破天荒列伝

竜門やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破天荒列伝

【Ｎコード】
Ｎ９９１９Ｃ

【作者名】
竜門やよい

【あらすじ】
中国漢王朝、武帝の時代を舞台にしたフィクション。藍田（らんでん）に住む劉星影（りゅうせいえい）は武芸の得意な男装の美女。平凡な生活を送っていたが、結婚を間近に控えた妹の劉星蓮（りゅうせいれん）が、誘拐同然で後宮に召されてしまった。激怒した星影は妹の婚約者・安林山（あんりんざん）と共に妹奪回のためある行動に出るのだが・・・。

第一話　姉妹

序章

時は武帝の世、漢王朝が最も栄華を極めた時代でございました。
藍田というところに大変美しい2人の姉妹が住んでおりました。
姉妹は藍田では有数の大商家・劉家の娘で、その美しさゆえに人々は、姉の劉星影を『蝶』、妹の劉星蓮を『花』と愛称し、2人合わせて『藍田の蝶花』と呼んでいたそうです。
針を持たせれば羽衣のごとき代物を作り、琴を弾かせればその美しき音色に小鳥はさえずりを忘れ、舞を舞わせれば香蛾（天女）のごとくと、大変な評判でございました。
どこの名家に嫁がせても恥ずかしくないほどの気品を持つ、才女の名にふさわしい姉妹でしたが――――

・・・ただ一つだけ、『普通』とは違うところがありました。

剣が大きく弾かれる。そのまま宙を舞い一直線に地面へと突き刺さった。

ここは藍田にある中央広場。先ほどからこの場所で、人々が見守る中二人の人物が戦っていた。一人はここ最近、藍田を荒らしまわる山賊団の頭目。そしてもう一人は虎模様の鞘を腰に下げた若者。そんな2人の戦いは、今の一撃で勝負がついたらしく、剣を弾かれた山賊の頭目は、対戦相手である若者に剣の切っ先を突き付けられ、その場に膝を突く。
その様子を見ていた周囲は一斉に歓声を上げる。うずくまる山賊の頭目に人背を向け、若者がその場を去ろうとした時だった。

頭目は、最後の悪あがきと言わんばかりに、自分を倒した相手へとなりふり構わずに襲い掛かる。それに気づき、周りの者たちは叫ぶ。若者が振り向く。山賊の頭目が雄叫(おたけ)びを上げて切りかかる。全員が目を見張った瞬間――――。男の攻撃はあっさりとかわされたばかりか、逆にお返しとばかりに強烈な蹴りをくらい、地面に這(は)いつくばるように倒れてしまった。戦意を失った山賊の頭目の元へ、若者は落ち着いた歩調(ほちょう)で近づくと、その胸倉を掴んで怒鳴りつけた。

「勝負は私の勝ちだ！約束通りこの町での悪行は許さん！！ちゃんと部下に伝えろ！わかったな・・・山賊の頭目殿・・・？」

若者の言葉に力なく、苦々しく頷く山賊の頭目。
それを確認すると、相手の胸倉から手を離す。

「悪いがお前達は役人に引き渡す。今までの報いをしっかりと受けるがいい！」

そして去り際に、はき捨てるように言い放った。

「・・二度とこの町と私達姉妹に近づくな・・！！」

そう・・・山賊の頭目を倒した若者こそ、藍田で誉れも高い『藍田の蝶花』の一人、『蝶』こと姉の劉星影だったのです。この時彼女は、十四歳になったばかりの少女でした。

時は武帝の世、漢王朝が最も栄華を極めた時代でございました。
藍田(らんでん)というところに大変美しい２人の姉妹が住んでおりました。

姉妹は藍田では有数の大商家・劉家の娘で、その美しさゆえに人々は、姉の劉星影を『蝶』、妹の劉星蓮を『花』と愛称し、2人合わせて『藍田の蝶花』と呼んでいたそうです。

針を持たせれば羽衣のごとき代物を作り、琴を弾かせればその美しき音色に小鳥はさえずりを忘れ、舞を舞わせれば香蛾（天女）のごとくと、大変な評判でございました。

どこの名家に嫁がせても恥ずかしくないほどの気品を持つ、才女の名にふさわしい姉妹でしたが――――

・・・ただ一つだけ、『普通』とは違うところがありました。

それは――――

姉君である劉星影が、男顔負けの武芸の達人だったことです。

・　・　・　・　・　・　・

花々が咲き誇る大きな屋敷。庭には、華やかな色彩のさまざまな花が咲き乱れ、【百花繚乱】の言葉がまさにふさわしいと言える光景だった。中でも一番目を引くのは、中央にある桃の木々だった。この美しい花々のもとで、人々は口々にお祝いの言葉を述べていた。祝辞の輪の中心にいる男に向かって。

「おめでとうございます。」

「おめでとう！本当におめでたい。」
「本当にこの度はおめでとうございます。」
「皆さん、どうもありがとう。」

集まった人々から述べられるお祝いの言葉に男は満足そうに返礼する。

皆から声を掛けられている男、年の頃は五十を少し過ぎたくらいの貫禄ある雰囲気を漂わせていた。

「今日は私の娘のためにお集まり頂き、誠に恐縮です。」
「なんの！藍田きっての名士、劉伯孝殿のご招待とならば、応じないわけがありませんよ！」
「そんな、大げさですよ。」
「なにをまた！ご謙遜なさって。」
からかうように言う客人達に、劉伯孝と呼ばれた男は控えめに笑みを浮べる。

この劉伯孝という男、地元藍田では知る人ぞ知る人物。代々古くから続く名士の家柄にして、手広く商いを行う大商家の主である。その性格は情が深く、温厚で、義を重んじる人望の厚い人物であった。そして彼こそ――――

「なんせ、あなた御自慢の愛娘『藍田の蝶花』と呼ばれた妹君、星蓮殿のご結婚が決まったのですから！」

『藍田の蝶花』と謳われた姉妹の父親だったのだ。今日はその自慢の愛娘の1人、劉星蓮の結婚が決まったことを報告するための祝いの席であった。親戚はもとより、仕事仲間や先祖の代から付き合いのある人々を集めて、ささやかながらも結婚の前祝をしているところであった。食事の準備が整うまでと、劉家自慢の花々を眺めながら談笑をしていた。嬉しそうにはにかむ彼の元へ、妻である喬桜華

夫人も夫の仕事仲間の妻たちに取り囲まれながらやってきた。

「本当にこの人ったら、直前まで結婚にごねていたくせに、決まった途端、何から何まで特注で取り揃えて。私も思わず焼いてしまうぐらいなのですよ。」

おかしそうに笑う妻に、周りの人々もにこやかに言った。

「ほう・・・特注ですか？」

「それでは今回の婚礼は盛大にされるのですな。」

「ええ。するからには、衣装も豪華にすると言ってもう・・・あの通りですの。」

困ったような視線を家の中に送る喬(きょう)夫人。それに合わせるように、人々も家の中に目をやる。そこには煌びやかな花嫁衣裳と輿入れ道具が用意されていた。どれもこれも美しい玉(ぎょく)や絹をふんだんに使っていたが、中でも一番一目を引いたのは花嫁衣裳だった。真っ赤な真紅(しんく)の花嫁衣裳には金と銀の糸で美しい大輪の花が縫われており、それを目にした人々は、見惚(みと)れながらため息をついた。

「なるほど。これは気合の入れかたが違いますな。」

「本当に・・・娘よりもはしゃいで準備をしまして。」

「なにを言う！これぐらいせねば・・・せめてもの親の心遣いだろう。」

「心遣いなんて。親ばかもいいところですわ。」

夫婦のやり取りに客達は笑い声を上げる。

「いやいや、伯孝殿のようなお父上を持てて、星蓮さんもさぞ幸せ者でしょう。」

「しかし、才色兼備の星蓮殿を娶れる林山殿はもっと幸せ者ですな。」
「美男美女ですから、まさにお似合いの夫婦になりますよ！」
和やかな空気の中、話題は自然と子供の話へと移る。
「林山殿も親が決めた婚約者がいたにもかかわらず、それを解消してまで星蓮さんを選ばれたとか。」
「ええ・・・李家のお嬢さんには誠に申し訳ないことをしましたが・・・。」
「なにを言いますか！あそこは親子で評判が悪い！」
「その通りです。伯孝殿や星蓮さんが気を病まれる事はありません！」
周りの気遣うような言葉に答えるように劉伯孝も言った。
「まあ・・・経緯はどうあれ、結果的に林山殿が、彼が私の娘を『幸せにする』と言ってもらってくれたことがありがたいですよ。」
「さよう、ご令嬢の星蓮殿が良縁に恵まれたことには違いありません。」
「ハハハ、本当ですな。そうなると後は姉君の星影殿だけですね。」
何気なく発した招待客のその一言。男の言葉にその場にいた全員がギョッとする。
「あ・・・！？」
「ば、馬鹿！！」
言った男も、その側にいた者も、慌ててその口をふさぐ。
さっきまで賑やかだった場の雰囲気が一気に静まり返る。

皆お互いの顔を見合わせる。否、ある人物の顔色を伺うように一点に視線を注ぐ。

「・・・ええ、本当に。後はあの子だけなのですが。果たして嫁の貰い手があるかどうか。・・・・」

劉伯孝の暗い声に、周囲に張り詰めたような、なんともいえない空気が流れる。

「なっ、何をおっしゃいますか！あああ、あれほどの器量良しですよ！？男がほうっておくわけが――――・・・・」

「そ、そうですとも！婦女としてのたしなみだって、か、完璧なのですよ、星影さんは――――・・・・！」

口々に取り繕うように言う人々に劉伯孝は言った。

「・・・いいんですよ。もうほぼ、諦めていますから。本人もそのようですし。」

ため息混じりに言う彼に、周りの者もお互いに顔を合わせるしかなかった。

そんな輪の外から、少しはなれたところにいたある婦人がそっと自分の夫に囁く。

「・・・ねえ、あなた。劉家のお姉様って、一体どんな方で・・・？」

不思議そうに訪ねるに新妻に夫は苦笑しつつも答える。

「ああ・・・。それがものすごいじゃじゃ馬なのだよ。別名『女虎傑』。特注の虎模様の剣を下げて歩いていることからそう言われているのだ。おまけに男以上に腕が立つ。君は他から嫁いで来たばかりだから知らないが、数年前にここらを牛耳っていた山賊を、たった一人で倒して役人に引き渡したのは他でもない・・・・星影殿なのだからな。」

「まあ！たった一人で？なんて恐ろしいのでしょう・・・。」

新妻は顔色を変えて身震いすると、改めて劉夫婦の方を見る。

「今回妹の星蓮殿が安林山殿と結婚するにあたって、一番もめたのは、姉である星影殿が原因らしいぞ。婿である安家の奥方、丁夫人が、『乱暴娘の妹と大事な跡継ぎとを結婚させられない』と、だいぶ言ったそうなんだ。実際に、安家の息子は金貸しの李家の娘との婚約が決まっていただけに、そこら辺も絡んで大変だったそうだ。」

「まあ、星蓮殿、ご苦労されたんですね・・・なんて不憫な・・・！」

「ああ。だがそこら辺は、林山殿や劉夫妻が丁夫人と粘り強く交渉して、なんとか今回の結婚を許してもらったそうだ。」

「星蓮殿がかわいそうですわ。私だったらそんなお姉様、恥ずかしくて外も歩けないのに。」

顔をしかめて話す妻に、夫は劉夫婦に哀れみと皮肉を混ぜたような笑みで見ながら答えた。

「まったくだ。最も、誰も星影殿には文句は言えないさ。厄介者の山賊を追い払ってくれただけに、恩もあるだろうし、下手なことを言うとこっちがやられてしまうからな。」

そんな会話が劉夫婦に聞こえないよう、あちこちで囁かれる。それ

に気づいた劉家の主人は周りに聞こえるような大声で、自分の妻を呼んだ。

「この話はよしましょう。それより桜華、星蓮を呼んできてくれ。皆さんにご挨拶をさせねば。」

それまで顔を伏せていた喬夫人だったが、その言葉に慌てるように言った。

「だ、駄目ですわ！貴方。あの子・・・今日は調子が悪いといって、今部屋で休んでいますの。ですから・・。」

喬夫人の言葉に周りがざわめき立つ。

「なんだと？今朝まであんなに元気だったじゃないでか！？」

喬夫人が頷きながら目線を送るのを見て、劉家の主人は何かを理解したかのように目を見開く。

「伯孝殿、私達に気を使わなくていいですよ。」

「そうですとも。調子の悪い時に無理をするのはよくありませんぞ。」

「婚礼が近いので、その準備などで気疲れたのかもしれませんよ。」

幸い、劉夫婦のやり取りに気付いていない客たちは、心配そうに声をかける。

「・・・申し訳ない。一言お礼の挨拶をさせようと思ったのですが、とんだことに。」

「いいですよ。結婚を控えているのですから、今日のところはしっ

かり休養してください。」
「そうですとも。挨拶はいつでもできますよ。」
「本当に申し訳ない・・。」
「お気になさらないでください。」

そんな周りの反応に、劉伯孝はすまなそうな笑みを浮かべながら言った。

「皆さんのお心遣いには感謝いたします。十分なおもてなしとまではいきませんが、奥の部屋に食事のご用意が出来ました。どうぞ召し上がっていってください。」
「これはありがたい。」
「さあさあ、召使に案内察せますゆえ、皆さん奥の部屋へ。」

劉伯孝が手を叩くと、数人の侍女達がやって来て客達を奥の部屋へと案内をする。人々は皆、口々にお礼の言葉を述べながら部屋の奥へと進んでいく。去っていく客達を笑顔で見送ると、彼は小声で妻に話しかける。

「・・・それで、本当のところはどうなのだ?病気ではないのだろう?」
「ええ・・・それが――――」

言いにくそうにしている喬夫人の代わりに、側に控えていた侍女が恐る恐る答えた。

「・・・実は、お嬢様方は先ほど馬に乗って出かけられまして。」
「なんだと!?馬に乗って出かけただと!?星影だな!?いったい

どこへ！？」

声を荒げて問いただす夫に、妻は疲れたように答える。

「・・・さあ。わかりませんわ。」

それを聞くと、彼は呆れたようにはつぶやいた。

「星影め・・・嫁入り前の妹を連れ出して、いったいどうするつもりなのだ・・・！？」

花々が満開に咲き誇る庭の中。そこで一番目を引く桃の木の傍で、力なく肩を落とし、途方にくれる劉家主人の姿があった。

第一話　姉妹（後書き）

はじめまして。
この度は、小説を読んでくださり、ありがとうございます！
はじめて掲載したのですが、かなりドキドキしております。
もしよろしければ、この小説に関する感想を教えてください・・・・！！

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第二話　姉心と妹の恋心

藍田の町が見渡せる小高い丘。辺りは小鳥のさえずりと、柔らかい風によってもたらされる新緑の香りが漂っていた。そんな静かな場所に、似つかわしくない豪快なくしゃみが響きわたる。

「あ～風邪でもひいたかな？」

「単に、誰かが噂しているだけじゃないの？」

鼻をすする音と、小さな笑い声。そこには二人の若者の姿があった。この二人、年の頃は十七、八くらいで、一人は薄い桃色の着物を着ており、金の花を掘り込んだ真珠の髪飾りを一つ付けていた。その容貌は香蛾（天女）のごとく美しく、美女と呼ぶのにはふさわしかった。そしてもう一人は、薄い青色の着物を着ており、腰には見事な剣を下げていた。そして、こちらの容貌も整っており、なかなかの美男に見えるのだが、

「お父様達が、星影姉さんのことを言っているのかもね。」

「そうかもな。『嫁入り前の妹を連れ出して！！』とか言っているかもしれないね、星蓮。」

そう、彼女達こそ言わずと知れた『藍田の蝶花』劉星影・星蓮姉妹だったのだ。

この姉妹、藍田では知る人ぞ知る名物姉妹だった。有名だったのはその外見だけではない。内面的にも有名だったのだ。

妹の星蓮は今年で十六になる娘だが、その性格は温厚で優しかったうえに、教養を備え上品でおしとやかな才女であった。また、儒教の教えを守る奥ゆかしい女性でもある。そのため、女性の教養とされる舞や琵琶はもちろんのこと料理などが得意で、その腕は藍田で

も一、二を争うほどであった。そして、その美しい容貌から彼女に求婚を求める相手が後を絶たないほどだった。

それに対して、姉の星影の方は今年で十七になる娘だが、その性格は活発で男勝りであり、その立ち振る舞いは男性的であった。また、この時代の女性にはめずらしく武芸・剣技の使い手でもあった。そのため、動きやすいという理由で普段から男装をしており、腰には虎模様の入った鍛冶屋特注の『虎勇剣』を下げていた。このことから人々は彼女のことを『女虎傑』と呼んでいた。しかし、その容貌は妹に劣らぬもの美しいもので、彼女が女性の服を着たと聞けば、それを見るために多くの人が集まるのだった。

「それにしても本当にいいのか？失敗しなきゃいいけどさ。」

「うん。ねえ、星影姉さん・・・私、上手くできるかしら。」

「いやなら止めてもいいのだよ。結婚を間近かに控えたお嫁さん。」

いたずらっぽく笑う星影とは対照的に、星連は暗くどこか沈んでいた。実は、今日二人が家を抜け出してきたのには理由があった。町が見渡せる丘に来たのも、その先にある【薬妙寺】で、ある計画を実行するためだった。

「しかし、黙って出てきたから父上達は怒っているだろうなぁ。」

「ごめんね、星影姉さん。私のわがままのせいで・・・。」

「気にしなくていいさ。確かめたいのだろう？『林山の噂』を。」

「そうだけど・・・。」

自信なさげに呟く星蓮を見ながら優しく星影は囁く。二人が話す『林山』とは本名を『安林山』と言って、劉家と同様大商家・安家の息子であり星蓮の婚約者の事である。林山は、文武両道に秀でており、特に武道の腕は星影も一目置くほどだった。また、思いやりの深い優しい性格で義侠心にも厚かった。そのうえ容貌も端整な顔立

ちをしており、地元ではかなりの美男で知られていた。付け足しておくならば、彼と星影は同じ武門の門下生――つまり兄弟弟子でもあった。なによりも、彼と劉家の姉妹とは幼少からの幼馴染だった。この時代には珍しく、お互いの家を行き来し、家族ぐるみの付き合いも少なからずあった。そんな中で林山と星蓮はお互いに少なからず思いあうようになっていったのだ。そのことについては星影も知っていたので、二人の結婚が決まった時は手を叩いて喜んだものだった。

「まあ、こんなことをしなくても、林山は星蓮のことを本気で愛しているよ。その噂にしたってあいつのことを好きな女達が流したデマに決・・・。」

「でも、はっきり違うとは言い切れないわ！！」

大声を張り上げる妹に星影は困ったように首を傾げる。普段上品でおとなしいだけに、怒った時の迫力はすさまじい。まあ・・・あれだけの修羅場の上に結ばれたのだから心配しなくてもいいのに、と苦笑いしながら星影は思う。

安林山と劉星蓮の縁談話。一見、順調に決まったかのように見えるが、ここに来るまでにはかなりの難問と苦労があったのだ。というのも、この時すでに林山には親の決めた婚約者がいた。相手は、今は同じ大商人だが、元は金貸しをしていた李海金（りかいきん）の娘・李桂蓮（りけいれん）だった。難問となったのがこの親子だった。

父親の李海金（りかいきん）は、金貸し時代かなりあくどいやり方で金儲（かねもう）けをすることで有名だった。それは今の商売でもいえることだ。その李海金（りかいきん）の娘である彼女も、容姿は美女の領域に入るのだが、父親に輪をかけたような性格の悪さで、美人であることを鼻に掛け、自分の思い通りにならないことがあると平気でわがままを言う女性だった。しかも、ことあるごとに『藍田の蝶花』である星影、星蓮を敵視する

負けず嫌いでもあったのだ。そんな彼女も林山のことは好きだったらしい。だから林山が、婚約破棄を自分の両親と桂蓮親子の前で言った時、林山の両親以上に激怒したのが桂蓮だった。

冒頭(ぼうとう)でも話が出た通りに、安家の母親と親戚達の反対ぶりと言ったら凄まじかった。

いくら星蓮が才色兼備(さいしょくけんび)を備えていても、その姉は山賊を倒すほどの武芸の達人。早い話が、縁談を反対される理由は自分にあった。まさに修羅場(しゅらば)中の修羅場(しゅらば)。

このような状況で何故二人が婚約できたかと言うと・・・。

「でもな、『あんな卑劣なこと』をするような連中を、もう相手にするはずがないだろう。林山の両親も言っていたし。」

「・・・確かに『あんな卑劣なことをする人の娘と息子は一緒にさせない。』って、お義母様達はおっしゃってくださったわ。」

星影達が言う『卑怯なこと』とは、林山・星蓮の婚約が決まる三日前のことだった。その日も林山の親戚に婚約についてのことで（正確には星影の素行のことで）呼ばれ、激論(げきろん)した末、家に帰る途中だった。劉家の主人に大事な話があるから戻って欲しいと、追いかけてきた安家の親族の使いに言われ、渋々（しぶしぶ）ではあるが父・劉伯孝(りゅうはくこう)と途中で別れ、二人で暗い山道を歩いていた時だった。そこへいきなり、覆面(ふくめん)をした男達が現れ星影達に襲いかかってきたのだ。統率(とうそつ)の取れた集団だったが、星影の前では敵ではなかった。偶然にも、劉家に向かう途中だった林山も現れ、あっという間に二人がかりで覆面の男たちを倒したのだが・・・。そんななかで星影は見てしまった。木の影から去っていく桂蓮と数人の男達を。林山と星蓮が止めるのも聞かずに、逃げる桂蓮達を捕まえると、そのまま李家に乗り込み李家の主人のまえで彼女に剣の切っ先を突きつけると怒気を含ませどなりつけた。

「いいか、これは忠告だ！今度私の妹と弟弟子に手を出してみろ！その時はお前ら親子の首を叩き切ってやる！！」

幸いこ事件は穏便に済まされ、二度とかかわらないと約束させたのだったが・・・・。

後で調べてわかったことなのだが、実は覆面の男達を使って星影姉妹を襲わせたのは、安家の親戚と李海金が結託した計画的犯罪だったのだ。なんとこの親戚、李海金に借金をしており、それを帳消しにしてもらう条件として李海金に協力したのだという。しかもその内容は星蓮と林山の婚約を邪魔することであり、星蓮を傷物にするというものだった。

安家の親戚の使いが、劉伯孝に言った大事な話にしても、星影と星蓮を父親から引き離すための真っ赤な嘘。わざと二人だけで帰らせるための口実だったのだ。ここまで用意周到に計画していた李親子の唯一の誤算は、星影の強さを甘く見ていたことだろう。それを知った星影をはじめとする劉家一同と、林山が怒ったのは言うまでもない。しかしこの事件は、後に意外な展開で終結するということを誰が予想しただろうか。その事実に対して、彼女達以上に、烈火のごとく真っ先に激怒したのが、林山の母・丁鳳娘だった。

「安家一族の家名に泥を塗ったばかりか、罪のない娘を辱めようとするとは！！おまけに安家の嫡子の縁談が借金の帳消しのために持ちかけられたとあっては末代までの恥！！それだけだけでも許しがたいと言うのに・・・・！！」

彼女を怒らせた理由はそれだけではなかった。自分の親戚達が林山

と桂蓮の婚約話をまとめ、桂蓮を林山に勧めたのは、李海金からの金銭的な取引・・・賄賂を貰っていたからだと知ったからだ。

日頃から『息子の嫁には賢女を』と言う丁夫人からすれば、『賄賂を貰って、不正取引のようなことをして決められた婚姻』であったとなれば、黙っているはずがない。

「今回のことで、劉家・李家双方のことがよ――く！・・・分かりました！！林山と桂蓮殿との縁談は――――――――破棄です！！！は・だ・ん！！林山は星蓮殿と結婚させます！！！卑怯者の家に大事な跡取り息子をやれますか！！！？」

この丁夫人、実は地元豪族の娘で大変感情的な性格の持ち主である。おまけに星影と同じく、女だてらに大変腕が立つらしい。（あくまで噂だが。）意外な援軍の登場により、四面楚歌の状況は回避され、林山の婚約反対派の親戚一同を黙らせることに成功。

こうして二人はめでたく結ばれたのだった。

「『女は怖い』というが・・・。まさに、丁夫人のためにあるような言葉だな。」

その時のことを思い出し、星影は楽しそうに笑う。

「笑い事じゃないわ、星影姉さん。」

「悪い、悪い。でもさ、列女が太鼓判を押して許してくれた結婚だよ。あんな『噂』嘘だと思うけどなぁ～」

「・・・・・・・。」

自分の問いに、黙り込む星蓮。そんな妹の姿に星影はため息混じりに言った。

「そもそも冷静に考えて、ありえないよ。『林山と桂蓮がまだ付き合っている』なんて噂は？」

星影達が先ほどから話す『噂』と言うのが、この桂蓮が関わっていることなのだ。星蓮が気にするその噂と言うのが『林山と桂蓮が影でまだ付き合っている』というものだった。なんでも週に一回、星影達が今いる丘の先にある、薬妙寺という寺で二人が密会していると言うのである。最初は、林山に限ってそんなことはない、と信じていなかった星影達だった。ところが、林山がここ最近、星蓮にも内緒で頻繁（ひんぱん）にどこかに行くようになったので、さすがに怪しいとは思っていた。心配になった星蓮が何度聞いても、林山はあいまいな返事しかせず、すぐにはぐらかしてしまうのだ。そんな時、星影が彼の友人を捕まえて（締（し）め上（あ）げて）聞いたところ意外な事実が発覚した。「林山が薬妙寺で桂蓮と会っているのを見た。」と、言うのだ。それも一度や二度ではないと言う。

「いいか、星蓮。馬鹿がなにを言おうと、林山を信じろ。あんないい奴は他にいない。」

「・・・でも、教えてくれたのは星影姉さんじゃない？」

ジロリと、自分を睨みながら言う妹。

「た、確かに、教えた私が悪かった！でもなぁ～」

「姉さんの言うこと、身勝手すぎるわ！林山の悪口を言ったり、褒めたり・・・！」

不機嫌な顔で、星蓮は姉を見た。

（・・・こんなことなら、泣きながらせがまれても、教えるんじゃなかった。）

「悪かったよ、星蓮！しかし冷静に考えれば、教えてくれた奴らが冗談で言ったかもしれないだろう？お前と結婚できる林山をひがんで、嘘を教えたのかもしれないぞ？」

「・・・。」

ふてくされたように黙り込む妹を見ながら、やれやれ・・・と星影は思う。

恋人を褒めても喜ばず、へそを曲げると言うならば――

「だがな、もし噂が本当ならば・・・林山はその程度の男だ。」

「！？」

（とことん侮辱（ぶじょく）してみようじゃないか？）

星影の言葉に、星蓮は声にならない叫びを上げる。

「大体（だいたい）男なんて浮気する生き物だよ。星蓮は、林山が自分に対して一途な奴だと勘違いしていただけなのさ。」

星蓮が黙っていることをいいことに、星影は林山の悪口を言い続けた。

「特定の女が出来れば、『ちょっとぐらいは・・・』って、わき見したくなるものなんだよ、男は！まあ、それが嫌ならこの婚姻を取りやめにすればいいさ。」

「・・・！」

「良かったじゃないか。お前の傷が浅いうちに悪い奴だとわかってよ。無理に女にだらしない、ロクデナシなんかと結婚しなくて・・・やめといた方が賢明(けんめい)――」

「――――――――ひどい!!!」

それまで黙っていた星蓮だったが、その言葉に過剰(かじょう)に反応すると星影を睨(にら)み付(つ)けながら言った。

「ひどい!!林山はそんな人じゃないわ!!彼はいい人よ!!そんな悪口言わないで!!そんなことというなんて・・・星影姉さんの意地悪!!!」

捲(ま)くし立(た)てるようにそこまで言うと、荒(あら)く肩で呼吸をする。

「・・・怒ったか?」

「当たり前よ!!」

間髪いれずに言う妹・星蓮に姉・星影は言った。

「じゃあ信じてやれよ、林山のこと。」

「いや、信じてるからこそ、私の言葉に怒ったのだろう?」

「星影姉さん・・・・!」

興奮気味(こうふんぎみ)の妹の肩に、優しく手を置きながら星影は続ける。

「悪い、悪い!そんなに泣くなよ。なぁ?」

自分の胸に寄りかかるようにして、泣きじゃくる妹をなだめながら星影は思う。

いつの時代も恋は女性を、人を変えると言うが。普段は温厚で落ち

着きのある星蓮も、恋愛に関しては慌てふためいて取り乱す・・・・性格が百八十度変わるということか。
妹・星蓮を優しく慰めながら星影は言った。

「だからこそ確かめるんだろう。噂がほんとかどうか・・・？」

林山と桂蓮が薬妙寺で密会していると聞いた以上、姉としてこのまま放っておくわけには行かない。こうなると真偽を確かめる必要がある。
しかし、いくら確かめると言っても結婚まで後数日。時間があまり残されていない。星蓮が直接何度も林山に聞いたが、彼は相変わらず知らないと言い張る。星蓮も星蓮で、結婚前にあまり波風を立てたくないということで、林山に強く聞けない。
それなら代わりに自分が聞こうと星影が言えば、もっとややこしくなるからやめて、と星蓮は言い、じゃあ知らないふりをしておけ、と星影が言えば、でも気になってしかたない、と星蓮が言って泣き出す始末。星影は考えた。可愛い妹のために。悩める乙女と言いましょうか、そんな星蓮のために星影は考えた。

そもそも林山という男は、星蓮に『よけいな話』をしない奴だった。よけいな話というのは、剣の稽古の最中に腕にアザをつくった、組み手の練習をしていて捻挫をした、弓の弦で手を切った、と言ったささやかな程度のことである。要は、心配をかけたくないのだ。
それが好きな人、恋人である星蓮にならなおさらである。よくよく星影は思っていた。
怪我を口実に星蓮といちゃつけばいいのにと思うほど、林山は星蓮の『不安』になりそうなことは一切言わない男だった。ただ、星影に対しては、『幼馴染の親友』と思っているのでなんでも話してしまう。そして、自分を通して最終的にいつも星蓮にばれてしまうのだった。

正直、星蓮からすれば、そんな伝わり方は面白くない。自分のことが好きなら、余計な気遣いなどせずに、包み隠さず話してほしい。だから星影が、自分が代わりに林山に聞こうかと言う申し出も断ったのである。そんなことを思い出しながら、星影はあることに気がついた。星蓮が林山に真相を聞いても彼は答えない。星影が聞けば林山は答えるかもしれないが、嫉妬心からそれは星蓮が嫌がるのでしない。

（つまり、星影が星影ではなく、星蓮が星蓮ではない立場で聞けばいいんじゃないだろうか？）

「私が星蓮のふりわして、星蓮が私のふりをして、そのことを確かめるんだろう？」

星影が思いついた作戦――――――『星影と星蓮の二人が入れ替わる』というものだった。作戦はこうだ。まず、二人の衣装を交換し、星影に変装した星蓮に深めの笠をつけさせて顔がわからないようにする。そして星蓮に変装した星影も、顔を隠すための扇を用意する。それから、林山と桂蓮の二人を見たと言う時間に合わせて薬妙寺に張り込む。二人が現れたところで、わざと物音を立てて、星蓮に変装した星影がその場から立ち去る。それを慌てて追いかけてきた林山の前に、星影に変装した星蓮が登場。剣の切っ先を突きつけ、その場で二人を問いただして事実関係を探るという物騒な策だった。この星影のとんでもない提案に、星蓮もあっさりと承諾し、現在に至るのであった。

「でも・・・・でも、本当に上手くいくかしら。」

「上手くいくさ！命の危機を感じている時に、嘘をつく奴がいるか

？」

心配そうに言う星蓮の手を引きながら、星影は薬妙寺から程近(ほどちか)い廃屋へと向かう。

「そうでもしないと話してくれないって・・・なんだか悲しい。」

「星蓮、」

「いくら私に、心配をかけまいとしてくれる気持ちは嬉しいわ！でもね、やっぱり恋人なら・・・夫婦になるのなら、これからはちゃんと何でも話してほしい・・・。」

「星蓮・・・。」

星蓮がこの提案を受け入れた背景には、これを機会に、林山が自分に直接すべてを話してくれるようになれば・・・と、いう思いも込められていた。

だからこそ、作戦が成功するか失敗するかはわからない危険な賭けに出たのだ。結果がどうなるにしろ、騒ぎになるのは間違いないだろう。しかし何のわだかまりもなく、結婚できるようにするにはこれが最適(さいてき)であると最終的に星蓮が判断したのだ。

「お前が思うようにやりなさい。姉さんは、私は星蓮を応援するよ。」

妹がそうしたいのなら、姉として手を貸すだけ。それが姉妹と言うものだろう。

廃屋の前まで来ると、乱暴に戸を開ける。最初に星影が中に入り、人がいないのを確認すると、手招きをする。

「大丈夫だ！早く来い、さっさと着替えよう！」

「うん・・・でも・・・星影姉さん・・・。」

それでもまだ不安そうにしている妹を星影に渇を入れる。

「そんな弱腰でどうするんだ!?この日のために今まで練習したんじゃないか。うかうかしていると、本当にあの女狐(めぎつね)に林山を盗(と)られるぞ!それでもいいのか?」

「――――!!そんなの嫌!嫌よ・・・・私。」

目に涙を溜めながら星蓮は言った。そんな妹を見ながら、今度はなだめるように言った。

「じゃあ、迷わないで。あなたも林山も優しすぎる。それは良いことだけど、悪く言えばお人好し過ぎる。こういう事はちゃんとしておかないと。苦しむのは自分なのよ。」

星影が優しく肩を抱くと、星蓮も安心したかのように彼女に抱きつく。

「・・わかった。私・・・・・やるわ。自分で決めたことだもの。」

そう言った星蓮の表情からは、何かをふっきった様子が感じられた。

「それじゃあさっさと着替えよう!ほら、早く脱いで。」

そう言いながら、身につけているものを脱ぎ始める星影。星蓮もそれに少し遅れるようにしながらも、服を脱ぎ始める。

「ねぇ・・・星影姉さん」

「なんだ?」

脱いだ服を相手に渡しながら星影は答える。

「・・・一つだけ、一つだけ最後に、お願いがあるの。」

星影からの服を受け取りながら星蓮は言う。

「お願い？まさか桂蓮を張り倒してくれって？」

冗談交じりで笑う星影に、いつになく真剣な表情で黙り込む星蓮。

「・・・どうした？」

手を止めて、妹に目をやる星影。

「この計画では・・・星影姉さんが、囮（おとり）になってくれる手はずだったわよね？」

「ああ、そうだが・・・？あ、ちょっと襟が曲がってるぞ。」

（なんだ、作戦のおさらいか？）

そんなことを考えながら、星蓮の衣服を正す星影に妹は言った。

「・・・私一人で解決する。お願い、この作戦は私1人でやらせて！！」

「なんだと！？」

思わず声を上げる星影。まじまじと妹を見る。

「・・・・一人で平気なのか！？」

「もちろんよ。だって・・・これ以上星影姉さんに迷惑はかけたく

ないの。星影姉さんが武芸を始めたのは私たちを守ろうとした結果じゃない。だから・・・」

泣きそうになる星蓮の姿に、星影も苦いものを感じる。

「だから・・お願いよ！星影姉さん、私一人でさせて。お願い。」

深々と頭を下げる妹を前に、何も言えなくなってしまう。

（いい加減この子も、姉離れする年頃になったのか・・・・いや、私が妹離れできていないだけかもしれない・・・。）

「・・・わかった。星蓮の言う通りにするよ。さあ、早く支度を済ませよう。グズグズしてると二人共来てしまうからね？」

「星影姉さん・・・！」

「顔は、この笠をかぶればわからない。」

そう言って、持ってきていた笠を手渡す星影。そんな姉の姿を見ながら星蓮は・・・

「ありがとう・・・ありがとう、星影姉さん。あのね、星影姉さん、私ね・・・・」

星蓮の言葉に星影が顔をあげる。

「星影姉さんのこと大好きよ・・・・とても誇(ほこ)りに思うわ。」

「私もだよ、星蓮。ありがとう・・・。」

嬉しそうに言う星蓮に、思わず照れてしまう星影。そんな互いの様子に、思わず笑みがこぼれる二人。互いの身支度を済ませると、廃

屋から外に出る。そしてそのまま二手に分かれて歩き出す姉妹。

「頑張るんだぞ！気を付けてな！」
「わかってるわ、ありがとう！」

満面の笑みで手を振る妹。いつもより長く手を振り続ける星蓮に、星影は照れくさくなり、足早にその場を立ち去る。風がいつもより激しく、そして穏やかに吹き、花の芳(かぐわ)しい香(かお)りを運んでくる。そんな風を胸いっぱいに吸い込みながら、星影はその場を去る。

しかし、後に星影は、ここで星蓮と別れたことを後悔することとなる。

第二話　姉心と妹の恋心（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！
余談ですが、この小説の主人公は、かなり妹思いという設定です。
次回もよろしくお願いします！！

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第三話　義姉弟と強奪事件（前編）

すれ違う人すべてがこちらを見る。否、自分ではない人を見ていると言った方が正しいだろう。薄い桃色の着物、金の花が刻み込まれた真珠の髪飾り、優雅（ゆうが）で上品な身のこなし。扇で顔は隠してはいるが、ちらほらと見え隠れする薄紅色（うすべにいろ）の口元・・・・なんせ今の自分は、『藍田の蝶花』で名高い『花』こと、劉星蓮なのだから――――。

日の傾いた町を、少し澄まして歩きながら星影はそんなことを考えていた。

あれから服を取り替えた星影と星蓮。その後星影は、星連と薬妙寺で別れ、そのまま帰路（きろ）へとついていた。

「大丈夫かな。星蓮・・・。」

歩きながら考えることと言えば、妹・星蓮のこと。

（やはり一人だけで残してくるべきではなかったかな・・・？）

今になって、不安と心配で星影は後悔していた。

（もし、賊（ぞく）にでも襲われたら・・・いや、でも林山がいるから大丈夫か。）

いちお、私の兄弟弟子だし。

「そうだよ。何もなければ林山が送って来ることだし、平気だよね。」

そう自分に言い聞かせる星影。そんな事を考えながら、家の近くまでさしかかった時だった。なにやら家の前が騒がしい。

（・・・何の騒ぎだ？）

不思議に思った星影は、そのまま人だかりを押しのける。

「すまない、ちょっと通してくれ。」

なんだよ、と言ってくる人々を無視して前に進む。そしてその輪の中央に目をやると人が倒れていた。見たことのあるような・・・見慣れた人物。一瞬我が目を疑った。

「林山！！？」

そう叫ぶと、大慌てで倒れている人物に駆け寄る星影。

「くっ・・・星・・影か？」

苦しそうに呻く人物こそ、星蓮の婚約者にして星影の親友、安林山だった。その体には傷だらけになっており、ところどころ打撲（だぼく）の痕（あと）も見られる。集団で暴行を受けたことは察（さっ）しがついた。

「何故お前がここに？薬妙寺に行ったんじゃ――・・・！？何があったんだよ！？おい、しっかりしろ！！」

林山が大怪我（おおけが）を負っていることにも驚いたが、いるはずのない場所にいたことにも星影は驚いた。とにかく、なにがあったのか聞き出

そうと、彼女は林山に再度呼びかける。

「林山、しっかりしろ！なにがあったんだ、林山！！」

「せ、星蓮・・・が」

「星蓮に何かあったのか！？」

何度目かの呼びかけに、力なく林山が何か言おうとした。それを聞こうと彼を抱き起こした時だった。家の中から聞き覚えのある声――声のする方を見ると、

「この声は・・・！？」

母親である喬夫人が泣きながら飛び出して来たのだ。

「は、母上！！？」

「ああ・・よかった！よかった、帰ってきたのね・・・！！」

星影の姿を見ながら、安堵の色を見せる喬夫人。しかしそれは、ほんの一瞬の出来事だった。喬夫人はすぐさま元の泣き顔に戻ると、すごい勢いで星影に抱きついたのだ。

「星蓮！？星蓮なのね！？」

「は、母上！？」

「よかった、本当に良かったぁ・・・星蓮・・・！！」

噛み締めるように何度も妹の名前を呼ぶ母。そんな母親にどう対応していいか戸惑う星影。とにかく自分が星蓮でないことは伝えよう。

「あの母上・・・。こんな格好をしているので、間違えても仕方ありませんが、私は星蓮ではありませんよ。」

「えぇ!?な、なにを言って・・・!?」
「それは母上の方です。私は星影ですよ。」
「あっ・・・せ、星影!?星影だったの!?貴方その格好は――――・・・・!?」
「はい、ちょっと訳ありでして・・・。それより母上、一体なにがあったのですか?何故林山が怪我をして、母上は泣き叫びながら星蓮の――」
「・・・星蓮・・・!!」

途端に喬夫人の顔が凍りつく。肩を震わせながら顔を覆うと、星影にとりすがって泣きはじめる。

「うっ、うっ、あぁあぁ・・・!せ、星蓮、星蓮、・・・・!!」
「は、母上ちょっと・・・!?」
「せ、星蓮、星蓮、星蓮・・・!」
「しっかりしてください、母上!だからなにがあったか話を――」
「星蓮・・・どうして、星蓮・・・!」
「あの・・・!」
「星蓮・・・星蓮・・・星蓮・・・!!」

(・・・これじゃあ埒があかない・・・。)

なにを聞いても『星蓮』としか言わない母親。怪我をしたまま動けない林山。そしてこの状況を飲み込めない星影。

「おい、何の騒ぎだ?」
「いや、それがさぁ~」

そんな事をしているうちに、野次馬達はドンドン増えていく。

（ここにいても野次馬を楽しませるだけだな・・・。）

そう判断した星影は、右手で母親の肩を抱き上げ、左手で林山の体を支え起しながら言った。

「くわしい話は後で聞きます！とにかく家の中へ入りましょう。」

野次馬の目を避けるように2人を抱えて、駆け足に家の中に入る星影。素早く戸を閉め、やれやれと一息つくが・・・。そこで星影を待っていたのは、衝撃の光景だった。

「――なにこれ！？」

星影の目に飛び込んできた光景――――――

割れた花瓶に破れた幕。ところどころへこんでいる壁。刀傷が付いた机。

床は泥だらけになっており靴痕がついていた。

変わり果てた家の様子に呆然と立ち尽くす星影。

「誰がこんなことを！？」

憤慨やるせない気分になり、星影は思わず大声を張り上げていた。

「役人にやられたのです・・・！」

そんな彼女の質問に答えが返ってきた。答えたのは、いつも自分達を出迎えてくれる侍女達だった。

「役人が・・・？一体何故！？」

怪訝(けげん)そうにする星影に、侍女たちは互いに顔をあわせて首を振る。

「私達にもわかりません。ただ・・怖くて。」

そこまで言うと嗚咽(おえつ)し始める。よほど怖かったのか、怯(おび)えて声が出せないようでもある。

「すまない、詳しいことは父に聞くから。父上は?」

いつもの部屋です、そう答えた侍女達に礼を言うと、星影は急ぎ父親のいる部屋へと向かった。

「ま、待て星影・・・!」

後ろから林山の呼び止める声がしたが構わずに進んだ。

父のいる部屋・・・南側にある日当たりのいい場所。いつもは、やんちゃをして怒られるために行くが、今日は違う。なにがどうなって、役人が家を荒らし、林山が暴行を受けたのか。わからないのは、それにどのように星蓮が関わっているのかだ。星蓮は自分と違って無茶な事はしない普通の女の子だ。

役人が出てくるような不始末をするとは考えにくいのだが――

目的の部屋の前まで着くと、勢いよく戸を空ける。そこに父親である劉伯孝(りゅうはくこう)の姿があった。

「父上・・・!」

「お前・・・!?」

机にうつ伏せになるようにしていた劉伯孝だったが、娘である星影に気づくとよろよろと立ち上がった。

「星蓮・・・!?・・いや・・・星影、か・・・・!?」

（ここでも星蓮かよ!?）

内心呆れつつも、それだけ妹・星蓮に変事があったのかと思う。大げさに靴音を響かせながら父親に近づくと、問いただすような口調で星影は言った。

「父上!一体なにがあったのですか!?帰ってみたら家の前で林山は怪我をしているし、家は役人に荒らされたというし、なにを聞いても母上は泣き続けるし・・・驚くばかりです!!」

巻くし立てて言う星影に父親は弱々しい笑みを浮かべる。しかし星影を見るだけで何も言うそぶりはなかった。

「母に聞いても、林山に聞いても『星蓮が』としか言わないし、侍女たちは怯えきってしまって話せる状態じゃないし・・・なになんですか!?星蓮になにかあったんですか!!?」

そんな父親に苛立ちを覚えながら星影は続ける。

「星蓮はもう戻ってるんですか!?何処にいるんですか!今すぐ呼んでください!!」

そこまで言い切ると肩で息をする。改めて父親を見る。それまで黙って話を聞いていた劉伯孝だったが、視点の合わぬ目で話し始める。

「ああ・・・わしも驚いたよ。お前が女らしい装いをするとは・・・。思わず星蓮と間違えてしまった。」

力なく言う父親にますます不信感を積もらせる星影。そんな彼女に追い討ちを掛けるように父親はとんでもないことを口走った。

「劉家はお前に継いでもらわないと・・・。あの花嫁衣裳を来てな・・・。」

父親の言葉に思わず耳を疑う。彼が指を指した先には、星蓮の花嫁衣裳が飾ってあったのだ。

「なっ・・・何を言っているのですか父上!?あれは星蓮の花嫁衣裳ですよ!?」

「いいのだよ・・・。星蓮にはもう必要ないのだ・・・。もう・・・!」

「もう会えんのだよ。星蓮は・・・戻ってこないのだ。」

いつもと違う父親の態度に、星影は直感的になにか感じ取る。

「なんですって!?いったいどういう意味ですか!?」

そのまま父親に近づこうとした時だった。

「・・・連れて行かれたんだ。」

「え!?」

振り向くとそこには、林山と侍女達に支えられた母親が立っていた。

「林山?」

「連れて行かれたんだよ!後宮に・・・・!」

「なっ!?こ、後宮!!?」

あまりのことに星影は返事ができなかった。
一体なにを言っているんだ、みんなは？星蓮が後宮へ？いくら家が大商家だといっても、そんなつてはないぞ。第一星蓮は林山と結婚するのに・・・？

「混乱するのも無理はない。・・・場所を変えて話そう。義父上、星影には俺から話します。その間義母上、どうか義父上のお側に。」

うな垂れる父親の側に小走りで近づく母親。それを心配そうに見守る侍女達。

「星影もそれでいいな？」
「ああ・・・。」

（このまま父上を問いただしても、こちらがほしい情報は聞きだせそうにないしな・・・。）

行こう、と自分の腕を掴み、部屋から連れ出す林山。いつもと違う両親を残して、星影達はひとまず部屋を出る。

「それで・・・？どうしたって言うんだ、林山！？」

顔色の悪い両親を見ながら戸を閉めると、小声で林山に尋ねる星影。

「なにがどうなって、お前が家の前で怪我を負い、役人が家を荒らし――――」

一呼吸吐いてから、星影は言った。

「・・・星蓮が、妹が後宮に・・・という話になるんだ?」

星影の問いに林山は口を閉ざす。

「林山・・・何があったんだ?何故星蓮と後宮とが関係あるのだ!?」

「――それは・・・」

「林山、私の勘違いならそれでいいのだ。まさかお前、星蓮が、結婚の決まった人妻が、後宮に連れて行かれたというのか?」

「星影・・・。」

悔しそうに林山が唇を噛む。それだけで、今自分が言っていることが『間違っていることではない。』と、自覚させられてしまう。

押し黙ったままの親友を見ながら、少し話題を反らして話を進めようかと思った時だった。頭の片隅にあった小さな疑問を林山にぶつける。

「なぁ林山・・・。何故お前はここにいるんだ?」

「何故って・・・来ちゃ悪いのか?」

怪訝そうな顔をしながら、星影を見つめる林山。

「いや・・・星蓮と家に戻ったんじゃなかったのか?まさか星蓮を怒らせたんじゃ・・・。」

「怒らせるわけないだろう!?それ以前の問題に、今日はまだ星蓮と会ってない。」

「なに!!?」

（会っていない!?そんな馬鹿な・・・だって!!）

「お前薬妙寺に行ったんじゃないのか!?そこで星蓮に会わなかったのか!?」

「・・・薬妙寺?」

星影の言葉に、林山の顔はわずかにこわばっていた。

「お前まさか・・・知らないのか!?」

言ったと同時に星影は内心、しまった、と思った。今回の計画については、あくまで林山は知らないこと。ここで、話してしまっては妹の気持ちを裏切ることになる。しかし今は、そんなことを言っていられる状況ではなかった。

「知らないのかって・・・なにがだ!?薬妙寺と星蓮となにか関係があるのか!?」

彼女達の気持ちも計画も知らない林山は、案の定詰め寄ってきた。林山を落ち着かせようと、なんとか話の内容を『入れ替わり計画』からそらそうとする星影。

「その・・・!星蓮と会わなかったのか?なんか、お前を探していたみたいなのだが。」

途端に勢いよく星影の肩を掴む林山。

「なんだと!?どういうことだ!?星蓮が俺を!?一体いつ!?なにがあったんだ!!!」

完全に冷静さを失っているようだった。激しく星影の肩を揺さぶる林山。

「待て、待て、コラ！」

「星蓮がどこで!?俺を!?いつ!?いつなんだよ星影!!」

「お、落ち着けよ・・・！」

「俺の星蓮が俺を探して・・・!!星影、なにがあったんだ!!答えろ!!一体なにがあったか答えろぉ!!」

（・・・ここにも愛で性格が変わる奴がいるな。）

わずかに微笑すると、肩に置かれた手を払って星影は言った。

「それはこっちの台詞だ。先に私の質問に答えてもらおう。・・・なにがあった?」

「・・・俺にも何がなんだかわからないんだ。」

「わからない・・・?」

訝しそうにする星影をよそに、林山はたんたんと話し始めた。

第三話　義姉弟と強奪事件（前編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
余談ですが、この小説の主人公は、かなりマイペースな性格です。
次回も、よろしくお願いします。

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第四話　義姉弟と強奪事件（後編）

星影・星蓮が薬妙寺にて罠（！？）をしかけて林山を待っていた頃、当の本人は劉家を訪れていた。安林山が劉家に行った目的はただ一つ。単純に妻となる星蓮に会うためだった。

婚礼の決まり上、結婚まで男女が家を行き来してはいけないと言われているが、林山からすれば、そんなもの知ったことでなかった。大好きな星蓮に会って話がしたかった。初めて彼女に会った時、星影に連れられて武術の稽古場に来た星蓮を見て、一目で好きになった。ふんわりと笑う笑顔がたまらなく好きだった。その頃すでに、自分には決められた婚約者がいたが、当時はその意味さえよく考えていなかった。とにかく、結婚するなら彼女しかいないと、勝手に決めていた。親には当然反対されたが、それでも自分の意志を貫いた。一般的に、婚姻というものは親が決めてしまい、自分達の意思は通されない。だが、あえて自分の恋を押し通した。多少の犠牲を伴ったが、その分幸せも手に入れた。結婚すれば、毎日一緒に入れるのに、どうして今日みたいに会いたくなってしまう。理由をつけて会いにきてしまう。

（側にいるだけでもいい――――――！）

顔を見るだけでも良かった。その姿を見て安心したかった。でも、本音を言えば、話をしたかった。どんな気持ちで家を出て、どんな思いで星蓮の家を訪ねたか。何度も星蓮のことを考えながら、何度その顔を思い浮かべたか。どれほど自分が星蓮を愛しているか、彼女がどれだけ自分のことを愛しているか・・・語りたかった。だから、『ご機嫌伺い（うかがい）』という口実を作ってまで星蓮に会いに行ったのだが・・・

「すまないな、せっかく来てくれたのに。」

会いたくて、会いたくてたまらなかった愛しい人は――

「ちょっと今使いに出していて・・・」

あいにくの留守。愛想笑いをする義理の父の様子を見ながら直感する。

「気遣い無用ですよ。本当は星影が連れ出してしまったんでしょう？」

姉の星影が彼女を連れ出している事はわかっていた。

ばれたか、と苦笑しながら謝る劉家主人。

すまなそうにわびる劉家主人に対して林山は笑顔で答える。

「いいえ、いつものことですから気にしていません。星影も寂しいのですよ。妹と離れるのが。」

「ありがとう。君みたいな男なら星蓮のことを安心して任せられる。」

「ご安心を。お嬢さんは俺が必ず幸せにします！」

「おお、それは頼もしいな！」

和やかな雰囲気で談笑している時だった。

家の中が妙に騒がしい。それに大勢の足音と金属の擦れ合う音が響く。それはだんだんと、彼らがいる部屋へと近づいてくる。戸が破れんばかりの音で開くと、一気に役人達がなだれこんでくる。思わず立ち上がる二人。

「お主が劉家の主人、劉伯孝だな？」

上官らしい男が言った。

「は、はい。あの・・・お役人様、これはいったい何事でございましょうか!?」

たじろぐ劉家面々に、役人達は道を作るように両脇に立つ。その道を当然のように、颯爽と歩きながらやってくる三人の男。劉伯孝の前まで来ると、そのうちの一人、文官らしい男が声を張り上げて言い放った。

「勅命である!!謹んで受けよ!」

「ちょ、勅命!!?」

文官らしい男の言葉に、劉伯孝と林山は互いに顔を見合わせる。

――勅命――

国を統べる王のみことのり。つまり、漢帝国を納める皇帝・劉徹の命令であった。

この命令は絶対的な力を持ち、拒否する事はすなわち拒否したものへの『死』を意味する。

また、拒否することでその身内、親兄弟子孫にいたるまでが『不忠』の汚名を背負わなければならなかった。それだけこの『勅命』には強い意味があった。

「そ、そんな恐れ多いものが何故我が家に・・・！？」
「・・・義父上！」

事態を飲み込めない二人であったが、このままつっ立っていても仕方がない。恭しく胸の前で手を合わせると膝を突いて頭を下げる。そんな二人の様子に文官は満足そうに頷くと、声高々（たかだか）に言った。

「この度の勅命については、皇帝陛下直属の使者、郭勇武様直々にお言葉を伝える。」

そう言って、右にいた武官らしい男に巻物を手渡す。

「皇帝陛下の命を受けた郭勇武である。これより陛下の勅命を申し付ける。」
「は、はい。謹んでお受けいたします・・・！！」

深々と頭を下げる蒼伯孝を見ながら、郭勇武と名乗った使者はその姿を鼻で笑う。

（嫌な奴だな・・・。）

それが林山の第一印象だった。とはいえ、それを口に出して言うとこちらの罪に問われる。ここは我慢して、同じように頭を下げる林山。

「この度、皇帝陛下の命によりここ藍田に来ている。都から皇帝陛下の勅命が下っているのは知っているな？」
「は、はい。存じております。」

「では何故、使者である俺自(みずか)らが、ここに赴いているかもわかるな？」

「いえ、それが・・・。」

役人の言葉に劉家主人は首をかしげる。たしかに現在藍田には、皇帝陛下の勅命を受けた使者が来ていた。しかしどういった用件かまでは知らなかった。そもそも勅命とは、用件次第では、極秘(ごくひ)にも公(おおやけ)にもできる話であった。

「もうよい！時間が限られているので単刀直入に言うぞ！！そのほうの娘のことで参った。」

その言葉に劉伯孝だけでなく、林山もギクリとする。

「あ、あの子がなにか・・・・！？」

しでかしましたか・・・？と、までは言わなかったが、顔がそう述べていた。思わず顔をあげた瞬間、無礼者と怒鳴られた。

「現在、皇帝陛下のおわす、後宮が現在どのような状況下は知っているな？」

「はい、お聞きするところによれば、今上（皇帝）の後宮は思わしくないと・・・。」

後宮――庶民には聞きなれない言葉では会ったが、どういう場所であるかは知っていた。皇帝の妻女達が住む宮中の奥御殿(おくごてん)のことであり、その数は多いもので数千人の女性が住んでいた。また、古来より皇帝の権威(けんい)を現す象徴(しょうちょう)の一つとして、妻女たちの人数によって現す場合があった。これは、他国に己(おのれ)の権力の強さを見せ付けるだけではなく、子孫繁栄(しそんはんえい)も視野(しや)にいれた方法だった。昔は現代ほど医

学が発達しておらず、特に乳幼児の死亡率は高かった。そのため男性は、身分の高いものになればなるほど家系を絶やさないためにも多くの妻を娶っていたのだ。

「その通りだ。ここ半年の間に、後宮で悪性の病が流行してな・・・女官などを含めた多くの後宮関係者が亡くなった。しかも一ヶ月前から、その病が皇帝陛下の奥方様達にも広まりだしてな・・・おかげで奥方様達の人数が激減してしまった。」

「なんと・・・お悔やみ申し上げます。」

「うむ・・・重臣の方々と話し合った結果、皇帝陛下の権威を守るため、ついては子孫繁栄のために、『中華全土より皇帝陛下の奥方様にふさわしい女性を集めるように』と、仰せつかったのだ。」

そう言うと、劉家の者達の前で使者はとんでもない命令を告げた。

「そこでだ、お前の娘を後宮に召すこととなった。」

「なんですと!?いったいどっちが!?」

狼狽する劉家主人。そんなことは聞かなくても分かっていた。皇帝の妻に選ばれるのは、美人で、品がよく、慎ましやかな女性らしい女性なのだから。間違っても・・・・・

「決まっているだろう。まあ、噂どおりの美しさだな?」

高らかと笑う使者とは対照的に、その話を聞いた二人は頭の中が真っ白になる。否、父親の方に関しては顔面蒼白である。

「お待ちください!娘はここにおります安林山と近いうちに嫁ぐ身。どうかお許しのほどを!!」

「安林山?」

「貴様！皇帝陛下の勅命に逆らう気か！？」

側近の男が剣を抜きかけたが、郭勇武がそれを制止する。

「劉よ、お前は聞くところによると、以前から娘の後宮入りの話を断っていたと聞くが・・・。」

「何故それを！？」

確かに以前、そういう話が出ていたのも事実だった。なんせ「藍田の蝶花」と言われるほどの美人姉妹なのだ。そんな娘達を後宮管理者が放っておくはずがない。文・武官はもとより、多くの宮廷関係者が自分の推挙（すいきょ）で入廷しないかと誘ってきたのだが、星蓮は林山のことが好きだし、星影はあの通りだし、ということで断り続けていたのだ。なによりも、娘には好きな人と一緒になってほしいという親心から、これまですべて断っていたのだ。さいわい星蓮が婚約してからは、その誘いも来なくなっていたので胸を撫で下ろしていた矢先のことだった。

「世の中には、後宮に入りたくても入れん娘が数多くいる。その中で、こちらが何度も出向いてきてやって来ているというのにいいご身分だな？」

「そんな！私は・・・！」

「それでもなお、断るとは一体どういった了見（りょうけん）だ！？」

「で、ですからそれは、以前から申しておりますように、私の娘達はなく、身分の高い良家お嬢様の方が適任かと・・・！」

「貴様！！我らの心遣いを無にする気か！？」

さっきの静かな口調とは一変した乱暴な口調。劉家主人の胸倉を掴むとそのまま締め上げる。とっさに林山が止めに入る。

「おやめください！お役人様！義父上をお放しください！」
「若造が！・・・もう婿気取りか！？」
「お願いです！彼女を返してください！彼女は私にとって大切な人なのです。」

林山の訴えに使者の郭勇武は眉をひそめる。

「なにやら話がかみ合わんな？話しによれば、お前の娶る相手は劉家の・・・」
「私が妻にするのは、貴方様達が今上に差し出そうとしている人です！町でどんな話をお聞きしたか存じませんが、それはあくまで過去の話です！今日ここに来たのも、妻となる彼女に会うためでございます。」

そう言うと林山はその場に膝をつくと、頭を下げながら言った。

「お願いでございます！！彼女だけは・・・お許しのほどを！！！」
「私からもお願いします！娘は、あの子はここにいる安林山に嫁ぐ身・・・どうかお許しを！！」
「義父上！？」
「使者様、郭様！どうかこの件に関しては、なかったことにしてくださいませ！！」

自分と同じように、いや、それ以上に頭を下げる姿に、林山はなんとも言えない気持になる。

「郭様、お願いでございます！どうか娘だけは、うちの娘だけはお見逃しください・・・！！」
「見逃せだと・・・聞き捨てならんな・・・？」

意地の悪い声で笑う郭勇武に劉伯孝は言った。

「はい、そのためにはなんでも・・・・あなた様にはできる限りの事はさせていただきます・・・！！ですから娘だけは・・・・！！」

「それは金品でもか？」

「え！？」

驚いた林山達が顔をあげた先には、薄汚く笑う郭勇武の姿。

この男まさか・・・適当な言いがかりをつけて、賄賂を要求しているのか！？

「し、しかしそれは違法では・・・！？」

「何でもすると申したではないか。」

「それはものの例えでありまして、いくらなんでも賄賂は渡――――！」

「無礼者！！」

劉伯孝が言い終らないうちに、郭将軍の拳（こぶし）が飛んだ。

「義父上！？」

「な・・・なにをなさいます！？」

「誰が賄賂を寄越せと言った・・・！？冗談のわからぬ商人風情が。」

「・・・貴方様が遠まわしにそう言ったのでは！？」

皮肉を込めていった林山に、郭勇武は唾（つば）を吹きかける。

「っ！？」

「よさないか！！」

掴みかかろうとする林山を劉伯孝が慌てて抑える。

「耐えてくれ・・・！」

「・・・わかっています・・・！」

そう言うと、頬に吹きかけられた唾を拭う林山。

（わかっているが・・・これはいくらなんでも、皇帝陛下の使者たる者の礼儀ではないんじゃないか・・・！？）

堪える林山を罵るように、さらに郭勇武は言い放った。

「そういえば安林山とか言ったな？お主聞くところによれば、以前は李桂蓮という女子と婚約していたそうじゃないか。」

「それは――」

郭勇武の言葉にかすかに動揺する林山。その様子を楽しむように彼は話を続ける。

「それが、劉家の美女に乗り換えたかと思えば、未だにその女と通じておるそうじゃないか？挙句の果てに・・・つくづくすきものだな？」

郭勇武の言葉に抑えていた林山の怒りが顔に宿る。

「まあわからんでもない・・・。良い物を見ると、つい欲しくなるのが人の欲望よ。」

「良い・・・物！？」

それまで我慢して聞いていた林山だったが、その怒りは頂点に達し

た。愛する恋人を侮辱したばかりか、一番触れて欲しくないことを嘲るように言ったことが許せなかった。

「貴方にとって彼女は・・・・人ではなく、物だと言うのですか！？」

「何を血迷ったことを・・・。女の役目は男を喜ばせること。陛下がお喜びになることに、何の不服があるというのだ？」

さっと林山の顔に赤みが差す。それは怒りによるものだった。

「彼女は物ではない！！私の妻になる人だ！！第一、結婚の決まっている・・・人妻まで平気で奪うのですか！？貴方様のしている事は、陛下の名を汚す最低のことだ！！」

立ち上がり郭勇武の前まで行くと、凄みをきかせて怒鳴りつける。暫くにらみ合っていた二人だったが、その沈黙を破ったのは使者である郭勇武の方だった。

「堂々と陛下を愚弄し、勅命を拒否するなど・・・・死罪は免れるぞ。」

「貴方様こそ、それが皇帝陛下の使者として振る舞いですか！？」

「女を男の飾りと見てなにが悪い？勅命を奉じぬ下賤風情が・・・！」

その言葉に林山の理性は壊れた。

「黙れ・・・・！俺の大事な人を返せ！」

そういうよりも早く、すかさず使者に掴みかかる。素早く繰り出される林山の拳は使者の顔面に命中する。相手は不覚をとられてその

まま倒れたかに見えたが。顔に食い込む拳を素早く掴むと、そのまま勢いよくひねりあげると投げ飛ばした。意表を疲れた林山は投げ飛ばされるが、なんとか受身で着地した。すぐさま態勢を整えるが、その一瞬の隙をついて郭勇武は隠し持っていた灰を林山の顔めがけて浴びせる。

「うわっ！？」

灰が目に入り視界をふさがれてしまった林山。

「卑怯なっ・・・！」

彼が慌てている隙をついて、郭勇武は視界が見えない林山めがけて蹴りを入れる。まともにくらい、よろけたところを今度はみぞおちに拳を連続して打ち込まれてそのまま林山は倒れた。

「なかなかの腕だが、その程度では俺には通用せんぞ。」

「貴様ぁ！この卑怯者め！！」

「自分から無礼を働いておいて、卑怯も糞もあるものか！」

まともに拳を受けてうずくまる林山に、郭勇武は馬鹿にするような目で彼を見る。

「どうやらお前には教育が必要だな？お前たち！手加減はいらん！叩きのめせ！！」

掛け声とともにいっせいに役人が林山に飛び掛る。そこからはもう酷いものだった。身動きが取れなくなっている林山を棒や刀の鞘でたたきつけるのだ。

「おやめください！郭様！林山をお許しくださ・・」
「黙れ！！」

彼の懇願はあえなく却下されたばかりか、適当にあしらわれてしまった。なおも食い下がろうとする主人に棍棒が打ち込まれる。部屋に彼のうめき声が響き渡る。

「義父上！！」
「あなたぁ――！？」

騒ぎを聞きつけ、駆けつけた喬夫人の悲鳴が部屋に響き渡る。

「お、おやめを・・・！」

棍棒で打ち込まれてもなお、義理の息子を助けようとする劉伯孝。
そんな彼に容赦なく蹴りを入れる郭勇武。

「やめろぉ！義父上、義父上ぇ！！」

そのまま家の中から引きずり出される林山。

「見せしめだ！やってしまえ！！」

郭勇武の声を合図に、役人たちはいっせいに林山を袋叩きにし始める。
両手両足を数人がかりで押さえつけると、棍棒や素手で執拗に殴りつける。中には、剣を鞘に収めたまま、叩きつける役人もいた。

「おやめください！どうか、死んでしまいます！おやめくださぃぃ・・・！！」

追いかけてきた喬夫人の声に、忌々（いまいま）しそうに舌打ちをしながら、郭勇武が合図をする。
それによって林山は暴行から解放されたが、動くことは出来なかった。かすかに動く首だけを持ち上げたが、頭ごと踏みつけられる。

「ぐぁ・・・！！」
「いいか、俺に逆らうことは、皇帝陛下に逆らう事だ！！よく覚えておけ！！」

身動き取れない林山の腹を蹴り上げると、はき捨てるように言った。

「これをもって、皇帝陛下直々の勅命は完遂（かんすい）され、劉家は命を受諾（じゅだく）したとものとする！！」

郭勇武が大声で言い放つ。するとそれに合わせるように、役人たちも声の限り連呼（れんこ）する。

「劉家は勅命を受諾した！ありがたいお言葉を受諾した！！」

なにも知らない町の者たちは、とにかく勅命があったことは良いことなのだと、次々にその場に突っ伏して声を上げる。

「皇帝陛下万歳！皇帝陛下万歳！！」

その光景に、呆然と地面にへたり込む喬夫人と侍女達。悔しそうに歯を食いしばる林山。

そんな林山の様子を横目で見ながら、郭勇武は満足そうに去って行ったのだった。

第四話　義姉弟と強奪事件（後編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
余談ですが・・・各話ごとの題名を決めるのが、個人的に一番大変です・・・！！
それで・・・え～と、今後、タイトル変更することがあります。
本題は変わりませんが、各話は変更する・・・と、思います。
ややこしくてすみません（土下座）！！
以上、小話でした。

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第五話　なんとかの逆鱗に触れる

「・・・後は見ての通りさ。本当に情けないよな。」

庭にある桃の木に、寄りかかるようにして言う林山。その目は怒りと悲しみと苛立ちが見え隠れしていた。

「・・・ああ、その使者がな・・・！」

林山の話を黙って聞いていた星影が言った。

「なんてむちゃくちゃなんだ！？信じられない・・・結婚を控えている娘を略奪同然で連れて行くなんて。人のすることじゃない！」

「そりゃそうだ。人ではない・・・なんせ相手は皇帝陛下だぞ。」

「そんな事は聞いていない！！それ以前に、郭勇武という奴の振る舞いが気に食わん！！使者としてあるまじき行為だ！！」

そう言って、林山が寄りかかっている木に拳を打ち込む星影。

「あんまりだ。いくら陛下だからってやっていいことと悪いことの区別もつかないのか！？なにが名君だ！どこからどう見ても昏主じゃない！？」

「星影！！」

林山の戒めるような声に、彼女は下唇をかむ。

「めったなこと言うな。」

「ああ、わかっている・・・・。陛下の批判は不越罪になるからね。」

悔しそうに下を向く。

わかっている・・・陛下を悪く言う事は罪になる。

（ことのほか今上（きんじょう）の場合は・・・！！）

現皇帝である劉徹は政治面・外交面共に優れた人物だった。もし欠点があるとすれば、大変気性が激しいことだった。彼の怒りに触れた者は、どんなに優れて人物であっても命はない。匈奴にいる漢人の何人かは、その怒りに触れ、国を追われた者だと言っても過言ではない。

「でもな、お前の言う事は否定しない。」

「林山？」

いつもとは違う口調に思わず星影は彼を見る。

「できることなら奪い返したい。星蓮が他の誰かのものになるなんて考えたくない。」

顔をあげて彼の方を見ると、悔しそうに下唇（したくちびる）を噛締（かみし）める林山の姿があった。その姿を見ているうちに、収まりつつあった星影の怒りもふつふつと煮えたぎり始める。

「私も・・・同感よ！大切な妹を『物同然』に扱（あつか）われるなんて・・・許せない！！」

そうよ、このまま済ませるものか！！

星蓮を後宮に？ふざけるな！！

絶対にそんなことをさせはしない。
そうなれば考える事は一つ。

（・・・星蓮を取り戻す・・・・！！）

星影は考えた。目に入れても痛くない、可愛い妹を取り戻すためにどうすればいいか。そのためにはまず、敵の正確な情報を得なければならない。そう思った星影は、うな垂れる林山に尋ねた。

「それで林山、役人達が来たのはいつ頃の話なんだ？」
「もう一刻ほど前だよ。だが・・・追うのは無理だぞ。早馬でさっさと行ってしまったからな・・・。おまけに馬が漢のものじゃなかった。大きさからして西域の駿馬（しゅんめ）だ。」
「駿馬！？」

早馬を使ったということは、林山が言う通り、今から役人達の後を追っても間に合わない。この時間だったら城門はもう閉まっているだろう。しかも西域の駿馬（しゅんめ）は漢の馬と違ってかなり早く走る・・・自分の乗っている馬では追いつけないだろう。

「まるで追いかけてくることも計算して・・・・時間を見計らってきたみたいだな。」
「まったくだ・・・。」

どうしたものかと、その場に座り込む星影と林山。

「絶望だ・・・取り返せないのか・・・！」
「林山・・・。」

頭を抱えこんでつぶやく林山を見ながら、星影はさらに考えた。

藍田で取り戻せないとなると残る方法はただ一つ。

一番単純で誰もが思いつく、かなり危険な考えかつ方法――

「・・・後宮に行けば、星蓮を取り戻せるんじゃないかな!?」

名案だ、と自身万満々に言った星影だったが、

「馬鹿かお前は!?後宮は、俺たち一般人が簡単に入れる場所じゃない。入れるものなら、真っ先に俺が行って、星蓮を取り戻してるぞ!!」

即答のもとに、あっさりと林山に否定される。

「でも、それ以外方法はないぞ!」

「そうかもしれないが・・・・。」

黙り込む二人。

通常の場合、皇帝の妻に選ばれた女性に否定権はない。皇帝陛下の言う事は絶対であり、断ると言う事はすなわち死を意味するということなのだ。今回の場合、陛下の勅命により来た使者が皇帝の代わりであり、その使者の言うことは絶対なのである。極端(きょくたん)に言えば、林山が使者を殴っておきながら、袋叩(ふくろたた)きにされ、辱(はずかし)めを受けるだけですんだことを、第三者が見た時『命が助かっただけでもありがたい』と、喜ぶべきことであった。それが常識なのだ。それでもな

お、なにか良い案は、星蓮を取り戻す方法がないかと考える二人。

「なんとか・・・後宮に入る方法はないのかしら。」

しばらく続いた沈黙を先に破ったのは星影だった。

「無理だな。後宮と言うのは陛下の妻達がいるところだ。出入りできる人間は限られている。基本的に、身分のある女性か美女か女官だけしか入れないんだ。まず、男の俺が後宮に入ることは不可能だ。星影はある程度の条件を満たしているが・・・。」

林山の視線が自分に注がれる。その意味を察して相手を睨みつける。

「そうだな。私のような『女虎傑(じょこけつ)』の異名を持つじゃじゃ馬が、身分が高くて、品のある、慎ましやかな女性達のいる後宮に入れるわけがないからね。」

嫌味ったらしく言う星影に林山は思わず苦笑する。

「そう気を悪くするな、悪かったよ。まあ、方法があるとすれば・・・いっそのこと、俺が宦官(かんがん)になって後宮に入るしか手はないのかな・・・。」

「宦官?」

彼の呟きを聞き、星影は不思議そうに林山を見る。

「知らないのか?確かに後宮は男子禁制だ。ただ例外として・・・宦官・・・男を捨てた者だけは入ることができるんだ。」

「男を捨てる・・・?」

考え込む星影に、バツが悪そうに林山は手探りで教える。

「・・あそこを切るのだよ。」

「なに!?」

途端に真っ赤になる星影。そんな姿を見つつ、やはり彼女も女かと今更ながらに再確認する。

「詳しく話すと、宦官というのは後宮に仕える男の奴隷のことを言うんだ。奴等の仕事は後宮にいる皇帝や皇后、宮女たちの世話をすること。だから、皇帝の妻たちに粗相をしないように男性器を除去されるんだ。宦官が生まれたのは、異民族の捕虜が始まりなんだ。捕らえた異民族を『宮刑』という刑罰に処し、後宮で働かせ始めた名残が今の宦官だ。」

「へえ〜じゃあ、後宮の宦官は今でも異民族の人達なの?」

「いいや。中には異民族もいるだろうけど、多くの場合は漢民族さ。主に罪を犯した連中や自ら進んでなったものと、きっかけはさまざまだけどな。」

「え!?自分で!?物好きもいるんだな。」

「理由は人それぞれさ。一様には言えないがな。」

林山がそういい終わると同時に、星影は黙り込んでしまった。

(・・・やっぱり女の子にこういう話はまずかったかな?アレを切るって言っただけでも初な反応をしていたし。)

林山がそんなことを考えている時だった。

「――――――あっ!!」

それまで静かだった星影が、突然叫び声を上げた。それと同時に彼女は勢いよく立ち上がると林山に向かって言った。

「そうか!!そうだよ!!後宮・・宦官・・・男と女・・その手があった!!」

「せ、星影!?」

その叫び声は狂喜(きょうき)にも似たような声だった。怪訝(けげん)な顔をする林山を見据(みす)えたまま彼女は尋ねた。

「林山、あなたは私の妹の星蓮のことを本当に愛している?」

「ええ!?な、なんだよ!?急に・・・。」

「いいから答えなさい!!愛しているの?愛してないの!?」

真顔で聞かれた林山は、真っ赤になりながら答える。

「あ・・・愛しているに決まっているだろ!!当たり前じゃないか・・・!!」

照れながら言う林山の答えに、星影は満足そうにうなずくと話を続ける。

「いい答えね。あなたと星連が結婚すれば、私はあなたの義姉なのはわかるわよね?」

「そうだけど・・・?何でそんな当たり前のこと聞くんだ?」

意味ありげな笑みを浮かべる彼女を不振に思うと同時に、林山は背筋に悪寒を感じる。

「じゃあ、星蓮のために義姉である私に協力してくれるわよね？私の妹であり、あなたの妻である星蓮を取り戻すために？」
「それはもちろん協力するけど・・・・。」
（なんだろう・・・一体俺になにをしろと言うんだ。）
「じゃあ決まりね！行きましょう！すぐに支度して！！」
困惑する林山をよそにそう言い終わると、そのまま踵（きびす）を返して立ち去ろうとする星影。
「ちょっと待て！！行くってどこに！？」
相手の行動がわからない林山。そんな義弟に、星影は不適な笑みを受けべると言った。
「後宮。」
「へ・・・・？」
「後宮へ行くの。方法は簡単よ。私があなたに成りすまして、宦官として後宮に行けばいい！！」
「な、なに――――――――――――！？」

驚く林山にさらに追い討ちを掛ける。

「だってそうでしょ？私が妻女として後宮に行くのは難しいし、林山が宦官になるのはまず無理。それなら、逆にしてしまえばいいのよ。」

「逆・・・・・？」

「私とあなたが入れ替われば万事解決じゃない！」

「・・・・・・・本気か？」

星影のあまりに唐突な発言に林山は唖然とする。

「本気よ！それに宦官だと、動き回れる上に、怪しまれずに星蓮を取り戻せるじゃない！！」

確かに彼女に言う通りだった。

しかし星影の言っている事は、明らかに法に反する犯罪だった。

「つまり・・偽造するわけか？宦官証明書を？」

「もちろんよ！だって考えて御覧なさい？あなたが宦官になって後宮に行って星蓮を連れ戻したとしても、切っちゃったらもともこもないわ！そうかと言って、私が女官として入ったとしても、助けられる確立は少ないでしょ？だったら、途中まで一緒に行って、後は私に任せればいいのよ！！」

なんてとんでもないことを言う女だ・・・。この人が本当に俺の義姉さんになるのか？

「そうと決まれば話が早い！林山、すぐに家に戻って準備をして！

私は役所に行って宦官の募集をしているか聞いてくるわ！」
「待てよ！宦官は入れ替わったからといって、簡単になれるものじゃないぞ！医者の証明書が必要――」
「だから偽造しようって、いってるじゃん。」
「だから犯罪だぞ、それ！！？」
「ばれなきゃいいんだって！心当りはあるから・・・特に問題ないよ。」
さらりと言い放つ星影。

（こいつ素で、なんて恐ろしいことを言い放つんだ！？）

「し、しかし、仮に連れ出したとしても、ばれるのは時間の問題だ！その後はどうすればいいんだ！？星影だってただではすまないぞ！？」
「大丈夫！後宮に私達を知る人間はいないんだからばれるはずない。まあ、無事に救出できたら、あなた達は会稽（かいけい）に逃げればいい。あそこには、厳師匠のお父様がいるし、わけを話せば協力してくださるさ。今は山で薬草取りをしているんだって。」
「な！？師匠に頼むのか！？そんなことしたらご迷惑が・・・・・！！」
「なに言ってるんだ！宦官証明書の偽造も頼むんだぞ？一つ迷惑かけて同じ結果なら、二つ迷惑かけた方がいいだろう？」
「おまっ・・・！？師匠に宦官証明書の偽造を頼むつもりだったのか！？」
「当然だろう。師匠は武の道だけでなく、医術の道も究めたお方・・・！これ以上の人物はいない！」

（こいつの頭の中には、師に対する“尊厳”の心がないのだろうか・・・？）

「そんな固い顔するな！」

固まっている林山に星影は言った。

「きっと力を貸してくださるさ。なんせ、女の私に武芸を教えてくださるような方なのだからな！」

真っ直ぐな目で見つめられて、思わずかにたじろぐ林山。

（まるで俺の言ってることの方が、おかしいみたいじゃないか・・・。）

そう思った林山だったが、そんなはずはないと首を振る。

そして強めの口調で星影に言った。

「だが、仮に上手くいったとしても、お前はどうするつもりなのだ!?」

「私のことは心配しないで。最終的には母の知り合いの寺に行って尼になるから。」

「あ、尼!!?」

「さすがの皇帝陛下も、尼僧にまでには手出しはしないでしょう？なんたって風評に響くじゃない。御偉くて、尊くて、大変信心深い皇帝陛下様のね。」

片目だけ閉じて見せながら、あっけらかんと言い放つ星影。思わず目が点になる林山。

なんてとんでもないことを言う女だ・・・。この人が本当に俺の義姉さんになるのか？

「可愛い妹と義弟のためなら、多少の事は平気だからね！」

多少って・・・自分の人生犠牲にしてまでか！？

いや、ダメだ！友としてそんな事はさせられない！！

「ダメだ！危険だぞ！！お前の両親はもとより、俺の親の命にだって関わる――」

「・・・じゃあ、やめよう。」

林山の言葉に、それまでの明るい声が一転する。

「星影？」

戸惑う林山に、切り捨てるかのような低い声で星影は言った。

「不安があるならやめよう。いくらお前が星連を愛していたとしても、迷いがあるならやめよう。星蓮のこと・・・諦めてくれ。」

「ちょっと待てよ、星影！」

「この計画は、私達どちらかに迷いがあったら出来ないんだ・・・。お前の妻の代わりなら他にいくらでもいる。」

「星影、なに言って――！」

「でも私の妹の代わりはいない――。私の妹は星蓮だけだ・・・。」

星影の言葉にハッとする林山。

「母はもう年だから、子供は無理だろう・・・。そうなれば、血を

分けた同じ両親から生まれた姉妹は星蓮1人だけだ・・・。」

星影の射抜(いぬ)くような視線に固まる林山。

「私の妹は、劉星蓮1人きりだ。その妹が愛したのは安林山、お前だけだ・・・。見殺しには出来ない。」

そこまで言ったところで、強気だった星影の表情がふいに緩(ゆる)む。

「わかってるさ、林山。お前に迷惑をかけてることぐらい。私の言っていることは、法に当てはめれば違法なことだ。だが、見殺しには出来ないんだ!妹だから・・・!!」

そう言うと、うな垂れるように視線を下に向ける星影。

「そうだよな・・・たった一人の妹だもんな?」

ゆっくりと星影の肩に手を置きながら林山は言った。

「・・・俺よりも、お前の方が辛いよな。いきなり妹が、誘拐同然連れて行かれてさ。悪かったな、気がつかなかったよ。」

すまなそうにわびる林山に星影は言う。

「・・・謝るな林山。だからお前は人が良すぎるんだ。」

軽く笑って見せると、林山の胸に軽く拳を当てる。

「特に、女に勘違いされやすいぞ？」
「馬鹿言え！俺は星蓮一筋だ！！」
「じゃあなんで・・・妙薬寺で桂蓮と会って、い・た・ん・だ・よ！？」
「え！？な、どうしてそれを・・・！？」
途端に顔色を変えてたじろぐ林山。そんな相手に星影は詰め寄る。
「どういうことだよテメー！？なんで別れた女と会ってたんだ！！？」
「お、お前には関係ないだろう！？」
林山の言葉に、思わず相手の胸倉を掴む星影。
「大有りなんだよ！！お前が桂蓮と会っていると言う噂を聞いて、星蓮が心配性になったんだぞ！！それで真相を確かめようと、私と星蓮が入れ替わって、妙薬寺で待ち伏せしてたんだ！！」
「なっ、なんだとぉ～！！？」
「なのにお前は噂で聞いた逢引場所に来ないどころか、星蓮に会うために劉家に来てたというし・・・一体どういうつもりだ！！？」
「正しいじゃん！俺のしてること！！」
言語道断、と言わんばかりに、自分を掴んでいる星影の手を振り払う林山。
「そんなしょうもない理由で、星蓮をそそのかして連れ出したのかお前は！」
「そそのかしてない！星蓮が是非確かめたいと言ってきたんだ！！」
「星蓮が・・・！？」
「こうなった以上はっきり答えてもらうぞ！お前はどういうつもり

で桂蓮と会っていたんだ!?」

星影の問いに、困ったように黙り込む林山。視線を星影から反らし、口をへの字にする。

「黙り込んだって解決しないんだよ!確かにお前をだますようなまねをした事は謝るが、原因を作ったのはお前だ、林山!星蓮は不安だったんだぞ・・・愛情が自分から桂蓮に移ったんじゃないかって・・・。」

肩を掴み、揺さぶりながら星影は話を続ける。

「話せよ、星蓮のことを愛してるなら・・・!ちゃんとした理由があるならきちんと言ってくれよ!これ以上星蓮を不安にさせるな!!」

ここに来てようやく、林山の視線が星影へと戻る。

「わかった・・・。」

「それじゃあ――――!」

静かに、落ち着いた口調で言う林山に星影も安堵する。

「どうして俺が桂蓮に会っていたか、きちんと星蓮に話す。だから星影も・・・これ以上は聞かないでくれ。」

「林山!?」

「俺の口から、直接星蓮に伝えるよ。お前を介さずに、ちゃんと星蓮本人に言う。」

「林山・・・!」

「俺は星蓮の夫になる男だ。俺の妻は星蓮だけさ。」

林山の答えに、星影も納得したように頷く。

「お前がそういう気持ちならその方がいい。林山の口から、直接星蓮に伝えてやってくれ。」

「ああ。そのためにも星影、お前の提案に俺も乗るよ。」

「えっ！？いいのか林山！？」

「当然だろう？俺が星蓮と会わないことには、直接星蓮に伝えられないじゃないか。」

悪戯っぽく笑う林山に、星英もつられて笑う。

「そうと決まれば、さっそく役所で宦官の募集をしているか聞いてくるよ。林山はその間に身支度を整えておいてくれ。戻ったらその足で一緒に、厳師匠の元へ向かおう！」

「わかった。頼んだぞ、星影。」

手際よく言う星影に、林山も答えたのだが――

「しかし星影、お前は本当にいいのか？」

少し控え目に林山は星影に言う。

「何がだ？」

不思議そうに言う星英に林山は言った。

「俺達のしようとしている事は違法だぞ。俺と星蓮は逃げればいいかもしれないが、お前一人放っておくわけには――」

心配そうに言う林山。

「私は大丈夫。」

林山の言葉を遮るように、はっきりと星影は答える。

「林山と星蓮が夫婦になって、幸せに慣れればそれで私はいいんだよ。隠れて暮らすようになったとしても、2人がお互いを愛し合い、可愛い子供を作ってくれれば、私はそれだけで十分満足だ。」

「でも――」

「私はどうせお嫁に行けない。好きな相手だってできるわけがない。恋なんてできない・・・。だからせめて、あなた達だけでも幸せになって欲しいの。」

「星影・・・!?」

「わかってちょうだい、林山・・・。」

一瞬星影が見せた、寂しそうな笑みと優しい口調の女言葉。なにか言いかけた林山を残し、彼女はそのまま庭を後にする。後に残された林山の周りには、桃の花びらがヒラヒラと舞っていた。

第五話　なんとかの逆鱗に触れる（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
余談ですが、宦官について、いろいろ勉強したのですが、難しいですね（笑）
意外だったのが、ヨーロッパにも宦官的な人がいたことにびっくりしました！
以上、小話でした（笑）

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第六話　入れ替わり大作戦

同じ服を着た人々が門の前を行きかう。それに混じるように、地味な服装の人々が一列に並んでいる。その先頭の前には机が置かれており、身なりの整った男性が腰を構えていた。

「あそこが宦官の受付をしてところか!?」

「おい、あまり大きい声出すな!怪しまれるだろうが。」

場違いな明るい声と、それを咎めるような低い声。――劉星影(りゅうせいえい)と安林山(あんりんざん)だった。

「なんか長安の役人って、やけになよなよしてるんだな?」

「馬鹿、ジロジロ見るな!ここにいるのは俺達が普段見ている役人じゃない!・・・全員宦官の方々だ。」

そう言うと、楽しそうに辺りを見回す星影の首根っこを掴む林山。

「わぁっ、わあ!?何するんだよ!?」

「・・・少し口を慎め。目立つだろーが!」

「だって、あまりにもこの役所が広いから・・・。」

「宮殿だ、宮殿!しっかりしてくれよ・・・!」

星影の首根っこを掴んだまま、林山は木陰(こかげ)に移動する。

「いいか、せっかくここまで来れたんだから・・・ボロを出すような真似はするなよ・・・?」

「なに余計な心配してるんだよ?ここまで何事も無く来れたじゃないか!?」

「だからこそ心配なんだ!」

強めの口調で言う林山に、星影も思わず肩をすくめる。

「わかってるさ。もちろん気を付けるよ！それにしても長安って、本当に華やかな場所なんだな。」

上機嫌に答える星影を見ながら、深いため息をつく林山。

「お前本当に呑気だな・・・。」

「そんなに心配するなよ。いいだろう、せっかく上手く入れ替われたんだから・・・ねぇ、星影さん？」

「ああそうだな、林山殿！！」

星影のちらつかせる紙を見ながら嘆く林山。星影の手には、しっかりと宦官の証明書が握られていた。

「まさか・・・本当にバレずに宦官になるなんて・・・・。」

深くため息をつく林山の脳裏に、藍田での出来事がよみがえる。

・
・
・

故郷・藍田を出発し、後宮がある長安へとやってきた星影・林山の義姉弟。星影の提案で、自分の名前を貸すことにした林山だったが、半場当てにはしていなかった。

「厳師匠！無理を承知でお願いいたします！！どうか私たちのわがままをお聞きください！！！」

「それは・・・・本気で言っているのか？」

そう言って、膝を突いて頭を下げる星影を静かに見据える厳師匠。

（ほらな、思った通りだ・・・。）

内心悪態をつきながら、上目遣いで自分達の武術の師匠を見る林山。厳師匠、本名を厳飛龍（げんひりゅう）といって星影と林山の武道の師匠である。武術・剣技を得意とする彼は、藍田では有名な実力者だった。今は藍田に居を構えているが、元は各地を流浪しながら武道を教える侠客だったらしい。ただ、藍田に来てからは、【変わり者】の名称が定着してしまっていた。しかも、何を隠そうその原因は劉星影にあった。彼は女性である星影に武芸を教えたことで、【変わり者】と呼ばれるようになってしまったのだ。最も、星影が山賊を撃退して以来、星影の師匠として一目置かれるのは事実である。現在でも門下生は年々増加し続けているが、相変わらず【変わり者】として見られていた。

「林山、お前はどうなんだ?首が飛んでもかまわないのか?」

その横で硬い表情をしている林山に、彼はぶっきらぼうに問いただす。

知らない仲ではないとは言え、自分が師と崇める人物に身分偽造・・・犯罪行為をお願いするのは、さすがに気が引けた。

「・・・常識で考えれば、星影の言っていることは大罪です。」

「ほお、知っていて星影の案に賛成するのか?」

いつになく厳しい厳師匠の口調に黙り込む林山。この時代、自分の身内が罪を犯せば、その罪が重ければ重いほど一族は残酷に、そして大勢殺される。そのことと照らし合わせて考えれば――星影と林山が今行おうとしている事は間違いなく大犯罪であった。それに

ついては、二人とも十分にわかっているのだが・・・

「建前では、悪いことだと理解しています・・・！」

「『建前では』だと？」

厳師匠の問いに頷きながら林山は言った。

「しかしこの国の法では、私の心まで取り締まることはできません。」

「それはつまり、国の法を犯してでも、自分の婚約者を取り戻したいと？」

「悪いことだとは思っていません！」

林山の代わりに星影が答える。

「今回、中華全土で行われている宮女の対象は、『未婚の女性』のはず。それを何処（どこ）で嗅ぎ付けたのか、『藍田の蝶花』と呼ばれているということで有無を言わさず連れて行かれたのです！」

「しかし宮中に上がる事は、この国の女性なら誰もが夢見る最高の名誉だぞ？」

「愛する者がいるのに、無理やり引き剥がされて見ささされる夢など、悪夢以外の何ものでもありません！！」

星影の言葉に林山も頷く。そんな様子を、顎鬚（あごひげ）を撫でながら眺める厳師匠。

「私達だけじゃない！きっと星蓮だって・・・！今頃、辛く悲しい思いをしているに違いありません！！」

そう言って、声を荒げる星影に厳師匠はなだめる口調で言った。

「・・・まあ落ち着け。肝心なのは当人同士だ。林山、お前は本当にそれでいいのか？」

星影から視線を反らしながら尋ねる厳師匠。

「若気の至り、という言葉がある。お前がまさにその状態だ。恋に走るあまり、事の善悪がわからなくなってはいないか？」

「厳師匠！？」

「星影、お前は少し黙っていろ。わしは林山に聞いているんだ。」

どうなんだ？と、尋ねる厳師匠に林山は口ごもる。

師匠の言っている事は正しい。本当は自分でも、間違ったことをしているとわかっている。

「自分の命や、愛する星蓮の身を脅かしてまで、貫き通す愛か？」

ことが露見すれば、自分の身内ももちろんだが、愛する星蓮の命だって危ない。それはわかっている。

「両親や一族を危険にさらしてもか？なんの落ち度もない族子を、巻き込むことになってもか？」

わかってはいるが、

「・・・俺は好きなんです。」

忘れるにはあまりに辛く、諦め切れない大きな存在――――

林山は拳を強く握り締める。

そう、好きなんだ。だから助けたい。
理由は単純で、言葉はありきたりかもしれないが、

「俺は・・・星蓮を愛しています。」

意味はとても重たいもの・・・！

顔をあげ、背筋を伸ばしながら林山は言った。

「俺の妻は、星蓮だけと心に決めております。」

星連を愛しているからこそ、助けたいと思う気持ちは本物。

「だから星連を連れ戻します――。」

他の男なんかに渡したくない。相手が自分より上であっても許せない。許したくない。

「お願いします・・・お力お貸しください・・・！」

そう言って、深々と頭を下げる林山。

「師匠、私からもお願いします！どうかお力をお貸しください！」

そんな林山に続けるように星影も言う。

「厳師匠！責任はすべて、私が取ります！決して、厳師匠に御迷惑をかけるような事はしません！！ですからどうか・・・・！」

頭を下げる弟子二人を無言のまま見つめる厳師匠。しばらく二人を見つめていた厳師匠だったが、大きく息を吐くと静かに言い放った。

「お前らの性格はよく知っている。せいぜい、バレずにもっても一ヶ月ぐらいだ・・・。それまでになんとかするのだぞ。」

「師匠！？」

「それでは！！」

同時に二人が顔をあげると、そこには口の端だけあげて笑う厳師匠の姿があった。

「やるなら、徹底的にやれ！逃げ場所は作っといてやる！！」

「厳師匠・・・！」

「ありがとうございます、師匠！！」

「コラコラ、喜ぶのはまだ早いぞ？そういうことは、星蓮を取り戻してからにしろ。」

そう言うと、おもむろに立ち上がり、部屋の奥にある棚の方と向かう。

「師匠それは・・・。」

戻ってきた厳師匠の手には、紙と墨と筆、そして子袋が握られていた。

「行くなら、早い方がいい。すぐに宦官証明書を書くから、しばら

く待っていろ。それと・・・」

鼻の頭をかきながら、厳師匠は言った。

「向こうにしばらく滞在するなら、なにかと物入りだろう?少ないが持って行け。」

そう言いながら、子袋を林山に手渡す。

「こ、こんな大金を!?」

「少し早いが・・・林山と星蓮へのご祝儀代わりだ。」

「厳師匠・・・!」

ニシシ、と笑う厳師匠に、星影と林山の二人からも自然と笑みがこぼれる。

「師匠のお心遣い、本当に感謝いたします・・・!なんとお礼を申していいのやら・・・」

「厳師匠、妹に代わって、お礼申し上げます!ただでさえ、厳師匠には御迷惑をかけているというのに・・・!」

「わしの事は気にしなくていい。情のない連中を敵にまわすんだ。義を重んじなくて人と言えるか!そのためにも星蓮を取り戻し、皆が幸せになる必要がある。」

「師匠!」

「遠慮はいらん。星蓮を助けるためのわずかな足しにしてくれ。」

厳師匠に言われるままに、差し出されたご祝儀(!?)をありがたく受け取る林山。

「必ず星蓮を取り戻します!!」

ワハハ、と笑いながら膝を叩く厳医師に、二人は深々と頭を下げたのだった。

・
・
・

「・・・厳師匠があんなにあっさり協力してくれるとはね・・・。」
「そりゃ義を重んじる侠客だからね、先生は！」

その時のことを思い出しながら、しみじみと頷く二人。ただ、林山に関しては、呆れ気味に頷いていたと言っていい。

「世の中そんなに甘くないというが・・・」

こんな常識外れの作戦が簡単に成功とは正直思ってもみなかった。他の方法を考える必要があると、思っていただけに、厳師匠の賛成は嬉しい予想外だった。

「なに言ってるんだ、林山！この世の中、信じるものは救われるようにできてるんだぞ！？」

そんな星影の言葉に、ため息交じりで林山は言った。

「つまり世の中、無理を通せば道理も通るってことか・・・。」
「その通り！ちゃんと天は見ていてくださるってことだよ！！」

自信満々に答える星影に、林山は苦笑いする。

「だが、お前とはここでお別れだ、せ・・・林山。くれぐれも気を付けてな。」

「わかってるよ。すぐに星蓮を見つけて、迎えに行くから待っていてくれよ！」

「しっ！！あまり大声で言うな・・・！」

「はい、はい、わかってます。」

「本当かよ・・・。こんな調子で大丈夫か？しかもお前1人で・・・」

心配そうに言う林山の肩を軽く星影は叩きながら言った。

「林山は大人しく、宮殿近くの宿で待ってればいいんだよ！確か・・・『月餅華（げっぺいか）』だっけ？」

「・・『月仙華（げっせんか）』だ！」

星影の言葉に、ますます不安が積もる林山。

「私のことは大丈夫よ！宿代がなくなる前に帰ってくるから。それよりも・・・本当に無理を言って、ごめんなさい。」

改まったように、頭を下げながらわびる星影。

「なんだよ、急に？」

それに驚き、思わず聞き返す林山。

「だってそうだろう？いくら偽装のためとは言え、林山の両親に嘘をついてるわけだし・・・貴方にも迷惑はかけたけど、ご両親には本当に悪いと思ってる・・・。」

その言葉に林山は自分の父母のことを思い出す。本当のことは言わなかったが、自分が宦官になると言った時、普段は温厚な気の弱い

父は烈火のごとく怒り、気が強くて気性が激しい母は大粒の涙を流して泣き続けた。親の反対を押し切って、半場逃げるように家を飛び出してきた自分。決して後悔はしていない。儒教で言うところの孝の道に反することは確かだった。嘘までついて、罪を犯そうとしているのだから。

だがそれでも・・・・！星蓮のためなら、愛する彼女のためなら、きっと両親もわかってくれるだろう。

「気にするな。愛する人を取り戻すためだ！それより・・・お前に注意して欲しいことがある。」

「注意しておくこと？」

辺りを気にしながら、林山は星影の耳元で呟いた。

「星蓮が連れて行かれた日、劉家に来た郭勇武（かくゆうぶ）と言う使者の男のことだが・・・。」

「お前と父上に暴行した男だな！？」

無言で林山は頷く。

「調べたのだが、奴は・・・郭勇武は、陛下のお気に入りとして召（め）されるようになった将軍らしいのだ。」

「将軍ですって！？なんで将軍がわざわざあんなところまで来るわけ？しかも使者で？・・・変な話ね・・・。」

林山の話に、星影は訝しそうに片目を吊り上げる。

「ああ、詳しいことまではわからないが、その武力を買われて今では陛下のお気に入りだそうだ。最も宦官が推挙した男だからな。あ

まりいい奴じゃないだろうが。」

ふてくされた様子の林山に、星影は思わず首を傾げる。

（なんだか、いつもより機嫌が悪い。）

「だいたい宦官なんて、いつの時代においても国を惑わす元凶なんだ。」

「・・・林山、貴方なんかあまり宦官のことは良く思っていないみたいだけど・・・どうして？」

「決まっているだろう！やつらはいわゆる欲の塊なんだ！連中は遥か昔から、ろくでもないやつらさ！金に、権力に、あいつらのおかげで何度世の中が乱れた事か！！」

捲くし立てるように言う林山に星影は驚いた。

「お、おい！落ち着け！少し声を抑えろ！」

「俺は冷静だ！」

「自分で冷静というときこそ、冷静じゃないんだよ！」

周りに聞こえるだろう、と周囲を見渡しながら言う星影。しかし、そんな星影にかまうことなく、林山は強い口調で話し続けた。

「悪国と言われる秦だって、宦官が滅亡する手伝いをしたようなものさ！あいつらが宦官になる目的はただ一つ、富と名声がほしいからだ！！どいつもこいつもみんなそうだ！！歴史でそう学んだだろう！？」

（・・・そう言われてもあまり歴史は学んでいないからな。さすがに厳師匠もそこまで教えてはくださらなかったし。）

女性に学問は不必要と言われていた時代、一般の女性の多くは字が読めず、字が読める女性は身分の高い女性や家が裕福な家柄の女性に限られていた。星影も家が大商家で裕福だったので、読み書きはできたものの彼女自身があまり学問に興味を示さなかった。星影は、あまり歴史を学ばなかった。あくまで歴史に（・）ついて（・・・）の話だが。

「兵法・・・孫子だったら完璧なのだが。」。

苦笑いをする星影に、いつになくまじめな顔になる林山。

「それならなおさら言っておく。いいか、宦官には気をつけろ！簡単に信用しないほうがいい。奴らの頭のなかは欲の塊だ！金もうけのためならどんなことでも平気でする腹黒だ！」

凄みを利かせて言う林山に内心呆れる星影。

冷静な彼をここまで怒らせるとは・・・宦官って、そんなに忌み嫌われる存在なのだろうか？

（でも林山、あなたは星蓮のために、一瞬でも大嫌いな宦官になろうとしなかったけ？）

「まともな奴がすることじゃない・・・なるとしたら、物欲か、変人か、罪人だけだ！」

「ふ～ん・・・。」

安林山という男は間違っても人の悪口いう男ではない。まじめすぎる一途な性格だ。だから、星蓮を奪った郭勇武を、その男を推挙し

た宦官に対して、郭勇武同様の怒りが表れて怒っているだけなのだろう。

（・・・ここは下手なことを言わずに、黙って頷いておくに限るな。）

星影が納得したかのように頷くと、案の定、林山は彼女が自分の意見に納得したのだと思い話を進める。

「わかってくれたのならそうで良い。くれぐれも、お前が俺と入れ替わっていることは悟られるなよ。」

この話にはさすがの星影も、真剣な面持ちになる。

「ええ。こういう話だけは広まるのが速いし、バレたらただじゃすまないものね。そろそろ行くわ。遅れるといけないから。」

その言葉に合わせるように、星影の首根っこを掴んでいた林山の手も離れる。

「いいか、絶対に油断するなよ！言葉遣いと礼儀に気をつけろ！間違っても将軍に喧嘩を売るなよ！」

「わかってる！あなたの方こそ気をつけてね、星影！」

「ああ、健闘を祈っているよ、林山！」

互いに目配せをし、駆け出して行く星影。

「大人しくするんだぞ！」

そう言って声をかける林山に、星影は何度も手を振りながら、人ご

みにまぎれていった。
そんな義理の姉の姿を見送りながら、林山はあることに気付く。
「しまった！星影にあのことを聞くのを忘れてた・・・。」
彼は少し顔をゆがめると呟く。
「この作戦のこと・・・もう父上達に連絡してくれたかな・・・？」
林山がそう言ってぼやくのには理由があった。
・
・　・
・　・　・
藍田を出発する前のこと。星影と林山はある話をしていた。
「星蓮を取り戻すためとは言え、父上達に嘘を言って家を出てきたことが、やはり気になるな・・・。」
そう言って、日に何度も同じことを言う林山。そんな林山を、見かねた星影がある提案をした。
「なぁ林山。そんなに心配なら、長安に着いてから、家族宛に書簡（しょかん）を出さないか？」
「書簡？」
不思議そうに尋ねる林山に、星影は言った。
「そう・・・これから私達が行う、『入れ替わり奪回作戦』につい

て記した書簡をね。」
「なんだと!?」

途端に声を荒げる林山。

（秘密だと言っておきながら、なにを今さら・・・!?）

「そんなことしたら、連れ戻されるだろう!?」
「大丈夫だよ。宮中に入る前ならまだしも、宦官として私が宮中に入った後じゃ、連れ戻しも何も出来ないさ。」
「確かに・・・。」

一度宮中に入ると、どんな事情があっても身内が立ち入る事はできない。そこを逆手に取った良い考えだった。

「下手に騒げば、皆殺しにされるからな・・・。」
「その通り!むしろ、私達の帰りを黙って待っていた方が賢いからね?」

星影の言い分はわかりやすかった。連れ戻せないとわかれば、父上達も大人しくしているだろう。それにこちらの安否がわかるだけでも、これ以上の心配をかけることはないだろうし。

「もちろん読み終わったら、燃やしてもらうように書いておくけどね。」
「それはいい考えだ。」
「じゃあ長安に着いたら、さっそく書簡を書いて送ろう!」

そう言って肩を叩く星影に、林山は嬉しそうに頷いたのだった。

・

・・・・・

「ああ言ってくれたし、代わりに書いてくれたよな・・・？」

普段は人に頼らない林山だが、相手が親友・星影ということもあって任せきっていた。

「星影が言い出したことだし、出してくれてるだろう。」

そのまま踵を返し、門へと向かって歩き出す林山。

一方の星影も、人ごみをかき分けながらあることに気付いていた。

「しまった！林山に渡すの忘れてた・・・。」

彼女は頭をかきながら呟く。

「この作戦を書いた書簡・・・。」

そう言いながら、懐から一つの書簡を取り出す林山。長安に着いてから、身内へ宛てた自分達の作戦を記した書簡だった。内容は自分達の作戦と必ず変えるから心配しなくてもいいというものであったが・・・。

「渡しそびれちゃったな・・・。」

困ったように呟く星影。林山は知らなかった。星影がこの作戦のことを書いた肝心の書簡を、彼女の両親はもとより、林山の両親にもまだ送っていなかったことを。

「まあ、宮中に入ってから手紙を出せばいいか。」

星影は知らなかった。宮中に入った者は、外界宛に手紙などを出してはいけないという決まりがあるということを。

「「なにも心配ないよな。」」

お互いに勘違いしたまま、それぞれの目的地に向かう二人。しかしこの書簡を書いたことと、送るのを後回しにしたこと。これが後に、厄介な自体になることを、二人はまだ知るよしもなかった。こうして星蓮奪回作戦は、危(あや)うさを含めたまま開始されたのである。

第六話　入れ替わり大作戦（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
宦官について、この小説で書きましたが、最後の宦官は１９世紀までいたらしいですよ！！
本編には関係ありませんが、小話と言うことで（苦笑）
空飛や琥珀を通りして、当時、宦官になった人々の事情を伝えてもらいました。
宦官という役職は、実際は過酷だったようです。
以上、余談でした。

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第七話　宦官新入生

宦官（かんがん）――――古代中国の後宮に仕える者達の名称。「宦」男性器を去勢したとうい意味を持ち、「官」官職を表す意味を持っている。そして後宮は、時の皇帝の妻達が暮らす場所であり、皇帝以外の他の男子が立ち入ること禁止された女性の園でもある。また、世継ぎ誕生の神聖な場所であり、皇帝以外の他の男性の子種（こだね）が入り込まぬようにする必要もあった。それを完全なものにするためにも、女性奉仕人以外に男性に近い存在が必要であった。つまり宦官とは、後宮で働く去勢（きょせい）された『男女の中間』という性別をもつ役人なのだ。

「説明は以上です。さあ、皆に挨拶しなさい！」

（・・・なんて傲慢なのだろう。）

目の前できつい言い方をしている、上司となる宦官を見ながら星影は眉を潜めていた。ここは後宮にある部屋の一つ。そこに星影を含む、新人宦官達の姿があった。そしてこの部屋で、新人宦官達の挨拶が行われていた。新しく入った宦官は星影を含めて数十人。不安げにしているもの、落ち着いているもの、すまし顔のものと、まさに十人十色。それぞれの性格がよく表れていた。星影にとって、宦官になる事は難しいことではなかった。男性であるが男性ではない中間人。女性でありながら、普段から男装し、男性的な振る舞いをする星英。彼女にとっては、宦官と自分とは似ているよう思えたからだ。

（まあ・・・欲深いところまでは一緒にされたくないが。）

そんな事を考えていた時だった。耳元で甲高い声が響く。思わず顔をしかめて声のする方を見る。そこには、上司こと黄藩（こうはん）の顔があった。思わずのけぞり返る星影。

「なにを抜けた顔をしているのですか!?貴方の出番ですよ!!」
「え・・・なにがです？」
「あ・い・さ・つ・で・す!!」
「あ・・・すいません。」

睨みつける黄藩の横をすり抜けると、星影は愛想良（あいそよ）く笑みを浮かべながら挨拶をする。

「はじめまして。安林山（あんりんざん）と申します。未熟者ではありますが、よろしくお願いします。」

お辞儀（じぎ）をして頭をあげた時だった。なにやら皆の視線が自分に集まっていることに気づく。こちらを見ながら小声囁きあっている。先輩にあたる宦官たちがしきりに何か話していた。横を見ると、同じ新人の宦官たちまでこちらを見ている。

（なんなのだろう?嫌な感じ・・・。）

やっぱり林山の言っていた通り、宦官になる人間は変わり者が多いというのは本当みたいね。こんな中で星蓮を探すのは大変そうだ。

いそいそと、元の場所に戻りながら星影は思った。
一通りの紹介が終わると、先ほど以上にきつく、甲高い声で、黄藩がその場にいる全員に言った。

「いいですか、後宮での貴方達の仕事は、皇帝陛下のために働くことです。宦官として自分がどうするべきか先輩達から学ぶように。特に上下関係については絶対守らなければいけないことです。上の空ではいけません！特にそこのあなた！」

黄藩の指差した先には星影がいた。全員の視線が集まる。

「な、なんですか！？」

恐る恐る尋ねると相手は目を吊り上げて叫ぶ。

「なんだではありません。あなたのことを言っているのですよ。いつまでも抜けた顔をしないでちょうだい！」

「抜けた顔なんかしていませんよ。これが普通の顔です！おかしいとでも言うのですか！？」

星影が反論すると、黄藩はさらに彼女に近づき怒鳴りつける。

「本当に物分りが悪いのですね！？目上に対しては敬意をはらう、口答えしない、言ったばかりでしょう！？」

敬意もなにも、そっちが喧嘩を売ってきているんじゃないか。本来なら殴り飛ばしてやりたいけど、ここで喧嘩をするわけにはいかないな。

そう思い、この場は穏便に済ませることにした。

「申し訳ありません。緊張のあまりつい・・・今後は気をつけます、黄藩様。」

こういう人間に限って、下手に出れば機嫌を良くして黙るはずだ。

星影が大人しく言うと、さすがに相手の方もそれ以上は何も言わなかった。

「・・・いいでしょう。とにかく、今後あなた達には雑用をしてもらいます。主に書物関係、運搬・記入・整理等です。」

書物関係の仕事か。できれば宮女関係の仕事の方がよかったんだけどな。

「もちろん、その他の仕事もしてもらいます。」

なんだ、それなら星蓮に近づける可能性もあるな。心配して損した！

「まあ、掃除や動物の世話になりますがね。」

（・・・喜んで損した。このジジイ、紛らわしいことを言いやがって！）

「ではこれから、各仕事の担当別に名前を呼びます。まず、記入担当が馬子秀（ばしゅう）、優媛緋（ゆうえんひ）、華淳遼（かじゅんりょう）そして高敬静（こうけいせい）。わからない点については先輩である高敬静（こうけいせい）に聞くように。」

星影の怒りをよそに、黄藩は次々と新しい宦官達の名前を言っていく。その声を聞きながら星影は考えた。

ここはひとまず、雑用をしながら星影を探すとしよう。運搬の仕事になれば、道に迷ったとか言えば誤魔化せるだろう。問題は一緒に仕事をする連中だな。変に検索（けんさく）してこなければいいんだけど。

「そして、整理係り担当には、安林山、王琥珀、それと張空飛の以上三名とします。張空飛、先輩なんですから指導の方しっかりと頼

みますよ。」

（私は整理の係りか・・・。）

これじゃあ運搬とか、道に迷ったとか言っても誤魔化せないな。でも待てよ、書物をしまう書庫はかなり広いはず、一人ぐらいいなくなっても気づかれないんじゃないかしら。いざとなったら書物に埋もれていましたとか言えばいいか。

「最後に、先輩である私達の言うことを良く聞く様に！特に安林山！！わかりましたね？」

星影の考えを遮ったのは黄藩の声だった。いつの間にか話終わっていたらしい。名指しで星影こと、安林山の名を呼ぶと、きつい目でこちらを見ながらさっさと出て行ってしまった。残された星影とその他一同。黄藩が出て行くと、周りの張り詰めた空気が和らぐ。新人宦官の緊張もここでようやくとける。みんな少し安心したようだったが、そんな中で星影一人だけが納得のいかない顔をしていた。

（なんで私だけ・・・？）

私がなにをしたと言うの！？もしかして、返事するのが遅れたから？しかし上司の方はそれでいいとして、新人達がこちらを見るのは何故だろう。心なしか先輩の中には睨んでいる者もいるような・・・。

「あまり気にしなくていいよ。君が綺麗だから嫉妬しているだけさ。」

不意に小声で声をかけられる。それまで扉の方を見ていた星影だったが、声のする方を見た。そこには背の高い男が立っていた。その

容姿は、普通の女性ならば嬌声を上げて喜びそうなものだった。

「・・・あなたは？」

「私は王琥珀。よろしくね。」

にこやかに笑う相手に、思わず星影の表情もほぐれる。

「あ、確か私と同じ――――」

「そう、整理係り。お互い頑張ろう。」

（この人はそんなに悪そうに見えないな。）

そんなことを考えつつ、とりあえず気になったことを聞いてみる。

「あの、嫉妬というのは？」

小声で尋ねる星影に王琥珀も小声で答える。

「言葉通りさ。陛下は美しいものが好きだからね。上手くいけば目に留まり、気に入られれば、出世も思いのままになれるからな。」

片目を閉じて見せる王琥珀に星影は疑問に思う。

気に入られれば？実力とある程度の家柄があれば、誰でも出世できるんじゃないの？もちろん、誠実で潔白な人物ならばなおさら――――

「気に入られて出世できるなら、だれも苦労はしないよ。第一そんな馬鹿なことがあるわけないだろう。」

真剣に答える星影に、相手はまじまじと彼女を見る。そしてその表

情は、みるみるうちに笑みへと変わっていった。

「君・・・安林山と言ったかな?どうやらここの決まりについて、なにも知らないようだね。」

それはあきらかに笑いをかみ殺した声だった。あくまで星影は真剣に聞いたつもりだった。いくら口元を押さえているとは言っても、笑われたとなってはさすがの星英も黙っていない。

「・・・王琥珀、殿だったかな?こっちは真剣に言っているんだ。なにも笑うことはないだろう?失礼な奴だな・・・!」

「これは失礼、非礼をわびよう。君の気を悪くするつもりはなかったんだけどな。」

そういって軽く頭を下げる。謝られたとなってはこれ以上怒る理由はない。

「別に気にしてない。・・・あっちに行ってくれ!」

少し怒り気味に星影は言うと、琥珀を追い払うように勢いよく手を振ったその時だった。振ったと同時に顔の近くで小さな叫び声がした。何事かと思って声のする方を向くがそこには誰もいない。

「・・・なんだ、気のせいか。」

「違います・・・。」

その呟(つぶや)きに返事が返ってくる。もう一度周りを見渡してみるがやはり側には誰もいない。

「ここですよ・・・!」

声は下からする。星影が下を見れば、そこには一人の宦官が座っていた。しゃがみこんでいたと言ってもいい。

「そんなところでなにしているんですか?」

「あ・・・あなたの裏鉄拳(うらてっけん)が顔にあたったのです・・・・!」

「え!?」

どうやらさっき手を振った時に、その手が今うずくまっている彼の顔面にあたったらしい。小さな叫び声はその痛みによるものだった。その事実に気づいた星影は慌てて謝る。

「も、申し訳ない!気がつかなくて!!しかし・・・よく裏鉄拳なんて知っていましたね。もしかして経験者ですか?」

「いいえ、そういうわけでは・・・あ、私は張空飛(ちょうくうひ)。貴方達と共に書庫の整理を担当します。わからないことがあれば何でも聞いてください。貴方達よりはここの生活が長いですから。」

星影が裏鉄拳を当てた人物こそ自分達の教育係だった。さらに平謝りする。

「こ、これは知らぬこととはいえ、とんだご無礼を!申し訳ない。」

「いいですよ。わざとじゃないんですから。」

優しく言う張空飛の様子を見てますます恐縮(きょうしゅく)してしまう。こんな良い人に怪我をさせるなんて、本当に私という人間は。宦官も悪い人ばかりじゃないのね。とりあえず、最初が肝心だよね。張空飛が立ち上がるのを確認すると、彼に向かって頭を下げながら言った。

「あの、申し遅れましたが、私は、り・・・安林山と申します!張

様。」

危うく本名を言いそうになったが、なんとか自己紹介できた星影。するとその横に気配が、

「同じく、王琥珀と申します。張様、今後ともご指導のほどを。」

最初に星影に声をかけてきた王琥珀だった。頭を上げた彼と目が合う。

「・・・まだいたんですか？」

「そんな言い方はないでしょ？同じ職務の担当なんですから。」

「そうでしたね・・・。」

（なんか好きになれないな、こいつ。）

そんな二人のやり取りに苦笑しながらも張空飛は言った。

「まあ、まあ、二人供。これから長い付き合いになるんですから、仲良くしてください。」

「あ、すみません張様。わざとじゃないですから！」

「私もです。申し訳ありません、張様。今後は気をつけます。」

そう言って頭を下げる二人に空飛は落ち着いた口調で言った。

「そんな、張殿でいいですよ。それより、これから仕事についての説明をしますのでついてきてください。」

空飛の言葉に従ってついていこうとして時だった。

「・・・？」

琥珀が自分の前を横切った時だった。彼が通り過ぎた時のなんとも言えない違和感が星影を襲う。

（なんだろう・・この人なんか――）

「おい！お前。」

突然肩を掴まれたと同時に首だけ後ろを向かされる。否、髪を掴まれたといったほうがいい。

「痛っ！なにするんだ！？」

見るとそこには数人の宦官の姿があった。こちらを見ながら意地悪く笑っていた。そのうちの一人、星影の髪を掴んでいる宦官が言った。

「これは、これは、張様とそのおまけ方、随分偉そうだな。」

「よ、楊殿、呂殿。」

少し青ざめた顔をしながら言う空飛。その様子になにかを感じ取る星影。とりあえず自分の髪を掴んでいる、この邪魔な手をどけることにした。

「その手を離せ。」

掴まれている手を勢いよく払いのけると顔をしかめて言った。手加

減して払ったのにもかかわらず、払われた相手は大げさに反応した。

「痛っ！貴様、目上に対して随分生意気な口が聞けるのだな？なあ、安林山よ。私にこんな態度をとってもいいのか！？」

すかさず横にいた男が罵る。

「そうよ！律明（りつめい）大丈夫！？まあなんて乱暴な子なのかしら！あなたになにかあったら、文京（ぶんきょう）困っちゃうわ～」

どうやら星影の髪を掴んだ宦官は楊律明といい、今しゃべっている宦官が呂文京というらしい。

一体なんなんだ、この二人。待てよ・・・確か黄藩の側に控えていた男達じゃないか？先ほど黄藩の側で、自分達を値踏（ねぶ）みするように見ていた二人の姿を思い出す。上司の側にいたので、彼らが自分よりも身分が上ということは確認できた。

「これだから下っ端は！」

二人が、自分に喧嘩を売ってきている意味がわからない。

「あんた、こいつがなんで裏鉄拳なんか知っていると思う？」

ふいに自分に意見を求められる。

あまり関わりたくはなかったが、無視するわけにもいかないだろう。

しぶしぶさっきと同じことを言う。

「経験者・・・だからですか？」

彼女の答えに、例の二人はもちろんのこと、その取り巻き立ち連中

まで声を立てて笑い出す。

「聞いた!?張が武道の経験者だって!」
「こわーい!私お漏らししちゃいそうだわ。」
「張にできるなら、犬でもできるわよ。」
「いや、犬と同じさ。たいして変わらないよ。」

取り巻きの言い方に、星影の気分は悪くなった。

(どこに行っても嫌な連中はいるのね・・・。)

怪訝な顔をしていると、ようやく話をふってきた本人、楊律明が口を開いた。

「よくお聞き、林山。この張が裏鉄拳を知ってるには、いつも仕事でへまをして、お仕置きとしてそこら辺にいる兵士に殴らせているからよ。」

(兵士に殴らせている!?)

その一言で、周りはさらに笑いに包まれる。卑猥さのある嫌な響き。しかし、星影の関心は別にあった。
張空飛という男は、いじめられているのか。
高らかに笑う律明たちに、それまで黙っていた張が興奮気味に言った。

「そ、それは私のせいでなくお二人のせ・・・」

(――――二人のせい?)

目線を空飛に向ける。彼がその続きをいいかけたその時だった。高い音が周りに響く。その音と共に張が床に倒れこむ。突然のことに星影は呆気に取られたが、すぐさま彼の元に駆け寄ろうとした。

「張様！」
「来ないで！」

うずくまったまま空飛は叫んだ。

「来ないでください・・・私のことも張様なんて呼ばないで・・・。」

押し殺すような声だった。
横目で張空飛を見れば、彼は下唇を噛んでいた。

「その通りよ。よくわかっているじゃない。悪いのはこいつなんだから！誰のせいだって！？言って御覧なさい！？」

かが見込みながら、憎々しげに言う文京に星英は嫌悪感を覚える。

（なんだよこいつら！まるで桂蓮みたいだ・・・！）

自分の身近な、嫌いな人間を思い出し、星影の気分は最悪だった。

「自分の立場がわかっているの？私達に口答えするなんて良い度胸じゃない？下っ端のくせに！」

・・・この男、叩きのめしてやろうか！

正直彼らに掴みかかりたかったが、本物の林山との約束をここで破

るわけにはいかなかった。空飛が彼らの仕打ちに耐えるように、この彼女も自分の中にある怒りを必死に抑えた。

「まあ、あんたの場合は、一生下っ端でいるつもりだからかまわないけど。そうでしょう、張?」

そう言われ、視線を下げる空飛。そんな彼を楽しそうに見ながら、楊律明と呂文京は皮肉な言葉を続けた。

「張よ、お前はここに来て何年経つ?」
「・・・七年でございます。」
「七年も経つのに、何故お前がいつまでも下っ端のままかわかるかい?」
「・・・いいえ。」

下を向いたまま彼は答える。

「律明殿。どうやら下っ端の張にはわからないみたいですね。」
「当然だ。だから下っ端なのだよ、文京殿」

そう言って、大声を上げて笑いあう両名とその取り巻きたち。文京と呼ばれた男が合図すると、取り巻きの数人が空飛の元へと駆け寄る。

「張よ!わからないことがある時はどうするのだ?」

取り巻きの問いに空飛が黙っていると、今度は律明が首を振って合図する。途端にそのうちの二人が右と左に分かれるとそのまま彼を押さえつける。それまで黙って事の成り行きを見ていた星影だったが、さすがにこのままではまずいと感じた。

「なにをする気だ！やめ・・・」

星影が叫ぶと同時に、律明は身動きが取れなくなっている空飛の腹を蹴りつけた。鈍い音と彼のうめき声だけが響いた。

「あの野郎・・・なんてことを！」

とっさに止めに入ろうとする星影だったが、それはある人物によって制止される。

「落ち着け、林山殿。」

「な、王琥珀・・・殿！？何故止めるんだ！？離せよ！」

掴まれた腕を払おうとする。

「彼の言う通りよ、やめたほうがいいわ。」

その声に振り返ると、そこには先輩宦官たちの姿があった。驚く星影に彼らは小声で囁く。

「そうよ。ここでは、楊律明様と呂文京様は黄藩様の次に偉い方々なのよ。」

「逆らわないほうが身のため・・・ここで賢く生きる方法なの。」

人事のように言う彼らに星影は戸惑いを感じる。

それではまるで・・・。

「では、あなた達は彼がどうなっても言いというの！？」

自分がよければ他人は関係ない、と言っているようなものじゃない。
彼女の質問に彼らは苦笑いしながら答える。そしてさらに拍車をかける。

「仕方ないわ。張殿は要領が悪いもの。」
「仕方ないって、彼は貴方方の仲間でしょ？何故そんな薄情なことを・・・。」

途端に彼らの表情が変わった。星影の言葉を鼻で笑うと言った。

「冗談じゃないわ！あいつはこの中では一番の落ちこぼれなのよ。」
「お人よしも、ここまでくればただの馬鹿よね。」
「間違っても、仲間なんて思いたくないわ。」

互いに顔を見合わせながら、クスクスと笑う。

（なんてひどい人達なんだ！）

心の中で、激怒する反面、星影は林山の言葉を思い出した。
なるほど、林山の言う通りだ。宦官とは、心根がこれほどまでに卑しいのか。己のみの安泰しか考えない、自分さえたよければ良いという考えの持ち主か！

「それに、的がいてくれないと私たちが危ないわ。」

その一言で彼女は確信する。

（これはいじめだ・・・・！！）

心の中で呟くと、視線をいじめの傍観者から加害者へと向ける。
星影達のやり取りを気にすることなく、楊律明・呂文京とその取り巻き達の悪行は続いていた。

「張、質問に答えろ。さっき自分で言っていただろうが。」

さらに数回腹に拳を打ち込みながら律明は言った。

「せ、先輩に教えて・・・いただき、ます。」

苦しそうな空飛の姿が星影の目に入る。彼女の中でなにかがふつふつと煮えたぎっていた。

「下っ端のくせにいい気になって、新入り相手に威張り散らしてるんじゃないわよ。」
「そ、そんな！私はそんなつもりは・・・」
「うるさい！楊律明様、呂文京様、どうしますか？」

取り巻き立ちは、主犯者といえる二人に意見を求める。

「お願いです！気に障ったのなら謝りますから、どうか・・・！」

息も絶え絶えに空飛は言った。楊律明・呂文京は、見下すような目つきで彼を見る。彼ら二人は小声でなにか囁きながら空飛を見た後、星影たちを見回して言った。

「誠意が足りないわね。せっかくだから、張共々、こいつが面倒を見る新人も一緒に反省してもらおうかしら。」

彼らの標的は、新人である星影達にも及びつつあった。彼らの言葉に真っ先に空飛が反応する。

「待ってください！やるなら私一人で十分です！どうか二人には・・・！！」

空飛の懇願を無視すると、こちらに近づいてくる。二人は星影の前まで来ると口を開いた。

「気に入らないんだよ。こいつが。」

二人は星影を見ながら苦々しく言い放った。その目ははっきりと星影を捉えていた。

（私のことが気に入らない・・・か。）

星影は、自分の状況を直ぐに理解したが、抵抗はしなかった。

「ちょっと、なにをしているの？こいつを押さえつけて。」

その声にあわせて二人の取り巻きが星影に近づく。そして、彼女の両腕を掴んで動きを止める。

「なんのつもりですか？」

力いっぱい押さえつけているつもりらしいが、星影からすれば、近所の幼い子供たちが自分の腕にぶら下がっているのと同じぐらいの

圧力だった。

（まさかこれで動きを封じているつもり?）

内心で笑った彼女の予想は的中した。

「決まっているでしょ。せっかくだから、いろいろ教育してあげるわ。」

そう言いながら額を突っつく彼らに対して、星影のなかにはっきりと“怒り”の文字が浮かぶ。

「だいたいあんた!ちょっとばかり綺麗だからって、いい気になってんじゃないわよ。」

そういうことは、普通女に言うものでは?今の私、いちお男なのだけど。

「さっきから一体なんなんですか。・・・放してくれません?」

「ふてぶてしいところがますます気に入らないわ。」

「まあ、その分だけやりがいがあるんだけどね。」

そう言って、彼らは薄っすらと笑ったが、同じ様な笑みを浮かべたのは彼らだけではなかった。

「なにがおかしいのよ、安林山!?」

安林山こと劉星影も、意味ありげに微笑む。

「自分がどうなるかわかってるわけ?」

「叩きのめされるわけでしょ？」

悪びれることなく、星影は言った。

「道理で、張殿が裏鉄拳について知っているわけですね。」

どこの世界でも悪い習慣はあるようだ。

「あなた方の教育とやらにつき合わされれば、嫌でも覚えるってわけか。」

身分が絶対のこの世の中、その犠牲はいつも弱い立場のものにくる。

「なに言ってるの。私たちは善意でやってるのよ。己の容姿が良いことを鼻にかけ、陛下に近づいて、よかなることを考えるような輩を掃除するためにもね。」

もっともらしことを言っているが、それは自分の行為を正当化するための言い訳。こいつらは、自分達の憂さを晴らすために悪いことをやっているんだ。

「お前のような、卑しい心根を持つものは特にね！」

「そうよ、薄汚い魂胆が見え見えよ！」

勢いよく胴で出来たの杯が投げつけられる。それは星影の肩に当たると、音をたてて床に転がった。星影の体に軽い痛みが走る。

「やめてください！右も左もわからないようなものに乱暴するのは！！」

「口答えする気？だいたいお前は腹が立つのよ！その恩義がませし

いところ、善人ぶっていい気になってるんじゃないわよ。」
「違います！私はただ・・・！」
「そういうところが嫌いなんだよ！お前もこいつもね！」

そんな彼らの押し問答と、肩の痛みをよそに、彼女の心中には、林山との約束を守るという思いはなくなっていた。宦官の陰湿ないじめを見せ付けられ、星影の中にあるなにかの歯止めが利かなくなっていた。

張殿がおとなしいからと好き勝手なことをしやがって――！

そして星影は決断を下した。

「・・・・それは、それは、奇遇（きぐう）ですね。」

そう言って笑う星影に、全員の視線が集まる。

林山は、将軍には喧嘩を売るなとは言った。

「私も――」

でも、宦官に喧嘩を売るなとは言わなかった。

「テメーらみたいな腐った奴らは・・・・気にいらねーんだよ！！」

（一暴れさせてもらうぜっ！！）

言ったと同時に、拘束されたままの自分の腕を勢いよく振り回す。腕を押さえていた宦官達は、その勢いで前後に飛ばされ、壁に激突した。とたんに全員の表情が変わった。

「陛下のためにも、しっかりと働かせてもらうぜ。まず手始めに、汚物の排除と洒落こもうか・・・！？」

満足げに笑う彼女の表情は笑顔だったが、その目だけは笑っていなかった。周りの動揺はさらに大きくなる。

「ちょ、ちょっと！こんなことしていいと思っているの！？私達は・・・！」

文京が投げつけた銅の杯を手に取ると、こんしんの力を込める。それは鈍い音をたてて変形した。その場にいた全員の表情が変わった。青白くなり、ガタガタと震え、中には半泣きになっている。

「私を痛めつけるために投げたのなら・・・これはいらないですよね、文京様?」

ひっ、と悲鳴を上げると、彼はそのまま相棒である律明に抱きついた。

「や、やめなさい!なにする気なの!?この野蛮人・・・」

「はぁあ!?決まっているだろうがぁ!!?」

星影の手から元・杯が落ちる。彼女の怒りは頂点に達していた。卑怯者が・・・!

「再教育してやるんだよ!先輩面していい気になってんじゃねぇぞ!!!」

叫ぶと同時に部屋中に悲鳴が響く。続いて鈍い音が響く。

「あ、安殿・・・!?」

「これは・・・なんと強いのだ。」

あっけにとられる張琥珀とそれを助け起こし、感心したように見る王琥珀。そう思ったのもつかの間。

「きゃあ――――!!やめて!!ごめんなさーい!!」
「痛い!痛い!!わあ～ん!!」
「もうしないから許して――――!!」

「うるせえ!!がたがた言うな!!散々いじめつくしたんだろう!?」

「ひぃぃぃ!!血、血がぁ!血がでてるよぉ!!」
「ごめんなさーい!もうやめてぇ!!」
「た、助けて!誰か助けてぇ～!!」

泣き叫ぶ楊律明・呂文京ならびにその取り巻き達。慌ててすぐさま止めに入ろうとする王琥珀と張空飛だったが・・・。

「邪魔するなぁ!!!」

星影のあまりの迫力と破壊力に近づけずにいた。こうなってはもう誰も彼女を止められない。主犯とその取り巻き達の体には、無残な姿へと変わっていった。こうなっては、周りが考える事は一つ。自分達が巻き込まれないようにすること。皆、遠巻きになっていく。阿鼻叫喚(あびきょうかん)と化したこの状況は一刻ほど続いた後、騒ぎを聞きつけた上司である宦官・黄藩達と宮廷兵が駆けつける。

「なんですかこれは!?」

「教育ですよ、きょ・う・い・く！素行と態度の悪い、楊律明・呂文京とその取り巻き共に、指導してやったんです。」

倒れている取り巻きの一人を蹴り飛ばすと、星影はにこやかに言った。

「少しは人の痛みをわかれ！楊律明様、呂文京様方がいつも他の方にされていることを、わざわざして差し上げたんですが、なにかぁ～？」

上限関係が厳しい宦官社会。その新人の言葉とは言えない言葉に黄藩は絶叫する。

「安林山――――――――――――――！！！！！」

結局、初日早々先輩である宦官に打撲等の大怪我をさせ、宮廷の備品（！？）を壊したとして、食事抜きと朝までの罰掃除を命じられた星影。そして、この前代未聞の騒ぎはその日のうちに後宮にいるすべての宦官に伝わることとなり、星影はそんな彼らの“敵”として標的（ひょうてき）にされたのだった。

「あ！」

小さな音が響く。

「何もしていないのに割れた・・・？」

割れたのは茶碗だった。それも最近買ったばかりの新品。婚約の記念にと星影が贈ってくれたものの１つだった。林山の脳裏に不安がよぎる。

「星影の奴・・なにか問題起こしてないといいけどな。」

皇居がある方向を見ながら本物の林山は大きくため息をついた。

第七話　宦官新入生（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
次回も、よろしくお願いします（平伏）

※誤字・脱字・おかしい文のつなげ方を発見された方！！
こっそり教えてください・・・！！

第八話　宦官の心得

「まだ書物を運んでないの？さっさと書庫に運んでよ！本当に役に立たないわね！！」

「・・・・す・い・ま・せ・ん。」

甲高い怒鳴り声と共に１つの影が、扉の中から弾き出された。

「たく！なんて人使いが荒いんだよ！」

扉に向かって舌を出す人物。安林山（あんりんざん）こと劉星影（りゅうせいえい）だった。

宮中に入ってから数日が経過していた。宮中に入って早々暴行（！？）事件を起こした星英は当然のごとく先輩宦官たちのいじめを受けていた。おかげで休憩時間はないわ、食事は摂れないわ、睡眠不足になるわと、ろくな事はなかった。そのため自然と口調も荒くなる。

「まさか宦官（かんがん）が、あんなに陰湿（いんしつ）で、弱い者いじめが好きだとは思わなかったよ。」

一人でブツブツと、愚痴（ぐち）っていた時だった。

「しかたなさ。後宮は力がすべてだからね。」

声と同時に、持っていた荷物が軽くなる。びっくりして後ろを振り返った星影の目に飛び込んできたのは。

「琥珀！？」

それは久しぶりに見る王琥珀（おう こはく）の姿だった。あの騒動以来顔を会わせていなかった。それもそのはず。罰掃除の後から、馬小屋のようなところに放り込まれたのである。

「大丈夫？手伝うよ。」

そう言って星影の荷物を持つと、さっさと歩き始める。

「あ、待って！そんな、手伝ってもらうなんて悪いよ。貴方の仕事だってあるんだろう？」

「いや、平気だ。一人より二人の方が早く終わるしね。」

にこやかに答える琥珀に、星影は好感を覚える。最初の時は嫌な奴だと思ったが、こうして話してみるといい人かもしれない。

「それに比べて、楊律明（ようりつめい）も呂文京（りょぶんきょう）も性格がひん曲がってるわ！」

星影の愚痴を、琥珀は困ったように笑いながら答える。

「本当に、林山は宦官らしくないね？」

「え！？な、なんで！？」

思わず声が上ずる星影。

（もしかしてバレた！？）

「なんと言うか――」

そんな星影の問いに琥珀が答えようとした時だった。前方で物音がする。お互いに顔を見合わせた二人は、何事かと小走りで近づく。

見るとそこには一人の宦官がうずくまっていた。抱えていた荷物が回りに散らばっていた。それを慌てて拾っていた。星影は、その後姿に見覚えがあった。

「張空飛殿!?」

同じ雑用係りで、先輩の張空飛だった。

「え・・・?あ、林山殿!?」

星影に気づいた張空飛は、びっくりしたように彼女を見る。驚くのも無理はなかった。彼も、琥珀同様、謹慎という名の元で隔離されていた星影と会うのは久しぶりだったからだ。

「大丈夫ですか?手伝いますよ。」

星影は早足で張空飛の側まで行くと、落ちている荷物をいくつか拾いながら声をかけた。

「林山殿・・・。」

そんな星影に呆気に取られる張空飛だったが、その後ろからやってきた琥珀を見て、慌てたように立ち上がった。

「こ、琥珀殿まで。ご、ごめんね。ありがとう・・ございます。お二方。」

「いいですよ。貴方も書庫まで行くのでしょう?一緒に行きましょう。」

琥珀が微笑みかけると、彼の方もつられたように微笑み返す。しか

し、その笑みは直ぐに消えた。そして、荷物を両脇に抱えている星影へと体ごと視線を向けた。

「申し訳ありません、林山殿！」

言ったと同時に、頭を下げる張空飛。

「はい？」

突然謝罪の言葉を受けた星影は、間の抜けたような声を出す。

「私のせいで、あなたに迷惑をかけてしまって！！」

「え、張殿？」

「ごめんなさい、ごめんなさい！本当にごめんなさい！私のせいで――」

「ちょっと、待ってください。」

「私を助けたばっかりに、あなたは楊律明様や呂文京様達から、受けなくて良い嫌がらせを受けて――――」

その言葉で、相手がなにを誤っているか察する星影。

「私のせいでごめんなさい！申し訳ありま――」

「それは違うよ。」

張空飛の言葉を否定するように星影は言った。

「私が勝手に受けたものだ。楊律明・呂文京が売ってきた喧嘩を、私が買って叩きのめしただけだ。あなたのせいじゃない。」

「でも――」

「それに、私もあいつらが大嫌いだから、嫌ってもらって結構！勝

手にネチネチさせてればいいんだよ。」
「そんなことをしたら、一体なにを――！」
「すればいいさ。その時は、こちらもそれ以上にやり返してやる。とにかく・・・張殿は悪くないんだから、気にしなくていい。私に謝る必要もない。」
優しい口調で言う星影に、張空飛は目を見開いた。しばらく星影を見つめていた張空飛だったが、その目からは大粒の涙がこぼれ出した。
「泣かなくていいじゃないですか。あなたは悪くありませんから。」
そう言って、張空飛の背中をさすれば、相手は嗚咽し始める。
「それにしてもすごい量ですね。もしかして、楊律明殿が？」
琥珀の問いに、空飛はおずおずと頷く。その様子を見て、星影は思わずため息をつく。
「本当に、人使いの荒い男だな。琥珀殿！あなたも手伝ってくれ！私はこっちを持つから。」
星影の言葉に、それまで事の成り行きを見ていた琥珀は、小さく笑う。
そして、わかった、と言って本の山を持ち始める二人に空飛は目を丸くする。
「そんな！林山殿、琥珀殿、悪いですよ！もしこんなところを上の方に見つかったら・・・。」

慌てる空飛とは別に、たいして気にしていない様子の二人。特に星影に関しては、

「そんなもの、見つかったら、見つかったですよ。どうにでも誤魔化せばいいですから。」

「あなた達はなにも知らないからそんなことが言えるのです。・・・私なんかに構っていたらひどい目にあいますよ。」

最後のほうは消え入りそうな声で言った。

「関係ないね！私が誰と仲良くしようが私の勝手だ。それよりもむしろ、私といた方がまずいかもな・・・。」

その問いに彼は首を横に振る。

「そんなことないですよ！あの時・・・あなたが身代わりになってくれたから私は助かったんです。あれ以来・・・連中は私に嫌がらせはしてきません。でも、代わりにあなたが・・・・！」

空飛に対する嫌がらせが少なくなったのは事実だった。その一方で星影に対する風当たりが強いのも本当だった。あれだけ派手に暴れて奴らに怪我をさせたのだ。仕方ないといえば仕方ないことだが。

「私は大丈夫だよ。心配しないで！これを運び終わったらもう近づかないから。」

星影の言葉にびっくりしたように空飛は彼女を見る。

「なにを言っているのですか！？そんなこといわないでください！！私はあなたに感謝していると同時に友情を感じて・・・！！」

「え？」

空飛の言葉に星影は動きを止める。それは空飛も同じだった。

「張殿・・・。」

「・・・申し訳ありません。馴れ馴れしいことを言ってしまって・・・。でも。」

「でも？」

「そう思えたのは・・・あなたが初めてなんですよ。」

空飛の言葉は、星影を驚かせるのには十分だった。そんな彼女達の視線を気にしつつも彼は言った。

「あんな風に助けてくれたのは初めてだったし、今みたいに優しく言ってくれた方はあなたが初めてです。だから嬉しかった。周りはいつもずるいことしか考えない人たちばかりだったから・・・。」

「張殿。」

「あなたは・・林山殿は心が優しいのですね。あなたの優しさが嬉しかった。友情みたいなものを感じました。」

真顔で言われて恥ずかしくなる。

「い、いや、そんな優しいなんて！私はただ、ああいう奴らが許せなくて。」

「優しいだけでなく、勇気もあるのですね。」

「そんな！大げさですよ！でも、張殿にそういわれると悪い気はしません！あの、私なんかでよければ・・・友達になりませんか？」

「友達・・・？」

「ええ。ただしこの友達は厄介ですよ。周りから嫌われてるんですからね。でもその分、友情を大切にする奴です！」

そこまで言って星影は気づいた。

しまった、仮にも自分の先輩に軽々しく“友”なんて言葉を使ってしまった。上下関係の厳しい後宮で軽々しく言ってしまった。いくらおとなしい彼でもさすがに怒るだろう。

そう思ったのだが。

「本当に・・・？」

「え？」

当の本人は、たいして怒る様子もなく、びっくりしたように自分を見つめていた。

「本当に友達になってくれるのですか！？」

「い、嫌じゃないんですか？」

「とんでもない！あなたみたいな真っ直ぐな人と友達になれるなんて・・・私。」

そういって泣き出す空飛の背中に、優しく王琥珀が手を回す。

「泣かないでください、張殿。あなたも林山殿と同様優しい人だ。」

「こ、琥珀殿。」

「付け足して言うならば、その厄介な友達を持つと、お節介な友達もついてくるがよろしいですかな？」

「琥珀殿、あなた。」

「私もなりたいと思ってたんですよ。お二人の友に。」

口だけで笑ってみせる王琥珀。

「じゃあ、決まりだな。・・・俺達三人は今日から友だ！」

照れ隠しに言う星影に、琥珀が付け足して言う。

「ええ。私達は同じ仲間です。」

「はい、これからよろしくお願いします・・・！」

「ああ、よろしく！」

「私も。」

にこやかに言う星影と、笑顔で頷く王琥珀。それを見ながら少し照れくさそうに微笑む張空飛。

「そうと決まれば、堅苦しいのはなしだ！二人供、私の事は林山と呼んでくれ。その方が友らしい。」

「わかった。私も琥珀でいい。張殿は・・・」

王琥珀の言おうとしている先を理解し、代わりに張空飛が答える。

「私が先輩であることを気にしているのですか？友なのですから上下は関係ないですよ！それでは仲間になりませんからね。私のことも空飛でいいです、林山、琥珀。ここからは他人行儀（たにんぎょうぎ）はなしにしましょう。」

そう言った空飛はどこか嬉しそうだった。

彼の方が自分達より先輩になるわけだが、気が弱く、どこか謙虚なところがあり、未だに下級宦官のままの男性だというが・・・。

（楊律明（ようりつめい）と呂文京（りょぶんきょう）の言ったことは、いい加減な話だったみたいだな。）

そんな空飛の笑顔に、星影も気を良くする。

「じゃあさっさと終わらせよ。皆で協力すれば早く終わるしね。」

星影の一言で歩き出す三人。ここに来て友ができたことが嬉しかった。同じ年頃の友といえば、変な話だが林山しかいない。あとは、同じ門下生と言ったところだった。同じ年頃の娘達は劉星影を怖がっているか、親が近づけないようにしていたこともあっていないに等しかった。ただ、近所の子供達だけは、怖がることもなく、親の目を盗んでは彼女に群(むら)がってきた。子供からすれば星影はちょっとした英雄だったから・・・。でも、今日できた友達は違う。気の合いそうな友達。星影の心が軽くなるのと比例して彼女の足取りも軽やかになった。

第九話　宦官生活と妹探しは、前途多難

張空飛の案内の元、ほどなくして目的の書庫までたどり着いた。

「じゃあ、はじめましょうか。」

そう言って、空飛を先頭に書庫の中へ入る。

「琥珀、あなたはこの竹簡をあそこの棚に右から順に閉まってください。林山、あなたはこの書を上から順にここの棚に閉まってください。」

「わかった。」

「まかせて。」

空飛に言われるがまま、作業を始める星影達。その後、空飛手際よく二人に指示をした。

（空飛を下級宦官のままにしておくなんて・・・上の連中はなんて馬鹿なんだろう。）

そんな空飛の手際の良さを見ながら星影は思った。見る限り、仕事熱心だし、真面目であり、人間的にも優れている。それなのに何故、いつまでも下っ端の仕事をさせられているのか。

（きっと妨害者がいるんだろうが・・・。）

星影の脳裏に、例の二人組の姿が浮ぶ。

空飛にしても、琥珀にしても、なんで宦官なんかになったんだか・・・。

黙々と仕事をこなす二人の姿に、星影の中で疑問がよぎる。
確かに宦官は嫌な奴が多いけど、この二人は別だ。そこ辺の男より、よっぽどしっかりしている。見た目だっていいし。それが何故宦官に？
そんなことを考えながら、作業をしている時だった。

「それにしても・・・あなたには正直びっくりしましたよ、林山。」
「え？何が？」

空飛が遠慮がちに声をかけてきたのだ。驚く星影に、空飛は笑いながら言う。

「だって・・・私は後宮に来てもう七年ぐらいになりますが、あそこまで暴れまわった宦官の方は始めてみました。以前は、なにか武芸をなさっていたのですか？」
「ああ・・・えーと、三年ほど師に仕えたからね。」
「三年であんなに強くなれるのですか？すごいですね！」

目を輝かせながら興奮気味に話す空飛に対して、一方の琥珀は冷静な意見を述べた。

「なるほど、道理で強いわけだ。しかし何故、宦官になられたのだ？そのまま続けていればもっと強くなれたはずだったのではないか？宦官でなくても、武官としての道もあったのでは？」

不思議そうに尋ねる琥珀。それを聞いて、そうですよね、何故ですか？と、疑問符をちらつかせる空飛。そんな二人に向けて、星影はあいまいに笑みを向ける。彼らの問いに内心彼女は困ってしまう。

（まさか“妹を奪回するために来ました！しかも女性で～すぅ！”

などとも、言えないし・・・。）

「ハハハ、人生いろいろあるのだよ・・・。」

できるだけ平静を装いながら、とりあえず誤魔化してみる。
空飛が星影に話しかけてきた。不思議そうに首をかしげる星影に

「いや、気を悪くしないでほしい。立ち入ったことを聞いてしまって。」

「そうですよ。あなたもご苦労なさっているのですね。」

すまなそうに言う琥珀と、しみじみと言う空飛。これ以上質問されたらボロが出るかも知れない。なんとか話題をそらさない。

「そういう琥珀と空飛は、どうして宦官になったの？」

先ほど自分が疑問に思ったことを、二人にぶつけてみる。突然の質問に二人は、手を止めると星影の方へと視線を移す。

「どうって・・・決まっているじゃないか？」

苦笑いする琥珀と空飛。
やっぱり林山が言うように、富と名声がほしいからかな。意外だなぁ・・・。
たが、彼らからの返事はまったくと言っていいほど星英の予想と違っていた。

「家が貧しくてね。早い話が口減らし（くちべ）さ。」
「ええ・・それで家族が食べていけるなら。」

「家族！？」

予想と反する答えに、星影は思わず体ごと二人の方に向き直る。

「はい。私の家はとても貧しくて・・・。そんな時に役人に言われたのです。『子供を宦官にすれば生活が楽になる』とね。それで手術をしてもらったのですよ。八歳になる前の時にしました。丁度・・・父さんが死んだ時でした。」

（八歳で宦官に・・・！？待てよ、と言う事は――――――！！）

「ちょっと待った！もしかして空飛の歳って・・・・。」

「年ですか？十五になりますが、なにか。」

（私より年下！？こんなに大人びているのに。）

改めて星影は彼の方を見る。確かに背は私よりも低い。それに、顔にもまだ幼さが残っている。

（何故今まで気がつかなかったんだろう・・・。）

星影の視線に気づき空飛は笑って答える。

「驚きましたか？私が貴方より年下なのが。十七歳の安林山殿。」

「私の年を知っているのか？」

「ええ、事前に聞いてましたから。ちなみに琥珀殿は十九歳でしたよね。」

「ご名答。よくご存知で。」

（十九・・・・やっぱり琥珀は年上だったか。）

背の高い彼を見ながら驚きを隠せない。

（しかし、待てよ・・・！ここまでの情報を知ってるとなると、宦官証書が見られたということ!?では他の宦官達にも!?）

そう思った星影だったが、

「あ！別に盗み見をしたわけじゃないですよ！上の方々がそう話しているのを聞いただけで・・・誤解しないでください！！」

首と手を振りながら必死に弁解する空飛。そんな彼の様子に内心ホッとする。

（なんだ、見られていたわけじゃなかったのか。）

「わかってますよ。そんなに慌てると言う事は・・・もしかして常習犯かな？」

「違いますよ！！」

からかう琥珀に、空飛は顔を真っ赤にして怒る。

「気にするな、空飛。琥珀も冗談はほどほどにしなよ。空飛は真面目だから本気にしやすいんだから。」

「林山！」

「ああ、悪かった。先輩相手に申し訳ないことを言ってしまったな。」

「でも、年下なのに先輩なんて変な話ですよね。」

一見何事もないように言った空飛の一言。それに星影は疑問を感じる。

「空飛は、宦官がどういうものか知らなかったの？」

「知っていましたよ。後宮で働くための特別な人間という事は。」

（・・・信じられない。）

表情を崩さずに言う空飛に、ますます不振感を積もらせる星影。

「そんな・・・知っていて宦官になったの？それも貴方の意思じゃないでしょう？そんなことしたら、家族にも会えないじゃないか。」

彼の両親は、自分がお腹を痛めて産んだ子を、どうして宦官などにさせたのだろう。こんな良い子を宦官にするなんてひどい親だ。子供が可愛くなかったの？

「そんな贅沢言っていられませんよ。食い扶ちが減ったうえに、お金まで入るのですからね。両親もその事は理解していますし・・・仕方ありません。」

どこか諦めたように言う空飛に星影は戸惑う。何故そんなに諦められるのか。

「・・・後悔してないの？」

星影の問いにそれまでにこやかにしていた空飛の顔が強張った。

「・・なんでそんなことを聞くのですか？」

「だってそうじゃないか！？理由は分かるけど、子供にだって選べ

る権利ぐらい・・・」

そう言いかけた星影だったが、なにげなく空飛の顔を見た瞬間、言葉が詰まる。

「そんな・・・選べるわけ・・・ないじゃ・・ない・・ですか。」

そこには目に涙を溜めた空飛の姿があった。今にも泣きそうな表情だった。いや、無言で泣いていたと言ったほうが良い。

「空飛、あの・・・!?」

嗚咽する空飛に戸惑う星影。彼をなだめようと慌てて側に行く。そんな彼の肩を抱き寄せ、なだめたのは星影ではなく琥珀だった。背中をさすりながら、ただひたすらに彼を落ち着かせると、星影に向かって静かに言った。

「・・・・空飛と同じとまではいかないが、私も似たような理由だよ。ただ違っているのは、私の体には半分異系血が流れていることだ。」

「異系・・・もしかして混血か?」

黙ったまま頷く琥珀。母が匈奴のなんだ、と付加えていった。

「異系であるゆえに、まともな職につけなかったんだよ。私が働かないと、小さい弟や妹、年老いた両親が食べていけなくてね。」

「だからって、男を捨てることはないじゃないのか!?」

納得がいかない様子の星影を、冷ややかな眼で琥珀は見つめる。

「・・・『漢民族』の君にはわからないだろうね。異系だという理由だけで差別されるつらさを。」

今までとは違う、琥珀の突き刺さるような視線に思わず悪寒を覚える。そんな星影を見ながら、琥珀は少し冷めたような口調で言った。

「宦官は、皇帝の妻達の世話をするためだけに作られた人間ではない。戦利品を、有効活用するために出来たものだといっていい。」

「戦利品・・・？」

「宦官が生まれたのは、異民族の捕虜が始まりなんだよ。捕らえた異民族を宮刑という刑罰に処し、後宮の奴隷として働かせ始めたのが始まりだ。」

「その名残が・・・宦官なんだよね？」

「なんだ、林山。そういう学について、学んでいるんじゃないのかい？」

「いや、習うには習ったが――」

琥珀の言葉に、星影は視線をそらす。歴史について学ぶ機会はなかったが、父親が大商人であったので多少の事は聞いていた。漢帝国が、匈奴や山越族といった異民族達とは、長い歴史の中で何度も争ってきたのは知っていた。高祖（漢王朝初代皇帝・劉邦）の時代から彼らとの戦は耐えなかったが、今の皇帝は、ことのほか異民族に対して厳しいらしい。現皇帝の祖父・曽祖父のころは、匈奴との間で条約を結び、定期的な交易場があったので民間交易も盛んだった。しかし、こうした匈奴との関係を断ち切ったのが現皇帝・劉徹である。皇帝がこのような行動に出たのには、『匈奴に対する屈辱的な外交政策を終わらせる』という意味があったらしい。詳しいことは

わからないが、漢が匈奴を優遇し続けたのにもかかわらず、匈奴が漢の領地を侵略し続けたことが原因だと、以前父親が言っていた。以来、漢と匈奴は不穏な仲となってしまった。

「まぁ・・・宦官のことまで、詳しく教える師もいないだろう。」

ため息交じりに琥珀は言った。

「他の異系ほどひどくはないが、どこに行っても冷遇されるね。私達の働ける場所はどこかわかるかい？重労働や死体処理、挙句は花街さ。そこでしか生活していけない。」

琥珀の言葉に、国内に無数の異民族が存在することを星影は思い出した。皇帝が漢民族以外を冷遇する政策を取ったことで、その影響は自然と異民族に現れていた。

「もちろん宦官もそうだけどね。この職業が、一番多いだろう。私達が出来る仕事は、漢人が嫌がる仕事しかないからね。」

（知らなかった・・・。）

琥珀の言葉に星影は黙り込む。確かに、宦官、奴隷、異民族が結びついているなど、星影には想像がつかなかった。皇帝の異民族に対する徹底した政策は、結果的に琥珀のような職の得られないものを生む結果となっていたのだ。

（私は、宦官に対して、偏見的にしか見ていなかった。）

自分の心の狭さを知り、星影は急に恥ずかしくなった。しかし琥珀は、そんな星影を気にもとめず、話を続けた。

「今の漢帝国の皇帝には、我々と一方的に和平を断ち、攻め滅ぼせるだけの力があったからね。皇帝陛下様にとって、異民族を皆殺しにすることは簡単だったんだよ。」

「琥珀！なんてことを・・・！それは明らかに今上（皇帝）に対する侮辱です！そんなことを言わないでください。このことが誰かの耳に入って今上のお耳に入ることでもあれば・・・殺されてしましますよ！？」

小声で注意する空飛の意見をものともせずに彼は言った。

「空飛、これはあくまで、仮定の匈奴の話であって、陛下には直接関係はないことだ。」

それでもなお、なにか言おうとする彼を制す琥珀。彼の言う通り現皇帝から、匈奴との関係を断ち切ったのは事実だ。でも、だからと言って琥珀の言っていることがすべて正しいとは星影には思えなかった。そう思ったからこそ、今度は星影から口を開いた。

「琥珀、あなたの言っていることは正しいと思う。」

「林山！？貴方までなんてことを！！」

「空飛、最後まで聞いて。漢がそうするのにはそれなりの『わけ』があったんじゃないの？」

「『わけ』・・・？一体どういう『わけ』かな？」

わずかに眉間を寄せる琥珀。その様子を気に止めるでもなく星影は言った。

「漢が一方的に関係を断ったのは事実だし、多くの匈奴の民を殺め

たのも事実。でもそれは、貴方たち異民族が漢の国の領土を脅かすから仕方なく・・・・。」

言った瞬間、琥珀の目がかっと見開く。

「なにが脅かすんだ!?君は知らないだろう?漢民族が無抵抗の女子供になにをしているか。自分達が一番だと自負し、威張りくさっている連中のことを!」

いきなり怒鳴りつけられ驚く星影。普通ならここで黙り込むところだが彼女は違った。ひるむことなく言い返した。

「それは一部の馬鹿がしていることだ。そんな連中と一緒にするな!漢民族すべてがそうじゃない!種族で考えるな、問題は個人だろう!?」

「ならば、我々もそうだ!勝手に危険だと決め付けたのは誰だ!?」

琥珀の言葉に星影は言葉を失う。答えはわかっていた、だからこそ返事に困った。

「ことあるごとに『異民族』は、『野蛮人』は、と、蔑み、我らのすべてが悪であるかのように言ってきたのは誰だ?」

そう・・・彼らを危険だと、野蛮だと決め付けたのは漢民族だったから。

「人を国や人種単位で考えるな?いい迷惑だ?よくそんなことがいえたものだな?悪だと言って生きる場所を奪ってきたではないか。」

琥珀の言っている事は、道理が通っていた。

「・・・確かに、琥珀の言っている事は正しい。しかし、あなたが今言っている事は陛下に対する非難だ。」

「私は陛下を非難しているわけではない。」

「だが、知らない奴らが聞けば陛下への非難と勘違いされる。」

「それは君のように無神経な者が、勘違いするだけじゃないのか。」

「どういう意味だ!?」

はき捨てるように言い放った言葉は、明らかに星影個人に対するものだった。

「君は何故宦官になった?金や名声を得るためか。」

「なに馬鹿なことを言っている!?私はそんなつもりはない。」

「では、どんな理由で?」

これには彼女は黙り込むしかなかった。なんと答えていいのかわからなかった。陛下の側で働きたいとでも言って誤魔化せばよかったかもしれない。ところが、彼の気迫に押され嘘をつくことはできなかった。

「空飛は、家族のことを思い宦官になったのだ。純粋に家族の生活を思ってこそ、己を犠牲にしたのだ。」

「それは・・・私が悪かった。だが・・・。」

「そんなことも、彼の気持ちもわからないような君に非難される覚えはない。」

その言葉に星影は、傷ついたと言うよりも頭にきたと言っていい。いくら自分が悪かったと言っても、今の琥珀の言い方は、彼女の許

容範囲を超えるものだったからだ。少し大きめの声で言った。

「そんなつもりで言ったんじゃない！喧嘩を売っているのか！？」

「君はやはり漢民族だ。なんでも力で解決しょうとするところが特にね。」

「貴様！」

琥珀の言葉に、持っていた書物をおくとすかさず彼の胸倉を掴む。それに合わせて琥珀も自分を掴んできた星影の腕を掴む。一触即発かのように思えたが。

「やめてください、二人共！！どうして喧嘩をするのですか！？私は気にしていませんからやめてください。」

それを止めたのは空飛だった。二人の間に割って入りながら言った。

「私達はさっき友の誓いをしたばかりではないですか！？」

「く、空飛。」

「漢民族も、他の民族も、仲良くしていけば良いじゃないですか。今上にはそれをなしえるだけの度量（どりょう）をお持ちです！時間はいくらでもあります。」

落ち着きを取り戻した空飛は控えめに言った。そして、二人の服の袖を持つと言った。

「争いはもうたくさんです。」

その言葉に二人は離れる。

「・・・すまない。なにも君を責めるつもりはなかったんだ。私はただ・・・。」

「いいや。謝るのは私の方だ。本当に・・・・二人に申し訳ないことをした。」

（・・・・悪いことをした。）

空飛のおかげで冷静さを取り戻したものの星影の心は晴れなかった。いくら知らなかったとは言え、彼らを傷つけた事は間違いなかった。しかも短気を起こして殴りかかろうとまでした。空飛に止められなかったら、あるいは彼がその場にいなかったら間違いなく、前回と同じ失敗をしていただろう。あの時は先輩である宦官が絡んできたことが原因だったが今回はわけが違う。民族間の根強い問題だ。なによりも、二人に話を聞くまでは一般の貧しい人々のことや異民族達のことについてなにも知らなかった。もし、星蓮がさらわれず、宦官に成りすまして後宮に入っていなかったら、大商家という裕福な家で育った星影は、彼らの話を聞くことも知ることもなかっただろう。

「私は知らないことが多すぎた・・・・。」

足元に置いた書簡を拾いながら呟く。沈み込む星影を見て、逆に琥珀と空飛は困ってしまった。

「・・・あまり気にしないでほしい、林山。ちょっと言い過ぎた

よ。」

「そうですよ。あなたは宦官になったばかりなのですから。これからは後宮の暮らしについてしっかり学ばないといけませんからね。わからないことや、聞きたい事があったらなんでも聞いてください。」

そんな二人の気遣いに、星影はますます落ち込んでしまった。

こんなに親切な人間が貧しさや、差別のために宦官になるしかなかったなんて・・・・。わからないことがあったらか・・・どうせ星連を見つければ、こんなところはおさらばなんだからな。

（待てよ。わからないこと・・・！？）

空飛が言った一言は星影の思考を活性化させるのに十分だった。

空飛は後宮に来て七年になると言っていたよな。もしかしたら星連についての情報を何か知っているかもしれない。今の状況なら、聞いたところでそんなに二人も不信がらないだろう。

（――――聞き出すとしたら今だ！）

決心した星影は思い切って話を切り出した。

「実は、二人に聴きたいことがあるのだけど・・・。」

「聞きたいこと？」

「なんですか？私にわかる範囲（はんい）でしたらお答えしますが？」

にこやかに言う二人に、多少の罪の意識を感じつつも尋ねた。

「最近ここに、藍田から陛下の妻として後宮に入った女性がいるだろう?彼女がどこにいるか知らないか?」
「・・・藍田から?」
「後宮に入った女性?」
そう言うと、不思議そうに星影を見る二人は。
「たのむ!今どこにいるか教えてくれないか!?」
真顔で必死に尋ねる星影に、二人はお互いに顔を見合わせながら話はじめる。
「・・多分いると思うが・・ちなみにその女性の家柄は?名前と年はわかるのか?」
「藍田では名の知れた大商人の娘だ。名は劉星蓮、今年で十六になる。」
星影の言葉に、二人は再度顔を見合わせる。
「なるほど・・商家の出ですか。でしたら、美人ぐらいですかね。」
「ああ、そうなの!!ものすごい美人なのだが!」
「林山、容姿(ようし)のことではない。役職(やくしょく)のことだ。」
「役職?なにそれ?」
すっとぼけた声を出す星影に、二人は笑いながら答えた。
「つまり、皇帝の奥方の位ですよ。商家の出で、地元で有名な美人だったなら・・今の時期、おそらく『美人』の位でしょう。」

「商家の出ならって・・・もしかして身分によって位とかも決まるの!?だったら美人の位は高いの!?それとも低いの!?」
「落ち着け。わかりやすいように説明するから」
琥珀は笑いをこらえつつ言った。
「後宮には、陛下の制裁である皇后様を筆頭に妻妾(さいしょう)階級は十一段階に分かれているのだよ。超級が『皇后』様で等級は皇帝陛下に相当する。その次が第一級の『婕(しょう)好(よう)』様で等級は宰相の位に相当、第二級が『きょう蛾(が)』様で等級は上卿の位に相当、第三級が『容華』様で等級は中二千石の副丞相の位に相当、第四級が『充衣』様で等級は真二千石の部長の位に相当、第五級が『美人』様で等級は二千石の郡守の位に相当、第六級が『良子』様で等級は千石の郡級守の位に相当、第七級が『八子』様で等級は千石の郡級守の位に相当、第八級が『七子』様で等級は八百石の副郡級守の位に相当、第九級が『長使』様で等級は八百石の副郡級守の位に相当、第十級が『少使』様で等級は六百石の県長の位に相当する。」
「・・・そんなにいるの?」
「ああ、今は三千人しかいないけどな。」
「三ぜ・・・!?」
あまりの多さに眩暈(めまい)を覚える星影。後宮に美女が多いと言うのは聞いていたが、そこまでいるとは知らなかった。驚く星影に琥珀は話を続ける。
「昔は八段階しかなかったのだが、陛下が即位なされてから十一階級に増えたのだよ。いくつか呼び名の変わったものもあるからな。」

（そういえば・・・今の皇帝は無類の美女好きだって、前に厳師匠が言っていたよな。）

思わず眉間にしわがよる星影。

「それに、先の病（やまい）の流行で奥方様達の数がめっきりへってしまいましたからね。本来ならもう少し位が下のところですが、今はそんなことを言っている場合じゃないですし。それに今上は、教養・器量・家柄のどれかがよければ、多少の事は目を瞑（つむ）っていますから。」

しみじみと言う琥珀に空飛が付け足した。

（なるほど・・・それで星蓮は上から五番目か。）

「じゃあ、美人の位の人達がいるところに、星蓮がいるってことか！？」

細かいことをさらに尋ねてみる。しかし二人は、さっきとは打って変わって困った表情をする。

（質問の内容がまずかったかな？）

そんな二人に焦る星影だったが、二人の答えはまた違ったものだった。

「どうかな・・・。私達は宮女担当の宦官じゃないからね。」

「第一、今月だけでも二百人ほど集めたらしいですから。まあ、これでも少ない方なのでけど・・・。さすがにその中から探すとなると――――・・・・・」

「つまり・・・わからないと？」

同時に頷く琥珀と空飛。

嘘でしょう!?確かに二百人・・・五千人いる女性の中から星連を探すとなると・・・・。

星蓮を見つけるのは、かなりの苦労じゃないか!?とても脱出のまでに、いたるかどうか。それともいっそ、皇帝陛下に頼んでみようか。

「じゃあさ、陛下に会うにはどうすればいいかな?」

なんの気なしに言った言葉。星影として、軽い気持ちで聞いたことだったが、次の瞬間二人の顔が引きつる。そしてものすごい勢いでしゃべりだした。

「無理ですよ、そんなこと!今上にお会いできる宦官は、高級宦官に限られているのですよ!私たち下級宦官には夢のまた夢、お会いすることはできません。」

「空飛の言う通りだ!高級宦官の方でもお会いできるかどうかなのに・・・・。少し勉強不足だぞ!」

興奮気味に言う空飛と、説教気味に言う琥珀。二人がかりで説教されてはかなわない。まずいことを聞いてしまったと思いながら、なんとか話題を変え星影。

「わかった、わかったから!冗談だって!・・・しかし、奥方達が三千人となると彼女達の部屋はさぞかし狭いだろうな。」

なんせ三千人もいるのだから、そんなに広い部屋はもらえないだろう?と、笑いながら言ってみる。しかし、星影の茶化した笑いは、

琥珀の一言によってあっさりとやんだ。

「まさか。陛下は奥方様達のために毎年新しい宮殿を建てているのだよ。それも豪華で、彼女達の好みに合わせた建物を。」

「毎年!?」

そう叫んで星影は固まった。

毎年豪華な宮殿を建てるなんて・・・さすがというべきか、呆れるべきか、そんな事をしていてこの国の財政は大丈夫なのだろうか。

「で、でも、新しい宮殿ができたらそれまで住んでいたものはどうなるのだ?そこも使うのか?」

「いいえ、そのままにしておきます。新しく完成した宮殿しか使わないですよ。」

「そんなに毎年建てて、場所の方は空きがあるのか?」

「古くなった建物から壊していくので問題はない。」

真顔で言う琥珀に星影は目が点になった。

問題ないって・・・。一年しか使ってないのに?なんてもったいないんだ!なんだか金銭感覚が狂いそう・・・。

「そ、そう。それなら場所は問題ないね・・・。それで――奥方様達が今いらっしゃる宮殿はどこにあるのだ?」

「確か・・・『宝仙宮(ほうせんきゅう)』のはずです。はっきりした事はわかりませんよ。なんせ私達は、奥方様達担当の宦官じゃないですからね。」

「もっとも、下級宦官はそこの担当にはなれないよ。なれるのは同じ宦官でも身分の高い高級宦官のみだから。」

そんな二人を交互に見て星影は思う。

（後宮って、思っていたより身分に厳しいのね。）

「それで・・・？その『劉星蓮』殿という方と、君の関係は？」

そんな星影を見て、琥珀はやや低めの声で尋ねる。

「か、関係って・・・。」

その顔はいつもの優しいものではなく、正直言って怖い表情だった。

「宮中に入られた女性は、すべて皇帝の物・・・！不埒なマネを、考えてはいないだろうね・・・！？」

自分の心臓が丈夫でよかった。早くなる鼓動を静めるように胸に手を当てる。できるだけ平素を装いながら二人を見る。ここはなんとか乗り切らねば。

「いやだな。そんなたいした関係じゃないよ。その・・・俺の父上の、弟の妻の、その妹の旦那の、その旦那の兄の娘の、その娘の友達の、その友達の祖父の、その祖父のいとこの親戚の、その親戚の叔母の娘さん！！そう、つまり遠縁の、遠縁の、遠縁に当たる人なのだ！！！・・・・・ハハハ！！！」

口からでまかせを言う星影。やばいな・・・こんな話信じるわけがないだろうし・・・そう思っていたのだが。明らかに誰でも疑いそうな内容だったが。

「それは・・・珍しいな。」

「へー遠縁ですか？すごいですね。」

・・・納得したらしい。あくまでも、空飛の方だけ。琥珀の方はしばらく訝しそうに星影を見ていたが、なにも言わずに竹簡をしまう作業を開始した。おそらく、人の事情をとやかく言うつもりがないのだろう。琥珀に同調するように空飛も、私達も仕事を再開しましょうか?と、星影に声をかけると自分達の本来の仕事を始める。作業をしながら星影は思った。

星蓮についての手がかりはつかめた。『宝仙宮』というところに、妹がいるかもしれないという情報。確かめるなら今夜しかない。皆が寝静まった頃に宝仙宮へ行こう。

そう決心すると同時に、気がかりなことができた。王琥珀の存在。

(この男は・・・油断できない。)

横目だけで彼の方を見るが、そこには自分の仕事に専念する琥珀の姿があるだけだった。

第十話　黒い影

闇の中、辺りを気にしながら宮廷内を動き回る人影――

「もう！どうして後宮って所はこんなに広いわけ！？」

言わずと知れた劉星影（りゅうせいえい）だった。ただし今は男の安林山（あんりんざん）。汗をかきながら、ひたすらに後宮内を走り回る。彼女が動き回る理由はただ一つ、妹の劉星蓮（りゅうせいれん）を探しているに他ならない。昼間、同僚（！？）の王琥珀（おうこはく）と張空飛（ちょうくうひ）から聞き出した話を頼りに、皇帝の妻達がいる館、宝仙宮の前まで行ったのだが・・・案の定、強固な警備だったため正面から入ることはできなかった。なんとか他の場所から入れないものかと館の周りをうろついているのだったが・・・

「駄目だ・・・塀は高すぎるし、登るための足掛けになりそうなものもないし・・・！！」

星影は正直焦っていた。後宮に来ればすぐに妹が見つかると思っていた。しかし、実際は見つかるどころか、返ってわからなくなっただけだった。ただでさえ、林山に化け、性別を偽って後宮に入り込んでいるのだ。このまま後宮での滞在（たいざい）が長引けば、いつなんの拍子に正体がばれるかわからない。そうなれば、自分ばかりか、本物の林山の首も、さらには妹の星蓮の首まで飛びかねない。宦官の証明書を偽造してくれた厳師匠も言っていた。

“せいぜい、ばれずにもっても一月（ひとつき）ぐらいだ・・・。それまでになんとかするのだぞ。”

はっきり言って時間がない。

限られた時間の中で探さなければならないのだ。それもたった一人で。

「冗談じゃないわ・・・・！！」

自然と星影の眉間にしわがよる。

こんなことになるなら、後宮についてもっと勉強しておくべきだった。こうして苦労するのも、自分の知識のなさ、無知が原因なのだから。だからといって、後宮について教えてくれる先生もいなければ場所もない。あったとしても、それは妻女として入るための教育のみ。誰が後宮内のまで教えてくれようか。もっとも、そんな情報を外部に漏らすようなことはしないだろうが。だから知らなかったのだ。後宮について・・・本当になにも知らなかった自分。そしてそこにいる者達・・・後宮で働く宦官についても。自分はいずれいなくなるからいいにしても、本物の宦官達が気の毒だった。林山から聞いていた宦官の話と、現実での宦官とは、まったく違っていたから。なぜなら、自らが実際に体験してわかったことだから。

“家が貧しいから・・・。”

“異系ゆえに・・・”

琥珀と空飛の言葉が胸に刺さった。二人の境遇は違っていたにしても、結局は暮らしが成り立たないからと言って宦官の道を選んだ。

ふと星影に昼間の出来事が頭をよぎった。あの後、書物の整理を終えて、他の仕事に取り掛かったことだった。その仕事中に、いきなり空飛が小さく叫んだかと思うとそのまま失禁してしまったのだ。驚く星影に琥珀は教えてくれた。男性器を切ったせいで、うまく排泄の調整ができないのだ、と。渋い顔をしながら話してくれた。す

ぐさま着替えに行かせようとする星影に対して、それを見ていた上司が言った言葉。

「いつものことでしょ！仕事をさぼるな！！」

いやらしい笑みを浮かべる上司達。荷物を持たせるとそのまま外に放り出す。それを星影が助け起こすと、丁度そこを通りすぎる官僚達の姿。彼らはこちらに聞こえるようなわざとらしい声で言い放った。

「おやおや、こんなところに歩く汚物が。」
「なにをしているのかね、早く片付けてくれ。」

そういい残すと笑いながら去っていく。連中の言葉に星影の怒りが浸透する。

（この野郎・・・・・！！）

殴りかかろうとした寸前で琥珀に止められた。
彼が黙ったまま首を振る。琥珀が止める理由はわかっていた。だからこそ拳を握り締めるしかなかった。
宦官は欲の塊だと林山は言ったが、果たして本当にそうだろうか。確かに権力をほしいままにして国を混乱させた宦官がいるのは知っているが、そんなものはほんのごく一部ではないのか。多くの宦官が辛酸を舐めつらい生活を送っている。宦官の上下間におけるいじめは日常茶飯事。奴隷としてこき使われ、官僚達からは鞭打ちや罵声を受ける。宦官として富を得るのはほんの一握り。その少数の者達のせいで、宦官全般が悪者になっているのではないのか。そもそ

も、何故そのことを皇帝は、歴代の皇帝達は見逃していたのだろうか。いや、もしかしたら、この悲惨な現状を知らないのではないか。この時になって星影は思った。今まで信じて疑わなかったこと――

――

皇帝とはなんなのか。

ここに来て星影は皇帝というものに疑問を感じていた。本当に万人にとって神であり、どんな人々でも大切にしてくれるのだろうか。少なくとも、漢民族に対してはそうかもしれない。でも、本当に漢民族すべてを思ってくれているのか。宦官という特殊な人種の輪の中で、何日か過ごした星影にはそれを信じることができなかった。ここまでして、何故宦官になる必要が、陛下に尽くす必要があるのだろうか?やはり、家族のためにわずかな収入を得るためになのか。それがたとえ、人以下の存在として扱われることになろうとも。しかし、本当にそれでいいのだろうか?

考えてみれば、自分はなに不自由なく育ってきた。武芸にしても、自分達の身を守るためとはいえどこか贅沢だったようにも思える。いつも世の中に不満を感じていた。女だから女らしく、しとやかに、上品に・・・と。きまりに縛り付けられ、身動きが取れないように感じた日々。自分こそが一番不公平だと思っていた。女に生まれたことこそ最大の不幸だったと思っていたこと。でも・・・実は違っていた。ただ単に自分が世間知らずだっただけなのだ。自分の不満ばかりを並び立てるだけで、一度も他人の境遇について省みることがなかった。自分が彼らと違ったのは、自分の方が人生の選択肢が多かったということ。二人から見れば私は裕福で恵まれている。他の女性達と比べてもかなり自由だった。どうして自分のことしか考えなかったのだろう。いつからそうなってしまったのだろう。一つのことが星影の頭をよぎる。

三年前の出来事。

あの時から、自分の価値観が変わってしまったのかもしれない。男のような格好をし、男のような立ち振る舞いをし、男のような言葉遣いをするようになったのも、すべてあの出来事がきっかけだ。女らしくしても仕方ないと思うようになったのも。男は身勝手なものだと考えるようになったのも。だからなのか。男に成りすまして、宦官として後宮に来ていることに対してまったく罪悪感がわかないのは。それどころか、星蓮を取り戻すことにしても当然だと考えている。大罪を犯していることに、一族を危険にさらしていることに、私達は、いや、私は実感していないのかもしれない。だからこんなことをしてしまったのだろうか。私のやっていることは身勝手でわがままなことかもしれない。でも――――!!

「・・・どんなことをしてでも・・・星蓮は必ずとりもどす・・・絶対に。」

自分のしている事は常識から外れているのは分かっている。でも、私が全部悪いのだから。あの時星蓮と離れなければよかったと、何度考えただろうか。そのせいで、父が、母が、林山が、なによりも星蓮が傷つき、人生が狂ってしまった。でも・・・・・・・・・・・・・・・

「――――――人の心に常識なんてない。」

そうだよ、常識なんて関係ない。私は私にできることをすればいいんだ。人の心の常識は他人が決めるものじゃない。私がしているこ

とがわがままと言われても構わない。だから私は罪を犯してでも自分の信念を貫く。

「絶対に・・・・取り戻してやる！」

自分の目的を再確認して呟いた時だった。ふいに人の気配を感じる。とっさに近くの柱の後ろに隠れる。息を潜めていると、段々と足音と、人の声が近づいてくる。聞き覚えのある声。

「ここには来るなと言ったであろう？」

この声はまさか・・・！？

柱の影から聞こえる足音と、声の主を確認するまでは信じられなかった。

（琥珀！？）

それは紛れもなく、同じ下級宦官でここでの友である、王琥珀だった。しかも一人ではない、全身黒ずくめの男と一緒だった。後宮では見たことのない怪しい男。二人は、星影が隠れている柱の前まで来るとその場に立ち止まった。どうやら星影がいることに、気づいていないようだった。

「申し訳ありません。どうしても、伯燕様にお伝えしたいことが・・・」

（はくえん？）

星影は思わず眉を吊り上げる。

彼は自分のことを『王琥珀』と、名乗っている。周りもそう呼んでいる。

では『伯燕』とは？あだ名？それとも幼名かしら。

疑問はそれだけではない。

真夜中にこんな人気のいないところで、それも見るからに、後宮に勤める人間ではなさそうな男と一緒にいる。

なにかあると思った星影は、二人の話に耳を傾ける。

「実は伯燕様！例の件ですが、手はずが整いまして・・・。」

「まことか！よくやった。」

（手はず・・・！？なにか約束でもしていたのか？）

だとしたら、一体どんな約束を？？こんな夜中に人気のいない廊下で密談するほどだし。・・・まさか、物騒な話じゃないでしょうね。

「・・・計画に、抜かりないだろうな？」

「はい。・・・奴を殺すには十分です。」

予感的中！

聞こえてくる会話はかなり物騒だった。

（殺す!?一体誰を!?）

詳しく話を聞こうと、身を少し乗り出した時だった。星影の影が廊下に映る。それは一瞬の出来事だったが、黒服の男はその影を見逃さなかった。そのことに気づく星影。

（しまった、見られた!）

星影が息をのんだ瞬間。

「誰だ!?」

罵声に近い声で、黒服の男が星影のいる柱めがけて短刀を数本投げつける。

「どうした!?何事だ!?」
「はい!今、柱の影に人が!」
「なんだと!?」

二人が柱の陰に駆けつけるとそこには、短刀の刺さったほうきが一本転がっていた。

「なんだ、ほうきではないか。驚かせるな。」
「・・・おかしいですな。確かに人影だったのですが・・・?」

不思議そうにしている黒服の男。箒を手に取ると、マジマジと見ながら首を傾げる。
そんな彼に琥珀、いや、伯燕は声を掛ける。

「あまり殺気立つでない。私はそろそろ戻る・・・。人目に付くと厄介だからな。」

伯燕の言葉で、二人はその場から離れ始める。しばらくすると、二人の男の姿は暗い廊下の中へと消えていった。辺りに再び静寂が戻る。

「助かった・・・」

誰もいない廊下に響く声。地上にはその姿を窺えないが、まぎれもない星影の声だった。柱の天井にへばりつく彼女の姿があった。

「武芸を習っていて良かった。」

安堵すると、勢いよく地上に着地する。誰もいないのを確認すると、長居は無用とばかりに一気に駆け出す。風を肩に受けながら星影は考えた。

王琥珀・・・と、偽る伯燕と黒服の男のことを。おそらく王琥珀とは彼の偽名だろう。つまり王琥珀は、偽名で伯燕と言う名が本名なのだ。琥珀は、伯燕は一体何者だろうか?彼は自分のことを匈奴だと言っていたが・・・本当だろうか。それに琥珀の口調、二人のやり取りを聞いた限り、それほど身分が低いような感じではなかった。むしろ、どこかの貴人のような話し方だった。そう、主人と家来のような雰囲気が二人にはあった。

なによりも引っかかることがあった。彼になにかを感じた。それは以前どこかで感じたことがある『なにか』を。そこまで考えて星影

は気付いた。その『なにか』に。最初に彼と会った時に感じた違和感――――――・・・・・!?

「あれと同じだ・・・・・!」

武道の修行場で、いつも漂(ただよ)っていた空気。武人特有の感覚。いつも星影が、身近に感じていたもの。

「琥珀の動きは・・・『武人の気』だ・・・・。」

星影が琥珀に感じた『なにか』。それは、彼の雰囲気の中に『武』を感じたからだった。その見え隠れしている武人の気配に気づいたからだ。どんなに隠してもごまかすことのできない、「武」の気配。あれは自分が道場にいた時の周りの人間と同じ匂いがしたからだ。では彼はいったい何者なのか?はっきりとわかることは唯一つ。

「彼は・・・宦官じゃない・・・・。」

それだけではない。気がかりな事は、誰かを殺す相談をしていたこと。彼らは誰を殺そうと言うのか?宦官に成りすまして、後宮に来てまで殺す必要がある人物。

“皇帝陛下様にとって、異民族を皆殺しにすることは簡単だったんだよ。”

・・・・・まさか――――――!?

そんな事を考えていた時だった。

突然あたりに叫び音が響く。それと共に遠くの方から大声で叫ぶ声が聞こえた。

「なに?庭の方から?」

不審に思い声のするほうへと進む。近づくにつれて嫌な匂いが漂う。その時だった。

「痛っ!!」

声と共に、星影は勢いよく倒れる。なにかに足を引っ掛けてつまずいたようだった。

「なんなんだよ!?いっ――――――」

一体!?そういいかけて、星影は我が目を疑った。そこには血まみれの男が倒れていた。すでに事切れているらしく、死後硬直が始まっていた。思わず後ずさりすると手になにかが当たる。恐る恐る振り返るとそこには、屍(しかばね)の山、山、山、山。

「――――どうなっているの・・・!?」

服装からして見覚えがあった。数日前に星影の乱闘を止めに来たのでよく覚えていた。間違いない、彼らは皆、後宮の宮廷兵だ。後宮の宮廷兵と言えば選りすぐりの精鋭ばかり。それがこうも簡単に切り捨てられている。星影は直感した。これはただ事ではない。冷静に周囲の状況を見る星影はあることに気がつく。

「この死体・・・!切られてまだ間(ま)もない・・・?」

屍は奥へ行くほど新しいことに気づく。
これをたどっていけば、なにか分かるかもしれない！
そう思うと急いで彼女は駆け出した。奥へ行くほど血の匂いがする。
そのにおいを頼りに、庭の奥深くへと星影は進むのだった。

第十一話　激突（前編）

血の臭いと死体の後をたどりながら、なんとか星影は庭の奥に着いた。
そこで彼女が見たものは、黒ずくめの賊らしい集団と、それを一人必死で対抗する男の姿だった。男は寝巻き姿で、一つに束ねられていた髪は乱れていた。

（一人で乱闘していたのか！？）

しかし、星影の思考はそこで止まる。寝巻き姿の男が手前の賊を跳ねのぞけた時だった。背後に別の賊が忍び寄ったのだ。寝巻き姿の男はそのことにまったく気づいていない。
あのままでは切られる。
そう思った星影は、近くにあったほうきを掴むと勢いよく宙を舞って飛び出すと同時に叫んだ。

「危ない！！」

すばやく、寝巻き姿の男の背後に着地すると、賊の刀を受け止める。ほうきの棒の部分が刀の柄に食い込み動きが止まる。止まったのを確認すると、勢いよく刀を払いのけた。

「大丈夫ですか！？怪我は？」
「あ、ああ。大事は無いが・・・お主は一体・・？」
「な、なんだ！？貴様は！？」

驚く賊達と、男をよそに星影は涼しい顔で言った。

「お前らこそ何者だ!?多勢(たぜい)に無勢(ぶぜい)とはずいぶん卑怯なのだな?さっきの兵の死体も貴様らがやったのか?」

賊達は、しばらく星影をマジマジと見ていた。ところが、やがてなにかに気づいたようにお互い顔をあわせる。そして目の色を変え、はき捨てるように言い放つ。

「お前その服装・・・・さては宦官だな?玉無しは引っ込んでいろ!!死にたいのか!?」

大声で馬鹿にするように笑いだす賊達。男達の蔑(さげす)んだような物言いに、ここ数日間の星影の我慢が爆発した。鼻歌交(はなうたま)じりに襲い掛かってくる賊の一人を蹴り飛ばすと鞘(さや)ごと刀を奪い取る。

「その言葉・・・後悔させてやるよ!!」

言ったと同時に、星影は剣を抜き斬りかかった。一振りのうちに三人が倒れる。たちまちに賊たちの顔色が変わった。

「な、なんだこいつ!?」
「どうした?威勢のいいのは口先だけか?」
「偉そうな口を叩くな!死ねー!!」

いっせいに飛び掛る男達。
すばやく星影は身をかがめると、先頭の男の胸倉に滑(すべ)り込(こ)み投げ飛ばす。

「ぐわあ！！」

その隙に高く飛び上がると、大きく足をひろげて一回転する。二人の顔面に食い込み、倒れてしまった。なおも襲い掛かる男達を蹴り上げ、手とうで剣を叩き落す。その隙に空の鞘で腹を突いてやる。そのまま高く飛ぶと上段蹴りを繰り出す。すばやく着地した足を軸にすると数人を足払いする。

「くそったれー！！」

星影に敵わないと思った賊が数人、あの襲われていた男に狙いを定めて斬りかかる。
いくら男が刀を持っているとはいえ、四方から襲われてはたまらない。

「おのれ！」

自分が不利とわかりながらも、剣を構える寝巻き姿の男。その姿は、星影の視界にも入っていた。星影は軽く舌打ちをすると、足元に転がっていた塀の残骸らしい石を一、二個交互に蹴り、持っていた刀を勢いよく男たちめがけて投げつけた。残骸は賊達の背中や頭に命中し、刀に関しては賊の一人の腕に命中した。それぞれが倒れ、手から刀を落とし、地面に倒れる。それを見届けると、自分もすばやく襲われていた寝巻き姿の男のもとへと駆け寄る。

「すまん！またお主に助けられたな。それにしてもなかなかの腕だ・・・！一体何者だ！？」
「話は後です！ここは私に任せて、今のうちに逃げてください！」
「しかし・・・・。」

「逃がすか!!」

容赦なく打ち込んでくる賊達。人数的にこの人をこのまま逃がすのはよくないわ。少々不利でも側にいてもらう方がいいかもしれない。

「仕方ないな・・・!私の近くに隠れていてください!!」

落ちていた槍を持つと、それを頭上に回しながら襲い掛かってくる覆面の男達を蹴散らした。なおも襲い掛かってくる賊を、槍を使って上下左右に振り回し叩きつける。次第に二人に対する包囲は遠巻きなっていく。

「本当にただの宦官か!?強すぎるぞ!?」

次第に動揺し始める男達。その様子を見て星影は不敵な笑みを浮かべる。

「情けないな?宦官に負かされるなんて?腕を磨いて――――出直してきな!!」

槍をすばやく振り回すと威嚇してみせる。男たちが後ずさりしたその時だった。

「お前らじゃ無理だ!どいていろ!」

そう言って一人の男がゆっくりと歩み寄る。

「お遊びはここまでだ、小僧。」

冷たく言い放つ男。腰に下げていた刀剣をゆっくりと抜く。

「貴様がこの賊を率いているものか！？」

星影の問いに男は答えることなく、刀剣を彼女に向けて構える。青白く光る刀剣は、月明かりを受け、美しく輝いていた。男の動き一つ、一つに無駄がなく、なかなかの使い手である事は、星影もすぐにわかった。

（こいつ・・・できる。）

直感的に星影がそう思った時だった。

「うわあぁ！？」

鉄でできた槍が無残にも目の前で二つに割れる。

（早い！いつの間に！？）

視線を男に返すと、目の前に刀剣の姿。

「えぇえ！？」

慌てて頭を下げる星影。そのまま男の股を滑るように潜り抜ける。

「このガキ！」

男の股から潜り抜けると、素早く体制を立て直す。お返しとばかり、高く飛び上がると、ひねりの効いた蹴りを繰り出すが――

「なに！？」

星影の蹴りは、相手の刀剣の柄の部分で受け止められる。

「――馬鹿が！」

笑みを見せて言う男からは、余裕が見え隠れしていた。

（ここは三十六計――逃げるに限る・・・！）

本能的に、自分が不利だと確信する星影。

（お荷物もあることだし――――逃げよう！）

音を立てて着地すると、敵に背を向けて走る星影。その足は、寝巻き姿の男に一直線で進んだ。

「な、なんじゃ！？」

「逃げます。」

短く答えると、寝巻き姿の男を抱きかかえる星影。そして、呆気にとられている賊達の頭上を飛び越えて庭を駆け抜ける。

「な、なんだ！？どこに行く気だ！？」

「今考えてます。」

「なんじゃそれは！？どうするつもりなんだ！？」

狼狽(ろうばい)する相手をよそに星影は落ち着いた口調で言った。

「落ち着いてください。このままあなたが側にいたままでは、私が戦いにくいんです。なによりも、お互いの身が危ない・・・危険なんです。」

「では、安全な場所に逃げればいいだろう!?」

「どこですか、そこは?」

「――――――!?おぬしは後宮の人間だろう!?把握(はあく)できておらんのか!?」

「申し訳ありません。ほんの数日前に来た新人でございます。」

「なっ!?」

「それ以前の問題に、あなたこそ、襲われる危険があるなら、事前に把握しておいてください。おかげで、何人もの人間が犠牲になりました。」

「無礼者!好きで狙われておるわけではない!!」

「無礼で結構、コケコッコーにございます。悪人に限って、そういう言い方をしますよね~」

「下賤!いいたいことはそれだけか!?」

「その下賤に助けられたのは、どちら様でございましょうか?」

「お、おのれは~!!」

青筋を浮かべる相手に、嫌みったらしく丁寧な口調で言う星影。

「それで?安全な場所はどこでございますか、お偉い様?」

「・・・!!・・・このまま、庭を抜ければすぐじゃ・・・!!」

「ありがとうございます。それではしっかりと、掴まっていてください。」

苦々しく言う相手に、勝ち誇ったように笑う星影。

「後で覚えておれよ・・・！！」
「ご自由に。私はすぐに忘れますから。」
「なっ！？」

星影の言葉に、目を白黒させる寝巻き姿の男。呆然と星影を見つめるが、本人はそんな視線を気にすることはなかった。今の星影の頭にあったのは、この状況から逃げ出すこと。そして、

（星蓮を見つけるまで、死ねるか！！）

妹に対する思いのみ。木々の間をすり抜けて走る星影。自分が来た道とは別の入り口に差し掛かったときだった。突然、その目の前に無数の弓が降り注いだ。

「うわぁあ！？」

矢雨の前寸前で、急停止する星影。

「こ、今度はなんだ！？」

見れば屋根の上にいつの間にか賊の集団達がいた。こちらめがけてありったけの弓やら石やらを投げてくる。寝巻き姿の男を庇(かば)いながら必死にそれを防ぐ星影。

「逃がすな！まとめて射殺せ！！」

後ろから罵声が響く。振り向いた瞬間、青白く光る一太刀(ひとたち)。

「逃げろ！！」

抱きかかえていた寝巻き姿の男を放りなげると、襲い掛かってくる刀を受け止める星影。

「お遊びはお終(しま)いだ！そろそろ死んでもらおうか！？」

「残念だが、まだこの世には未練がある！」

「では、力ずくでするまでだ！！」

男が刀を弾き返すと、星影は一気に飛び掛った。互いが刀を振るたびに高いが音が辺りに響く。

（さすが後宮に忍び込むだけあるわ。刀剣の方もなかなかだけど――）

「――私を倒すに値しない！！」

そう言って、星影が後ろに飛んだ時だった。

「ううっ・・・。」

唸り声がする・・・しかも聞き覚えのある声。見るとそこには・・・。

「お前、まだいたのか！？」

逃がしたはずの男の姿があった。

「なにやってんだ！？早く逃げろ！！」

「ま、まて・・・は、」

「よそ見するな!!」

襲い掛かってくる相手の攻撃をかわしつつ、星影は再度男に声をかける。

「いいから早く逃げろ!!死にたいのか!?」

「に、逃げろと、言われても・・・!」

息も絶え絶えに言う男。

どうして逃げないのだ!?抱きかかえていたから、走り疲れたというはずはない・・・。まさか、防いだはずの敵の刃が男に傷でも負わせたのか!?

目だけで見ると彼は腹を押さえたままその場に座り込んでいた。

「おい!しっかりしろ!!やられたのか!?」

「ああ・・・そうじゃ・・・。」

唸(うな)るように、寝巻き姿の男は答える。

「・・・やられたんじゃよ・・・!」

男の言葉に星影は舌打ちする。

(くそ、防げなかったか!)

彼女の中の怒りの矛先(ほこさき)は賊の頭に向けられた。

「俺の防ぎ様が悪かったとは言え、お前のせいであの人は怪我をし

たんだ！この代償は高くつくぜ！！」
「お主・・・・！」

苦しむ男の声をよそに、一歩踏み出すと賊の頭向かって斜めから切りつける。それは相手の頭の布をかすめ、数本の髪の毛が宙を舞った。

「このガキ！」

「怒るなよ。これくらいじゃぁすませないぜ・・・！？」
「待て！」

彼女の言葉に、うずくまっていた男がなにか言いかける。

「しゃべらないで！すぐにケリをつけますから！」

すかさずそれを静止する星影。

「あなたのかたきはとる！」

「違・・・！」
「いいからそこを動くな！こいつに怒りを感じているのはわかるが、動くと傷に――」

「だから、違うと言っているだろうが！！」

寝巻き姿の男は、彼女を怒鳴りつけると、とんでもない事を口にした。

「お主に・・やられたのだ！！」

「へ・・・・？」

「放り出された時に、思いっきりみぞおちに肘鉄(ひじてつ)をくらったのだ！！いくら非常時といえども、人に肘鉄を食らわせる奴があるか！！？」

「えええぇ！！？」

どうやら星影は、男を庇(かば)った時、無意識のうちに、肘鉄(ひじてつ)を食らわせていたらしい。

「そ、そんな・・・仕方ないだろう！わざとじゃないんだ！！」

「だったら一言謝らんか！！」

「ああ悪かったよ！！申し訳ありません！！さあ逃げろ！！」

「お主は人の話を聞いてないのか！？痛くて動けないんだよ！！」

「よく言うよ！今這(は)いつくばりながら少し動いただろう！？じゃあ少し休んでから逃げろよ！！その間は俺が防いでてやるから！！」

「お、お主と言う奴は――――――――！いい加減に・・・！！」

「・・・すんのはお前達だぁ！！」

今まで黙ってことの成り行きを見ていた賊の頭だったが、あまりのばかばかしい話のやり取りに腹を立ててしまったらしい。無理もない、自分との真剣勝負の途中で相手が他の話をしていれば誰だって腹を立てるだろう。

「今までいろんな奴を狙ってきたが、お前らみたいな大馬鹿は初めてだよ!!」

「だ、誰が大馬鹿だと!?大きなお世話だ!!」

「その賊のいう通りじゃ!この無礼者め!!」

同感だとばかりに、星影が助けた男も大きく頷く。

「テメー!助けてやってるのに、なんだその口の利き方は!?」

「助けるなら、もっと丁寧に助けろ!!」

「二人対大勢で、どうやって丁寧な救助活動が出来るんだよ!?」

「だから無視すんじゃねぇよ!少しは真面目にやりやがれ!!」

「そんなこと、言われなくてもわかってるよ!大体、このおっさんがボーとしてるからいけないんだ!!」

「な!?誰がおっさんだ!?」

星影の言葉に、顔を真っ赤にして怒る男。

「本当だろうが!?賊も悪いが、おっさんの態度も悪い!!」

「なっ、なっ――――――口を慎め!!」

「そう思うなら、戦っている最中に話しかけ――――――!?」

そう言いかけた星影の目に飛び込んできた光景。屋根の上から弓を構えて狙う数人の男姿。その的は自分後ろに向けられていた。

「――――――おっさん！」
「だから誰がおっさんだと・・・！！」
弓を引く音がかすかに聞こえた。その音に男の頭も気づき声を上げる。
「なっ！？」
「危ない！！」
交えていた刃を跳ね返すと、星影は自分に抗議している男の方へ向かう。
「うわぁああ！？」
賊の頭をよけるように弓が放たれる。数本の矢が唸り声を上げて襲い掛かる。星影は寝巻き姿の男を抱えたまま廊下の方へと飛びのけた。
「ぐおおお！？」
星影と寝巻き姿の男は廊下に叩きつけられた。その足元には数本の矢が突き刺さっていた。
「これは・・・！」
「毒矢か・・・危なかった。」
矢先は黒光りしていた。
「この毒は――――――鴆か・・・？」

毒性の高い毒。それを使ってまで襲ったということは――――――

（どうやら、厄介な男を助けたらしいな・・・！）

「怪我はありませんか！？」

「いや、大丈夫だ。・・・その、すまなかったな・・・。」

「いいえ。私の方こそ失礼なことをしてしまいました。」

照れくさそうにいう男に笑顔で星影は答える。

「クソ！はずしたか・・・。」

そんな二人を忌々しそうに見つめる賊の頭。

「卑怯だぞ！一対一の剣の勝負に弓を使うなど！！」

「黙れ！暗殺に卑怯もクソもあるか！！」

「あ、暗殺だと・・・！？」

賊の頭の言葉に、唖然（あぜん）とする星影。

（やはり、このおっさんを狙ったのか！）

「ふざけるな！お前の思い通りにさせない！！」

「フン！お前も、あの護衛どもと同じだな・・・！」

その言葉に星影は、生暖かい死体の感触を思い出す。

「貴様が・・・宮廷兵を殺したのか・・・！？」

「だったらなんだ？こっちは、報酬外のことをさせられて、いい迷惑だったぜ！」

「貴様！！」

（人の命を、金感情で決めるというのか！？）

「わかったらそこをどけ！その男と心中でもしたいのか！？」

「――冗談じゃない・・・！ここで死んでたまるか！！」

賊の頭の言葉に、星影の怒りが着火（ちゃっか）する。

「貴様のその首を叩き落して市街にさらし、その見物料を貴様が殺し者の遺族に渡す！！」

吠（ほ）えるように言う星影に、一瞬、相手は目を丸くするが――――――

「そうかい・・・どかないということか・・・・。」

ニンマリと笑うと、大声で言った。

「それならまとめて殺すだけだ！やれ！！」

賊の頭の声を合図に、星影と寝巻き姿の男目掛けていっせいに弓が振り注ぐ。

男を抱えて素早く柱の陰に隠れる星影。

「どうする気じゃ！？このままでは殺されるぞ！？」

狼狽する寝巻き姿の男。それとは対照的に、星影は落ち着いた表情で言った。

「大丈夫です。私の怒りが見事に点火しましたから。」
「お主の精神状態と、今の状況とどう関係あるんじゃ!?」
「ハッハッ!大有りですよ・・・・!」

そう言って笑う星影。その表情を見て、寝巻き姿の男は息を呑む。相手はさわやかに笑っていたが、その目は、笑ってはいなかったからだ。

「さぁ〜て・・・反撃といきましょうか?」

両手の関節(かんせつ)を鳴らしながら、力強く星影は言い放った。

第十一話　激突（前編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
小説を書いていると、どうしても、長々とした内容になってしまいます（汗）
ダラダラ書いてますが、どうぞ、お付き合いください。

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてください（苦笑）
ヘタレで、すみません。。。

第十二話　激突（後編）

「・・・どう反撃するつもりなのだ・・・？」

柱の影で、寝巻き姿の男が尋ねる。問われた本人、安林山（あんりんざん）こと劉星（りゅうせい）影（えい）は、不敵（ふてき）な笑みを浮かべる。

「倍返し。」

星影は短く答えると、自分の両手の拳に息を吹きかける。そして、木で出来た廊下に拳を叩きつけた。

「なにぃ！？」

大きな音と共に床に亀裂（きれつ）が入る。そのまま一直線に、柱の影に沿って拳を入れていく星影。

「な、なにを――――！？」

「いいから見てな！」

困惑する寝巻き姿の男に笑いかけると、近くに転がる刀を手に取る。そして弓が降り注ぐ中を、隣の柱へと、剣の切っ先を下に向け、切込みを入れながら移動する星影。ここでもまた同じように、柱の陰に沿って床に穴を開けていく。

「なんの真似だ？恐怖のあまり、頭がおかしくなったか！？」

下品な声で笑う賊の頭。その声に誘われるように、柱の陰から星影が姿を覗（のぞ）かせる。

「誰がおかしくなったって!?まだわからないのか?」
「なんだと!?」
「俺のやりたいことは――――――」

剣の切っ先を下に向け、切込みを入れながら、男が待つ柱の陰へと戻る星影。

「こういうことさ!!」

言ったと同時に、足の踵(かかと)で切込みを入れた床を叩く星影。すると床が長方形の形で割れてはずれる。

「なっ!?」
「盾(たて)さえあれば、弓なんか怖くないんだよ!!」

くりぬいた廊下の板を盾にすると、寝巻き姿の男と共にその後ろに隠れる。そのまま庭に下りると、庭へと舞い降りる。

「か、構うな!射掛(いか)けろ!!」
「そうはさせるか!!」

庭に転がる大き目の石や破片を持つと、狙いを屋根の上に定める。

「おい!そんなもので大丈夫か!?」
「平気、平気!射程(しゃてい)内に入れば――――!」

数歩進むと、勢いよく屋根の上で弓を射掛ける男達目掛けて石を投

げる。

「ぎゃ！？」
「ぐわぁ！？」

鈍い音と低い叫びを上げながら、男達は次々に屋根から落ちていく。

「おお、見事じゃ！！」
「ほらね？言ったとおりでしょ？」
「な・・・冗談だろう！？」

驚く賊の頭を尻目に、大はしゃぎする星影と寝巻き姿の男。ある程度弓手を落としたところで、盾にしていた木の板を、力の限り放り投げる。それはくるくると回りながら、屋根にいる残りの者たちに命中した。その様子を満足そうに見る星影。一方の賊の頭は、ただ固まることしか出来なかった。

「お、お前一体・・・！？」
「さあ、残りは貴様だけだ・・・！覚悟してもらおうか！？」

不敵に笑って剣を構える星影。それにあわせるように剣を構える賊の男。そこには、先ほどまで、余裕で刀剣を構える男の姿はなかった。

「貴様一体何者だ、小僧！？ただの宦官ではあるまい！？」
「さてね・・・。名乗るほどのものではない。」

顔に汗をにじませながら尋ねる相手に、星影は涼しい顔で言い放った。

「言わせてもらえば、貴様らみたいな不届き者を見過ごせない者・・・と、だけ名乗っておくか！！」

そう言って賊の男の刀剣を弾き飛ばす星影。刀剣はくるくる回りながら、後ろの方に飛んでいく。それを目で追いながら、賊の男が小さく声を上げる。その隙にしゃがみこむと、素早く、相手を足払いする星影。前かがみに倒れこんでくる相手の腹に、拳を思いっきり叩き込む。

「がはぁ！？」

それによって、相手の体が一瞬こわばる。そこを今度は、剣の柄を垂直（すいちょく）に構え、一直線に賊の頭の背中に叩き込む。

「――っ！！」

低い唸り声を立てて、その場に倒れこむ賊の頭。そしてそのまま動かなくなるのを確認すると、静かに言った。

「なかなかの腕だが、暗殺をするのには十年ほど早かったみたいだな？」

クスクスと笑うと、賊の頭を無視して踵（きびす）を返す星影。

「大丈夫ですか？」

そう言って、寝巻き姿の男のもとに駆け寄る星影。

「あ、ああ・・・大事無いが・・・。」

そう言った男の視線は、自分ではなくよそに向けられていた。なにかあるのかと思い、星影もその視線の先を追うと――――

「・・・この賊がどうかしましたか・・・？」

地面に倒れている、賊達を見つめる寝巻き姿の男。

「あまり近づかない方がいいですよ。気絶したフリをしてるだけかもしれませんから。」

「・・・心配するな、賊は皆死んでいる。毒を煽(あお)ったようだからのう。」

「毒!?」

男の言葉に、思わず駆け寄る星影。見ると、全員すでに事切(ことき)れていた。

「嘘だろう!?死んでる・・・！」

「矢に塗ってあった毒、鴆(ちん)で自害したのであろう・・・暗殺者の掟(おきて)に従ったのだ。」

「暗殺者の掟？」

「そうだ。自分達が捕まったり、負けた場合には、雇い主の情報を漏らさないためにも、こうやって自害するのじゃ。」

「そんな・・・！」

では彼らは、雇い主を守るために死んだというのか!?

「まあ・・・どの道、これだけのことをしておいて、無事ではすまないからのぅ・・・。」
「しかし誰がこんなことを!?」
そう言いかけて、ふいに彼女の中で先ほどの出来事がよみがえる。
“・・・計画は、抜かりないだろうな?”
“はい。・・奴を殺すには十分です。”
琥珀と黒ずくめの男の会話。
(まさか・・・犯人は琥珀・・・・!?)
いや、あの琥珀に限ってまさか・・・。
仮にも自分の友達である。自分の友達がこんな悪いことをしたなどと、とても星影には思えなかった。正確には信じたくなかった。しかし現実は、琥珀が密談していた黒服の男と同じ、黒服の集団が殺そうと襲ってきたのである。すでに宮廷兵の数十人は殺されてしまっている。琥珀の目的がなんであるかは知らないが、自分の隣にいるこの男が狙われていたのは事実である。そして、琥珀の名が、偽名で本名が伯燕(はくえん)であるということ。
「あの、なにか教われるような心当りでも――」
「心当りは、ありすぎてわからんな!」
そう言うと、さっきまで自分を襲っていた賊達の死体を物色しだす

寝巻き姿の男。死体の首に手を当てると、時折唸(ときおりうな)るような声を出しながら眺めていた。どうやら死んでいるか確認しているようだが・・・。

（なにしてんだ。このおっさんは・・・。）

自分で死んでると言っておきながら。

「あの・・・死体相手になにしてるんですか・・・。」

「おお、ちょっと確かめたいことがあってな。」

星影の答えに、あっけらかんと答える男。

「危ないですよ！そんなうかつに触って・・・もし賊が生きていて、襲い掛かってきたらどうすんですか！？」

「その時はまた、お主に助けてもらおう。」

そう言って、子供のように笑う男。あまりにも無邪気な返事に星影は言葉を失う。そして改めて男の姿を見る。年は自分より上であるのは確かだった。年のころは四十ぐらいだろうか。寝巻きは絹が使われており、その体からは上品の香りが漂(ただよ)う。香の匂いからして、身分が高い事は間違いなかった。加えてなかなか渋めの好漢(こうかん)だ。

そう言えばこの人、賊達に襲われていたけど・・・。なんのためにこの男を狙ったんだろう？　宮中にいるという事は、それ相応の身分がある人物だろうが・・・。仮に皇族だとしても、宮中で寝巻き姿というのも、おかしな話である。

（・・・本当になんなんだろう？）

「まぁ・・・無事ならいいですけど。しかし、結構汚したなぁ～」

そう言って、土や埃(ほこり)をかぶった自分の服を払う星影。そして、ついでだから、と言いながら相手の衣服の汚れも払ってやる。

「お、おいおい。」

「動かないで！埃(ほこり)を払ってるだけですから。参ったな・・・袖口は泥がついてて落ちないな・・・。」

洗濯しないとだめですね、と呟く星影。そして、持っていた布で、相手の手を拭いた。そんな星影の姿に男は愉快そうに笑った。

「気にせずともよい！着物の一枚や二枚、どうということもない！」

「いや、でも、これは絹ですよ？絹の服なんてこんな高価なもの――――」

「それもそうか。まぁ気にするな！」

豪快に笑い声をあげる男と返事に困る星影。

（本当になんなんだ・・・この男は？）

星影がそう考えている時だった。遠くの方で複数の人の声と足音が響く。どうやらこの異変に気づいた他の宮廷兵達が来たらしい。来るのが少々遅すぎはしないだろうか。

そんなことを考えながらも、安堵する星影。これで、この寝巻き姿の男は大丈夫だろう。自分の役目は終わりである。

「私はこれで失礼します。」

そう言って、寝巻き姿の男の前で軽く手を合わせる星影。このまま

ここにいれば、勝手に部屋を抜け出したのがばれてしまう。これ以上目立つような行動をすれば、星蓮を探すのがますます難しくなる。背を向けて、立ち去ろうとした星影だったが、

「待て！」

助けた男によって、行く手を遮られる。

「お主の活躍、見事であった！礼を言うぞ！！」

「いや・・・いいですよ。人として、当然のことをしたまでですから・・・。」

「お主のおかげで助かったのだ！是非、褒美をやりたい！！」

「え、いや・・・いりませんよ。」

「いらぬだと！？おお・・・口は悪いが、なんと謙虚な！気に入ったぞ！！」

そう言って、嬉しそうに星影の腕を強引に引っ張る寝巻き姿の男。

「ちょ、ちょっと！」

「見かけぬ顔だが新入りか！？なりは宦官じゃが・・・見たところなかなか腕の立つ武人と見る！！いや・・・仮に宦官だとしても、宦官にしておくのは惜しいぞ！」

驚く星影の目に映ったのは、目を輝かせながら自分に詰め寄る男の姿。

「名はなんと言うのだ！？年はいくつじゃ！？」

「ちょ、やめてください！放してくれません！？」

なれなれしく肩を抱いてくる相手に顔をしかめる星影。すると男は

いきなり、彼女を抱き寄せながら囁いた。

「おお！よく見れば可愛い顔をしているな！？褒美にお前を愛でてやるのも良かろうのぉ～」

「はぁあ～！？めでる！？」

思わず聞き返す星影。相手は上機嫌に話を続ける。

「そうじゃ！湯にでも一緒につかりながら、たっぷりと可愛がってやるぞ～！」

めでる？
芽出る？
目出る？
愛でる？
え・・・？

男の言葉に対して彼女の頭の中で恐ろしい答えが導きだされつつあった。

（まさか・・・！？）

「あ、あの・・・『めでる』って、もしかして・・・・。」

恐る恐る尋ねる星影に男は満面の笑みで答えた。

「決まっておろう！愛でるといえば、『愛する』という意味しかないだろう！？」

そう言うと、星影の顎を掴むと顔を寄せてくる男。

「ぎゃ!?な、なにするの!!?」

慌てて男の顔を引き剥がす星影。

（めでるって、【愛する】と書く愛でるのことかぁ～!!）

「これ、何を照れている?」

「照れるとかそういう問題じゃないだろう!?」

冗談じゃない!!私は劉星影という女だけど、今は男・安林山(あんりんざん)!この人、私が男（!?）と知っていて声をかけているわけ!?なんなのよ!?これ以上わけのわからないのは御免よ!!

身の危険を感じた星影。この状況を打開するため、さっそく行動にでる。

「ウフフ～・・・」

相手に向かって、にっこりと笑いかける星影。

「おお!なかなか可愛い顔をするではないかぁ～?」

相手も星影の美しい笑みに気を良くしたのか、笑い返してくる。そして星影を掴む男の力が緩んだ時だった。

「やぁ!!」

威勢(いせい)良く叫ぶと、こんしんの力を込めて男の手を払いのける星影。

「痛っ！？」

そして相手には目もくれず、一目散に逃げだした。

「ま、待たぬか！恥ずかしがらなくても良い！！」

馬鹿野朗！！誰が恥ずかしがるだ！？気持ち悪いっての！！

喉まででかかった言葉を飲み込むとひたすら星影はその場を後にする。

結局この夜、星蓮を見つけることはできなかった。

第十二話　激突（後編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
基本的に、主人公はお人よしな面があります（苦笑）

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、
という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてください（苦笑）
ヘタレで、すみません。。。

第十三話　嫌なツケがまわってくる

「おはよう林山。ねえ、聞きましたか？昨日の騒ぎのこと？」
「おは・・・・！さ、騒ぎ・・・・て！？」

朝一番で、空飛からかけられた一言。まだ外が暗いうちから起き、眠い目を擦(こす)りながら自分の仕事場に行くと、そこにはすでに張空飛(ちょうくうひ)の姿があった。にこやかにいう彼を見ながら昨夜のことが頭をよぎる。

あれから、道に迷いながらもなんとか無事に自分の宿舎までたどり着いた星影。朝方だったこともあり、わずかな睡眠をとって自分の持ち場に来たのだが・・・。なにも知らない空飛を前にしろもどしつつも首を横に振った。

「な、なんかあったの？」
「あれ、知らないの？なんでも昨夜、賊がここに侵入したらしいのだけど・・・その賊を全員返り討ちにした人がいるらしいんですよ！それも宦官が！！」

（・・・こんなことになるなら、着替えて探せばよかった。うん、今度からは着替えて探そう。）

目を輝かせながら言う空飛を見ながら、心の中で反省会をする星影。

「・・・すごい宦官がいたもんだね。」
「そうでしょう？それで今ね、その宦官を探し回っているらしいのですよ。」
「・・・・・・・・！？」

その宦官を探し回っている?それってちょっと、いや！かなりまずくない！?もし見つかって、身元を調べられでもしたら偽造していることがばれてしまう。悪くすれば、この計画が暴露(ばくろ)するばかりか、下手をすれば劉家・安家共に、一族・・・いや三族皆殺しに・・・・・！！

そんな事を考えている星影だったが、空飛の意味ありげな視線に気づき目を反らす。

（もしかして・・・疑ってるのかな。）

宦官の正体が、安林山(わたし)じゃないかだって。

「その話なら私も聞いたぞ。」

視線をそらしたその先に、琥珀が立っていた。

「こ、琥珀・・・。」

「なんでも稲妻(いなずま)のごとく現れ、疾風(しっぷう)のごとく去って行ったそうだ。それもたった一人で。」

さわやかに話す琥珀に、星影は笑顔で答えていたが内心複雑だった。

琥珀・・・否(ひ)、【伯燕(はくえん)】と言った方が正しいかもしれない。星影は昨夜、黒ずくめの怪しい男と密会していた。自分達とこうして呑気に挨拶をするところから考えると、彼は星影がその現場を見ていたことを知らないのだろう。それに星影が朝方戻った時、彼は寝台で休んでいた。

そんな星影の胸の内を知らない空飛は、彼女にとんでもないことを言った。

「ねえ、林山。賊を倒した宦官って、貴方のことじゃないんですか？」

（・・・・なんでそうなるの・・・・・・！？）

まあ、確かに当たっているけど。でも、ここで話せばきっと・・・いいや絶対に大騒ぎになる。

正直星影は、空飛のことは嫌いではなかった。むしろ好きな方だった。昨夜のこともあり、琥珀に対して不信感は強まっていたが、空飛に対しては、その分好度感が強くなっていた。最も、空飛の優しい性質がそう思わせるのだろう。多くの宦官は、ずる賢(がしこ)いそうだが空飛にはそんな面がなかった。

（まあ、それがなくても空飛はいい奴なのだが。）

「な、なに言っているんだ！？私がそんな事をするわけないだろう！？第一、なんで私なんだ！？」

もちろん星影は否定する。下手なことを言って彼らまで巻き込むわけにはいかない。

「本当に？私はこの話を聞いて、絶対に貴方度と思ったのですが・・・琥珀はどう思いますか？」

「そうだな。腕の立つ宦官といったら・・・やはり私も空飛と同じ意見だよ、林山。」

星影の返事を待つ二人。核心を突かれて黙り込んでしまう星影。

いくら二人が話の合う相手だといっても、真夜中に宿舎と離れたところに何故いたのか追求される事は目に見えていた。特に琥珀に関

しては、今は信用できない。なにより、またあの男に会うのは嫌だった。こんなことになるなら、助けないほうが良かったかもしれない。なんか怪しい人だったし。かとか言って、放っておくわけにもいかなかったしな・・・・。
困っている人を見過ごせない自分が憎い。だが、いつまでも黙っているわけにはいかなかった。

（仕方ない・・・誤魔化せるところまで誤魔化すしかない。）

「あ、あのね・・・。」

彼女が言いかけたその時だった。それまで真剣な面持ちだった二人が、声を立てて笑い始める。状況をつかめない星影は呆気にとられた。

「林山てば、なに真剣に困っているのですか。冗談に決まっているでしょ？」
「本気にするなんて君らしくないな。」

彼らの笑う姿に確信する。どうやら自分はからかわれたみたいだった。安堵した星影だったが次第に腹が立ってきた。

「二人共！悪ふざけが過ぎるぞ！なんだよ、二人して・・・。」

ぶつくさ言う彼女に二人は悪びれた様子もなく言った。

「ああ、すまない。あんまり君が慌てるからつい。」
「でも、さすがに賊を追い払うことなんて私達には無理です。なんせ皇居に侵入するぐらいの賊ですよ。宦官の私達には到底（とうてい）太刀打ちできません。」

説得力のある空飛の話に琥珀も頷く。そんな二人の姿に星影は安堵する。どうやら二人には、バレなかったようだった。このまま話の流れに沿っていったほうが身の為ね。余計なことは言わないようにしよう。危機を回避した星影は、彼らに合わせるように相づちを打つ。

「当たり前だよ！宦官が賊に敵うわけがないさ！きっと武官の人だったんじゃないかな。」

「しかし、ご本人は宦官だったとおっしゃっていましたよ。」

「もしかしたら、見間違えたのかもしれないな。暗闇で襲われたそうだからね。」

琥珀の言葉に頷く空飛を見て星影は内心喜んだ。

これでもう、私が本人だと思うこともないだろう。探すにしても、この広い後宮にいる何千の宦官を調べて見つけるなんてできるわけがない。きっと途中で疲れて諦めてしまうに違いない。

安心した星影だったが、ここで一つの疑問が残った。

あの襲われていた男は一体何者だろう・・・？男の自分（！？）を口説いてきた身分の高そうな人物。おそらく身分の高い人であろうが、あんな人がいるなんて世も末ね・・。どっちにせよ、もう自分には関係ない人だけど。

「そうですよね、林山？」

突然の空飛の声。どうやら自分に何か意見を求めたらしいが、話を聞いていなかった彼女は適当に話を合わせる。

「え、ああ。そうだよね。なあ、琥珀？」

ここは琥珀に話を振って内容を聞きだそう。しかし琥珀は、星影の問いに笑いながら、そうだね、と頷くだけだった。そうしているうちに再び空飛がしゃべりだす。

「でも本当にすごいですね、その人。」
「ああ。名も告げずに去っていくとは・・・まさに漢(おとこ)だな。」
「きっと、武芸の達人なんでしょうね！」

（黙り込んでいて、疑われるのもいやだし。）

どうやら、自分の活躍について語っていたらしい。あんまり関わりたくないけど・・・仕方ない、話に付き合うか。

「今時いるんだね～名前も告げずに去るなんてさ！」
「それだけじゃないんですよ、林山！その人、ご褒美まで断ったそうですよ！」
「その話なら、私も聞いたぞ。『褒美目当てで、人助けをしたのではありません。』と、申したそうだ。」
「なにそれ！？」

（私そんなこと言ってないよ！？なんか、噂話に尾ひれがついてない！？）

「驚きですよね～『あなた様をお助けするために、天より参りました。』とか言ったそうですし！」
「なんなのそれ！？」

（私は、星蓮を助けるために後宮に来ただけであって、変態を助けるために来たわけじゃない！！）

「世の中・・・いろんな人がいるんですね。」
「そうだな。その人みたいな、奇特な人もいるようだね。」
「・・・・なんとも言えない。」

（開いた口が、ふさがらないよ・・・。）

たった半日で、これほどまでに話が大きくなっていることに、驚きと呆れを感じる星影。

「とにかく、今朝からこの話題で持ちきりなんですよ！」
「他に話すことはないの？」
「ないから、話題になるんですよ。ここは後宮ですからね～どんな些細（ささい）なことでも、すぐに広まるんですよ。」
「空飛の言う通りだ。一部を除いては、ここは完全に隔離された場所。池の水面に石を落とした時の波紋（はもん）のごとく、伝わっていくんだよ。その石が大きければ大きいほど、その波紋も大きく広がっていくのさ。」

静かな口調で言う琥珀の視線は、星影へと向けられていた。

「そういうわけだから林山、君は特に気をつけた方がいいぞ。」
「どういう意味だ・・・琥珀？」
「池には、花もあれば、飾りの石もある。それにあたれば、波紋は形を変える。形を変えて、届かないはずの場所に、意外な形で伝わったりもするんだよ。」
「・・・つまり、真実が正しく伝わらないこともあると？」
「正解。」

短くいうと、にっこりと笑う琥珀。そして視線を、星影から空飛に

向ける。

「しかし、普段から話題が少ないと、こういった話はどうしても気になるね。空飛もなかなか、おしゃべりが好きなんじゃないかい？」

「え！いや・・・私はそんな～」

「実は私も好きなんだよ。ワクワクしないかい？同じ宦官で、あれだけの偉業（いぎょう）をやってのける宦官のことを？」

「え！？琥珀もそう思います！？」

「ちょっと、二人共・・・！」

「どんな人でしょうね～賊を倒した宦官！」

「ああ、一目会ってみたいね。」

そう言って、楽しそうに話し始める空飛と琥珀。二人の耳に、星影の言葉が届くことはなかった。それどころか、

「林山もそう思いますよね！かっこいいと思いませんか！？」

同意を求められる始末。

「・・・うん、そうだね。」

面倒くさくなった星影は、乾いた笑みを浮かべる。正直、二人の言葉に、一喜一憂しているのが馬鹿馬鹿しくなったのだ。

（なんか馬鹿らしい・・・。適当に相づちをうてばいいか。）

そう結論付けると、盛り上がっている二人の会話の輪に加わる星影。

「一人で、数十人の賊を倒してお救いするなんて・・・武官顔負けですね！」

「しかも、見返りを要求するどころか断るとは・・・よほどの御仁だろうな。」
「そうそう！私達には真似できない、立派な人じゃないか～！？」
「立派な方ですよ！皇帝陛下をお助けしたんですから！」
「ああ、見事に皇帝陛下をお助けしたのだからな。」
「そうそう！皇帝陛下をお助けするなん・・・・・・」

投げやりで言っていた星影の言葉が止まる。否、空飛と琥珀が言ったことと自分が言った言葉によって、声が出なくなったと言うほうが正しいだろう。

・・・こうていへいか？

へいか？ヘイカ？平価？兵科？幣か？兵か？塀か？丙か？兵家？兵火？陛下？・・・・・・

陛下――――――――――！？

「ちょ、ちょっと！陛下って、まさか・・・皇帝陛下の――――！！」

星影が声を上げたのと、扉が音を立てて開いたのはほぼ同時だった。三人が扉に目をやると、そこには、昨夜星影が助けた男が立っていた。

「げっ！？あの時のぉ！！？」

「おお！やっと見つけたぞぉ！！」

男は嬉しそうに星影に近づいてきた。肩で息をしているところを見ると走ってきたのが良くわかる。

「お、お待ちください！！」

その後から、同じく息を切らせながら現上司である黄藩（こうはん）や楊律明（ようりつめい）、呂文京（りょぶんきょう）といった他の宦官達が現れた。大半は見慣れない宦官だったが、服装からして高級宦官であることはわかる。皆、肩で息をしていることから、やはり彼らも走ってきたのだろう。その様子に混乱する星影一同。男はそんな星影達の様子に気づきもせず、黄藩達に星影を見せびらかすようにその肩を抱きながら言った。

「間違いない！この者だ！朕（ちん）を助けた宦官は！！」

「えええええ！！！」

星影を含めた全員が、大きな叫び声を上げる。いっせいに、その場にいる者達の視線が星影一人にふり注ぐ。その視線を目の当たりにして、彼女自身も混乱する。

何故？どうして私の居場所がわかったの！？何千にもいる宦官の中

から、どうやって私を探し当てたの!?それも下っ端の宦官をたった一日・・・いや、半日で?ていうか、この人いったい・・?

(自分のことを“朕”なんて言って・・・。)

戸惑いつつも、なんとなく横目で琥珀と名乗る郭伯と空飛の方を見る。星影が見た彼らの表情からは、驚愕(きょうがく)とも畏怖(いふ)とも狂喜(きょうき)とも取れるなんともいえない顔をしていた。しかし自分達を見るその目は生き生きとしていた。

「安林山。」

突然、甲高い声で今の自分の名を呼ばれて星影は我に返る。声の主は上司である宦官の黄藩だった。

「お前に、尋ねたいことがあります。もう知っているとは思いますが、昨夜東の庭にて、陛下のお命を狙う逆賊が侵入しました。その話はあなたも聞いていますね?」

はい、と星影は返事をする。

やはり昨日の男たちは賊だったのね。あれだけの強固な後宮の警備をかいくぐって忍び込んだのだから、まさかとは思っていたのだけど。

いや、それよりも――

「あ、あの・・・『陛下』って・・・?」

自分が助けたのは、目の前にいる男。昨夜とは打って変わって身なりを整えている男。しかもよくよく見れば、その服装はこの国でただ1人しか出来ない立派な姿をしていた。龍の絵柄が施された衣装、唾のついた見事な帽子、豪華な金細工を施した剣、質の良い玉・・・。

（まさか――――!?）

星影の中で認めたく会い事実がまとまる。
私が助けたのは目の前にいる男だけど・・・！

「幸い陛下に大事はありませんでしたが、率直（そっちょく）に言います。陛下をお助けしたのはお前ですね?」

ヘイカヲオタスケシタノハオマエデスネ?

「え・・・?」

私が助けたのはここにいる怪しい趣味を持つ、皇族らしいこの男なんですけど。口ごもる星影に黄藩は話を続ける。

「陛下がおっしゃるには、自分を助けたのはお前だと申しておられるのですぞ。」

「そんな!なにかのお間違いでしょう!?」

そう、自分が助けたのは、ここにいる変な男。間違っても漢帝国の皇帝があんな変態なわけがない。いや、皇帝陛下であってほしくない！

「馬鹿を申せ！その方、朕が嘘をついていると申すのか？」

途端（とたん）に、耳元で怒鳴りつけられた。男が不機嫌そうに自分を睨んでいた。ただでさえわけがわからない状況のなか、耳元で怒鳴られた星影は苛立ちのため自然と口調が荒くなる。

「な、いきなり耳元で大声を出すな！！第一、どうしてあなたにそんな事を言われなければならないのですか？関係ないでしょう！？」

言った瞬間、罵声とも悲鳴とも近い声が響く。すかさず裾を黄藩に引っ張られる。

「安林山！！なんと言う恐れ多いことを！この無礼者が！！まったくお主と言うやつは！喧嘩はするわ、言葉遣いは汚いわ、目上を敬わないわ、挙句の果てには夜中に無断で後宮を徘徊するわ、本当に宦官にあるまじきことばかりして！！自重（じちょう）しなさい！！！」

真っ赤な顔をして怒る黄藩。それに星影が反論しようとした矢先、今度は後ろに引っ張られる。

「琥珀!?空飛!?」

見るとそこには、顔色を変えた琥珀と空飛の姿があった。顔を引きつらせいた琥珀と顔面蒼白（がんめんそうはく）の空飛がいた。

「林山!なんて失礼なことを!!君は自分がなにを言っているのがわかっているのか!?」

「そうですよ!林山、なんてことを言っているんですか!不謹慎（ふきんしん）です!早く謝ってください!!」

何故か中腰の状態で必死に訴えてくる二人。彼らだけではない。

「早く謝りなさいよ!!ぐずぐずしない!!」

「そうよ!この無神経男!!」

「いくら朝だからって寝ぼけすぎだわ!!」

周りの者たちも必死に訴える・・・というよりは、口々に非難し始めた。

（一体どうなっているの!?何故私が、怒られなきゃいけないの!?）

ますます混乱する星影に追い討ちをかけたのは。例の男の一言だった。

「皆の者落ち着け!朕は怒ってはおらん。仮にも朕の恩人であるぞ。」

「だから、あんた一体なんなんだよ!?偉そうなことばっかり言って!何様のつもりだ・・・?」
「な・・お主朕が誰か知らんのか!?」
半場混乱したような声をだす男。半場怒りぎみに答える星影。
「ああ知らないよ!!琥珀!空飛!いったい誰なのんだ?このおっさんは!?」
「おっ、おっさん!!?」
「り、林山!?ほ、ほほほほ本当にわからないの!?」
「知るか!こんな怪しいおっさん!!」
彼女の一言に、とうとう黄藩が切れた。ツカツカと、大またで星影の前まで来る。そして男に一礼すると、思いっきり星影の耳をつねあげた。
「痛ったぁ!!ちょ、黄藩様!?」
「林山!!!分からないと言うなら教えてあげましょう!!!ここにいらっしゃるお方こそ、漢王朝第七代皇帝陛下、劉徹(りゅうてつ)様にあらせられるぞ!!!!控(ひか)えなさぁ――――――い!!!!この無礼者がぁぁぁ!!!!!!」
この罵声に近い声に、全員が息を呑む。

・・・へいか？ヘイカ？平価？兵科？幣か？兵か？塀か？丙か？兵家？兵火？陛下？・・・・・・

陛下――――――――――！？

「えええ！？あ、あなた様が皇帝陛下ぁぁぁ――――――――！！？」

今度は部屋に星影の叫び声が響き渡った。

「・・・・知らなかったのか？」

小声で尋ねる琥珀に星影は、うん、と答える。

「なんということだ・・・。」

「今ごろ気づいたの？林山・・・。」

思わず呆れる琥珀と空飛。

「あ、あなたって人は・・・。」

星影の耳をつねあげていた黄藩の手が離れる。そのまま尻餅（しりもち）をつく。

呆れかえったのは彼らだけではなかった。それは周りもみんな呆気にとられて固まっていた。

最も本人は半場放心状態だったのだが。まさか自分が助けた変な男こそ、漢帝国始まって以来の名君・劉徹様、皇帝陛下だったとは・・・！！目だけで相手を見ると、彼もまた呆れた表情で彼女を見ていた。

【陛下に対する無礼は不越罪】＝つまり、三族皆殺し。

頭の中にその言葉が浮かぶ。自分が言った言葉は間違いなく陛下を怒らせたであろう。

・・・星蓮ごめんなさい。お姉ちゃん、あなたを後宮から助けられないかもしれない。
林山ごめんなさい。貴方のふりをしたことをご両親に説明することができなさそうにないわ。どうやら私、正体がばれるよりも先に寿命が尽きるみたいです。短気で有名な皇帝に無礼を働きました。心残りは貴方たち2人を引き合わせることができなかったこと。

（・・ゴメンナサイ。そして、さようなら・・・・！！）

ただ一人星影だけが、心の中で懺悔（ざんげ）していた。

「あ！」

小さな音が響く。

「何もしていないのに割れた・・・？」

割れたのは玉（ぎょく）けつだった。それも最近買ったばかりの新品。婚約の記念にと星影が贈ってくれたものの１つだった。林山の脳裏に不安がよぎる。

「星影の奴・・なにか問題起こしてないといいけどな。」

皇居がある方向を見ながら本物の林山は大きくため息をついた。

第十三話　嫌なツケがまわってくる（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
オリジナルで書いてる点も多いので、ご了承ください（大汗）

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、
という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてください（苦笑）
ヘタレで、すみません。。。

第十四話　命がけの謁見会（1）

「昨夜はお前のおかげで助かったぞ！！」

上機嫌に目の前にいる人物が言う。正確に言えば、星影が林山のフリをしてここに来る原因となった人物。あれから奇跡的に一命を取り留めた安林山（あんりんざん）こと劉星影（りゅうせいえい）。元々相手は、怒ってはいなかった。面白い奴だ、とかえって気に入られてしまったらしい。幸い正体もバレずにすんだのだが、強制的に文・武官僚の集まっている場所へと連れてこられたのだった。偶然にも自分が助けた人物こそ、諸悪（しょあく）の根源（こんげん）ともいえる漢王朝第七代皇帝・劉徹（りゅうてつ）その人だった。

「あの時はもう駄目かと思い、何度庭に行ったことを後悔したことか。」

本人が言うには、昨夜いつものように自分の妻の一人の部屋に行った後、急に庭にある桃の木を見たくなったのだと言う。そうなると気になって妻の横で寝ていられなくなり、護衛もつけずに一人で桃の木がある東の庭『桃花園』まで行ったらしい。幸い途中で宮廷兵に会い庭まで供をさせて、着くと一人で桃の木を眺めていたのだが、いきなりそこを覆面の男達に襲われたと言うのだ。その場にいた宮廷兵はすべてやられ、もはやこれまでかと思った時、星影が現れて男達を蹴散（けち）らしたおかげで助かったというのだった。

「礼をしようにも、お主が逃げたおかげで礼もできなかった。おまけに名前も分からない。まあ、服装からして下級宦官だと察しがついたから見つけることができたのだがな。」

嬉しそうに話す劉徹に星影は、余計なことを、と内心悪態をついていた。あれほどまでに会いたかった皇帝陛下に会えたのは良かったが、星影からすれば、最悪の出会いだった。あんな会い方をするくらいなら、会わない方がマシであった。

「安林山、と言ったな。面を上げろ。顔をよく見ておきたい。」

仕方なく言われたまま顔をあげれば、一同の視線が自分に集まる。

陛下の前で面を上げる事は、大変名誉なことなのだが今はそれどころではない。後宮ではできるだけ目立たないようにしてきたつもりの星影にとっては、陛下の目に留まった事は良い意味でも悪い意味でも正体がばれる可能性がないとは言い切れないのだ。

しばらく星影を眺めていた皇帝だったが控えていた黄藩に声をかける。

「しかし、黄藩が言ったようなやんちゃには見えないのう。」

（・・・やんちゃ!?私が!?）

思わず黄藩の方を見ると彼は顔をしかめつつ言った。

「ええ。そりゃもう!!入って早々に傷害事件をおこすわ、目上には従わないわ、己の武芸の腕をひけらかすで・・・・・かなりの非常識者。まったく持って宦官らしくありません!!」

（この男・・・・そこまで私を嫌うのか?）

「ほお・・・そんなにひどいのか?」

今度はその横にいる楊律明（ようりつめい）や呂文京（りょぶんきょう）に聞いていた。二人が一瞬こちらを見て笑う。

（あの二人・・・私のこと嫌っているからな。この分じゃ、私についてあることないこと陛下に言いふらすだろうな。）

「はい、本当に困っております。お話すればきりがございません。」
「ほう、そんなにひどいのか？話してみよ。」
「でも・・・。」

わざとらしく口ごもる文京に星影は嫌気（いやけ）が差す。

「話によっては何とかしてやってもよい。言いたいことがある者は、話すことを許す。」

「よろしいのですか？では・・・皆、皇帝陛下様のお許しが出ましたよ！」

いっせいに、数十人近くが一歩前に出る。

「なっ！？」

（ちょっと待て！私はそんなに大勢やってないわよ！？）

そのなかには同じ新人の宦官達の姿もあった。ただ彼らの場合は、星影を困らせるつもりのようだった。おそらく例の二人の差し金だろう。

「林山殿は本当に乱暴な方です。意味もなく私達を殴りつけ・・・

！」

星影の予想通り楊律明・呂文京を中心に、あの日星影にやられた取り巻きや彼女を嫌っている宦官たちまでここぞとばかりに話し始める。星影は、その様子に怒りを感じなかった。むしろ呆れたと言っていい。冷めた目で彼らを見つめる。

（こういう輩（やから）がいるから、いつまでたっても宦官は悪く言われ続けるのだろう。）

それはさておき、楊律明・呂文京達がそう言ってくれることは星影にとって都合が良かった。下手に気に入られるよりはましだから。そんなことにでもなってしまえば、星蓮を探し出し、連れ出すことができなくなる。なおも、自分の素行について悪く話し続ける楊律明・呂文京。ただ一人、黄藩だけは黙っていた。

（遠慮せずに好きなこと言っていいのに。あなただって私のことが気に入らないんじゃなかったのか？さっきまで甲高いキーキー叫んでたじゃないか・・・！？）

「・・・もうそれぐらいになさい。」

そうそう、そんな風に甲高い声で・・・・！？

「え？」

「林山の事はそのくらいになさい。」

黄藩の発した言葉は、星影を悪く言う言葉でも、楊律明・呂文京達に同調する言葉でも、陛下に媚（こ）びる言葉でもなかった。黄藩の発し

た言葉は、

「いくら陛下のお許しがあったからといって、いくらなんでも言いすぎですよ。」

彼らをいさめる言葉だった。小さく息を吸うと再度言った。

「陛下のご気分を害したらどうするんですか？」

黄藩の言葉通り、その話を聞いていた劉徹の顔はかなり不機嫌そうなものだった。

どうやら楊律明・呂文京達の話を信じているみたいだな・・・。この分だと、適当にお礼かなにか言われて返されるだろう。

楊律明・呂文京達は嫌がらせのつもりで言っているのだろうが、星影にとっては都合が良かった。そう星影が思った時だった。ふいに劉徹と目が合った。彼は意味ありげに星影を見ると口の端を少しあげて笑う。

その瞬間、星影の体に戦慄が走る。同時に辺りに低い声が響いた。

「・・・・首を刎ねるか？」

思わず体が固まる。

（待ってよ・・・！？それって私に言っているの！！？）

いきなりの死罪宣告に星影は動揺する。その様子を見て、声高らかに彼らは言った。

「さすが皇帝陛下様！ご明瞭なご判断。」

「後宮の風紀を乱すものにはけじめが必要ですものね。」

（お前らぁ――――！そんなに私が憎いか！？）

口々に賞賛する楊律明・呂文京達だったが、

「そんなに自分達が死ぬのが嬉しいか？」

「ええ！そりゃあ・・・・え？」

その言葉を最後に、辺りが静まり返る。それは彼ら一同に向けられたものだった。恐る恐る楊律明が尋ねる。

「そ、それはその・・・安林山のことではないのですか？」

「朕がいつ『林山を殺す』と、言った？耳障りな烏合（うごう）の衆（しゅう）を殺せ・・・とは言ったぞ。」

涼しい顔をして劉徹は言った。その目には、すでに問いかけた楊律明の姿は映っていないようだった。

なんだか・・・違う意味で、風向きがやばくなっているような・・・。

「これ以上つまらん嘘を風潮するならば、城壁にその首をさらすぞ。

」

「そ、そんな！う、嘘なんて・・・・。」

慌てる一同を冷ややかな視線で劉徹は見る。
彼のその表情は恐怖を感じるのに十分なものだった。

「嘘であろう。もしお前らの言うことが本当ならば、林山が弁明するはずであろう？それなのに弁明するどころか、呆れたように眺めるだけだ。他のことを考えながら。」

目線は彼らに注いだままで、話す皇帝に星影は視線を離せないでいた。

陛下は三人を見ながらずっと話していた。自分を見たのはほんの一瞬のはず。その一瞬の間に、自分の仕草の細かいところまで見たというのか？噂通りと言うか、さすがと言うか、なかなかあなどり難いお方だ・・・！！

しかし、感心している場合ではなかった。

「貴様ら、朕の命の恩人を愚弄（ぐろう）するつもりか？」

「そんな！めっそうもありません！！」

楊律明・呂文京達の寿命が縮みつつあるのは間違いなかった。黙って話を聞いていた星影だったが、劉徹の表情が厳しくなるにつれ嫌な予感がしていた。最初に会った時は、怪しい変な男だと思っていたが・・・。

・・・噂では今の今上、皇帝陛下は、言葉遣いが悪いと言う理由だけで人を殺すような恐ろしいお方だというが。まさか本当に・・・・・・!!

「お前らのような輩の顔など、一秒たりとも見たくない!!オイ誰か!この者達の首を刎ねろ!!」

予感的中!!

途端に命乞いを始める一同。

「お許しください!どうか命ばかりは・・・!」
「お助けください、皇帝陛下様!」

「黙れ!早く殺せ!」

皇帝の言葉に、宦官達の悲鳴が響き渡る。そして、皇帝陛下の命令に驚いたのは彼らだけではなかった。

(ちょっと待って!ここで死なれたら私のせい?それはいくらなんでも・・・!!)

黙って、その状況を静観していた星影だった。

自分を落としいれようとした、楊律明・呂文京達のことは大嫌いだった。
でも、自分が原因で誰かが死ぬのはイヤだった。
自分のせいで、人が死ぬのはイヤ・・・。
そんな星影の気持ちは、言葉となって発せられた。

「お待ちください！！」

嫌いだからという理由で、見殺しには出来ない。

「殺さないで下さい！！」

星影の声に、皇帝をはじめとする全員が彼女を見る。

「お待ちください、皇帝陛下！！どうか呂様達を殺さないでください！！」

「林山！？」

彼らの命乞いだった。命乞いをしていた本人達はもとより、劉徹もびっくりしたようにこちらを見る。

「・・・どういうつもりだ、林山？朕に逆らう気か？」

さっきとは打って変わった、きつい口調で星影に問いただす。

「いいえ。彼らは私のことを言っただけで、皇帝陛下の悪く言ったわけではありません！気分を害されたのでしたら、それは私の責任でもあります。」

「ほお、朕に逆らってまで自分を悪く言った者を助けるのか？こいつらのかわりに首が刎ねられてもいいと？」

席から立ち上がり自分を見据えたまま睨みつける。

「それで、貴方様の気がすむのでしたら。」

即答する星影に周りはざわめく。気にせず星影は話を続ける。

「もし、皇帝陛下が私に恩義を感じてくださるならば、恩賞は彼らの命で結構です。どうか、血なまぐさいことをなさらないでください。」

しばらくの間見つめあう星影と皇帝。鋭い目つきをしていた皇帝だったが、うっすらと笑うと彼女に告げた。

「・・・・いいだろう。そこにいる下衆（げす）共の命は助けよう。」

皇帝の言葉に、安殿、という声が響く。

「お前達、林山に感謝しろよ。」

「は、はい！林山殿ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「感謝します！！」

口々に言う彼らに、星影は複雑な気分になった。気恥ずかしいような呆れのような・・・とにかく、あまりいい気分ではなかった。

「いや、もういいから・・・。」

それだけ言ってあいまいに笑った。

（私に謝るぐらいなら、これを機会に弱い者いじめをしないと誓ってくれた方が嬉しいんだがな・・・。）

そんな状況をもてあましている星影の様子に劉徹が言った。

「おい！礼はもうよいから、さっさと消えろ！これ以上、その甲高い声を聞いていたら殺したくなる！！」

皇帝の言葉に楊律明達は小さく叫ぶ。

「も、申し訳ありません！い、今すぐ出て行きますので、」

「い、命ばかりはお助けを！！」

「もういい、行け！」

彼らは我先にと逃げるように部屋から出て行く。その後ろ姿はなんとも情けないものだった。

「・・・情けない。」

「まったくだ！なんと軟弱な！！」

独り言のつもりで言ったのだが、星影の声は皇帝に聞こえたらしい。口をふさいだが遅かった。相手はニヤニヤしながら自分を見ていた。

「ハハハ！本当に面白い奴だ！あんなクズを助けるとは。」
「お、恐れ入ります。」
「まあ、そういうところがいいのだがな・・・。しかし林山よ、朕に逆らったのだからそれ相応の覚悟に答えてもらうぞ。」
意地悪く笑う相手に、彼女の精神は崖(がけ)っぷちに立たされる。
私をどうするの？やっぱり斬首？それとも火責めの刑？水攻めの刑？生き埋めの刑？それとも・・・逆さ吊りの刑？あ、もし逆さ吊りだったら、私の死体は林山に持って帰ってもらおう。
危機感を抱いているのだが、気持ち的にはどこか楽観的に彼女は考えていた。そんな星影の考えなど知ってかしらずか、皇帝は楽しそうな口調で言った。
「林山、そう硬くなるな。心配しなくても命をとったりせん。」
じゃあ牢屋に幽閉されるの？
どうしても悪い方へと考えてしまう星影。不安な彼女をよそに皇帝は言った。
「朕の出す、簡単な条件に従ってもらうだけだ。」
「条件？」
思わず聞き返した星影は慌てて口をふさぐ。
後宮における規則の一つに、皇帝陛下の許しがあるまで言葉を発してはいけないという決まりがあるのだが・・・。

（しまった！うっかり声をかけちゃったよ・・・！！）

自分の失態に焦る星影に対して、その様子を、目を細めて眺める皇帝。

「気にせずとも良い。朕に気にせず話したいことを言ってよいぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

「さて、話がそれてしまったが、お前には条件をのんでもらうぞ。」

残酷な笑みを浮かべる皇帝。

やはり私が彼らの身代わりに首を刎ねられるの？やばい！そんなことになったら、星蓮は助けられなくなるし、林山にだって迷惑をかけることは目に見えている。こんなことになるなら、勢いに任せて助けるんじゃなかった。

今さらながら、自分の性格を恨む星影。その彼女にとって皇帝陛下の言った言葉は、星影を驚かせるのに十分だった。

「朕は今まで多くの宦官を見てきたが、お前のような面白い奴は初めてだ。お主のことが気に入った。林山よ、今日からお主は朕付きの宦官として仕えよ！」

「「ええ！！？」」

突然のことに星影は声を上げる。否、彼女ともう一人。

「陛下本気でございますか！？」

そう言ったのは、劉徹のすぐ側にいた妖艶な美しさを漂わせる男だった。

第十四話　命がけの謁見会（1）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、
という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてください（苦笑）
ヘタレで、すみません。。。

第十五話　命がけの謁見会（2）

声を上げた人物に、星影は視線を向ける。その男は、皇帝の側に素早く駆け寄った。服装からして彼も宦官らしかった。

「うむ、延年いかがした？」

延年と呼ばれた男は、すぐさま皇帝の真横まで寄ると、なよなよとした声で話し出した。

「陛下、お考え直しください！こんなどこの馬の骨ともわからない下賤の男を・・・軽々しくお側においていいのですか？それこそ、世間のいい笑いものにされてしまいます！！」

星影にとって、この男の話はともかく『下賤』と言う言い方が頭にきた。延年の言葉に皇帝は怒るかと思えば、先ほどとは打って変わって困ったような顔で見るだけだった。それはまるで、駄々（だだ）をこねる子供を見る母親のような顔つきだった。

「だからなんじゃ延年？お前はなにが不満だ？」

「だっておかしいじゃありませんか？」

優しく尋ねる劉徹に、延年は顔を大げさにしかめると、星影を汚いものでも見るような目つきで見ながら言った。

「陛下があの男とお会いしたのは、真夜中の、それも桃の木のある東の庭『桃花園』でございますよね？あそこは、『下級宦官は立ち入り禁止』のはず・・・この男が入れるわけがないじゃないですか

!?入っただけでも罪になるのですよ!!おまけにあんな時間にいること自体がおかしな話ではありませんか!?」

延年の言葉に周りがざわめき立つ。

星影も星影で、『下級宦官は立ち入り禁止』と言う言葉に凍りつく。

「そういえばそうだったな。林山、どういうことだ?」

延年の言葉に、思い出したような口ぶりで、劉徹は星影に尋ねた。
その言葉は、星影を動揺させるのにも十分だった。

まずい・・・!ここで正体がばれたりでもしたら、自分はおろか妹の星蓮や義弟の林山の首まで飛びかねない。

本日三度目の心臓に悪い事態。

(・・・仕方がない、できるところまでごまかしてみよう。)

「恐れながら申し上げます。確かに、そちらのお方がお疑いになるのも無理はありません。実は・・・その・・・まことに言いにくいのですが、厠(かわや)に行く途中で道に迷ってしまいまして・・・・・・。」

「道に迷った?」

「はい。お恥ずかしいことに、こちらにお仕えしてまだ間がないこともありまして。帰り道を探しておりますうちにわからなくなってしまい・・・・。」

「しかし・・・・『桃花園』の周りには普段宮廷兵がいるであろう?」

いぶかしそうに言う劉徹に、星影は遠慮がちに話を勧める。

「はい、私もそう聞いていました。いざとなれば兵の方々にお聞きしようと持っていたのですが・・・それが昨夜はいらっしゃりませんでした。『桃花園』の周りに兵の方がいらっしゃるのは存じておりましたので、おかしいと思い、しばらくそこにいたのです。そしたら・・・」

少しの間を置いて、わざと険しい表情を作りながら彼女は言った。

「叫び声のような、断末魔のような声が聞こえてまいりまして。これはただ事ではないと思い・・・。」

「駆けつけたと？」

星影が頷くと劉徹は、なるほど、そういうことか、と納得したかのように頷いた。それは周りも同じようだった。

星影が話した内容はもちろん嘘である。特に、兵の事に関しては警備していたこと自体知らなかったが、このさい仕方ないと割り切って嘘をついたのだ。妹と義弟と一族のためと思う心があったからこそ、これほどのホラ話ができたのである。

「そういうことなら、納得がいく。なあ、心配性宦官の李延年（りえいねん）よ。」

皇帝が延年と呼んだ男に再度問いかける。

（李延年・・・それがこの男の名前か。）

「しかし、陛下・・・！」

「我々も延年殿の意見に賛成でございます、陛下。」

延年とは別の声がする方を見ると、そこには顔をしかめた文官一同の姿があった。

「なんじゃ、お前らまでなんだと言うのだ？」

延年の時とは打って変わって、あからさまに不機嫌さを露(あら)わにする劉徹。それに対して気にせず話を続ける文官達。

「この男の話を聞く限り、どうも作ったような話に感じます。このことにしても、持ち場と関係ないことを話すかどうか・・・どうなのかな、黄藩殿？」

話を振られた黄藩は、ばつの悪そうに星影を見ながら、

「・・・・いくら私が彼の上司と言いましても、間接的な立場でして・・・直接的な事は担当の者に任せていますし。偽りは申していません、陛下。」

落ち着いた口調で言う黄藩。

「しかし陛下、こういうことはしっかりと確認しておきませんと。」

（なんかやばい展開になってないか？）

危機感を感じて、皇帝を見る星影。周りの意見に後押しされ、劉徹が考え込みだした時だった。

「恐れながら・・・私も延年殿や文官方の意見に賛成です。」

はっきりとした声が響く。声の方を見ると武官の席から一人の男が歩み出る。それを見た瞬間、皇帝の表情が変わった。

「勇武!?めずらしいな。お主が文官達と意見をあわせるとは。あれほど文官連中を嫌っているお前が!?」

珍しいと言った感じの声を出しながら皇帝は彼を見る。

(ゆうぶ・・・どこかで聞いたことがあるような。ゆうぶ、ユウブ・・・勇武!?)

しばらく考えていた星影はハッとする。

(もしや・・・勇武と言うのは――――!?)

「お戯れを。私は文官が嫌いなのではなく、文官方の陛下に対する考え方が嫌いなだけです。媚びへつらいしかしない方々でも、たまには良いことをおっしゃるのですな?」

彼の言葉に文官たちは、無礼な、と口々に批判し始める。劉徹の方はそれを咎めるどころか楽しそうに眺めている。周りの状況とはよそに、星影の心には疑惑が募っていた。

(この男が、林山の言っていた男なのだろうか?)

「媚びへつらいとは・・・郭将軍!我々の忠義を侮辱する気ですか

！？」

「あなた方の忠義は書に記すこと。我らの忠義は武で示すこと。楽でいいですな。」

「そうやっていつも人を見下すような言い方・・・！礼に反するでしょう！？いくら我らのことが気に入らないとは言え・・・！！」

なんか子供の喧嘩みたいになってきたな。

文武官のやり取りを見ながら星影はそう思った。

「まさか！気に入らないのはあなた方だろう。これ以上回りくどい言い方は聞きたくない。陛下、文官方のわかりづらい話をまとめますと、文官の方は、今の状況から考えてその男が賊の一味である可能性があるといいたいいんですよ。」

「では、この者が賊だと言いたいのか？勇武？」

「ですから、それは我々の考えです！怪しいと思いませんか！？」

「そうです！きっと賊の一味です！」

「賊ぅ！？」

家臣達の言葉に、星影は思わず声を上がる。

いくらなんでも、賊はないでしょう！？仮にも皇帝を助けたのに！？

「ちょ、ちょっと待ってください！いくらなんでもそれは――」

そう言って、声を上げた時だった。星影と郭将軍の視線が合う。

（――――いやな目・・・！）

それが正直な感想だった。人を値踏みするようなその視線。そらせばよかったのだが、それではまるで自分が負けるような気がした。視線をそらすことなく、星影は睨むように相手を見続けた。相手はそんな星影に、口元だけで笑って見せた。

「ほれみろ！林山も違うと言っているではないか。」
「当然です！やましいことを正直に言うようでしたら、役所など必要ありません！！」
「ではなんだ！ここにいる安林山を犯人として調べろと言いたいのか！？」

星影達の様子を知らない皇帝と文官達は激論を交わすのに夢中だった。そんな状況の中、星影も郭将軍も視線をそらさないでお互いを見ていたのだが、

「しかし・・・仮にも陛下のお命を守ったのも事実。疑うのも失礼かと思います。」

一瞬星影をきつく睨んだ直後に、郭将軍が発した言葉だった。思わず星影は目を見開く。

（もしかして私を庇ってくれたの？）

相手が、星蓮を連れ去った郭勇武本人であるかことは間違いなさそうだった。でも、直接顔を見たわけではないのでわからない。

「さすがは郭将軍だ！いいことを言うではないか！？」
「そうですとも。ここは恩賞を与えて称えるべきです。」

「だいたい、朕の命を助けたものが賊の一味であるという考えが馬鹿げている！」

（助かった・・・・？）

郭将軍の言動は、多少癪に障ったが、怪しまれて身元を調べられると言い出されるよりましだった。しかし、安堵するにはまだ早かった。

「陛下！なにも我々は陛下のためを思い言っていることです！お側に置かれるのは陛下の自由ですが、せめて身元をしっかり確認してからでないと。」

（余計なことを言うな！！）

思わず顔を文官達の方に視線を向ける星影。そして冷や汗をかく。彼らが全員、顔を真っ赤にして怒っていた。郭将軍の一言で、その場が納まるかのように見えたがそうでもなかった。逆に文官たちを怒らせてしまったらしい。

「陛下！我らは陛下のために申しているんです！！」

「おい、少し落ち着かんか！」

「陛下も、少し冷静にお考えください！」

「そうです！この者と賊の関係について十分に調べたうえでないと・・・！」

再開された激論に、再び窮地に陥り困りはてる星影。ふいに、視線を感じる。それも武官の席のほうから。

（まさか・・・・？）

恐る恐る、視線を感じた方向を見るとあの男の姿があった。郭勇武が堂々とこちらを見ていた。それも、周りが気づくぐらいに無遠慮で見ている。手を口元まで持っていくと考えるような仕草をしながら言った。

「安林山・・・殿でしたかな?君はある男によく似ている。」

「ある男?」

郭将軍の意味ありげな物言いに星影は聞き返す。

「ああ、君と同じ名と性別を持つ男なのだが・・・・。」

「私と同じ・・・?」

彼の言葉に思い当たるふしがあった。

(まさか林山のことか?)

星影は目だけで彼を見る。

「ああ。別に外見が似ていると言うわけではないんだが・・・。」

「・・・どういったお方なのでしょうか?」

「聞きたいかね?」

相手の言葉に頷くと、郭将軍は含(ふく)み笑いのまま話しはじめた。

「そいつは、私が藍田(らんでん)で見かけた、どうしようもない優柔不断な男だ。」

この一言で星影は確信する。

間違いない・・・この男が星蓮を強引に奪ったうえに、林山に卑怯な手を使い、父上に暴力を奮い、母を悲しませ、家をメチャクチャに破壊した男！

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。

奴が言う『優柔不断な男』とは？何故あんなにまじめで誠実な男がそんな言い方をされなきゃいけないのだ！？まあ・・・確かに少し優しすぎるところが玉に傷だけど。

そんな星影の気持ちを知らない郭将軍は話を続ける。

「郭将軍でしたか・・・？その、私と同姓同名の方は将軍とはどのようなご関係で？」

星影の質問に、彼は微笑しながら答える。

「関係？たいした関係ではない。あんな女から女に渡り歩くような輩は。」

「女から女に渡り歩く？」

「ああ。その男はな、親が決めた婚約者が気に入らず、他の娘と婚約したのだが、それだけでは飽き足らなかったのか。さらにまた他の女にも手を出していたんだ。」

「・・・それは本当ですか？」

「本当だ。」

（――――――――――――――ふざけるな！！）

よくもそんな大嘘が言えたものだな！？

彼女の心に黒いものが充満していく。

お前のせいで、私達はなにもかもメチャクチャになったんだ！！
お前のせいで、私達はしなくて良い苦労と嫌な思いをしたんだ！！
それだけではあき足らず、今度は林山を愚弄する気か！！？

「たいした武芸能でもないくせに、私に挑んできたのだからな。」

それは貴様が、星蓮を無理やり連れて行こうとしたからだろう！？

「それで、けっきょく勝負はしたのか？」

二人の話を聞いていた劉徹が尋ねる。

「ええ、もちろんですとも陛下。勝負はむろん私が勝ちました。」
「それはそうでしょう。将軍と一般人では相手になりませんからね。」

勝つだろうよ、目潰しなどという卑怯な手段を使えばな。

「その男も馬鹿ですね。なんでまた将軍に喧嘩を？」

彼と同じ武官の一人が尋ねた。

「さあ・・・少々腕がたつからと調子に乗っていたんでしょう。大商家の息子かなんだか知りませんが、迷惑な話です。」

（・・・迷惑しているのは私達だ・・・！！）

「まあ、その母親も相当な奇形な女らしく、父親もすっかり気を抜かれてしまっているらしですからな。」

「それはなんとも、恐ろしい女子じゃな。しかし男の方も情けない。」

「本当に。藍田の商人たちは少々軟弱すぎます。おまけに謝ればなんでも許されるという愚かさがありますし。」

（愚か・・・だと？お前に、お前にそれを言う権利があるのか！？）

感情を抑えていた星影だったが――――。

「林山殿。そう怖い顔をなさるな。別に貴殿のことを申しているわけではない。」

郭将軍の言葉に、星影は目を見開く。残酷さを感じさせる笑みで、星影に語りかける。

「藍田に住む安林山と、その周りの者達の醜さを話しているだけだ。」

郭将軍の一言に、ついに星影の我慢は限界を超えた。

林山のことを侮辱したばかりか・・・父上、母上たち皆を愚弄するとは！！

そもそもお前が星蓮を連れて行かなければそんなことにはならなかったものを!!
ここに来る原因となった一番の諸悪(しょあく)の根源(こんげん)め!!
お前のせいで星蓮は・・・許せない!!
ぶっ殺してやる!ぶっ殺して――

「ぶっ――――!」

「――――――――――もうそのくらいにしないか!!」

星影の声とは違う、低めの声があたりに響く。それも陛下のいる上座の近くからだった。

「仲卿!?」
「衛青将軍!」

陛下からは『仲卿』、家臣達から『衛青将軍』と呼ばれた男は、白の武具を身にまとった人物だった。背が高く鎧を着ているのにもかかわらず、筋肉質である事は見てとれた。そして見る限り、陛下よりは若い男性だった。

第十五話　命がけの謁見会（2）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
人間関係を、オリジナルで書いてる点があると思いますが、ご勘弁ください（大汗）

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてください（苦笑）
ヘタレで、すみません。。。

第十六話　命がけの謁見会（3）

郭勇武を叱りつけるように声を上げた人物に、星影は思わず驚きの声を漏らす。

（だれ・・・この人？）

「郭将軍、いい加減にしないか。安林山殿に対して失礼だ。仮にも陛下のご恩人であるぞ。」

男が発した言葉は、安林山こと劉星影を助けるもの。そして、

「それを賊扱いするなど、言語道断ではないか！？」

その口調は、注意とも戒めとも言える声だった。

「・・・珍しいな？普段はあんなに無口なお方が・・・。」

「本当に・・・！めったにご自分からは、ものを言われない方が・・・。」

そう言って、囁きあう文官達に気にすることなく、本人は話を続けた。

「彼がいたからこそ、陛下のお命が助かったのだぞ。」

「・・・これは失礼しました。私はただ、ものの例えで申しただけで、別に彼を侮辱したつもりではありません。」

「それにしては随分悪い例えをしたな？・・・関係ない私が聞いて

も、十分不快になった。例えられた彼は私よりもっと不快だったはず。」

「それは――」

「人を陥れることが、武人がすることか？」

衛青将軍の言葉に黙り込む郭勇武。周りも静まり返った。

「こんなことは言いたくないが、昨夜の賊の侵入に関しては、問題があったのは警備体制ではないのか？」

「それは――――、」

「例え陛下がいらぬと仰せられても、お供するべきであった。陛下のお命を守ることが、我ら武人の務めだ。勤めを果たせなかったばかりか、陛下をお救いした安林山殿をこともあろうに賊扱いするとはどういうことだ！貴殿達を見ていると、まるで自分達の落ち度を彼に負わせているように見える。」

「そんな！我らは決してそのようなつもりでは――」

見かねた他の武官が弁護する。それに対して衛青は答えた。

「君達が、日頃の鍛錬を怠っていないことはわかっている。」

「で、でしたら――」

「ならば、何故このような事態になったか考え、自己反省をしないのだ？」

衛青将軍の言葉に、ハッとしたように武官達は彼を見る。

「自分達の不手際を省みず、他人にそれを押し付けるのは良いことかな？どうなのかね、郭将軍？」

「・・・申し訳ございません。」

郭将軍が謝ると、それに合わせるように武官達も頭を下げる。そんな彼らの姿を、反対側の席で良い気味だとばかりに小声で囁きあう文官達。衛青将軍の視線は、そんな文官達に向けられていた。そして、彼らを見据えながら、きつめの口調で言った。

「文官の皆様も同じです。皆様が陛下を思い、彼を疑う事は当然のこと。しかし、忠義を尽くした者に対し、批判するをあびせるというのは感心しませんな？」

「衛青将軍、それは――――！」

「儒教の忠を掲げる国の重臣である貴方が、その理を乱すようでは天下に示しが付きませんぞ！？」

「それは・・・。」

「不審と思うのは仕方がありませんが、刑にかけるというのは賛同しかねます。私の申し出、受け入れてくださりますね？」

「は、はい。」

「申し訳ありません・・・。」

口々に謝る文官達。衛青将軍は一通り全体を見渡すと全員に聞こえるほどの声で言った。

「この者は賊ではない。・・・私が保証します。」

衛青の発言に全員目を見張った。

「お待ちください、衛青将軍！そのような軽率なことを！！」

「そうです！あなたのような方が、何故こんな輩を――――――――！！」

「どうしてそこで、彼を罪人扱いするのですか？私が先ほど申したことを、ご理解していただけなかったのですかな？」

「め、滅相もありません！ただ・・・。」

「え、衛青将軍！本気でおっしゃられているのですか！？」

「私が、冗談を言っているように聞こえますか？」

「そうではありませんが・・・ただ、なんの根拠も無いのに・・・。」

「そこまでおっしゃる根拠をお聞きしたい！」

「郭将軍！？」

声の主は郭勇武だった。

「国の重臣中の重臣、国の宝とまで言われる貴方が、そこまでおっしゃる理由をお聞きたい。」

声は穏やかだったが、その目からは妬(ねた)み・蔑(さげす)みが含まれた挑戦的なものだった。

「そうです！我らが納得するように説明してください！！」

郭勇武に同調するように、文・武官達は口々に言い出した。衛青はそれを軽く見回すとゆっくりとした足取りで、星影の方へ向かって歩き始めた。

うそ!?なんでこっちに来るの!待って、待って!心の準備が・・・・!!

動揺(どうよう)する星影の前まで来るとそのまま片膝をつく。

「・・・・。」

「あ、あの・・・?」

無言で自分の顔を覗き込む衛青に、彼女は顔が熱くなった。

(近くで見ると・・・・男前だ・・・・。)

年は、自分より二十ほど上であるのは間違いなかった。表情は無表情であったが、武官とは思えないほどの穏やかな目をしていた。

(今まで、私の周りにいなかった人間だな・・・。)

「・・・仲卿よ、それでどう証明できるのか?」

劉徹の問いに、衛青は首だけを向けて軽くおじぎをして答えた。そして再度、星影の方に向き直った。そんな衛青に皇帝は不服そうな顔をした。そんな劉徹に気遣いながらも、衛青は口を開く。

「安林山殿。君にいくつか、質問させてもらうよ。正直に答えてくれ。君の命がかかっているからね。」

衛青の言葉に、星影は無言で頷いた。
命がかかっていると言われて、その質問を拒否するはずがない。もっとも、自分より身分の上の人間の言葉を無視する権利はないのだから。

「君の役職は、下級宦官でよかったかな?」
「そうです。」
「君は昨夜陛下をお助けしたそうだが・・・陛下と知らずに助けたのかね?」
「そうです。」

衛青の質問に、申し訳なさそうに星影は言った。これには、玉座にいた本人も、渋い顔をした。しかし、質問を続ける本人は気にせず話を続けた。

「では、今玉座に座っていらっしゃる方はどなたかわかるかい?」
「・・・?漢王朝第七代皇帝・劉徹(りゅうてつ)様です・・・。」
「では、君の好きな食べ物は?」
「え?え~と・・・黄桃(おうとう)が好きですが・・・。」
「では、好きな動物は?」
「・・・ウサギが好きです。」

質問の内容に、星影も、周囲も、困ったような顔をする。

(なんで、昨夜のことと関係ないことを違うこと聞くの?)

玉座にいる最高権力者に、目で訴える星影。しかし相手は、小さく首を振るだけだった。

そんなやり取りに、衛青も気づき、さらに星影に顔を近づけた。

「ところで、陛下には姉君が四名いらっしゃるのを知っていたかい？」

「え？初めて聞きしましたが・・・。」

陛下のことなんて知るわけがない。まして、姉が何人いるかなんて知らない。

「それでは、陛下が景帝の第九皇子ということは知っていたかい？」

「そうなんですか！？」

これも初耳。景帝・・・陛下の父親の子供が何人いるのかなんて知らない。

（この人・・・なにを考えてるのんだ？）

相手の意図がまったく読めない星影。それは周囲も同じだったが、誰も衛青の不可解（ふかかい）な行動をとめることは出来なかった。とめられる立場にある皇帝ですら、どうしたものかと静観していた。

「さて・・・。今この場は、君が陛下を襲った賊の仲間ではないかという話で意見がわかれてしまっている。わかるかい？」

「・・・わかります。」

「君は賊か？」

今までの質問の中で、一番低い声で尋ねる衛青。

「違います。」

これには、星影も一番低い声で答えた。

「陛下の命を狙ったのではないのか？」

「違います！私は賊ではありません！」

先ほどとは打って変わって、はっきりとした口調で星影は答える。

（この人も、私を賊だと思ってるわけ！？）

そう思いながら、星影は相手の次の言葉を待った。しかし衛青は、黙ったまま星影を見るだけで口を開こうとしない。周りはそんな彼の様子に目を見張る。郭勇武も目を細めながらその様子を見ていた。

「衛青将軍・・・？」

恐る恐る、相手に声をかけてみる。星影の言葉は聞こえているみたいだったが、衛青が返事を返すことはなかった。緊張（きんちょう）や戸惑いが星影の心に広がる。そして頭は真っ白になった。しかし、その一方で、膠着（こうちゃく）したこの状況をなんとかしなくてはいけないという考えが星影の頭の片隅（かたすみ）にあった。

「・・・恐れながら、申し上げます。」

正直、星影は怖かった。無表情のまま自分を見つめる目の前の男が。

「私をお疑いなら・・・どのような処分でも受けます。」

何もかも見透かしてしまうような目が怖かった。

「私は賊ではありません。宦官です。でも・・・桃花園に入ったことの罰は受けます。」

そんな顔で見られるのは・・・女だって、バレるかもしれない。

彼女の緊張は周りへと伝わり、部屋に緊張が張り詰める。

「・・・君は賊ではないね。」

ようやく発せられた衛青の言葉に星影は驚いた。衛青の言葉が、ひどく穏やかなものだったからだ。

「何故そう言える?」

すぐさま、玉座にいた劉徹が尋ねる。

「・・・顔を見れば、嘘をついていれば、見分けがつきます。」

「つまりあなたは、顔を見て判断したということか!?」

皮肉めいた口調で言う郭勇武に、衛青は無表情で首をふる。

「正確には『目』だよ、郭将軍。どんなに嘘をつくのが上手い者でも、目まで変えることは出来ない。」

衛青の言葉に、周りにいた文武官達がざわめきたった。あまりにも単純な彼の言葉に、皆珍しいものでも見るように衛青を見た。そして、彼の答えに驚いたのは文武官達だけではなかった。

「どういうことじゃ?」

玉座に座る、この国の覇者。皇帝・劉徹は、訝しそうに衛青に言った。

「仲卿よ、子供の遊びではないのだぞ?その方は朕をからかっておるのか?」

「滅相もありません、皇帝陛下。わかりやすく申し上げますと、人は嘘をつく時、顔色や声の調子に普段と変わります。しかし、嘘をつくものはそれを心得ております。ですからいくらでも誤魔化せます。ただ、唯一誤魔化せないのが目です。」

「まさか・・・その者の目が綺麗だから嘘をついていないと申されるのですか?」

「・・・ああ。少し、説明が悪かったね、郭将軍。正確には『瞳』だ。」

「瞳？」

思わず聞き返した星影に、衛青の視線が向けられた。

「そう、瞳だよ。瞳が大きくなれば、その者は嘘をついている。でも君は、私の質問に対して瞳の大きさが変わらなかった。」

「それが証拠になるというのですか！？」

衛青の話に、納得出来ない郭勇武が横槍（よこやり）を入れた。

「瞳の大きさとは、人それぞれ違うものでしょう？そんなことで、嘘かどうかわかるのですか？」

声を荒げる郭勇武。視線を星影に向けたまま、衛青はそんな彼の質問に答えた。

「だから、最初に安林山殿の瞳の大きさを確認して質問をした。彼の口調や表情は変化したが、瞳の大きさは変化しなかった。」

静かな口調で言う衛青に、周囲も静かになってしまった。ただ一人、皇帝・劉徹が納得した顔で言った。

「なるほど・・・つまり仲卿は、誰でもわかるような当たり前の質問を林山にして、『林山の普段の瞳の大きさ』を確認した。その上で、重要な質問をして、瞳の大きさが変化をするか・・・嘘をついているかどうか確かめたというわけか。」

「仰せの通りでございます、皇帝陛下。」

そう言うと、ここでようやく皇帝の方へと向き直る衛青。

（そうか・・・だからあんな関係ないことも尋ねたのか。）

皇帝・劉徹の話を聞きながら、星影も納得したように感嘆の声を漏らした。

それと同時に、背中に冷たいものを感じた。

無意識で衛青の質問に答えた自分。

もし・・・相手に問いに嘘をついていたら。

厠に行く途中で、偶然陛下を助けたというように嘘をついていたら。

（この武人は・・・見破っていた。）

感嘆（かんたん）の思いと共に、言い知れぬ怖さが星影の心を支配したのだった。

第十六話　命がけの謁見会（3）（後書き）

すみません。
投稿小説を見直しまして、あまりにも脱字や間違っている漢字が多かったので、修正しました（大汗）
あと、読みにくかったので、読みやすいようにしてみました（冷汗）
アップしたと、勘違いされた方、本当にごめんなさい！！

第十七話　命がけの謁見会（4）

衛青の発言により、文武官が集まった広間は異様な雰囲気になっていた。

安林山こと、劉星影は、無言で衛青を見つめていた。

視線をどこに向けたいいのかわからなかったというのもある。正面を、皇帝の方を見るにしても、身分の低い者が最高身分の者を見るのは好ましいことではない。衛青に対してもそうだったが、今まで、やり取りをしていたということもあり、視線を衛青に向けていた。正確には、衛青の首の辺りを見ていた。顔を見るのは、皇帝同様に身分的なこともあってが、見ることが出来なかった。

自分の正体すら、見抜いてしまいそうな洞察力（どうさつりょく）が怖かったからだ。

「でも衛青将軍、瞳が大きくなった、ならなかったで、本当にこの者を信じるおつもりですか？」

各自が、それぞれ小声で議論する中、最初に口を開いたのは李延年（りえんねん）だった。

「衛青将軍は、国の英雄とも言えるお方。そのお言葉は信じたいのですが・・・。ねぇ、陛下。」

李延年の言葉に、皇帝・劉徹（りゅうてつ）も言葉を濁（にご）す。

「それもそうじゃな・・・。衛青よ、それで間違いないのか？」

問いただすような口調の相手に、衛青は頭を下げながら言った。

「仰せの通りでございます。ご不審に思われるのも、ごもっともでございます。ただこれは・・・私の昔の経験に基(もと)づいておりますゆえ・・・。」

その言葉に、かすかにざわめき始めていた家臣達が黙り込む。

「・・・仲卿の経験か・・・。」

独り言のように劉徹は呟く。

「万が一の時は、私が責任を取ります、皇帝陛下。」

衛青の言葉に、劉徹はそう言った相手と星影を見比べる。そして、自分の右膝を叩いた。

「仲卿を信じよう。」

その言葉に、星影は劉徹の方を見る。相手と目が合う。劉徹はにやりと笑うと言った。

「林山は賊ではない。」

その場の全員に聞こえるような声で皇帝は叫んだ。

「仲卿の立派な証拠がある以上、これの話はそれまでじゃ！仲卿ほど、誠実で、律儀なやつはおらんからな～間違いなかろう？」

茶化すように笑う劉徹に、家臣達もつられるようにして笑う。
皇帝の言葉に、それまで硬く無表情だった衛青将軍の目がわずかに微笑んだ。それと同時に周りの空気も和む。

「そうですね・・・衛青将軍がそう申されるなら・・・。」
「ええ・・・！賊ではないですね。」
「身元は、宦官の証明書を見ればわかることですし。」

あれほどまでうるさかった外野も、すっかり静かになった。その様子を目の当たりにした星影は思う。

（衛青将軍って、すごい・・・！！）

あれほどうるさかった文・武官を黙らせるなんて。優れた人物である事は間違いない。
星影の緊張が解ける。

（助かったんだ・・・！）

小さく、安堵の息を漏らす星影。
もちろん、この状況に満足したのは星影だけではなかった。

「さすがは仲卿だ！朕自慢の忠義の臣じゃ。」

上座で、皇帝は大喜びしていた。そんな皇帝に、衛青将軍は無表情で言った。

「恐れ入ります。しかし陛下、昨夜の失態については、私にも責任があります。今後はこのようなことがないように勤めていきたいと思います。」

「なにを言う！お前は大将軍であろう！？兵とお主とは関係ないであろう！」

「私も武人です。きちんとした対策を決めていなかったのですから・・・。彼らの責任にするわけには。」

「もうよい。」

そういって玉座から降りると、衛青の側に駆け寄る皇帝。

「朕も一人歩きしたのが悪かった！衛兵達の罪は問わん！この話はもう終いだ！誰も異存はあるまいな！？」

「「異存はございません、皇帝陛下！」」

皇帝の問いに答えるように文・武官は声を揃えていった。いっせいに頭を下げる光景はなんとも迫力のあるものだった。これが皇帝の威光というものか。

「林山よ、嫌な思いをさせて悪かったな。」

急に自分に声をかけられ、慌てながらも頭を下げながら彼女は言った。

「そんな、陛下!!もったいないお言葉です!!」
「よい、よい。勇武よ、いくら名前と性別が同じだからといって、言って言い事と悪い事があるだろう?」
その様子を立ったまま見ていた郭勇武に皇帝が言った。
「・・・は!申し訳ありません!」
「以後は口を慎め!少しは衛青将軍を見習え!」
片膝を突きながら謝る郭勇武に、彼は冷たい言葉投げかけた。途端に文官席から押し殺すような笑い声が聞こえる。それに対して、渋い顔のまま下を向く宿敵の姿に星影は内心スカッとしていた。
(いい気味、ざまーみろ!でたらめ言うから恥をかくんだ。これもすべて衛青将軍のおかげだ!)
「お前らも人の事は言えんだろうが!!」
今度は文官席に向かって怒鳴りつける皇帝。その声に今度は彼らが静かになる。
(あーあ。人の失敗を笑うからだよ。)
少し気の毒そうに彼らを見る星影だったが、彼女にそれを言う権利はないだろう。
「さて、話がそれてしまったが・・・。」
咳払いをすると彼女に向き直りながら皇帝は言った。

「安林山よ、朕はお主の事が気に入った。」
「あ、ありがとうございます。」
「お前といると本当に飽きない！もっと語らいたいものだ。」
「もったいないお言葉です。」

「そんなことはない。お主を見ていると・・・・霍去病を思い出す。いや・・・去病の再来か・・・。」

呟くようなかすかな声で言う。彼がそう言った瞬間、室内になんともいえない空気が漂うのがわかった。無表情だった衛青将軍の表情も険しくなった。

（なんだろう？衛青将軍まで・・・。）

「まあ、なにはともあれ、朕はここにいる安林山に金二千金・銀二千金与えたうえで、朕の側に置くことにする。」
「ええ！？」

思わず叫び声をあげる星影。

（き、金銀を二千金ずつ！？そんな大金を！？）

「どうした？金銀二千金では少なかったかな？」
「め、滅相もございません！！いいえ、むしろそんなに頂くわけには――」
「ハハハ！謙虚な奴じゃのう。ますます気に入ったわい！」

にこやかに言う劉徹に、星影は返事に困る。戸惑う彼女の前まで来ると、かがみこみながら星影の耳元でそっと囁いた。

「お前には朕の側にいてもらうぞ。・・・・職務も、食事も、着替えも、厠(かわや)も、沐浴(もくよく)も、寝所も同じだ。そうれに、妻達の元に行く時もだ・・・。」

満足そうに言う皇帝に星影は背筋に悪寒を感じた。

（宦官って・・・そこまで一緒なの？）

職務も、食事も、着替えも、厠も、沐浴も、寝所も一緒で、皇帝の妻女達の元に行く時まで同じなの！？子供じゃあるまいし！姉妹でもそこまでしないわよ！第一、そんなことして奥方達は困らないの！？私付きで押しかけて行ったら奥方達だって絶対に困るよ！奥方達だって・・・。奥方達のところに行く時も・・・！？

そこまで考えて彼女はあることに気づく。

・・・待てよ。もしここのまま陛下付きの宦官になって、行動していれば星蓮に会えるんじゃないか？いや！絶対に会える可能性が高い！！これこそ本当にチャンスよ。多少の危険を伴うけど、これを逃したら次はない。

星影は決心した。自分の大切な人達を幸せにするために究極の選択をする。

「・・・私でよろしければ、皇帝陛下の仰せのままに。」

猫なで声を出しながら、満面の笑みで言う星影。その答えに皇帝も満面の笑みを浮べながら頷く。

「よし！決まりじゃ！」

商談成立！

どちらともなくにこやかに笑う二人。互いの利害関係が一致した結果とも知らずに。そんな二人の様子にさすがに周りは諦めたように見えたが。

「いけません！陛下！！」

約一名反対者がいた。言わずと知れた李延年だった。

（こいつ！せっかく星蓮に近づけるかも知れない好機なのに・・・余計な口を挟むな！）

「延年、いい加減にしろ！！これは勅命だ！！」

皇帝のきつめのいい方に一瞬体を奮わせる延年。しかし彼はそこで話すのをやめなかった。下唇をかむと震える声で話しを続けた。

「わ、私はただ・・・陛下が・・・陛下が、心配なのです！！貴方様になにかあったら・・・私は・・・！！」

（ちょっと待った。そんなに私が危険に見えるわけ？）

「陛下が、陛下が襲われたと言うだけでも、胸が張り裂けんばかりだというのに・・・！」

涙目になる延年に皇帝も困ったように彼を見る。

「お怪我がなかったのが・・・本当に幸いでしたが・・・・これだけはわかってください！！私は陛下の身が心配なんです・・・・！！だがら・・・。」

それでもなお、なにか言おうとしている延年の言葉を皇帝は遮った。

「お主がわしのことを心配して言ったことは分かっている。」

「陛下・・・！」

星影の横にいたはずの皇帝だったが、いつの間にか玉座に戻っていた。

（なに、その早業！？）

「心配せずとも、わしが一番可愛く思っておるのはお主だけだ。愛い奴だ、延年。」

今までに聞いたことのないような、優しい声で語りかける皇帝。手を伸ばし、壊れ物でも扱うかのように、ヨシヨシと延年の頭を撫でる。すると、それまで不機嫌な顔をしていた延年だったが、少しふてくされたように、わかりました、と言うと、元いた場所に戻っていった。このやり取りに星影はかすかに不振を覚える。

感動とはどこかほど遠い、異様なこの感覚。

彼らのやり取りを見て、何故か星蓮と林山のやり取りを思い出した。

（なんか似てるような、似てないような・・・。なんなのだろう、

この二人。）

ただ、先ほどまで表情の険しかった衛青将軍の顔が元の無表情に戻っていた。

周りも周りで、いつものことだと言わんばかりの空気が流れていた。

第十八話　命がけの謁見会（5）

皇帝・劉徹と宦官・李延年のなんともいえないやり取り。
そんな空気をもてあます、星影を含めた一同。しかし、その雰囲気はある声によって終止符を打たれる。

「では、安林山殿には明日から陛下の身の回りで働いていただけるように手続きをしておきます。」

そう言って声を上げたのは一人の文官だった。彼もまた、上座に近い場所にいた。着ている物からして、文官の中では身分が高そうだった。年も、見るからに陛下や衛青将軍よりも上の男性だった。十分に貫禄が漂っていた。

「仲舒、それはないだろう？」

仲舒と呼ばれた男の言葉に、皇帝が文句を言おうとした矢先だった。

「陛下！」

真横にいる延年に咎（とが）められる。

「わかった・・・。林山！明日から朕のところに来るように。詳しい事は後で追って沙汰（さた）する。」

皇帝はしぶしぶ納得したようだった。軽く星影に笑いかけるとその場を後にする。彼の姿が見えなくなると、文・武官達もぞろぞろと部屋を後にする。その姿を星影は、呆然と見つめていた。

「・・・行っちゃった。」

皇帝がいなくなったと同時に彼女の緊張は完全に解けた。

（まさか昨夜の変態・・いや、男性が漢帝国の皇帝・劉徹様だったなんて。世の中わからないものだな。）

そんなことを考えている時だった。彼女の肩を叩くものがいた。振り返るとそこには、

「あ、黄藩様！」

彼女の上司である黄藩の姿があった。

「陛下も下がられました。さあ、私達も行きますよ。」

そう言ってさっさと歩き出す。その後を慌てて追う星影。

「待ってください、黄藩様。」

「黄藩『殿』で結構ですよ、安林山殿。」

「り、林山殿!?」

黄藩の言葉に星影の声がうわずる。今まで自分を呼び捨てにしていた上司が、急に『殿』付けで呼んできたのだ。彼女でなくても驚く。

「そうですよ。貴方はもう私の部下ではありません。」

「それってつまり・・・見放されたのですか？」

情けない声を出す星影に、黄藩は驚いたように振り替える。

「なにを言っているのですか!?そうではありません。貴方は私と同じ身分になったのですよ。『殿付け』をしてなにがいけないのですか!?」

「ええ!?私が高級宦官に!?どうして!?」

その言葉に黄藩の顔色がかわった。

「貴方はなにを聞いていたんですか!?たった今皇帝陛下から、お側にとの、ありがたいお言葉を頂いたでしょう!?」

「そりゃそうですけど・・・それといったいどういった関係が?」

「もう本当にあなたは!!陛下のお側に仕えるのに、下級宦官のまま仕えられるわけがないでしょう!?それぐらいわからないんですか!?」

「いや、そんなに怒らなくても・・・。」

「怒りますよ!なんなんですかあなたは――――!!?」

信じられない、と何回も繰り返しながら怒る元・上司。

「ああもう!どうして貴方はこうなんですか!?ただでさえ、素行が悪いというのに!!」

「はあ・・・すいません。」

「謝るぐらいならきちんとしてください!大体ね・・・!!」

部屋の入り口で説教を始める黄藩。それを気の毒そうに見ながら去っていく文・武官。

だが肝心の星影は、黄藩の話など聞いていなかった。彼女の中では、今後の後宮での自分の行動をどうするかで頭がいっぱいだった。

それにしてもこれからどうしよう。とりあえず、林山にこのことを伝えないと。上手くいけば、早いうちに星蓮を連れ出せそうだし。

そんなことを考えている時だった。彼女の視界にある人物の姿がう

つる。

「あ、衛青将軍・・・。」

幸い、彼女の呟きは黄藩には聞こえなかった。無論衛青にも。星影の視線は黄藩から衛青へと移る。

（そうだ、こうしちゃいられない。言うべき事は言っておかないと――――――!!）

星影は、顔を伏せたまま嘆(なげ)いている黄藩を無視するとそのまま彼の後を追いかける。

「あの!待ってください、衛青将軍!!」

星影の声に衛青は立ち止まる。

「・・・。」

「衛青将軍、先ほどはありがとうございました!!」

無言のまま自分を見る衛青将軍。そんな彼の様子にたじろぎつつも彼女は言った。

「衛青将軍が取り成してくださったおかげで、私は賊だと勘違いされずにすみました!」

「・・・。」

「だから、お忙しいとは思いましたが、一言お礼がいいたくてお引き止めてした次第で・・・。」

「・・・。」

「あの、本当にありがとうございました!感謝してもしきれません

！！」
「・・・。」
「あの・・・。」

ずっと黙ったままの相手。

何故何も言わないんだろう？もしかして宦官とは話したくないのかな。

「・・・えっと、本当にそれだけなので・・・。その・・・はい・・・。」
「・・・。」

笑って見せても、その表情は変わらない。

（・・・やっぱりこの人も、いつぞやの官僚みたいに宦官の事を汚いものとして考えているのかな。）

そう考えると、なんだか自分のやっていることが急に惨めに思えてきた星影。後ろの方では、星影がいないいいのにもかかわらず、未だに嘆きながら説教を続ける黄藩がいた。正確には気づいていないといった方がいい。

「お・・・お引止めをして、申し訳ありませんでした。では、失礼します・・・。」

そう言って踵（きびす）を返して、立ち去ろうとした時だった。

「・・・疑われても無理がないな。」
「え？」

その声に星影は振り返る。今まで一言も発しなかった衛青の声だった。

「・・・律儀（りちぎ）に礼を言う宦官は初めてだ。優しいな。」

「え、衛青将軍！？」

その口調は、どこかぶっきらぼうではあったが不快感はなかった。

「おまけに将軍相手に、掴みかかろうとした奴も初めて見た。あの時止めていなかったら今頃・・・。」

「え！？も、もしかして・・・そうだと知って助けてくれたんですか！？」

詰め寄るように近づく星影に、口だけで笑ってみせる。

「・・・無鉄砲もほどほどにしなさい。」

そう言い残すと踵（きびす）を返して去っていく衛青。その後姿を見送る星影。

（衛青将軍は、私が蔡勇武に掴みかかろうとしたのがわかったから止めに入ってくれたんだ。）

冷静に考えてみればあそこで掴みかかって、奴を倒したとしても、賊の仲間だという疑惑がますます濃くなるだけだった。それだけではない。身元についても洗いざらい調べられていただろう。

もしあの時、怒りに任せて掴みかかっていたら今頃大事になっていただろう。

衛青将軍が発言してくれなかったら、今頃私は・・・。

「いい人だな・・・。」

一言呟くと、彼女踵を返して歩き始める。未だに嘆き続けている黄藩の元へと戻る。

（よかった、別に嫌いだから無視してたわけじゃなかったんだ。）

相変わらず顔を覆ったまま説教して続ける黄藩の前まで来る。きっと宦官がお礼を言うなんて思ってなかったから返事に困ったんだ。確かに、楊律明や呂京文のような宦官が多いが、空飛のような良い宦官だっている。でも、これで少しは宦官について見直してくれたかな。

「いいですか、わかりましたね！！」

黄藩の同意を求める言葉に星影の思考は遮られたが、

「はい、わかりました。」

いきなりではあったが即答する。その返事に安心したのかようやく彼は顔をあげた。

「そうですか・・・やっとわかってくれたんですね？」

ここでやっと、長ったらしいお説教が終わった。少しふらつきながらも黄藩は言った。

「それでは、貴方の新しい部屋に案内しますから、ついてきてくだ

さいね。」
「え?新しい部屋ですか。」
「ええ。言ったでしょ?高級宦官になると個室がもらえると。貴方の荷物は、同じ整理係りの王琥珀(おうこはく)と張空飛(ちょうくうひ)に運んでおくように言っておきますから心配は要りません。」

荷物を運ぶ?私の荷物を!?それはまずい!!あの中には検査の目をかいくぐって持ち込んだものがいろいろ入っているのに!!空飛はともかく、琥珀には感づかれるような気がした。

「ちょっと待ってください、困ります!」
「どうしてですか?」
「荷物は自分で持って行きます!取りに行かせてください!!」
「そう言われましてもね。まさか貴方・・・彼らと別れたくないんですか?」
「え・・・それは。」

確かに空飛や琥珀と離れるのは正直辛い。林山以外にできた初めての友達。どんな形であれ、気の合う友になれそうだった。それにこのまま二人の側から離れるわけにはいかなかった。気がかりなことが残っていたから。
昨夜の出来事・・・琥珀が黒ずくめの男と密会していたこと。もしかしたら、彼が陛下を殺そうとした賊の仲間かもしれない。そうだとすれば彼の行動はつじつまが合う。危険を冒してまで命を奪う必要のある人物と言えば陛下を置いて他にいない。
しかし、何故彼がそんなことを?

“一方的に和平を断ち、攻め滅ぼせるだけの力は今の皇帝にはあったからね。”

琥珀の言っていた言葉が脳裏をよぎる。
琥珀は、復讐をするつもりなの・・・・？確かに今の今上は異民族に対して攻撃的だが、だからといってなんの罪もない宮廷兵達の命まで奪うなんて。もしそうなら――――

「・・・その通りです。」

見逃せない。陛下は妹を奪った人だけど・・・。だからと言って陛下を見殺しにはできない。例えどんな人間であっても、

「私は彼らと離れたくありません・・・！」

私の目の前で誰かが死ぬのは嫌だ――――――
このまま彼の元を離れるわけ行かない。

「そう言われても、彼らは下級宦官、私達は高級宦官。身分が違います。」
「でも、彼らは私の友達です！離れたくありません！」
「貴方って人は！そんなわがままは通用しませんよ！」
「じゃあ、高級宦官にはなりません！下級宦官のままでいいです！！」
「な、なんてことを言いだすんですか！？そんなことをしたら、貴方の命はないんですよ！？楊律明と呂文京達の命を助ける代わりにお側に仕えると陛下とお約束したでしょう！」
そうだった・・・！こんなことになるなら、あんな奴ら助けるんじゃなかった。
「じゃあ、どうすれば・・・！」
「諦めなさい。もう彼らとは住む世界が違うのです。」

黄藩の冷淡な言い方に星影は納得がいかなかった。

「それとも、離れられない特別な理由でもあるんですか」
「特別な理由って・・・それは――――。」

ここで黄藩に昨日のことを話すわけにはいかなかった。はっきりとした証拠もないし、彼まで巻き込むわけにはいかなかった。それに、せっかく晴れた賊の疑いをかけられる可能性もあった。

「・・・友達と離れたくないからで・・・。」

星影の言葉に一瞬大きく目を見開いた黄藩だったが、呆れたような口調で言った。

「・・・友が欲しいなら私が紹介します。それで我慢なさい。」
「そんなの友達なんて言えないよ！もういいです！陛下にお願いしてきます！」
「り、林山殿！？」
「下級宦官のまま、お仕えさせてくださるように頼んできます！！」

思いたったら即行動。踵を返すと、皇帝が去っていった方向へと行こうとする。

「待ちなさい！どこに行くんですか！？」
「陛下にお願いしに行くんです！」

彼女のとんでもない発言に、黄藩は真っ青になる。そして行かせまいと、星影の腕を掴む。

「ば、馬鹿！な、な、なにを考えているのですか！？行かせませんよ！」
「離して下さい！武人の情けです！！」
その腕を振りほどこうとするが離れない。相手もかなり必死だった。
「なにが武人ですか！？貴方は宦官でしょう！？」
「体は宦官でも、心は武人！いいから離して下さい！！」
「冗談じゃありません！いくら貴方が高級宦官になったからといっても、林山殿！貴方のしている事は家臣の領域を超えた大胆な振る舞い！！無礼もはなはだしいことです！！」
「それは百も承知です！別に貴方には迷惑かけないからいいでしょう！？」
「そういう問題ではありません！行かせません！絶対に行かせませんよ・・・！！」
「それでは力ずくで押し通るのみです・・・！！」
星影は自分を掴んでいる黄藩の腕を力いっぱい払いのける。それによって黄藩の手は腕から離れたかのように見えたが、
「逃がすか！！」
「わああ！？」
素早く彼女の腰にしがみつく
「しつこいですよ！？」
「当たり前です！！」

構わずそのまま引きずるが、一行に離れる気配がない。３０メートル程進んだところで動けなくなった。

「黄藩様！離して下さい！！」

「呼び方は『黄藩殿』でしょ！？離さないったら離しません！！」

そんな二人の押し問答にいつしか人だかりができていた。

「は～な～し～て～！！」

「は～な～す～か～！！」

左右に振ってみるが離れない。それどころか、ますますきつくしがみついてくる。痺れを切らした星影。

「いい加減に・・・！」

怒鳴りつけようとした時だった。

「しやがれ！！！」

ドスのきいた怒鳴り声。初めて聞く黄藩の、宦官の男らしい声に星影はもとより周りの者たちは度肝を抜かれる。

「このクソ餓鬼が！！手間かけさせんじゃねーよ！！」

ものすごい力で彼女を引き寄せると、星影首根っこを掴む。

「ちょ、黄藩殿！？一体な・・・！」

「ガタガタ言わずに来やがれ！！」

男らしく黄藩は言うと、そのままずるずると引きずっていく。

「放してください！それが宦官のすることですか！？」

「うるせぇ！お前がそれを言うな！！」

闇魔もはだしで逃げだしそうな勢いで睨みつける黄藩。さすがの星影もなにもいえなくなった。周りも呆気にとられた状態でそれを見送る。彼女は引きずられながら思った。

仕方ない・・・今夜にでも後宮を抜けだして、林山のいる宿にいこう。彼ならば何か言い知恵を出してくれるかもしれない。それにしても・・・。

「たく！人がしとらしくしてりゃ、良い気になりやがって！！」

（宦官て・・・怒らせると怖いんだ・・・・・。）

“・・・無鉄砲もほどほどにしなさい。”

衛青将軍がそう言って理由がなんとなくわかった。私の性格を理解したうえで言ってくれたのだろう。
しかし、このときの彼女は知るよしもなかった。星影の様子を見ている人物がいたことに。

「あれが安林山ですか？」
「そうだ。なかなかイキがいいだろう？」
「確かに。我々にとっては、もってこいかもしれませんね――――」
星影を見ながら柱の影で笑う人物。

「――――郭将軍。」

彼女の姿が見えなくなるまで、郭将軍の視線は星影へと注(そそ)がれていた。

第十九話　本物、奔走中

「郭将軍？郭将軍・・・て、あの郭勇武将軍のことか！？」
「ええ、郭勇武将軍のことです。」
「郭将軍のことについてね・・・。」
「なんでもいいんです。知っていることがあれば教えていただけませんか？」

ここは長安にあるとある居酒屋。夕方ということもあって店の中は仕事帰りの客でごったがえしていた。どの客も、その日の疲れを癒(いや)そうと酒で鬱憤(うっぷん)を晴らしていた。
その中に本物の安林山(あんりんざん)の姿があった。彼の周りにはある一団がいた。彼らは宮廷の建築を担当するもの達だった。林山の申し出に苦笑する男達。

「そりゃ別にかまわねーよ。」
「しかし、あんまり良い話は聞けないぜ？」
「かまわないですよ。知っている限りでいいですから。」

苦笑する男達に合わせるように、林山も笑みを浮かべた。
林山は星影と別れて以来、暇をもてあましていたわけではなかった。星蓮を取り戻した時の逃げる手はずや、逃げ道の確保などについて使えそうな道がないか下見などをしていた。武具芸の鍛錬(たんれん)も毎日欠かすことなく行った。
しかし、それだけではなかった。

「郭将軍がどういう人物か教えてくれませんか？」

林山には考えがあった。

あの日、劉家に押し入った男、郭勇武について調べていた。郭勇武のことは、役所に勤めている知り合いからある程度聞いていた。しかし、その話も【都で将軍をしている陛下のお気に入り】ということだけだった。林山は、その情報だけでは納得できなかった。

何か引っかかる。何かある。調べてみる価値がある。

（――――行動あるのみ！）

考えるよりも先に体が動いていた。

「郭将軍がどういう人物か、教えてほしい。」

ある時は市場へ聞き込みをし、またある時は芝居小屋で聞き込みをし、またまたある時は老若男女さまざまな人々へと話を聞きまわるという、いわゆる情報収集をしていたのだ。少しでも宮中にいる星影の役に立てばと、自分達の敵についていろいろ調査していた。

今まで聞いてきた郭勇武の話は、林山が藍田で聞いた話と同じようなものばかりだった。『郭勇武が陛下のお気に入り』という話しか出なかった。そして、どういうわけか、郭勇武の名前を出しただけで、追い返されてしまうこともあった。

快く話してくれる者もいたが、

『郭将軍は、陛下のお命をお助けして将軍職についた人だ。』

『郭将軍は、陛下に美女を献上して将軍職についた人だ。』

『郭将軍は、占い師の予言で陛下から将軍職をもらった人だ。』

と、みんな言うことが違うのだ。

（どれが本当なんだよ！？）

話を聞くうちに、林山はわけがわからなくなった。

恐らく、『郭将軍が陛下に気に入られて将軍職についた』というのは本当だろう。そして、その話を聞いた人々が、気に入られた理由を推測しながら話をしていくうちに、噂話に尾ひれがつく形となったのだろう。

（一般人に聞いてまわるのは、あまり意味がないな・・・。）

そう判断した林山は方向転換（ほうこうてんかん）した。

皇居と関係のある者達から、話を聞くという作戦に変えたのだ。皇居関係者といっても、都に来たばかりの自分にその様な高貴な知り合いはいない。仮にいたとしても、宮廷に仕える人間が、そう簡単に宮廷の内情をもらすはずがない。特に、後宮に関しては厳しく制限されていた。

そこで林山は、皇居と関係のある人々・・・出入りを許され、ある程度の自由がきく職人などに目をつけた。現皇帝は、とにかく派手なものが大好きで、自分の住んでいる宮殿はもちろんのこと、都を囲んでいる城壁を豪華にするのが好きだった。そのための工事を頻繁（ひんぱん）に行っている。宮廷の出入りを許されている人々に聞くことはできない。しかし、その下で働いているもの達からなら話を聞くことができるのではないだろうか？

現に、今まで聞いた『郭勇武の話』にしても、

「これはね、後宮に品物を納めている、大商人のところで働いてる人から聞いたんだけど・・・」

「なんでも、皇居の柱を直しに行った職人が、お役人達がそう話してるのを聞いたって言うんだよ！」

と、第三者からの話を元に、噂話が流れていたのだ。
その第三者・・・皇居などに出入りしている者の下で働いている者達から聞いた方が早いと林山は気づいたのである。

そして、ある酒屋がとある職人達の溜まり場になっていることを知る。その職人達は、主に城壁の作業を行っているらしく、宮中や郭勇武に関する話の信憑性が期待できた。
教えられた酒屋へと入ると、自然に振舞いながら、なんとか彼らの話の輪へともぐりこむ込むことへと成功した林山。一緒に雑談をしながら、彼らの酔いが回ったことを確認すると、郭勇武に関する情報提供を求めたのである。
内心期待に満ちた林山に、棟梁をはじめとした男達は困ったように言った。

「郭将軍ね～あの人については、うかつなことは言えねぇーんだよなぁ・・・。」
「なんせ、ちょいと特殊なお人だからよ！」
「と、いうと？」

顔を曇らせ、話を渋る相手。

「普通の将軍ではないんですか？」

落ち着いた口調で尋ねる林山。林山の声に、男達は苦笑いしながら言った。

「武官になろうと思ったら、大抵はその筋の連中が推挙するんだよ。」
「つまり、その筋で将軍になったのではない・・・と？」

「そうなんだ。その推挙した連中が宦官なんだよ。」
「宦官が？」

（武官からの推挙ではないということか・・・！？）

一般的に宦官とは宮廷での雑用が主な仕事である。だがまれに、宦官の中でも身分の高い後宮の宦官になると皇帝にふさわしい女性を探し、後宮に入れるということがある。
こういった場合、女性を推薦するというのならまだわかる。しかし、女ではなく男を、それも宦官としてではなく、将軍として推挙したということになるのだ。

「変な話だろ？普通は宦官が推挙するって言ったら宮廷の女だろう！？」
「確かに・・・変な話ですね・・・。」

将軍職とは仮にも国をになう人物がなるものである。
清廉・潔白・率直を必要とする優れた人物を金のことしか頭にないような連中に、そんな優れた人物を果たして推挙することができるだろうか。
答えはわかりきっていた。たとえ推挙したとしてもろくな奴でない事は目に見えている。

「まあ、さすがに宦官の推挙で将軍になっただけあってよ、やることなすことが結構汚いんだ。」
「宦官からの推挙だと、良くないんですか？」
「当然だ！宦官に頼むってことは、金がある奴がすることだぜ！？」
「特に、身分の高い宦官と仲良くすれば、陛下に近づくこともできる！」
「上手くいけば、その宦官の口添えで出世できるってわけだよ！」

「じゃあ、宦官に推挙してもらうということは・・・」

「出世目的に決まってらぁ！」

そう言って、男達は酒を流し込んだ。

「陛下は、男でも女でも、美形が好きだからなぁ～」

「そうそう。郭将軍は男前だからな・・・。」

「しかも、腕っ節がついよいことを鼻にかける嫌な奴さ。」

「それでいて、頭がいいというか・・・悪知恵も働くしよ。」

「陛下に気に入られてるから、裏で随分好き勝手なことしてるんだぜ。」

話を聞きながら林山は考えた。

今聞いている【郭勇武の話】は、これまで聞いてきた中で一番信憑性があった。

それまで話を聞いた相手が、町にいる宮廷とはあまり関わりのない人々の話だった。

しかし、今自分に話をしているのは、宮廷に出入りしている者達だ。

（一番信用できる話だろうが――――――）

ここで林山は自己判断をしなかった。今の話が正しいとすぐには決めなかった。

この話が本当かどうか、確認しようと林山は思ったのだ。

（・・・・少し、カマをかけてみるか。）

そう考えると、近くにあった酒の器を手に取る林山。

そしてわざと、大げさに首を振りながら茶化すような口調で言った。

「でも・・・それはあくまで噂でしょう?信じられないな~」

林山の言葉に、男達は猛烈(もうれつ)に反発した。

「嘘なもんか!郭将軍の機嫌を損ねて、陥(おとしい)れられた奴が何人もいるんだぜ!?」

「男だけじゃない!女なんて悲惨だぞ!気に入った女なら、人妻でもなんでも強引に自分のものにする!出世のためなら自分の女も上司にも渡す!」

「女を見る目があるんだろうな・・・とにかく、郭将軍の紹介する女は上玉(じょうだま)ぞろい!」

「だから、今後宮の奥方様の募集でも、郭将軍(みずか)様自ら足を運んでいるそうだぜ。」

なるほど・・・それで合点納得(がってんなっとく)がいく。

(星蓮を連れて行ったのも自分のためか・・・!!)

こみ上げる怒りを必死に抑える林山。そして、気落ちを切り替えて、再度男達に質問した。

「しかし、そんな振る舞いを陛下が許すはずないでしょう?」

「問題はそこなんだよ!ここだけの話なんだが・・・どうも宦官連中が、郭将軍に味方しているらしいんだ。」

「宦官が?」

「大きい声じゃ言えないが、そのお礼もかなりのものなんだとよ。」

「一体どこからそんな大金を手にいれてるのやら・・・!」

「そりゃ、どこぞの金持ちから賄賂もらってるんだろう?」

「俺の聞いた話じゃ、娘を見逃してもらうための謝罪料をとってるって聞いたぜ！」
「謝罪料！？」
1人の男の言葉に、林山は思わず聞き返した。
「ああ。婚礼の決まってる娘の後宮行きを見逃す代わりに、その親から大金をせしめるって方法よ！」
「婚礼の決まっている娘を！？」
「これが性質（たち）が悪くてなぁ～嫁入りするって決まってる娘を狙って、お声がけをするらしいんだよ！もちろん美人に限るがな！」
「じゃあ、知っていて後宮行きを命じるんですか！？」
「そういうことだ。後宮に入れるってことは、女にとっちゃ最高の名誉だからな。親にとっても最高の名誉さ！」
「なかには、娘が後宮に行けるってことで、破断にしちまった縁談もあるんだぜ。」
「破談に！？当人同士は、いい迷惑じゃないですか！？」
「高貴な方々はそうでもないぜ。まぁ・・・好きあってる者同士は気の毒だな。」
「そういうところは、見逃してもらう代わりに、郭将軍へ謝罪料として大金を払うんだ。勅命を内緒で見逃していただく謝罪料って名目でよ！もちろん郭将軍がその値段を決めるんだがな。」
「まぁ、話を持ちかけて相手がのってくりゃー将軍様の思い通りよ！紹介料として花嫁の親から金を取る。その花嫁をなじみの宦官に紹介して、その宦官から紹介料を取る。」
「それで金を集めると・・・！？」
「その通り！金がほしい時は、金を持ってる嫁入りの決まった美人のいる家を狙う。金がそんなに必要じゃない時は、身分に関係なく、嫁入りの決まっている美人のいる家を狙う。」
「要（よう）は、金か女のどっちかハズレても、どっちかで得すりゃそれで

いいわけさ！」
「郭将軍とすれば、金と美女の両方が手に入る美味しいお仕事さ。でもなぁ・・・」
「なんです？」
「いやな・・・大金を出しても、見逃してくれねぇ場合もあるんだ。」
「え？」
「そういう時は、金がほしいんじゃなくて、娘目当ての時らしいぜ。」
「娘目当て・・・？」
「ある金持ちは、金で見逃してもらおうと頼み込んだが、強引に連れて行かれちまったらしいぜ。」
「え！？そ、それは――――――」
（――――俺達のことか！？）
林山の脳裏に、郭勇武とのやり取りがよみがえる。
（もう都で噂になっていたのか！？）
しかし、そんな林山の考えはすぐに否定された。
「そういや、そんな話もあったなぁ・・・。ありゃ確か、一年ぐらい前のことだろう？」
「い、一年前！？」
（俺と星蓮のことじゃないのか・・・！！）
相手の言葉に安堵する林山。だが、ホッとしたのもつかの間だった。

「あれはひどかったよなぁ～婚礼の準備中に、いきなり郭将軍が押しかけてきてさ。」
「婚礼の準備中に？」
「ああ。花婿が、花嫁の家に来ててな。その時に勅命だとか言って上がりこんでよ・・・。」
「その２人は、好きあってる者同士だった。だから親父も、金欲しさに将軍が来たと思ってな・・・金で解決しようとしたんだが――――」
「ところが将軍は、『誰が賄賂を渡せと言った!?この無礼者が!』と言って、父親を散々痛めつけてな・・・。」

（・・・似ている・・・。）

話の内容が同じだった。自分の時と驚くほど同じだった。俺も、結婚のことで星蓮の家に行った時に郭勇武が現れた。そして、【勅命】という陛下の後ろ盾で星蓮を連れ去ったのだ。

「それで・・・その後の２人は？」

自分でも、なぜそんな質問をしたのかわからなかった。
その花嫁は強引に連れて行かれたということを、林山は今聞いたばかりだった。
だが、思わず尋ねていた。自分と星蓮と同じ状態に陥った恋人達の末路。

（最悪の場合・・・俺達も、その恋人と同じ道をたどるのかもしれない・・・。）

そんな林山思いが、話の続きをせがませた。林山の言葉に、職人達を束ねている棟梁が重い口を開いた。

「2人共死んじまったよ。」

「死んだ!?まさか・・・心中を!?」

一緒になれないなら、2人一緒に死んだということか!?
2人で、郭勇武から逃げて、逃げ切れなくてそれで死んだというのか!?
誰にも邪魔をされないように・・・互いの愛情を守るために!?

林山の頭の中で、愛の逃避行をして、互いに手を取り合って心中する男女の物語が浮かぶ。
美しい愛の形を想像した林山だったが、棟梁は、そうじゃねぇ、と低い声で言った。

「結果的には心中になる・・・。だが、少し順番が違うんだ。」

「順番!?」

「花嫁を守ろうと抵抗した花婿が、花嫁の目の前で切り殺されたんだよ。」

「切り殺された!?」

「ああ・・・惚れた男を殺された花嫁は、そのまま将軍に連れて行かれた。そして、入廷する前日に、かんざしで喉(のど)を突(つ)いて死んだんだ。恋人からもらったかんざしでな・・・。」

「そんな・・・!」

「幸い、後宮に入る前だったから死体は返してもらえたが、残された家族も惨(みじ)めなもんさ。」

かわいいそうになぁ、と言った棟梁の言葉で、その場は静かになった。

（心中だ・・・。）

彼らの言う通り、順番は違うが、その恋人達は心中したのだ。

愛する女性を救おうとして殺された男。

自分のせいで、愛する男性を失った女。

（同じことをしただろう・・・。）

もしあの時、星蓮が側にいたら、俺達もその恋人達と同じ結末になっていただろう。

俺は、星蓮を守るためなら命は惜しくない。

星蓮も、俺のためなら死を選ぶだろう。

でも、だからといって、生きることへの執着がないわけではない。

最高権力者の命に背いてでも、２人で生きていける覚悟はある。

覚悟はあるが――――――

（星蓮が死んだら、俺は生きて行けない・・・！）

俺は星蓮以上に、好きな相手はできないだろう。

星蓮が好きだから、親が決めた縁談を断って彼女を選んだ。

断った相手には悪いとは思ったが、星蓮のためなら俺は悪者でいい。

それぐらい星蓮を愛している。

本音を言えば、星影の提案を聞いた時うれしかった。

口では星影の作戦に反対したが、本心は違った。

星影を犠牲にしてでも、星蓮と一緒になりたかった。

（ひどい男だ・・・俺は・・・・！）

周りは、俺が穏やかで優しい男だと言う。でも、本当は違う。
薄汚い部分を持っている男。腹の底では、惚れた女のためなら誰かを犠牲にしても構わないと思っている。

（ごめんな・・・星影。）

自分達のために、奮闘（ふんとう）してくれている友であり、義姉である星影にわびる。
そして改めて、郭勇武に怒りを覚えた。
目潰（めつぶ）しを使って、自分の叩きのめしたやり方に怒りを覚えた。それと同時に、そんな郭勇武の卑怯な手口でやられた自分を情けなく思った。
俺が不覚を取らなければ、星影はこんな苦労をしなくてすんだはずだ。

（それに――――・・・・・）

2人が薬妙寺に行っていたことにしても、俺が関係していることは間違いなかった。
李桂蓮――――――――元・婚約者とのあらぬ噂が原因だろう。

（俺が全部悪いんだ・・・・！）

都に来てから、毎日皇居のある方を俺は見る。
星影と星蓮の無事を祈りながら。
星蓮が生きていることを願いながら、何度も後宮の方を見る。
星蓮と再会できたら、きちんと彼女に話そう。桂蓮とのことについて。
だから星蓮、間違っても自害なんてしないでくれ！！
もし、万が一星蓮が命を絶っていたら――――

（俺は皇帝と刺し違えて死ぬ・・・！お前のあとを、追うからな・・・！！）

「大丈夫か、兄ちゃん？顔色が悪いぞ。」

その一言で我に返る林山。

「いえ、気にしないでください。なんでもないですから。」

「馬鹿言え！なんでもないわけねーだろ。わかってるって！今の話をきけば誰だって胸糞悪くなるよな。」

「ええ・・・まあ。」

愛想笑いをした林山。その心中は、星蓮への思いでいっぱいだった。

そして、星影に対しても――――――――――

（ごめんな・・・星影。ごめんな・・・！！）

俺がふがいないばっかりに、女のお前にばっかり無理させて・・・！あの時だってそうだ。

三年前のあの時だって――――――――――――――――――！！

“私がやるよ！！”

遠い昔の記憶が、林山の心を侵食する。

あの時のような思いは二度とごめんだ！

そう思い、持っていた器を机の上に置いた。

（今の俺は、後戻りはしない。するつもりはない！！）

器に入った酒に映る自分を見ながら、林山は強く決心するのだった。

第十九話　本物、奔走中（後書き）

小説を大幅修正したので、新作もアップしました（苦笑）
本編とは関係ありませんが、日本にも『侠客』がいたそうですよ！
江戸時代は、町奴（マチヤツコ）・鳶（トビ）とも言われていたらしいです！ただ・・・江戸時代あたりの歴史にそんなに詳しくないので、間違っていたらごめんなさい（汗）！！もし、詳しい方がいたら、こっそり教えてください・・・！！

第二十話　危険は突然やってくる

酒の入った器を握り締める安林山（あんりんざん）。
そんな林山に、そう怖がるな、と笑いながら、職人の一人が言った。
「いくら、郭将軍が悪名高いといっても、俺らには関係ないことだ！」
「ただし、美人を身内に持つ者は気をつけんといけんがなぁ～」
「まぁ、兄ちゃんは男だから大丈夫じゃ！」
「馬鹿！陛下は美形が好物なんだぜ！？そうなると、この兄ちゃんも危ないだろう？」
「そりゃ言えてるな！オメーの横にいると、ますます綺麗に見えるからなぁ～」
「なんだと、テメー！？」
そう言って爆笑する職人達。その様子に、林山も思わず笑みを浮かべる。そんな若者を見ながら棟梁は言った。
「だから兄ちゃん、気をつけろよ！郭将軍に目をつけられたら最期！老若男女にかかわらず、首が飛んじまう。」
「それが庶民でもなであってもな！」
人差し指を立てると、首の前で真横に引く仕草をする男達。
「ハハハ・・・そうですね・・・。」
（というか、もうすでに郭勇武の犠牲者なんだが・・・。）
美人の奥さんをもらおうとして、郭勇武に強奪されたんですけど。

しかも、それを奪い返すために、親友兼義理の姉と一緒に都まで来たんですけど。
おまけに、その姉と入れ替わって、男の大事な部分を死守したんですけど。

「気をつけろよ！！」
「はい・・・気をつけます。」

（捕まらないようにね・・・。）

苦笑しながら言う林山。

今、自分達がしようとしていることがばれてしまえば、間違いなくそうなることを思いだしてしまったからだ。
笑みを浮かべる林山と一緒に笑う男達だったが、そのうちの一人が遠慮がちに尋ねた。

「なあ、兄ちゃん・・・あんた、ここの人間じゃないだろう？」
「え！？わかるんですか。」
「そりゃそうだよ。ここの人間はみんな知ってるからさ聞かねーよ。」
「大体、なんだってこんな物騒な話を聞くんだ？」
「はい、ちょっと噂を小耳にはだんだもので・・・。つい、好奇心（こうきしん）の虫がうずきまして。」

（さすがに本当の事は言えないからな。）

相手が信じる信じないは別として適当に答える。

「好奇心ね～まあ若い頃は誰でもそうだよな。」

「まあな。俺もそうだったし！」
どうやら自分の作り話を信じてくれたらしい。ホッと胸をなでおろす林山。
しかし、次の瞬間その心臓が飛び上がった。

「茶化してんじゃねぇぞ！」

怒鳴り声に近いドスの聞いた声。その声にびっくりして顔をあげると、そこには一人の男が立っていた。年のころは二十代後半ぐらいだった。

「あ、凌の旦那！」

「馬鹿が・・・！笑い話にしてんじゃねぇぞ！！」

彼の声に周りの者は黙り込む。林山もそうだった。周りの様子からしてこの男が只者ではないと察したからだ。

「おい、兄ちゃん！」
「・・・俺のことですか？」
「お前以外に誰がいるってんだよ！？」

相手の偉そうな態度が、癪に障ったがここでもめるのは禁物だった。目だけで相手を見ると、男は林山の目の前で怒鳴りつけた。

「あのな、好奇心旺盛なのは結構だが、噂話で命をとられることな

んぞいくらでもあるんだぞ!?」
「あ・・・すみません。」
「変な虫は、心のかごにしまっとけ!二度とつまんねーこと口にすんじゃねーぞ!お前らもだ!!」

そう言うと、男は二つ隣の席まで行くと腰を下ろした。男が仲間らしい男達と話しはじめたのを見届けると林山は彼らに尋ねた。

「あの、今の人は一体・・・?」
「『百面夜叉の義烈』さんだよ。」
「『百面夜叉の義烈』?」
「ああ、ここらの悪共の元締めで名を凌義烈って男さ。面倒見もいいし、気前もいいから、結構な数の食客抱えててよ。」
「食客を?」
「そうなんだよ。悪い人ではないんだけどな。口が悪いって言うか・・・。」
「怒らせるとかなりおっかないんだ!」
「まぁ、わかりやすく言えば、腕っ節の強い、肝の据わった『侠客』ってとこかな。」
「侠客・・・。」

林山の脳裏に、故郷にいる一人の男の姿が浮かぶ。

(そういえば、厳師匠も侠客だったよな・・・。)

侠客とは、義理人情を第一と考える集団のことである。一般的に、徒党を組んでいた者のことを称してそう呼んでいた。無頼者が多く、なかにはお尋ね者までいたという。徒党によって決まりあがり、自分達の決まりで動くことが多かった。
それに対して、食客というのは、その名の通り、食べさせてもらっ

ている客人のことである。何かの理由で、その家で食事の面倒を見てもらう代わりに、なにかしらの用事をする人だ。用心棒とはまた違って、自分となにかしら縁のある人物のところで世話になる場合が多い。
その食客を多く世話しているということは、それだけの経済力があるということである。

（侠客が食客の面倒を見るか・・・。）

“別に珍しいことじゃない。甲斐性があれば、面倒を見てくれるぞ。”

厳師匠の言葉が、林山の頭に響く。かつて、厳師匠が各地を流浪していたころの話を教えてもらっている時だった。厳師匠は、ある町で有力な侠客の元で食客として過ごしたことがあったという。
「侠客が、大勢の食客を抱(かか)えてるってことは、それだけ大きな顔ができるってことさ。」
「どういう意味ですか？」
「食客は、食事やら何やらの面倒を見てもらってるんだぜ？金持ちや役人ならともかく、それを侠客が面倒見てれば最強じゃねぇか？」
「最強・・・？」
「つまりな、林山。侠客ってのは、義理人情で動くものだ。義に背くことなら、例え相手が役人であっても指図(さしず)は受けん。仮に、役人ともめたとしても、侠客の方が強いに決まってる。」
「でも、力だけでは勝てませんよ？」
「なにも、腕っ節の強い奴ばっかりが侠客や食客をしてるわけじゃねぇ！知恵の回る奴だって大勢いるんだぜ？まぁ・・・知恵といっても、悪がつくがな！」

「しかし、役人を相手にそんな無茶をするのは――――」
「おかしいぜ。だが、それが侠客・食客だ。」
「え？」
「侠客は、役人や金持ち共が、裏でやってる悪行が気に入らねぇんだ。『義』に反するからな・・・。食客も、食わせてもらってる『恩』がある。だから、その家の主人がやれといわれれば必ず実行する。」
「確かに・・・道理にあっていますが――――」
「『義に従って動く侠客』と、その侠客へ『恩を返そうとして動く食客』・・・強いに決まってらぁ。」
「師匠・・・。」
「この国で一番強いのは奴らよ！少なくとも俺は、そう思ってるんだぜ？」
そう言って笑う厳師匠は、いつもより楽しそうだった。
（損得なしに動く侠客と、それに従う食客・・・か。）
そこまで思い出すと、林山は小さくため息をつく。
「・・・そうですか。」
記憶のなかの厳師匠に告げるように、言葉として発する林山。
「そういうことよ！凌の旦那のお声もかかったし、この話は終いにしようぜ！？」
林山の考えなど知らない男達は、そう言って話を終わらせた。
（確かに、ここらが潮時（しおどき）だな・・・。）

凌義烈のことが少し気になったが今はそれどころではない。だが、これが言うようにこれ以上の検索は危険かもしれない。

「そうですね。彼の言う通り、郭勇武将軍のことを聞くのはよしときます。『百面夜叉の義烈』にまた怒られたら堪りませんからね。」

「ハハハ！そりゃそうだ！またな坊主！」

「気をつけて帰れよ！」

林山はゆっくりと立ち上がると彼らに礼を言い、勘定を済ませてその場を後にしようした時だった。

「うわ！」

「おっとすまねぇ。」

背中に体重を感じる。見るとそこには、

「あなたは・・・・凌義烈・・・殿」

林山にぶつかったのは他でもない、百面夜叉の義烈だった。その手には酒瓶を抱えていた。よろけるように林山に倒れこむのを慌てて支えるが・・・・。見たところそれほど酔っているようには見えなかった。

「なあ、郭勇武のことがそんなに知りてぇなら・・・。」

「え？」

耳元で囁く相手に、林山もなにかを感じ取る。

「『情報屋』に聞くって手もある。」
「・・・情報屋？」
「・・・・あんまり、誰彼かまわず聞きまわるな。みんながみんな良い人じゃねぇ・・・。身内だって、敵になる世の中だぞ？」

そう言うと、彼はすぐさま林山から離れると何事もなかったかのように席に戻った。
不審に思いつつも林山は店を後にしたのだった。

※

林山が、酒屋から出ると外はかなり活気付いていた。
町は人で溢れ、皆忙しそうに行き来する。多くの露店が並び立ち、買い物客などでにぎわっていた。藍田と比べて長安は本当になにからなにまで違っていた。町中が輝いている。
現皇帝が即位してから早三十年。国の繁栄は皇帝の力を表す。豊かで平和であるほどその時代の皇帝が優れていると言うことだった。
それだけ現皇帝が期待されているということなのだが・・・。

（いくらなんでも人妻を盗ることはないだろう・・・。）

皇族の慣わしや決まりなどは、むろん庶民が知るはずがない。ただ、妻の数が多ければ多いほど、その国は優れているとされている。

（皇帝にとって、妻とはただの勲章でしかないのか・・・。）

そう考えると、静まったはずの怒りが再び燃え上がる。

皇帝なら、女はよりどりみどり。何千という数の女がいる。それでも、まだ足りないというのか？

（俺は、星蓮がいてくれればいい・・・！！）

いや、彼女しか妻には考えられない。
例え、星蓮が皇帝と枕を共にしていようともかまわない。
身を汚されてしまっていても気にしない。
俺と星蓮の愛は、それぐらいで壊れるものではない。
愛し合う思いさえあれば、俺達は何度でもやり直せる。

（星蓮・・・！）

愛する女性の仕草を思い出し、息苦しくなる林山。

（もうやめよう！考えたって、星蓮が目の前に現れるわけじゃない！！）

気を紛らわせようと、意識を違う方へと向ける。星蓮以外のことを必死で考えた。
考えて、考えて、考えて、考えているうちに、不意に先ほどの出来事が頭をよぎる。

（なんだったんだろう・・・あれは？）

酒場で出会った一人の男。

「百面夜叉の義烈・・・か。」

さきほどの相手の行動が、林山は気がかりだった。
今日会ったばかりの相手。まるで自分だけに伝えるために、わざと倒れこんできた男。

（なにか意味があったのか・・・？）

そこまで考えた時だった。林山は何者かの視線を感じ取る。それは明らかに自分に向けられていた。

（気のせいかもしれないが・・・確かめておくか。）

林山は、相手に悟られないように平静を装いながら歩き続けた。何気なく、立ち止まってみる。すると、それに合わせるように後をつけている人物も立ち止まる。それを数回繰り返す。

（間違いない！やっぱりつけられている・・・！！）

そう確信すると、林山は方向転換した。彼はその足で宿ではなく、人気のない道へと向かう。その後を追うように人影がついてきた。かすかに自分の足音以外の音が重なる。

足音からして・・・一人。

（ここは一つ・・・やるか？）

相手がついてくるのを確認すると林山は行動に出た。

歩く早さを上げると、近くの路地へと入る。入ったと同時に右足に力を込めると勢いよく飛び上がった。左足で左側の路地の壁を蹴る。さらに反対の足で右の壁を蹴る。それを数回繰り返す。ほんの数秒の間に彼の体はあっという間に、壁と壁の間の上の方へと移動した。両足を開き、壁にその身を任せる。林山はその状態で待った。自分をつけている人物が路地に入ってくるのを。ほどなくして一人の男が路地に入ってきたが、一瞬驚いたように足を止める。それは明らかに誰かを探すような仕草をしていた。男が一歩前に出る。

（――――――――――今だ！）

林山は相手の背後に舞い降りた。

「お前は！？」

相手の男を見た瞬間、林山の体に戦慄（せんりつ）が走った。

「凌・・・義烈・・・・！？」

「あーあ！見つかっちまったか。」

そこには先ほどの酒屋であった凌義烈の姿があった。

第二十話　危険は突然やってくる（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！このまま勢いに乗って書いていきたいです！！

※誤字・脱字がありましたら、こっそり教えてください（汗）お願いします・・・！！

第二十一話　男の駆け引き

「・・・なんのようだ?」

林山は素早く、腰に下げていた刀を抜くと男の首につけつける。一瞬の無駄もない身のこなしだった。

（――――――周りに仲間の気配はない。）

「何故俺をつけていた?」

軽く睨みつけながら、再度問いただす林山。それに対して相手は、怖がる素振りを見せるどころか、逆に笑い飛ばしながら言った。

「ハハハ!随分物騒だな。しかし、見事なもんだ!」

相手の態度に彼の眉間にしわがよる。そんな林山に凌義烈は低めの声で囁いた。

「・・・お前、郭勇武のことについて詳しく知りたいんだろう?」

「なんのことだ?」

「とぼけなくてもいいだろう?散々店の客に聞きまわっといてよ。」

相手がどういうつもりかは知らないが、理由を言うつもりなど毛頭無かった。

「・・・別に。単に興味本位だ。」

刀を突きつけたまま林山は答える。

「そいつは嘘だな。」

「・・・なんの根拠があってそんなことを言う？」
「お前の顔を見りゃわかる。それもかなり深刻なんだろう？」
鼻で笑う男に、林山は刀の柄を持ち直しながら聞く。
「貴様、何者だ？」
「店で聞かなかったか？俺のことを？」
「ここらのゴロツキ共の元締め、凌義烈。『百面夜叉の義烈』だろう？」
「まあ、大体はあってるがちょっと違うな。」
「なにが違うんだ？」
「お前俺の通り名の『百面』はどういう意味か知ってるか？」
「初対面なのに知るわけないだろう！」
林山の言葉に、そりゃそうだ、と頷く凌義烈。
（わかってるなら、最初から言うな！）
「じゃあ教えといてやるよ。『百面』て、のは百通りの顔があるから『百面』て、言うんだ。ここらの元締めだけが俺の仕事じゃねぇ。」
「元締め以外になにをしてると言うんだ？」
林山の問いに、待ってました、と言わんばかりに満面の笑みで凌義烈は答えた。
「まあ、いろいろやってるが、今日は情報屋をするつもりだ。」
「情報屋！？」
「ああ。特定の人物について知っている限りのことを教え、報酬しだいではかなり正確なことを調べるって言えばわかるよな？」

「説明しなくても意味ぐらいは知っている！」
「そう怒るな。情報屋と言っても百のうちの一つだがな。」
（こいつが？どう見てもゴロツキ共の頭にしか見えないが・・・。）
「それで？その情報屋が俺になんのようだ？」
「単刀直入に言う。お前俺から情報を買わないか？」
「情報！？誰の？」
「郭勇武についての情報に決まってるだろう。」
「郭勇武の！？」
相手の素性はともかく、内容には興味があった。しかし・・・。
「断る・・・！」
「断る！？俺の情報はここらじゃ一番信用できるし、絶対損はさせないぜ？」
（うそ臭い・・・どうも今一信用できない。）
彼がそう思ったときだった。
「うそ臭いってか！？そりゃないな！！」
「な・・！」
（こいつ・・・！俺の考えていることがわかるのか！？）
動揺する林山を見ながらさらに凌義烈は言った。
「なんでわかるかって？そりゃ、顔見りゃわかるっての！」

下品に笑う凌義烈に林山は不愉快になった。
普段から感情を表に出さないようにしている林山にとっては、彼にそんなことを言われるのは正直心外だった。そんな林山彼の気持ちを知ってか知らずか、凌義烈は話を続ける。

「人の考えてることがわからなきゃ、情報屋はできねーよ。」

薄気味悪く笑う男。こいつの言うことを聞いていいものか・・。そもそも今まで情報屋なるものの世話になったことがないからわからない。そしてもう一つわからないのは・・・

「なんで俺なんだ?」

この男はいったい俺のどこが気に入ったと言うのだ?その疑問に男はあっさりと答えた。

「理由は簡単さ。あんたが良いところの坊ちゃんだからだ。」
「それも見ればわかると言うことか?」
「まあな。」
「つまり金持ちなら誰でも言いと言うことか?」

さげすむように林山が言うと、男はニヤニヤしながら答えた。

「最も、俺は俺の好みに合ったやつにしか情報は売らんがな。」

嘗(な)め回すように自分を見る男に、林山は背筋に悪寒を覚える。

「あいにく俺はその気はない。失せろ!」

はき捨てるように林山は言った。それに対して男は、

「勘違いするな！俺だってねーよ！女の方が大好きだ。」
「じゃあ、その大好きな女に売れば良いだろう。」
「残念だが俺に近づいてくるのは可愛い女だけだ。」

服の襟を少しはたけさせながら言う。男の胸に目をやった林山は思わずぎょっとした。
彼の首には無数の赤い痕がついていた。俗に言う、キスマーク・・・口付けの跡だった。

「なっ！？そっ、そんなものを見せるな！！」
「ハハハ、照れてるのかい！？無理もねぇ、ガキには目の毒だったな。」
「だ、誰がガキだ！？」
「まあ、俺の気配を察知したのは褒めてやるが、あっちの方は気がつかなかったみたいだな。」
「なに！？」

ふいに自分から視線をそらす相手。

「知りたいか？」
「・・・言ってみろ。」

何事かと思い、林山も凌義烈と同じ方向を見る。

「方法は簡単さ。まず、そこにある竹の後ろに隠れろ。こんな風にだ。」

言うなり、路地の入り口の壁に立てかけてある竹の束の後ろに身を潜（ひそ）める。

「・・・それがなんだと言うんだ？」

狭い隙間に、腰をかがめてガニマタになる男。はっきり言ってかっこ悪い姿だった。

「いいからやってみろ。」

そういって手招きをする。

（こいつ・・・俺を馬鹿にしているのか？）

そう思いつつ、渋々（しぶしぶ）同じように竹の背後に隠れる林山。

そういう素直なところが彼の美点と言えるのだが。

「で？これがどんな意味が・・・」

そう言いかけた時だった。罵声にも近い声が当たりに響く。

「本当にこっちにいったのか！？」

「はい！間違いありません！お役人様！」

聞き覚えのある声にはっとする。林山は目を疑った。そこには先ほどまで一緒に話していた男達の一人だったからだ。

「その若者が、郭将軍様の悪口を言ってたんですよ！本当です！！」

「よく知らせてくれた。捕まえしだい礼は弾んでやる。」

「へ、へい！ありがとうございます。」

何回も頭を下げながら、媚(こび)を売る男の姿。

「いいか！一般人だからって手加減するな！見つけしだい捕まえろ！くれぐれも殺すなよ！」

隊長らしい男が大声を張り上げる。

「将軍の悪口を言うものはなんびとたりとも容赦するな！！行け！！」

その声に掛け声とともに足音も遠ざかっていった。

「・・・何故だ・・・？」

彼らが立ち去ってからようやくでた言葉だった。

「あの男も不満を言っていたのに、どうして・・・。」

「そういうもんだ。口ではうまいこと言ってても、腹の中ではなに考えてるかわかりゃしない。」

ひどく冷静に凌義烈は言った。

“皆が皆良い人じゃねぇ・・・”

先ほどの彼の言葉が頭をよぎる。そうか、そういうことだったのか。

「俺は――――危(あや)うく役人に売られかけたということか・・・。」

「当たりだ。お偉いさんの悪口を密告すればな、それ相応の礼がもらえるからな。」
「その謝礼欲しさに俺を売ったと!?」
「そうだ。それが土地のものでなければなおさらやりやすい。」
「よそ者だからしたのか!?」
「半分当たってるな。ここの者なら、郭勇武の悪口を言えばどうなるかわかってる。だからいわねーし、聞かねーよ!」

林山を見ながら凌義烈は言った。

「ガキはいい。危険に対してひどく鈍感だ。だから、ああいう者のカモになる。それも自ら進んでな。」
「――――俺はガキじゃない!」
「ガキさ。聞きたいけど聞けない、確かめるのが怖い。だから俺に消えろと言う。」
「!?」
「大人の駆け引きができないようじゃ、いつまでたってもガキのままさ。」

悔しいがなにも言えなかった。
言い返すこともできず、黙り込む林山に、相手は小声で告げた。

「もし、大人として話を聞きたいのなら、耳寄りの情報を教えてやるよ・・・。」

真顔で凌義烈は言った。さっきとは打って変わっての真面目な態度に林山は内心戸惑う。ここまで断言するということは、よほど自分の情報に自身があるのか。ガキ扱いされたのは癪に障ったが、この男の話に興味を持ったのは事実だった。早い話が聞いてみたくなったのだ。

「で、どうするんだ?買うか?買わないか?」

男の話が嘘か本当か・・・・確かめるためにも聞いておく必要があるだろう。

林山は決心した。

「・・・受け取れ。」

懐から銀を取り出すとそれを相手に向かって投げた。それを受け取ると、男は満足そうに懐にしまった。

「相談成立、だな?」

「勘違いするな!先に言っておくが、もし貴様の話が嘘ならば・・・。」

「金を返せって?」

「俺の前から失せろ・・・!」

これは本音だった。ホラ話に付き合うほど暇ではない。だからハッキリと言った。

「勉強料ということで、貴様に恵(めぐ)んでやる・・・!!」

ある意味自分に対する罰(ばつ)でもあった。仮に偽りだったとすれば、真意を見抜けなかった自分に対する罰金だ。

「こいつ高い勉強料だ。信用されてないとはな。」

相手は気を悪くすることなく、口元だけで笑ってみせる。

「いいから話せよ。」

「まあ、そう焦るな。ここじゃあ目立つ。それに今は役人が駆け回っている。ひとまずは俺の隠れ家に来ないか？」

「お前のところに？」

「そうだ。ぐずぐずしてると役人にとっ捕まるぞ！」

「・・・わかった。行こう。」

凌義烈の申し出に快くとはいえないが素直に従う林山。

正体のつかめない凌義烈の登場により、事態は思わぬ方向へと向かうことを、今の林山は知るよしもなかった。

第二十一話　男の駆け引き（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！あまり、だらだら書き過ぎないようにしようと思います（笑）

次回もきちんと書くので、読んでやってください！！

よろしくお願いします！！

第二十二話　それぞれの夜～再会はにぎやかに～

「本当にもう！びっくりしましたよ！！」

興奮気味に言う空飛に、星影は苦笑いをしつつも頷いた。

（これで何回、言われたことか・・・。）

ここは高級宦官用に設けられた部屋の一室。
そこに、安林山こと劉星影、王琥珀、張空飛の三人の姿があった。

「私もまさか、三人でこうして過ごせるなんて思ってもみなかったよ。」

星影に、同調するように二人も頷いた。事の発端は、二刻ほど前にさかのぼる。

黄藩によって強制連行された星影は、高級宦官に与えられる個室へと放り込まれた。
文句を言おうとする星影を目だけで脅すと、黄藩はさっさと部屋から出て行ってしまった。
それもご丁寧に外から鍵をかけて。

「私は罪人かぁ!?ここから出せぇ――――!!」

扉を揺らして怒鳴り続けて一刻半。抵抗したところで誰も来てくれないことはなんとなくわかっていた。これじゃあ林山の元に行けないな、と考えていたその時だった。

「本当に宦官らしくないね。」

鍵が外れる音と共に、見慣れた顔が二つ彼女の前に現れた。

「琥珀!?空飛!?」

そこには仕事仲間兼友達である、王琥珀と張空飛の姿があった。

「林山!会いたかったよ!!無事でよかった・・・・!!」

一直線に、自分の元に駆け寄ってきて抱きつく空飛。その頬には涙のあとがあった。

「すまない・・・心配をかけたな。でも、二人がどうしてここに・・・」

言いかけて彼女はあることを思い出す。

“貴方の荷物は、同じ整理係りの王琥珀と張空飛に運んでおくように言っておきます。”

「まさか・・・黄藩様の命令で来たのか!?」

「『黄藩殿』だろう、林山?私達は、黄藩様のご命令で君の荷物を

届けに来たんだ。」

予想通りの答えに納得するも、内心寂しい気持ちになる星影。

（やっぱりな・・・荷物を置いたら、そのまま帰っちゃうのかな。）

しかし、琥珀の返事は彼女の予想していたものとはまったく違っていた。

「黄藩様は、私達に君の荷物を運ぶように言ったうえで『今夜一晩、林山殿の側で身の回りの世話をするように。』と言われてね。空飛と二人でここまで来たわけさ。」

「黄藩様が！？」

驚く星影に琥珀は言った。

「だから、君は『黄藩殿』だろう？聞いたよ、黄藩様と随分派手な押し問答をしたんだってな？」

「え？」

意地悪そうに言う琥珀。そう言うと、クックと小さく声をたてて笑い始める。

「そうですよ！『陛下に会わせろ！』と言って大騒ぎしたのでしょう！？あなたという人は、どうしてそう無茶なことを・・・！！」

怒った口調で言う空飛だったが、その顔には笑みがこぼれていた。

「・・・黄藩様が、私のために二人を遣わしてくれるなんて、思ってもみなかったからさ。」

かみしめるように言うと、改めて二人を見る星影。

「だから『黄藩殿』でしょう？黄藩様、言っていましたよ。『私の手には負えない。お前達早いところ行って、林山をなんとこかしてきておくれ！』って。」

「そうそう。『あのまま明日まで放置していたら、部屋を突き破って陛下のもとに行くかもしれない。』ってね。」

「部屋を突き破るって・・・。」

（あの人、私をなんだと思っているんだろう・・・。）

不満げに思う星影に、すかさず空飛が言った。

「でも林山ならやりかねませんよね？壁とか突き破っちゃいそうです。」

「おい！失礼なことを言うな、空飛！私は部屋を突き破ったりはしない！」

「では、どうするつもりだったんだ？」

「決まってるだろう！！」

ニヤニヤしながら尋ねる琥珀に、星影はハッキリとした声で言った。

「解体するだけだっ！！」

「「意味的には同じじゃないか！？」」

声を揃えて言う琥珀と空飛。

「細かいところが違うんだ！細かいところが！！」
「どちらにせよ、暴れるつもりだったんだろう？呆れた奴だな・・・。」
「林山てば、おかしいですよ～！」
「うるさいな！どうせ私は変わり者だ！」

冗談交じりで言い合う三人。そして、誰からともなく笑いあった。
一通り笑ったところで、琥珀は星影に問うた。

「しかし林山。こんなすばらしい部屋を、本当に君は壊すことができるのか？」

琥珀にそう言われ、改めて部屋の中を見渡す星影。三人のいる部屋はそれまでの汚くて狭いものとは違い、広くて綺麗な場所だった。

「そうですよ！こんな素敵な部屋があるなんて・・・驚きました。」
「ああ・・・宮廷って本当に広いんだね。」

しみじみと言う空飛に、星影も頷きながら答えた。そんな二人を見ながら琥珀は言った。

「それだけじゃない。君のお世話をすることを条件に、今日はお休みを頂いたんだ。むしろ、こっちの方が驚くべきことじゃないかな？」

「どうして休みを貰ったからといって驚くんだ？休みはいつでももらえるものじゃないのか？」

言った瞬間、二人の表情が引きつる。その様子に、自分がまたおかしな事を言ったんだな、と確信する星影。

「あのね、林山・・・下級宦官にはお休みなんてものはないんですよ！年がら年中働かないといけないんです！！」

「休みがない！！？」

古来から中国王朝では、一般の宦官には休みというものがない。それは、彼らが宮廷における奴隷だったからだ。ただ、身分の高い、高級宦官に関しては例外である。
それ以外の宦官、下級宦官が休める時といえば、永遠の眠りにつく時のみだ。

つまり、多くの宦官が【死】を迎えなければ、ゆっくりと休むことはできなかったのである。

「だから、下級宦官として休みがもらえるという事は異例なのだよ。」

「その証拠に、ここ何日も働き詰めだったでしょ？気づかなかったんですか！？」

「いや・・・てっきり、楊律明と呂文京達の嫌がらせかと思ってたから・・・。」

「ま、まあ確かにそういった考え方もありますが・・・それにしては・・・。」

「鈍いな、君は・・・。」

大きなお世話だ、と星影は思ったが、さすがに言葉には出せなかった。そんな星影に、さらに琥珀は質問をした。

「まさかとは思うが・・・君、自分の『証(あかし)』はきちんと持っているのか？」

「証(あかし)？」

（なんだろう？宦官証明書のことかな？）

「琥珀、いくらなんでもそれはないですよ！『男性だった証』を失くす人はいませんよ！」

（男性だった証？？）

意味がわからない星影は、無言で空飛を見つめる。それに気がついた空飛が声をかけた。

「林山、気にしちゃだめですよ！琥珀はからかってるだけなんですから！」

「そ、そうなのか？」

恐る恐る琥珀を見れば、相手はさわやかな口調で言った。

「林山・・・『男性器』だけは、なくさないようにね。」

「だっ・・・男性器！！？」

琥珀の言葉に、星影は真っ赤になる。

（男性器って！？え、え・・・えええぇぇぇ――――――――！！？）

「林山・・・まさか君、男性器のことまで――」

「――――――馬鹿野郎ぉ！！変なこと言うなぁ！！！」

琥珀の問いに答える代わりに、相手の頭を思いっきりはたく星影。

「痛っ・・・！叩くことはないだろう！？」

「はたいたんだ！！」

「意味的には同じだろう？」

「うるさい！お前が変なこと言うからだ！！」

恥ずかしさもあって、いつも以上に琥珀に食って掛かる星影。琥珀も琥珀で、星影からの暴力による返事が気に入らなかったらしく、厳(きび)しい顔で星影を見た。険悪(けんあく)な空気を察知(さっち)した空飛が、慌てて二人の間に割って入った。

「落ち着いてください、二人共！林山、いくらなんでも暴力は良くないですよ！」

「だ、だって！」

「琥珀も、今のはよくありませんよ。私でも嫌な気分になります！」

「・・・すまない。」

「宦官にとって、『証』は死ぬまで必要な必需品(ひつじゅひん)ですよ！」

「そ、それが『証』って言うのか・・・・？」

ぶっきらぼうに尋ねる星影に、空飛は穏やかな口調で言った。

「ええ。直接的には言いませんが、ここでは『証』と言うのですよ。

」

「へ、へぇ～知らなかったなぁ～」

（切り取ったモノを、死ぬまで持ってるなんて・・・。）

「気にしないでください。私も・・・男性器の隠語を教えていませんでしたからね。これからは、『証』というようにして下さい。」

「あ・・・そうなんだ。」

さいわい空飛は、星影が【男性器を証と呼ぶことを知らなかった】と、理解したらしい。

（そりゃ、確かに男性だった時の証って言えば、証だけどさぁ・・・！）

空飛の説明で、『証』の意味を理解した星影だったが――――――

「でもさ、なんでわざわざ持ってなきゃいけないんだ？」

「「え！？」」

「おかしいだろう？その・・・男せ・・・いや、証をずっと、持ってなきゃいけない理由ってあるのか？」

なぜ、切り取ったものを後生大事に持っていなければいけないのか、星影はわからなかった。自分は女性だからわからないが、男性が男の証を切断するということはかなりの激痛と屈辱を伴うだろう。女性で言えば、胸を切り取られるのと同じくらいつらいかもしれない。そんないやな思いまでして取ったものを、持ち続けるということが理解できなかった。

「いつまでも手元においていておくなんて、未練がましいんじゃな

いか？」

それを見るたびに、その時の苦い思い記憶を呼び覚ますことになるのではないだろうか？

宦官になったことへの後悔の念が起きるのではないだろうか？

そんな星影の問いに、空飛と琥珀は互いに顔を見合わせる。二人は目だけで、なにかしらのやり取りをすると、星影を見ながら言った。

「・・・極楽へいけないんですよ。」

「極楽～？」

「死を迎える際、宦官は必ずあるものをもって黄泉へと旅立つ。それが、男性だった時の『証』なんだよ。」

「その『証』がないと、あの世できちんと扱ってもらえないのです。」

「え！？あの世ではそういう決まりなのか！？」

そんな星影の問いに、琥珀はため息まじりに言った。

「決まりというか・・・儒学に反するだろう？」

「儒学に？」

「そうですよ。儒教の教えでは、子孫繁栄を重要視しています。しかし宦官は、証をとってしまっているので子孫を残せません。よって、とても罪深い存在とされています。」

「罪深い？宦官が！？」

「ええ・・・子孫を残すという義務を果たさないからですよ。ですから、死ぬ時ぐらいは・・・・・人として、五体満足で死を迎えなければいけないのです。」

「果たせないって・・・！だったら、どうして宦官って役職があるんだよ！？」

「・・・異民族の奴隷化の名残（なごり）だよ。もう忘れたのかい？」
「覚えてるよ！覚えてるさ・・・！琥珀が話してくれたことは！ただ――」
（矛盾してる・・・！）
「犯罪行為を、仕事にするなんて・・・おかしいよ！」
「林山！？」
「私は、宦官というものがよくわからない！でも、宦官以上に、この国の身分の高い人々のやり方もわからない！」
「それならなぜ、宦官になったんだ？」
「それは――――・・・！！」
妹を取り戻したいから。
（・・・なーんて、本当の理由なんて言えない。）
言えないからこそ――――
「私だって、いろいろ理由があるんだよ！！」
うそをついて誤魔化す。
「私は――好きで宦官をしてるわけじゃない！！」
そう、単純な理由でしている。良く言えば家族のためだが、悪く言えば自分の意地を通すためだ。
「私は・・・空飛みたいに、家族のために犠牲になったわけじゃない。琥珀みたいに、生活に困って宦官になったわけじゃない。正直・

・・私の理由なんて、二人と比べたら情けないな・・・。」

そう、空飛達のように、誠実な理由じゃない。道理にあわない、犯罪行為を行っている。

「林山・・・？」

「でも・・・こうするしかなかったんだよ・・・。」

妹を助けるためには。親友の幸せのためには。大事な人達のためには。

「ごめんな・・・馬鹿で。」

自分に言い聞かせるように星影は謝った。

「確かめもせずに・・・・決めつけて。」

本物の林山から、『宦官はろくでもない！』と、教えられていたこともあり、薄汚いものたちだと思っていた。だが、実際は違っていた。おいしい思いをしているのはほんの一握り。その一握りの連中の悪評のせいで、宦官全体が悪だという印象を一般人に与えていたのだ。

（私も・・・そんな人間の一人だったんだ。）

噂話だけで、宦官というものを評価していた自分。実際に宦官になって、やっとそのつらさが理解できたのだ。

（馬鹿な話だよな・・・・。）

「無知でごめんね・・・・・。」

そこまで言うと、星影はゆっくりと息を吐いた。そんな星影を見ながら空飛は言った。

「やっぱり・・・林山は変わっていますね。」

「え？」

「変わっていますよ・・・・良い意味で。」

空飛の言葉に、星影は顔を上げる。

「ああ、思ったことをなんでも口にしてしまう。」

星影の動きにあわせるように琥珀も言った。

「あまりにも素直に感想を述べてしまうので、私達の方が困ってしまうよ。」

「困るって・・・？」

「思ったことを、すぐ口に出してしまうという点だよ。注意しようにも、君があまりにも純粋なので、傷つけないように声をかけるのが大変だ。」

「純粋？私が？」

「そうですよ！本当に、人がよすぎます！」

「ああ、馬鹿正直だね。」

「ば、馬鹿正直！？」

「それでいて・・・嫌味がない。だから、良い意味で変わり者だよ。」

そう言うと、星影に笑いかける琥珀。

（・・・・あれ？）

いつもと違う。

琥珀の顔を見た瞬間、星影は本能的にそう感じた。

目の前で微笑む琥珀の顔が、まったく別人のように見えたのだ。

いつもと同じ笑みのはずなのに、何故かひどく、星影の心を引いた。

「どうしたの、林山？」

急に黙り込む星影に、空飛が心配そうに声をかける。問われた星影は、

「いや・・・なんか、琥珀が優しく見えたから。」

「えっ？琥珀はいつも優しいじゃないですか？」

「いや、違うんだ！そういう意味じゃなくて――――・・・・なんて言うか、琥珀の笑顔がすごくやわらかいような・・・。」

「やわらかい？」

琥珀の言葉に、星影は声の主へと視線を向ける。そこには、目を大きく見開く琥珀の姿があった。

「私は・・・そんなにきつい顔をしているかな、林山？」

「ち、違うんだ、琥珀！誤解しないでくれ！そういう意味じゃないんだ！ただ・・・」

「ただ？」

「今の笑顔が、一番自然な感じがしてい――――」

そこまで言って、星影口を閉ざした。

（なに言ってるんだ、私！？）

まるで、琥珀のいつもの笑顔が偽物（にせもの）みたいな言い方じゃないか！？

「わ、悪い！変なことを言って！！」

「いや・・・気にしなくていいよ。」

そう言って、星影に笑み向ける琥珀。しかし、先ほどのもの違って、どこか固いものだった。そんな琥珀の態度に、気まずさを覚える星影。それとは対象的に、琥珀はすぐにいつもの口調で言った。

「本当に君は、変わり者だよ～林山殿？」

からかうような口調で言う琥珀。その言い方がおかしかったのか、茶化しちゃかわいそうですよ、と笑いながら言う空飛。そんな琥珀を見ながら、星影は疑問を感じた。

（本当に、琥珀が陛下を襲ったんだろうか・・・？）

こうして話す限り、琥珀が悪い人間のようには思えなかった。多少、毒舌（どくぜつ）なところはあるが、親しみを持てる部分もあった。

（琥珀を犯人と決めつけるのは・・・よくないかもしれない。）

琥珀がただの宦官ではないのは、昨夜のことでわかっていた。しかし、伯燕（はくえん）という名を持っているのも事実だった。

（もしかしたら・・・琥珀は、なにかわけがあって宦官になったのか？）

そんなことを思いながら、星影は琥珀を見つめた。それに琥珀が気づき、ニッコリと星影に笑いかける。その笑みから余裕のようなものを感じられた。これには星影も、負けじと笑顔を作る。それを見ていた空飛も、楽しそうな笑みを浮かべる。こうして部屋の中は、さまざまな笑みであふれるのだった。

第二十二話　それぞれの夜～再会はにぎやかに～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
本編とは関係ないのですが、三国志の英雄の一人である曹操は宦官の家系です。曹操が悪役にされる理由として、『宦官の子』という家庭事情も含まれているらしいですよ！なんでも、儒学に違反する存在らしいですから・・・。ただ、私もそんなに儒学に詳しくないので、正確なことは言えませんが（大汗）間違ってたらすみません（汗）
あと・・・小説に関係あるようで、関係ないんですが、すごく困ってることがあります。
サブタイトルつけるのが、一番大変で、難儀（なんぎ）しております・・・（涙）サブタイトルが決められなくて、内容が出来上がっていても、アップ出来ずにいたりします・・・（硬直）

第二十三把　それぞれの夜～宦官の生き様～（前書き）

☆警告☆

エグイと感じる表現が含まれています。不快を感じる恐れがありますので、ご注意ください。

・・・と、書きましても、エグイの基準がわからないので、そこまでひどくなくなかったら、すみません（汗）

以上の点をご理解のうえで、お読みください（平伏）

第二十三把　それぞれの夜～宦官の生き様～

部屋の中は、表面上、ほのぼのとした場所へとなっていた。
警戒（けいかい）されないために笑みを浮かべる安林山こと劉星影。
意味ありげな笑みを浮かべる王琥珀。ただ単に、無邪気な笑みを浮かべる張空飛。
三者三様（さんしゃさんよう）が、それぞれにふさわしい笑顔を作っていた。

「ともかく、『証』はなくしてはいけないよ、林山。無駄な出費を防ぐためにもね。」

最初に口を開いたのは琥珀だった。星影を見ながら、悪戯（いたずら）をした子供をしかりつけるような口調で言った。

「無駄な出費？」

間接的な言い方ばかりする琥珀に、星影は疑問を言うしかなかった。
そんな星影に、空飛が意味を説明した。

「『証』をなくしてしまったら、買わなければいけないからですよ。」

「買うってなにを？」
「だから『証』をですよ。」
「男性器を！？」

空飛の言葉に、自分の耳を疑う星影。

「ちょっと林山、隠語（いんご）を使ってくださいよ・・・！はしたな――」
「売ってるものなのか！？つーか、一人一個のものだろう！？」

「ああ、一人に一本と二つの球体がついている。」
「ちょっとお！！琥珀までなに言ってるんですかぁ！？」
「いいじゃん、空飛。事実なんだから。じゃあ、一本と球体が、一緒に売られてるのか？」
「そういうことだね。」
「だから、はしたないので隠語を使ってくださいって！！」

真っ赤な顔でいう空飛に、照れるな、と言いながらからかう星影。
もしこの場に、本物の林山がいれば、どれほど嘆くか、星影自身は理解していないだろう。

「まぁ・・・売られていると言っても、その『証』の半数は、木材や石などで作られたものだけどね。」
「なんだ、偽物か？」
「半数はな。」

安堵した星影に、琥珀は意味ありげに言った。

「え？半数？」
「・・・そう、半数は偽物だが、残りは本物だ。」
「本物！？」
「ああ。正真正銘の『証』も売られている。買うことが出来るのは、高級宦官に限られるがね。」
「なんだよそれ！？なんで本物が売られてるんだ！？いや、それより、購入に関しても、身分制度が適応されているのか！？」
「落ち着いてくれ、林山。順を追って説明しよう。」

質問攻めをする星影に、琥珀は静かな口調で言った。

「宦官の大半が、切り取られた自分の『証』を持っている。ただ、

なかには、自分の『証』を最初から持っていないものもいるんだよ。」

「最初から!?」

「ああ・・・。切断作業の際に、渡されなかった場合とかね。」

「なんで、必要なものを渡さないんだ!?」

「その時の作業や手続きも関係するが・・・切る側が下手な切り方をして、渡せないという場合がある。仮に渡されたとしても、防腐処理をきちんとしてもらえなかったせいで、腐ってしまう場合があるんだよ。」

「腐る!?」

琥珀の言葉に、凍りつく星影。そんな星影に追い討ちをかけるように空飛が言った。

「その話なら、私も聞いたことがありますよ。ある方は、綺麗に切り取って渡してもらえたのですが、後処理が悪かったらしくて腐ってしまったとか。」

「なっ・・・本当なの!?空飛!?」

「ええ・・・。異臭がするので、臭いのする方を見たところ、『証』入った箱に虫が群がっていたそうです。」

「む、虫が・・・!?」

「夏場でしたからね〜・・・幼虫や成虫やらが集まっていたそうですよ。」

星影の頭の中でその映像が流れる。

異臭を放つ肉に群がる虫の姿。想像しただけで吐き気を覚えた。

「最悪だ・・・・!」

(想像した自分に対して!!)

顔をしかめる星影に、空飛も沈痛な面持ちで言った。

「本当にお気の毒なことです・・・。結局その方は、売られている本物を買われたそうですよ。」

「てことは・・・その方は、高級宦官になるわけ？」

「そうです。高級宦官の方は、お金がありますからね。それはそうと林山・・・！あなた、本物を買えるのは高級宦官だけ（・・・）だと思っているみたいですが、それは違いますよ！」

「え？身分制限ないの！？」

「制限ではなく、限られてしまうのですよ！本物の『証』は、木などで作ったものと違って、とても高価なのです。とても下級宦官には買えないのですよ・・・。」

「そうだったのか・・・。じゃあ、売り切れで買えなかった人が、作り物を買うんだね～」

「実際は少し違うよ、林山。本物を売っているのは下級宦官だ。」

「ええ！？」

琥珀の意外な発言に、何度目かの驚きの声を上げる星影。

「売られている本物は、下級宦官のものなのか！？」

「そうだよ。生活に困った下級宦官が、持っていた自分の『証』を売る。売ったお金で、作り物の『証』を買う。」

「――おかしいだろう！？なんで、本物を売って偽物を買うようなまねをするんだ！？」

「それは・・・生活が厳しいからです。」

「生活！？宮廷にいるのになんで生活が苦しいなんてことが――」

「年をとって、体力の衰えた宦官は、金品をいただいて宮廷を出るのが決まりなのです。ほとんどの宦官は、その老後を寺社で過ごします。高級宦官の方は、身分があるので、それなりに好待遇で迎え

られますが・・・・。」
「・・・下級宦官は違うというのか？」
星影の言葉に口を閉ざす空飛。相手の態度に、自分の意見が正しいのだと感じる星影。
「身分のない下級宦官はどうなるんだ？」
「・・・一般的には、寺社に住まわせてもらうことになっています。」
「それは、一般への形式的な話じゃないか、空飛？」
「琥珀！」
「どういうことだ？違うのか！？」
「ああ・・・違うよ。運がよければ、寺社においてもらえるよ。運がなければ、物乞いをするしかない。」
「物乞い！？」
（宦官が乞食をするというのか！？）
「そうだよ。仮に、運良く寺社においてもらえたとしても、衣食住を保障されるとは限らない。雑用が出来れば、雨風をしのぐことが出来る。それが出来なくなれば、軒下で夜を過ごすこととなる。」
「おい！それは野宿じゃないか！？」
「野宿よりもひどいな。毛布もなにもない軒下やお堂の側、時には畑のような場所で老後を過ごすことになる。」
「なんだよそれ！？仮にも、神や仏に仕える者がいる場所だろう！？」
「漢帝国の主な学問は『儒学』だ。寺社があるといっても、この国ではそれほど神仏は普及していない。数も限られるし、宮廷を出る際に渡される金品もわずかなものだ。」

「じゃあ・・・下級宦官が、自分の『証』を売るのは、生活に困った末の結果なのか・・・？」

「その通りだよ。それで彼らは空腹を満たす。それでも、飢えをしのげない時は、自分の本物の『証』と引き換えにして手に入れた作り物の『証』も手放すんだ・・・。」

琥珀の言葉に、星影はなにも言えなくなった。下級宦官の末路に対する非常な現実。

怒りや悲しみ、やるせない気持ちが、彼女の心を支配していた。星影は、それを言葉にすることは出来なかった。しようと思っても、どこから怒ればいいかわからなかった。

「・・・・・知ってるのか・・・・？」

ようやく出た言葉がそれだった。

星影の一言に、意味を察した琥珀が答えた。

「陛下はご存じないよ。あのお方の周りは、高貴な方々ばかりだからね・・・。儒学における異端者のことなど、誰も進言するはずがない。」

「そんなことない！確かに、陛下の周りには傲慢な奴らが多いが――――」

そう言った星影の脳裏に、一人の人物が浮かぶ。

“・・・律儀に礼を言う宦官は初めてだ。優しいな。”

「衛青将軍がいるじゃないか！」

宦官である自分を助けてくれた武人。星影の言葉に、琥珀は首を横に振る。

「確かに・・・衛大将軍は陛下に気に入られている。しかし今では・・・『媚びるところがある』と、お気に入りではあるが、それほどお気に入りという立場でもないのだよ。」

「媚びる！？」

あの衛青将軍が！？清々しくて、気遣いをしてくれる人が媚びる！？

「ばっか・・・！あの人のどこが媚びてるんだよ！？琥珀、お前は見てないからわからないかもしれないが、衛青将軍はめちゃくちゃ無表情なんだぞ！？」

「林山・・・衛青大将軍が寡黙な方であるのは、私達も知ってることですが・・・。」

「それだけじゃないぞ、空飛！衛青将軍は、私の危機を察して助けてくれたんだ！？」

「君を助けた・・・？」

星影の言葉に、琥珀はわずかに顔色を変える。

「そうだよ！郭勇武・・・将軍に、嫌味を言われてるところを助けてくれたんだ！他の奴らは、私達を汚物扱いしたが、あの方は人として接してくださったんだぞ！？」

「そうだってんですか・・・！？」

「・・・衛青将軍がね・・・。」

星影の言葉に、驚いたように頷く二人。空飛は、『助けてもらった』

ことに関して驚いたようだったが、琥珀は――――――――

「衛青将軍が・・・助けたとはね・・・。」

『衛青将軍が助けた』と、いう点に驚いたらしい。

「そうだよ！私達のように、いつも見下される者を助けてくれるようなお方なんだぞ！？」

しかし、星影はそんな琥珀の様子に気がつかなかった。気づく余裕がなかったといったほうが正しいだろう。そして、衛青将軍に対して必死に弁護をし続けた。

「愛想がないっていうならまだしも、ゴマすりをして媚びるなんて・・・ありえないだろう！？あんなに、周囲に気配りが出来る人が――――」

「・・・それだよ、林山。」

「はぁあ！？」

「『周囲に対する気配り』が、陛下の目には媚びているように映るのだよ。」

「気配りが！？」

「陛下は、老若男女問わず、派手で大胆なものが好きなんだ。衛青将軍の『謙虚さ』が、陛下には『地味』に見えるらしい。」

「贅沢だな、おい！？」

（謙虚ほど、美徳なものはないんじゃないか！？）

そんな星影の発言に、真っ青な顔で空飛が飛びついた。

「不越ですよ、林山！そんなことを大声で言ったらー！！」

「かまうか！むしろ大声で言ってやる！！謙虚さを地味と見るのはおかしいぞぉぉぉ――――――――！！陛下の考えはおかしいですぞぉぉぉ――――――――！！！」

「ちょっとぉ林山！？」

「衛青将軍が媚びてるって言うなら、世の中すべてが媚びた人間だぞぉぉぉ！！！陛下はそういう自覚がありますかぁぁぁ――――――！！？」

「やめてぇぇぇ――――――林山！！」

「謙虚さなくて、秩序が守れるかぁぁぁ――――――――――――！！！」

口元に両手をあてて、扉に向かって叫ぶ星影。そんな星影に、文字通り飛びついて静止する空飛。そんな二人を見ながら琥珀は言った。

「その秩序があれば、君は生きていないよ、林山。」

「なんだと！？」

「陛下は、恐れを知らない、派手で美しい者を好むんだよ。安林山そのものじゃないか？」

「なっ！？私が不届き者だというのか！？」

「今行っている行動そのものが、大胆不敵なものだと思うが。」

琥珀の言葉に、なにも言い返せなくなる星影。

確かに思い返せば、首が飛んでもおかしくないことを、結構やった気がする。

（・・・琥珀の言う通りかもしれない・・・。）

星影自身は、【結構】という程度で考えているが、実際は飛んでいけなければいけないぐらいである。

「陛下の耳に入れば、今度はただじゃすまないぞ。」

それぐらいにした方がいい、と言う琥珀の言い方が、星影の癪に障った。

「入ればいいさ！衛青将軍が媚びてるなんておかしいだろう！？媚びてるっていうのは、楊律明や呂文京のことを言うんだろう！？」

そこまで言って、星影は気がつく。

「琥珀・・・お前その話、どこで聞いたんだ！？」

「・・・なぜそんなことを聞くんだ？」

「どこで聞いたんだ、その話は！？」

「ど、どうしたんですか、林山！？」

「二人は、おかしいとは思わないのか？　楊律明と呂文京は、私を陥れるために、陛下にあることないこと言ったんだぞ！？」

そうに決まっている！郭勇武だって、しつこく大将軍相手に喧嘩を売っていた。

「琥珀の話だって、衛青将軍を妬んだ者のホラじゃないのか！？」

「林山・・・。」

「それに私が見た限り、陛下は衛青将軍を嫌っているそぶりは見せなかったぞ！？」

「それは、衛青将軍が陛下に味方したからだよ。」
「味方!?」
「安林山を高級宦官に取り立てることに同意し、周囲の者を同意させるだけの発言をしたからだよ。」
「私を・・・?」
「安林山を、手元に置くための手助けをしたからだよ。衛青将軍は、陛下がほしい者を手に入れるための協力をしたからね。元々機嫌もよかったから、陛下が衛青将軍を煙たがっている姿を君が見なかっただけだよ。」
「琥珀の言う通りです。残念ですが・・・本当なのです。」

申し訳なさそうに空飛が言った。

「衛青将軍は、下級層出身者(かきゅうそうしゅっしんしゃ)です。ですから、身分の低い者の・・・人の気持ちがわかる方なんですよ。常に気を遣い、荒波(あらなみ)を立てないように謙虚な姿勢をとられるのですが――・・・」
「陛下は、それがお気に召(め)さないんだよ。」

琥珀の言葉に星影はなにも言えなくなった。

(冗談じゃない・・・!!)

どこまでわがままな男なんだ!?私から可愛い妹を奪っておいて!いや、陛下がそんな性格だから、郭勇武のような男がえらそうに大きな顔をするんだ!!
そんなことをしていたら、陛下の周りは腹黒い奴ばかりになるじゃないか!?

――――――――――悪人がのさばり、善人が身を潜める――――――――――

そんな状況が、自然と出来上がっているんじゃないのか！？いや、むしろ陛下自身が、自分で自分の首を絞めてるって言えるんじゃないか！？

（命を狙われて当然じゃないか！！）

陛下を助けたことへ、後悔を覚える星影。それと同時に、激しい怒りを覚えるのだった。

第二十三把　それぞれの夜～宦官の生き様～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
小話なんですが、捕虜になった異民族の男子は、男性器を切断されるのですが、女性の場合は子宮をつぶされたそうです（冷汗）つぶすというか、おなかの中にある子宮を引きずり出す、とか・・・（硬直）――――痛いですよぉ！絶対に痛いですよぉ！！人種が違うってだけでひどくないですか！！？てか、昔の人はそこまでするんですかぁ！！？
「じゅあ、後書きに書くなよ！エグイなぁ！！」て、話になるんですが、いろいろ思うところがあって書きました（苦笑）なんというのか・・・宦官の制度って、儒学の教えが広まる前からあったんですよ。前漢の武帝が、国学として取り入れたことで、現在の中国でも孔子様の教えが広く浸透（しんとう）しているそうです。この小説を書くにあたり、宦官に関する資料を読みながら「もっと早く、孔子様が生まれるか、宦官制度が出来る前に、国学になっていればなぁ・・・。」と、ちょっと切なくなりました。同時進行で、儒学について少しかじってみたんですが・・・難しかったです（汗）どうしても矛盾を感じてしまうというか・・・。でも、規則・秩序の面では、儒学はすごく美しい教えだと思いました。

第二十四話　それぞれの夜～迷惑な訪問者達～

琥珀の話に黙り込む星影。その心中は、かなり複雑なものだった。

「林山、気持ちはわかるが――――」

「もういいよ！わかったからなにも言うな！！」

とりあえず、不満を口にしてみる星影。

「わかってくれたのなら、それでいいんだけどね。」

「つまり陛下は、真面目が嫌いで、不真面目が好きってことだろう！？」

「林山！」

「どうせ私は不真面目だよ！」

そう言って、そっぽを向く星影。

「そんな自棄を起こさないでくださいよ・・・。」

「元々こういう性格だ！だけど、これだけは言っておく！私は楊律明や呂文京とは違う！媚を売るようなまねはしない！！」

「これはまた・・・身近でわかりやすい例を出すね。」

「これでも違いのわかる人間だからな！大体あいつらは性格が悪いからいけないんだ！今度ふざけたこと言いやがったら、一発ぶん殴っ――――――――！」

「その必要は無い。」

冷めた口調で琥珀は言った。

「そんなことしなくても、彼らは君に忠実だよ。」
「どういう意味だ?」
星影が尋ねた時だった。部屋の戸が叩かれる。
「失礼いたします。」
「あ!お前は――――」
恭(うやうや)しくお辞儀(じぎ)をしながら部屋に帰ってきたのは、彼ら三人の天敵とも言える楊律明と呂文京とその取り巻き達だった。
「どうしてここに・・・!?」
驚く彼女をよそに、彼らはニコニコしながら言った。
「安林山様、先ほどはありがとうございました。」
「ありがとうございます、林山様。」
「林山様、感謝いたします。」
「り、林山様!?」
いっせいに頭を下げる彼らの姿に、背筋(せすじ)が凍りつくのを感じる星影。
突然の『様付け』に、全身の血の気が引く。それと同時に、全身に鳥肌(とりはだ)がたつのがわかった。それは、星影に抱きついたままの空飛も同じだった。どちらともなく、互いに顔を見合わせる星影と空飛の二人。ただ一人、琥珀だけが、涼しい顔でそれを眺(なが)めていた。
「い・・・いや、いいよ別に・・・。それよりどうしてここに?」
「はい、黄藩様のご命令でお届け物を持ってまいりました。」

そう言って、合図した彼の後ろから現れたものは――――――――

「あ、それは！」
「これはなんと・・・。」
「すごい・・・！」

琥珀と空飛が感服するのも無理はなかった。そこには金と銀の山があったからだ。

「これってまさか・・・。」
「はい、先ほど皇帝陛下から賜った金二千両と銀二千両、それから・・・。」

呂文京が手を叩くと、大きな箱を抱えた、二人の宦官が姿を現す。二人がかりで、箱の両端を持っていた。その表情は終始笑顔で、恭しく星影の前に箱を置いた。

「・・・なにこれ？」
「一千両分の翡翠や真珠、水晶などの宝物でございます。」
「宝物！？」

驚く星影達の前で、箱は開けられる。そこには、見事の細工が施された翡翠や真珠などがあった。他にも、金や銀で出来た装飾品があった。

「どういうことだ！？私が頂いたのは、金銀あわせて四千両のはず・・・。」
「それなんです！！」

星影の声にあわせるように、大声を出す楊律明。

「陛下は、林山様にご褒美をお与えなさる際に、『金銀をあわせた数が、四というのは数が悪い。』と、仰(おお)せられまして！」

「『金銀とは別に、宝物を一千両分与えれば、数が悪くない。』と、いうことになったのでございます！」

「そうなの！？」

「はい！ですから、お気になさらず、受け取るようにとのことでございます！！」

「気にするなって・・・・・！」

その言葉に、顔をあわせる星影達三人。

「小銭(こぜに)ならまだしも・・・一千両分の宝物って・・・・！」

（縁起を担(かつ)いだ結果、褒美(ほうび)を増やされるって・・・・・。）

呆気に取られる星影の耳元で、空飛が小声でささやく。

「林山！これ全部、皇族の方しか持つことが許されないものばかりですよ・・・！」

「なっ！？・・・・本当か、空飛！？」

それに星影も小声で答える。

「普通そうですよ！見てください、この翡翠・・・！それに、この金で出来た首飾りも！」

「そうなの？そうなのか！？」

「さすがは皇帝陛下だ。気前がいいな。」

動揺する星影と空飛を尻目に、のほほんとした口調で琥珀は言う。

「よほど陛下は、高級宦官である安林山様をお気に召したようですね？」

「よせ琥珀！お世辞はいい！」

からかうように言う琥珀の言葉を、星影は激しく否定したのだが――

「いいえ！安様が忠義者ですので、陛下のおぼえもよろしいのですわ！」

「本当に、さすが林山様！文京憧れますわ～！！」

否定した星影の言葉を、大げさに褒めちぎる楊律明と呂文京。彼らの態度に、再度凍りつく星影。

なんなんだこいつらは！？昨日まで、敵意丸出し（てきいまるだ）で嫌味を言ってたのに！

なんだよ、この変わりようは！？言い方もなんかうそ臭い！！

（どうしよう、鳥肌が立ってきた・・・！）

相手のあまりにも、腰の低い物言いに身震（みぶる）いする星影。

「そ、それはどうも・・・。」

顔を引きつらせつつ、とりあえず返事をする星影。横を見ると空飛の目が点になっていた。

無理も無い・・・あんな言い方されたら、本人でなくてもショックは大きいよな。

とにかく、彼らにはさっさと帰ってもらおう。

「えーと・・・あの、わざわざ運んでくれてどうもありがとう。その、お疲れ様・・・。」

「当然のことをしたまでです。もったいないお言葉ですわ！」

「本当に！恐れ入りますわ！！」

ニコニコと笑ったまま、その場を離れない楊律明・呂文京一行。

「うん、わかった・・・もういいから。みんな仕事があるでしょ？」

「そんな、お気遣いしていただけるなんて！本当にお優しいですのね、林山様！！」

「私達のことまで心配していただかれなんて！さすが皇帝陛下をお救いした英雄です！！」

そう言ったまま動かない、楊律明・呂文京一行。

「あのさ、黄藩さ・・・殿からは、なんて言われてここに来たの？」

「はい、陛下からのを林山様の元に運ぶようにいわれ、ここまで参りました。」

「あ！気になさらないでください！皆で運びましたので、そんなに重くなかったですから！！」

それでもなお、その場から立ち去ろうとしない楊律明・呂文京一行。

そんな彼らの様子に、とうとう星影は痺れを切らした。

回りくどい言い方をしても無駄だ。はっきりと彼らに言おう。

「・・・悪いけど、用が済んだのなら帰ってくれない？」

途端(とたん)に、悲鳴(ひめい)にも近い声が部屋に響く。

「そんな・・・林山様！私達に帰れと！？」
「あんまりですわ！あんまりですわ！！」
「あんまりって・・・そんなひどいことは言ってないだろう？君達も忙しいだろうから、帰っていいよって言っただけで・・・。」
「そうは参りません！私達にもなにか、林山様のお世話をさせてくださいませ。」

「世話！！？」

（なんでお前らに、私の世話をしてもらわないといけないの！？）

「はい！安様、なにかお飲み物でもお持ちいたしましょうか？」
「林山様、果物はいかがでございますか？」
「肩はこっていませんか？お揉みしましょうか？」

そう言って星影に近づいてくる。

「いっ・・・いいいいい！いい！いい！！いらない！！！私には琥珀と空飛で十分だ！！！」

「まあそんな！遠慮なされずに、林山様。」

「遠慮(えんりょ)なんてしてないから！！お願いですから、今すぐ帰ってください！！！」

低姿勢で敬語を使いながら、自分に寄って来る相手を怒鳴りつける星影。彼女の怒鳴り声によって、部屋の中は静かになる。おびえたような目で星影を見つめる沢山の目。

（これで奴らも帰るだろう・・・！）

と、思ったのだが――――――

「本当に謙虚なお方ですね！」

「もう、恥ずかしがりやなんだから！」

「・・・。」

（・・・こいつらは本当に人間なのだろうか・・・・。）

何故言葉が通じない！？さすがに殴るわけにはいかないし・・・。

この状況に、さすがの星影もお手上げとなる。そんな彼女を見かねて援軍が出動した。

「楊律明様、呂文京様、それに皆様も。あとは、私達がやりますのでお引取りください。」

「まあ、王琥珀！身分もわきまえないその振る舞い！」

「やめてください！とにかく、もうお帰りください！」

「ちょっと！私たちが邪魔だとでも言いたいの！？」

「私達はただ、林山様のことを誤解していたから仲良くしたいのよ！」

（・・・私は仲良くしたくない。）

怒ったように言う楊律明に、即座(そくざ)に空飛は反論する。

「でも、林山は帰ってほしいと言っています！気持ちはわかりますがお帰りください！！」

「空飛、あなた・・・！！」

「私と琥珀は下級宦官、あなた方は高級宦官。皆さんはこれから先いくらでも林山と話す機会があるじゃありませんか！？大体、散々林山をいじめておいて・・・調子が良すぎます！！」

いつも温厚な空飛の強気な発言に、その場にいる全員が黙り込む。驚いた表情でしばらく動けなかった楊律明・呂文京とその一行だったが・・・。

「お側にいられなくなる下級宦官が、ずいぶん生意気な口をきけるわね！？」

「お前・・・下級宦官の立場でありながら、高級宦官になられた安林山様を『林山』ですって・・・！？」

楊律明の言葉に、空飛は顔色を変えた。

「お前こそ、気安く林山様を呼び捨てに出来る身分ではないのよ！」

「そ、それは私が悪かったです！でも――――」

「あんたのそういう言い訳がましいところが、気に入らないの！本当に目障(めざわ)りね！！」

「弱いくせに生意気なのよっ！！」

そう言って呂文京は、空飛めがけて平手打ちをしようと手を上げた。それまで我慢していた星影だったが、空飛に手を上げようとしたと

ころで見ては黙ってはいられない。

「やめろっ！！」

素早く空飛を庇うように、二人の間に割って入った。

「いい加減にしてくれ！お前達が迷惑なんだよ！！」
「林山！？」
「林山様！？」
「なにが私のためだ！？なんで空飛を叩こうとした！？」
「そ、それはつい――――」

バツが悪そうに言う相手に、星影はきつい口調で言った。

「空飛は私の友達だ！空飛が優しいからっていい気になるな！そうやって自分より下の身分のものには偉そうにして・・・！ご機嫌取りは沢山だよ！！」

「林山・・・そこまで私のことを・・・？」

「悪いけど出て行ってくれ！！お前らの顔なんか見たくない！！」

言うと同時に、近くあった金銀を掴むと投げつける。

「きゃあ！？」
「り、林山！？なんてことを――――！？」
「そうですわ、林山様！」

驚く空飛同様、声を荒げながら楊律明達は言った。

「なんてもったいないことを！！」

「これだけで、当分遊んで暮らせるというのに！！」

「ああ！宝物が！貴重な宝が～！！」

そう言って、星影が投げた金銀を大急ぎで拾う一同。

「なんてことなの！？せっかくの宝物がこんなに汚れて・・・・！！」

「林山様、せっかくの金銀が台無しではありませんか！？」

そして、拾った金銀を裾（すそ）で磨（みが）きはじめる楊律明達。

「おっ！お前らぁ――――――・・・！！」

その姿に、星影のなにかが切れた。

「・・・・・せつか・・・！？」

「え？」

「り、林山？」

「そんなに――――その塊が大切かっ！！？」

「り、林山！？」

「くれてやるから即行（そっこう）、出て行けぇぇぇ――――！！！」

両手で金と銀の入っている箱を持つと、彼らに向かって勢いよく投げつける星影。

「きゃあああ！！」

「痛――――い！！」

それは大きな音を立てて、星影に媚(こ)びる者達に命中(めいちゅう)した。

「出て行け！この恥知らず共！！ほしけりゃくれてやる！！」

張(は)り裂(さ)けんばかりの、星影の怒鳴り声が響き渡る。そして、部屋一面に金銀がばら撒(ま)かれた。金銀の硬いものがあたり、彼らは一瞬、苦悶(くもん)の表情を見せるのだが――――――

「安様のお許しが出たわ！！」

「ちょっとそれは私のよ！」

「どいて！拾えないわ！！」

「私の金銀よ！！」

我先(われさき)にと金銀を拾う一同。一心不乱、必死でお宝を拾う宦官達。なかには、拾った金銀を奪い合う者達までいた。そんな彼らの姿が、ますます星影の怒りを煽(あお)った。

「こっ・・・！こ、こ、この恥知らず知らず共ぉ！！失(う)せろっ！二度と来るなぁぁぁ――――――――――――！！！」

言うより早く、彼らに向かって拳(こぶし)を向ける。
それをいち早く察知(さっち)し、止めに入る空飛と琥珀。

「林山、落ち着け！」
「暴力はよくないですよ！！」
「そうだぞ、林山。部屋を壊すのはよくない！」
「てっ、問題はそこじゃないだろうが、琥珀っ！！」

琥珀の手を振り切ると、近くにあった棚(たな)を掴みそのまま持ち上げる。
棚の上にあった高価な壺(つぼ)などが、大きな音をたてて床に落ちた。

「わあぁぁぁ――――――――――――――！？り、林山ダメ！！」

空飛の声と、壷の割れる音と、星影の棚を持ち上げる姿。これにはさすがの楊律明・呂文京と、その取り巻き達も慌(あわ)てて逃げ出す。

「待ちやがれぇぇぇ――――――――――――――！逃げるなぁ！！」

我先(われさき)にと逃げていく一行。もちろん金銀は、ちゃっかり持って行った。そんな楊律明達の背中に向かって、星影は何度もほえるのだった。

第二十四話　それぞれの夜～迷惑な訪問者達～（後書き）

小説の感想をいただけると嬉しいです。読んでもらって、楽しい・面白いと、思っていただける話を目指しております！主人公・星影を、もう少し生かせるように頑張りたいと思います・・・！！

余談ですが、衛青仲卿が、武帝に煙(けむ)たがられていたのは事実らしいです（汗）衛青が常に、低姿勢(ていしせい)で謙虚に振舞(ふるま)ったことが、「媚びている」と、見えてしまったらしいです。元々、衛青将軍が、下級層出身者ということもあり、目上に対する接し方が、少し大げさすぎたからとも言われています。悪く言うと、召使が、主人にへりくだる的な（大汗）個人的には、衛青将軍が好きであります。武帝との出会い方はどうあれ、彼の場合、自分の経験と努力で大将軍まで出世した人ですから！

以上、竜門のつぶやきでした。

第二十五話　それぞれの夜～友情っていいものだよ～

暴れる星影を、二人がかりで必死に抑える琥珀と空飛。

「ほら林山！もういなくなったぞ！」

「そうですよ！落ち着いて、棚を下ろして下さい！！」

その声で、ようやく星影は棚を下ろす。二人になだめられ、渋々（しぶしぶ）ではあるが破壊行為を中断する星影。しかし、星影の怒りが収まったわけではなかった。

「ふざけやがってあいつら・・・！」

（なんて欲深い連中だ！）

私が貰った金銀が欲しくて、しつこく居座り続けたんだな・・・！！

「なんであんな奴らが高級宦官になれるんだ！？こんなことなら、助けてやるんじゃなかった！！」

柱を叩きながら怒り散らす星影。その横で、割れた壷の破片を拾いながら琥珀は言った。

「それは彼らが、世渡り上手で、へつらいが上手いからだよ。なによりも金がある。」

「金があるのに、私からせびったというのか!?」
「金品が多すぎて困ることはないだろう?彼らみたいな高級宦官もいるということだ。」
「忌々（いまいま）しい・・・!!いくら、世渡り上手だからといって、あんなのを高級宦官に選ぶほうがどうかしてる!!」

（採用者は、なにを考えてるんだ!?）

「仕方ないよ。彼らの場合は、実家が裕福（ゆうふく）だからね。」
「裕福ぅ〜!?」
「そう。賄賂を贈れば、身分を買うのは簡単だからね。」
「それ違法じゃないか!?」
「そうだよ。」
「そうだよって・・・琥珀!!宦官になる者は、生活に困っているから宦官になったんじゃなかったのか!?」
「まさか。高級宦官の多くは、それなりにお金のある家なんだよ。」
「はぁ!?宦官になる者は、家が貧しい者か異民族かのどちらかじゃないのか!?」
「それは偏見（へんけん）だよ、林山。宦官になる者の半分は出世が目的さ。」
「出世って・・・!?」
「出世するための近道・・・というところかな。お金に余裕（よゆう）がある野心家や一般庶民はもちろん・・・前科（ぜんか）持ちの者とかもね。」
「前科って・・・犯罪者か!?本当なの、空飛!?」

星影の問いに、片づけをしていた空飛が顔を上げる。

「事実ですよ。刑罰の一つに、『宮刑（きゅうけい）』があるでしょう?」

（宮刑・・・そういえば、林山がそんなことを言っていたな。）

空飛の言葉に、林山とのやり取りを思い出す星影。

「じゃあ、宮刑になった人は、全員宦官になるんだね。」
「それって、みんな宦官にならないといけないの？」
「そうでもありません。宮刑を受けられたお方でも、宦官になっていらっしゃらないかはいますし――――」
「『受けられたお方』？」

空飛の言葉に、聞き返す星影。

「身分の高い方で、そういった人がいるのか？」
「い、いえ・・・それは――――」

星影の問いに、口ごもる空飛。

「太史令、司馬遷・・・司馬子長様だよ。」

黙る空飛の代わりに、琥珀がはっきりとした口調で言った。

「司馬遷、様・・・？」
「琥珀！？」
「現在は、故事旧志の編集をされていらっしゃるそうだよ。ある将軍を弁護したがために、それで陛下のお怒りを買い、宮刑を命じられたお方だ。」
「将軍の弁護！？それはどういう――――――」

「――――――いけません！！」

星影の言葉を遮るように、怒鳴り声を上げる空飛。

「く、空飛!?」

怒鳴らなくてもいいじゃないか、そう言いかけて、口を閉じる星影。なぜなら、空飛が怖い顔で星影を睨(にら)んでいたからだ。

(お、怒ってる!?)

初めて見せる怒りの表情に、言葉を濁(にご)す星影。そして、低く小さな声で空飛は星影に言った。

「林山・・・司馬様のことは、決して・・・!決して、陛下にお尋ねになってはいけませんよ・・・!!」

「え・・・?なんで?」

「司馬様の話を出した私もいけませんでしたが・・・名前を出してはいけませんよ・・・!!」

「空飛・・・?」

「琥珀も、林山に変なことを教えないでください!!」

空飛の態度に、ただならぬなにかを感じる星影。空飛の言葉で黙る星影とは対照的に、琥珀はいつも通りの口調で言った。

「私は林山が、知らないままでいると、危険だと思ったから教えただけだよ。」

「知らずにいた方がいいですよ!琥珀は一言多いです!!」

真っ青な顔で、琥珀を怒鳴りつける空飛。

「とにかく林山!!この話は、陛下の前でもどなたの前でも、絶対に禁句ですからね!!」

「き、禁句って・・・。」
「わかりましたか!!?」
「・・・はい。」

空飛の並ならぬ気迫に、わかりましたと頷く星影だったが・・・・

（そういう中途半端なことされると、気になって困るなじゃない・・・！）

心の中の【疑問】という名の霧が、晴れることはなかった。
宮刑がどういう罪状で処せられるものかは知らないが、男という性別を奪われる刑である。
言いかえれば、それだけの大犯を犯したということだ。そんな者達を、高貴な人々の世話をさせるという考えが納得できなかった。

「しかし、危なくないか？犯罪者を、皇族関係者がいる宮廷で働かせるなんて・・・。」

（また犯罪が起きるんじゃないか・・・？）

自分の中にある疑問を、相手にぶつけてみる。星影の直球の質問に、空飛が速球で答えた。

「ですから、働いてもらうのですよ。天下人である陛下のお側で、功徳を学び、罪を悔い改める・・・それが、宮刑の真意なのです。」
「なるほど・・・そういう意味だったのか・・・。」
「そうですよ!労働が過酷なのも、それだけの罪を自分が犯したと自覚させるためです。それ理解したうえで、しっかり働けば、教養のある身分のある方々が、その行いをわかってくださるということですよ。」

「・・・と、いうのは建前であり、言い方を変えれば理想論。実際は、悪人共が悪知恵を働かせて、出世をもくろむというものだよ。」
「え？理想論？」
「ちょっと琥珀！？なにを言っているのですか！？」
星影と空飛のやり取りに、琥珀が皮肉めいた口調で乱入した。
「事実じゃないか、空飛。宦官として後宮に入って、陛下に気に入られれば、出世は思いのままだよ。」
「なるほど・・・！いかにも、悪人が考えそうなことだな！」
「だから林山も！それで納得しないでください！！琥珀も、林山に変なことを教えないでください！！」
「宮中の、『表』ばかり教えても意味がないじゃないか。『裏』もきちんと教えておく必要があると思うけど？」
「裏表の問題ではありません！琥珀の言い方は、聞く者によっては誤解をあたえます！」
「私は林山のために言っているんだよ。空飛は少し、過保護過ぎないかい？」
「私だってそうです！林山のことを思えばこそ、教えているのです！琥珀は無責任過ぎます！」
そう言って、珍しく互いの意見を譲らない琥珀と空飛。睨みあう二人に、初めて星影は静止をかけた。
「よせよ、二人共！その話は次の機会にしてさ～」
「林山！」
「林山、私と空飛は君のことで――」
「だから私が悪かったって！しっかし、わからないよなぁ～」
二人の注意を自分に向けるように、声高らかに星影は言った。

「犯罪者はともかく、金がある一般人がどうして普通に仕官をしないの？」
「普通に仕官って・・・」
「それは――――」

星影の言葉に、琥珀と空飛は睨(にら)みあいをやめた。それを確認すると、星影は言葉を続けた。

「普通に役人として仕官して、出世を目指せばいいだけの話じゃないか？」
「だから宦官の道を選ぶのだよ。」
「男を捨ててまで？」
「そうだよ。文官になるにしても学問がダメ。武官になるにしても才能が無い。あるとすれば金がある。今出て行った人達がその例さ。」
「私達には、理解できないことですけどね。」

そう言って、部屋の片付け作業を再開する空飛。

「お金のことしか頭にない方々の考えなど、下級層出身(かきゅうそうしゅっしん)の私には理解不能です！」

少し不機嫌そうに、床に落ちている金銀を拾う空飛。

（下級層じゃなくてもわからないよ・・・。）

これには、さすがの星影もなにも言えなくなった。正確には、二人から聞いた高級宦官の実態に呆(あき)れ返(かえ)ったといっていい。

「金さえあれば・・・なんでもできるってか?同じ高級宦官でも、黄藩様の方がましだな。」

星影の脳裏に、安林山の悪口を諫めた黄藩の姿が浮かぶ。

「当然だよ。高級宦官にも上から下まである。そのなかでも黄藩様と君は『上』、楊律明と呂文京やその取り巻き達は『下』といったところだよ。」

「例え奴らが、高級宦官の中で『下』だとしても、高級宦官であることに変わりはないじゃないか?」

「いいじゃないか。彼らは、君に逆らうことはない。それどころか・・・甘い汁を吸おうと企んでるだけだよ。」

「冗談じゃない!お断りだよ!!」

げっそりとした顔で言う星影。

(二度とあいつらの顔なんか見たくない!だが・・・また押しかけて来る可能性もあるかもしれない・・・。)

「・・・金をやったんだから、もう来ないよね?」

部屋に散らばった金銀を拾い集めている空飛に尋ねる星影。真偽を確認するには、空飛に限ると星影は思っていたのだ。星影の問いに、空飛は作業をやめて言った。

「どうでしょう・・・。むしろ、また貰えると思って来るんじゃないんですか?そういうところがありますし・・・。」

「それって空飛の予想?」

「ええ。長年の経験を元にした予想です。」

「うわぁ~・・・・・。じゃあ、確実に来るな・・・。」

「だから、とめたのですよ・・・。」

肩を落とす星影に琥珀は言った。

「それはいいが、林山。君は少々短気すぎる。いくら彼らの態度が悪かったとは言え、皇帝陛下から賜った金銀を投げつけたのは感心できないな？」

「だって、近くにあってお手ごろだったから・・・。」

星影の答えに、目頭を押さえる琥珀。大きくため息をつきながら言った。

「林山、頼むからあまりめった事はしないでくれ。これ以上目立っては・・・私がやりにくい・・・・・。」

消え入るように呟(つぶや)かれた最後の言葉。その言葉に、弾(はじ)かれたように琥珀を見る星影。

「なにか言ったか・・・？」

「――――いや、なにも・・・。」

かすかに動揺する琥珀。

無意識のうちに呟(つぶや)いたようだったが、星影は、はっきりと耳にした。

“私がやりにくい”

（まさか琥珀――――――――――!?）

星影が昨夜目撃した、琥珀と黒服の男とのやり取りが浮かぶ。

（琥珀の奴・・・陛下を襲う機会をうかがっているのか？）

つい、不安そうな顔で琥珀を見る星影。
そんな星影に、なにも知らない空飛が優しく声をかける。

「林山、琥珀が言いたかったのは『心配をかけさせないでくれ』と、いうことですよ！」
「さすが・・・空飛だね。私の気持ちがよくわかっている。」

にこやかに笑う空飛と琥珀。どうやら空飛には、琥珀の最後の方の言葉が聞こえなかったらしい。星影には琥珀が空飛の話にあわせているように見えた。

（誤魔化しているな・・・。）

琥珀の怪しい行動を見ただけに、その点に関して星影は見抜いていた。

「そうだな・・・空飛の言う通りみたいだし。」

（今は、そういうことにしておこう・・・。）

変なことを言って琥珀を刺激すれば、自分にまでとばっちりがくる危険があった。

「ごめんな、琥珀。心配をかけてしまって。」
「気にしなくていいよ。私たちは友なんだから・・・そうだよね、空飛？」
「当たり前ですよ！友達なんだから。」

目の前でにっこりと笑う空飛に、つられて星影も微笑んだ。そんな星影を見ながら、空飛は穏やかな口調で言った。

「本当に・・・友達って、いいものですね。さっきの林山の言葉・・・すごく嬉しかったですよ。ありがとうございます・・・。」

「急にどうしたの、空飛？」

「だって・・・初めてだったんですよ。あんなやさしい言葉・・・。」

空飛の言葉に、気恥ずかしくなる星影。よせよ、と声をかけて、星影は固まった。なぜなら、目の前にいる空飛が泣いていたからだ。

「ど、どうしたの、空飛！？なんで泣いてるの！？」

「だ、だって・・・！私のことを、人として扱ってくれたのは、林山が初めてで・・・！」

「空飛・・・。」

「ありがとう、林山。ありがとう・・・！」

何度も、ありがとう、と繰り返す空飛。その目から、涙がとまることなく流れ続けた。

そんな空飛の姿が、ひどく星影の胸に突き刺さった。

（よほど・・・つらい思いをしてきたのね・・・。）

星影は、泣き続ける友の肩を優しく抱くと言った。

「大丈夫だよ、空飛。私達は友達だから。空飛がいじめられていたら、私が助けるからね。」

「そんな、林山・・・。私も、私も林山を助けます！これからは林山のために――！！」

「ただし、友達としてね？見返りを求めるような友情はナシだよ。」
「私は楊様達とは違います！そういうつもりは――――！！」
「知ってるよ。初めて会った時のこと覚えてる？」
「え？」
「空飛は、私を助けてくれたよね？」

楊律明・呂文京とその取り巻き達に因縁をつけられた時、空飛は新人宦官である安林山を庇ってくれた。

「私が仕掛けるより先に、あいつらが私に喧嘩をふっかけてきた時だよ。あれはさ、純粋に私を助けるためにしてくれたんだろう？」
「じゅ、純粋というか・・・そこまで考えていなかったので――――」
「――――――私も、そういうつもりで言ったんだよ。」
「え？」
「損得考えずに、思わず新入りの宦官を助けたんだろう？他の連中は、みんな自分の身が大事だから黙って見ているだけだった。でも空飛は、自分を犠牲にして安林山を助けてくれた。」
「そんな！私は――――・・・・」

真っ赤な顔で、あたふたしている空飛に向かって星影は告げる。

「私は、他人を思いやる張空飛の心意気が好きなだ。」

真っ直ぐに、空飛を見ながら星影は言った。

「だから、もっと自信を持ってよ！空飛は、優しい人間なんだから。それに、人がいいから、利用されたり、そんな役回りを押し付けら

れる。そして、それを文句も言わずにする。」
「あ・・・はい、確かにそうです・・・。」
「誤解しないでよ、空飛！今のは悪口とかじゃない。私は、そういう人の良い人間が好きなんだ。」
「好きって・・・。」
「そういう奴、嫌いじゃない。いや・・・嫌いになれない。だから、これからも空飛を頼るよ。」
「なっ・・・なにを言っているのですか、林山！？あなたは、もう高級宦官なのですよ！？私のような下級宦官に――」
「だって空飛は、私の先輩じゃないか？私より、宮中のことだって詳しい。琥珀も知識があって頭がいいけど、宮中に関しては初心者だしさ。」

星影の言葉に、琥珀は無言で頷く。それに対して、空飛は首を振りながら言った。

「・・・林山は、私を美化しすぎですよ・・・！私はあなたが思っているほど、立派な人間ではありません。無駄に・・・この七年間を過ごしただけです・・・。」
「私は無駄だとは思わない。」

卑屈な態度をとる空飛に、星影はきっぱりと言った。

「空飛が今まで宮中で過ごした七年は、これから意味を持ってくると思う。今は、下積みをしているだけなんだよ。」
「下積みなんてとんでもないです！私は・・・昔から不器用ですし、いつも失敗ばかりで、どうすればいいかと悩む始末で・・・！」
「それだよ、空飛。」
「は・・・？」
「無駄な時間があるとすれば、『悩む時間』だよ。」

「ええ！？」

星影の言葉で、伏せていた目を上げる空飛。そして、星影に疑問をぶつけた。

「悩む時間が、なぜ無駄なのですか！？自己反省をし、なぜ間違いを犯したかを考えることが、なぜ無駄なのですか！？」

「うん、悩むことは良いことだよ。でもね・・・悩みすぎるのもよくないんだ。」

「え・・・？」

「悩んで、考えて、それで答えが出るならいい。だけど、考えて答えが出ないなら、考えるのをやめればいい。」

「考えるのをやめる・・・！？」

「そうだよ。だってさ、悩むってことは、なにか問題があるから悩むんだろう？『自分がなんで悩んでいるのか』、『悩む原因がなんなのか』、そう考えた時って、たいてい過去のことを思い出すじゃないか？」

「え・・・ええ、同じ過ちを繰り返したと・・・反省するのですが・・・。」

「それが無駄な時間だ。考えたって失敗するなら、そこで終わらせたらいいさ。難しく考えるより、前向きに単純に考えた方が気持ちも楽じゃない？」

「確かに・・・そうかもしれませんが・・・。」

「終わった過去を、後悔し続けること・・・それぐらいさ、無駄という言葉を使っていいのはね。」

「林山・・・。」

「人生の経験を、無駄だと表現するもんじゃない！すべては、天から与えた試練だと思えばいいんだよ！」

「試練・・・？」

「いろんな体験をして、人は強くなれるんだ。力ではなく、心が強

いんだよ。その証拠に、空飛は強い心を持ってるよ！」
「私が！？」
空飛の視線を受け、星影は相手の目を見ながら言った。
「そうだよ。さっきだって、私のために楊律明達と戦ったじゃないか？私、すごく嬉しかったんだから！」
「そ、そんなこと・・・！あれは、無礼を働いてしまっただけで、」
「無礼なものか！あいつらの態度が無礼だ！私の貰った金品が目的だったんだよ。空飛は、強い心であいつらと向き合ったんだ。」
「いえ、それは林山が困っていたから――」
必死の形相になる空飛に、星影は悪戯っぽく言う。
「ほら、やっぱり空飛は良い人間だよ。見過ごしてもいいものを見過ごせない。相手よりふりな立場であっても、勇気を持って私を助けてくれたんだ。」
「勇気なんて・・・私は――――」
「じゃあ空飛に聞くけどさ、友達になる前の私をどうして助けてくれたの？」
「え？」
「明確な理由を、四十字以内で述べてください。」
「四じゅ・・・ええ！？そんな、理由なんて・・・・！」
星影の問いに、難しい顔で考え込む空飛。そんな相手に星影は言った。
「ないだろう？空飛が、友達になる前の私を助けたのだって、無意識にしたことなんじゃない？」
「・・・ええ。」

「木に例えれば、根っこは同じなんだよ。無意識に考えて、私は空飛とは友達でいたい。誰かを好きになるのに、いちいち理由なんていらないだろう？」

そう言うと、空飛の頭に手を置く星影。

「だから張空飛は、私の自慢の友達だよ。」

「林山・・・！」

「空飛が困っていたら、私が助ける。友達として、空飛のことが好きだからね。」

「私のことを・・・そこまで思って・・・？」

「それだけ私は、空飛のことが大事だよ。ねぇ、琥珀？」

「・・・林山の言う通りだよ。」

黙って聞いていた琥珀が口を開く。

「私も林山と同じだ、空飛。」

星影と空飛を見ながら琥珀が言った。

「空飛だけじゃない、林山に対してもそうだよ。私達は縁（えん）があって、この場に一緒にいるんだよ。その縁（えん）を大事にしよう。」

「琥珀・・・。」

「いいこと言うじゃないか！」

「お互い様だよ、林山。単純に考えて、私も二人と友達になれてよかった。」

「琥珀・・・！」

「私からも頼むよ、空飛。もっと自信を持っていいからね。林山と離れても、私が側にいるよ。だから、自分を低く考えるのはやめにしよう？」

琥珀の言葉に、空飛から大粒の涙が落ちる。

「こ、琥珀・・・林山・・・！」

「泣かないでよ、空飛！琥珀も、泣かすようなことを言うな！」

「泣かすつもりはなかったんだけど・・・。」

「ち、違いますよぉ～嬉しいんです・・・！」

そう言うと、星影の胸に顔をうずめる空飛。そんな空飛を星影は、よしよし、と言いながら抱きしめる。

「空飛って、涙もろいんだね？」

「違いますよぉ～もぉ――――なんで林山ってばぁ～！」

「どうやら、かなりつらい七年を過ごしてきたようだね・・・。」

「そうなのか、空飛？」

星影の問いに、泣きながら首を縦に振る空飛。

（まぁ・・・人生の半分を、存在否定（そんざいひてい）されて過ごせば仕方ないか・・・。）

性別で差別され、職業で差別され、儒教で差別される。それに加えて、毎日の重労働。

心身ともに疲れ果てるだろう。

「私達にはわかるよ、空飛。あなたの苦労がわかる。」

「り、林山・・・！」

「空飛は一人じゃない。私も一人じゃない。琥珀も一人じゃない。」

そう言って、力いっぱい抱きしめる星影。それにあわせるように、空飛も星影にしっかりと抱きつく。抱き合う星影と空飛に苦笑しながら、琥珀もそんな二人を抱きしめる。妙な抱擁ではあったが、星影は不快にならなかった。むしろ、その状況を楽しんだといっていい。

「友達だよ。私達三人は・・・・友達だからね。」

だからこそ、こぼれんばかりの笑みで星影はそう言ったのだった。

第二十五話　それぞれの夜～友情っていいものだよ～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

少し、友情場面を表現してみました。ご感想をいただければ嬉しいです（笑）

第二十六話　それぞれの夜～嘘を重ねて、演じきる～

星影は泣き続ける空飛を慰(なぐさ)めながら、あることを思い出していた。

“姉様ぁ～・・・！”

“泣かないで、星蓮。”

泣きながら、自分に抱きつく姿。声を立てて、自分にすがりつく姿。

星影の中で、空飛と妹・星蓮の姿が重なっていた。

（星蓮も、よく泣く子だったな・・・。）

小さい時から、悲しいことがあると姉である自分に甘えてきた星蓮。

星影は、そんな妹をいつも慰めていた。

（あの子は・・・どうしているだろう・・・。）

無理やり連れて行かれたのだ。きっと怖い思いをしたはず。連れて行かれる時、抵抗して怪我などしていないだろうか？あるいは、悪い役人にいかがわしいことをされたりしていないだろうか？

（郭勇武め・・・・！）

私の可愛い妹を、傷物(きずもの)にしていたら容赦(ようしゃ)しないからな・・・！！

仮に、傷物にされたとしても、私が励(はげ)ませばいい。私がしなくても、きっと林山が慰めてくれるだろう。ただ問題なのは――――――

（星蓮が生きているかどうかだ・・・！）

林山と引き離されたことで、人生に絶望して命を絶っていたら。毒をあおって自害してしまっていたら。短剣でのどやら胸やらを突いてしまっていたら。

（星蓮・・・！！）

それを考えると、胸が苦しくなった。

（お願いだから、生きていてね・・・・！！）

必ず、お姉ちゃんが助けに行くからね・・・！！

妹を思い、空飛を優しく抱きなおす。妹を慰める時のように、ひたすら空飛の頭を撫でた。

「大丈夫だから・・・。」

自分に言い聞かせるように、大丈夫、と何度も呟く星影。そんな星影の姿に、次第に空飛も落ち着きを取り戻す。

「ありがとう・・・もう、大丈夫です。」

「え？」

その言葉で、星影の意識は空飛の元へもどった。

「本当に・・・ありがとう。もう、泣きません。」

「あ、ああ・・・。それなら、いいよ・・・。」

空飛の言葉に、相手の体から離れようとしたのだが、

「あれ？」

（体が動かない。）

突然の金縛りに、困惑する星影。しかし、原因はすぐに判明した。

「琥珀・・・？」

「どうかしたのかい？」

「どうかしたじゃないだろう！？」

琥珀が、星影と空飛の二人を抱きしめていたのだ。ここでようやく、自分と空飛が琥珀に抱きしめられていたことに気づく星影。

「――――――離れろっ！」

「林山？」

「ど、どうしたんですか？そんなに声を荒げ――――――――」

「いいから、離れろ！！」

強引に、琥珀を引き剥がす星影。

「り、林山・・・！？」

「なにを怒っているのですか？私、なにか気に触るよう――――」

「なんでもない！！」

「林山！？」

「なんでもないよ！だから、気にしないでくれ！」

額に汗を浮かべながら星影は言った。彼女が焦ったのには理由があった。

（バレてないよね・・・！？）

慌てて、胸に手を当てて、衣服をただす星影。

（女性だとバレてないよね・・・・！？）

衣服をただすフリをしながら、胸の固さを確認する星影。安林山と入れ替わって、宦官になるにあたり、星影は裏工作をしていた。自前の大きめの胸は、布で巻いて固い胸板になるようにしていた。だから、やわらかいふくらみを感じることはないだろう。

それでも――――

（胸があるって、バレてないよね・・・！？）

胸に固く巻いた布を触る星影。その感触を確かめるように、胸についたほこりを払うフリをしながらか何度も撫でる。

（よかった・・・固い胸だ・・・。）

変装に異変がないことを確認し、安堵する星影。

（この・・・・・馬鹿星影っ！！）

安堵したところで、自分自身をしかりつける星影。

（抱擁なんてしてしまえば、女だとバレる可能性があるじゃないか！？）

その場の空気に流されて、思わず空飛達と抱擁をした自分。

（空飛にしても、琥珀にしても、元・男じゃないか！？）

相手が元・男だということを忘れて、抱き合ってしまった自分。

（私は友達を探すために、安林山になったんじゃないだろう！？）

完全に、劉星影ではなく、安林山として二人に接してしまった自分。

（私が林山のフリをして、宦官になったのはなんのためだ！？）

そう――――――犯罪を行(おこな)ってまで、宦官になった理由はただ一つ。

（妹・星蓮を後宮から救い出すためだろう！！？）

小さく歯軋(はぎし)りする星影。そんな彼女を現実に戻したのは、友人二人の声だった。

「・・・林山？」

「やっぱり・・・怒っているじゃないですか・・・。」

「――――――え！？」

その言葉で我に返る星影。顔を上げて二人を見れば、そこには難しい顔をした琥珀と空飛がいた。それを見て、星影は内心で悪態(あくたい)をついた。

（なにやってるんだよ、私！！）

星影から見た二人の自分に対する態度は、当然のものだった。さっきまで、仲良く友情を確かめ合っていたのに、急に突き放すような行動に自分が出たのだ。

（ヤバイ・・・！完全に怪(あや)しまれてる！！）

自分を見る琥珀と空飛の視線が痛かった。特に琥珀からは、ただならぬ気を感じていた。

（軽率(けいそつ)なことをした・・・！）

空飛はともかく、琥珀の前での妙な行動はよくなかった。

（・・・空飛はともかく、琥珀との付き合いは慎重(しんちょう)にしなければならないというのに・・・。）

空飛は、本物の宦官で間違いない。しかし、王琥珀は『伯燕(はくえん)』という別名を持っている。

あの晩、琥珀・・・伯燕(はくえん)は、誰かを殺す計画を立てていた。怪しい黒服の男と共に。その直後に陛下は襲われた。つまり、彼がその計画を実行したということではないだろうか。多少目的が違うにしても、素性(すじょう)を偽(いつわ)っているのは確かである。そして、星影の直感が正しければ、武術の心得があると判断できる。そんな相手に、自分の体を触らせたのは間違いだった。

「林山・・・。」

そんな星影の心中を知らない空飛が、消え入りそうな声で話しかけた。

「どうして・・・怒っているのですか？」
「怒ってない！！」

琥珀のことで、イライラしていた星影はぶっきらぼうに答える。星影の言い方に、肩をふるわせる空飛。そんな空飛の代わりに、今度は琥珀が星影に声をかける。

「では・・・照れてるのかい？」
「照れてない！！」
「で、でも林山、あなた――――――！」
「なんでもない！！しつこいよ！！」

困惑する空飛に、吐き捨てるように星影は言った。

二人からの質問を聞く限り、自分が女性だということはバレていない。空飛は、上手く誤魔化せるが、問題は琥珀だろう。

（こいつには、これからも気をつけないと・・・・。）

琥珀をチラッと見ながら、自分に言い聞かせる星影。だから、星影は気がつかなかったのだ。空飛の態度の変化を。それに星影が気づいたのは、空飛の声を聞いてからだった。

「ごめんなさい・・・そういうことだったのですね・・・・。」
「え？」
「本当にごめんなさい・・・林山・・・！！ごめんなさい！！」
「ええ！？」

突然謝る空飛に驚く星影。それと同時に、空飛の安林山に対する謝罪内容にも驚かされた。

「私の臭い体で、林山に抱きついたから怒ったのですよね!?ごめんなさい・・・!ごめんなさい、林山・・・・!!」
「はあ!?」

意味がわからず、相手を凝視する星影。その視線の先には、暗い顔で俯く空飛がいた。

「ごめんなさい・・・。体を拭いていないから、臭いますよね・・・。」
「拭いてない・・・?」
「汚い体で・・・ごめんなさい、林山・・・・!」

そう言って、体をふるわせえる空飛。そんな空飛の態度に、星影は――――――

「・・・・なに言ってるんだ、空飛!?」

困った顔で、尋ねるしかなかった。星影の問いに、空飛は遠慮がちに答えた。

「だって・・・私の体が臭かったんでしょう?」
「臭い?」

空飛の言葉に、相手の側まで行く星影。そして、空飛の服の裾を持つと臭いを嗅ぎはじめた。

「り、りりり林山!!?」
「なっ、なにをしているんだ、君は!!?」

星影の予想外の行動に、大声を出す二人。

「う～ん・・・私達が寝ている、寝床の臭いがするな。」
「林山!?」
「臭いかどうかなんて、わからないよ。」
「ええ!?」
「いや・・・だからさ、木の臭いぐらいしかしないけど・・・。」

クンクンと、空飛の服を、自分の鼻に当てて嗅ぐ星影。
その姿に、空飛は真っ赤な顔で抗議した。

「やめてください!からかっているんですか!?」
「それはこっちのセリフだよ。私は、空飛が臭いという理由ではなれたわけじゃない!」
「では、私の体の方が臭かったのかい?林山。」
「お前は場違いな臭いがするよ、琥珀!」

(伯燕という怪しい名前を持つ、危険な香りがね!?)

星影の怒鳴り声に、言葉を詰まらせる琥珀。そんな相手を無視すると、星影はきつめの口調で言った。

「臭い臭くないって、なにを言ってるんだよ、二人共!?」
「いえ・・・ですから、私達体を拭いてないので――――」
「私も拭いてないよ!ここ数日、楊律明・呂文京のせいで、湯浴みすらできてないんだから!」

(もっとも、湯浴みをすれば、女性だとバレるから、体を拭くことしかできないけどね・・・。)

そんな星影の様子に、空飛は小さく叫んだ。

「私・・・教えていませんでしたっけ・・・？」

「え？ということは――――――」

（・・・私、またおかしいこと言ってると・・・？）

正確には、おかしいことをしていた。星影の言葉に、琥珀がため息をつきながら言った。

「林山・・・下級宦官は、体を洗うことができないんだよ。する時間もないし、費用の問題で、洗わせてもらえない。だから、水でぬらした布で、体を拭くことしかできないんだ・・・。」

「・・・と言っても、実際は体を拭くこともできません。林山が来た日から・・・・私、体を拭いていないので――――」

「ええ！？宦官生活って、そこまで劣悪（れつあく）なの！？」

「気がつかなかったのは・・・・楊様達の嫌がらせだとでも思っていたのかな、林山？」

「嫌がらせじゃなかったのか・・・！！」

星影の言葉に、大きなため息をつく二人。

「しかし、臭（くさ）いが嫌ではなれたんじゃないとなると――――」

「どうして、急に拒絶（きょぜつ）したんですか・・・？」

「あ、いや、それは――――――」

二人の問いに、返事に困る星影。

女とバレないかと、慌てて離れたとは言えないし――

（・・・仕方ない。誤魔化せるところまで誤魔化そう！）

そう決心すると、苦痛の表情を作りながら星影は言った。

「違うんだよ！空飛、琥珀！！私が、２人の側を離れたのは――――」

「「離れたのは？」」

「――――――・・・つらくなるからだ！！」

「「つらくなる！？」」

「そうだよ！私達は・・・明日から離れ離れになるんだぞ！？これ以上、二人の側にいたら――――私は悲しくてたまらない・・・・・！！」

「悲しい・・・！？」

「ど、どういうことですか、林山！？」

二人が、自分の話を聞く姿勢になったのを確認すると星影は言った。悲しい声を出しながら。

「明日から・・・私は、誰も知り合いのいないところで、二人とはなれて仕事をするんだよ？今夜二人とこうして、最後の夜を過ごせて本当に嬉しい・・・。だけど――――――」

「だけど？」

「・・・空飛や琥珀に優しくされたら・・・二人に甘えてしまったら、明日から私は、寂しい毎日を過ごすことになる・・・！」

そう言って、顔を覆う星影。

「笑ってくれよ・・・！強がってみても、偉そうなことを言っても、すごく不安なんだ・・・。陛下のお側でお仕えするのが・・・！」

そのまま、泣き声を出しながら星影は言った。

「空飛と琥珀の臭いが気になってはなれたわけじゃない！！こうして接しているうちに、二人と離れたくなくなっちゃったんだよ・・・！！」

「林山！？」

「ねぇ・・・陛下の側仕え、辞退してもいいよね・・・？」

「正気か、林山！？そんなことをしたら――――君は、ただではすまないぞ！？」

「黄藩様にも言われたよ！そしたら、あの方は、私の友達を選ぶと仰ったんだ！人に選んでもらった友達なんて、友達といえるか！？」

「林山、それは――――――」

「友達じゃないだろう！？それこそ、楊律明や呂文京みたいな連中だよ！」

「しかし・・・陛下の命には、逆らえないよ・・・。」

「わかってる！だから離れたんだよ！！」

琥珀の言葉に、怒鳴りつけながら星影は言った。

「空飛と琥珀やたら、別れる時がつらくなる・・・・！それに私は、気がついてしまったんだよ！！」

うぅ、と低く唸ると、星影は大げさに叫んだ。

「わかってるよ・・・。陛下のお側でお仕えできることが、とても名誉なことだと・・・。それなのに私は――――一緒にいられない友に対する情を・・・・強く感じてしまった・・・！！」
「林山、あなた・・・！」
「・・・今離れないと、離れなくなってしまうから・・・！！」
「・・・そこまで私達のことを・・・！？」
「嫌な思いをさせてごめんね、二人共・・・！心にないことをしてしまって・・・！」
「では・・・情を振り切るために、私や空飛から離れたのか？」
「・・・笑ってくれていいんだよ。」
小さな声であざ笑う星影。そんな星影の姿に、空飛が食いついた。
「――――おかしくなんかありませんよ！！」
「空飛。」
「林山！」
わぁ、と声を上げて、再度星影に抱きつく空飛。
「ごめんね・・・林山！林山のつらい気持ちも知らないで、私は――――」
「やめてくれよ、空飛！そう言うことされたら私は・・・・」
肩を震わせながら星影は言った。
「友達と離れたくなくなるじゃないか・・・！！」
「林山・・・！！」
「ごめんよぉ空飛！急に、そっけなくしてさぁ～！」
「そんなことありませんよ、林山！私こそ・・・きちんと説明して

いなかったばかりに・・・！！」
「空飛・・・！」
「十分です！林山の気持ち・・・私、十分伝わりましたかね・・・！！」
「空飛！！」
（よっしゃ～！難易度初級の調略に成功！！）
空飛を抱きしめながら、心の中で飛び跳ねる星影。
（空飛への誤魔化しは良しとして・・・問題は――――）
うっすらと目を開けて、難易度上級の獲物を見る星影。
「琥珀・・・。」
（この男だよな・・・！）
自分と空飛の抱擁を見つめる男に、星影は悲しそうな声を作りながら言った。
「琥珀、ごめんね・・・！ひどいことばかり言って・・・・。」
上目遣いで、そっと琥珀を見る星影。
「琥珀が抱きしめてくれた時・・・・恥ずかしかった・・・。」
「・・・林山。」
「だけど、すごく嬉しかったんよ・・・！」
「・・・嬉しかった？」
「ああ・・・自分でもわからないんだけど・・・なんだろう・・・。

すごく暖かくて、安心できて・・・！」

そう言って、琥珀から視線をそらす星影。そして、必死で声を震わせた。

「恥ずかしかった・・・！だかど、すごく嬉しかったんだよ！」

「林山。」

「それなのに私は――――――優しくしてくれた琥珀を無理やり引き剥がして・・・！！」

「・・・林山、私は気にしていないよ。」

「私が気にしているんだ！私って奴は、どうしてこんなに――――――！」

「そんなこといわないでください！林山の気持ちは、琥珀だってわかっていますよ！そうですよね、琥珀！？」

空飛の言葉に、琥珀は二人に近づきながら言った。

「・・・わかっているよ。友への情を振り切るために、強引に私達を振り払ったということだよね・・・？」

「琥珀、あなた――――――！」

「私達は、今しか一緒にいることができない。それなら――――――今のこの時間を有意義（ゆういぎ）に過ごそうじゃないか？」

「琥珀・・・！」

「君にはかなわないよ・・・林山。」

そう言って、星影の頭を優しくなでる琥珀。そんな琥珀に、声を震わせながら星影は告（つ）げる。

「ありがとう・・・琥珀・・・！」

（――――――よっしゃ！！難易度上級も一応は、調略完了！！）

「ありがとう・・・琥珀、空飛・・・・！！」

（ありがとうぉ！私のホラ話に騙（だま）されてくれて！！）

そして――――――

「本当に・・・ごめんね・・・琥珀、空飛。」

（二人を騙してしてしまって・・・・。）

正直、空飛を騙すことには、かなり罪悪感があった。空飛があまりにも純粋なので、騙すのには忍びないと思ったからだ。なによりも、自分に対して親身になって、心配してくれたいい友達だったので――――――

（空飛、本当にごめんなさい・・・・！！）

心の中で、何度も空飛に頭を下げた。その一方で――――――

（琥珀は・・・・・・騙してもいいか。）

琥珀を騙すことへの、罪悪感はあまりなかった。それには、琥珀が【伯燕】という別名を持っているということが、大きく関係してい

た。琥珀への警戒が強かったこともある。

（空飛は、上手く誤魔化せたと思うが、琥珀は――――――――）

本当に、私の言葉を信じているかどうかは確信できない。

（まぁ・・・表面上は、なんとか、二人を誤魔化すことはできたからいいか・・・。）

琥珀に頭を撫でられ、空飛を抱きしめながら、胸をなでおろす星影。

だが、星影は知らなかった。部屋の外で、自分達三人のやり取りを見ている人物がいるということを。

「あれが・・・安林山か、黄藩？」

「左様でございます。」

三人を見ていたのは、黄藩と文官の衣服をまとった青年だった。年齢的には、黄藩の方が上だったが、身分的には若い文官が上だった。文官の問いに黄藩は、声を潜めながら言った。

「あの一番気性が激しいのが、安林山でございます。」

「そうか・・・。」

黄藩の説明に、考え込むような口調で青年は呟く。

「陛下が『似ている』と、仰(おっしゃ)るので、君に頼んで見に来たが――――」

青年は小さく笑うと言った。

「なるほど・・・無茶なところは、兄上にそっくりだ。」

「霍光(かくこう)様！」

「無茶なところは・・・ね。」

霍光と呼ばれた青年は、そう言うとゆっくりと部屋の前を離れて行く。その後を、足早に黄藩が追いかける。月明かりに照らされた霍光の顔は、青白い陰影をつけて浮かび上がっていた。

第二十六話　それぞれの夜～嘘を重ねて、演じきる～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
今後も星影は、自分達のために嘘をついていく予定です（笑）妹が可愛いので、奪い返すためなら基本的に道理を捻じ曲げます（苦笑）型破りな星影を書いていくつもりなので、笑ってやってください（汗）

※お手数ですが、誤字・脱字を発見した方、こっそりでいいので教えてください！！お願いします・・・！！

第二十七話　それぞれの夜～善と悪は紙一重～

薄暗い道を二人の男が進んでいた。ゴロツキ風の男と誠実そうな青年。その純粋そうな男が安林山であった。郭勇武のことに調べていた安林山は、居酒屋で凌義烈という男と知り合った。役人に捕まりそうになったところを助けてくれたばかりか、蔡勇武について詳しい情報を買わないかと言ってきた男。心底信用するわけにはいかなかったが、相手はここら一帯の裏を牛耳る『百面夜叉の義烈』という通り名を持つ人物である。

『邪の道は蛇』というように、ただの噂話よりは確実なものが聞けるかもしれない。そう思ったからこそ、ここまでのこのこと付いてきたのだ。義烈の案内で、いくつもの狭い路地を進む林山。

「ついたぞ、ここだ。」

義烈が言った先には、木が生い茂る邸宅だった。門をくぐると、数人の男達が火を囲う形で談笑していた。林山達の、凌義烈の姿を見るや否や彼に向かって頭を下げながら言った。

「お頭！お帰りなさいませ！」
「義烈の兄、お早いお帰りで！」
「お疲れ様です！！」

出迎え方からして彼の配下であることに間違いはなかった。口々に言う彼らに凌義烈は変わらぬ表情で答える。

「ご苦労だな。」

彼に向かっていっせいに頭を下げる姿に、凌義烈という男が只者で

はないことを思い知らされた。そのまま邸宅に入っていく。しかし、林山を驚かせたのはそれだけではなかった。

「お頭！お帰りなさいませ！！」
「お疲れ様です！義烈様！！」
「兄貴！お待ちしておりました！！」

と、波のような大歓声で迎えられる二人。

（すごい！なんて数だ・・・。）

軽く見積もって百人はいるぞ。これをすべて、この男が面倒を見ているのか！？

そんなことを考えながら、林山は義烈へ視線を向ける。林山の視線に気づいた義烈が口元だけで笑う。そんな義烈の側に、一人の男が素早く近づく。そして、義烈に向かって頭を下げながら言った。

「頭！お帰りが遅いんで心配してましたぜ！」
「許蘇か。いつ戻った？」
「ヘイ、三刻ほど前に戻りました。」
「首尾は？」
「ご覧の通りです。」

許蘇と呼ばれた男の手には、竹簡が握られていた。

「ご苦労だったな。」

凌義烈のねぎらいの言葉に、許蘇は深々と頭を下げる。

「お頭の命令ならば喜んで行います。」

「おう、頼りにしてるぞ！」

満足そうに凌義烈は笑った。彼らのやり取りはまさに、裏の人間の姿と言えた。

「それはそうとお頭！失礼ですが、そっちの男は・・・？」

許蘇の問いに、男達の視線が今度は林山に向けられる。

林山が答える代わりに義烈が言った。

「こいつは俺の客人だ。」

「客人！？この若造がですか！？」

「年は関係ねぇだろう！俺の客に文句があるのか！？」

「め、めっそうもございません！」

「じゃあ、黙ってろ！くれぐれもいじめんじゃねーぞ！！」

「へい、かしこまりました・・・！」

そう言った許蘇だったが、林山を見る視線はどこか下品だった。

「そういうわけだから、俺は少し遅れるぞ。先に下見の方だけ話しといてくれ。」

「え！？しかし、頭がいないと・・・。」

「なんだ？なんか文句でもあんのか！？」

「文句はないすけど・・・やっぱり義烈の兄貴がいないとどうもまとまりませんから。」

「馬鹿野郎！テメーらガキか！？・・・ある程度（ていど）は調べがついてるんだ。あの男のこともな・・・。」

最後の方は、消え入るような声だった。彼らのやり取りに林山は疑問を持った。

下見？あの男？

（・・・なんだか悪巧みの予感がするな。）

百面夜叉の義烈の下見だ。まさか、誰かを襲うための下見とかじゃないだろうな！？いや、ありえるかもしれない・・・この怪しい男のことなら。

「とにかく、グダグダ言ってんじゃねぇ！つべこべ言わずにやれ！！わかったか！？」

「ハ、ハイ！かしこまりました！！」

その場にいる百数十人が、義烈に向かっていっせいに頭を下げる。

それは、かなり迫力のある光景だった。

「ほら！なにしてんだ！さっさと来い！」

軽く背中を叩かれ、我に返る林山。目の前には、ニヤニヤと笑う凌義烈の顔があった。

「い、言われなくてもわかっている！」

「どうだかね？先に言っとくが、俺は忙しいんだ。さっさと商談まとめようぜ？」

「望むところだ！」

再び歩き出す義烈の後を追う林山。背中に、義烈の配下から鋭い視線を感じたが、知らないふりをしてやり過ごした。

（どうやら俺は、お邪魔虫みたいだな。）

そんなことを思いながら、凌義烈について行く林山。奥に進むと、ある部屋の前で義烈は止まった。義烈は乱暴に戸を開けると、さっさと中に入って行った。林山もその後に続く。部屋の中は薄暗かったが、豪華な調度品が数多くならんでいた。

（この布は絹か。むこうの剥製は北方のものだな。あれは南の真珠だ。）

無意識のうちに、品定めをする林山。それは、大商人の息子のサガとも言えた。早い話が、職業病といっていい。

「全部仕事の報酬だ。」

「・・・そうか。」

豪華な調度品を見る林山に義烈が言った。庶民から見れば、ため息が出るほどの物だが、幼い頃から大商人の仕事現場を見てきた林山にとってはあまり驚くことはなかった。むしろ、それらの調度品によって、持ち主がどういった人物か予想できた。

（絹は西域から、剥製は北方の匈奴から、真珠は長江から来たものと考えれば・・・！）

頭の中で、商品の生産から仕入れまでの過程を計算する林山。その結果、一つの答えが導き出された。

（凌義烈という男・・・ずいぶん儲けているみたいだな。）

かなりやばいやり方で。

部屋にある装飾品の中から、林山は見つけていた。その中のいくつかは、取引が禁止されている物だったことを。正確には、普通の取引では絶対に手に入らないものがほとんどだった。

（裏で幅広く稼いでいるということか・・・。）

そんな中で、林山の眼にあるものが止まる。部屋の奥にある扉。どこからどう見てもただの戸なのだが。

（気になる・・・。）

気になってしょうがなかった。林山の様子に気づいた義烈が言った。

「あの戸が気になるが？」

「別に・・・。」

わざとそっけなく言う林山に、義烈は笑いながら言った。

「いいだろう。せっかくだから見せてやるよ。とっておきを。」

得意げに言うと素早く戸を開く。

「あ！」

戸が開かれた瞬間、林山は目を奪われた。

「これは・・・なんて見事な木蘭なんだ！」

戸の先には、鮮やかな赤紫色と雪のように白い大輪が咲いていた。

「すごい・・・！こんなに美しい木蘭は見たことがない。」
「この部屋から、朱雀の間から見るのが一番綺麗なんだぜ？」
「『朱雀』？四聖獣のことか？」

四方をつかさどる神、それが四聖獣である。

「そうだ。ここが朱雀の間、右が青龍の間、左が百虎の間、向かいが玄武の間だ。」

見ると、右と左と向かい側に戸があった。そこにはそれぞれ朱雀、青龍、百虎の絵が力強く描かれていた。開かれた戸にも朱雀の姿があった。

「建物の中央に庭を造ったばかりか、木蘭の木を守るように四聖獣を配置するとは・・・なんて風流なんだ・・・！」
「だろう！？この時期は酒の魚にしてんだよ～」
「それはいい趣味だ！」
「そんなにいいか？」
「ああ、見直したよ！なかなか、粋なことをするじゃないか！？」

咲き誇る木蘭を見ながら林山は言った。今まで、数多くの木蘭の花を見てきたが、これほど立派なものを見たのは初めてだった。目を輝かせながらいう林山に、義烈は苦笑しながら言った。

「・・・やっぱりお前は、良いところの坊ちゃんだな。」
「どういう意味だ？」
「大抵の奴は、この部屋にある豪華な装飾品に目がいく。だがお前は、真っ先に戸の方に関心がいった。・・・よっぽど見慣れた金持ちだからこそ、見向きもしなかったんだろう？」
「――――――！」

義烈の鋭い観察力に、林山の表情から笑みが消える。

（こいつ・・・やはり曲者（くせもの）だな。）

これは、一瞬たりとも気が抜けない。

「・・・金持ちじゃなくても、見慣（みな）れている場合があるんじゃないのか？」

「ハハハ！コソ泥（どろ）だとでも言うのか！？よく言うぜ。」

林山の返事に、楽しそうに言う義烈。

（――――――――これ以上、嗅ぎまわれては厄介だな・・・！）

そう判断した林山は、笑い続ける義烈に言った。

「そんなこと、どうでもいいだろう？それよりも、早いところ商談をまとめたい。これ以上お前の部下を待たせては、帰りが怖いからな。」

「心配すんな！俺の命令に逆らってまで、お前をどうにかしようという奴はいねーからよ。」

「・・・そうだといいんだがな。とにかく、早くしてくれ。」

「なんだよ？信用されてねーのか、俺は？」

「金は払ったはずだ。これ以上危ない場所にはいたくないからな。」

正直、凌義烈と一緒にいたくなかった。すべてを見透（みす）かしたようなものの言い方をされては、いつボロが出るかわからなかった。

（そうなる前に、この場を離れないと――――――――！）

「そんなに急がなくてもいいだろう?それとも・・・急がないといけない理由でもあるのかい?」
「・・・理由などない。お前の勘違いだ。」
そう言い放った林山を、無言で見つめる凌義烈。ほんの秒の出来事だったが、林山にはかなり長い時間のように感じられた。
「お前さん・・・なにかワケありだろう?それも郭勇武絡みだ。」
義烈の言葉に、林山はかすかに動揺する。
「言っただろう、興味本位で聞いていただけだ!」
「興味本位で、俺から情報を買ったのか?」
「話を持ちかけてきたのはお前だろう!?俺はそれに乗っただけだ!」
「・・・女がらみか?」
核心をつかれ押し黙る林山。わかりやすい相手の態度に、困ったように首を振りながら義烈は言った。
「やっぱりな・・・。みんなそうなんだぜ。郭勇武のことを知りたがる奴は・・・。この間も、恋人を奴に奪われた若い男に、奴の情報を売ったばかりだからな。」
「え!?」
驚く林山をよそに、義烈は立ち上がると近くにあった酒瓶と器を取る。

「奴の情報を欲しがるのは、女を取られた男だけじゃねぇ。一人娘を盗られた老夫婦や女房を取られた旦那とかな。」
「そんなことまでしていたのか!?」

（あの野郎ぉぉぉ――――!!信じられん!）

林山の脳裏に、郭勇武が高らかに笑う姿が浮かぶ。

「まあ・・・教えてやった奴のほとんどが出て行ったがな。」
「出ていったって・・・ここをか?」
「ああ。相討ち覚悟で奴に襲い掛かり、この世から出て行ったんだ。」
「てっ、死んだのかよ!?」
「まあな。」

肩をすくめながら、義烈は器に酒を注ぐ。

「ほら、いいから飲めよ。」

そう言って、酒で満杯になった器を林山の前に置く。しかし林山は、その器を受け取らなかった。

「まさか・・・そうなるとわかっていて、他の連中にも情報を売ったのか!?」
「そりゃ金になるからな。」

落ち着いた様子で言う相手に、林山の中で怒りが芽生える。

「貴様っ!金のためなら、人が刺し違いになって死んでもいいとい

うのか！？」
「俺だって一応は、注意してるんたぜ？『聞くだけにしとけ、馬鹿な事はするなよ』ってな。いつも念押しに言ってる。それでも連中は郭勇武に襲い掛かって殺されたんだ。自業自得さ。」
義烈は冷たく言い放つと、酒の入った自分の杯を一気に仰いだ。
「忠告を聞かない奴が悪いんだ。世の中にはどうにもならねぇことがある。」
強い口調で言う相手に、思わず黙り込む林山。
「お前さんだって、どうにもならないから、俺の話を買う気になったんだろう？」
「それはそうだが・・・しかし！」
「この世の中が、平和で穏便に、問題が解決するなら、俺達が会うことはなかったはずだぜ？」
そう言いながら、新たな酒を注ぐ義烈。
「俺もよぉ・・・わかってて、ついついお節介で教えちまうんだよ。」
「そんなに金が欲しいのか？」
「半分は、当たってるな。」
林山の嫌味に、笑顔で答えながら義烈は言った。
「どいつもこいつも、自分に素直なんだよ。自分の意志を通せたら、死んでもかまわねーて、馬鹿な連中ばっかりだ。お前もその口だろう？」

「え・・・？」
「俺はそういう奴見ると、つい手助けしたくなるんだ。無駄死にさせちまうとわかっててな・・・。」
「お前・・・。」
「俺は嫌いじゃねぇな・・・そういう奴。」
クックッと、喉を鳴らして笑う義烈に林山は言葉を失う。
この男の言う通りだった。俺達のように、大切な人を奪われた現実を割り切れない人達がいる。自分も星蓮のことが諦め切れなくて、星影と入れ替わってまで連れ戻しに来た人間だ。いくら命の危険があると言っても、決心してしまっていたら、なにを言っても聞くはずがない。凌義烈という男は、俺や俺のように、この男を頼ってきた人達の気持ちを理解していた。だからこそ、止めてと無駄だとわかっていながらも、郭勇武の情報を教えていたのだ。
そこまで考えたところで林山はあることに気づく。
もしかしてこいつは――――
「それじゃあ、改めて尋ねようか。」
俺が考えているよりも、
「こんなひどい男だとわかった今でも、あんたは俺から情報を買うかい・・・？」
まともかもしれない。
（信用できるんじゃないか・・・？）

そんな林山の気持ちは、言葉となって義烈に伝えられる。

「ああ、買わせて貰うよ。お前は、俺が思っている以上にまともな人間みたいだからな。」

林山がそう答えると、相手は目を丸くしながら言った。

「・・・今までいろんな奴を見てきたが、そういう返事をされたのは初めてだ。」

「嬉しいか？」

「ガキが・・・！調子に乗ってんじゃねーよ。」

そう言って笑うと、林山の前に置いていた酒の入った器を持つ。

「早く飲め。これで商談成立だな・・・。」

「ああ、頂こう。」

今度は素直に酒を受け取る林山。義烈も自分の杯を持つと、林山の杯と合わせた。

こうして、林山と義烈は誓いの杯を交わすのだった。

第二十七話　それぞれの夜～善と悪は紙一重～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
小説の中に出てきた木蘭は、中国原産の落葉小高木のことです。一般的に、庭木などに使われます。三・四月ごろ、葉に先だって、赤紫色や白色の花をつけます。本来は「木蓮」と書くのですが、ストーリーにあわせて「木蘭」としました。そっちの方が、中国っぽいと思いましたので（笑）
余談ですが、木蘭つながりで、有名な中国武将を見つけました。「花木蘭」という男装の女性武将がいるそうです！文武に秀でた女性とまでしか知りませんが・・・彼女に関する話、たくさんありますね（汗）ハッピーエンドから悲劇的なものまで（大汗）「どれが本当の話！？」と、思わずツッコミをいれてしまいました（苦笑）詳しい方いらっしゃいましたら、教えてください（笑）

※お手数ですが、誤字・脱字を発見した方、こっそりでいいので教えてください！！お願いします・・・！！

第二十八話　それぞれの夜～妹命のお姉さん～

凌義烈に勧められた酒を、安林山は一気に飲み干した。酒の濃度が高いせいか、喉に熱く伝わる。飲みなれていない林山は、うぅ～と、唸りながら杯を置いた。

「お前さんには、西域の酒は少しきつかったみたいだな？」

「・・・やっぱり酒は、漢のものが一番いいよ。」

林山の言葉に、声を立てて笑う義烈。それに釣られるように、林山も声を立てて笑った。不思議と先ほどまで感じていた、凌義烈の笑い声に対する不快感はもうなかった。

「そういやまだ名前を聞いてなかったな。なんていうんだ？」

思い出したように尋ねる相手に林山は、

「俺は――――」

言いかけて口を閉じる。いくら星影が後宮にいるからといって本名を名乗るわけにはいかなかった。今の俺はあくまで劉星影・・・安林山ではない。

「なんて名だ？」

「ああ・・・申し遅れたが、俺は――――劉星影。」

「劉、星影・・・？」

「そうだ。俺の名前は、劉星影。」

星影が今、宮中にいるとはいえ、入れ替わっている身。どこで誰が

聞いているかわからない。だから、名乗る名前は【劉星影】と決まっている。

「そうか。」

林山の言葉に、義烈は納得したようだった。相手に怪しまれなかったことに安堵する林山。しかし、次に義烈が発した言葉に固まった。

「それで星影、お前が郭勇武の情報を知りたい理由ってのはどんなんだ?」

「り、理由!?」

(言わないといけないのか!?)

そんな林山の心中を察した義烈が言った。

「俺はいつも、理由を聞いてから情報を売ってんだ。それが俺との取引の決まりだ。」

「女がらみだと知っているだろう!?」

「『女がらみ』としか知らねぇし。つーかよ、本当に女がらみだったのか?」

「なっ!?」

「ハハハ!自分でしゃべっちまったら、世話ねぇよなぁ~!?」

林山を見ながら爆笑する義烈。今まで笑われた中で、一番大きなものだった。義烈の態度に、林山は真っ赤な顔で怒鳴りつけた。

「騙(だま)したな!!?」

「騙してねぇーよ。カマかけたら、それに星影が引っかかったんだろう!?」

義烈の言葉に、林山は複雑な顔になる。そこには、【星影】と呼ばれたことに違和感を覚えたという思いがあった。

「星影よ・・・今さら、隠す必要はねぇだろう?俺達や、買い手と売り手なんだぜ?」

「そ、それはそうだが――――」

「俺はお前の話すことを、誰かに言うつもりはない。金にならないからな。」

「・・・金になれば、話すのか?」

「なんだよ、お前それほどのご身分か~?」

茶化す義烈に、林山は口を閉ざした。

(信用すると決めた以上、正直に答えなければいけないよな・・・。)

考え込む林山。そんな林山の杯に、新たに酒を注ぎ足しながら義烈は言った。

「難しく考えるな。どうしても言いたくねぇなら・・・言う必要はない。」

「え?」

「言えねぇのは、尻込みしてる証拠だ。お前は長生きできそうだな。」

「なっ!?お、俺が臆病者だとでも言いたいのか!?」

「悪く言えばな。良く言えば、命を大事にしてることだ。」

「ふざけるな!俺は――――」

「悪いことじゃないぜ、迷うことは。」

「な・・・!?」

「ここぞという時に、考えて決断できないと男じゃねぇからな。」

そう言って、義烈は酒を口に運んだ。

「まぁ・・・今すぐ話せとは言わねぇ。今日のところは、酒でも酌み交わせればそれでいい。」

「・・・なにをのん気なことを言ってるんだ!?」

「星影が急いでないからだろう?」

「俺は急いでる!一刻を争う状態なんだ!!」

「その割には、ゆっくり構えてるじゃねぇか?長期戦のつもりじゃねぇの?」

「時間はかけたくないんだ!さっさと片をつけないと――――――」

そう言いかけて、林山は慌てて口を閉じた。そんな相手の様子を、義烈は口惜しそうに言った。

「惜しかったなぁ～もう少しで、話してくれそうだったのによぉ～」

口調とは裏腹に、義烈の表情はひどく楽しそうだった。そんな義烈の態度に、林山は必死で自分に言い聞かせた。

(落ち着け林山!相手のペースに飲まれるんじゃない!)

悔しいが相手は、自分よりも話術(わじゅつ)に長(た)けている。余計なことを言えば、言い負かされるどころか、自分達の本当の目的がバレる恐れがある。そうなれば、自分の身代わりで宮中にもぐりこんでいる星影の身が危ない。

(そうだ・・・星影だけじゃない。星蓮だって――――――!!)

俺がしくじれば、そのツケがすべて二人にいってしまう。

「・・・他言無用と、約束できるか？」
「そういうつもりで、取引の契約したんだろう？」
「俺一人が・・・犠牲になるならまだいい。」
「なんだよ、共犯でもいるのか？」
「共犯などいない――――――――！」

（そう・・・共犯などいない。）

俺にいるのは――――――――――

（愛する女性と、信頼する友のみだ。）

「俺一人で・・・動いているんだ。」
「へぇ～単独犯かい？だったら、俺に悪巧みを言っちまっても、問題ねぇだろう？」
「仕事を請け負う相手が、裏切らなければな・・・！」
「おいおい、まだ俺を信用してないのかよ～！？」
「・・・信用はしている。しかし、俺の大事なものに、絶対に被害がいくかないとは、否定できないだろう？」
「ずいぶん慎重だな。そんなに大事な女かい？」
「大事だ。」

（俺の対応次第で、二人の女性の命がかかっている・・・。）

恋人である星蓮の身も大事だが、その姉である星影の身も大事だった。
本来ならば、自分がするべき危険な仕事を、星影が身代わりとなって行(おこな)っている。

（俺の口から漏れた情報で、最初に危険な立場になるのは星影だ・・・。）

正体がバレれば、その場で殺されてしまう。星影の性格を考えれば、逃げるようとするだろうが、宮中は四方を壁に囲まれた城。それも、この国の最高権力者を守るための精鋭兵がそろっている場所。逃げ切れることは不可能だ。

（そうなれば、あいつは俺達のことを思って死を選ぶだろう・・・！）

星影と長い付き合いをしてきただけに、相手が何を考えているか林山にはわかった。それだけに、星影に対して罪悪感ばかりを感じていた。

（星影は、俺達のために命を懸けているんだ・・・・！）

この男を利用すると決めた以上、凌義烈を信じきるしかない・・・！！

（俺の大事な人達のためにも――――――――――――！！）

「凌義烈・・・あなたに命をかけよう・・・！」

それまでの口調とは一変（いっぺん）した、はっきりとした声で林山は言った。

「俺の命をあなたにかける。その代わり、あなたも中途半端なことをしないでくれ・・・！」

そんな林山の姿に、一瞬動きをとめた義烈だったが――――

「・・・じゃあ、言っちまえよ。心にたまってる鬱憤も、まとめて吐いちまえ・・・！」

そう言うと、今度は自分の杯に酒を入れる義烈。
その義烈の言葉で、林山の覚悟は決まった。
ゆっくりと呼吸を整えると、真剣な表情で林山は言った。

「皇帝陛下が・・・漢帝国全土に、後宮入りにふさわしい女性を連れてくるように、勅命を出したのは知っているか？」
「ああ、あの奥方狩りの勅ね。」
「俺の暮らす町にも、皇帝の勅使だという男が現れた。そして、ある女性を連れて行った。」
「ある女性？」
「その女性には婚約者がいて、数日後には結婚式を挙げる予定だった。なのに・・・陛下の使者は、それを知っていて、無理やりその女性を連れ去ったんだ・・・！」
「・・・つまり、その使者ってのが――」
「そうだ！郭勇武だったんだ・・・！！」

その時のことを思い出し、憎々（にくにく）しげに顔をゆがませる林山。

（あの時、俺が不覚を取らなければ・・・・！！）

「俺は・・・その女性を取り返すために、都まで来たんだ・・・！」
「なるほどな・・・。郭勇武のことだ・・・とっくにその娘を、宮中に入れちまってる可能性が高いぜ。」
「それはわかっているが――――」
「後宮に入っちまってたら、取り返すのは不可能だぞ？」

「――――それでも取り返したいんだっ！！」

声張り上げ、再度怒鳴りつける林山。
そんな林山にむかって、怖い、怖い、と言いながらなだめる義烈。

「じゃあ星影は、連れて行かれた娘を取り戻したくて、郭勇武について調べてたってことか？」
「そうだ！郭勇武について調べれば、彼女を取り戻すための方法が見つかるんじゃないかと思って・・・！」

頷く林山に、男はやれやれと首を振りながら言った。

「方法は――――ないこともない、が・・・。」
「本当か！？」
「ああ。調べてみないことには、正確にはわかんねぇけどな・・・。肝心なのは、その娘が入廷してるかどうかだ。入廷する前だったら、取り返すことは可能だろう。」
「入廷しているかどうか・・・！？」
「郭勇武ってのは、自分のために美女を後宮に入れるんだぜ？見た目がいいだけじゃ、今の皇帝陛下様は満足しねぇんだよ！」

「どういうことだ？」
「教養とか、品格とか・・・早い話が、礼儀作法の問題だよ。」
「礼儀作法・・・。」
「ああ。礼儀作法ができてない娘、庶民の娘なら、それを覚えさせてから後宮に入れる。そういう娘なら直ぐに取り戻せるが――」
そう言って一息置くと凌義烈は言った。
「礼儀作法が完璧な貴族のお嬢さん方や、そういうことをしっかりと教え込んでる家の娘さんなら、宮中に送られちまってる可能性が高い。取り戻すのはまず無理だ。」
凌義烈の言葉に、林山の表情がこわばる。
「星影・・・お前さんが取り戻したい娘はどういうお嬢さんだ？年は？身分は？」
「・・・年は今年で十六、身分は大商家の娘だ・・・。」
「礼儀作法は？」
凌義烈の言葉に、林山は肩を落としながらいった。
「完璧だ・・・！！彼女の父親は、礼儀作法については徹底的に教えた挙句、それでも心配だからと、貴族の作法まで教えた人だったんだ！！」
「てことは～」
「完璧さっ！！しかも彼女は、かなり物覚えが良かったよ！！地元じゃ、才色兼備で有名な美女だったんだぞ！！？」
拳を握り締めながら、悔しそうにつぶやく林山。

「星影・・・希望は持たねぇ方がいいな。」

気の毒そうにいう義烈に、林山は頭を抱え込む。

（義父上、義母上、なぜ星蓮を、完璧な淑女にしてしまったのですか・・・！？）

恨み言とは言い難い、恨みの念を強める林山。

それに、今さら星蓮が、後宮にいるかどうか調べるという義烈の発言は無意味だった。理由は、彼女の姉がとっくに宮中に入り込んでいるからだ。考えてみれば、星蓮が後宮にいるということを前提にして、宦官証明書を偽造して入れ替わったのである。入廷していないとなれば、自分の身代わりになった星影を連れ出さなければならない。

（もう少し・・・計画を立てて行動すればよかったな。）

自分達のやっていることを、違った意味で反省する林山。

「それで・・・後宮にいるかどうかは、すぐにわかるのか？」

「だから、調べればわかるって言ったろぅ！？ただな・・・お前の話が誇張じゃねぇなら、その娘は入廷しちまってるだろうぜ。」

「本当に、嘘ならよかったよ！！」

（義父上・・・！何故あそこまで完璧に、お嬢さんの教育をなさったんですか・・・・！？）

林山の心中は、義父に対するやるせない気持ちでいっぱいだった。

「あ――・・・気の毒だが・・・・それじゃあ、とっくに宮中に入

っちまってるな・・・。」

断言する林山に、バツが悪そうに義烈は言った。

「とりあえず、取り戻すのは諦めた方がいいぜ。毎回、成功するもんじゃないからなぁ～」

「毎回!?」

「・・・ヤベ。」

落ち込んでいた林山だったが、義烈の言葉に反応し、相手の顔を見る。

「『毎回』ってどういうことだ!?成功した人がいるということか!?」

「いや、それはよ――」

「もしそうなら頼む!教えてくれ!!」

「おいおい。」

「俺に出来ることならなんでもする!!報酬にしても、さっき渡した分で足りないと言うならもっと出しても構わない!!」

そう言いながら、凌義烈に詰め寄る林山。

「あのな――金があればいいってもんじゃないんだぜ!?」

「じゃあ、あんたの言うことなんでも聞くよ!!だから頼む!彼女を取り戻す方法を教えてくれ・・・!!」

土下座をしながら懇願(こんがん)する相手に、困ったように顔をかく義烈。

「お願いだ、義烈殿!!この通り頼む・・・!!」

額を床にこすりながら頼む林山。そんな様子に、呆れながら義烈は言った。

「お前・・・自分の言葉には、責任ぐらい持てよ。」

「それじゃあ・・・!?」

「いいだろう・・・。この世の中、きちんとしているようできちんとしてないからな。誤魔化す方法ぐらい、いくらでもある。」

「義烈殿・・・!!」

「その代わり、料金は割り増しさせてもらうぜ?」

意地悪く笑う相手に大きく頷く林山。

最初は、郭勇武の弱み探しでしていた情報収集だった。だが、これなら星影に危険な真似をさせることなく、星蓮を取り戻せるかもしれない・・・!!

期待に胸が膨らむ林山。

「ありがとう・・・これで彼女を取り戻すことが出来る!!」

「礼はその娘を取り戻してからだ。それでよ、調べるうえで聞きてぇんだが・・・。」

「なんだ!?何でも聞いてくれ!」

嬉々（きき）とする林山に、義烈は苦笑しながら言った。

「お前が助けたい愛しい女の名前は、なんて言うんだ?」

「ああ、そんなことか!彼女の名は――――・・・!!」

そう言いかけて、再び林山は口を閉ざす。

しまった・・・！なんて答えたらいいんだ!?

（ここで、劉星蓮と恋人同士だと答えてはまずい！！）

林山が焦るのには理由があった。

中国では昔から、【同性同士の結婚は固く禁止】されていた。そのため、同性同士で結婚する事は近親的な意味を持ち、儒教の教えにおいても、大変悪いことだとされ、やってはいけない事だったのだ。

（どうすんだよ!?同性の結婚は禁止なのに・・・！今さら本名は名乗れないし・・・。）

しばし、考え込んだ林山だったが――。

（仕方ない・・・誤魔化せるところまでやってみよう。）

本物の星影のように・・・！！

そう決心すると、自分の返事を待つ男に向かって言った。

「彼女の名は・・・劉星蓮。」

「劉、星蓮・・・?てっ、同姓か!?」

怪訝(けげん)そうな顔をしながら義烈は言った。

「おいおい！同姓の結婚は禁止だぜ!?わかってんのか!?」

予想通りの反応に、林山は焦ることなく、堂々（どうどう）と言い放つ。

「誤解しないでくれ！彼女は俺にとって目の中に入れても痛くない、可愛い、可愛い、この世の中で一番愛しい――――」

「・・・愛しい？」

「――――――――――――妹だぁぁぁ！！！」

「いっ、妹！？」

「そうだ！変な勘違いをしないでくれ！！」

「・・・・！」

珍獣（ちんじゅう）でも見るかのように、自分を見る目が痛かった。日ごろから、星影本人が言っていることをそのまま言ったのは良かったが・・・。

（これじゃあまるで、過保護（かほご）な馬鹿兄貴だよ・・・！）

「ずいぶん・・・妹思いなんだな・・・？」

案の定、義烈は引き気味に尋ねてくる。

そんな相手に羞恥を覚えつつも、林山は言い切った。

「当たり前だろう!?妹には幸せになってほしいんだ!!」

「だったら、皇帝の側にいたほうが贅沢三昧で幸せなんじゃないのか?」

「星蓮には他に好きな男がいたんだ!!二人は深く愛し合っていた!結婚も間近だった!それなのに――――」

そう、俺達は愛し合っていた。それなのに――――――

「郭勇武に無理やり・・・略奪同然に連れて行かれたんだ!!」

拳を握り締める林山に義烈は言った。

「なるほどな。お兄ちゃんから見れば辛いだろうな?」

少し納得したように言う凌義烈。

(なんとか誤魔化せたみたいだな・・・。)

「・・・ちなみに、その婚約者は今どうしてんだ?」

ふいに話題を変えられるが、

「彼は・・・妹が後宮に召されてすぐに町を出た。きっと傷ついたんだろう・・・。」

星影譲りのホラ話で、その場を乗り切る。

(なんだか・・・変な感じであいつと似てきたよな。)

そんな林山の話を疑うことなく、同情するように義烈は言う。

「恋人を忘れるために旅に出た・・・か。気の毒なこった。」

「ああ。忘れようと思っても、そう簡単に忘れることはできないのにな・・・。」

自分に言い聞かせるように言う林山。

簡単に忘れられないからこそ、危険を犯してまで自分は都まできたんだ。

星影まで巻きこんで・・・。

「それで、その婚約者の名前はなんてんだ?」

「なっ・・・!べ、別に言う必要は無いだろう!?」

根掘り葉掘り聞いてくる相手に林山は言った。

「なんでそこまで聞くんだ?妹の話だけ聞けるば十分だろう!?」

「なに言ってんだよ!どんな些細な情報でも大事だからな。依頼の内容は、すべて正しく把握しておきたいんだよ。」

「しかし・・・。」

「今さら、隠す必要もないだろう?」

義烈の言葉に、再度考え込む林山。

まあ、相手は町にいる情報屋だし・・・言ったところで、本物の星影と鉢合わせになることもないだろう。

(――まあ、いいか・・・。)

そんな軽い気持ちで林山は言った。

「林山・・・。」

何も問題は起きないだろう、そう思いながら、その名前を口にする。

「星蓮の・・・妹の婚約者の名前は・・・安林山。」

「安林山・・・!?」

「そうだ。同じ大商家の息子で、今年で十七になる男だ。」

「安林山だと!?」

林山の言葉に、相手は目を丸くする。聞き返すような口調で、自分の本名を言う凌義烈。

「本当に・・・安林山と言うのか・・・!?」

自分を凝視しながら尋ねる義烈。

「そうだが・・・どうかしたのか?なにかおかしいことでもあるか?普通の名前だと思うが・・・?」

自分の本名だけに、相手の反応が気になる本物の安林山。

「なるほど・・・そういうことか。」

不思議そうにする林山を無視して、義烈は意味ありげな笑みを浮べる。

「なんなんだ?まさか・・・その名前を知っているのか?」

一瞬、林山の背中に冷たいものが伝う。その問いに、自分を凝視していた義烈の表情がやわらかくなった。

「いいや・・・。」

それは嘘とも、本当とも取れるなんとも言えない表情。緊張した面持ちで待つ林山に義烈は告げる。

「いずれわかることだ。」

凌義烈の笑みに、なにか良からぬことを感じ取る林山。ふいに彼の中で星影と星蓮の姿が交差する。

（なにもなければいいが・・・。星影、星蓮、どうか無事でいてくれ。）

今の林山には祈ることしかできなかった。

だが、そんな願いもむなしく、彼の予想通り、とんでもない展開になっていることを林山はまだ知らなかった。

第二十八話　それぞれの夜～妹命のお姉さん～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
本物の安林山は、心優しい青年ですがちょっと、優柔不断なところがあります。星影と比べれば、いろいろ考えすぎてしまうところがあります。でも、星影よりも信念を貫き通します。嘘が苦手な、一途な男です。

※お手数ですが、誤字・脱字を発見した方、こっそりでいいので教えてください！！お願いします・・・！！

第二十九話　それぞれの夜～食べられる？～（前書き）

同性愛関係の話が苦手な方は、読まない方がいいと思います。自己判断でお願いします（平伏）

第二十九話　それぞれの夜～食べられる？～

「・・・私は君が心配だよ、林山。」

そう言ったのは琥珀だった。遅めの夕食を、三人で摂っている時だった。たわいない雑談の中で、琥珀が安林山こと劉星影にそう言ったのだ。

「心配って？」

豪華な夕食をかきこみながら、星影はのん気な声で尋ねる。そんな相手の姿に、琥珀はため息をつく。

「君のことだよ、安林山殿。本当に君が、陛下のお相手を務めることができるかどうか・・・ね。」

「なんだ、そんなことか。」

「『そんなことか』ではないよ。私は本気で心配しているんだよ？」

「そうですよ、林山。今の琥珀は、からかっているわけではありません。」

「そうなの～琥珀が？」

「・・・そうだよ。」

星影の言葉に、琥珀の眉間にしわがよる。そんな琥珀を見て、慌ててなだめ役に回る空飛。

「すみません、琥珀。私が一言多かったです！」

「空飛、私は別に――――」

「でも、林山は大丈夫ですよ！今上は、大変お気に召していらっしゃるのですから。」

（・・・それはそれで、困るんだけどなぁ～）

嬉々として言う空飛に、苦笑する星影。陛下の側にいれるということは、妹・星蓮を探すための近道でもある。だがその半面で――――

（危ないんだよな・・・。）

陛下が自分を見る目が危なかった。上手く言えないが、あの男の側にいるということは、断崖を目隠しで登るのと同じような感じがした。

（危ないんだよね・・・。）

「危ないんだよね・・・。」

その言葉に、星影の喉を通過していた食べ物が詰まる。

「だ、大丈夫ですか、林山!?」

「あ、ああ・・・！」

咳き込む星影の背を、空飛が必死に叩いた。涙目の星影の視線は、介抱する空飛を見ていなかった。

「危ないんだよね・・・。」

自分の心の中の言葉を、口に出した琥珀を見る星影。

「こ、琥珀・・・！」

（私の心を読んだのか！？）

名を呼ばれた琥珀は、星影の方を見る。そして、顔を曇らせながら言った。

「君は凶暴な性格だから、陛下のお側に行くことは危ない気がしてならないよ・・・。」

「・・・。」

「林山、くれぐれも、陛下に逆らってはいけないよ。」

「危ないって、そっちかよ！？」

琥珀の言葉に、持っていた器を乱暴に置く星影。

「そういうところが危険だ。」

「大きなお世話だ！」

「ちょっと、やめてくださいよ二人共！」

そんな二人を、オロオロしながらとめる空飛。

「林山、琥珀はあなたが心配なだけなのですよ！私も、あなたがいじめられないかどうか心配で・・・。」

「大丈夫だよ！いざとなったら殴り飛ばすから。」

「殴るらないでください！！琥珀・・・私も林山のことがすごく心配になってきました・・・！」

「同感だよ、空飛。返り討ちにあう、高級宦官がお気の毒だね。」

「そっちですか！？」

「まぁ・・・心配なのはそれだけじゃないよ。本当に、お相手が務まるかどうか・・・。」

「しつこいな、琥珀も！大丈夫だよ！陛下の身のまわりのお世話を

すればいいだろう!?」

琥珀の言葉に、星影はきっぱりと言い切った。その言葉の本当の意味も知らずに。

「陛下のお世話って言ったって、従者(じゅうしゃ)みたいなものだろう!?」

「林山・・・?」

「役人のやる仕事をするようなものだから、真面目にすればなんとかなるさ!」

言った瞬間、二人の顔がこわばった。

「もしかして・・・君、また(・・)知らない(・・・・・)とか?」

「陛下が(・)お側に(・)置きたい(・・・・)と言った意味を・・・・!?」

「え?」

二人の凍りついた表情にただならぬものを感じる。

(嫌な予感・・・。)

「どういうこと?」

星影の質問に、二人はバツが悪そうにお互いの顔を見る。

やっぱりな・・・やっぱりですね・・・と囁(ささや)きあいながら。

「林山、陛下が興味を抱かれる人種は三種類ある。」

「人種〜!?」

怪訝(けげん)な顔をして尋ねる星影。

（人種？三種類？なんのこと？）

「一つは陛下の身内の方に対するもの、もう一つは陛下の家臣に対するもの、そして最後の一つは・・・陛下が愛するもの・・・・以上三つです。」

「ふーん。それで？」

「残念だが林山・・・・・・。」

琥珀は、気の毒そうな目でこちらを見ながら言った。

「お前は、陛下にとって、」

「陛下にとって？」

「愛するものに選ばれた・・・！」

「・・・・・・はい？」

アイスルモノ、あいするもの、愛するもの・・・・・・愛するもの！？

その意味を理解した途端、星影の体に旋律（せんりつ）が走る。

「ちょっと待て！！陛下は――――お、お、お、お、お、おおおおお

男だぞ!?わ、私も・・・・おおお男なのだぞ!!そんなはずないだろ!!冗談も休み休み言え!!」

「冗談ではありません・・・・。」

(冗談じゃないって・・・!?)

琥珀と空飛の言葉に、星影は鳥肌をたてたまま固まった。彼らの言葉に偽りはないだろう。二人の性格から考えてこんな嘘をつくような男達ではない。だからといって、からかっている様子もない。混乱する星影を、二人はさらに追い詰める発言をした。

「実は、今の今上は・・・女性の方も好きですが、その・・・男性の方も好きなのです。」

「なっ・・・なにぃぃぃ――――――――!!?」

「空飛!好きではないだろう!?」

琥珀のきつめの声に、星影はかすかな安堵を覚える。

(なんだ、やっぱり冗談だったのか!!)

「大好物の間違いだ。」

琥珀の言葉で、星影の安堵は吹き飛ぶ。そして激しい眩暈（めまい）が発生した。

「あ、そうでした！ごめんね、林山。うっかりしていたよ。もうちょっとで林山に違ったことを――」

「だぁぁあぁあ！！意味は同じだろう！！？」

（と、いうことは・・・つまり――――――――――！！）

星影はその答えを否定したかった。正確には、否定してほしかった。だから、言葉にしていったのだ。少し、お茶目な口調で。

「もしかして・・・陛下って、男寵（おとこちょう）（同性愛者）・・・・なの～？」

そんな星影の問いに、同時に頷く二人。

（予感的中！！？）

「正解です、林山。」

「違うよ、空飛。大正解の間違いだよ。」

「だから、意味的には同じだろう！！？」

激しく机を叩けば、汁物が入った器の表面が波立(なみだ)った。

（もしやとは思っていたんだが――――――――！！）

まさか、まさか陛下にそのけがあったとは・・・！！

（否定したい！強く否定したい！！）

混乱する星影に、琥珀は現実味(げんじつみ)のある話を始めた。

「李延年という宦官がいただろう？」

「李延年・・・？」

（確か陛下の側にいた宦官のことか！？）

琥珀の言葉で、陛下と親しそうにしていた宦官を思い出す星影。

「あ、ああ。確か、陛下のお側にいた軟弱(なんじゃく)そうな人・・・？」

「あれは、その筆頭(ひっとう)だ。」

「うそぉ！！」

琥珀の言葉に絶句する星影。

そんな・・・！二人は恋人同士だったのか！？道理で、馴れ馴れしいわけだよ！！あの時私が星連と林山のイチャついてる姿を思い出したのも、私の本能が直感的にそのことを感じ取ったからか！？いや、でも・・・男にまで手を出すなんて――――！

（不潔だよぉ！陛下ぁ！！）

彼女の中の皇帝像に亀裂が入った。

「だからって、なんで恋愛関係に・・・！？」

「驚くのも無理ないですよね。今上が李様に興味を抱かれたのは、李様の妹君、李夫人が後宮に入られてからなんです。」

「妹？」

「はい、大きな声ではいえないのですが、李様の家は・・・娼妓を営んでいまして、お父上もお母上も、兄弟姉妹すべて芸人でした。もちろん李様も・・・。ところがある時、彼は罪を犯して宮刑に処されてしまったんです。」

「宮刑に！？じゃ、じゃあ・・・それがきっかけで、陛下の男寵になったわけ・・・？」

星影の問いに、空飛は首を横に振った。

「いいえ、最初は後宮で陛下の犬狩係りの仕事をしていたのです。その同じ頃に、李様の妹君がのお目にとまったのです。」

「その妹君である李夫人が、陛下の御前で舞を披露したんだ。」

「舞を？」

「それが今上に大変気に入られて、夫人に取り立てられたのです。その妹君のご縁故から、李様も恩賞を賜りまして・・・。」

「その結果が男寵？」

星影の問いに、無言で頷く空飛。

（なんてことだ・・・・！）

この時代、同性愛の習慣はごく自然なものであった。だから星影も、男同士の愛情があるということは知っていた。知ってはいたが――――

「陛下に、男の愛人がいるなんて・・・・！」

「他にも大勢いるよ。だが、今一番寵愛を受けているのは、李延年様だ。」

「・・・・。」

愛の形とはさまざまある。自分がよく知っている愛といえば、『家族』に対する愛と『恋人』に対する愛がある。だから、今聞いている話は、自分にとってかなり刺激的なものだった。否――――負の衝撃を受けたといったほうが正しいだろう。

（むか～し・・・そんな愛の形を聞いたことがあったが・・・。）

藍田にいた頃、都の美しい男娼の話を聞いたことがあった。女性のように美しく、女性以上にしなやかで愛らしい男児。それを聞いた時、いろんな人間がいるんだな、と笑い話で終わらせたことがあったが・・・・。

（まさか、実物を見ることになるとは・・・・！）

それも、超上流階級の愛！！

（高貴な人って・・・わからない。）

そんなことを考えながら、星影はため息混じりに呟く。

「陛下は・・・あんな弱々しいのが好みなのか？」

星影の言葉に、空飛が血相を変えてしかりつけた。

「林山！めったなことを言ってはいけません！！」

「だって本当でしょう？それとも、なにか気に入られるような特技でもあったわけ？」

「特技ね・・・強(し)いて言うなら、李様は歌に優れているよ。」

「歌？」

「ああ。彼はただのお気に入りってわけじゃないんだ。れっきとした『協律都尉』という官職に就いている。」

「協律都尉に！？」

協律都尉とは、歌や楽器、音楽に関する役職のことである。協律都尉に抜擢(ばってき)されたということは、美術的に優れているということを意味していた。

「李様は、元・芸人であるうえに、彼らの生家もそれを本業としていた。しかも李様の作る歌は、陛下好みに合う素晴らしいものなんだよ。」

「なるほど、得意の歌で陛下の心を掴んだのか・・・。」

（歌で生活していたのなら、優れているのも納得がいくが――）

どんな罪を犯して宦官になったのやら・・・。

「なにはともあれ、李様に対する陛下の扱いはまさに『韓媛のごとし』で・・・。」

「韓媛？」

「どなたですか？」

琥珀の話に、今度は星影だけでなく、空飛も聞き返した。

「え！？空飛も知らないのか？」

「ええ・・・初耳ですが。」

そう言って、顔を見合わせる星影と空飛。そんな二人に琥珀は言った。

「ここだけの話なんだが・・・韓媛というのは、陛下の皇太子時代の相手なのだよ。」

「それって・・・『男寵』とか言わないよね・・・？」

恐る恐る琥珀尋ねる星影。【相手】という単語が出た時点で、答えは決まっていた。それでも琥珀に聞いたのは、その事実を信じたくなから。信じたくなかったからこそあえて聞いてしまった。間違っていることを望みながら。韓媛が何者であるか。無論（むろん）答えはわかりきっていた。

「さすが林山！鋭いな。」

「やっぱりぃぃぃ！！」

頭を抱（かか）えてうずくまる星影。

（なんで、こういう時だけ間がさえるんだよ！？）

「つまりそいつも宦官かよ！？」

苛立ちながら言う星影に、琥珀は首を横に振る。

「それは違う、林山。韓媛様は宦官ではない。」
「宦官じゃない？」
「どういうことですか？」
空飛の問いに琥珀は言った。
「韓媛様の場合は、最初からそんな関係ではなかったんだ。陛下が『膠東王』だったころのご学友なのだよ。」
「ご学友？」
「韓媛様は騎射（きしゃ）がとても上手で、陛下と狩をご一緒することもしばしばあったんだ。ともに学問に励み、親交を深めておられたんだ。」
「では、そのご自慢の弓で陛下のお心も射止（いと）めたと？」
「あ、例えが上手いですね。林山。」
星影の皮肉に、手を叩きながら上手いと言う空飛。そんな彼の姿に、星影はこめかみを押さえる。
「頼むから・・・そんなことに感心しないでくれ。」
【英雄色を好む】とは言うけれど、陛下がここまで好色とは・・・。この分だと皇后様が気の毒だな。まあ、なにか言ったところで罰せられるのは目に見えているけど。私が親だったら注意するんだけどな。少しは自重（じちょう）しなさいってね。
（親・・・？そういえば――――）
「ねえ、そのことについて、誰も何も注意しないの？例えば・・・陛下のお母上とかさ。」「王皇太后様ですか？」
「あ、ああ。」

陛下の母親の名前など星影は知らなかった。基本的に、興味のないことは覚えない主義である。ただでさえ、陛下に対して不信感を抱いているので、それを生み出した母親について感心などもてなかった。もっとも、星影は最初から、現・皇帝の生母のことを知らないという有様である。

（あの（・・）陛下の母君か・・・。）

だから彼女は、皇帝の母親について想像するしかなかった。これまでの陛下の行動を思い出し、考えてはみたのだが――――――

（期待しない方がいいか・・・。）

その結果、星影の思考回路は悪い答えを導き出していた。

「・・・注意したの？」

言っても無駄だと思いながらも、言葉に出してみる星影。それに琥珀が答えた。

「注意したよ。皇太子時代にね。だから、二人の関係は皇太子時代に終わったんだよ。」

「ええ！？」

予想外の返事に、驚きの声を上げる星影。

「じゃあ、韓媛殿とは縁が切れたんだ！？」

（なんだ！ちゃんと、しつけしてるじゃないか～）

安堵する星影に、琥珀は何度も頷きながら言った。

「そうだよ・・・。おかげで、永遠に二人は会えなくなったけどね。」

「永遠に・・・？」

「ああ・・・風紀を乱したからね。」

「まさか――――――追放されたのですか！？」

空飛の言葉に、星影も同じことを思う。

追放か・・・ありえるかも。宮廷の風紀を乱せば追放ぐらいにはなるよね。確かに、追い出されてしまえば、二度と二人は会えなくなる・・・。

「そうだね・・・追放されたことには変わりないかな・・・。」

「そ、そうなのか・・・。」

（それが本当なら、ちょっと韓媛様が気の毒だな・・・。）

愛し合っていたのを、引き裂かれるなんて・・・・！

（まるで・・・林山と星蓮みたいじゃないか・・・。）

早く星蓮を見つけて、二人を一緒にしないとな。

再決意しながら、シミジミとする星影。そんな彼女に合わせるように、琥珀もシミジミとした口調で言った。

「王皇太后様のお言葉によって、韓媛様は死んだわけだからね。」

「そっかぁ・・・。それは永遠にあえなくなるわ・・・・て！？ええ！？」

「韓媛様が死んだのですか!?」
「ああ。皇太后様が注意なさった結果、韓媛様は死んだんだよ。」
「それって、殺したってことかよ!?」
「いや、正確には王皇太后様によって自殺に追い込まれたのだ。」
「だーかーら!意味的には同じじゃないかぁ!?」

とんでもない話だ!私は男寵を白い目で見ているが、世間ではそうでもない。人それぞれ好き嫌いはあるかもしれないが、なにも殺すことはないじゃないか!?いや、それよりも、王皇太后様自殺に追い込むなんて・・・。

「というか、おかしくないか!?なんで、殺さなければならないんだ!?」
「仕方がない。韓媛様が、殺されるだけのことをしてしまったんだよ。」
「つまり、陛下と恋をするのは命がけってことかよ!?」
「寵愛の奪い合いは、日常茶飯事だからね。」
「子供の問題に、親が口を出すなんてどうかしてるよ!!」
「で、でも林山・・・王皇太后様が死をお命じになったということは――――陛下に悪影響を与えると判断されたからかもしれませんよ?」
「悪影響?」
「だって、そうでなければ、命を奪うということはしないのでは・・・?」
「それはないんじゃないかな・・・。」

遠慮がちに言う空飛を見ながら、星影はその意見を否定した。

(あの陛下の母親だ・・・。)

息子の行動を見れば、どういう親かは想像がつく。息子である陛下の振る舞いを思い出しながら星影は言った。

「とにかく、王皇太后様を怒らせてしまったという点が、よくなかったんじゃないか?」

理由はともあれ、星影は皇帝の相手である韓媛様が気の毒に思えた。同性愛は儒教でいけないというけど、相手を思う純粋な愛の形に違いはないんじゃないかな?そう思い、改めて韓媛に同情する星影。

(韓媛様、かわいそう・・・。)

陛下と恋をしたばっかりに、殺されてしまうなんて。それだけ、純粋な愛だったのかな・・・。

しかし、そんな星影の思いは、琥珀の説明ですぐに消し飛んだ。

「別に・・・王皇太后様だけが悪い、というわけではないよ。皇太子の威光(いこう)をいいことに、韓媛様は好き放題したんだからね・・・。」

「好き放題?」

「韓媛様がですか?」

「ああ。皇帝の同母弟である江都王様に土下座をさせ、後宮の出入り自由をいいことに宮女に手を出したんだ。」

「なに――――――!?陛下の弟を土下座!?」

「しかも宮女に手を出したんですか!?」

「そうだよ。」

「なんてことを・・・どちらも重罪じゃないですか!?弟君に対する無礼はもちろんですが、後宮の女性は、すべて今上のものとされているのですよ!?」

「そうなのか！？」
「そうですよ！琥珀の話が正しければ、韓媛様は景帝の女性に手を出したことになるじゃないですか！？」
「おいおい！韓媛様は、それを知ってて、父親の女に手を出したのか！？」
「だから、王皇太后様が激怒されたんだよ。」
「それ、自業自得じゃん！？」
「そういうことだね。」

（前言撤回！！！）

それは怒って当然だよ！！殺されて当然じゃないか！！
というか、そんな奴と、うちの可愛い星蓮と林山を同列に扱った自分が恥ずかしい！！

（林山と星蓮は、真剣に付き合ってんだ！！）

韓媛と陛下の恋に対して、低い評価をする一方で――――――

（しかし・・・皇帝の同母弟を土下座させるなんて、ある意味たいした男だな。）

韓媛の悪賢さを、高く評価する星影だった。

「でも・・・そんなことをしたら、さぞかし、皇太子時代の今上はお怒りになったのでしょうね。」
「泣いたそうだよ。」
「そりゃあ、泣きたくなるよ！仮にも自分が愛した相手がさ～」

「『母上、韓媛の命だけはお助けください。』」

「「・・・・はい・・・？」」

「・・・陛下は泣きながら、何度もそう申されたそうだよ。愛する韓媛に死を命じた母君に、泣きながら命乞いをしたそうだ。」

「命乞い――――――――――――――――！！！？」

「しかも、裏切った相手のために、泣きながらですか！？」

「よほど、惚れていたのだろうね。」

遠くを見る琥珀と、目が点になる星影と空飛。陛下の恋愛歴（れんあいれき）を聞き、星影は精神的な疲れを感じる。

（聞かなきゃよかった・・・・。）

後悔の叫びが、星影の心にこだました。そんな心中を察したのか、意味ありげに琥珀が言った。

「だから林山、くれぐれも、陛下の夜伽（よとぎ）に粗相（そそう）をしないようにね。」

「なんでそうなるんだよ！？冗談じゃない！私は絶対に、陛下と枕なんかならべないからね！！」

「でも林山・・・陛下の命（めい）を拒（こば）むことは死罪を意味しますが・・・。」

「こっちに拒否権はないってか!?」

冗談じゃない!陛下と閨を共にしてみろ!

(そんなことしたら、確実に女だってバレるじゃないか!?)

涙目になる星影に、空飛は必死で語りかけた。

「落ち着いてください、林山!私があなたを助けますから!」

「空飛!?」

「今度は、私を・・・いえ、私達を頼ってください!私達にできることだったらなんでもします!」

「え?でも、そんなことをしたら――」

「林山を助けます!だから・・・元気を出してください・・・!」

そう言って、恥ずかしそうに下を向く空飛。

「空飛・・・!」

まさかこの子、死罪覚悟で私を陛下のから守ろうというのか?私があなたを助けたことに恩を感じて、今度は自分の命をかけて助けるって言うの?

(やっぱり・・・空飛はいい子だよ・・・!!)

こんな純情な子を騙すなんて・・・私は本当にひどい奴だよ・・・!!

空飛の態度に、心の底から懺悔する星影。しかし、彼女がそう思ったのもつかの間だった。

「その・・・あなたの代わりに仕事をしますから・・・！」
「空飛・・・！？」
「あの・・・夜伽で疲れたら・・・代わりに働きますから。」
「空飛ぃぃぃ！！？」

前言撤回！！

悪気があって言ったわけでない彼の一言。しかし、彼女を怒らせるのには十分だった。

「縁起でもないことを言うなぁぁぁ！空飛ぃぃぃ！！」

キョトンとしている空飛の肩を揺さぶる星影。どうやら空飛は、自分の言葉が原因で相手が怒っていることはおろか、怒らせてしまったことを自覚していないらしい。これは俗に天然と言うのだが・・・。そんな二人間に琥珀が割って入る。

「落ち着け林山！！」
「こ・・琥珀！！お前はどうなんだ！？いざとなったら助け・・・」

懇願するように言う星影に、彼もまた首を振りつつ答える。

「宦官にならずに武官になっていれば・・・おしいかな、安林山。」
「嘆(なげ)くな！！余計なお世話だよ！！」

（こいつはやっぱり悪者だ！）

「無理を言うな。助けたいと思っても、私たちが一緒に入れるのは今日だけだ。」
「それに宮廷での主導者はあくまで今上です。私たちは逆らえません。」
半狂乱（はんきょうらん）に陥（おちい）っている星影に、とどめの言葉を告げる友達。
（なんだよ！さっきまで味方だと散々言ったのはどこのどいつだ！？）
怒りの収まらない星影は、その場に立ち上がると天を仰いで叫ぶ。
「一体ここは、後宮はどうなっているの――――――――！！！？」
命の危機は乗り越えた。しかし・・・どうやら自分は、陛下の愛妾に・・・男寵になってしまったらしい。それってやばくない！？正体がばれんじゃない！？私どうなるの？いや、星蓮や林山はどうなるんだ！？
（私はただ妹を、星蓮を取り戻したいだけなのに――――――――――――！！！）
自分の不運に、星影は嘆（なげ）くことしかできなかった。

第二十九話　それぞれの夜～食べられる？～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
小話なんですが、漢の武帝って・・・・美形好きなんですね（遠目）
私個人の偏見もあると思いますが、美しければ、男女問わずに愛したそうですよ（大汗）小説の中で紹介した「韓媛」は、本当に王皇太后の怒りを買って死を命じられてます。韓媛は、武帝が皇太子時代に愛した男性です。同じ一つの寝台で寝起きし、皇族以外の立ち入りを禁止されている後宮にも、皇太子（武帝）のお気に入りということで、特別に出入りを許可されたという人物でした。文武に優れた人で、将来有望だったのですが、武帝の弟を土下座させたという名目で命を落とします。なんでも、狩の時に「兄上様（武帝）が馬で来られます！」という知らせを聞いた武帝の弟が、平伏して兄を待っていたところ、その前を馬に乗った韓媛が通過。兄でないと気づいた弟は、韓媛を注意しようとしたのですが、韓媛は相手が皇太子（武帝）の弟と知りながら知らん顔をして、そのまま馬で疾走したのです。本来ならば、皇太子の弟が平伏していることに気づいたら、馬から速攻で降りて「失礼しました！どうかお許しください！！」と、謝るところを無視して通過してしまったのですよ！！韓媛が、皇族である武帝の弟に謝らなかったのは、「自分は劉徹様の寵愛を一身に集めている身分だぞ！」と、高慢になっていたからだそうです（大汗）韓媛は、それなりに身分はありましたが、皇族よりは断然下です。完璧に皇太子の威光をかさに、その弟を馬鹿にしたのです。あまりの無礼に、弟は母である王皇太后に泣きつきました。お兄さんでは、話にならないからです（笑）これを聞いて、王皇太后は怒りました。以前から、韓媛が宮中への出入り自由をいいことに、美しい宮女と密通していた情報もつかんでいたので、「韓媛に死を命じます。」と、いう決断をくだしたそうです。これを聞いて、韓媛は武帝に泣きつき、武帝も母の王皇太后に泣きついて命

乞いをしたそうですよ（汗）武帝は王皇太后に、韓嫣が死ぬギリギリまで、韓嫣の命を助けてくれるように頼んだそうです。ちなみに武帝は、韓嫣と宮女の密通を知っていました。それでも、愛する韓嫣の命乞いをしたそうです。これには、個人的に武帝の愛するものへの寛大さを感じました（苦笑）ただ、王皇太后が韓嫣に死を命じたのは、「家臣が主君筋に逆らうような真似をしては、のちのち、兄弟が仲たがいする元になる。」と考えたからこそ、韓嫣を死罪にしたそうです。韓嫣も最後は、武帝と今生（こんじょう）の別れを交わして、潔く命を絶ったとか。

長々と書いてしまいましたが、権力と愛の両立は、つくづく難しいという話でした（汗）

第三十話　それぞれの夜～若き将軍の話（前編）～

現・皇帝劉徹の恋愛事情を聞き、完全な金縛り状態になる安林山こと、劉星影。

「林山・・・。」

放心状態の林山（星影）を、心配そうに見る空飛と琥珀。

「純情にもほどがあるね・・・林山は。」

「本当に・・・なんで宦官になったのでしょうか？」

二人のヒソヒソ声は、星影に届くことはなかった。彼女の頭の中は、自分のことだけでいっぱいだった。

（どうしよう・・・！）

琥珀と空飛の話が事実とわかった以上、陛下の側にいることはかなり危険だった。いつ襲われて、女だとバレるかわからないからだ。見た目や身の上話を誤魔化せても、体のつくりまでは誤魔化しきれない。

（そもそも、手がかりがないしな・・・。）

高級に来て得た情報と言えば、陛下の妻が『宝仙宮』にいるということ。そこに星蓮がいるかもしれないということのみ。

（おそらく・・・星蓮を見つける一番早い方法は、郭勇武に近づくことだろう。）

そうは思ったが、その方法は無理に思えた。昼間のやり取りで、郭勇武が自分を馬鹿にしているのはあきらかだった。しかも、星蓮を強奪し、林山に怪我をさせ、自分を宦官にしたにくい相手である。そんな男に、媚を売ってまで仲良くするという器用なことを星影はできない。第一、衛青の口添えがなかったら、星影は郭勇武を殴り倒していた。

衛青将軍がいなければ、自分の命は間違いなくなかった。それどころか、賊として処分されていた可能性も高い。

（衛青・・・仲卿様かぁ・・・・。）

星影の中で、衛青の姿が浮かぶ。無表情ではあったが、かなりの男前であった。表情に変化がない男だったが、それはそれで影があって渋い印象を与えた。

（今まで・・・私の周りにいなかった男性だったなぁ・・・。）

瞳の大きさの変化で、安林山の無実を証明してくれた男。
自分を見つめる瞳を思い出し、思わず口元を緩める星影。

（陛下のおかげで、貴重な体験ができたわけだよね～）

衛青が最後に、自分に笑い（？）かけた顔を思い出し、嬉しくなる星影。

（かっこよかったなぁ～衛青将軍・・・！）

そのまま、物思いにふける星影だったのだが――――――

「林山、元気出してください。」

「えっ！？」

「物事には順序があります！いくら陛下でも、無理やり乱暴をすることはありませんよ。」

声と共に、肩に軽い衝撃を感じる星影。見れば、空飛が星影の肩に手を置いて励ましていたのだ。

「陛下は、李延年様が一番のお気に入りです。だから・・・強引に林山に手を出すようなことはありませんよ。」

「空飛・・・。」

「空飛の言う通りだよ、林山。李様の性格を考えれば、お側仕えになってもしばらくは清い関係は間違いないね。」

そう言って微笑する琥珀。そんな琥珀の言葉に、裏があると感じとる星影。それは、言葉となって琥珀に向けられた。

「琥珀が言う『しばらく』て、何ヶ月ぐらい？」

「『何日』と、聞くべきじゃないかな、林山？」

「安全保障期間は日数単位かよ！？」

「好色だからね、陛下は。」

「期待させるようなことを言うな！！」

そのまま、険悪なムードに突入する二人。それに待ったをかけたのは空飛だった。なんとか、その空気を良くしようと空飛が話題を変えた。

「やめましょう、二人共！　今上のお話も、ここまでにしましょうよ！」
「空飛。」
「それより林山、私あなたにお聞きしたいことがあるんですが～！」
「聞きたいことぉ～？」
張り詰めた空気を和ませようと、陽気な声で空飛は言った。
「実際の衛青大将軍って、どんなお方でしたか？」
「え？」
「私は話でしか聞いたことありませんが・・・あなたはお目にかかったのでしょう？」
笑顔で尋ねる空飛に、星影は再度、衛青の顔を思い浮かべると言った。
「良い人だったよ。」
感想を述べる星影に、それを聞いていた琥珀は笑い声を上げる。
「なにがおかしい、琥珀？」
「いや・・・ずいぶん短い感想だと思ってね。」
「じゃあ琥珀は、衛青将軍がどんなお方か知っているのか！？」
しかめっ面になる星影を見ながら琥珀は言った。
「お目にかかったことはないが、宮中では知らないものはいないよ。なんせ、はじめて匈奴を倒した漢帝国の将軍だからね。」

「匈奴を？」
「付け加えれば衛皇后の弟だ。」
「皇后の弟！？」
「・・・知らなかったのか？」

どこまで世間知らずなんだ・・・と、呟く琥珀。そして、星影にわかりやすいように話しはじめた。

「衛青将軍は、『衛皇后の弟』ということで宮中に召され、建章監侍中になられたお方だよ。」
「皇后様の？」
「早い話が、姉の寵愛で出世する機会を得たということさ。」
「出世って・・・！」
「琥珀、その言い方は違いますよ！また林山が誤解するじゃないですか！？」

琥珀の言葉に、空飛が異議を唱えた。

「今上にお近づきになったきっかけはそうでしたが、現在の地位に上りつめたのは、衛青大将軍の実力です。」
「そうなの？」
「そうですよ！だけど・・・同じ衛皇后様のご親族でも、私は霍去病様の方が素晴らしいと思います・・・！」
「霍去病？」

聞き覚えのある名前だった。思い出そうとする星影の頭の中で、ある人物の言葉が響く。

“お主を見ていると・・・霍去病を思い出す。いや・・・去病の

再来か・・・。”

「どうしたの、林山？霍去病将軍がどうかしましたか？」

優しい口調で尋ねる空飛に、星影は遠慮がちに言った。

「あ、ああ・・・。昼間、陛下も言っていたんだけど・・・」

「『けど』、なんだい？」

「実は・・・陛下が『霍去病』って人と、私が似ているといっていたんだけど・・・。」

陛下が自分に向けて言ったこと台詞。

賊の疑いが晴れた直後、陛下が自分に向けて言った言葉。

「陛下が？」

「林山と『霍去病』様を似ていると仰ったんですか！？」

「そうなんだよ・・・。」

呟くようなかすかな声で言った陛下。その言葉に、文武官すべての態度がおかしくなった。無表情な衛青将軍ですら、険しい表情になったのだ。

「その『霍去病』様も、李延年や韓媛のような陛下の男寵だったの・・・？」

これまでの話の流れから、『霍去病』も陛下の男寵相手だと思った星影。

しかし、二人の口から出た答えは星影の予想に反していた。

「なにを言っているんだ、君は!?」
「そうですよ、林山!違いますよ!」
「え?違うの!?」
「違いますよ!!霍去病将軍ですよ!?知らないのですか!?」
「え?将軍なの!?」
「林山!?あなたまさか――――霍去病将軍を、あの方のことを知らないのですか!?」
「え?ああ・・・知らないけど・・・なんで?」
「なんてことだ・・・!あきれてものが言えないよ!」
多少の怒気を含ませながらも、彼らは星影に告げた。

「霍去病様といえば、衛皇后の妹君のご子息、衛青大将軍の甥、驃騎将軍・霍去病様ですよ!」

「衛青大将軍や皇后の親族!?」

「それだけじゃありません!戦の大天才で、匈奴の折蘭王・盧侯王を倒し、渾邪王を漢に投降させて匈奴を衰退させた人物です!」

「へぇえ~・・・凄い人なんだ。」
「はい!貴人の気質を備え、見目麗しい若き将軍でした・・・!この国で霍去病様を知らない人なんていないんですよ!容姿端麗、文武両道、才色兼備、快刀乱麻、頭脳明晰、まさに霍去病様のためにあるような言葉ですから!!」
「空飛は・・・霍去病様に憧れてるの?」

(というか、よくそこまで褒め言葉が出るよなぁ・・・。)

「もちろんです！あの方はこの国の英雄ですよ！衛青将軍も軍事の才がありますが、霍去病様はそれ以上・・・ゆえに、今上（きんじょう）も寵愛（ちょうあい）されました・・・！！」

うっとりとしながら話す空飛に星影は苦笑した。

（本人は興奮して忘れてるみたいだけど、匈奴の血を引く琥珀の前で、匈奴に対して悪い話をしなくてもいいだろうに・・・。）

そんなことを考えながら、横目で琥珀を見る星影。しかし問題の琥珀は、いつもと変わらぬ口調で言った。

「確かに霍去病様は、軍事の天才と言われているね。」

そう言った琥珀の表情は、穏やかなものだった。

（こいつ・・・ちょっとやそっとのことじゃ、動じないのか？）

琥珀の態度に驚きつつも、感心する星影。熱烈に霍去病を褒める空飛に、琥珀は静かな声で言った。

「空飛には悪いが、私は同じ匈奴討伐将軍でも、衛青大将軍が好きだね。」

「ええ！？どうしてですか！？霍去病将軍の方がカッコいいじゃないですか！？」

「空飛！」

（馬鹿！琥珀は匈奴関係者だぞ！！）

咎（とが）めるような星影の口調で、ようやく自分のうかつな発言に気づく

空飛。赤く染まっていた顔色が青く変わる。それを見て、小さくため息をつく星影。

（やっと、琥珀が匈奴の者だと思い出したか・・・。）

「ごめんなさい、琥珀・・・！私なんて無神経なことを・・・！！」

そう言って謝る空飛に、琥珀は困ったように言った。

「謝られても・・・人の好みはそれぞれじゃないか。」

「そうではありません！私、琥珀が匈奴の出身だということを――」

空飛のその言葉に、ああ、と短く答える琥珀。

「そんなことか。気にすることはないよ。」

「でも――」

「私は漢帝国に仕える人間だよ。気にする方がどうかしている。」

そう言って笑う琥珀に、空飛は何度も頭を下げた。しかし星影から見れば、琥珀の態度は不自然すぎた。

（まるで自分が、匈奴の人間じゃないみたいな口ぶりな・・・。）

「まあ・・・衛青大将軍も霍将軍も立派な方ってことだよね？」

「そうだね。」

「そうですね。」

その言葉を最後に、三人の会話が途切れた。星影、琥珀、空飛の間になんともいえない空気が流れた。

「それで、その・・・霍将軍はどうなの？」

最初に口を開いたのは、沈痛な空気に耐えられなくなった星影だった。

「・・・どうとは？」

「なにがですか？」

「だから～霍将軍は、今も匈奴と戦っておられるのか？」

何気なく聞いた星影の問いに、陰気な空気は消滅した。

「「ええ！！？」」

否、消滅したと言うよりも、吹き飛んだと言った方が正しい。

二人同時に絶叫したかと思うと、まじまじと星影を見つめる。

「林山・・・あなたなにを言っているのですか！？」

「霍将軍は、二年前に亡くなられただろう！？」

「亡くなった！？」

この答えには、今度は星影が絶叫した。

「な、なんで死んじゃったの！？」

「死因は病死です・・・！お歳も、二十三歳とまだまだこれからでしたのに・・・。霍去病様が亡くなられた時の、陛下の嘆きようと言ったら大変なもので、しばらく食事も摂られなかったのですよ・・

・！」

――

夭折（ようせつ）

星影の頭にその二文字が浮かぶ。この時になって星影はやっと思い出した。

二年前、匈奴討伐に活躍した若き将軍が亡くなり、都はもとより中国各地で彼のために祈りをささげ、その死を惜（お）しんだことを。当時自分は、己の境遇（きょうぐう）、女性の弱い立場を恨むことに気をとられ、英雄の死を惜しむことも、考えることもなかった。むしろ皆からちやほやされ、奉（たてまつ）られる若き優秀な将軍に殺意さえ抱いていた。

（――なんで男ばっかり――――！！）

女というだけで、家という籠に閉じ込められる自分達。それに比べて男たちは好き勝手なことばかりして！！女のどこが男に劣るというんだ！？私達のおかげで子孫を残していけるというのに。不公平だ！！

一心に、そんなことだけを思い、日々を過ごしていた私。

男に対して、激しい妬みを抱いていた自分。

今考えると、昔の私は自分のことしか考えていなかった。

「ごめんなさい・・・。」

神妙（しんみょう）な面持ちで言う星影。それは、琥珀や空飛に向けて言ったものではなかった。

（申し訳ありません・・・霍去病将軍・・・。）

天界にいるであろう、英雄に向けて謝罪の念を込めて祈ったのだった。

第三十話　それぞれの夜～若き将軍の話（前編）～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
いまさらなのですが、小説の中で空飛が呼ぶ「今上（きんじょう）」とは、皇帝を意味する呼び方です。ただ、使用できるのは、在位中の天皇に対してのみです。ですから、この小説を使って説明しますと、七代目皇帝である劉徹（武帝）を今上と呼ぶのに問題はありません。しかし、６代目皇帝である劉啓（りゅうけい）（景帝）に使うのはおかしいです。今を生きているお上に対して、「今上」と、使うのが正しいそうなので（笑）要は、【生きている時限定】で使える呼び方だそうです（苦笑）だから、武帝が死んだら、今上とは呼ばれません。その後を継いだ子供が今上になりますので。

第三十一話　それぞれの夜～若き将軍の話（後編）～

「霍将軍・・・さぞかし無念だったろうね。・・・陛下にとっても、漢帝国にとっても、私達民衆にとっても・・・実に惜しいな・・・。」

「・・・だから陛下は、君と霍将軍をだぶらせているんだ。それでよけい愛しく思うのだろう。」

「だから、なんでそんな風に話をつなげるわけ!?」

しみじみという琥珀に、星影は苛立(いらだ)ちを覚える。

（こいつ・・・!!人事だと思って。）

「それはかなり違うだろう!?霍将軍と私では雲泥(うんでい)の差・・・。私みたいな者とそんな立派な方とが同じわけが・・・・。」

「同じさ。陛下が（・）関心を（・）抱く（・・）と言う点に関してはな。」

「関心って・・・。」

「それに、すぐに手を出すところが似ているしね。」

「手を出す～?」

「叔父君絡(がら)み・・・と、言えばいいかな。」

「もしかしてそれは――――――!あの事件のことですか!?」

琥珀の言葉に、空飛が素早く反応する。

「あの事件って?」

「李敢様の事件ですよ!知りませんか、林山!?」

「李敢様～?誰のこと?」

「李広将軍のご子息だよ。李広将軍の死後、武官として仕官したんだが・・・少々傲慢なところがあってね。」
「父である李広将軍が死んだのは、衛青大将軍のせいだって、逆恨みをして暴行したのですよ!!」
「暴行!?」
「正確には、衛青将軍を一方的に殴ったんだよ。」
「なっ!?仮にも大将軍だぞ!?大体、なんで衛青将軍を恨んでたんだよ!?」

(陛下の影響か!?)

衛青将軍が媚びていると、馬鹿にして殴ったのだろうか?
でも、衛青将軍を恨むって・・・!?

(見下される対象にはなっても、恨まれる性質じゃないだろう!?
衛青将軍の場合!!)

「原因はなんなんだよ!?どんな逆恨みをしたんだ!?」
「逆恨みというか・・・難しい話なんですよね、これが。」
「難しい話~?」
「・・・そうなんですよ。すべての原因は――――・・・」
「匈奴討伐の戦がきっかけだったんだよ。」
「琥珀?」

言葉を濁す空飛の代わりに、はっきりとした口調で琥珀が言った。

「匈奴との戦で、李広将軍は、衛青将軍の下で指示を受ける立場となった。李広将軍は、衛青将軍が下級層出身者だということで馬鹿にしていたんだ。年齢的にも、衛青将軍の方が年下だったしね・・・。」

「それって普通、衛青将軍の方が恨まないか？要は、じーさんが、『若造の下で働くのがやだぁ～』て、駄々（だだ）をこねたわけでしょう？」

「じーさんて・・・林山・・・。」

「ま・・・まぁ、そうだね。だから李広将軍は、衛青将軍の軍命を無視して、自軍のみで敵を攻撃しようとしたんだが――――」

「逆に負けて、衛青将軍に助けてもらったとか？」

「・・・だったらよかったんだけどね。李広将軍は、敵とは戦わなかったんだよ。」

「・・・え？でも、出撃したんだよね？」

「出るには出たが、道に迷って敵陣にすらつけなかったんだ。」

「迷子かよ、じーさん！？」

（老人らしいけど、かっこ悪っ！！）

「己を恥じた李広将軍は、『自分は年老いたせいで、天命にも見放された』と嘆いて、自害してしまったんだ。」

「なに天命のせいにしてんだよ！？協調性のなさが、失敗の原因だろう！？反省もしないで、なに命を粗末にしてんだよ！？」

「仕方ないよ。李広将軍は、自尊心が強いお方だったからね。」

「気位が高いのも考えものだな・・・！」

「同感だね。けっきょく李広将軍は、年齢と運を理由に自害したが、それ以前の問題なんだよ・・・。」

「問題って？」

「陛下が、李広将軍を衛青将軍の指揮下に置いたのは、衛青将軍が匈奴について一番良く知っていたからなんだ。衛青将軍は、匈奴の戦法や地理的に詳しかったからね。だから陛下は、衛青将軍を匈奴討伐の総大将にしたんだよ。ところがそれを、李広将軍は理解して

いなかったんだ。」
「だめじゃんか、じーさん・・・。」
「そうなのですよ！挙句（あげく）、そのご子息である李敢様は、『父が死んだのは、衛青のせいだ』と、衛青大将軍に一方的に喧嘩を売って殴ったのですよ！！」
「完全な言いがかりじゃないか！？それで、陛下は李敢をどうしたんだ！？」
「どうもしなかったよ。」
「なんでだよ！？仮にも、皇后の弟だぞ！？」
「理由は二つ。まず一つが、衛青将軍が、陛下に李敢様のことを訴えなかったんだよ。」
「どうして！？」
「衛青将軍は、人の気持ちのわかる方・・・。それゆえに、父をなくした李敢様の怒りが痛いほどわかったんだよ。『李広将軍の単独行動を止められなかった自分にも責任がある』と・・・李敢様の行為に口を閉ざしたんだ。」
「そんな・・・あんまりじゃないか！？誰も衛青将軍を助けな――――！？」

「そこですよ！！」

星影の言葉を遮（さえぎ）るように、空飛が声を上げた。

「それを知った衛青将軍の甥、霍去病将軍が、黙ってはいなかったのですよ！！」
「霍去病将軍が？」
「はい！叔父を殴って、いい気になっている李敢様に天罰を加えたのです！」
「なになに？数倍返しで、殴り返したとか！？」

「いや、狩の最中に射殺しただけだよ。」

「死を持って償えってかぁぁぁ!!?」

「さぁね・・・。どうお考えだったかは知らないが、これが理由の2つ目だよ。陛下ご自身が直接、李敢様を罰する前に、本人がこの世からいなくなってしまったんだ。」

「罰するっていうか、刑罰じゃないじゃんか!?そんなことして、陛下は怒らなかったの!?」

「『去病は、叔父思いの優しい子じゃ!』と、ありがたいお言葉をかけたとか、かけなかったとか・・・。」

「そこは、しかるべきじゃない!?」

「とんでもありません!本来なら、大将軍を殴った李敢様が悪いのですよ!」

「いや、そうかもしれないが・・・。」

「罪人という汚名を背負って斬首にされるところを、不慮の事故死という名目で処理されたんだよ。李家の名誉を保てたから、よかったと思うけどね。」

「・・・。」

(おかしいよ、お前ら。)

いや・・・むしろ、高貴な人の感覚がわからない。

衛青将軍が、殴られたことを黙っていたのは、それなりに理由があったからじゃないの?

周囲との争いごとを好まない人だっていうから、若造の李敢のことも、大目に見たんじゃないかな?もしかしたら、その父親の身勝手をとめられなかってことを悔いて、相手の無礼な行動を受け止めたんじゃないのか?だとしたら――――

「霍去病将軍って、無茶苦茶だね・・・。」

「だから君にそっくりなんだよ、林山。」

琥珀の言葉に、星影は相手をにらみつける。

「冗談じゃない！私は、霍去病将軍とは違う！」

「ちょっと、林山！？」

「私の方が、物事の後先を考えて行動する！」

（なぜ、考えなかった！？）

なぜ衛青将軍が、李敢に殴られてもやり返さなかったのか。父を失い、名声も失った相手の家庭事情を、衛青将軍が考慮（こうりょ）したと思わなかったたの？衛青将軍に対する李広の軍令違反も、李敢の武人としての行いは、はっきり言って悪いことだ。でも衛青将軍は、李親子の行為になにも言わなかった。李広のあてつけ自殺と李敢の無礼な振る舞い。特に李敢からの暴行を公（おおやけ）にしなかったのは、『若気（わかげ）の至（いた）り』として、目をつぶったんじゃないのか？

「私は霍去病将軍のように、李敢を射殺するようなことはできない・・・！」

（なぜ、叔父が黙っていたことを考えなかったの？）

私は衛青将軍じゃないから、あの方がなにを考えているかわからない。でも、私があの方の立場だったら、李敢との共存の道を選んだはず・・・。事情はどうあれ、自分が原因で死んでしまった李広将軍。その息子が、恨みを持っていてもおかしくない。それでも、争

いを嫌う衛青将軍なら、時間をかけてでも友好な関係を築こうと思ったんじゃないのか？

（それなのに霍去病は――――！）

“狩の最中に射殺した”

「馬鹿なこと言うなっ！！」

短気を起こし、狩の最中の事故として李敢を殺した。これほど、卑怯な手口で相手を葬り去る奴がいるか！？そんなことで、衛青将軍が喜ぶとでも思ったのか！？

（衛青将軍の気持ちも考えないで――――！）

いや、衛青将軍の考えがわからないような、そんなこともわからないような奴と、

「私と霍去病将軍は違う！」

（――――――――そんな奴と一緒にするな！！）

そう言って、琥珀達から視線をそらす星影。声を荒げ、激しく否定した。そんな友に、最初に声をかけたのは空飛だった。

「林山・・・あなたの気持ち、わかりますよ。」

「・・・え？」

「わかりますよ・・・。」

（わかる？私の気持ちが？）

思わず顔を上げた星影。その先に、優しく微笑む空飛がいた。

「わかりますよ、林山。」

「空飛・・・？」

「霍去病将軍に似ているといえば、誰だって驚きますから。」

「空飛？」

「戸惑っているのですよね。でも、自信を持ってください！あなたは、霍去病将軍と同じ、立派な人間です！！」

「空飛ぃぃぃ！？」

「少なくとも、私はそう思っていますからね！！」

「・・・！！」

そう言うと、しっかりと星影の手を握り締める空飛。

（もっと戸惑うんですけど・・・・！！）

無鉄砲な将軍に、似ていると言われるのが。

話を聞く限り、あまり好印象を持てない若武者を、立派だというみなさんの意見に。

高飛車な将軍と、私がそっくりとか。

しかもそれを、友達にまで保障されちゃったんだけど。

「ちょっと・・・！そういう冗談はやめてよ、空飛！」

だから、私は否定の意見を求めました。一緒にしてほしくなくて。

でも友達は、満面の笑みで首をふりながら言ったの。

「そんなことありません！頼もしいところとか似ていますよ！」
「頼もしいって・・・！」
「派手で、奇抜で、人と違ったことをするところがそっくりですよ！」
「私は、狩のドサクサで人殺しはしないぞ！？」
「しかし、迷子のついでに、賊退治をしたじゃないか？」
「いや、琥珀！それは――――」
「そうですよ！しかも、名も告げずに去るなんて・・・！かっこいいです、林山！！」

（いや、それは、陛下（変態）から逃げたかっただけで・・・。）

「とにかく私は、林山と霍去病将軍は、なにか同じものを持っていると思います！」
「なにかって・・・。」
「絶対そうですよ！ねぇ琥珀？琥珀もそう思いますよね！？」
「そうだね・・・。大胆なところが同じかな。」

キラキラと、目を輝かせる空飛と、しみじみと言う琥珀。

「本当に林山て、変なところで謙虚ですよね！」
「まったくだよ。君は、変わっている。」
「・・・。」

（これは・・・なにを言っても無駄だな。）

二人の言葉に、言い知れぬ敗北感を感じる星影。

（つーか、私が霍去病に対して、怒りを感じていることに気づいて

ない。）

気づいてないどころか、私が謙虚に否定していると思っているらしい。

気づいてもらえないむなしさもあって、星影は深く長いため息をつく。

「衛青将軍の身内は・・・すごい武道派が多いんだな・・・。」

遠目で言う星影。それに対して、いいや、と琥珀が否定した。

「そんなことはないよ。同じ『霍氏』でも、文の道に優れている方もいる。」

「文に？」

（武ではなく？）

不思議そうに言う星影に、琥珀は言った。

「ああ。霍去病将軍の異母弟で、霍光子孟・・・霍子孟様という方だよ。」

「異母弟？霍将軍の！？」

（霍去病に弟がいるのか！？）

霍去病の弟・・・想像しただけで、末恐ろしい。兄が兄なら、弟も弟。絶対、とんでもない男に違いない。

「心配しなくても、弟君は兄君と違っておとなしいよ。」

「え！？」

琥珀の言葉に、驚いたように相手を見る。どうやら琥珀は、星影の表情で相手が何を思ったか理解したらしい。

「霍去病将軍とは正反対の性格だよ。今のところ、それほど名声はないけれど、なかなか優れたお方だ。」

「へ、へぇ～そうなんだ・・・。」

（正反対の性格か・・・。）

じゃあ、兄のような無茶苦茶はしないよね。文人なら、腕っ節は弱いだろうし。

星影がそんなことを考えている時だった。

「林山。」

低く鋭い(するど)声で名前を呼ばれる。声の主は琥珀だった。ひどく真剣な表情で星影を見ていた。

「林山・・・もし、霍光様に会うことがあったら、気をつけた方がいい。」

「どうして？宦官嫌いなのか？」

「そういうわけじゃないよ。お若い方だが、かなりのキレ者だから・・・ね。」

「つまり、短気でキレやすいってことか。」

「違う。」

短く断言すると、琥珀は言った。

「二代目・董仲舒様となりうるほど、政治関係に強いかなりの知恵者だよ。」

「「董仲舒様に!?」」

同時に叫び、言葉を失う空飛と星影。

董仲舒なる人物を知る空飛は、文字通り言葉を失う。その心中は、なんともいえないほど複雑なものだった。そして星影も、完全に言葉を失っていた。

（・・・・・・・・・董仲舒って、誰だ?）

ただし、星影の場合、空飛と違って、董仲舒なる人物がわからなくて黙り込んでいた。

董仲舒・・・どこかで聞いたことがあるような・・・。

（聞いた方がいいかな?）

そう思って口を開こうとして星影はやめた。先ほど、霍去病将軍を知らなかったということで、かなりのブーイングを二人から受けたのだ。

（まぁ・・・いいか。）

考えた末、尋ねるのをやめる星影。また、二人に呆れられるのも嫌だし、尋(たず)ねるのが面倒くさかったからだ。それに、董仲舒という名前に聞き覚えがあった。

（そのうち思い出すよね～）

そう結論付け、何度も頷く星影。そんな安林山の姿は、真剣に話す琥珀から見れば、自分の話を理解したと思わせるのに十分だった。そんな周囲など気にすることなく、真面目な顔（！？）で首を縦に動かし続ける星影。星影の態度に、霍光子孟なる人物を理解したのだと思う琥珀と空飛。だから、暢気に構える星影の気持ちを、二人が気づくことはなかったのである。

第三十一話　それぞれの夜～若き将軍の話（後編）～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
主人公の星影が、宦官をしているということで宦官についていろいろ書いています。
小説の中で、さまざまな宦官事情を星影が知らなくて、琥珀や空飛を困らせていました。これは、宦官が宮中に関係する役職という点を考慮（こうりょ）し、星影があまり知らないという設定にしました（笑）中国では、宮中での内情を他言無用としておりましたので、一般庶民は詳しいことは知らなかったのではないかと思われます。特に女性は、外部との接触を禁止される時代でしたので、『そんなこと知らないよ。』と、星影が連発する結果となりました（苦笑）今回の話でも、身分の高い将軍を知らないということで二人を困らせています（笑）ただ、霍去病を知らないというのは、ちょっと無理があるかなぁ～と、思っています。当時の霍去病の人気は、かなりのものでしたから。ちなみに彼も、叔父・衛青同様、衛皇后の縁で高貴な身分になれた人です。衛青より後に、武帝に仕えたのですが、その活躍はすさまじかったそうですよ。衛青が、最初に万里の長城を越えて匈奴を打ち破った武将なら、霍去病はそこにとどめをさしたような働きをしたみたいですから・・・。関係書物を見ながら、匈奴の人々をちょっと気の毒に思う今日この頃です。

第三十二話　それぞれの夜～老人の嘆き～

豪華な調度品が並ぶ一室。そこに漢帝国七代目皇帝・劉徹の姿があった。寝台に寝転がりながら、劉徹は書物に目を通していた。

「陛下。」

呼ばれて、書物から顔を離せば、一人の男が立っていた。

「珍しいな。その方が朕の室まで来るとは？」

「お戯れを。私がなにを申し上げたいか、ご存知のはずでしょう？」

その言葉に、劉徹は首をすくめる。

「えー・・・安林山のことか？」

「それ以外にございますか？」

「漢帝国の知恵袋、董仲舒のお説教はいつもキツイな。」

そう言って笑う皇帝・劉徹に、董仲舒は困ったような笑みを浮かべた。

董仲舒――若い時から『儒学』について深く研究し、六代皇帝・景帝の時に博士となった人物。父・景帝の死後、息子である劉徹が即位した際は、董仲舒の人柄を見込んで、すぐに自分の元へ召し出している。それだけ皇帝・劉徹は董仲舒を信用していた。わがままな皇帝も、董仲舒からの進言であれば素直に言うことを聞いたので、諫言をすることが多かった。そのため退官後も、朝廷で問題が起こると、皇帝・劉徹は御史大夫である張湯を派遣して董仲舒に公平な意見を求め続けた。つまり董仲舒とは、七代皇帝・劉徹の頼もしい

重臣であり、皇帝に諫言を出来る数少ない家臣の一人であったのだ。
そんな『諫言師』・董仲舒が、わざわざ劉徹の元へやってきたということは、諫言をする時と決まっている。

「陛下・・・陛下の好みに文句は言いませんが、少し控えていただけませんか？」
「控えておるぞ。だからこそ、昼間もお前の諫言を聞いたのではないか。」
「でしたら、あの者をお側に置くのはやめてください。」
「何故じゃ？林山はあの通り――」
「『腕が立つ』と、言うことはお聞きしております。ですから、安林山のことは諦めてください。」

今の二人の話の中心は、他でもない、劉星影こと、安林山のことだった。劉徹が安林山に好感を持っているのとは対照的に、董仲舒は安林山をあまり快く思ってはいなかった。

・　・　・

最初に董仲舒が、安林山の話を聞いたのは真夜中だった。従者が騒ぎ立てるので、寝台から起き上がれば、『陛下が刺客に襲われた』と聞き、大慌てで宮中に駆けつけたのだ。従者からの話では、『宮廷兵の多くが殺され、陛下も（・）大変な（・）こと（・・）になっている』とまで聞かされ、生きた心地がしなかった。

（陛下にもしものことがあれば――・・・！！）

最悪の事態を想像し、董仲舒は全身から血の気が引いた。急いで身支度を整えると、皇帝のいる宮中へと向かう董仲舒。主君の安否だけを願いながら、劉徹がいる部屋に駆け込む董仲舒。他の重臣達が

集まる中、そこで彼が見たものは――――

「美少年だ！美少年！！背の高い、少し口の悪い美少年だった！！」

「へ・・・・・・・・！？」

「艶のある黒髪、女子のような赤い唇、細身でしなやかな体をした美少年だぁぁぁ！！」

「・・・・・・・・陛下・・・・・・・・？」

大変なことになっているという陛下は、ピンピンしており、とても元気だった。
元気というよりは――――――

「へ、陛下落ち着いてください！」
「美少年じゃ！美少年！！早く探し出せ！！！」
「落ち着いてください。どうか、陛下！」
「朕（ちん）は落ち着いておる！だから早く、あの美少年を探さぬかぁ！！」

変な風に興奮していた。
よく見れば、他の家臣達が、必死で陛下を抑えてつけている。
それを振り払いながら、子供のように駄々（だだ）をこねる皇帝・劉徹。

「お前らが行かぬのなら、朕自ら探しに行く！」
「おやめください、陛下！危のうございます！！」
「まだ刺客がいるかもしれません！」
「うるさい！朕に指図する気か！？」

「陛下・・・・・・？」

呆気に取られている董仲舒。そんな彼に気がついたのは、衛青大将軍だった。

「――――――仲舒殿ではありませんか！？」
「仲卿殿・・・これは一体・・・！？」

衛青の言葉に、ようやく周りも彼の存在に気づく。

「おお、仲舒ではないか！？わざわざ来てくれたのか！？」
「陛下、一体なにがあったのですか？陛下に大事がありと聞き、参ったのですが・・・。」

改めて陛下を見たが、怪我などしていない。

「お怪我は、されていらっしゃらないようですが・・・・。」
（ご乱心か？）

怪我はしていないが、確かに大変な（・）状態になっていた。

冷めた目で言う董仲舒に、衛青が側まで行く。

「詳しいことは、私からお話いたします。」

こちらへ、と言いながら、董仲舒を部屋の外へと連れ出す。

「大将軍、一体何事じゃ？」

「はい。それが・・・陛下が刺客に襲われまして。」

「それは聞いておる！刺客に襲われたわりには、やけに陛下の機嫌が良いではないか！？」

「それが・・・陛下をお助けした者がいるのです。」

「どういうことだ？宮廷兵はやられたのではなかったのか！？」

「はい、陛下を守った宮廷兵は全滅です。」

「では、武官がお助けしたのか！？」

「いえ、助けたのは武官ではありません。」

（武官ではない？）

衛青の言葉に、董仲舒は眉をひそめる。

「それでは、誰が陛下のお命をお助けしたというのだ！？」

「・・・宦官です。」

「宦官！？」

控えめに言う衛青に、董仲舒は間の抜けた声を出す。

「仲卿殿・・・生真面目なあなたが、なんの冗談ですか？」
「事実です。」
「なっ・・・ありえぬ！宮廷の護衛兵を倒すような敵を、男を捨てた宦官が――」
「倒したのです。」
「・・・・信じられん・・・・・！」

（戦うことを目的に訓練された武官よりも強い宦官？）

「何者だ・・・・その宦官は！？」
「わかりません。陛下が申すには、陛下をお救いしたあと、名も告げずに去って行ったそうです。」
「名乗らずに去っただと！？」
「我々が、騒ぎを聞きつけて駆けつけた時にはもういませんでした。」

そう言って、うつむく衛青に董仲舒も呆気にとられる。

二人が驚くのも無理はなかった。それは、宦官に対する認識が関係していた。宦官は男性器を切り落としているため、体格的にも精神的にも男女の中間という存在であった。また、宮中における奴隷ということもあり、ほとんどの者が軽視していた。嫌う理由としては、性欲をなくした宦官の、それを代償するかのような物欲な面を忌み嫌っていたからだ。そのため董仲舒も、陛下を助けた宦官の行動に戸惑いを感じていた。

（見返りを求める宦官が、礼を要求せずに、去っていった？名も告げずに？いや、それよりも――）

「その宦官は、武術の腕が立つということか・・・？」
「・・・陛下が申される限り、武官に（・）して（・・）も（・）申し分ない（・・・・・）と。」
顔を上げた衛青の表情は険しかった。

「これは、私個人の考えなのですが・・・賊にしても、その宦官にしても、只者ではないと思います。」
「確かに・・・。賊はどこに忍び込んだのだ？」
「『桃花園』に・・・。」
「後宮の中心部ではないか！？」
「警備の者が、怠っていたとは思えません。むしろ、陛下の行動と性格を知ったうえでの犯行だとしかいえません。」
「・・・内部犯か？」

無言で頷く衛青に、董仲舒も険しい表情になる。

「賊の手がかりは、なにも残っていませんでした。皆、毒をあおって自害を・・・。」
「素人ではないな。」

以前から、陛下が暗殺されかけたことは何度もあった。主犯を探し出しては、密かに始末させていた。公にしては、国の面子にも関わる。

「では、いつも通り――」

――――――――――見つけ出し、二度と陛下に手を出せないように。
――――――――――

そう言いかけた董仲舒の言葉を衛青が遮った。

「それが――――・・・出来そうもないのです。」
「出来ない？」
「ええ・・・。陛下が、お許しにならないのです。」
「陛下が！？」

目を丸くする董仲舒の元に、噂の人物が上機嫌でやってきた。

「仲舒、仲卿、話は終わったか？」
「陛下！」
「いや、何度も刺客に襲われたが、今回のようなことは初めてだ！あのような若者がいるとは！！」
「若者？」

聞き返す董仲舒に、劉徹は楽しそうに言った。

「朕を助けた若者のことじゃ。宦官の身なりをしておったが、あの武術の腕は武官顔負けだ！すぐさま探し出して、朕の側近にしたい！」
「側近！？」

思いがけない言葉に、董仲舒は再度聞き返す。

「そうじゃ！朕の命を助けてくれた者なのじゃぞ！？仲舒、すぐに探してくれ！」

「その者をですか!?」
「当たり前じゃ!朕の命の恩人じゃぞ!朕が声をかけたら、照れて逃げてしまってなぁ～なかなか可愛かったぞぉ!!」

（つまり・・・あなた様の命の恩人は、あなた様好みだったと!?）

「仲舒、すぐに調べてくれ!あの美少年を探し出すのだ!」

目を輝かせながら言う劉徹に、董仲舒は無言で衛青を見る。その視線を受けて、彼は無言で首を横に振る。その後、皇帝よりの勅命により、武人のような宦官探しは行われ、安林山という一人の美少年（!?）にたどり着いたのだった。

・
・
・

「林山はあの通り、可愛いではないか?なにが問題なのだ?」
「あなた様が、外見で人を判断されるところです。」

厳しく言う董仲舒に、気にすることもなく劉徹は言った。

「林山は、見た目だけでなく、中身もしっかりしている。」
「確かに、肝(きも)が据(す)わっておりましたな。」

宦官とは思えません、と皮肉を言う董仲舒。

「意地の悪いことを言うでない!宦官の一人や二人、増えてところでどうということもあるまい?」
「そうおっしゃられますが、先週も新しい宦官をお側に置いたばか

りではありませんか？これ以上増えれば・・・。」
「うむ、延年が怒りそうだな。」

皇帝の呑気な言葉は、董仲舒の怒りを煽ることとなった。

「そういうことではありません！私はもう少し、危機感を持っていただきたいと申し上げているのです！！」
「仲舒～」
「耳障りだと言うことは重々（じゅうじゅう）承知していますが、言わせていただきます！！陛下・・・陛下のお側仕えの宦官は、慎重に選ばなくてはならないのですよ！！陛下のお命はお一人だけの命ではないのですぞ！？」
「それぐらい朕とてわかっている。だがな、そのことについてはお前も納得はしたじゃないか。」
「それはそうですが・・・。」
「わからんな・・・仲卿はわかってくれたというのに。どうしてお前達は、あんな愛らしい者を危険に思うのか。」

陛下の言う通り、仲卿殿が、安林山の存在を許したのは以外だったが・・・。

（衛青（男）も、周りに気を配りすぎるところもあるしな・・・。）

董仲舒がそう思った時だった。

「叔父兄上には、叔父兄上なりのお考えがあってのことでございます。」

その声に、二人の視線がそちらへ向けられる。

「光ではないか？どういしたんだいきなり。」

そこには、一人の若い男性が立っていた。若者は、劉徹と董仲舒に頭を下げたまま、穏やかな口調で言った。

「衛青大将軍には、大将軍としての考えがあったのでございましょう。」

霍光の言葉に、困ったような口調で董仲舒は言った。

「やれやれ・・・立ち聞きをされたのかな、霍光（かくこう）？」

「無礼をお許しください、陛下、仲舒様。お察（さっ）しの通り、お聞きいたしました。」

そう言って霍光は、ゆっくりと頭を上げた。わずかな微笑を作ってはいたが、その目には鋭い光を宿（やど）していた。

第三十二話　それぞれの夜～老人の嘆き～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
小説とは関係ない、個人的な感想なのですが、実際の衛青仲卿と霍去病は、本当に対照的な人物でした。一言で言えば、「謙虚で控えめな衛青仲卿と、豪快で派手な霍去病。」です（汗）でも、二人共後世での英雄像はかなりの評判です。
それを裏付ける話として、三国志の英雄・曹操の四男・曹彰は、小さい時に、父・曹操から「どんな大人になりたい？」と、聞かれた時「衛青や霍去病のような将軍になる！！」と、言って爆笑させたとか（笑）その後も、二人の（どちらかというと霍去病の）真似をするよう行動・公言をしたそうですよ、この息子は。曹操も、「馬鹿の子ほどかわいい。」敵な感じで、この息子に対応したとか。これを聞いてわかるように、衛青仲卿と霍去病は、「みんなのヒーロー」・「子供達の憧れの的」の代名詞だと思われます。ただし、霍去病の方がちやほやされましたが（汗）
霍去病が衛青仲卿より有名になったのは、彼の実力ももちろんですが、武帝に気に入られたことも関係したと思います。また、若くして死んでしまったことも「英雄・霍去病を美化させる」のに、十分だったと私は思います。霍去病について、小説か小話で、また後（のち）ほど書こうと思います（苦笑）
ただ・・・「衛青仲卿と霍去病の違いはなに？」と、聞かれたら、「『苦労』を知っているかどうかという点です。」と、私は答えます。二人の人性と性格形成を見る限り、『苦労』をしているかどうかで、人生も人間性も大きくわかれてしまったと思いますので。

それで、小説とは関係ない余談ですが、曹操の息子曹彰は四男だそうです！最近私も知ったのですが、曹操の身代わりで死んだ曹昂の上に、お兄さんがいたそうです。だから、長男と次男（曹昂）が劉

夫人の子で、三男（曹不）・四男（曹彰）・五男（曹植）・六男（曹熊）が卞夫人の子になるそうです。

あと、本当に関係ないですが、映画「レッドクリフ」見てみたいです（苦笑）

第三十三話　それぞれの夜～老人と若人の嘆き～

霍光子孟――――漢帝国皇帝・劉徹の妻、衛皇后と大将軍・衛青仲卿の甥にして、霍去病の異母弟である。劉徹から見れば、彼も可愛い身内の一人だった。

「光よ、気にせずともよい。それよりお主はどう思う、林山のことは？」

側に寄れ、と言う劉徹の言葉で、小走りで近づく霍光。

「今の状況では、正確なことは申し上げられませんが・・・。ここはひとまず、陛下のお側においてもよろしいと思います。」

「『ひとまず』・・・とな？」

「安林山殿の身元のご確認は？」

「宦官証明書は、本物であったぞ。」

「・・・もう一度、調べ直してはいただけないでしょうか？」

「お前も疑っているのか？」

「用心に越したことはありません。」

「子孟の言う通りですぞ、陛下。」

若い青年の言葉を、老人が付け足した。

「可愛い猫に見えても、いざ触ってみたら虎だった・・・ということも、十分に考えられますぞ。」

「猫が虎に変わるかぁ～・・・それもなかなか面白い趣向よのぅ～」

「面白がるようなことではございませんが！？」

「そうじゃな・・・朕としては、光が心配してくれるのは嬉しいぞ。

」

笑いをかみ締めながら、劉徹は霍光に話しかける。

「お前にも見せたかった・・・！あの太刀さばきを見れば、お前も感じたはずだ。安林山が、霍去病の再来だということを。」

その言葉に、霍光の表情が変わる。そして、静かな口調で答えた。

「私は・・・昨夜の現場にも、先ほどの顔合わせの場にも、居合わせおりません。ですが、お話をお伺いする限り、無茶なところは去病兄上に似て（・・）いる（・・）と（・）だけ（・・）、申しておきます。」

「ハハハ！光にも是非見せたかった！昨夜のことを思い出すだけで、朕は今でも胸が躍るぞ！」

「私もでございます。昨夜の出来事を思い出しただけで、大変心の臓に堪えます・・・！」

毒づく仲舒に、悪びれた様子もなく劉徹はあっさりと言った。

「そう憎まれ口をたたくでない。本当は今すぐにでも、側に置きたかったのだが・・・・。仲舒が余計なことを言うから、明日になってしまったぞ！」

「なにをおっしゃいます！本来ならば、もう少し様子を見るところでございますよ！？陛下のお側に置くからこそ、慎重にしなければなりません！ただでさえ、昨夜の騒ぎがあった後だというのに・・・！」

「その賊を倒したのは林山だぞ。」

「存じております！とても宦官とは思えないほどの、腕前だったそうでございますね！？」
「まったくだ！宦官にしておくのには惜しいなぁ～」
「同感です。それほどの腕を持つ者が、何故宦官になったのやら・・・！」
「それでは仲舒様は、安林山殿を刺客の一味だとお考えで？」
「・・・否定は出来ん。」

しばらく返事に困った仲舒だったが、渋い顔で答えた。そんな老臣に、劉徹は呆れ気味に言った。

「大げさだ、仲舒。疑り深いにもほどがあるぞ？」
「陛下のお命には変えられません！！」
「仲舒・・・」
「陛下のお命がかかっているからこそ、陛下がご不快になられようとも、言わせていただきますぞ！！」
「やれやれ・・・仲舒もうるさかったが、延年はそれ以上にうるさかったぞ。なにをあんなにムキになっているのやら・・・。」
「それは陛下のお心が、安林山に傾くことを恐れているのゆえでしょう。」
「どういう意味だ？」
「恐れながら、それはご自身がよ～く！・・・おわかりのはずでは？」
「まさか、嫉妬しているというのか！？」
「私に聞かないでください。延年殿の気持ちを、どうして私がわかりましょうか？」
「だが、まるで知っているような言い方をするではないか！？あれがなにか言っていたのか！？」
「聞かずとも、見ていればわかります。そんなに気になるのでしたら、本人に聞かれるのが得策かと。」

皮肉を述べると、そっぽを向く仲舒。そんな相手の態度に、劉徹は顔をしかめた。

「仲舒！言葉がすぎるぞ！朕があれをどれほど大切にしているかお前も知っているだろう！？本人が言ったならまだしも・・・勝手な推測をたてるでない！！」

「でしたら陛下も、安林山が安全であると、勝手な思い込みをなさらないで下さい！！」

「なんじゃと！？」

「なんです！？」

「おやめください、陛下、仲舒様！」

険悪な空気が漂う二人の間に、霍光が割って入る。

「恐れながら陛下・・・仲舒様の仰ることは、推測とは断言できないかと存じます。」

「光、口出しするでない！」

「いえ、私はただ、延年殿が――」

「延年がなにか言ったとでも言うのか？あれの口から直接聞いたのか！？」

「いえ、聞いたというわけではありませんが・・・。」

「ならば口を出すな！」

怒鳴りつける劉徹に、困った顔をしながら霍光は言った。

「・・・仰せの通り、私は延年殿の口からは聞いておりません。」

「では黙っておれ！」

「ですが・・・延年殿が嘆いてい――――」

「なんだとぉ！！？」

霍光が言い終わるよりも先に、劉徹は勢いよく彼に飛びついた。

「光！延年はなんと言っていたのだ！？なんと！？」

そして、そのまま霍光の胸倉（むなぐら）を掴むと締め上げる劉徹。これには、首を締め上げられた霍光はたまらない。必死で首を絞める相手をなだめようと、口を開くのだが――――――

「お、落ち着いてくだ・・・さい！ど、どうか手を――――――！」

「なんと言ったんじゃ！？言え！言えわんか！！」

「て、手をお放し・・・くださ――――・・・！」

「早く話さんかっ！！」

苦しむ霍光に気づくことなく、乱暴に相手をゆさぶる劉徹。

「へっ、へい・・か・・・！く、苦しいです・・・！」

「馬鹿者！苦しいのは朕の方だ！！」

「陛下！子孟の首を絞めてはいけません！！」

「あれはなんと言っていたのだ！？言え！言わんか！！」

「陛下！！子孟から手を離してください！」

慌てて仲舒が止めに入るが、劉徹がその声を聞き入れられることはなかった。正確には、李延年のことで頭がいっぱいで、その声が届いていなかったと言っていい。

「延年はなんと言っていたのだ！？どうしたというのだ！？」

「で、ですから、放していて・・・いだかない・・こと・・・に・・・は・・・・！！」
「言いかけて何故答えな――――――――――！？」

「あなた様が首を絞めているからですっ！！劉徹様ぁぁぁ――――――！！！！」

「うぉおぉ！！？」

鼓膜が破れんばかりの怒声に、動きを止める皇帝・劉徹。首をすくめて横を見れば、しわくちゃな顔をさらにしわくちゃにした董仲舒の顔があった。

「ち、仲舒！？」
「陛下！！子孟から手をお放しください！！」
「い、いきなりんだ！？耳元で大声を――――」
「――――――出させたのは陛下の責任でございます！！」
「な、なに！？」
「ご自分のお姿を御覧なさい！！あなた様が興奮のあまり、情報源である子孟の口ならぬ、首を封じているのですぞ！？」
「む、むうう・・・！」
「子孟をお放しならないと、延年の話は聞けませぬぞっ！？」
「――――――――くっ・・・！」

仲舒の罵声で、不機嫌そうに手を離す劉徹。それにと同時に激しく咳き込む霍光。そんな青年の背を仲舒はさすった。

「まったく！子孟を殺す気ですか、陛下！？」

「光がもったいぶるのが悪い！」
「どんな人間でも、首を絞められれば、しゃべることは出来ないと思いますが！？」
「ええい、うるさーい！！もったいぶらずに早く言え、子孟！！」
「はっ、はい・・・。」

劉徹の言葉に、咳き込みながら頷く霍光。そして、息も絶え絶えに話し始めた。

「え、延年・・殿は、陛下が若い宦官をお側に置かれたうえに、大変気に入っている様子を目の当たりにして、ひどく落ち込んでいました。」
「・・・それで？」
「延年殿は、ずっと独り（・・）言だ（・）と（・）言って（・・・）いた（・・）のですが・・・側にいた私に、『今まで良くしていただいて感謝しています。でも・・・もうお会いできませんね・・・。私は身を引きます・・・。陛下のためにも・・・それがいいでしょうから・・・。陛下のお側に、私は不要ですよね・・・！』と、小さな声で言うと、逃げるように奥に引っ込んでいきました。」

霍光の話に、大きく目を見開く劉徹。そして捲くし立てながら、霍光にくってかかった。

「おい！お前はさっき、本人からは聞いていないと言ったではないか！！なぜ隠していたんだ！？」
「隠していたとは、とんでもございません！延年殿は『ただ（・・）の（・）独り（・・）言』だと、私に言いましたので・・・。」
「ええい！どっちでも構わぬ！！・・・あとで誤解を解かねばならんな・・・・・！」

頭を抱え込んで困る劉徹。そんな皇帝の姿を見ながら家臣二人は思う。

（この方は・・・・）

（本気で困っておられるのか・・・。）

狼狽（ろうばい）する劉徹を見ながら、どちらともなく顔をあわせる霍光と仲舒。内心、彼らは呆れていた。特に、延年の話を劉徹に伝えた霍光は情けない気持ちでいっぱいだった。彼はわかっていたのだ。延年が自分にそう言ったのは、たまたまその場に霍光子孟という人物がいたから言ったのではない。自分が衛皇后と衛青大将軍の身内でなので、あえて聞かせる為に言ったのだ。わかりやすくいえば、自分が皇帝に可愛がっている身内であるから聞かせたのだ。

（あの李延年が言ったことは、独り言ではない・・・・。）

彼はこれまでも、自分の地位を脅かす人物（恋敵）が現れる度（たび）に、さまざまな話術や裏工作をしてきた高級宦官なのだ。必ずその言葉の裏に意味があった。

霍光が聞かされた李延年から『独り言』にしても、直訳（ちょくやく）すれば、「私がそう言っていたと陛下に伝えて。」と、自分にことづけたのだ。早い話が、「延年殿が、悲しんでいました。」という第三者の視点で、陛下にそのことを伝える伝言役に選ばれたのである。延年本人から、直接頼まれたわけではないが、悪知恵の働く李延年の『独り言』を聞かされたのだ。その時点で、嫌でも延年の話を陛下の耳に入れなくてはいけなかった。

（延年の話が、政（まつりごと）に関することではないからまだましだが・・・・。それにしても――――――）

仮にも文官たる者が、宦官風情の言うことを聞いたとなっては名折れである。しかし彼は、高級宦官兼協律都尉の李延年となると話は別だ。自他共に認める陛下の皇帝の男寵。恨みを買われたら命がいくつあっても足りない。だから霍光は、延年の策略を知りながらも、彼の思い通りに動いたのだ。延年の作戦を知っていながら、陛下に延年の皇帝に対する純粋な（！？）気持ちを伝えたのである。仮に自分が、延年の邪な本性・・・真実を陛下に言ったところで、彼が自分の言うことを信じるとは到底思えなかった。いくら陛下が優れた人物であっても、惚れた相手の言うことと身内である自分の言うことを比べれば、どちらを信じるかは目に見えている。下手なことを言って処刑されるよりは、黙って知らん顔している方が利口なのだ。例え、陛下の気を引くための延年の道具に使われたとしても、黙って従う方が身のためである。

（恋は盲点と言うが・・・。天子にもそれがあてはまるとはね。）

そう思い、陛下に聞こえないように小さくため息をつく霍光。彼の吐いた息が、劉徹の耳に届くことはなかった。当の本人は、しばらく呆然としていたのだったが・・・・

「そうであったのか・・・！」

そう呟くと、霍光を直視する劉徹。

「光が朕の室まで来たのは、そのためだったのか・・・！？」

（延年のことを伝えにきてくれたのか。）

目を輝(かがや)かせる主君に、力なく頷(うなず)く霍光。そんな二人を見ながら、『独り言』の本当の意味を理解する仲舒。

（なるほど・・・子孟は、延年と陛下の痴話喧嘩(ちわけんか)に巻き込まれたのじゃな。）

誘惑(ゆうわく)のなんたるかを心得ている李延年のこと。自分よりも若い安林山という恋敵（!?）の出現に、先手を打ったということか。

（あのあだ花・・・なんとかせねばならないのぅ・・・。）

後宮において、最高権力者を惑わすのは女性だけではない。宦官という男女の中間的存在も、十分な災(わざわ)いを持つあだ花であった。特に現皇帝は、美しければ男女問わずに愛する男である。男性であっても、寵愛の対象になるのだ。

（まぁ・・・花の命は若いうちだけ。延年の寵愛も長くは続かないだろうが――――）

まだ、陛下の寵愛を失ったわけではない。自分も当面は、李延年の扱(あつか)いには注意する必要があった。

（さいわい子孟も、あだ花の扱いは慣れてきてはいるが・・・。）

気の毒に、と同情の視線を送れば、霍光もそれに気づいた。

（お主もそんな役回りじゃな・・・。）

（仲舒様、わかってくださいましたか・・・。）

互いに、視線を送って意思の疎通(そつう)をする二人。真相を知らない劉徹は、延年の思惑(おもわく)通り嘆(なげ)き始めた。

「延年！許してくれ・・・！お前がそのように、心を痛めているとは、朕はまったく知らなかった・・・！！」

「・・・陛下。」

「傷心の身で、それでもなお、朕を思って身を引こうとは・・・！なんと健気なのだ！」

「陛下、あの、」

「延年・・・お主は本当に、身も心も美しい！朕が愛すべき花・・・まさに色鮮やかな百合のような花じゃ！」

「「・・・。」」

（・・・花は花でもあだ花では？）

（いや、同じ百合なら――――腹黒い黒百合であろう・・・。）

感動する皇帝を尻目(しりめ)に、目だけで語り合う仲舒と霍光。しかし、いつまでも延年の話をしているわけにもいかない。

（今の問題は延年のことではない。）

宦官らしくない振るまい。宦官らしくない仕草。宦官らしくない大

胆な行動。宦官らしくないさわやかな姿。宦官・・・以前の問題で、武官なみの凄腕を持つ男。

（今は、安林山のことが優先じゃ・・・！）

そう思い、本題に戻すべく、仲舒は口を開いた。

「お気持ちはよくわかります、陛下。」
「仲舒！朕の悲痛を、わかってくれるのか・・・？」
「もちろんでございます。今の陛下のお気持ちを伝えれば、延年殿も安心するでしょう。」

落ち込む劉徹を慰めながら仲舒は言った。

「陛下、ひとまずその話はおいておきましょう。」
「『おいておき』・・・？」
「そうです、今はそれどころではありません。まずは、安林山殿についての話を・・・」
「それどころではない・・・！？」

仲舒の言葉に、陛下の額に青筋が浮かぶ。

「・・・仲舒、お主今なんと言った？」
「は・・・？ですから、安林山の――――」
「お前は今、『おいておけ』と言っただろう！？」
「？それがなにか・・・？」
「仲舒！お前という奴は、なんでそんなに薄情なんだ！！」
「へ、陛下！？」

目くじらを立てて怒る皇帝に、命の危機を感じる仲舒。

（なにか気に障るようなことでも言ったか？）

考える仲舒に、劉徹はその答えを言った。

「お前は、朕が延年を思う気持ちがわからないのか！？」

その言葉で、自分の粗相に気づく仲舒。

（しまった・・・！延年に対する言い方が悪かったか！）

安林山の話を急ぐあまり、李延年の扱いを粗末にしていまった老臣。いや、粗末にしたつもりはなかったが、劉徹からすれば、仲舒の言い方は無責任に感じただろう。その証拠に、相手の機嫌はどんどん悪くなっていく。

「仲舒！あれになにかあってからでは遅いのだぞ！？それなのに――――――その話を『おいておけ』だ！？一体どういうつもりじゃ！！」

「お、お待ちください、陛下！私は決して、そんなつもりで言ったのでは・・・！！」

「そうでございますよ！仲舒様は、目の前にある大事について話すことが先決だと仰っているだけで――――――」

「大事ぃ～！？」

仲舒を庇った霍光の言葉に、劉徹の額の青筋が増える。

「つまりお前らは、延年の事は大事ではないと申すのか！！？」

「ちょ、へ、陛下!?」
「そういうわけでは・・・!」
「今解決すべき大事ではないと言うのか!?ええ、どうなんだ!?言ってみろぉ!!」
牙(きば)をむく劉徹に、霍光はなんとかその場を取り繕(つくろ)うとする。
「そ、そういうわけではありません!第一、陛下が延年殿の側を離れることがあっても、延年殿が陛下の側を去ることなどありま・・・!」
言いかけて、慌てて口を閉じる霍光。
(しまった!!焦るあまり、とんでもないことを口走ってしまった・・・!!)
仲舒に続き、己(おのれ)の失言に凍りつく霍光。それは、霍光が庇った相手・仲舒も同じだった。
(いかん!陛下の怒りに・・・!!)
(完全に火が――――――――!)
「貴様ぁぁぁ~!!朕の延年に対する気持ちを愚弄(ぐろう)するつもりかぁぁぁ!!?」
((ついてしまった――――――――――――――!!))

二人の予想は、悲しいことに的中する。目の前には、真っ赤な顔で激怒する劉徹の姿。そんな主君に対して、必死で謝罪する家臣二人。

「落ち着いてください、陛下！若い子孟の申したこと・・・。どうか、お怒りをお静め下さい。」

「お許しください、陛下！誤解でございます！！例え話で申してしまい――――――」

「――――――縁起でもないことを言うな！！なにが例え話じゃ！！もし、延年が韓媛のように朕の元を去ったらどうするのだ！？」

「そ、それは――――」

（・・・否定はできない。）

陛下の寵愛をいいことに自滅する可能性がある。

そんな霍光の思いを知らない皇帝は、さらに怒り狂った声で言った。

「光！延年が命を絶ったら、お前はどう責任を取るのじゃ！？」

「え、あ――――――その・・・」

「落ち着いてください、陛下！それは考えられません！！」

言葉を濁す霍光代わりに、仲舒が即答した。

（死を命じられることはあっても、自分から死ぬなど考えられん！）

陛下の威光を利用する点は、韓媛と李延年は同じなのだ。二の舞の死に方をすることはあっても、健気に身を引くために死ぬような人間ではない。

「とにかく冷静なってください、陛下！子孟をお許しください！！」
「黙れ仲舒！こやつだけは許せぬぞ！！光、お前は朕と延年の愛をなんだと思っておるのだぁぁぁ！？」
「へ、陛下！？」
「お前は責任を取れるのか！？延年になにかあったら責任取れるのか！？」
「ええ！？ちょ、へ、陛下ぁ・・・！！」
「取れるのか！？取れるのかぁ！！？なんとか言わんか！！」
「く、首・・・絞めないで・・くだ・・さ、い・・！！」

こうして、再度首を締められる霍光。

「おやめください、陛下！子孟が死んでしまいます！」
「うるさい！」
「陛下、お願いですから、落ち着いてください！」

前途（ぜんと）ある若者を助けようと、仲舒は必死で劉徹を落ち着かせようと説得する。

「陛下！冷静にお聞きください！問題はそこではないのですぞ！！」
「なんだ！死ぬ前になにが言いたい！？」

乱暴に霍光を放すと、劉徹は仲舒を睨（にら）みつけた。

（死ぬ前に・・・か。相変わらず気の短い方だ。）

普通の者なら、ここで命乞いをするところだが、董仲舒は違っていた。長年使えてきた仲舒には、皇帝の扱いはお手のものである。ゆっくりと呼吸を整えると、劉徹に向かって言った。

「いいですか、冷静に考えてください。もし、安林山がただの宦官ではなく、陛下に危害を加える暗殺者だった場合・・・。」
「朕を殺すとでも言うのか？」
鼻で笑う劉徹に、仲舒は動じることなく落ち着いた口調で続けた。
「いいえ。陛下は文武両道のお方です。武芸の心得のある陛下がそう簡単にやられるとは思っておりません。」
「まぁな・・・。」
「ですが、もしも（・・・）です。」
「もしも（・・・）・・・・・なんだ？」
「相手が陛下の命を奪えないとわかった時、その矛先はどこに行くでしょうか？」
「なに？」
「陛下の身近にいる者だとは考えられませんか？もしも、お側に延年がいた場合・・・。」
「なんだと！？」
「陛下の代わりに、延年の命を奪うということも考えられますぞ。」
「ば、馬鹿なことを言うな！何故延年なのだ！？関係ないではないか！！」
「大有りです。李延年は、陛下の大切な者。陛下の大事な者を殺すことで、間接的な苦痛を、あなた様に与えようとする可能性があります。」
「し、しかし・・・なにも延年でなくとも・・・！！」
「はい、延年とは限りません。陛下にとって大切な方が狙われるのですから。むしろ・・・衛皇后様やその他の奥方様達の方が、命の危険にさらされる確率が高いでしょうな。」
「なっ！？皇后を！？ありえんぞ！そんな――――――」
「はい、断言も否定も出来ません。ただ・・・今言えることは、陛下の大切な方――――――・・・陛下が失うことで、心を痛めるお

方であれば、間違いなく無差別に殺すでしょう。」

「無差別に・・・・！？」

その言葉で、顔色を変える劉徹。そして、考え込むように腕を組んで黙り込んだ。

（・・・やれやれ、ようやく静かになった。）

やっと大人しくなった主君を見ながら仲舒は思う。

（こうでも言わないと・・・・あの男、安林山に対して陛下は警戒を持ってくださらんからな。）

仲舒が皇帝に述べたことは、実際に彼自身が危惧していることでもあった。なぜなら、本当に安林山が刺客だった場合、その巻き添えをくう者が必ず出るからだ。昨夜だけでも三十四名の宮廷兵が殺されている。暗殺に関しては今回のことが初めてではない。さかのぼれば、皇太子時代からあることだった。そのため陛下は、命を狙われることに対して慣れていたと言っていい。良くいえば、肝が据わっているとも言えるが、本当のところは警戒心がなさすぎるのだ。それには、皇帝自身に武の心得があることから、少々外敵を軽んじているという面に原因があった。だから、命を狙われることにあまり危機感を持っていない。

家臣の立場から言えば、それは大変迷惑な話だった。いつ、何時、彼のとばっちりを受けて死ぬかわかったものではない。一人を守るために万の人間が犠牲になることもあるのだ。いくら皇帝が生き神といえる存在であっても、極力犠牲は避けたいのが本音である。だからこそ陛下に、もう少し危機感を持ってもらう必要があった。

（遠回りになったが、李延年や皇后様達の話したのは正解だったな。

）

危険を自覚してもらうためにも、陛下の弱点である延年や皇后のことを話した仲舒。誰だって、自分の大切にしている者が傷つくといわれれば真剣に話を聞くだろう。

なにより、少しでも皇帝に自分の身を案じてほしかった。延年はもちろんだが、衛皇后や他の夫人達のことを言ったことはかなり効いたはずだ。

「・・・皇后に・・・妃達になにかあっては困る。」

「それは、私達家臣も同じ思いでございます。」

「・・・仲舒は、朕にどうしろと言うのだ？」

仲舒の言葉を受け、劉徹は彼の話を聞く気になっていた。そんな皇帝の問いに、深々と頭を下げながら仲舒は言った。

「恐れながら申し上げます、皇帝陛下。私はすでに退官した身ですので、政に関して口出しはできません。」

「・・・うむ。」

「ですが、この身はいつまでも陛下の臣・・・あなた様の命には従います。私は、安林山をお側に置きたいという陛下のご意思に反対はしませんが・・・」

「なんじゃ？」

「その代わり、彼の身元だけは念入りに調べる許可をいただけないでしょうか？」

「林山の身元調査か？」

「はい。できれば、子孟にその役目を与えていただきとうございます。」

「仲舒様・・・！」

「光にか？しかし、このような仕事、光にはちと、早すぎ――――

―」

「――――霍将軍が活躍されたのも、今の子孟と同じ年頃でございました。同じ兄弟ながらば・・・出来ぬことはないと思いますが。」

「――――――――!」

仲舒の発言に、劉徹が息を呑むのが霍光にはわかった。部屋の中は、なんともいえない空気によって静かになる。しばしの静寂(せいじゃく)の後で、皇帝は低い声で言った。

「・・・霍光に任せよう。」

そう告げると、寝台からも、家臣二人からも離れる劉徹。そしてそのまま、部屋から出て行ってしまった。あとには、老人と若人(わこうど)が残された。皇帝の足音が完全に聞こえなくなったところで、どちらともなく笑みを浮かべる仲舒と霍光。

「そういうことじゃ、子孟。」

「さすが仲舒様・・・鮮やかなお手並(てな)みで。」

老臣の話術に、霍光はにこやかに喝采(かっさい)を送った。

「兄上の話をされては、さすがの陛下もなにも言えませんからね。」

「なに・・・老骨(ろうこつ)にできるのはここまでだ。あとは、お主にかかっておるのだぞ、霍子孟殿よ。」

「心得ております、董仲舒様。安林山なる人物に関しては、私にお任せください。」

霍光の言葉に短く返事をすると、外へと視線を向ける仲舒。その先には、宮廷兵に守られながら歩く劉徹の姿があった。

（やれやれ・・・さっそくご機嫌伺(きげんうかが)いかのぅ・・・。）

足早に進む主君を見ながら、仲舒は小さくため息をつくのだった。

第三十三話　それぞれの夜～老人と若人の嘆き～（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！
ここでちょっと、言い訳をを書かせてください・・・・・（大汗）
この小説の前の話、【それぞれの夜～老人の嘆き～】の中で、董仲舒について説明をした一文、『皇帝・劉徹は御史大夫で（・）ある（・・）張湯を派遣して董仲舒に公平な意見を求め続けた。』と書きました。この御史大夫・張湯なる人物は、儒学に理解を持つ、熱心な裁判官だった人です。彼の性格を一言で言うと、『大変真面目な人』だったようです。どれだけ真面目だったかと言うと、彼が子供の頃に、お父さんの留守中に大事な肉をネズミに盗まれてしまい、その罪でお父さんが鞭打ちになってしまいました。これに張湯は激怒し、「悪いのは、ネズミであって父ではない！！」と、ネズミ捕まえて、人間に対してするような裁判をして、死罪（しかも磔の刑）にしてしまったのです（汗）・・・普通のネズミだったと思いますので、「チューチュー」としか、言えなかったと思います。それを彼は・・・
「ネズミよ！お前の罪状は、肉を盗んだうえに、その罪を張（私の父）に着せたとあるが、間違いないか！？」「チューチュー！」「では、犯行はお前達がしたのだな！？」「チューチュー！」「では、数匹で共謀して、張（私の父）に罪をきせ、肉を盗んだことを認めるのだな！？」「チューチュー！」「よくわかった。それでは法に従って、お前は磔の刑に処す！」「チューチュー！」「それでは刑を執行する！」「チュー――――・・・！！（断末魔）」・・・と、いう感じで執り行ったことになるんですよね・・・（大汗）しかも、これを見た彼の父は、「なんと、手際のいいことだ！この子は将来、立派な裁判官になる素質がある！さっそく、そのための勉強をさせよう！！」と、裁判官のための教育をさせたと言うからすごいです（苦笑）そして彼は、立派な裁判官へとなりました。その仕事振り

は、武帝に高く評価され、信任も厚かったことから、裁判官としてはもちろんのこと、董仲舒へのお使い役（!?）として、重要視されたようです。

だ・・・彼の場合、『目には目を、歯に歯を』というハンムラビ法典の言葉を、そのまま裁判で実行する人だったらしく、さまざまな階級の人々から不満と恨みを買ってしまっていました。そのため最後は、朱買臣という人を筆頭にした、張湯に恨みを持つ人々によって陥れられて、自害してしまいます。融通が利かないのも仕方ないと思いますが、陥れるのはもっとよくないと思います。

それでですね、張湯さんの話をここで出したのには、一応・・・理由がありまして。実は・・・御史大夫・張湯が、この小説の中には登場しないからです（大汗）すみません!!登場しないのに、書いちゃいました!!一度は、御史大夫・張湯の一文を消そうと思ったんですが、消すのがもったいなくなってしまいまして・・・!!だから、どんな人だったか、ここで書かせていただきました（汗）ですから、御史大夫・張湯さんは、今後登場しません。どうか、あしからず・・・!!

以上、言い訳兼謝罪文でした

第三十四話　高級宦官もつらいよ

（なんて綺麗なんだろう。）

自分の背丈と同じくらいの水晶を見つめながら思う。ここは後宮のとある一室。そこには安林山こと劉星影の姿があった。彼女のいる部屋は、中国全国から集まった貴重品で埋め尽くされていた。

「すごいな・・・どれも高そう。」

大きなこの白い毛皮・・・もしかして虎!?模様からして虎だよね!?すごい!白い虎がこの世にいるなんて!!こっちは翡翠で出来たの置物だ。細工が細かいなぁ・・・!これが噂に聞く西域の器か!?水晶でできているように見えるけど違うみたいね。金の鎧は着た時にちょっと動きにくそう。あの絹で出来た羽毛は触り心地が良さそうだなぁ。この掛け軸は水墨画かしら?力強くてすばらしい・・・!

楽しそうに部屋の中を見回る星影。実は彼女、今日ここで皇帝・劉徹と会うことになっているのだ。最初は緊張したが、時間が経つにつれて彼女の緊張もほぐれていった。そうなると、いつまでも部屋の中でじっとしている星影ではない。先ほどから部屋を行ったりきたりしながら宝物を見ていたのだ。彼女にとって、そこにあるものすべてがまさに未知であった。

「すごいな～どれもこれもめずらしい・・・!」

そう言ってため息をついた時だった。

「そんなにめずらしいか？」

突然後ろから声をかけられて我に返る星影。

「こ、皇帝陛下！？」

そこには、笑いをかみ殺す皇帝・劉徹の姿があった。その様子からすると、かなり前からこの部屋にいたらしい。

「朕が入ってきたことにも、気がつかないとはな。」

「す、すいません！大変失礼いたしました！！」

（なんで気がつかなかったの、私！？）

せめて、一言声をかけてくれれば気づいたのに・・・。

慌てて頭を下げる星影に、劉徹は楽しそうに笑う。

「気にすることはない。どうだ、なかなかいいだろう？」

「は、はい！あまりにも素晴らしくて・・・・思わず見入ってしまいました。」

「そんなに気に入ったのなら、どれか好きなものを与えよう。どれがいい？」

「え！？そ、そんな！滅相（めっそう）もございません！！」

気前のいい劉徹の言葉に、星影は首を横にふる。

「すでに、金銀などの宝を五千両もいただいたのです！これ以上はいただけません！！」

「別に遠慮はいらんぞ。これなんかどうだ？」

そう言って、近くにある角のようなものを手に取る劉徹。そして、星影の前に差し出した。

「これは『象牙』と言ってな、動物の角を加工したものだ。なかなか立派だろう。」

「ぞ、ぞうげ・・・ですか。」

触ってみろ、という皇帝に、恐る恐る触れる星影。

「スベスベしてる・・・！」

「そうであろう？なかなか光沢があるだろう？」

「はい、思っていたよりも滑らかです！」

楽しそうに象牙の表面を撫でる星影。初めて見て、触るものに彼女は上機嫌になる。そんな星影の姿に、劉徹は含み笑いをしながら言った。

「いるか？」

「・・・は？」

「象牙だ。お主に与えよう。」

「え！？いえ、結構です！！」

そう言って、無造作に自分の前に象牙を突き出す皇帝。それに対して、驚きながらも即答で断る星影。いくら珍しい物だと言っても、もらったところでこれをどう使えばいいのかわからない。

（第一、逃げる時に邪魔になるよ・・・。）

「そうか・・・。象牙はいやか。」
「いえ、そういうわけではあり・・・」
「では、これはどうだ？いや・・・水晶の方がいいな。」
「ちょ、陛下！？」

星影の言葉を無視して、部屋の宝物を物色し始める劉徹。宝の山からいくつか手に取ると、それを星影に渡していった。劉徹から投げるように渡される宝物を、必死で受けとめる星影。

「陛下！宝を投げないでく・・・！」
「あれもいいな！そっちなんかどうだ！？」
「ちょっと、話を聞いてください、陛下！」
「腕輪は・・・地味な物ばかりだな。仕方ない、数で誤魔化すとして～」
「ええ！？ちょ、ええ！？」
「よし、毛皮もやろう！これなんか、林山に似合いそうじゃのぅ！」
「陛下！陛下ってば！！」
「おお！むこうに絹の着物があったな！これと、それと～」
「だから、こんなに持てませんし、貰えませ――――――ん！！」
「ん・・・？おお、それもそうか。」

星影の悲痛ともとれる声に、劉徹が振り返る。そこには、皇帝から渡された宝の数々を重そうに抱える高級宦官がいた。

「林山。無理をせずに、そこら辺におろせばいいだろう？」
「そこら辺におろせませんよ！おろせる品ではないでしょう！？傷でも付いたら大変じゃないですか！？」
「少々構わん。ここにあるのはすべて献上品だ。どうせまた持ってくる。」
「だからこそ、無下（むげ）には扱えません！これは、陛下に対する贈り物

ですよ！？」
「また持ってくるからよい。気にするな！」
ハハハ、と笑う劉徹に、段々（だんだん）とついていけなくなる星影。
（皇帝と庶民の金銭感覚は、ここまで違うのか・・・！？）
「そうだとしても大事にしてください！・・・せっかく・・・陛下お一人のために、献上されたものなのですから・・・。」
渡された宝の山を元の場所に戻しながら星影は言った。最後の方は、嘆きとも悲しみともいえる声で彼女は呟（つぶや）いた。
（皇帝一人のために、用意した品だと言うのに・・・。）
そんな星影の言葉に、劉徹もなにかを感じ取ったらしい。軽く咳払（せきばら）いをすると、星影に向かって言った。
「うむ・・・ちと、冗談が過ぎたな。林山の言う通り、これは朕のために用意された品々であった。」
「そうでございますよ。陛下が大事にしないと、引き立て役は気の毒です。」
「引き立て役？」
「違いますか？最高権力者に見合った高級品を、献上するのが普通と思いますが？」
「最高権・・・！引き立・・・！？」
皇帝の言葉はそこで途切れる。何事かと思い、相手を見る星影。途端に、笑い声が部屋中に響いた。

「朕の引き立て役かぁ!?本当に、生意気な口を叩く奴じゃ!」
「な、生意気なことを申しましたか?」
「ハハハ!自覚しとらんのか、林山!?まったく、お前は・・・・ハハハ!」
そう言って、何度も笑う皇帝・劉徹。
(・・・また、変なことを言ったんだな・・・。)
そうは思っても、なにがいけなかったのかわからない星影。今の彼女に出来ることは、皇帝の笑い声がやむのを待つことだけだった。
「林山がそう言うのじゃ!以後、気をつけることにしよう。」
「・・・ありがとうございます。」
呆れ気味に言う星影に、皇帝・劉徹はなおも笑いながら言った。
「林山よ・・・実はな、今日は朕からお主に贈り物があるのだ。」
「・・・陛下、褒美(ほうび)の品はいただきましたが?」
「これは、褒美の品ではない!お主が望んだものじゃ。」
「私が望んだもの!?」
劉徹の言葉に、星影が聞き返した時だった。失礼します、と言う声と共に、見慣れた人物が姿を見せた。
「黄藩様!?」

それは、元上司兼現同僚である黄藩だった。その姿を見て、星影の背中に冷たいものが流れた。

（まさか・・・黄藩様が私の望んだ（・・・）者!?）

陛下は、そう思われてるのか!?

そう思って皇帝を見れば、相手は片目を閉じて合図を送ってきた。

（いやいやいやいや!!――――――――誤解も甚(はなは)だしいんですけど!!!?）

いつ、だれが、いや・・・私が、黄藩様を必要としましたか!?悪い人ではないと思うけど、いい人とも思えないんですけど!?怒らせたら口汚くなるんですけど!?乱暴になるんですけど!?うっとうしいから、側にいてほしくないんですけど!?

（よくわからないけど、誤解を解(と)かなくちゃ!!）

誰が言ったか知らないけれど、陛下がそう思ってるなら、かなり違うと言わなきゃ!

「あ、あの陛下!」

「これ林山。『黄藩様』ではなく、『黄藩殿』であろう?」

「あ、はい!黄藩、殿・・・です。」

「ハハハ!『黄藩殿です』か。面倒な同僚が増えたなぁ～黄藩殿?」

「陛下、恐れ多いことを仰らないでください。私のようなものに、『殿』付けなど・・・お戯れが過ぎます。」

黄藩の言葉に、さらに爆笑をする劉徹。そんな劉徹を横目で見ながら、視線を黄藩へと移す星影。対する黄藩は、星影を見ることなく、皇帝に向かって丁寧な口調で言った。

「陛下、仰せの通りお連れいたしました。」
「そうか、ご苦労だったな。」
「隣に控えておりますが、いかがいたしましょうか？」
「ここに来るように伝えてくれ。お前はもう下がってよいぞ。」
「はい、失礼いたします。」

皇帝の言葉に、黄藩は深くお辞儀をすると、足早に部屋を後にした。最後まで黄藩は、一度も星影を見ることはなかった。そんな相手の態度に星影は、なんともいえない気持ちになる。

（無視されたのかな・・・？）

前日、黄藩と派手に言い争った（！？）ことを思い出す星影。

（なんだろう・・・なんか――――――――）

「物足りないか？」
「え！？」
「あいつの態度に、物足りないと思っているのだろう、林山？」
「え、あ・・・あの・・・。」

確信を突かれ、星影は返事に困った。皇帝の言う通りだった。てっきり、なにか言われるとばかり思っていたのに、なにも言わずに出て行ってしまった元上司。物足りなさもあるが――――――

（どちらかと言えば、そっけなかったな。）

「無理もない。今はお前の方が身分は上なのだ。下の者が上の者に意見する権利はないからな。」

「そうですか・・・。それじゃあ仕方な・・・――――――――ええ!?」

（私の方が身分は上!?黄藩様よりも!?）

「上!?私が黄藩様よりも!!?」

「なんじゃ?知らなかったのか?」

驚いた表情をする星影に、あっけらかんとした様子で言う劉徹。そんな相手に、すぐさま星影は反発した。

「知りませんよ!それより、おかしいじゃありませんか!?だって・・・私みたいな若輩者(じゃくはいもの)が、どうして黄藩様より上なんですか!?ここに来て、まだ日が浅い私が・・・。」

「朕を助けたからに決まっておろう。」

当然のごとく言う皇帝。

「高級宦官にも、上(うえ)から下(した)があるのじゃ。林山が助けたクズ共は、高級宦官では下の下(げげ)。黄藩は上(うえ)じゃ。」

「待ってください!上の上はないのでは!?」

「だから林山は、特上じゃ。」

「どういう基準ですか!?」

「朕が決める。よって林山は、特上の高級宦官である。」

「あなた様ですかぁ!?」

（完璧な王様主義!!）

劉徹の言い分に、めまいを覚える星影。そんな彼女に、劉徹は厳しい口調で言った。

「・・・林山よ。数日前までは、お主が黄藩より下の身分だった。だが今は、お主の方が黄藩よりは上なのだ。それはわかるな?」

「は、はぁ・・・。」

「では、黄藩のことは『黄藩様』ではなく、『黄藩殿』と呼ぶのが正しいな?」

「・・・そうなりますが・・・。」

「急に変えられないのはわかる。しかしな、いつまでも同僚を様呼ばわりするのはよくないぞ。場合によっては、嫌味に聞こえるぞ。」

「嫌味!?冗談じゃありません!私はそんなつもりは――――」

「ならば、『黄藩殿』と、呼ぶようにせよ!お主も気まずいだろうが、黄藩はもっと気まずいのだぞ。」

（・・・そうかもしれない。）

皇帝の言うことは、一理あった。

少し前まで後輩だった人間が、急に自分と同等の立場になれば、黄藩様でなくても戸惑うだろう。自分よりも、やりにくいはずである。

「・・・これからは、意識して『黄藩殿』と、呼ぶように気をつけます。」

「『意識して』か・・・。まぁ、早く馴染(なじ)むように心がけろ。」

「・・・心得ました。」

皇帝の言葉に、頭を下げる星影だったが、

（ここに慣れるのが早いか、星蓮を見つけて逃げるのが先か。・・・微妙なところだな。）

宮中に留まるつもりは毛頭なかった星影は――――――

（星蓮を連れ出すまでの辛抱よ・・・！！）

改めて、自分の使命を確認するのだった。

第三十四話　高級宦官もつらいよ（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
気前のいい劉徹を書いてみました。ついでに、黄藩も出してみました。豪快な皇帝と、元上司の高級宦官に挟まれ、少しだけ主人公は難儀しています。劉徹と黄藩の態度に、戸惑う星影を書いてみました。
小説の話の流れには関係ないのですが・・・・気をつけていても、誤字・脱字が多くて、自分のうっかり加減にうんざりしています・・・（大汗）
おかげで現在、小説更新恐怖症になっております・・・（涙）もう・・・笑ってやってください。

第三十五話　狐と狸の馬鹿試合（前編）

妹・星蓮奪回への決意を新たにする星影。そんな星影の思いを、もちろん皇帝・劉徹は知らない。知らないのだが――――――

「わからんな・・・。」

「・・・え？」

「林山よ、朕はお主のことがわからん。」

宦官としての安林山に、皇帝は疑惑を持ち始めていた。

「朕は、林山が何故、宦官になったのか不思議でならん。」

劉徹の言葉に相手を見る星影。その顔からは、疑いの色がはっきりと表れていた。

「ふ、不思議ってそんな――――――！」

（まずい！私を疑っている・・・！）

劉徹からの視線を受け、なんとか誤魔化そうとする星影。

「わ、私が宦官になった理由は一つ、陛下にお仕えするためですよ！？何故、不思議がることがありましょうか・・・？」

「声が上擦っているぞ。」

「き、急にそんなことを仰られるからですよ！そんな、当たり前のことを――――――！」

そう言って、誤魔化してみる星影だったが、彼女の動揺する様子ま

では誤魔化せなかった。相手の変化を感じ取った劉徹は、厳しい表情で問いただした。

「ならば武官として仕官すればよかっただろう?それほどの腕前を持ちながら・・・なんとも解(げ)せん・・・!」

「え!?いや、それにはいろいろわけがありまして・・・。」

「ほう・・・どんなわけだ?」

「いえ、陛下のお耳に入れるほどのことでは――」

「林山・・・朕の命に逆らうのか・・・!?」

きつい口調で言う劉徹。有無(うむ)を言わさぬ気迫に、星影は返事に困った。

(まいったな。逆らうわけにはいかないし・・・。)

だからと言って、適当な答えをすれば、相手が怒るのは間違いない。こういう人間は、曖昧(あいまい)な答えをすればするほど深く追求する性質(たち)なのだ。

「林山、はっきりと答えよ!どんなわけがあるのだ!?」

その証拠に、明確な答えを要求してくる劉徹。

(これ以上の誤魔化しは・・・無理、か・・・。)

ここは奥の手を使うか。

そう決心すると、視線を落として黙り込む星影。その様子を黙って見守る劉徹。互いに黙り込む二人。頃合(ころあ)いを見計らったところで、星影は劉徹に背を向ける。そして、項垂(うなだ)れたふりをしながら言った。

「わかりました・・・陛下。でも、これだけはお約束してください・・・！」

「・・・林山？」

さっきとは違う、落ち着いた静かな声で言う星影。劉徹に見えないように、懐（ふところ）から小瓶（こびん）を取り出す。

（これ（・・）を使う羽目になるとはな・・・。）

その（・・）動作がわからないように、小刻（こきざ）みに肩をふるわせながら星影は言った。

「誰にも・・・話さないでください！李延年様にもです・・・！」

素早く、小瓶の中身を目につける星影。

「それは構わんが・・・。何故延年が出てくるのだ？」

劉徹の言葉に答えず黙り込む星影。もちろんわざとだ。そんな相手に、皇帝は再度同じ質問をする。

「林山、何故延年の名を出す？」

「・・・陛下と延年様が、深き仲と聞いております。それゆえに・・・お気を許され、信頼している方であっても、私の話を言わないでいただきたいのです・・・！」

「・・・それほどのことなのか？」

劉徹の問いに、無言で頷く星影。そして、声を震わせながら言った。

「み・・・皆様が、私を疑うお気持ちはわかります。本当なら、昨日あの場ではっきりというべきでした・・・。でも――――言いたくなかったんです！言ったら・・・それだけ自分が惨めになる・・・！」

「・・・林山、誰にも言わないから理由を話してごらん。」

そんな星影に近づくと、そっと彼女の肩に手を乗せる劉徹。それに合わせるように、星影は劉徹を見る。完璧な顔を作りながら。

「約束ですよ・・・！？」

「――――――林山、お主・・・・！」

「約束してください、陛下・・・！」

「・・・・泣きながら頼まれては、守らないわけにはいくまい？」

涙を流しながら懇願する相手に、優しく語り掛ける劉徹。

「泣くでない、林山・・・・。」

（よかった・・・私の頬を伝う涙を、本物だと思ったようね・・・！）

皇帝の言葉に、自分の小道具の高精度を実感する星影。

この時、星影が流していた涙は、彼女の体から出たものではない。

隠し持っていた小瓶の中に入れておいた涙。つまり――――

（万が一のことを考えて、準備しといてよかった。）

さまざまな状況を予測して、星影が作った『偽物の涙』なのだ。ただの水では、すぐにバレるので、本物と思わせるように塩を混ぜて調合した液体である。星影が、ここまで細かい芸をしたのには理由があった。

「泣くでない、林山。お主らしくないぞ・・・？」

星影の頬に手をあて、そっと涙を拭う劉徹。そして、手についた星影の涙を口に含んだ。

「陛下、なにを・・・？」

劉徹の行動に、わざとか弱い声を出す星影。そんな皇帝の姿を、星影は低姿勢で注意した。

「涙は、口にするようなものではございません！それを、陛下ともあろうお方が、私のような者の――――――――！」

「・・・林山のものであったからこそ、朕は口にしたのだ。」

「なにを仰るのです、陛下！？涙とは、体から出る不浄のもの・・・！そのような汚いものを口にしては・・・！！」

「汚くはない。」

「陛下・・・！？」

「林山は身も心も美しい。その体から出るものが、汚いはずがない・・・！」

そう言って、再度星影の涙を拭うと口に運ぶ劉徹。そんな皇帝の仕草を、憂いを込めた目で見る星影。しかし、腹の底は、まったく憂いなどは感じていたなかった。

（やっぱり、口にしやがったか・・・！）

劉徹の姿に、心の中で毒づく星影。

琥珀達から聞いた皇帝の話しが正しければ、相手はかなりの好色。つまり色男なのだ。軟派なことは平気でやると、星影は予想していた。だから、自分の涙を皇帝が口にしてもいいように、わざわざ薄い塩味をつけておいたのである。

（まさかとは思ったが・・・本当に口にする奴があるか！？）

普通の女性なら、そういう情熱的なことをすれば喜ぶだろう。しかし、星影は違った。彼女の場合、歯の浮くような台詞を言われただけで悪寒を感じる性質だった。今も、劉徹のおかげで、星影は全身鳥肌状態になっていた。もっとも、服で隠れているので、皇帝がそれに気づくことはなかったのだが――――――――

「林山よ、涙は不浄なものではない。泣くことで、苦痛から人を解放してくれる。そして、その者を清めてくれるのだ。」

「清める・・・？」

「そうじゃ。だから涙は、塩味をおびておるのだ。塩は、身を清めてくれる。」

「陛下・・・。」

「お主の涙は、朕の身に染みたぞ？林山が涙を流すほどのことじゃ・・・。今のお主は、泣くだけではその苦しみからは解放されん。」

「・・・・・・なぜ、そのように断言できるのです？」

「お主の涙の味が薄いからじゃ・・・。清める作用が足りない。」

「・・・水だとでも仰りたいのですが？」

「いいや、普通の涙じゃ。この味が、水であるはずがない・・・！」

「陛下・・・。」

（ホッホッ！お味はよろしいようですね・・・！？）

鳥肌を立てながらも、心の中で腹黒く笑う星影。そんな星影に、劉徹は子供をあやすような口調で言った。

「林山・・・お主は、朕を助けてくれた。今度は、朕がお主を助けたい。」

「陛下・・・。」

「朕は、お主の心を救いたい。そのためにも・・・朕の問いに答えてはくれまいか・・・？」

「・・・陛下、なんと、もったいないお言葉を・・・・！！」

（だぁぁぁ！！どこから、そんな言葉が出てくるんだよ！？寒い！寒いよ！！）

劉徹のくさい台詞に、いろんな意味で身震いする星影。

生理的に、拒否したかったが、ここでボロを出すわけにはいかなかった。

昔見た恋愛劇を思い出しながら、劉徹にむかって言った。

「そのお言葉・・・信じていいのですか・・・陛下？」

水でできた涙を浮かべながら、念を押す星影。

塩も少し加えていたので多少目にしみたが、妹のために姉は耐えた。

「もちろんじゃ、林山！」

「本当に、誰にも言いませんか・・・？」

「天帝に誓って、他言はせぬ・・・！」

「では・・・私と陛下だけの・・・秘密にしてくださいますか？」

目を赤くして言う安林山の訴えに、陛下は力強い声で言った。

「我が、天命に誓う！このことは、朕と林山の二人だけの秘密にする・・・！！」

「陛下・・・！」

「さあ、話しておくれ、林山。」

皇帝の言葉に、嬉しそうに微笑む安林山。

（よしよし・・・上手く食いついてきた。）

相手が、自分の話にのってきたのを確信すると、作り物の涙を流しながら星影は言った。

「私は・・・幼い時から武芸を習っていました。武芸が好きで、好きで・・・将来は武官になって陛下のお側で働くことが私の夢でした・・・！」

「なるほど・・・そういうことなら、お主のあの腕前、納得がいく。」

「ありがたきお言葉・・・・！」

「しかし、宦官になったということは――――――なにか、武官になれない理由でもあったのか？」

劉徹の問いに、うぅと、小さく嗚咽（おえつ）するふりをする星影。

「・・・なれませんよ・・・！」

「林山？」

「どんなに夢見ようと、私の願いがかなうことはありません・・・！」

「林山、どういうことじゃ？」

戸惑う劉徹に、星影は声を荒げながら言った。

「生まれた時から決まっていたんです・・・！私は武官になれないと！！」

「生まれたときから・・・！？」

「はい・・・。まことに・・・言いにくいのですが、その・・・・・・！」

「遠慮するな！申してみよ・・・！」

「・・・出産の時、産婆の手違いから・・・あそこを傷つけられたのです・・・・。」

「なに！？」

その言葉で、劉徹の顔色が変わった。

「まさかその傷が元で・・・。」

「・・・はい。しばらくして、その傷が化膿してしまい・・・いろいろ治療したんですが、結局は切り落とすしかなかったんです・・・！」

「それは――――――なんと気の毒な・・・。」

「だから私は、武官にはなれない！なれるはずがないんです！！」

顔を覆いながら、声を押し殺して嗚咽する星影。もちろん嘘泣きだったが、バレないようにと、目が赤くなるように一生懸命擦る。もっとも、塩を入れた水を使ったので、そんなに擦らなくても目は真っ赤だった。嘆く星影に、劉徹は深いため息をつきながら言った。

「それでお主は・・・武官ではなく、宦官の道を選んだのか・・・！」

「うっ、うぅ・・・！はい・・・！」

「それでは・・・・宦官になるより他、道はないな・・・・・。」

安林山の話で、彼が何故宦官になったか理解した皇帝だったが、

「・・・・林山、それは本当に手違いだったのか!?」

「嘘を言っているように見えますか?」

星影の言葉に劉徹は黙り込んだ。どうやら、彼女の話が本当かどうか考え込んでいるらしい。その様子を見て、星影は次の作戦へと出た。

「陛下、いいですよ・・・。私のことで・・・・そんなに考え込まないでください。」

「なにを言う林山!朕は――――」

「どうせみんな、私が賊の一人だと思っているんでしょう!?ええ、そうでしょうとも!!こんな宦官らしくない乱暴者、賊と思われて当然ですよ!!」

「林山!そんなに投げやりになるでない!」

「気休めは言わないで下さい!陛下だって、陛下だって・・・・本当は私を、賊だと思っているのでしょう・・・・・!?」

床にへたり込みながら言う星影。その姿にギョッとする劉徹。そして、慌てて弁解(べんかい)し始めた。

「誤解だ林山!朕はわかっておる!お前は朕を賊から救ってくれた!そんなお前を、朕が賊と思うはずがあるまい!?現に、この目でしかと見届けておるのだぞ!?」

「でも今、黙り込まれたじゃありませんか!?私の話がうそかどうか、考えていらしたんでしょう!?」

「そうではない!朕は、思うところがあって、考えておっただけじ

や！」

「そう仰いますが、どうせ・・・・！どうせ、どこぞの重臣の方と私の身元について調べる気でしょう！？」

「うっ・・・！？な、何故それを知っているのだ！？」

「ええ！？」

劉徹の言葉に顔をあげると、そこにはしまったという顔をして手で口を覆う男の姿があった。二人の間に、気まずい雰囲気が流れる。

「・・・・そうなんですか？」

「い、いや、その・・・な、なにを言うか！朕がそんなことをするわけないだろうが！？」

演技抜き、地で質問する星影と、繕い笑いをする劉徹。

（調べる気なのか・・・・！）

計算外だった。口から言った出任せが、事実だったとは！

そんなことをされれば、正体がバレるのは必然である。とんでもない事実を知り、彼女は背中に冷たいものを感じていた。しかし、ここで動揺しては怪しまれる。星影はできるだけ平静を装いながら、冷めた目で皇帝を見つめた。その視線に気づき、劉徹はしかりつけるように言った。

「こ、これ！そんな目で見るでない！」

「・・・元々こんな目ですが、なにか？」

「嘘をつけ！いつもより、かなり違うではないか！？」

「『いつも』とは、どういう意味でございましょう？」

「なに！？」

「私が陛下にお目にかかったのは、今日を含めて三度だけでござい

ます。『いつも』と言えるほど顔をあわせてはおりません。それなのに陛下は、三度見ただけで、私のすべてがわかるのですか？」

「それは――――――！」

「左様でございますね。三度見て違えば、調べたくなるのも当然でございますね～？」

目に加え、冷たい口調で言うと、劉徹の方もさすがに居心地が悪くなったのだろう。星影を無理やり立たせると、彼女を見つめながら言った。

「林山・・・お前の言う通り、朕はお前のことを調べるように家臣に命じた。しかし、それは朕の本意ではない！朕は、お主が賊でないと信じている！」

「・・・陛下は私にそう言いつつ、股肱（ここう）の臣に、私の身元を調べさせているのでしょう？」

「だから仕方なかったんじゃ！一昨日の晩に、お主があの場にいたとこについて疑問視する声があって――――――！」

「ひどい・・・陛下！私・・・私、陛下のこと、信じていたのに・・・！」

「だから誤解じゃ、林山！」

「肘鉄をくらわしたことを、怒ってらっしゃるんですね？暴言を吐いたことが、気に入らないでしょう？無礼者の私が言う資格はありませんが――――・・・こんな仕返し、あんまりでございます・・・！！」

劉徹の手を払い、再度泣き崩れる星影。彼女の演技に、皇帝はすっかり騙されてしまう。

「悪かった！朕が悪かった、林山！」

「おやめください！そのようなお戯（たわむ）れは――――――！！」

「――――――戯れではない!!」

そう叫ぶと、星影を抱き起こす皇帝。そして、涙を流す星影を見ながら言った。

「仲舒は――――――いや、重臣の一部が、安林山を疑っているのは事実じゃ。宦官とは思えぬ武才と、下級宦官の立ち入りを禁止されている場所にお主がいたからだ。賊ではないと証明できるはっきりとした証拠がないからじゃ!だが・・・朕は今日はっきりとわかったぞ。」

「・・・なにがですか?」

「お前は辛い過去を背負って、宦官になったということを!仕官の仕方はどうであれ、それでも朕の側に仕えるためにここに来たということを!」

「・・・陛下?」

「今ここで、約束しよう!安林山のことについて、これ以上の検索(けんさく)を朕はしないと・・・!調査を命じた者にも、その命を取り消すと伝える!!」

「陛下・・・!」

(やった!危険要素は排除できた!!)

皇帝の言葉に、星影は心の中で歓喜(かんき)する。自分の作戦が上手くいきつつあることに。しかし、ここで喜んではいられない。念入りに、最後の仕上げに取り掛かる星影。

「・・・そう仰ってくださるのはうれしいのですが・・・。」

「どうした?なにが不満だ?」

「いえ・・・。陛下が、私のためにそう命じられても、みなさんは

納得しませんよ・・・・。自分勝手なことを言ったことはお詫びします。そして・・・陛下のお心に感謝します。だから――」

健気な作り笑いを作ると、優しい声で皇帝に言った。

「調べてくださって結構です・・・それで皆さんの不満がなくなるなら――――・・・・!!」

「――――林山・・・・!!」

名前を呼ばれると同時に、素早く相手から顔ごと視線をそらす星影。そして、服の袖で顔を隠した。知らない者からみれば、『安林山が周りの非難・中傷に堪えながらもけなげに陛下に尽くしている』ように見えるだろう。

そんな星影の姿に、皇帝・劉徹は――――――――

「朕は馬鹿だった・・・!お前のような心の優しい者を疑うとは!!安心しなさい。他のものには朕が上手く言っておく。お前は何も心配しなくていいんだよ。」

すっかり騙されてしまった。皇帝の言葉に、星影は袖から少しだけ顔を見せながら言った。

「でも陛下!一度出した命(めい)を撤回しては――――陛下のご威光に、傷をつけてしまうのでは?」

「かまわん!朕は林山のためなら、どんな非難中傷でも受けよう・・・!」

「陛下・・・!それほどまでに私のことを・・・!?」

そう言って、笑顔を見せる星影。彼女の笑顔に、皇帝は満足そうに頷く。

（・・・上手くいった。このままとどめをさしておくか・・・！）

上機嫌になる劉徹を見ながら、星影は最後の仕上げに取り掛かった。

「ありがとうございます・・・！ありがとうございます、陛下・・・！陛下だけです・・・私の心をわかってくださったのは・・・！」

「これこれ、大げさじゃぞ、林山。」

「いいえ。陛下の優しさに触れ・・・私は、陛下への思いが強くなりました・・・！」

「ハハハ！それは嬉しいことを言っ――――――」

「――――――私は、陛下のことを尊敬します！いえ・・・心からお慕いします・・・！！」

そう言うと、皇帝の胸に顔を押し付け、相手の服を少し掴む星影。

「り、林山！？」

「陛下・・・。」

小さく顔をすり寄せ、服を掴む手に力を込めた。

こういう仕草をされると男は嬉しいと、以前本物の林山が言っていたからだ。

（でも・・・本当にこんなことで男は喜ぶんだろうか？）

初めてすることもあり、その効果を疑問視する星影。

だが、そんな彼女の心配は、取り越し苦労だった。

「林山・・・！愛い奴だ！朕はいつまでも林山の味方だぞ・・・！！」

歓喜に近い声を上げながら、星影の体を抱きしめる皇帝。

「安林山の身元調査はやめさせる！お主の傷つくことはせぬ！だから、安心しておくれ、林山・・・・・・！」

「陛下・・・！」

皇帝の言葉に、作戦成功を確信する星影。

（これで心置きなく星蓮を探すことができる！）

男って、本当に単純だわ～！！

自分の言葉を信じる相手に、心の中で声高らかに笑う星影だった。

第三十五話　狐と狸の馬鹿試合（前編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
星影は、妹・星蓮のためなら、体を張って戦います（笑）特に、皇帝から自分の身を守るためなら、平気で最高権力者を騙します（苦笑）妹のためには、小道具やらなんやら準備します。余談ですが、この小説の中で登場した『偽物の涙』は、星影がこっそり宮中に持ち込んだ武器（！？）です。涙は女の武器と言いますので。・・・と言っても、星影は元男・安林山と偽って宮中に入り込んでますから、その表現はおかしいですかね・・・？いや、でも、実際は女なので、おかしいことはないですよね・・・（苦笑）あ、でも、ややこしいことには変わりないですね（汗）とりあえず、型破りな主人公・星影の姿を、今後とも笑って読んでいただけると嬉しいです。
ちなみに、小説の中で出てきた『股肱の臣』とは、『自分の手足のように最もたよりにする者』という意味です。

あと、小説とは一切関係ないのですが・・・・正月ボケって、なかなか直りませんね・・・（汗）

第三十六話　狐と狸の馬鹿試合（後編）

私・・・安林山が宦官になった理由を、皇帝が聞いてくることは予想していた。自分で言うのもなんだが、武才ある人間が、武官ではなく宦官になるということは、普通に考えてもおかしいことだ。琥珀や空飛ですら、不思議そうにしていたのである。陛下が疑問を持たないはずがない。そう思い、万が一に備えて、懐(ふところ)に『偽物の涙』を忍ばせていたのだが――――

「すまなかった、林山・・・！」

「どうかそのように、恐れ多いことを仰らないでください！陛下を苦しめたとあっては、その罪の深さに・・・私は耐(た)えられません・・・！」

「お主が苦しむことはない！林山は悪くないのだぞ！？」

「陛下・・・！」

「だから林山、これ以上悲しい顔をしないでくれ・・・。さあ、元気を出すのじゃ！」

自分のホラ話を信じ、謝罪し、励ます皇帝・劉徹。そんな相手に、星影は罪悪感などまったくなかった。琥珀同様、騙して悪いという気持ちにはなれなかったのだ。

なぜなら――――

（お前が、変な勅命(ちょくめい)を出したおかげで、私達は苦労してるんだぞ！）

妹・星蓮を奪った郭勇武同様、皇帝に対しても、良い感情など星影は持っていなかったからだ。韓媛の話を聞いた時点で、今まで彼女が抱(いだ)いていた【皇帝像】に亀裂(きれつ)が入ってしまった。さらに、自分を救ってくれた衛青将軍を軽蔑(けいべつ)していると聞き、激しい怒りを感じて

いたのだ。もはや星影の中で、皇帝・劉徹への失望は修復不能であった。

「林山、自分を責めてはいけないぞ！お主の気持ち、朕は痛いほどわかったからな。」

「返す言葉もありません、皇帝陛下・・・！そのお気持ちだけで、私は十分でございます。」

（賊の疑いさえ晴れれば、星蓮を探すのに十分ですから・・・！）

下級宦官から高級宦官への昇格は、星蓮を奪い返すうえで、天が与えた絶好の機会だった。陛下の好色にさえ気をつければ、妹を探すのも簡単である。さいわい、陛下には李延年という一番のお気に入りがいる。しかもこの男寵は、安林山（私）を敵視している。陛下の下心と、延年の嫉妬心を利用すれば、自分がその手の対象になることはない。賊の嫌疑が晴れ、安林山の身元調査が中止された今、星蓮を探すための障害はなくなったのだ。

（こんなに上手くいくなんて・・・やはり天は、私達の味方ね！）

勝利の喜びをかみしめる星影。しかし、その余韻も長くは続かなかった。

「林山、つらいことを聞いて悪かったな。」

「いいえ。賊ではないと、わかっていただけただけで、私は満足でございます。」

「光には朕から、林山の身元調査の打ち切りを伝えておく。もちろん、お主が宦官になった経緯は誰にも他言せぬ。」

「はい、どうか私達だけの秘密に・・・・！」

「ああ、朕と林山だけの秘密じゃ・・・・！」

皇帝が、自分を抱きしめる力が強くなる。星影がその異変に気づいた時、彼女は完全な金縛り状態にされていた。そう・・・・・

「・・・・・陛下？」

目の前にいる最高権力者によって――――――――！

「もう、林山に辛い思いはさせん・・・！朕も林山のことを思っているぞ・・・！」

そう言って、星影を抱き寄せる劉徹。その目は、獲物を見つけた狼そのものだった。劉徹の態度に、本能的に危険を感じる星影。

「あ、あの！そろそろ放していただけませんか・・・？」

笑みを浮かべながら、後ろへ体を引く星影。その動きにあわせて、劉徹も前かがみになる。

「なんですか、陛下！？・・・この動きは・・・！？」

「安心しろ・・・・ここには誰も来ない。」

「はい・・・？」

意味ありげな言葉を口にする皇帝。その言葉に目を見張る星影。

「林山・・・！」

「へ、陛下？」

「あの庭で会った時から、ずっとお主に焦がれていた・・・。そなたも朕と同じ思いでいてくれたとは・・・！」

「はぁ？」

「怖がることはない・・・朕にすべてを任せよ――――――――！」

言ったと同時に、林山の首に自分の唇を押し付ける劉徹。突然のことに、星影の口から変な声が出た。

「うきゃ！？」

「おお・・・！なんという滑らかな肌じゃ・・・！まるで女子のようにー――――」

「馬っ――――――・・・！！な、なに言ってるんですか！？やめてください、陛下！！」

「なにを言う？誘ったのはお主ではないか、林山。」

「誘ったぁぁぁ！？」

劉徹の行動で、相手がなにをしようとしているのか理解する星影。

（い、いか――――――――ん！）

熱演しすぎた！？このままでは犯される！というか、操が奪われる前に正体がバレる。

「誤解です！陛下！！おやめくださ――――――――――――い！！」

必死で抵抗した星影だったが、反り返った姿勢のため、上手く動くことができない。それに加えて、不安定な星影の体を劉徹が素早く支えたのだ。

「こ、困ります！陛下！お許しを！！」

「その反応・・・まだ男を知らぬか・・・！？」

「本当になに言ってるんですか!?ちょっと、本気でやめてください!」

恐れていた事態に戸惑う星影。うろたえつつも、この状況を打開するための策を考えた。

(前回のように、殴り飛ばしてしまおうか?いや、上半身が自由に動かないからそれは無理!ならば、下半身を使って急所に蹴りを入れれば――――――!)

膝に力を入れる星影だったが、その脚力が皇帝に向けられることはなかった。

(――――――だめだ!確かに股間を蹴れば、こいつの動きは封じられるけど・・・・!)

相手は仮にも皇帝である。前回は、知らなかったということで許されたが、今回はそうもいかない。皇帝陛下相手に暴力行為・・・そんな無礼が二度も許されるはずがない。

四苦八苦悩み、暴れる星影に、皇帝は楽しそうに言った。

「怖がることはない、林山・・・!よかろう、朕が手取り足取りその喜びを教えて――――!!」

「きゃあぁぁぁ――――――――――――!?」

勢いよく、星影を押し倒そうとする劉徹。させまいと、必死で背骨と両足で踏ん張る星影。そんな星影に、愛い、愛い、と言いながら、首やら頬やらに口付けてくる皇帝。劉徹の攻撃から、首を左右に振りながら、本気でよける星影だったが――――――

（いやぁぁぁ！！駄目ぇぇぇ――――――――――――――――！！？）

不安定な体勢で、相手の体重をかけられ、星影の体は限界だった。

彼女の体は、床へと確実に近づいていた。

こんなことなら、腹筋や背骨を鍛（きた）える修行をしとけばよかった！！

（誰か助けてぇぇぇぇ――――――――――――――――――――！！）

星影がそう思った時だった。

「失礼します。」

声と共に入り口に二つの影が立つ。その声に、劉徹の動きが止まる。

それと同時に、自分を掴む力が弱まった。

（――――――――――――今だ！！）

素早く、皇帝を押しのけると、その体からすり抜ける星影。その動きに劉徹は、あっ、と叫ぶものの、

「失礼いたします、陛下。入ってもよろしいでしょうか？」

自分を呼ぶ声に、彼は小さく舌打ちをする。

「誰だ!?邪魔をしおって・・・!」

（よかった・・・誰だかわからないけど、助かった・・・!）

天の声とも言える声に、安堵する星影だったが――――――

「よくも無粋な真似を・・・!追い返してくれる!」

劉徹の言葉で、彼女の安堵は吹き飛んだ。

（冗談じゃな――――い!!）

せっかく助かったのに!なに言ってんだ、このおっさんは!?

キッと相手を睨(にら)みつければ、同じような顔で入り口を睨(にら)む男の姿。

そして、大きく口を開けていた。その姿を見て、星影は凍りついた。

（ヤバイ!本当に追い返す気だ!!）

「朕は今忙しい!要件なら後に――――――――――!!」

「――――――してはいけませんっ!!!」

皇帝の言葉をかき消すように、大声で叫ぶ星影。その声を聞き、驚いた表情で声の主を見る劉徹。

「なんじゃ林山!?朕に指図(さしず)する気か・・・!?」

「あ、いえ・・・だって――――――・・・・・！」

あからまさまに、不機嫌になる皇帝。そんな相手をなだめるように、星影は猫撫で声で言った。

「陛下、今はご公務のお時間です！それを疎かになさってはいけません！」

「しかし、林山、」

「それに――――――私見たいのです・・・・・。」

そう言って、陛下の小指を素早くつまむ星影。

「り、林山！？」

「私・・・陛下がご公務に熱心な姿――――――見たいです・・・！」

「ね、熱心とな・・・？」

「皆様、仰っていました。歴代皇帝の中でも、陛下が一番ご公務に熱心だと！」

「皆が？」

「だから私、楽しみにしていたのです！陛下のお側で、そのすばらしい手腕を拝見できると！」

「それなら、いつでも見せてやる！それよりもじゃ・・・！今は、林山と二人で――――――」

そう言って、自分の小指を掴む手を握ろうとする劉徹。それを察して、素早く手を離す星影。

「お戯れは終わりです！日の明るいうちから、これ以上私をからかわないでください！」

「なにを言う！朕は本――――」

「こういうことを本気でされるのは、殷の周王のごとき者がすることです！陛下のような立派な方が、するはずがありません！私をからかったんでしょう！？」

「なっ、いや・・・その・・・！」

「やっぱり！私の反応を見て、面白がっていたんですね！？おかしいと思いましたよ～昼間から体を求めるなど、悪名高い殷王と同じではすからね。あ～びっくりした・・・・！」

「う、うぅ・・うむ・・・！」

暴君の例を出され、首を縦に動かす劉徹。その姿を見届けると、相手に擦り寄りながら甘い声を出す星影。

「もぉ～本当に陛下は、お噂通り、ひどいお遊びをされますね～？あまりに真剣なので、騙されるところでしたよ！？」

「いや、だから、遊びなどでは――――――！」

「私が泣いて陛下を困らせたので、仕返しでされたのでしょう？」

「し、仕返しなど、そんな――――――」

「フフフ・・・わかっていますよ。」

返事に困る劉徹に、意味ありげな眼で星影は言った。

「私を元気付けるために、ひょうきんなことをなさったことぐらい、わかっていますから！」

「ひょうきん！？」

「陛下が、私を賊でないとわかっていただけただけで十分なのに・・・。それどころか、尊い御身を道化のごとく変え、殷王のごとき振る舞いまでされるとは・・・！」

「朕が道化・・・？」

「それほどまでに、私のようなものに気をかけてくださるなんて――――・・・陛下って、本当にお優しい！・・・いいえ、単に優し

いというだけではありません。海のように深い思いやりを持っていらっしゃいます！」

「海・・・？」

呆気にとられる皇帝に、極上の笑みを見せながら星影は告げる。

「私、日輪のごとき輝きと暖かさを持つ、陛下のことが好きです・・・！」

言ったと同時に、皇帝の首に抱きつく星影。

「林山！？」

しかしそれは、一瞬の出来事だった。驚く皇帝の声にあわせて、その体から離れる星影。大胆な星影の行動に固まる劉徹。そんな相手に星影は、今度こそ、とどめをさしにかかった。

「陛下！今、声をおかけになられた方は、ご政務（せいむ）に関することでいらしてるんですよね！？」

「え？いや、それは――」

声をかけた人間が、どういう用件で来たのか星影は知らない。

「隠さないでください！お願いでございますよ～！私に、陛下がお仕事をされているお姿を見せてください。」

「ち、朕の仕事を？」

政務に関することで来ているかなど、星影にわかるはずがない。

「追い返すようなことを、なさらないでください！せっかく、陛下の凛々（りり）しいお姿が見れるよい機会なのですよ？私にとっては・・・！」

「・・・凛々しい、とな？」

それでも、彼女はそう言いきった。

「はい！お願いでございます、陛下・・・！早く、お部屋にお招きください！！」

言い切る理由はただ一つ。

「歴代皇帝の中でも、真のご政務をされるという、陛下のお姿を見せてください！私・・・そんな陛下を見るのが、ずっと夢だったんです！！」

自分の操を守り、目的を果たすため。

「・・・。」

目を輝かせて頼む星影に、劉徹は無言で下を向く。

（・・・あれ？あからさますぎたかな？）

口から出任せ（？）を言った星影だったが、静かになる皇帝を見ながら不安を覚える。

（そう言えば陛下は、媚びへつらう人が嫌いだとは聞いていたが・・・。）

少し、褒めすぎたかもしれない。いや、媚びる態度を取りすぎたかもしれない。というか、どこまでが、媚びる姿になるのだろう?私の感覚では、かなり褒めすぎたと思うんだけど・・・。

(褒め称えることと、媚びることの違いの基準て・・・どこだろう・・・?)

自分の発言を思い返しながら、不安な気持ちで次の言葉を待つ星影だったが――――――

「よし!早く入れっ!!」

入り口に向かって、元気よく叫ぶ皇帝。その言葉で、星影の不安は消滅した。

「陛下!」

「可愛い林山の頼みじゃ。それに・・・朕が『公職』よりに『好色』をとると、勘違いされたくないからの~?」

「ご心配にはおよびません、陛下!私――――・・・わかっていますから・・・!」

(あんたが好色だってこと。)

そして、どちらともなく、笑顔を浮かべる劉徹と星影。その心のうちを、互いが知ることはなかったが、

（陛下の側では、常に嘘をまとっていなければいけないのか・・・・。）

嘘をつくのは好きじゃないが、自分の貞操と正体が露見しないためにも、道化師の真似をしなければいけないらしい。

（今日から私が、どんな嘘をついたか、書き記しておこう・・・。）

後で、つじつまがあわなくならないように。

上機嫌な劉徹の横で、今後について画策する星影。そんな彼女の前に、二つの影は足早にやって来た。

「遅くなって申し訳ありませんでした。」

（あれ・・・？）

その声を聞いて、星影は首を傾げる。聞き覚えのある声。彼女の脳裏に、その声を持つ人物の姿が浮かびあがった。

「挨拶はよい。面を上げよ！」

「はい。」

皇帝の命令に、目の前の二人が顔をあげた。

「あ！？」

その顔を見て、星影は思わず声を上げる。

「・・・琥珀!?空飛!?」

そこには、安林山（星影）の友である王琥珀と張空飛がいた。驚く星影に、劉徹は楽しそうに言った。

「黄藩から聞いたぞ、昨日の騒ぎを。」

「昨日の騒ぎ?なにかあったんですか?」

聞き返す星影に、劉徹は笑いながら言った。

「やれやれ。当事者がなにも知らんのか?昨日、お主の沙汰(さた)について決定を下(くだ)した後、黄藩ともめただろう?」

「え・・・?まさか、あのことがですか!?」

「聞いたぞ~?朕に会いに行くと言って、黄藩と引き合い（・・・・）をしたそうじゃないか!?」

「いや、引き合いと言うか・・・。」

「正確には、『黄藩に引きずられた』と言った方がいいかの~?」

ニヤニヤしながら言う劉徹。

（・・・もう陛下の耳に入ったのか。）

「黄藩さ・・殿がそう仰られたのですか?」

「黄藩だけではない。他の者が何人か言いに来た。あんまりにも常識外れのことだったからな。」

（そんなに目立(めだ)ってたの！？）

少し恥ずかしくなった星影は、頭を下げながら言った。

「申し訳ございません！！以後・・・気をつけます！」

「まあ、そう照れるな。お前も寂しかったんだろう？」

「え？」

「そこまで思われると・・・朕も嬉しいぞ？」

「ええ？」

「朕に会いたかったのだろう？」

（・・・別に、そういうわけじゃないんだけど。）

ニコニコする劉徹に、星影は乾いた笑みを浮かべる。

「まあ、惚気(のろけ)はここまでにして・・・。友と別れたくないという林山の気持ち、朕はよくわかった。だからこそ、二人がお主の近くで仕事ができるようにしておいた！」

「え？それはつまり・・・・。」

「朕が言っているのは、二人とも林山と同じ高級宦官にしたということじゃ。」

「え！？と、言うことは――――――！」

「王琥珀と張空飛も、今日から林山と同じ高級宦官として朕の側で働いてもらう。」

「本当ですか！？」

「朕が嘘をついているように見えるか？」

大きく左右に首を振る星影に、皇帝は満足そうに頷く。

「林山が寂しいと言うのならば仕方がないが、無理なお願いを叶え

てやったのだ。その分しっかり働いてもらうぞ。」
「はい！安林山、精一杯ご奉公させていただきます！」

（よかった、これで琥珀の動きが観察できる！空飛のことも、側にいた方がいじめから守ることができる！）

勢いよく頭を下げる星影。その後に、続くように琥珀と空飛も頭を下げる。

「恐れ多くも身に余る光栄、感謝いたします、皇帝陛下。」
「せ、せ、せい誠心誠意でお仕えいたします！ハイ！！」

皇帝を前にして緊張したのか、空飛の方は声がかなり上擦（うわず）っていた。

「うむ、頼むぞ。雑務の他に、林山の話し相手になってくれ。」
「心得ました。」
「も、もちろんです！ハイ！！」

二人の様子に、劉徹は目を細めながら言った。

「林山・・・お主は良い友を持ったな？」
「はい！私にとっては最高の友です！！」

即答する星影に劉徹は苦笑する。

「まったく！やけるわい。」

劉徹が声をたてて笑った時だった。

（――人の気配？）

自分達以外の、人の気配を感じとる星影。ほどなくして、入り口近くから一人の男が姿を現した。

「陛下、よろしいでしょうか？」

「おお、延年か！？入れ！！」

晴れ晴れとした顔で、手招きをする劉徹。そこには、昨日、自分を賊だと疑った男であり、皇帝の恋人である李延年の姿があった。

第三十六話　狐と狸の馬鹿試合（後編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
サブタイトルを『狐と狸の馬鹿試合』としたのですが、『馬鹿試合』は『化かしあい』の間違いではありません。意識して、『化かしあい』を『馬鹿試合』にしました。理由は、星影と皇帝・劉徹のやり取りの内容が、化かしあいであることに、変わりないからです。星影は、妹を奪い返すつもりで宮中に乗り込みました。彼女的には、戦いに行ったわけです。その意味を込めて、化かしあいの『しあい』を『試合』にしました。ですから、化かしあいの『化か』を『馬鹿』にしたのも、星影と皇帝・劉徹のやり取りが、ちょっとお馬鹿な内容だということでそうしました。だから今回は、ちょっとした言葉遊び感覚で題名を決めております（笑）
あと、小説に関する話ですが、琥珀と空飛も高級宦官に昇格しました。以上です（苦笑）今後の展開が気になる方、興味のある方、是非続けて読んでやってください・・・！！よろしくお願いします（照）

第三十七話　喧嘩の火種

「改めて紹介しよう。お主達と同じ高級宦官で、協律都尉の李延年だ。」

「李延年です。はじめまして。」

劉徹の紹介に軽く笑いかける延年。そんな相手を見ながら、不安を感じる星影。

（はじめまして・・・ね。）

面識があるのに、『はじめまして』はおかしくない？あれだけ人を睨みつけておいて、忘れてしまったと言うわけではあるまいし・・・。まぁ、琥珀や空飛がいるせいかもしれないけど――――――

（こいつもこいつで、胡散臭（うさんくさ）い感じがする・・・。）

星影がそう思うのも無理はなかった。何故なら、延年の顔は笑ってはいるが、その目はどこか、自分達を見下すものだったからだ。嫌な感じはしたが、気にしていてはきりがない。とりあえず、その目に気づかないふりをして星影も挨拶をした。

「・・・安林山です。よろしくお願いします。」

「王琥珀と申します。以後お見知りおきを。」

「張空飛でございます。ご指導の方、よろしくお願いいたします。」

「私のことは、延年とお呼びください。よろしくね、林山殿、琥珀殿、空飛殿。」

「「「はい、延年様。」」」

延年の言葉に、三つの重低音（じゅうていおん）が重なる。皇帝を前に、表面上は穏やかな挨拶が行われた。しかし、殺伐（さつばつ）とした空気が延年から流れてくるのを、星影は感じ取っていた。

（感情を表にださないとは・・・。これが上級宦官の世渡りか。）

「わからないことがあれば延年に聞いてくれ。延年、よいな？」

「もちろんです。林山殿、琥珀殿、空飛殿、なんでも私に聞いてくださいね。」

「ありがとうございます。」

「よろしくお願いいたします。」

「お願いいたします、延年様。」

和気藹々（わきあいあい）（！？）と言葉を交わす一同。

（人付き合いは、前途多難だな・・・。）

笑顔を作りながら、心の中でぼやく星影。

「ところで延年、なにか用でもあるのか？」

会話が途切れたところで、延年に声をかける劉徹。

「お主が朕のところへ来たということは、なにかあったのだろう？」

「・・・ええ。」

劉徹の言葉で、控えめに頷く延年。伏せ目がちに答える姿からは、憂（うれ）いと艶（つや）やかさがにじみ出ていた。

「実は・・・霍光様が陛下にお目にかかりたいと、いらしておりま

して。」
「!?」
「光がか?」

延年の言葉に、星影と劉徹の顔が変わる。

(霍光?霍光って確か――――――――!)

琥珀が言っていた二代目のこと?

そう思い、発言者を見れば、彼は星影に目配(めくば)せした。それと同時に、皇帝が言った言葉を彼女は思い出す。

“光には朕から、林山の身元調査の打ち切りを伝えておく。”

それで星影は合点がいった。

延年がこの場に来たことを。霍光が陛下に会いたがっている理由を。

(私のことできたのか・・・!)

もしかして、もう身元調査が終わったのか!?いや、いくらなんでも早すぎない!?昨日の今日で、もうわかるというの!?でも――

――――――

(私のことで来ていることは、間違いない!)

そう思って、皇帝と延年の会話に耳を傾ける星影。なんとか、霍光の話を盗み聞こうと彼女は必死だったが、

「詳しいことはお聞きしておりませんが、今すぐ陛下にお会いして、お話したいと仰るのですが・・・。」

（話の内容までは、延年も知らないのか！？）

聞こえてくる会話に、複雑な気分になる星影。一方の劉徹は、延年の話を聞き、顎鬚（あごひげ）をなでながら言った。

「・・・わかった。今すぐ会おう。」

「では、こちらにお通ししてもよろしいでしょうか？」

「いや、朕が行こう。いつもの部屋で、待たせているのだろう？」

「え？え、ええ・・・そうですが――――」

皇帝の返事に、言葉を濁す延年。

「なにも、陛下自ら向かわれなくてもよろしいのでは・・・？」

「そうもいかん。霍光には、はっきり言わねばならことがあるからな。」

そう言って、星影に視線を向ける劉徹。その目は、『任せろ』と、星影に語りかけていた。

そして、星影達と延年を交互に見ながら言った。

「悪いが朕は、急用ができた。延年、後は頼んだぞ。」

「陛下！？」

「林山達に、いろいろ教えてやってくれ。」

「お待ちください！陛下ご自身が向かわれなくても、霍光様をお呼びすれば――――――！」

「延年。」

ひどく優しい声で、皇帝は言った。

「朕は、とても大事な仕事を霍光に任せたのだ。朕が頼んでおいて、呼びつけるというのもよくないだろう？」

「でしたら、私もお供します。林山殿達には、しばしお待ちいた・・・」

「延年。」

今度は、少し怒った声で劉徹は言う。

「延年だからこそ、林山達のことを任せるのだぞ？お主が、自分の自覚してもらわねば、朕が困るではないか。」

「陛下・・・。」

「さぁ・・・いい子だから、朕の言うことを聞いておくれ。」

「そうではありません！私は、陛下のご意思に逆らっているわけでは――――！」

「心配してくれることぐらい、わかっておる。だから、話が終われば、いつものところに・・・のぅ？」

そう言って、延年に微笑みかける劉徹。延年も延年で、まぁ、と不満の声を上げつつも、怪しい笑みを見せる。

「わかってくれるな、延年。」

「はい・・・。」

そのまま、二人の世界を作る劉徹と延年。そんな彼らを見ながら、やっぱり二人『愛し合う仲』なのかと実感する星影。

（星蓮のためにも、極力陛下に気に入られないようにしつつ、李延年の恨みを買わないようにしないとな・・・。）

熱い視線を送り合う彼らを見ながら、そう決心する星影。そこまでは良かったのだが・・・・。

「では、名残惜(なごりお)しいですが・・・。」

「うむ・・・。」

そう言って歩き始める劉徹。ところが、数歩歩いたところで立ち止まる。そして彼は笑顔で言った。

「じゃあな、林山。」

「は・・・？」

「お主のことじゃ、安林山。」

「あ、はい！すいません、陛下。」

急に名前を呼ばれ、相手への返事が少し遅れた。それに対して、慌てて星影は頭を下げた。

「ハハハ！よいよい、本当に林山は可愛いの～」

「え、あの・・・。」

「気にするな、林山！また後でな。」

「は、はい・・・。」

頭を下げたままの星影に、劉徹は楽しそうに笑う。そして笑いながら、皇帝は部屋から出て行ってしまった。この何気ない劉徹の行動。彼のこの最後の一言がまずかったのだ。

それにいち早く気づいたのは空飛だった。その空飛の異変に気づいたのが琥珀。そんな琥珀にやっと星影が気づいたのは、皇帝の姿が完全に見えなくなってからだった。

「・・・ん？」

（あれ、琥珀が冷や汗かきながら口を半開きにしてる。めずらしいな・・・普段あんなに落ちついている奴が。）

その琥珀の目線の先を追う星影。

（あれ、空飛の奴どうしたんだ。あんなに真っ青になって。ははーん、わかったぞ。皇帝を間近かで見た緊張のあまりと、いなくなった安心感で気が抜けたのか。）

だが、その空飛の目線は皇帝が去った場所へと向けられていなかった。

（なんで斜め後ろ・・・？なにかあるのか？）

そう思って、何気なく後ろを振り返った時だった。向いたと同時に、なにかが顔めがけて飛んできた。

「うわっ！？」

とっさのことではあったが、素早くよける星影。

（なんだなんだ！？何事だ！？）

よけた物は、音を立てて床に落ちる。そこに視線を落とす星影。そこには、一枚の扇が落ちていた。

「おやおや・・・反射神経はなかなか良いみたいね。」

その言葉で、声のする方を見れば、李延年の姿があった。手を振りながらにこやかに笑う延年。

（この人笑ってるけど・・・・、）

「でも・・・あんまり可愛くはないね、林山殿って。」

（目が笑ってない。）

クスクスと、笑う延年に星影は首をかしげる。

なんだかよくわからないが、こいつは、私の反射神経を試したかったのか？しかし、なんのために・・・？高級宦官に必要なことなのか？

相手の行動が理解できない星影。とりあえず、床に落ちている扇を拾うと、それを差し出しながら言った。

「そりゃそうですよ。私は男（？）ですから。」

言ったと同時に、扇を差し出している手を叩かれた。意表をつかれたこともあり、思わず持っていた扇を手放す星影。扇は、一直線に床へと落下する。彼女の手に加えられた力は、たいして痛くはなかった。しかし、この延年の動きは、星影を激しく傷つけた。

「な、なにするんですか！？」

不覚にも、相手の攻撃（？）で扇を手放してしまった自分。手を叩かれたことに驚いて、気をゆるめてしまった自分。延年の動きを察して、よけなかった自分。武芸をしているのにもかかわらず、油断

して【守る】という動作を怠った自分。それが、彼女の中にある【武人としての誇り】を深く傷つけた。

（悔しい！よりによって、こんな軟弱な元・男に不覚を取るとは・・・！！）

自分自身の未熟さを、痛いほど痛感してしまった星影。その苛立ちは、怒声として叩いた相手にぶつけられた。

「問答無用で、いきなり叩く奴がいるかっ！！なに考えてるんですか！？」

星影の言葉に、全員の動きが止まる。ただし、それぞれが、動きを止めた理由は全員違った。

「りりりり、林山・・・・・！」

（あなた！今上のお気に入りの高級宦官になんて暴言を！！どうしよう・・・！このままでは、林山がひどい目にあってしまう・・・・！）

友の身を案じ、延年からの報復を想像して固まる空飛。

「き、君という奴は・・・・・！」

（李延年が、性質の悪い二重人格だということを忘れたのか！？私達まで、まき沿いにしないでくれ・・・・！）

友と自分の身を心配し、どうしたものかと固まる琥珀。

「『いきなり叩く奴』・・・・ねぇ・・・。」

それまでの明るい声とは打って変わって、低く鋭い声で呟く延年。

そんな延年の変化に、

「なにブツブツ言ってるんですか!?」

星影は気づいていなかった。失礼な奴だと言わんばかりに、高級宦官・李延年を睨みつける。

「言いたいことがあるなら、大きな声で言ってください!聞き取れませんよ。」

怒る星影に、延年は、ふっ、と小さく笑う。そして、赤い実のように小さい唇を動かした。

「・・・・て。」

「はぁ?」

「・・・てよ。」

消え入りそうな、か声で囁(ささや)く延年。

(なに言ってんだ、こいつ!?)

そんな相手に苛立つ星影。

「だからなんですか!?はっきり言ってくださらないと――――――

！」

「――――――拾ってよ。」

「はあ！？」

「私の扇を、拾えと言っているのがわからないの？」

顔をゆがめながら、命令口調で指示する延年。薄ら笑いを浮かべる相手に、星影はカッとなった。

こいつ！お前が叩いたから落ちたんだろう！それを渡して拾えと言うのか！？

（つーか、拾って差し出してやったのを叩き落しといて、よく言うよ！）

怒鳴りつけようと口を開いた星影だったが、それが声になることはなかった。

「・・・やめるんだ、林山。」

「ほはふ！？」

彼女の口は、琥珀によってふさがれる。琥珀は、そのまま腕を掴むと、自分の方へと星影を手繰り寄せた。

「やめるんだ、林山。」

再度、小声で咎める琥珀に、星影も小声で反論する。

「な、なんで？悪いのは向こうじゃないか・・・！？」

「・・・気持ちはわかるがここは耐えろ。」

「でも――――――」

「冷静さを失った君では、相手の思うツボ。あとは私に――――・・・」

任せろ、と目で語りかける琥珀。彼は、星影の動きを制したまま前かがみになると、扇を拾って延年に差し出した。

「失礼しました。どうぞ。」

静かな丁重な口調で琥珀は言った。

「延年様が落とされた（・・・・・）扇でございます。」

「『落とされた』・・・？」

琥珀の言葉に、眉をひそめる延年。険悪な空気が二人の間に流れる。それを察して、なにか言おうと考えた星影だったが――――――

「――――――だめです。」

「空飛？」

「お願いします。おとなしくしてください・・・・！」

後ろから、星影の服の裾をつまむ空飛。そして、しきりに首を横にふった。

「口出しするな・・・・てこと？」

星影の問いに、今度は首を縦にふる空飛。涙目で訴（うった）えてくる空飛に、星影は拍子抜（ひょうしぬ）けする。

「空飛に頼まれちゃ・・・逆らえないな。」

（・・・琥珀からも、任せろと言われたしな・・・。）

ここは琥珀に任せるか。

そう思い、わかったよ、と空飛言えば、彼は嬉しそうに頷く。そんな空飛の頭を撫でると、問題の二人へと視線を向ける星影。そこには、静かな火花を散らす延年と琥珀がいた。

第三十七話　喧嘩の火種（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
李延年の再登場です。主人公が高級宦官になったので、これからも出てくるかと思います（汗）前回、なんとか陛下から、身を守った星影でしたが、その陛下のおかげで、またもや災難（さいなん）に見舞（みま）われています（苦笑）陛下に悪気はないのですが、何気ない仕草が延年の癪に障ったということです。
一応、「自分の好きな人が、自分以外のこと仲良くするなんて許せない！」的なことを、表現してみたのですが・・・いかがでしょうか？
とりあえず、延年から星影（林山）に売られた喧嘩は、さりげなく琥珀が受け継ぎました。

それから・・・小説の（・）話とは関係ないのですが、文章の中で、誤字・脱字がございましたら、お手数ではありますが、教えてください！！お願いします・・・・！
チェックはしているのですが、見落としているところがあるみたいで・・・お恥ずかしい限りです（大汗）へたれですが、これからもお願いします・・・（平伏）

第三十八話　火種の結末

穏やかな笑みで、恭しく扇を差し出す琥珀。一方、差し出されている延年の方はかなり不機嫌だった。あからさまに嫌な顔をしながら、彼は・・・陛下のお気に入りは口を開いた。

「・・・なんの真似？」

「『拾え』と仰ったじゃありませんか？言われたままのことをしたままですが？」

「誰がお前に拾えと言ったの？」

「名指しでの指名は、仰いませんでしたよね？」

その言葉で、延年の顔にさっと赤みが差す。話術では、琥珀の方が一枚上手だった。二人のやり取りを聞いているうちに、星影はようやく延年の態度を理解した。延年は、自分に対して嫉妬しているのだ。おそらく、最後に劉徹が声をかけたことが原因らしい。延年の恋心（？）をわからないこともないが、彼の陰湿なやり方が星影は気に入らなかった。

（変な心配しなくても、私は陛下に興味はないのに・・・。）

むしろ迷惑だよ、あのおっさんは。

そんな星影の視線に気づいた延年は、馬鹿にされたとでも思ったのだろう。ますます顔を赤くする。こうなっては彼の方も、なりふり構わなくなった。星影を睨みつけながら叫ぶ。

「いいからお前が拾えよ！安林山！！」

子供のように怒る延年に、彼女の緊張は完全にとけた。

（なんだか・・・駄々っ子みたい。）

彼女の頭の中に、故郷・藍田にいる子供達の姿がよぎった。

「ちょっと、聞いてるの!?早く拾えよ!!」

だからと言って、命令は無視できない。渋々（しぶしぶ）扇を拾い上げると、再度延年に手渡す星影。今度はあっさりと、受け取ったように見えたのだが――――

「・・・フン!」

「あ。」

小さな音が床に反響する。扇は延年の手の中ではなく、床へとその身を移していた。

「なにするんですか!?」

「あーあ!手が滑ったみたい・・・・。もう一度、拾って。」

鼻を鳴らして笑う延年。

（子供は子供でも・・・こいつは、かなり意地の悪い子供だな。）

そんな星影の考えをよそに、延年は自信に満ちた表情で言った。

「ここではね、私が宦官の中で一番偉いの・・・。陛下も仰ってたでしょう?」

「いや、聞いてませんけど。」

「〜！！わからないことがあれば、私に聞けと言っていたことをもう忘れての！？そんな調子じゃぁ〜これからここで、まともにやっていけそうにないわね〜！？」

大げさにため息をつく李延年。そんな相手に、星影は内心とても困った。

陛下の愛人であり、元・男であり、美形であり、前科持ちである人物。

その性格は、桂蓮に近いものはあるがちょっと違う。

（・・・どう扱えばいいんだ・・・？）

星影が、延年を持て余していることには変わりない。今まで、この手の人間が周りにいなかったこともあり、どう対処していいのかわからなかった。だが・・・これだけは、はっきりとわかった。

「上手く陛下を誘惑しても、この私がいるんだからね！」

「はぁ？あの、誘惑って――――・・・」

「お前の好きにはさせないってことよ、賊の残党さん？ああ・・・続の疑いは晴れたんだったわね。ごめんなさいね、田舎者・・・！」

彼に、李延年に対する不快感がしっかりと生まれた。

おまけに、迷惑な勘違いまでしている。何度も言うようだが、誰が陛下を誘惑しようなんて考えるか！！

（ここで普通に渡しても、こいつは絶対に受け取らないだろう。）

ならば、自分流でこの場を治めるか。

そう決めた星影の行動は早かった。

「それは失礼仕った！はい、どーぞ！！」
「きゃあ！？ちょ、ちょっと！！」

胸倉に手を突っ込み、素早く手を抜く星影。

（受け取らないのならば、強引に懐へねじ込むのみ！）

星影の行動に、叫び声を上げながら延年は言った。

「なにするの！？いやらしい！私の胸を触るなんて・・・！」
「男だから問題ないでしょう？つーか、女性のような反応をしないでください。」
「そうじゃないでしょう！？」
「これは失礼いたしました。『元・男』でしたので、問題ございませんね。」
「なっ・・・！？」
「付け加えれば、胸がないので問題がないの間違いでした。」
「そういう問題じゃないわよっ！私が言いたいことは！！」
「じゃあ、言ってください。」
「～！！だ、だから！私に触れていいのは陛下だけだぞ！！陛下に対して無礼じゃないか！？」
「それはそれは・・・あいにく私は、田舎者でして。そういうことでしたら、あとで直接、私から陛下に謝っときますからご心配なく～！」
「な・・・！？陛下がお前なんかと口を聞くわけが――――――！」
「陛下は私に『また後でな』と、仰られました。お話しする機会は

あると思いますがぁ～？」

その言葉に、開きかけた口を閉ざす延年。黙り込んだ相手に、容赦なく【言葉】で攻撃する星影。

「延年様、勘違いされているようですので、はっきり申し上げます。私は陛下と延年様の仲を悪化させる気はありません。」

「林山！？」

「林山あなた――――――なにを言っているのですか！？」

「事実を言ってるだけだよ、琥珀、空飛。延年様、そういうことですから、幼稚ないじめをしないでください。」

「ちょっと、林山！？」

「嫉妬深いと、陛下に嫌われてしまいますよ、延年様？」

「わ、私が嫉妬深いですって・・・！？」

「そうですよ。そういうことをされると、せっかくの美しさが損なわれますよ。現に、顔が醜くなっています。」

「なっ！？」

「り、林山！？」

「わからないなら、そこの鏡をご覧になってはいかがでしょう？眉間にシワが刻まれてますよぉ～？」

「ば、馬鹿にしてるの！？」

「違いますよ。本当にシワが――――・・・あ、延年様・・・よく見ると、目元にもシワがありますね。」

「ななっ！？」

「寝不足ですか？ちゃんと手入れしないと、ひどくなりますよ～？新米イビリをするよりも、お美しいお顔のお手入れに力をお入れした方がよろしいと思いますがぁ？」

「～っ・・・・！！」

茶化しながら言う星影。そんな彼女の発言に、凍りつく琥珀と空飛。

言われた本人は、力なく項垂れていた。すぐに、反論してくると思っていた星影だったが、延年が口を開くことはなかった。それを見て、ようやく彼女は自分のしたことの重大さに気づく。

（・・・ちょっと言い過ぎたかな。）

【先輩に対する無礼】にではなく、【暴言で傷つけてしまった】ということに対してだが。

自分の口が悪いということは、家族や本物の林山に散々言われていたのでわかっていた。だから、口喧嘩をしても勝つことが多かった。そんな自分が、『言い過ぎた』と思ったのだ。

もっとも、鈍い彼女がそう感じるということは、『言い過ぎた』程度にはならないだろう。

その証拠に、心なしか、延年の肩は小刻みに震えていた。

（やばいなぁ～ちょっと、傷つけたかもしれない・・・。）

「あの・・・なにもそんなに落ち込まな――――――」

見かねた星影が声をかけるが、

「・・・・・・わね・・・・・！」

「は？」

「・・とうとう本性を現したわね！このアバズレ！！」

「誰がだよっ!?」

（それが男（!?）に対して使う言葉!?）

延年は落ち込んでなどいなかった。むしろ、思わずツッコミを入れた星影に対して、ここぞとばかりに暴言を吐いた。

「お前に決まっているでしょう、安林山!!私に向かって、ずいぶん偉そうな口がきけるわね・・・!?」

「え?あの～」

「本当に、賊かどうかは紙一重だわ!陛下がお前に声をかけたのは、単にお前が変り者だからよ!そのうち飽きられるんだから!!」

「・・・あ～そうなればいいですね。」

延年の嫌味を、真面目に答える星影。先ほど襲われたこともあり、心の底から言った言葉だった。だが、相手はそうとはとらえてくれなかった。

「たいした余裕ね!?口は達者みたいだけど、それでは陛下のお心が、お前に向くことはないわ!!」

「いや、本当にそれ、いいですから!」

「なにがいいのよ!?私を馬鹿にしてるわけ!?なんなのよ、さっきからその態度は!?」

「延年様こそなんなんですか?何度も言いますけど、私は、延年様と陛下の関係には興味は――――――」

「――――ないふりをして、私を欺(あざむ)けると思ったら大間違いよ!!横恋慕の盗人とはお前のような奴のことを言うのかしらねぇ～!?」

「・・・・。」

「黙ってないでなんとか言ったら!?それとも・・・図星だったかしら!?」

黙り込む星影に、勝ち誇ったように言う延年。しかし実際は、黙ったのではなく、呆れてものが言えなかったのである。

（どうしよう・・・完全に、私を恋敵だと思ってる・・・？）

誤解しないでください。いい迷惑なんですけど。

そう目で訴えてみるが、星影の思いが延年に伝わることはなかった。むしろ、そんな彼女の視線が癪に障ったらしい。ますます睨みつけてきた。星影も星影で、真剣に対応するのが馬鹿らしくなり、どうしたものかと返事に困る。

「なんとか言いなさいよ!!この性悪!!」

「違います。」

そんな延年の言葉を否定したのは琥珀だった。

「こ、琥珀？」

「なんなのよ、お前!?お前も私に逆らう気!?」

「滅相もございません。ただ・・・一言言わせていただきますと、あなた様のご振る舞いがあまりにひどうございます。」

「なっ!?」

「延年様、あなた様は仮にも協律都尉でしょう?そんな汚い言葉を使っては、陛下に嫌われますよ。」

「な、な・・・！」
「それに林山殿は、『アバズレ』ではありません。正確には、男に対して使う言葉ではありません。それを、宦官に、それも罵声として使われるとは・・・あまり意味を考えずに使ってらっしゃるんですか？」
「ば、馬鹿にしてるの！？」
「事実を述べたまでです。」

再度、琥珀に言い負かされたことで、延年の怒りはますます燃え上がる。そして、その矛先は星影へと向けられた。

「すいぶん・・・忠実な部下をお持ちですね、林山殿！？陛下に媚びてまで、側にはべらせたい気持ちがわかりますわ。」

（・・・・部下だと！？）

延年に振り回されていた星影だったが、その言葉に彼女の怒りが点火した。

「部下ではありません！友達です！！」
「友達？あなた本気でそんなこといってるの？宦官に友なんているわけないじゃない？」

馬鹿にしたような口調で言う延年に、星影も同じ様に言い返した。

「そうですね・・・！あなた様のような方には、決して手にいれることの出来ない友達ですよ。」
「なっ！？」

「どんな大金を積まれようとも、友というものは金では買えません。

真の友人がいないあなた様にはわかりませんよね？」

お返しとばかりに、思ったことをそのまま口にする星影。・・・と言っても、散々失礼なことを言っているのを本人は自覚していないが。

「利用できるか出来ないかで、人を選ぶような方に、『友達』を理解するのは難しいお話でしたね？申し訳――――あ・り・ま・せ・ん・！！」

皮肉を込めて言う星影。その言葉に、延年も負けじと言い返す。

「言葉を知らないのは・・・あなたの方じゃないの、林山殿？陛下を助けたからと、いい気になっているみたいだけど、ボロが出るのも時間の問題じゃないかしら？私はあなたのことなんて絶対に認めませんよ、まがい物なんて・・・！」

「なにをおっしゃいます、延年様。いくら高級宦官の中にも上から下まであると言っても私達は同じ高級宦官。陛下はそんな事は気にしないでしょう～？ご心配しなくても、あんたと陛下のご寵愛関係を、本当に壊すつもりはありません！！」

二人の間に見えない火花が散る。皇帝陛下の男寵相手にここまで張り合う奴はまずいない。それでも、星影はひるむことなく相手を睨み続けた。理由はただ一つ。

（弱腰で喧嘩なんかできるか！！）

喧嘩感覚で、延年と争っていたから。

【やられたら、倍にしてやり返す。】

師である厳飛龍の言葉を思い出す星影。師匠直伝（じきでん）の信条が、この非常識な状況を作り上げていた。側にいた琥珀も空飛も、二人の気迫にあてられ、もはやとめる力すらなかった。
しばらく睨みあった星影と延年だったが、それを先にやめたのは李延年だった。

「・・・とにかく！これ以上、陛下に色目を使わないでくださいね！！」

捨て台詞を吐くと、さっさと奥に引っ込んでしまった。

「なんなんだか・・・。」

一人で喧嘩を売り、一人で怒り、一人で会話をして去って行った李延年。私がいつ、陛下に色目なんか使ったてんだ！？使うかそんなもの！

（李延年も李延年で、陛下同様、未知の人種だ・・・！）

「嫉妬してるんだよ、林山に。」

星影の肩に手を置きながら、琥珀が言った。

「本当に君は、怖いもの知らずだね・・・。」
「なに言ってんだよ！？先に喧嘩を売ってきたのは、あっちの方じゃないか！？」
「そうだとしても、買わないでください！！」

「く、空飛!?」

涙目で、抱きついてくる空飛に面食らう星影。

「殺されたら、元も子もないんですよぉ～!?そっ、そ、それを・・・林山はぁ～・・・!!」

「わ、悪かったよ、空飛!頼むから泣かないでよ～!」

「泣いでないでずぅ～!林山のばがぁ――――――!!」

「泣いてるじゃんか!?ごめん、ごめん!私が悪かったからさ・・・?ね?ね?」

必死で空飛をあやす星影。そんな2人の姿を見ながら、琥珀はいつもの口調で言った。

「まぁ・・・宣戦布告を受けた以上は、気をつけることだね、林山?」

「だから、なんで私なんだよ!?なんで、恋敵にされなきゃいけないんだよ!?」

「延年様の長年の経験が、そう判断したんだろう。あまり気にしない方がいいよ。延年様もあれで、悪気はないとは思うし・・・。」

「それ、胸を張って言えるの?」

星影の問いに、笑顔で首を横にふる琥珀。そんな琥珀のフォローに、もちろん星影は納得できなかった。悪気がなかったなんて、気休めの言葉でもそう思えない。なんせ、相手は自分に対して、明らかに敵意をむき出しにしていたのだ。

「まあ、陛下からの寵愛で、あの李延年様に敵視されると言うことは・・・。」

「言うことは?」

「それだけ君に魅力があると言うことだよ、林山。」
「・・・。」

（もしかして、慰めてくれてるんだろうか・・・。）

そうだとしたら、あまりにも嬉しくない励ましである。

「それで・・・どうすればいいのかな？」
「なにがだよ！？」
「仕事だよ。私達はどんな仕事をすればいいのかな、林山様？」
「そんなこと私が知るか！黄藩様から、なにか聞いてないのか？」
「『黄藩殿』だろう？あの方からは、直接聞けと言われたよ。『現場の責任者』から。」
「『責任者』？」
「・・・林山知らないんですか？」
「全然。」
「林山が知らないということは・・・・・その責任者は、李延年様で、間違いないみたいだね。」
「「あっ！」」

琥珀の言葉に、空飛と星影が同時に声を上げる。口には出さなかったが、二人は同じことを考えていた。

“わからないことがあれば延年に聞いてくれ。”

先ほどの皇帝の言葉がよみがえっていた。

「そうだよ！陛下が『延年から聞け』って・・・！」
「それじゃあ、延年様が責任者だったんですか！？」
「・・・その通り、みたいだね。だが肝心の上司は、仕事について

なにも説明しないで、私達を残してどこかに行ってしまった。」

ため息交じりで言う琥珀に、あとの二人もハッとする。

「本当にそうだよ！あいつなにも言わずに出て行ったぞ！？」

「どうしましょう・・・！私達、ここのことなんてなにも知りませんよ！？」

「そうだね・・・延年様がいないとわからないよ。」

（琥珀の言う通りだ！）

考えてみれば、自分達は李延年に聞かなければなにもできないじゃないか！？なにがどこにあるのか、どんな仕事をすればいいかわからない。・・・なにをしていいのかわからない。

（・・・ということは、つまり――――――――――――――！！）

「李延年（あれ）の言いなりにならないといけないのか・・・？」

「『あれ』ではありませんよ、林山！延年様です！」

「そうなるよ。どんなことを言われても、従わなければいけないらしいね・・・延年様の意見には。」

「そんな・・・！あの方の下で、仕事をしないといけないとなると――――――・・・！！」

「・・・生き地獄だ・・・！！」

互いに顔を見合わせると、誰からともなく肩をおとす三人。

少しの間とは言え、あんなわがままと付き合わなければならないとは・・・・。つくづく私は・・・いや、私達はついていない。

広く煌(きら)びやかな部屋の中に、残された三人の男（！？）。そして早くも、皇帝の側仕えに不安を感じるの星影だった。

第三十八話　火種の結末　（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
星影が毒々しくなっていますが、笑って許してやってください（笑）
『可愛い妹のためなら、どんな手段でも使う』というが主人公星影の設定ですので（大汗）
一応、星影ＶＳ延年のガチンコシーンを書いてみました。琥珀ＶＳ延年は、その前座のようなものです（苦笑）天然で喧嘩っ早い非常識な星影と、悪知恵が働く毒舌な延年。そんな星影達のやり取りを、笑って読んでいただければ嬉しいです（照）

第三十九話　知ってる訪問者

寝苦しい夜だった。

（今夜に限ってなかなか寝付けない・・・。）

そう思いながら、何度目かの寝返りを打つ男。それは、他でもない本物の安林山だった。ここは、本物の安林山が泊まる長安の宿『月仙華』。そこに泊まる林山は、その日、寝苦しい夜を過ごしていた。とにかく、なかなか寝付けない。人は、悩み事や心配事があると眠れないと言うが、今の彼はまさにその状態だった。

「星影の奴、大丈夫かな。」

林山の悩みの種は、自分の親友にして、義理の姉となる劉星影のこと。

自分に成りすまして、宦官として宮中に潜入（せんにゅう）した星影。

目的は、略奪同然に奪われ、皇帝の妻にされた女性を奪い返すため。

その女性こそ、俺の愛しい婚約者であり、星影の大事な妹・劉星蓮だった。

彼女を取り返すために、俺と星影は、師匠をそそのかし、故郷を離れ、知り合いのいない都へとやって来たのだ。その星影が宮中に潜入して数日経つが、いまだに彼女からはなんの連絡もこない。

（やはり・・・宮中では自由に動けないか・・・。）

宮中とは、例えるならば鳥かごのような場所だ。自由に、中の鳥が出入りすることはできない。むしろ、その中の大事な鳥を守るためなら、他の鳥を犠牲にすることが普通なのだ。いくら下級宦官に化けたとはいえ、不審な動きをすれば警戒される。ただでさえ、性別を偽り、宦官の証明書を偽造しているのだ。

（・・・あいつの動き一つで、すべてが決まるからな。）

慎重に行動しなければ、命の保障さえないない場所。それが宮中である。だから、星影の性格を考えると、バレないかどうか気が気ではない。もっとも、かごの外にいる自分が思い悩んでも仕方がないことだが・・・。

（無事であることを祈るしかないか・・・。）

頭をかきながら、小さくため息をつく林山。星影のことも気がかりだったが、それ以上に彼を悩ませる問題の種が他にもあった。

「凌・・・義烈か。」

それは、数日前に出会った情報屋、『百面夜叉の義烈』こと、凌義烈のこと。郭勇武の情報を教えると言い、星蓮を後宮から連れ出す方法があると言った男。怪しい人物ではあったが、完全な悪人であるとはとても思えなかった。自分を助けてくれ、隠れ家まで招待し、酒までごちそうしてくれたのだ。悪い奴ではなさそうだが――

“いずれわかることだ。”

林山の脳裏に、凌義烈の意味ありげな笑みと言葉がよみがえる。

（本当に信用してよかったんだろうか・・・？）

そんなことを考えながら、寝返りを打った時だった。

（・・・誰かいる・・・！？）

部屋の中に、自分以外の人間の存在に気づく林山。その気配を感じ取り、そっと目を開けてみる。すると、目の前には人の顔・・・・。

「ぎゃあああああああああああああああ――――――！？」

「わあああああああああああああああああ――――――！？」

同時に叫び声をあげる。そして、寝台から転げ落ちる二つの影。頭を打ちながらも、寝ぼけた頭で必死に考える林山。

落ち着け、落ち着くんだ林山！今見た顔は見覚えがある。絶対に間違えるはずはないが、どう考えてもありえない！俺は今見た人物をいやと言うほど知っている！だから間違えるはずはないが・・・ありえないのだ！ここにいるはずがないのだ！なのに、なのに、なぜここにいる・・・・・！？

夢か？幻か？寝ぼけているだけか！？

「ちょっと、林山！大丈夫？」

声を掛けられて、思わず体をビクつかせる。

（ああ・・・間違いない。）

これは夢でも、幻でも、寝ぼけているわけでもない。まぎれもない現実。

恐る恐る振り返る。

「やっぱり・・・・星影か。」

そこには、林山の幼馴染であり、兄弟弟子であり、未来の義姉である、劉星影その人の姿があった。

「私以外に、誰があなたのところに来るわけ?まったく・・・静かにしてよね。他の泊り客に迷惑でしょう?」

（そう思うなら、心臓に悪い登場のしかたをしないでくれ。）

心の中で密かに文句を言う林山。

「でもよかった。あなたがまだ起きていて。」

「ああ・・・。誰かさんのせいで眠れないし、すっかり目が覚めたよ!」

「おはよ~」

「今は真夜中だ・・・!」

嫌みったらしく怒る林山に、星影はおかしそうに笑った。そんな相手を見ながら、林山は改めて星影に声をかけた。

「それで？なんでお前がここにいるんだ？」
「居たら悪いのか？」
「悪いことはないが、予告もなしに来られるとなぁ～」
「宮中から、どうやって予告を出せって言うんだよ？」
「いや、それは・・・」
「・・・悪かったな・・・！」

林山の問いに、不機嫌そうに言う星影。

（・・・？今日はやけに、機嫌が悪いな。）

いつもなら、自分の嫌味など笑い飛ばすか、無視して話を進めてしまう星影。それが、今日に限って言い返してきた。

（・・・慣れない宦官生活で、苛立ってるのか？）

「まぁ・・・悪いとかそういう問題じゃなくて、よくここまで来れたな？宮中は兵士がいるから、抜け出すのは大変だっ――――――・・・！？」

そこで林山の言葉は途切れた。途切れたというよりも、出なくなったと行った方が正しい。

「お前その格好――――！？」

しばしの沈黙の後に、大きく息を吸い込みながら声を出す林山。

「どうしたんだ、その服は！？」
「ああ、着がえてきたんだよ。宦官の姿で、宮廷の外に出たら目立つでしょう？」

「そうじゃなくて！」
「じゃあ、なに？どこがおかしい？」
「どう見ても、おかしいだろう！？」

開いた口を、さらに大きく開けながら言う林山。
彼が見た星影は、武官姿だったのだ。正確には、武官が鎧をつける前の服装だったのだ。

「その服はどうした！？つーか、その服と一緒になっているはずの鎧は！？」
「それなら、後宮の門の近くの木の上に隠してきた。大丈夫、見つからないように上の方にかけて来たから！」
「そうじゃなくて！お前・・・それの持ち主はどうした・・・！？」

（鎧や服の持ち主は・・・！？）

真っ青な顔で問う林山に、星影は笑顔で言った。

「今は寝てるよ。」
「つまり・・・持ち主が寝ている隙に、盗んだのか？」
「違うよ～後ろから、首の辺りに手刀を入れただけだって！」
「武力行使かよ！？」
「大丈夫。ちゃんと力の加減をしておいたから、私が戻るまでは寝てるよ。」
「立派な強盗じゃないか！？これ以上罪を犯すな！」
「それは逆だよ、林山。同じ死罪になるなら、悔いのないようにいろいろした方が得さ。」
「開き直るなっ！」
「だってそうだろう？一千両で盗んで死罪になるのと、一万両盗んで死罪に納得した方が得じゃない？」

「そういうところで、損得勘定するんじゃない！」

悪びれることなく言う星影を、林山は怒鳴りつけた。

「お前なぁ～！変装するなら、兵士じゃなくてもよかっただろう！？」

「見回りのふりして、歩き回れて便利よ。むしろ、女官とかの方が怪しいじゃん？」

「それはそうだが――――――・・・その鎧の持ち主が、目を覚ました時、厄介じゃないか！？」

不意打ちとはいえ、攻撃されて気を失ったのだ。相手は、仮にも武人である。黙っているはずがない。

心配する林山の意見を、星影はあっさり否定した。

「平気だよ。体面を大事にしてる小心者を選んだから。」

「見てわかることなのか！？」

「わかれば苦労しないよ。世間話にかっこつけて、他の人から聞いたんだ。」

「世間話って・・・。」

「これの持ち主、かなり自尊心が強くて臆病なんだって。おまけに、恥を隠す性質（たち）らしいんだよ。」

「性格分析して、攻撃したってか！？」

「そういうこと。だから、『誰かに襲われて、身包み剥（は）がされました。』なんて言うはずないよ。」

「あてになるか！丸裸にされれば、他の仲間がそれに気づくだろう！？」

「だ～か～ら！見つからないように、鎧と一緒に木の上に隠してきたから。」

「一緒にするなよ!?てか、目立つだろう!?」
「大丈夫。見つからないように、上から葉っぱをかけておいたから。それに、戻ったら脱いで返すつもりだし。」
「・・・本当に手加減したのか?」
「したよ。」

林山の問いに即答する星影。その答えを聞いて黙り込む林山。

星影の話を聞く限り、彼女が手加減したとは思えない林山。
宮中を守る兵士ならば、それだけの力と体格が必要である。兵士の性格は別問題として、手加減したとはいえ、仮にも大の男が、女性からの攻撃を受けて眠ったままでいるはずがない。木の上に運ばれたり、葉っぱをかけられた時点で意識を取り戻すはずだ。

「・・・本当に、ちゃんと力の加減はしたのか?」
「したよ。まぁ・・・ちょびっとね。」
「例えるなら?」
「え~と・・・瞬殺するところを、1発で倒したってとこかな?」
「たいして変わんねぇじゃんか!?つーか、どう違うんだよ!?」
「時間が違うだろう?」
「攻撃力は変わらないだろう!?お前それ、手加減になってないぞ!?」
「だってさ、仮にも宮中を守る兵士相手に、手加減するのはおかしいじゃない?」
「お前の考えがおかしいよ!」
「おかしくないよ。宮中の兵は、皇帝を守るために存在する精鋭じゃん。私みたいな、弱者が手加減したらやられちゃうよ?」
「弱者って・・・。」

少し、頬を染めながら言う星影。その姿に、乾いた笑みを浮かべる

林山。

（本気か謙遜か・・・聞きたいけど知りたくないな・・・。）

藍田最強の女性の言葉に、頭痛を覚える林山。

「とにかく！宮中で身を守るには、情報収集と武力と思い切りの良さが重用なの。」

そんな林山に、片目を閉じて見せる星影。それは、あきらかに誤魔化そうとする姿だった。

（やめよう・・・こいつに説教しても、無意味だ・・・！）

開き直りと無鉄砲において、劉星影は天下一品なのだ。

「・・・帰る時、気をつけろよ・・・。」

（真面目に聞くだけ、こっちが冷や冷やする。）

どこまでも、大胆不敵な親友に圧倒されっぱなしの林山。そして、これ以上の精神的な負担を感じないために話題を変えた。

「それはそうと、星蓮についてなにかわかったのか？」

「あ・・・うん、それが・・・。」

「俺のところに来たということは、それなりの収穫があったから来たんだろう？」

そうでなければ、真夜中にくるはずがない。

「実は、そのことなんだけどね・・・・。」

林山の言葉で、言いにくそうに星影は下を向く。

（やはりなにかあったな。）

直感的にそう思った林山は、立ち上がると星影の座る反対側の席に自分もつく。

机には、自分が寝る前に飲んだ熱すぎる湯が器に残っていた。それを手にとり、近くにあった杯（はい）に注ぐと彼女の目の前に置いた。熱すぎた湯は、時間がたったことで丁度飲み頃になっていた。

「とにかく、飲みながら話そうか。」

静かに頷く星影。

（これはいよいよ、重大なことだな・・・。）

星影のおとなしい態度に、自分の直感があたっていたことを確認する林山。

「で、なにがあったんだ?星蓮の居場所が見つかったのか?」

「・・・そうじゃないの。」

「それもそうか。数日やそこらで見つかるようじゃ、禁断の場所とはいえないからな。」

「林山、あの――――」

「ありがとな、星影。逃走経路の確保ついでに、俺のところに寄ってくれたんだろう?」

「いや、私は――――・・・・」
「いまさらかもしれないが、無茶だけはしないでくれよ。お前になにかあったら、悲しむのは星蓮だけじゃないからな。・・・俺だって嫌だ。」
「・・・林山・・・・！」
「だからさ、なかなか上手くいかなくても気にするなよ。計画通りに行かないのが、当たりま――――――――」

「林山！！」

悲痛な声で星影が叫ぶ。

「・・・わかっているよ、星影。」

（なにか、あったんだろう？）

優しいまなざしで語りかければ、星影は無言で首を縦に動かした。

「静かに話そう。今は夜中だ。それに・・・俺達のやっていることは、人に知られたら困る話だからな？」
「林山・・・・。」
「教えてくれ、星影。」
「でも・・・・！」
「俺は文句を言える立場じゃない。むしろ、文句を言われる立場なんだぞ？全部、お義姉さんに押し付けてる愚弟なんだからさ。」
「林山・・・・！」
「今の俺の仕事は、義姉上の話を聞くことだよ。」
「ありがとう・・・林山。ありがとう・・・・！」

茶化しながらいう林山に、星影は嬉しそうに頷く。そして、呼吸を整えるために大きく息を吸う星影。

「・・・林山、これから話すことを落ち着いて聞いてくれない・・・？」

林山が頷くと、安心したように息を吐く星影。そして、今までの後宮での出来事を話し始めるのだった。

・
・　・
・　・　・

星影が林山に、後宮での出来事を話し始めた同じ頃、藍田の劉家と安家は大騒ぎになっていた。

「なんですと!?林山殿が宦官に・・・・!!」

「なんですって!?星影殿が尼に・・・・!?」

ここでは今、劉・安両家の一族一同が集まった話し合いが行われていた。安家に嫁ぐはずだった花嫁・劉星蓮が後宮に入ってしまい、その件を協議するために集まったのだが・・・。

「そうですか・・・。林山殿は、星蓮を・・・あの子を追って宦官に・・・・。」

「ええ・・・止めたのですが、無駄でした・・・。」

お互い力なく肩を落とす劉・安両家の当主。

「あの元気な星影殿が尼なんて・・・・！！」

「はい・・・書置きにはそう書いてありました・・・。」

お互いため息をつく劉・安両家の夫人。

星蓮が連れて行かれた直後に、それぞれの家を飛び出していた星影と林山。星影は尼になると書置きを残し、林山は直接宦官になると告げて出て行ったきり、行方がわからなくなっていたのだ。双方の両親はなんとかそれになることを止めようと、藍田にあるすべての尼寺を押さえ、藍田にあるすべての宦官手術専門の医者を押さえて二人が現れるのを待っていたのだ。

しかし、待てども、待てども、二人が現れる気配が一向になかった。

もしや藍田以外の他の土地に行って、そこで尼や宦官になってしまったのか？

危機感を感じた劉・安両家の両親は、あの手この手で調べつくした。その結果、意外な事実をつかんだのだ。

「我々がいくら手を尽くそうと・・・」

「あなたが、二人を助けていたのでは、話になりませんよ。」

そう言って、部屋の隅（すみ）に視線を向ける劉家と安家の当主。

「まさか、先生が手引きなさっていたとは・・・・。」

目を閉じたまま黙って座る男に、その場にいる一同の視線が集まる。

「厳飛龍、師匠・・・？」

劉家主人の言葉で、張り詰めた空気が部屋に満ちるのだった。

第三十九話　知ってる訪問者（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
星影と林山の再会話です。サブタイトル通り、予告なしで来た訪問者・劉星影と、そんな親友の登場に驚く本物の安林山を書いてみました。少し読みにくかったらごめんなさい（汗）
感想とかを頂けると、嬉しいです（照）

最後になりましたが、誤字・脱字を発見された方、こっそりでいいので、教えてください（大汗）お願いします・・・！！

第四十話　弟子が弟子なら、師匠も師匠

星影の父・劉伯孝の言葉に、その人物が答えることはなかった。そんな相手に、再度、劉家の当主は声をかけた。

「どういうことですか・・・厳飛龍殿？」

そこにいたのは、星影と林山の武術の師匠・厳飛龍だった。星影の父・劉伯孝の二度目の問いに、彼は閉じていた目を開ける。しかし、あいかわらず口を開こうとはしない。

「厳先生！一体どういうことですの！？林山に、私達の息子に、宦官の手術をしたのですか・・・！？」

林山の母・丁鳳娘の問いにも、この武人は黙ったままだった。なにも言わない厳飛龍の代わりに、星影の母・喬桜華が答えた。

「残念ながら本当ですわ、鳳娘さん・・・。役所に行って調べてきましたので、間違いありません。」

「我々も、うっかりしていましたよ・・・。飛龍殿は武術だけでなく、医術にも長けた方だということのを――――――――忘れていました・・・！」

娘と息子の行動をとめようと、両親達は藍田にあるすべての尼寺と宦官手術専門の医者の元へ人をやった。事を公にしたくないため、秘密裏に張り込みを行った。当初は、すぐに見つかると楽観していた子供達の捜索。ところが、いつまで待っても星影と林山は見つか

らない。そして、時間だけが無駄に過ぎていった。焦りと不安に耐えた両家だったが、とうとう、星影の母である喬夫人の我慢が限界に達する。ただでさえ、娘の一人を誘拐同然で強引に奪われたうえに、残された娘まで一方的にいなくなってしまったのだ。不安定な母心は、焦りと心配の狭間で、追い詰められてしまったのである。

「お願いします、あなた！星影の行方を、お役人の方に調べていただきましょう！」

「お前の気持ちはわかっているよ、桜華。だが、そんなことをすれば、我が家だけでなく、安家にもご迷――――――」

「私がすべての責任をとります！！安家の方への非難は、私が受けますから・・・！」

「桜華、少し落ち着きなさい。」

「落ち着いております！これが精一杯なのです！！」

「桜華・・・。」

「だからどうか・・・！どうか、私が狂う前に・・・！！・・・星影を、あなた・・・！！」

「・・・わかったよ、桜華・・・。」

こうして、妻・喬夫人の訴えを、夫である劉伯孝が聞き入れ、役所に届け出たのだ。

この劉家の行動に対して、安家から非難の声は上がらなかった。何故なら、林山の母である丁夫人も、一人息子のことを思い、夜も眠れない状態だったからだ。【大商家】の家名ゆえに、騒ぎ立てるようなことをしたくなかった丁夫人。ただでさえ、息子の婚約者が二度も変わっているうえに、二度目の婚約者である劉星蓮が後宮に召しだされてしまったのだ。それだけでも、安家の面子は丸つぶれである。それに加え、『安家の息子は、婚約者を奪われたことで、宦官になろうとしている。』と、噂されれば、末代までの恥となる。この状態で、『親心』と『名家の妻』という立場の選択肢を迫られ

れば――――――・・・・・安家正妻・丁鳳娘の答えは決まっていた。人一倍、自尊心と誇りの強い彼女は、『名家の妻』としての役割を果たさなければならない。手間や金銭的な費用がかかっても、公の場所に届け出ることはしなかった。どんなに息子のことが心配でも、家を守るためなら、つらい気持ちを押し殺して動かなかったのである。

だから劉家から、『責任はこちらで持つので、役所に届けさせてほしい。』という申し出をされた時、大歓迎のうちに受けたのだ。もちろん、丁鳳娘がそんな気持ちを、口にも態度にも出さなかったのは言うまでもないが・・・。

「娘の劉星影が、行方不明になったので探してほしい。」

林山が行方不明であることを伏せ、劉家は役所に捜索(そうさく)を依頼した。安林山の捜索を頼まなかったのは、星影の側に必ず林山がいると確信していたからだ。両家の両親は、二人が同時にいなくなったことから、星影と林山が事前に計画して姿を消したのだと考えていた。つまり、星影を通して探せば、芋づる式に林山も見つかると判断したのである。

その結果、役所に届け出たその日に、二人の行方はすぐに判明した。両親達の予想通り、林山の行方も、星影を通してわかった。しかし・・・ある点を除けば、予想通りではなかった。

「星影の失踪を役所に訴えましたところ、すぐにその行方を教えてくださいましたよ。あの子は、林山殿と一緒にいると・・・！」

「その事実をお聞きした時・・・あまりのことに、生きた心地がしませんでしたわ・・・。」

役人から聞かされたとんでもない【真実】
それは、劉家夫婦の、両家の予想にかなり反したものだった。

「『劉家の星影お嬢様は、安家のご子息と一緒に、都へ行かれたみたいですよ。』と・・・！」

林山が行方知れずになっていることは、公には伏せていた。それにかかわらず、その話をしてくれた人物は、林山が安家にいないことを知っていた。驚く劉家夫婦に、普段から交流のあるその高官の役人は、【安林山が宦官手術を受けた】という話をしたのだ。

「しかも、婿ど――――・・・いや、林山殿の手術を行ったのが、厳飛龍殿・・・あなただと教えられたのですよ!?」

この話を聞いた劉家夫婦は、最初は信じられなかった。そんな夫婦に、話をしてくれた高官の役人が、あるものを見せた。それは、厳飛龍直筆の安林山の宦官手術を行ったという内容の書類だった。それを見て、ようやく現実を受け止めた星影の両親。大慌てで役所を後にし、その足で安家へと駆け込んだのだ。
知らせを待っていた安家夫婦は、この報告に狂乱状態となる。叫び狂う丁夫人を、喬夫人がなだめ、放心状態になった安家の当主を劉家の当主が介抱した。そして、なんとか動ける劉家夫婦の指揮の下、厳飛龍を劉家に呼び寄せ、今に至るのであった。

「飛龍先生、お答えください。何故、私達に知らせてくれなかった

のですか・・・!?」

「そうですぞ!親である我々に無断でなんということを・・・!」

劉家夫婦の言葉に、厳飛龍は沈黙を守り続けた。そんな彼に、次第に周囲も苛立ちはじめる。ことのほか、丁夫人の苛立ちは激しかった。厳飛龍の前まで来ると、睨みつけながら言い放った。

「黙ってないで、なんとか言ったらどうですの!?」

丁夫人が怒るのも無理はなかった。大事に育てた一人息子を、よりによって宦官にされてしまったのだ。

「星影殿はまだいいでしょう!尼寺から出れば、いいだけなのですから!でも・・・林山はそうもいきません!!」

女性は、髪を切ることで尼になる。だから尼になっても、髪を伸ばせば、普通の女性に戻ることは出来た。しかし、宦官になった男子は、普通の男子には戻れない。大事な部分を切ってしまっているからだ。肉体的な問題から、普通の男性に戻ることは出来ないのである。

「私は、息子を大商家の跡取りとして育てました!宦官にするために育てたのではありませんっ!!それを――――――血筋を絶やす宦官などに・・・・!!」

宦官になるということは、子孫を絶やすという問題もあるが、それだけではない。

宦官に限らず、後宮に入った者は、二度と後宮から外へは出られな

いのだ。それは、皇帝・皇族に関わる宮中での出来事を、外部に漏らさないための対策だった。秘密を守るために、生きて外に出すことはしないのだ。そのため、一度宮中に入った者は、原則として家族とは二度と会えない。つまり、永遠に会えなくなるということだった。

「あなたのおかげで、私達夫婦は、永遠に息子に会えなくなったのですよ!?どうしてくれるのですか!!?」

怒りを露わにする丁夫人に、厳飛龍はようやく重い口を開いた。

「・・・本人の意思です。いくら親だからといっても、あの子達の人生をとやかく言う権利はないでしょう?」

冷ややかな口調で言う厳飛龍。それは、丁夫人を怒らせるのには十分な態度だった。

「人事みたいに仰らないでください!!渡り者のあなたと、私の息子は違うのですよ!?あの子は、安家の大事な跡取りなのです!!」

「跡取りである前に、一人の人間でもあるのですよ、お母上殿。恋に生きる純朴な男です、林山は。」

「あなたに、あの子のなにがわかるというのですか!?」

「各地を渡り歩いてきたからこそ、はっきりとわかります。・・・彼が、お母上で、かなり苦労としていることもね?」

からかい口調で言う厳師匠に、周囲の人間は固まる。

「苦労ぅ・・・!?わ・た・く・し・でぇ〜!!?」

「わしから見ても、そう見えますぞ。怖いぐらいに、息子への執着心が強くないですか?」

「ちょ・・・！厳先生！？」
「な、なんてことを・・・！」
「本当でしょう？いや～藍田のご婦人は、いろいろと怖いですなぁ～」

丁夫人を刺激する態度に、全員が凍りつく。気性の激しい彼女を怒られるとどうなるか、ここにいる人間はよく知っていた。だから、厳飛龍の行為は、火に油を注いだと言っていい。

「さすが・・侠客なだけありますわねっ！！なんて無責任で、お気楽な、いい加減な男なのでしょう！！？」
「ほ、鳳娘！？お前、なんてこ――――――！」

「――――――あなたは黙っていてくださいっ！！！」

丁夫人の一言・・・一睨みで、安家の主人は黙り込む。

「厳先生のような・・・あなたのような、その日暮らしの人間と、大商家の跡取り息子では、身分が違うのですよ！！」

周囲の予想通り、激怒する丁夫人。その姿に、どうしたものかと、互いに顔を見合わせる一同。そんな中、怒られている厳飛龍だけは、自分の姿勢を崩さなかった。

「そうですな～年齢も、生まれた場所も違いますね。暮らしも、林山の方が、好待遇でしょう。いやいや、丁夫人の仰ることはもっともだぁ～」

のん気に背伸びをすると、丁夫人の言葉に頷(うなず)いてみせる厳飛龍。彼の態度に、林山の母は顔を引きつかせた。

「でしたら・・・！なぜ、林山達をとめてくださらなかったのですか・・・!?」

「だからこそ、とめなかったんですよ。わしのような流れ者と、大商家の林山とでは、ものの考え方が違うでしょう？」

「常識で考えても、宦官になりたがるなんておかしいでしょう！？」

「女が男に操(みさお)をたてるように、林山は男として、星蓮に操(みさお)をたてたんでしょう？いい話じゃありませんかぁ～？」

「悪いでしょう！？個人ではいい話かもしれませんが、名家としては不名誉な話です！！」

真っ赤な舌を見せながら言う丁夫人。そして、歯ぎしりをしながら息子の師匠に尋ねた。

「・・・それで？いくらあの子から貰ったのです！？」

「と、申されると？」

「とぼけないでください！！宦官の手術費用として、林山からいくら巻き上げたのですか！！？」

「巻き上げたなど、人聞きが悪い。むしろ、こっちが金をやったんですがね・・・。」

「なっ・・・！？二人に金子を渡したのですか！！？」

「違います。やったのは、林山だけです。」

「なにを考えているのですか！？それではあなたは、二人に余計なお金を渡したのですね！！？」

「違います。あなたのご子息だけです。」

「意味的には同じでしょう！？そんなお金があれば、藍田を出ることなど、簡単ではありませんか！！？」

「いいえ、意味的には違います。林山にしか渡していないので、星

影が使えるはずはありません。」
「誰に渡す、渡さないにこだわらないでください！！問題はそこではないのですよ！？」
「いや、そういうことは、きっちりしておかねば。」
「屁理屈（へりくつ）はもういいです！！仮に一人だけに渡したとしても、二人で使うのは目に見えています！！！」
「それは、林山次第でしょう？とにかく、こちらが得をするようなことはしておりませんよ。」

丁夫人の言葉に、困ったように微笑む厳師匠。

「大体ねぇ～師匠が、弟子から金品をむしりとるようなことはしません。これでも私は、筋の通った侠客ですよ？」
「知っていますよ！あなたが、物騒な侠客であることぐらいは！！」
「物騒とはひどいですな～？」
「ひどいのはあなたですわ！大事な息子の大事なところを切り落として、安家を根絶やしにしたのですからね！？」
「あきらめるのはまだ早い！今からでも遅くはありませんぞ・・・！励（はげ）めば、来年にも第二子の誕生を望めます。」
「問題を作っておいて、よく前向きな意見が言えますわね！！？馬鹿にしているのですか！？あなた、私達を馬鹿にしているのですか！！？」
「お慰（なぐさ）めしているだけですが？」
「とてもそう聞こえませんが！？」
「あ！それも、そうですなぁ・・・。同じ慰めるでも、ご主人の方がよろしいですよね？」
「っ！？」
「一番いいのは、寝床で夫婦仲良く過ごすことでしょうなぁ～？ハハハ！！なんちゃって！」

「――――――――馬鹿にしているのですかぁぁぁ――――――――!!!!?」

爆笑する厳飛龍を、真っ赤な顔で怒鳴りつける丁夫人。彼女は、持っていた布を引き裂くと、それを厳飛龍めがけて投げつけた。

「あなたが資金提供をしたせいで、二人は藍田から出て行ったのですよっ!?都へ宦官になるために、林山は出て行ったのですよぉ!!?」

「あーあ・・・。絹の布を引き裂くなど、なんともったいないことを・・・。」

「絹がなんですか!?息子と比べれば、たいした価値はありません!!今は、そういう問題ではありませんでしょう!!?」

「大有りですよ、丁夫人。大商家の子供の小遣いと、しがない武術師範の生活費と・・・どちらが都まで行く資金になるか、普通に考えればわかることでしょう?」

「待ってください!我が安家では、息子にそれほどの大金は渡してはおりませんが・・・!?」

厳師匠の言葉に、それまで黙っていた安家の主人が口を開いた。

「いくら大事な跡継ぎとは言っても、湯水(ゆみず)のごとく与えてはいません!決まった金額の中で、やりくりをするようにさせています。」

「ほぉ~そうなんですか?」

「そうですよ!金銭的にだらしなくなっては困りますので・・・!なぁ、鳳娘?」

「旦那様の仰る通りですわ。我が安家はそうしています!もっとも・・・劉家では、どうされているか知りませんけど・・・!?」

八つ当たりをこめて皮肉る丁夫人に、星影の母は不機嫌そうに言った。

「劉家でもそうですわ、鳳娘さん！星影にお金を渡す時は、その使い方を聞いてから渡しています。」

「妻の言う通りです。用途(ようと)に問題があれば、渡すようなことは絶対にしません。」

劉家夫婦の言葉に、失礼しました、と声をかける安家の主人。

「しかしそうなると・・・二人はどこから、都への旅費を準備したのやら・・・？」

「そんなのわかりきったことですわ、旦那様！義理人情を重んじる侠客の先生が、協力したに決まっています・・・！！」

「鳳娘。」

「では・・・丁夫人は、飛龍殿が金銭的に援助したと？」

「やめてくだされ、丁夫人。わしのような収入の少ない者が、協力できるわけないでしょう？」

「侠客は、損得なしで動くと聞きますが！！？」

「そりゃぁ、金があれば用立(ようだ)てますよ？」

「つまり、あの子達のために、金子を作って用立てたということですか！！？」

「あのですね～」

嫌みったらしく言う丁夫人に、厳飛龍はため息混じりに言った。

「あなた方お金持ちと、下級層であるわしを一緒にしないでくださらんかね。見るからに違うでしょう？」

「なにが違うんですの？同じではありませんか！？」

「違いますよ、丁夫人。身に着けている物からして、すべて違います。」
「身に着け・・・服のことですか？」
「あと、剣とかですね。庶民は、特注品とか身につけませんよ。・・・特に、漢では手に入らない、外との貿易で得た生地で、服を作ったりしませんからね～？」

後半の言葉を、強調しながら厳飛龍。その言葉で、ばつの悪そうな顔をする劉家夫婦。それは安家夫婦も同じだった。中でも、丁夫人は悔しそうに唇をかんでいた。武術の師匠は知っていたのだ。林山の服は、彼の母の強い勧めで作られた、他国の生地を使ったものであることを。嫌味をこめて言ってみれば、その意味に気づいた母親が、恨めしそうに彼を見た。

（睨んだところで、事実だろうが・・・。）

そんな丁夫人を無視すると、少し明るい口調で厳飛龍は言った。

「まぁ・・・都までは、かなりの費用がかかりますからな。親からの小遣いや、わしからの金子では足りんでしょう。そうなると、身につけている物を売ってしのいだんじゃないでしょうかね～？」
「売った！？」
「私の林山が、そのようなみっともない真似をしたというのですか！？」
「物の価値を、わかっている子らですぞ。足りないと思えば、どうやって資金を作るか考える子達です。自分達の持ち物を処分したと考えるのが普通でしょう？」
「た、確かに・・・！」
「商売人の子なので、取引の仕方は得意ですし・・・！」
「そういうことなので、厳飛龍の懐から出た金で、二人が都に行っ

たなどという、迷惑な言いがかりはつけないでいただきたい。」

鼻で笑う厳師匠に、なにも言えなくなる一同。しかし、林山の母は黙らなかった。

「何度もいいますが、今の問題は、金銭感覚ではありません!!あなたが、息子と星影殿をそそのかしたという点でしょう!!?」

「わしが星影と林山をそそのかした～?」

「そうに決まっているでしょう!?ねぇ、みなさん!!!?」

そう言って、周囲に同意を求める丁夫人。

（つーか、わしがそそのかされたんだが・・・。）

あんたの息子に。

ちなみに、その息子をそそのかしたのが、息子の婚約者の姉なんだが。

「林山が、自分で言い出すはずがありません!!」

そうでもないぞ。

『俺は・・・星蓮を愛しています。俺の妻は、星蓮だけと心に決めております。だから星連を連れ戻します――。お願いします・・・お力お貸しください・・・!』

と、寝ぼけたことをぬかしやがったぞ?

（だからこそ、星蓮奪回作戦に、わしも協力したんじゃないか・・・・。）

怒る丁夫人を尻目に、小さな息を吐く厳飛龍。そんな武術の師匠の脳裏に、一つの記憶がよみがえる。それは、星影と最後に言葉を交わした時のことだった。

・
・
・
・

「この作戦を両親に伝える？」
「はい！」
「お前は馬鹿か。」
「厳師匠には、言われたくないです。」
「どういう意味だ！？」

星影と林山が藍田を出発する前のことだった。わしと最後の打ち合わせをした時、星影が耳打ちしてきたのだ。

「林山の奴が、両親に嘘をついたことをいつまでも気にしてるんですよ。」
「お前は気にならないのか？」
「気になるようならしませんよ。いや、そうじゃなくて・・・！この作戦に、少しでも迷いがあれば、失敗する可能性があるじゃないですか？」
「それも・・・そうだが。」

弟子の言葉すべてに、納得する師匠。
気にするようでは、こんな大胆な行動を星影は起こさない。作戦が完璧でも、実行者に躊躇いがあれば、失敗に終わってしまう。

「だからこそ、私や林山の両親に、この作戦について書簡で知らせようと思うのです。」

（・・・なにを覚えてきたんだ、こいつは。）

星影の話を聞いた時、わしは頭痛を覚えた。戦においてもそうだが、証拠になるような内容を書き残せば、必ず見つかってしまう。場合によっては、それが動かぬ証拠となり、殺されたという例が多い。星影達がしようとしていることは、間違いなく犯罪だ。その犯罪内容を記した書簡を、身内に送りつけるなど言語道断。『捕まえてください』と言っているようなもんである。

【バレて困るようなことは、文字として残してはいけない。】

口が酸っぱくなるほど教えてきたのに、この弟子はもう忘れてしまったというのか!?

「師匠、忘れているわけではありません。最後まで聞いてください。」

「・・・続きがあるのか？」

師匠の様子から、その変化を感じ取った星影が、からかい口調で言った。それに対して、言ってみろという態度で臨(のぞ)む厳飛龍。

「私が行く後宮は、一度入れば、二度と出れない場所でしょう？だから入る直前に、作戦を書いた書簡を藍田へ送ればいいんですよ。」

「直前・・・にか？」

「ええ。私の父母や、林山の両親が真実を知る頃には、計画は実行されているのですよ?とめることなど出来ません。」
「確かに・・・後宮は、自由に出入りできる場所ではないからな・・・。」
「そうでしょう!?無理して連れ戻すよりも、天に祈りながら私達の帰りを待つ方が利口ですから!」
「お前・・・親に対して、罪悪感はないのか?」
「ありますよ。でも、これとそれとは別です。割りきりが大事ですから。」
「つまり・・・割り切れずに、考え込んでいる林山のために、危険な行動をとろうというのか?」

わしが最後に見た林山は、難しそうな顔で黙り込んでいた。それを思い出しながら問えば、星影は綺麗な笑みを浮かべる。

「失敗につながる芽は、事前に摘(つ)んでおきませんとね?」
「星影・・・お前、本当にふてぶてしいな・・・?」
「いえいえ。お師匠様ほどではありません・・・?」

互いに顔を見合わせ、クックッと、声を震わせて笑う師弟。それはまさに、悪童同士(あくどうどうし)のやり取りと言える姿だった。

・
・　・　・
・　・　・

そこまで思い出すと、一人で楽しげな笑みを浮かべる厳飛龍。

(あんな面白い弟子は、生涯に一度きりであろうな・・・。)

今まで、さまざまな土地で、いろんな若者に武術を教えてきた。その中でも、星影の才能は飛びぬけていた。女性でありながら、男性に後れを取らない武才。よく利く機転と、とどまることのない話術。情が深く、理性で物事を考える。厳飛龍が教えた弟子の中で、星影が一番出来のいい子だった。

（この先、星影のような弟子とは、二度と出会えないだろう・・・。）

もっとも、女の弟子は、星影一人きりだが・・・。

そんな弟子のためにも、今日は、自分が汚れ役をしなければならない。

（弟子達のご両親も、必死で演じているのだからな・・・。）

今日、この場に自分を呼び出したのも、本当に林山が宦官に、星影が尼になったと、親族達に思わせるため作戦だと厳飛龍は考えていた。すべては、星影が知らせた真実を隠すための猿芝居。武術の師匠はそう思っていた。だからこそ、丁夫人などから発せられる罵声を、【愚痴】として受け止めていたのである。【息子が宦官になったと、一時的にでも思わせた罪の償い】として・・・。

（さすが、わしの弟子のご両親だ。白熱した演技をするじゃないか・・・！）

これなら、一族の者達も信じるだろう。これだけ見せれば、二人が本当に宦官と尼になったと思わせるのに十分だ。

（わしも、負けずに悪い師匠を演じなければな！！）

しかし、彼は知らなかった。星影が、入れ替わり奪回作戦について記した書簡を、親達に送っていないことを。親達が、二人の入れ替わりを知らないことを。双方とも、真実を知らずにいたのだ。

（さっさと一族への偽装を終わらせて、内密に今後のことをご両親と話し合わねばな！）

星影のうっかりを知らない厳飛龍。そして、一人で盛り上がり、一人で無意味な気合を入れる侠客兼武術の師匠。そんな彼の態度が、この後、さらなる修羅場を生むのだった。

第四十話　弟子が弟子なら、師匠も師匠（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
星影＆林山の師匠と星影＆林山の両親のやり取りを書いてみました（どちらかと言うと、厳師匠と林山の母になりますが；）厳飛龍が、星影の師匠ということで、少しふてぶてしい人になっております。なにも知らないお師匠様の今後を、お楽しみいただけると嬉しいです（苦笑）
ちょっとした小話なのですが、この時代の医学とは、今と同じ医学という感覚ではなかったそうです。病気になったら、まじないや祈祷で治すのが基本的な考えでしたので、医学は導師や占い師と同じカテゴリーにあったそうですよ（汗）今では考えられませんが、専門職としては下の下的（げてき）なものだったらしいです・・・。当時は、学んでいても、あまり評価されにくかったみたいですよ（大汗）現代的な考えで見ると、ちょっと怖いですね（苦笑）

第四十一話　誤解してても、会話は進む

星影が、自分達の悪巧み（妹・星蓮奪回作戦）を両親達に知らせると聞いた時、わしはその提案に反対だった。表面上はその行為を黙認したが、内心は許したことを後悔していた。悔やむのは、己の命が惜しいからではない。親孝行にかっこつけて、親不孝なことをしようとしている星影をとめられなかったからだ。いくら星影が、親を安心させるために知らせると言っても、その秘密が親だけに伝わるとは限らない。どんなに気をつけていても、両親以外の人間にバレる危険があるのだ。中でも、親族からの密告によって発覚する場合が多い。

星影のように、『バレれば、三族皆殺し』になるような犯罪では、親類によって秘密が漏れ可能性があるのだ。理由は、とばっちりを受けないため。犯罪を密告すれば、犯罪者の身内であっても、自首したことになるので罪を軽減・免じられる。だから、身内に不届き者がいるという名目で役所に訴えられることが多いのだ。仮に、親達のみに上手く伝わったとしても、その秘密を守り続けられるかが問題だった。自分の子供達がやろうとしている犯罪行為を知った時・・・親達が違った意味で心痛を覚えるのは間違いない。

「林山が、自分で言い出すはずがありません！！厳先生にそそのかされたのです！！」

現に今、丁夫人はその心痛を怒りに変えて吼えている。星影がどのような書面を送ったか、わしは見ていないので知らない。しかし、先ほどの伯孝殿達の態度を見ていれば、大体のことは予想がついた。

（星影のことだ。【親戚の前で、厳師匠を悪役に仕立て、適当にけなすようなことを言ってください。】とか【身内の前で、本当に私

や林山が尼や宦官になったと思わせるようなやり取りをしてくださ
い。】とか【厳師匠の行為について、両家が一緒になって軽く口論
してください。】的なことでも書いたのだろう・・・。）

弟子の性格を考えれば、あまり具体的な台本は書いていないはずだ。
第一、細かく書く余裕も考える時間もなかったはずだ。そうなれば、
親達が話の筋書きを決めたと考えるのが普通である。もっとも、落
ち着いた演技を彼らが出来るとは期待していない。その証拠に、目
の前で繰り広げられる口論が雑でまとまりがなかった。

（まぁ・・・入れ替わって、後宮から妹を強奪する作戦を始めてい
ると聞けば、まともな演技も出来ないだろう。）

混乱するのも無理はない・・・。

そんなことを考えながら、笑いをこらえている時だった。大げさな
咳払(せきばら)いが、飛龍の耳に届く。見れば、男の弟子の母が、怖い顔で自
分を見ていた。

（いかん、いかん。真面目にやらねば、親族達に嘘だと疑われるな・
・・・！）

林山の母の仕草を注意されたと誤解する飛龍。そして、仕切りなお
しの意味を込めて明るい声で彼は言った。

「え～みなさんが誤解されているようなので申しますが、わしは弟
子達をそそのかしたつもりはありませんぞ？」
「金子(きんす)を渡しておいて、よくそんなことが言えますね！？」
「鳳娘！少し落ち着きなさい！」
「だって本当でしょう！？こんなことに・・・こんなことになるな

ら、林山を、こんな男に弟子入りさせませんでしたよ!!」
「鳳娘さん・・・。」
「桜華さんも、そう思うでしょう!?厳先生が、林山をそそのかしたのだと思うでしょう!?」
「あの・・・林山殿だけですか・・・?」
「も、もちろん星影殿もですよ!彼女も、厳先生がそそのかしたに決まっています!!林山と星影殿は、この男にそそのかされたんです!!」

喬夫人の指摘で、愛想笑いをしながら内容を訂正する丁夫人。そして、気遣いを込めながら星影の母に力説し始めた。

「とにかく、子供達は厳先生に、そそのかされたに決まっていますよ!!そうでなければ、お宅のお嬢さん、星影殿が尼になりたいというはずがありません!!」
「確かに星影が、尼になろうというのは無理があると思いますが・・・。」
「そうでしょう!?そうでなければ、あの星影殿が自分から尼になるなどありえませんわ!!」
「『あの』・・・ですか?」
「星影殿の性格を考えれば、星蓮殿を奪い返すぐらいの気迫があるはずです!!嘆き悲しむ性質ではありませんわっ!!」
「・・・でも、星蓮がいなくなったことで、人の世に嫌気が差したとも考えられますわ。あの子達は、仲のいい姉妹でしたし・・・。」
「でしたら、なおさらありえませんわ!!星影殿の星蓮殿に対する姉妹愛は強いもの・・・!間違っても、泣き寝入りなどするはずがありません!!」
「ま、間違ってもですか・・・!?」
「そうですわ!!きっと、厳先生の口車に乗せられてしまったのですよ!!この男の『魔の囁き』があったからこそ、星影殿は尼にな

ろうという気になったんですわ!!」
「・・・。」
「魔の囁きって・・・。」
（わしはモノノケか・・・？）
自分を人間扱いしない弟子の母親に、少なからず気分を害す厳飛龍。しかし、嫌な気分になったのは彼だけではなかった。断言する丁夫人に、喬夫人は顔を引きつかせていた。
「鳳娘さんは・・・星影が、自主的に尼になろうとするのはおかしいと・・・？」
「もちろんです!あんなに元気な星影殿が、規則正しく、堅苦しい静かな生活を望むなんて、おかしいじゃありませんか!?そそのかされたと考えるのが当然ですよ!?」
「おかしいですか・・・星影が、静かな生活を過ごすことは・・・？」
「おかしいですよ!!あの星影殿が、読経づくしの生活を好むはずがありません!!この男がそそのかしたのですよ!!」
「ずい分はっきりと、断言されるのですね・・・。」
「当然ですわ!きっとこの男は、なにか企(たくら)んでいるに決まってますわ!!」
「企みですか・・・？」
「そうでなければ、林山と星影殿が、宦官や尼などになるはずがありません!!無理がありすぎます!!」
丁夫人の言葉に、その場の全員があきれ返る。彼女が取り乱しているのはよくわかったが、その言い方にはトゲあった。
（あんたの言い方だと、星影は尼に向いてないと言ってるようなも

んじゃないか・・・。）

実際の星影は、神や仏を熱烈に信じている方ではない。なんせ、生神と言われる皇帝から、妹を奪い返そうとしているくらいだ。

（丁夫人の言い分は、間違っちゃいないと言えば、間違っちゃいないが・・・。）

そんなことを考えながら、何気なく星影の母に視線を向ける飛龍。するとそこには、眉間にシワを刻んだ喬夫人の姿があった。明らかに彼女は怒っていた。

（怒るのも無理ないな・・・。）

芝居とは言え、娘のじゃじゃ馬ぶりを、はっきりと言われたのだ。親が言うならともかく、他人に自分の子をけなされれば不機嫌にもなる。それを無遠慮にズバズバ言われれば、親でなくても嫌な気持ちになるだろう。

（しかも丁夫人の場合は、本音のように言い切るからな・・・。）

丁夫人に視線を向ければ、彼女は髪を振り乱しながらこちらを指差していた。彼女は、飛龍を睨(にら)みつけながら言った。

「この男のおかげで、林山は宦官にされたんです！！あなたが、無責任な人間だとわかっていたら、林山を厳飛龍という人間に弟子入りさせませんでしたわ！！」

「鳳娘、やめないか・・・！」

「林山が、林山が、どうしても厳師匠に弟子入りしたいと頼むので、渋々許しましたが・・・！今は、あなたのような人間に弟子入りさ

せたことを後悔していますわ！！」
「もう終わったことじゃないか・・・やめなさい。」
「だって悔しいんですもの！！林山が宦官に！こんなことに巻き込まれて・・・！こんな大事になるとわかっていたら・・・！！」
「鳳娘・・・。」
「全部あなたのせいよ！！厳飛龍っ！！」

涙を浮かべながら絶叫する丁夫人と、そんな妻をなだめる安家当主。林山の母の言葉に、飛龍は複雑な気持ちになった。

丁夫人の言葉を聞く限り、彼女が自分に八つ当たりをしている気がしたからだ。
普段から丁夫人が、わしをよく思っていないことは知っていた。だから、入れ替わり作戦に手を貸したわしに、少なからず憎悪を持っているはずだ。林山の名前で、宦官証明書を作り、星影にそれを持たせたのだ。文書偽造という犯罪に、息子が一枚かんでいると知るだけで、この母親は怒るだろう。それが、身分まで偽っているとなると・・・かなりご立腹（りっぷく）しているはず。つまり、今回の作戦で感じた不快を、芝居にかっこつけて、わしにぶつけているということだ・・・。

そうでなければ、これほど丁夫人が暴言を吐くはずがない。

・・・・・・・・・・・・・・と、思う。

（これは・・・しばらく、静観しておいた方が賢（かしこ）いな。）

程（ほど）なくして、妻の変化に気づいた劉家当主が、落ち着きましょう、

と言いながら、妻と人妻の間に割って入った。それを見て、騒いでいる妻の夫も、鳳娘、と両肩に手を置いてなだめ始めた。男達の気遣いで、ようやく林山の母も静かになる。それと同時に、喬夫人の異変に気づいたのだが・・・

「あ・・・あら?どうなさったの、喬夫人!?顔色が悪いですが――・・・!?」

(あんたのせいだ、あんたの。)

つーか、そういう打ち合わせをしてたんだろう?

「まさか・・・怒ってらっしゃるの!?」

(そうだよ。あんたが原因だ、丁夫人。)

本音丸出しの台詞で言うから、怒っちまったんだよ・・・。

「あ、あの、ごめんなさい・・・!私・・・あなたの気持ちも考えないで、いやだわ、本当に・・・!!ごめんなさいね、嫌な思いをさせてしまって・・・!」

「・・・いいえ。お気になさらないで下さい。気にしていませんから・・・。」

「で、でも・・・!」

「・・・鳳娘さんのお気持ちに、余裕がないのだから仕方ありませんよ・・・。」

「ごめんなさいね、桜華さん・・・。私、無神経すぎましたわ・・・!一人で、勝手なことを言い過ぎました・・・。」

オドオドする丁夫人の態度で、部屋の中はますます変な空気が流れ

た。そんな姿を見ながら、今後の展開を予想する厳飛龍。

（まぁ・・・【丁夫人が、我を忘れて取り乱し、喬夫人に失言をする。その後、丁夫人は喬夫人に己の失態を詫び、改めてわしへの非難を始める。】・・・と、いうのが、妥当な筋書きだろうな。）

そう思い、無言で丁夫人の言葉を飛龍は待った。しかし、丁夫人の口から発せられた言葉は、彼の予想から大きく外れたものだった。

「私ばかり、愚痴ってしまったのがいけませんでした!!不満は、公平に解消しなければいけませんのに・・・!!」

「・・・愚痴・・？」

（公平に解消!?）

丁夫人の言葉に、首をかしげる喬夫人。それは、話を聞いていた武術の師匠も同じだった。意味のわからない飛龍だったが、次に発せられた丁夫人の言葉ですべてを理解した。

「私ばかり文句を言っては、あなたがすっきり出来ません!!桜華さん、あなたの怒りの原因である厳先生に不満をぶつけてください!!」

「なんでだよっ!?」

（どう考えても、あんたが原因だろうがっ！？）

喬夫人の不機嫌を、厳飛龍が原因だと決め付ける丁夫人。彼女の言葉に、思わずツッコミを入れる武術の師匠。そんな息子の師匠の言葉に、林山の母は、これ見よがしに言い放った。

「当然でしょう！？あなたは、大商家の正統な血を絶やした犯罪者！それも、藍田きっての名士の家柄の劉家と安家を絶やしたのですよ！？いくら、桜華さんが温厚でも、怒る時は怒りますからね！！」

「絶やすって・・・。星影は髪をのばせば、それで解決でしょう？」

「そんなに簡単に尼をやめられるようでは、仏の教えも、たかが知れたものです！！あなたのそういう考えが、私は許せないのです・・・！！」

「丁夫人・・・少しはご自分の発言をよ～く、考えた方がいいですよ。」

「まぁ、私を脅迫するつもり！？言っておきますが、あなたの脅迫に屈するほど、私は弱くはありません！！」

「いえ、あなたが強すぎるのは知ってますから・・・・。」

「なんと情けない言い草！！やはり、人の上に立つ素質は、あなたにはないようですね・・・！？」

「・・・。」

（絶対台本とか無視して話してるな・・・丁夫人は。）

相手の態度に、怒り通り越して、疲れを感じる武術の師匠。

それは、星影の母である喬夫人も同じだった。眉間からシワは消えたが、代わりに片目のまぶたがヒクヒクと痙攣していた。

（ここまで鈍いと、わざとやってると思われても仕方ないよな・・・

。）

返事に困り、黙り込む厳飛龍。そんな相手の態度に、機嫌をよくした丁夫人が、声高らかに言った。

「遠慮しないでこの男に仰って下さい、桜華さん！！厳飛龍のおかげで、私は怒りを感じていると！！」

（つーか、あんたが遠慮してくれよ、丁夫人・・・・。）

てか、そういう結末を設定していたのか・・・？

見当違いな発言をする丁鳳娘に、厳飛龍は頭痛を覚えた。そして、話の中心人物である星影の母を見る。視界に映った喬夫人は目を伏せており、まぶたの痙攣はやんでいた。見る限り、彼女は落ち着きを取り戻していた。星影の母の姿に違和感を覚えつつ、飛龍は無言で喬夫人の様子を窺った。

「桜華さん、気にせずに言っていいのですよ！？あなたも、この先生のおかげで迷惑をしているのでしょう！？」

「私は――――――・・・。」

「迷惑しているはずでしょう！？」

意見を押し付ける丁夫人に、喬夫人はゆっくりと顔を上げる。全員が見守る中、星影の母は、静かな口調で全員に聞こえるように言った。

「鳳娘さんの・・・丁夫人のお気持ちは、私もわかります。同じ子を持つ母として・・・残酷ですもの。」

困ったようにうつむきながら、丁夫人の意見に同意する喬夫人。そんな相手に、林山の母は嬉しそうに言った。

「わかってくださいますのね、桜華さん!?」

「ええ・・・。」

「そうでしょうとも!そうと決まれば、こんな男は、藍田から追い出してしまいましょう!!第二、第三の犠牲者が出るま――――――!」

「――――――――残酷ではありますが、悪と決め付けるつもりはございません・・・!」

嬉々と話す丁夫人に、喬夫人は大きめの声で釘を刺した。その言葉に、全員が彼女へと視線を送る。

「お、桜華!?」

「あ・・・悪ではないと仰る(おっしゃ)のですか!?」

「はい。飛龍先生は・・・星影によくしてくださいました。『あの時』も、星影達を助けてくださいましたし・・・。」

「桜華さん!?」

「私にとっても、娘・星影にとっても、飛龍先生は恩人なんです・・・。」

「桜華さん・・・!」

「星影に武術を教えてくださったのは、飛龍先生です。先生がいたからこそ、星蓮も林山殿と婚約まで出来たのです・・・。」

「それは――――――・・・。」

「鳳娘さんからすれば、迷惑なことだったでしょうが・・・私達にとっては救世主でしたわ。」

遠目で語る喬夫人。そんな彼女の姿に、全員なにも言えなくなった。

「私は、二人の娘に対して、平等に教育してきたつもりです。どこへ行っても恥ずかしくないように、立派な女性になるように育ててきました。」

「桜華さん。」

「娘二人も、そんな親の期待にこたえるように、賢く成長してくれましたわ・・・。おかげで、あの子達への縁談は引く手あまた。二人の将来は安心だと、私は確信しておりました。」

「喬夫人・・・？」

「三年前のあの時までは・・・・！」

喬夫人の言葉で、部屋の中に張り詰めた空気が満ちた。彼女の言葉の意味を、その場にいる全員が理解できた。

「三年前・・・星影が十四、星蓮が十三の時でした。藍田に、『極悪』としか言いようのない山賊達がやってきたのは・・・！」

「桜華・・・。」

「あの人達の無法ぶりを、誰もとめることができませんでした。無銭飲食は当たり前。盗み、放火、恐喝、殺人・・・・欲しいものを手にいれるためなら、平気で人を傷つける。逆らう人間は、役人であろうと容赦はしない。おかげで、誰もあの獣達を大人しくさせることが出来ませんでしたわ・・・。」

「・・・桜華、もうその話は――――」

「・・・言わせてください、あなた。せっかくの機会ではありませんか・・・？それとも・・・鳳娘さんはよくて、私は言ってはいけないのですか・・・！？」

「なにを言うんだ？そういう意味では――――」
「でしたら、言わせてください。私・・・今でも思い出しますの。あの獣達が、私達の娘を『よこせ』と言ってきたことを・・・！」
そう言うと、髪に挿していたかんざしを抜く喬夫人。
「当時から、星影と星蓮を褒めてくださる声がありました・・・。『藍田の蝶花』と、賞賛（しょうさん）されておりましたわ。」
「・・・今でもそういわれているでしょう？いつから二人が、『藍田の蝶花』と呼ばれていたかわしは知りません。しかし、三年前からそう呼ばれていたのは知っていますぞ？」
喬夫人に答えるように、言葉を返す厳飛龍。侠客の返事に、星影の母はかんざしの挿さっていた部分を手で直しながら言った。
「そうでしたわね・・・飛龍先生。でも、私も知らないんですよ。いつからあの子達が、『藍田の蝶花』と呼ばれるようになっていたかを・・・。いつの間にか、そう噂されるようになっていたんです・・・。」
「その噂を、鬼畜男・・・獣共を束ねている山賊の頭が、どこからか聞きつけてきたというわけですか。そして、あなた方に【『藍田の蝶花』を自分の妻としてよこせ】と、要求をしてきたんですね？」
「・・・星影は、本当になんでも、飛龍先生にお話しているのですね・・・。」
武術の師範の言葉に、星影の母は苦笑する。それにあわせるように、飛龍も笑みを見せながら言った。
「なんでもというわけではありませんぞ。話の流れで、聞いたまでのことです。悪人から、『姉妹そろって嫁に渡せ』という要求を、

いろんな意味で呑むことが出来なかったんでしょう?」
「ええ・・・。あの頃、星影には婚約者がいましたから・・・。」
「その話も知っていますぞ。関様という身分の高い若様と、婚約されていたそうですな?しかも、相手からの強い要望で、嫁ぐ約束をされたとか・・・?」
「・・・はい。家柄から言っても、もったいないくらいの良縁でございましたわ・・・。」
「そんなことはないでしょう。『藍田の蝶花』と呼ばれる姉君ですぞ?だから相手も、星影を妻にと望んだのですよ。」
「それは、そうですが・・・。」
「星影には、高貴な身分の婚約者がいて、星蓮にも、豪族や名士の息子から縁談が申し込まれていた・・・。だから、丁重にお断りしたんでしたな?」
「そう・・・ですわ。お断りしたのですが――――」
「・・・鬼畜男は、その答えに納得でいなかった。断ったその日から、劉家に対して数々の嫌がらせを始めたそうですね・・・?」
「・・・よくご存知ですね、飛龍先生。」

娘の師匠の言葉に、少しだけ笑みを見せる母親。しかしその笑みも、程なくして消えるのだった。

第四十一話　誤解してても、会話は進む（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
厳師匠に対する、星影の母・喬夫人と、林山の母丁夫人の気持ちを書いてみました（笑）
よろしかったら、この話を読んだ感想をいただけると嬉しいです（汗）

もし、誤字・脱字がありましたら、お手数ではありますが、お知らせください・・・！！
よろしくお願いします・・・（平伏）

第四十二話　星影の過去

抜いたかんざしを髪に挿しながら、喬夫人は語りかけるように言った。

「鬼畜男に、『娘を渡さない限り、お前達の平穏は来ない』と脅され続けましたわ。それは、言葉だけでは終わりませんでした・・・。仕事の邪魔をされ、取引の荷を盗まれ、我が家の使用人達に乱暴をふるいましたの。」

「おかげで、使用人や取引先が逃げたそうですな?」

「・・・ええ。相手が山賊とう職業の方でしたので、一般の方々は恐れおののき、私達から逃げていきました。」

「手がつけられずに、ずぐにお手上げ状態になったんでしたかね?」

「そうでもないのですよ?最初の頃は、武芸者の方を護衛として雇ったり、役所に訴えて、鬼畜男達に対応しましたわ・・・。」

「しかし、武芸者も役人も役には立たなかった。武芸者はことごとく倒され、なかには殺された者もいたそうですな?それは、役人に対しても同じ・・・。もっとも、役人の場合は、殺される前に、劉家から手を引いたそうですが・・・。」

「護衛として雇った方には、本当に申し訳ないことをしました・・・。私達のせいで、命まで奪われてしまうなんて・・・!お役人の方に、死者が出なかったのは、唯一の救いでしたわ。」

「出なかったのではなく、出さないように鬼畜男が指示したんでしょう?無頼者の武芸者を血祭り上げれば、それとなく、役人でもかなわないと印象付けられますからな。」

「・・・飛龍先生は、そう思われるのですか。」

「わしはそう考えますよ。見せしめで殺せるものを、殺さずに生かしておいたんですよ、山賊共は。それは、奴らのその後の動きを見ればわかると思いますぞ?」

「そうかもしれませんね・・・。」
「奴らの汚いところは、公的な機関の助けがないと、見せ付けた上で、抵抗した劉家に対して報復活動を行ったことです。劉家とは無関係の人間に危害を加えるという・・・薄汚い(うすぎたな)手段を使ってね・・・・！」
飛龍の言葉に、寂しそうに喬夫人は呟いた。
「・・・正直に申し上げますと、娘を手に入れるために、無関係な藍田の方々に危害を加えるとは思っていませんでした。・・・まさか・・・お役人にまで、暴行を加えるとは思いもしませんでしたから・・・・。」
「お役人だけではないでしょう?星影の婚約者であった関の若様にも、八つ当たりをしたじゃないですか。・・・家を焼いたそうですな?」
「・・・別宅の方を、放火したそうです。証拠はなにも見つかりませんでしたが、関家からの使者の方から、そういうご指摘を受けましたから・・・。」
「その結果、星影は婚約を解消されてしまったんでしたね・・・・。」
低い声で言う飛龍に、喬夫人も同じような声音(こわね)で答えた。
「本当に関家には、ご迷惑をかけてしまいました。元々・・・身分的な違いがありましたし・・・今では、縁がなかったのだと思っております。」
「そうでしょうかね?単に、面倒に巻き込まれたくなかったんじゃないですか?星影の婚約者の家柄は、家柄や名誉を大事にされるお家だったんでしょう?」
「それは・・・・。」

「情けない話だ・・・！婚約者一人守れずに、見捨ててしまうなど、情けない男だ！そんな弱虫とは、縁がなかったと考える方が正しいでしょう。」

「飛龍先生・・・。」

「しかし、もっと情けないのは、あなた方被害者の見方をする人間が、藍田にいなかったということだ！」

大きめの声で叫ぶと、部屋の中を見渡しながら飛龍は言った。

「劉家に非がないにもかかわらず、気づけば藍田の人間があなた方の敵になっていた・・・！人々はこぞって、『劉家の娘が、山賊の嫁にならないのが悪い。』と、非難するようになったんでしたな・・・！？」

「・・・仕方ありませんわ。劉家で雇った武芸者でも、歯が立たなかった相手です・・・。お役人の方でさえ、あの獣共を捕らえようとして大怪我を負ったのですよ？私達のせいで、みなさんにご迷惑をおかけしたのですから・・・。」

「だからと言って、鬼畜男共に尻尾（しっぽ）をふるなど、こんな馬鹿な話はない！可愛い娘のために、どんな嫌がらせに耐え、星影達を守り続けるあなた方を悪者扱いするなど・・・馬鹿もいいところだ！」

「ですが・・・」

「相手が諦めることを信じて、我慢している人間に対して、これ以上の嫌がらせはないでしょう？とばっちりを食らうからと言って、被害者である劉家の人々を悪く言うのはおかしい！」

「飛龍先生・・・！」

「いくら勝てないからと言って、庶民を守るはずの役人まで、一緒になって山賊の味方とは・・・！誰が賊か、まったくわかりませんなぁ～！？ここにも、いらっしゃる何人かは、特に身に覚えがあるんじゃないですかね！？」

皮肉る飛龍の声が部屋に響く。彼の言葉で、部屋はさらに気まずい雰囲気になる。

「ハッハッ・・・とんだ傑作ですな？役人でもかなわないとわかると、藍田の人間は、獣達に味方するようになったんですからねぇ・・・！」

「おやめください、飛龍先生！事情はどうあれ、誰彼かまわず危害を加える相手に、立ち向かう人などいませんわ・・・。危険を顧みてまで、私達を助けてくれる方なんて――――――いえ・・・いるにはいましたが――――――・・・。」

「いたるにはいたが・・・到底、あの賊共に勝てるほどではなかった、でしょう？・・・当時の林山の力でも、あの連中は、少々荷が重すぎたと思いますぞ？」

飛龍の言葉に、かすかに丁夫人が反応する。そんな林山の母を彼は見なかった。見なくても、どういう顔をしているかはわかった。

「・・・今思えば・・・林山が、星蓮殿を好きだったのは、あの頃からだったんでしょうね・・・。」

「いつから惚れておったのか知りませんが、好きだったのは確かでしょう？結局は負けて、ボロキレ状態で放り出されたんですからね～」

唇をかみ締めながら言う丁夫人。そのの言葉を、クックッと、声を立てて笑いながら聞く厳飛龍。息子の師匠の態度に、丁夫人は殺気立ったが、彼は知らん顔をする。そして、気にすることなく話し続けたのだ。

「びっくりしましたよ～道の真ん中で、若者が傷だらけで倒れていて、その両脇に美少女が二人もいたんですからな！あの時は、若者

の傷の手当てよりも、美少女二人をなだめるのに苦労しました。」
「ええ・・・。飛龍先生が、星影達を助けてくださったおかげで、娘二人は、鬼畜男の元へと行かずにすみましたわ・・・。」
「いやいや！困っている娘を見捨てるわけにもいかんでしょう？まぁ・・・最初は、かなり驚きましたよ。『獣を倒したいので、武術を教えて下さい。』と、頼まれた時は。いのししでも仕留めたいのかと思いましたぞ。」
「私も驚きましたわ・・・。飛龍先生が、本当に武術を教えてくださった時は。」
「とんでもない！衣食住を保障され、もてなしを受ければ、無碍にも出来んでしょう？もっとも、短期間で武術を習得（しゅうとく）した星影に、わしが驚かされましたがね？」
「飛龍先生の教えを受け、山賊とあの子は戦い、みごとに勝ったのですから。」
「あれはびっくりしましたな～役人ですらてこずる獣達を、十四の娘が叩きのめして、捕まえてしまったんですからね。」
「はい・・・。おかげで、藍田の悪は一掃（いっそう）され、薄汚い者達に、娘を奪われることなく、すみました。」
「・・・その代わり星影は、山賊と戦って勝ったこと女傑として有名になったんでしたな？」
優しい声で飛龍が言えば、喬夫人は声を震わせながら言った。
「・・・星影には・・・かわいそうなことをしてしまいました・・・！あの子の手を汚（よご）してしまったんですから・・・！」
「遅かれ早かれ、汚れ物になる運命だったんですぞ？貞操を守り、悪漢（あっかん）達を追い払ったのですから、星影のやったことは立派ですよ。」
「ですが・・・親として、子を守ってやることができませんでした！おかげで星影は、藍田でも一人、浮いた存在になってしまってしまいました・・・！」

「英雄とは、人から理解されにくいものです。星影は、そういう星の下に生まれた子でしょう。」
「英雄って、飛龍先生・・・あの子は女の子ですよ!?男ではなく、女の子です!」
「いいじゃないですか、女の英雄というのも。」
「いいことばかりじゃありません!山賊を倒した怪力女として、あの子は、縁遠くなってしまったんですよ!?」
「まぁまぁ。先は長いんですから。長期戦で行きましょう。きっと、星影にもいい相手が見つかりますよ。」
「長期戦って・・・!あの子はもう十七ですよ!?あと5年以内に、相手が見つかると言うのですか!?」

喬夫人の言葉に、飛龍は困った笑みを浮かべる。当時の中国での女性の結婚適齢期は、七~二十二歳とされていた。つまり、七~二十二歳の間に婚約・結婚をしない女性は、【身体的な問題がある。】とされ、差別の対象となったのだ。また、婚約中に相手の男性が死亡した場合は、肉体的なつながりの有無(うむ)に関わらず、【未亡人】とみなされ、女性としての価値が下げられたりしたのだ。

「山賊を倒してから、あの子宛に届いた話といえば・・・皇族からのお誘いくらいです!!」
「え!?皇族から!?」

目を丸して言う飛龍に、喬夫人は渋い顔をしながら言った。

「そうです・・・!皇族の方から、星影の話を聞き、是非我が家に来て欲しいという申し出を受けました。」
「初耳ですな!?いつの話ですか!?」
「・・・忘れました。お断りをしたお話ですから・・・!」
「断った!?なぜですか!?皇族なら、それなりの生活が出来ます

ぞ?あ!もしかして・・・正妻としてのお話ではなかったからですか?」

「・・・違います。」

「あ、それもそうですな・・・。皇族が、商家の娘を貰いたいといえば、良くて側室でしょうね~!?」

「側室ではありません。」

「あ、そうです・・・。と、いうことは~妾としてのお話だったんですか?そりゃ、お断りしますよね。皇族とはいえ、大商家の娘を妾になど・・・!」

「妾でもありません。」

「あ、そうなんですか?そうなると・・・侍女として来てくれとかですか?子供の世話係りとして入れて、何年か経って、息子が気に入れば、その側室にしようとかいう・・・!」

「まったく違います。」

「・・・では、なんと?」

すべての可能性を否定され、返事に困る飛龍。そんな彼の側に、小走りで星影の父が近づくと言った。

「飛龍殿・・・皇族の方から、星影を貰い受けたいという話が来たのは事実です。」

「では・・・何故、お断りしたのですか?いやいや、それも気になりますが・・・やけに喬夫人の機嫌が悪くありませんか・・・?」

「悪くもなるでしょう・・・結婚話ではなかったんですから・・・。」

「結婚話ではない?」

劉家主人の言葉に、きょとんとする飛龍。そんな相手に、星影の父は深いため息と共に言った。

「星影に来た誘いは、側室に、妾に、侍女にともいうものではありません。」
「・・・なんの誘いだったんですか？」
「その皇族の方の、『妻女の女護衛として貰い受けたい』というお話だったんです・・・！」
「護衛っ！？」
「豪遊無双の娘の話を聞き、是非とも貰い受けたいと・・・！」
「・・・つまり、美貌（びぼう）ではなく、武力を買われたと・・・？」
「買われておりません！そのお話はお断りしたんですから！！」

飛龍の呟きに、涙を浮かべながら喬夫人は言った。

「悪く言えば、用心棒の誘いだったんです！！『給金は、男の護衛と同じ額だけ出す。死んだ時は、見舞金もしっかり出すし、葬儀もこちらがすべて出すから。』と・・・！こんな馬鹿な話がありますか！？」
「星影が聞いたら喜びそうですな。」
「そうでしょうとも！ですから、あの子の耳に入れておりません！！」

そう言うと、わっと、声を上げてなく星影の母。

「こんなことなら・・・！鬼畜男達の退治を、飛龍先生にお任せしていれば・・・！」
「いや、わしはやる気だったんですが・・・星影がねぇ・・・。」
「星影が自分で倒すと言った時、もっと反対していればよかった・・・！」
「ちょっと、難しいと思いますぞ。」
「藍田以外から・・・都の方に人をやって、腕の立つ用心棒を探すという手もありましたのに・・・！」

「それは金と命の無駄でしょう。藍田の用心棒でも歯が立たなかったんだ。いくら都が優れた場所と言っても、必ず優れた者ばかりとは限らんよ。」
「そうかもしれませんが――――・・・！」
「それに、星蓮は無事に婚約できたじゃないですか？」
「・・・婚約は出来ましたが、あの子は林山殿と一緒にはなれませんでした・・・。林山殿が婿になってくださった時、私も娘もどんなにありがたかったか・・・！」
「桜華さん・・・！」

声を押し殺す喬夫人に、戸惑い気味に丁夫人は声をかけた。そんな相手に、少しだけ口元を緩めながら星影の母は言った。

「す・・・すみません・・・取り乱してしまって・・・！皇族からのお話を思い出したら、つい・・・心がかき乱されてしまって・・・。」
「いいんだよ、桜華。傷ついたのは、お前だけじゃない。私も同じだよ。」
「そうですぞ。可愛い娘を用心棒にと言われ、死ぬことを前提で誘われれば、どんな親でも怒りますよ？」
「飛龍先生・・・。」
「飛龍殿の言う通りだ。いくら皇族の方でも、言って良いことと悪いことがあるからな。」
「そうですわ、桜華さん。気になさらないで。」
「星影殿は、悪くありませんよ。大商家の娘を捕まえて、用心棒など・・・言う方がひどいです。」

夫や、安家夫婦から優しい言葉もあり、涙を拭きながら言った。

「ありがとうございます、みなさん。本当に、申し訳ありません・・

・！」

そう言って、謝る姿はいつもの喬夫人だった。彼女は身だしなみを整えると、林山の母である丁夫人を見ながら言った。

「丁夫人・・・。同じ母として、あなたのお気持ちはわかります。ですが私は・・・話も聞かずに、飛龍先生を悪とは思えません・・・！」

「桜華さん・・・。」

「藍田の人間が全員敵になり、娘を人柱として要求された時、私達は死を選ぼうとまで思いましたの。そこへ、飛龍先生が現れたのです・・・！」

「でもね、桜華さん、」

「あの時星影は、飛龍先生から武術を習って、自分で続を倒したいと言い張りました・・・。私や旦那様が反対しても聞かず、飛龍先生が『脅迫』してもそれに屈(くっ)せず・・・！」

「桜華さん。」

「すみません、喬夫人。『説得した』と、言っていただけませんか？」

「結局・・・星影のわがままを、飛龍先生が聞き入れ、あの子が飛龍先生の代わりに賊と戦ったのです。そして、あの子は勝負に勝ち、自分と妹の操と藍田の平和を守ったのです。」

「ちょ・・・喬夫人。わしの話、聞いてますか？」

「・・・ええ、もちろんです。だから私、今回のことと三年まえのことは・・・同じではないかと思うのです・・・。」

「同じ・・・ですか？」

不思議そうに尋ねる丁夫人に、喬夫人は顔を上げながら言った。

「あの時飛龍先生は、星影のわがままを聞いてくれました。あの子

に良いように、便宜を図ってくださいましたわ。だから今回のことも――――――」

「今回のことも？」

「なんらかの便宜を図ってくださった、と・・・私は信じております。」

「桜華さん・・・！」

「桜華。」

「喬夫人・・・。」

「飛龍先生・・・私にとって、先生は神とも思える存在なのです。それは、今も昔も変わりませんわ。」

「神などと・・・わしは、変わり者の人間ですぞ？そうやって、褒めていただいたところで・・・お宅のご息女をお返しすることは出来ませんが？」

「お戯れを。娘はいつも申していました。『厳師匠は、変わり者は変わり者でも、常識を持って生きている変わり者！』だと・・・。」

「常識を持つ変わり者・・・？」

「あの子が、どういう意味で言っていたのかわかりません。ですか、飛龍先生が、あの子の人生を変えたお方であること確かですわ。」

「ま、まぁ・・・女武人にしてしまいましたからね・・・。」

「星影が信用し、信じているお方ですよ、飛龍先生は。だから私も・・・飛龍先生を悪く思うことは出来ませんわ。・・・私は今回のことで、飛龍先生を信じていますから・・・！」

そう言って、まっすぐな目で厳師匠を見る星影の母。彼女の言葉に、弾かれたように丁夫人が反応した。

「――――待ってください！では桜華さんは・・・この男を、厳先生をかばわれるのですか！？」

「かばう、かばわないではなく、真実を知りたいだけです・・・私は。」

「桜華・・・！」
「喬夫人・・・。」

驚く周囲を気にすることなく、はっきりとした声で言う喬夫人。

（なるほど・・・こういう展開だったのか。）

どうなることかと母親達の話を聞いていた自分。
どうやら、丁夫人は厳飛龍を信じない、喬夫人は厳飛龍を信じる、という立場をとっているということを強調したらしい。確かにこのまま、劉家・安家の両家が、厳飛龍を悪と決めたままにすれば、どちらかの身内が役所に訴える可能性があった。訴えないにしても、なんらかの罪をでっち上げて消そうとするかもしれない。
・・・自分達の当主に、取り入るための手段として。
そうならないためにも、両家のうちの誰かが、厳飛龍の味方である必要があった。

（普段の行いも考え、わしに味方しそうな喬夫人を味方役に選んだということか・・・。）

驚いたな。そこまで考えて、筋書きを書くとは。一体、どちらの親が考えたのやら・・・。

驚きつつも、話の展開の良さに感心する厳飛龍。しかし彼が驚いたのは、話の流れだけではなかった。

（まさか、喬夫人が三年前の話を出すとは・・・な。）

星影の母が、昔話を出したことにも驚いていた。

初めて星影と出会ったのは三年前・・・・・・旅の途中だった。
山道を歩いていた時、上の方から女性の泣き叫ぶ声が耳に届いた。
『この辺りは山賊が出る』と、立ち寄った店で言われていたので、剣の柄を持つと、迷わず声のする方へと走った。女性が、山賊に襲われていると思ったのだ。ところがそこにいたのは、傷だらけの少年と、少年の両脇で泣いている美少女二人だった。賊がいないことに安堵し、近づいて声をかければ、美少女二人が大声で威嚇(いかく)し始めた。自分を警戒する二人をなだめ、名前を名乗ってわけを聞けば、彼女達は泣きながらこれまでの経緯(いきさつ)を話してくれた。
役人が手を焼く山賊に、無理やり求婚されていること。町の人間も役人も、被害縮小(ひがいしゅくしょう)のため、姉妹に山賊の頭の元へ輿入(こしい)れするようにと、町ぐるみで強引に迫っていること。さらに、傷だらけの少年は、二人の姉妹を助けようと山賊に立ち向かい、返り討ちにあってしまったということ。
この話を聞いた時、わしの侠客として血が騒いだ。
薄情な周囲の人間に対する怒りと、無法の限りをつく山賊共を一掃しようと思った。
なによりも、哀れな二人の姉妹を助けたいと思った。
そんなわしに、姉妹の姉がとんでもない頼みをしてきたのだ。

「お願いでございます！どうか私に、武術をお教えください！！ここにいる林山の敵を取り、大事な妹を守りたいのです！」

・・・・え？

「だ～か～ら！山賊をぶち殺したいから、協力してください！！あいつらのせいで、婚約者まで逃げちゃったのよ！！おかげで、女の面子が丸つぶれなの！！絶対に、牢屋にぶち込んで、斬首にさせなきゃ気がすまない！！」

ぶち殺したいって・・・。わしに、代理で頼むんじゃなくて?

「私の問題を、他人任せにするなんておかしいじゃない!?他人を巻き込んで、怪我をさせたら申しわけないでしょう!?ですから、武術を私に教えてください・・・!!」

いやいやいや・・・!気持ちはわかるけど、無理だと思うよ。教えるにしても、時間がないと思うから、ここはおじさんが代わりに~

「やる前から、決め付けないでください!!あなたが私に家に来て、付きっ切りで武術を教えてくれれば大丈夫よ!?それとも、他にあなたを先約してる人がいるの!?」

いや・・・気ままな旅なので、先約とかそういうのはないけど・・・。ほら、金銭的な問題もあるからさ、住み込みで教えるとなると、お金がねぇ~・・・

「問題ないわ!私の家は、藍田でも有数の名士をしている大商家よ!!お金はきっちり払いますから!!だから私に武術を教えてよ!!絶対に、短期間で豪傑になるから!!」

そう言われても、一朝一夕で強くなれるもんじゃ――――・・・!

「嫌なの・・・?嫌だって言うの!?断る気!?可愛い美少女二人と、傷だらけの美少年が頼んでもダメ!?だったら、この場で死んでででやるっ!!」

え?え・・?ちょっと!?えぇ!?お嬢様?ええ!?

「ここであなたが、私の申し出を断るなら、あなたの名前を体に刻んで死ぬ・・・・！！」

・・・・・なにを・・・手伝えばよろしいのでしょうか・・・？

「私に、鬼畜男共を、倒せるだけの武術をご教授くださいませ・・・！厳飛龍様・・・？」

・・・・・・・。

（・・・今思えば、あいつの男勝りな一面は、元々あったものなんだろうな・・・。）

昔を思い出し、少しだけ黄昏（たそがれ）る厳飛龍。

その一方で、途切れていた会話は、業を煮やした丁夫人によって再会された。彼女は、小さく咳払いをすると沈痛な面持ちで言った。

「桜華さんのお気持ちは、わかりました・・・。厳先生への質問が少し・・・悪かったみたいですね。」

「鳳娘さん？」

「丁夫人。」

「まあ・・・十歩譲って、厳先生だけが悪いという言い方は、少しよくなかったでしょうね。少しだけ変えましょう。」

（十歩しか譲れねぇーのかよ・・・。）

どれだけ、心が狭いんだ?

咳払いをする丁夫人に、無言の圧力をかける飛龍。林山の母は、そんな師匠を無視すると声を整えながら言った。

「それでは、桜華さん・・・いえ、劉家の方々は、厳飛龍を信じるということで良しとしましょう。劉家は、厳飛龍を信じる・・・ということで。」

「劉家は・・・?」

「ど、どういうことですか?丁夫人・・・!?」

戸惑う劉家夫婦に綺麗な笑みを浮かべると、ひどく明るい声で丁夫人は言った。

「安家は・・・絶っっっ対に!!厳飛龍師匠・・・あなたを信用・し・ま・せ・んっ!!!」

「鳳娘さん!?」

「鳳娘!?」

「丁夫人!?」

「私は・・・!安家は絶対に、この男を信用しません!!」

そう言うと、フンと、鼻を鳴らしてそっぽを向く安家の正妻。そんな彼女に、劉家の正妻は上ずった声で聞いた。

「何故ですか、鳳娘さん!?どうしてそんなに・・・頑なのです!?」

「・・・桜華さんには悪いですが、私には私の考えがあります！仮に、桜華さんが言うように、この男が便宜を図っていたとしても、林山は宦官にされたのですよ！？」
「それは・・・！」
「この書類が何よりの証拠です！厳飛龍のおかげで、林山は玉無しにされたんですよ！？尼と違って、伸びて元に戻るというわけではないのですよ！！？」

そう言って、役所から取り寄せた、安林山の宦官証明書の複写を見せる丁鳳娘。彼女の目は、怒りの炎で燃えていた。

「こんなものまでご丁寧に作って・・・！どこまで安家を侮辱（ぶじょく）し、笑い者にすれば、気がすむというのですか！？厳飛龍っ！？」
「て、丁夫人、どうか怒りを静めてください！お気持ちはわかりますが――――」
「そうですわね！伯孝殿！！同じ男として、切り取られる痛みを想像することぐらいは出来るでしょう！？」
「丁夫人・・・！」
「今まで、伯孝殿に気を使ってあえてなにも言わないでいましたが・・・今日という今日は言わせていただきます！！」
「お・・・おい、鳳娘！いい加減に――――」

「――――あなたは黙っていてくださいっ！！！」

本日、二度目のダメだしを夫にする丁夫人。そして、息子の師匠に向かって、小馬鹿にするような口調で言い放った。

「いくら、武勇に優れた指導者であっても、人間的にダメな人間は

ダメということです!!そんな人間が教える武術など、三流にしかなりません!!」

（『三流』だぁ・・・？）

丁夫人の言葉に、厳飛龍の目つきが鋭くなった。

演技とは言え、自分の教える武術が三流だと言われたことが彼の癪に障った。武術を第一に考え、それを磨くために各地を修行してきた飛龍。それを三流扱いされたことが許せなかった。いくら芝居で言ったことだとしても、武術を磨いてきた彼からすれば、それは冗談などには聞こえない。我慢しがたい言葉だったが――――――

（入れ替わり強奪作戦を、二人の両親は我慢して許したんだ・・・。わしがここで、短気を起こして怒るわけにはいくまい・・・！）

屈辱ではあったが、その暴言に彼は耐えた。そんな武術の師匠の心を知らない丁夫人は、それまで以上に怒り散らした。

「一所に腰がすえられない人間なんて、ろくな人物じゃありません！いくら周りが親切に仕事や住む場所を提供したって、こんな風に恩をあだで返されるんですよ!?今回のことが良い例です!!」

「鳳娘さん、それはいくらなんでも言いすぎでは・・・？」

「桜華さんからすれば、私の言い方は言いすぎだと思いますよ!ですがね、宦官の末路というのは惨めなもの!!私は林山に、宦官だけにはなってほしくありませんでした!!」

「鳳娘・・・！」

「いいえ!宦官という言葉自体、林山には無縁と思っていました!!それを～・・・この三流武人がぁ・・・!!」

「なんということを言うんだ、鳳娘!厳師匠に失礼だぞ!?彼は仮

にも――――！」
「『藍田を救った劉星影殿の師匠』！！そう、仰(おっしゃ)いたいのでしょう！？」
「わかっているならお前・・・！」
「ですから言わせていただくのです！！これ以上は私の我慢が――――！！ああっ！も～う、腹立たしくて言葉にもならないっ！！」
「わ、わかった！わかったから落ち着いてくれ、鳳娘！！」
「そうですわ。落ちついていてください、丁夫人・・・！」
「鳳娘さん、少し休みましょう！？ね？ね？」

興奮する丁夫人を、部屋に集まっていた女性陣がなだめる。彼女達が、安家の正妻を抑えているうちに、安家の当主は冷や汗をかきながら弁護し始めた。

「誤解しないでください、厳師匠！私達はあなたのことを尊敬しています。だからこそ、息子の林山を先生の門下生にしていただいたのです。だから、先生のやり方に不満はありませんでしたが――――・・・・」
「・・・今はそれがあると？」
「・・・。厳師匠が、あの子達に、正道(せいどう)ではなく邪道(じゃどう)を教えましたので・・・。」
「わしが邪道を？」
「林山が、星蓮殿を深く愛していたことは知っています。男を捨ててまで、彼女に義理立てする気持ちはわからないこともありませんが――――・・・」
「お父上は、納得できないと・・・？」
「後宮に入ることは、女性にとって最高の名誉です。相手の幸せを思い、身を引くことも、一つの方法だったと思います・・・。」
「方法ですか・・・。」

安家当主・安癒遜（あんゆそん）の言葉に、厳師匠は顎鬚（あごひげ）に手をやる。そんな相手に気にすることなく、安癒遜は話を続けた。

「林山が、桂蓮殿との婚約を破棄したいと言ってきた時、私達は反対しました。星蓮殿を認められないからではありません。道理に反すると思ったからです。」

「それを言うなら、星蓮の姉の行いも、道理に反すると思われたのでは？」

「た、確かに、星影殿は・・・・お転婆だとは思いました・・・。しかし、いろいろあって、その考えも変わりました。」

「でしょうな。ご両親が決めた婚約者が、ならず者を使って、邪魔な恋敵を消そうとしたのですから・・・！」

「飛龍殿！？」

「事実でしょう、星影の父君？もっとも・・・あれぐらいの襲撃（しゅうげき）でやられるほど、わしの自慢の弟子はやわではない！」

「あ、あの、なにもこの場で仰らなくても――――――！」

「遠慮することはないでしょう？この場に、自分の借金を帳消しにする代わりに、金貸しの一人娘と安家の跡取りの縁結びをした者達の身内がいたとしてもね～！？」

「ひ、飛龍殿！」

慌てて、暴言を吐いた男の口を押さえる劉家当主。しかし、口を閉ざされても、その男の挑発はやまなかった。ハハァン！と、鼻を大きく鳴らすと、問題の人々へ、蔑（さげす）む視線を送る厳飛龍。

（人の縁も、金で決める腐れ商人共が・・・！）

演技抜きで、この侠客は問題の一族をにらみつけた。林山と星蓮の婚約が決まってから、彼らは丁夫人から、縁を切られていた。そんな恥知らずが、この大事な親族会議に来ているということは、なに

かしら裏があると彼は考えていた。言葉巧みに取り入り、丁夫人のご機嫌を取ろうとしているのだと。

（陪臣（ばいしん）の種（たね）め・・・！貴様らが、この場にいるだけで穢（けが）れるわい！）

口には出せないので、出さなかったが、そんなことを思いながら、軽蔑のまなざしを向ける侠客。この厳飛龍の動きに気づき、急いで顔ごと向きを変える劉伯孝。

しかし、劉家当主の心遣いもむなしく、部屋の中は険悪な空気で深まるのだった。

第四十二話　星影の過去（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
小説について、少し解説させてください。
主人公・劉星影の父が劉伯孝、母が喬桜華となっております。それに対して、親友の安林山の父が安癒遜、母が丁鳳娘となっております。一応、二人の親達が【厳飛龍】を呼ぶときの呼び方も微妙に違います。星影の父・劉伯孝が『飛龍殿』、星影の母・喬桜華が『飛龍先生』、林山の父・安癒遜『厳師匠』、林山の母・丁鳳娘『厳先生』と呼んでおります。
中国では生まれた子供は、父親の姓を名乗ることとなっているそうです。ちなみに、お隣の韓国でも、子供は父親の方の姓を名乗るそうですよ。

第四十三話　誤解は続くよ、どこまでも

厳飛龍の挑発により、部屋の中は一部の人間の憎悪で満ちていた。
修羅への口火を切ったのは、言わずと知れた気性の激しい母親だった。

「息子の・・・林山の最初の縁談の決め方は、私共が悪かったと認めます！！ですが――――――林山を宦官にした厳先生！あなたにだけは、言われたくありません！！」

林山の母・丁鳳娘の言葉に、劉家当主の手をどけながら飛龍は言った。

「その台詞、そっくりそのまま返品しましょう、丁夫人。わしが言わねば、誰が言うというのかね？あなたのご身内の不徳を？」
「でしたら、次の機会にしてくださいっ！今の問題は、そんなことではないはずです！！」
「そうでもありませんぞ。わしの記憶が正しければ、あなたの後ろにいる連中は、縁を切った者達ではなかったのですか？」
「それは――――・・・！」
「借金の帳消しと賄賂の見返りを条件に、安家の次期当主の花嫁を紹介したという罪状で・・・？」
「あ、あなたには関係ないでしょう！？」
「左様。関係はないが、気に入らない！丁家の鳳娘殿ともあろうお方が、あれだけの恥をかかされながら、縁を切ると宣言した者達を、もうそばにはべらせているのですからな・・・！？」
「おやめなさい、飛龍殿！」

「そうですわ！鳳娘さんには、鳳娘さんの考えが――――！」
「・・・あったとしても気に入らん！その恥をもう忘れるとは――
――――・・・ずい分と、薄っぺら～い、正義心（せいぎごころ）ですねぇ～？」
「わ、忘れていたわけではありません！！ですが、彼らは――――
――」
「『十分反省しているから許した。』と、言うのでしょう？」
「な、何故それを！？」
「聞かんでも、大体の想像はつきますぞ。ど～せ、伯孝殿からの知らせを聞いて、気が動転しているあなたの元へ、ゴマをすりに来たんでしょう？」

驚く丁夫人にそう言うと、問題の人々へと視線を向ける武術の師匠。

「『丁夫人、林山殿のことは・・・お聞きしました。私達が、こんなことを言える立場でも、顔を出せる身分でもありませんが、あなたのことが心配で来てしまいました。』」
「え！？」
「『あの時は、林山殿にも、丁夫人にも、なによりも安家に大恥をかかせてしまいました。そのことを、ずっと悔やみ続けていました。』」
「ひ、飛龍殿！？」
「『こんな時に、失礼とは思ったのですが、あなたに会って謝るのは今しかないと思い・・・こうやって来た次第です。本当に申し訳ありませんでした。』」
「飛龍先生、なにを仰って・・・！？」
「『借金いう弱みを李殿に握られ、あの時はああするしかありませんでした・・・。どうか、その罪滅（つみほろ）ぼしをさせてください！今こそ、あなたのお力になりたい。』」
「げ、厳師匠・・・！？」
「『どうか、我々も、劉家との話し合いの場所に参加させてくださ

い。あなたのお力になりたい・・・！！お願いします、丁夫人・・・！』」

そこまで言うと、あざ笑いながら飛龍は告げる。

「ど～せ、こういうことを言われたんじゃないのかね？」

「厳師匠・・・あなたは・・・！」

「・・・何故あなたが、その話を知っているのです・・・！？」

驚く安家夫婦に、ゲラゲラと笑いながら飛龍は答えた。

「わしは、人生の大半を流浪しながら生きてきた男ですぞ？漢帝国の全土を旅し、さまざまな人間を見てきました。だからこそ、こういう人種がどんなことを考えているか、見ればわかるんですよ。」

「え！？話を聞いたわけではないのですか！？」

「当然ですよ、癒遜殿。なにが悲しくて、お宅の親戚の雑音に耳をすまさなきゃならんのです？」

「じゃあ、どうして・・・厳師匠は、妻とその親族の会話を知っているのですか！？まさか、適当に言ったことが当たったとでも言うのですか！？」

「そういうことです。」

癒遜の問いに、真面目な声で飛龍は言った。

「何度も言いますが、わしは人を見る目はある方です。それに加えて、見てきた経験をもとに、『よく使われる言葉』を言ったまでですよ。」

「『よく使われる言葉』！？」

「砕いて言えば、『騙す時に使う言葉』です。」

「だ、騙すって・・・・!?つまりあなたは、妻の親類が――――――妻を騙したと言うのですか・・・?」
「違います。謝るふりをして欺(あざむ)いたんです。」
「意味的には、同じじゃないですかっ!?」
「まぁ・・・取り入ることが目的ということは同じですな。」
「それこそ、最低じゃありませんかぁ!!?」
「そうですな、癒遜殿。あなたの奥様に『取り入る』のは、今しかないと思ったんでしょう?奥様のお身内は~?」
「取り入った・・・?私に・・・・!?」
「どういうことですか、皆さん!?皆さんは林山や星影殿、星蓮殿にした仕打ちを、反省したのではなかったのですか!?」

飛龍の言葉を受け、顔を引きつかせる丁夫人と、顔色を変えて問いただす安家当主。それを受け、金で動いた連中は、大慌てで弁護し始めた。

「ご、誤解です、癒遜殿!」
「我々が、心から尊敬している丁夫人を騙すはずがないでしょう!?」
「李殿への借金という負い目があり、仕方なく、悪事に手を染めてしまっただけなのですから!!」
「そうですよ!今は、心を入れ替えて反省をしています!!」
「それなのに厳先生の発言は、心から反省している我らに対する、侮辱意外のなにものでもない!!」
「だから、丁夫人・・・そんな戯言(たわごと)を信じないでください!私達は、星影殿に対してはもちろん、鳳娘殿に対して、本当に申し訳ないことをしたと思っているんですよ!?」
「今では、自分達が行った行為を深く後悔しています!二度と、あんなことがあってはいけないと思っているのです!!」

「・・・と、言いつつ本心は？」

「反省なんか出来るかよ！？なんで俺達が、あんな小娘に対して、心からわびなければならないんだ！？」

「そうですよ！あの女のおかげで、金ずるは逃げるし、借金の帳消し話はなくなるし・・・！」

「星影にしても、鳳娘にしても、俺達に取っちゃ、武術を鼻にかける迷惑なじゃじゃ馬女だよ。」

「そうそう！林山と李家のお嬢さんの縁談が破談になったせいで、丁家からも李家からも冷遇され・・・散々だったわ！！」

「幸い、丁夫人がこちらの思い通りに機嫌を直してくれたからよかったものの・・・。」

「まぁ・・・こっちが下手に出てれば、丸め込むのは簡単だがな～？」

「癪に障るが、相手は俺達より上の立場にいるわけだから・・・。ご機嫌を損ねないようにしなきゃならないし・・・！」

「劉星影にしても、鳳娘さんにしても、気の強い女の扱いには困りますね～！」

「ほっほぉ～それは大変ですなぁ～？」

「大変さ！年増の相手をするのはね～同じ女なら、まだ若い星影の方がましさ！ハハハ！」「それはそれは。アハハ！」

「ハハハ！！」

「「「「「ハーハッハッハッ！！」」」」」

そう言って笑う、厳飛龍と金の亡者達。

「・・・だ、そうですよ、丁夫人？」

「「「「てっ・・・・コラァァァァァ――――――――――――――――――！！！？」」」」

飛龍の言葉で我に返る一部の人々。そして、一斉に飛龍に向かってツッコミを始める。

「ちょっとあんたぁぁぁ！！なにを言わせるんですか！？」

「本心。」

「なにが本心だ！？変なこと言わせやがって！！」

「つーか、あんたらが勝手に言ったんでしょう？」

「あんたが、変な質問をするからだ！！」

「だったら、言わなきゃいいだろう。それを、あんたらは口にしたんじゃないか。拒否権があったのにねぇ～？」

「なっ・・・！？俺達が悪いというのか！？」

「わかってるなら聞かんでくれ。それが、あんたらの心の声なんだろう？」

「心の声だと！？でたらめを言うな！！」

「それはあんたらだ。心にもない嘘をついて、丁夫人を丸め込んだんだからな～？」

「あれはうっかり言ったんだ！『本心』から言ったわけでは――――・・・・！！」

「なるほど。うっかり、『本音』を言ったというわけか。」

「てっ、そうじゃな――――い！！あれは、本心でも本音でもない！！」
「じゃあ、何になるのかね？」
「ぐっ・・・！」
「そ、それは・・・！」
「どちらになるのかね？本心か？本音か？」
「ど、どちらでもない！！大体、本心も本音も、意味的には同じじゃないか！！？」
「違うぞ。本心とは、『その者の本当の心』という意味で、本音とは『口に出すことがはばかられる音色（ねいろ）』を意味するのだぞ。」
「な、なんだと！？」
「『その者の本当の心』と『口に出すことがはばかられる音色（ねいろ）』が同じ意味になりますかなぁ～？違いますよねぇ？」
「くっ・・・！」
「う、うるさい！考えればわかることだろう！？」
「わかりませんなぁ～？どう違うのですかぁ～？この武術馬鹿にもわかるように、きちんと教えていただけませんかぁ～？」
「きっ、貴様～・・・！」
「ん？んん？どうしました？どこが同じか言えませんか？言えませんか？・・・言えませんよねぇ～？意味は違うのですから・・・！？」
「ぐぅぅぅ・・！」
「本心とは、『その者の本当の心』という意味で、本音とは『口に出すことがはばかられる音色（ねいろ）』を意味するのですから・・・！意味は違いますよね！？」
「たっ・・・確かに・・・！」
「・・・そ、そうとも言いますが・・・！」
「そう言うのですよっ！つーか・・・丁一族ともあろう者が、そんなこともわからんとは・・・ブフフッ！！あ～あ・・・こりゃ、おかしい・・・ププッ！」

大げさに首をふると、わざとらしく笑う飛龍。

「まぁ・・・どちらにせよ、口が滑ったことには変わりないでしょう？」

そう言って馬鹿にすれば、金で動いた人間達は殺気立った。

「こ、こいつ・・・！！」

「言わせておけば～！！」

「まぁまぁ、そう気色(きしょく)ばまずに。わしに八つ当たりするより前に・・・・・ご機嫌取りをしなくていいのですか？」

「なに！？」

「どういう意味だ！？」

「あなた方より、立場が上の女性にですよ～？・・・・そうですよねぇ～丁鳳娘殿？」

「「「「「――――――――――――――――――！！」」」」」

この言葉で、声にならない叫びを上げる人々。飛龍の発言を受け、その場には冷たい空気が広がる。それにより、改めて自分達の失言に気づく。

「おわかりになりましたか、丁鳳娘殿？」

そんな空気を広げるように、問題の人物へと声をかける飛龍。彼の問いに、彼女は優しい声で答えた。

「・・・ええ・・・・・！よぉぉぉぉぉ――――――――――くっ

！！・・・わかりましたわ・・・・！！」
「ほっ、ほほほ、鳳娘さん・・・！？」
「て、丁夫人・・・！？」

「皆さんのご熱心な気遣い、よぉ――――――く・・・理解できましたわ・・・！！だから安心してください・・・。」

武術の師匠の後押しを受け、綺麗な笑顔を作りながら言う丁夫人。

「よぉ～く、わかりましたわ・・・！！あなた達が、私をどう思っていたのか・・・！？」「て、丁夫人・・・！？」
「奥方殿・・・・！？」
「いい根性をしてますわね・・・！？私を騙すなんて・・・・！！」

空気を震わせるようなその声に、金の亡者達は口を閉ざす。そして、恐る恐る声の主を見れば――――――

「その気使い、二度と私には使えませんからね・・・！！？」

そこには、今にも牙が生(は)えてきそうな形相をした安家正妻の姿があった。
その姿に、こわばった表情で固まる人々。ただ一人、誘導(ゆうどう)役をした飛龍だけはにんまりと笑っていた。

「仕方ありませんよ、丁夫人！どんなに気丈な人間でも、弱気な時ほど付け入りやすいらしいですからな～？」
「・・・厳先生・・・！」
「金で動くあなたの身内は、自分さえよければいいと言う連中ばか

りみたいですぞ～？」
「お、おい！？」
「なにを言うんだ、あんたは！？」
「金で、林山の縁談を持ちかけた一部の丁一族の本音と本心を伝えただけですが？」
「馬鹿者！そんなの本心でも、本音でもない！」
「そうだ！いい加減なことを言うな！！」
「それはあなた方でしょう、金の奴隷。いや～油断しましたな、丁夫人？まんまと隙をつかれたみたいですよぉ～！？」

からかう飛龍に、丁夫人は拳を震わせる。そんな安家正妻の姿を見て、金の奴隷達は行動に出た。

「ご、誤解ですよ、鳳娘さん！・・・我々はそんなつもりはありませんっ！！」
「そうです！私達は、厳飛龍の話術に引っかかっただけです！！」
「その通りです！この男は、あなたの大事な林山殿を宦官にした奴ですよ！？そんな人間の言葉を信じてはいけません！！」
「金品を受け取り、手術を受けさせた悪人に間違いはないのです！その悪人と俺達を一緒にしないでください！」
「きっと、手術の報酬に目がくらみ、林山の手術を行ったのです！この男こそ、金の奴隷ではありませんか！？」
「そうですわ！とめることができる立場にありながら、とめなかったんですよ！？私なら、命に代えてもおとめしますわ！」
「だから、俺達が金で動くはずはありませんし、丁夫人や星影殿を見下しているはずがありません！どうか、騙されないでください！」
「そうでございますよ！これが、私達の本心や本音であるはずが――――――！！」

「黙りなさいっ！！」

複数でしゃべる身内を、大声で一喝する丁夫人。その声に怯み、思わず黙り込む人々。

「鳳娘・・・さん・・！？」

「この後に及んで、よくそんなことが言えますね！！？なんて見苦しいのっ！？」

「み、見苦しいって・・・！」

「でも、悪いのはこの男で――――――！」

「厳先生に罪をなすりつけてどうするの！？なんて低い争いをしてるの！！」

「ひっ！」

「す、すみません・・・！」

「え？怒るところはそこですか？つーか、わしですか？」

「確かに厳先生は最低です！」

「否定してくれんのですか・・・？」

「最低な人間には変わりありませんが、私は許せないのはそこではないのです！！」

「あの、わしの話聞いてくれないんですか？」

「私が怒っているのは、人に罪を擦り付けるというあなた達の行為が許せないのです！！」

「丁夫人・・・。」

「見え見えの嘘をつかないで頂戴！！お前達の嘘は、もう私には通用しないのよ！！？」

なんとか、飛龍に罪をなすりつけようとする丁夫人の身内達。しかし、それが丁夫人に通じることはなかった。

「お前達のような人間が、私と同じ一族だと思うと、吐き気がする

わ・・・！！」
「ほ、鳳娘殿！」
「て、丁夫人・・・！」
「星影殿を小娘呼ばわりし、彼女に対して反省できないとはどういうことなの！？」
「ち、違いますよ・・・！」
「なにが違うの！？確かに・・・以前は私も、星影殿をよくは思っていませんでした！ですが、闇討ちの一件以来、それなりに彼女のことを認めているつもりですよ！？」
「そ、それは知っていますが・・・！」
「だったら、どうして心からおわびすることが出来ないの！？」
「も、申し訳ありません！」
「李殿からの借金に関してもそうですよ！！楽して借金を帳消しにしてもらい、その上紹介料と賄賂まで貰おうとは・・・！！自分の後始末も十分に出来ないくせに、なにをえらそうに言っているのですか！？」
「その・・・あの・・・！」
「遊びで作った借金を、肩代わりしたのは誰ですか！？私でしょう！？わかっているのですか！！」
「ご、ごめんなさい！ごめんなさい！」
「年増と付き合いたくないなら、はっきり言って頂戴！その代わり・・・肩代わりした借金は、耳をそろえて全額返してもらいますわよ・・・！？」
「そんな！困ります、丁夫人！」
「見捨てないでください！」
「私は困らないし、見捨てた覚えもありません。お前達が嫌だと言うから、その願いを聞いてあげると言ってるんでしょう！？」
「誤解です！どうか、お許しください！」
「失言をお詫びします！ですから、私達をお守りください・・・！」
「私は、祠の神様ではないのですよ！？・・・・・ついでだから言

いますが、私も、星影殿も、武術を学んだのは、護身のためです！それはわかっていますか・・・！？」

「は、はい！もちろんです！」

「身を守るためということは、重々承知しております・・・！」

「だったら答えて！誰がいつ、それを自慢したというのですか！？鼻にかけたというのかしら！？」

「あっ！それは・・・その・・・！」

「私が、いつ、どこで、誰に、そういう態度を取ったのかしら！？気が強いのは、自分でも理解してますけどね・・・！？」

「す、すすすみません！言葉のあやです！すみません！」

「安家からも、丁家からも、おまけの李家からも、お前達が冷遇されるようになったのはなぜ！？白い目で見られるようになった理由はなに！？わかっているでしょう！！？」

「わ・・・私達に原因があります・・・！」

「・・・我々が悪いです。」

「申し訳ございません・・・！」

「なにが、気遣いが大変よ！？癪に障るよ！？大変なのは私の方よ！！お前達のような馬鹿にまで、気遣ってやらないといけないんだから！！本当に・・・嘘ばっかりついて！！」

「丁夫人の言う通りだな。」

気炎を上げて吼(ほ)える丁夫人に、頭をかきながら飛龍は言った。彼の言葉に、周囲の視線も武術の師匠へと向けられる。

「丁夫人、その者達の考えは変わらんよ。口でどれだけわびようとも、腹の底で馬鹿にしてるんだから意味はないぞ。」

「な、なんてこと言うんだ！」

「そうだ！元々は、あんたが原因だろう！？」

「言いがかりはよしてくれ！本当に反省しているなら、そうやって

わしの言葉に反発するはずがないだろう？」
「なっ・・・文句ぐらいは言うぞ！？あんたは、丁家とは無関係なんだからな！」

「すぐそれだ！そうやって、『丁家』を出せば、みんななにも言わないと思ってるのかね？」

それまでの言葉とは一変し、厳しい口調で言う飛龍。

「本当に反省している人間とは、そのことだけで心が一杯なんだ。なにか言われても、そのことに対して気持ちが一杯だから、反論する余裕がないものだ。それなのにあんたらは、即答に近い形で返事をする！あんたらの心は、反省という気持ちで、一杯ではないみたいだな・・・！？」
「ぐっ・・・ひ、人それぞれじゃないか！？個人差があるだろう！？」
「謝罪の気持ちに、個人差などない。そう考えている方がおかしい。」
「なっ・・・！」
「馬鹿にしているからこそ、そうやって言葉に出るんだ。丁夫人や星影を見下す言葉がな！」
「ふざけるな！！丁・・・あ、安家の人間でもない、あんたなんかに、そんなこと言われる筋合いはないぞ！」
「ほぉ～『安家』ねぇ・・・。」
「そうだ！安家のことに、余計な口を挟むんじゃない！！」
「『丁家』でかなわないとなると、『安家』を出すとは・・・つくづく、世渡りの上手な商人殿だなぁ～？」
「なんだと！？」
「安家の人間でないから、あんたらの汚い性根がわかるということだ！まぁ・・・心にやましいことがある奴に限って、核心をついか

れると、そうやってけなすんですがねぇ？」
「こいつ、言わせておけば――――――！！」
クックッと、笑う飛龍。彼の態度に、我慢が出来なくなった一人の男が掴みかかろうとするが――――――――――
「――――――――やめてくだされ！！」
野太い声によって、その動きは制止される。
「伯孝殿！？」
「飛龍殿に、手を出さないでくだされ・・・！」
とめたのは、星影の父である劉伯孝だった。彼は、娘の師匠に手を上げようとした人物を見据えながら言った。
「怒りに任せて、飛龍殿に喧嘩を売るのは勝手ですが、相手が武術の達人だということを忘れていませんかな・・・？」
「あっ――――――・・・！」
「仲買人と、武術師範の師範では、勝負は見えていると思いますが・・・？」
「べ、別に私は勝負なんて――――――――！」
「喧嘩を売っておいて、勝負ではないと言い切れませんよ・・・？」
吐き捨てるように言う劉家当主。
「あなた方の発言で、怒っているのは丁夫人だけではありませんよ・

・・・！？」

「そうですわ・・・！飛龍先生への侮辱は、我が娘・星影への侮辱とみなしますよ・・・！？」

星影の両親の言葉に、振り上げていた拳を下に下ろす男。その姿に、丁夫人は大きなため息をつきながら言った。

「・・・出て行って頂戴。」

「・・・え？」

「出て行って頂戴、あなた達・・・！」

「ほ、鳳娘さん！？」

「丁夫人・・・！」

「今すぐこの場から、出て失せなさいっ！！」

そう叫ぶと、戸口を指差す丁夫人。

「あなた達を許したという言葉は撤回します！今すぐこの場から立ち去りなさいっ！！」

「そんな、丁夫人！？」

「鳳娘さん、それはあんまりのお言葉ですよ！」

「そうです！発言をそうコロコロ変えられては、安家正妻としての威厳に――――」

「黙りなさい！！しつこいわよ！？」

雷鳴のごとく怒鳴る丁鳳娘。

「息子のことで、我を失っていたとは言え、あなた方をこの場に入れたのは間違いでしたわ・・・！」

「ほ、鳳娘殿！」

「お前達の言う通り、私は安家正妻・丁鳳娘。同じ丁一族でも、お前達と私とは違うの！分をわきまえているなら、控えなさい！！」

「丁夫人・・・！」

「安家正妻と、それに従う家の者という違いがわからないのかしら・・・！？図に乗らないで頂戴！！」

凄みを見せていう烈女に、熱を帯びていた者達は静かになる。

「返事は？」

「え・・・？」

「安家正妻の命令が聞こえないのっ！？」

「は・・・はい・・・。」

「お前達の耳は、老域に入っているの！？そんな声じゃ、聞こえないわ！もう一度言いなさい！」

「そ、そんな・・・・！」

「丁夫人・・・！」

「謝罪の言葉も入れて、大声で言いなさい。」

「・・・本当に、申し訳ありませんでした・・・！」

「すみませんでした・・・！」

「・・・ごめんなさい！」

「私だけに謝ってどうするの！？星影殿と星蓮殿のご両親にも、謝りなさい・・・・！」

下唇を噛みながらわびる者達。相手が、心から謝っていないことは、丁夫人もわかっていた。それでも謝罪の言葉を言わせた。

「お前達が丁家の一族でも、私や伯孝殿達とでは、身分が違うのですよ・・・！！？」

上下関係を、劉家・安家の前ではっきりと見せつける為に。

「・・・出て行きなさい！目障りだから早くして！」

冷ややかな丁夫人の言葉を受け、金の亡者達は、足早に部屋から出て行く。

立ち去る間際、全員が、恨めしそうに誘導役をした男を睨みつけた。

（わしの口車に、乗る方が悪いんだろうが・・・！）

それに対して、厳飛龍は、笑顔で手をふりながら見送ったのだった。

第四十三話　誤解は続くよ、どこまでも（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
仲たがいしていた厳飛龍と丁夫人でしたが、なんとか協力（！？）出来たみたいです（笑）
息子が絡んでいるため、丁夫人は厳飛龍に対して、厳しい態度をとっています。息子が関係していなければ、もう少し優しい女性です。
その点について、この話の中で書ければいいなと思っております。
ちなみに、厳飛龍は喧嘩早い性格でもあります。

第四十四話　真実に気づいた時・・・。

部屋から立ち去る丁一族の悪巣達。後には、一部の丁夫人の一族、劉家一族、喬家一族、安家一族だけとなった。この時になってようやく、丁夫人は泣き言を漏らした。

「・・・馬鹿にして！！安家の正妻である私を馬鹿にしてっ！！」
「・・・鳳娘・・・！」
「言葉巧みに、私の林山を思う心を利用して・・・！それにつけ入るなんて・・・！！取り入るなんて！！」
「鳳娘さん・・・。」
「母心をあの連中は利用してぇ――――・・・！！悔しい・・・私・・・悔しいわ・・・！！」
「・・・丁夫人。」
「本当に情けない・・・！まさか・・・まさか、よりによって、厳先生の言葉なんかで、正気に返るなんて・・・・！」

袖を握り締めて、肩を震わせる林山の母。それにより、部屋の中は気まずい空気となる。
不機嫌になる丁夫人だったが、気分を害したのは彼女だけではなかった。

（演技っていう免罪符で、好き勝手なこと言ってくれるな・・・！）

『なんか』呼ばわりされた厳飛龍も、かなり不快な気分になっていた。

気に入らない者達の鼻を明かせたのはよかったが、丁夫人の機嫌を悪くしたのは失敗だった。ただでさえ、扱いにくい女性を、ますま

す扱いにくくしてしまったのだ。その証拠に、目の前にいる母親は、面倒くさい状態に陥(おちい)っていた。

「息子には幸せになって欲しかったの・・・！宦官になるなんて思っていなかったのよ・・・！！」

「鳳娘・・・。」

「私のどこがいけなかったの？世の中、どうにもならない事だってあるのに・・・！そこまで、あの子は星蓮殿を・・・！？」

「気にしてはいけないよ、鳳娘・・・！」

妻を気遣い、丁夫人の肩に手を伸ばす夫。しかし彼女は、そんな夫の手を振り払うと、無言で椅子に腰掛けた。

「ほ、鳳じょ――――――・・・！」

額に手をあてながら、深いため息をつく林山の母。妻に声をかける安家当主だったが、彼の言葉は途中で途切れる。なぜなら、丁夫人の体から、【私にかまわないで頂戴オーラ】が出ていたからだ。

（完全に、ふてくされてるなぁ・・・。）

こうなってしまっては、後は癒遜殿に任せるしかないか・・・。唯一、丁夫人の機嫌を直せる男・・・夫だからな～。

そんなことを考えながら、安家当主に視線を向ければ、黒雲(こくうん)を放つ女性の機嫌を取っていた。丁夫人の機嫌は相変わらずだが、あのまま続ければ、彼女の機嫌が良くなるのは確かだった。

（さすが、【粘りの癒遜】の異名を持つ男だ。）

よく真面目に、対応できるよなぁ～
いくら妻だとは言え、面倒くさくならないのかね？
まぁ・・・愛する妻相手なら、そんなに苦にならないだろうが・・・
。

（それはそれとして、この芝居はいつまで続くんだ・・・・？）

いい加減、演技することに飽きてきた飛龍。そして、今回の話し合いの主催者である劉伯孝に視線を送る。相手は、飛龍からの目配せに気づくと唇を動かした。

“も・う・す・こ・し・が・ま・ん・し・て・く・だ・さ・い！”

（『もう少し我慢してください』・・・か。）

劉家当主のこの言葉に、飛龍はその言葉の意味を考える。

（なるほど・・・つまり、不機嫌な丁夫人をなだめてから親族を帰し、その後で、われわれだけで話し合いをするということか・・・！）

“心得（こころえ）た！”

自分のいいように解釈し、口パクで答える飛龍。
星影の父からの返事を、武術の師匠がばっちりと誤解したことは言うまでもない。

「あ・・・あの！あとは・・・私達だけで話し合いませんか？」

そんな中、悪くなった状況をなんとかしようと喬夫人が口を開いた。

「星蓮と林山殿の件については、親である私達だけで話した方がいいと思いますの。」

場の空気を良くしようと、明るい口調で言う劉家正妻。彼女の言葉に、夫である劉伯孝も同調した。

「うむ、桜華の・・・妻の言う通りだ！どうでしょう、癒遜殿、鳳娘殿！？」

「おお！いいですな！その方がいいでしょう！なぁ、鳳娘！？」

「・・・・・・・・・・・・好きにすれば？」

「あ！いいです、いいです！！是非、そうしてくだされ！！」

投げやりで答える妻の言葉をかき消すように、大声で叫ぶ安家当主。そんな親達の姿に、他の親族達も納得する。

「そうですね・・・。その方がいいですわ。」

「星蓮殿が、後宮に行った以上、縁談は成り立ちませんし・・・ね？」

「同感です。今日は、これ以上話し合うことはないでしょう。」

「林山殿や星影殿ことは、ご両親が決めた方がいいですからね。」

「それに・・・丁夫人もお疲れのようですから、これ以上の話し合いは酷（こく）ですし・・・。」

「我々は、伯孝殿と癒遜殿の判断に従いますよ。」

納得したというよりも、丁夫人に対する同情が、それぞれの一族を動かしていた。

「すみません！そう言っていただけると、助かります・・・！」
「とんでもありません、癒遜殿。今日のところは、これにて失礼しますね。」
「急にお呼びして、本当に申し訳ありませんでした。」
「いえいえ、お気になさらないで下さい。伯孝殿のお呼びとあれば、いつでも参りますよ。」
「そうですよ。それでお役に立てるなら、喜んで伺いますから！」
「ありがとうございます、皆さん。そう言っていただけると、気が楽になります。」
「本当に・・・返す言葉もありません。」
「そんなに恐縮少なされないでください。伯孝殿にも、癒遜殿にも、桜華殿にも、鳳娘殿にも非はないのですよ！」
「そうですわ。伯孝殿達は、被害者なのですから・・・！」
男親子言葉に笑顔で答えると、飛龍に冷たい視線を向ける一同。

（残りは残りで、変な感じで団結してるな・・・。）

女性達の視線を受け、飛龍は苦笑いするしかなかった。そんな武術の師匠に目もくれず、彼女達は丁夫人の元へと集まる。

「鳳娘さん、お気をしっかり持ってくださいね！」
「厳先生には、負けないで下さい。」
「私達は母として、あなたの味方ですから！」
「・・・。」
「ひどいことを言われたら、いつでも私達を呼んでください。」
「その時は、私達が丁夫人をお助けしますから！」
「飛龍先生の毒気に、耐えてくださいね。いつでも、お力になりますから！」

「・・・。」

口々に、丁夫人を励ます劉家の女性陣。しかし、先ほどの身内からの裏切りが答えているらしく、丁夫人が彼女達に返事をすることはなかった。

「鳳娘、みなさん、君を心配してくださっているのだよ？なにか、お返事しないと・・・？」

「・・・。」

「・・・鳳娘。一言だけでも、お返事をしないと、失礼じゃないかい・・・？」

「・・・。」

「鳳娘・・・。」

「そんなに仰らないであげてください、癒遜殿。」

「そうですわ。鳳娘さんも、お疲れだと思いますし・・・ね？」

「私達が、一方的に言っていることですから。」

「すみません、皆さん！妻に代わって、お礼申し上げます・・・！」

そんな妻の代わりに、夫・安癒遜が丁寧に礼を述べる。女性陣も女性陣で、丁夫人の気持ちを察し、気にすることなく声をかけ続けた。

「それではこれで・・・。またご連絡くださいね。」

「私達はいつでも力になりますから！」

「お大事にしてください。失礼します。」

「桜華さん、鳳娘さんのこと、よろしくお願いします。」

「もちろんですわ。皆さん、ありがとうございます。」

こうして、まともな女性陣は、丁夫人に優しい言葉を残すと部屋から出て行く。もちろん彼女達は、去り際に【諸悪の根源・厳飛龍】を睨むのを忘れなかった。

（本当に女とは、執念深い生き物だよな・・・。）

そんな女性陣のアイコンタクトに、飛龍は苦笑するしかなかった。
しかし、微妙な笑みを浮かべたのは彼だけではなかった。

「いやはや・・・女性とは怖いものですな～」
「ハハハ・・・！まったくです。我妻ながら・・・頭が上がりませんね。」
「怖いもの知らずというか・・・団結すると怖いですね、女性は？」

彼女達の夫・・・男性陣も、苦い笑みを浮かべていた。飛龍に気遣うように、そう言うと帰り支度を始める。

「では、我々も失礼しますか？」
「そうですな～妻達が行ってしまったので。」
「伯孝殿、なにかあったらお知らせください。」
「そうですぞ！仮にも、身内なのですからね？」
「ありがとうございます。皆さんのお気遣い、本当に感謝します・・・！」
「星影殿と林山殿の無事を、心から祈っておりますぞ。」
「失礼しますよ、伯孝殿、癒遜殿。」
「はい、本日はお忙しい中、ありがとうございました。」

女性陣の後を追うように、男性陣も、口々に別れの言葉を述べると、一人、また一人と部屋を後にする人々。程なくして、広い部屋の中には、星影の両親と林山の両親、そして厳飛龍だけが残された。

「いや～・・・なかなか気の利くご親類ですなぁ～」
「・・・・・・・・あなたにも、それぐらい気が利けば、林山は

宦官にならなくてすみましたでしょうね・・・！？」
「鳳娘！？」
「鳳娘さん・・・！？」
「あなたといい勝負じゃないですか、無骨者の厳先生？」

静かな部屋で、様子見の意味も込めて言う飛龍。それに対して、ようやく口を開いた丁夫人。優しい声ではあったが、怒りが込められた負の言葉であった。そんな母親の言葉に、息子の師匠はいつもの口調で言った。

「ハハハ・・・厳しいお言葉ですな？」
「あら・・・これでも、優しく言っているのですが？」
「わしは人に媚びるのは得意ではない。あなたのご親族は、かなり得意で上手みたいですがな？」
「飛龍殿！！」
「本当のことでしょう、伯孝殿？あれを、獅子身中の虫と言うんじゃないですかなぁ～？」

「大きなお世話ですっ！！！」

飛龍の言葉をかき消すように叫ぶ丁夫人。その目は、真っ赤に血走(ちばし)っていた。

「あなたに・・・先生に言われなくても、私の親類が悪いことぐらいわかってますよ！！」
「ほ、鳳娘・・・！」
「わかっていますとも！ええ！！・・・私は嫌な母親ですわ！！」

「そんな・・・鳳娘さん！誰もそんなことは言っていませんわよ・・・！？」

「嫌な女ですよ、どうせ！林山と星蓮殿の縁談にしても・・・金銭的な取引があるとわからなければ、二人を一緒にしていませんでしたわ！」

「丁夫人・・・。」

「星影殿の妹だから――――――女性らしく振舞えない彼女だから・・・快く、安家の一族に迎える気になれなかったんです・・・！」

「鳳娘さん・・・。」

「あの子の将来を、人生を完璧なものにしたかった！だから・・・星影殿を、彼女を理由に、星蓮殿との婚約を許さなかったのよ・・・！」

「・・・鳳娘さん。」

「ひどい話でしょう！？息子の婚約を、二度もすれば、あの子の名前に傷がつくと思ったのよ！！縁談をだめにすれば、林山にバツをつけることになるから――――――！！」

「・・・わかりますわ。婚約破棄は、そう簡単にしてはいけないものですから・・・。」

「かばわないでください！！桜華さん達からすれば、ひどい話なんですから・・・！」

「そんな、私は――――――・・・！」

「星蓮殿が、李家のお嬢さんよりいい子だとわかっても、私は反対したわ！傷をつけたくなかったから・・・・！でも、その反対自体が無意味だったわ！李家の親子が、あんなのだったんだから！！」

「鳳娘さん。」

「大商家の家名を守りたいばっかりに、他の事が見えていなかった！林山のことだけ見すぎて、周りの人間をきちんと見ていなかった！！あの子の心を見て――――――！！」

そう言うと、甲高く笑う丁夫人。

「ひどい母親でしょう?そうでしょう、厳先生!?」
「ちょっと、ちょっと。わしはそこまで言ってませんぞ?」
「白々(しらじら)しい!不満のないふりをして、すまし顔で誤魔化すなんて・・・!林山もそうだったんでしょう!?」
「なにがです?」
「あの子から、私の話を聞いたんでしょう!?」
「どんな話ですか?」
「とぼけないでください!星蓮殿が連れて行かれた日、私はあのこと喧嘩をしたのです!」
「喧嘩ぁ?」
「あの子は・・・ずっと星蓮殿のことばかり言って・・・。だから私、林山に言ったんです!」
「なんと?」
「『この世の半数が女性なのですよ!今は星蓮殿が、一番いいかもしれませんが、そのうち、もっといい人が出来ます。早く忘れなさい!』・・・と、息子に言ったのですよ!!」
「はぁ~それは、ひどいですね。」
「そうよ!あの子もそう言ったのよ!『母上はひどい!』って!でもね・・・人の心は変わるものよ!?離れてしまえば、永遠にその思いが続くはずがないでしょう!?」
「そうですな、続くことはないでしょう。『綺麗な思い出』として残るでしょうが・・・。」
「『綺麗な思い出』!?」
「現実的な考えも大事かもしれませんが、物事を割り切りすぎるのも、考え物ではないですかね?固い人間になるだけで、柔軟性にかけますぞ。」
「――――――やっぱりあなたが、林山に余計なことを吹き込んだのね!!?」
「はぁ?なんですか・・・一体!?」

「言ってることが同じなのよ！！あなたが言った言葉すべてが！！」
「同じ・・・？」
「そうなんですよ、厳師匠・・・。」

顔をしかめる飛龍に、癒遜がそっと耳打ちした。

「あなたが今仰った『ひどい』や『綺麗な思い出』や『物事を割り切りすぎる』とかいった言葉は――――――最後に息子と言い争った時、あの子が妻に言った言葉なんですよ・・・。」
「林山がですか？」
「ええ・・・。普段は穏やかな子なんですが、妻の言葉で、売り言葉に買い言葉で、ひどい口論になりまして――――・・・。」
「まぁ・・・星蓮のことが絡めば、聞き分けのいい林山も変わるでしょう・・・。」

（つーか、好きな女が絡めば、理性を失うのが男だろう・・・？）

林山の父の言葉を聞きながら、口元を緩める飛龍。

「なにをコソコソ話してるのですか！？」

そんな男同士のやり取りに、丁夫人が食いついた。

「私に隠れてなにを話しているのですか、旦那様！？」
「あ・・いや、鳳娘・・。」
「厳師匠に、林山のことを言わないでください！そんな人に、教える価値はありません！」
「鳳娘！なんて失礼なことを――――」

「――――――――――したのは厳飛龍殿ですっ！！」

そう叫ぶと、拳を机に叩きつける林山の母。

「もういや！わけがわからない！！なんなのよ、この男は！」

「ほ、鳳娘・・・！」

「嫌いよ！大嫌いよ！厳飛龍なんか！！嫌いよ！」

「丁夫人！？」

「鳳娘さん、落ち着いて！」

「大嫌い！・・・返してよ・・・！林山を返して！！林山っ！！」

「鳳娘さん・・・！」

「林山を・・・安家の跡取りを！私の息子を・・・！林山・・・！！」

「しっかりしてください、鳳娘さん！」

「りんざぁぁぁぁ――――――――――――――――ん・・・・・！！」

そう言って、大声で息子の名前を呼ぶ母親。只(ただ)ならぬ彼女の姿に、慌ててなだめ役にまわる喬夫人と安家当主。それを見ながら、飛龍と伯孝は言葉を交(か)わす。

「これでは、話し合いになりませんな・・・。」

「そうですな。このままでは、殺し合いになりますね。」

「誰が原因だとお考えですか・・・？」

「わしが悪いと言いたいのでしょう、伯孝殿？」

「わかっているなら、もう少し謙虚な態度をとってくだされ・・・！・・・丁夫人の手前もあるのですから！」

「いやいや、申し訳ござらん。」

小声で注意する夫達に、飛龍も小声で答える。

「しかし、一応は終わりましたね。」

「・・・なにがですか?」

「だから、親族の前でのやり取りですよ。一件落着ですな。」

「一件落着なわけがないでしょう?まだ、星影と林山殿が見つかっていないのですよ・・・!?」

「・・・は?」

「それに飛龍殿、あなたは関係者の一人であることには変わりありません!責任を取って、娘の捜索に付き合っていただきますぞ!?」

「見つかってない・・?捜索・・・?」

「ふざけている場合ではないのです!?ただでさえ、丁夫人が心労で衰弱しているというのに・・・!」

「あれは衰弱とは言いませんぞ?凶暴化してるだけじゃないですか?」

「~心が乱れていることには変わりないでしょう!?」

怒気を含ませて言う劉家当主に、飛龍は首をかしげる。

「・・・そういう筋書きなんですか?」

「は?筋書き?」

飛龍の問いに、今度は伯孝が首をかしげる。

「筋書きとは・・・どういうことです?」

「だから、台本のことですよ。」

「台本・・・。」

「それはもういいですよ。幸い、丁夫人のおかげで、部外者達は帰ったわけですからな。今後の方針については、『林山が宦官になっ

たことと星影が尼になったことは、こちらから指示を出すまで、他言無用にしてください。』と、命令すればいいでしょう。」

「・・・飛龍殿？」

「丁夫人が林山のことを怒るのはわかりますが、わしが焚きつけたわけではないのですぞ？それはあなたも、知っているでしょう？」

「そうなんですか・・・？」

「そうなんですかって・・・そう聞いているんでしょう？」

「なにを？誰からです？」

飛龍の言葉に、動揺しながら聞き返す伯孝。その姿を見た時、彼は初めてこの場への違和感を覚える。

（・・・これも、演技なのか・・・？）

そう思い、口を閉ざす飛龍。そんな相手に、狼狽（ろうばい）しながら星影の父は言った。

「飛龍殿、誰からなにを聞いているんですか！？星影から、託（ことづけ）でもあるのですか！？」

「え、いや・・・。」

「飛龍殿！なにが打ち合わせなんですか！？なにかあるんですか！？」

「ど、どうなさったんですか、あなた！？」

「飛龍殿！？」

「その男に、なにか無礼なことを言われたんですか！？」

娘の師匠に詰め寄る劉家当主。その劉家当主の態度に、なにかあったのかと尋ねる劉家正妻と安家夫婦。

「飛龍殿・・・！やはり妻が言った通り、今回の娘達の件には、な

にか裏があるのですか!?」
「裏って・・・それは――――」
（あなた方も知ってることだろう?）
入れ替わり強奪作戦に関する話を――――――?
そう思った彼は、辺りを見回しながら言った。
「・・・ここにはもう、わしを含めて、五人しかいませんぞ?」
「だからなんですか!?」
「星影から聞いていませんか?出て行った前後に・・・?」
「え・・・?『尼になる。』と言って、飛び出していきましたが・・・?」
「・・・その後は?」
「「「「その後!?」」」」
声をそろえて聞き返す、弟子の親達。それを見た瞬間、すべてを理解する厳飛龍。それは彼にとって、信じたくない事実だった。
間違いない・・・!!

（親達は、星影達の入れ替わり奪回作戦を知らないのかぁぁぁぁ！！？）

そう考えた瞬間、ところどころで感じた違和感も合点できた。あれは、演技などではない。

（本気で、怒っていたのか・・・！？）

そうと知らず、かなり無神経なことを言ってしまった。
ひどい人間だと思われても、無理はないが――――――――・・・・！！

（まぁ・・・元から丁夫人には、よく思われていないから・・・・いっか？）

少し落ち込んでみるが、持ち前の前向きな考えで、すぐに立ち直る
武術の師匠。
そして、この状況になった理由を考え始めた。

（親達が知らないということは・・・星影が問題の書簡を出してい

ないのか・・・？）

てっきり、親族用の猿芝居に付き合わされているのだと思っていた。しかし、話を進めるうちに、演技とは思えない点がいくつかあった。演技で心配していたのではなく、本気で心配していたのだ。二人の弟子の親達は。

（単に、まだ届いていないだけかもしれないが～・・・）

それにしては、時間がかかりすぎている。ならば、出していないと判断した方がいいだろう。

（出していないと考えると・・・作戦を変更したのかもしれんな。）

入れ替わり奪回作戦は、藍田にいる時点での作戦である。都に行ってから、なんらかの理由で、その作戦を変えたとも考えられる。

入れ替わりが困難と判断したか。

あるいは、都で別の方法を見つけたか。

（捕まったという、最悪の事態も考えられるが・・・。）

もし星影達がヘマをしたのなら、藍田に役人が来ているはずである。弟子達の家族を捕まえに来ないということは、入れ替わりがばれたというわけではないだろう。

（そうかと言って、知らせるのをやめたわけではないだろうし・・・。）

星影はともかく、親思いな林山が、それを許すはずがないだろう。

どちらにせよ、星影が作戦を両親に知らせていないのは変わりない。そうなると、後のことは自分がどうにかするしかない。
奔放（ほんぽう）な弟子の尻拭（しりぬぐ）いを、師匠である自分がしなければならないのだ。

（厄介な問題を置いて行ってくれたな、あいつらは・・・！）

目の前で、自分を問い詰める星影と林山の両親にうんざりする厳飛龍。すべては、自分の差配（さはい）一つにかかっているのだと実感する。それと共に、己（おのれ）の発言次第で、ここにいる人間の首が飛ぶということも理解したのだった。

第四十四話　真実に気づいた時・・・。（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！
ようやく、厳飛龍が真実に気づきました。結構、にぶいお師匠です。
責任ある立場にありながらも、どこかのん気に構えています。
それが、厳飛龍という人間であり、星影・林山の師匠の良いところです。

余談ですが・・・丁夫人を書くのが大変でした。気性が激しい人なのですが、息子・林山が関係してくると怖くなります（笑）浮き沈みの激しい正確だと思っていただければ幸いです（苦笑）ただ・・・小説の中で、そう表現できているかどうかが心配です（大汗）
よろしかったら、コメントください・・・（平伏）

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！

第四十五話　愛弟子達の尻拭い

劉星影の妹兼林山の婚約者である劉星蓮が後宮に強制送還された。
これに対して、弟子二人が取った行動は、難攻不落（なんこうふらく）といえる女の園（その）から妹を奪い返すことだった。最高権力者のために集められた、美しい女達がいる場所・・・それが後宮。そこに、身分を偽って侵入するという星蓮の姉とその婚約者。

「「厳師匠、どうかお力をお貸しください！！」」

愛弟子二人から協力を求められ、義侠心から快く承諾した自分。
弟子達のために、資金を提供し、宦官証明書を偽造した自分。
若い二人の無謀な作戦を、いろいろと忠告しながら見送った自分。

「林山が、（星蓮奪回作戦に）集中できないので、父上達に（星蓮奪回作戦を）知らせることにします！」

その弟子の言葉を信じ、両親やその親族の前で、悪い師匠を演じた自分。
ふてぶてしくて、無責任な男を演じた自分。
必死で、猿芝居をしていた自分。

（わしは演じていたのだが・・・。）

「どういうことですか!?飛龍殿!!」
「筋書きとはどういうことですか?どんな筋書きですの!?」
「厳師匠!!あなたなにか知っているのですか!?だからそんなことを仰るのでは!?」
「そうですわ、飛龍先生!心当たりがあるなら黙ってないで仰ってください!!」

・・・・・弟子達の両親は、演じていたわけではなかった。

伯孝殿は、本気で自分に問いただしていた。
丁夫人は、本気で怒り散らしていた。
癒遜殿は、本気でこの事態にうろたえていた。
喬夫人は、本気で娘達を心配していた。

「どこにいるのですか、星影は?娘は――――――――!」
「林山はどこなの!?林山は、息子は――――――!!」

「「「「あの子は、無事なのですか!!?」」」」

――――――――――――本気で、自分の子供のことを心配していた。

（と、いうことは・・・・つ～ま～り――――――――――――・・・・！！？）

自分に詰め寄ってくる親達を見ながら、飛龍はひどい頭痛を覚える。

（あいつらぁぁぁ――――――――――――特に星影っ！！）

この場にいない相手に対して、心の中で激しいツッコミをする武術の師匠。

（自分の親達に、星蓮奪回作戦を作戦知らせてねぇのかぁぁぁぁぁ！！？）

そう思った瞬間、背筋が凍りつくのを飛龍は感じた。

冗談じゃないぞ！！つーか、星影！本当に書簡を送ってないのか！？
わしは知らせたものだと思って、話を進めていたんだぞ！？
お前がきちんと、連絡してるもんだと思って、わしは芝居してたん

だぞ！？
親達以外にバレないように、親族の前で、本当に林山を手術したと嘘をついたんだぞ！？
尼志望でもないのに、お前が尼さんになったみたいに言ったんだぞ！？
それがお前・・・肝心の両親は、なんにも知らねぇじゃんか！？
自分で言い出しておいて――――無責任にも程（ほど）があるだろう！？

（とにかく、それはそれとして！！・・・・まいったなぁ～！）

彼の感情がツッコミを連発する一方で、理性の方は別のことを考えていた。

（親達が知らないとなると・・・ここで真実を知らせるのは、いろいろと都合が悪いぞ・・・！）

これから自分が、どう動くべきか。

星影が事前に作戦を知らせていないとなると、代わりに自分が説明しなければいけない。心配する親達に、子供の無事（！？）を知らせてもよかったが――――――――

「どういうことですか、厳先生！？筋書きや台本とはなんですか！？」
「え・・いや・・・！」
「林山と関係があるんですか！？息子に関係があるんですか！？ねぇ！！」
「ちょ、ちょっと！丁夫人！」

「林山の居場所を知っているのですか!?そのなのですね!?会わせて!息子と会わせて!!」
「ちょ・・・落ち着いてくだされ!」
「あの子が玉無しでもかまわなの!生きていれば、それで私はいいの!!」
「だから落ち着いて、丁夫人!」
「子供が作れない体でもいいの!跡継ぎは、養子を取るからそれでいいの!私は、息子がそばにいてくれれば・・・それでいいの!」
「あ、あの～・・・。」
「林山が・・・林山が、私の側から離れるのがいやなのよぉ～!!」
「あ――・・・。」
「林山・・・!林山・・・私の坊やぁ――――・・・!!」
「・・・。」

（真実を伝えれば、これ以上に大騒ぎするだろうな・・・。）

自分の胸をつかみ、乱暴に衣服を揺さぶり、声を上げて泣く女性。

（・・・この女に、一から説明するは大変だろう・・・?）

星影の両親はともかく、林山の母・・・丁鳳娘が、その話を大人しく聞くとは思えない。
林山の母に、息子の体は無事だと知らせることが困難だろう。
相手が、最後まで自分の話を大人しく聞くとは思えなかった。

付け加えれば、さらなる修羅場が、その先に待っているような気がしたのだ。

（わし・・・二人からの連絡を待つように説得出来るか?）

「うっうっ、林山！母が悪かったわ、私が・・・！」
「・・・。」
「お願いだから、私のところに帰ってきて！林山・・・！！」
「・・・。」

（・・・・・・・・決めた。）

いい加減、林山の母の声を聞きあきていた飛龍は、ある決断を下す。

（本当のことは、しばらく黙っておこう。）

真実を、胸にしまう決断をしたのだった。

飛龍がそう決断したのには、いくつかの理由があった。
まず、この問題が複雑だったことにある。
星影と林山が、星蓮を後宮から奪い返そうとしていること。
後宮に入るために、星影と林山が入れ替わったこと。
女の身であり我なら、宦官になった星影のこと。
星蓮救出後は、都はもちろん、藍田から離れた知らない土地で、林山と星蓮が新婚生活を送ること。
星影が、星蓮救出後は、劉家や安家に迷惑をかけないために、尼となって罪の償い（！？）をすること。
・・・・・それらを、慎重に話さなければならなかった。言葉を選び、相手に気を使いながら話すことなど自分には無理だった。口

は達者だが、細(こま)やかな対応をするのが得意ではない。言い方を誤(あやま)れば、さらなる誤解を与えてしまう可能性がある。

次に、真実を聞いて、弟子の両親達が騒ぎ立てる恐れがあった。万が一、その話を使用人達にでも聞かれてしまえば、【噂】として、人の口から口へ伝えられる恐れがあった。仮に、使用人でなくても、偶然その話を聞いた人間によって、バラされる危険もある。バラされなくても、脅迫の材料にされる場合もある。もっとも、聞かれてしまった時点で、こちらが不利になるのは目に見えている。

そして今、一番考えられる可能性として、弟子達に会いに行かれることだった。子供のことが心配になった母親が、都まで出向いてしまう可能性がある。【母親】というのが、どちらの女親かは、言わなくてもわかること。あれほど、息子がかわいい彼女なのだ。しかも、武術の心得まであるのだから、息子を連れ戻しに行くと言い出すに決まっている。そんなことをされれば、星蓮を救い出せても、二人が夫婦になることは出来ない。そうなれば、星影が黙っているはずがない。今度は別に、もう一騒動起こるであろう。

（『知らぬが仏』なら、『言わぬも仏』だろう・・・。）

それら、すべての危険を防ごうと思えば、言わないことが安全だと飛龍は判断したのだ。

（大体(だいたい)、なんでもかんでも親に教えるなんぞ、五、六歳の童(わらべ)がすることだろう？）

最初から、両親に作戦を知らせるという提案に飛龍は乗り気でなかった。

星影にしても、林山にしても、若さに任せて無茶なことをする。その危(あや)うさを現(あらわ)したのが、星蓮奪回作戦の報告だった。只(ただ)でさえ、危険極まりない作戦をしているのに、これ以上の危険の負荷(ふか)をかける

必要はない。例えるならば、油瓶を抱えて、火の海を走り抜けるようなものである。
だから、星影の危険な作戦を、彼は握り潰すことにしたのだ。
もっとも、飛龍が言わずにおこうと決めたのは、面倒くさいというのが一番の理由だったりする。

（まぁ・・・生徒の悪いところを治すのが、先生の役目だからな。）

自分の中で都合よく、気持ちを変換させると、視線を弟子の両親へと向ける飛龍。
ところが――

「飛龍殿っ！！」
「飛龍先生！！」
「厳師匠！！」
「厳先生ぇぇぇぇ・・・・！！」

そこには、鬼のような表情で自分を睨む両親の姿。

（・・・うん。絶対に黙っておこう。）

その姿を見て、再度、心に固く誓う飛龍。

これ以上の面倒は、ごめんだから。
わしは、弟子の尻拭いをしなければならないのだ。

そう考えると、事態を収拾するための行動に彼は出た。
捲くし立てるように聞いてくる親達に、飛龍は体ごと彼らに向きなおすと言った。

「伯孝殿・・・ものは相談なのですが・・・。」
「なんでしょうか!?」
「この件は、わしに任せていただけませんか?」
「はぁ?どういうことですか・・・!?」
「あなた方のお子さんの件を、わしに任せていただけないでしょうか?・・・と、いうことですよ。」
「飛龍殿にですかぁ!?」
「左様。お任せくだされ。」
「待ってください!任せると言っても・・・どうなさるおつもりですか!?」
「そうですわ、飛龍先生!星影も、林山殿も・・・都に行ってしまったんですよ!?探すにしても、私達が探した方が――――」
「心配無用。あて(・・)があるのですよ。」

「「「あて(・・)!?」」」

飛龍の言葉を受け、声をそろえて叫ぶ弟子達の両親。

「そ、そそそそそ、それじゃあ!厳先生は息子の居場所を知っているのですか!?」
「まぁ・・・あては、ありますので。」
「どこです!?どこに林山はいるのですか!!?」
「知りたいですか?」
「当たり前でしょう!?もったいぶらずに言ってください!!」
「いいでしょう・・・。その代わり、二つほど条件があります。」

「「「条件!?」」」

「二つもですか!?」

「嫌なら教えませんが?よろしいですか、丁夫人?」

「くっ・・・!い、嫌では・・・ありませんが・・・!?」

「そうですとも!是非、お聞かせください!」

怒りを堪えながら言う丁夫人と、滅相もない、と言いながら答える安癒遜。そんな夫婦を見比べながら、得意げに飛龍は言った。

「簡単ですよ。一つは、星影と林山の話は、しばらくの間他言無用にしていただきたい。」

「他言無用って・・・」

「もちろんですわ!厳先生は、私達が林山のことを世間に言うとでも思ってらっしゃったんですか!?」

「いや・・・丁夫人はしゃべらないとわかっていますから。」

「なんです!?その言い方は!?」

「まぁまぁ落ち着きなさい、鳳娘!それで?もう一つの条件はなんでしょう!?厳師匠!?」

「ええ・・・。もう一つは、星影と林山の件を、わしに一任し、極秘に扱っていただきたいのです。」

「飛龍殿に、星影達のことを一任!?」

「それも、極秘にですか・・・?」

「そうすれば、星影と林山に、会うことが出来るでしょう・・・!」

茶化しながら言う飛龍に訝しそうにする親達。そんな中で、一人、丁夫人だけは笑いながら応じた。

「ホホホ!・・・いいでしょう・・・!厳先生の条件を、私はのみ

ますわ。」
「鳳娘!?」
「丁夫人!?」
「おお！わかってくださるのですかぁ～!?」

丁夫人の言葉に驚く親三人と、意外だと言わんばかり尋ねる飛龍。
そんな息子の師匠の問いに、丁夫人はカッと目を見開くと言った。

「その代わり・・・私達の要望にも、きちんと答えてくださいね！？」
「つまり、林山・・・ご子息と再会させることですか?」
「もちろんです!それ以外に、私達の望みはありません!それとも、そんなこともわかりませんの・・・!?」
「ご心配なく。確認のために聞いただけですから。」
「それならいいですが・・・くれぐれも、息子と会わせるという約束を守ってくださいね！」
「もちろんですよ。そんなにわしは、信用できませんかな?」
「当然ですわ!!もしあなたが、林山と会わせるという約束を破った時は――――――!」
「・・・なんでしょう?」

「息子・林山と、星影殿をたぶらかし、誘拐した罪で、役所の獄につなぎます・・・!?」

ほとんど、脅迫の意味を込めて言う丁夫人。それに対して、あっけらかんとした口調で飛龍は答えた。

「いいでしょう。藍田から追放するなり、なんなりど～ぞ。」

「あら、藍田から（・・）とは限りませんよ?この（・・）世から（・・）・・・という可能性も考えておいてくださいね・・・!?」
「ハハハ!また一つ、丁夫人絡みの『笑える思い出話』が増えましたな～?」
「本当に、減らず口ですわね・・・!?」

こうして、見えない火花を散らせる林山の師匠と母親。そんな二人の間に割って入りながら、劉家当主は飛龍に言った。

「飛龍殿・・・・あなたを信じないわけではありませんが、一体どういった方法で星影達を・・・?」
「わしに一任してくださるのでは?」
「お任せしますが――――――――せめて、どうするかぐらいはお聞きしても・・・?」
「一任しているなら、野暮な話は無用です。」
「しかし――――――!」

「無用ですぞ。」

劉家主人の質問を、目で制すと口だけで笑う厳飛龍。その笑みは劉家主人を始め、周囲の者達を圧倒するなにかがあった。

「それではこれより、劉星影・安林山・劉星蓮の話は他言無用。この件はただ今より、厳飛龍にすべてを一任し、極秘扱いとさせていただきますぞ!よろしいですな・・・!?」

有無を言わさぬ、侠客兼武術師範の言葉。厳飛龍の発言に、誰も反論しなかったが・・・。

（何故だ・・・？何故、悪巧(わるだく)みをした時の星影の姿を思い出す！？）

劉伯孝の脳裏には、ドス黒く笑う娘の姿が浮かんでいた。
何故、そんな姿を思い出したのか、彼が知るすべはなかったが――
――――・・・・・

（（（本当に・・・任せてよかったの・・・・・？））））

他の三名も、同じような不安に駆られていた。
その場にいる全員が、言葉では言い表せない恐怖を覚える。
こうして話し合いは、親達を不安の渦に巻き込んだ男によって、半場強制的に終了させられたのだった。

・　・　・　・　・

弟子の不始末を師匠が上手くまとめた頃、問題の弟子達は重苦しい空気の中にいた。
林山から促(うなが)され、星影はこれまで後宮で起こった出来事を話していた。
最初は、後宮での宦官達の実態についての感想だった。
それが、宦官にならなければ生きていけなかった者達の家庭事情。

そこから、友達になった張空飛・王琥珀の話になった。
王琥珀の話が出たところで、同じ宦官でありながら、琥珀が『伯燕(はくえん)』という名前を持つ怪しい人物であること。
さらに、王琥珀こと伯燕(はくえん)が黒ずくめの男を従え、皇帝陛下を殺そうとしたこと。
そして、その集団に襲われていた皇帝陛下を助けたこと。
結果的に、皇帝の側仕えの高級宦官に出世してしまったこと。

・・・・など等を、事細(ことこま)かに話していったのだ。

最初は驚きつつも黙って聞いていた林山だったが、話が深刻になるに連れ、その表情は硬いものへと変わっていった。

「・・・・以上が話の大筋なの・・・。」

一通り話終えると、林山が入れてくれた湯を一気に飲み干す星影。

「・・・・つまりお前は、俺に成りすまして入った後宮で、喧嘩はする、賊は蹴散らすし、
皇帝の愛妾(あいしょう)になるといったことをしたわけか?」
「愛妾にはなっていない!だが・・・それ以外はすべて事実だ。」

林山の言葉に、一部修正を加えると彼女は言った。

「だが別に、好きでしたわけじゃないんだ。喧嘩にしても、人を見下す態度が許せなかった。賊を蹴散らしたことも、不埒(ふらち)な輩を放って置くわけにはいかなかった。皇帝の・・・お側仕えになることを決めたのも、星蓮の情報を知るいい機会だと思ったからだ。愛妾になるつもりはもちろんない!!すべては――――・・・その・・・成り行き・・・かな?」

「成り行きか？」
「成り行きです。」

念を押して聞く林山に星影は黙って頷く。
それを最後に、部屋の中は沈黙が漂う。

（やだな～・・・もしかして、林山の奴、怒ってる？）

「林山・・・怒ってるの？」

心配になり、声に出して聞いてみるが、返事は返ってこなかった。
それが、星影の不安を煽り、しゃべらせると言う言動に駆り立てた。

「悪かったよ、林山！でも仕方ないじゃん？」
「・・・。」
「だってさ、初日にいきなり一方的な因縁つけられたら、無視なんて出来ないだろう！？」
「・・・。」
「琥珀の怪しい一面を発見したことだって、星蓮を探しに行った帰りだったんだぞ？たまたま、居合わせちゃっただけだよ！？」
「・・・。」
「陛下を助けたことにしても、陛下だなんて知らなかったんだよ！？あんな怪しい変態・・・誰が陛下だと思う！？救出したのは、偶然の産物じゃないか！？」
「・・・。」
「意地悪な先輩達を助けたのだって、私が原因で殺されれば、後々で面倒だと思ったからよ！噂とかされたら、目立つじゃないか！？そしたら、星蓮探しの邪魔になるだろう！？」
「・・・。」
「そりゃ・・まぁ、陛下の側仕えになったのは、危険もあると思う

けど、うまく色仕掛けをかければ、星蓮を見つけられるかもしれないじゃん!?」
「・・・・。」
「とーにーかーくっ!仕方がなかったんだよ!!すべては・・・星蓮を助けたい一心!林山のためにも、短期勝負で、片付けたかったんだよ!」
「・・・・俺のため?」
「そうだよ!仕方なかったんだよ!!」
「・・・そうか、仕方ない・・・か。」
「わかってくれたの、林山!?」
「仕方ないよな・・・・。」
「そうだよ!仕方ないよ。アハハ!」
「そうかぁ〜ハハハ!」

「「ア――――――ハッハッハッハッハッ!!」」

二つの重低音(じゅうていおん)があたりに響く。その場が和(なご)んだように見えた次の瞬間。

「なにが仕方ないだ!?目を付けられて!暴れまわって!死に掛けて!色物になって!お前ろくなことしてねーじゃん!!?」

額に青筋を浮かべながら激怒する林山。一方、耳元で叫ばれた星影はたまらない。即答で、言い返した。

「仕方ないだろう!!私だって好きで愛妾になったわけじゃない!

！別にお前に迷惑はかけてないだろ！？」
「十分かけてるだろうが！仮にもお前は俺のふりをしてんだぞ！？もう少し考えて行動しろよ！！」
「私は良かれと思ってしたんだぞ！・・・・確かに少々無茶はしたが。」
「どこが少々！？一歩間違えれば、死んでいたかもしれないんだぞ！？そうなったら星蓮はどうなる！？助けるられねぇじゃんか！？」
「私はそんなヘマはしない！てか、林山・・・お前なにかと言うと星蓮、星蓮て・・・色ボケもいい加減にしろよ！！」
「なっ！？いいだろう別に！俺は星蓮が好きで・・・・彼女が心配だから言ってるんだ！」
「冗談だよ。相変わらず生真面目だねぇ～林山殿はぁ？」

星影の皮肉めいた言葉に空気が張り詰める。普段はこんなことで喧嘩をしないのだが、今日は違っていた。長安に来てから、慣れない環境と途切れることのない緊張感と、周りへの必要以上の警戒心からお互いにストレスが溜まっていた。

「なんだと～！？もういっぺん言ってみろ！この無謀女！」
「何度でも言ってやるよ！このヘタレ男！！」

いつもなら、どちらかが折れるか譲るかする二人だが・・・・。

「普段から、考えることが危なすぎるんだよ！まぁ・・・・だから、入れ替わりとか思いついたんだろうけど・・・！？」
「ごめ～ん！かび臭い、古い頭の奴から見れば、私の策はまばゆすぎたかもね～？」
「そうかもしれないな・・・！星影は、神経も性格も図太いから。」
「・・・上等じゃねぇーか？いてもいなくても頼りにならねぇ色男・・・！？」

「そりゃぁ、こっちの台詞だよ。常識皆無の能天気女・・・！」

今の二人は、とても己の我を抑えるほど余裕はなかった。

藍田で両親と師匠がややこしい事態になったように、今度は都にいる星影と林山が、修羅場へとコマを進めていた。

無論、この場を収める人間がいないことは言うまでもない。

第四十五話　愛弟子達の尻拭い（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！
これにて、藍田での修羅場は、一応終了です。少し、長く引っぱりすぎたかもと、反省しています（冷汗）でも、最後は厳師匠がしめる形でまとまったので、よかったと思っています（汗）なにも知らなかったお師匠が真実に気づいた時・・・その行動は早かった的なまとめかたにしました（苦笑）ちなみに、星影の大胆な性格は、厳師匠譲りのつもりです（笑）ところどころ、似ているように書いたのですが、読んでいて伝わったでしょうか・・・？読んでくださった方が、読みにくくなかったかどうかが・・・心配です。
とりあえず、星影の過去について少しだけ書けてよかったと思っています（笑）林山と星影・星蓮の関係や厳師匠との出会い、星影の過去の恋愛が書けてよかったです（苦笑）
次回からは、星影と林山のやり取りになると思いますので、よろしくお願いします（平伏）
楽しく読んでいただけるように、頑張ります！！

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！
ちなみに・・・早速、教えてくださった方がいました。個人情報を考慮し、お名前は言えませんが、本当にありがとうございました（土下座）！！
今後は、もっと気をつけて書こうと思います・・・！！

第四十六話　義姉弟喧嘩（前編）

月がかげり、闇が広がる部屋の中。

「お前が楽できるのは、私が全部やって（・・・）あげてる（・・・）からだろう・・・？可愛い可愛い義弟さん・・・！？」

「その可愛い義弟のおかげで、お義姉様は後宮に忍び込むことができたんでしたよね～？

俺が親切に、身分を貸して、あ・げ・て・い・る・か・ら。」

そんなどす黒い（？）場所にあわせるように、優しい口調で罵りあう二人の男女。

「それが、義理の姉に対する口の聞き方か・・・林山？」

「これでも、かなりの敬意を払っているんですけど・・・星影義姉さん？」

言わずと知れた、武官の衣服をまとった劉星影（りゅうせいえい）と寝巻き姿の安林山（あんりんざん）であった。

先ほど、久方（ひさかた）ぶりに再会した星影と林山。しかし、その喜びをわかちあうほど、穏やかな状況ではなかった。

「前々から言おうと思っていたんだが、なんでも暴力で解決しようというお前の考え方は賛成できないぞ・・・星影！」

「じゃあ、私も言わせてもらうわ・・・林山。優しい言葉を使うだけじゃ、優しい男とは言えないよ？」

「そうだな・・・俺のこの優しさの八分（はちぶ）でも、お前に恵んでやれればいいんだけどなぁ～・・・無理だよな？」

「・・・おい！目上に、なめた口聞くじゃねぇぞ・・・！？」

「そっちこそ、勝手に格付けしてんじゃねぇーぞ・・・？お前の数々の迷惑行為のせいで、俺が今までどれだけ苦労したと思ってんだ・・・！？」

密談（！？）をしていることもあり、部屋に明かりはつけていなかった。

そのため、相手の顔はもちろん、表情もわからない。

声を頼りに、自分達の感情を表現するしかなかったが・・・。

「へぇ～・・・星蓮一人、いや・・・大事な婚約者一人、守れなかった奴がよく言うよ・・・！」

「ほぉ～・・・星蓮一人、いや・・・大事な妹一人、未だに見つけられない奴がよく言うよ・・・！」

二人が、怒っていることは間違いなかった。机をはさんで睨みあう星影と林山。しばしの沈黙の後で、先に口を開いたのは義姉の方だった。

「仕方がないだろう？新米の私が、後宮で自由に動くことは難しいんだ・・・！なんせ、陛下のための女の貯蔵庫なんだからな・・・！」

「・・・そうだな。今回は、場所が『後宮だから』ってことで、言い訳できるよな～？適当なお前の行いを、誤魔化せるもんな・・・？」

「なによそれ？林山は私が真面目にしてないって言いたいわけ・・・！？」

「冗談に決まっているだろう？へぇ～お前、真面目にしてないのか

？図星かよ・・・！？」

「おい！その言葉今すぐ取り消せ・・・・！いくら未来の義弟だからって、言っていいことと悪いことがあるだろう・・・！？」

「俺は、よかれと思って言っているんだけど？こうでも言わないと、気にすることもないだろーが・・・！？」

「お前は私の後宮での生活を知らないから、そんなことが言えるんだよ。四六時中、常に誰か側に人がいて、まったく動けないんだぞ・・・！？高級宦官だからって理由で、自分でできることも、勝手に誰かがしてるし・・・！」

「いい気なものだな。こっちは毎日ヒヤヒヤしながら過ごしているのに、お前は向こうでお気楽暮らしか？」

「どこがお気楽だ！？上司には怒鳴られるし、先輩連中は目の敵にしてくるし、同期の奴らは嫌味を言うし・・・！」

「針のムシロだとでもいいたいのか？つーか、それは昔の（・）話なんだそう？」

（高級宦官になった今、そんな苦労はないだろう？）

心の中で、星影の言葉を皮肉る林山。

「そうだよ！散々人を馬鹿にしといたくせに、今度はそいつらが媚びてくるんだ！！」

そんな親友の言葉に答えるように、星影は怒りを露わにした。

「地位が上がった途端に、コロッと態度を変えたんだ！馬鹿にした相手に、ヘコヘコと謙りやがる・・・！」

「それが普通だろう？宮中の上下関係は厳しいんだぞ。」

「あれは身分以前の問題だ！金のためならなんでもするような恥知らずばっかりなんだぞ！？金さえもらえれば、誰にでも尻尾を振る

恥知らずなクズ共さ！！」
「そりゃそうだろう。皇帝のお気に入りになったんだ。尻尾を振られるのは当然だろう？」
「なんだよ！その言い方！？」
「なにが不満だ？ちゃんと返事をしているだろう？」
「その言い方がいやなんだよ！めっちゃくちゃ投げやりな返事じゃないか！？ちゃんとしろよ！」
「お前こそ、ちゃんとしたらどうだ？陛下公認の【あ・い・しょ・う】なんだからな？」
「林山！？」
「たいしたものだな・・・。女の姿より男の姿でいる方が、色気があるんじゃないのか～？」
「テメ――――――！林山っ！！」
林山の胸倉（むなぐら）を掴んで、睨みつける星影。そんなの義姉様子を気にすることもなく、目を半開きにしながら義弟は言った。

「本当のことだろう？な～に、熱くなってんだか・・・？」

吐き捨てるように言うと、無遠慮に星影の手を払いのける林山。
生意気な義弟の態度に、拳を震わせる星影。

（殴りてぇ・・・！めっちゃ、殴りたい・・・この男を！！）

林山をボコボコに殴ってしまいたいのだが――――――――・・・！！

（・・・・・出来ない・・・・・！！）

殴り合いの喧嘩など出来ない。
ここで、殴り合いの喧嘩など出来ない・・・！
そんなことをすれば、騒ぎを聞きつけて、宿の人間や泊り客が来てしまうだろう。
それで見つかるのは、かなりマズイ。
普段の格好（男装姿）ならまだしも、今の自分は武官の服装（鎧なしの姿）をしているのだ。
宮中の役人が、夜中に宿で騒いでいるとなど、不信極まりないだろう。
仮にこの場を逃げ切れたとしても、追っ手をかけられる可能性もある。
厄介な事態になるのは目に見えていた。

（・・・こいつと殴り合いはできない・・・！出来るはずがない・・・！！）

出来ない理由があるだけに、星影が実力行使に出ることはなかった。
拳を握り締め、必死で己の短気な気性を抑える星影。
平常心を取り戻そうと星影は頑張った。

（ちくしょう・・・林山め・・・！悔しいが、ここは我慢だ！！）

義姉が耐える一方で、義弟はというと――――――

（・・・へぇ～意外と冷静なんだな・・・。）

目の前で拳をふるわせる親友を、冷静に観察していた。
いつもの彼女なら、ここら辺で拳の一つでも自分に向けてくるところだが、星影はそれを我慢していた。恨めしそうに自分を見るだけで、行動を起こすことはなかった。

（妹を救うという一念が、こいつをここまで我慢強くするとは・・・。）

そんな星影の姿に、少しずつ落ち着きを取り戻す林山。
多少なりとも、自分が大人気ないことを言ったと彼は思い始めていた。
嫌な言い方をしたと自覚して始めていた。
自分の態度が、少しきつかったと理解していたのだが――――――

（だからと言って――――――――それとこれとは、話が別だ・・・・・！）

星影が、安林山の・・・自分のふりをして行った数々の無謀な行為。

（気に入らない上司を叩きのめしたのは大目に見るとして、陛下を陛下と知らずに助けたり、賊を倒したり、狼藉を働いたり、敵を助けたり、寵臣になったり、下賜された宝物をぶちまけたり、陛下を騙したり、陛下の男寵と喧嘩をしたり、兵士に当身を食らわせて追剥をしたことは――――――――――――――――！！）

絶対に許せん・・・・・・・・・・！！

それを考えれば、

（いつものようには許せない・・・・！！！）

いくら冷静さを取り戻しても、星影に対する怒りは収まらない。
長い付き合いから、今の星影の心中を林山はよくわかっていた。
もちろん、彼も拳を合わせる真似はしたくないし、する気もない。
しかし・・・・・林山の腹の虫、怒りの虫は収まらない・・・！！

（あいつが、いくら反省しているといっても、その傍若無人（ぼうじゃくぶじん）ぶりはないだろう！？）

だからこそ、林山は自分の暴言をとめることが出来なかった。

「珍しく大人しいから、どんな重大発表かと思えば・・・・自分の失敗発表かよ？」
「・・・・なに？」
「愚痴るなとは言わないが、もう少し自覚してくれよ。潜入捜査をしてるってことをな・・・！？」

その怒りを【拳】ではなく、【口】に込めて勝負に出たのである。
これに対して、星影は軽く眉を動かす。

（こいつ、口でカタをつける気だな・・・・！）

相手の考えを察し、一瞬、頭に血が上った星影だったが――――

（面白い！その勝負、受けて立とうじゃないか・・・！！）

売り言葉に買い言葉。

相手のやり方に乗ったのである。

やると決めたからには、徹底的にやる星影。

口元だけで笑うと、林山から手を離す星影。

そして、微笑を浮かべながら言った。

「・・・それは悪かったな！私は林山と違って、コソコソと上手に、隠し事ができないんだよね～？薬妙寺、ああ薬妙寺、薬みょー寺！」

嫌味を込めて放たれた星影の言葉。それは、林山を不快にするのに十分な言葉だった。

「・・・桂蓮のことは、関係ないだろう？」

ぶっきらぼうに言う林山に、星影は冷やかし口調で返した。

「はぁ～？なんで、桂蓮のことが出てくるの？私は、お寺の名前しか言ってないんだけど～？なのに、今話すなんておかしくな～い、林山く～ん？」

「・・・嫌味な奴だな・・・！桂蓮のとのことは、俺から星蓮に直接話す。お前には関係ないことだ、星影！」

「まぁいいけど。でもさ～あの日だって、お前が星蓮の側から離れなきゃ、星蓮は後宮なんかにつれて行かれなかったんだけどな～？・・・いつもは、引っ付き虫みたいにくっついてくるくせに、肝心

なところで役に立たないなぁ～」
「俺が訪ねに行った時は、すでに前が連れ出した後だったろうが！？」
「早く来ないのが悪いんだよ。市場の果物だって、早く行かないと売り切れるだろう？」
「可愛い妹を果物扱いしてんじゃねぇ！それが、実の姉の言葉か！？」
「姉だからこそ、言える言葉なんだよ。奴ら、よ～く熟れた食べごろの、可愛い星蓮をもぎ取っていきやがったんだ・・・！食べごろに熟れた、可愛い可愛い星蓮をっ・・・！」
「ばっ・・・！ひ、卑猥（ひわい）な表現するな！女の癖に、いかがわしい言葉使いやがって・・・・！」
「イカガワシイ？・・・ほっほぉ～どうイカガワシイのかな？」
「なっ！？」
「私の可愛い妹のどこが、イカガワシイ？純粋に、可愛い妹を果物に例えて褒めた私の言葉のどこが、イカガワシ～イ？」
「せ、星影・・・・！」

「お前さ、欲求不満なんじゃないの？星蓮には黙っててやるから、郭（くるわ）にでも行って、きれいなお姉さんと一戦（まじ）交えてきたら？」
星影の言葉で、林山の顔に赤みが差す。からかうつもりでいった浮気を勧める星影の一言。それは、林山の星蓮への愛を侮辱する一言。林山の怒りの炎に、油を注ぐ行為だった。

「――――――――――――そんなことするかぁっ！！！」

怒りに任せて、乱暴に机をたたく林山。途端に、小さな叫び声が上

がった。

「あっち！！」

「なっ・・・え！？」

見れば、星影の着ていた服が濡れていた。林山が机を叩いた衝撃（しょうげき）で、湯の入った器（うつわ）が星影の服にかかってしまったのだ。

「あっつぅ～！」

湯のかかった場所に、息を吹きかける星影。それにより、林山の怒りの炎は小さくなった。

「せ、星影・・・。」

（しまった・・・！）

やっちまった・・・。

いくら星影の言葉に動揺したとはいえ、湯をかけてしまったことはよくなかった。

やけどになっていないか？赤くはれていないか？水ぶくれになっていないか？

そんなことを考えながら、林山は星影に声をかけた。

「す、すまない、星影！大丈・・・・」

「――――――――林山テメ～！！」

林山の言葉をかき消すように叫ぶ星影。それとあわせるように、彼

女は席から立ち上がった。

「やりやがったなっ!?汚ねぇ真似しやがって!」
「なっ・・・なんだと!?」
「口で負けたから、こんな仕返しをしたんだろう!?」
「なにぃ――――――――!?」
「熱ぅ～!信じられない・・・最低だな、お前!」
「馬鹿!誤解するな!狙ってしたわけじゃないんだぞ!?」
「わざとじゃないっていいたいのか・・・?」
「当たり前だろう!?ほら、早くこれで拭けよ!」

そう言って、懐から布を出し、星影の服を拭こうとする林山。しかし星影は、そんな親友の手を払いのけると乱暴な口調で言った。

「狙ってない?わざとじゃない?それが詫びの言葉かよ!?」
「星影!?」
「お前って・・・見かけによらず、陰湿なんだな・・・!?」
「ふざけるな!俺は、そこまで器の小さい男じゃない!」
「もういい!お前のおかげで、借り物の服が汚れたじゃないか!?返す時が大変だろう!?」
「盗んでおいて『借り物』だと、よく言えるな!?たいした根性だよ、たくっ!・・・陛下は一体、こんな女のどこが気に入ったのやら・・・・!」
「聞こえてるぞ、林山!私だって、好きでお気に入りになったんじゃない!このわからずや!!」
「それはこっちの台詞だ!お前こそ、俺がどれだけ苦労しているか知らないくせに偉そうなことというな!!この世間知らず!!」
「うるさい!世間知らずなのは私のせいじゃない!!この世の中の決まりごとに従ったからそうなったんだ!!男ばっかりずるいんだよ!!単純なくせに、馬鹿!!」

「馬鹿はお前だ！男は国を守り、女は家を守る！それがこの国の・・・国学・儒学の祖である孔子の教えだぞ！！星影・・・お前の言い方は、知らない者が聞けば、孔子様に刃向(はむ)かっていると誤解されるぞ！？」

「勝手に誤解させればいい！勘違いした奴が無能なんだ！！孔子様は尊敬すべきお方！！私も尊敬してる！！だが、彼の教えの使い方は間違っている！！」

「まっ間違っているだ！？お前・・・その考え方の方が、どうかしてるだろう！？」

「じゃあさ、仮に戦のし過ぎで、男がいなくなったらどうする！？」

林山を指差しながら問いかける星影。これに対して、林山は顔をしかめながら答える。

「なに言ってんだお前・・・。男がいなくなるって、そんなことがあるわけ――」

「もしもの話だ！女しか残ってなくて、目前まで敵が迫ってきている。それでも戦わずに家を守ってろって！？」

「はぁ～？」

「家に火を放たれて、敵が押し入ってきても逃げずに守れって！？」

「待てよ！だから・・・。」

「『貞操を守って死ね！』と言うなら、この国の民は全滅するじゃないか！？」

「だから、そんなことがあるわけ――――」

「――――ない！！なんて言い切れないだろう！？現に、星蓮はお前と結婚してないだろう！？」

「関係あるか、それ！？」

「大有りだ！人生は、必ず予想通り、計画通りになんて進まないんだよ！もしそうなら、お前は星蓮と新婚生活を楽しんでるはずだろう！？」

「そ、それはそうだが～」

星影の気迫に押され、林山の怒りは少しずつ収まっていった。

（どうしてこいつは、こうも物事を大げさに考えるんだ？）

それでいて、その例え話と話の本題を、上手に結び付けることが出来るんだ？

矛盾なく、話の流れに組み込める？

返事に困る林山に、星影は気にすることなく話を続けた。

「孔子様の教えは道徳面では良いと思う。だがな、人間の生死をかけての場では邪魔な存在にしかならない！！だから、いざという時は女だって戦うべきだ！！」

「なんでそう結論付けるんだよ！？お前は戦がしたいのか！？なんでそんな物騒な話にするんだ！！」

「女をなめるなよ！！」

「向こう（宮中）でなにがあったんだよ！？」

「私だって苦労したんだ！！星蓮は見つからないし、気苦労は増えるし！やっとの思いで抜け出してくればお前はのん気に寝てるしさ！」

「夜に寝るのは普通だろう！？寝てたらいけないのかよ！！」

「私が星蓮を連れてくるのが、昼間だとは限らないだろう！？」

「おい！お前声がでかいぞ！！少し静かにしろ！！」

「お前もだ！！大声で叫・・・・・・！！」

星影がそう言いかけた時だった。

両脇の壁が激しく叩かれる。

突然のことに、とっさに戦闘態勢に入る二人だったが――――――――

「うるせぇぇ！！」

「真夜中に騒ぐなぁ！！」

「眠れねぇだろ――――――――がっ！！」

「「！！」」

声にならない叫びを上げて、顔を見合わせる二人。

（もしかして・・・！）

（まわりの人達を起こしちゃった！？）

そう思ったと同時に、二人の体は動いていた。

「す、すみません！！本当に申し訳ない！！静かにしますから！！」

「もう二度と騒ぎません！！ごめんなさい！！」

素早く席から立ち上がると、ものすごい勢いで、両側の壁に向かって謝り始める。

「本当にすみません！お騒がせしました！！」

「明日早いんだ！静かにしてくれよ！」

「そうだ！周りの迷惑ぐらい考えろ、このボケ！！」

「あんまりうるせぇと、殴りこむぞコラァ！！」

「「わかりました！！本当に申し訳ありませんでした！！」」

入れ代わり立ち代わり、左右の壁を行き来しながら謝る星影と林山。

「すみません、すみません！本当にごめんなさい！！」

「ごめんなさい！本当にすみません！私寝言がひどくて――――――！！」

「――――――てっ！おい！！」

両脇に向かって謝る星影と林山だったが、星影の言葉に林山は非難の声を上げる。

「お前は黙っていろ、星影！」

そう小声で怒鳴ると、星影の口をふさいだ。林山の行為に、ムッとした星影だったが、すぐに彼が制した理由に気づく。

（そうだった！ここには林山しかいないってことになってるんだった・・・！）

そのまま黙り込む二人。程なくして、部屋の中は元の静けさに戻る。
それを見計らって、星影から手を離す林山。そして、疲れた口調で彼は言った。

「・・・とにかく、静かに話そう。これが原因でバレることもあるからさ。」
「わ、わかった。静かに話そうか・・・。」

そう言うと、どちらともなくため息をつく二人。
そして、小声で話し合いを再開する星影と林山だった。

第四十六話　義姉弟喧嘩（前編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！
義姉弟喧嘩の前編です（汗）たわいのないやり取りを繰り返していますが、漫才だと思って読んでくださると嬉しいです（大汗）
余談なんですが、現在でも中国における孔子様の振興はすごいんですね・・・！秩序的としては、美しいと思いました。ただ・・・女性の視点から見ると、「もう少し、行動の自由を・・・！」と、思いましたけどね（苦笑）

最後に、最近更新が遅くてすみません（平伏）

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！

第四十七話　義姉弟喧嘩（後編）

意外な仲介者達（ちゅうかいしゃ）（！？）からの制止により、最悪の空気を回避した劉星影（りゅうせいえい）と安林山（あんりんざん）。
両側の壁に耳をつけ、隣人達の寝息といびきを確認する二人。
それらを聞き届けると、壁から耳を離して席へと戻る星影と林山。
そして、完全に周囲が静寂になったところで二人は口を開いた。

「とりあえず・・・お前には、もうなにも言わないようにするよ、星影。」
「な、なんだよ、急に？」
「お前には、あまり常識は通用しないからな・・・。怒るだけ、無駄なことだよ。」
「義理の姉に、失礼なことを言うな！！」
「だから大声を出すな、星影！！」
「お前もうるさいぞ、林山。」
「もういい！あーあ、馬鹿らしい・・・。」

そう言うと、湯の入った器を口に運ぶ林山。

「まぁ、いいけどな・・・。」
「なにが？」
「少し叫んだら、すっきりした。・・・もういいよ。」
「・・・なに？」

すっきりしただ？

その言葉を聞き、思わず相手の方を見る星影。

「お前がいろいろあって苛立(いらだ)っていたように、俺も・・・苛立(いらだ)っていたんだよ。」
「り、林山・・・？」
それまでの激しい口調とは打って変わって、落ち着いた声で言う義弟。そこには、いつもの穏やかな林山の姿があった。
（毒気が抜けてる・・・。）
そんな親友を食い入るように見つめる星影。この義姉からの視線を受け、林山は静かな口調で言った。
「・・・俺はな、星影。お前が陛下に気に入られたことを、逆手に取ろうとしている姿勢が心配なんだよ。」
「心配って・・・？」
「お前は、陛下に気に入られたことを利用して、星蓮の居場所に関する情報を聞きだす気だろう？だけど、あの皇帝は一筋縄で行くご仁ではないぞ。」
「あの変態が？」
「変態言うな！・・・陛下は、十六で即位してから数十年、歴代皇帝の中でも、名君として君臨しているんだ。いくら、お前が知恵を働かせようとも、このまま嘘がバレないはずがない。」
「え？でも、偽の涙に騙されたよ。」
「成功例は忘れろ！最初が上手くいったから、次も上手くいくと考えるな！それが、失敗の元なんだぞ？」
「自信を失わないためにも、覚えておく必要があるよ。」
「安心しろ。お前は十分自信に満ち溢れすぎている！とにかく、陛下が本気を出せば、赤子の手をひねるように、お前を殺すことだってできるんだからな・・・？」
「殺すって・・・。」

ちょっと、大げさじゃない？・・・そう、顔で訴えかければ、林山は首を振りながら言った。

「今の皇帝は、自分の思い通りにならない人間を一番嫌うお方だ。もし、お前が自分の言いなりにならないと思った時、『命を奪う』という、強硬手段に出る可能性があるんだぞ？」

「言いなりって・・・。」

「心当たりはあるだろう？・・・・・・・・二度も襲われているなら。」

「あ・・・！そう言えば・・・・・。」

誘われたし、襲われた。

直球の台詞で、誘いを受けた。

林山の言葉で、嫌な記憶がよみがえる星影。

最初は陛下を助けた時。

危なかったけど、騒ぎを聞きつけた宮廷兵のおかげで、なんとか逃げることができた。

二回目は高級宦官として再会した時。

かなり危なかったけど、琥珀と空飛が来てくれたおかげで、なんとか途中やめになった。

「どちらも未遂ですんでよかったが、これからはそうとも限らないぞ？二度あることは三度あるんだ。また、狙ってくるぞ・・・？」

「うん・・・。」

林山の言い分ももっともだとばかりに、相手の言葉に頷く星影だったが・・・。

「大丈夫だよ！いざとなったら、李延年を利用するから！」

あの嫉妬深い恋人（？）を使えばいい。

陛下が、強引に関係を迫ってくれれば、延年のことを言えばいい。

『延年様に申し訳ない。』とか『裏切り行為をしてほしくない。』と言えば、あの最高権力者はやめるはず。

それに、そういう雰囲気になるとわかれば、あの手この手で、その場に延年を呼びつければいい。

そうすれば、私に手出しするはずないし、出せるわけがない。

そんな考えをめぐらせる星影に、林山は意外な発言をした。

「では・・・その男寵も、お前を利用してきたらどうするんだよ？」

「利用？」

（あの軟弱者が、私を？）

「話を聞いた限り、李延年は・・・かなりの切れ者だぞ。下手をすれば、陛下よりも厄介だ。」

「・・・確かに、陛下がいる時といない時じゃ、性格が全然違うな・・・。」

「そんな人間だからこそ、隙あらば、お前を陥れようとするぞ。今後は、後宮でのお前の行動にしても、逐一で調べるだろう・・・！」

「え～調べるかな・・・？」

「調べるさ。自分の男寵としての地位を、脅かそうとする『安林山』のことをな。・・・最悪の場合、お前を殺すかもしれないぞ・・・！？」

低い声で、ささやくように言う林山。その言葉に、星影は呆れ気味

に言った。

「おいおい、まだ頭が寝ているのか？私は、あんな軟弱者にやられるほどやわじゃないぞ。」

「馬鹿！お前を消すために、自分の手を汚すわけがないだろう？刺客やらなんやら雇って、汚い手段で殺すだろう。」

「刺客なんて、林山～」

「ああ！お前なら刺客の二、三十人ぐらい、平気で倒すだろうな！だが、毒でも盛られれば、どうなるかわかったもんじゃないぞ？」

「毒って・・・。後宮で毒が使われるなんて、稀（まれ）じゃ――――――」

「――――――ないだろう？現に、宮中で毒が使われているところをお前は見たはずだぞ。」

「・・・あっ・・・！」

その言葉で、陛下を助けた夜のことを思い出す星影。自ら毒をあおって死んだ男達。秘密を守るために死んだ暗殺者達。

「後宮では毒を使った殺しが一番多いんだぞ、星影。」

「確かに、毒で死ぬところは見たけど・・・毒を使ったのは、外部の人間だったよ？」

「星影のは特殊な例だ！普通に宦官として仕えていても、陛下が暗殺されかける場面に遭遇する確立はないに等しいものだぞ・・・！？」

「じゃあ、私って運がいいんだな～」

「まぁ・・・普通は、巻き沿いを食って死ぬんだけどな・・・。」

「普通じゃないって言いたいのかよ！？」

「運がいいなって、褒めたんだけど？」

「もういいよ！つまりお前が言いたいのは、延年が毒を使って私を殺そうと企（たくら）んでるってこと？」

「否定はできないだろう？」

「そりゃあ・・・嫌われてるのは自覚してるよ。でも、そんな簡単に毒を宮中に持ち込めるか?」

「金があれば可能だろう?あそこの人間は、平気で毒のやり取りをするらしいからな・・・。」

「え~冗談だろう!?いくら金があっても、宮中はこの国の中枢機関なんだぞ?そんな簡単に、毒が持ち込めるわけが・・・・!」

「・・・持ち込めるさ。李延年が噂通りの高級宦官ならな。」

「・・・職権乱用ってことか?」

「ああ。それに・・・そういった真似をするのは宦官だけじゃないしな。」

「なに?他にも、劇薬を使う奴がいるのか!?」

「・・・いるよ。後宮の大半を占める女官やお妃様方が――――・・・自分達のために劇薬を使うんだよ・・・。」

「なに!?女官や奥方が、毒を使うのか!?」

「馬鹿!声が大きい・・・・!」

「いや、だって・・・!毒だろう?毒を使うんだろう・・・女性が・・・!?」

「・・・ああ、使うらしい。」

「あの可愛い女官や、陛下の奥方が使われるのか・・・?」

「・・・ああ。見たことはないが、その(・・)可愛い女官や陛下の妃達でさえ、時と場合によっては使うらしいぞ。」

信じられない、というような顔で、自分を見る親友兼未来の義姉。その視線を受け、頭痛を覚える林山。

「普段から、『人は見かけによらない。』って言っているのは、どこのどなただったかな、星影?」

「疑り深いのも考えものじゃないか、林山?てか・・・そんな話聞いたことないよ。」

「昔話で聞かなかった？つーか、歴史を習ったなら思い出せ！敵国からの刺客の話とかを思い出せ！似たような話があるだろう！？」
「あ・・・！そう言えば・・・。」

（そんな話があるったようなぁ～）

古い記憶を掘り起こし、なんともいえない気持ちになる星影。

「思い出したか？」
「・・・思い出さなきゃよかった・・・。」

女達の残酷な伝説を思い出し、彼女は顔をしかめた。そんな星影に林山は言った。

「お前の話が本当なら、桂蓮みたいな奴が宮中にいるということか？」
「ま、まぁ・・・そうだな。」
「嘘だろう・・・！？後宮には入れるくらいの女性が、そんなことをするはずがない・・・！」
「するさ。陛下に近い立場の女性ほどな。」
「私は信じないぞ！後宮にいるのは、高貴な女性達だろう！？教養が高くて、気品あふれる才覚と美しさを備えた美女なんでしょう！？」
「だから、自分の手を汚さないために、自分の子飼いである女官や宦官にやらせるんだろう？それが、後宮で女達が出世する一番早い方法らしいぞ。」
「・・・詳しいんだな？」
「常識だろう？これぐらいのことは、みんな知っていることだぞ。」
「そうなのか？」
「そうだよ。」

「ぶっそうなんだな・・・後宮って。」

てか、女の楽園じゃなかったの？
陛下専用の女性の花園じゃなかったの？
そんな場所で、女達の潰しあいとかがあるわけ？
かなり危険な、女の戦いがあるわけ？
それが、宦官とかによって、危険地帯にされたりするわけ？

林山からの話を聞き、改めて宦官以外の後宮の人々について考える星影。

「つーか、誰か宦官を取り締まれよ・・・。」
「無理だろう。その宦官を甘やかしているのが、陛下なんだろう？」
「それはそうだが・・・。」
「ついでに、そんな宦官を庇(かば)っているのがお妃様達だ。」
「・・・でもさ、それはあくまで過去の王朝や、昔の皇帝の時代だろう？今でもあるとは、思えないけどな～毒殺とか、そういうこと・・・。」
「・・・確かに、俺も断定はできない。見たわけじゃないからな。お前に話したことだって・・・あくまで予想でしかない。」
「だったら、うかつなことは言わない方がいいぞ！星蓮と結ばれないうちに、お前が死んだら困る！」
「俺はそう簡単に死なないよ！でもな――――――・・・まったくないとは言えないだろう？少なくとも、『過去の事例』で、そういうことがあったんだ。今がないはずがない。」
「あ、それもそうか・・・！」
「そうだろう？それに、みんな・・・口には出さないが、あるとは思っているんだぜ？」
「なんだよ、それ？不越罪になるから言わないってか？」
「違うよ。それも半分あるけど――――・・・そういう証拠がな

いから、誰も言わないんだ・・・。」
「そっか・・・！証拠がなければ、白を黒にも、黒を白にも出来るからね？」
「そういうことだよ。」

林山の話を聞き、星影は嫌な気分になった。
完璧な女性しかいないといえる場所に、桂蓮のような意地の悪い女性達がいる。
そう思うと、これから会うであろう陛下の妃達に会いたくなくなった。
顔を合わせる前に、星蓮が見つかればいいと思った。

「宮中は・・・嫌な男だけじゃなくて、嫌な女もいるのか。」
「ああ・・・。民間とあまり、大差ないんだろうな。足の引っ張り合いの程度とかも・・・。」
「つまり、憎い相手を蹴落とすためなら、どんな手段も選ばないってか？」
「・・・そうだろうな。寵愛を得(え)るために、命の奪い合いをする。それが後宮って場所じゃないのか？」
「・・・。」

林山の言葉を聞き、顔色を変える星影。

（・・・なんだかんだ言って、星影も女性なんだな。）

そんな義姉の姿に、密かに安堵感を覚える林山。

皇帝をめぐる女達が争う話。
悪女の例として、例えられた女性達。その存在を、男である林山もある程度は知っていた。

悪女の話を聞き、『こんな女性には気をつけろ』と、言われたことも多かった。
男の自分から聞いても、むごいと思う話を、女性が聞けばかなり嫌なはずである。
現に、自分の恋人である星蓮に話した時、かなり嫌そうな顔をしていた。
今回、そういった話を星影としたのは始めたったが・・・・。

（やっぱり、星影も女性なんだな。）

顔色を変えて黙り込む星影。恋人と同じ反応をした親友。
男勝りな彼女のことなので、元気よく笑い飛ばすかと思った。
それだけに、今の反応は意外なものだった。

（この姿を見れば、他の奴だって、星影にも女らしいところがあると思うはずだ。）

だから星影に悪いと思いつつも、女性らしい親友の姿に林山は少し安堵した。
そんなことを考える林山に、生気（せいき）のない声で星影が話しかけた。

「林山・・・。」
「うん？」
「・・・怖いな、後宮って・・・。」
「ああ・・・怖いみたいだ。」

子供のような感想を述べる義姉に、笑いを堪えながら返事をする林山だったが――――

「そんなところに、私の可愛い妹がいるのか？」

「え？」
「そんな場所に、私達の大事な星蓮がいるんだよな・・・・？」
「――――――――――――――――――！！」
この言葉で、林山から笑いは消える。
「どうしよう・・・星蓮いじめられてないかな・・・！？」
「せ、星影・・・！」
「平気で毒を使う女共がいるんだろう？そこに星蓮がいるんだよな？」
「いや、そうだけど・・・」
「そんなところに、星蓮のような優しい子が行ったら――――――いじめの的じゃないか！？」
「な、なに言ってるんだよ！？」
（そうだよ・・・！なに言ってるんだ、俺は！？）
星影からの言葉を受け、自分の失言に気づく林山。
「どうしよう・・・！いくらあの子がしっかりしてても、所詮（しょせん）・・・私達は田舎者・・・！都の人間は、意地が悪いというじゃないか？」
「待てよ、星影！」
「都会の人間は冷たいとか言うだろう？それが、身分の高い人間ならなおさらじゃないか！？」
「星蓮はしっかりしているから、大丈夫だよ。」
「本人がまともでも、周りがまともじゃなければ意味ないだろう！？」
「それは――・・・！」
「どうしよう・・・早く見つけないと・・・！星蓮・・・！」

動揺する星影の姿に、林山は痛感した。
自分の発言で、相手を不安にさせたということを。
それと同時に、自分自身も不安にかられていた。

なに言ってんだよ・・・俺・・・。

（星影を不安にさせるようなことを言ってしまうなんて・・・。）

いや、不安になったのは星影だけじゃない。
俺自身も、自分の言葉で不安になっていた。
話を聞く側だった星影はまだしも、話をした側の自分が不安になるなど・・・自業自得もいいところである。

「星蓮・・・星蓮・・・！」

青ざめた顔で、妹の名前を何度も繰り返す星影。
原因を作ってしまっただけに、その姿に罪悪感を覚える林山。
そして、罪滅ぼしとばかりに、陽気な声で星影に言った。

「しっかりしろ、星影！俺の言い方も悪かったが、そこまで不安になる必要はない。今は星蓮の身に、なにもないことを祈るしかないだろう・・・！？」
「祈ってどうにかなる問題か！？助けた方が早いだろう！」
「居場所がわかれば、すぐにでも助けに行くさ！それがわからない以上・・・祈る以外に方法があるか？」

厳しい口調で言う林山に、思わす視線をそらす星影。そして、少しかすれた声で言った。

「・・・すまない林山。私が不甲斐ないばかりに・・・。」
「ほ、星影？」
「私が早く、星蓮を見つけられないばかりに・・・！私が――――――・・・！」

（長子である私が、しっかりしていないばかりに・・・！！）

こうしてるうちにも、星蓮はいじめられてるかもしれない！
先輩である妻達に、『あんた、可愛いからっていい気になってんじゃないわよ？』と、いびられてるかもしれない！
藍田にいたころなら、私がそんな馬鹿女共をぶちのめせばよかったが、今のあの子には味方が（おそらく）いない！
星蓮は、野に咲く一輪の花のような子だ！！
その場にいるだけで、人目を引くぐらい可愛い子！私の自慢の妹！！
あの子の側にいたら、他の花が見劣りしちゃうからな～
それで逆恨みされて、嫉妬とかされちゃったりしたら・・・！！
女って、男よりも陰湿な部分があるからな・・・。
部屋に閉じ込められたり、ご飯の中に虫とか入れられてるかもいしれない！
あの子は・・・星蓮は、涙をこらえてそれに耐えてるかもしれない・・・！！

『助けて・・・！星影姉さん・・・！！』

（私の名前を呼び、助けを待っているはずっ！！）

「・・・星影？おい星影、星影っ！」

急に黙り込む親友の姿に、心配になって声をかける林山。

「星影！大丈夫か、星影！」

「林山・・・・。」

その呼びかけに星影が気づき、ゆっくりと顔を上げる。

「どうしたんだ？急に黙り込んだりして・・・。」

「ねぇ、林山・・・。」

「なんだよ？」

「・・・・・死体さえ出てこなければ、何人殺しても罪にはならないよね？」

「なに真顔で、恐ろしいこと言ってんだよっ！？」

真剣な星影の態度に、冷や汗をかく林山。そんな義弟に、必死の形相で義姉は言った。

「だ、だってだって！星蓮が・・・可愛い妹が、年増の女達にいじめられたんだぞ・・・！？」

「落ち着け！それお前の中の妄想だ。」
「私の妹に、虫の入った食事を強要したんだ！殺しても罪にはならないはずだ・・・！そう、法律で決まっているはずだ・・・！！」
「どんな法律だよ！？それ、お前の妄想限定の法律だろう！？」
「心配するな！証拠が必要なら、こちらが適当にでっち上げればいい・・・！そうすれば、あの性悪共は豚の餌だ・・・！」
「過保護にも程があるだろう！？気持ちはわかるが冷静になれ、星影！星蓮は、いじめられてなんかいないさ！」
「なんで断言できるんだよ！？見たのかよ！？見たのか？見れるわけないだろう！？」
「うるさい！それぐらい見なくてもわかる！」
「なんだよ、いつのまに透視を身につけたんだ？」
「身につけてないし、持ってないよ！そんな能力！！」
「じゃあ、なんでだよ！？」
「お前の妹だからだ、星影。」
「え！？」

その言葉で、星影の言葉は途切れる。
そして、それと入れ代わる形で、今度は林山が口を開いた。

「劉星影の妹だからこそ、ちょっとやそっとのことじゃ、星蓮は負けない。そうだろう？」
「林山・・・。」
「俺は、星蓮のことはもちろん心配だ。でも、星蓮がどんな女性かわかっているから、安心している面もある。」
「それは・・・そう、だが・・・。」
「星影・・・俺は、星蓮同様に、お前のことも心配だ。」
「え？」
「お前の話を聞いて、後悔してるんだ。後宮に行かせたことを。」
「いまさらなにを言ってるんだ、林山！？」

「ああ、本当にいまさらだな。でもな、後悔してるのは事実だ。」
「・・・お前が今頃反対しても、もう遅いんだぞ?私は、やめるつもりはないからな・・・!?」
「わかってる・・・。とめても無駄だし、俺も・・・とめたくないからな。」
「なんだよ。わかってるならそんなこと――――」
「――――言わせてくれよ。親友として、言っておきたいんだ。」
「・・・林山?」
「宦官のことばかり言って、その他のことをお前に言ってなかったよな・・・?だから・・・他の事も言っておきたいんだ。」
「他のこと・・・?」
「ああ・・・後宮は美しい世界じゃないってことだ。美しい分、醜い部分も多くある。」
「そう言われれば、変なとこが・・・多いかな?」
「多いと思うぞ。・・・これから先、お前はもっと嫌な分部を見ると思う。陛下、女官、妃達はもちろん、同僚や部下、上司の悪い面を見るかもしれない・・・。」
「なんか、悪いことばっかり言っていない?」
「仕方ないだろう。そういう話しか知らないんだ。気をつける話として・・・な?」

そう言うと、困ったような笑みを浮かべる林山。

「俺が思うに、結局外も内も・・・高貴な連中と俺達も、やっていることは同じなじゃないか?」
「私達庶民と、高貴な連中がか?」
「ああ。身分さえ取り除けば、ほとんど同じだと思う。実際見て、星影はどう思った?」
「そうね・・・。確かに、身分の厳しさを除けば――――」

同じかもしれない。

そう目で訴えれば、林山は軽く頷く。そして、真剣な表情で星影に言った。

「俺は・・・星影が権力争いに巻き込まれてほしくない。」

「なんんだよ、急に？」

「急でもないし、取り越し苦労でもない。お前が、陛下のお気に入りになった以上、その地位をめぐった争いが起きるはずだ。現に今、起きているだろう・・・？」

「そうだけど・・・別に、私は陛下のお気に入りとか興味ないよ。」

「お前がそうでも、周りはそうもいかないだろう・・・。今後、宮中にとどまる以上、それを利用しようと近づく輩が増えるはずだ。その時・・・お前がどう対処するかだ。」

「星蓮を助けるまでは、私はどんなことでも耐えて見せる。正体だって、隠し通して見せるさ・・・！」

「そうじゃない、星影。俺は――――」

「心配しなくても、欲に目がくらんだりしないよ。」

「星影・・・。」

「私は、そのために宦官になったんだぞ？目的を見失うわけが――――」

「――――見失ってもいい！そのために、お前が命を落とすようなことになるなら、見失ってくれた方がいい・・・！」

「林山！？」

「お前が死んだら、星蓮が悲しむだろう？」

「え・・・？」

「俺は、星蓮に恨まれたくはない。それに、俺も、大事な親友を失いたくない。」

「・・・林山。」

「仮に、今回失敗しても、諦めなくてもいいだろう。逃げ延びて、もう一度機会をうかがってやるさ！」

「林山、お前・・・・。」

「あくまで、三人で（・）都から脱出することが目的だろう？だれか一人でも欠けるのは、嫌だろう・・・？」

「林山・・・・！」

「だから無茶をしないでくれよ、星影。お前になにかあったら、俺達夫婦は気が気じゃないからな？」

（夫婦ってこいつ・・・！）

もう、そのつもりでいるのかよ。

林山の言葉に、思わず笑みを漏らす星影。

「心配してくれたのか・・・林山？」

「星影の命が心配だからこそ、いろいろ言ったんだけど？」

「そ、そうなんだ・・・。」

「まぁ、いいや。それより・・・ほら、これ使えよ。」

そう言って、星影に布を差し出す林山。それはさきほど、星影の服を拭くようにと、林山が懐から出したものだった。そして、星影が乱暴に払い落としたものでもあった。

「林山・・・。」

「借り物なんだろう？濡れたまま返したら、さすが小心者も、犯人探しをするかもしれないぞ？」

優しく星影に語り掛けると、再度、布を星影に差し出す林山。星影はそれを、ゆっくりと受け取りながら言った。

「・・・ごめんなさい、林山。あなたの身分で、むちゃくちゃなことばっかりして。」
「お互い様だろう?俺も・・・ちょっと、言い過ぎたよ。ごめんな。」
「い、いや・・・私が悪かったよ。本当にごめんね、林山。」
「ああ・・・俺の方こそ。ごめんな、星影。」

そう言って、笑みを見せる林山に、星影も笑顔を見せる。一応は、一段落する星影と林山の喧嘩。最後は、性格的に一歩大人な林山が、折れる形で星影をなだめた。これに対して、謝られることが苦手な星影は、素直に自分の非も認め、謝罪の言葉を述べたのだった。

第四十七話　義姉弟喧嘩（後編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！
義姉弟喧嘩の後編です。林山が、大人になることで、喧嘩を鎮めるという形で書いてみました（苦笑）とりあえず、【林山が星影を心配している】というところを表現できるように書いてみました（笑）

更新が、大変マイペースでごめんなさい（土下座）
おそらく今後は、マイペースに行くと思います・・・。こればかりは性格なので、ご了承ください・・・（平伏）

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！

第四十八話　凌義烈＋αの話

一時は、険悪な空気になった劉星影と安林山。しかし、お互いが素直になることで、仲直りをしたのだった。

「ごめんね、林山。」
「俺こそ悪かったよ、星影。」

そう言って、言葉を掛け合う二人。

（林山は、私を心配してくれてたんだ・・・。）

親友からの気遣いの言葉を受け、心が温かくなる星影。

（本当にごめんね、林山。ごめんね・・・！）

そして、林山を見ながら心の中で何度も詫びたのだった。星影が反省する一方で、先に謝罪の言葉を述べた林山はというと・・・

（『先手必勝』ならぬ、『謝罪必勝』だな。対・星影に関しては・・・。）

親友との喧嘩内容を分析し、無事に治(おさ)められたことを安堵（！？）していた。

根本的な思いは違ったが、仲直りできたという点では、二人とも満足したのだった。

「ねぇ・・・林山もここに来てから――――・・・嫌なことがあったの？」

場の空気が落ち着いたところで、遠慮がちに星影が尋ねる。そんな義姉からの問いに、微笑しながら答える林山。

「嫌なことというか――――・・・ちょっと気になることがあって・・・な。」

「気になること？」

「・・・・実は、お前に報告があるんだよ。」

「報告～？」

「ああ。ある男に会ったんだ。・・・男の名前は凌義烈（りょうぎれつ）。」

「凌・・・義烈？誰だよ、それ？」

「ここら辺じゃ、『百面夜叉（ひゃくめんやしゃ）の義烈』っていう通り名で知られている、裏社会を取り仕切る男だ。」

「裏社会を取り仕切る男っ！？」

予想外の言葉に、目を見開く星影。驚く親友に林山は言った。

「正確には、悪党共の元締（もとじ）めらしいがな。」

「どういうことだ、林山！？どこでそんな男と知り合ったんだ・・・？」

「その・・・町の酒場で知り合ったんだ。」

「町の酒場～？なんでそんなところにいたんだ・・・？」

「聞き込みをしててな、偶然出会ったんだよ。」

「へぇ～よくわかったな・・・相手が裏社会の人間だなんて？」

「まぁな・・・いろいろあったんだ。」

（さすがに、役人に売られそうになったところを助けてもらって知り合ったとは・・・口が裂けても言えないがな・・・！）

その時のことを思い出して、一人、乾いた笑みを浮かべる林山。

「どういう男なんだ？その義烈って奴は。」

「口と性格は悪いが、悪い男ではない。結構、義理堅いところもあったからな。」

「・・・その男と話をしたのか？」

「したよ。」

「会話をしただけだよね？」

「・・・・・強力な助っ人になると思って、ある程度のことを話した。」

「なんだと！？まさか林山――・・・その男に私達の計画を話したのか・・・！？」

「すべて話したわけじゃない。俺もそこまで馬鹿じゃないからな。」

「じゃあ、どこまで話したんだ！？」

「郭勇武に、『大事な妹』を強奪されたというところまでだ。」

「大事な妹・・・！？」

「そうだ。今の俺・・・劉星影からすれば、命よりも大事な妹になるだろう？」

「・・・なるほど。私の名前を使ったわけ？」

「お前が、俺の名前を使っている以上、使うわけにはいかない。どこで、情報が漏れるかわかったもんじゃないからな？」

「賢明な判断ね。でもさ、使い慣れない名前を使って、相手は怪しまれるようじゃ困るぞ？」

「まぁ、怪しんではないが・・・変に思われたのは間違いないだろうな・・・。」

「変に思われたって――――――なにをしたんだ、林山！？」

「・・・別にぃ。実際の劉星影の真似をしただけだ・・・。」
「私の？」
「結果的に、『無理やり連れて行かれた妹を取り戻したい過保護な兄』という設定に、なってしまったがな・・・。」
「林山が過保護な兄ぃ～？」
「『劉星影の男版』ということだ。」
「なんだよ、それ！？どうせなら、『強奪された妹を取り戻したい心優しい兄』にしろよ！」
「どっちでも同じだろう？」
「違うっちゅーの！てか、なに話してんだよ！？そこまで言う必要、あったのかよ！？」
「仕方がないだろう？怪しまれないためにも、ある程度の情報を相手に伝える必要があったんだ。」
「それで？それだけの危険を冒(おか)した見返りはなんだ？もちろん、十分だろうな・・・！？」
「当然さ。その男に頼めば、後宮から星蓮を連れ出せることが出来るんだ。」
「！？」

林山の言葉で星影の表情が変わる。目を吊り上げ、義弟を直視すると、低い声で彼女は言った。

「星蓮を後宮から連れ出せることができる・・・？その男がか？」
「ああ。俺達以外にも、郭勇武の被害者がいたんだ・・・。あの男――――・・・凌義烈は、そんな恋人達のために、宮中に忍び込んだりしていたらしい。」
「・・・本当に、悪党の元締めか？していることが、侠客みたいじゃないだな。」
「おそらく、侠客だろう・・・。いや、侠客であることには間違いない。」

「本人に聞いたのか？」
「聞いてはいないが、奴の行動や隠れ家、その配下達を見た限り――――『侠客の大親分』としか言えないな。」
「それって、侠客だから信用したってこと・・・？」
「それだけが理由じゃない。信用してみる価値はあると思ったからだよ。だから、星影には悪いとは思ったが――――――――俺の一存で協力を仰いだんだ。」
「それはいいよ。別に、気にしてないから・・・。それにしても、よくそんな危険な男と、平気で接触できたな？」
「当然だろう？すべては星蓮のためだ。彼女のためなら、俺は命をかける覚悟だ・・・！」
「林山・・・。」
「心配するな、星影。お前だけに危険な橋は渡らせない。俺達は義姉弟だろう？言ってみれば、運命共同体でもあるんだ。」
「・・・林山。」
「今の危険から脱するためにも、多少の無理が必要だろう？俺は平気だから大丈夫だ。三人で・・・それぞれの幸せを手に入れるためなら、俺はどんなことだってする覚悟だ。」
「林山――――――――」
目を輝かせながら力説する林山。そんな義弟に星影は――――――――

「お前さ、やっぱり騙されてるんじゃないのか？」

疑いと断言が込められた言葉をかけた。

「・・・なに？」

義姉の言葉を受け、反射的に聞き返す林山。それに対して、あっけらかんとした口調で星影は言った。

「だって、そうだろう～？何度も言うが、私達は都の人間から見れば田舎者なんだぞ？騙されている可能性もあるだろう。」

「それはない！俺が直接交渉したんだぞ・・・！？」

「別に、林山が信用できないとは言ってない。ただ・・・騙されて、お金だけ取られるだけならまだしも――――――計画がバレて命をとられちゃたら、意味ないってことだよ。」

「それはそうだが・・・」

「危険じゃないか？今からでも断れないの？」

「断るって・・・！」

星影の問いに、言葉を濁す林山。

「確かに、星影の言い分は・・・・・・・・・・一理ある。」

「そうでしょう？」

「だが・・・今の段階ではなんとも言えない。だからこそ、俺はあの男を信じてみようと思う。」

「信じる！？夜叉ってあだ名される男をかぁ～？」

「あだ名じゃなくて、通り名だよ！」

「どっちでもいいよ！お前また、そんなお人好しなことを言ってさ～・・・。」

「いざとなれば、俺一人ですべての罪を被る！」

「なに言ってるんだよ！？そういう問題じゃないだろう、林山！？私はそんなつもりで言ったんじゃ――――」

「それだけ俺は、覚悟してるってことだ！！」

星影の言葉を遮ると、強気な口調で言う林山。

「上手くいけば、お前の負担が軽くなる。そうなれば、宮中に長く留まる必要がなくなるんだぞ!?」
「いや・・・いいよ、そんな。最初から、持久戦の構えだしさ～」
「長引けば、お前への危険が増すだろう!?あてずっぽに探すよりも、凌義烈からの情報を介して、星蓮のいる正確な居場所を探した方が早いだろう?それだけ、手間だって省けるんだぞ・・・!?」
「林山の気持ちは嬉しいけど・・・ちょっと焦りすぎじゃない?もう少し、気長にした方がいいと思うよ?」
「いつまでも、お前に男装させとくわけにもいかないだろう?」
「私は慣れてるから平気よ。だから～もう少し慎重にじっくりした方がいいって!」
「気長に慎重に、できる状態ならそうしてもらうさ!」
「なによ、できないって言うわけ?」
「できないだろう!?皇帝の気を引きまくって、恋敵を作って、文武百官から注目されまくって、下級宦官から高級宦官へ異例の出世を遂げた安林山を、いつまでも続けられるわけがないだろう・・・!?」
「え、いや、それは――――――」
「恋敵や同僚は誤魔化せても、皇帝を誤魔化すことはできないだろう・・・?寝所に連れ込まれて、し・ま・え・ば。」
「ちょ、ちょっと、顔近いよ・・・!」
「お前がな、『恋の駆け引き』が得意なら、俺もここまで焦らないぞ?だが実際は、恋ならぬ、事故を装った『故意の駆け引き』ぐらいだろう・・・!?出来たとしても!」
「あの・・・顔怖いよ、林山。」
「お前が皇帝を助けたことを、非難するわけじゃない。ただ、死んでく・・・いや、死んでしまっていたら、それはそれで好都合だったと思うんだよな・・・!?」
「いや、本当に怖いから・・・林山。」
「皇帝が死んだら死んだで、そのどさくさにまぎれて、星蓮を連れ

出せたんじゃないかなぁ～とは、思ったりするんだよね・・・！まぁ、あくまで想像の範囲で、本心じゃないけどさ・・・！！」
「本当に怖いよ、林山。なんか、性格変わってるし・・・。」
「ハハハ！お前が知らないだけで、もともとこーゆー性格だけど・・・！？」
「わかった、わかったよ、林山・・・！」

気迫で迫る林山に、後ずさりをする星影。

「林山の言い分はわかったよ！・・・それで？その侠客の前例は確かなのか？」
「もちろんだ！凌義烈が、宮中からの脱走者を手引きしたというのは間違いない。」
「本人がそう言ったの？」
「ああ！うっかり、口を滑らせていったんだ！」
「・・・じゃあ、間違いなさそうね・・・。」

そう言うと、湯を口に運びながら星影は言った。

「私も、星蓮が『宝仙宮』にいる（・・）かも（・・）しれない（・・・）としかわかってないからね。本当にいるかどうか・・・怪しいものだし・・・。」
「そうだぞ。上手く入れ込めたとしても、その中のどの部屋にいるかはわからないんじゃないか？」
「それ以前に、自由に出歩くことすら、今の状態じゃ困難だからね・・・。」
「だからこそ、凌義烈にかけてみないか？悪い話ではないと思うが・・・どうする？」

意見を求める林山に、静かな口調で星影は言った。

「・・・よそ者の私達からすれば、案内役は必要だとは思う・・・。」

「星影。」

「林山の判断が間違いだったとは思わない。宮中にいる私が言えるのは、相手に気を許しすぎるなってことだよ。」

「星影、わかってくれたのか？」

「私が宮中から出て、林山を助けることは出来ない。だから、林山が外で見方を作ることは無難だと思うよ。」

「そうだろう？ここの地理に詳しい人間がいた方が、逃げるときにも有利だろう？」

「そうね。ここら一帯にハバが利いて、宮中に忍び込める侠――――――・・・・・」

（・・・・・・・・・あれ？）

そこまで言ったところで、星影は“あること”に気付く。それと同時に、彼女の言葉は途中で途切れる。

「星影？」

急に黙り込んだ義姉の名を呼ぶ義弟。それに答えるように、星影は言葉を発した。

「林山・・・その人とは、酒場で知り合ったんだよね？」

「あ、ああ・・・。郭勇武の事を聞いてまわってる時に、向こうから声をかけてきたんだ。」

「そして、その男の隠れ家に行って、交渉をまとめた・・・？」

「ああ。代金も、すでに払っていたからな。」
「後宮にいる星蓮を助け出すための協力料を払ったわけよね？百面夜叉の義烈という侠客に・・・？」
「そうだが――――――・・・なにか腑に落ちない点でもあるのか？」
「・・・うん・・・。」

（侠客・・・ね。）

林山からの情報を確認しながら聞く星影。
すべてを聞き終わった時、星影の中で沸き起こった“あること”は“疑問”となっていた。そしてそれは、言葉となって林山に伝えられた。

「・・・おかしくない、林山？」
「なにがだ？」

「後宮は男子禁制で、内部の情報がめったに漏れない場所よ。どうして町中に住む一介の情報屋に、そこまで出来るの？」

「あ・・・。」
「いくら裏社会に強い、侠客の大親分だとしても、限度があるんじゃないか？」
「それは――――――・・・」

星影の疑問に、一瞬顔色を変えた林山だったが、すぐにその問いに答えた。

「・・・俺も最初はそう思った。だが、奴はただの情報屋じゃない。百面夜叉、と言われるだけあって、いくつもの顔を持ってるんだ。」
「だからなんだよ?」
「つまり、町の侠客はその百面のうちの1つと考えれば筋が通るだろう?」
「それはそうだけど・・・。」
「それに、奴の隠れ家に言った時、俺は見たんだ。普通の市場では取引されない、取引を禁止されている品が、奴の隠れ家に置かれていたんだ。」
「それで、裏社会の男だと思ったわけ?」
「まぁな。お前は凌義烈を見てないから怪しく思うんだろう。実物を見た立場で言わせてもらえば、悪人とは思えなかったぞ?」
「それが危ないんだよ、林山。完全な悪人よりも、少しだけ悪に染まった、ちょい悪の方が、性質(たち)が悪いんだぞ?白黒はっきちりしない、中途半端な奴の方が扱いにくいんだよ。」
「話をした限り、星影とは気が合うと思ったが。」
「中途半端って言いたいのか!?」
「まぁ・・・危うさがある男だったが、仕事に対しては熱心だとは思う。その代わり、金には少しうるさかったが・・・。」
「だったら、なおさら怪しくないか!?もしかしたら、郭勇武の回し者かもしれないぞ・・・?」
「その時はその時だ。むしろそれを逆手にとってしまえばいい。」
「それじゃあ、さっきの私と同じじゃないか!?お前、私が皇帝やその男寵を利用すると言ったらだめだと言ったじゃないか?人に注意しておいて、自分がするとかどういうつもりだよ・・・!?」
「星影と俺じゃあ、いる場所が違うだろう?」
「関係ない!」
「あるさ。それに・・・お前の話を聞く限り、郭勇武がお前に目をつけてる可能性があるんだぞ?」

「私をか？」
「・・・ああ。顔は見られていないと言っても、奴の過去の所業を聞けば、『宦官・安林山』を見逃すわけがない。現に、話かけてきただろう？」
「話というか・・・喧嘩はふっかけられたけど。」
「どちらにせよ、『安林山』という名前は覚えていたんだ。そのことが引っかかるんだよ・・・。」
「・・・そうね。名前と一緒に、自分の都合の言いように、記憶を改ざんして覚えてたし・・・！」
「幸い、奴がお前の顔を知らなかったからいいようなものだ。名前のことにしても・・・今の（・）ところ（・・・）は、同姓同名の偶然ぐらいにしか思ってないだろう。」
「『今のところは』？」
「そうさ。安林山が、今後宮中で目立たなければ、奴も注意深く観察はしないだろう。」
「わかってるよ！気をつけるって。」
「いいや、わかってない！仮にも相手は、正当な嫡子まで殺し、郭家の家督を継いだ男だ。」
「な・・・嫡子を殺した！？」
「馬鹿！声が大きい！」

シッと、口の前に人差し指を立てながら林山は言った。

「そうだよ。郭勇武は、歌碑をしていた妾の子供だった。郭家の本妻には子供がいたが、全員不可解な死を遂げたらしい。」
「つまり・・・郭勇武は、卑怯な手口で家督を継いだってこと？」
「おそらくな。正当な嫡子を殺して家督を継いだというのが、もっぱらの噂らしい。もっとも都の人間は、奴からの報復を恐れて、大きな声では言わないがな・・・。」
「信じられない！義理の兄弟を殺すなんて・・・。」

（とんでもない男だ！）

林山の話を聞き、改めて郭勇武に対する怒りが増す星影。

「私には理解できないわ・・・！治世の時代に・・・乱世じゃあるまいし！」

「俺達には理解できないさ。父親だけが同じな、義理の兄弟なんていないからな・・・。」

そう言うと、空になっていた自分と星影の器に湯を注ぐ林山。そして低い声で彼は言った。

「そんな相手だ。なめてかかると――――――――・・・俺みたいになるぞ、星影？」

卑怯な手でやられるぞ？

念を押すような林山の言い方で、その言葉の意味を察する星影。

「・・・わかったよ。」

親友の忠告は、無視できないから。

了解の意味も込めて、深くうなずく星影。

「二度と、郭勇武に自分から喧嘩をふっかけるなよ・・・！」
「努力はするよ。」
「それじゃあ、意味ないだろう？ちゃんと誓えよ！」
「だって、いつもとめてくれる林山がいないんだぞ？それって、難しいじゃない？」
「たくっ・・・！他人を頼りにするなっての。」
「わかってるよ。助けは二度も入らないからね・・・。」

そう、二度も助けは入らない――――――――・・・・！！

“将軍相手に、掴みかかろうとした奴も初めて見た。あの時止めていなかったら今頃・・・。”

「衛青将軍・・・。」
「え？」
「あ、いや・・・衛青将軍がとめてくれなかったら、危なかったよな～と、思って。」

あの時、衛青将軍が助けてくれなかったら、今頃どうなっていたかわからない。
自分の動きをいち早く察し、先手を打ってとめてくれた。
お礼を言いに言ったら、優しい言葉を返してくれた。
それまで無表情だった衛青将軍が見せてくれた笑顔。

（衛青将軍の・・・おかげだよね・・・！）

ぶっきらぼうな将軍を思い出し、はにかむ星影。そんな親友の姿に、林山は複雑な表情をするのだった。

第四十八話　凌義烈＋αの話（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。
仲直り後、凌義烈についての話をする星影と林山を書いてみました。
星影が宮中に長くいることに対して、危機感を持つ林山。彼としては、義烈を使って、早めに義姉を宮中から出そうとしています。対する星影は、持久戦覚悟なので、宮中に長くいても平気だったりします。だから、義烈を使うという林山の案に、「え～焦りすぎじゃない？」と、思いつつも、同意しました。
内容的には、以上のような意味を込めて書いたのですが・・・読んでくださった皆さんに、伝わっているかが不安です。
よろしかったら、感想を聞かせていただけると嬉しいです（汗）

※誤字・脱字を見つけられた方、こっそりでいいのでお知らせください・・・！
よろしくお願いします・・・（平伏）

第四十九話　人の噂はいい加減

宮中で出会った武人を思い出し、頬を染める劉星影(りゅうせいえい)。

（衛青将軍・・・・！）

その相手は、大将軍・衛青仲卿だった。

自分より、二十近く年上の男性。
もしかしたら、父上と同じくらい・・・いや、それ以上かも。
私よりかなりおじさんだったけど、すごくカッコよかった！
年は取ってたけど、それはそれで渋みがあって素敵だった！
年相応に落ち着いていて、優しさがにじみ出ていたし・・・！

（衛青将軍って・・・本当にいい人だったわ。）

衛青将軍のことを考えるだけで、楽しい気分になる星影。
そんな親友に対し、安林山(あんりんざん)は厳しい口調で言った。

「まぁ・・・衛青将軍の助けがあったから、郭勇武と直接もめずにすんだようなものだしな。」
「ああ、衛青大将軍様、様だよ！」
「・・・わかってるとは思うが、次からは気をつけろよ。」
「わかってるよぉ～」
「あまり信用するなよ。」
「大丈夫だって！後宮で信用してるのは、空飛と衛青将軍だけさ。」

「わかってないだろう！？俺は、その（・・）衛青将軍を信用するなって言ってるんだよ！」

「・・・・はい？」

林山の言葉に、思わず相手を見る星影。

衛青将軍を信用するな？

衛青将軍を信用するな・・・・？

衛青将軍を信用するな・・・・！？

衛青将軍を――――――――――――――！？

「今、なんて言った・・・・？」

何度も頭を駆け巡る林山の言葉。

聞き間違いではないかと、確認の意味を込めて尋ねる星影。

しかし、彼女の気持ちを否定するように、はっきりとした口調で親友は言った。

「だから、『衛青将軍は信用するな』って言ったんだよ！」

「・・・へぇ～衛青将軍って二人いたんだ。」

「同姓同名じゃない！衛青将軍は一人しかいない！」

「・・・へぇ～衛青将軍ってあだ名の人が他にもいるのか。」

「そんなあだ名ねぇよ！本名だよ、本名！」

「・・・へぇ～衛青将軍って、親の名前を受け継いでたんだ。」

「継いでない！名前の代襲名とかしてないから！」

「・・・へぇ～衛青将軍って――――」

「いい加減に認めろっ！俺が言ってる男と、お前が言ってる男は同一人物なんだよ！」

「・・・同一人物・・・？」

「そうだよ！姓は衛、名は青、字は仲卿！大将軍・衛青仲卿のことを、俺は言ってるんだ！！」

「えぇえ！？」

林山が非難する人物と、自分が尊敬する人物とが同じ人間だと理解する星影。
その瞬間、言い知れぬ怒りが彼女を襲った。

「どういうことだよ、林山！？なんで・・・！？なんで、衛青将軍を信用しちゃだめなんだ！？」
「星影は、衛青将軍がどんな人間か知らないんだろう？」
「知ってるよ！無口で無表情だけど、思いやりのある優しい人だって！」
「へぇ～なんで星影は、そういうことを知ってるんだ？」
「目の前で見たからに決まってるだろう！？陛下や文武官のいる前で、さりげな～く、私を助けてくれたんだ！」
「陛下の前ね・・・。」

星影の答えを聞き、深くため息をつく林山。

「やっぱりわかってないな・・・星影は。」
「なにがだ?」
「衛青将軍がお前を助けたのは、皇帝が側にいたからだ。早い話が、皇帝にいいところを見せようと、点数稼ぎをしたわけさ。」
「点数稼ぎだと!?」
「そうだよ。衛青将軍と言えば、匈奴討伐将軍として有名だが、権力者に媚びるということでも有名な男だ。」
「媚びるっ!?」
「ああ。星影を助けたのだって、皇帝の印象をよくするためだろう。ご機嫌取りをしておけば、後々なにかと都合がいい。」
「ふざけるなっ!衛青将軍は、目先の欲で動くような人じゃない!私を助けたのだって、善意によるものだ!」
「そんなのわからないぞ。陛下が見ていなかったら、助けなかったかもしれないだろう?」
「衛青将軍は、そんなセコイ人間じゃない!一度も会ったことないくせに、知ったような口をきくな!!」
「だから言うんだよ、星影。同僚の宦官ならまだしも、一度しか会っていない相手を、そこまで信用するのは危ないだろう?」
「なんだよ、その言い方!お前は、衛青将軍のなにを知ってるって言うんだ!?」
「少なくとも、お前よりは精通しているつもりだぞ?それにお前が心配だからこそ、苦言を呈しているんだ。どうでもいいなら、忠告なんかしないさ。」
「・・・お前の気持ちは嬉しいよ。だけど――――衛青将軍を疑うのはおかしくない・・・?」
「だったら冷静に考えてみろ。普通に考えて、大将軍という身分の男が、見ず知らずの宦官を助けると思うか?それなりの見返りがあるからこそ、助けたと考えるのが普通だろう?」
「下心があったって言いたいのか!?」
「そういう場所だろう・・・宮中っていうのは?ただでさえ、宦官

嫌いは武官に多いんだ。それを考えれば、自分をよく見せるために良い格好をしたと――――」

「――――――――――――違うっ！！！」

その言葉を聞いた瞬間、カッと顔が熱くなる星影。気づいた時、彼女は反射的に叫んでした。

「せ、星影！？」

「あの人は、媚びてるんじゃない！謙虚過ぎるだけだっ！！」

「・・・あの人ぉ～！？」

「衛青将軍は、人の痛みがわかる人だから、周囲の人間に気を使い過ぎてるだけだ！本人は、媚びてるつもりなんかないんだよ！！」

「お、おいおい・・・！」

「私を助けたのだって、一対複数の状況だったから、救いの手を差し伸べてくれたんだ！弱きを助けるという、孔子の教えを忠実に実行したんだよ！！」

「待てよ、俺はそんなつもりで――――」

「なのに――――なんで、『気遣い』を『媚』だと思うの！？どうして他人を思いやる気持ちを、下衆（げす）な姿だと捉（とら）えるわけ！？」

「星影・・・？」

「誠実に振舞う姿のどこが気に入らないんだよ！？派手で、華やかな方がいいなんておかしいだろう！？」

「ちょ、なにを言って・・・？」

「私は――――――・・・・・誰がなんと言おうが、衛青将軍を信じるからな!!」

そこまで言い切ると、肩で息をする星影。その言葉を最後に、部屋の中は静かになる。

「・・・どうしたんだ、星影・・・？」

静寂を破った林山の声。そんな親友の言葉で我に返る星影。
彼女の目に、驚いた表情の林山が飛び込んできた。

「・・・そんな言い方、お前らしくないぞ？そこまでムキなることか・・・？」

搾り出すようにして出された林山の言葉。その表情は、完全に困惑していた。
これに対して、ひるむことなく星影は言った。

「それはこっちの台詞だ！林山こそどういうつもりだよ！？お前は、人の悪口を言う男じゃないだろう・・・！？」
「別に悪口じゃないぞ？俺は、事実を言ったまでだ。」
「事実だと！？私には、悪口にしか聞こえなかった！」
「だから悪口じゃないよ。世間一般で聞く話をしただけだ。」
「世間一般だぁ～！？お前どこで、そんなホラ話を仕入れたんだ！？」
「ホラ話とは言えないぞ？星影に話したの内容は、普通にみんなが話しているものだ。」
「みんなが！？」
「ああ。藍田の人間でも知ってることだよ。まぁ、全員が全員、そう言っていたわけじゃないが――――衛青将軍がそういう風に言われてるのは事実だろう・・・。」
「『そういう風』にって――――どう言われてるの！？」
「だ～か～ら！さっきも言ったが、陛下に媚びへつらって、取り入ろうとしてるってことだよ。他にも、そういう態度を取るから、周囲の者から嫌われているとか聞いたぞ。」
「嫌われてるぅ！？」
「一部の人間にな。俺はそう聞いていたから、お前にも気をつけてほしいと思って言ったんだが――――・・・・・・・・・・実物は違うのか？」
「当たり前だろう！？そんなわけが――――・・・・・・・・・・」
そう言いかけた星影だったが、一つの記憶が彼女の口の動きをとめた。
“衛大将軍は陛下に気に入られている。しかし今では・・・『媚(こ)びるところがある』と、お気に入りではあるが、それほどお気に入りという立場でもないのだよ。”

琥珀から聞かされた、衛青将軍の話。
【偏見】という名の下で評価された、衛青仲卿に対する周囲の見方。

（・・・・ないって、言い切れない・・・・・！！）

それを思い出し、なにも言えなくなる星影。

確かに、衛青将軍が、「媚びる」という評価を受けているという話は聞いていた。
でも、だからと言って、実際の衛青将軍が媚びているのかと言えばそうでもない。
無表情、無愛想、不器用の【無・無・不】の【気】を出していたが、鋭い洞察力と観察力を持っていた。自分の瞳を見て、賊であるかどうかを証明したほどの知恵者だ。
それに加え、性格も、素朴で穏やかな優しい人だった。

「違うんだ、林山・・・！」
「星影？」
「違うんだよ、違うんだ・・・・衛青将軍は――――――・・・・・！！」

すごく良い人。

そう説明したかったが、言葉にならなかった。

すごく良い人だと伝えたくて、一言で言い表すのが申し訳なくて――――

それを、どう言葉にしていいのかわからない。

どうすれば、衛青仲卿の正しい人物像を伝えられるかわからなかった。

「違うんだよ・・・・！」

林山から視線をそらし、床を見つめながらつぶやく星影。

上手く言葉をつむげない彼女は、『違う』という一言しか言えなかった。

「とにかく、違うんだよ!!」

「違うって、星影・・・・。」

「違うったら、違うんだ!そこを理解してくれよ!!」

きちんと言えなかったが、強く林山の話を否定した。衛青将軍が悪い人間ではないと伝えたい一心で、違う、と言い続けた星影。そんな親友に、困り顔で林山は言った。

「まぁ・・・お前の気持ちはわかるぞ、星影。衛青将軍は、お前の命の恩人でもあるわけだし・・・。そんな人間の嫌な話を聞けば、怒るのも無理はないと思うが――――――」

「怒るさっ!!ホラ話を聞かされて、いい気分なわけがないだろう!?」

「あのな～信じたくない気持ちもわかるが、人間誰でも欠点はあるぞ？」
「欠点ってなんだよ！？衛青将軍は、媚びへつらう人間じゃない！」
「そう言うけどな、衛青将軍は下級層出身者なんだぞ？」
「だからなんだよ！？好きで、低い身分に生まれたわけじゃない！」
「それだけじゃないんだ。衛青将軍は――――・・・『飛将軍』と呼ばれた李広将軍を殺したんだぞ・・・？」
「殺した・・・・？」

その言葉で、ようやく林山の方を見る星影。

「そうだ。衛青将軍は、李広将軍を殺したんだぞ。」
「衛青将軍が・・・李広将軍を殺した・・・？」

（李広将軍・・・・？）

聞き覚えのある名前にハッとする。

（李広と言えば――――――琥珀が言っていたあの李広将軍か？）

匈奴討伐の際に、衛青将軍の配下になった老将軍。
自分より若年（じゃくねん）の衛青将軍の命令は聞けないと言った老人。
「敵を倒す」と出かけておいて、迷子になって味方に助けられたじーさん。
「天に見放された。」と、自分の失敗を天帝のせいにして、自害してしまった武人。

「お前は知らないかもしれないが――――」

「――――――知らないのは林山の方だろう!?」

林山の言葉を遮りながら、強く反論する星影。

「知らないのは、林山の方だ・・・!李広将軍は、衛青将軍の命令を無視して出撃したんだぞ?その上、敵と遭遇(そうぐう)することなく、道に迷って味方に救出されたんだ!そして、それを恥じて勝手に死んだんだぞ!?」

「それは俺も知ってるよ。」

「だったら、どこが衛青将軍のせいだって言うんだよ!?」

「李広将軍は、衛青将軍と会った直後に自害した。それも、『軍令違反の件』についての話をした後だ。」

「だからなんだよ?」

「もし本当に、衛青将軍が思いやりのある人物なら、李広将軍に対して気遣いの言葉を使えたはずだよな?」

「・・・なにそれ?衛青将軍が、暴言吐いたって言いたいわけ!?」

「李広将軍を死に追いやるだけの言葉のやり取りがあったんじゃないか?」

「なに言ってるんだ!?衛青将軍は、匈奴討伐の総大将だったんだぞ!?軍令違反をした者を処罰するのは当然のこと・・・!厳しいことを言うのは当たり前だろう!?」

「普通はそうだが、李広将軍と衛青将軍の場合は少し違う。」

「どこが!?」

「全部だ。李広将軍は、先帝の代から仕える功績の高い名将。対する衛青将軍は、なんの功績もない寒門(かんもん)出身の若者。確かに衛青将軍

は、全軍の最高責任者だった。しかし当時は、年齢・身分・戦歴共に、李広将軍よりも下だったんだよ。」

「だからなんだよ?」

「そんな格下の相手に罪を問われれば、李広将軍もたまったものじゃないだろう?それこそ、子供が大人を叱るようなもの・・・。李広将軍からすれば、恥をかかされたことになる。」

「だったら、軍令違反をしなければいいだろう!?衛青将軍だって、好きでじーさん相手に説教なんかしたくないさ!」

「飛将軍を『じーさん』って言うな!」

「じーさんはじーさんだ!規則違反をしたんだから、怒られるのは当然だろう!?衛青将軍は、総大将としての職務をまっとうしたまでじゃん!?」

「それはそうだが・・・結果としては、死に追いやったわけだぞ?」

「だから、衛青将軍のせいだって言うのか!?いい加減なこと言うなよ!」

「でもな、みんなそう言ってるんだぞ?衛青将軍が、李広将軍を悶死させたって。」

「なんでだよ!?なんで、みんなそんな嘘を言うんだよ!?」

「・・・嘘とは言い切れないからだろう?状況からしても、衛青将軍が疑われても無理はない。」

「どういうことだ!?」

「李広将軍が、最後に会った相手が衛青将軍だ。その際、李広将軍は、衛青将軍から、皇帝に出すための報告書を作るように命じたらしい。」

「報告書?」

「軍令違反をしたという内容の報告書だ。自分の犯した罪を、自己申告するものさ。」

「・・・それを、『李広将軍だけ』に書かせたのが問題だって言うのか?」

「いや、『失敗したらみんな』書くものだから、それは関係ないだ

ろう。俺も詳しくは知らないが・・・反省文みたいなことを書くらしいぞ。」

「だったら、なんで衛青将軍が責められるのさ?」

「噂によると、衛青将軍がそれを命じた際に、李広将軍を辱めるような言葉を使ったらしくてな・・・。」

「はぁあ!?有り得ないよ、そんなこと!第一、衛青将軍が、李広将軍に悪口を言ったっていう証拠でもあるのか!?」

「証拠は――――――・・・ないこともない、というか・・・。」

「え!?あ、あるの・・・・!?」

「ああ。本当か嘘か、わからないんだが・・・李広将軍は死ぬ直前に、自分の部下を集めて言ったらしいんだ。」

「なにを?」

「自分の不手際と、武運のなさと、不運な運命・・・。そして、部下達を失敗に巻き込んだことへの謝罪の言葉と・・・。」

「『と』、なんだよ?」

「衛青将軍は新時代の人間で、自分は旧時代の人間だと・・・。」

「新時代と旧時代・・・?」

「多分、『世代交代』だということを言いたかったんだろう。その後、李広将軍は死んでしまったんだがな。」

「世代交代・・・ねぇ・・・。」

「問題は、李広将軍と今生の別れをした部下達の話だ。彼らが言うには、『李広将軍は、衛青将軍に殺された。』と言っていたらしいんだよ。」

「えぇえ!?」

「この話は賛否両論があってなぁ・・・。真実は定かじゃなんだ。でも・・・衛青将軍と李広将軍の間に、なにもなかったとは言い切れないだろう・・・?」

「そんなの嘘だ!いいや、罠だ!それは衛青将軍を落としいれようとする罠だよ!そうでなければ妬みだ!」

「だから、どちらとも言えない話なんだよ。でもな・・・李広将軍

の死に、衛青将軍が関係していたという意味合いのことは、この先ずっと言われ続けるだろうよ。」

「どうして!?李広将軍の部下の証言に、信憑性はないんだろう!?」

「そうだが、『衛青将軍と会った後、李広将軍は自害した』という事実は、変えられない。」

「でも、それは――――――・・・・!」

「だから、衛青将軍が李広将軍を死に至(いた)らしめたのは、間違い・・・・」

「――――――――――――――――――違うっ!!」

違う!

「せ、星影!?」

「絶対違う!!」

違う違う違う違――――――――――――――――――う!!

「衛青将軍は、そんなお方じゃないっ!!」

あの人は、私を助けてくれた。
みんなから差別される宦官を助けてくれた。
宦官である私をかばってくれた。

“・・・疑われても無理がないな。”

“・・・律儀（りちぎ）に礼を言う宦官は初めてだ。優しいな。”

“・・・無鉄砲もほどほどにしなさい。”

浮かんでは消える、衛青からの優しい言葉。

（あんな優しくて、賢くて、穏やかな人が――――――――）

「人を傷つけるようなことを言うはずがない・・・・！」

絞り出すような声で言うと、再度、林山から顔を背ける星影。
そんな星影の姿に、林山はあることを感じ取る。

（まさかこいつ・・・・。）

一つの考えが、林山の中でまとまる。

（・・・もしそうなら、この取り乱しようも説明がつく。）

それを確かめるために、林山は静かに言った。

「お前の気持ちはわかるよ、星影。お前にとって衛青将軍は、恩人だからな。」

動きをとめ、林山の話に聞き入る星影。それを確かめながら、林山は話を続けた。

「でもな、衛青将軍は寒門の出なんだ。やはり・・・生まれながらの性質というか、気品というか、持って生まれたものが違うと言うか・・・なぁ？」

その言葉で、星影の体がかすかに反応する。

「彼が将軍になれたのだって、姉が皇帝の寵妃になれたことも関係するし・・・。いや！もちろん、匈奴討伐の総大将としての実力もあったと思うけど――――――――・・・・」

一息おいてから、わざと大きな声で林山は言った。

「やっぱり、同じ一族である霍去病と比べたら、地味と言うか、目立たないと言うか、人気は劣(おと)るよな！いくら同じ兄弟でも、霍将軍と衛青将軍じゃ・・・・・・」

「霍去病と衛青大将軍を比べるなぁぁぁぁ――――――――――――――――!!!!」

林山が言い終わらないうちに、星影の怒声が部屋に響き渡る。

「せ、星影・・・？」

「ふざけんじゃねぇよ!!衛青将軍は、謙虚で寡黙なだけなんだよぉ!!それのどこが、媚びへつらってるって!?」

「おま・・・声が大きいぞ!静かに――――――・・・!!」

「静かな声で言ってもわかんないだろうがっ!!あのなぁーいくらみんなが知ってる話だとしても、それが正しいとは限らないんだぞ!?お前が知ってる衛青将軍の話は間違いだぁ!!」

大音量で怒り続ける星影。探(さぐ)りの意味を込めて言った林山の言葉は、星影の逆鱗に触れていた。無論、【霍去病】という名が引き金になったことを、林山が知る由(よし)もなかったのだが・・・・・

「私が会った衛青将軍は、そんな腐った人間じゃないっ!!見たことも話したこともないくせに、いい加減なこと言うな!!」

「ちょ、落ち着――――――!」

「なんでわかってくれないんだよ!?さっきから違うって言ってるだろう!?」

「わかった!わかったから――――!」

「いくら親友でも、衛青将軍への侮辱は許さないっ!!!」

「馬鹿!!これ以上大声を出したら――――――――」

（周りの人間が起きるじゃないか！！）

予想以上に怒る星影に焦る林山。注意しようと口を開いた瞬間――

――――

「うるせぇぞ、小僧ぉ！！」

「さっきからなんなんだよっ！？」

「どれだけ大声でわめけば、気がすむんだぁ！？」

声と共に、激しく叩かれる両側の壁。

（やっちまった！）

この状況に、内心で悪態をつく林山。

「す、すいません！！本当に申し訳ない！！静かにしますから！！」

謝ったのもつかの間。今度は部屋の扉が叩かれる。

「ちょっと劉さん！さっきからなんなんですか！？下まで声が響いていますよ！！」

運が悪いことに、文句を言ってきたのは、泊り客だけではなかった。

「うるさくて眠れないって、他のお客さんから苦情がきてるんですよ！！他のお客さんの迷惑です！！」

扉を叩く激しい音と、中年女性特有の声。林山が泊まる宿の女将だった。

それに対して、慌てて戸口に向かって叫ぶ林山。

「す、すみません！なんでもありません！！寝言なんです、寝言！！」

「寝言ぉ～！？誰か来ているんじゃないんですか・・・・・！？」

「違います！よく人と会話をしてるような寝言を言うんですよ！！本当にすみません！申し訳ないです！！」

「まあ・・・寝言だかなんだか知りませんけど、あんまり騒ぐようなら出てってもらうよ！？」

「わかりました！よ～く、わかりました！！申し訳ありません！！」

「まったく・・・本当に寝言なんだか・・・。」

林山のなんともいえない説明に、渋々ながらも納得する女将。

宿の責任者に謝る一方で、鳴り止まない罵声にも彼は対応した。

「静かにしてくれよ、兄ちゃん！！」

「こっちは明日早いんだ！迷惑なんだよ！」

「これ以上騒ぎやがると、ただじゃおかねぇぞ！？」

「す、すいません！！本当に申し訳ないです！！ご迷惑おかけしました！！静かにしますから！！」

（また同じ失敗をしてしまった・・・・！）

そんなことを考えながら、必死で頭を下げる林山。
しかし、先ほどと違ったのは、【一人で謝っている】という点だった。
一人で謝ることは不満ではなかった。この部屋には、あくまで自分一人しかいない。
それ以外の者の声・・・星影の存在がわかってしまうとかなり困る。
ただでさえ彼女が、兵士の服装で自分のところに来ているのだ。
宮中にいなければいけない人間が、街中にいるというのは不信極まりない。
見つかってしまえば、ただではすまないだろう。
だから彼は、一人で謝り続けた。

「本当に、申し訳ありませんでした・・・・！！」

しばらく謝れば、周囲からの非難はなくなった。程なくして、複数の寝息が林山の耳に届く。それを確認すると、星影へと視線を向ける林山。

「星影・・・！」

自分の声に、相手が答えることはなかった。ただ、その背中からは怒りがにじみ出ており、彼女が不機嫌であることを林山に教えてくれた。

「お前のせいで、両隣から文句を言われたぞ？」

「大声を出させるようなことを言った林山が、悪いんだろう・・・。」

そう言った星影の声は、小さいながらも威圧感を与えるものだった。

「・・・衛青将軍の悪口を言うお前が悪い。」

「悪かったよ、星影。機嫌を直してくれよ？なぁ？」

「うるさいよ・・・。いい加減な噂ばっかり信じやがって・・・。」

ぶっきらぼうに言うと、強く拳を握り締める星影。

自分がここまで怒る理由がわからなかった。

命の恩人を悪く言われたからかもしれない。

自分が好感を持っている人間を、侮辱されたからかもしれない。

どちらにせよ――――――

「衛青将軍は・・・優しいだけなんだ。周囲に、気遣いすぎるだけなんだ・・・！」

衛青将軍を悪く言われたことが許せなかった。

正しいことが、正しく伝わっていなかったからかも知れない。

自分が、こんな悲しい気持ちになるのは・・・。

「衛青将軍は悪くない・・・・・・。」

消え入るような声で告げる星影。

「お前の話はわかったよ・・・星影。」

そんな親友に、林山は落ち着いた口調で答える。

「星影の言う通り・・・李広将軍が自害した原因は、衛青将軍じゃないということはわかったよ。」

「林山!?」

「星影が言うなら、なにかの間違いだな?」

「わかって・・・!わかってくれたのか、林山!?」

「ああ・・・。」

・・・わかった。

こいつのこの態度で、わかってしまった。

星影が、衛青将軍をどう見ているのか・・・・!

「衛青将軍が、本当は心穏やかな人だということはわかったよ。」

「林山・・・!」

「でもな、星影・・・・。この国の人間・・・・大半の漢民族は、俺のように思っているんだぞ。」

「え？」

（星影の気持ちを考えれば、こんなことは言いたくはないが――――――！）

迷いはあったが、それを振り払うと林山は言った。

「衛青将軍が、李広将軍を死に追いやった人間だと本気で思っているんだ。」

「え・・・？」

声のトーンを下げながら義姉に告げる義弟。

林山から発せられた言葉により、星影が奈落の底に突き落とされたのは言うまでもない。

第四十九話　人の噂はいい加減（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
「衛青仲卿が嫌われ役になっている」という設定は、実際にあった話を使わせていただきました（汗）詳しい話については、次の話の後記で、解説させてください（大汗）
それで、小話なのですが、小説の中で出てきた『寒門』とは、貧しい身分を意味しております。また、『天帝』に関しては、天上界を支配する王様のことを意味します。

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください（平服）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第五十話　噂についての討論会

林山から聞かされた話の中で、こんなに嫌な思いをしたのは初めてだった。

「今なんて・・！？」

「・・・民衆は、衛青将軍が李広将軍を殺したと思ってるって言ったんだよ。」

林山の言葉が、胸に深く突き刺さる。心臓が、嫌な音を立て始めた。

「な、なんで・・・？なんでみんな、衛青将軍が殺したなんて思って――――――・・・・・！？」

「別に、みんながみんな、衛青将軍が李広将軍を殺したと思っているわけじゃない。衛青将軍を好きな人もいるから、『悪』としてはまとめられることはないが――――・・・・」

一息おいてから告げられた、親友からの言葉。

「・・・この事件に関する衛青将軍の評判はあまりよくない。李広将軍の死を語る上で、衛青将軍が『悪人扱い』されるのは事実なんだ。」

その言葉を聞いた瞬間、言い知れぬ怒りが湧き起こる。星影はその思いを、言葉として外に吐き出した。

「――――――――馬鹿言うなっ！李広将軍の死と衛青将軍は無関係だ！！私、聞いたんだから！」

「聞いたって・・・・・誰から聞いたんだ？」

「琥珀に聞いたんだよ！衛青将軍は、絶対にそんなこと出来ないって・・・！」
「琥珀って・・・・・『伯燕（はくえん）』という別名がある奴か？」
「そうだよ！あいつは、そういうことに詳しいから・・・！」
「星影お前――――・・・そんな怪しい奴を信用してるのか！？」
「素性は怪しいが、あいつの話に嘘はない！信じる価値はある！！」
「なに言ってるんだ！？なんの根拠もないのに、そんな相手を信――――――」
「琥珀のことはどうでもいい！今は、衛青将軍の話が先だ！」
そう言うと、話を聞けと言わんばかりに机を叩く星影。
「誤解しないでくれ、林山！何度も言うが、衛青将軍は人の悪口を言うような人じゃない！それどころか、相手のことを思うあまり、自分がひどい目にあっても、隠してしまう人なんだ！！」
「そうなのか？」
「そうだよ！だって――――――」
“衛青将軍は、人の気持ちのわかる方・・・。それゆえに、父をなくした李敢様の怒りが痛いほどわかったんだよ。『李広将軍の単独行動を止められなかった自分にも責任がある』と・・・李敢様の行為に口を閉ざしたんだ。”
「・・・李敢のことも、『李広将軍の単独行動を止められなかった自分にも責任がある』って言って・・・！陛下に訴えなかったんだから！！」
「李敢・・・？」

「李広将軍の息子だよ。父親が死んだのは衛青将軍のせいだと逆恨みして、暴行した馬鹿息子だっ！」
「あぁ！『あの』李広将軍のご子息か？」
「どういう意味の『あの』かは知らないけど、李広将軍の息子だよ・・・。」
「あの李敢、と言えば、霍去病将軍が天罰を与えた李広将軍の息子しかいないだろう？」
「天罰ぅ！？」
「そうだよ。霍去病将軍が事故を装って、李敢を単独で裁いてしまった話だろう？誰でも知ってる話じゃないか？」
「そうなの！？」
「ああ。『霍去病将軍の名裁き』として、藍田の子供達も、よく話していただろう？」
「え・・・？」
「知らなかったのか？」
「・・・・・・・・・・！」
「・・・知らなかったみたいだな？」

呆れ気味に言う林山の声は、星影には届いていなかった。
この時、彼女の心中を占めていたのは、琥珀から霍去病の話を聞いた時と同じ思いだった。

（なんてことだ・・・！）

ここでも霍去病は、英雄・・・いや、善人扱いか！？
衛青将軍の思いも理解しないで、勝手な振る舞いをしたというのに！
わだかまりを解こうとする叔父の思いを無視した甥。
衛青将軍の気遣いを無駄にした、高慢な若将軍。
話を聞く限り、わがままな印象しかない武人。
てか、罪を犯しても、褒め称えられるのは何故！？

霍去病は、なにか特別な免罪符でも持っているのか！？

（霍去病なんかよりも、衛青将軍の方が何百倍もかっこいいじゃない・・・！！？）

実際の衛青将軍を知るだけに、低評価されることが納得できない星影。

一方、そんな親友の様子に、林山は複雑な気持ちになっていた。

目の前で衛青将軍のことを話す星影は、いつもの彼女とは違っていた。

目はかすかに赤みがさし、頬は桃色に染まっていた。

唇もわずかに震えており、どこか落ち着きがない。

はっきり言ってこんな星影を、林山はこれまで見たことがなかった。

（・・・やはり、星影は衛青将軍のことを――――――）

取り乱す星影に、林山は何度も聞こうとした。

その事実を聞きたくて、確かめたくて・・・・。

しかし、それを口にすることはできなかった。

林山が言葉にする前に、彼女が口を開いてしまったからだ。

「霍去病のことも、今はどうでもいい！！問題は、李広将軍とその

息子だ！」
「星影・・・。」
「親子そろってわがままなんだよ！衛青将軍を勝手に誤解して、敵視して、馬鹿にして・・・！！」
「・・・仕方がないだろう？李家と衛家では、仲良くしろと言うのが難しい話だ。あの両家は不仲なんだから。」
「それって、身分が原因なの？」
「身分もそうだが、陛下も原因の一つだ。」
「なにしたんだよ、あの変態！？」
「聞いた話じゃ、接し方に差があったらしいぞ。」
「接し方に？」
「ああ。父親の家臣よりも、自分の家臣の方が大事だったみたいだ。」
「それが、李親子の自尊心を傷つけたってこと？」
「親子というよりも、李家全体に不満を持たせたんだろう。高貴な方々は、気位が高いって言うだろう？」
そう言うと、湯の入っている器を手に取る林山。
「もしそうなら・・・衛青将軍が李広将軍を殺したって話も、李家が広めたんじゃ――――――！？」
「半分はそうかもな。ただ・・・実際に広めたとなると、李家の者ではなく、その取り巻きの仕業と考えた方が理に適ってる。」
「つまり、ご機嫌伺いとして広めたのか！？」
「媚びかどうかは知らないが、李広将軍は人望があった。仮にも、『飛将軍』と称えられた武人だ。憧れる奴だって多い。李広将軍の名誉を守るために、衛青将軍を悪役にしたとしてもおかしくない。」
「・・・・・・・・それって、『軍令違反で死んだ』ってことに、してほしくなかったってこと？」
「そうじゃないか？案外、李敢を狂気へ駆り立てたのも、そんな連

中の一言だったりしてな。『あなたの父上を殺したのは、衛青将軍ですよ。』みたいなことを言ってさ？」

「それを信じて、衛青将軍が悪いって決め付けたってか！？」

「余計なことを吹き込んだ可能性はあるだろう？」

「信じられない！！普通は、きちんと調べてから、事の真偽を見極めるものだろう！？自分の父親のことなんだから・・・・！」

「若気の至りってやつじゃないか？気持ちばかりが急いで、父親の死の真相を、きちんと確認できる余裕がなかったんだろう。だから、冷静な判断が出来なかったんだ。」

「もしかして衛青将軍は、そんな状況を知っていたから、陛下に訴えなかったんじゃ・・・！？」

「・・・そうかもな。どちらにせよ、李家側が衛青将軍に仕掛けた嫌がらせに変わりないんじゃないか？」

「それじゃあ衛青将軍が、馬鹿みたいじゃないっ！？」

李敢の思いを知って、暴行事件を口外しなかった衛青将軍。

叔父が受けた暴行を知り、不問にしている意味を考えずに仕返しをした霍去病。

わだかまりを解こうとしたこと衛青将軍の努力は、無駄に終わった。

その結果、李敢は悪とされ、霍去病の名声は高まった。

そして、衛青将軍が李広将軍を死に追い込んだという話が、真実として定着してしまった。

気遣いでしたことが、人の命を奪い、自分の評判を悪くしてしまったのだ。

「割に合わなさすぎだろう！？」

それを思うと、腸が煮えくり返る星影。

「皮肉な話ねっ！！李家が流した誤報を、多くの民衆が信じている

なんて・・・！」
「無理もないさ。情報が少ない上に、その伝わり方に問題があったんだから・・・。」
「・・・なにそれ？情報の多さが、その人の良し悪しを決めると言うのか！？」
「だから衛青将軍も、『李広将軍を殺した』と、誤解されたんじゃないか？」
「どういうこと・・・・？」
「庶民（俺達）には、『衛青将軍が原因で、李広将軍が死んだ。』という情報しか伝わっていない。衛青将軍や李広将軍を知る者が聞くのと、知らない者が聞くのとでは、捉え方が違うはずだ。」
「捉え方が？」
「『衛青将軍が原因で、李広将軍が死んだ。』と、聞いただけじゃ、いろんな可能性を考えるだろう？彼らを知る者なら、どんな経緯でそうなったか、大体の想像はつく。ところが、知らない者が聞けば、衛青将軍が李広将軍を殺したと誤解するんじゃないか？」
「――――――――あっ！」

（そうかもしれない・・・・・！！）

『衛青将軍が原因で、李広将軍が死んだ。』って聞いただけじゃ、普通の人は単純に考える。
衛青将軍が原因＝原因である衛青将軍が悪い＝衛青将軍は悪人。
・・・・・・・・・・・・と、いう、方程式を弾き出すだろう。

「そっか・・・。情報が曖昧だと、良くも悪くも想像できる・・・・・！」
「しかも相手は大将軍だ。日常生活の中で、大将軍と民間人が触れ合う機会なんてないだろう？あったとしても、相手の本質を見抜くまでの付き合いなんてできるわけがない。」

「ええ。そうなれば、自分達で好きなように想像するしかないわね・・・。」

「だから『衛青将軍が原因で、李広将軍が死んだ。』と聞けば、どうしても衛青将軍の方を悪く思ってしまったんだ。」

「じゃあ、衛青将軍が悪者扱いされるのは、人々の妄想が付け足された結果なのか!?李広将軍をいびり殺したとか、見殺しにしたとか、置き去りにしたとか――――そういう濡れ衣を着せられたってこと!?」

「内容までは知らないが、まぁ・・・多分、そんなところだろう。それが慶事ならともかく、凶事となれば――――・・・人の恨みや妬みも加えられる。」

「恨みや妬み?」

「ああ。李家同様、寒門出身の衛青将軍をよく思わない人間の嫌がらせだよ。現にお前、郭勇武が、衛青将軍に突っ掛かってるところを見たんだろう?」

「!!」

林山の言葉で、星影の記憶は逆流する。

彼女の頭に浮かんだのは、衛青将軍に言い負かされ、悔しそうにする天敵の姿。

「――――――見た!憎々しげに、突っ掛かってた!!」

思い出したことを口に出せば、やっぱりな、と頷く林山。

「そういう連中が、噂を悪い方に煽(あお)ったりするんだよ。」

「その通りだ!余計な知恵の働く奴らだから、悪評にするのは簡単だわ・・・!」

「しかも、人の死に関する情報なら、間違いがあってはいけない。だから、『衛青将軍が原因で、李広将軍が死んだ。』という話の内

容にも、『間違って伝わってはいけない。伝わるはずがない。』と、思うだろう？」

「それじゃあ――――そんな人間の先入観を利用して、嘘の情報をばら撒いたってこと！？」

「おそらくな。だから誰も、『衛青将軍が、李広将軍を殺した。』という話を疑わなかったんじゃないか？無論、俺も含めて・・・・！」

「つまり、心理作戦を使ったということか！？四面楚歌みたいな！？」

「それとこれとじゃ、意味は違うが――――――――・・・まぁ、作戦的には似てるかな・・・？」

「そういうことだったのか・・・・・・・・・・！」

苦笑しながら言う林山と、わかったとばかりに頷く星影。しかし――――――

「だけど・・・・・それはそれで、おかしくない？」

「なにが？」

「なんで誰も、そんないい加減な噂を注意しなかったの・・・？」

衛青将軍がどういう人間か知っていれば、その噂が間違っていることに周囲は気づいたはずだ。そうなれば、でたらめな噂をしている奴らを叱りつけることが出来るはずである。

『衛青将軍が、李広将軍を殺した。』という噂を、民衆に広がることはなかっただろう。

そんな星影の疑問に、湯を口に運びながら林山は言った。

「そりゃあ俺達みたいに、気心の知れた仲なら言うぞ。でも、大将軍ともなるとそうはいかないだろう？」

「なにそれ？大将軍になると、教えてくれる友達がいなくなるわけ？友達が減るって法則でもあるの！？」
「そんな法則はない！だけど・・・大将軍と親しく出来る相手となると限られてくるだろう？」
「交友範囲が、狭くなるってこと？」
「狭くじゃなくて、高くなるだろう！？交友範囲は！」
「そうなのか？」
「そうだろう！？付き合う相手が、大将軍に近い地位の高官や皇帝とかになるんだからさ。」
「やっぱり狭い範囲じゃん！？」
「出世するってのは、そういうことだろう？だから驚いたんだよ、俺は！衛青将軍が、星影を助けたことに・・・・！」
「驚くことかぁ～？人助けが？」
「驚くさ！身分にうるさい宮中で、宦官であるお前を衛青将軍は助けた。それも、賊の疑いが強い奴をだ！仮に、陛下の気を引こうとした行為だとしても――――――・・・失敗した時のことを考えれば、かなりの代償を払わされるってのに・・・。」
「じゃあ、危険を冒(おか)してまで、私を助けてくれたってこと・・・！？」
「・・・そうなるな。」

林山の言葉で、嬉しそうにハニカム星影。それを横目で見ながら、湯をすする林山。

「俺も詳しくは知らないが、上流階級の人間は、『はしたない』という理由で、あまり噂話をしないらしいぞ。」
「なっ！？衛青将軍の話が、はしたないって言うのか！？」
「そうじゃない。よけいなおしゃべりはしたくないってことさ。高官って言えば、年配の者ばかりだろう？そういうハジけた話よりは、国政や外交についての話を、熱心にしたがるものだ。」

「そっか！年寄りに冗談は通じないからな・・・！」
「そういう言い方するんじゃない！目上に対して・・・！」
「別にいいんじゃない？土地は変われど、年寄りはどこも同じってことでしょう？藍田みたいに。」

楽しそうに言う星影の言葉で、故郷でのことを思い出す林山。

藍田きってのじゃじゃ馬娘・劉星影は、藍田の長老達の悩みの種だった。
彼らはことあるごとに、いつも星影を非難していた。
しかし、星影も星影で、彼らの話に耳を傾けることはなかった。
いつも、話半分で聞いていた。
ああ言えば、こう言い、ここ言えば、ああ言う。
結局根負けしてしまい、みんな星影の好きなようにさせていたのだ。
口喧嘩で彼女に勝てる相手など、そうそういないのである。

（まぁ・・・自分を見捨てた人間からの指図なんて、誰も聞きたくないがな・・・。）

諸々の事情も思い出し、一人沈痛な面持ちになる林山。

「でもさ、親しくする相手が限られてるって言っても、下の者との交流がまったくなかったってことはないでしょう？」

そこへ彼の思いなど知らない義姉が、新たな問いを発する。それに答えるため、再び口を開く林山。

「・・・まぁな。衛青将軍ほどの御仁（ごじん）なら、勝手に近づいてくる人間もいるだろう。」
「・・・・それって、取り入ろうとする奴らとか？」

「そんな連中ばかりじゃないぞ！純粋に衛青将軍に憧(あこが)れて、慕(した)っている人間だっているだろう！？」
「じゃあさ、そういう者達が伝えたりしないの！？『尊敬する衛青将軍のでたらめな噂が、流れてますよ！』って！？」
「言ったかどうかは、わからない。ただ・・・仮に伝えたとしても、肝心の衛青将軍が動かなければ、意味がないだろう？」
「動かないって？」
「誤解を解こうとしなければってことだ。」
「なに言ってんだよ、林山！？どこの世界に、自分の身の潔白を証明しない人がいるっていうんだ！？」
「・・・いるだろう。星影が話した通りの衛青将軍なら・・・。」
「どういうこと・・・！？」
「衛青将軍は、周囲に気遣う優しい性格なんだろう？あまりにも気遣いすぎるから、媚びていると誤解されるくらい。」
「そうよ。謙虚なだけなのにさ！」
「しかも衛青将軍は、李敢に逆恨みで殴られた時だって、皇帝に訴えなかったんだろう？」
「うん。馬鹿息子の気持ちを考慮してね。」
「それでいて、基本的な性格が、周囲への気遣いときている。」
「だから？」
「そうなれば、自然と争いごとを好まない、事を荒立てるようなことはしないだろう？」
「・・・なにが言いたいんだ、林山？」
「衛青将軍は、争いごとを防ぐためには、自分を犠牲にする人じゃないのか？そのためなら、自分が悪者になってでも、平和を保とうとするんじゃないか？」
「あ・・・！」
林山の言葉で黙り込む星影。
親友の推測は、現実味のあるものだった。

常に周囲を気遣う衛青将軍なら、その変化を嫌うはずだ。
和を乱すようなことを、避けたがるような気がした。

「そう・・・ね。そうかもしれない・・・。」
「だろう?そう考えれば、李敢の行動だって説明がつくぞ。」
「行動って・・・李敢が衛青将軍を殴ったこと?」
「ああ・・・・・。もしからしたら李敢は――――――――――衛青将軍が殴り返さないと踏んで、殴ったかもしれない・・・。」
「わざとやったってこと!?」
「それも、八つ当たりの意味を込めてしたかもしれない。」
「八つ当たりだぁ~!?」
「そうだよ。名門の家柄でありながら、寒門の出である衛青将軍に手柄を持っていかれたんだ。身分も、李家を上回る速さで出世した。」
「それに身分は関係ないだろう?実力ある者だけが、功績を残せるんだから。」
「手柄だけじゃない。李広将軍の死後、李家は完全に活躍の場所を失ったんだ。なによりも、偉大な父親を奪われたんだぞ?・・・・・衛青将軍を恨まないはずがないだろう?」
「それじゃあ李敢は・・・・衛青将軍の性格を見抜いたうえで、殴ったってことかよ・・・!?」
「あくまで仮説だけどな。」
「信じられない!!もしそうなら、私は李敢の墓を暴いて、その死体を辱(はずかし)めてやるっ・・・・・!」
「やるな、怒るな!俺達は、想像で話してるんだぞ?そういう可能性もあったんじゃないかと、推測で話しているだけなんだからさ。」
「そうだけどっ!」
「どうせ、今となってはわからないことだろう?本人は死んだんだからさ。」
「そうだけど・・・。」

そう・・・死んでしまったら、その人間がなにを考えていたなんかわからない。
李敢が、どんな思いで衛青将軍に暴力を振るったのかなんてわからない。
でも・・・衛青将軍の登場で、李家が没落したのなら・・・恨んでいた可能性は高い。

「・・・今となっては、わからないってことか・・・。」

死人に口なしとはよく言ったものだ。
李敢の気持ちなんて、李敢しかわからないだろう。
ただ、事故を装って殺されたことは、李敢でなくても無念だったろうけど・・・。

「父親が自害で、その息子が殺害・・・それも射殺されるとはね。」
「まぁ・・・家の栄華なんて、そう長くは続かないって事だろう?」
「そうだね。没落のきっかけが、血気盛んなじーさんの身勝手なんだから。」
「だから、『飛将軍』をじーさん言うな!つーか、お前・・・・李広将軍がどんなお方か知らないだろう?」
「知ってるよ。人の話を聞かない慌て者だろう?」
「馬鹿!誰が慌て者だ!?やっぱりお前、あの人をきちんと理解してないぞ!?」
「してるよ!だって、琥珀が――――――――・・・・・・・・!」

そう言いかけた星影だったが、彼女の言葉はそこでとまった。

“陛下が、李広将軍を衛青将軍の指揮下に置いたのは、衛青将軍が

匈奴について一番良く知っていたからなんだ。衛青将軍は、匈奴の戦法や地理的に詳しかったからね。だから陛下は、衛青将軍を匈奴討伐の総大将にしたんだよ。ところがそれを、李広将軍は理解していなかったんだ。”

星影の脳裏に、琥珀の言葉がよぎる。その瞬間、彼女の心に一つの疑問が生まれた。

「・・・理解してたのかな。」
「はぁ？」
「林山・・・陛下は言ったのかな？」
「なにをだ？」

つぶやくように言う星影。その声を聞き取ろうと、聞き返す林山。

「陛下は、『衛青将軍の方が、匈奴の内情・戦法に詳しい』ということを、きちんと李広将軍に説明したのか？」

「はい・・・・・・・・・？」

真顔で尋ねる星影に、林山は呆気に取られるのだった。

第五十話　噂についての討論会（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！

「衛青仲卿が嫌われ役になっている」という設定について、小説の内容とは少しズレますが、ちょっと書かせてください（大汗）
いつの時代かは忘れたのですが、李広を主人公にした後世の時代小説で、「悪役＝衛青」という内容のものがありました。その小説の中で、李広将軍を死に追いやった将軍として、衛青は紹介されていました。どうやら、衛青が悪者役にされていた時期があったようです。
それを今回は、書いてみました。

※誤字脱字を発見された方、こっそりでいいのでお知らせください・・・！！
よろしくお願いいたします（平伏）

第五十一話　悪いのは誰？

それは、ごく当たり前の質問だった。
当然過ぎる内容に、林山の返事は遅れた。

「・・・・李広将軍への説明？」
「そう！李広将軍は、衛青将軍が匈奴討伐の総大将になったことを理解してなかったらしいんだよ！」

ようやく出た言葉に、星影が即答する。しかしその答えは、林山にとって意味のわからないものだった。

（理解もなにも、上からの命令なら、それに従うだろう・・・・・？）

それを説明だの、理解だのという星影。彼女がなにを言いたいのかわからなかった。

「どういうことだ・・・・？」

とりあえず、わからないので質問をする。質問に質問で答えるやり取り。
そんな彼の問いに、星影は声を潜(ひそ)めながら言った。

「だから李広将軍は、衛青将軍が総大将に選ばれた理由を理解できてなかったんじゃないか？」
「そりゃあ、納得はできないさ。それまでの戦歴から考えれば、李広将軍が総大将になった方がいいだろう。でも、決まった以上は、それに従っ――――――」

「そうじゃないよ！李広将軍が衛青将軍を認められなくて、理解できてなかったとかじゃなくて、衛青将軍が匈奴に詳しいということを、『知らされていなかった』んじゃないかってことだよ！」
「知らされていなかった・・・？」
「そう！だから陛下が李広将軍に、衛青将軍を総大将に選んだ理由を話したのかどうかって聞いてるんだよ！」
「俺に聞かないでくれ！陛下じゃあるまいし、わかるわけがないだろう？」
「そうだけど、一つの可能性として考えればつじつまが合わない？名将とは思えないほど、幼稚な動きをした李広将軍の行動を――――！？」
「可能性・・・ねぇ。」

星影の言葉で、腕を組む林山。

「確かに・・・。一般に知られている李広将軍からすれば、らしくないと言えば、らしくない。」
「私は、李広将軍がどんな人かは知らない！でも・・・仮にも『飛将軍』とも言われた男が、あんなお粗末な最期を迎えるなんておかしくない？冷静に考えればさ・・・？」
「そうだな・・・。俺が知っている『飛将軍』李広は、筋を通す、義理堅い人物だ。」
「義理堅い？」
「ああ。部下も大事にし、自分よりも周囲の者達を第一に考えていたらしい。戦死者が出れば、自分の褒美の中から、多めに見舞金を家族に送ったりもしていたんだ。」
「そ、そうなの！？」
「とても人望のある将軍だった。弓術（きゅうじゅつ）に秀（ひい）でていたので、『高祖の時代に生まれていればよかった。』と、惜しまれたほどの人材だ。遅く生まれたと言っていい。」

「つまり、『生まれる時代を間違えた』的な人？」
「その通り！しかも、匈奴の者からは、『漢の飛将軍』と恐れていた。名前だけも脅威になる人だった！」
「それを考えれば、武威のある李広将軍を総大将にしないのはおかしいわね・・・。よっぽど頑固だったのかな？」
「頑固だけど、悪い意味で頑固じゃない。李広将軍は、年を取ってからも戦場で働きたいがために、昇進するのだって拒んだそうだし。」
「出世を断ってた！？李広将軍が！？」
「高い位をもらって、安全な宮中で平和ボケするよりは、低い身分で、危険な戦場を駆け回る方が性（しょう）に合ったらしい。」
以外だ・・・・・・・・・！
つーか、琥珀から聞いた話とは全然違う！？

（なんか思ってたよりも、意地悪じーさんじゃない？）

林山からの話を聞き、少しだけ、李広将軍への評価を改める星影。
それと同時に、疑問が増えた。

「そうだとしたら、おかしな話ね・・・。常識をわきまえていた老将が、単独行動を取ったり、自害したりするなんて・・・・・。」
「もしかしたら――――・・・・・お前の言う通り、李広将軍は知らなかったのかもしれないな。衛青将軍が総大将に選ばれた理由を・・・・！」
「やっぱりそう思う？」
「ああ・・・。『知らなかった』と『説明していない』じゃぁ、まるで意味が違うからな。陛下が『説明していない』と考えれば、李

広将軍の行動は道理に合う。」
「そうだとしたら、なんで陛下は言わなかったんだろう・・・。そんな大事なことを。」
「決め付けるのはよくないぞ、星影！俺達の話は、あくまで推測でしかないんだからさ。」
「そうだけど――――――」
「でも・・・お前の意見が、間違っているとは言い切れない。なんせ陛下は、李広将軍のことを『過去の産物』と考えていたみたいだからな。」
「『過去の産物』？」
「ああ。早い話が、自分好みの人間じゃないってことだよ。」
「自分好みじゃない～？」
「陛下は、派手で大胆な人間が好きなんだろう？あと、美しいものなら、男女問わずに愛でるんだったよな？」
「あ～・・・確かに、好きみたいだけど・・・。」
自分が見た皇帝を思い浮かべながら、冷めた笑みを見せる星影。
「それに李広将軍を当てまめれば、派手とは程遠い、堅実な人間だ。」
「え・・・堅実でもあったの？」
「堅実さ。それに根性もある。かつて皇帝に罰せられ、身分を平民に落とされた時も、持ち前の努力で返り咲いたほどの人だ。」
「将軍が平民に！？なにしたの！？」
「詳しくは知らないが、敵に捕まった罰らしいぞ。」
「へぇ～敵陣を目指して迷子になった時みたいに、仲間の手を借りた罪ってこと？」
「まさか！敵を射殺しまくって、自力で帰ってきたそうだぞ。」
「なのに陛下は罰したの！？」
「そうだよ！平民にはなったが、結局『後将軍』として、戦場に戻

って来たけどな・・・。」

そう告げると、湯の残った器を机に置く林山。新たな事実を知って、知識が増えた星影。しかし、一つの疑問が解けたことで、新たな疑問が出来た。

「でも・・・前科があるなら、どうして命令違反なんかしたのかしら・・・?」

「それは、手柄を立てようとして焦ったんだろう?平民として過ごした時期が長かったから、その穴埋めをしようと焦ったじゃないか?」

「罪を犯してまで焦ることなの?戦に勝てば、それでいいじゃん。」

「自分の手柄で勝たないと、意味がないだろう?結果を出さなければ、恩賞はもちろん、次の戦にだって参加できないさ。」

「だったら、なおさら焦るのはよくないじゃん?」

「・・・皇帝に嫌われてると思えば、それだけで十分じゃないか?」

「嫌われてた!?まさか、李広将軍も気遣い過ぎる派!?」

「いいや。父親の代から使える将軍ということが、今の皇帝は気に入らなかったらしいぞ。」

「え?」

「厳師匠からお聞きした話なんだが、歴代の皇帝が即位した時、一番大変なのは、家臣達をどうまとめ上げるかなんだ。特に、親の代から使える文武官の対応には気をつけるらしいぞ。」

「なんでまた?」

「即位したばかりの王が、最初から自由に政(まつりごと)を取り仕切ることはできない。周囲の助言や助けがあるからこそできるものらしい。例えば、民衆から税金を多く取りたいと思って、それを管理する者が、自分と慣れ親しんだ者なら自由にできる。ところが、親の代からの者となると、自分より経験も功績も信用もある。思う通りにできな

いんだ。」
「だから？」
「戦に関してもそうさ。今の皇帝が即位した時、戦の主導権は李広将軍にあった。一時は、宮中から離れていたが、民衆からの声にこたえる形で現役復帰した。だから、匈奴討伐に関しても、ずっと李広将軍に一任されてきた。それが今の皇帝は面白くなかった。」
「どうして？優秀なら、任せておけばいいじゃん？」
「いいか、星影。あくまで李広将軍は、先帝時代から家臣だ。今の皇帝は、自分のめがねにかなった武将を登用したかった。父からの家臣ではなく、自分からの家臣に戦場を任せたかった。」
「それじゃあ・・・衛青将軍が、匈奴討伐の総大将に選ばれたのは――――――！？」
「自分の家臣だったからだろう。匈奴の情報に詳しい上に、最愛の妻の弟。しかも、前途ある若者だ。経験をつませれば、その後の戦場での働きも期待できる。」
「・・・だから李広将軍は、自分を旧時代と例えたのか・・・！？」
「そうらしい。もっとも・・・普通の世代交代とはいかなかったが。」
「え？」
「以前から皇帝は、李広将軍を邪魔に思っていた節があったそうだ。考え方や、やろうとしていたことも違ったらしい。だから、李広将軍の代わりに、衛青将軍を総大将にしたのも、そのしっぺ返しみたいなんさ。自分より年上なうえに、民衆にも人気があり、先帝から仕える忠臣だからこそ、扱いづらかったんだろう。」
「じゃあ・・・陛下は、李広将軍に、衛青将軍が総大将に選んだ理由を、『わざと』知らせなかったの・・・・・！？」

「・・・そうだろう。必ず伝えなければいけない義務なんて、陛下にはないからな。だから・・・俺にはわからないよ。あんなすばらしい将軍のどこが気に入らないのか・・・・。」

どこか寂しそうに言う林山に、星影は忘れていたことを思い出す。

（そっか！『飛将軍』って、李広将軍のことだったのか・・・！！）

藍田にいた頃、彼はしきりに言っていた。

自分は、『飛将軍みたいな武人になりたい！』と。

大商家の跡取りである林山が、武門の道を選ぶことは出来ない。

武官になることは出来ないが、【武人のような魂を持ちたい】と言っていた。

それを横で聞きながら、頑張れと応援した自分。

『飛将軍』が、あだ名ではなく、本名だと思っていた自分。

「林山は、飛さんみたいになれるよ！」と、言い続けた自分。

なんで気づかなかったの、私！？

（だから林山は、衛青将軍に良い感情を持っていなかったんだ・・・！）

それを思い出し、思わず目を伏せる星影。今頃思い出した自分を、深く恥じた。

恥じたのだが――――・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（でも、まぎらわしい言い方をした林山も悪いよね・・・・？）

『飛将軍』と聞いただけじゃ、『飛さん』だと思う。間違っても『李さん』だとは思わない。

それにあいつは、「林山は、飛さんみたいになれるよ！」と、私が言った時、笑うばかりで説明をしなかった。誤解されるようなことをした林山が悪い。
本名があるなら、本名を言えっての！

（まぁいい・・・。林山が『飛将軍・李広将軍』に憧れていると、わかっただけでもよし（・・）としよう。）

そう自分の中で結論付け、完結させる星影。
一方の林山も、憧れの李広将軍のために、己の持論を展開し始めた。

「これはあくまで俺の予想だが、おそらく李広将軍は、無名の衛青将軍に総大将の座を奪われたことで焦りを感じたんじゃないかな？おまけに、戦で上手く手柄が立てられなくて、なかなか恩賞にありつけなかったらしいし。」
「それで、さらに焦ってしまったと？」
「あるいは、自分より若い武人が抜擢されたことが、李広将軍の自尊心を傷つけたのかもしれない。」
「ふ～ん・・・世代交代とは、思わなかったのかな？」
「心の中では、わかっていたかもしれないが、口に出せるわけがないさ。誇り高き武人なら、しつこく聞くよりも、戦場で成果を出して、総大将に返り咲けばいいんだからさ！」
「でも・・・その結果として、李広将軍は冷静さを失ってしまったんだろう？」
「ああ。きっと、敵を倒すことなく、味方に助けられる形で帰還した李広将軍は、絶望してしまったんだ。成果を残せなかった自分が、今後戦場に行くことはできない・・・と。」
「それを嘆いて、自害したってこと・・・？」
「・・・そうだろうな。これも俺の予想だが、陛下はそうなることも踏まえて、李広将軍に説明しなかったかもしれないな。」

「ちょっと待ってよ！それじゃあ――――――衛青将軍が匈奴に詳しいから総大将になったことを、李広将軍が知ってたら、軍令違反をして死ぬこともなかったんじゃないの！？」
「・・・・否定はできないな。」
「だったら、衛青将軍も李広将軍も悪くないじゃないか！？つーか、どっちもいい人間じゃん！？」
「そうだよ！そうなるんだよ・・・！！」
「だよね！？」

そう言うと、互いの顔を見合わせる義姉弟。この議題に関する答えは、すでに出ていた。

「つーか、すべての原因は、肝心な説明をしなかった陛下が悪いんじゃないか！？」
「絶対そうだな！陛下の口添えがあれば、最悪の事態は免れたかもしれない・・・！」
「そうだって！あの変態が、きちんと話していれば、誤解することはなかった！李広将軍もその息子も、死ぬことはなかったんじゃないか・・・・！？」
「馬鹿！声が大きいだろう！？」
「だって！」
「人に聞かれたら、どうするんだ！？陛下に対する不越罪で捕まるぞ・・・！？」
「別に悪口は言ってないだろう？」
「悪口は言ってなくても、否定的な言葉を使えば、それだけでも罪になるんだ！」
「なんだよ、間違いすら指摘できないの！？」
「だめだろう？てか、普通誰も言わないし、言えないぞ。」
「そりゃあ・・・言っちゃいけないとは言われてるけど――――――――！」

「我慢しろ！俺だって、我慢してるんだから・・・・！！」

そう言うと、利き手の拳を強く握り締める林山。

親友の言うことは正しかった。陛下を侮辱すれば、罪になるのは当たり前。

否定すれば、罰せられる。悪口だって言ってはいけない。

相手が皇帝陛下だから。

（私だったら、我慢できないけどな・・・・。）

よく我慢できるよな、林山。あ～あ！こんな胸糞悪い話、しなきゃよかった！

本人に直接言えないとなると、この怒りをどこにぶつければいいんだよ？

いつもだったら、武術の鍛錬をするか、やけ食いするか、遊びまわるかして発散するけど――――――・・・・。林山はともかく、宮中にいる私は、その半分も出来やしない。

なにか、代用になるものを見つけて、発散するしかないってか？

そうなれば、なにで――――――――・・・・！？

その瞬間、星影の中で一つの【閃き（ひらめ）】が湧き起こる。

「――――――――それだっ！！」

その【閃き】は星影の頭を駆け巡り、【閃い】として林山に発せられた。

「それだよ、林山！」

目を輝かせながら、その【閃き】を告げる星影。

瞬間的に思い浮かんだ考えは、自分の疑問を解決してくれる【答え】だった。

それの同意を求めたくて、彼女は言葉にしたのだったが――――――

「な、なにが！？」

聞かれた方は、驚くしかなかった。主語も、脈絡もない言葉に、疑問符で返す林山。

そんな親友に、星影はハッキリとした口調で言った。

「衛青将軍は、陛下の『身代わり』として悪く言われてるんじゃな

いか！！？」

「なにぃ！！？」

あまりにも、唐突すぎる星影の意見に、今度は林山が声を上げる。

「陛下の代用～！？衛青将軍がか・・・・・！？」

「今までの話をまとめれば、そうなるでしょう？」

「どうまとめたんだよ！？」

「そもそも、李広将軍が死んだ根本的な原因は、陛下にあるでしょう？」

「え？そりゃあ――――そうだけど・・・。」

「それなのに、陛下が悪いと言っちゃいけないんだよな？」

「罪になるからな。」

「衛青将軍は、悪く言ってもいいのに？」

「まぁ、現場の指揮を執ったのは、衛青将軍だからな。」

「大将軍を悪く言ってもいいってこと！？」

「良いことはないが、陛下を悪く言うよりは、まだマシだ――――――？」

そこまで言って、林山も気づく。

「そうか！表立って、陛下を非難できないから、その次に責任がある衛青将軍に、罪をかぶせたわけか！？」

「その通り！陛下が間違ったことをしていても、批判したらいけない。それだけで罪になる。だけど、李広将軍が死んだことに対する不満はなくならない。」

「ああ。李広将軍は、少々頑固で自尊心が強いが、悪い人間ではない・・・！現に、部下思いで、多くの兵から慕われていた。実際の衛青将軍には、なんの落ち度もないからな！？」

「李広将軍は、言われるまま、総大将になって匈奴と戦った。李広将軍を罰した件にしても、上司としての職務を果たしただけ・・・。その結果、李広将軍は自害してしまった。そうなれば、その怒りが向けられるのは――――――――？」

「功績のある将軍を差し置いて、新参者を総大将にした陛下だ・・・！」

「そうでしょう？いくら、衛青将軍が匈奴の情報に精通していたとしても、李広将軍がその事実を知らなかったら、衛青将軍に従うはずがないよ！」

「・・・ああ。李広将軍の人柄を考えれば、年齢だけで人を判断するとは思えない。そうなれば、李広将軍に十分な説明をしていなかった陛下が悪いだろうな・・・！！」

「李家が、先代から使える優秀な一族なら、それなりに人望もあったはずよ。事実、李広将軍は部下に慕われていた。李広将軍が、陛下をきちんと扱っていなかったとなると、その人達の不満は陛下に向けられる・・・！」

「・・・・つまり星影は、陛下が衛青将軍を悪者にすることで、自分への不満と、李広将軍の名誉を守らせたって言いたいのか？」

「李広将軍の名誉まで考えたかは知らないわ。だけど、前者・・・自分への不満を防ごうとしたのは間違いないと思う！衛青将軍は、それまでなんの功績もない無名の武人だった。匈奴との戦いの後で、

有名になり、人々に知られるようになったのよ？」
「確かに・・・。みんなが知らないからこそ、好きなように性格設定ができるからな。」
「その通り。総大将として、直接命令を下し、李広将軍と最後に会った男・・・衛青将軍という人間をね・・・！」
口の端だけを上げて、不敵な笑みを見せる星影。

「ただでさえ、噂っていうのは尾ひれがつきやすいものでしょう？おまけに衛青将軍は、争いごとを防ぐためなら、自分を犠牲にするような人。」
「なるほどな・・・・・・それなら、衛青将軍が悪役を甘んじたのも説明がつく。」
「そうよ。すべては――――――――――――」

「「皇帝陛下の名声を守るため・・・・・・・・・・・・！」」

声をそろえて言う星影と林山。
互いの意見が同じだったことに、思わず笑みを浮かべる。

「お前の考えは正しいよ・・・星影！」
「林山こそ・・・見事な推理よ。」
満足そうに言うと、互いを称えあう二人。そして確信した。
「間違ったことを間違ったことだと言わないで我慢することなんて、みんながみんなできることじゃないわ！例え、その原因が陛下であっても――――・・・ねっ？」
「そうさ。相手が相手だけに、陛下に非があるとわかれば、火種の要素になりかねない。それを防ぐために、衛青将軍が身代わりになったということか・・・！？」
「そうよ。衛青将軍を悪者に仕立てることで、陛下への不満を発散させたんだわ！衛青将軍は陛下の身代わりとして、悪役になっていただけなんだよ・・・！！」
そう言うと、湯の入った器を一気に煽る星影。
「やっぱり陛下は、とんだ食わせ物だ！！」
「同感だな・・・！」
「あの男のせいで、二人の人間の命が失われた・・・！」
「・・・結果的にはそうだな。」
「しかし、李敢も馬鹿だよな～衛青将軍を父親の仇と誤解して暴行し、殺されちゃったんだからな。」
「・・・・・・・・・自業自得だろう。同情する必要はないと思う。」
「珍しいわね、林山。あなたが、そんな冷たいことを言うなんて？」
仮にも、尊敬する人の息子じゃない？と、付け加えて聞けば、覚えてたのか、と、ぼやきながら林山は言った。

「・・・いろいろ考えてたら、そう言う心境になっただけだ。」
「いろいろって・・・なにを想像したわけ？」
「いや・・・もしかして李敢は、衛青将軍を、『親の仇ではない』と、わかって（・・・・）いて（・・）、襲ったんじゃないかなぁ・・・と。思ってな。」
「はぁ！？確信犯だったってか！？」

林山からの意外な言葉に、目を見張る星影。

「推測になるんだが・・・衛青将軍が陛下の身代わりで悪役になったことは、暗黙の了解として、宮中の人間は知っていたんじゃないか？」
「まぁ・・・事が事だけに、知っていなければいけないだろうけど・・・。」
「周囲もそれを知っていたからこそ、衛青将軍への目立った弁護をしなかったんじゃないか？」
「そうかもしれないけど・・・・。それと李敢が確信犯なのと、どう関係があるんだよ？」
「衛青将軍は、陛下への不満を抑える役をしていたんだろう？だったら、息子である李敢が、そういう事情を知らないはずがないんじゃないか？」
「え！？それじゃあ――――――――父親の仇と誤解して襲ったんじゃなかったの！？」
「さぁな・・・。肝心の李敢が死んでるから、真相はわからない。でも・・・知っててやったって可能性も考えられるだろう？」
「つまり――――――・・・衛青将軍がやり返さないとわかってて、陛下にぶつけられない怒りを、拳に込めてぶつけたってこと！？」
「だから霍去病将軍の行為を、陛下は咎（とが）めなかったんじゃないか？」
「霍去病はもういいよ！！聞き飽きたっ！口にするな！！」
「なに怒ってんだよ？俺は事実を言っただけで――――――」

「ああ、そうさ！霍去病はすばらしい将軍だよ！陛下に好かれてるし、英雄だし！」
「せ、星影？」
「だけど話を聞く限り、わがままな男でもあるんだよ、霍去病は！！陛下に気に入られてるのはどうでもいいが、怒りに任せて人を殺すのは納得できない！」
「しかし、その行動に義侠心はあると思うぞ？」
「事故を装って、殺しをすることがか！？真の侠客なら、偽造行為なんかしない！正々堂々とするはずだ！奴がしたことは、陰日なたを歩く刺客の手口だよ！！」
「星影お前・・・・もしかして嫌いなのか？霍去・・・」

「嫌いだよ！！」

歯をむき出しながら言う星影。間髪いれずに返された返事。
その姿に、思わず面食らう林山。

「嫌いって、星影・・・！？」
「嫌いと言うより、大嫌いだ！！私は霍去病が気に入らない！」
「・・・そういえばお前、霍去病将軍が亡くなられた時、かなり不機嫌だったよな？『男ばっかりチヤホヤされて！』とか言って・・・。」
「そうだよ！怒ったことは覚えてる！でも、霍去病が妬ましいから嫌ってるわけじゃない。奴のやり方が気に入らないんだよ・・・！」
「お前そんなに、霍去病将軍が李敢を射殺したことが気に入らないのか・・・？」
「それだけじゃない！陛下は、霍去病と私が似ていると言いやがったんだ！私を霍去病の再来とか言いやがって・・・・・！！」

「・・・・ああ、そのことか。」

星影から聞いた話を思い出し、苦笑する林山。

「いいじゃないか、星影。『霍去病の再来』なんて、最高の褒め言葉じゃないか？」

「最高に嬉しくないよ！！お前さー私が目立ったから、陛下に気に入られたと思ってるみたいだけどそれは違うぞ！陛下が私を気に入ったのは、半分は霍去病のせいなんだから！」

「あのな～嫌なのはお前だけじゃないと思うぞ。天界にいる霍去病将軍だって、男勝りな男装女と同じだと言われて、迷惑してるかもしれないだろう？」

「テメー林山！名誉毀損で訴えるぞ！？」

「訴えられるようなことをしてる奴に言われたくない。」

「共犯の癖によく言うよ！なんだよ、霍去病の肩ばかり持ってさ・・・！？」

「そりゃあ星影・・・相手が郭勇武なら、俺はお前の味方になる。だが――――霍去病将軍となれば話は別だ。」

「別って？」

「漢帝国の英雄と藍田の英雄じゃ、規模が違うじゃないか？」

「悪かったな、じゃじゃ馬で！？」

「そう言うなよ。これでも俺は、同郷の英雄の方が好きだぞ？」

「それはアリガト――・・・・・。」

さわやかな笑顔で言う林山に、苦虫かみ殺したような表情で答える星影。

「とにかく！！今は、衛青将軍の話だよ！！」

「はいはい。」

「故意でやられたって話が本当なら・・・衛青将軍がかわいそう・

・・・。」

「あくまで、推測でしかないんだけどな。」

「そこまで身を挺して、陛下のために仕えているのに・・・・・陛下に嫌われてるなんて・・・!!」

「・・・ああ。割に合わないだろうな。」

「衛青将軍が気の毒だよ!なんとか、手助けできないかな・・・?」

「他人のことよりも、自分のことだろう?まずは、星蓮を見つけることに専念してくれ。」

「わかってるよ!そのために、私はあなたと入れ替わってるんだから・・・・・・・!」

「だったら、余計なことを考えるな!目の前のことだけに、星蓮を救い出すことだけに集中しろ!」

「・・・・林山。」

「そのために、危険を冒してるんだろう?俺達の目的は、星蓮を取り戻すことだぞ!」

「わかった・・・・考えないよ。」

そう言って、林山の進言を受け入れた星影だったが――――――――

「じゃあ手始めに、どう行動すれば、陛下の衛青将軍に対する考え方を変えることができるかな?」

「お前、俺の話を聞いてたぁ!?」

「聞いてたよ。『考える』なんて、まどろっこしいことは出来ないよね?やっぱり、行動あるのみさ!」

「俺は、衛青将軍のために動くなって言ったんだよ!?そんなことしてる場合じゃないだろう!?」

「なに不義理なこと言ってんだよ!?私は侠客として、受けた恩に報いたいだけだ!そのためにも、陛下が衛青将軍に持っている誤解を解きたいのよ!」

「今は、それどころじゃないだろう!?後にしろよ!」
「私が宮中にいる時間は限られている。しかも、いずれ、お尋ね者になる身だ・・・。後なんてあるものか!」
「そこまで気遣う必要はないだろう!?向こうだって、見返りを期待してるわけじゃないんだしさ!」
「お前言ったよね、林山?衛青将軍は、危険を冒してまで『安林山』を助けたと・・・?」
「それはそうだが、それとこれとは話が――――――」

「違わないし、変わらないよね?『安林山を、衛青将軍が助けた』と言う事実は、変えられない。」

――『衛青将軍と会った後、李広将軍は自害した』という事実は、変えられない。――

先ほど、自分が言った言葉の一部を変換し、笑顔で告げる劉星影。

「そ、それは――――――」
「言ったよね、林山?」
「・・・・・・・・・ぁぁ。」

(なんで余計なこと言っちゃったんだぁ~俺っっっ・・・・・・!!!)

にこやかな声で言う星影に、激しい後悔を覚える林山。楽しそうに

自分を見る親友の姿。
ニヤリと笑う義姉に、不安を覚える林山。
そして、それを決定付けるような発言を、星影はしてしまう。

「そういう話を聞いた以上、私は引き下がるわけにはいかない・・・！星蓮探しと平行して、衛青将軍のお役に立てることをしようと思う！」
「なにぃぃぃぃ！！？」
「星蓮を捜索しつつ、衛青将軍の宮中での誤解を解いてみせる！」
「馬鹿言えっ！同時進行で、出来るわけがないだろう！？」
「出来るよ！ちゃんと、安林山をしてるも～ん！」
「星影！」
「うるさいな。もう決めたんだから口出しするなよ！なんせ、衛青将軍の優しさは、林山お墨付きなんだから～！？」

そう告げると、上機嫌で笑う星影。

「じょ・・・！」

冗談じゃない！！
両天秤（りょうてんびん）の作業なんかされたら、それこそ時間の無駄！計画が露見する確率が高い！
星影の身だって危なくなる。

「馬鹿野郎！遊びでしてるんじゃないぞ！？」
「もちろん、まじめにするつもりよ？」
「それが、まじめにする奴の態度か！？」
「きちんとしてるからと言って、必ず成果が出るってもんじゃないよ？程々が一番なんだから。」
「じゃあ俺は、そのほどほどに命をかけてるってことか！？」

「大げさだな～林山。命までかけなくていいよ。」
「なっ・・・！？」
「気楽にすればいいじゃん？普段は優柔不断なのに、こういう時だけ、しっかりした意見を言うんだから～！」
「優じゅ――――――――・・・・・・・！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・ブチッ

小さいながらも、細いなにかが切れる音。

「？なんの音・・・？」

不思議そうにあたりを見回す星影。なんの音か、まったく気づいていない彼女。
からかい混じりで言った、星影の言葉。それは、林山のなにかを切る合図だった。
いつまで、陽気な状態でいる親友に、ひどく静かな声で林山は言っ

た。

「・・・・答えてくれ、星影？」

「え？どうしたの、林山？」

「星影・・・俺達の目的はなんだ？」

「はぁ？さっき言ったじゃん・・・？」

「いいから言ってみろっ！俺達が、都に来た理由はなんだ・・・・！？」

「なにって・・・星蓮を奪い返すためだろう？今更、なにを言ってんだ？」

「その気持ちは、今も変わりないか？」

「当たり前だろう！？そのために私は、お前のフリをして宮中にもぐりこんだんじゃないか！？」

「じゃあ、わき目も見ずに、その目的を遂行できるか？」

「当然だろう！？なんなんだよ、さっきから・・・？なにか、気になることでもあるのか？」

「ある。」

「なによ？琥珀のことが、そんなに気になるの？」

「怪しい黒ずくめのことじゃない！お前の・・・星影のことだ。」

「私？なんで？」

「・・・星影、今から聞くことに、正直に答えてほしい。」

「え？なにを？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いいから答えてくれ・・・！」

「・・・わ、わかったよ・・・。」

只ならぬ林山の気迫に、戸惑いつつも同意の言葉を口にする星影。

「単刀直入に言うぞ、星影。」

「はい？」

不思議そうに、自分を見る親友。

先ほどから、確かめられなかったことを確かめるために林山は口を開いた。

「お前・・・・衛青将軍のことが、異性として好きなんじゃないか？」

途端に、部屋の中で甲高い音が響く。

その音の正体が、星影の持っていた器であることは言うまでもなかった。

第五十一話　悪いのは誰？（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

前回の後記の続きになりますが、語らせてください（汗）

衛青が、悪役扱いされていると知ったわけですが、それは唐の時代の小説の中でのお話でした。そうなると、「じゃあ、武帝時代の衛青はどうだったのかな？」と気になってしまい、調べることにしました（苦笑）結果は――――――・・・・・微妙なものでした（大汗）李広側からの視点で書かれたものと、衛青将軍側からの視点で書かれたものでは、やはり意見の食い違いのようなものがありまして・・・（汗）衛青が悪者扱いとまではいかないのですが、「李広を死に追いやってしまった。」的なことが記されているものがありました。

衛青の基本的な性格から考えても、李広を攻め立てて自害させたと考えるのは難しいと思います。その点をふまえ、小説の中でも、「李広将軍は、衛青将軍が匈奴討伐の総大将に選ばれた【理由】を、きちんとわかっていなかった。」という形で、書かせていただきました。

私も勉強不足なので、あくまで推測として言うのですが、一説に、武帝は李広をあまり好んでいなかったようなんです。理由は、【先帝の代からの家臣】であるため。お父さんの時代から仕えている人なので、むげには出来ない。自分のやろうとしている政策と違う考えを持っていても、それなりの功績があるので無視できない。なんせ、父の代から仕えている人だから・・・。つまり、口うるさい年寄りと思っていたようです。武帝から見れば、李広の考え方は古いものだったらしいです。そうでなければ、李広を長い間、平民のままにしていても、おかしくないと思いますし（汗）

それらの事情などを考えれば、李広が自害に至るまでの根本的な原

因は、事前に李広へのフォローや気遣いをしてあげなかった武帝にあるのではないかと思います。
この点に関しては、周囲の人間も知っていたと思います。ただ、はっきりと武帝を非難するわけにはいかないので、出来なかったと思われます。そこで、その代用として、無口な衛青が身代わりになった気がしてなりません。実際に、「武帝への不満、李広を死なせてしまった責任を衛青にかぶせた。」と、紹介している資料がありましたので・・・。
ただ、李広の息子が、衛青にぶつけた怒り中に、多少なりとも武帝への怒りがあったかどうかは・・・難しいところです。血気盛んな若者が、そこまでが、父親の死を深く深く追求して、見極めるのは、難しかったと思いますし・・・。多分、「周囲がそう言っているから、父を死に追いやったのは衛青なんだ!!」と、思っていたのではないでしょうか。そうでなければ、普通に考えて、衛青に無礼を働くことはなかったと思います。
でも・・・仮に知っていたとして、下級層出身者である衛青が、やり返さないと踏んで、鬱憤晴らしにしたという見方もありますし・・・。とりあえず、考えられる可能性みたいなのを書いちゃいました（笑）いろいろ、書きすぎですね（汗）
ただ・・・衛青が李広の息子の件を武帝に訴えなかったのは、そこら辺の事情があった気がします。あと、下級層出身という負い目もあったと思いますし・・・。

なんか、長々と書いて申し訳ないです。
ここまで読んでくださった方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あなた様はすごいです!!
ありがとうございました（汗）

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください

（平服）

私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第五十二話　失恋の立ち直りは遅い

茶器の割れた音が、波紋（はもん）のように部屋中に広がる。

“お前・・・・衛青将軍のことが、異性として好きなんじゃないか？”

「・・・・林山？」

なにを言ってるんだ？

そう尋ねたかった。でも、彼女の思いは言葉にならなかった。喉まででかかった言葉を、声にすることができない。声に出そうとしたが、うまく言葉にならないのだ。

それ以前に、林山の言った言葉の意味を、星影は理解できずにいた。

「なにが言いたいんだ・・・・・？」

ようやく出た言葉。一番、無難だといえる問いを、林山に投げかかる。幸い相手は、星影の問いに答えてくれた。彼が星影に聞きたい問いと共に・・・。

「好きなんじゃないか？衛青将軍のことが。」
「・・・他の奴と比べたら好きさ。立派なお方だから・・・。」
「『そういう好き』じゃない。俺の言ってる好きは、『恋愛における好き』の方だ！」
「恋・・・愛？」
「星影は衛青将軍を、恋愛対象として見てるんじゃないか？そして、惹かれたんじゃないのか？衛青将軍の中にある、男の優しさって奴に・・・・。」
「なに！？」

この言葉で、それまで不思議そうにしていた星影の表情が一変する。

「私が――――――私が衛青将軍に、女として惚れていると言いたいのか！？」
「・・・少なくとも、俺の目からはそう見えた。『大人の男の優しさに、惚れこんでいる女』のように・・・。」
「私が・・・大人の男に恋をしてる・・・・？」

林山の言葉に、目を丸くする星影。しかしそれは、ほんの一瞬のことだった。星影はすぐにいつもの顔に戻ると、ため息をつきながら林山に言った。

「林山・・・・・私は笑えない冗談は嫌いなんだ。特に、こういう状況で聞かされる、性質（たち）の悪い冗談はね・・・・！？」
「あいにく俺は、冗談を言うのは好きじゃないんだ。ましてや、今みたいに、心に余裕がない状態では特にな。」

目を細めながら言う林山に、星影はなおも言葉を続けた。

「そう・・・。それじゃあ林山は、私が衛青将軍を特別視してるって言いたいわけ?衛青将軍を、異性として好きになったと思ってるの?」

「そうでなければ、一番大事な星蓮救出作戦と、衛青将軍の評判改善活動とを、同時進行で行うなんて言わないだろう!?特別な思い入れがあるからこそ、そういう気持ちになったんじゃないか!?」

「林山!」

「どっちが、優柔不断なんだ!?これだと決めたら、最後までやりきれよ!あっちも、こっちもなんてことをしてたら、両方、中途半端で終わるだろう!?」

「・・・あなたの言い分はわかった。心配しなくても、ヘマだけはしないわ。」

「わかってねぇよ!いいか、星影!俺は、星蓮のためなら、死んでもかまわないと思ってる!だが、衛青将軍が原因で死ぬなんて、まっぴらごめんだ!」

そう言うと、拳で机を叩く林山。

「俺の命は、星蓮のためだけに使うつもりだ!星影に預けたのもそのため・・・。それを、お前の個人的な善意活動に使われるのは困る!」

「個人的な善意活動じゃないだろう?あなたは、誤報をそのままにしておけって言うの?」

「お前が、評判改善活動をしなくても、誰かが代わりにしてくれる。衛青将軍が良い人間なら、それを慕う者が、いずれ誤解をといてくれるさ!」

「いずれっていつよ!?林山さ、李広将軍が死んで何年経つかわかってる?これだけ経っても、衛青将軍の悪評が続いてるのよ!?そ

れなのに、さらに待てって言うの!?」
「星影・・・俺達と星蓮は、生きている限り、一生続く縁を持っている。だが、衛青将軍を含めた、宮中にいる人間とは『今限り』の縁だ。」
「だからなによ?」
「一生続く縁と、一期一会の縁とじゃ、どちらを優先すべきかわかるだろう!?」
「わかってるけど、無視するわけにもいかないでしょう?」
「だったら、お前に命を預けてる俺の気持ちも無視しないでくれよ!」
「林山?」
「宮中にいて、直接探せるお前にはわからないだろな?俺がどんな気持ちで、星蓮やお前のことを考えてるか!?祈ることしかできない自分を、どれだけ不甲斐なく思っているか・・・!!」
「お、落ち着けよ、林山!そんなに興奮しな――――――」
「――――――怒ってるんだよ、俺は!お前が、星影が、あんまりにものん気だから・・・!!」
「林山・・・。」
「恋をするなとは言わない。ただ・・・もう少し、危機感をもってくれよ!そして、割り切って行動してくれ!衛青将軍のことはっ!」
「・・・・・・・・・なんだと?」
親友の発言に、星影の眉間にしわが寄る。
「今、なんて言った・・・・?」

「だから、命の危険を冒してまで、動く必要はないだろう!?」
「そうじゃない!私が聞いてるのは、その前だ!」
「はぁ?」

「恋って、なんだよ・・・・・・・・!?」

そう言った彼女の声は震えていた。

「恋ってなんだよ・・・?それは私に・・・・言ってるのか・・・?」

見れば、唇を振るわせる星影の姿。その様子を見ながら、林山はもう一度口を開いた。

「・・・してるんじゃないか?衛青将軍に恋を・・・。」
「だから誰が!?」
「お前だよ。」
「お前って!?」
「安林山のふりをしてる劉星影だ。」
「お前・・・私が色恋に現(うつつ)を抜かしてると言いたいのか・・・・!?」
「そうは思っていない。俺の知る劉星影は、私情よりも義理人情を

優先する。だからこそ、衛青将軍の評判改善活動よりも、妹救出を優先するはずだ。・・・色恋よりもね。」

「貴様っ!!」

カッと目を見開き、林山の胸倉をつかむ星影だったが――――――――

「本当のことじゃないか?それに俺は、星蓮の救出を優先してくれと言っているだけだ。衛青将軍に恋をするなとは言ってない。」

「お前っ!まだ言うのか!?」

「俺も恋をしてるからわかる。なによりも、男が女に、女が男に惹(ひ)かれるのは自然なことだ。むしろ、それを拒むことはないだろう?」

「なに言ってるんだ!?私は恋など――――――――!」

「武人としての『憧れ』が、『愛』に変わってもいいんじゃないか?相手が、衛青将軍ほどの御仁ならば・・・・?」

「――――――――――・・・・・!」

林山の言葉に、カッと顔を赤らめる星影。

「お前は・・・林山は、私が衛青将軍に恋しているように見えるというのか・・・?」

「見えるよ。」

「いつから目が悪くなった・・・・?」

「俺は健康そのものだ!それとも――――――・・・・わからないのか?恋してることを・・・?」

「むしろ、お前がそう言う根拠がわからないね。どうしたら、私が色恋をしているなんて、血迷いごとを言えるのやら・・・・・!」

「言えるさ！今のお前はまるで、関家の若様と――――――――――・・・！？」

林山の言葉は、途中で途切れる。

「関家・・・・・・？」

その言葉に合わせるように、林山を掴んでいた星影の手が離れる。

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・しまった！）

そんな星影の姿に、林山の体中の血液が、一気に降下する。

「ち、違うんだ星影！今のは――――――」

「関家の・・・・若様？」

「言葉のあやなんだ！言葉の・・・・・！」

「関家の若様・・・・。」

「すまない！俺はどうかしてい――――・・・・・！」

「関家の若様――――――――――・・・・・！」

緊迫（きんぱく）した表情で言う星影。

そばで弁護する林山の声など、聞こえていないようだった。

しかし次の瞬間、場違いなような笑い声が部屋に起こる。

「それが決めてか！？そこで判断したのか、林山！？フッフ・・・・ハハハ！アッハッハッハッ！！」

「せ、星影・・・・！」

「アハハハ！！そうか、そうか・・・関の坊ちゃんか・・・！？ア

ッハッハッ！ハ――――――――――ハッハッハッ！！」

林山を指差しながら、狂人のように笑い続ける星影。
瞳孔（どうこう）が開いた目。高い声や低い声を出す口。口元だけを上げ、無表情で笑う親友。

「ア――――――――――ハッハッハッ！ハッハッハ！！アッハッハッ！！」

部屋にこだまする星影の声。
先ほどまでたぎっていた林山の怒りは、この時すでに消滅していた。
今、彼の心のうちを支配していたのは、己が犯した失態への後悔。

（なんで、言ってしまったんだ・・・！？）

星蓮との問題や、触れてほしくない元・婚約者のことを言われ、カッとなった自分。
それに加え、優柔不断だと侮辱されたことで、歯止めが利かなくな

ってしまった自分。
星影との口論に夢中になった自分。
相手を言い負かせたくて、言ってはいけないことを口にした。
【禁句】とされていた話題を出してしまった。
星影が一番嫌う話・・・・！

（星影は、自分の恋愛に関する話が、一番死ぬほど大嫌いだというのに――――――――・・・・・！！！）

「ホント、林山といると飽きないよ・・・・！」

林山の心中をよそに、陽気な声で言う星影。
瞳孔（どうこう）の開いた目を、さらに大きくしながら笑う。
大きな声で笑い続ける星影を、林山は注意しなかった。
経験上、注意しても聞かないことを知っていた。
それに、自分が注意しなくても、制裁がくるのがわかっていたから・・・・・・・。

「「「うるせぇぇぇ！！！」」」

三度目となる制裁が部屋に響く。
激しく叩かれる両側の壁。隣人達からの苦情を伝える声だった。
それを合図に、星影の笑い声はやんだ。

「ゴメンネ、リンザン。」

笑い声を収めると、片言でつぶやく星影。その言葉を最後に、口を閉ざす親友。
周囲は相変わらず文句を言っていたが、彼女の耳には届いていないようだった。
表情は楽しそうにしていたが、完全に周囲の声を遮断（しゃだん）していた。
この状況に林山は、先ほどの星影の言葉に答えるように軽くうなずく。
そして、そのまま黙り込んだ。これを最後に、部屋の中は静まり返った。

これに対して、うるさく苦情を言っていた隣人達に変化が表れる。

「・・・なんだよ。」
「急に静かになったな・・・・・？」
「変じゃねぇか？」
「どうなってんだ・・・？」

そうささやきあいながら、口数を減らしていく周囲。
突然の静寂のに、調子を狂わされる形になった隣人達。
しばらく、ボソボソ話していたが、それが寝息に変わるのに、そんなに時間はかからなかった。

「あ～あ。おかしかった！」

周囲が完全に静かになってから、茶化すような口調で言う星影。

「・・・おかしかったか？」
「おかしかったよ。」

林山の言葉に、背伸びをしながら答える義姉。

「強気な口調で言うから、そうなのかと思ったけど・・・・。やっぱり、あなたの勘違いみたいね、林山？私が衛青将軍に、恋してる

なんて話は？」

あざ笑いながら言う星影。

そっけない言い方をする相手に、言葉を選びながら林山は言った。

「・・・恋愛には興味ないかもしれないが、衛青将軍には興味があるんじゃないか？」

「それはあるよ。衛青将軍のような方が、宮中にいるのは興味深いからね。」

「じゃあ、異性として、興味深いとは思わないのか？」

「あなたさ、私が恋愛に興味ないこと知ってるでしょう？」

「そうだが・・・。」

「関家とのことも知ってるのなら、そんなこと聞く必要ないんじゃない？つーか、いい加減しつこいよ、林山。」

そう言うと、床にしゃがみこむ星影。そして、床に散らばった破片を拾いながら言った。

「でもまぁ・・・悪かったよ、林山。優柔不断とか言ったのは。」

「なんだよ、急に・・・？」

「要は、その仕返しとして、関家のことを言ったんでしょう？まったく・・・油断も隙もない奴だな、お前。」

「な、なに言ってるんだ？そんなの――――――・・・・・・」

・・・・・・違うとは言い切れない。

星影の言う通り、優柔不断だと、言われた腹いせに言ったのだ。
その事実を否定すれば、自分に嘘をついたことになる。
この場を収めるためだけの嘘をつくなど、正直すぎる林山にはできなかった。
そうかといって、上手く話題を変えることもできない。
返事に困って黙り込む親友に、やっぱりねぇ～と言いながら、星影は笑う。

「図星だったみたいだね、林山？」
「す、すまない、星影。俺は――――――」
「気にしてないからいいよ。私が先に、からかったわけだし。まぁ・・・私が悪かったんだから、そんなに怒らないでよ。」

集めた破片を手に乗せながら、楽しそうな口調で言う義姉。

「それに、大事な星蓮探しを、片手まで探すような言い方をしたのも悪かったみたいね？両天秤をしてるように思えたわけ？」
「・・・・・・・・・そこまで、わかってて挑発したのか？」
「人聞きが悪いわね、林山。仮にも、あなたの『姉』になる人に対して？」
「もういいよ。それより、素手で破片を拾うな。危ないだろう？」

破片を拾う星影を制止させようと、手を伸ばす林山。しかし、林山が拾おうとした破片を星影は横からかっさらった。

「星影！？」
「林山は、私が衛青将軍のために働こうとする行為が『脇目』だと

思ってるみたいだけどそうじゃないよ。」
「じゃあ、なんだって言うんだ？」
「上手くいけば、こちらの都合の良いようになるかもしれないでしょう？」
「大将軍さえも利用しようってか！？」
「そうじゃないよ。でも・・・好感を与えておけば、いざという時に見逃してもらえるだろう？」
「図々しいな！？」
「なに言ってんだ、林山。星蓮のためなら、卑怯もクソもないだろう？」
「それはそうだが・・・・・。」

星影の話に相づちを打ちながら、再度、破片を拾おうとする林山だったが・・・。

「あ。」
「言っとくけど、衛青将軍をこちらに引き込むつもりはない。衛青将軍にご迷惑がかかってはいけないからね。ただ・・・好かれておいて、損はないでしょう？」

それを、横から奪い取る星影。

「陛下のお側仕えになった以上、身を守るためには、陛下に苦言を言える人の気を引いておく必要があるの。李延年だけだと、私が殺されちゃう可能性があるし。」
「あ、ああ・・・そうだな。」

気を取り直し、違う破片へと手を伸ばす林山だが――――――――――

「あっ！」
「それにね、陛下や李延年以外にも、気をつけないといけない連中がいるだろう？特に郭勇武なんかは、『安林山』の名前を覚えていたからね・・・・！」

しかし、その破片も星影によって持っていかれる。それを不服そうに見送る林山。

「郭勇武は、安林山の本当の顔を知っている。もし奴がこちらを怪しんで、身元を調べたりでもしたら、厄介なことこの上ない・・・！」
「・・・じゃあ、これ以上目立つなよ。」

そう言って、星影のいる場所から離れたところにある破片を拾おうとするが――――――――

「ああ！」
「わかってるよ。だけど、星蓮を無事に取り戻したあかつきには、それ相応のお礼はさせてもらうぞ。郭勇武にはきっっっちり！十倍返しで、やりかえさないとね・・・・・！？」

またもや、林山より先に破片を拾う星影。距離的な不利を感じさせない素早い動き。
数回、この状況が繰り返えされたことで、林山はようやく気づく。

「おい・・・！」
「なぁに？」
「わざとやってるだろう！？」
「なにが？」
「なにがじゃない！俺が拾おうとする破片を横取りしてるだろう！

？」

星影が、自分からわざと破片を奪い取っているということに。
林山の指摘に、悪びれることなく星影は言った。

「まさか！偶然、私が拾おうとした破片と林山が拾おうとしたものが同じだけだよ。」
「だったら、自分の近くにある破片を拾えよ。」
「どの破片を拾おうが、私の勝手だ。私が落して割った茶器の破片だ。」
「偉そうに言うな！明日怒られるのは俺なんだぞ！？とにかく拾うな！怪我するだ――――――」

「――――――――――――そういう優しさは、星蓮だけにしろ。」

今までの口調とは一変。凄みを利かせて言う星影。

「星影！？」

突然の変化に、戸惑いの声を上げる林山。
それに対して星影は、手に持った破片を机に置きながら言った。

「どんな事情で、桂蓮と逢引してたのかは知らないが、裏切りだと勘違いされる行為はするな！」
「な・・・こんな時になに言ってんだ、星影！？」
「もう一度言う。二度目の裏切りは許さん！」
「待てよ！それは誤解だ！」

「ああ、仮に誤解だとしても、星蓮を悲しませたことには変わりない！とにかく、二度目は許さない。私の妹を悲しませるような行為はね・・・・！？」

睨みながら言う星影に、林山はなにも言えなかった。
星影が言うことは、正しかった。自分の行為によって、星蓮が傷ついたのは間違いない。
元を正せば、自分と桂蓮のことが原因で、強奪されたといっていい。
だから、なにも言えるはずがない。

視線をそらし、うつむく林山。
そんな親友に、星影は少しだけ声をやわらかくしながら言った。

「心配しなくても、星蓮探しが第一であることは変わりない。私の一番は星蓮だからね。星蓮には、幸せな恋を貫いてほしいの・・・・！」
「・・・星影・・・。」
「そのためにも、あなたには頑張ってもらわなきゃ困るの。星蓮を大事にしてほしいのよ・・・・！」

瞳孔の開いた目を細めながら言う星影。
そんな彼女の態度に、相手がなにを言おうとしているか察する林山。

「・・・お前もしつこいな、星影。その話は、俺から直接星蓮に話す。」
「しつこいぐらい言わないと、わからないだろう？」
「俺はそこまで馬鹿じゃない！」
「お前のことはどうでもいい。大事なのは、星蓮を傷つけないことだ！わかってるだろうな・・・・・・！？」
「・・・もちろん、星蓮は大事にする。愛しているからこそ、こ

こまで来たんだ。」

「勘違いしないで！私は、衛青将軍に恩があるから、その恩を返したいと思ってるだけ。林山が考えてるような、馬鹿な展開はありえないのよ。」

「馬鹿な展開って・・・・。」

困ったように言う林山に、星影はハッキリとした口調で言った。

「人がする恋愛はかまわない。だけど自分の恋愛は、馬鹿らしいものでしかないの。」

威圧的（いあつてき）に言う物言いに、口を閉ざす林山。

（これは・・・完全に怒らせてしまったみたいだな。）

彼女が、恋愛を嫌っているのは知っていた。

知っていたからこそ、尋ねるのを躊躇（ちゅうちょ）していた。
ここまで星影が、色恋を毛嫌うのには理由があった。

「・・・・まだ、引きずってるのか？」

「黙れ。」

意味ありげに言う林山に、星影は冷たい視線を投げかける。

親友が色恋を嫌う理由を、林山は痛いほどよく知っていた。
その根本的な原因は――――――――――――――――――――――――

「・・・・貴族なんて、いい加減なものさ。」

「黙れ。」

「家を焼かれたくらいで、美人の婚約者を見捨てる男だ。」

「黙れ。」

「根性なしだと言うことが、わかっただけでもよかったと思うぞ。」

「黙らないのか？」

そう言った星影の目は、侮蔑と怒りに満ちていた。

「うるさいよ、林山。」

冷たく言い放つと、そのまま机にひじを突く星影。

星影が色恋話を嫌う理由。
それは、星影が恋愛というものに対して、深い傷があったからだ。
そのすべての原因となったのが、星影の元・婚約者にあった。
昔の星影・・・・あの事件が起こる前の星影は、お転婆だが、可愛い女性だった。
星蓮が、ちょっと元気になったような女の子。
健康的で明るく美しい女性、それが『藍田の蝶花』劉星影だった。
星蓮と共に、多くの男達の憧れの的(まと)だった星影。
俺にとっては、面倒見がいい姉のような存在であり、同じ年の仲のいい友達だった。
元々、父親同士の仲がよかったので、子供である俺達も自然と仲良くなった。
同じように成長し、身近な付き合いを重ねてきた。
今とほとんど変わらない付き合いをしていた。
今と違う点があるとすれば、星影への縁談の話。
劉家の長女として申し分ない彼女の元へ、多くの男達が求婚した。
その中に、星影を射止めた男がいた。

それが、関家の若様だった。
貴族の若様で、美男子としても有名な男。
俺も詳しいことまでは知らないが、才女として有名な星影の話を聞きつけ、求婚を申し込んだ。
星蓮ではなく、星影に求婚したのは、若様と近い年だったからしい。

俺はもちろん、星影も、関家の若様の顔を見たことがない。
だが、文のやり取りはしていた。
書簡を通して、二人がどのようなやり取りをしたか知らないが、婚約破棄を告げられた時の星影の表情は今でも忘れられない。

「私は、恋愛と縁がなかっただけ。ただ・・・・それだけよ。」

表情のない顔で告げた星影。
この時代、それ相応の身分がある者には、【恋愛での縁談】などありえない。
だから俺と星蓮のような縁談は珍しい。
縁談とは、親が決めるもので、本人の意見など反映されない。
特に女性の場合は、自分の意思が通ることが少ない。
そんな結婚事情だから、星影がどういう気持ちで婚約したかはわからない。
ただ・・・決め手となったのは、関家の若様からの書簡だったらしい。
それを見て、星影は恋に落ちた。

【生まれて初めての恋】をしたのだと・・・星蓮が教えてくれた。

その恋を、星影は大事にしていた。
繭を扱うがごとく、大切にしていた。
それが破れた時、壊れた時。

――――――――――――――――私は、恋愛と縁がなかっただけよ――
――――――――――――――

あの時と、婚約破棄を告げられた時と表情で言い放つ星影。
星影の衛青将軍に対する気持ちを尋ねるのを躊躇したのもそのためだった。
心の傷は、目に見えない分わかりづらい。
だからこそ、言葉ひとつで、その傷を広げることも治すこともできる。

（それなのに俺は――――――――――・・・・！）

星影を傷つけるようなことを言ってしまった。
桂蓮とのことは、どうみても俺が悪い。
星蓮はもちろん、星影に責められても文句は言えない。
それなのに俺は、我慢することができなかった。

（俺は・・・・・心の修行不足だ。）

自分を責める林山。そんな彼の耳に、星影の声が飛び込んできた。

「衛青将軍のことは好きだよ。でもそれは、人として好きなだけ。」

周りが敵だらけの時に、ただ一人、味方になってくれたから。
優しくしてくれた相手が、あの人だったから。
その相手が、たまたま衛青将軍だけだった話。

「星影・・・・。」
「だから林山―――――――――――」

そう、それだけの話だから―――――――――――――――・・・・・・・・
・！！

「せっかくの美談を、色恋話に変えるなんて、下品をしないでちょうだい・・・・！」

そう言って、立ち上がる星影。

上から自分を直視する相手に、林山は小さく息を吐く。

「・・・わかった。もう、この話は二度としないよ。」

「ありがとう。」

林山の言葉に、ひどくきれいな声で言う星影。

しかしその表情は、相変わらず【無】としか言えなかった。

第五十二話　失恋の立ち直りは遅い（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！
武一辺の星影の【恋】について書いてみました（笑）
気になる方は、今後ともよろしくお願いします（土下座）

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください
（平伏）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第五十三話　宮中に帰りました。

誰かの呼ぶ声で、星影は目を覚ました。
焦点の定まらない目で、声のする方を見る。
そこには、自分を覗き込みながらなにかを言う人影。
すると突然、その人影は星影の肩を掴む。
この行為により、目を覚ますよりも先に、星影の中の【武】が覚醒する。
とっさのことに、彼女がとった行動は――――――――

「曲者め――――――――――――――――！
！」

武力行使に出ること。
人影の胸倉を掴むと、垂直に床へ叩きつけた。

「――――何者だ！？」

鋭い声を上げると、相手の首を掴み、その頭を床に押し付ける。

「いっ、痛・・・・！！」

「答えろ！何が目的だ！？」

痛がる相手の言葉を無視しながら怒鳴る星影。

「言え！言わないのなら――――――！」

そう言うと、相手の首から手を放し、今度は髪を掴んで乱暴に揺らす。

「痛っ！痛たた・・・・！」

「痛いか？」

痛がる相手の反応を確かめると、低い声で星影は言い放つ。

「・・・少しでも妙なマネをしてみろ。こんなものでは済まさないぞ？」

髪を掴んだ手を、思いっきり床に叩きつける。それにより、鈍い音と声が響く。

「どうする？痛い目にあいたいか・・・・・！？」

脅しを込めた星影の問い。

普通の者なら、その迫力でなにも言えなくなるのだが・・・・・・・・

「ま・・・待てくれっ！林山・・・！！」

そんな彼女の問いに、返事が返ってくる。
それはとても聞きなれた声。
まさかと思い、相手の顔を覗き込むと――――――――――――

「あ・・・！？こ、琥珀っ！！？」

そこには、床に押さえつけられ、苦しそうに顔をゆがめる王琥珀（おう こはく）の姿があった。

「なんでここに・・・？」
「できれば・・・その手をどけてほしいんだけど・・・？」
「あっ！？す、すまない！大丈夫か！？痛かったか！？」

琥珀の言葉を受け、慌てて手を離す星影。それに対して彼は、むせながらも息も絶え絶えに答える。

「ケホッ、ゴホ・・・平気だよ。しかし・・・なかなかいい腕をしているね？細腕なのに力がある。」
「ほ、細くて悪かったな！」

裾から出ている自分の腕を、慌てて隠しながら星影は言った。

「それより、なんでお前が私の部屋にいるんだ?」

「ああ・・・。黄藩様の命令で、起こすようにと言われてね。」

「黄藩様の!?」

「『黄藩殿』だろう?知らないのかい?黄藩様のご命令で、今日から君のお世話をすることになったんだよ。」

「誰が!?」

「私が。」

にっこりと笑って答える琥珀。

「お前がぁ!?」

「ああ。」

涼しい顔をして言う琥珀。そんな相手の言葉に星影は・・・・

「そんな話、聞いてないぞ・・・・・。」

つぶやくしかなかった。

星影の返事に、やっぱりな、というような顔をしながら、琥珀は付け足すように言った。

「やれやれ・・・つくづく君は、延年様に嫌われているということか。」

「延年・・・?」

「彼から聞いていないみたいだね。」
「へ？」
「延年様が君に、そう伝えているはずなんだが？」
「なに！？」

琥珀の言葉に、大きく目を見開く星影。そんな相手の姿に、彼は苦笑しながら言う。

「伝わっているはずなんだけどね・・・。一応、勅命だから。」
「勅命だと！？」
「そうだよ。君の世話係は、陛下の命で決まったんだ。陛下から出された勅命は、黄藩様を通して延年様に伝えられ、延年様から直接君に、伝えられているはずなんだが・・・。」

琥珀の説明に、星影は不機嫌な表情を作る。その顔を見た琥珀は、困ったような口調で言った。

「その様子だと、聞いてないみたいだね？」
「聞くもなにも、初耳だよ・・・。」
「やれやれ・・・。黄藩様のお考えは、正しかったみたいだ。」
「どういうこと？」
「『延年殿は多忙な方ゆえ、万が一にも伝えそびれる可能性があります。それゆえ、延年殿に伝えたことを、王琥珀・・・あなたにも伝えておきます。』と、おっしゃられてね。」
「多忙もなにも、嫌がらせ以外の何者でもないだろう！？」

琥珀の言葉に鋭いツッコミを入れる星影。

「しかも、嫌な感じで黄藩様の予想が的中してるし！」

星影の中で、さげすむ目をした李延年の顔が浮かぶ。

（つーか、わざと知らせなかったんだろうけどっ！）

相手の性格を考えれば、そう考えるのが普通だった。

不服そうにする星影に、笑いながら琥珀が言った。

「『黄藩殿』だろう、林山？そう怒るものじゃないよ。妬みがあるということは、その分君に、魅力があるということさ。」

「自分で自分の首を絞めるようなものなら、そんなものは魅力とは言わない・・・！」

「いいや、だから魅力なのだよ。見た者の心を強く捕らえて離さない・・・虜にしてしまう。」

「と、虜って・・・。」

「そういう魅力が君にはある。君はきれいだよ、林山。身も心も・・・ね？」

そう言うと、艶のある笑みを見せる琥珀。

彼の言葉と表情に、星影は真っ赤になってしまう。

「あ、朝っぱらから気持ち悪いこと言うなよ！聞いてるこっちが恥ずかしくなるっ！」

「私は事実を述べてるだけさ。」

「へぇ～！？私に魅力があるって？」

「あるよ。でも・・・今朝の君は、その魅力が少ないね。」

「なんだよ！？床に叩きつけたことを、まだ根に持ってるのか！？」

「そうじゃない。今朝の君は、少し顔色が悪いんだよ。」

「顔色？」

「ああ。いつもは、薄い桃色の可愛い頬が、少し青い気がする。それに、眼の周りが黒くなってるよ。昨夜はあまり、寝れなかったん

じゃないかい？」

昨夜という言葉で、星影の心臓が嫌な音を立てる。

「そ、そんなに・・・顔色が・・・悪いのか？」

「いや、目立つほどではないが・・・・近くで見れば、違いがわかるよ。」

「・・・そう。」

琥珀からの説明を受け、頬に手を当てながら言った。

「実は昨日・・・緊張して寝れなかったんだ。」

「さすがの林山も、眠れないことがあるんだね？」

「あれだけのことがあれば、眠れないだろう！？私は神経（しんけい）は、そんなに図太くない！」

「『肝も』じゃないかい？」

「琥珀！」

星影からの言葉に、相手は声を立てて笑う。

「そんなに笑わなくてもいいだろう！？失礼な奴だな・・・！」

「すまない。でも・・・・安心したよ。君が病気じゃないならね。」

「平気だよ。間違っても、病気なんかになるものか！」

そう、病気になるなどとんでもない！

そんなことにでもなれば、一発で女だとばれてしまう！

「これでも、体には気をつけてるんだ！」

謙遜でも、誤魔化しでもない真実。
彼女の言葉に、琥珀は静かに言った。

「・・・林山、あまり気を張らなくていいんだよ？本当に具合が悪い時は、遠慮せずに薬師やまじない師をよんでもらえばいいんだから。」
「いいよ！私は元気なんだから！」
「そうじゃないよ。」

強く言い切る星影に、琥珀は言葉を続ける。

「頼ってほしいと言ってるんだよ、私は。」
「え？」

頼る？

自分とはなじみのない言葉に、星影の気炎が一瞬そがれる。

「前々から思っていたんだが、君はあまり他人を頼ろうとしない。すべて、自分一人だけで片付けようとする。それは良いことだが、完璧すぎるのは問題だよ。」
「・・・・琥珀は、私が完璧主義だといいたいのか？」
「そこまでは言っていないよ。ただ・・・・君は一人じゃないんだ。いざとなったら、私や空飛がいる。側にいる友に、甘えてもいいんじゃないかな？」
「甘える！？」

驚く星影に、照れたような笑みを見せる琥珀。

「ああ。変な言い方かもしれないが――――友達だからこそ、君に頼ってほしいと思う。私も空飛も。これでも、黄藩様よりは長く一緒にいるじゃないか？」

「それは――――そうだけど・・・。」

「宮中は、変わった人や難しい人が多い。延年様のような方も多いだよ。だれかれかまわず、心を許すことはできないだろう？そういう時こそ、友達を信じてほしいんだ。」

「・・・・確かに・・・知らない奴よりは、知ってる琥珀達の方がいいけど――――」

「だからこそ、困ったことがあれば、私達を頼ってほしい。私も空飛も、できる限りの協力をするし、相談にのるよ。」

「そこまで、思っててくれたのか・・・・？」

「友達だからね。他の者に言いにくいことでも、私達なら話せるんじゃないかな？頼れて、心を許せて、信じることができる。少なくとも私は、そう思っているよ。」

「琥珀・・・。」

「まぁ・・・朝から、人一人を組み伏せるだけの力があるんだ。それほど、体調が悪いということもないかな？」

そう言って笑う琥珀。それと対照的に、固まる星影。

・・・・・・・・・・そうでした。

組み伏せるどころではない。

親切に自分を起こしにきてくれた相手を、床に叩きつけたあげく、髪を掴んで乱暴に扱ってしまったのだ。

それどころか、脅しまでかけていたぶったのである。

普通ならば、こちらが相手を心配しなくてはならない。
それなのに自分は、相手を気遣うどころか、相手に心配をかけているのだ。

（友に対して、非常識極まりないな・・・。）

今更ながら、変なところで抜けている自分にうんざりする星影。

「すまない・・・琥珀。寝ぼけていたとはいえひどいことをしてしまったよ。申し訳ない・・・！！」

そう言って、深々と頭下げる星影。そんな友の態度に、手を振りながら琥珀は言った。

「気にしなくていいよ、林山。正直・・・半分は予想していたことだ。延年様がお前に伝えていないことぐらい。」
「では半分は、予想していなかったのか？」
「ああ。床に叩きつけられて、髪を掴まれるとは予想してなかった。」
「・・・すまない。」

その一言で、再度赤くなる星影。茶化すつもりで言った琥珀の言葉は、星影に追い討ちをかけただけだった。落ち込みながら謝る星影の姿で、そのことに気づく琥珀。

「冗談だよ。気にしていないから、あまり陰気にならないでくれ。

それに、あまりゆっくりもしていられないし。」

自分の失言を挽回するため、さりげなく話題を変える琥珀。

「今日から一人で、陛下のお側で働くんじゃないのかい？」

「あっ！？」

「遅れでもしたら、厄介だろう？私への詫びはいいから早く着替えなよ。」

「――――――そうだった！」

琥珀の言葉で、自分の置かれている現状を思い出す星影。

「すっかり忘れてた！待っていてくれ。すぐに着替えるから！」

琥珀にそう言い放つと、慌てて着替えようとする星影。

しかし、腰紐を緩めようとしたところであることに気づく。

今までは早く起きて着替えたり、隠れて着替えていたからばれなかった。

高級宦官になって、皇帝の側になると言うから着替える時がとても心配だった。

しかし、彼女の予想に反して個室だった。

その時は、自分はなんて運がいいんだろうと喜んだのだが・・・。

「どうした、林山？」

動きを止める同僚に、琥珀は不思議そうに尋ねる。

「琥珀・・・なんで出て行かないんだ？」

「なにか問題でもあるかのかい？」

ひどく不思議そうな顔で言う琥珀。

当たり前だ!着替えるところを見られたら、自分が女であるとばれてしまう!!

今ここには、琥珀がいる。見るからに出て行く気配がない。

琥珀が出て行かない限り、自分は着替えることができないのだ。

「なにをしてるんだ?早く着替えなさい。」

そんな星影の気持ちを知らない琥珀は、彼女に早く着替えるように促す。

「あの、着替えたいんだけど・・・出てってくれないか?」

「どうして?恥ずかしがることはないだろう。男同士なのだから。」

椅子に腰掛けながら琥珀は言った。

「いや・・・いくら友でもさ、人に見られるのはちょっと・・・。」

「ハハハ!心配しなくても君の体なんて見やしないよ。そんな趣味はないからね。」

「と、とにかく、出てってくれよ!気になるんだ!!」

怒りを露わにする星影に、琥珀は目を細めながら言った。

「だから見ないと、言っているじゃないか?まるで女みたいな言い方をするね。」

「なっ・・・!?だ、誰が女だ!!俺は男だぞ!!?」

「だったら、男らしく気にしなければいいじゃないか。」

そう言って、自分の部屋でくつろぐ琥珀に苛立ちを覚える。

「でもさ、琥珀。・・・親しき仲にも礼儀は必要じゃないかな。」

「それは君に必要ないことじゃないか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ブチッ

小さいながらも、細いなにかが切れる音。

「いいから出てけぇぇぇ――――――――――――――――!!!」

言うと同時に琥珀を部屋から放り出す星影。

「な、なにするんだ、林山!?」
「いいから外にいろ!!」
驚く琥珀を怒鳴りつけると、乱暴に戸を閉める。

（これが毎日続くのか・・・・!!）

一人になった部屋で、深くため息をつく星影。

（あの時の林山も、こんな風に怒ったんだろうな・・・・。）

そんな彼女の脳裏に、昨夜の出来事がよみがえるのだった。

第五十三話　宮中に帰りました。（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

お話は、林山の元から宮中に戻った翌日の話です。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第五十四話　天然からの言葉

「お前・・・・衛青将軍のことが、異性として好きなんじゃないか？」

本物の林山からの言葉を聞いた時。
親友の言葉を理解した時。
自分が茶器を落したのだと気づいた時。

「私が――――――私が衛青将軍に、女として惚れていると言いたいのか！？」

ひどく、変な気分になった。

「林山・・・・・私は笑えない冗談は嫌いなんだ。特に、こういう状況で聞かされる、性質（たち）の悪い冗談はね・・・・！？」

それは、不快とも、苛立ちとも言えるおかしな気持ち。

「今のお前はまるで、関家の若様と――――――――――・・・・・・！？」

そう・・・あの名前を聞いた瞬間。

「ち、違うんだ星影！今のは――――――」

おかしくて。

「言葉のあやなんだ！言葉の・・・・・！」

おかしくて、おかしくて・・・。

「すまない！俺はどうかしてい――――・・・・・！」

おかしくて、おかしくて、おかしくて――――――――――

「アハハハ！！そうか、そうか・・・関の坊ちゃんか・・・！？アッハッハッ！ハ――――――――ハッハッハッ！！」

声を抑えることができなかった。

「ア――――――――ハッハッハッ！ハッハッハッハ！！アッハッハッ！！」

壊れた楽器のような声で笑った。

ここまでひどい笑い方ができるなんて、自分でも驚いた。

「ホント、林山といると飽きないよ・・・・！」

ひとしきり笑ったところで、自分を見つめる親友に声をかけた。

そこには、先ほどの彼はいなかった。

私の失言に怒った義弟はいなかった。

いつもの表情で私を見ていた。

いつもよりも、覚めた目で、静かに私を見ていた。

「「「うるせぇぇぇ！！！」」」

そんな私達に、周囲から苦情の声が上がった。

自分に向けられる暴言に、怒りなど感じなかった。

それよりも強い怒りを、私が感じていたから・・・・。

「ゴメンネ、リンザン。」

茶化すように言った言葉。怒りを隠しながら言った言葉。私の言葉を最後に、部屋の中は静かになった。

「あ～あ。おかしかった！」

本当におかしかった。
林山の言葉がおかしかった。
おかしかったけど、その分悔しかった。
よくわからないけど、腹立たしい気分になった。

だからなじってやった。

「そういう優しさは、星蓮だけにしろ。」

抑えていた怒りを、林山にぶつける。

「どんな事情で、桂蓮と逢引してたのかは知らないが、裏切りだと勘違いされる行為はするな！」

星蓮に関する怒りをたたきつけた。

「二度目の裏切りは許さん！」

そして、星蓮のことについて林山に釘を刺した。

「仮に誤解だとしても、星蓮を悲しませたことには変わりない！とにかく、二度目は許さない。私の妹を悲しませるような行為はね・・・！？」

可愛い妹の話をした後で、衛青将軍の話をした。
私が、衛青将軍を武人として尊敬していると伝えた。

“お前・・・衛青将軍のことが、異性として好きなんじゃないか？”

林山が、なぜそんなことをいったのかわかっていた。
私が、林山をからかい、【優柔不断】だとなじったからだ。
それに対して、林山が反撃をしたのだ。
その考えを親友に伝えれば、困ったように黙り込んでしまった。

（思った通りだ・・・。）

林山の答えに呆れながらも安堵した。

（私の好きは、異性を思う好きじゃない。）

親友の姿を見ながら、再確認をした。
恋愛なんて、ガラじゃない。
私が衛青将軍を思うのは、武人として惹かれたから。
間違っても、異性として惹かれたわけじゃない。
すごくきれいな人間に思えたから、あの人についてまわる悪評をなんとかしたかった。
星蓮救出と同時進行で、衛青将軍の汚名を消したかった。
それが、陛下をかばうための汚れ役だとしても許せなかった。
衛青将軍が、そういう役を引き受けていたとしても嫌だった。

（衛青将軍はそういう人間じゃない――――――――――――――!!）

「私は、衛青将軍に恩があるから、その恩を返したいと思ってるだけ。」

そう・・・あの人が好きになってしまったから。
武人としての気質に、惚れ込んでしまった。
同じ武人として、あの人が好きだ。

あの笑顔が好きだから。
私だけに笑いかけてくれた顔。
あんな穏やかな顔を見てしまったら、放ってなんかおけない！
庇ってもらった、助けてもらった恩を返したいだけ。

それからは・・・・・・なにを話したかなんて覚えてない。
なにか・・・話したかもしれないが、よく覚えていない。
唯一、覚えていることといえば――――――――――――

「私は、恋愛と縁がなかっただけ。ただ・・・・・それ（・・）だけ（・・）よ。」

そう言ったことだけ。
記憶に残っている会話など、その程度だった。

・
・　・　・　・　・

（つくづく短気なのかな・・・・私は。）

昨夜の再会は、お互いの報告をする程度で終わった。
前半の会話は覚えているが、後半の会話は覚えていない。

人は、血が上るとなにもかも忘れてしまう。
そういう時に話した言葉など、これっぽっちも覚えていない。
多分・・・後半の方は、今後のことについての話をしたのだろう。
結局、夜明けが近づいたこともあり、早々に宮中へと引き返してしまった。
林山と、次の再会の約束はしたが、次がいつになるかわからないが
――――――――

（間違っても、市場の首台の上では再会したくないけど・・・。）

首をさらされる自分を想像し、苦笑する星影。
状況からしても、真っ先にさらし首にされる危険が高いのは自分だろう。
死ぬことは怖くない。
でも、【大事なもの】を残して死ぬのは嫌だ。

可愛い妹と義弟を残して死ぬのは嫌だな・・・。

（そのためにも、なにがなんでも生き残って、星蓮を取り戻さなきゃ！）

前向きな考えを打ち出すと、素早く戸の前から離れる星影。

（取り戻すためにも、高級宦官・安林山として、変・・・陛下に愛想を振りまかないと！）

嫌々ながらも、媚びる覚悟を決める。
そして着替えようとした矢先だった。

「林ざぁ――――――――――――――――――んっ！」

再び、聞きなれた声。
そして、激しく扉が開く音。
誰が来たのか、星影にはすぐにわかった。

「く、空飛か！？」

脱ぎかけていた着物を、着直しながら星影は言う。

「『空飛か』、は、ないでしょう！？」

星影の言葉に、少し不服そうな返事をしながら答える相手。
息を切らせて部屋に入ってきたのは、星影の友である張空飛だった。

宮中で、星影が信用している数少ない人間の一人である。

「そんなつれないこと、言わないで下さいよ～」

頬を膨(ふく)らませて文句を言う空飛だったが、星影が着替え中だったと気づく態度を一変する。

「あ・・・！？ご、ごめんなさいっ！着替えの途中でしたか・・・！？」

顔を赤くし、ドギマギと慌てる空飛。そんな友の姿に、星影は微笑しながら言った。

「いいや、気にしなくて大丈夫だよ。それより・・何か用？」

星影の問いに、彼は大きく頷く。

「はい！たいしたことなんですけど、たいしたことじゃないことがありまして。」

「・・・なにそれ？」

「実はね、あるお方がここにいらっしゃるんですよ！」

「あるお方？」

「はい！さて、ここで林山に問題です！以前私達は、あなたに陛下のご姉妹についてお話ししましたが、そのうち陛下の女性のご姉妹のお名前は、なんと言ったでしょうか！？」

「陛下の女の姉妹！？」

（そういえば、李延年の説明の時に聞いていたな。）

その時の記憶を頼りながら、口を開く星影。

「確か・・・三人いらしたよね？」
「人数はいいです。お名前の方は覚えていますか！？」
「ああ・・・。上から順に、長女の平陽公主様、次女の南宮公主様、三女の林慮公主様の三人だ。」
星影の答えに、空飛は惜しみない拍手を送る。
「大正解です！さすが林山！！」
「アハハ！ありがとう。こう見えても物覚えはいい方なんだ。」
「では、物覚えのいい林山殿にお話します！なんと、その中のお一人、平陽公主様が近々後宮にいらっしゃるそうなんですよ！！」
「平陽公主様が！？・・・なんでまた？」
「聞きたいですか？」
「それを言うために来てくれたんだろう？」
「はい！」
星影の言葉に嬉しそうにうなずく空飛。
「それがね、皇后様のお見舞いに来られるんですよ。」
「皇后様が・・・？どこか御体の具合でも悪いのか？」
「ええ。二ヶ月ほど前から体調を崩されて・・・。」
悲しそうに言う空飛。それにつられるように、星影の気持ちも沈んだ。
（皇后様か・・・まだお会いした事はないがきっと素敵な方なんだろうな。・・・と、信じたい。）
陛下が陛下だけに、皇后がまともだとは思えなかったが・・・

（でも待てよ・・・夫婦にしても、兄弟にしても、片方がダメなら、もう片方はしっかりしてるものだ！）

そう考えれば――――――――

（皇后様は、まともに違いない！！）

と、いう結論に達する星影。

「なにが原因かは知らないが、やはり、皇帝の正妻とはきついんだろうな・・・。」

「ええ。奥方はたくさんいますからね・・・。早くよくなってくださればいいんですが。」

「さぞかし気苦労も多いことだろう・・・。」

「・・・そうですね。」

しみじみと語り合う星影と空飛。

庶民でさえも、女好きな亭主を持つと苦労すると言うのに・・・。

皇后の場合は、相手が女好きで男好きな陛下だ。妻の数が半端ではない上に、男の恋人もいるのだ。女だけでもややこしいのに、そこに男が加わるとなると・・・。

考えただけで憂鬱になる。想像するんじゃなかった。朝っぱらから最悪な気分だ。

「空飛！いい加減にしないか。星影の着替えの邪魔になるだろう！

？」

そんな空気を破ったのは、いさめる様に投げかけられる声。
それは、戸の外にいる琥珀からだった。

「あ、そうでした！ごめんなさい、林山。邪魔しちゃいましたね。」
「いや、いいよ。気にしないでくれ。」

大丈夫だと言って、空飛を引き止める星影。
そんな彼女の言葉に、すかさず琥珀が文句を言う。

「なんだそれは？私は駄目で、空飛はいいと言うのかい・・・・！？」
「なに言ってるんだ？別にそんなつもりは――」
「二人供、喧嘩はしないで下さい！私が出て行けばすむことでしょう？今そちらに行きますから！」

琥珀にそう言うと、星影の側から離れる空飛。去り際に彼は、小声で星影に耳打ちする。

「外で琥珀と待っていますから、早く来てくださいね。」
「ああ、すまない。すぐに終わらせるよ。」

手を振って部屋を出て行く空飛。
その姿が見えなくなったところで、戸の側に駆け寄る星影。
そして、鍵がかかっていることを確認すると、いそいそと着替えに取り掛かるのだった。

第五十四話　天然からの言葉（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・（土下座）
！！

この小説の題名になっている『天然からの言葉』の『天然』は、空飛をさしています。
話の中でも、基本的に星影は、空飛には甘いです。理由は、空飛が純粋な子なので（笑）
代わりに、琥珀には少し辛口です。理由は、琥珀が怪しい上に、いつも余計な一言多いので（苦笑）

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください（平伏）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第五十五話　籠（かご）の鳥

ゆっくりと優雅に、上品に、私は動く。
見事な模様が描かれた器をそっと机に置く。
そして、その器と同じ花が描かれた陶器を傾ける。
湯気とともに、さわやかな芳香（ほうこう）が周囲に漂う。
茶を注いだ器（うつわ）を差し出せば、目の前の人物は薄っすらと笑う。

私の動きがよいと褒める。
男心を掴む姿だと褒める。
あの貴人好みでよいと褒める。

嬉しくない。

そんな褒め言葉、嬉しくない。
どんなに素晴らしい些事（さじ）や、称（たた）えるような言葉をかけられても、私の心は動かない。
その言葉の意味を知っているから――――――

喜ばない。

故郷・藍田から遠く離れた場所に私はいる。
漢帝国の中心である長安に私はいた。
毎日が、稽古・勉学の連続。

完璧な貴婦人になるための修業。
すべては、1人の男の妻になるための教育。

だけど、相手は林山じゃない。

相手は、林山よりも年上。
地位も、名誉もなにもかもがこの国で一番の殿方。
女としては、最高の名誉かもしれない。
でも私は――――――――・・・・

愛する人のために自分を磨きたい。

会ったこともない相手のために。
愛してもいない相手のために。
林山以外のために。

愛していない男のために、女を磨かされる私。
女として努力する日々。
これ以上の苦痛はない・・・・・！

ここでの味方は、自分だけ。

姉も、父も、母もいない。

恋人さえも・・・！
愛する人さえも――――――――・・・・！！

林山、あなたは今、どうしているの？

あなたに嫁ぐ日を待ち焦がれていた。

あなたのことを考えるだけで、毎日が幸せだった。

でも・・・あなたと桂連が密かに会っていると聞き、胸をかき乱された。

激しく心を揺(ゆ)さぶられ、嫉妬の炎を燃え上がらせた。

思いつめた挙句、私はひとつの方法をとった。

彼に真相を問い詰めたのかって？

いいえ。

――――――――姉と入れ替わり、彼を脅して真実を聞き出す――
――――――――

それが、臆病な私が取った方法。

だからでしょうね。
きちんと確かめればよかったのに・・・。
そんなことを企んだから。
卑怯なことをしたからでしょうね。
今、こうして天罰を受けているのは・・・。

こうなったのは、誰のせいでもない。
自分自身にあるの。
私が悪いのです。

林山に嫌われたくない。
愛する人に嫌われたくない。
嫌な女だと思われたくない。

そう思って、いい格好をした私に非があるの。

臆病な恋をした私が悪い。
きれいな自分だけを、相手に見せようとした私が悪い。

星蓮は悪くないっ！！

そんなことを考えていると、必ず聞こえてくる姉の声。
自分を責めていると、決まって聞こえる懐かしい幻聴。
姉が私の気持ちを知れば、おそらくそう言うだろう。
あの人はそんな人だから・・・。
だけど・・・・。

星影姉さんは悪くない。

悪いのは、嫉妬で狂った私。
婚約者とその元・婚約者の仲を疑った私にある。
疑って、怪しんで、悩んで。
醜い心で、謀略（ぼうりゃく）をつむいだ私が悪い。

私が提案したから私が悪い！
・・・いいえ、その意見を採用した私に責任があるの。

あなたは妹として、姉に従ってしまっただけよ！
・・・いいえ、妹として姉に頼りきった私が悪いわ。

星蓮を一人残した私がいけないんだ！
・・・いいえ、一人にしてほしいとお願いしたのは私よ。

――――――――いいから、姉が白といえば、妹も白といえばいいんだよ！！
星影姉さん。

悪いのは私で、星蓮じゃない！！それで納得しなさ――――――――いっ！！！

ああ言えば、こう言う。
こう言えば、ああ言う。
そうやって、私をかばい続けるだろう。
姉はそんな人だから。
そして弱い私は、そんな姉の言葉に甘んじるだろう。
ずっとそうだったから。

ずっと、弱いままで、姉に頼り続けていたから。

でも――――――――――――――！

・・・ここで弱みを見せるわけにはいかなかった。
強く堂々とした女でいなくてはなかった。
姉のような強い女性でいなくては・・・・！！

劉星影のように・・・・・・・！！

聞きなれた靴音が部屋に響く。
【あの男】が、私の前に姿を現す。
私を見て、軽く笑いかける。
それだけで、私は身の毛がよだつ。

男は、私から視線を離すと、目の前にいる主（しゅ）に語りかける。
私が【物】としてどうかと、問う。
容貌はもちろんのこと、礼儀から言葉遣い、教養にいたるまで。
すべてにおいてどうかと、問う。

男の主は、怪しい笑みを浮かべると「よい。」と一言つぶやく。
その答えで、男は恭しく主(あるじ)に頭(こうべ)を下げる。

私は、この男を知っている。
【郭勇武】という名の武人だ。
近頃、陛下に気に入られて、召しだされた将軍だという。
陛下は、なぜこんな男を気に入ったのか・・・。
考えただけで、情けなくなってしまう。

そんな情けない男の主(あるじ)が――――――――・・・・・。

・・・・・・・・・・わからない。

わからないわ。

なぜこの人が、こんな男を使うのか。

申し分ない身分にいながら、何故・・・・・？

郭勇武は、この主(あるじ)の命で、私を召し上げたと言う。
召し上げたなどときれいな言葉を使ってはいるけれど、実際は強奪でしょう？
後で話を聞かされて、どれだけ惨めな思いをしたか。
私を奪うために、家族にどんなことをしたか。
愛する林山になにをしたか。

――――――――有名な美人姉妹を、揃って見れなかったのが残念だ。

林山の抵抗について、面白おかしく話した後。
愛する人を侮辱され、笑い者にされた後に言った言葉。
人に対して、これほどの憎しみを持ったことはない。
そんな憎い者達の言いなりになどならない。
言うことなど聞くものか。
それを態度で示せば、相手は狂気を口にする。

――――――――――――――――お前の愛する者を殺す――――――――――――――――

拒むことなどできない。
拒めば、私の家族と恋人を殺すと言う。
それだけじゃない。
私に関わるすべての人を殺すと脅す。

そして、永遠に消えぬ汚名を着せて、闇に葬り去ると言う。

悔しいけど、彼らにはそれだけをする力がある。
郭勇武の主（あるじ）には、それだけの権力がある。
名前しか聞いたことのない人物。
高貴な身分にある人物。
そして、とてつもなく欲深い人物。
天は何故、生家のみで身分の優劣を決めたの？
何故、心で、身分の優劣を決めてくださらなかったの？
そうすれば、目の前にいる者達が、【高貴】にはならなかったのに。
それぐらい、この人達は悪なのに・・・・！！

愛するものを守る力がない私は、そんな彼らに従うしかない。
守る力がないから、従うしかなかった。
私にできることはそれしかないから。
林山や家族を守るためには、それしか方法がなかった。

彼らは、それを知っていて私を脅した。

私を連れ去ったのも、自分達の都合によるもの。
己の欲望を満たすため。
だから、当然でしょうね、星蓮。
あなたが、これだけの憎しみを持つのは当然のことだったのよ。
持って当たり前だったの。
だって相手は人ではない。

人間とは思えないほど、ひどくて、卑怯で、ずる賢い方法を考える者達。
人の皮を被った鬼畜。
したたかで、残酷な獣。
同じ人間じゃないのだから。

でも、負けることはいかないの。

相手がどんなに強大であろうとも、私は泣き寝入りなどしない。

劉家の女として。

劉星影の妹として。

安林山の妻として――――――――――――――――!!

茶を飲んだ獣の口が開く。
言葉をつむいで私に語る。
その言葉で、私の未来は決まった。

私がいつ、皇帝陛下の室として入挺するか。

鬼畜達の声がやんだ後、私は強く拳（こぶし）を握った。

第五十五話　籠（かご）の鳥（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

星蓮の一人称です。
星影や林山ばかりだったので、この辺りで彼女を出してみました。
題名の「籠の鳥」とは、囚われの身となっている星蓮を表現しました。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第五十六話　真昼の訪問者（前編）

それは、突然の再会だった。

「ずいぶんいいところに泊まってるんだな、星影？」

星影が帰った後の昼下がり。
昼食を済ませ、部屋で剣の手入れをしていた安林山（あんりんざん）の前に１人の男が現れた。

「凌、義烈・・・殿！？」

そこにいたのは、片手に包みを抱えた【百面夜叉（ひゃくめんやしゃ）】の凌義烈（りょうぎれつ）だった。

「どうしてここに・・・！？」

思わぬ訪問者に目を見張る林山。義烈の登場に彼は戸惑った。
何故なら、凌義烈には自分がどこに泊まっているか教えていなかったからだ。

（どうやってここを探り当てたんだ！？）

長安に、星の数ほどある宿。その中から、安林山・・・・・・否、【劉星影】という名と年齢だけを頼りに探し当てたというのか!?

驚く林山に凌義烈は楽しそうに言った。

「おいおい、忘れたのか!?ここら一帯は俺のシマなんだぜ?わからないはずがないだろう。」

やれやれと、言いながら肩をすくめる義烈。

「それに、ここの宿のおかみとは知り合いでな。星影のことも、おかみから聞いたんだ。」

「・・・よく俺だとわかったな?」

「わかるさ。俺の元には、どんな些細(ささい)な情報でも、伝わるようになってるからな。」

「つまり・・・ここで起こることは、手に取るようにわかるということか?」

「ご名答。」

その言葉で、背筋に悪寒が走る林山。

迂闊(うかつ)だった。

相手の身分を考えれば、俺一人の居場所を突き止めるのは簡単なことだ。

【百面夜叉】の義烈と言われる男なら・・・・。

（若造一人見つけ出すのは、造作もないということか・・・！）

身をもって、【百面夜叉】のすごさを感じる林山。そんな彼に、相手は明るい声で話しかけた。

「そういうわけだから、ここらで悪さはするんじゃねぇーぞ、星影ちゃん？」

「・・・・そうしよう。さすがに驚いたよ、義烈殿。偶然とはいえ、この宿のおかみが、あなたのところの侠客だったとは・・・」

「あぁ？」

「ここだけじゃないんだろう？義烈殿の配下が、関係している店は・・・？」

林山の問いに、顔をゆがめる義烈。

自分が泊まっている宿は、【百面夜叉】と呼ばれる侠客の親玉・凌義烈の支配地。

この宿のおかみが、自分のことを義烈に伝えたということは、直接話をできるほどの関係ということになる。そうなれば、義烈の配下と考えた方が正しい。部下が上司である義烈に自分のことを伝えても不思議ではないだろう。

そう思って発した言葉。

しかし、そんな林山の問いに相手は手を振りながら言った。

「馬鹿言うな！おかみは侠客じゃない。気のいい普通のおばちゃんだ！」

「え！？違うのか・・・！？」

「違うよ、馬～鹿！侠客じゃねぇよ。侠客じゃないが――――――・・・俺らに協力的な、『侠客寄り』の人間って言えばわかりやすい

かな。」
「侠客寄り?」
「そうだ。おかみが俺に、お前のことを知らせたのも、『協力義務』を果たしてくれた結果だからな。」
「協力義務?どういうことだ?」
自分の考えを否定された林山は、再度義烈に問う。そんな相手に侠客は言った。
「この宿のおかみに限らず、ここら一帯の連中に言ってんだよ。『変わった奴がいたら知らせてくれ。』ってな。」
「・・・・それじゃあ俺は、その『変わり者』に該当したということか?」
「『変わり者』じゃなくて、『変わった奴』にだ。それにこれは、俺とみな様との共同作業でもあるんだよ。」
「共同作業?」
「よそ者が流れてきて、勝手気ままに無法を働かれたら困るんでな。そうなれば、俺だけじゃなく、ここらで商売してる連中にも迷惑がかかる。だから、なにかが起きる前に、ここの決まりを教えてやらねぇといけねぇんだよ。」
「なにかが起こるって・・・・犯罪がか?」
「それ以外にあるか?」
「だったら、役人に任せればいいじゃないか?あなたがする必要はないはずだ。そのために、獄吏(ごくり)だって――――――」
「馬~鹿!役人なんてな、袖の下ひとつで、黒を白に、白を黒にできるんだよ!」
「そんなことあるか!ここは、皇帝の住む都だろう!?都で汚職が起こるわけ――――」
「だ~からっ!起こるんだよ!!お前だって、それに巻き込まれてここに来たんだろう?」

「！・・・それはそうだが――――――」

義烈の言葉に、林山の言葉を途切れる。
汚職という分類ではないが、皇帝の使者としての立場を利用して、恋人をさらった男。
権力者の庇護によって、守られている郭勇武。
それを思い出し、自分の正論に口を閉ざす林山。

「わかってるはずだろう？役人なんて当てにならならねぇって！？家柄と金がある奴がここでは一番強いんだ。特に、権力者の寵愛を受けてる者がな・・・！」
「それは・・・郭勇武のことか？」

林山の言葉に、口元だけで義烈は笑う。

「わかってるじゃねぇか？ここじゃ、みんながみんな、役人には頼らないんだ。テメーの身は、テメーで守らなきゃならないんだよ。表がだめとなれば、裏しかないだろう？」
「その裏が、義烈殿なのか・・・？」
「言うまでもねぇ！表で通用しないことは、裏で通用する。裏で通用しないことは、表では通用する。どうだ・・・？ちゃ～んと、陰陽のバランスも取れてるだろう・・・！？」

クックッと、のどを鳴らしながら笑う義烈。

「言うまでもねぇ。役人に相手にされなかった奴らが、俺のところに来るわけさ。正しいことを金と権力で捻じ曲げられた者、体面や家柄を守るために、わかっていながらも悪事を頼みに来る者・・・。」
「悪事を頼みに来る！？」

「そうだ。旦那が囲(かこ)ってる性悪女に、跡継ぎを作っちまったので始末してほしいとか、上司が賄賂(わいろ)しだいで、無罪を死罪にしちまってるから、止めるためにも殺してほしいとか。そういう悪事だ。」
「待ってくれ！前者はともかく、後者は悪事になるのか？上司の不正を正そうとすることが、悪事になるのか・・・！？」
「なるだろう。自分じゃどうにもならないから、殺してくれって頼んできたんだからさ。」
「し、しかし、子の始末は私怨(しえん)だが、賄賂で動く上司を誅することが――――――」
「悪事だろう？理由はどうあれ、同じ悪事には変わりねぇよ。」
「そうかもしれないが――――――」
「それを俺が、美化してやってるのさ！共犯としてな・・・？」
「共犯って・・・。」
「侠者と役人の違いは、無理やり道理を通せることだ。役人は、法と規則で動く。俺ら侠者は義理と人情を含めた『侠』で動く。損得や金では動かないのが侠客だ！見栄とお綺麗な体面を保つ仕事は、役人共に任せればいい！汚い裏仕事は俺達侠者がする。だから人もついてくるのさ・・・！」

強い口調で言い捨てる義烈。その表情は、狂気じみたものだった。

「義烈殿・・・。」

相手の口調に圧倒(あっとう)され、なにも言えなくなる林山。
それに気づいた義烈は、表情を緩めながら言った。

「まぁ・・・侠客って言っても、金で動かねぇとは言い切れないがな。俺も半分は悪だからよ！好きなんだよな～あの黄金色と白銀色が・・・！」
「義烈殿。」

「でもな、表の奴らと違うのは、俺がその欲に忠実なことだ。ほしいと思えば、ほしいと言う。間違っても、奇麗ごとを並べ立てて奪ったり、騙し取ったりなんぞしないぜ。権力って言う免罪符も使わない。それが裏のやり方ってことよ！」

「しかし義烈殿の場合は・・・報酬としてもらっているのだから問題はないだろう？」

「ハハハ！残念ながら俺は、結構法外な金額要求するんだ。絞れるところからはしっかり絞るからよ？」

「え？でもそれは、当然じゃないか？貧しい者から取れない以上、裕福な者から多く持っているものから取るのは当たり前では？」

「え！？お前、そう思うのか・・・！？」

不思議そうに言う林山に、義烈も不思議そうに答える。

「え？そうじゃないのか・・・？貧しい者から、借金や質入、身売りをさせてまで金を取るよりは、裕福な者から取る方が効率もいい。下手に貧しい者から取り立てていれば、余計な私怨も生まれるし、なによりもかわいそうじゃないか？」

「・・・間違ってはいないが・・・。」

「それに、侠者を頼る人の大半は、下級層の人ばかりだろう？この国の大半は、貴族や金持ちよりも中流階級・下級層の人が多いじゃないか。困っている人々を助けることが侠客の本質なら、後回しにされがちな彼らを救うことこそが道理に適うと・・・俺の師匠は言っていましたから・・・。」

林山の言葉に、ますます目を丸くする義烈。

「・・・お前、侠客がどういう者か知ってるのか？」

「え？ああ。漢の高祖（劉邦）も、元は侠客じゃないか？」

「よく知ってるな！？いや、よく知ってるのは、お前の師匠の方か・

・・！」

そう言うと、腕組みをして考え込む義烈。

「もしかして星影の師匠は・・・・侠客なのか？」

「え？あ・・・ああ。」

「そうか・・・道理でな。」

小さく呟くと、持っていた包みを机の上に置く義烈。

「侠客の師匠を持ってるなら、俺が気に入るのも当然か・・・。」

「気に入る？」

「そういうことだ。お前がただの小僧なら、俺も気にかけねぇ。だが・・・・・・そうもいかないんでな・・・。」

「え？どういう・・・・？」

「ハハハ！気にするな！要は、お前の話を聞いたら、どうしても気になったってことだよ！それで、様子見ついでによったわけさ。」

そう言うと、部屋にあるいすに腰掛けた。そこは、朝方まで本物の劉星影が座っていた席。

星影がしていたように、足を組んでくつろぎ始めた。

（もしかして・・・心配してくれたのか？）

つかみ所のない相手から発せられた言葉。それを紐解（ひもと）いて自分なりに解釈（かいしゃく）してみるが、いまいち納得できない林山。

（悪い奴でないことは確かだが――――――――）

善人とは言いがたい。

多くの食客を養い、侠客としても大きな力を持っている人物。
ここら一帯(いったい)の裏を牛耳(ぎゅうじ)る『百面夜叉(ひゃくめんやしゃ)の義烈(ぎれつ)』として、庶民との強い絆を持っている男。
彼から聞かされた情報提供の協力の実態が、なによりの証拠である。

（どちらにせよ、こちらの動きはすべて、奴に筒抜(つつぬ)けということか・・・・。）

何食わぬ顔で自分の前に現れた義烈。
都の無数にある宿の中から、わずか一日ほどで自分を探し当てた侠客。
彼が、自分の宿まで来れたのは、人々の協力があったからだ。
それを考えれば、今後の動きは今まで以上に気をつける必要がある。

（凌義烈・・・・・・侮(あなど)れない男だな。）

改めて、相手の力を思い知らされた林山。
油断してはいけない、気を許しすぎてはいけない人物。
警戒しなければいけない人物。

「おい！いつまで突っ立ってるんだ？」
「え！？」

その声で、我に返る林山。見れば例の侠客が、こちらを心配そうに見ていた。

「大丈夫かよ？」
「あ・・・いや、平気だ。ちょっと寝不足で・・・」
「ほぉ～！寝不足とな・・・！？」

誤魔化しで言った林山の言葉に、義烈の目がキラリと光る。

「せっかく手土産を持ってきたしよ～ゆっくり語ろうぜ？その辺の話についてよ・・・！？」

そう言って、持っていた包みを開く義烈。シュッと、音を立てて布がとかれる。

「！？それは――――――――――――！」

中から出てきたのは、見事な細工がされた酒ビンだった。

「どういう酒が好きかは知らねぇから、適当に選んで持ってきたぜ。漢（かん）のものなら大丈夫だろう？」
「それじゃあこれは・・・漢（かん）の酒か？」
「ああ。本当は西域のもんでもよかったが、こっちの方が美味いからな。」

酒ビンを軽く叩きながら言う義烈。
林山は、酒のよしあしはあまり気にしない。大商家の付き合いで、いろいろな酒を口にしてきた。漢人は酒に強い者が多く、彼もその一人だった。そのため、知り合いを尋ねる時、酒を土産にすることは普通だった。
だから凌義烈の酒の手土産に、驚く必要はなかったが――――――

（すごい細工だな・・・・）

驚かずにはいられなかった。
義烈が持ってきた酒ビンの模様は、林山が見てきたものの中では「高価」な分類に入るもの。まだ口にはしていないが、その酒が美味いことは間違いない。

（こんな手土産を持ってこられては、早々に追い返せないな・・・。）

本当はすぐにでも帰ってほしかったが、訪ねてきた相手を無下（むげ）にはできない。
渋々（しぶしぶ）ではあったが、林山は客人をもてなすことにした。
彼は、昨夜星影にしたように、湯を入れて義烈の前に差し出す。

「なにもないが・・・。」
「おお、悪いな。」

湯と一緒に、前日市場で買った干した果物を添える。
それを義烈は、湯と一緒に口に放り込んだ。彼の食べるスピードは速く、あっという間に干した果物と湯は空になった。出されたものがなくなったところで、義烈は林山に言った。

「なぁ、この器使ってもいいか？酒ビンしか持ってきてねぇからさ。」
「酒っ・・・？てっ、今から飲むのか！？」
「ああ。」
「信じられない！真っ昼間から酒を飲む気か！？」
「いいじゃねぇか。どうせお前さんは、寝不足なんだろう？」
「え？」
「今朝まで起きてたんだろう、星影。二人でさ・・・？」
義烈の言葉で、心臓が脈打つ。相手の顔を見れば、意味ありげに微笑んでいた。

まさかこいつ――――――！！

（俺が昨日、星影と会っていたのを知っているのか・・・・！？）

そうは思ったものの、ここで余計なことをしゃべるわけにはいかなかった。

「・・・なんのことだ？」

とりあえず、シラを切ってみる。林山の返事に、義烈は不服そうに答える。

「とぼけなくてもいいだろう？俺達は、商売仲間なんだぜ？隠すことないだろう～？」

声のトーンを上げながら言う義烈に、平静を装いながら林山は言った。

「俺はあなたに、妹の件を依頼しただけだ。商売契約は結んだが、仲間になったつもりはない。」

「へぇ～！ずいぶん冷たいこと言うな、星影！？俺を信用してないのか？」

「信用はしている。依頼人としてな。」

「ハッハッ！お前ならそう言うと思ったぜ！」

大声で笑うと、机の上にある茶器に手を伸ばす義烈。二つ取ると、持ってきた酒を流し込み始める。

「そういう星影だからこそ、こうして飲む必要があるんだよな～」

「おい！俺は、酒なんて飲まないぞ！」

「なんだよ、飲んだことないのか？けっこう飲める口だと思ったんだけどな。」

「飲めないことはないが、昼間に酒を飲むのはよろしくない！まっとうな人間は、働いてる時間だぞ？」

「ハッハッハァ！真っ当ね～！？さすが、良家の坊ちゃんの言うことは違うわ！」

笑いながら、酒の入った器を自分と林山の前に置く義烈。

「まぁ飲めよ。」

「断る。昼間に酒は飲まない。」

「頭が固いね～お坊ちゃんは。」

「誰がお坊ちゃんだ！その呼び方はやめろ！」
「本当だろう？大商家の跡継ぎなんだからよ！？」
「・・・いいから、大声でそういうことを言うな・・・！」
「それじゃあ、一緒に飲もうぜ。夜の酒もいいが、昼の酒もうまいんだぜ？」

林山に目配せすると、一気に酒をあおる義烈。

（なんて、口が達者なんだ・・・！！）

こうなっては、断ることなどできない。
相手の態度に苛立ちながらも、器に手を伸ばす林山。
そして、義烈と同じように一気に酒を流し込む。

高価な酒が、自分の憂さを払ってくれる。

そう思って飲んだのだが――――――――――

「！？」

口にした酒は予想に反していた。

「薄い・・・？」

実際に飲んだ酒は、林山が知る中では「安物」の分類に入る酒だった。
見た目と中身の違いに固まる林山。

「美味いと思っただろう？」

そんな彼を、楽しそうに見る義烈。

「その酒を、高価な酒だと思っただろう？」
「・・・思ったが、違うみたいだな？」
「その通り！安物の酒さ。」

そう言って笑う義烈。

「お前さんに足りないものは『それ』だ、星影。」
「足りないもの？」
「お前は見た目で人を判断する。中身まであまり見てない。酒場でのことがいい例だ。」
「――――――――――――あっ！」

義烈の言葉で、自分を役人に売った男のことを思い出す。
一緒に郭勇武の悪口を言っていた。
それなのに、そ知らぬふりで林山だけを密告した。
裏切り者をあぶりだして、自分の私腹にかえていた。

まるで、郭勇武の間者のようで性質が悪かった。
何度思い出しても、嫌な気分になる。

「思い出したみてぇだな？」
「できれば、思い出したくなかった。あれは一生の不覚だ・・・！！」
「だろうな。じゃあ聞くが、なんで不覚を取っちまったと思う？」
「・・・俺が未熟だったからだろう？」
「大まかにまとめればな。細かく言えば、見た目で判断したのが悪かったんだよ。見た目を観察してから、危険かどうか決める。見た目で上・中・下と評価してから、相手と話をする。それから本当の判断を下す。それがよくなかったのさ。」
「それは俺だけに限らないだろう？みんなそうじゃないか？」
「多数決でいけば、そうなるな。だが、みんなと同じじゃ困るんだ。」
「え？」
「俺と組む以上は、大勢のうちの一人じゃ困る。もっと、感を鋭くしてもらわねぇとな！」
「感？」
「直感だ。野生の感を鋭くしろ。」

そう言うと、薄い酒を流し込む義烈。

相手がなにを言いたいのか、なんとなくではあるが林山はわかった。
恐らく、自分を思って言ってくれているのだろう。

要は、感覚だけで、危険を判断できるようにしろと言っているのだろうが――――――

（何故、そんなことを俺に言うんだ・・・・？）

突然現れたかと思えば、侠客について語ったり。
土産だと持ってきた酒を使って、人生学を説き始めたり。

（昨夜の件にしても、知っているとほのめかせるだけで、肝心なことは聞いてこないし・・・・・！）

こちらの問いを、のらりくらりとかわしたかと思えば、心臓に悪いようなことをズバッと言う。
そうかと思えば、学問の師のような指導口調になる。それをこちらが真剣に聞けば、急にからかってきたりと・・・・わけがわからない。
説教をされているのか、授業を受けているのか、からかわれているのかわからない。
相手の行動が読み取れず、イライラだけが募（つの）る。

「よく昼間に酒なんか飲めるな・・・。」

そんな焦りを、皮肉にこめて相手に発する林山。
それに対して、微笑しながら義烈は言った。

「時間なんざ関係ねぇ。大事なのは、飲む時期だ。」
「時期・・・？酒に旬などあるのか？」

「あるぜ。打ち解けたい人間がいる時に飲むのがコツだ。酒ってのは、病気の治療だけじゃなくて、人間が打ち解ける役割まで果たしてくれる。だからこそ俺は、今お前と一緒に飲みてぇんだよ。」
「え？」
「お前と初めて酒を飲んだ日、えらく気分がよかった。あの高揚感は久しぶりだった・・・！」

空になった器に、酒を入れながら義烈は言う。

「ガキの頃に戻ったみてぇで、ワクワクしたんだ。久しぶりに、楽しかったんだよ・・・！」
「・・・そうなのか？」
「そうだよ！どうしてもまた飲みたくなってな。だけど、お前に会えるのは3日後だろう？仕方がねぇから、そこいらをぶらぶらしてたら、ここのおかみと会ってな～」
「俺の話を聞いたというのか？」
「そういうこと。基本的に、依頼人のところに押しかけることはしねぇんだが、我慢できなくてよ！ついでに言えば、夜まで待てなくて来ちまったんだ。」

声を立てて笑う義烈に、林山の中のなにかが抜けた。

「つまり義烈殿は・・・俺と仲良くなるために酒を持参(じさん)したと？」
「義烈でいい。『殿』付けされるほどご大層なもんじゃないからよ！」
「・・・義烈の言い分はわかった。でも、昼に酒を飲むのはちょっと・・・。」
「いいから飲めよ、星影！もうお前の分は注(つ)いでるんだぞ！？」
「てっ！あなたが勝手についだんだろう！？」
「拒まなかったお前が悪いんだろう？それとも、酒も飲めないお子

ちゃまなのか～!?」
「誰がお子ちゃまだっ!?」

義烈の言葉で、林山の顔に赤みが差す。

「違うなら飲んでみろよ～?」
「当然だ!」

自分の前に置いてある器をつかむと、一気にあおる林山。

「お～お～!いい飲みっぷりじゃねぇか!?」

やんや、やんやと、手を叩く義烈。そして、空になった林山の器に酒を注ぐ。

（・・・・・・・・調子が狂う。）

相手の口車に乗せられ、酒をあおることとなった林山。
その側で、陽気に酒をすすめる凌義烈。
相手に茶化されながら、酒を飲む林山だったが――――――――

（・・・何故ここに来たんだ?）

仮にも相手は、【百面夜叉】の異名をとる男だ。

俺が心配だから？
俺と仲良くなりたいから？
一緒に楽しく、酒を飲みたいから？

いいや！
そんな子供じみた理由で、ここまで来るはずがない。
いくら侠客だといってもだ。
そうなると、なるとやはり――――――――――――――！

（・・・昨夜のことを探りに来たんだろうな・・・！）

宿のおかみから話を聞いてたということは、俺が誰かと話していたということを知っているはず。

“今朝まで起きてたんだろう、星影。二人でさ・・・・？”

その証拠に義烈は、口に出してそのことを俺に伝えてきた。
俺は奴の依頼人。しかも、頼んだ内容が内容だ。俺の身の回りを調べないはずがないじゃないか・・・！

（詰めが甘かったかもしれない・・・・！！）

自分の軽率な行動を、林山が恥じた時だった。突然、強い力で引き寄せられる。

見れば、自分の肩に義烈の手がまわされていた。

「ぎ、義烈・・・！？」

「俺は、お前のことを気に入ってんだよ！お坊ちゃんのくせにそれなりに度胸はあるし、おもしれぇことを言うし、やってるしよ。」

「・・・大人の駆け引きのできないガキじゃないのか？」

「今はな！だが、師匠が侠客となれば、話は別だ！俺がいろいろ教えてやるさ！人生経験が豊富なお兄さんがさぁ～？」

茶化しながら言う義烈。そんな相手の目を見た瞬間、林山の体がこわばる。

（こいつ――――――――・・・・・！？）

ふざけた態度をとっていたが、その目は真剣そのものだった。

「・・・・・・・いろいろ聞かせてくれよ、星影。」

「い、いろいろ・・・？」

「とぼけるなよ。それを聞きたくて、ここまで来たんだぜ？」

「なにを言ってるんだ！？意味がわからない・・・！」

「昨日・・・お前の部屋に来てた奴のことだ。」

・・・・知っているのか・・・・・・！？

（俺のが誰と会っていたか!?）

その言葉で、林山の体から汗が噴出す。暑さによるものではない、嫌な汗だった。

林山の心に悪い思いがよぎる。
当たってほしくない最悪の結末。
それを振り切るように林山は言った。

「なにを言ってるんだ!?俺の部屋には誰も来ていない!お前しか・・・義烈しかきていない。」
「ああ。男は（・）俺しか来ていないな。」
「えっ!?」

（なぜそれを!?）

慌てて相手を見れば、真顔で自分を見る義烈がいた。

「さぁ坊や・・・自白の時間だ。俺に嘘や誤魔化しは通用しないぜ・

・・・？」

義烈の問いに、ひたすらシラを切っていた林山。
しかし、それも義烈の言葉で崩壊するのだった。

第五十六話　真昼の訪問者（前編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

少しだけ解説をさせてください。
文中に出てきた【造作】とは、「『たやすい』・『簡単』という意味で、古風な言い回しの時によく使われる言葉。」であります。
わかりにくいかもしれませんので、補足です（だったら、使わなきゃいいのに；）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第五十七話　真昼の訪問者（後編）

「さぁ坊や・・・自白の時間だ。俺に嘘や誤魔化しは通用しないぜ・・・？」

義烈からの言葉を受け、林山の体に緊張が走る。
自分よりも年上の男。
自分よりも世間をよく知っている人物。
危険についても、詳しく知り尽くしているであろう侠客。
だが、ここで取り乱してヘマをするほど、林山は子供ではなかった。

「自白ね・・・。こういう場合、俺が罪人で、あなたが獄吏（ごくり）ということか？義烈殿・・・？」
「何度も言わせるな！義烈でいい。」
「じゃあ義烈・・・なにを根拠に、俺が人と会っていたというんだ？」

【彼女】とは言わずに、あえて【人】と言う。
そんな林山の言葉に、一瞬、つまらなそうな表情を見せる義烈。
何回かのやり取りで林山は学習していた。
義烈が、自分にカマをかけてくる方法を。

（奴は、『男は自分が最初だ。』と言った。それがら、わざわざ『女性』だという単語を出す必要はない。相手が言うまで、使わない方が無難だ。）

林山の判断は正しかった。自分のカマをかわした相手に義烈は、次の罠を仕掛けてきた。

「宿のおかみから聞いたのさ。何度も騒いで、最後の最後は、苦情を言った隣人の泊り客を一喝したそうじゃねぇか？」

「ああ、誤解だよ！寝ぼけると大変なんだよ、俺は。つい大声とか出しちゃうから。」

「嘘つけよ。一喝した声はは、女だったらしいじゃねぇか・・・！？」

「そっかぁ～俺の声は女っぽいか。ああ、でも、寝起きだと、ちょっと高くなるかもしれないなぁ。」

「ほぉ～そいつは是非とも聞いてみてぇもんだ。今夜泊まってもいいか？」

「いつも聞けるとは限らないんで、泊まるだけ無駄だと思うよ？」

「はっ！・・・たいした減らず口だな！？」

「あなたには適わないさ・・・！？」

その言葉を最後に黙り込む二人。

（誤魔化せたか・・・・？）

林山がそう思った時だった。

「なるほど。お前の話が本当なら、寝起きの声は女みたいになるのか？しかも腹話術までできるとはね～？」

「腹話術？」

「この部屋のお隣さんの話じゃ、男の声がする途中で、何度も女の声がしたそうだぜ？逆もあったらしいが？」
「・・・勘違いじゃないか？そんなこと・・・」
「両隣のお隣さんが、同じこと言ってるんだぜ？両方の聞き違いだって言いたいのか？しかもその男女の声は、かぶる場面が何度もあったそうじゃねぇか？」
「夜中なら、寝ぼけていたんじゃないか？両隣の人達は？俺も俺で気をつけないとな～変な寝言を言うのは。」
「おかみも聞いてたんだぜ？店の用事で早く起きてたんで、寝ぼけちゃいないぜ？」
「疲れて幻聴でも聞いたんだろう？」
「そうかな？おかみは男女が話してる会話のような声を聞いてる。話の内容まではわからなかったが、あんまりうるさいんで文句を言いに言った時に聞いたらしいぜ・・・？」
「え？」
「劉星影の、泊まってる男の客以外の声。女のわびる声を聞いたんだと。」

義烈の言葉に、固まる林山。

「だから知らないよ、俺は。おかみさんの勘違――――――――――！」

「星影っ！！！」

林山の声を遮るように発せられた罵声。思わず、声の方に視線を向

ければ、鋭い目でこちらを見る侠客がいた。

「嘘は終わりにしようぜ・・・星影。俺は職業柄、相手の嘘を見抜くのは得意なんだ・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・！！」

終わった・・・・・・・・・・・・・・・・。

（これ以上は・・・・誤魔化せないか・・・・・・！！）

その一言で、林山の抵抗の一手は封じられる。

（くそっ！こんなところで――――――――――――！！）

バレてしまうのか？

ここで真実を話せば、きっと芋づる式にすべてがバレるだろう。

俺が偽名を使っていたことも。
星蓮の兄ではなく、恋人であったことも。
自分の身代わりで星影が、後宮にいることも。

割れた花瓶を直しても、欠片の一つを取ってしまえば、中の水は流れ出す。
その水のように、漏れてはいけない秘密が漏れてしまう。

（俺がもう少し気をつけていれば・・・・！！）

バレることはなかったのに・・・・・！！

力なくうなだれる林山。そんな彼の側に、そっと近づく義烈。

「話してくれるよな、星影・・・・・・？」

聞いたことのないような、穏やかな声の義烈。自分の耳元で優しくささやく相手に、林山は拳を握り締める。

すまない・・・・！！

「誰にも・・・・・」

星影・・・・！星蓮・・・・・！

「誰にも他言しないと・・・・・・」

ふがいない俺を、

「誓えるか・・・・・!?」

許してくれ・・・・・・!!

「当然だ!俺の口は堅いし、値段が高いからな～!?星影ちゃんの悪いようにはしねぇよ!」

軽口をたたきながら言う義烈に、林山は下唇をかむ。

（なんだ・・・！？その言い草は！？）

自分がこんなにも、絶望しているのに、相手はあっけらかんとしている。
こいつが、余計なことを嗅ぎ付けさえしなければ、こんなことにはならなかった。
しられたくない。
でも、隠し通せない。
それなら、それなら――――――――――――――――――！！

「もし・・・もしも・・・！このことをあなたが他言すれば、」

「他言すれば？」

（こんなことはしたくないが――――――――――――――――――――――――！！）

「――――――――――――――――――お前を殺すっ！！！」

（俺達のために死んでくれ！！）

言ったと同時に、持っていた剣を抜く。

「なっ！？」

一寸の狂いもなく、相手に刃を突きつける林山。

「あ！？」

切っ先を義烈に向けたのだが――――――――――――――――――

「――――――――――――遅い。」

耳元で、ささやく低い声。

義烈は、林山の剣を素早く交わすと、あっという間に懐に入り込んでいた。

そして、あっという間に林山をねじ伏せてしまった。

「うぁ・・・・！？」

「誰にも言わねぇーから、物騒なものをしまいな？」

子供を諭（さと）すような口調で言う義烈。その声にあわせるように、林山の手から離れる剣。

「くっ・・・・！」

林山のうなり声と、金属音とが重なる。

「お前なぁ～相手見てから、刃物を抜けよ！俺じゃなきゃ、殺されてたぞ？」

「馬鹿言え・・・！」

（お前でなければ、殺せていたさ・・・！）

顔をゆがめる林山に、呆れ気味に首を振る義烈。

「たくっ・・・人を馬鹿にすんなよ・・・。」

そんな相手の態度と言葉で、林山は悔しさが増した。

あまりにもふがいない自分。

秘密一つ守れず、脅し一つまともにできない自分。

情けない自分に、悔しさ以上の怒りを感じていた。

「・・・約束しろ・・・・・!誰にも言わないと、約束しろ・・・・・!!」

怒りと悔しさを押し込めて出した言葉。
それに対して、義烈はため息交じりに言った。

「お前のような真面目な奴は、初めてだぜ。」
「天地天命で誓え!絶対に言わないと・・・・・!!」
「誓うよ。後が怖いからな?」

口だけで笑って見せると、林山から手を離す義烈。

「お前は大事な取引相手だ。天地天命で他言はしない。」
「必ず守れよ!他言すれば殺す!!」
「返り討ちにあっといて、よく言うな?」
「黙れ!それだけ、重要なことなんだっ!!」
「わかった、わかった!俺が悪かったから!!だから・・・なぁ?」

手を合わせて頼む義烈を睨みつけると、林山は大きく息を吐きながら言った。

「確かに・・・お前の、義烈の言う通り、昨夜は女性と会っていた・・・。」
「それはわかってるよ！それで？どんな子なんだ！？」
「どんな子って・・・。」
言葉を濁す林山に、その先を尋ねる義烈。
「教えろよ！お前は、どんな女と憂さを晴らしてたんだ？」
「俺が憂さを晴らす・・・・？」
どちらかと言えば、憂さを晴らされていたんだが・・・？
義烈の言葉で、不快感を露にする林山。
「そんな顔するなって！それでさ、具体的にはどんなことをしたんだよ？どうだったんだ！？」
「どんなって・・・話をしただけだが？」
「馬鹿！そんなことは聞いてねぇよ！俺が聞きたいのは、その女となにをしていたかだ！」
「なにって、知ってるんじゃないのか？」
「想像はつくが、お前の好みは知らないかよ！」
「好み？」
「とりあえず、美人なんだろう！？」
「え？あ、ああ。美人は美人だが・・・・」
「やっぱりな！なぁ、今度紹介してくれよ！是非とも、一戦交えてぇからさ！」
「一戦交える！？」
「おう！」

林山の言葉に、興奮気味に訴える義烈。

「一戦交えるって――――――・・・あいつとか!?」

（星影と戦う気か、こいつ!!?）

藍田では有名な武の申し子と!?

義烈の言葉に、戸惑いを隠せない林山。驚く彼に、相手は言葉を続ける。

「男なら、やりたくなるのは当然だろう!? しかも美人とくれば、なおさらじゃねぇか!?」

「いや、いくら美人だといっても――――――やめた方がいい！悪いことは言わない！」

「なんだよ、病気でも持ってるのか!?」

「持病はないが、あの強さは男以上だ！下手をしたら、【百面夜叉】の義烈でも殺されるぞ!?」

「なっ・・・なにぃ!?それほどいいのかっ!?」

そう言うと、さらに興奮し始める義烈。

「信じられん！それほどの良い女がここにいたって言うのか！？俺の縄張りにか！？」
「え？いや・・・縄張りもなにも、ここの人間じゃないが・・・？」
「なんだ、よそから流れてきた女か！？それなら、俺が知らないはずだ！ここの美人は、あらかた味見をしたからな。」
「味見！？」

その言葉で、相手の態度に違和感を覚える林山。

「味見って・・・ここの女性は、そういう人が多いのか？」

武術の達人が？
高貴漂う都にか？
そんな女性と戦うことを、味見というのか？
というか――――

（なんか、おかしくないか・・・？？）

都では、手合わせをすることを【味見】と言うのか？

いぶかしそうに言う林山に、義烈は爆笑する。

「当たり前だろう!?ここは長安、天子様のいる花の都だぜ!?綺麗な花は手にこぼれるほどいるんだぞ!?」
「そうなのか・・・?」
「そうさ!ここはこの国の中心だ!一番最高の者が集まる場所だ!」
「そうなのか・・・。」

星影のような女傑が、都には多くいるのか?
もしそうなら――――――・・・・・・・・・考えただけでめまいがする。

思わず、額に手を当てる林山。

「そういうわけだから、洗いざらいしゃべっちまえよ!もうバレてんだから、隠しても無駄だぜ!」
「そうだろうな・・・。百面夜叉の義烈様の前では、隠し事など・・・!」
「皮肉はいいって!うらやましいな、お前!よかったんだろう!?」
「よかったって?」
「とぼけるなよ!お前のことだから、お姉さんにお世話してもらったんだろう!?」
「え・・・?あ、ああ・・・。世話はかけたが――――――・・・。」
「やっぱりな!おかみから聞いてるんだぜ?夜中から今朝方まで、ずいぶんお盛んだったみてぇじゃねぇか~!?」
「お盛ん?」
「どこで引っ掛けたのか知らねぇが、星影も好き者だな~!?」
「引っ掛けた・・・?」

お盛ん？引っ掛けた？

義烈の言葉を聞くうちに、深まっていく違和感。

どうも話がおかしい・・・。
この男は、俺と星影の話し合いを知っているはずだ。
それなのに、なかなか確信を聞こうとしない。
事が事だけに、周囲を警戒しているのか？
それとも、単にふざけているのだけなのか？
ガキだからと、俺を馬鹿にしてからかっているのか？
それならなぜ、卑猥な表現をするのだ？
下品ないかがわ――――――――――――――――――
！！！？

（ま、まままま、まさかこいつ！）

そこまで考えたところで、ある考えが林山の頭をよぎる。

（俺が星影にも手を出してると思ってるのか！？）

星影が、俺を訪ねてきたのを夜這いだと思ってる!?

そう考えれば、相手の表現は納得できる。
義烈の態度に納得はできたが、林山の気持ちは納得できなかった。

（もしそうなら、めちゃくちゃ迷惑な勘違いだ!!）

自分が愛しているのは星蓮だけ。
いくら世の中で、姉妹をそろって妻にする男がいるといっても一緒にしないでほしい。
星蓮を真剣に、一途に愛している自分からすれば、かなり失礼な話だ。
なによりも、星影は大事な親友なので、色恋の対象にされるのは許せない。
だからこそ、それを確かめるためにも林山は言った。

「ちょっと待て!なにか勘違いしてないか、義烈!?」
「勘違いなものか!お前が女を連れ込んだのは、事実だろうが!?」
「その表現自体が、間違ってるってっ!!」
「嘘つけ!おかみが嘆いてたぜ。娼婦を連れ込んで騒いでたんだろうぉ～!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

しょうふ

ショウフ

正麩

しょう・・・・・！？

「娼婦ぅぅぅぅぅぅぅ！！！？」

「そうだよ！昨日は、どんな美人のお姉さんとよろしく犯ったんだぁ～！？」

絶句する林山を、小突きながら言い放つ義烈。

「誤魔化すなよ！他の泊り客も、女のあえぎ声がうるさかったってごねてたぜ？」

「あえぎ声ぇぇ！？」

出してねぇよ！つーか、罵声しか言ってねぇよ！

「おまけに文句を言ったら、女の方がそれを黙らせたそうじゃねぇか？行為の邪魔だとかでよ～？」

いや、確かに黙らせたけど！でも、行為とかはしてないけど！？

「お前金持ってるから、さぞかし良い女を買ったんだろうな～！？
俺も、味を見たかったなぁ～！」

てっ！！味見って、そっちの味見かよぉぉぉぉ――――――――――――――――！？

（一体どこでそんな誤解に・・・・・・・・・・・・！？）

混乱する林山だったが、義烈から発せられた次の言葉で、その謎は解けた。

「この宿は、娼婦連れ込み禁止なのによ！おかみが、怒ってたぜ！？『最近の若い者は我慢が足りない』って！」

（犯人はおかみかぁぁぁぁぁぁ！！！？）

・・・おそらく、宿のおかみと両隣の客達が勘違いしたのだ。
特に宿のおかみさんが。
その勘違いした情報を義烈が聞き、それを信じて俺を冷やかしているのだろう。

（だとしても冗談じゃない！！名誉毀損（めいよきそん）にもほどがあるだろう！？）

冷静に考えをまとめ、再度怒りが湧き起こる林山。

「違うんだ義烈っ！！俺は娼婦なんて――――――――・・・・・・・・・・・・！！！」

そう言いかけたところで、林山は気がついた。

（・・・・・待てよ、このまま誤解させた方がいいかもしれない。）

事情はどうあれ、義烈は俺が昨夜、人と会ったのを知っている。
宮廷兵の身なりの者ではなく、娼婦と会っていたと思っている。
それなら、そう思わせておいた方がいいのでは・・・・・？
下手に否定して、せっかくの誤解を相手がといてしまっては困る。

（真実に気づかれては困る・・・・・！！）

「どうした！？急に黙り込みやがって～？図星か星影～！？」

事実を知られるくらいなら、汚名をかぶる方がいい。
それが星影や愛しい星連のためになるなら。

「俺は・・・・！」

女遊びはしない。
星蓮がいるからしない。
彼女を裏切りたくないし、なによりも、星蓮以外で欲情しない。
本当に愛しているのは星蓮だから。

劉星蓮だから――――――――――――――！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・女性を買ったのは、初めてだったんだ・・・・・・・・・・」

（彼女を助けるためにも、汚名を着ようじゃないか・・・・・！！）

「ハッハッハッ！！ようやく、真実を白状したなぁ～！？」

助平な笑みを浮かべる義烈に、引き笑いを作る林山。

なにが真実馬鹿やろう！！

俺は買ってない！
本当は買ってねぇよ！！
浮気してないけど、そう言うしかないだろう！？

（この屈辱忘れまい・・・・！！絶対に、この恨みを晴らしてやるぞ、郭勇武・・・！！）

目の前の人物ではなく、こうなった元凶に対して怒りを再燃させる林山。
顔で笑みを浮かべ、心で泣く林山。

「まぁ、女を買うのは、男として当然だ！恥じることはねぇぞ！」
「そ・・・そうですか・・・？」
「しかし、初めて買った女が、激しい性質というのも珍しいな！？よかったか！？」
「え、ええ・・・まぁ・・・。」
「そうか、そうか！よかったな、おい！この好き者めぇ～！！」

真実を知らない義烈は、助平、助平とはやし立てる。
それを無言で受け入れる安林山。

その後、話題は女性の話で大いに盛り上り、二人だけの飲み会は夜中まで続いた。

そして林山は、改めて郭勇武への復讐を誓うのだった。

第五十七話　真昼の訪問者（後編）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

真実はバレなかったものの、義烈にからかわれる結果となった林山。
そんな彼を、今後も応援してあげてください。お願いします（平伏）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！
ヘタレですみません・・・（土下座）

第五十八話　本日、女難の相あり

後宮を甘くみていた。

宮中の長い廊下を歩きながら、安林山こと劉星影はそんなことを考えていた。

後宮に来て半月が経つが、妹・劉星蓮に関する確実な情報はなにも得られない。

得られたものがあるとすれば、下級宦官から高級宦官の地位になったことぐらい。

望んで出世したわけではない。

願って、皇帝に気に入られたわけじゃない。

宮中で目立たないように、夜間行動したことが裏目に出たのだ。

偶然助けた相手が、皇帝であっただけ。

その結果、高官に取り立てられてしまったのだ。

出世欲のある者が聞けば、贅沢な愚痴だというだろう。

私も人間だから、欲がないわけではない。

でも今は、そんなことよりも、可愛い妹の星蓮を奪い返すことが先決！

そのためなら、危険を承知で皇帝の側仕えの高級宦官になってもかまわない！！

そもそも、星蓮は皇帝の妻として召しだされた。

それならば、夫である皇帝が、新しく入った妻の元へ行かないはずがない！！

それらの思いが重なり、二つ返事で皇帝の側仕えの高級宦官になった。

しかしそれは、危険と隣り合わせの世界へと足を踏み入れることだ

った。

危険その一、王琥珀（おう こはく）。
同じ下級宦官だったが、安林山の「陛下ぁ～林山からの、お・ね・が・い・！」（多少脚色されております。）により、共に高級宦官になった男。
星影が宮中に来てから知り合った友達だが、【伯炎】という別名を持つ怪しい人物。
陛下襲撃直後に、黒ずくめの男に、誰かを殺す話し合いをしていた。友達ではあるが、油断できない相手だ。

危険その二、霍光（かくこう）。
皇帝が気に入っていた、今は亡き霍去病将軍の甥。
若いながらも切れ者で、私が賊の仲間ではないかと疑った男。おまけに、安林山の身元の再確認を陛下に申請していた。幸い、その話を事前につかみ、裏工作（色仕掛け）をしたおかげで私に対する身元調査は阻止できた。しかし、まだまだ油断はできない。

危険その三、李延年（りえんねん）。
皇帝の寵愛を一身に受ける高級宦官兼
初めて会った時から、下級宦官・安林山を賊の仲間だと批判した人物。いつもイライラ怒っており、陛下を惑わすなと、わけのわからないことを言う。その後も、陛下のいないところで、あからさまに嫌味をいって突っかかってくる変な男。

ざっと見たところで、これだけの危険人物がそろっている。

いや・・・彼らだけではない。
同じ危険は人物でも、一番の危険なのは――――――――――――――!!

（皇帝陛下だろうな・・・・・。）

漢帝国の七代皇帝・劉徹。
この国の最高権力者であり、絶対に逆らってはいけない相手。
文武に優れ、政治もきっちりとこなす人物。
一見立派そうに見えるが、実は、とんでもない癖があった。

「実は、今の今上は・・・女性の方も好きですが、その・・・男性の方も好きなのです。」（情報提供：張空飛）
「（好きではなく、）大好物（だいこうぶつ）の間違いだ。」（情報提供：王琥珀）

そうなんだよ!!
美男美女が大好物!
恋愛対象・性欲対象の好色家!!
男も女も愛せる両刀使い!!!

皇帝の近くに行けば、星蓮の手がかりが得られると思った私にとっ

て、これは計算外だった。

陛下に気に入られるような態度をとれば、【好意】だと受け取られ、襲われて操を奪われる危険があった。そうなれば、星蓮を救うどころか、私のとばっちりを受けて死なせてしまう可能性もある。

・・・・・・正直、今の私に、元・男という設定で、男のふりをしている私欲情し、襲おうとする皇帝が嫌だ。

元をたどれば、この権力者のおかげで、星蓮は強奪されたのだ。

それでも、恭しい態度で接しなくてはいけないのが、忌々しいことこの上ない。

仮に、上手く陛下をあしらえたとしても、愛人・李延年が邪魔する可能性があった。

高級宦官・李延年が私を激しく嫌う理由。

それは、恋敵として安林山を敵視しているからだ。

李延年が側にいれば、陛下は私を襲わない。襲わないが、陛下から星蓮関係の話が聞き出せない。李延年の前でそんな話題をすれば、私の弱みを探している相手を喜ばせることになる。でも、李延年が側にいてくれないと、星蓮の話を聞きだす前に襲われてしまう。

今の私の課題は、李延年に邪魔されないで、陛下に教われないように気をつけながら、星蓮の行方を聞き出すことだ。どれか一つでも間違えれば、正体がバレてしまうだろう。

“目を付けられて！暴れまわって！死に掛けて！色物になって！お前ろくなことしてねーじゃん！！？”

まったくもって林山の言う通り。

成り行きで、出世するものではない。

身分が上がった以上、これまで以上に警戒しなくてはならないのだ。

そう思い、今後の立ち回りについて策をめぐられる星影。

しかし、星影を困らせているのはそれだけではなかった。
それらの男達以外にも、星影を困らせている者がいた。

「あら、見て林山様よ！」
「本当だぁ！相変わらず素敵ね。」
「宦官なんてもったいないわ！あの方が武官だったら・・・！」

柱の影からこそこそと――――――――・・・しゃべっているつもりでいる女官達。
そう、延年より執念深く、霍光よりするどく自分を監視する存在。

「林山様～！！」

名前を呼ばれて振り返った先には。

「ご機嫌麗しゅうございますぅ～！！」

にこやかに笑う女官達の姿。
全部で五人。
振り向いた星影の元へと、いっせいに集まってきた。
そして、彼女を取り囲むような配置につく。

「これから仕事ですかぁ～？」
「え・・ええ。陛下に用事を頼まれまして・・・。」
「今日はどちらに行くんですのぉ～？」
「はい、書庫の方へ行くのですが・・・。」
「まあ、なんて偶然！私達もそちらに行くところでしたの！ご一緒しましょう！！」
「・・・・はあ。」

またか？

これで今日は三回目だ。

さっきも、彼女達とは違う、別の女官達がそう言ってついてきた。
女官というのは、そんなに暇なのだろうか。
つーか、宦官よりも、女官の方が動き回りやすかったかな・・・？
もしそうなら、代わってほしい。
星蓮を探したいので、代わってくれ。

自分の後をついてくる女官達に、心の中で不可能な頼みをする星影。
そんな彼女をよそに、女官達は黄色い声を上げながら言った。

「あのぉ～林山様は、どんな女性がお好みですの？」
「好みの女性・・・・・・・・！？」

予想外の質問に、星影の歩みは遅くなる。それと同時に、彼女は上ずった声を出していた。

「なんでまたそんなことを・・・」

そう言いかけて、星影は気がついた。彼女達の目が本気だったから。

なんだなんだ！？
彼女達は、市場調査でもしてるのか！？
男が好きな女性についてでも！？

（もしそうなら、なんと答えればいいんだ？）

「そう言われましてもねぇ・・・。」

返事に困り、あいまいに笑って誤魔化す星影。
しかし、そんな星影の態度を女官達は許してくれなかった。

「林山様っ！真面目にお答えください！」
「そうですわ！私達、真剣に聞いているのですよ！？」

怒られてしまった。

「いや・・・だから・・・。」

女の私に、好みの女と聞かれても。

（答えようがない・・・・。）

女官達の言葉に、困り顔で歩を進める星影。
その後を追いながら、彼女達は質問攻めをしてくる。

「ほら、細い女性が好きとか、太い女性が好きとか。」
「えっ？」

そう言いながら、腕を絡ませてくる女官の一人。くすぐるように、なでるように絡まされた腕。突然のことに星影は、すっとんきょな声を上げる。

「あ、あの！？」
「やはり美人がいいですか！？それとも・・・・可愛いほうがお好きですか？」

別の女官により、反対側の腕も同じようにつかまれる。

腕の自由が奪われた。

「いいえ！優しい女性が一番ですわ。細かいところにも手が届くような！」

いきおいよく、後ろから手を伸ばされて抱きつかれる。

「だっあぁああああああああっぁ――――――――――――――――――！！！？」

（ヤバッ！！そこは胸ぇぇぇぇぇぇ――――――――――――――――――！！！）

触られたら、女だってわかるじゃないかっ！！

思ったと同時に、叫び声を上げる星影。
そんな宦官の反応に、女官達はクスクスと笑いながら言った。
「もぅ！林山様ったら、本当にお可愛いらしいんですねぇ～？これぐらいのことで照れたりして。」
「それとも女性の免疫がないのですかぁ？」
「め、免疫って・・・私は別に・・・。」
免疫もなにも、同性だし。
そう言いたいのを我慢して、下に視線を落とす星影。すると彼女達は、さらにとんでもない発言をする。

「「「「「でも、そういう初々しいところに、惹かれますわぁぁぁ～！！」」」」」

ウイウイシイ？

ヒカレル？

その言葉に、眉をひそめる星影。

え？なに？
馬車に轢かれるって？
それとも楽器を弾かれる？
まさか・・・戦の時の退かれる？

「ど、どういう意味で――――――――――？」
「ですからぁ～林山様は、お優しい上に魅力的で～」
「お姿もお心も美しくてぇ～！」
「行動的で、頼もしくてぇ！」
「私達女官が憧れ、夢中になるぐらいのぉ・・・・！」

「男らしいという意味ですぅ！」
「はぁぁぁぁ！！！？」

なんじゃそりゃぁあ！！？

女官達の言葉で、顔を上げる星影。そこには、目を輝かせながら自分を見る女達がいた。

「ちょ・・・みなさん！なにを言ってるんですか！？本気で、そんなことを言ってるんですか！？」
「いやですわぁ～冗談に聞こえました・・・？」
「違うんですか！？」

「「「「「本気ですっ！！」」」」」

声をそろえて言う女官に、星影はめまいを感じる。

「なにを言ってるんですか、みなんさん！？あのですね、私は後宮では卑しい宦官の身分ですよ！？私なんかに憧れるなんて、そんなの悪い錯覚で――――――――――――――！！」
「女官が宦官に好意を持つのはおかしいと、林山様はお考えなんですか？」
「当たり前でしょう！？玉無しの宦官と、陛下の私物である女官が――――――――・・・・！！戯れも、おやめなさいっ！！」

そう言って、強く叱った星影。対する女官達は、皆、呆気にとられていた。

（やば！きつく言い過ぎたかな・・・？）

内心、我に返って心配した星影だったが、その後の展開は、彼女の予想に大きく反していた。

「まあ、林山殿ったら。もしかして・・・何も知らないの？」

「知らないと申しますと！？」

なにかあるのだろうか。

疑問符が彼女の頭をめぐる。

「知らないのでしたら・・・私が教えて差し上げますわ・・・・！」

そう言ったのは、星影の右腕をつかんだ女官だった。視線をそちらに向ければ、彼女は妖艶な笑みを星影に見せる。そして、星影の頬を両手で包み込むように触れてきた。

わけがわからない星影は、相手の出方を知るため、相手の動きに文句を言わなかったのだが――――――――――――

「ちょっと！なにする気よ、このアバズレ！！」

「抜けがけはなしよ！離れなさい！」

「きゃ！？な、なによ！？」

途端に、甲高い声が響く。見れば、残りの女官達がいっせいに、星影から女を引き離しにかかる。しかし、それだけではすまなかった。

「なによ！私は親切で言っているの！！いざと言う時に陛下の前で粗相がないようにと～！！」

「そ、粗相・・・・？」

すでに十分と言えるほど、陛下には無礼を働いている。

今生きていることでさえ奇跡なのである。

「なにが親切よ！色目なんか使って。林山様は陛下のいい人なのよ！勝手なことしないでちょうだい！！」

「い、色目？いい人・・・？」

彼女達の会話は、だんだん喧嘩腰になっていく。そして内容もエスカレートしていった。

「それに林山様にだって、選ぶ権利があるわ！あんたは引っ込んでなさい！！」

「あ、あの君達、」

「そうそう！ここは私がぁ～」

「なんで貴方なの！？私の方が最適でしょう！？」

「いいえ、見た目で言えば、私よ！！この中で一番じゃない！？」

「ふぜけないで！！私が林山様の――――――――――――！！」

「お、おい！」

女官達にもみくちゃにされる星影。

そして、そのまま掴み合い、罵り合いの喧嘩を始める女達。

「頼むから喧嘩をしないでくれ！！」

てか、巻き込まれる方の身にもなってよ！！

星影の言葉を無視し、争い続ける女官達。
それを鎮めようと、静かにしなさい、喧嘩はよくない、と、注意する星影。
それでも、うるさく騒ぐ五人の女達。

（いい加減、人の話を聞けよっ！！！）

女官のくせに、人の話し一つ、まともに聞けないのか！？

普段から、人の話を聞かない星影に、彼女達を非難する権利はない。
しかし、本人がそのことに気づくことはなかった。

「だいたい貴方の場合は、林山様を使って陛下のお情けを頂きたいだけでしょう！」
「ひどい！誤解ですわ、林山様！私は純粋に貴方をお慕いしているだけで・・！」
「お、お慕い！！？」
「まあ、なんてずうずうしい！私のほうが林山殿のことを！」
「よく言うわね、この浮気者！安様、信じてはいけませんよ。貴方

様を本当に思っているのはこの私で、」

次第に距離を詰めてくる女官達。いつの間にか足は止まり、その場から動けなくなっていた。おまけに、窮屈なうえに身動きがとれない。

「ちょ、ちょっと！少し離れて・・・！」

「そうよ！離れなさいよ！」

「いや、彼女一人だけじゃなくて全員が――――――――――・・・！！」

そんな星影の声は、彼女達には届いていない。

その代わり、星影の我慢が限界に届きつつあった。

「痛い！引っ張らないで！」

「やめなさい！君！」

「やったわね～！？このアバズレ！」

「よしなさいって！」

「そういうあんたは淫乱でしょ！？」

「だから、」

「ふざけないでよ売女！！」

「いい加減に――――――・・・・」

「なんですって！？いい加減に――――！！」

「・・・するのは君達だぁ!!喧嘩はやめろぉぉぉぉ――――――!!!!」

自分の耳元で騒ぐ女官達に、たまりかねた星影は大声で怒鳴りつける。
そして、腕と体を振り回すと、怒気を込めて言い放った。

「テメーら、いい加減黙れって言ってんだろう!?耳元でぎゃーぎゃー騒ぎやかって!!お前ら女官だろう!?恥ずかしくないのか!?」

「り、林山様・・・!?」

「宮中ってのは、得れば れた人間が来るとこだろう!?人で物のでも動物でも!!その中で女官となれば、礼儀云々（れいぎうんぬん）はきちんとしてなきゃだめだろう!?それがなんだ!!この様は!!?」

「あ・・・それは、」

「世の男がどういう女が好きか知らねぇ!!でも、人の話も聞けないような奴は、男でも女でもろくでも大嫌いだっ!!自分の話ばかりで、相手の話を聞かない、他人を思いやれない自己中ってことだからだ!!」

「安様・・・・。」

「人目も気にせず喧嘩するなとは言わねぇが、誰かが話を聞いてくれっていってるときは、真面目に聞きやがれ!!それが教養のある女官の態度かっ!!?」

そこまで言い切ると、肩で大きく息をする星影。

「ご、ごめんな・・・さい・・・・！」

その言葉で、星影はハッとする。

「あ・・・。」

見れば、女官達は身を寄せて震えていた。
何人かは、床にうずくまっていた。その面々を見れば、星影の腕や背中にくっついていた女性達だった。どうやら、星影が体を動かした（？）ことで、跳ね飛ばされてしまったらしい。星影の側から離れた場所で、彼女達は自分を見ていた。その目は完全におびえていた。それに気づいた星影は、慌てて謝罪の言葉を述べた。

「いや・・・怒鳴って悪かった。頼むからそんなに怖がらないでくれ。」

それでもなお、体を寄せ合っている女官達。

（これでは私は悪者だな・・・。）

罪悪感を覚えた星影は、できるだけ優しい声で女官達に言った。

「それに喧嘩なんかしたら、せっかくの美人が台無しだよ。みなさん、男心をクス倉さえるほどの美姫ですから。私も危うく、惑わされるところでしたよ？」

軽く笑って見せる。すると、それまで張り詰めた表情をしていた彼女達の様子が一変する。

「すみません、林山様！！」
「どうか、私達をお許しください！」
「みっともない真似をしたことを、反省しております！」
「ご迷惑おかけいたしました！！」
「申し訳ございませんでした、安様！」

そう言って謝る彼女達の顔からは、何故か笑みがこぼれていた。

「いいよ。わかってくれたら。もう喧嘩はよしてくれ。」
「お約束しますわ。もうしません！」
「私も。」
「私もです。」

彼女達の反応に安心する星影。だから油断していた。

「ただ・・これだけは教えてください・・・・・・・・！！」
「なんだい？答えられる範囲なら答えるよ。」
「本当ですか！？」
「ああ。かまわないよ。」
「では――――――――――――――」

そう言って、顔を見合わせると、声をそろえて言った

「「「「「私達の中で、誰が一番のお好みですかぁ！！？」」」」」

「は・・・？」

「「「「「せめてそれだけ教えてください！！」」」」」

仲良く声をそろえて言うと、再び自分に詰め寄ってくる女官達。

その迫力によって、壁に追いやられる星影。
どうやら星影の微笑により、彼女達の“反省”の二文字は遥か彼方に飛んで行ってしまったようだった。

なんだよそれ！？
反省したんじゃなかったの！？

「林山様ぁ！！」
「私の安様っ！」
「私の林山様よ！！」
「いいえ！私ですよね！？」
「はっきり仰ってくださっていいんですよ！私だと！」

なんなんだよ！？
女官って、わけがわからない！！
言葉も通じないし！！
だ、誰か！

（助けてぇぇぇぇぇ――――――――――――――――――――！！！）

心の中で、星影が助けを求めた時だった。

「あいにくですが、林山にそんな暇はありません。」
「琥珀!?」

聞きなれた声がした。その方向を見ると、そこには王琥珀の姿があった。
彼は星影を取り囲む女官達を優雅に押しのけると、そこから彼女を救い出す。
そして、いつもと変わらぬ口調で言った。

「林山殿、すぐに戻るようにと陛下からの伝言です。」
「何!?本当か。」
「急いでください。遅れては大変なことになります。」

陛下からの命令。

あまり聞きたくはないが無視するわけにもいかない。
どうせこれも星蓮が見つかるまでの我慢だ。
それに、なにかあったのかも知れない。

「わかった・・・!では皆さん、私はこれで失礼します。」

呆気にとられている女官達を残すと、その場を後にする。早足で歩きながら星影は言った。

「琥珀が来てくれて助かった!それで、一体どこに戻ればいいんだ?今は朝の会議の時間ではないのか?」
「ああ。それが終わった後は、延年殿と酒を飲むそうだ。」

「は?延年殿と酒って・・・・・。まさかお前!」

星影の言葉に、悪戯っぽく琥珀は笑う。

「嘘に決まっているだろう、林山?」

シレッとした顔で普通に話す琥珀。

私も結構大胆不敵だが、こいつもかなり大胆不適かもしれない・・・・。

自分に語りかける友が、いつも以上にふてぶてしく見えた。

第五十八話　本日、女難の相あり（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

星影の宮中での日常です。ややこしい相手は、男性のみではないという話（笑）

それから、小説とは関係ありませんが、最近更新が遅くてすみません（大汗）
なんとか、２００８年８月８日にアップすることができました（苦笑）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第五十九話　何とかが歩けば、危険に当たる

類は類を呼ぶ。

優しい者の側には、優しい者が。
真面目な者の側には、真面目な者が。
ふてぶてしい奴の側には、ふてぶてしい奴が来るという。

「琥珀、いくらなんでもそれはまずいぞ。陛下の名を語ったとなれば重罪になる。」
「君が言わなければね。密告するかい？」
「いや、そんなことはないが、」

薄っすらとした笑いを浮かべながら問う、恩人・王琥珀。
これに対して、グッと言葉を詰まらせる安林山こと劉星影。
女官達に囲まれ、質問攻めを受けて難儀していたところを、琥珀に救われた星影。
助けてもらったまではよかった。

よかったのだが――――――――――

「陛下が、私を呼んでいるなんて嘘をつくのは――――――――――まずいだろう？」

自分を助けるための手口が問題だった。

そうなのだ。琥珀は友である自分を助けるために、ありもしない陛下からの呼び出しという名目を偽装したのである。

「それじゃあ君は、あのまま放置された方が良かったのかな？」
「いや・・・それは――――――――」
「しつこく迫ってくるご婦人方に、されるがままにされていた方がよかったかい？」

それは困る。

あのまま彼女達に、わけのわからないことを言われ続けてはたまらない。
言葉を濁す友に、琥珀は言った。

「返事が出来ないということは、助けてよかったと言うことみたいだな。」
「・・・・・すまない。礼を言う。」
「そうかしこまらなくていいよ。君も大変だね。女官に人気があるのも？」
「人気がある！？私がか？」
「なんだ、知らないのかい？今彼女達の間では、君の話で持ちきりだよ。『美少年宦官・安林山』として。」
「び、美少年・・・！？」

自分の顔が引きつるのがわかった。

（美少年・・・喜んで良いのか悪いのか。）

性別を偽っているだけに、複雑な思いになる星影。

「みんな君に気に入られたくて、なんとかお近づきになろうと必死なんだよ。だから、さっきみたいに積極的に誘うんだ。」
「馬鹿言うな！単にからかわれただけだよ。」
「へぇ・・・君はそう思っているんだ？」
「そうだよ！からかわれているとしか、考えられないだろう！？」
「じゃあ聞くけど、なんと言ってからかわれたんだい？」
「それは――――――・・・恋人にするなら、どんな女性が好みかとか。」
「で、どんな娘が好みなんだい？」
「そうだなぁ～やっぱり私は――――――・・・て！なに言わせんだよ！？」
「安林山の好みの女性。」

星影の問いに、涼しい顔で答える琥珀。

「そうじゃない！！なんで――――――！！」

女の私に、好みの女なんてことを聞くんだ!!?

「――――――――――――・・・・・・!!」

そう言いたかったが、喉まででかかった言葉を飲み込む。

「『なんで』・・・の、後はなんだい?」

「な・・・なんで!そんな馬鹿馬鹿しいことを聞くんだよ!?馬鹿馬鹿しい!!」

上手い言葉が見つからなかった星影は、馬鹿馬鹿しいと、何度も連発した。

本当のことを言いたかったが、言うわけにはいかない。

言ってしまえばそこで終わり。

女だとバレれば、自分だけでなく、妹やその婚約者である親友も終わってしまうのだ。

それを思い出し、苦虫をかみ殺したような顔で耐える星影。

その姿に、笑いこらえながら琥珀は言った。

「フフ・・・からかってすまなかったね。男がない者に、好みの女

性を聞くのは酷だった。」
「だったら聞くなっ！」

自分だってないだろうるが！と、不機嫌そうに言えば、琥珀は笑みを抑えながら言う。

「念のためだよ。男を捨てたのに、男としての欲が残っていては怖いからね？」
「欲もなにも、きれいさっぱりないんだから、いかがわしい真似はできないだろう！？」

（私は元から、ついてないけど。）

胸を張りながら言う星影。その言葉で、琥珀の笑みは消える。

「・・・君は、そう考えているんだ？」

意味ありげに言うと、そこで口を閉ざす琥珀。

「どういう意味だよ・・・・・・？」

嫌な予感がした。

また、聞いて後悔するような話なのか？
上ずった声で聞けば、琥珀は小さく首を振る。

「私が言いたいのはね、林山。女性問題に、巻き込まれないでほしいということだよ。」
「巻き込まれないよ！つーか、巻き込まれてたまるか！！ありえないよ、そんなこと！」
「自覚してないんだね。・・・己のことを。」
「十分自覚してるよ！私のどこに、女性に好かれる要素があるっていうんだ！？文官や武官でもない、宦官なんだぞ！？」
「武官でも倒せなかった賊に、勝ったじゃないか。」
「それとこれとは関係ない！」
「頼もしい男性は、すべての女性が好むじゃないか。」
「違う！私はそんなに頼もしくない！」
「そうだね。行き当たりばったり出動いた結果、たまたま成功してるだけだよね。」
「喧嘩売ってんのか！？テメェェェ――――――――！！」
「君の意見に賛同しただけじゃないか？」
「もういい、黙れ！！」

吼えるように怒鳴る星影と、耳をふさぎながらそんな相手を見る琥珀。

「びっくりするな、急に大声を出して。しかし・・・本当に君は、とても面白くて興味深い。女官達が騒ぐのも、無理はないね。」
「しつこいぞ、琥珀！」
「そんなに照れなくてもいいんじゃないか？女性に口説かれるなんて、男冥利に尽きるぞ。」
「・・・本当に変な奴だな、琥珀は！いくら身分が上がっても、男と女の中間に、女性がときめくわけないだろう！？」

「結婚相手としては、魅力的だと思うよ。」

「はぁあ!?結婚っ!?」

琥珀の言葉に、悪寒のような身の毛がよだつような、妙な感覚を覚える星影。

「・・・・・・毎度のことながら、やはり知らなかったみたいだね?」

「し、知らなかったって・・・まさか、おい・・・!?」

その先を尋ねる星影に、加虐的な笑みを浮かべる琥珀。

「男の機能がなくても夫婦にはなれる。ここでは珍しくないことだ。」

「ええ!!?」

「つまり、宦官と女官が夫婦になれるんだよ。」

「えええええ！！？」

夫婦になれる！？
宦官でも！？
宦官も結婚できるの！！？

「宦官も――――――――――結婚ができるのかっ！！？」

「出来るよ。」

目を丸くして聞く星影に、同じように目を丸くしながら答える琥珀。

「君は、そんな『当たり前』のことも知らなかったのかい？」

「あ・・・当たり前なのか！？」

新たな事実に、硬直する星影。

本当に後宮はなんでもありなのだな！

つーか、ある意味ここの方が、外よりも危険地帯じゃないか！　？

しかし、宦官でも結婚できるなら――――――――――――

（本物の林山を、宮中に送り込んでもよかったかも・・・・・・・・・。）

本人がいないのをいいことに、頭の片隅（かたすみ）でとんでもないことを考える星影。

・
・
・

「フェークシュンッ！！」

星影がそう考えた同じ頃、本物の安林山が高らかにくしゃみをしていたりする。

「・・・・風邪かな？」

無論自分の知らないところで、親友兼義姉がとんでもないことを考えていたことを、林山が知る由もない。

・
・
・

さてさて。縁起でもないことを考える星影だったが、本気でそう思ったわけではない。

多少、林山への腹いせもあったが、そんな馬鹿なことをさせるつもりはない。

だから、林山の振りをして宦官になったのだ。

星影にとって、林山も妹・星蓮同様大事な身内なのである。

「まぁ・・・ここではそれが常識だけどね。」

「常識って・・・・宦官の結婚が？」

「そうだよ。子供は出来ないが、自分の身内を養子にする場合が多いね。あるいは、子供を作ってから宦官になったりする人もいる。」

「そうなの！？」

「ああ。だから、親子で宦官というのも珍しくはないよ。」

「奇特な人もいるものだな・・・！宦官と結婚してくれるような娘さんがいるのか・・・！？」

「いたじゃないか。さっきまで君の周りに？」

「え？」

サッキマデキミノマワリニ？

「そ、それってまさか――――――――――――――――――――！？」

「そう、あの女官の方々だよ。」

「えぇぇえ!!?」

（あ、あの女官達が!?）

「じょ、冗談だろう!?」

「真実だよ。彼女達は、『君好みの恋人』になりたくて、いろいろ聞いていたわけさ。」

「それって、私と結婚したいがために・・・・か?」

「そうだよ。」

「そんな!それはつまり――――――――――愛に身体的な障害は関係ないってことか・・・・!?」

（知らなかった!宮中の女性は、精神的な愛を尊(とおと)む純情乙女達だったのか・・・!!）

欲望にまみれた愛の泥仕合(どろじあい)ばかりを見てきただけに、純粋な愛の形に一人感動する星影。

だが、所詮は幻想・・・彼女の早とちりだった。

「う～ん・・・中には、本気でそう思っている人もいるかもしれな

いが・・・・。」

渋るように言う琥珀の言葉で、幻想の世界から帰還する星影。

「え!?ということは――――――――・・・やっぱり、からかっていただけなのか・・・。」

「一人、二人は、本気でそう思っている人もいるかもしれないが・・・。」

「そっか、そうだよな～そんなことだと思った!」

「でも、大半は違うよ。たぶん君を利用しようと考えているんだろう。」

「利用!?」

宮中に来てからよく聞く言葉。それが琥珀の口より発せられる。

「利用って――――――ちょっと待てよ!私を利用して、いったいなになるというんだ!?」

「得になるから、君を利用するんだよ。考えてもごらん。周りから見れば、君は延年様と同じ立場の宦官。あわよくば、君を自分の虜にして、『陛下のお情け』を頂こうとする腹黒い者がいてもおかしくないだろう?」

「お情けって・・・・!?」

聞き慣れたくない言葉が耳に入る。

「そう、お情けだよ。身分はどうあれ、子を産めば、奥方様になるわけだからね。」
「つまり、私を出世の踏み台にしようってか！？」
「宮中で女性が生き残るのは、大変だからね～」
「詐欺じゃねぇかぁぁぁ！！」

前言撤回！！

純情の【じゅん】の字も、ここの女にはないということか！？

「まぁ、断定はできないけどね。ただ・・・はっきり言えることは、これから先、宮廷中の女官達が君の取り合いで争いが起こるということだよ。」
「そんな断定いらねぇよ！てか、なんで宮廷中なの！？大げさすぎるぞ！」
「大げさじゃないよ。君の噂は、かなり広範囲で知れ渡っているんだから。」
「馬鹿言うなよ！私はここに来て、まだ一ヶ月も経ってないだぞ！？いくらなんでも、話の伝わりが早すぎる！」
「残念ながら、伝わるのが早いんだ。元々宮中は、閉鎖的な上に、入ってくる情報も少ない。限られた話ししか入ってこないから、みんな新しい情報に飢えてるんだよ。だから、」
「だから？」
「君のような『変り種』の話は、良い話のネタになるんだよ。おか

しな話だよね、『種がない』のにさ？」

普通の者とは違う、変わった点のある人物を意味する【変り種】
種は種でも子を産むための元である【子種】
この二つをかけて話した琥珀。
言ってしまえば、言葉遊び。

「なに上手いこと言ってんじゃねぇよ、この腐れ馬鹿！！怒る気がそれたわっ！！」

笑いを取ろうとして言った琥珀だったが、相手は真っ赤な顔で怒るばかり。

「怒ってるじゃないか？」
「こ・れ・で・も、怒りが半減してんだよ！笑えない冗談言いやがって！！」

星影の言葉に、うけなかったか～と、ぼやく琥珀。

「いい加減にしろよ！変な予想ばっかり言いやがって！！」
「あのね、林山。私も、呪い師のような真似をするつもりはないよ。でもね、事前に本人がそれを知っていれば、いくらかの醜い争いを防げるじゃないか？」

「それ私のせい!?私のか!?つーか、宮廷の女性に問題があるんじゃないの!?」

「そういう気にされる君も、半分は悪いよ。ここに入る前に言われなかったかい?宮中での行動には気をつけると。」

「言われたけど、これは想定外だ!そこまで、知れ渡っているはずがないだろう!?」

そう言うと、大げさにため息をつく琥珀。

「惜しいかな・・・・林山。宦官ではなく、武官にでもなっていれば・・・。」

「その台詞、前にも聞いたぞ!とにかく、冗談はそこまでだ!!俺は女官達を誘惑するためにこんなところに来たんじゃないんだからな!!」

「では、何のために宮中へ?」

「なにって――――・・・へ、陛下のお側で働くためさ!!それ以外なにがある!?」

「・・・そうか。私はてっきり、他に目的でもあってきたのかと思っていたからな・・・・。」

「え?」

(まさか・・・・・・・・・・・・・・バレた?)

琥珀の言葉に、身の危険を感じる星影だが――――――――――

「出世したいのかと思ってた。」

その言葉で不安はかき消された。

「俺をそこらの欲物共と一緒にするな！！」

不安と入れ替わる形で、怒りが湧き起こる星影。

なにが出世だ！
驚かせやがった！！
大体、それが友達に言うことか！？
いや、それよりも――――――――――

（こいつは、そういう目で私を見てるのか！？）

そう思うと、憤慨、やるせない気持ちになる。
怒気を含ませながら、琥珀より一歩前に進む星影。そして、琥珀から離れるように歩き出す。

「待つんだ、林山！そんなに早く歩いては、人とぶつかるぞ。」

琥珀の注意を無視して、歩を早める星影。
そのまま廊下の角を曲がった時だった。彼女は勢いよくなにかとぶつかった。

「うわ！」

「きゃあ！！」

悲鳴に続いて、高い音が当たりに響く。それと同時に、星影は軽い衝撃を受ける。衝撃とともに、自分の上になにかが乗ったのを感じる。

「林山！どうした！？」

声と音を聞きつけ、琥珀も慌ててやってきた。

「大丈夫か、林山！それに――――――――――――――――お嬢さんも！」

お嬢さん？

その声で、星影は自覚する。自分は人と・・・お嬢さんというのだから、女性とぶつかってしまったのだと。視線を前に向ければ、目の前に一人の女性が座り込んでいた。
女性というよりは、少女と言った方が正しいかもしれない。

「す、すまない！よく前を見てい――――――――――――――！？」

そういいかけて、星影は口を閉じた。彼女の近くに粉々になった茶器が転がっていた。
どうやら彼女が運んでいたらしいが、その破片が彼女の衣服についていた。

（大変だ！破片で怪我でもしたら――――――――――――――！！）

「大丈夫かい！？怪我は――――――――――――――！？」

慌てて破片を払いのけると、少女を抱き起こしたのだが――――――

「きゃあ！？」
「痛っ！？」

相手は小さな悲鳴を上げると、思いっきり星影の手を叩く。
少女の肩を抱いていた手は、無常にも弾かれた。

「ちょ・・・ちょっと？」

（な、なんで・・・・！？）

救いの手を拒むの・・・・・・・・・・！？

呆気にとられる星影。一方少女は、それを見るなり、蚊の鳴くような声で謝った。

「あ・・・！？ご、ごめんなさい・・・・。」

「え・・・いや・・・」

親切で抱き起こしたのに、相手は真っ赤な顔で自分の手を払いのけた。
意味のわからない星影だったが、すぐにあることを思い出す。

（しまった！今の私は、一応男なんだった・・・・・・・・・・！！）

男性器を取り払ったとは言え、男は男。宦官といえども、男性という枠には入るのだ。
この時代、男女が手を触れ合うなど、はしたない行為の一つとされていた。

だから、少女の反応は当たり前のこと。
それに気づいた星影は、何度も謝った。

「申し訳ない。気安く女性に、あなたのような可愛らしいお嬢さんに触れてしまって・・・。」

優しく語りかけるような口調で言えば、少女は無言で首を振る。

「それより、お怪我はありませんか？大丈夫ですか？」
「は・・・はい。だ・・・大丈夫で――――――――・・・・！？」

そこまで言ったところで、少女の声は途切れた。
そして、真っ青な顔でガタガタと振るえはじめた。

「ど、どうしました？顔色が随分悪――――」
「どうしよう・・・。」
「え？」
「どうしよう・・・！どうしよう！！」

そう言った少女の視線は、壊れた茶器に向けられていた。

「す、すまない！私のせいで、茶器を割ってしまって・・・！」

少女に再度謝ると、茶器の破片を拾う星影。そこへ、琥珀が手伝いに入るのに、時間はかからなかった。破片を拾いながら、星影は改めて少女を見る。

内気だが優しそうな子供・・・といった感じだった。
見たところ、年はまだ十三、十四だろう。
顔形は整っており、大人になれば間違いなく美女になるほどの容姿をかねそなえていた。

「どうしよう・・・どうすればいいの・・・。」
「お嬢さん？」

少女を眺(なが)める星影の耳に、相手の声が届く。
そんな彼女が発した言葉は、星影を驚かせるのに十分だった。

「私・・・殺されちゃう・・・・・！」

「こ、殺される!?」

物騒な単語に、星影は相手を見る。そこには、恐怖に顔を引きつらせる少女がいた。

第五十九話　何とかが歩けば、危険に当たる（後書き）

最後までくださり、ありがとうございます・・・・（平伏）！！

余談ですが、小説中に出てくる【降嫁】とは、【皇族の娘、皇女が、皇族の籍から外れて、家臣などのところにお嫁に行くこと】を言うそうです。
上の身分から、下の身分の人のところに行くので、【降下】ともじって【降嫁】らしいです。
個人的には、ややこしいなぁ～と思います（汗）

※誤字や脱字がありましたら、ご連絡ください（土下座）

第六十話　聞き間違いに気をつけよう

物騒な単語に、星影は少女を見てから横目で琥珀を見る。
琥珀は無言でうなずくと、少女に声をかけた。

「それは・・・どういう意味でしょうか、お嬢さん？」
「え！？」

琥珀の問いに少女は顔をあげる。

「あ・・・あの、私・・・・私・・・！」
「お嬢さん、あなたは今、『殺される』と仰ったが・・・一体誰にです？」

琥珀の言葉に、少女は無言で首を振るばかりで答えなかった。

これはつまり――――――――――

「答えられない・・・のですか？」
「私、私・・・！」

時折（ときおり）、蚊の鳴くようなか細い声で、なにか言おうとする少女。
だが、それが言葉になることはなかった。
その様子を見るうちに、星影は相手の心理状況を理解する。

彼女は、【答えられない】んじゃなくて、【答えられる状況じゃない】んだ！

そう判断した星影は、素早く少女の前まで行く。
そして、視線を相手に合わせながら言った。

「大丈夫ですから、落ち着いてください。私の名前は安林山。最近、高級宦官になった者です。」

その言葉で、相手の震えはとまった。下に向けられていた視線も、星影の方へと向けられる。そこには、目を輝かせながら自分を見る少女がいた。

「安、林山・・・・！？も、もしやあなた様は――――――――賊から陛下をお救いした武烈（ぶれっ）宦官・安林山様！？」

「武烈？」

「は、はい！陛下を賊からお助けした武を極めた宦官武人！　香蛾（こうが）（仙女）のような美しさを持ち、文武に優れ、古今東西の数万の書物を学び、素手で虎を殺せるほどの豪傑とお聞きしています！！」

・・・・・・・・なんかすっごく、尾ひれがついてない・・・・？

そう思って、琥珀を見れば、あいまいな顔をして首を横に振るだけだった。

「いや・・・虎は素手では倒せませんが――――・・・・私がその安林山です。こっちにいるのが、私の友で同じ高級宦官の王琥珀と言います。あなたの名前は？」

「わ、私は・・・玲春（れいしゅん）、徐玲春（じょれいしゅん）と申します。」

「年は？」

「あ、はい・・・十四になります。」

「十四？」

三つも年下じゃない。妹よりも、空飛よりも幼い娘。

そんな子供を怖がらせるなんて、どういった相手だろう。

「玲春さん、私は宮中に来て日が浅い人間だが、あなたの発言に戸惑っている。」

「え？」

「茶器一つで殺されるなんて話、聞いたことがない。はっきり言って、そんな馬鹿な話はない！」

「安様・・・。」

驚いたように、声を漏らす少女。

「あなたの主が、あなたになんと言ったのかは知りませんが、それはきっと脅しですよ。壊さないように、脅しで言っただけです！本当に殺すわけが――――」
「・・・・殺されました。」
「・・・・・・・・・・はい？」
「殺された？」
「私の・・・・先輩に当たる方が、茶器を割ってしまい・・・・折檻の末に、殺されました。」
「はぁぁあ！？」
「だから――――――――私も、茶器を割った咎で殺されるのです！」

わっと、叫ぶとそのまま泣きはじめる徐玲春という名乗る女官。
あまりのことに、呆気に取られる星影。しかし、すぐに気持ちを切り替えると言った。

「落ち着いてください！仮にそうだとしても、君に責任はないよ！悪いのは、ぶつかってきた私なんだから！」
「いいえ！いいえ・・・！前を、前を見ていなかった私が悪いです！私が――――――――・・・・！！」
「違う！悪いのは私だ！」
「いいえ！私が――――――――」

「――――と、言うよりも！この事態をどうするか、協力して考えるのが先じゃないかい？」

激しく意見をぶつける星影と少女の間に、割って入りながら琥珀が

言った。

「どちらが悪いにせよ、茶器が割れてしまったことに変わりはないよ。」

「こ、琥珀・・・。」

「王様・・・。」

「そのためにも玲春殿、あなたにお聞きしたい。あなたの主はどなたです？」

「それは――――――――・・・・・・・・・」

「あなたのお話をお聞きする限り、あなたやあなたの主人が、ここの人間とは思えません。もしそうなら、茶器一つ、備品一つ壊しただけで、なぶり殺してしまうような気性の激しいお方を、私が知らないはずがない。」

「私がって・・・・そうは言っても、宮中は広いんだぞ？いくら物知りなお前でも、聞いたことのない、知らないことぐらいあるさ。」

「それはないね。」

星影の言葉を、即答に近い形で琥珀は否定する。

「宮中は確かに広いが、人の出入りは限られている。おまけに閉鎖的な場所だから、外に情報が漏れることなどない。だがその反面、そんな閉ざされた場所だからこそ、些細（ささい）な情報でもすぐに広がってしまう。ここの人間は、おしゃべりや噂話が好きだからね。」

最後の方は、少しだけ茶化すような口調で言う琥珀。そしてさらに言葉を続ける。

「それだけ気性が激しいとなると、仕える立場の私達は気をつけなければいけない。そうなれば、自然とそういう話は伝わってくるも

のだよ。特に、黄藩様あたりが、教えてくださらないはずがないじゃないか？」

「それも・・・・そうだな。」

あの意外と律儀な黄藩さ・・・殿が、先に釘を刺さないはずがない。

「じゃあ君は――――――――」

「・・・はい。王様が仰るとおり、私も主人も、宮中の者ではありません。」

と、琥珀の予想通りの答えを口にしたのだが・・・。

「ですが・・・私の主人は、元々は、ここのお方でございました。」

「え？」

ここのお方？

「それはつまり――――――――」

「元は、宮中にいた人間ということですか・・・・・？」

琥珀の問いに、少女は無言で頷く。

予想と反することを付け足す少女。

「ですから・・・どうか私のことはかまわないでください。そうしなければ、あなた方も・・・・」
「馬鹿なことを言うな！それならますます、放っておくわけにはいかないよ！」
「じゃあ、君はどうするつもりだい、林山？」
「決まっているだろう？私が彼女の君の上司にわけを話して、お詫びするだけさ！」
「ええ！？」
「詫びるって、林山・・・・！」
「誠心誠意で、直接謝罪に行く。そして、命だけは勘弁してもらうようにしてもらう！」

胸を張りながら、自信満々に言った星影。それに対して外野は、厳しい意見を述べる。

「い、いけませんわ！そんな！あなた様まで、殺されてしまいます！！」
「そうだよ。第一、元宮中の住人という高貴中の高貴なお方が、君に会ってくれるとは思えないぞ？」
「大丈夫だよ。大事な茶器の破片を手形に、お目通りを願えばいい。」
「相手を刺激してどうするんだい！？そんなことをしたら、そのまま処刑場に連れて行かれても文句は言えないよ？」
「引き返して、もう一度面会を求めたらいい。」

拳を前に突き出しながら言う星影。
その姿は、【いざとなったら、実力行使で押し入る】という彼女の意思を物語っていた。

「君は正気で言っているのかい!?もしそうなら、君の考えは無茶苦茶だよ!相手を挑発するようなことばかりじゃないか!?それが、謝罪に行く者の心構えかい!?」

星影の考えを察して、すかさず注意する琥珀。
これに対して星影は、なだめるような口調で言った。

「落ち着け、怒ると頭の筋が切れて早死にするぞ。とにかく!起きてしまったことは仕方ないじゃないか!?わざとじゃないんだし。謝ればわかってくれるさ。」
「なにを言っているんだ、君は!誠心誠意で謝って許してもらえるなら、玲春殿が、ここまえ取り乱すはずがないだろう!?」
「王様の仰る通りです!駄目・・・!駄目ですよ、安様っ!!謝ってお許しいただけるわけが――――――・・・!!」
「おいおい、ずいぶん物騒なことを言うね。君の主というのは、一体どういったお方なんだ?」

星影の問いに、徐玲春は声を震わせながら言った。

「・・・普段は、とてもお優しい方です。でも、一度お怒りを買ってしまえば――――許しては下さりません。」
「なんだから面倒な男だな。」
「違います。」
「え?」
「私の主は、男性ではありません。女性・・・御夫人でございます。」
「「夫人?」」
「はい。宮中から、名だたる名家に嫁がれ、今に至るのでございま

す。」

「つまり――――降嫁されたということですか!?」

驚いた様に琥珀が問う。それに、少女は頷く。

「降嫁って・・・琥珀。玲春さんの主人というのは――――!?」

「皇女ということになるね・・・。」

小声で言えば、相手も小声で返しえてきた。

嫌な予感がする。

「・・・・・玲春さん。」

嫌な予感がするが、聞かねばならない。

「良いにくいでしょうが、教えていただけませんか?」

話を進めるためにも、問題を解決するためにも

「君の女主人はどなたですか?」

聞かなければならない。

「・・・こう・・・様です・・・。」

星影の真剣なまなざしを受け、徐玲春の唇がゆっくりと動く。

「・・・・なに様ですか？」

少女が言った名前は聞き取れなかった。星影は出来るだけ優しい声を出しながら、再度問いかける。

「――――――――・・・様です。」

「はい？」

「――――――――平陽公主様です・・・・・！」

「平陽公主？」

平陽公主？

どこかで聞いたことが――――――――

平陽公主、平陽公主、平陽公主、平陽公主、平陽公主・・・・！？

「――――――――平陽公主ぅ！？」

「あの平陽公主、様か・・・・！？」

同時に叫ぶと、互いの顔を見合わせる星影と林山。

「「陛下の実姉・平陽公主様!?」」

「・・・・はい。私の主は、陛下の姉君、平陽公主様でございます。」

二人の問いに、はっきりと平陽公主は答えた。

「それじゃあ――・・・!君の、玲春さんの主とは、平陽公主様だったのか?」

「はい・・・。この度、衛皇后様のお加減が優れないとのことで、お見舞いのために宮中に参られているのです。私はそのお供として、参ったのですが・・・・」

彼女の声はそこで途切れる。

「玲春さん?」

「そ、それなのに・・・それなのに私・・・!お役に立つどころか、

お気に触れるような真似を・・・・！」

しぼり出すように言うと、肩を振るわせる。

「なに言ってるんだい！？失敗なんて、誰でもすることだよ！それに陛下の姉君なら、話せば許してくださるよ！」

あの気分屋の皇帝の姉。

おだてて、持ち上げれば、なんとかなるはずだ。

最悪の場合は、私が陛下に頼めばいい。

「だから泣かないでほしい。君のような良い子を、このまま見捨てることはできない！第一、茶器が割れたのは、私にも責任があるんだよ？」

「安様・・・！」

「君が悪いんじゃないよ、玲春さん。廊下を走って、君にぶつかった私が悪いんだ。」

「そんな！そんな、安様・・・！」

「ほら、もう泣いちゃだめだよ。絶対に君を死なせないから。いざとなれば、私が罪をかぶる。」

袖から布を取り出すと、それで徐玲春の涙を拭く星影。

「何故です・・・？」

「はい？」

「何故、私をそこまで庇って下さるんですか・・・・？」

戸惑い気味に問う少女に、あっけらかんと星影は答える。

「だって君は、悪くないじゃないか。」

「え？」
「殺されるような悪事なんかしていない。それに、」
「それに・・・？」
「君は優しい子だよ。私のとばっちりで、ひどい目にあわせたくない。」

そう。私が年甲斐（！？）もなく、廊下を走った結果、起こった事件。

「そうだよな？琥珀？」

廊下を走る結果になった人物に、威圧的な笑みを向ける。

「琥珀様は賢いから、必ず力になってくれるよ！」

怪しい集団を持ってるし。

不適な言葉と思考で、相手を見る星影。

「・・・・それは、遠まわしに脅してるのかい？」
「人聞きが悪いなぁ～琥珀様？」
「協力しないとするのでは、どちらがいいかわかっているよ。だだね・・・」

協力の意思を表明しながらも、言葉を濁す琥珀。

「なんだよ？」

「・・・相手が平陽公主様となると、陛下のお力でも納められないかもしれないよ？」

「「ええ！！？」」

星影の声と、甲高い悲鳴が重なった。

「な、なんだ！？」
「この声は・・・？」
「あ・・・！？」

驚く星影でも、琥珀でも、玲春でもない声。

「馬、馬様！？」
「え！？」
「ばあ・・様？」

自分の背後に向かって呼び掛ける少女。悲鳴にも近い声を上げる徐

玲春。
声のする方を見ると、一人の老女が立っていた。

「な、なんてことなの・・・・・・！！？」

肩を震わせる老女の視線の先には、粉々の破片があった。

「玲春！！お前はなんていうことをっ！！」

甲高い声を上げながら、徐玲春に接近する老女。
そして、手を振り上げる。

（ヤバッ！？）

老女の様子に、本能的に危機を察する星影。思ったと同時に、体が動いていた。

「おやめくださいっ！！」

徐玲春めがけて振り下ろされた手を、寸前で静止する星影。

「なっ！？」

「あ、安様！？」

驚く女性二人を交互に見ながら、星影は老女の方を見ながら言った。

「暴力はよくありません！おやめください！」

「なんですかあなたは！？関係ない人間は、引っ込んでいなさい！」

「いや、これでも関係あるんですよ！」

「関係ある！？」

「あなたこそ、彼女と関係あるんですか！？」

「ありますよ！小さい時からこの子の面倒を見ているのですよ！？」

「小さい時から！？」

再度、女性を交互に見る星影。

この老女がこの幼女の面倒をみていた？

（面倒を見たということは――――――――――）

相手の言葉に、一瞬返事に困った星影だったが、すぐに合点する。

（そうか！二人はそういう関係か！？）

自分なりに納得すると、老女に視線をもどす。その視線を受け、老女は厳しい口調で言った。

「早くこの手を離しなさい！こちらの問題に、他人が口を挟まないで頂戴！！」

「お怒りはごもっともですが、落ち着いて下さい、『ばあ様』！！」

「ば、ばあ様！？」

「叩いて問題が解決するわけではないでしょう、『ばあ様』！？」
「だ、だだだ、誰が『ばあ様』ですって――――――！？失礼なっ！！」
「失礼しました！お孫さんの話も聞かないで、いきなり叩くのはよくありませんよ、『おばあ様』！？」
「それも違います！『お』をつければいいというものではありませんよ！？誰がこの子の祖母ですか！？」
「え！？でも、『おばあ様』って言っていましたが？」

老女の否定を不思議そうに聞き返すと、視線を徐玲春に向ける。
老女が、徐玲春の祖母であると思い込んでの発言。
そんな星影の態度で、相手の勘違いを察する老女。

「それが違うのです！玲春は『馬様』と言ったのですよ！『ばあ』ではなく『馬』です！『馬』と書く！」
「ああ！それで『馬様』でしたか！？いやいや！失礼いたしました！」
「まったくです！なんなんですか、あなたは！？」
「これは申し遅れました。私は――――――」
「おや？あなたその服は――――――宦官・・・！？」

相手の問いに、行為を正しながら口を開いた星影だったが、老女の問いに遮られてしまう。
仕方がないので、相手の言葉を肯定しながら言った。

「そうです。私は宦官の、あ――――――」
「そういうことだったのですか！？」

星影の言葉がいい終わらないうちに、老女はその会話を終わらせる。

突然のことに、驚いて相手を見れば、不機嫌そうにこちらを見ていた。

「宦官ならば、名乗らなくて結構！馴染みの宦官は間に合っております。」

「はあ？」

「その方の魂胆はわかっておる。そこの女官の粗相をネタに、我らに取り入るつもりであろう？」

「取り入る！？」

「誤解です、馬様！この方は、そんな方ではありません！」

老女の言葉に徐玲春が声を上げる。

「なんですか、玲春！？この宦官は、お前の知り合いですか？」

「あ・・・その、知り合いというか・・・・」

「まさか・・・馴染みの宦官じゃないでしょうね？」

皮肉るような口調で言う老女の言葉に、少女は赤面する。

「違います！私、私はそんな――――――！」

「まぁ、それはどうでもいいですが。どちらにせよ玲春、お前は主の宝物を割ったのです。取り入る方法を間違えたのです。」

「ちょっと待った！」

老女の言葉に制止がかかる。

「なんなんですか、さっきから！？取り入る取り入らないとか！？馬様、あなたなにか、誤解をしていませんか！？」

「白々（しらじら）しい！お前がそそのかしたのでしょう！」

「そそのかすもなにも、私達は初対面ですよ？」

「初対面!?」
「さらに言うならば、茶器を割ったのは徐玲春さんではない!」
「え!?」
「この私です。」
「なんですって!?」
「私が、徐玲春さんにぶつかって割れてしまったんです。彼女に罪はない。」

突然の告白に、老女は大きく目を見開く。それは徐玲春も同じだった。

「な、なにをおっしゃいます!私が落として割ったのです!あなた様は悪くありません!」
「私が早足で歩いた上に、前方不注意で割ったんだ!君は悪くないよ!だから馬様!!」
玲春から馬と名乗る女性に視線をうつしながら星影は言った。

「罪があるとすれば、玲春さんではなく、この私です。だからどうか、彼女を罰しないでください!」
「安様!?」
「なんですと・・・・!?」

星影の言葉に目をまるくする二人の女性。

「林山・・・!」

それとは対象的に、額に手をあてて嘆く琥珀。呆れているようにも見て取れる。

しかし星影は、そんな友を気にすることなく、自分の意見を述べ始めた。

「だから玲春は悪くありません！罪に問うなら私を！」

「いけません！嘘ですわ、馬様！安様は悪くありません！罰するのでしたら、どうか私を！」

「それは違うよ、玲春さん。私が君にぶつかったんだ！その衝撃で、あなたは持っていた茶器を落とした。それで割ったとなれば、罪は私にあるはず！」

「なんと！」

「しかも、私の方が彼女よりも上背があるし、でかい。おまけに正面からぶつかっている。大柄な人間と小柄な人間が真正面からぶつかった時、どちらにふりか考えればーどちらに非があるかおわかりですよね？馬様？」

「それは・・・まことか！？」

星影の話にのまれ、徐玲春を問い正す老女。

この場合、気が弱い者や罪から逃れたい者はだれもが星影を肯定するだろう。

しかし徐玲春は、あえてそれを否定した。

「いいえ！違います！確かに…私は安様とぶつかりました。しかし、安様から私にぶつかったのではありません！その証拠に、私はぶつかった衝撃で、衝撃で・・・・・あ、安様の上に乗ってしまったのです・・・・！」

そう言うと、真っ赤な顔になる徐玲春。

「もしーーーーーーーー安様からぶつかったのでしたら、私ははじき飛

ばされてしまいますわ！安様の方が、私より上背もあって体が大きいのですよ！あるいは、安様が私の――――――上に・・・・・・」

消え入りそうな声で言う。

「だから安様に罪はありません！」

顔を上げた少女は、真顔で続ける。

「ですから、この方は関係ありません！私を罰して下さい！」

そんな徐玲春の言葉に、すぐさま星影が反論した。

「なに言ってるんだ！？君は悪くない！！」

「私が悪いのです！」

「いや、私だ！」

「私です！」

「私だ！」

こうして、第二次庇いあい戦をはじめる二人。

普通では、宮中という場所ではありえない争い。

この光景に、若い二人より長く生きている女性は呆気に取られ、麗しい宦官は呆れ返る。

「「だから悪いのはー！！」」

「どちらでもかまいませーん！！」

一番大きく叫んだのは、馬と名乗る老女だった。

「いい加減にしなさい！なんなんですか、その茶番は！？騒々しい庇いあいは！？」

「茶番なんて・・・そんな、馬様・・・！」

「こっちは真剣にしてるんですよ！？それを茶番とは、あなたの方こそ無礼でしょう！？」

「下世話な宦官がえらそうに言うでない！お前の振る舞いの方が、はるかに無礼なのですぞ！？」

「下世話って、あなたね――――――！」

「お黙りなさい！いらっしゃい、玲春！！」

そう言うと、少女の手を掴む。

「ちょっと！玲春さんになにを――――」

「――――――心配しなくていいですよっ！あなたも、一緒に来ていただきますからね・・・・！？」

意味ありげな笑みを浮かべると、強引に星影の腕も掴む。
星影の反論する隙を与えることなく、さっさときびすを返す老女。
こうして、馬と名乗る女官に引きずられていく若い女官と宦官。

ただ、そこにはいるはずの星影の友は、何故かその場から姿を消していた。

第六十話　聞き間違いに気をつけよう（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました・・・！！

小説に関する小話なのですが、話の中で出てきた『降嫁』とは、『皇族の女性・皇女などが結婚されて皇族の籍を抜けること』を言うそうです。日本で言えば、紀宮様（現・紀子様）がそうなります。小説とは関係ないのですが、秋篠宮親王のご息女、眞子様が一部のAボーイ（秋葉系男子）の方々に人気だそうです。紀子様が好かれているというのは知っていましたが、「眞子様まで!?」と、かなりびっくりしました（苦笑）個人的にルパンが好きなので、紀子様は好きでしたが・・・つくづく、『萌えの文化』は深いと思いました。

最後になりましたが、よろしければ小説の感想を、教えていただけると嬉しいです（照）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十一話　誇張（こちょう）噂（うわさ）はお断り！

部屋の奥には一人の婦人が座っていた。
見た目からして、馬と名乗る女性よりは若かった。
しかし、自分よりはかなり年配の女性。
そんな相手を一目見て、星影の警戒心は深まった。
なぜなら、女性の眼光からはただならぬ風格が漂っていたからだ。

「遅かったのぅ。なにをしておったのじゃ？」
「遅くなって申し訳ございませんでした。」

高めでありながら男のような力強い声。
二人のやり取りを見て星影は確信した。

目の前にいる女性こそが、

「――――――――――平陽公主様。」

――――――――――皇帝の姉・平陽公主だと。

馬と言う女性に引きずられて、ある部屋の前に連れてこられた星影と玲春。

そして、強引に部屋の中へと押し込められる。
連れて行かれた先は、豪華な品が埋め尽くされた部屋。
その中央に、美しく着飾った中年の女性がいたのだ。

目だけで玲春に問えば、相手も目で答える。

この人が、平陽公主だと。

平陽公主様の視線は、馬と名乗る女性から星影達へと移った。

「なんですか、瞭華(りょうか)？その宦官は。」

自分を連れてきた老女に問う元・皇女。

（瞭華(りょうか)？）

聞き覚えのない名に、一瞬思考を停止する星影。だが、すぐに理解した。

（『瞭華(りょうか)』とは、馬様の字(あざな)か。）

意外にも可愛い名に、小さく笑う星影。しかしその笑いを、本人は見逃さなかった。

「無礼ですぞ！平陽公主様の御前で！」

「あ、すみません。」

しかりつける相手に、反射的に謝る星影。

それを呆れ顔で見ながら、馬瞭華(ばりょうか)は言った。

「申し訳ございません。本来ならば、このような下賤を、平陽公主のお目に触れさせるのは、心苦しいのですが・・・」

こっちだって、見てほしくないよ。

（つーか、どうしてここの人間は、初対面の相手に『下賤』を連発するんだろう。）

馬瞭華の言葉に、怒りと疑問を感じる星影。
そんな彼女の思いをよそに、話の本題は進んでいく。

「それで？この宦官をわらわに見せる理由・・・・・？」

そこで平陽公主の言葉が途切れた。
その目が、なにかに気づいたようなものへと変わる。

「おや、玲春ではないか。」

平陽公主の視線が、星影の隣にいた玲春へと向けられる。

「どうしたんじゃ？宦官と仲良く並んで。」

それまでの強い口調が、柔らかいものへと変わった。
平陽公主を見れば、その目元が少しだけ緩んでいた。

“普段は、とてもお優しい方です。”

玲春の言葉が頭をよぎる。

（確かに・・・玲春さんには、身近な者には優しいみたいだな。）

そんなことを考えながら、目だけで少女を見る。
そこには、平陽公主の言葉を受け、対応に困っている玲春がいた。
だがその体は、恐怖によって小刻みに震えていた。

「玲春さん。」

怯える少女を放っておけず、気遣いの声をかける星影。
そして、妹にするように、その手を両手で握ってさすってやった。

「あ、安様!?」
「・・・・私がいるから大丈夫です。あなたは、なにも心配しなくていい。」

暖めるように、優しく玲春の手を握る。

（・・・小さい。それに冷たい手だ。）

緊張のためか、恐怖のせいか。玲春の手はひどく冷たかった。

（星蓮も、こんな風に震えているのだろうか?）

星影の中で、玲春と妹・星蓮の姿が重なる。
それと同時に、ひどく悲しい気持ちになった。
未だに、妹を見つけられない自分。
己の不甲斐なさに、情けなくも悔しくなる。
それはまるで、相手の体温を通して、不安な気持ちが伝わってくるようだった。

しかし、それに同調するわけにはいかない。

（どうなるかわからないが、この子は私が守る・・・・・！器一つのために、人一人を殺させるものかっ！）

決意を新たにし、目の前の人物へと視線を向けた。

少女を守るために、己を奮い立たせた。

「フフ・・・。」

これに対して、上座にいる婦人は色めいた声で笑う。

「なるほどのぅ・・・。瞭華、そうならそうと言わぬか。」

「平陽公主様？」

「そうか。玲春も、そのような年頃になったか・・・。」

「年頃？」

（なんの年頃だ・・・？）

意味がわからず、少女を見る星影。

しかし玲春も、その意味がわからないらしく、小さく首を横にふった。

「お、恐れながら平陽公主様、おっしゃっている意味がわからないのですが・・・？」
「とぼけるな、瞭華。真面目なお前からすれば、こういうことは、わからぬ感覚かもしれんがのぅ。」
「わ、私にわからない感覚でございますか・・・？」
「玲春、なかなか見栄えのよい者ではないか？お前も面食いのようじゃな？」
「へ、平陽公主様・・・？」
「ホッホッホッ！しかも、仲良く手をつなぐなど、初々しいではないか？」
「初々しい・・・・・？」

ここでも初々しい！？

高貴な婦人の言葉に、眉をひそめる星影。
同じように、困った顔の玲春と顔を合わせながら平陽公主の言葉の意味を思案した。

「ごらん、瞭華。あのように仲が良いのだから、そう目くじらを立てて怒るでない。」

怪訝（けげん）な表情の老女を諭（さと）すと、薄っすらと目を細めながら平陽公主は言った。

「まだまだ子供と思っていたが・・・玲春、なかなかよい相手を選んだではないか？」

「平陽公主様!?」
「わ、私のあ、相手!?」
「てっ・・・・・・・・・私?」

ニコニコしながら、自分を見る平陽公主。
己を指差しながら問えば、そうじゃ、と短く答えた。

「女官と宦官の恋、わらわは良いと思うぞ。」

「え・・・?」

「珍しいことではないからのぅ。宦官と女官が恋人同士になるのは。」

にょかんとかんがんがこいびと?
こいびと
コイビト
恋人
恋人・・・?
え?え!?恋人って・・・?恋人!?
え?それって・・・!?
え?え?え?えぇえええ――――――――――――――――――!!?

“宦官と女官が夫婦になれるんだよ。”

星影の中で、琥珀の言葉がよみがえった。

「「わ、私が」」

「玲春さんの」
「安様の」

「「恋人ぉぉぉ――――――――――――!!?」」

平陽公主からの言葉を受け、強い衝撃を受ける馬瞭華と徐玲春と・・・安林山こと劉星影。
動揺する三人をよそに、上機嫌で女主（おんなあるじ）は言う。
「そんなに照れなくてもよいではないか?愛いやつじゃのぅ、玲春。わらわに、自分の恋人を紹介して、認めてほしいとは・・・可愛いところがあるではないか?そう思わぬか、瞭華?」
「へ、平陽公主様!それは!!」
「見た目も良いし、玲春にも優しいようじゃ。宦官というが少々難点ではあるが、わらわは認めても良い。」

「み、認めるって!?あの・・・!」

相手がなにを思い、なんと発言しているのか認めたくない。
認めたくはないが、聞かなくてはいけない。
聞いて確かめて、誤解しているようなら、その誤解を解かなければいけない。

星影の問いに、真剣な表情で平陽公主は告げた。

「お主を、玲春の恋人として、認めても良いということじゃ。」

「「平陽公主様――――――――――――――――――っ!?」」

やっぱ、誤解してるじゃ――――――――――――――――――ん!?

女二人の叫びと、宦官の心の声とが重なる。

（琥珀・・・・どうやら私は、玲春さんの、女官の結婚相手と誤解されているらしい。）

友の言葉を思い出しながら、硬直する星影。
その横で、慌てふためきながら少女が叫んだ。

「誤解でございます！平陽公主様！わ、私とこちらの方は、そ、そっそ、そんな関係ではありません！」
「そうでございます！私がこの宦官を連れてきたのは、そのような浮かれ話をするためではありません！！」
「違うのか？玲春に恋人ができ、その相手をわらわに認めてもらうために、瞭華を通して連れてきたのではなかったのか？」
「違います！わ、私・・・恋人なんて、そんな！」
茹(ゆで)ダコのようになった女官に、つまらなそうに女主(おんあるじ)はぼやく。

「なんじゃ、違うのか？まぁ、玲春の性格を考えれば・・・・・・・・まだ早いかのぅ。恋人を紹介すると言うのは。」
「平陽公主様ぁ！」
「ホッホッホッ・・・そう照れるでない。のんびり気長に待ってあげるから、早くいい相手を見つけてなさい。そして一番に、わらわの前につれてくるのですぞ？」
「平陽公主様・・・・！」
「お前は、わらわが一番目をかけている女官じゃ。だからこそ、変な虫に持っていかれぬか、心配でならぬ。」
「そんな！もったいないお言葉でございます・・・・・！」
「それならば、早く良い女になれ。男から、引く手数多の良い美姫(びき)になっておくれ。それが、お前にとって、女にとっての一番の幸せになるのじゃよ？」

優しい声色で告げる平陽公主。
その言葉を受け、嬉しそうに顔をほころばせる玲春だったが――
――――

「・・・・・・・私は、平陽公主様が望まれるような人間ではありません。」
「なに？」
「・・・・・・・・それ以前に、私は、良い女性になれる資格も寿命もありません。」
「どういうことじゃ？」
「その意味をご理解いただくためにも、こちらをご覧くださいませ、平陽公主様。」

玲春の代わりに、瞭華が主の問いに答える。
彼女は懐から布を取り出すと、それを恭しく平陽公主の前に差し出した。

「こちらの品に、見覚えがございませんか？」

その声と共に、布の包みが解かれる。

「なんじゃ？」

怪訝な表情で、その中を覗き込む平陽公主。

（なにをする気なんだ？）

星影も、そっと布の中へと視線を移した。

「わらわになにを見せたいのじゃ、瞭華？その布の中に、な――――――・・・・！？」

先に中を確認していた主の表情が固まる。

「そ・・そそそ・・・それは――――――――――！！？」

（茶器の破片じゃないか！？）

平陽公主同様、星影も中を見て絶句した。

布の中には、茶器の破片があった。

先ほど、星影と玲春の不注意で割ってしまった平陽公主が大事にしている茶器。

その一部を、いつの間にか拾っていたらしい馬瞭華。

老女のすばやい動きに感心する星影。

しかし事態は、星影の思いとは裏腹に緊迫していた。

「そ、それはっ！まさかわらわの――――――・・・・！？」

「はい。平陽公主様の茶器でございます。」

先ほどの星影達と逆転する形で、強い衝撃を受ける平陽公主。

「な、なんということを！？わ、わらわの！わらわの茶器が、何故・・・・・！？」

「玲春に、平陽公主様の大事な茶器であるので、大事に扱うように命じたのですが。」
「れ、玲春が割ったのか！？」

「違います！！」

とっさに、声を上げる星影。

「なにが違うのじゃ・・・・・・・！？」

声を出して、少しだけ後悔する。

星影の経験上、こういった場合の相手の反応は決まっている。
真っ赤な顔で怒り、声を荒げて攻め立てる。
あるいは、鬼のような形相でにらみつける。
暴言を吐いて、罵ってくる。
そう決まっている。
決まっているのだが――――――――――

「なにが違うのじゃ・・・・宦官？」

顔色を変えることなく、まっすぐ自分をにらむ女性。
その眼力が、並ならぬもの。

（武人が放つ殺気に近いな・・・・！）

一般人とは違う、何かを感じ取りながら星影は思う。

（あの陛下の姉だと思って、のん気に構えていたが・・・・その考えは誤算だったかもしれない。）

己の認識の甘さを反省する星影。

そうは思ったが、気圧（けお）されるわけにはいかなかった。

「突然の無礼をまずはお詫びします、平陽公主様。お詫びした上で、恐れながら申し上げます！茶器を割ったのは、玲春さんではありません！」

「では、誰が割ったというのじゃ？」

「この私が割りました！！」

「お前が！？」

星影の言葉に、怪訝そうな顔をする平陽公主様。

「平陽公主様が大事にされている茶器を割ったのは、玲春さんではなく、私です！廊下を走っていた私が、玲春さんにぶつかって割れたんです！」

「あ、安様！」

「私が割ったというのに、馬様は信じてくださいませんでした！玲春さんに罪はありません！ですからどうか、私だけを罰してください！」

「い、いけません！そんな――――――」

「お前が、玲春の代わりに罪をかぶると？」

玲春の言葉をさえぎるように、平陽公主が問う。

「その小娘の代わりに、死罪になるというのか？」

「代わりもなにも、玲春さんには罪はありません。私のような大おん・・大男が、小柄な彼女とぶつかれば、どんなに守り抜こうとも、茶器は壊れてしまいます。」
「ふむ・・・道理に合うな。」
「そ、そんな！違いま――――――」
「なにが違うのじゃ？」

星影を庇おうとした玲春だったが、平陽公主の鋭い視線に口ごもる。まさに、【蛇ににらまれた蛙】状態だった。

「あ・・・・。」
「なにが違うのじゃ？」
「・・・・。」
「何故答えんのじゃ？」
「・・・・。」
「なにか言わぬか？お前の口は飾りか？」
「・・・・。」
「答えぬか！黙っておればよいというものでは――――」

「答えたくても、そんなに一方的に言われたら、返事ができませんよ！」

見かねた星影が助け舟を出す。

「だだでさえ、ご大層なご身分のあなた様のお側に仕えているのです！そんなに攻め立てられては、ますます何も言えなくなりますよ？」
「お前・・・わらわに口答えをする気か？」
「口答えなんかしていません。事実を述べているだけです。」
「それが口答えだというのじゃ！」

玲春のことを思って出した星影の助け舟は、あえなく撃沈する。
それも、相手の怒りをあおる形で。

「瞭華！この無礼な宦官は何者じゃ！？」
「はい・・・それが。」

主人の問いに、ばつが悪そうに言葉を濁す馬瞭華。
その様子に、あることを思い出す星影。

（そういえば・・・馬様には、名乗ってなかったな・・・。）

名乗ろうと思えば名乗れた。
しかし相手の突然の登場に、自己紹介しそびれていたのだ。

（説明していないんだから、説明できるはずがない。）

玲春には名乗ったが、馬瞭華には名乗っていない。
だから、馬瞭華は平陽公主に説明などできない。

「瞭華、この宦官はなんじゃ？答えぬか。」
「は、はい・・・。」

（怒る主人相手に、『わかりません』と答えるのだろうか？）

星影の中で、小さな疑問と意地悪な心が芽生える。

気性の激しいという平陽公主に仕える老女が、どのようにこの場を切り抜けるのか見たくなった。

眼力のみで、星影に合図する老女。
名乗りなさい、と、無言の圧力をかける馬瞭華からの命令。
星影はそれを――――――――――

（知～らないっと！）

無視した。

馬瞭華からの視線。
自分を見ているのはわかっていた。
わかっていたが、穏やかな表情を作る。
そして、目線を下に向ける。

見てみぬふりをしながら、馬瞭華から自然に視線をそらす星影。

この態度には、本人も横にいた玲春も動揺した。
普通に考えても、宦官・安林山と平陽公主付きの女官・馬瞭華では、後者の方が身分が上。
そんな馬瞭華からの命を無視するなど、ありえないことなのだ。

「あ、安様・・・！」

小声で玲春が言う。

「なにをなさっているのですか？どうか、名乗ってくださいませ・・・！」

「まだ、平陽公主様と馬瞭華様がお話の途中じゃないか？」

「ですが、馬様が、」

「なにも言って（・・・）ない（・・）よ、玲春。ここはお任せしよう。」

にっこりと少女に笑いかける星影。

宮中に入ってから、確かに無礼なことはしてきた。

実際に、無礼と言われてもおかしくない。

無礼者なのは事実だから。

「瞭華、この者の名と身分は？身に着けているものからすれば、高級宦官のようではあるが？」

「あ、はい・・・それは、」

名乗らない宦官のおかげで、主に攻め立てられる老女。

（この状況をどう切り抜けるの？）

期待しながら、聞き耳を立てる星影に馬瞭華は盲点をついた。

「・・・私よりも、玲春の方が詳しいと存じます。」

「なに？」

「玲春、平陽公主様にご説明しなさい。」

そうきたか！？

年齢と経験は同じ年数とは言うが、なかなかこの女も侮れない。

相手を冷静に分析しつつ、問われた玲春に視線を送る。

「あ、あの・・・。」

「玲春、その宦官は何者じゃ？」

「早くご説明しなさい、玲春！」

星影からの視線と、平陽公主と馬瞭華からの言葉で、混乱状態に陥る少女。

どうすればいいのか、わからなくなっていた。

「わ、私・・その・・・！」

「玲春！」

「早くお答えしなさい！」

「あ、も、申し訳ありません・・・！」

悪戯心はここまで。

これ以上、玲春を困らせるわけにはいかない。

だから、星影は口を開いた。

「それには及びません。」

そう告げて、玲春から手を離す星影。

「自分の名と身分ぐらい、名乗れます。」

少女を庇うように後ろに下げながら星影は言った。

「平陽公主様、度重(たびかさ)なるご無礼をお詫びいたします。私は、最近高級宦官になった者で、安林山と申します。」

「安、林山・・・・じゃと・・・・!?」

「平陽公主様!あ、安林山とは・・・まさかあの――――――――!?」

名乗った瞬間、二人の態度が一変した。

「お前が弟を・・・陛下をお助けした噂の宦官か・・・・!?」

「は、はい、そうですが・・・・?」

噂?噂って、玲春さんが言っていたあの噂のこと?

先ほど聞いた話を思い出す。

陛下を賊から助けた宦官武人だとか言われている・・・あれか？
私を　香蛾（仙女）のように美しく例え、素手で虎を殺せるとか、
数万の書物を読破してるとか、いい加減な噂のことを言っているのか？

（この人達も、そう思っているのかな？）

そう思った星影あったが、その予想はあっさりと外れる。

「玲春、この者が『あの』安林山殿なのですか！？」
「『殿』！？」
「あ、はい・・・そうでございます。」

玲春の言葉を受け、すぐさま平陽公主に向かって叫ぶ馬瞭華。

「間違いございません、平陽公主様！この者が、『あの』安林山殿にございます！」
「なに！？この宦官が『あの』安林山か！？」
「あの、『あの』って、どのですか？」
「本当にお前が、『あの』安林山か！？」
「いえ、ですから、『あの』って、どういう意味ですか？」
「本人だと思われます、平陽公主様！この宦官の姿を見る限り、聞いた話と一致いたします！」
「え？話って・・・？」

戸惑う星影の前、馬瞭華はきっぱりと言った。

「この者こそ、再び陛下をお守りするために、天界から現世に舞い戻った、霍去病(かくきょへい)将軍の生まれ変わりでございますよ！」

「生まれ変わりぃ！？」

老女の言葉に驚愕する星影。それに対して、女主は頷きながらつぶやく。

「そうであったか・・・・！これが噂の去病の生まれ変わり。弟の、陛下の身を案じるあまり、急いで現世に戻ってきたという忠義者か・・・！」

「なんですかそれ！？誰が霍去病の生まれ変わりですか！？」

「それだけではございません、平陽公主様！生まれ変わる際に、陛下のお目を喜ばせるために、陛下好みの美しい香蛾(こうが)（仙女）になって戻ってこられたそうです！武烈宦官でございます！」

「間違いないのだな、瞭華！？美少年好きの弟のために、弟好みに生まれ変わってきたのが、この安林山なのじゃな！？」

「いやいや！私と霍去病将軍は無関係ですから！つーか、そんな気遣いしてませんよ！それ以前に、生まれ変わりじゃありませんから！！！」

「左様でございます、平陽公主様！本来なら、女性として生まれるはずが、手違いで男に生まれてしまったそうでございます。」

「その話はわらわも知っている。仕方がないので、わざわざ男のものを切り落として、宮中に入ってきたそうじゃが・・・それには裏があったそうじゃのぅ？」

「はい！意地汚い、匈奴の策略だったのでございます！すべて、匈奴が・・・！」

「え？きょ、匈奴・・・・？」

突然出てきた異国の民族の名前に、虚をつかれる形になる星影。
一見、自分と関係なさそうな単語を、憂いをこめた表情で女達が語り始めた。

「本来なら・・・・霍去病将軍は、武官として陛下に再びお仕えするはずでした・・・！それが生前、霍去病将軍によって倒された折蘭王、盧侯王が恨みを晴らすために先に生まれ変わり、恐れ多くも霍去病将軍の男性を傷つけたのです！」
「はあぁあ！？」

（なにそれっ！？）

まったく身に覚えのない話。固まる星影の前で、更なる物語を彼女達は口にする。

「折蘭、盧侯めっ！産婆として生まれ変わって復讐するなど、まさに不意をつくやり方じゃ。いいや、卑しくも卑劣なやり方じゃ！おかげで去病は、武官ではなく、宦官になるしかなかったのだからな・・・。」
「私は悔しゅうございます、平陽公主様！腹黒い匈奴の策略で、霍去病将軍が辱めをお受けになったことが・・・！」
「よさぬか、瞭華！折蘭、盧侯の二王にしても、最後は去病が天帝から授かった『裁きの剣』によって、誅（ちゅう）されたのじゃから。」
「ちょ、なんなんですか、その話！？『裁きの剣』って、なぁに！？だれから聞いたんですか！？」

ここまでくると、大げさな作り話ではすまない。
笑ってすませる範囲を超えていた。

「ですが、匈奴の執念は只事ではありません。恨みを持った匈奴の

共が、賊として生まれ変わって陛下を襲われたのですから！」
「ふむ・・・まさか数日前に弟を、陛下を襲った賊が、匈奴の生まれ変わりであったとは・・・！道理で、宮中に忍び込めるわけじゃ。」
「数日前って・・・え？」
「死霊となった同族と共に、宮廷兵を殺し、弟まで殺そうとした・・・。しかし、弟が、漢帝国の皇帝が死ぬことはなかった。」
「はい！それを撃退したのが、ここにいる霍去病将軍の生まれ変わり、安林山殿です！安林山殿は、陛下を襲った賊をことごとく皆殺し、息のある者も容赦なく嬲り殺したそうでございます！」
「本当になんですか、それ！？やってませんよ！つーか、そんな恐ろしいことしてないですよ！」
「ホッホッ・・・知っておるぞ。取り残された賊共を、陛下に害をなした悪漢とし、生きたまま素手で皮を剥いだそうじゃのぅ・・・？」
「その上、陛下のために素手で虎を殺し、その毛皮と肉を贈ったそうでございますよ！賊にしても、安林山殿の強さに恐れをなし、命からがら逃げ去ったのですから・・・！」

なんかすっごく、尾ひれがつきすぎじゃない！？

そう思って、玲春を見れば、

「そうだったんですか・・・！？私、知りませんでした・・・！」

目を輝かせながら言う始末。

だぁれ！？そんなめちゃくちゃな噂を流したの！？
それじゃあ、ただの化け物じゃんか！？
尾ひれがつくにもほどがあるだろう！？

怒りを通り越し、疲れのような者を感じる星影だった。

第六十一話　誇張（こちょう）噂（うわさ）はお断り！（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

小話なのですが、小説の中に出てきた「折蘭王」・「盧侯王」とは、霍去病将軍が、「驃騎将軍」になった年の春に、出兵した先で討ち取った王様達のことです。その際、兵士などを含めた八千余の首級を上げたそうです。さらに、その年の夏の出兵では、三万余の首級を上げて、小月氏の国まで攻めていったそうです。これにより、匈奴の「渾邪王」が漢に投降し、匈奴は急速に衰退していったのでした。このような活躍から、当時の民衆は霍去病将軍を支持したみたいです。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十二話　人間、思い切りが大事。（前書き）

新年明けましておめでとうございます。
８６日にわたる長期連載停止をしてしまい、申し訳ありません・・・
（大汗）！！
今年も、『破天荒列伝』をよろしくお願いいたします（土下座）！
！

第六十二話　人間、思い切りが大事。

少女が星影に見惚れる一方で、平陽公主は馬瞭華に問うていた。

「それで瞭華、どこから安林山を連れてきたのだ？」

「私ではなく、玲春でございます。」

「玲春が？」

平陽公主の美しい眉が釣り上がる。

「どういうことじゃ、玲春？」

「あの、それは――――」

「まさか、お前、安林山の恋人になったのか！？」

「違います！私と玲春さんは恋人じゃありません！」

玲春の代わりに星影が答える。

「陛下を助けたという点のみは、仰る通りの安林山です！」

弁護と共に、誤解を解きにかかる星影。

「霍去病将軍の生まれ変わりとか、陛下好みに生まれ変わってきたとか、賊を惨殺したとか、素手で人の皮をはぐとか、虎を倒すとか、そんなこと出来ませんから！それらは間違いです！！」

「では、お主と玲春の関係はなんじゃ？」

宦官の言葉を受け、訝（いぶか）しそうに女主は聞く。

「それはこちらでございます。」

そう言って、馬瞭華が先ほどの破片を見せる。
彼女のこの行動により、話は元へ、緊迫した空気へと戻る。

「・・・・・・・瞭華。」
「はい。」
「・・・・・認めたくはないが、これは・・・・。」
「はい。平陽公主様が大事にしていた器物(きぶつ)でございます。」
「これが・・・わらわの茶器か・・・・・？」

問うというよりも、呟くように声を漏らす女主。

「はい。そして、こちらの茶器が・・・器物が壊れていた現場に、玲春と一緒にいたのが安林山殿です。」
「なんじゃと・・・？」
「安林山殿が申すには、茶器を割ったのは自分だというのです。」

「なんじゃと!?」

「違います!」

平陽公主の叫びを、違うという叫びが遮った。

「玲春?」
「違います!平陽公主様!茶器を割ったのは、私でございます!」

瞭華の言葉を否定する玲春。

「前を見ずに、ボーと歩いていた私が悪いのです！私がよけていれば、茶器は割れませんでした！私に責任がございます！」
「なにを言うんだ、玲春さん！」

（この期に及んで、私を庇おうというのか！？）

相手の優しさに、嬉しさはよりも、苛立ちのようなものを覚える星影。
その苛立ちを言葉にすれば、少女は大きな声で言った。

「事実でございます、安様・・・！私に非があったのです。もうこれ以上、なにもおっしゃらないでくださいませ・・・！」
「馬鹿言うんじゃない！平陽公主様の茶器を壊したのは私だよ！廊下を走った挙句、君はぶつかった私が悪い！体格から考えても、大柄な私が悪いに決まっているだろう！？そうですよね、平陽公主様！？」
「なっ・・・・！？」
「いいえ！茶器をしっかりと守らなかった私が悪いのです！前を、前を見ていなかった私が悪い・・・・そうでございますよね、平陽公主様！？」
「・・・それは・・・」
「それが違うんだよ！仮にそうだとしても、君に責任はないよ！悪いのは、ぶつかってきた私なんだから！そうでしょう、平陽公主様！？」
「う・・・うむ・・・？」
「いいえ！私が悪いのです！そうでございましょう、平陽公主様！？」
「こ、これ、少し落ちつ――――」
「違う！悪いのは私だ！玲春さんは無実ですよね、平陽公主様！？」
「安様が無実なのです、平陽公主様！非があるのは私のみでござい

ます！」
「いや、私だ！平陽公主様！」
「私です！平陽公主様！」
「私だって！」

こうして、第三次庇いあい戦をはじめる二人。
普通では、宮中という場所ではありえない争い。
しかも間に、元・皇女を挟んで繰り広げる戦い。
若い二人に問いただされ、困惑気味に高級宦官とお気に入りの女官を見比べる平陽公主。
はっきりと答えない彼女を追い詰めるように、次第ににじり寄って来る星影と玲春。

「どっちらでございますか！？」
「どっちが悪いと判断されますか、平陽公主様！？」

今まで、いろいろな裁きをしてきたであろう元・皇女。
だが、どちらが悪いか決めてくれなど言う仲裁を受けたことはないはず。
答えに困る中年女性の前で、庇いあいは最高潮を向かえる。

「しつこいな！」

「それはあなた様です！」

「「だから悪いのは――――――――――――！！」」

「庇いあいは、おやめなさ――――――――――――いっ！！」

声と共に、体が後ろに下がる感覚を覚える星影。
見れば、自分と玲春の首根っこを瞭華がつかんでいた。

「なんですか！平陽公主様の御前で、無礼ですぞ！？」

見かねた瞭華が助けに入る。

「平陽公主様を御覧なさい！あまりのことに、大変お困りではありませんか！？」

老女の言葉どおり、呆気にとられる女主人がいた。
その姿を目にし、恥ずかしそうに下を向く玲春。
対する星影は――――――――――

「困っているのではなくて、悩んでらっしゃるだけだと思います。どちらが悪いのかで。」
「屁理屈は結構です！」

子供じみた発言をしたのだった。

「なんなんですか、あなたは！？なんて無礼でむちゃくちゃなんですか！？」
「安林山ですから。」
「意味がわかりませんよ！『劉陽』のように、男色の代名詞にでもなりたいのですか！？」
「いや～私、男色とかの趣味はないんで。」

笑顔で手を振りながら、瞭華の意見を否定する星影。

「なんですか！？その言い草は！本当になんて無――――――――！」

「――――――もうよい、瞭華。」

額に青筋を立てる老女を止めたのは、上座にいる元・皇女だった。

「そんなに叫べば、お前の声がつぶれるだけじゃ。はしたなくもあるから、おやめ。」

「し、しかし、平陽公主・・・。」

「その宦官は、あの皇帝陛下がお気に召した者じゃ。理屈が通るわけがあるまい・・。」

その言葉で、ようやく口を閉ざす瞭華。それを横目で見ながら平陽公主は言った。

「わらわの大事な茶器が割れたというのに、肝心の犯人がこれじゃ。」

気だるそうに言うと、椅子の腕に頬杖をつく女主人。

「犯人が名乗り出たのはよい。手間が省けるからのぅ。だが・・・名乗り出た者同士がかばいあうなど前代未聞。」

「さ、左様でございますね・・・。罪を擦り付け合うというのは、前例がありますが、」

「安林山も玲春も、己に非があると言って引かぬとは・・・・。」

目を細めると、ジッと星影と玲春を見つめる平陽公主。

「どう思う?」

しばしの沈黙の後で、そばにいた瞭華を見る。

どちらが悪いか。

主の問いに、老女は恭しく答える。

「恐れながら・・・・この宦官が、玲春をたぶらかしておるのだと思います。」

「馬様!?」

「私が玲春さんをたぶらかしただ!?」

瞭華の言葉に、二人の顔色が変わる。

自分が悪いとされることに、星影は構わなかった。

それで、玲春が殺されないならよかった。

でも、『たぶらかした』という発言が納得できなかった。

「恐れながら馬様、『たぶらかした』というのは、あまりのお言葉ではありませんか!?私は、玲春さんに害を与えてはいません!」

「そうですわ!安様に非は――――――――」

「非は私にあります!そう言われても、一向に構わない。でも、彼女を騙したりはしていません!」

「安様!またそのような――――――!」

「――――いいから君は黙っていなさい。」

なにか言おうとする玲春の口を、そっと指でふさぐ星影。途端に、

真っ赤な顔で幼い女官は固まった。

「玲春さん、君は悪くないんだよ。だから後は、私に任せて・・・！」

玲春の口をふさぐ、人差し指と中指に力を込めながら告げる星影。
相手が反論しないのを確認すると、女主人の方へと視線を戻す。

「平陽公主様。私の話をお聞きください。」
「・・・言ってみよ。」
「茶器を持っていたのは、間違いなく玲春さんでした。それを落としたのも、彼女に間違いありません。」
「なっ！？なんですか、その言い草は！？まさかあなた――――――今になってから玲春に罪をっ！」
「最後まで話をお聞きください、馬様！」

顔色を変えた老女を制すると、平陽公主を見たまま星影は言った。

「柳がなびくのは風が吹くからと言います。では、彼女が茶器を落としたのは、風があたったからではありませんか？」
「つまり、その風がお前と言うことか？」
「突風に耐えられる柳はまれでしょう。ましてや、儚い花であれば、その花弁を壊してしまいます。」
「玲春が花か？」
「淡き霧の中で見つけられる、色鮮やかな大輪かと。」
「それがお前の申し開きか、安林山？」

射抜くような視線。平陽公主の瞳とぶつかる。
それに答えるように、星影もそらすことなく言葉を続けた。

「左様でございます。私の望みはただ1つ。玲春さんを咎めないでいただきたいのです。」

挑むように見れば、相手も鋭くこちらを見る。
そのまま沈黙が続く。
先に、無言を破ったのは平陽公主だった。

「・・・いいでしょう。安林山、お前の自首を受け入れよう。」
「平陽公主様!?」
「そして、お前が玲春をたぶらかしていないということものぅ。」
「わかっていただけましたか?」

納得したように、表情を和らげる宦官。対する女官は、顔面蒼白で言った。

「あんまりでございます!平陽公主様!安様を、安様を、殺すおつもりですか!?」
「なにを言うのですか、玲春!平陽公主様が大事にされていた高価な茶器を割ったのですよ?」

(・・・高価な茶器ね。)

馬瞭華の言葉に合わせるように、問題の器物へと視線を落とす星影。

(あれ・・・?なんかおかしくない?)

割れた破片を見るうちに、星影はある矛盾に気づく。

(どうして、彼女は・・・平陽公主様は陶器を使われているんだ・・・?)

元・皇女であり、皇族である平陽公主が陶器を使うこと。
それは、現代の私達から見れば、なんらおかしいことはない。
だが、漢時代はそうではなかった。
この時代の陶器は、青銅器の代わりであり、代用品とされていたのだ。
そのため、形はもちろんのこと、色までも青銅器そっくりに作られていたのである。
しかも、陶器を使うのは下級層の身分の者がほとんど。
平陽公主のような元・皇女兼皇族という上流階級ならば、青銅器を使うのが普通である。
それがわざわざ陶器を使っているのである。

（いくら、異国の珍しいものだからといっても、庶民が使う陶器を皇族が使うのかしら・・・？）

彼女が疑問に思うのは当然であった。
こうして、その謎を追求しようと、さらに破片を凝視する星影。

改めてみる茶器・・・陶器は、赤いつやを帯びた器物だった。
口や底の方に帯状の模様はなく、青銅器のように突起した飾りなどもない。
どちらかと言えば、『無装飾の器物』であった。
『無装飾の器物』とは、当時の漢で、全1世紀頃から流行していた装飾のない物のことである。使いやすいということもあり、シンプルな造りの器物を好んで使っているのだ。

（平陽公主様も、無装飾がお好きなのだろうか？）

赤い破片を見つめながら、ぼんやりと考える星影。

その断片的な破片の絵柄から、そこに描かれていたであろう鳳凰の姿。
パッと見る限る、その陶器は西域の最も東にある大帝国（ローマ）から来たものだとわかった。

（割った割らないの話ばかりで、あまり茶器を見ていなかったが――――――――・・・・）

老女の手の中にある器を見ながら考える星影。
その器には、大商家の娘の感を刺激するなにかがった。

（――――――――――――これはっ！？）

その『なにか』に気づくのと、目の前の女主が口を開いたのはほぼ同時だった。

「なにか言いたそうじゃな、安林山？」

若い宦官の様子から、なにかを察して声をかける皇帝の姉。
真剣に破片を見ていたこともあり、平陽公主への返事が一瞬遅れた星影。

「あ・・・いえ。・・・そんなことは。」
「誤魔化すでない！なにもないというはずがないだろう！？」
「平陽公主様・・・、」
「なにを企んでおる？皇帝の姉を謀ろうとは、ふてぶしいこと極ま

りないぞ・・・・！？」

「いえ、私は――――――」

「もうよい！まぁ・・・最後に聞いてやらぬこともないぞ・・・？」

「最後？」

訝しそうに聞き返す宦官を見ながら、あざ笑う様な口調で平陽公主は告げる。

「なにか言いたいことがあるならば、言ってみよ。遺言くらいは聞いてやろう。」

「へ、平陽公主様！？」

悲痛な玲春の声にあわせるように、小さく笑う女主。

（遺言って・・・。）

それって、私の死罪は確定ってことか？

「平陽公主様、そのお言葉はさすがに・・・」

遠慮気味に言うねえやに、元・皇女は笑いながら言う。

「なにがまずいことでもあるか？仮にもこの安林山殿は、『霍去病将軍の再来』と言われる者。それほど高名なお方が、よもや命乞いなど口にするはずはなかろう？」

カチン。

頭の中で、金属同士がぶつかるような音がした。

（や～めた・・・・！！）

霍去病が嫌いな星影。
自分は、『霍去病将軍の再来ではない』と言ったのに、それを信じてくれない平陽公主。
その上で、『お前は霍去病将軍の再来なのだから、情けない真似等できないだろう？』的なことを口にした皇帝の姉。
早い話が馬鹿にしてきたのである。

（こんな相手を気遣う必要なんかない！）

平陽公主の余計な一言が、星影の良心を消し去ってしまった。

「・・・・わかりました。」

目の前で微笑する女主人。それに答えるように、星影も微笑みながら言った。

「大変なご無礼とは存じますが、そのお言葉を受けまして、恐れながら申し上げます。」

恭しく上半身を下げると、頭だけ上げながら女主に問うた。

「恐れながら、平陽公主様に再度お尋ねしたいことがございます。」
「許す。申してみよ。」
「はい、こちらの平陽公主様がお持ちになっていた茶器は・・・・本当に高価な物だったのですか？」
「なに？」
「無礼者！なんと言うことを言うのじゃ！？」
「そうでございますよ、安様！こちらの茶器は高価だと、お話したではありませんか？」
「これ（・・）が？」

布の中身を指差しながら問う星影。

「『これ』・・・だと？」

それまで、星影の行動を大目に見ていた平陽公主だったが、さすがにこの行動は癪に障ったらしい。星影を見る目が鋭くなる。

「わらわの、平陽公主の持ち物に対して、『これ』とはなんじゃ？」
「すみません、『こちら』の品がですか？」
「言うまでもない。貧乏人は高価なものに目がくらむというが・・・見すぎて目が使い物にならなくなったかぁ？」

目だけでなく、言葉まで鋭くなっていた。
この険悪な空気を受け、側にいた女性二人が口を開いた。

「安林山殿、あなたにはわからないかもしれませんが、高価な物ですよ。玲春からどこまで聞いたか知りませんが、それは漢のものではなく、西域の陶器なのです。」
「そうでございますよ！仮にも、平陽公主様がお持ちになっている物です！まがい物のであるはずがありません！」
「つまり・・・西域でも、特に高価な陶器・・・もとい、茶器ということですか？」
「そうじゃ。この茶器は、西域の商人に頼み、特別に取り寄せた物。めったに手に入らない逸品じゃ。」

二人の言葉を受け、自慢げに告げる元・皇女。

「高価なのですか？」

それに対して星影は、疑いの言葉をぶつける。

「・・・お前はなにを聞いていた？」
「馬様と玲春さんとあなた様のお話です。」
「ならば、聞くまでもなかろう！？高価に決まっておる！」
「高価ですか？」
「高価じゃ！わらわのためだけに選ばれ、漢にはない異国の高級品！それだけ、価値がある・・・！」
「命よりもですか？」

その言葉に、一瞬場の空気が固まる。
特に玲春は、これ以上ないというぐらいに目を丸くする。

「人の命よりも、高価な茶器なのですか？」

再度、言葉を足して問う星影。

「・・・玲春が、そう申したのか？」

それに気づいた平陽公主の言葉で、玲春の体が震えだす。

「そういうことを、玲春さんに言ったんですか？」

「質問に質問で答えるな。わらわの質問に答えよ！」

「申し訳ありませんが、私と玲春さんは、今日が初対面。ご主人であるあなた様のお話など、聞く暇がないと思いますが？」

「若造っ！！」

「安、林山です。短気はお体に触りますよ、平陽公主様？」

そう言うと、馬の手の中にあった茶器を手に取る星影。

「な、なにをするのです！？その茶器は――――」

「よい。」

星影の動きを注意した瞭華を、平陽公主が制す。

「いまさら鑑定でもする気か、安林山殿？」

それでも星影はなにも言わなかった。答えない宦官に、皇帝の姉は茶化しながら言った。

「好きなだけ見ればいい。それが今生でお主が最後に見る高級品じゃ。なんせその茶器は、人より高価な品・・・。玲春はもちろん、

奴隷数十人分よりも高価な物。それだけ価値がある茶器なのじゃからのぅ？」

（・・・・この茶器が、人の命以上の価値があるだと・・・・！？）

無言で茶器を見ていた星影だったが、平陽公主の言葉に顔をゆがめる。

「・・・玲春さん。」

「は、はい！」

ようやく口を開いた星影。真っ先に呼んだのは、高貴な皇女ではなく、側仕えの女官であった。

「この茶器が、あなたの命よりも高いと、あなたも思いますか？」

あまりにも単純な問い。そんな若い宦官の問いに、玲春はもちろん、その主や上司でさえ、言葉を失ってしまった。

「そ、それは・・・・・」

星影の言葉に戸惑いながらも、若い女官は言った。

「そうなのでございましょう・・・？平陽公主様はもちろん、馬様も、そうおっしゃって――――――」

「では、馬様にお聞きします。この茶器は、馬様・・・あなたの命よりも高いのですか？」

玲春の言葉を遮ると、今度は少女の上司に聞いた。

「なにを馬鹿なことを・・・!?高いに決まっているでしょう!?平陽公主様が、この茶器を買われる場に、私もいたのですから。」

「たまたま、居合わせたのですか?」

「偶然ではない。」

瞭華の代わりに平陽公主が答えた。

「瞭華は、わらわが幼い頃より仕えている、わらわのねえやじゃ。女官頭であり、わらわが一番信頼しておる者である。」

「平陽公主様・・・!」

もったいないお言葉です、というねえやに、元・皇女は首を振った。

「本当のことじゃ。だから、瞭華よりも高いと言うのは癪。瞭華の代わりはおらぬ。それを茶器と比べるなど、不快極まりないぞ、安林山・・・!?」

「だったら、玲春さんを含めた他の人だって、不快に決まっているでしょう?」

声を荒げることなく、静かに怒気を含ませながら告げる星影。

「あ、安様!?」

「自分の大事な相手と茶器を比べることには不快を感じ、それ以外の者では不快に思わない。なるほど、大した公平なお気持ちをお持ちだ。」

「安林山よ・・・お前は、身分というものがわかっておらぬようだ

な？」

渋い顔をしながら平陽公主は言った。

「わらわとお前では、身分が違う！韓の若造の例を知らぬのか？」

「陛下の弟君兼あなた様の弟君を土下座させた方がなにか？」

「あの若造は、陛下の寵愛をいいことに無礼を働いた。今のお前は、あの男娼と同じじゃ。」

「違います。」

ひどくまじめな声で、星影は反論した。

「あの方は、自分のために身分以上のことをしました。ですが私は、他の誰かのために、己の身分以上の行いをしています。」

「他人のためにじゃと・・・！？」

怪訝そうに、眉を吊り上げる元・皇女。玲春やその上司も目を見張っている。

「あまりにも、あなた様がお気の毒になりましたので、私の首をかけて申し上げます。」

本当なら、無視してもよかった。だが、それを言わなければ、自分の家業に傷をつけることになる。両手でしっかりと、破片になった茶器持つ星影。

「人の命よりも高価だと申された、平陽公主様お気に入りの茶器。」

そして彼女は行動に出た。

「これのどこが高価だぁぁぁ――――――――――――――!!!?」

絶叫するなり、持っていた破片を力いっぱい床に叩きつける星影。

「「「「えええ――――――――――――!!?」」」」

三種類の異なる声と、高い音が部屋に響く。

「わっわらわの茶器がぁぁぁ――――――――――――!?」

「へ、平陽公主様の茶器がぁぁぁ――――――――――――!?」

「あ、安様ぁぁ――――――――――――――!?」

金縛り状態で絶叫する三人に、宦官服の若者は言った。

「この茶器に、ふさわしい対応をさせてもらっただけです。」

悪びれることなく、平然と言い放つ星影。
気違いとも言える高級宦官の行動に、狼狽する三人の女性。
彼女達の瞳に映るその姿は、『気違い』よりも『気迫』の方が勝る姿であった。

第六十二話　人間、思い切りが大事。（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

小話なのですが、小説の中で出てきた「劉陽（りゅうよう）」とは、春秋時代に実在した「美少年」のことで、中国では「男色」の代名詞でもあります。記憶があいまいなので、詳しくは覚えていないのですが、確か「りゅうよう」と読んで「劉陽」と書いていたように記憶しています。もしご存知の方で、「読み方や漢字が違う！」と思われた方、お手数ですが、ご連絡ください（平伏）物覚えが悪くてすみません・・・（大汗）！！

ちなみに、「元気な老人」の代名詞とされるのが、三国時代の英雄『黄忠』・『超雲』です。日本では、老人のイメージのない「超雲」ですが、中国では「元気でしっかり者のおじいさん」だそうです。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十三話　ただいま鑑定中

洗練された調度品が並ぶ広い部屋。
その中央で四人の人間がいた。
現・皇帝の実姉平陽公主。平陽公主のねえや兼女官頭筆頭の馬瞭華。
平陽公主に仕える幼い女官・除玲春。
そして――――――――

「この茶器に、ふさわしい対応をさせてもらっただけです。」

悪びれることなく、平然と言い放つ宦官服の若者。安林山こと劉星
影の姿がそこにあった。
気迫十分に言う宦官に、圧倒されるばかりの女性三人。

「い、今の音は一体・・・!?」
「なにがあったの?」
「ちょっと、誰かいるみたいよ?」
「え・・・あれって・・・!?」

器の割れた音を聞きつけ、他の平陽公主付の女官達が、部屋の幕の
裏からこちらを覗いていた。
そんな彼女達の視線に気づき、最初に口を開いたのは馬瞭華だった。

「あああああ、あ、安林山!!そ、その方気でも狂ったのか・・・
!?一度ならず二度までも、平陽公主様の茶器を割るとはっ!」

なんとか威厳を保とうと、キツメの口調で言うが、ろれつがまったくまわっていない。
早い話が、動揺を隠しきれていないのだ。

「別にいいでしょう?元々、一回目の工程で壊れてるんだら。」
「な!?」
「いいじゃないですか。疑わしい人間を二人罰するよりも、こうやって目の前で罪を犯した一人だけを罰すれば簡単でしょう?」

星影の言葉に、赤くなったり青くなったりする女官頭。

「――――――なんてことをおっしゃるんですか、安様!?」

瞭華と入れ替わる形で、今度は玲春が口を開く。

「なんてことを――――!なんてことを!それではあなた様が――――!!」
「それを言うなら、『なにをしてるんですか、安様?』じゃないかなぁ~?」
「そんなのんきなことをおっしゃっている場合ですか!?」
「のんきなことはないよ。とにかく、これはもう私と平陽公主様の問題だ。」
「えっ!?」
「君には『関係ない』んだから、口を挟まないでくれ!」
「あ・・・安様・・・・!」

冷たく言い捨てる星影に、玲春は言葉を失ってしまう。

「なんという、なんという狂気じゃ・・・・！？」

部屋の空気を、さらに張り詰めさせるようなつぶやき。
動揺する召使二人の背後では、怒りと呆れをまぜた様な表情の平陽公主。

「お・・・お嬢様・・・・。」

そんな主人の姿に、ねえやは激しく狼狽（ろうばい）する。
玲春にいたっては、今にも倒れそうな顔色になっていた。

「この気違いめっ！！気でも狂うたかぁ――――――――！！？」
「いいえ。私はいたって正常です。」

混乱気味に言う元・皇女の第一声に、冷静な口調で即答する若い宦官。

「正常じゃと！？」
「はい。おかしいのはこの茶器の持ち主である平陽公主様！・・・・あなた様です。」
「なんじゃと！？」

そう言うと、平陽公主に向かって指を指す星影。

「ぶ、無礼者っ！貴様、誰に向かって――――――――！？」
「陛下の実姉・平陽公主様に向かって、申しているのです。」
「貴様ぁ！！」

「しかし、一部は訂正いたします。平陽公主様はおかしいのではなく、お可哀想なのでございます。」
「か、可哀想!?」
悪びれた様子もなく、むしろ不機嫌そうに相手に告げる。
「そうです。こんな茶器に・・・いえ、器に、惑わされてしまったあなた様がお気の毒です。」
「気の毒じゃと・・・・・・!?」
驚く相手を尻目に、割った破片の一部を拾う星影。そして、全体をくまなく凝視した。
「あ・・・安様・・・?」
「な、なにをしているのです?」
「確かめているのです。」
「確かめるじゃと!?」
「ええ、確かめたかったので割りました。」
「「「え?」」」
意外な答えに、思わず互いの顔を見る女主人と女官頭。
「な、なにをでございますか・・・?」
上司二人の側で、たどたどしく尋ねる玲春。
それに対して、拾った茶器を見せながら星影は言った。

「この器は、西域の物ではありません。漢で焼かれた正真正銘国産の器です。」

「なにぃ！！？」

「こ、この茶器が、」

「西域の物ではないのですか！？」

「そうだよ。」

玲春の問いに真顔で答えると、はっきりとした口調で繰り返した。

「大変申し上げにくいのですが、これは西域の物ではありません。早い話が・・・偽物です。」

「に、偽物！？」

「この茶器が偽物なんて・・・・・！」

平陽公主に向けて発せられた言葉に、女官二人は戸惑うばかりだった。

「・・・なぜ断言できる・・・・！？」

戸惑うねえやと女官を見ることなく、星影だけを見据えて問う元・

皇女。

「この逸品を偽物だとうそぶくとは何事じゃ！根拠もなしに――――！！」

「ございます。」

「なに！？」

「根拠が四つ、ございます。」

「四つ！？」

「四つもあると・・・！？」

星影の発言に、女官主従は顔を見合わせる。

そんな召使を横目で見ながら、女主は声高らかに笑う。

「ホッホッホッ！宦官風情が面白い・・・！ならば申してみよ！！その証拠とやらを！！」

「では、この下品な宦官風情、平陽公主様お持ちの器がまがい物である根拠をつ、申し上げます。」

平陽公主の皮肉に皮肉で答えると、星影は説明を始めた。

「こちらの証拠をお伝えする前に、平陽公主様にいくつかお聞きしたいことがございます。」

「申せ。」

「こちらの器は、お金を出して買われたのですか？」

「そうじゃ。まさか貴様・・・わらわが、権力に物を言わせて奪ったとでも思ったか？」

「とんでもございません。被害状況を確認したかっただけです。仮に、権力で強奪されたのでしたら、罰が当たったのだと思うだけですから。」

「・・・貴様一言多いぞ。」

「よく言われます。それではもう一つ。その商人は、この器をなんと言って、平陽公主様に薦められたのですか？」
「先ほど言った通りじゃ。」
「つまり、『一点物』という理由でご所望されたと？」
「そ、そうです！一点物だと言うので、平陽公主様が気に入った物です・・・！」

主の代わりに、そのねえやが質問に答える。

「・・・貴様一言多いぞ。」
「よく言われます。それではもう一つ。その商人は、この器をなんと言って、平陽公主様に薦められたのですか？」
「先ほど言った通りじゃ。」
「つまり、『一点物』という理由でご所望されたと？」
「そ、そうです！一点物だと言うので、平陽公主様が気に入った物です・・・！」

主の代わりに、そのねえやが質問に答える。

「装飾のない無装飾であり、色も控えめの奥ゆかしい赤。世間では、青銅器に近いものを求める傾向がありますがそれでは芸がございません。流行に乗るのではなく、本当に自分が良いと思ったものを持つというのが平陽公主様のお考え。」
「なるほど・・・周りに流されず、ご自分のお好きなものを選ばれたのですね。」
「選んだというよりも、相手が平陽公主様に『是非』と薦めたのです！西域の窯で、漢の貴婦人向けに焼かれたという赤つやの器を！」
「では、平陽公主様が選ばれたのではないのですか？」
「そうです！」

なんてことだ！一番、偽物を買わされやすい状況じゃないか！

（しかも、薦められたものを素直にその場で買ったということは――――――――）

「・・・いくらです？」

「はぁ？」

そっと瞭華の側によると、その顔の近くでささやく星影。

「相手はいくら、おまけをしてくれたんですか？」

「なっ！？」

途端に真っ赤な顔になる女官頭。

質問の内容もそうだが、噂の美少年が近づいたことも、顔色が変わった要因だったらしい。

「な、なんと無礼なっ！？」

「・・・だってそうでしょう？西域からの商人なんて、度々来るようなものじゃない。そんな相手の薦める物を簡単に買ったということは、なんらかのおまけがあったからなのでは？」

「――――――戯言は許しませんよ！！」

星影に顔を近づけると、その耳元で叫ぶ瞭華。

（否定はしないのか・・・。）

自分の問いに、『違う！』とも『そんなことない！』とも、何らかの特典がっあたのではないかということを否定しなかった。

上座の平陽公主を見れば、少し耳が赤くなっていた。

（やっぱり、おまけしてもらったのか・・・・。）

どんな身分であっても、値引きやおまけ、特典に弱いものなのね。

「いいですか！この茶器は、漢人向けということで、面白いということで買われたのです。」

「面白い？」

「西域で作られながら、どこか懐かしい漢のにおいがする美術品。こんな趣向は他にはないでしょう！？それを偽物などと・・・・霍去病(かくきょへい)将軍の生まれ変わりが聞いてあきれますぞ！？」

「私も、霍去病将軍の生まれ変わり扱いをされて、呆れ返っています。それから、お買い上げになった場には、平陽公主様と馬様とその商人がいただけですか？」

「若い女官が数人おりました。玲春はいませんでしたが！」

「なるほど・・・商人の話のみで決めてしまわれたのですか。」

（軽率なことをしたものだ。）

物を買う時ほど、慎重にしなければならない。

こういう場合は、１人ぐらい、その道の専門家に同席してもらうべきである。

（まぁ・・・今さらそんなこと言っても、この人達は怒るだけだろうな・・・。）

「・・・なにが言いたい？」

「いえ、なにも。」

意味深な言葉を最後に、質問をやめた宦官を鋭くにらむ女主。

「・・・大体のことはわかりましたので、本題へと入らせていただきます。」

「もったいぶらずに、はよう申せ！」

（そんなに怒らなくてもいいのに・・・。）

苛立ちをあらわにする平陽公主を見ながら、少し冷めた・・・落ち着いた口調で星影は言った。

「まず一つ目は、この器の表面に問題がございます。」

「表面？」

「まさか貴様・・・これに装飾がないから、偽物だとほざくのではあるまいな？」

「ご冗談を。こちらの器が、『無装飾』の器であることは、一目瞭然（いちもくりょうぜん）でございます。それればかりか、漢人ならば懐かしむであろう味わいを持っているということも。」

「ならば、漢で作った物と似ていても、なんら変わりがないであろう。」

「ええ。漢人は無装飾の物を好みます。この器も、漢人好みの赤つや焼きの土器でした。」

「土器？」

不思議そうにつぶやく平陽公主に、星影は表情を和らげながら答えた。

「左様でございます。西域の人間は、私達漢人のように土器と陶器を分けて考えておりません。土器も陶器も磁器も、すべてをひっくるめて考えているのです。」

「わけておらんのか・・・？」
「正確には陶器全般を『赤つや土器』と、言っております。彼らは、土器と陶器は作る材料や技法に違いがあるぐらいで、向こうではまとめて考えているらしいのです。」
「では・・・これは陶器でよいのか？」
「はい。陶器をさす場合が多いので、おそらくこの器も陶器でしょう。ただ・・・その点を思えば、これは漢の物でしょうね・・・。光沢が違いますから。」
「光沢じゃと？」
「ええ。西域の物でしたら、器の表面に独特の光沢がなくてはなりません。西域の釉（うわぐすり）は、漢の物と違って釉に含まれている物が違います。噂では、瑠璃が多く使われているらしいのです。」
「瑠璃が？」
「瑠璃とは、あの美しい青色とこがね色の模様が入っている石のことですか？あれが、陶器に使われていると？」
「初めて聞きますが・・・。」
「ええ。昔、こぼれ話を聞いたことがありまして。」

女官二人の言葉に笑顔で答える星影。
以前、父親と取引のあった、南方の窯の主から聞いた話。それをそのまま口にする。

「だからもう少し、鮮やかな輝きがなくていけません。ですが、この器の表面は鮮やかさも光沢さも弱いのです。漢の物と変わりません。むしろ同じです。」
「しかし、商人は漢人向けに作ったのだと――――」
「漢人向けの無装飾用として焼いたのならば、なおさら表面に鮮やかな光沢がなければなりませんよ、馬様。その鮮やかな光沢こそが、西域で作った逸品だという証。特に西域の器は、陶器も磁器も土器も、表面に光沢・つやがある物がほとんどです。」

「だが、土や焼き上がりによっては、それが出来ないものもあると聞きますぞ!?」
「確かに、使う土・材料の配合・焼き方によっては、光沢が出ないものもあります。しかし、この器に使われている土は粘りのある赤い土が使われています。これだったら、つやを出すための特別な釉が使えるはずです。それなのに、使わないのはおかしいでしょう?」
「うっ・・む・・。」

星影の問いに、口ごもる女官頭。

「あの・・・おかしいのですか?」

馬瞭華を気遣うように、遠慮がちに尋ねる玲春。

「使う土や、作り方によって多少の違いが出るんですよね?でしたら、焼き方によっては、安様がおっしゃるような光沢に必ずなるとは限らないのではないでしょうか・・・?」
「そうだね。それが、市場でいろんな種類の器と一緒に売るものならね。」
「え?」
「これは、『平陽公主様に』と、ご指名を受けて薦められたものだよ。逸品として紹介されたのなら、中途半端なものを薦めること自体おかしいんじゃないかな?」
「あっ・・・!」

星影の言葉に、玲春の顔色が変わる。
それは、側にいた彼女の上司と、上座にいる女主も同じだった。

「以上が、一つ目の証拠です。続きまして、二つ目の証拠を裏付けるのが、この破片です。」

そう言うと、たくさんある破片の中で、一番薄い破片を差し出す星影。
彼女が選んだのは、釉のついた側面の破片だった。
それを、光にかざして見せながら星影は言った。

「何色に見えますか？」
「・・・赤に決まっておろう？」
「そうなんですか？」
「そうですよ！赤色の茶器なのですから、赤色の釉が塗って――――」

そこで瞭華の言葉が途切れた。

「瞭華？」
「あ！」

平陽公主がねえやを呼ぶの声と、玲春の叫び声とが重なる。

「色が・・・・！」
「どうした、玲春？」
「違います・・・！」
「なに？」
「たっ、大変でございます！平陽公主っ様！！い、いいいいい色がっ！」

声を震わせながら訴える女官の言葉で、女主の視線がもう一度破片に戻る。

「これは！！」

相手がそれに気づいたのを確認すると、静かな口調で星影は言った。

「『黄色』でございましょう？『赤褐色』ではなく、『黄褐色』。」

星影の言うとおり、破片は『赤色』ではなく、『黄色』に輝いていた。

「殷時代から続く硬陶（こうとう）の釉特有の『黄褐色』にございます。」

「殷時代じゃと！？」

「ではこれは――わが国の！？」

改めて、違いを見せ付けられて固まる女性達。

最初に口を開いたのは、怒りに満ちた平陽公主だった。

「なぜ気づかなかったのじゃ・・・！？瞭華、お主も気がつかなったのか！？」

「も、申し訳ございません！私も、赤色に見えたのですが――――！」

「下地（したじ）の土が、赤すぎたのでしょう。」

取り乱す主従に星影が声をかけた。

「光沢が出るといっても、完全な赤や紅色を出すのは大変です。特に漢では、青銅器を模した物が主流ですので、赤や紅色を出すことは難しいでしょう。見慣れていなければ、細かい違いなどわかりません。」

「林山・・・！」

「おそらくこれを作った者は、土の色が赤いのをいいことに、黄色の釉を薄めに塗ったのでしょう。」

「な、なぜそのようなことを！？」
「理由は簡単です。赤の釉がなかったから、黄色を使ったのでしょう。」
「ですから、なぜ黄色を！？」
「ぼかしを出すためです。」
「ぼかしじゃと！？」
「完全な赤よりも、他の色をつけてぼかした方が、自然にあるような色になるでしょう。普段から、あまりしっかりとした赤系の器を見ていないものなら、少しぐらいくすみやぼかしがあった方が親近感を持てるでしょう。」
「そう言われれば・・・。」
「そうかもしれぬ・・・！」
「それに黄色は、金色に近い色でもあります。工夫次第で、黄金色に見せることもできるでしょう。」
「なるほど・・・！」

星影の説明に、深くうなずく平陽公主と馬瞭華。その横で、少しだけ元気を取り戻した玲春が言った。

「すごいですわ！安様・・・！器のことについて、そこまでお詳しいなんて・・・！」

無邪気な少女の言葉に、少しだけ笑みを浮かべながら星影は答えた。

「それは誤解ですよ、玲春殿。私には、それほど陶磁器などの知識はございません。」
「ですが――――！」
「あくまで耳にした噂話です。その噂話と照らし合わせれば、西域の器・・・本物の赤つや焼きであれば、珊瑚のような紅色でなければなりません。それに、割ってみてわかったのですが――――

―」

他の破片を手に取りながら星影は言った。

「焼き上がりを見る限り、この器に使われている土は、赤みが強い灰色の土ではないかと思われます。おそらく・・・博山炉（酒壷）や鐘（フタ付の器類）を作るための土を使って作ったのではないでしょうか？」

「そ・・・そんなこと！陶工でもない宦官風情に、土の違いがわかるわけがないでしょう！？」

「ご心配なく。あくまで、私個人の推理です。詳しいことは、宮中にいらっしゃる陶工の方にお聞きした方がよろしいでしょう。」

星影が言う陶工とは、宮中にいる陶工のことだった。

中国には古代から、宗教的な儀式に使う青銅器、陶器や磁器などを作る職人がいた。

漢王朝でも例外にもれず、そう言った職人が宮中にいたのである。

「表面に使われている釉が違う。それが、二つ目の証拠です。」

「・・・では、三つ目は？」

「三つ目が、この破片によってできた粉です。」

そう言うと、別の破片を手に取る星影。そして、近くにあった机上の上でその破片をたたいた。すると破片から、パラパラと細かい粉が落ちた。

そんな星影の動きに、ギョッとする女官達。

そっと、持ち主である高貴な婦人を見るが――――――

「粉じゃと？」

そこにあったのは、訝しげに問う平陽公主の姿。
もはや、若い宦官が、自分のものを壊すことに、何も言わなくなっていた。
否、茶器よりも、常識はずれの宦官に興味が移っていたのだ。

「粉が、どうしたというのだ？」
「触ってみてください。」

薦められるまま、星影が作った破片の粉を触る平陽公主一同。

「どうですか？」
「どうと言っても・・・」
「ザラザラですが・・・？」
「ほうほう、ザラザラですか？」
「何が言いたいのじゃ？」
「西域の器は、漢の器と比べ、土の質が違います。西域は、土の質が細かい物を使っています。だから割った時、砂のように、サラサラとした状態になります。ですが・・・どうですか？この破片によってできた粉は？」
「あ・・・！？砂のようにサラサラしていない・・・です・・・！」
「し、しかし！それは割れ方によるのではありませんか！？砕こうと思えば、もっと細か――――！！」

瞭華が言い終らないうちに、鈍い音が響く。
若い宦官が、破片を床に一生懸命たたき作る音だった。

「てっ・・・安様ぁぁぁあああぁ！！」
「わ、わらわの茶器がぁぁぁぁ！！！？」
「なにをしているのですかぁぁぁ――――――――――！？」

「砕いてるんですが。」

真顔で答える宦官に、滝のような汗を流しながら訴える馬瞭華。なぜなら、彼女の側で怒りのあまり絶叫する元・皇女の姿があったからだ。

「貴様！安林山！！わらわの前で、一度ならず二度までも、茶器を割るとはぁぁぁ！！？」

「さっき砕いた時、なにもおっしゃらなかったじゃないですか？」

「お前に気をとられすぎて、気づかなかったのじゃっ！！」

どうやら、予測不能な行動をする宦官に気をとられ、茶器のことまで目に入らなかったようである。

「と、とにかく！おやめなさい！！」

女主人と若い宦官の間に入りながら叫ぶ瞭華。しかし、そんな女官頭の静止を受ける前に、問題の宦官は動きを止めていた。

「それは失礼いたしました。」

そう言うと、軽やかな身こなしで砕いた粉を布に載せる星影。そしてそれを、女主とそのねえや達の前に差し出した。

「ほら、ご覧になってください。これ以上砕けません。」

そこには、見た目にもサラサラとは言えない、砕けた器の粉があった。

「く、砕けないからと言って、土の質が細かいなど――――――――

！！」

「――――――断言はできませんね。その点についても、どうぞ宮中の職人にお聞きください。」

怒る相手に優雅に話す宦官。

「そして最後の四つ目は、刻印がないことです。」

「「刻印？」」」

星影の言葉に、声をそろえる一同。

「そうです。先ほどおっしゃいましてよね？この器は、『無装飾なので模様が一切入っていない』と？」

「そ、その通りじゃ。これは、無装飾の茶器じゃ！刻印などとわけのわからないものが――！」

「その刻印こそ、本物の印なのです！」

平陽公主の言葉を遮りながら叫ぶ星影。

「優れているものというのは、価値があるという反面、最も偽物を作られやすいのです。それを防ぐために陶工達は、自分達が作った作品に印をつけるようになったのです。それが、『刻印』です。これつけることで、本物と偽物を見分けることができるようになりました。そればかりか、どこの窯で焼かれたものかわかるようになったんです。」

「焼いた場所までわかるのですか！？」

「釜ごとに、刻印を決めてつけるようになりましたからね。」

「そう決まっているのですか・・？」

「そうだよ、玲春殿。これは、百年前から続く習慣なのです。」

「そんな・・・それでは――――――！」

「話がかみ合わぬではないか・・・!?」

星影の話に、呆然とする平陽公主。そんな女主を庇うために、彼女のねえやは口を開いた。

「し、しかし!仮に刻印が入っていたとしても、それが本物だとは限らないのでは!?」

「さすが馬様!職人の中には、偽物の刻印をつける輩もいます。ですが、この器にはその刻印すらないのです。」

「それは・・・!」

「西域の中でも、一番の赤色の焼き物が焼かれる場所、そこで焼いた器なら、刻印がなくてはいけません。それが、一番の品だという証拠になるのですから。」

「しかし異国の商人が・・・!」

「ではお聞きしますが、その商人のことは覚えていますか?」

「覚えていますとも!西域から、わざわざ来たのですよ!?」

「肌や髪、目の色はどうでしたか?」

「肌は白く、髪は金色に明るく、目が茶色の男でしたわ!」

「彼は、この器を、どうやって持ってきたか言っていましたか?」

「さっきも言ったではありませんか!?西域から船で、直接持ってきたと聞いたのですよ!」

「では、海路で来たと?」

「ええ!自分達の船で、漢まで来たと!」

「自分達の船?」

女官頭の言葉に、星影の眉がピクリと動く。

「そうですわ!自分達の船で、さまざまな港によりながら来たと・・・!」

「それは・・・一つの船で来たと言うのですか?」

「そうでしょう!?なにがおっしゃりたいの!?」
「すみません、訂正します。」
瞭華の言葉に、ため息交じりで星影は言った。

「偽物の証拠が、四つから五つに変更します。」

「なっ!?」
「ええ!?」
「林山、それは――――――――――!?」

「商人も偽者ですね。」

「「「ええぇえ――――――――――!!?」」」

星影の言葉に、再度、声をそろえて叫ぶ女性陣。
これには星影も、乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

第六十三話　ただいま鑑定中（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

今回・・・器について調べたのですが・・・・・・かなり大変でした（大汗）
極力、時代配慮（？）をしながら書いたのですが・・・・・その道のプロ、専門家の人が見たら、「ここ違うんじゃないかな～？」と、言われる気がしてなりません・・・（冷汗）
とりあえず、星影の『わが道を行く』姿勢は相変わらずです。まだ続きますので、引き続き、よろしくお願いします（平伏）

第六十四話　鑑定終了

若い宦官の『商人偽者宣言』。
それは、宮中の女達に新たな波紋を呼んでいた。

「安林山殿！あなたは、どんな根拠があって、商人まで偽者だと言うのですか！？」
「九割は、断言できませんけど・・・話のつじつまが合いませんね。」
「ほとんど断言しているではありませんか！？」
「私がここで断言してしまっては、馬様はもちろん、平陽公主様に恥をかかせてしまうのでは？」
「心配しなくても、十～ぅ分！！かかせておりますよっ！！」
「お、おやめください馬様！！どうか！ど～かっ！安様をお許しください・・・！」

ああ言えばこう言う、こう言えばああ言う。
のらりくらりと発言する安林山（あんりんざん）こと劉星影（りゅうせいえい）。
そんな星影に掴みかかろうとする上司・馬瞭華（ばりょうか）。
それを、必死で抑える配下の徐玲春（じょれいしゅん）。

「放しなさい、玲春！この宦官は、われらのよく知る商人を偽者だという不届き者です！」
「それは誤解です、馬様。」
「『誤解』ですと！？」
「はい。商人以外も偽者でしょう。」

「え!?」
「おそらく全員、共犯でしょう。」
「ええ!?」

新たに、とんでもないことを言い出す宦官。

「ば・・・!馬鹿なことをおっしゃらないでくださいっ!!商人を含めた全員が共犯!?ふざけないで頂戴!!」
「ふざけていません。本気です。」
「なおさらよくありませんっ!!」

その結果、さらに馬瞭華を怒らせてしまった。

「あなたね・・・!宮中に入る人間が、それも平陽公主様にお目通りできる人間が、わざわざ自滅するようなことをしますかっ!?考えても御――――――!!」
「――――――先入観のみで、発言されるのはよろしくありませんよ、馬様。」

片目を閉じながらそう告げる星影。

「ところで馬様。」

体ごと女官頭に向けながら星影は問うた。

「よろしければ、これを持ってこられた商人とその連れの特徴を詳しく教えていただけないでしょうか?」
「な、なんでそんなことまであなたに――――――――!」
「お聞きできないのなら、私も商人が偽者だという理由は申しません。」

「なっ！？」
「ですから、また（・・）騙されても文句をおっしゃらないでください。」
「なっ、なななな！！」
あまりの言い方に、茹でタコのように真っ赤になる女官頭。
「安林山殿！なっ、な、なんと無礼な物言いを――――――――！？」
すぐさま反論したのだが――――
「――――教えておやり、瞭華。」
ねえやの言葉を遮りながら、女主人はそう命じた。。
「お嬢様！？」
「『平陽公主様』、であろう？瞭華よ。安林山に、詳しく話しておやり。」
「し、しかし・・・！」
「話したところで、変わるわけではあるまい。安林山の減らず口は。」
そう言うと、問題の人物を見つめる皇帝の姉。
茶化すような口調だったが、彼女が怒っているのを、星影はわかっていた。
というか、すでにかなり怒らせていた。
今はその怒りが一山終えて、収まっているが、いつ爆発してもおかしくない。

無言で笑みを作れば、それを見ながら、瞭華、と女主人が促す。

「わ、わかりました・・・。」

渋々ながら、女官頭は口を開いた。

「・・・平陽公主様の元へ来た者は、西域の商人を紹介してくれた商人が一名、西域人が一名と、その西域人の通訳が一名、品物を運ぶものが二名の計五名です。」

「すべて男性ですか？」

「いいえ。品物を扱っていた者は女性でしたが。」

「品物を使っていたのが、女性ですか？」

「ええ。」

相手は全部で五人・・・。そのうち二人が女か。

（女性に重労働させるとは、ひどい連中だな。）

「いくら特別に許可されたとしても、男が宮中へ入るのは異なこと。それゆえ、品物を運ぶものは女性なのです。」

星影の心中を察してか、さりげなく解説する瞭華。

「これはご丁寧に。」

それに笑顔で答えれば、相手はキッと睨みつけた。

「さらに申し上げれば、西域からの商人を紹介してくれた者は、昔から平陽公主様が懇意にしている者。不実なことをするはずがあり

ません。」
「では・・・西域の商人を紹介した者以外とは、それまで付き合いがなかったと？」
「当然です。」
「その方以外は、全員異人だったのですか？」
「いいえ。通訳も漢人だと言っていましたわ。」
「他の三人は？」
「異国の商人が幻人（ローマ人）、女二名が蛮人だそうです。」
「そう名乗ったのですか？」
「ええ、幻人だと名乗りましたよ。蛮人の女についても、その通訳の方がそうおっしゃいましたので。肌の色も、漢人とは違いましたし。」
「通訳の方の出目（出身地）は、お聞きになりましたか？」
「南方だと言っていました。南方は暑いので、かなり日に焼けてしまったと。」
「日に焼けていたのは、品物を運んだご婦人達もそうではないのですか？」
「そうですね、焼けておりましたよ。赤茶色のような色をしていましたが・・・。」
苦々しく告げる老女。その目は、どこまで聞くのかと星影を責めるものだった。
しかし彼女は気にしない。気にしたところで真実がわかるわけではない。
周りを気にしないのが、安林山に化ける劉星影のやり方なのだ。

「聞きたいことは聞けましたので、ご安心ください。」
「今の会話で、十分な情報を得られたと？」
「そういうことです。」
「馬鹿馬鹿しい！今話した中に、どんな怪しい点があったと申すのですか！？」

「あなた方が、『少ない情報』と『相手の言葉のみ』で、彼らの話を信用していたということです。」
「どういうことです!?」
「『肌は白く、髪は金色に明るく、目が茶色』の男・・・を、馬様は幻人と判断されたのでしょう?」
「そ、そうですが。」
「なぜ、そう判断されたのですか?」
「幻人は、漢人よりも白い肌をし、髪や瞳の色が明るく、翡翠や珊瑚のようだと聞いていたからです。」
「それは、幻人限定ですか?」
「え?」
「肌が白く、髪は金色に明るく、目が茶色ならば、『すべて幻人である』と教えられてのですか?」
「あっ・・・・!」
星影の言葉に、何かに気づいたように叫ぶ馬瞭華。

「ど、どういうことですか・・・安様?」

自分の上司の様子を見ながら尋ねる玲春。星影は微笑みながら言った。

「うん。それじゃあ、玲春さんや・・・この場にいる皆さんにお聞きします。皆さんが、漢人とは違う毛色や目の色をした者を一目見ただけで、正確にどこの国の人間か判断できますか?」
「え?」
「肌が白く、髪は金色に明るく、目が茶色ならば、『それ以外は幻人でない』と判断できますか?」
「それは――――――・・・・!」

星影の言葉に、玲春もようやく気づく。それは、幕の側にいる女官

達も同じだった。

「できるわけがないのです。」

そう。一目見ただけで、漢人以外の異人を判断することなどできない。

だれが、どこの国の者か見分けがつくはずがない。

漢人は、自分達を基準にして考える。

髪や目が黒いか、肌の色が薄い黄色をしているか。

それ以外は、『蛮人』と判断する。

そんな判断の仕方なので、肌が真っ白だったり、黒かったり。

目が青かったり、緑色だったり。

髪が金色だったり、栗色だったり。

まとめて『異人』と判断するのである。

「我々と見た目や言葉違えば、とりあえず、『蛮人』か『異人』と名称をつけて呼ぶ。そうでしょう？」

漢民族が、どのような基準で『蛮人』『異人』と決めて呼ぶか、正確にはわからない。

漢人である自分でさえも、深く考えたことがないのでわからない。

だが、父から聞く限り、『文化』が基準になっているらしい。

漢民族よりも、同等あるいは高度なものであれば『異人』に。それより下と判断されれば、『蛮人』になるのである。

要は、『知識』があるかどうかが決めてらしい。

だが、漢人以外の少数民族にも学問はある。知識もある。

しかし、文化があっても文字のない民族もいる。

そんな者達は、口頭で文化を伝えている。

文字を残さないことが、未熟と判断される。

仮に、書き記す文字、絵文字を使っていたとしてもだ。

漢民族は絵文字を使わない。
漢民族にはないのでおかしい。
けっきょくは、人数で圧倒する漢民族の意見が正しいと結論付けているのだ。

ちなみに・・・・本編とは関係ないが、日本の古代の巫女・卑弥呼についても、そのような傾向がある。
当時の日本には、「ひみこ」という巫女は確かにいた。
しかし、「ひみこ」に当てた漢字は、当時の中国王朝・魏（曹魏）が当て字で「卑弥呼」と命名したのである。
その当て字の意味は、漢字の通り【卑しい巫女】とのことらしい。
当時の中国の人々は、自分達こそが一番優れているという自負があった。
だからそれ以外の民族、朝貢に来た者達に対しては、はっきりと【格下】と区別していたのである。

作者的には悲しいことだが。

「その一例として、みなさんは山越人や他の少数民族でも身分を偽ることがあるのをご存知ですか？」
「知っておりますが・・・。」
「それに、我々は早い段階で気づくでしょうか？」
「それは――――・・・・！」
「言葉や習慣で気づく場合もありますが、それらを完璧に習得していれば、滅多なことがない限りバレないでしょう。」
「し、しかし！」
「漢人とて、戦の際は敵方のフリをして紛れ込むのです。漢人にできることを、他の少数民族ができないとお思いですか？」

蛮人ではなく、あえて『少数民族』と言う星影。

「ところで馬様はご存知ですか?数年前に陛下は、ある国を平定されたことを。」

「・・・南越国のことか?」

混乱するねえやの代わりに平陽公主が答える。

「左様でございます。その南越国のことです。」

望んでいた答えを聞き、満足げに星影は答える。

南越国（現在のベトナム中部）とは、ほんの数年前に漢の完全な領土となった場所のことである。

南越国の歴史は古く、秦の始皇帝が中原を統一した際、嶺南を攻略し、越の番禺（ばんぐう）（現在の広東省広州市辺り）を占領し、『南海』・『桂林』・『象』の嶺南３郡を置いたことにはじまる。

秦が滅び、その支配が放棄されると、その知事であった趙佗（だちょう）という人物によって『南越国』として独立したのだ。そのため、この国の人々のことを『越人』と呼ぶようになった。その後『越人』は、中国南部やインドシナ東北部を支配していたが、前漢に対して反抗を企てたのだ。この反抗は長期化したが、それを鎮圧したのが、前漢七代目皇帝の武帝であった。武帝は、前１１８年に南越国を征服し、そこに7郡を置いたのである。その際武帝は、広東省、海南島ばかりでなく、ベトナムの北部や中部をも制圧したのだった。これらの地域は、後に『交州（こうしゅう）』と呼ばれるようになる。

この数年後の前１１１年には、嶺南7郡は9郡へ変わる。

だが、物語の中では、嶺南はまだ7郡なので、7郡として話を進めていきたい。

「そこには現在、7郡が置かれておると聞いております。これにより漢は、南越国での南海貿易での利益が約束されました。」
「詳しいのぅ、安林山。」
「噂を耳にしたまででございます。その噂によれば、西域からの高級品が入るのは、日南郡からとのこと。海に接していることもあり、犀(さい)、玳瑁(たいまい)（海亀の一種で、その甲がべっ甲であるもの）、銀、銅、布も集まるとお聞きします。どれも、異国の者達を魅了するものではございますが、中でも、青銅器や鉄器を求める商人が多いとか。」
「銀や銅ではなく、青銅器や鉄器をですか？異国の方が？」
「異国の方もだよ、玲春さん。漢の青銅器や鉄器が精巧なのは、他国にでも周知の事実。それを求めて、南海貿易を求める商人が多いと聞いています。」
大商家の娘として、自分の知る限りの知識を話す星影。
「異国の貿易の特徴は、国内の貿易と違って受身であること。」
「受身？」
「玲春。」
話を遮った女官に、静かに平陽公主が注意する。途端に、身を震わせる少女。
怯える彼女の肩を抱きながら、お許しをと、代わりに詫びる星影。
それを微笑しながらうなずいてみせる平陽公主。
許しが出たところで、中断していた話を再開した。
「元々、漢と異国の貿易は、漢同士の取引とは違うのです。」
「どう違うと？」

「先ほど申し上げた通り、受身だという点です。漢と異国との取引は、常に漢が受身なのです。我々と異国との商談・取引は、あくまで『漢』が受身の形なのです。」
「受身なのですか・・・？」
「つまり、こちらが待っている側なのですか？」
「ええ。異国から漢に来ることはあっても、漢から異国の、それも西域の先まで行くことはできません。」
「なぜ行かないのですか、安様？」
「それはね、玲春。危険だからだよ。」
「危険じゃと？」

不思議そうに聞き返す元・皇女に彼女は答えた。

「向こうには漢が『蛮人』と呼ぶ方々よりも、はるかに恐ろしく危険な蛮人が多いそうです。ですから、危険をおかしてまで行かないし、行くこともできません。行ったとしえても、せいぜい、錫蘭（スリランカ）あたりまでですよ。」
「そうなのか？」
「はい。ですから、西域から漢まで一つの船で来たというのが解せません。西域から漢まで来るには、船を乗り換えてこなければならないからです。一つの船でここまで来るのは、とても要領が悪い・・・というより、無理なんですよ。」
「それは・・・危険な蛮人がいるからですか？」
「それもありますが、問題は『道』ですね。」
「道じゃと？」
「はい。陸に坂道、でこぼこ道、獣道があるように、海にもそういった道があるのですよ。だから、海路によっては船が壊れたり、使い物にならなくなります。途中で何らかの事故が起こるのです。」
「それでは、一つの船で来るのは無理ではないか・・・？」
「そうなんです。だから普通は、仲介者を通して来るんですが・・・

。」

「それが、直接来たとなると・・・・・・・！」

平陽公主のつぶやきで、馬瞭華の顔色は青白くなる。

「ですから幻人が・・・船を乗り換えずに、本国から来たというのが解せませぬ。それに聞いた話では、幻人の国は漢に負けぬ大国で、多くの国々が支配下にあると聞きます。それなら、支配国から近い国のものが品物を取引すればよいだけの話。そのような要領の悪いことをしないでしょう。」

「で、でも安様！相手は平陽公主様でございます！陛下の実の姉君でございますよ！それなら――――」

「それだけのことをして当然だと？」

「はい！」

「仮にそうだとしたら、さらにおかしい。ここにいらっしゃる平陽公主様は、陛下にとってなくてはならない頼もしい姉君様だよ？それほどのお方に対して、たった五人で尋ねてくるかい？」

「あ！」

「百倍、千倍の人数で来ないとおかしいお相手だよ？無礼極まりない外交を、幻人がするとは思えないな。第一、このような粗悪品を薦めるかい？」

星影の問いに、玲春は横に首を振る。

「それにね、多分西域人・・・幻人（ローマ人）だと名乗った商人は、昔から南海貿易と関係の深い占尼人（中部チャム族）や藍人（南部チャム族）、あるいは扶南国の人間（クメール人）だね。漢人だと名乗った通訳と品物を運んだ女性達は、日南郡の越人だと思うよ？」

「え？」

「幻人を名乗った者以外は、漢人。おそらくは、役割分担を決めて、それぞれの役を演じていたのでしょう。」
「え、演じていた!?」

それまで黙っていた馬瞭華が口を開く。

「あの者達は、芝居をしていたということですか!?」
「いいえ。漢人の商人役だけは本物でしょう。」
「馬鹿をおっしゃらないでください!女二名はともかく、通訳が越人のわけがありません!」
「なぜです?」
「肌の色も、目の色も、漢人と同じなんですよ?越人にしては、肌の色が薄すぎます!」
「越人の中には、漢人に近い肌の色、目の色の者もいます。とても少ないですが、探せば似ている者はいますよ。それは、漢人にも同じこと。漢人であっても、多少髪の色が薄かったり、肌が黒かったりするではありませんか?」
「り、理由にはならないでしょう?それだけでは!?」
「ええ、あくまで一部ですから。だからこそ、日南での交易の話をしたのです。」
「どういうことですか・・・・!?」

瞭華の問いに星影は言った。

「現在の交易は、海を渡っての物品取り引きから、陸路を使った取引まで、さまざまございます。ですが、陸路における西域との商売取引のできる道ができたのはつい最近のことです。つまり、交易の主流は海路なんですよね。」
「そうなのですか、安様?」
「そうだよ。近頃、異国から入ってくる品のほとんどが海路を利用

している。陸路からのものもあるけど・・・これは少ないね。」
「なぜですか？」
「原因はお金だよ。張騫様が重い課税をかけたことがきっかけさ。おかげ様で、商人の多くは地主になったそうですが。」

事実、星影の実家、劉家と取引のあった一部の商人は地主となっていた。
張騫が、どういう考えがあって、容赦ない課税を課したのかはわからない。
しかし、商人を追い込んだ課税は、今度は自営の農民を追い込んでしまった。
風の噂では、元・商人の地主に、泣かされる農民が増えたらしい。

（どこかを締め付ければ、別のどこかが締め付けられる。まさに負の循環だな・・・！）

そんなことを考えながらの発言。彼女の言葉の意図を、相手はしっかりと理解していた。

「嫌味な奴じゃな。貴様は何が言いたいのじゃ、安林山？」

急かすように平陽公主問う。それに流されることなく、落ち着いた口調で星影は言った。

「もしやとは思いますが、馬様。その商人に、青銅器や鉄器をお渡しになりませんでしたか？」
「なっ！？」
「珍しい物と話を聞かせてくれた褒美に、青銅器や鉄器を下賜されたのではありませんか？」
「安林山殿・・・なぜあなたがそのことを・・・！？」

「やはりそうでしたか・・・・。」

女官頭の返事に、小さく息を吐きながら星影は言った。

「商人の中には、ずる賢い奴がいましてね。大金を出して青銅器や鉄器を買うより、高貴な方々を口先だけで丸め込んで、買うよりも安くもらってしまおうと考える奴がいるのです。」

「なんですと!?」

「異国の珍しい物といえば、どんな人間でも気を惹かれます。おだてられて、讃えられて、気分がよくなれば、財布の口だけでなく、気持ちまでも大きくなるものです。」

「安林山殿・・・!」

「で、ですが!越人が、平陽公主様をだます理由が――――!」

「最近の日南郡は、越人を差し置いて、漢人が交易の主権を握っていると聞きます。そうなれば、昔から商売をしている日南郡の者は、商売がやりづらいはずです。」

事実、現・皇帝が日南郡を平定してからは、かねてから付き合いのあった越人との取引が少なくなった。それと入れ替わる形で、日南郡での取引相手が漢人へと変わっていた。

「陸路に金がかかるなら、金のかからない海路が主流になるのは必然。海路を使うとなると、日南群で取り引きされると考えるのが賢明でしょう。さらにいうならば、日南は、昔から越人が主として交易を行っていた場所。陸路の交易が難しくなった漢人が、流れ込みやすい場所でもあります。」

「そうなんですか・・・?」

「そうだよ、玲春さん。『漢人』と名乗るだけで、越人が築いたものをかっさらうことができるのですから。」

あざ笑いながら言えば、平陽公主などはあからさまに嫌な顔をした。

「だから、商人共々共犯だと言うのか?紹介してくれた商人まで、わらわを欺いたと?」

「一人だけ知らなかったというには、大掛かり過ぎます。宮中に出入りできるということは、それだけ優秀な証拠。警戒心や慎重さも人一倍なはずです。」

「だからこそ、わらわは信じられぬのじゃ!その商人も、偽物と知らなんだかも知れないじゃろう?」

「いいえ。商人は知っていて、あなた様にこのようなまがい物を薦めたのです。」

「よくそれだけ、小賢しいことが言えるものじゃ!商人に非があると決め付けすぎであるおう?茶器についてはともかく、西域から漢までの道のりについては、単に通訳が西域人の言葉を間違えて訳しただけじゃろう。」

「平陽公主様・・・・!」

あまりの意地の張りように、あっけに取られる星影。

「しかも安林山よ・・・お主は、その商人を、紹介してくれた商人を知らぬではないか?どのような男か、知らぬだろう?」

「人柄まではわかりません。しかし、平陽公主様がそこまでおっしゃられるということは、それだけ信頼できる方というのはわかりますが――――――」

「つまり貴様は、何があっても商人に非があると決め付けるのじゃろう?」

「・・・確かに私は、平陽公主様がご存知の商人の方を知りません。ですが、どんな人間であるか知ることはできます。」

「ほぉ・・・どうやって知ると?」

「品物です。」

「・・・なんじゃと？」
「彼が商人ならば、扱っている品物を見ればわかります。まっとうな商売をしようとしているものかどうかは、品物の状態や質を見ればわかります。仮に、高価なものでなくても、大事に扱っていれば、それが品物の状態に出てくるのです。」
「安林山・・・！」
「何度も申しますが、こちらの品物は、肩書きとまったく違う最悪な品です。それだけで、その方がどのような御仁か十分に理解できましたよ。」
「それだけで決め付けるか？」
「それだけで十分なのです。それに決め付けているのではなく、そう思わざる得ないのです。」
「決め付けておるではないか・・・！？」
邪悪とまではいかないが、ただならぬ気を発する女主。
それを察して、彼女のねえやが口を開いた。

「安林山殿の申すことは、よくわかりました！しかし・・・何度も申しますが、われらが申す商人の方は、古くから平陽公主様と付き合いのある者なのですよ。」
「馬様。」
「平陽公主様はもちろん、私や他の女官達も信頼しているのです。その者が、わが主に恥をかかせるようなものを持参し、薦めたとは信じられぬのです。」
「許羽は・・・あの商人は、わらわが昔から信頼をしておる男だ。最近は、体を壊したこともあり、なかなか来てくれなんだ。それが、わらわのためにと、西域の品と共に来てくれたのじゃ。あの真面目だけがとりえの男が、そんなことをするはずがない！」
「平陽公主様・・・。」
「あれほど気骨のある商人は他にはいない！だが――――――耳が遠

く、老いてしまった。きっと、耳が遠かったせいで、通訳の言葉を聞き間違えただけじゃ！」

（まだそんなことを言うのか？）

いくら親しい仲とはいえ、これだけ証拠がそろっているのにまだ信じる気？

（許羽か・・・）

その名前に覚えはなかった。

藍田出身の星影が、知るはずもない都の宮中を出入りできた商人の名。

平陽公主様の話を聞く限り、悪い人間には聞こえない。

軽率な買い方をしたのも、その許羽という老人を信頼してのことか。

（信じてあげたいのは山々だけど・・・・。）

何度目かになる視線を、問題の茶器へと送る星影。

（品物を見る限り、とても良い商人には思えないんだよね・・・。）

気持ちでは、平陽公主達の話を信用したかった。

しかし、大商人の娘としての感が、それを許してはくれなかった。

星影が悩む一方で、当の女主人は弁護を続けていた。

「通訳と異人が共謀して誤魔化せば、数の上からでも商人が不利じゃ。言葉にしても、通訳と異人の間では成立するが、商人はまるで通じぬ。商人にはわからぬ、何らかのやり取りがあっても仕方ない。

」

「西域で商売をする商人のほとんどは、ある程度は向こうの言葉わかります。最低でも、単語ぐらいはわかりますよ。」

「わかるものか！西域人がどうかは知らぬが、山越人や南方や北方にいる蛮人の言葉を聞いたことがあるか？わけのわからぬ、汚らしい言葉を使う。」

（汚い？）

そう断言すると、馬鹿にするように笑う元・皇女。

「漢の言葉も理解できぬ野蛮人。あんな卑しい者の言葉を基準にするのは癪じゃが、それを思えば、わかりづらくて当然じゃろう？」

「そうでございますね。」

平陽公主の言葉に、馬瞭華をはじめとした女官達が納得する。

「西域の者の言葉を聞く機会はございませんが、蛮人の言葉でしたら、存じております。わかりづろうございます。」

「馬様のおっしゃるとおりですわ。」

「卑しい者の言葉など、漢人はわかりません。」

「その通りでございますよ。」

そんな主人に合わせるように、幕の側にいる女官達も小さく笑う。

「玲春、お前はどう思う？」

ただ一人、若い宦官の隣で笑わずにいた少女に平陽公主は問う。

彼女は、自分が問われたことで、一瞬驚いたように頭を下げる。

そして、星影を気にしながら小さく答えた。

「・・・・・・・異人の言葉を聞いたことがございません。」

蚊の鳴くような言葉でそう答えた。途端に、周りの女官達が笑い始めた。

（なぜ笑う?）

周りがなぜ笑うのか、その笑いのツボがわからない星影。

対する平陽公主は、自分の侍女の答えを受け、ため息をつきながら言った。

「聞かずとも判断せよ。異人は卑しい者。そんな『野蛮人』が上品な言葉など発するはずがなかろう?悪臭放つ異民族が。」

“ことあるごとに『異民族』は、『野蛮人』は、と、蔑(さげす)み、我らのすべてが悪であるかのように言ってきたのは誰だ?”

琥珀の言葉が頭をよぎる。

そうだな・・・琥珀。

私は最初、お前が漢人に対する自分を皮肉っているのかと思っていた。

でも、彼の言う通りだ。

彼らを危険だと、野蛮だと決め付けたのは漢民族だ。

しかも、上流階級である皇帝の姉本人がそう断言するのだ。

――――――――――――異人は卑しい者

癪に障った。

宮中の女達の言葉が、星影の癪に触った。

「確かに、そうも考えられますね。」

急に、静かな口調でいる宦官に、女性達の笑いはやむ。

「私も、己が漢民族であることを誇りに思っておりますが。」

星影も星影で、平陽公主の意見を否定はしなかった。しかし――――

「『卑しい』は余計でしょう?」

一言だけ否定した。

その言葉で、全員の視線が自分に集まる。

それを無視して、目の前でさえずる女達に向かって星影は告げた。

「南方・北方にいる漢民族でない者を、卑しいとおっしゃるのはよろしくないです。」

「あ、安様!?」

「平陽公主様だけに限りませんが、漢民族でない者を『卑しい』と表現するのは、よろしくありません。」

「なんじゃと?」

「我ら漢民族がすばらしいのは間違いありません。しかし、漢民族

でなければ、『卑しい』と思うのはおかしいでしょう？漢民族でなくても、学があり武のある者もいます。いるのにもかかわらず、それを知らないし、認めていない。」

「そのようなこと、今は関係ないだろう？」

「今申さないと、次に申す機会がないから申すのです！」

低く怒鳴りつけるようにいう星影の声に、馬瞭華をはじめとした女官達の体が震える。

平陽公主も、ふいをつかれたように目を見開く。

「・・・仮に、あなた様の仰る通り、通訳の者がおかしな訳し方をしたとしましょう。」

「あ、安様？」

急に話を戻した宦官に、玲春は声をかける。

それに答えることなく、星影は自分の意見を言った。

「平陽公主様の仰るとおりでしたら、この器についてはどう説明されるおつもりですか？」

認めない女主に対して、割れた破片を差し出す星影。

「光沢も、上薬も、土も、刻印も、すべてにおいていい加減なこの器！これについては、どう説明するおつもりです？」

「それは――――！」

「この器の存在自体が、商人にも非があるという、動かぬ証拠なのですよ？」

「ちゃ、茶器についてはともかく、西域から漢までの道のりについては、単に通訳が西域人の言葉を間違えて訳しただけじゃろう？」
「相手を信じたいお気持ちはわかります。ですが、それならなおさら、偽物だと知らなかったというのは腑に落ちません。」
「しつこいぞ、安林山！」
「しつこいですとも！命を懸けて話しているのですから！」

平陽公主が、親しい相手をかばう気持ちはわかる。だが、第三者である自分まで、それを受け入れてしまっていけない。そんなことをすれば、商人の娘の名誉に傷がつく。
だから、情を捨てて厳しく告げた。

「『平陽公主様へ』と薦める品なら、十分に確認しているはずです。仮に何者かの策略で、すりかえられたとしても、品物が変わった時点で気づくはずです。」
「安林山・・・！」
「経験不足であろうが、年が若かろうが、見た目が悪かろうが、それらが商人の良し悪しを決める基準ではありません。」
「では、貴様の申す基準とはなんだ・・・・？」
「勇気です。」
「勇気？」

その言葉に、平陽公主の眉がつり上がる。

「勇気がなければ意味がありません。悪いものは悪い、偽者は偽物と、ハッキリと言い切れる勇気です。」

良い物があれば、欲しいと思うのは人の性（さが）。

「いくら本人の前でも、偽物だと気づけば、正直にそう伝えるべき

です。」

職人が、作ったものに上・中・下と評価をつけて売買する。
それが商人の仕事。

「それによって、己が悪い立場になったとしても、それは仕方がないこと。一番いけないのは、偽物だと言わなかったがために、取引した相手に不利益を与えることです。」

幼い頃は、そんな父の仕事に違和感を抱(いだ)いていた。
同じような商品に、差なんてつけたくはない。
だって、汗水流して、一生懸命作った気持ちに差なんてない。
それなのに、どうして差をつけるの？
そしたら父上が言った。

「これは、金銭的な問題だけではありません。本物だと思って他の者に紹介したら、偽物だったと恥をかかせたり、笑い者になったり、場合によれば怒りを買ってしまうことです。信用も一緒に無くしてしまうのです。」

同じように作って、差があるからこそ、品物の価値が上がる。
他の者に負けまいという職人の心が、さらなる逸品を作り出す力となる。
それを求める者のためにも、間違った品を渡してはいけない。

「それが大切な相手なら、お客様ならなおのこと。あなた様のお立場などを考え、言いそびれたのでしたら仕方ないかもしれませんが・・・・。」

偽りの品を渡してはいけない。

「恐れて言えなかったのなら、あまりにも骨がない。」

人は、値下げや買い叩きを汚いというがそうではない。
どんな場であっても、正しいことがいえないものが恥なのだ。
それによる不正で儲けた金など、我ら商人にとっては恥でしかない。
嘘の取引をすることが一番汚いのだ。

「商人として、嘘の取引をするのが一番汚いのですよ。」
「安様・・・・。」
「私が申し上げたいのは、日南郡は異国の品が集まる入り口である一方、すぐに交換できる場所でもあるということです。また、言葉さえ通じれば、異国の情報についても交換できる場所です。」
「だからなんじゃ？」
「私が思うに、これは日南郡の商人が西域の商人と偽り、金儲け目的で身分を偽って、あなた様にこのような品を売ったのではないでしょうか？」
「馬鹿な！これを持ち込んだ商人は、異国の者でしたわ！？通訳までつけて、やってきたのですよ！宮中で、それほど手の込んだことをしてまで、命の危険を冒してまでして、そこまで――――――！！」
「金儲けのためなら、危ない橋でも渡りましょう！金に貪欲な物はそういう者です。もっとも、相手が宮中を、平陽公主様をそれほど恐れていなかったとしたら？」
「え！？」
「『王様の娘』ということしか聞いていなかったのなら、世間知らずでだましやすいと思ったのでしょう？ましてや、宮中という限られた聖域で育ったのなら、人を疑うこともないと思ったのではないでしょうか？」
「無礼な！平陽公主様を愚弄するのか！？」
「ただし、一部は訂正いたしますよ！越人の方が、金目当てでこの

ようなことを起こしたとは思えません。」
「では、なんだというのです!?」
「張騫様が、陸路に高額な税をかけたおかげで、陸路で商売をしていた漢人が海路へと仕事場を変えたのです。おかげで、海路で商売をしていた越人の商人は、漢人の商人に仕事場を奪われたのですよ。そうなれば、一泡吹かせようと考えるでしょう。」
「無礼な!安林山殿、あなたは、陛下の国政を批判する気ですか!?」
「とんでもございません。ただ、漢人以外の少数民族のみが、悪者扱いされるのが納得できなかっただけです。」
「・・・随分、野蛮人共をかばうのじゃな?」

低めの声で平陽公主は問う。

「・・・いけませんか?」
「野蛮人がなんの役に立つ?」
「平陽公主様が生まれ育った、宮中ではなくてはならない、大きな存在かと存じます。」
「野蛮人が?宮中にいるのは、自慢すべき父母と瞭華のような優しいねえやや、気の利く女官達、それに優れた文武百官のみじゃ。たわけたことを申すな!」
「では、宮中での雑務の大半と、女人には難しい力仕事荒仕事をこなしているのは、どのような方々でしょう・・・?」
「っ!?」
「男として生まれながらも、皇帝・皇族にお遣えするため、男でも女でもない者に、生まれ変わった者達ではないでしょうか?」
「・・・・!」
「宮中で支えとなっている者の大半は、あなた様が蛮人とさげすむ者達が大半なのですよ・・・!?」

厳しい口調で言う宦官に、その場の全員が言葉を失う。
玲春も瞭華も、他の女官達も、複雑な顔で黙り込み。
その中でも、一番の権力者である女性は、目を見開いたまま黙り込んでいた。
言い返すことなどできない。
星影が言った言葉は、間違いなく――――――――――

「・・・・・正論じゃな。」

筋道を通した正しい話だから。

それだけ言うと、肘掛に体を預けてもたれかかる女主人。

「ついでに申し上げますと、西域の器が高いのは上乗せがあるから利益です。」
「上乗せじゃと?」
「はい。西域の器が高いのは、入港を待ってその貨物を買い、さらにこれを内地に転売し、その際につける上乗せを利益としているのです。これは、異国のものすべてにおいて同じです。海や砂漠やらを通って漢に輸入されるから高いだけです!そこらを通る交通費や手間賃を除けば、漢の品とたいして変わりません。」
「それでは・・・高価ではないのですか?」
「そうだね、漢の高級品と同じくらいの値はあるよ。だけど、人の命以上の価値なんてないから。」
「で、でも安様。それなりに高価な素材を使っているからこそ、高いのではないのですか?」
「違うな!値段が高いからといって、良い素材を使っているとは限らない。むしろ、漢にあるかないかで値段が上がったり下がったりするんだよ!珍しければ、そういうのが好きなものがこぞって買う!人気が上がれば、品数が限られていれば、金額ばかりが上がる!

商人が頻繁に来れない分・・・・ね。」

頻繁に西域の商人は来ないだろう?と、玲春に問えば、彼女は納得したようにうなずく。

「確かに・・・西域の商人様がいらっしゃるのは限られています・・・。」

「だから現地で買うより、高くなるんだよ。」

そう言って断言する星影。彼女がそういうのには根拠があった。

普段の彼女は、なんの証拠もなしに断言することが多いが、品物に関しては別だった。

星影の生家は、さまざまな品物を取り扱う大商家なのだ。ある程度の品の価値はわかる。

小さい頃から、本物の品だけを見て育ってきた星影。

大商家の娘として、知らず知らずのうちに、品定めをするためのすべを学んでいた。

そんな星影の長年の経験から言わせれば、平陽公主の持っていた茶器は偽物なのだ。

「それが――――――・・・・お前がわらわを哀れんだ理由か?」

「そうです。後学のために、お伝えしているのです。我ら漢人の目から見れば、偉人の見分けなどつきません。ですから、相手の話のみで判断するのは危ないものです。」

冷ややかな視線を送れば、問題の人物は静かに黙り込んでいた。

「平陽公主様が、許羽様という商人の方をかばわれるお気持ちはわかります。ですが、あなた様が相手を思われてかばう優しさは、許

羽様にとってよいことではございませんよ。」
「なんじゃと?」
「あなた様がこれ以上許羽様を庇われれば、許羽様はまた同じ間違いを犯すでしょう。」
「貴様、許羽を罪人扱いするか?」
「恥を認めたくないのでしたら、それはそれでよろしいではありませんか。ですが、あなた様にこの器を薦めた連中になんらかの処置はするべきです。第二の被害を防ぐためにも、対処してくださいませ。」
「誰に向かって偉そうな口をきいている?」
「先帝と王氏のご息女にして、現・皇帝の実姉・平陽公主様にです。」
「無礼者!!首をはねるぞ!!?」
「そう言えば、誰でも逆らわぬとお思いか!?」
皇帝の姉相手に、一歩も引かずに自分の意見を述べる星影。
玲春をはじめとした若い女官は、ハラハラしながらその様子を見つめる。
「さすが霍去病の生まれ変わりよ・・・・!」
普通の者なら、皇族に怒鳴られたら、恐縮して謝るのが常。
ところが目の前の宦官は、縮み上がるどころか怒鳴り返してきた。
長年、皇女に仕えた老女でさえ、この異常事態に動きを止めていた。
「何度も申し上げますが、私は霍去病将軍の生まれ変わりではござ

いません。」

問題の宦官は、真顔でそう言うと、少しだけ声を落としながら言った。

「・・・失礼いたしました、平陽公主様。」

「なに！？」

「大変無礼なことをいたし、申し訳ありません。平陽公主様。」

恭しく頭(こうべ)を下げて謝った。

しかしその心中は・・・・

（めんどくさい公主様だ。）

相手の気持ちはわかっていた。

わかっているが、怒らせたままでは話が進まない。

エセ宦官ながらも、宦官の心得(こころえ)はちゃんと会得(えとく)していた。

「無礼の数々は、お詫びいたします。ですが、平陽公主様のことを思えばこそ、失礼な発言をいたしました。」

「あ、安林山殿・・・・！」

「それに、平陽公主様のそのようなお声を聞いては、切り捨ててしまった、私の男を思い出してしまいます。」

「なっ！？」

その言葉に、女官頭や女官達が赤面する。

「あなた様のような大輪を困らせて、可愛らしい花達（女官達）も輝きを失ってしまいます。」

「・・・・・・次から次へと、口が減らぬ好色よ・・・。」

星影の口説き文句に、あきれ気味に笑う平陽公主。
そして、最初の落ち着いた声色に戻っていた。

「好色などと、とんでもございません。それに『英雄』でしたら、我が国では皇帝陛下が一番のつわものと存じます。」
「貴様・・・・。」

【英雄色を好む】
＝女好き・男好きの好色者。
そんな意味を込めてさりげなく言った言葉。
それをどこまで皇帝の姉が理解したかわからないが、あきれ気味に若い宦官を見つめていた。

「少々、感情論になってしまいましたので、話を元に戻しましょう。」

そう言うと、その場に片膝をつく星影。
そして、笑みを引きながら言った。

「器にあるべき光沢、上薬、土、刻印、器を扱った人。以上、五つの不審な点を考えますと、平陽公主様お持ちの器は、西域のものではなく、間のものであると考えられます。」
「安様！」
「安林山殿・・・！」

手にしていた破片を目の前に置くと、平陽公主様を見る星影。

「あくまでこれは、一宦官の意見です。幸い宮中には、神儀などに使う陶磁器などを作るための窯があると聞きます。そちらにいらっ

しゃる、漢全土から集められた選りすぐりの陶工や職人方にご確認した方がよろしいでしょう。」

そう告げると、恭しく頭を下げる星影。

若い宦官の言葉を最後に、部屋の中は異様な静けさの中で静まり返るのだった。

第六十四話　鑑定終了（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！

紀元前の東洋と西洋の器について書いてみました（苦笑）
話の中で出てきた「西域の器」は、古代ギリシャ・ローマの器を参考にしました。
それがローマの『赤つや焼き』です。
これは、ほとんどが創意を働かせて作られたもので、無装飾と装飾のあるものにわかれています。また、丈夫で運搬に優れており、日用品として使われていた器になります。
『赤つや焼き』以外の器は、壊れやすいという理由で、作った地域でしか使われなかったそうです。
ちなみローマにおける器の発達は、「征服した国をできる限り本国と同じようにする。」というローマ人の考えに基づくものらしいです。
すごいですね・・・大帝国・ローマ（汗）

第六十五話　決行予告

「よくもわらわに恥をかかせてくれたな！！」
「本当のことを申して、何が悪いのです！？」
「黙れ！皆の者、かまわぬ！！こやつを射殺してしまえっ！！」

怒声と共に、兵が水のように沸いて出てきた。
権力者の合図と共に、大量の矢がいっせいに星影向けて放たれる。

「く・・・そっ！」

（やめろ）

特注の剣で必死に防いでいた星影。だが、攻撃は止むことがない。
次第に奪われていく体力。増えていく傷と、服に広がる赤い色。

（やめろ！）

そしてついに――――――――――――――・・・・！！

「うっ！？・・・あぁあああ――――――――――――！！！」

顔以外の場所を残し、全身ハリネズミになる星影。

「ほっほっほっ！！さすが弓の名手達！城門にさらす首は、綺麗なまま残したか！」
「こっ・・・この外道が・・・・・！！」

笑い声に対して星影は悪態をつく。

（やめろっ！！やめるんだ！！）

「すまない・・・！私の可愛い、い、妹・星蓮・・・！」

彼女の手から剣が滑り落ちる。

「ごめんね・・・林山――――――――・・・・・！」

声にすることなく、親友の名を口につむぐ星影。

（やめてくれ！そんなことを言わないでくれ！！）

「二人を・・・・再会させてあげたかった・・・・・！」

その言葉を最後に、彼女の動きが完全に止まる。

・・・・そんな。

うそだろう？

なあ、おい！おい、おきろって！

おい！おい！おい！星影！！なぁ！！

目を閉じて動かない親友に向かって彼は叫んだ。

「死なないでくれ――――――――――――――――――！！」
「ぶっ！！？ゲッホッイ・・・オオッ！」

叫んだと同時に、激痛が俺を襲った。

「痛っ！？せ、せせっ星影っ！！？」

その痛みは、彼を覚醒させる効果を持っていた。
体を起こし、辺りを見回す青年。
視界の中には、やわらかい緑色と黄色い花びら。
頬を心地のよい風がなで、頭上では温かい光が彼を照らしていた。

「夢・・・・・・・・？」

呆然と空を見ながらつぶやく男。
彼こそ、現在後宮で『安林山（あんりんざん）』として動く劉星影の親友にして、彼女の妹の婚約者。
安林山その人だった。

「なに寝ぼけてんだよ、星影！？」
「せっ・・・！？あ、いや・・・なんでもない・・・・。」

ただし、彼も星影同様、入れ替わりを行っていた。
そのため、今の名前は『劉星影』となっている。
彼の前では――――――――

「て・・・・あれ！？義烈殿！？なんでここに・・・・！？」

「ゲッホ！お前に会いに行ったら、宿のおかみがここだって教えてくれてな！起きるまで一杯引っ掛けてたんだが、おめぇーが叫ぶから吹いちまったじゃねぇ！？あ～もったいねぇ！！ゲッヘッ、ゲッヘッ、ヘェッ！！」

咳き込みながが、酒瓶を見せる男――――凌義烈（りょうぎれつ）は言った。
林山が都に来てから知り合った男で、『百面夜叉の義烈』の通名を持つ侠客である。
雲散くさい男ではあるが、婚約者救出のために協力を仰いだ人物である。

「昼寝するのはいいけどな、叫びながら飛び起きるのはどうかと思うぜ？お前、額にコブできてるぞ。」

そう言われて、痛みのする場所を触れば膨れていた。
その痛みと共に、自分がここにいる理由を彼は思い出した。

婚約者の星蓮が、皇帝の妻として連れて行かれた。
彼女を奪回しようと、星蓮の姉にして、自分の親友である星影と共に都にやってきた。
星影の提案で、自分と星影は入れ替わり、星影は宦官として宮中に潜入した。
そんな彼女から、連絡が来たのは半月前。
星蓮の情報は掴めなかったが、代わりに情報をつかみやすい地位に彼女はついていた。
その後、『また来るから！』という親友の言葉を頼りに、訪ねてくるのを宿で待っていたのだ。
宮中に入る前、交わした星影との約束。
『密会場所である宿から林山が離れないこと。』
星影の場所がわかっていても、場所が場所だけに訪ねて行けない。

危険を伴うが、町にいる自分の元に会いに来てくれた方がいい。
万一の時は、人ごみにまぎれて逃げやすいという利点もある。
これが宮中であれば、即刻でつかまるだろう。

（だから計画を練った当初も、宿を変更することは考えていなかったんだが・・・・。）

しかし林山は、ある事情からその宿にいることができなくなっていた。
それを星影に伝えたいが、その後彼女はなかなか訪ねてこなかった。
どうするべきかと、部屋にこもって考えていた林山。
考えれば考えるほど、悪い考えばかりが頭に浮かんでしまう。
けっきょく、このままではいけないと思い、気晴らしを含めて外に出ることにした。
宿のおかみに、木々の綺麗な場所を教えてもらった。
都にありながら、どこか故郷に似た場所。
そこで彼は、武術の修練を行った。
久しぶりにかく汗と充実感に、気分も落ち着いた。
小さな木陰を見つけ、そこに寝転んで小鳥のさえずりに耳を傾けていたのだが――――

（そのまま寝てしまったのか・・・。）

夜に訪ねてくる親友のために、ずっと寝不足だった林山。
安心したことで一気に疲れと睡魔が彼を襲ったのだった。

（そうでなければ気づくはずだ。普段の俺なら・・・）

目の前にいる人物の気配に。

「ほれ、気付けに一杯飲んどけ！どんな夢見たのか知らねぇけど、『死なないでくれ』ってのは、あんまりいい言葉じゃないからな。」

嫌な夢だったんだろう？と、自分に酒を持たせながら男は言う。

「・・・・ああ。」

嫌な夢だった。

悪夢以外の何ものでもない。

よりによって、星影が、親友が射殺される夢なのだ。

（なんであんな夢を！？縁起でもない――――――――――――――――！！）

悪い予感を振り払うように、一気に酒をあおる林山。

「おー！おー！いい飲みっぷりじゃねぇか！？」

それを上機嫌で盛り上げる義烈。

「いいか、夢なんてただの幻覚だよ！特に悪夢なんてのはな、たいていが逆夢（さかゆめ）なんだよ。」

「さかゆめ・・・・？」

「そうだ！例えば、金を落とす夢を見たとするだろう。それは、現実で金を拾うっていう予告だったりするんだ。」

「夢でみたことと、正反対のことが起こると？」

「そういうこと。だからお前が見た悪夢も、現実じゃ真反対のことが起きるだろうよ！」

そうなのかな・・・・。

（星影がいる場所を考えれば、殺される確率の方が高いのだが・・・。）

義烈の励ましに対し、とても現実的なことを考える林山。

「大体な、夢なんてのは信じる奴が馬鹿だ！」

「義烈殿は・・・・信じないのか？」

「馬鹿！義烈でいい！」

「痛っ！」

林山を小突くと、その肩に腕をまわしながら義烈は言った。

「いいか、馬鹿たれ！夢なんてのは矛盾の塊なんだよ！」

「矛盾？」

「おう！お前の見た夢を思い出してみろ！現実と比べれば、必ず矛盾している場所が多いんだよ！考えてみろ！仮にお前が、デカイ城を作って贅沢三昧してたらどうする！？おかしいだろう！？」

「え・・あ・・・。」

「なんのために城を作る？城を作るための金はどうやって集める？それ以前にそんな大金持ってるか？しかも、贅沢してるのは今の姿のお前だ！城作るだけで、どれだけ時間がかかる？それにあわせて年取ってねぇとおかしいだろう？」

「・・・確かに。」

城を作る間（ま）には、星蓮と暮らすための新居を作った方がいい。

それに自分が見た夢にしても、義烈の言うような『矛盾』があった。
星影を射掛けるように命じた相手。
男ではなく女だった。
人一人の命を簡単に、言葉1つで奪うことのできる人間と言えばただ一人。
皇帝を除いていないだろう。
いくら宮中・・・後宮が女の園と言われていても、夢に出てきたような過激な女性がいるはずない。
皇帝の次に、権威のある皇后に関しても、穏やかで争いごとを好まないと聞いている。
それに――――――――・・・・

「すまない、義烈。貴殿の言うように、あれはただの幻覚だ。」
「おお、わかったみたいだな?そうだぜ~夢なんて、そんなもんだよ!悪りぃ夢見たからって、いちいち気にしてちゃあ、心配のし過ぎで早死にしちまうからな!?」

ハッハ!と、笑いながら林山を引き寄せる男。

「気にすんな!人生『塞翁が馬』って言うだろう!?そんなもんだ!」
「・・・・そうだな。」

あれは幻覚だ。
一番有り得ない光景が、あの中にはあった。
俺の見た夢で、星影は死んだ。
星影の状況を考えれば、死ぬ可能性はあるだろう。
だが、夢の中で見た親友は親友ではない。
彼女は、命が尽きる寸前、『手から愛剣を放した』。
武人の一部でもある武器を、『手放した』のだ。

それがおかしい！！

あいつは、なにがあっても武器を捨てるような奴じゃない。

最後の最後まで戦い抜く奴だ！

痛みや恐怖に負けて、武器を手放したりはしない！！

なによりも――――――――――――――――

（一人で絶対に死ぬ奴ではない・・・・・！！）

あのような不利な状況で、一人でおとなしく死ぬはずがない！！

（自分が助からないとわかれば、一人でも多く道連れにするまで戦う奴だ。）

そういう根性を持っている女だ。

一方的にやられて、死んでしまうような性質（たち）ではない。

動きを止め、死んでしまったと油断させるだろう。

そして、首を取ろうと近づいてきた相手を刺し殺して絶命する方法をとるはず。

普段から抜け目のない奴が、あんなきれいな死に方をするはずがない！

絶対に死んだふりをして、敵を道ずれにして死ぬはずだ！
なによりも、あいつは絶対に死ぬような奴じゃない！！
それを俺は、誰よりもよく知っているはずなのに――――――――――。

「あれは夢だ・・・！」

それを信じてしまった自分。

二度と信じないように。
そんな幻を見ないように。

「現実になってたまるか・・・！」

己に言い聞かせるようにつぶやく林山。
その姿を、目を細めながら見つめる義烈。そして、なにかを察したように口を開いた。

「・・・お前さんが納得したら、この話は終いにしようぜ？」
「そうだな。」

義烈の言葉に賛成する林山。

「それであなたの話は？」
「話？」
「とぼけないでくれ。俺に用があったからこそ、酒を飲みながら起きるのを待っていたんだろう？」
「ほっほぉ～なかなか頭がまわるようになったじゃねぇか？」
「あの（・・）返事をしていないんだ・・・。そう考えるのは普通だろう？」

用件はわかっていた。
彼はあの返事を聞きに来たのだ。
あの返事を――――――――――――

（どう答えるべきか・・・。）

林山が言う義烈からの返事とは、今彼を一番悩ませていたことだった。

『百面夜叉の義烈』は、【ある事情】を作ってくれた、ありがたいような、ありがたくないような男。
酒場で彼に助けてもらったことがきっかけで、郭勇武のことを知ることができた。
さらに義烈は、星蓮を助けるために手を貸すと約束してくれた。
はじめこそは疑ったが、最終的にはこの男を信じることにした。
都を知らない田舎者の俺にとって、義烈の存在はありがたいものだった。
都に知り合いがいないわけではないが、家出をしてきている上に、宦官として宮中に入ったことになっているので会いに行くなどできない。
下手をすれば、星影を置き去りにして、俺だけ故郷に強制送還されかねない。
悪くすれば、三族皆殺しにされるだろう。
だから義烈から何を言われても、星蓮のためにも従おうと思っていた。
その彼が最初に言ってきたのは、『宿を引き払って自分のところに来い』というものだった。

ハッキリ言ってそれは困る。
そんなことをしてしまえば、星影と連絡が取れなくなってしまう。
言付けをしようにも、相手が相手、事情が事情だけに他言することはできない。
協力者である義烈にも言うことができない入れ替わり作戦。
一方的に待つしかない立場の自分が、義烈の申し出に即答などできない。
だから、『考えさせてくれ』と、誤魔化しながら返事を引き延ばしていたのだが――――――

（もう誤魔化せないな・・・。）

これ以上返事を長引かせれば怪しまれる。
下手をすれば、役人に売るための時間稼ぎをしていると誤解されかねない。

（仕方ない・・・。部屋に荷物を半分残して、その中に説明した紙を入れておこう。異変に気づいた星影が、荷物をあさって見つけて読んでくれるはずだ。荷物も、部屋代を払っておけば、置かせてもらえるだろう。）

何度も、相手を誤魔化すためのやり取りを思い浮かべる林山。
本番に備えて、何度も頭の中でその連勝をしてきた。
それを実行に移そうと、口を開いた時だった。

「おいおい、なんか勘違いしてねぇか？俺は別に、宿の引き払いを催促（さいそく）に来たわけじゃねぇぞ？」
「え？」
「あれなぁーだめになったわ。」
「え！？」

「宿のおかみにバレちまってよ、『飯の種を持ってかれたら困ります！』って、泣きつかれちまったんだわ！」
「ええ！？」
「だからよ、宿に泊まったまんまでいいから、俺のところに出入りするってことでいいだろう？」
「そ、それはかまわないが・・・・」

やった！よくやったおかみ！！
これぞ天の助けだ！！
やっぱり天は、俺達を見捨てちゃいなかったんだ・・・！！

宿のおかみと天に感謝する林山。
その喜びを悟られまいと、少し驚いた表情で義烈に対応した。

「そういうことなら、仕方ないな・・・。わかったよ、宿から義烈のところに通うよ。」
「悪ぃなぁ～そっちの件は、それでひとつ頼むわ！」
「そっちの件？」
「ああ。俺が来た用件はそれじゃねぇからな。」
「では・・・一体どんな用件で俺を訪ねてきたんだ？」
「ん――――・・・・。ちと急だが、今夜下見に行くことになってなぁ・・・。」
「下見？なんの？」
「決まってるだろう？お前の愛妹を救うためのだよ。」
「ええ！？ずいぶん急じゃないか！？」
「仕方ねぇだろう？段取り組んでたら、今夜しかねぇってことになったんだからよ。」
「だからって今夜は・・・！」

星影と合流してからと考えていただけに、相手の申し出に困る林山。

「本当に急じゃないか・・・!?」
「善は急げって言うだろう?銭だって急がなきゃ手に入らないしな?」
「どうでもいいよ。それで、どこに下見に行くんだ?」
決まってしまったものは仕方がない。あきらめて問えば、義烈はあっさりと言った。
「後宮。」
「・・・・へ?」
「だから、今夜後宮にお邪魔するんだよ。」
「えっ――――――――えぇぇ!!?」
後宮!?そう叫んだ瞬間、額をはたかれた。
「馬鹿!声がでけぇ!!」
「痛っ!?」
再度、林山の額を指ではじくと、肩にまわす腕に力を込める義烈。
「お前も含めて五人ほどで行く。もちろん俺も行くがな。」
「ちょっ・・・!?・・・後宮って、そんなに簡単に侵入できるものなのか・・・!?」
「お前さ~世間一般に言われてるように、『宮中は鉄壁の守り』だとでも思ってんのかぁ?」
「違うのか!?」
「残念!えり好みしなけりゃ、入る方法はたくさんあるんだよ。」
「え、えり好みって・・・!?」

（そういう問題か！？）

「あと、心強い助っ人も来てくれる。あんまり緊張しねぇで、気楽に構えといてくれや。」

「き、気楽って・・・・・！」

「あ！一応、武器は持って来いよ。出来れば、剣あたりを持ってきてくれ。なけりゃ、貸してやるよ。今なら特別に無料で。」

「なっ！？ぶ、武器まで持ち込む気か・・・・！？」

「お前さ～忍び込むのに手ぶらで行くわけないだろう？兵士やら何やらいるわけだからさ、得物持ってないと殺されるぞ？」

「こっ・・・！？」

「ハハ！心配すんな！お前は俺が守ってやるから気楽にしてろ、気楽に！ただし・・・俺の命令にはきっちり従ってもらうからな・・・！？」

有無を言わさぬ圧力をかける侠客。

「頼むぜ、せ・い・え・い？」

「あ・・・あぁ・・・・。」

（やっぱり俺・・・天に見捨てられたのか・・・・？）

あまりの急展開に呆気に取られる林山。

「しっかし楽しみだな～久々だから、腕が鈍ってなけりゃいいけど！」

「楽しむようなことか・・・？」

「人生楽しまなきゃ損だぜ？心配すんな、天は俺らに味方してんだかよ！」

「よくそんなことが断言できるな・・・・！？」

「当然だろう。俺は天を、天帝様を信じてるんだぜ？なんせこの世の中、信じるものは救われるようにできてるんだからなぁ？」

“林山！この世の中、信じるものは救われるようにできてるんだぞ！？”

義烈の姿と親友の姿が、林山の中で重なる。

（間違いない・・・！やっぱりこいつは、星影と同類だ！）

上機嫌で言う義烈に、ため息交じりで再確認する林山だった。

・・・・・・・・・・・・

安林山が、のどかな陽だまりで物騒な話をしている頃。

劉星影は、物騒な話を終わらせていた。

「あくまで、一宦官の意見です。幸い宮中には、神儀などに使う陶磁器などを作るための釜があると聞きます。そちらにいらっしゃる、漢全土から集められた選りすぐりの陶工や職人方にご確認した方がよろしいでしょう。」

星影の言葉を最後に、異様な空気のまま静まり返る部屋の中。

その場にいる女達は待っていた。
後に続くであろう、この部屋にいる最高権力者の姉の言葉を待っていた。
程なくしてそれは、小さなため息と共に訪れた。

「瞭華。」
「はっ、はい！！」
「その器を、陶工の元へ持っていっておくれ。今すぐ返事がほしいと。」
「わ、わかりました！」

頭を下げると、幕の側にいた侍女を一人つかんで、そのまま部屋を出て行ってしまった。

「・・・お前達、なにをしている？」

ねえやが出て行ったのを確認すると、今度は幕の側にいる侍女達に声をかける。

「紅嘉（こうか）を見ておいで。よ～く、見てくるのじゃ・・・！」
「ひっ！」
「す、すぐに見て、まいります・・・！」
「うっ・・・ひっ、ひっ・・！」

平陽公主の冷たい視線と言葉に、転げながら奥へと消える女官達。
そのうちの何人かは泣いていた。
それを見届けると、視線を星影に戻しながら言った。

「時間がある。少し話しましょう。」
「・・・よろしいのですか？」

「わらわと話すのが嫌と言うのか？」
「とんでもございません。」
「ならば、顔を上げよ。・・・・わらわを見よ。」

言われるまま、顔を上げて平陽公主を見た。
椅子の腕に体を預け、少し寂しそうな顔をしていた。

（・・・ちょっと言い過ぎたかな。）

その表情に、少しだけ悪い気持ちになる星影。

「安林山よ、そなたが玲春を思う気持ちはよくわかった。」
「平陽公主様。」
「わらわものぅ・・・今いる侍女の中では、玲春に一番目をかけておる。」
「平陽公主様！？」

驚く玲春に、少しだけ平陽公主の表情が緩む。

「お前は少し気が弱く、控えめすぎるが、分をわきまえた賢い子じゃ。いずれは、名のある男に嫁がせるつもりじゃ。」
「そんな！そんな・・・恐れ多い・・・もったいないお言葉・・・！」
「これ、畏まるでない！その気持ちは、今でも変わらぬぞ？」
「で、ですが・・・！」
「だからこそ、お前には十分な教育をしてきたのじゃ。どんな男に嫁いでも恥ずかしくないように、習い事はすべてさせてきた。『あのこと』意外を除いてな・・・！？」
「・・・え？」
「あのこと？」

不思議がる女官と宦官に、意味ありげな笑みを浮かべる皇帝の姉。

「安林山、そなたが茶器を割った罪は許そう。玲春も・・・。今まで通り、わらわに仕えておくれ。」

「平陽公主様・・・・！」

「そんな、勿体ないお言葉です！！」

女主の言葉に、慌て頭を下げる星影と玲春。

喜ぶ玲春に対し、星影は手放しには喜べなかった。

（玲春さんを守れたのはよかった。でも、なにか引っかかる・・・・。）

『あのこと』とは何だ？

それに、あの笑みは何だ？

この人は仮にも皇帝の姉だ。

（油断していたら、予想外のことになりかねない。）

己の命よりも、無垢な少女の命を守れたことには安堵した。

しかし、完全に危機は去ったとは言えなかった。

「さぁ玲春、顔を上げておくれ。お前にはいろいろと、キツイことを言ったからのぉ。」

「平陽公主様・・・！」

「もう泣くでない。安林山殿も、顔を上げなさい。」

「・・・・はい。」

（安林山『殿』、ねぇ・・・・。）

気味の悪さを感じながら顔を上げる星影。

「そんなに泣くでない。これでは、布がいくつあっても足りぬではないか？」

「で、ですが・・・うっうっ・・！ひぅ！」

そこには、泣きじゃくる幼い女官と、それをなだめる女主人がいた。

（・・・気のせいだったかな。）

少し、神経質になりすぎたかもしれない。

美しい主従の姿を見るうちにそんな気持ちになった。

（陛下の姉だと言うから、一癖あるかと思ったけど、そうでもなかったみたいね。）

「しっかりせぬか、玲春。」

「そうですよ、玲春さん。泣かないで。」

そう言って玲春の側に行く星影。布を出そうと懐に手を入れたのだが、そこであることに気づいた。

（しまった・・・！私の布は、さっき玲春さんに渡しちゃってた！！）

つまり、持っている布がないのである。

（まいったな～どうしよう・・・！）

彼女の側に寄り、懐に手を突っ込んでおいて、差し出す布がない。

「あ、安様・・・！」

しかも玲春さんは、こっちを見ている。平陽公主が差し出した布は、彼女の手の中でぐしゃぐしゃになっている。平陽公主も平陽公主で、私が布を差し出すと思って、代わりの布を出さないでいる。

（ここで布がないってことになったら、かっこ悪いよね・・・！）

でもそこは劉星影。
普段からいろんなことに使う彼女の頭は、こんな時の対策法もすぐに叩き出してくれた。

「・・・いけませんよ、そんなに泣いては。」
「あ、すみません・・・安様。」

なかなか動かなかった宦官が、不意にあきれ声でそう言った。
それに対して、女官は申し訳なさそうに下を向く。

「私――――――――」
「――――あなたに差し出す布などありません。」
「え!?」

そう告げると、たっぷりと間をおいてから言った。

「布があればあるほど、あなたは泣き続けてしまいます。それなら、いっそ出さない方が良い。」
「え・・・？」

「と、申しても、あなたの涙は流れてしまいます。なので――――
――私の手をお使いください。」

懐に突っ込んでいた手を抜くと、それで玲春の涙をぬぐう星影。

「あなたが泣けばなくほど、私の手は涙に濡れます。」
「あ、安様・・・!?」
「ですが、それでよいのです。右手が濡れれば左手を、左手が濡れれば、この胸を差し出すだけ。」
「そ!?む、胸など・・・そんな、私が勝手に泣いてるだけです。安様がお気になさることは――――――――!」
「止まらないのでしょう?」
「え?」
「涙が止まらないのでしょう?」
「は、はい・・・。」
「止めたくてもとまらないのですよね?」
「す、すみません・・・・。」
「謝ることはありません。あなたの笑顔を見るためなら、卑しい私どんなことでもしましょう。ただ・・・この胸が濡れたその後は、一体どうすればよいでしょうか・・・?さすがに、足を使うわけにもいきませんし。」
「よろしゅうございます!私なんか、放っておいてくだされば・・・・!」
「嫌です。」
「安様!?」
「あなたが笑ってくれるなら、私はどんなことでもしますよ。例え、あなたに嫌われるような破廉恥なことをしてもね。もし、涙が止まらないというなら――――――」
「え?」

驚く玲春の顔に、己の顔を近づけながら言った。

「このどうしようもない口で、あなたの雫を吸うしかありません。雫と一緒に、憂いをおびた気持ちも、あなたの中から吸い取ってしまいましょう。」

少し困った顔をしながら、両手で玲春の頬を包む星影。

「あ、あああ・・・安さ、様・・・・・!?」

「泣き止みなさい、泣き虫さん。」

そう言って、少しだけ舌を出す星影。

その動きに、赤面して固まる玲春。

少女を引き寄せ、そのまま顔を近づる宦官だったが――――――

「な～んちゃって!う・そ・だ・よぉ!」

「えっ!?」

アハハ!と笑うと、体ごと玲春から離れる星影。

「え?え!?ええ!?」

「舐めとったりなんてしないよ!でも、君の笑顔を見たいのは本当さ。」

「あ・・・安様・・・・・!?」

「ごめんね、怖かった?」

呆気に取られていた玲春だったが、その言葉で涙溢れ出す。

「安様～・・・・！ひ、非道ございますぅ・・・・！」

「あーあー！ごめんって！だからさ、ほら、泣き止んで！」

少女を抱きしめると、頭をなでる星影。

「よーし、よし！いい子だから、泣き止みなさい。」

「こ、子供扱いなしゃらないで、ぐだしゃい・・・！」

ヒグヒグと泣く玲春を、茶化しながら、元気付けながら、なだめる星影。

それは、自分の妹にするような行為だった。

（本当に・・・星蓮の昔にそっくりだなぁ・・・・。）

少女を胸に抱きしめながら、シミジミと妹を思う過保護な姉。

宦官という立場も忘れ、幼い女官に対して愛妹のように接してしまう。

（玲春さんって姉妹いるのかな？いるとしたら、お姉さんじゃないかな～）

妹気質が十分あるし。

（まぁ、この子も素直で可愛いけど、やっぱり私の星蓮が一番よね～！）

女官を慰めつつ、大事な妹のことを考える星影。

だから気づかなかった。
自分達を、冷たい目で見つめる平陽公主の視線に気づけなかったのである。

第六十五話　決行予告（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

冒頭で、本物の林山を登場させてみました。林山は林山で急展開しています。

ちなみに【逆夢】の正式な意味は、「事実は反対の結果となって現われた、あるいは現れると考えられる夢のこと。」である。【逆夢】の反対が【正夢】になります。

それから【塞翁が馬】とは、中国の故事です。昔、中国北方の国境近くに『塞翁』という老人が住んでいました。ある日、老人の持ち馬がいなくなりました。人々は老人に、「馬がいなくなるなんて、悪いことが起きましたね。」と老人の不運に同情しました。これに対して老人は「悪いことはありません。これは良いことが起こる前触れです。」と答えたそうです。それからしばらくして、いなくなった老人の馬が、立派なメスの駿馬（しゅんめ）を連れて帰ってきました。それを見て人々は「いなくなった馬が、良い雌馬を連れて帰って来てよかったですね。」と老人の幸運を祝しました。ところが老人は、「良いことではありません。これは悪いことが起こる前触れです。」と答えたそうです。それからしばらくして、老人の息子がこの馬に乗って怪我をするなんて、悪いことが起きましたね。」と老人の息子の怪我に同情しました。これに対して、またもや老人は「悪いことはありません。これは良いことが起こる前触れです。」と答えたそうです。それからしばらくして、戦争が起こり、若い男子は皆、兵隊として戦地に行くことになりました。しかし老人の息子は、足を怪我していたため、兵士として戦場に行かないで済んだのです。

近所の人達は、そのたびごとに老人・『塞翁』に同情の意を表したり　喜びの言葉を述べたりしましたが、それ以後も老人は一向取りあわず、「福必ずしも福ならず、禍必ずしも禍ならず」と答えたそうです。それが故事に基づく【塞翁が馬】となり、『何が幸せになり、何が不幸になるか、前もって知ることが出来ないことの例え』として現代に残っています。

最後に長いようですが、星影と玲春の話はまだ少しだけ続きます（汗）
妹への妄想スイッチが入ったら、周りが見えなくなるのが星影の悪い癖です（笑）

結構ダラダラ書いてますが、書きたいことが多すぎて、ついつい書きすぎております。
とにかく、楽しく読んでもらえることを目指しておりますので、広いお心でお付き合いいただけるとありがたいです。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十六話　パッと見と、生物分類上は同じ

女官は宦官の胸に顔をうずめて泣いていた。
宦官は女官を優しく慰め、女官は宦官の優しさに甘えた。
だから二人は気づかなかった。
星影は・・・気づかなかった。
自分達の周囲の変化に。

「すみません・・・もう大丈夫です。」

自分の裾で目頭を押さえながら女官・徐玲春は告げる。

「本当に？まだ泣きたらないことない？」

それに対して、宦官・安林山こと劉星影は問う。

「大丈夫です・・・。本当に・・お見苦しいところを・・・。」
「気にしなくていいよ。また泣きたくなったいつでも胸を貸すからね。」
「・・・はい。」

星影の申し出に、少女は頬を染めながら頷く。

（よかった。泣き止んで。）

星蓮と比べるとずいぶん泣き虫だった。
でも、年齢的にはこの子の方が子供。
子供は泣くのが仕事だから仕方がないかもしれない。
そんなことを考えながら顔を上げる。

そこで、綺麗な笑みを浮かべる平陽公主と目があった。

（ヤバッ！）

とっさに目線を下げる星影。

（あれ？）

視線をそらしてから思う。

（なんで・・・そらしちゃったんだろう？）

作法で言えば、目をそらして正解だった。
下級の者が、上級の者の目を見ることは無礼千万。
ましてや、目をあわせるなど、場合によっては首が飛んでしまう。

だが、先ほど自分は、顔を見せろと言われた。
許可を得ているのだから、多少のことは大目に見てもらえるのだが・・・。

（なんだろう・・・見てはいけなかったような気がする。）

本能的に、そらさなければいけない感覚に襲われたのだ。

「終わったか？」
「へ、平陽公主様！？」
「もう平気のようじゃな、玲春。」

手持ち無沙汰の女主人が、自分の侍女と宦官に向かって声をかける。
それを合図に、頭を下げながら星影から離れる玲春。

星影は星影で、視線を床に下げたままでいた。
平陽公主の様子を窺いながら。

「も、申し訳ございません！平陽公主様の御前でこのような・・・！」
「まったくじゃ、林山。」

侍女の言葉を受け、それを星影に返しながら言った。

「わらわも様々な口説きの言葉を聞いてきたが、人の目の前でそこまで大胆にくどく色ボケはお前が初めてじゃ。よくそこまで、思いつくものよ！」
「いえ、これは私の友達がしていたことを真似ただけです。」
「白々しい！人のせいにするでない。」

本当なのに。
平陽公主の言葉にムッとする星影。

（林山の真似をしただけなのに。）

そう。星影が玲春にしたことは、昔々、本物の林山が愛妹・星蓮にしたことである。
二人が両思いとわかった時、婚約者がいる林山のために身を引こうとした星蓮。
その際の話し合いの時、林山が妹に言った言葉である。
それを、妹が心配な姉・星影が陰で盗み見していたのである。

（実際は、口で涙を拭うどころか、ちゅ～までしやがった。）

さすが同性相手にそれはできない。

だから最後は自分が考えた「うっそっ！」を加えてまとめたのである。

（思いつきで、同姓を口説く言葉なんて思いつくか！）

床を見つめながら、悪態をつく星影。
そんな宦官に平陽公主は言った。

「視線をそらさずともよい。」
「いえ・・・」
「わらわに、そなたの顔を見せておくれ。」

何度も聞いた、顔を見せろという言葉。
だが、発せられた声は、それまで聞いたことのないほど優しいもの。
その声に導かれ、体を動かした時だった

（なんだ!?）

背筋を刺すような殺気。
歪みかけた表情を、素早く押さえる。

（ヤバッ・・・・！）

口元を緩めながら、穏やかな表情を作る星影。

「心配せずとも、そなたが茶器を割った罪も、玲春の罪も許すと約束したではないか？」

悟られないように、悟らせないようにしながら玲春を見る。

「そうでございますよ、安様！本当に・・・ようございましたね・・・！平陽公主様の・・・奥様のお許しが頂けて・・・！！」

最後の涙を流しながらに言う玲春。その頬に伝う雫を手で拭ってやる星影。

それに対して、真っ赤な顔でシロモドする女官。

途端に、殺気が強くなった。

（やはりな・・・！）

感じた殺気が、自分に向けられた物だとわかっていた。

それを向けている相手。

「おやおや・・・なんともお熱いことじゃ」

若い宦官と女官の姿に、微笑する女主人。

――――――――――――――――わらわの物に触れるな――――――――――――――――

熟女の目はそう語っていた。

（熱いのはあなたの方でしょう・・・・平陽公主様。）

目の前で静かに、怒りの炎を燃やしている皇帝の姉。

「安林山よ。」

綺麗な顔のまま、皇帝の姉は口を開く。

「そなたは随分美術品に詳しい。教養があるのぅ。」

「いえ、噂話を聞きかじっただけでございます。」

これは本当。

父上達が、美術品の本物と偽物の違いについていつも聞かされていたから。

「職人が、他言してはならない話が、そなたの耳に簡単に入るのか？」

「はい、奇跡的に知りました。」

これも本当。

職人兼商人の男が、聞いてもないのに勝手に話してきたこと。

ちなみにその男が、星影に惚れていたことを彼女は知らない。

「それはまた、人徳のあることじゃ。」

鈴のように笑う元・皇女。

その時になって、玲春の顔色が変わる。

女主人の変化に気づいたらしい。

「ところで安林山殿。」

「・・・はい。」

「そなた先程、自分は『霍去病の生まれ変わりではない』と言ったが・・・誠か？」
「誠でございます。」

先程とは違う、低く静かな口調で相手の問いに答える星影。
自分が平陽公主を怒らせたのは間違いない。
それがわかった以上、相手がどのような出方をするか確かめる必要があった。
だからこそ星影は、冷静に対処したのである。

「そうか・・・。賊から陛下を守った武勇は『霍去病の如し』と聞いていたのじゃが？」
「噂に尾ひれが付いただけかと存じます。」
「ではそなた、武勇の腕はたいしたことがないのだな。」

ふいに、突き放すような口調で問う女主。
武人が聞けば、侮辱するかのような言い方だった。
普段の星影なら、こんな言い方をされて黙っていはいない。
武人相手であれば、『たいしたことないかどうか、お前の体で試してやろうか？』的なことを言って戦うだろう。
しかし、今は状況が違う。
侮辱目的で言っているのならまだ良い。
これは『戦』なのだ。
『言葉』を武器とした戦い。
相手が挑発しているのだと、星影はすぐにわかった。
それと同時に、『話術』を自分に仕掛けたのだということも。

「左様でございますね・・・。一応は、師について習いは致しましたが、人並みでございました。私は、運がよかっただけです。」
「運がよかったと？」

「賊は、精鋭の宮廷兵と戦った後に、私を相手にしたのです。それを考えれば、私の力など、大河の一滴。弱り切った賊は、その一滴の波紋にやられたのです。」

そう言って口を閉じた。

弱っていたということにした。

確かに、陛下を襲っていた集団は弱かった。

鬱憤がたまっていたこともあり、いつも以上の攻撃が出来た。

しかし奴は違っていた。

途中から合流した賊の頭目。

鬱憤がたまっていたおかげで、冷静さを取り戻すのに時間がかかった。

騒ぎを聞き付けて人が来てくれたからよかったものの、あのまま続けていたら・・・

（殺されていたかもしれない。）

もっとも、足手まといがいればの話しだが。

「ところで玲春、お前は林山のことをどう思う。」

「え？」

「教えておくれ。本当に林山と結婚するのか？」

「ちょ！？何を言ってるんですか、平陽公主様！？」

「そなたには聞いていない。玲春・・・どうなのじゃ？」

突然、自分に質問されたことで戸惑う玲春。

しかし、顔を上げるとハッキリとした口調で答えた。

「恐れながら申し上げます。何度もお伝えいたしましたように、安

様と私は今日初めて顔を合わせた者同士・・・。そのようなことになるはずがございません。」
「これから先もか？」
「は・・・？は、はい・・・。」

頷く侍女に、女主はしばらく相手を見つめる。そして星影を少しだけ見てから言った。

「女官と宦官が夫婦になるのはよくあること。だが・・・そのうちの何組かは、愛ではなく、欲望のために結ばれている。」
「欲望？」
「宦官の仕事は宮中全般に及ぶ。その中には、男女の交わりにも関わる仕事がある。」

「「ま、まじわり！！？」」

「女官の性技を宦官が教え、それを女官が高貴な男に試す。男が女官を気に入れば、あとは宦官が上手い具合『妻にと』薦めるのだ・・・。」
「なっ！？自分の妻をですか！？」
「そうだ。そうすることで、女官は地位を得られる。宦官は良い女を紹介した者として、出世が約束される。」
「つまり・・・陛下に薦めるということですか？」

『宮中にあるすべての人や物は皇帝のもの。』というのが宮廷での決まり。
ここにいる自分はもちろん、隣にいる少女さえ皇帝の物なのだ。
宮中には多くの女性がいる。
皇帝が、彼女達すべてと体の結びつきを持つのは不可能である。
平陽公主の話を基に考えれば、女官が宦官と結びつくことは、陛下

への推薦権を得るためだろう。
宦官にしても、自分の言いなりになる女官の方が、後々便利だということ。

（そうだとしても、何で急にそんな話を・・・・？）

「まぁ・・・女官の中には、弟ではなく、狙った武官・文官をモノにしたくて、宦官に協力を仰ぐものも多い。」
「協力？」
「そうじゃ。特に安林山殿よ・・・そなたのような宦官は人気じゃ。いくらきれいごとを並べ立てても、女官は女じゃ。そういうことを知るなら、そなたのような――――――――」
「――――――平陽公主様！！」

女主人の言葉を遮るように、玲春が声を上げる。

「なにをおっしゃっておいでですか・・・？」
「お前に常識を教えているのじゃ、玲春。」
「誤解でございます！私は、平陽公主様がお考えのようなことを、安様と――――――！」
「なにを言う？お前は、そのつもりで安林山を相方に選んだのだろう？」
「それが誤解でございます！安様とは、本当に今日、初めて出会ったのです！安様が、ご自分の出世のために私を利用することなどなければ、その逆もございません！！」

（そういうことか！）

その言葉で、ようやく星影も合点がいく。
どうやら平陽公主は、悪い宦官が自分のお気に入りの侍女に、性技

を教え込んで利用しようとしていると思っているらしい。

「私は平陽公主様にお仕えする身。この身を平陽公主様以外に使うことなどありません！」

「そうですよ！人をからかうのもおやめください、平陽公主様！」

「安様！」

「私に信用がなくても、玲春さんがそんなことをする子でないことを、あなた様は知っているでしょう！？」

「安様・・・！」

「・・・そうじゃ。知っているからこそ、嬉しかったのじゃ。ついに、玲春がそのことに興味を示したのだと。」

「なんですと！？」

「玲春。」

固まる侍女を見ながら皇帝の姉は口を開く。

「わらわに仕える身であれば、わかっているだろう？女の幸せは、力のある男を虜にすることじゃ。お前には、それだけの可能性が十分にある。ところがお前は、閨（ねや）の話を極端に嫌っていた。」

「年頃の娘さんであれば、そういう反応をするのは当然でしょう？」

「普通の娘であればな。しかし玲春は、わらわが一番目をかけている侍女。そのためにも、早いうちから男女の交わりを知ることは大事なことじゃ。しっかりと学ばせねばならぬ。」

「学ばせる？そういう書でも読ませるおつもりか？」

「ホッホッホッ！書物を読むだけでは学べぬわ。性技に長けた女をつけ、徹底的に学ばせる。どうすれば、男の一物を奮い立たせ、快楽を与えられるか。手や指、口や舌をどう使えば、男が喜ぶか。どう動けば、男と共に夢心地になるか。たっぷりと見せる必要がある。」

「なっ！？この子に覗きをさせる気ですか！？」

「そのような下品なことをさせるわけがあるまい。そういう達人達を用意して、堂々と実演させればいいのじゃ。」
「はぁあ!!?」

実演!?男女の交わりをしている場面を見せるだと!?

「正気ですか!?」
「最初は聞かせ、見せることから始める。後は体で覚えさせればよい。」
「っ!ふざけるな!!そんなことを覚えるために、男と交わらせる気か!?女の純潔を、初めてをささげる相手まで、あなたが勝手に決めるというのか!?」
「勘違いするでない。本物の男と突かせあうことはせね!女同士で体を慣らしたあとに、宦官と馴染ませれば十分じゃ。」
「なっ!?お、女同士で・・・宦官!?」
「そうじゃ。女同士であれば、作りが同じなのだから場所を覚えやすい。宦官とであれば、実物の男に近い上に、種を持っておらぬ。はらむ危険もない安全なおもちゃ（・・・・）じゃ。それらを使い、男女が一つになるための体位・性感帯を覚えさせる。もちろん、使うのは己の体だけではない。そのための道具の使い方、薬の使い方や調合方法も学ばせる。すべては、思いのままに男を動かすため。好きにさせる。惚れさせる。」

段々と早くなる口調に、言い知れぬ嫌悪感を覚える星影。

「女が化粧をするのがおかしいか?美しく着飾ることがおかしいか?愛らしく美しく微笑むのがおかしいか?それらに違和感を覚えたことがあるか?」
「それはありませんが――――!」
「男のために見た目を良くするのならば、中身をよくすることがお

かしいか?汚らわしいとでも思うのか?それこそ、当然のことではないか?」
「い、嫌です!嫌です平陽公主様!そんな恐ろしいこと・・・嫌です!!」

女主の言葉に、真っ青な顔で首を横に振る少女。
その手を取ると、素早く自分の後ろに隠す星影。

「平陽公主様!あなたのお話はわかりました・・・。ですが、あなたが玲春さんにしようとしていることは我慢できません。」
「・・・これだから下級層は困る。そうなることこそ、女の幸せなのだぞ?」
「それはあなたの価値観ではありませんか!?現に玲春さんは、嫌がってるじゃないですか!?」

星影の抗議に合わせるように、首を縦に何度も振る少女。

「嫌か?」
「お許しください、平陽公主様!」
「では、安林山ならどうじゃ?」
「え!?」
「相手が安林山ならどうじゃ?」

許しを請う少女に向かい、藪から棒に女主人は言う。

「女の用意はできていたが、秘密を守れるような宦官がなかなか見つからなかった。最悪の場合は、便利な宦官を用意して学ばせようとも思っていたのだが・・・。」

そう言った貴婦人の目は、怪しく光っていた。

「手間が省けたと、喜んでいたのだがな・・・・・！」
「なっ・・・！？」

まさかこいつ！私に玲春さんの性の手ほどきをさせるつもりか！？

（冗談じゃない！そんなことされたら、女だってばれるじゃん！？）

それ以前の問題に、この女は玲春さんを道具に使う気だ！！

（そんなことさせてたまるかっ！）

「玲春さんが、あなた様のお気に入りの侍女だということはよ～く、わかりました！ですが、大事に思うならこそ、嫌がるようなことはさせないはずですよ！？」
「別に、弟・・・皇帝に差し出す気など、わらわにはない。だが、その子には良縁を与えたい。そのためにも安林山・・・そなたには協力してもらう。」
「協力・・・！？私に、玲春さんの相方をしろというのですか！？」

そう問うた時だった。
慌しい足音と共に、馬瞭華が戻ってきた。
後ろには、きちんとした服装の中年男と、慌てて礼服を着たであろう初老の男がついていた。

「平陽公主様！ただいま戻りました。」
「どうであった？」
「は、はい！そのことについては、こちらの者より説明が――――――」
「いらぬ。本物か偽物か申せ。」

「は、はい！それでは――――」

ねえやに促され、中年の男が口を開く。

「へ、平陽公主様には、ご機嫌麗しいこ・・・・」

「悪い！ことの経緯を瞭華から聞いておらぬのか？世辞はよいからさっさと申せ！」

「も、申し訳ございません！馬殿からお聞きした件ですが、こちらにいる陶工頭の孫刻に平陽公主様ご所有の茶器を見せたところ、破損がひどくはありますが――――」

「長いっ！」

「ひっ！」

「本物か偽物かのみを申せと言っておるだろう？そんなに首をはねられたいか・・・？」

「ひっ！お、お許しください・・・！！」

「もうよい。わらわは長い説明など要らぬ。はよう、本物か偽物かのみを――――」

「偽物でございます。」

大きな声でハッキリと、断言する声。

「これは西域の器ではございません。」

そう言ったのは初老の男だった。

「恐れながら、馬殿が持ってこられた平陽公主様ご所有の器は、真っ赤な偽物でございます。」
「これ！孫刻（そんごく）！」
先ほどまでしゃべっていた中年男の注意に耳を傾けることなく、初老の男は言った。
「理由は、平陽公主様もご存知の五つの不審な点。陶工の者として言わせていただければ、あれは漢の南方の窯で焼いたものでしょう。」
「漢の南方じゃと・・・？」
「決定的な違いは釉と土です。詳しゅう・・・調べてみんとわかりませんが、あの器に使っていた釉は漢の物です。土も、漢で探せば見つかる土。いろいろ混ぜ物をして誤魔化しとりますが、間違いなく漢の物。」
「間違いないか？」
「へい。よく、あれだけの混ぜ方をして、器になったものです。」
「では偽物か？」
「偽物以外の何物にもなりゃしません。」
陶工の言葉はそこで途切れる。
「そうか・・・ご苦労であったな。」
「とんでもございません。」
「そ、そうでございますよ！このようなまがい物を、恐れ多くも平陽公主様に謙譲したとは、不届きに者ほ――――――――！！」
「――――――――わかっていると思うが！・・・・他言無用ぞ？言えば、お前達の首を、皿に乗せて酒の魚にする。」
「ひっ！！はっはいぃ！！」

平陽公主の言葉に、怯えまくりの中年男に対して、初老の男は落ち着いた声で答える。

「ではその時は、わしの作った皿の上に乗せてくだされ。」
「悪趣味な。馬鹿なことを申すのぅ？」
「申せます。わしらが、平陽公主様を困らせるようなことはいたしませんので。」
「ホッホッホッ！わらわの負けじゃ・・・孫刻。」
「そのお言葉、あの世に行く時の良い土産になりました。」

そう言って、口元だけで笑う初老の男。

二人のやり取りに、終始、オロオロしていた一同。
しかし、平陽公主の笑みでホッと胸をなでおろす。

このやり取りに星影は――――――

（なるほど・・・！こんな切り替えしの仕方もあるのか！孫刻という男、なかなかの人物と見た！）

なんとも、のん気なことを考えていたりする。
初老の男に感心する星影だったが、その思考は平陽公主によって止められる。

「わらわは、謀（はか）られたのか？」

あざ笑うような声で言った一言。
その声に、最初に反応したのは馬瞭華だった。
慌てて主人の前まで行くと、恭しく頭(こうべ)を下げながら言った。

「お待ちください、平陽公主様！まだ、詳しく調べてみないことには、偽物だと――――――」
「孫刻。お前は白黒はっきりした男じゃ。わらわは謀られたのか？」
「白黒はっきりしておりますが、人の考えまではわかりません。ですが、この器が偽物であることは間違いございません。」

破片を手に取りながら孫刻という男は答える。

「十分じゃ。」

そう言うと、側にあった扇を手に取る。

「許羽め・・・」

小さくつぶやくのと、扇が折れるのは同時だった。

「平陽公主様!?」
「わらわを謀ったのか・・・？」
「お、落ち着いてくださいまし！」
「わらわを謀るとは・・・・！」

低く呻く元・皇女。そして不意に、場違いのような笑い声を上げ始める。

「へ、平陽公主様・・・！？」

狂ったように笑う主の姿に固まる瞭華。
動きを止めたねえやに向かって、笑いを噛み殺しながら平陽公主は言った。

「危ないところだった！このまま偽物と気付かなければ、先の宴で自慢するところであった！」
「へ、平陽公主様・・・」
「真に・・・安林山の手柄であった・・・！」
「平陽公主様・・・。」
「安林山・・・今の話が本当ならば、弱いなりにも、そなたは武芸ができるということになるな？」
「・・・かじった程(てい)――――」
「少し気持ちが高ぶった。」

星影の言葉を遮りながら女主人は言った。

「安林山、そなたの武芸を見たい。」

すると、部屋の外から変な声が聞こえた。

「お前、外にいる者達に、紅嘉(こうか)を呼ぶに言ってきておくれ。」

ねえやと一緒に戻ってきた女官にそう命じる。

（こうか？）

その名前に、聞き覚えがあった。

“紅嘉（こうか）を見ておいで。よ～く、見てくるのじゃ・・・！”

先ほど、平陽公主が口にした名だった。

（紅嘉って・・・誰だ？）

星影の疑問をよそに、周囲の動きは慌しくなる。

平陽公主の言葉に、呼ばれた女官はもちろん、馬瞭華と玲春も反応する。

だが、その反応はまったく違ったものだった。

呼ばれて女官は、お辞儀もそこそこに部屋から飛び出した。

馬瞭華は口元を緩め、主人に向かって恭しくお辞儀をする。

それに対して、玲春は青い顔をさらに青くしながら、星影にしがみついてきたのだ。

「安様、安様・・！」

「ど、どうしたんだい、玲春さん？」

「こ、殺されます・・・わ、私達・・・！」

「へ？」

殺されるって・・・？

「大げさね、玲春は。」

そんな玲春を見て、おかしそうに笑う。

「わらわがお前を殺すはずがないであろう、玲春？おかしなことを・・・。」
「で、では！安様のみを、殺すとおっしゃるのですか！？」
「え？私を？？」
「安様を、安様を殺すおつもりなのですか・・・！？」

驚く宦官の横で、疑いの目で女主人に問う女官。
それにつられるように、星影も口を開いた。

「あの・・・？」
「紅嘉は人懐っこい良い子よ。」
「ですから、その紅嘉とは？」
「妾の飼っておる猫じゃ。」
「猫？」
「そうじゃ。毛並みの美しい、可愛い猫じゃ。わらわによく懐いておる猫じゃ。」
「はぁ。」
「かわゆうて、かわゆうて、仕方がない！わが子同然の可愛い猫じゃ！・・・おや、もう来たみたいじゃな。」

そう言うと、瞭華に向けて手を差し出す。その手に、朱色の扇を恭しく乗せるねえや。
それを受け取ると、平陽公主は上機嫌で立ち上がった。

「お前達もおいで。」

言われるがまま、後についていく星影と玲春。
部屋を出てそのまま、庭へと降りる。

「見よ。あれがわらわの紅嘉（こうか）じゃ。」

そう言って、朱色の扇で指された先。
案内されたその先に、紅嘉はいた。

「え？」

ふさふさとした毛並み。

「可愛いじゃろう？」

キラキラとした目。

「いや、可愛いですけど、これって――――――――・・・・！？」

大きな口から除く牙と、見るからに立派な巨体。

「虎じゃねぇ！！？」

「ガァアァァ――――――――――――――――！！」

星影の言葉と、紅嘉の雄叫びが重なる。

「そうじゃ。虎模様の猫じゃ。」

「いやいやいや！虎模様の猫じゃなくて、虎じゃないですか！？」

「紅嘉は虎模様の猫じゃ。」

「猫じゃないでしょう！？大きさからして虎ですよ！？」

「ふむ。最近、よく食べるようになったからのぅ。」

「どんなに食べても、猫はあそこまで大きくなりませんよ！？」

「大きくなるぞ。特に、人の肉が好きみたいじゃ。」

「へ？」

それって・・・。

「気をつけねば食われるかも知れぬぞ・・・安林山殿？」

こ、このババア！

（生きて返す気ないだろう――――――――――――！！？）

「ちょっとぉ！？殺す気満々じゃないですか！？」

「なにを言う。お前が、あの（・・）安林山なら、虎ぐらい倒せるだろう？」

「倒せませんよ!?誰がそんなこと言ったんですか!?」
「皆が申しておるぞ。しかもお前は、虎だけでなく、熊や狼まで絞め殺すというではないか?」
「どんな噂が流れてるんですか!?誰がそんな噂を流してるんですか!?」

この時、星影の脳裏に一人の宦官の姿が浮かぶ。
自分に扇を拾うように命じた人物。
気持ち悪い勘違いをして、捨て台詞を残して退散した者

(李延年か!?)

証拠はないが、確信はあった。
自分の直感がそういっているのだ。
今まで外れたことのない直感、間違えるはずがない。

「わらわが知るか。とにかく、紅嘉と遊んでおいで。」
「あ、遊ぶ!?虎と遊ぶんですか!?」
「そうじゃ。紅嘉の首につけている真珠が見えるか?」

見ると大きな真珠がついていた。

「・・・ありますが。」
「あれを、紅嘉からもらっておいで。」
「ええぇ!?」
「仲良くなれば、くれるはずじゃ。」
「仲良くって!」
「それが出来たら、お前の罪を許そう。」
「なに言ってるんですか!?さっき許すとおっしゃったじゃないですか!?」

「茶器を割った罪は許した。しかし、侍女達の前でかかされた恥・・・。あれは許しておらんぞ・・・？」

そう言って笑う皇女。

絶対怒ってる！
次女の前で恥を書かされたことはもちろん、茶器が偽物だって教えたことも怒ってる！
絶対に許してない！
間違いなく怒ってる！！

「簡単ではないか？紅嘉と仲良く遊べば、あの子も首の真珠を差し出してくれる。これほど簡単なことはないぞ？」

その口調に、その台詞。
ごねても、許してもらえるわけがない。

「・・・武器は？」

諦めてそう問えば、玲春は叫ぶ。

「安様！？なんてことを・・・！」
「使える武器はあるのですか？」
「そんなものなどない。」
「平陽公主様ぁ！？」
「何故、ないのです？宮中だからですか？」
「あの子はわらわの飼い猫じゃ。猫相手に弓や剣を振るうというのか？もちろん、刀や槍も使うなよ。」
「素手で戦えと？」
「わらわは遊べと言っておるのじゃ。そのための遊び道具ぐらいな

ら、貸し出してやろう。」

その言葉を最後に、女主人の顔から笑みが消える。そして、厳しい表情で星影に言った。

「先に言っておくが、武器など隠してはいないだろうのぅ？もし、武器で紅嘉を傷つけようものなら――――――」

目配せをする平陽公主の合図で、ふところから鈴を出す瞭華。
それを掲げて振れば、甲高い音が庭に響く。
それに続いて、庭沿いのすべての部屋の戸が激しい音ともに外れる。
庭の木々が大きく揺れ動く。

「お前は、串刺しになるだけじゃ。」

開け放たれた扉という扉。
木々の幹の間や美しい花々の傍ら。
それらのすべての場所。
庭を、星影達を囲むように、弓を構えた武装した多くの兵達（つわもの）が立っていた。

第六十六話　パッと見と、生物分類上は同じ（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

少しだけ、宮中の性事情を書いてみました。
宦官の仕事には、女性を紹介するということがあります。
その際、自分の息のかかった女性を紹介する場合が多いのですが、時に、自分と肉体関係のある女性を紹介する場合もあるのです。
宦官と女官は結婚できます。
そこを利用して、宦官自身が結婚した女官に対して性についての技を教えます。
女官が性について十分学べたら、身分ある他の男に女官を薦めてしまうのです。
もちろん、自分と夫婦関係にあるということは伏せて紹介します。
薦めた男が女官を気に入れば、そのまま女官を差し出します。
自分が薦めた女官が男のお気に入りとなれば、紹介した宦官はそれ相応の見返りをもらえるのです。
だから、それぞれ野望がある宦官と女官が協力して、偽装結婚する場合もあったのです。
ただし、宦官はそれなりの地位がなければいけませんが。
なかには、純粋に恋をして結婚する宦官・女官カップルもいたと思います。
しかし実際に、宦官が結婚相手として選ぶ相手の多くは娼婦や妓女が多かったそうです。
それも都でも指折りの美人達が主でした。ここからわかるように、男性として閨での楽しみが得られにくい宦官は、そういうことに精通している女性を好んだようです。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十七話　猫と遊べば（前編）

（不覚を取った。）

それが、今の彼女の正直な気持ちだった。
武術の鍛錬はしてきた。
山賊や荒れくれ者を倒してきた。
性質の悪い侠客や遊侠を叩きのめしたりもした
男と対等に戦ってきた。
それなのに――――――――――

（弓兵の気配にまるで気づかなかったなんて――――――）

「そういう問題かよ！？」

と、この場に本物の林山がいれば言うだろう。

それでも単純に彼女は悔しかった。
『女虎傑（じょこけつ）』の異名を持つ劉星影にとって、周囲の兵の気配に察せなかったことが悔しかった。

「おやめください！平陽公主様！！」

ズレた反省をする星影の側で、そんな宦官の考えを知らない女官はそれまで以上に必死で相手の命乞いをしていた。

「先ほどのお言葉は取り消します！平陽公主様の仰る通りにいたします！何でも言うことを聞きます！ですから――――――！！」

それまで以上に、切羽詰った声で訴える。

「安様のお命をお救いください・・・！！」

言うと同時に、その場にひざまずく女官。

「玲春さん！？なんてことを――――――」

「――――見苦しいぞ、玲春。」

その姿に、星影は驚き、平陽公主は顔をゆがめた。

「紅嘉と遊ぶのに、どうして危険なことがある？むしろ、わらわの猫の方が危ないであろう？」

「紅嘉は、猫ではなく虎ではございませんか！？虎と人では、どちらが危険か赤子でもわかることでございます！」

「・・・よぉもわらわに、そのような口が利けるな・・・？」

自分の言葉で、相手が機嫌を損ねたと気づいた時、すでに手遅れだった。

手にしていた、朱色の扇が彼女の目の前に来ていた。

それは迷うことなく、玲春の頬目掛けて打ち付けられた。

辺りには、甲高い音が響いたのだが。

「あっ！？」

玲春へ振り下ろされた扇は、彼女に痛みを与えなかった。
代わりに、側にいた宦官の頬を赤く染めていた。

「――――――あ、安様！？」

星影は玲春の身代わりに打たれた。

「――――お許しを。あなた様への今の発言は、玲春さん本来のものではありません。はじめて（・・・・）見る猫を前に、少し気が高ぶっただけでしょう。」

少女をかばいながら答える宦官。
それを見て、何か言おうとする玲春に向って星影は言った。

「平陽公主様の仰る通りだよ、玲春さん。紅嘉殿と遊ぶ（・・）のですから、武器など要りませんよ。」

「安様！？」

「私が悪かったんですよ、玲春さん。仮にも・・・子猫相手に武器など！た～いへん！・・・愚かなことを申してしまいまして？」

にっこりと笑う宦官に、周囲の女官達は動揺する。
対する兵達の方は、あからさまに馬鹿にするような視線を向けていた。
それに星影は気づいたが、いちいち文句を言っては埒があかない。
今は少しでも時間を稼いで、虎に怪我をさせずに倒す方法を考えなくてはならない。

「安様、あなた様は、どうしてそのようなことを――――――！」
「落ち着いて、大丈夫だから。」
玲春の側に近づくと、耳元でささやく星影。
「私は、子猫なんぞに負けない。」
「ですから、猫ではありません！紅嘉は、ただの虎ではないのです！」
「平陽公主様のお気に入りの子猫だと？」
「違います！あの子は・・・紅嘉の母親は人食い虎だったのです！」
「人食い虎！？」
「はい！あの子の母を退治した後、子供だった紅嘉も殺される予定だったのですが、不憫に思った旦那様が、二度と人を襲わせないことを条件に連れ帰った子なんです！？」
（旦那様って・・・平陽公主のか？）
どんな旦那か聞こうと思ったが、やめた。
あれだけ気位のた・・・いやいや！高貴な方の夫となるのだ。
ロクでもない男だと見当はついていた。
「人を食っていたのは、母親の方だろう？だったら、紅嘉は食べていないじゃないかい？」
虎の子はどうか知らないが、子猫などは肉など食べない。
母親の乳で成長するもの。
大きくなってから肉は食べるが、紅嘉の場合それはないだろう。
なんせ、【人を食べさせない】という理由で平陽公主の夫が助けたのだから。
そう思っての発言。

だが、そんな星影の問いは、玲春の発した言葉によって否定された。

「平陽公主様は、人は食べさせないと旦那様にお約束しました。ですが、『人と思えない者』は与えていました。」

「・・・・んん??」

謎かけのような言葉に、星影は眉間にしわを寄せる。

どういう意味だ?

人と思えない者?

『者』・・・ということは、人間よね?

あれ?それじゃあ、それって――――――!

「つまり・・・人であるにもかかわらず、人とみなされなかった人間を与えていたと・・・・?」

「・・・・主に、罪人などを・・・。」

「悪食じゃないか!?」

なに考えてるんだ、陛下の姉は!?

思いっきり、旦那との約束破ってるじゃないか!?

(よりによって、人を食べる虎を宮中で作ってどうするんだよ!?)

そう思って、問題の人物を見れば――――

「毒をもって毒を制すじゃ。熊や鹿、豚ばかりの良い物ばかりでは、陰陽のバランスがとれんじゃろう?」

優雅な返事を返してくれた。

「ちょっと待ってください！人間の肉なんかあげてたら、周りの世話する人間まで食料だと認識するんじゃないですか！？」
「心配無用じゃ。餌用の肉をやるときは、弓兵に円陣を組ませた中に、餌を放り込むのじゃから。」
「あ、そうなんですか？」
「そうやって覚えさせておるので、それ以外のもは食わぬ。安心せよ。」
「そうですか、それは良かった。」
相手の言葉に安堵したのもつかの間。重要にことに気づく星影。
「て！！ちょっと待ってください！今の状況が、まさにそうじゃないですかっ！！？」
自分を囲む弓兵を指差しながら訴える星影。
「気にするでない。ほんの余興じゃ、余興。」
「こんな物騒な余興はありませんよ！やっぱり私を計画的に殺す気じゃないですか！？」
「無礼者！平陽公主様に対して、なんたる暴言を申す！？」
「そう言いつつ、あなたも目が笑ってますよ、馬様！？私が玲春さんの祖母だと勘違いしたことを、まだ根に持ってますね！？」
「そうなのか、瞭華？」
「はい・・・とても仲が良かったという理由で。」
「ふざけた男じゃのぉ、安林山？瞭華はこんなにも若くて美しいというのに。」

元・皇女の言葉に、ねえやは、そんな・・・と、顔を赤くする。

（残念ながら、どう見てもおばあちゃんにしか見えないけど・・・。）

「まぁ、女心もわからぬ奴なら、食われても仕方がないかのぅ？」

「平陽公主様！？」

「冗談じゃ。軽い余興じゃ、余興。」

コロコロと笑う女主に合わせるように、周囲から失笑が起こる。

（こいつ、こいつら絶対に許さない・・・！）

人の命を遊び感覚で扱うとは！

この様子だと、私以前に、紅嘉の餌食になった人間はいると見た！

こんな人間が皇族だと？

ふざけるな！

（絶対に、この女を負かしてやる・・・！）

そう決めたものの、武器がなくては戦えない。

手持ち虎模様の特注の剣もなければ、武器の代わりになりそうなものもない。

なにかないかと、体を動かす星影の動きを平陽公主は見逃さなかった。

「念のためじゃ。林山の衣の改めよ！」

「なっ！？」

その言葉に答える短い返事と共に、いっせいに女官達が押し寄せて

きた。

「ちょ！待って・・・！」

「まさか！女官相手に、乱暴など働くまいな・・・？仮にも、『陛下の信義厚い安林山殿』ともあろう者が・・・！？」

抵抗の前に、先手を打たれる星影。

（冗談じゃない！下手に体を触られたら、女だとばれるじゃないか！？）

確かめる相手が女ならなおさらである。

とりあえず、自分の迫り来る女達を避けようとした時だった。

「やめてください！」

星影にのびる無数の手を玲春が防いだ。

「たった一人を大勢で・・・むしるようなことをしないでください！」

「なによ玲春！あなた、先輩に対してなんなのその態度は！？」

「そうよ！平陽公主様からの命を、あなたは逆らう気！？」

「わかっています！無礼だとわかっていますが、どうかやめてください！」

自分の後ろに、音字を隠しながら彼女は弁護する。

そんな玲春の後ろに隠れながら星影は考えた。

玲春さんが、かばってくれてるうちにどうにかしないと！

（体を触られないようにごまかす方法と、虎を無傷で倒す手段を！）

しかし、どうする！？

体はともかく、無傷で虎を倒すなんて。

（この場合、素手で戦うという手しかないが・・・。）

仮に勝てたとしても、深手を負うことは目に見えていた。

そうなれば、傷の手当てだと言われ、医者に見せられれば。

怪我をしなかったとしても、戦いのさなか衣服が破れでもしたら。

あるいは、傷を負い、衣服を裂けれたら――――――――！

（どの道、バレる可能性が高い！！）

なにか良い方法はないかと、周囲を見渡す星影。

まず目に入ったのは、女官達の身に着けるかんざし。

（目に刺せば、一発でケリがつくけど・・・。）

そんなことをすれば、まず射殺されてしまうだろう。

次に目に入ったのは、女官達の耳飾。

（あれは使えない！てか、耳につける以外、使用方法はない！）

『それが武器に変わるほうがどうかしてるだろう！？』と、この場に本物の林山がいれば言うだろう。

（とにかくなにか――――――――――！）

「どきなさい！」

「きゃ！？」

星影を守っていた壁が、突然音を立てて崩れる。

「玲春さん！」

倒れた玲春を抱き起こそうと手を伸ばした時、彼女の懐から何かが落ちた。

（――――――――――これだ！！）

玲春が落とした『ある物』

それを見た瞬間、星影の中でひらめきが起きた。

（これを使えば、なんとかなるかもしれない・・・！）

考えると同時に行動する星影。

玲春の落とした『ある物』を拾うと、素早く彼女を抱き起こしながら言った。

「・・・もういいんですよ、玲春さん。ありがとう。」

「安様！？」

「これ以上のかばい立ては無用です。私は大丈夫です。」
「なにを仰いますか!?諦めないでください!」
「諦めたわけではありません。ですから、ここであなたに誓いましょう。決して・・・死なないと。」

そう言って、みんなの前で彼女の両手を握り締める。

「安様・・・!?」
「その証として、しばらくこれをお借りしますよ。」
「え・・・?」

玲春を握る手が離れる。その片方の手が、彼女の前に差し出された。

「え!?こ、これは――――――――――――!?」

相手の手の中身を見た瞬間、玲春は固まった。
あまりにも、間の抜けた表情で。
その様子に集まっていた女官達も、宦官の手の中をのぞくが、それより先に星影は手を閉じていた。
そして自分をかばい続けた女官に向かって言った。

「どうか私の武運をお祈りください――――――――私の小さな香蛾。」

そう言って立ち上がると、上に来ていた服を脱ぐ。

「え!?」
「きゃあぁ!?」

「な、なんだ・・・!?」

突然、服を脱ぎ始めた宦官に、女官も兵士も、皇帝の姉とそのねえやも驚いた。

「なんの真似です!?安林山殿!?」

「薄汚れた宦官の体を、清らかな女官の方々に触らせるなど言語道断!ならば、武器を隠し持っていないという姿になればいいのです。」

そう言うと、薄着の着物姿になる星影。

普通は、その下を脱げば裸なのだが、星影はもう一枚着ていた。

その上、胸や肩、上半身全体に布を巻いていたので、女性の象徴は隠れていた。

普通は、胸だけ巻けばいいが、それではかえって胸の存在がバレやすい。

だから、肩や肘の辺りまでグルグルに布を巻いて誤魔化していたのである。

これだと、知らないものが見れば「下着の下に、包帯を巻いているだけ。」あるいは「怪我をしているだけ。」と思ってくれる。

幸い自分は、宮中に忍び込んだ賊を倒した宦官とされている。

それなら、「怪我が治っていなくて、未だに包帯を全体に巻いている」と思われた方が自然である。

「あれは・・・包帯か?」

「もしや、賊を倒したときの傷が治っていないのでは?」

「痛々しいわ・・・!」

「本当ですわね・・・。」

その証拠に、自分を見る兵や女官達の視線は同情的であった。

そして自然と、周囲の平陽公主を見る目が変わっていた。

（そりゃあ・・・手負いの英雄を虎と戦わせるんだもの。私が逆の立場であっても、無言の圧力かけるわよ。）

こうして、居心地の悪そうな元・皇女の前で、薄着の上一枚（？）下穿き一枚（？）だけになった宦官。
脱いだ服を高々と掲げながら、中央に歩み寄る。
そして声の限り叫んだ。

「さぁ、ご覧あれ！ご一同から見えるこの体、どこに武器を隠し持っていましょうか！？卑しい宦官のみなれど、銀に光る刃も、硬く重厚な長物も、私は一切持ち合わせていない！」

持っていた服を空に向かって投げる。
それは一瞬中を舞うが、すぐに地面へと落ちて言った。

「今落ちた服から、怪しい音がしたでしょうか？」

そう言いながら、クルクルと数回回ってみせる。

「女人を飾るかんざしはおろか、櫛や首飾りでさえ、付けていない。どうでしょう、女官の皆様？」

さらにピョンピョンと、飛び跳ねながら言う星影。

「怪しい金属音はしますか？短刀・短剣の葉の光が見えますか？いかがです、兵士の皆様！？」

どちらの問いにも、女官・兵士から声は上がらない。

それを見届けると、星影は動きを止めた。
そして、平陽公主に向かって、恭しい態度をとりながら言った。

「平陽公主様！恐れ多いことに、この卑しい宦官に、紅嘉殿とのふれあいのひと時を与えてくださったことに、心からお礼申し上げあげまする・・・！！」

「これはこれは・・・・・よい心がけじゃ。」

「はい、日ごろの行いが良いので、きっと紅嘉殿とも仲良くなれます。」

口の端だけ上げて笑うと、平陽公主に背を向ける星影。

「さぁ、紅嘉殿！この安林山と遊びましょう・・・！？」

――――――――――かかってこいよ。

そう言わんばかりに、利き腕を上げ、その中指だけを軽く動かす。

誰が見ても、明らかな星影の挑発。

その態度に、紅嘉はもちろん、飼い主である平陽公主も反応する。

「この・・・減らず口の高慢め――――――――――！」

そうつぶやくと、持っていた扇を縦に大きく振る。

「ダメッ・・・・・・・・！！」

玲春の静止と紅嘉の雄叫びか重なる。

鉄格子から、人食い虎が躍り出る。

「安様ぁ――――――――――――！！」

一直線に、星影の元へと突進する虎。

一定の距離まできたところで、彼女は大声で叫んだ。

「一緒に遊ぼう紅嘉殿ぉ！まずは――――――――――――――――――泥遊びっ！！」

陽気な声でそう言うと、足を使って思いっきり地面の土を虎めがけて引っ掛けた。

「ガァウ！？」

「いや～ここには、水がないから、水遊びができなくて残念！！だから代わりに、泥んこ遊びをしよーねぇー！！」

そう言いながら、容赦なく土をぶつけ続ける星影。

それは周囲に土煙を作りながら、視界を悪くしていった。

「安林山！わらわの紅嘉になにをする！？」
「お言葉ですが平陽公主様！土遊び、泥んこ遊びは、遊びの常識です！」
「紅嘉だけが、土まみれではないか！？不公平だぞ！？」
「ご冗談を！でしたら、紅嘉殿もやり返せばいいのです！ねぇ、紅嘉殿！？」

土煙の中心へ声をかけると、怒っているような泣いているような何とも言えない泣き声が響く。
後ろから、さらに抗議の声が上がるが星影はそれを無視した。
無視しながら、必死で心を無心へと変えていった。
心が研ぎ澄まされるにつれ、彼女の心に師の言葉がよみがえった。

“敵を倒すときは、無心の心。情けはかけず、一撃で仕留めるようにすること。それは人に限らず、他の生き物を相手にするときも同じだ。”

星影と林山の師匠である厳飛龍は変わった男だった。
性格はもちろん、武術の指導に関しても同じだった。

「生き物の動きを見ろ。」

目の動きと反射神経を養う修行をした時。
その際、彼が言った言葉だった。

「生き物の動きを見ろ。人ではなく、自然にいる動物の動きをだ。

そして考えろ。鳥が飛ぶのはなぜか？ウサギが穴にもぐるのはなぜか？狼が吼えるのはなぜか？」

「そんなことまで、考える意味はあるんですか？」

「ある。人間が動くのは、その動作をしなければ、何かができないからだ。それは動物にも言えること。鳥が飛ぶのは、餌である木の実のついた高い木に取りにいくため。ウサギが穴にもぐるのは身を潜めるのに安全であるため。狼が吼えるのは仲間を呼ぶためである。」

「それはわかりますが・・・。」

「相手が次に、どのような動きをするかわかれば、こちらもそれにあわせて動くことができる。それが同族同士の人間ならば、難なくこなせる。だが、これが人間と他の生き物だったらどうする？わかるか？」

「え？ちょっと・・・わかりません。そんなにずっと、見ないし・・・。」

「だからこそ、見て学べ！一日付きっ切りで見ろとは言わん！ただ、獲物と自分が向き合った時、相手がどのように動くか、相手になったつもりで考えろ！それらの獲物の特徴を掴み、知り、極めろ！それが、武に優れた人間になるコツだ。」

（『獲物の特徴を掴み、知り、極めろ！』・・・か。）

そこまで思い出して、改めて相手の姿を見る星影。

土をかけ続けることで、紅嘉の足止めには成功した。

土埃の間から見え隠れする巨体を観察した。

模様が特徴的で、牙が鋭い。

爪も鋭そうで、目も大きい。

体は間違いなく重いだろう。

かなり遠くから見れば、猫と間違えるかもしれない。

虎は猫に似てる。
猫は煮ると美味い。
そう言えば、最近猫を食べてな・・・

（いやいや、そうじゃなくて！！）

思わず出た雑念を消す星影。

（猫は俊敏な生き物。体が軽くて、身のこなしも軽い。対する虎は、猫の何十倍もでかい。つまり、猫より動きは多少劣る。だが・・・その分噛む力と引っかく力が強いはず。）

自分が虎だったら、どうやって餌をとる？
猫は生餌を取る時、急所を狙って飛びかかってくる。
それでは虎は？

「安林山殿！これ以上、紅嘉をいじめるようでしたら、こちらも容赦はしませんよ！？」

馬瞭華の声と、弓の弦の音が重なる。

（丁度いい。ここらで一つ、確かめるとするか。）

最後に思いっきり土をぶつけると、星影は（彼女なりに）わざとゆっくり動いた。
そして、紅嘉との間隔をあけるために、後ろ向きで数メートルほど走った。
宦官からの攻撃が止み、土煙が消える。
その中から現れたのは、巨体をブルブルと振るわせながら、体の土を振るう紅嘉。

数回、ゲェゲェと、口の中の土を吐くと、狙いを星影に定める。
怒った虎は、迷うことなく、彼女の頭めがけて飛び掛ってきた。

（――――――――なるほど。頭をやられたら、一発で死ぬからな。）

猫と同じ、急所を狙ってきた。
感心する星影の耳に、自分を心配する少女の声が届く。

「安様！！」

自分に伸びてくる前足。
素早く後方へ飛んで、鋭い爪を避けた。

「おお！」
「なんという脚力だ・・・！」
「ほぉ・・・なかなか飛ぶものじゃな・・・。」
「・・・普通はあれだけ後方には飛べません、平陽公主様。」

弓兵隊長の言葉に、瞭華の表情が険しくなる。
平陽公主は、ジッと星影を見つめていた。

（意外と動きが早いな！もう少し、距離を取ればよかったかも。）

自分の想像と、現実の違いに苦笑する星影。
あまり、優れた武の動きを見せては、かえってここにいる兵達に疑われる。
それこそ、霍光の言い分が正しいと証明してしまうようなもの。
控えめに飛んだが、目立ってしまったことは自覚できた。
だが、反省をしている暇はなかった。

再度、紅嘉が突進してきた。

（考えるよりも先に行動！）

それに合わせて、星影も突進した。
作戦を実行するために。

「なっ！？」
「死ぬ気か！？」
「やめてぇ――――――――！！」

突進したのは助走を付けるため。
地面を蹴って上体を浮かせる。
餌の動きに合わせて、紅嘉も飛び上がったのが――――――――

「ば～か。」

星影の体は一瞬浮いただけで、それほど高くは飛ばなかった。
というよりも、飛ぶフリをしただけ。
これには、目の前にいる虎も、後ろや周囲で見ていた者達も驚いた。

「飛び損ねたのか？」
「いえ！あれは――――わざと飛ばなかった・・・！？」
「どうして！？」

玲春の、その場にいた全員の疑問はすぐに解明された。
宦官が取った次の行動によって。

一瞬軽く浮いた星影の体。

それは、一歩後ろへ下がったことによる動き。
彼女はその状態で、勢いよく片膝をつく姿勢でしゃがむ。
その間、紅嘉の巨体は一直線に地面に落ちる。

（今だ！！）

相手が地面に着くかつかないかの瞬間。
星影は力一杯、屈していた体で飛び上がった。

「――――――――――――はっ！！」

地面に戻った紅嘉と、地面から離れた星影。
着地した紅嘉の頭に、勢いよく左の掌を叩きつけた。

「ガァ！？」

手加減なし、懇親の力を入れた一撃。
人間相手なら、骨を砕く勢いでやった。
これに紅嘉は、驚いたような声を上げる。
虎の体がこわばった。
それが合図だった。
星影は握り締めていた右手の拳を開く。
手の中にあったのは、玲春から借りた『ある物』
それを、思いっきり紅嘉の鼻に叩きつけた。

「ギャゥゥ！！？」

巨体が身を縮めて後ろに下がる。

その動きに合わせて、紅嘉の頭の上に左の片手一本で倒立する星影。

「と、虎の頭の上で倒立だと！？」

「安様ぁ！？」

騒ぐ周囲の前で、紅嘉の頭の上にある左手にグッと力を込めてから半回転した。

それまで、正面の平陽公主からは宦官の横顔しか見えなかった。

しかしその動きにより、星影の顔は正面を向く。

平陽公主と向かい合わせになった。

「よっ！」

そのままの姿勢で彼女は、垂直に虎の上に体を落下させる。

「ガゥゥウ！？」

そして、またがってしまったのだ。

「えええぇ――――――――――――――――――！！？」

あまりのことに、男も女も大声で絶叫する。
口うるさいねえやでさえ、間抜けな声を出す。
平陽公主は、いつの間にか開いた扇を口元に寄せていた。

第六十七話　猫と遊べば（前編）（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

星影ＶＳ紅嘉（虎）の対決・前編です。
よろしければ、ご感想などいただけると励みになります。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第六十八話　猫と遊べば（中編）

驚く周囲を尻目に、星影は左手で自分の目の前に見える虎の首輪の上の部分をつかむ。
そして陽気な声を出しながら言った。

「こ～う～か～ど～の！」
「ガァア！」

力強く引っ張ったため、紅嘉がうめく。

「よ～しよし！はじめましてぇ～私は、安林山と申しま～す！」
「グゥウ！ガゥウ！」

うめき声を無視して、利き手で紅嘉の顎の下の喉を締め上げた。

「ガァ！？」
「大丈夫、だいじょーぶ！怖くな～い、怖くない！」
「グアァ！ガァ！！」

首の上下を押さえ込まれ、絞められたことで苦しむ巨大な猫。
星影をふりほどこうともがくが無駄だった。
彼女は紅嘉に乗った際、しっかりと両足の腿で紅嘉の腹を締め付けていたのである。

（なるほど・・・！馬にまたがる要領で、虎も行（ぎょう）すればいいのか。）

紅嘉に、虎に乗るコツはつかめた。

あとは真珠の首輪をはずして、それを平陽公主に渡せばいいが・・・。

（・・・まずいだろうな。このまま簡単に渡すのは。）

ただでさえ、『賊を倒して陛下を救った武道派宦官』と言われているのである。

ここで、宮中の兵士達のいる前で簡単に首輪を奪っては怪しまれる。

一応自分は、『手傷を負って戦っている』という設定になっている。

後々のことを考えれば、手こずっている姿を見せておいた方が良い。

宦官らしく、非力的なところを見せておきたいが。

（それじゃあ、あの女に天誅できない。）

今までの、数々の対応を考えれば、はらわたが煮え繰り返る。

早い話が、人食い虎を自分にけしかけた相手への怒りが収まっていなかった。

仕方ない、ちょっと芝居を打つか。

（・・・・・・殺さない程度に。）

腹黒く心の中で笑うと、紅嘉の上で行動を開始した。

「心配しなくて大丈夫ですよ、紅嘉殿～？だから、そんなに暴――――ウッ！？」

紅嘉が大きく上体をそらしたその時。
星影は、紅嘉の顎の下の喉にあった利き手を放す。
そして、その手で自分の腹を押さえながらうめいた。

「ぐぅ・・・！うぅ！！」

「安様！？」

異変に気づいたのは玲春だけではなかった。周りの兵達も眼の色を変えた。

「安様ぁ！？どうなさったのです！！」

「いかん！行くな！！」

駆け寄ろうとする少女を弓兵隊長が制した。それと同時に大声で叫んだ。

「第一部隊！平陽公主様を安全な場所へ避難させよ！第二部隊は女官達を！第三・第四部隊前方へ！！他の部隊は後方で待機！！」

「え！？ど、」

どういうことですか！？という玲春の問いかけが終わらぬうちに、紅嘉の雄たけびがこだまする。

「あ！？」

見れば、紅嘉がこちらに向って突進してきていた。
その上にまたがる宦官は、虎にしがみついたまま、ピクリとも動か

ない。

「安様！？」

「どうやら賊と戦った際、怪我を負っていたみたいだな！その傷が――――――痛み出したのか・・・！？」

「傷！？では、まさか・・・！？まだ怪我が癒えていないと――――――！？」

「第三・第四部隊前列！構え！」

玲春の問いに微かに頷くと、部下に号令をかける弓兵隊長。

「何をなさるつもりですか！？」

「虎を、紅嘉殿を大人しくさせる！このままでは、あの宦官が死ぬからな。」

「お助けいただけるのですね！？」

「当然だ！」

尋ねてきた女官にそう答えると、彼は厳しい表情で口を開いた。

宦官を、星影を助けるために。

「威嚇用の弓を放――――――――」

「放つな！！」

武人の命令を遮る声。

「弓を放ってはならぬ！」

救助活動を停止させた言葉。他ならぬ、虎との遊びを命じた本人。

「平陽公主様!?」

「紅嘉が怪我でもしたらどうするのだ!?弓を使わずに生け捕れ!」

そう言うと、兵達に混じっていた虎の世話係をにらみつけた。

「紅嘉を落ち着かせろ。」

「お、恐れながら――――それは難しゅうございます・・・!」

「なんじゃと?」

「紅嘉一人なら、すぐにでもなだめられますが、上に人が乗っているのです!あの人に降りていただかないことには・・・!」

「そんな!それでも虎のことを知り尽くした虎のお世話掛なのですか!?」

「虎の世話係でも、こんなのは初めてですよ!私だって、虎またがる人間を見るのは初めてなのですよ!?」

「そ、それはそうですが――――では、安様はどうなるのですか!?なにか方法はないのですか!?」

「いや・・・助ける方法が、ないわけではないんです。」

「あるんですか!?」

詰め寄る玲春に、虎の世話係りはうなずきながら答えた。

「餌を与えるのです。」

「餌・・・食事ですか?」

「はい。鹿肉でも、猪でも、熊でもウサギでもかまいません。紅嘉が食事に夢中になっている間に、あの宦官様を救えばいいのです。」

「よかった!それでは、急いで――――――」

「安林山を射落とせ。」

「平陽公主様!?」

肉を取りにいこうとした虎の世話係と女官は、その言葉で動けなくなった。

「い、今なんと・・・？」

「鹿肉も、猪肉も、熊肉も、ウサギ肉も、鳥の肉も・・・・取りに行かなくてよい。」

「で、ですが！そうやって気を引かねば、安様は――」

「紅嘉に乗ったあいつが悪い。弓兵隊長、構わぬから射殺してしまえ！」

「ですから、ご冗談はおやめください、平陽公主様！」

「冗談はお前の方じゃ、玲春。単純に考えても、安林山一人が死ねば、この場は丸く収まるだろう？」

「・・・・本気で仰ってるのですか・・・！？」

信じられないという目で、主を見つめる少女。

それに答えるように、元・皇女は冷たく言い放った。

「宦官など宮中の奴隷。人の数には入らぬ。」

「平陽・・・公主様・・・・・！？」

「あ、あの！無理にお命を奪わなくても、鹿肉か何かを放り投げれば、本当にすぐに大人しくなりますが――――」

見かねた虎の世話係がそう言ったが、皇帝の姉はそれを鼻で笑った。

「お前、わらわの話を聞いていなかったのか？」

「え？あ、いえ・・。」

「わらわは、紅嘉だけが助かればよい。お前とて、手塩をかけて育てた紅嘉が、怪我でもしたら悲しいだろう・・・？」

「は、はい・・・それは・・・。」

「そんな！」
「うるさいぞ、玲春。冷静に考えてごらん。肉を取りに行かせている間に、ここの人間が先に食い殺されるわ。それならば、この場で肉を作った方が早いであろう。」
そう言った時だった。近くで紅嘉のほえる声。見れば目の前まで来ていた。
「弓兵、早く放て！」
「やめてぇ！殺さないで！！」
「弓兵隊長、いや、張願。なにをしている！早くおやり。」
弓兵隊長の名を口にしながら、平陽公主は催促する。それに玲春一人だけが反対した。
「おやめください、平陽公主様！弓兵隊長様も、安様を殺さないで！」
「むっ・・・。」
「安様は、命じられてしているだけです！それなのに、これはあまりの仕打ちでございます！」
「それは――――――」
「いい加減にせぬか！」
「平陽公主様！？」
「奥方様・・・。」
「一人殺すのをためらって、それ以上のものが死んでもよいのか！？」
「いえ・・・。」
「弓兵が戦うのは、敵の攻撃をそぎ、味方を守るためだ。お前は、それすらできぬのか？」
「なにを仰(おお)せられます！？」

「ならば雑念を捨てよ、張願！」

懇願する少女の言葉に、迷っていた武人。
だが、平陽公主の強い言葉で司令官の迷いは消えた。

「宦官に向けて・・・・構え！！」

ためらいがちの命令に、いっせいに弦の引く音。

「やめてっ！！」

駆け寄ろうとする玲春を、弓兵隊長が引き止めながら言った。

「放て――――――――――――――！！」

「やめてぇ――――――――――――――！！」

少女の叫びと弦がはじかれる音。

「安様ぁぁ！！」

その直後、異変が起きた。

「あ！？」
「な、なに！？」

兵達の定めていた焦点が消えたのだ。
否、狙っていた宦官ごと、虎が視界から消えたのである。
矢は、標的のない場所に落ちていく。
これには、兵や女官達も驚き、周囲を見渡したのだが――――――――

「みんな逃げろ――――――――――――――――！！」

「グォォアァァ――――――――――――――――！！」

聞き覚えのある苦しげな声。
滅多に聞くことのないうなり声。
それらを聞いた瞬間、全員に衝撃が走る。
声の発せられた方向。

「逃げて、くれ・・・・！！」

天を仰いで愕然（がくぜん）とした。

「きゃあぁぁ！？」
「う、上！？」
「と、虎が上から降ってきたぁ――――――――！？」
「ガァァア！！」

怒り狂った紅嘉が、人々の集まった中心へと落下してきた。

「こ、紅嘉！？」
「平陽公主様！」
「危ない！！」

捕まえていた玲春を安全な方へ突き飛ばす。そして、固まる元・皇女とそのねえやを素早く抱えると、間一髪でその牙から救い出す張願。
しくじった虎は、標的を周りにいた兵や女官達へと切り替えた。

「グオァァア！！」
「きゃああ！！」
「た、助けてくれ！」
「ガァァア！！」
「こ、殺されるぅ！！」
「食べないでぇ！！」

庭は大パニックと化した。
紅嘉は、近くにいた人間を手当たり次第襲い始めたのだ。
強靭（きょうじん）な歯で弓兵の武器を砕き、鎧を壊す。
女官の服の袖や裾を引き裂き、束ねられている髪に食いつく。

「ガゥゥウ！！」
「うわぁああ！？ゆ、弓が！？」

「矢束もやられたぞ！！」
「どいて！早く逃げなきゃ！」
「うるさいわね！私が先よ！」
「よせ！固まって逃げるな！散らばれ！」
「おい、そっちに逃げるな！こっちへ――――ぎゃぁぁ！！」
「ガァルゥウア！！」

我先にと逃げ出す女官。逃げる順番を争うものだから、さらに事態を悪くしていた。
それを守ろうと奮闘する兵達にしても、隊を乱されてしまい、うまく戦えない。
なによりも、頼りである武器を壊され、思うように太刀打ちできない。
次第に、兵達も逃げ腰になっていった。

「わぁぁあ！もうだめだ！」
「俺達も食われる！」
「ひぃ～！わ、私の服が！？」
「いやぁ！こんなところで死にたくない！」
「落ち着け！落ち着くんだ！」

第一部隊に平陽公主達を守らせながら、必死で指揮を取る弓兵隊長。

「冷静さを失えば、そこで終わりだ！皆、落ち着いて行動するんだ！」

混乱する者達をなだめようと声を張り上げる。そして、部下へ指示を出した。

「第五、第六部隊！代わりに前へ！前に出て遠巻きに虎を包囲しろ

！」

「は・・・ははっ！！」

「その間に、第三・第四部隊！隊を立て直せ！他の部隊は、退路を確保して女官達を非難させろ！」

「は、ははっ！！」

そう命じ、答えるものの、一度バラバラになってしまったものを元に戻すのは難しい。

「押すな！押すなって！」

「通してくれ！前に行かないと――――」

「俺は下がりたいんだよ！」

「よせ！これ以上前に行ったら虎が――――――！！」

「グォォオ！！」

「「「ぎゃぁああ！！」」」

まとまったと思えば、散らばってしまう兵達。

そんな彼らを横目で見ながら、虎の上の宦官は苦しそうに叫ぶ。

「や、やめろっ！紅嘉、殿・・・！！」

虎の上で、必死になだめようとする姿。

「頼むから大人しくしてくれ！他の人を襲わないでくれ！！」

その姿に、弓兵隊長は作戦を変えた。

「宦官殿！抑えられるか！？」

「も、申し訳ありません！腹に力はいらなくて・・・！」

「安様！賊との傷が癒えていないのですね！？」
「すまない・・・玲春殿・・・！」

そう言って顔をゆがめると、虎の動きがいっそう激しくなった。
自分の上に乗った宦官を揺さぶりながら暴れる紅嘉。
前足を交互に繰り出しながら、怒りの声を上げる。

「ガァルゥル！！」
「うわぁぁ！」
「ダメだ！前方が蹴散らされたぞ！」
「矢はもうないのか！？」
「矢どころか、弦すらないんだぞ！？」
「きゃぁあ――――――！！こ、こっちに来たわ！」
「助けて！死にたくない！」

逃げ惑う者達へ容赦なく攻撃する大きな猫。
それを押さえ込もうとする宦官。
しかしその動きは、周りから見てもぎこちなかった。

「安様ぁ！！」
「くそ！賊にやられた傷が・・・！」
「わかっている！とりあえず、虎から降りろ！」
「そうでございます、安様！そうしないと、安様を射殺すおつもりです！平陽公主様は！！」
「なに！？」

玲春の言葉に、星影の目がかっと見開く。
そんな宦官の姿に誰もが、怒りを露（あらわ）にすると思っていた。
ところが、その口から出たのは周囲の予想に反するものだった。

「そんなことはどうでもいい！ご無事なのか！？平陽公主様は！？」
「安様！？」
「そ・・・『そんなこと』だと！？」
「紅嘉殿は、私がなんとか・・・抑える！だから早く避難させてくれっ！」
「宦官ど・・・！？」
「弓兵隊長！こうなっては仕方ありません！私にかまわず攻撃してください！！」
「安様！？なんてことを――――――！？」
「わ、私一人の犠牲で、紅嘉が皆さんを襲わなくなるなら、その方がいい・・・・！！」

その星影の言葉で、張願の表情が変わる。

「平陽公主様を、陛下の姉君を安全な場所へ逃がしてください！！他の方達もです！できるだけ私から――――――私達から離れてください！絶対に、怪我をさせませんから！」
「安様・・・！」
「ちょっと、聞いた！？」
「自分を殺せという人物を、守ろうとするなんて・・・！？」
「大した宦官だな・・・！」
「なかなか骨があるぞ。」
「本当に・・・宦官にしては人が好すぎるわ・・・！」
「でも、陛下が気に入るわけだわ・・・。」

健気な姿に、逃げ惑う人々は感動していた。

「平陽公主様・・・。」
「・・・ふん。」

それに反して、皇帝の姉への視線は冷たくなる。
そんな視線に気づき、ねえやが恐る恐る声をかけると、本人は不機嫌そうに彼らを睨み返した。
目だけの威圧に、すぐに彼らはそれをやめたが、全員は見るのをやめただけ。

「なんてお方だ・・・。」
「私達がこんな目にあってるのに・・・。」
「・・・自分のことばかり。」
「それに比べて・・・あの宦官は・・・。」

怪我を負いながら、周囲を気遣う姿。
それは【善良な宦官】として振舞っていたのだが、それはあくまで建前である。
実際は・・・・

（このババァ！やっぱり計画的に殺すつもりだったのか・・・！！）

本心はだいぶ違うことを考えていた。
距離があったとはいえ、平陽公主と玲春達とのやり取りは、星影の耳にも届いていた。
あれだけ大声で話していれば自然と聞こえる。
多少、聞き取りづらいところもあったが、唇を読むことができたので会話は理解できた。

（即席・出来立ての肉を作れとは――――――――――――――――――とんでもない皇族だな・・・！）

客観的に考えれば、平陽公主の発言は理にかなっていた。
時間短縮・被害縮小を考えれば、自分を射殺した方が都合もいい。
だが、周りはそれでいいかもしれないが、生贄にされるこっちはたまったものではない。

（大体、虎の餌に人間がはいってるのがおかしいじゃないか！？）

そもそも、この紅嘉なる虎は「人間を食べさせない」という条件の下に、平陽公主の夫が助けたのだ。
約束違反もいいところである。

（それにいくら罪人とはいえ、虎に人間を食わせるとはどういうつもりだ！？昔から、虎に食われた人間は、その魂が虎の奴隷となって、身代わりの人間を差し出すまでこき使われるんだぞ！？そんなことも知らないのか！？）

昔からの言い伝えを思い出しながら、さらに苛立つ星影。
自分は、虎の餌になるために宮中に来たのではない。
入れ替わって宦官になったわけではない。
妹を助けるために乗り込んできたのだ。

（星蓮と再会すらしないうちに、虎に食われてたまるか！！）

それを虎の食料にされるなど、笑い話もいいところである。
おまけに、【罪人】の烙印まで押されて差し出されるのだから、平陽公主の対応は自分を馬鹿にしているとしか思えなかった。
こんなところで、それもこんな女のために、死ぬつもりなど毛頭もなかった。

「なんとか紅嘉殿は、私が大人しくさせます！その間に、皆さん遠くへお逃げください！女官の皆さんはもちろん、平陽公主様を・・・！」

苦悶の表情で、暴れる虎にしがみつきながら叫んだ。

平陽公主を気遣う言葉を発してはいたが、これもほとんど芝居である。

紅嘉を大人しくさせようと思えば、大人しくさせることはできる。

虎への力加減はできるし、怪我をさせるようなヘマはしない。

だが、それでは星影の気がすまない。

約束を破られたことや、玲春への不適切な発言に対して平陽公主への不満があった。

怒りがあった。

緊迫した状況、現実味を出すために、星影は兵や女官の衣服は破かせたりした。

「きゃあ！？買ったばかりの服が――――！」

「うわぁあ！？鎧が！」

「服ごと鎧も喰いちぎられた！！」

「やめろっ！やめるんだ、紅嘉殿！女官の方々や兵の皆さんを襲わないでくれっ・・・！！」

逃げ惑う女官や必死に虎に立ち向かう兵達には悪かったが、紅嘉をおとなしくさせるつもりはない。

皇族ともなれば、それより上の身分は皇帝しかいない。

しかし皇帝は、彼女の弟である。

弟が姉を叱るなど、道徳的に考えてもあまりないだろう。

彼らの父母は生きていない。

間違ったことをしていても怒る相手はいないのだ。

約束を破られたことも許せない。

でもそれ以上に、人間を生餌として虎に与える元・皇女の感覚が許せなかった。
だから他の者達に悪いと思いつつも、抗議の意味も込めて芝居を続けた。

（これは天罰だ！己の所業が、どういった悲劇を招くのか・・・その身をもって思い知れ！！）

「お前死にたいの！！？」

本物の林山がこの場にいれば、本気で殴りながら注意するだろう。
それだけ、死罪に相当するだけの無礼を星影はこっそりと働いていたのである。

「やめろ――――――！紅嘉ど、のぉ・・・・！！」

必死で紅嘉を抑えながら、制止の声を上げ続ける宦官。
熱のこもった演技で、周囲を見事にだましていた。
だれも、わざと襲わせているとは思っていない。
逃げ惑うもの達の間をすり抜けながら、目標へと着実にコマを進める。

「ぐわぁあ！！」
「ぎゃ！」
「な、なにをしているのです！平陽公主様をお守りしなさい！」
「わかっておりま――――うわぁあ！！」

気高い熟女を守る壁をつき壊しながら進む。

もちろん演技も忘れなかった。

「やめ――――――！うっ！？・・・・うぅぅ・・・！！」

――――虎を押さえ込もうとしつつも、傷の痛みで思うように動けない宦官――――

それが周りから見たの宦官の姿。

しかし実際は、わざと元・皇女に向かって虎をけしかけた。

「やめ・・・ろぉ・・・！！」

と言いつつも、虎の腹に当てている足をそっと押し付ける。

「グォォァアア！！」

ジワリジワリと押し付け、痛みを与えていくものだから紅嘉はたまったものではない。

ひどく暴れ、兵はなぎ倒し、蹴り倒して大暴れする。

「グハ！」

「ガハッ・・・！」

「うわぁぁ！！」

「ガァルルル！！」

「落ち着け！頼むから暴れないでくれぇぇぇ！！」

そう言いながら、押さえている両足をグリグリとねじりながら押し付ける。

わざと、紅嘉が暴れるような行為をする。

「お早く、お早くお逃げください！平陽公主様ぁぁぁ！！」

それでいて、平陽公主を心配する言葉を発しながら、見事にそう思わせるだけの白熱した演技をした。

「グァオオ！！」

「ひぃい！平・・・お、お嬢様！！」

「落ち着け、瞭華・・・・！」

目標までは数メートル。

平陽公主と、その横に馬瞭華。

その前には、弓兵隊長と数人の部下。

彼らの数メートル横に、投げ出された玲春がいた。

星影が、それぞれの大体内地を確認した頃、彼女を乗せた大きな虎は飼い主の目前へと到着していた。

「紅嘉・・・」

「お、おやめなさい！紅嘉！！」

他の者には手を出さない。

飛びつくのは、元・皇女とそのねえや。

顔色を変える主従の姿に、心の中で星影は微笑んだ。

その心境は、悪戯を始める子供のような感覚だった。

（心配無用。脅かし程度に、服を少しだけ破かせていただだくだけですから。）

嘘つきの代償として、ちょっと露な姿になってもらいますよ。

（まぁ・・・熟女が『あはぁ～んな姿』になっても、誰も喜ばない

けどね～）

紅嘉に抱きついたまま、その腹を瞬時に押す星影。

それを合図に紅嘉は、星影の目論見通り平陽公主へと向かった。

第六十八話　猫と遊べば（中編）（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

星影ＶＳ紅嘉（虎）の対決編の中編です。
我が道を行くのが星影です。
とりあえず、女らしく、女同士の喧嘩です。

余談ですが、たくさんのご感想をありがとうございました（嬉々）
！！
これからも頑張って、読んだ人が楽しめる話を目指します！！

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレ
ですみません・・・（土下座）

第六十九話　猫と遊べば（後編）

嘘つきを困らせてやろう。

そんな軽い気持ちで、星影は紅嘉をけしかけた。

「ガァアア！！」

「ひぃい――――――――――――――！！」

ところが、その攻撃は元・皇女へは届かなかった。

「はぁ！！」

寸前で、弓兵隊長が弓の弦を投げて防いだのだ。

（――――――なに！？）

「グゥル！？」

しかもそれが紅嘉の爪に引っかかってしまい、動きを止めてもがき始めたのである。

「ウ～ウゥ～！！」

（チッ！さすがは弓兵隊長・・・！でも、なかなかいい動きね。）

その心境は、悪戯が失敗したような子供そのもの。
あんな防ぎ方もあるとは。
感心しながら、ゆっくりと虎から体を起こす星影。
弓兵隊長は弓兵隊長で、紅嘉が動かなくなったのを見届けると、星影に向かって声をかけてきた。

「心配するな、宦官ど・・・いや、安林山殿！平陽公主様は、我ら弓兵第一部隊が守っている！だから、虎から降りろ！」
「え？」
「張願様！」
「『安林山殿』じゃと・・・？」

（私を名前で・・・それも『殿』呼びで？）

武人からの申し出に、素で驚く星影。
武官から見れば、宦官など『殿付け』で呼ぶほどの価値はない。
だからその言葉を聞いた時、相手が自分に対して何らかの心の変化を起こしていたことを感じ取った。
問題の弓兵隊長に目をやれば、必死の形相で自分を見ていた。

「紅嘉の動きが鈍った今しかない！左右どちらからでもいい！転がるように横から降りるんだ！」
「な――――なにをおっしゃっているのですか、張願殿！？弓兵隊長ともあろう者が、平陽公主様のご命令に背くのですか！？」
「私の使命は平陽公主様をお守りすることです、馬殿！宦官のみを殺すことなど、職務外です！」

（意外だな。）

ほとんどの武人は、宦官と見れば差別する。
最初この弓兵隊長を見た時も、そういう一人だと思っていた。
だが、先ほどとは印象がまったく違っていた。

（・・・見誤ったか？）

宮中に長くいたせいで、人を見る感覚が鈍ったのだろうか。

「とにかく早く降りるのです、安林山殿！今なら、貴殿を射殺さなくてすむ！」
「そうでございます！安様、怖いでしょうが、頑張ってください！」

虎の動きが止まったことで、離れていた玲春が駆け寄ってきた。
これに星影は、本気で怒鳴りつけた。

「こちっちへくるんじゃない！！逃げなさい、玲春さん！！」
「それは、安様の方でございます！さあ、早くこちらへ！」

そう言うと、両手を広げて構える少女。
この姿から真剣さも伝わったが、可愛さの方が勝っていた。

「その女官の申す通りだ！早く彼女の胸に飛び込め！」
「できますか！？そんなことしたつぶれるでしょう！？」
「つぶれないように頑張ります！ですから安様も、怖いのを我慢してください！！」
「いい加減になさい玲春！張願殿もですよ！！一番の責任者を逃がすなど――――そんな道理の通らぬ話がありますか！？」
「まだそんなことを仰るのですか！？」
「そうですわ！この後に及んで・・・どうしてそんなことを・・・

！？」

少女がそう言った時だった。
地鳴りのような声がその背後から響く。

「え！？」
「あ――――――――――紅嘉！？」

（しまった！）

「きゃぁぁああ！？」
「ぐわぁ！？」

弓兵隊長達に気をとられ、星影の力が緩んだ瞬間。
紅嘉が大きく飛び上がった。

（この馬鹿力め！！）

すぐに行（ぎょう）したが、勢いはとまらなかった。
いくら星影が武術の達人といっても、女性の力には限界がある。
なんとか力を分散させようと両足と両手を動かし続けた。

「はぁあ！」

その甲斐あって、紅嘉が食らいつくことは避けられた。
虎に身をゆだねた状態で、玲春の頭上を飛び越えたのだ。

（よっしゃ！危険回避完了！）

玲春を見下ろしながら、心の中で安堵する星影。
だがそれもつかの間。

「あ。」

着地地点に張願の姿。

（しまった！！）

と思ったが、遅かった。
そのまま――――――――――弓兵隊長めがけて体当たりしてしまったのだ。

「ぐっ――――――――――――――――――はぁ！！？」

「きゃぁああ――――――――――！？」
「隊長ぉ――――――――――――――！？」
「ちょ、張願様が・・・・やられた！？」

（やっべぇ――――――――――――――――――！！）

ぶつけちゃったよぉぉ！！

後悔したがどうにもならない。

この時、星影が乗っていた紅嘉は、一般に【シベリアトラ】と呼ばれる中国産の虎であった。
【シベリアトラ】の成人体重は、通常約１６０～３００ｋｇあるとされている。
その巨体が、勢いよくぶつかってきたのだ。
どんなに鍛えた大男であっても、その衝撃は大きいだろう。

（絶対、骨の一・二本は折れた・・・！）

ぶつかった手ごたえから、そんなことを考える星影。

ごめんなさい！弓兵隊長・張願様っ！！

（ぶつけたいのは、気位の高い元・お姫様なのにぃ――――――――――――――！！）

心の中で、弓兵隊長に懺悔する星影。
こうして、完全に人柱を突破したことで、元・皇女を守る者はいなくなる。
紅嘉にしがみついたまま、そっと目だけで標的達を見る。

「お、お嬢様・・・！」

腰を抜かしながらも、必死で女主を守ろうとしがみ付いているねえ

や。

（・・・口先だけの忠義というわけでもないのか。）

そして問題の皇帝の姉へ視線を向ける。

途端に、衝撃が走った。

（こいつ――――――――!?）

そこには青い顔をしながらも、まっすぐにこちらを見据える淑女がいた。

「とまれ!紅嘉!!主人の顔を忘れたか!?」

大声で叱りつけると、一歩こちらへ踏み出した。

飼い主らしく、堂々とした振る舞い。

これには、星影も少し感心した。

（たいしたものだが・・・これに紅嘉はどう答えるか?）

「ガァアア!!」

星影の疑問に答えるように、紅嘉は一声吼えると、迷うことなく突進した。

「紅嘉ぁ!?お嬢様がわからないのかっ!?」

困惑気味に叫びながら、さらに平陽公主に抱きつく馬瞭華。

（そりゃあ、動物だからな・・・。）

しかも、主食は在任という種類の人間。
もしたしたら、そんな人々の念が、紅嘉の攻撃を後押ししているのかもしれない。

叫んだところで、虎に通じるわけもなく、その声だけがむなしく響く。
現実を受けとめた元・皇女は、意外な行動に出た。

「――――!」
「えっ!?」

力いっぱい、自分に抱きついていたねえやを突き飛ばす。
それは、自分のねえやを守るための動きだった。

（やっぱり、ねえやは大事なのね～）

その優しさを、もう少し他の者にもしてやれよ。

「紅嘉・・・。」

攻撃的な飼い猫ならぬ、飼い虎の姿に目を細める。
だがよく見れば、扇を持つ手はかすかに震えていた。
動じていないわけではなかった。
しかし彼女から、逃げようとするそぶりは見られなかったのだ。

（これが皇族か・・・・・）

悪い部分ばかり見ていたから、悪い印象のほうが多かった。
今も、悪い印象の方が強い。

だが、芯の強さはあった。

（そう言えば、賊に襲われていた陛下も、多勢に無勢で勇敢に戦っていたな・・・。）

わがままで常識はずれだが、正念場では強さを見せる。
飼い猫相手に、背を向けて逃げるような無様な姿は見せないということか。

（・・・これじゃあ、私が悪者だな。）

悪者は、郭勇武だけで十分である。
高慢な皇帝の姉に一泡吹かせようと思っていた星影の考えは消えた。
相手の覚悟を見た以上、からかう気にはなれなかった。

（や――――――――めた。）

切り返しの早い星影の行動は、本当に迅速だった。

「紅嘉殿ぉぉぉ――――――――――――――――――――!!」

大声で虎の名前を呼ぶ。
力を抜いていた両足に力を込めると、紅嘉の腹を押さえ込む。

「グガァ！？」

馬を行すような動きで、虎の上で上体を起こした。

星影の体重が不安定にかかったせいで、紅嘉は後ろへと倒れそうになる。

「ガァァアア！！」

紅嘉もなかなか根性があった。後ろ足で踏ん張り、仁王立ちのような形になる。

「ひっ・・・と、虎が立ったぁ――――――――――！！」

その動きに、星影は振り落とされそうになったが、持ち前の脚力で耐えた。

「くっ――――――――――――――この！」

紅嘉も紅嘉で、二本足で立ったはいいが、バランスが上手く取れなかった。

（このままでは倒れる！平陽公主にぶつかっちゃう！）

そうなったら、弓兵隊長の二の舞である。

「お逃げください、平陽公主様！」

「押しつぶされますぅ！！」

そんな星影の予想に合わせるかのように、紅嘉は平陽公主目掛けて倒れこんでいった。

「お、お嬢様ぁあああ！！？」
「いやぁああ！平陽公主様ぁ！！」

玲春と瞭華、他の女官達の叫びが庭に響く。

「あ――――――――・・・あぁあ！？」

悲痛な声が、気の抜けた声へと変化する。

「させるかぁああ――――――――――――――――――！！」

虎の声に負けないくらいの声。
こちらを見る人々をあざ笑うかのように、宦官を乗せた虎は元・皇女の頭上を高く飛んだ。

「えぇぇえ！！？」
「な、なんという馬首――――――ではなく、虎さばきだ！？」

紅嘉が前に倒れる寸前、その首を後ろに引っ張り、数十歩後ろに歩

かせた星影。
その上で、自然の力と星影自身の力で前へと倒した。
それによって、紅嘉の前足が平陽公主に直撃することはなかった。
だが、このまま着地しても、体勢を立て直すにしても間隔が狭すぎた。
しかし、飛び越えるのには十分な幅だった。
そう考えた上で、着地と同時に標的の上を飛ばせたのだ。

「やぁあ――――――――――――――――!!」

皇帝の姉を飛び越えると、馬首ならぬ、虎首を庭のすぐ側の廊下へと向けた。
そして上体を起こしたまま、空中で紅嘉の首に利き腕を回す。
腕を曲げて力を込めれば、星影の力瘤（ちからこぶ）が浮かぶ。
それによって、きつく紅嘉は首を締め上げられた。
虎の動きを固定してから、背中の皮を思いっきりつかむ。

（猫だって、子猫を運ぶときは背中の皮を加えるんだ。虎だって、背に余分な皮があるはずだ！）

引っ張れば、案の定腕に一周させるだけの皮を持つことができた。
後は、紅嘉の腹を押さえ込む両足に力を入れると大声で叫んだ。

「いい加減に――――――――――――――――――――――――しなさいっ!!」

地響きと共に、煌びやかな飾りが施された道に激しい崩壊音が鳴り響く。

「ガァウゥウゥゥ――――――――――・・・・・・！！」

星影の激に続き、紅嘉の遠吠え。
それを最後に、辺りは土埃や木の破片が立ち込める場所となった。

「あ・・・安様・・・・！？」

視界が開けた時、少女が呼んだ宦官はそこにいた。
虎の背に乗ったまま、上から巨大な猫を押さえつけていた。

「・・・大丈夫だよ～・・・大丈夫だからね～」

穏やかな声でそう繰り返す星影。
そして、ゆっくりと虎を抑える力を緩めていった。
それに合わせるように、少しずつ自由を取り戻す紅嘉。

「大丈夫・・・・！私は、あなたに危害を加えるつもりはありませんからね・・・・！？」

そう言いながら、再度庭へと降りるように動かした。
虎がこちらに戻ってきたことで、女官達は叫びながら逃げた。

対する兵達の方は、落ち着きを取り戻していた。
わずかに残った弓を構えながら、遠巻きにこちらの様子を伺っていた。

「申し訳ない。急に乗ったから、驚いたんだね？ごめんね、ごめんね・・・！」

優しい声で言いながら、そっと耳元へ口を寄せる。
静かな声色で、何度も謝り続ける。子供をあやすように繰り返し言った。
それに合わせるように、周囲も静かになっていった。

「ギャ！ガッ、ガァ、ガッ・・・！」

それでも、一度怒った虎はなかなか機嫌を直さない。
自由を取り戻すにつれ、抵抗を再開し出したのだ。
右へ、左へと動く・・・動かしながら暴れる虎。

「紅嘉殿、お願いだから怒りを静めてください。」
「グゥルゥウ・・・！！」
「これだけ頼んでもだめですか？」
「ガァアア・・・！！」

（やっぱり、玲春殿から借りた武器が、顔に効いてるのかなぁ～）

隙あらば、自分の首に噛み付こうとする紅嘉。
それから逃げる星影。追いかける紅嘉
それを繰り返すうちに、クルクルと回り始める一人と一匹。

（やば・・・気分が悪くなりそう・・・。）

このまま回り続ければ、目が回って落馬ならぬ落虎して、紅嘉に食われてしまう。

周りの目もある手前、噛み付きをよけながら、彼女は声をひそめて言った。

「おい・・・調子に乗るなよ。」

怒りのすべてを声にこめる。そんな彼女の思いは、敏感な動物に伝わった。

「これだけ頼んでもきかねぇのかよ・・・・？」

もう一度、同じ口調で言えば、うなるのをやめてしまった。

「お前さ・・・今すぐ殺してやろうか？できんだぞ？首の周りには、命にかかわる筋が腐るほどあるんだ。」

グッと首に力を込めながら、優しい声で告げた。

「このまま吼えたり、暴れたりし続けたら――――――――わかるよなぁ～・・・子猫ちゃん？」

――――――――――逆らえばどうなるか？

そう言わんばかりの眼力で覗き込む星影。
優しい声でありながら、威圧感をこめる言葉。
しばらく、首を振って抵抗していた紅嘉だったが、数回くしゃみを繰り返した後、その場にうずくまってしまった。

「こ、紅嘉・・・・。」

あれほど、余裕だった平陽公主の言葉はもうない。
狼狽し、呆然と立ち尽くす元・皇女。

「ああ、いい子だね～？よしよし！」

なだめる様な、脅すような宦官の声と共に、小さな金属音が庭に響く。

「平陽公主様。」

名を呼ばれ、声を発した人物を見る皇帝の姉。

「お怪我ございませんか！？他の皆様も――――――――――大丈夫ですか！？」

馬に乗っているかのように、ゆったりと虎の上に乗りながら問う宦官。

自分を心配そうに見つめていた。

「玲春さんも大丈夫ですか！？」

「あ、わ、私は大丈夫です！安様こそ――――――――！」

「馬様も、怪我はなかったですか！？弓兵隊長様も、ご無事ですか！？」

「あ・・・ええ、平気ですわ・・・。」

「・・・大事無い。」

目を丸くしたまま、気丈に振舞う老女と部下に支えながら体を起こす武人。

「安林山殿こそ、傷はどうなのだ・・・？」

「そうですわ！安様！」

弓兵隊長の言葉に、弾かれるように星影の元へと駆け寄る女官。

「安様、傷は大丈夫でございますか！？すぐ、お医者様に――――――！」

「傷はふさがってるから平気だよ。ちょっと・・・緊張で、うずいただけだから。」

額の汗をぬぐいながら答えた。

穏やかな表情だった。その表情のままで、宦官は口を開いた。

「平陽公主様。」

真剣な声と共に響く金属音。

「大変お騒がせして申し訳ありませんでした！御所望の紅嘉の真珠の首輪――――――無事に、本人からお借りできました。」

地面に顔を突っ伏せ、ごめんなさい、ごめんなさい、と言っているかのように首を振る紅嘉。
そんな虎の上に跨ったまま、宦官は告げる。

「どうぞお受け取りを。お望みとあらば、御前までお運びいたしますが・・・？」

星影が両腿に力を入れると、紅嘉が小さく一声鳴く。
顔をねじって自分に乗る人間を見る紅嘉。
そこには、先ほどまでの穏やかな表情はなく、厳しい表情の宦官がいた。
目だけで紅嘉見下ろすと、片耳をつまんで「行け」と小さく囁く。
その言葉に小さく鳴くと、よろよろと自分の主人の元まで運び始める。

「ありがとう、紅嘉殿。私のような宦官の頼みを聞いてくれて。本当に、ありがとう・・・・！」

平陽公主の前まで来たところで、その顎を撫でながらお礼を言う。
そして、グッと、紅嘉に全身の力を加えてのしかかった後、その体から離れた。

紅嘉は、ぐったりとその場に座り込む。

「では改めまして。お約束の品、お受け取りくださいませ。平陽公主様・・・・！」

平陽公主に向かって、恭しく大きな真珠のついた金色の輪を掲げる宦官。

彼女の望んだ通り、怪我をさせることなく真珠を借りた（？）星影。

血の飛び散るような惨劇にはならなかったが、違った意味での惨劇を起こしていた。

これには、捧げられた本人はもちろん、周囲の者達も凍りつくしかなかった。

第六十九話　猫と遊べば（後編）（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

星影ＶＳ紅嘉（虎）の対決編の後編です。
関係ない人を巻き込んでしまいましたが、とりあえず目標が達成できた星影です。
次回は、種明かしとなっております。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十話　種明かし

かしずき、頭を下げる宦官。
その手には、大きな真珠のついた首輪。
そんな宦官の前には、見栄えも美しく、高貴な風貌をした女性が一人。

「紅嘉殿から真珠つきの首輪を借りれば、私の罪は不問とのことでしたね？」

穏やかな笑みを浮かべる宦官・安林山こと劉星影。
宦官の言葉に、周囲は次第にどよめきだした。
先ほどまで彼女は、人食い虎相手に格闘していた。
身軽な体と天性の武勇、彼女得意の知略（？）が功を奏し、虎がはめていた首輪を奪うことが出来た。
その報酬は、自分にかけられたいた『死罪』を『無罪』にすること。
晴れて約束を守った宦官に、普通なら非難は上がらないのだが――

「・・・なにをしたのじゃ・・・？」

非難というよりも、責めるような言葉がかけられた。

「なにをでございますか、平陽公主様？」

声の主は、現皇帝の姉・平陽公主だった。
虎と戦って勝った宦官に納得ができず、不平をもらし始めた。

「とぼけるでない！紅嘉に、なにか叩き付けたであろう？」

開いていた扇を閉じると、それで指差しながら言った。

「かんざしか？くしか？耳飾か？首飾りか？紅嘉の顔になにか叩きつけたのを、わらわは見ていたのだぞ！？」

「お、落ち着いてください、平陽公主様！今調べさせませるゆ――――」

「その必要はありません。」

ねえやの言葉を遮りながら星影は言った。

「平陽公主様がご所望いたしておる品は、これです。」

そう言って、一同の前に差し出された星影の手。

「な！？」

「これは――――――――！？」

宦官が見せる物体。それは、その場の全員が驚く物。

「お香です。」

匂い袋に入った香だった。

「・・・確か。」

「お香でございますね・・・。」

香の入った袋はの口は開かれ、中には乾燥した匂いの元が顔を覗かせていた。

玲春の持っていた香は、当時としては一般的な香草を使ったお香だった。

実はこの時代、春秋戦国・秦・漢と言った古代中国の頃は、香草で出来たお香を使っていた。

木片のお香が中国に広まるきっかけとなったのは、仏教の伝来と深く関係していた。

元々お香とは、漢方の一種であり、大半は良い芳香を持つ香原料だった。

それは、薬膳を食す僧侶にとって、切っても切れない存在。

仏教の布教を通して、自然にお香も人々に伝わっていったのだ。

なので、中国に本格的に仏教が入ってきたのは南北朝・五胡十六国時代。仏教の基盤が出来た時期であり、シルクロードを通して木片のお香がインドから伝わってきたのだ。

これ以後、最も花開いたのが唐時代である。

唐時代は芳香文化が最も栄えた時期であり、高価で上品な香りは宮中などの限られた人間がつけるものだった。それゆえ、皇帝・皇后に近いものは、彼らの移り香によって、同じように良い香りがしていた。良い芳香がする＝地位のある人間とされたのだった。

前漢の時代、まだ仏教の影響がそれほどなかったこともあり、使われる香は香草であった。主なものとして、中国産の『ネイティブハーブ』を使用していた。

ただし、玲春の使っていた香は、『ネイティブハーブ』ではなかっ

た。
香草の一種、藤袴（フジバカマ）という川べりや土手などに咲いているものを香にしたものだった。
淡紫色をし、可憐さ風情のある美しい花は、桜餅のような甘い香りが特徴だった。
そのため、香草としてはもちろん、葉を湯に入れたり、衣服や髪につけたりもしていた。
ちなみに、日本にお香が伝わったのは、５３８年の古墳時代。
その後、中国の僧侶・鑑真によって広まっていった。
先にあげた藤袴も、日本には奈良時代に伝わって『香水欄』と命名され、日ノ本の女性達に大変愛されたのだった。

「甘い匂いじゃ・・・。」

なんともいえぬ穏かな香気に、平陽公主は少しだけ冷静さを取り戻す。

「これを・・・紅嘉に叩きつけたのか？」
「とんでもございません。かなり苛立っていたので、気を落ち着かせていただこうと、匂いを嗅いでもらっただけです。」
「ふざけるでない。何がかがせたじゃ・・・？香を鼻に叩きつけただけであろう？」
「そう見えたかもしれません。私といたしましては、飛んだり跳ねたりする紅嘉殿の動きにあわせるうちに、ついうっかり、強く押し付けてしまったかもしれません。そんな気はまったくなかったのですが・・・。」
「なんと白々しい・・・！あの動きが、うっかりだと？」
「的確に狙って叩きつけていただけではありませんか、安林山殿！？」
「これはこれは手厳しい・・・。まぁ、あなたを傷つけたことには

間違いありませんね、紅嘉殿？」

そう言うと、その頭を撫で始める宦官。

先ほどまで自分を脅していた人間の動きに、最初は警戒した紅嘉。

しかし、優しい手の動きに、その体から力が抜けていった。

安心したように、紅嘉が警戒心を解いていたのは誰の目から見ても明らかだった。

そんな星影の動きにあわせ、妖しくも、ひどく甘美な空気が辺りに漂う。

「叩きつけたのは、香だけか？」

あたりに広がり始める香りの中で、元・皇女は宦官に問う。

「お前が叩きつけたのは、本当にこの香だけか？」

「はい。それ以外、使ってはおりません。」

焦ることなく、落ち着いた口調で答える星影。

「玲春さんにお借りした香で、紅嘉殿の気持ちを落ち着かせたまでです。」

そうは言ったが、実際は落ち着かせるために使ったのではない。

動きを封じるために使ったのである。

動物の嗅覚というのは、人間よりもはるかに優れている。そのため、人間にわからない臭いでも動物にはわかってしまう。餌を隠しても見つけてしまう猫のように、飼い主を臭いで判断する犬のように、生活の中で嗅覚を頼りにしている。

そんな『におい』に敏感な鼻の側で、独特の臭いを持つもの、臭い

のきついものをかがせるとどうなるだろうか？

（香を使ったのは、強い臭いをかがせることで嗅覚を使えなくするため。）

つまり――――

（獲物である自分の臭いをわからなくさせるため。）

だから、玲春が匂い袋を落とした時、閃いたのだ。

（これを使えば、虎も自分も傷つくことがない！）

策はそれでよかった。

問題は、実行に移す瞬間。

難しかったのは、香を使う時期だった。

物が物なので、投げてしまえば風で飛ぶ。

なので、香を使うためには接近するしかなかった。

乾燥した香草を掴み、片手で細かく潰す。

それを、紅嘉の鼻を狙って叩き付ける。

目に当てて眼球をつぶさないように、口に当てて腕を食いちぎられないように気をつけた。

それらのことを経（へ）て、星影の作戦は成功したのだった。

「これは、玲春さんからお借りしたもの。量が減ってしまいましたが、お返ししますね。」

そう言って、少なくなったお香を返す星影。

「お借りしたものということで扱いには気をつけたのですが、紅嘉殿を前にしたら、恐怖で手元が狂ってしまい・・・」

半分以上を使ってしまいましたと、すまなそうにわびる星影。そんな宦官の姿に、少女は大きく首を振りながら答えた。

「とんでもございません！安様がご無事なら、こんな香など惜しくありません！」

「玲春さん。」

「――――――ご無事でよかった！」

わっ！と、泣きつく女官に、困ったような笑みを浮かべる星影。

「申し訳ない。あまりにも、この香のにおいがよかったので、是非とも紅嘉殿にもかいでほしかったんですよ。」

「安様ったら、またそんなご冗談を・・・！」

「笑わせるな！」

感動的な二人のやり取りを元・皇女が遮った。

「平陽公主様？」

「笑わせるな・・・安林山。」

「何が・・・おかしいとおっしゃるのですか？」

「おかしいであろう？わらわは、紅嘉と遊べといったのだ。なぜ、

周りの兵や女官達を巻き込んだ？」

そう言うと、ボロボロになった弓兵と女官達を扇で差す。

「お前が、紅嘉の上に陣取ったおかげで、わらわの侍女達は服を裂かれて大恥をかかされた。」

「平陽公主様！？」

「奥様・・・！？」

女主人の言葉に、顔を合わせる侍女達。

「弓兵達はもちろん、それを指揮する張願（ちょうがん）まで大怪我をしたのだぞ！？」

「奥方様。」

「奥様・・・。」

「平陽公主様・・・。」

兵士はもちろん、名を呼ばれた弓兵隊長は渋い顔をする。

「安林山よ、お前はやりすぎたのだ。もはや、許す許さぬの問題ではない・・・・。お前の首は城門に乗せる。」

「ええ！？」

（嘘つきぃ！！）

助けると約束しておいてこの仕打ち。

約束違反。
あまりにも身勝手な命令に、

（やっぱり事故に見せかけて始末しておけばよかった！！）

と、思う星影。その一方で、すぐにその考えを否定した。

（いやいやいや！いくらなんでも、皇族になにかしたら、すぐに身元を調べられる。なによりも、無益なことをしないというのが私の信条！）

とりあえず、命乞いを試(こころ)みる星影。

「お待ちください！それはあまりにもひどうございます！私は、あなた様のお言葉に従ったまでですよ？」
「黙れ。わらわの茶器を壊し、玲春をたぶらかし、紅嘉をいじめ、わらわに大恥をかかせたお前を生かしておけるほど、わらわは馬鹿ではない！」
「そんな！あんまりでございますわ、平陽公主様！」
「うるさいぞ、玲春！いい加減に、」
「――――いい加減になさるのは、あなた様でございます！」

低い声が、平陽公主の声を阻む。

「張願？」
「いい加減になされませ、平陽公主様。」

平陽公主から、星影に威嚇や殺害をを命じられた弓兵の隊長・張願だった。
自分を支える部下から離れると、痛みを我慢しながら弓兵隊長は言った。

「あなた様は、ご自分の侍女達や私の部下がこんな姿になったのは、安林山殿が悪いと思っていらっしゃるのですか？」
「なんじゃと？」
「女官が服を裂かれ、兵が武器を壊され、それらが怪我を負ったのは、あなた様が安林山殿に紅嘉殿をけしかけたからではないのですか？」
「お前・・・わらわが悪いと言いたいのか？」
「兵が怪我を負ったのは、その力が未熟だったゆえ。あなた様の侍女達が怪我をしたのも、私達の力が及ばなかったためです。」
「・・・なにが言いたい？」
「このような事態になったのは、兵としての役割を果たせなかったわが部隊の責任。ひいては、この兵を指揮する私にあります。どうか、罰を与えるとおっしゃるのなら、私にお下しください。」
「張願様！？」
「そんな、隊長！」
「張願お前・・・！」
「本気でおっしゃっているのですか！？」

武人の言葉に、一同が驚く。無論、星影もその一人だった。

「待ってください！張願様、それではあまりにも・・・！」
「君は怪我を負いながらも、平陽公主様の命に従って約束を果たした。それどころか、私の兵や女官達を守ろうとしたではないか。」

痛々しい体でそう告げる弓兵隊長。
その姿に星影の良心は痛む。

「しかも君は、平陽公主様に射殺されると聞いても、動じることなく人食い虎をなだめた。それどころか、自分を殺そうとしている相手を逃がそうとした。」
「それは――！」

相手の態度に、さらに良心が痛む星影。

（お芝居であって、本心じゃなかったし・・・。）

口ごもる宦官に、武人はハッキリと言った。

「それだけ真を尽くせる人間を、見殺しになどできない。」
「張願様・・・。」
「馬鹿馬鹿しい！だから、己一人が罰を受けると・・・？お前は、本当に救えぬ馬鹿じゃのぅ・・・！」
「なんだと！？」

思わず声を上げた星影。その声を受け、目を細めながら女主人は言った。

「なんじゃ、その口の利き方は？お前は卑しい宦官。わらわのように高貴な者とに対し、その存在自体が無礼なのだ・・・控えぬか！！」
「な・・・！？」

なんてババアだ！！

見下してくる相手に、怒り心頭の星影。そんな彼女の前を影がよぎった。

「え？」

一人の兵が、自分に背を向けて立っていた。

（なんだこいつ？）

そう思った星影の前を、またもや影がよぎる。こちらも、張願が率いていた若い兵だった。先ほどの兵と同じように、平陽公主と星影の間に立つと動かなくなる。

「なんじゃ？」

二人の兵に向けて、元・皇女が口を開く。それに対して兵達は、代わる代わる答えた。

「兵たるものが、役目を果たせなかったのは兵自身のせいです。」
「それゆえ、張願隊長に罪はございません。罰するなら、我らを罰してください。」
「安林山殿と、私達の不始末はまったくの別物でございます。」
「どうか、その点をご考慮ください。」
「・・・・・なに？」
「お前達！？何を言っておる！？」

自分達の隊長の問いに、彼らは力強い声で言った。

「張願様同様、安林山殿に罪はないと申しているのです。」
「隊長一人に責任を負わせるなど、俺達にはできません。」

「なんですと！？」

あまりのことに、声を上げる女主人のねえや。そして、兵士二人を指差しながら言った。

「正気とは思えぬ！そんなことをすれば、お前達の首は落ちるのですよ！？」

「私達の隊長は馬鹿と評されたのです。ならば、その部下が馬鹿であるのは当然です。」

「俺達も、張願様と同じです。最後まで、尊敬する隊長にお供するまでです。」

若い兵の言葉に、女官達からざわめきが起こる。残りの兵達は何も言わずに見守っていた。

「面白い。では、望みどおり処罰しよう。」

「平陽公主様！？」

兵達の覚悟の言葉を受け、事務的に言う平陽公主。

（冗談じゃない！）

このままでは、自分のせいでとばっちりを受けた三人の人間が死んでしまう。

（私は星蓮を助けに来たのであって、他人を冥土に送るために来たんじゃない！）

そう思った時、彼女の口は動いていた。

「これ以上はおやめください、平陽公主様！気に入らないのは私だけでしょう！？」
「安様！？」
「この方達こそ、あなた様の命令で動いただけではないですか！？それに、そう命じるきっかけを作ったのは私です！私だけ罰すればいいじゃないですか！？」
「では、なぜ命乞いをする？」
「あなた様のおっしゃることがコロコロ変わるからです！」
「ほぉ・・・わらわが悪いというのか？」
「だから、そう言うわけではなく――――」
「もうよい！！」
星影の言葉に応じることなく、彼女は言い放った。
「先にこの三人を射殺せ。」
「えぇ！？」
「なぜです、平陽公主様！？」
気に入りの少女の言葉に、彼女は笑みを浮かべて答える。
「不越罪じゃ。のぅ、瞭華？」
「・・・間違いございません。」
「だからって、あなたを守った人達を殺せと！？」
「お前が悪い。」
間髪いれずに言う女主人。星影だけを睨み付けると、真顔で彼女は言った。
「お前が逆らったからこうなったのだ。」

「そんな・・・無茶苦茶ですよ！」
「その態度が悪い！さぁ、者ども遠慮はいらん。こやつ等を殺した者を次の弓兵隊長にしてやろう。」
「ちょっと！？」
「一兵卒から昇進できるのだ。戦では千の首を取らねばかなわぬことを、三つ取ればかなうのじゃ。簡単であろう？」

全体に聞こえるような声で問いかける女主人。
それにざわめき立つ兵士達。

「さあ、安林山の目の前で、無礼者を射殺してしまえ！」

その言葉で、場の戦局は動いた。
それまで、様子を静観していた他の兵達が動き出したのだ。

「なっ！？」

我先にと動き出す千の兵。彼らの動きに、星影は衝撃を受けた。

「下がれ！」
「え！？」
「いいから、下がれ！」
「下がれって・・・？」
「宦官殿を守れ！」
「見殺しにはさせないぞ！」

そう言うと、星影を庇うように前に立つ兵達。

「張願様を守れ！」
「宦官を守れ！我等の隊長を守れ！」
「隊長や仲間を殺すというなら、我らも殺せ！」

「お前達、なにを――――――！？」

「ここには、隊長と宦官殿を殺す兵はいないと言うことでございます！」

負傷した上司の体を支えながら、部下達は言った。
兵の半分は星影の側へ、残り半分は張願を守るために動いた。
そして、平陽公主に立ちはだかったのである。

「なんということを――――――！？」

これには、女官頭の馬瞭華は声をふるわせながら叫んだ。

「平陽公主様に対して何たる無礼！！こんなことが許されるはずがありません！」

そう言うと、側にいた女官達に向かっていった。

「お前達、他の者を連れてきなさい！このような輩、一刻も早く処刑しなくては！」

上司の言葉に互いに顔を見合わせる女性達。

「さぁ、早くお行き！早く！」

しかし、誰もその言葉に動こうとしない。互いの顔を見るばかりだった。

「なにをグズグズしているの!?さっさとお行き!!」

「・・・行けません。」

ふいに、一人の女官がポツリとつぶやく。

「先ほど・・・紅嘉殿に襲われた際、足をくじいてしまいました・・・。歩けません。」

「なら、お前には頼まぬ!そこのお前!行っておいで!」

怒鳴りながら言うねえやに、指名された女官は小さく答えた。

「・・・私も行けません。紅嘉殿に、服を裂かれてしまい、動けば脱げてしまいます。」

「もういい!それならば、お前はどうだ!?」

その隣にいた女官に問えば、こちらも同じように告げる。

「私は・・・紅嘉殿の前足のつめを受けました。立っているだけで、精一杯です。」

「じゃあ、お前は!?」

「足を叩かれました。痛くて動けません。」

「お前は!?」

「私も、動けば服が脱げます。」

「私は太ももを引っかかれました。」

「私なんて、血が止まらず、死にそうに痛いです。」
「私も行けません。動けません。」
「私も血が止まりません。痛みが増してきました。」
「怪我が痛くて行けません。」
「服がひどくて動けません。」

どの女官達も口々にそういって動こうとしない。
それは、ねえやだけでなく、元・皇女さえも苛立たせた。

「そんなに行きたくないか・・・!?」

冷たく怒りを含んだ声で問えば、女達は視線を下へと向ける。
しかしどの顔にも、はっきりとした不満が表れていた。

“ご自分は、お怪我がなかったからいいようなものを・・・。”
“私達が襲われたことを、怒っているという態度をとってはいるけど・・・・”
“心から私達を思っておっしゃった言葉じゃない。”
“安林山様が、賭けに勝ったことが気に入らないからそう言ってるだけ!”
“奥様は、私達が虎に襲われている時、なにもおっしゃってはくれなかった・・・!”
“それどころか、体を張ってお守りした張願様まで殺そうとするなんて・・・!”
“下手をすれば、私達でさえ、殺してしまうおつもりよ・・・”
“きっと、私達のことも、張願様達弓兵のことも、平陽公主様にとってはどうでもいいのね・・・”
“その証拠に、こうして場が収まっても、労りの言葉一つかけては

下さらない・・・！
”

“私達の主人は、私達の命がどうなろうと、なんとも思っていないのだわ――――――！！
”

彼女達の表情からは、怒り、悲しみ、戸惑い、苦痛、不安、不信感といった不の感情がにじみ出ていた。

（・・・そういうことか。）

そんな兵や女官達の反旗を見ながら、星影は気づいた。

（彼らを動かしていたのは、理不尽と言う心か・・・・。）

芝居とは言え、自分は彼らを気遣う言葉を発した。
しかし、主人である彼女は、それらの言葉を一切口にしなかった。
それどころか、その原因がすべて安林山にあるかのように語った。
ことの成り行きを見ていた一同は、そんな平陽公主のやり方に不満を持ったのだ。
それが結果的に、安林山を庇うと言う共通の行動を起こさせたのであった。

「信じられない！平陽公主様のありがたみを忘れるなんて！！」
「・・・この恩知らず共めっ・・・・！」

そうつぶやくと、人を呼ぶために女主人は声を出した。

「誰か！誰かおらぬか！？誰か誰でもいい！今すぐこの場にいるこの恥さらしを、安林山を殺し――――――――！！」

「安林山殿を殺してはなりません！！」

平陽公主の甲高い声と、低い声が重なる。

「え！？」

聞き覚えのある声。

（この声は、まさか――――――――――――――！？）

まさか、まさか、まさか――――――――！？

「あ！？」

声の先にいたのは、マントを翻し、屈強な兵を従えた男。

（――――――――衛青将軍！？）

星影の憧れる、大将軍・衛青だった。

第七十話　種明かし（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

星影が紅嘉に使った武器は、お香でした（笑）
動物は、鼻がよくきくと言うので独特のにおいのあるお香を使いました。
また、動物は人間よりもよく鼻がきく分、臭いを強く感じやすいのです。
なので、鼻を鈍らせて動きを封じました。

ラストに衛青将軍が登場です。

本文とは関係ありませんが、去年の今日（8月8日）に小説をアップしていたことに気づきびっくりです。あまりの更新の遅さに（大汗）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！
ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十一話　あの人がだんな様

修羅場に現れた武人は部屋の中を見渡すと、迷わず宦官の前へと移動した。
視界の中で、男がつけているマントがゆるやかに揺れる。
耳には、甲冑のきしむ音がした。
その姿に。
思いがけない人物の登場に。
星影の胸は高鳴った。

（衛青将軍・・・またお会いできた・・・！）

何か言おうと思ったが、突然のことに言葉が出ない。
そんな迷う星影をよそに、彼は再度口を開いた。

「一体なにをしているのですか？」

「え、衛青将軍！」
「あなた！」

大将軍の言葉に星影と平陽公主は同時に叫び、互いの声に二人は顔を見合わせた。

「な、なんで・・・！？」
「宦官風情が、何故わが夫の顔を知っているのじゃ！？」
「・・・・・・・・・え？」

おっと？
オット？
良人？
・・・・夫？

「お・・・・？」

今なんて？
この人、夫って言わなかった？
え？夫って、あの夫？
その夫？
このおっ・・・・！？
おっとっとっとっ――――――――！
もうちょっとで転びかけ・・・・・！

（じゃなくってっ！！）

混乱する自分に喝を入れると、大声で叫んだ。

「お、お、お、夫ぉぉぉぉ――――――――――――!!?」

夫って!!?

（ちょっと待って!まさか平陽公主の旦那様って――――――――!?）

「衛青将軍だったんですか・・・!?平陽公主様の夫は・・・!?」

今までにない、これまで経験したことのない大きな衝撃が星影を襲う。

（そんな!衛青将軍が結婚してるんなんて!）

い、いやいや!
仮にも大将軍だし、結婚してて当然だとは思ってたけど――――――
――
だからって!だからって・!!

（だからって、こんなオバサンとたくましい若者が夫婦ぅ！？）

聞き間違いじゃないよね・・・・！？

見るからに親子ほどの違いがある男女。

信じられない現実に、星影を場違いな金縛りが襲う。

「知らなかったのかい、林山？」

聞きなれた声と共に、見知った姿が目に飛び込んできた。

「琥珀っ！？」

友である王琥珀が星影の隣にいたのだ。

「おまっ！？どうして？いつの間に！？」

「間に合ってよかったよ。君が殺されていないか冷や冷やした。」

そう言って笑った琥珀の額は、汗で光っていた。

それで、急いで駆けつけてくれたことがわかった。

「いや・・・殺されてはいないけど、殺されかけてたよ。」

「それならこれ以上、無礼な発言は慎んだ方がいい。」
「私は別に――――」
「そして、覚えておきなさい。平陽公主様と衛青大将軍がご夫婦であることを。」
「ふっ、夫婦って・・・・」
釘を刺しながら言う琥珀に、たじろぎながら星影は聞いた。
「あの夫婦か・・・?」
「夫婦にあれもこれもないと思うが?またまた、知らなかったみたいだね?」
お約束といわんばかりの呆れ顔。
そんな友に対して、小声で星影は問うた。
「それじゃあつまり――――――――夫婦なのか?」
「夫婦だよ。」
「それじゃあつまり――――――――初婚同士なのか?」
「いや・・・衛青大将軍は・・・初婚だが、平陽公主様は・・・・二度目でいらっしゃる。」
「衛青将軍が初婚で、平陽公主様は二度目!?」
「声が大きい!」
星影より声を潜めながら答える琥珀。
「最初は・・・高祖の信頼する家臣である曹参様の御愛孫(孫)でいらっしゃる曹時様に降嫁されたんだ。ところが・・・」
「死んじゃったの?曹時様?」
「生きてるよ。」

勝手に殺さないでくれ、と言いながら説明する琥珀。

「曹時様は、生きてらっしゃる。ただ・・・元々お体が弱くてね。それが原因なんだよ。」

「つまり・・・体が弱くて子が作れなかったから離縁されたとか？」

「そうじゃない！・・・お子には恵まれた。嫡子である曹襄様がいらっしゃる。」

「じゃあ、なんで？」

「曹時様が・・・重い病気にかかったんだ。」

「重い病気？」

「不治の病だよ。」

「不治の病・・・・！？」

衝撃な事実を知らされ、狼狽する星影。

「不治ってことは――――！？」

「・・・ああ、治らない。だから、離縁なさるしかなかった。その後、平陽公主様にふさわしい地位と力と容貌を兼ね備えた衛青大将軍と再婚されたのだ。」

「それは・・・平陽公主様のご意思で？」

「・・・そうらしい。事が事だから、仕方ないと思うよ。」

不治の病に犯された夫。

弱いとされる男と結婚し、離縁した平陽公主。

「それって――――――」

琥珀の説明を受け、星影は思った。

（病気の夫を、見捨てたってことじゃない・・・？）

自分が接してきた元・皇女の印象から、そう判断した星影。

（その上で、若くてたくましくて丈夫な夫に乗り換えたってか！？）

誰が決めた結婚かは知らないが、病人を見捨てるなんてどうかしてる！

（治らないから、ポイ捨てして『さよらなら』したってことじゃない！）

それを思うと、今まで体験したことのない気持ちが星影の胸に広がった。

「・・・可愛そうだな。離縁なんて・・・・・」

「林山・・・。」

「考えれば考えるほど、お気の毒だ。別れるしかなかったなんて・・・。」

曹時様が。

「・・・仕方がないよ、林山。平陽公主様もおつらかったと思うが・

・・。曹時様も、平陽公主様のことを思って、納得されたことだし。」

そりゃあ、納得もするさ。
相手は皇族の娘。
逆らえば、身分はおろか、命さえも奪われる。

（つーか、私が同情してるのは曹時様であって、平陽公主じゃない！）

自分の言葉に、勘違いして返事をする琥珀に冷ややかな視線を送る。
そして、改めて問題の女を見た。
星影の眼に映った平陽公主は、宦官をかばうようにして立つ自分の伴侶を見つめていた。
元・皇女は、夫である衛青大将軍から、その肩越しから見える星影へと移った。

「・・・そうじゃ。衛青は、私の夫である。」

先ほど漏らした星影のつぶやきに答える平陽公主。
自慢げに笑うその姿が、星影の癪に触った。
琥珀からの、妻からの言葉を聞いても、納得できなかった星影は再度問いかけた。

「平陽公主様と、衛青大将軍は・・・ご夫婦だったんですか・・・？」

「聞いていなかったのか?衛青はわらわの夫であり、わらわは衛青の妻である。」

「あ、あの・・・本当に夫婦なのですか・・・・?」

信じられなくて、思わず口にする星影。

それを聞いた途端、平陽公主は真っ赤な声で怒鳴りつけた。

「な・・・無礼な!夫婦でなければなんだというのだ!?」

親子にしか見えません。

と、心の中で言う星影。

さすがに口に出しては言えない。

その行為に、星影の本能が危険信号を出したからだ。

「いえ・・・なにも。」

思わず視線をそらす。そんな星影の心が読めたのだろう。平陽公主は大声で言った。

「誰か！誰かおらんのか！？すぐにこのものの首を刎ねなさい！！」
「え！？」
「平陽公主様！？」

だから約束が違うじゃん！？

「待ってください！それでは本当に約束が違いますよ！？」
「なにが約束じゃ！無礼者をわらわが許すと思ったか？」
「あんまりですわ、平陽公主様・・・！いつも平陽公主様は、そんなお方ではないのに！あまりの変わりようですわ！」

（いや、あの皇帝の姉だから元々こういう性格・・・つーか、これが本性だろう。）

嘆く玲春の側で、そんなことを考える星影。

「旦那様も、そう思いませんか！？」

その少女の言葉を受け、夫である衛青は再び口を開いた。

「玲春の申す通り、安林山殿を城門に首だけでさらすことはできません。」
「なんじゃと？」
「・・・いくらあなたが、彼を殺すと言ってもそれは不可能だからです。」
「不可能？」
「ええ。この安林山殿は、陛下の覚えもよく、とても優秀な人材です。それゆえ、彼の処刑など、あなたの弟君が許すはずがありませ

ん。」

「では・・・夫君が、許さぬというのはどういう了見で？」

「ある程度の話は聞かせていただきました。・・・茶器とは消耗品。割れたのでしたら、私が代わりの物を用意させましょう。もし、私の紹介や見立てで不満のようでしたら、あなたがお好きなようにお選びください。幸い、今回の戦で出た褒賞がありますので、あなたの好きなものをお選びになってください。」

「まぁ！？つまり夫君は、妻であるわらわが侮辱を受けたというのに、それを我慢しろとおっしゃるのかしら？大事な茶器を壊され、傷ついているわらわを慰めもせずに、宦官風情の味方をすると？」

不快を露にした表情と声を出す平陽公主。しかしその目は、どこか困惑していた。

「・・・あなたが、傷ついているのはわかります。だからこそ、無意味な行為をして、人の命を奪わないでほしいのです。」

「安林山を殺すことが無意味だと？」

「無意味です。それは、私の知るあなたではない！」

それまでの口調とは一変し、きつい口調で断言する。

「あなたが、どうしても安林山を殺すというのならば、私は全力で彼を守るだけです。」

「あなた！？」

「衛青将軍！？」

「旦那様！」

「そもそも、一度は許すと言いながら、虎をけしかけて戦わせるなど、気高い皇女のすることではありません。」

「あら？なぁ～に？私に落胆したとでも？」

「悲しいだけです。」

真顔で答える大将軍に、平陽公主をはじめ、星影も意表をつかれた。

「落胆よりも悲しい。私の知っている人ではないので、悲しい・・・・ただ、それだけです。」

（・・・この人は、本音で話してる。）

嘘を言っていない。
本気で悲しんでいる。
妻がしたことを。

「あなた・・・どうして!?この者は私が大切にしていた茶器を割ったのですよ!?」

「壊れた茶器よりよい品を選べるようにしましょう。茶器だけでなく、着物や耳飾、首飾りにかんざし、なんでもあなたの望むものを贈りましょう。」

「あなた・・・は!」

怒るような、慌てるような声。その表情はどこかもどかしそうなものだった。

「どうして・・・なんでこんな宦官を庇うのじゃ!?」

「あなたこそ。何故、そこまで彼にこだわるんですか?」

「別にわらわは――――!」

「意地になっているだけじゃないんですか？」

衛青将軍の言葉に彼女は黙り込む。

それまで高慢だった平陽公主だったが、夫である衛青将軍の登場によって事態は一変する。

「・・・あなたは、この者が安林山だから、陛下のお気に入りだから庇うのでしょう？」

「相手が誰であるからと庇うというわけではありません。私は、あなたを卑怯者にしたくないだけです。」

「卑怯者！？わらわが！？」

「仮にも、皇帝の姉ともあろうお方が、平気で約束を破るなど、人の道で最もしてはいけないことです。」

「無礼な！」

「そう言われてもかまいません。あなたは、怒りに心を支配されているだけ。ここは私に免じて、２人を許しておあげなさい。」

「下賤の癖に、わらわに指図する気かっ！？」

「え？」

下賤？

星影が漏らした言葉を、怒り狂う女主人は聞き逃さなかった。

宦官を見つめながら、あざ笑うように言った。

「そうじゃ！この男は――――――元は、酪農をして暮らしていた奴隷！下賤中の下賤であり、姉が弟の皇后になったからこそ、わらわと結婚し、今の地位を得られたような者！わらわとて・・・弟の、皇帝の命でなければ、このような汚らわしい男を夫になどしない！」

「なっ！？」

「まぁ・・・下賤は下賤同士、馬が合うのじゃろう・・・！成り上がり者の癖に、わらわに大口たたくなど、身のほど知らずもそっくりじゃ！」

ブチッ。

「――――――――――――何てことというんだ！？」

我を忘れたとは、このことを言うのだろう。

「あんた・・・！何てこと言うんだよ！？」

なんで！？

「あ、安様！？」

「貴様・・・！わらわに、ようもそんな口・・・」

「皇族だからって、誰でも頭下げると思うなよ！皇族なら、みんなのお手本になるのが普通だろう！？」

なんで、そんなひどいことを平気で言えるんだ！？

「安様！おやめください！」

「お手本が聞いて呆れるわ！あんたのしてることは、悪い手本以外の何者でもない！なんで、そんなひどいことが言えるんだよ！？」

みんなの見てる前で、自分の夫を侮辱できる！？

「馬鹿か貴様？貴様に言ったのではないのに、なにを怒っている・・・下賤殿？」

「怒るさ！本人でない他人が聞いてひどいと思うんだ！本人が傷つかないわけがないだろう！？なんで、そんなこともわからないんだよっ！！」

人を傷つける言葉を平気で言えるんだ！？

叫んだと同時に、近くにあった手すりにこぶしを当てる。
手加減なしで、力任せにたたく。
辺りに嫌な音が響いた。

「ひっ！？」
「きゃ！？」

馬瞭華や玲春、他の女性達の悲鳴で我に返る。

「あ・・・。」

見れば、元・手すりらしい残骸があたりに散らばっていた。

（ヤバイ・・・・。）

いろんな意味で、自分が失態を演じたことを知る星影。
そっと、言い争っていた相手に目をやれば、見開いた両目を自分に向けていた。

「貴様・・・！一度ならず、二度も三度も・・・」
「平陽公主様にたてつく気ですか！？」

興奮気味に、ねえやが問いかける。それに、なんとか場を取り繕うと星影は口を開く。

「いえ！たてつくとか、逆らうとかではなく、何でそんなひどいことをおっしゃるのかと・・・・！」

「事実を申して何が悪い？」

星影の問いに、悪びれた様子もなく即答する平陽公主。

「下賤生まれは、どんなに出世しても下賤の風格は変わらん。わらわは、そう述べただけであって、傷つく言葉など一言も言っておらん。」
「なんですって・・・！？」
「それをお前は安林山・・・なにを聞いてるのじゃぁ？馬～鹿かぁ？」

わざと心配そうな声で言うと、声を立てて笑う女。

――――――――――――――――このババア！！

（殺してぇ・・・！）

腹の底から熱い何かがこみ上げてきた。
あの時と、郭勇武に本物の安林山を馬鹿にされた時と同じ気持ちになる。
そんな状態で、一歩前に踏み出した時だった。

「ええ、あなたのおっしゃる通りです。」

「え！？」

その声で、胸に渦巻く熱い怒りが消える。

「衛青将軍！？」

いつの間にか、隣に立っていた男。彼は、目だけで星影を見ると、視線を自分の妻に向けながら言った。

「あまり、からかわれないでください。彼は、まだ宮中に来て日も浅いのです。あなたのお戯れに戸惑うしかありませんよ。」

戸惑うって!?

（私は怒ってるんですけど!?）

そう思って衛青を見れば、彼は星影を見ていた。顔をこちらに向けながら口を動かした。

「彼女の申す通り、私は生まれながらの下賤・下級の者。それを知らないというのは・・・少し驚きましたよ?」

（笑った・・・?）

自分を見る目が、かつて見たものと同じだった。無表情に近い表情の中で、目だけが柔らかく笑ったように星影には見えた。

「え?いえ・・・あの・・・」

「ですが、そんな下級層ですら、道理の良し悪しはわかります。」

彼がそう述べた時、その視線は元・皇女へと戻っていた。

「なんじゃと・・・?」

「私を夫に迎えなざる得なかった、あなたの苦悩は理解しています。ですが、今の問題はそこではない。私は、夫として妻であるあなたに、約束を守っていただきたいだけ。それだけなのです。」

顔色を変えることなく、変わらぬ口調で告げる。

誰が聞いても、怒るはずの言葉に、穏やかな口調で返す男。

「それに、あなたが許さないと言っても、安林山と徐玲春の罪は許されます。」

「どういうことじゃ・・・？」

「間もなくこちらに、いらっしゃるからです。」

「いらっしゃる？」

誰が？と、聞こうとした時だった。衛青将軍の背後が騒がしくなる。

「林山！」

ここでの自分の名を呼ぶ慌しい声。それに重なる足音。

衛青将軍の後ろの兵が一斉に左右に分かれる。中央に道を明けた。

その道を通って現れたのは――――――

「林ざぁ――――――――――――ん！！」

高貴な服装を乱しながら、駆け寄ってくる最高権力者。

「へ、陛下ぁ！？」

（こ、昏主がきた――――――――――――――！！？）

星影の苦手な漢帝国七代目皇帝・劉徹だった。

第七十一話　あの人がだんな様（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

衛青と平陽公主の馴れ初めって、結構単純だったりします。
平陽公主の再婚相手を選ぶ際、皇帝の姉であるので、慎重に相手選びをしました。
その際基準とされたのが、【身分があり、人間的に優れた、知名度の高い男】というもの。
結果、選ばれてしまったのが『衛青』でした。
平陽公主からすれば、衛青は自分の家にいた『衛』という召使女の息子。
召使の子供を旦那にする。おまけに年も、自分よりかなり年下。
実際、二人がどういう夫婦関係だったのかはわかりませんが、衛青の性格を考えれば、敬意を払って大事にしていたと思います。
ある個人サイトさんでは、
『自分の家の召使の息子をだんなに迎えた平陽公主だが、そんなにイヤではなかったと思う。衛青の姉は美人だったので、その弟である彼も美男であったと思うから、年下の美男子を婿にできのだから嬉しくないはずはない。なんせ平陽公主は、病弱な夫がイヤで離縁していたので、若くたくましい新しい夫に満足していた思う。』
という会見を出されていました。
それを拝見し、私も強くそう思いました（笑）
ただ・・・個人的には、皇帝の命令で、拒否権なしで結婚させられた衛青が可哀想だと思ってたりします（苦笑）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレ

ですみません・・・（土下座）

第七十二話　子虎を巡って大騒ぎ

目の前に現れた中年。
その姿に誰もが敬意を払って接する。
しかし星影は、警戒を持って接していた。

「林山！無事か！？」

衛青将軍の言葉をつなげるように現れた漢帝国第七代目皇帝・劉徹。
突然の登場に、目を白黒させる星影。

「へ、陛下・・・！？」
「――――――林山っ！」

戸惑う星影に、感極まった声で駆け寄る皇帝。

「ああ・・・！なんということじゃ！？」
「陛下！？」

そう言いながら、星影を抱きしめる。
その行為に驚き、声を上げる宦官。

「可哀想に林山！身包みまではがされて！！怖かったであろう！？
もう、大丈夫じゃ！朕が来たから怖くないぞ～！！」

猫撫で声を出しながら、己の頬と星影の頬にすりあわせる最高権力者。

「ちょ！やめてください・・・！！」
「よしよし、照れるな！こういう時は、いつものように甘えればいいのじゃからな？」
「いつもって・・・そんなことしてませんよ！勝手な捏造話をしないでください！」

本気で嫌がる星影に気づくことなく、彼は自分の肉親に向かって叫んだ。

「姉上っ！林山になにを！？」
「それはわらわの台詞じゃ。まったく・・・なんじゃ、そのザマは！？いい年をして情けない・・・！」

大きくため息をつく姉に、弟は怒気を含ませながら言い返した。

「その台詞、そっくりそのまま送り返しますよ、姉上！？姉上こそ、皇女でありながら、虎と宦官を戦わせるなど、気がふれたとしか思えませぬぞ！？」
「わらわに無礼を働いたのなら、当然のことであろう？」
「だからといって、虎はないでしょう！？姉上！宮中に人食い虎がいると世間に知れれば、国の信用にもかかわります！即刻、その虎を引き渡していただきます！」
「嫌じゃ！紅嘉はわらわの猫じゃ。人食い虎ではない。」
「林山を襲ったではありませんか！？」
「食われておらんだろう？」
「食われていたら困りますよ！大体、なんで林山は下着姿なんですか！？」
「そやつが勝手に脱いだのじゃ。」
「嘘を申さないでいただきたい！武器を隠し持ってると言いがかり

をつけて、脱がせるように仕向けたのでしょう！」
「自発的に脱いだのじゃ！わらわに否はない。」
そう叫ぶと、持っていた扇を床にたたきつける。
「馬鹿馬鹿しい！行くぞ。」
それに付き従うねえや。彼女は振り返ると、脅すような声で言った。
「お前達もいらっしゃい！女官としての心得を、再教育してあげますから・・・！」
「ば、馬様・・・。」
「玲春も来なさい！この恩知らずが！」
老女の怒鳴り声が耳につく。
「そんないい方しなくてもいいでしょう？」
気づけば、不快感を言葉にして瞭華にぶつけていた星影。
「安様！？」
「そうでしょう？玲春さんはもちろん、他の皆さんは命の危険にさらされたのですよ？主人の身代わりで死ぬにしても、こんな恐ろしいことはありません。」
「なっ！？」
「彼女達がいたからこそ、私も食べられなかったのです。弓兵の方々にしたって・・・紅嘉殿を殺してはいけないと言う前提で動いていました。難しいことばかり要求しておいて、それが出来なかった

となれば、ボロクソに言うなんて・・・ひどいですよ！」
「あ、安林山殿、あなたね！」
「恩知らずと言う前に、『怪我は大丈夫？』、『巻き込んで悪かったね。』、『みんなが無事に生きていてくれてよかった。』ぐらいの言葉は、かけるべきです。それが上に立つ者の務めでしょう？」
「なっななな！」

星影の言葉に、どんどん真っ赤になっていく馬瞭華。

「ハハハ！よく言った林山！」
「陛下！？」
「瞭華、女官達をあまりいじめるでない。林山の言うとおり、当分女官達をゆっくり休ませてやれ。」
「で、ですが！」
「その娘達は、大の男でも恐れる虎に追い掛け回されたのだろう？朕から見ても、その身も心もボロボロではないか？」
「あ・・・。」

皇帝の指摘通り、服が破れているのはもちろん、怪我をしていたり、ゲッソリとやつれている女官達。

「こんな状態で説教など、なんの意味がある？むしろ、生き残ったことを褒めるべきである。」
「陛下・・・！」
「代わりの者を朕が用意しよう。だからお前達、十分に傷を癒すがいい。」
「陛下！？」
「私達の身を案じてくださるなんて。」
「なんてお優しい・・・！」

皇帝のありがたい言葉に、星影はその名を声にし、若い娘達は嬉しそうに小さな声で歓喜した。

「そういうわけだ。わかったな、瞭華？」
「こ、心得ました・・・・！」

皇帝の言葉に逆らうなどできない。
渋々応じる上司の姿に、誰ともなく顔をほころばせる女官達。

「・・・お前達も、お礼を申し上げなさい。」
「はい！ありがとうございます、皇帝陛下！」
「陛下、心よりお礼申し上げます！」
「ありがとうございました！」
「ハハハ！上に立つものとして当然じゃ！どの花も可愛いのぉ～」

若い女性の黄色い声に、上機嫌になる男。

「心身を癒せたら、今度は朕を癒しておくれ。」

デレデレと女官達を触る最高権力者。
その姿に、せっかく上昇していた星影の皇帝・劉徹への評価が急降下していった。

（この女好きが・・・！）
「この女好きが・・・！」

星影の心の声と姉の言葉が重なる。
思わず声の主を見れば、こめかみを押さえながら嘆く姿が映った。

（実の姉から見てもそうなんだ・・・。）

ほんの少しだけ、元・皇女に対して近親感を持った星影。

「なにか言いましたか、姉上？」
「別に。」

姉の言葉にめざとく反応する弟。問われた方は、興味なさげに返事をする。

「事実を言ったまでじゃ。・・・昔はそうでもなかったのにのぅ。」
「それはそれはご最(もっと)も。お偉い姉上様のおかげで、今日の朕がおるのですから。」
「・・・わらわのせいだといいたいのか？」
「お偉い姉上様に感謝していると申しておるのですが？そもそも、いつ、『平陽公主様』だと朕が言いましたかな？」
「・・・フン。」

皮肉を込めて言う皇帝に、姉の一人である平陽公主は不機嫌そうに眉をひそめる。

「皇帝陛下様のおなりとなれば、わらわのような降嫁した姉が、なにを申しても無駄のようですわね。・・・・韓援のこともあるし。」
「！？」

その言葉で、皇帝・劉徹の表情が変わる。

「・・・姉上。」

無表情で呼ぶ弟を無視し、ねえや達に声をかける姉。

「汚らわしい宦官の側にはこれ以上いとうない！行きますよ。」

女主人の言葉で、返事をしながら瞭華が頭を下げる。それに他の女官達も従った。

平陽公主は、自分の周りの人間に見向きもせず、優しい声で星影の側にいるモノを呼んだ。

「さあ、紅嘉もおいで。」

艶のある声で、愛猫ならぬ愛虎を呼ぶのだが・・・。

「紅嘉。」

「・・・。」

飼い主の言葉に、視線はおろか、動こうともしない紅嘉。

「紅嘉、おいで！」

再度呼ぶが、主人の問いかけにまったく応じない。

「どうした、紅嘉？ほら。」

「・・・。」

虎の世話係りが呼ぶが、答えない。

（どうしたんだ？）

これには、見ていた星影も疑問に思った。

（・・・まさか、私の攻撃でふてくされてるとか？）

虎に、人と同じ感情があるかはわからない。
ただ、攻撃や脅しをかけた手前、心配にはなった。
だから何の気なしに、問いかけるように名を呼んだ。

「紅嘉殿？」
「ガルゥ・・・。」

ここでようやく、返事をする紅嘉。
先ほどよりは小さいが、問いかけに応じる声。
星影の呼びかけに、耳を動かしながら答えたのである。

「え！？そんな、返事を・・・」
「返した・・・！？」
「なんじゃと・・・？」

これには、先に声をかけていた虎の世話係りも飼い主も驚いた。
無論、周囲も。
返事を返された本人も。

（ふてくされてるというわけではないのか・・・？）

ならばなぜ、飼い主達の返事に答えない？

（私の問いかけに応じたのは、単なる偶然か？）

そんな子虎の態度を、不思議に思いつつも声をかけ続ける星影。

「・・・呼んでますよ、紅嘉殿？」

「ガァ。」

「ほら、平陽公主様がお呼びですよ。行かないと。」

「グゥル。」

宦官の言葉に答えるように鳴くと、そのまま近づいてきた。

「紅嘉・・・殿？」

「グルゥン。」

猫がするように、頭を足にすり寄せてくる。

「紅嘉殿？」

「お、おい！噛まぬのか！？」

心配そうに見守る皇帝達をよそに、星影にじゃれ始める子虎。

「こ、こらこら！どうしたんだい・・・！？」

「グゥ～ル。」

猫のようにじゃれてくる紅華に、思わず笑い声を上げながら相手をする星影。

喉をかいてやれば、気持ちよさそうな鳴き声を上げる。

「と、虎相手に遊ぶなんて・・・！」

「なんたる肝っ玉じゃ！」

呆然とする瞭華を含める女性陣と、嬉々としながら見つめる皇帝。
他の者達も、その様子に何度も瞬きを繰り返す。

「・・・いい加減にせぬか。」

そんな中で一人、静かに怒りの声を上げる貴婦人。

「平陽公主様!?」
「姉上。」
「貴様の振る舞い、つくづく目に余るぞ、安林山。わらわの紅嘉に触るでない!」

不機嫌さを露にする女主人に、星影は紅嘉から離れる。

「・・・申し訳ありません。」
「紅嘉、早くおいで!」

星影を睨みながら、愛虎を呼ぶ平陽公主。
しかし子虎は、自分から離れた宦官の後を追うばかり。
飼い主の声はおろか、側に行こうともしない。

「紅嘉!?」
「こら、どうして平陽公主様の言うことを聞かないんだ?」

怒る平陽公主の苛立ちもあり、慌ててしかりつける虎の世話係りだったが、

「ガァアア！！」
「えっ！？わぁあああ！？」

自分の世話をしてくれた相手に向かって、威嚇したのだ。

「どうしたんだ！？お前、私がわからないのか？」
「ガウ。」

その問いかけに、凶暴な姿が一転。愛らしく吼える紅嘉。

「紅嘉・・・！？」
「ガウン。」
「こ、こらこら。驚かすんじゃない。さぁ、平陽公主様のお側に――――」
「グォオオオ――――――――――！！」
「わぁああ！？」

今度は、威嚇と一緒に噛み付く仕草を見せた。

「紅嘉ぁ！？」
「ど、どうなってるんですか！？」
「いや、私にも・・・！？」

尋ねる星影に、首を振りながら答える虎の世話係り。

「紅嘉殿は、いつもこうなのですか？」
「まさか！しつけはとりわけ厳しくしてるんです！今まで吼えたことなかったのに・・・！？吼えるわけが・・・！？」
「でも吼えましたよね？」
「いや・・・」

「ついでに、噛もうともしましたよね？」
「いや、その・・・」
戸惑う星影達をよそに、無言で平陽公主が紅嘉に近づく。
すると――――
「グゥウウル！！」
「え！？」
「ガァ、ガァアア・・・！」
「こ、紅嘉！？」
威嚇した。
ハッキリと、自分の主人である平陽公主を威嚇したのである。
「そういうことか・・・！」
何かを悟るように笑うと、口を開く皇帝の姉。
「紅嘉・・・わらわを恨むのは筋違いであろう？」
「グゥウゥ・・・！」
「お前に痛い思いをさせたのは、そこの宦官じゃ。にもかかわらず、わらわに牙をむくか・・・？」
「ガァア～ガァア～！」
「お前はわらわに逆らうのだな？」
「グォオォオオ！！」

まるで返事でもしているかのように、一番大きな声で吼える子猫。
途端に、大きく口をゆがめる平陽公主。
そう言って大声で叫ぶ。

「こんな虎、わらわはいらぬ！」

「姉上！？」

「この虎は、人を食らう邪道の生き物！」

「はぁあ！？」

食わせといて、そう言うか！？

支離滅裂なことを言う相手に、思わず声を上げる星影。
そんな彼女達の前で、皇帝の姉は顔をゆがめながらつぶやく。

「生かしておいたら、食費ばかりがかかる。」
「え！？平陽公主様・・・！？」

女主人の言葉に、虎の世話係りの表情が変わる。
彼女は、そんな相手を見ながらハッキリと言った。

「お前には悪いが、これは毛皮にするぞ。皮をはいだ肉は、犬の餌にしておくれ。これの骨は不浄だから、砕いて捨てろ。」

「えええ!?」

「確かお前、生き物はさばけただろう?最後の温情じゃ。おまえ自身の手で、その忌まわしい生き物を葬っておやり。」

「そんな!平陽公主様!」

そこまでするかぁ!?

(あれほど可愛がっていた子猫ならぬ子虎を!?)

驚きを通り越して呆れ返る星影。その近くで、それを命じられた本人は悲痛な声を上げた。

「あんまりでございます、平陽公主様!紅嘉は、私がしかっておきますから、命ばかりはお助けください!お許し下さい!どうかお考え直しを――――――!」

「しつこいぞ。殺すと、決めたのだから――――――」

「殺さないでください！！」

皇帝の姉と虎の世話係りとの間に、割って入る声。

「紅嘉殿を、殺さないでください！！」
「え！？」
「安様！？」
「命あるものです！私からもお願いします・・・殺さないでください！」

止めに入ったのは星影だった。

「どういうつもりだ、安林山？」

その声で我に返る。

（そうだよ・・・私どういうつもりだろう。）

自分を食い殺そうとした生き物をかばうなんて。

「グル～ウゥ・・・！」

でも・・・。

自分の足に擦り寄って、寂しそうな声を上げる大きな猫。
彼女が情にほだされるのに、時間はかからなかった。

「・・・紅嘉殿を育てられた者の申す通り、可哀想だからです。平陽公主様に叱えられたのは、本心からではないですよ。今は気が立っているだけで、少し落ち着かせたら元に戻るはずです。」
「これは、わらわにそむいた。一度敵意を出した獣は、二度と懐かぬ。」
「だから、いらないと？」
「そうだ。」
「わかりました。」

そっけない返事をする相手に、星影も表情を落ち着かせながら言った。

「もし、どうしても要らないというならば・・・・・私に頂けませんか？」

「林山！？」
「紅嘉殿とは、とても可愛い子猫です。それに、平陽公主様は勘違いなさっていらっしゃいます。この子は人を食べたことはありませ

ん。」
「なっ！？」
「確かに・・・この子の親は人を食していましたが、ここは宮中です。この子の口に、人が入るわけがありません。なぜなら平陽公主様は、衛青将軍のお言葉を守っていらっしゃったのですから。ねぇ、紅嘉殿？」

今度こそ、優しく語りかけ、撫でてやる。
ジッと、星影を見つめていた紅嘉だったが、おずおずと、自分に触れる手をなめた。

「なんせ、平陽公主様が大事に管理されていた子猫なのですから。」
「き、貴様！」

星影の言葉に、カッと頬を染める女主人。

「いいだろう。紅嘉は、林山に与えよう。」

「陛下！？」
「虎の世話係りとあわせて、安林山に与えよう。」
「なんと勝手なことを！？」

「勝手は姉上です。」

怒る姉をよそに、弟は冷静な口調で言った。

「いらないと言うものを、誰に与えようが勝手でしょう？あなたは、この子猫の所有権を放棄した。違いますか、姉上？」

「徹！」

「無礼ですぞ、姉上？私は皇帝ですが、あなたは皇族。それも朕の家臣に降嫁した身分。もう少し、わきまえて行動していただかないと・・・！？」

「くっ・・・！」

「これは皇帝としての命令である。・・・・・よいな、平陽公主？」

立場の違いをハッキリと言ってのけた弟。

それに対して、姉はこれ以上反論することはなかった。

「・・・これはこれは。さすが、優秀な王のご判断ですこと。」

言い返すだけ恥とわかっていたから。

「ご随意に。」

そう告げると、きびすを返す元・皇族。

「姉上！林山のことですが――――――！」

「お好きなように。わらわには、もう関係ない。」

釘を刺す弟を見ることなく、背を向けたまま言い放つ姉。

「あとはお任せしましたよ、愛しの夫君。」
「・・・。」

小馬鹿にするように言う妻と、それを無言で受ける夫。
そしてそのまま、部屋から立ち去ると思ったのだが――――

「玲春！」
「は、はい・・・・。」

彼女の足は、気に入りの女官の前で止まる。

「おいで。お前に非はない。」

その声は、最初に聞いた時と同じ優しい声。
起こっていないと言わんばかりの言葉。
しかし少女は、それを拒んだ。

「・・・身に余るお言葉、ありがたい限りでございます。」
「礼はいいから、おいで。」
「・・・いいえ。私は――――平陽公主様に、奥様に恥をかかせた不忠者・・・。ですから――――」
「なにを言う？わらわがいいというからいいのじゃ！」
「でも私は・・・」
「おいで。」
「私は、奥様に逆らいました。だから・・・」

「安林山が悪い！！――――――来るのじゃ。」

平陽公主は、自分のねえやと侍女達を引き連れて歩き出した。

拒む玲春に苛立ちの声をぶつけると、その手をつかむ平陽公主。

その際、何か言いたげに宦官を見る少女。

「玲春さん！」

「安様・・・！」

思わず声をかければ、玲春は星影を見ながら言った。

「安様・・・。」

「玲春！行くぞ！」

そう言われても、彼女は星影だけを見つめていた。強く腕を引っ張られても、動こうとしなかった。

「安様・・・！」

「玲春さん・・・？」

宦官一人に視線を向けていた。

星影も星影で、相手の様子に目を離せずにいた。

「安様。」

小さな、つぼみのような口が動く。
綺麗な声色で言葉をつむいだ。

「安様・・・玲春は、このご恩を生涯忘れません・・・！」

（え？）

その頬からは、一筋の雫が流れていた。
幼いながらも、艶のある不思議な苦悶の表情。
それでいて、目だけが真剣なものだった。
彼女は星影に向かって深々と頭を下げと、そのまま腕を引かれて行ってしまった。

「玲春さん・・・。」

後には、玲春の身を案じる星影と、さまざまな身分の男達だけが残された。

第七十二話　子虎を巡って大騒ぎ（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

姉弟喧嘩に加えて、紅嘉を巡った争い（！？）です。
なので、題名を『子虎を巡って～』にしました（苦笑）
さて、これにて『茶器事件』は閉幕しましたが・・・星影、女子供はもちろん、虎にも好かれてしまいました（笑）
とりあえず、自分に懐く動物には弱い星影です。

小説とは関係ないのですが、世間では夏休みということもあり、今月は後もう一本は新作をアップする予定です。それ以後については、気分屋なので未定ですが、夏休み以前のペースに戻ると思います。
なかなかパソコンの前までいくことができず、頂いたお返事へのお返事が遅いですが、

本っっっっっっっっ当――――――――――――――――――――に！！！

ありがとうございます！！！

ご感想と評価を下さる皆様に感謝しております！！

励みになっております！！

きちんと言ったことがなかったので、この場をお借りして一言。

破天荒列伝を読んでくださり、ありがとうございます！！

励ましをありがとうございます！！

次回も、よろしくお付き合いください（平伏）

第七十三話　華麗なる花（前書き）

★★★★★★★★★お詫びとご報告★★★★★★★★★★

大変お騒がせいたしましたが、『m様』と連絡がつきました。

私用乱用および、m様への羞恥プレイ、失礼いたしました。

第七十三話　華麗なる花

皇帝の姉がいなくなったところで、大将軍は声をかけた。

「大事無いですか、安殿？」

（え・・・・・？）

その言葉の意味を理解するのに、数秒かかった。

「あ・・・・安殿ぉ！？」

衛青将軍が？
衛青将軍が！？
衛青将軍が！！？

（わ、わわわ私のことを『安殿』って――――――――――――――――！？）

「どうかしましたか？」

「い、いや、だって！大将軍ともあろうお方が、私を『殿』呼びするなんて、恐れ多いですよ！？」

「何を言う。高級宦官ならば、そう呼ばれるのは普通じゃ。」

そう言ったのは、星影の近くにいた皇帝・劉徹だった。

「まったく！心配したぞ、林山！お前が姉上の侍女を庇って、瞭華に連れて行かれたと聞いた時！お前の命は終わったと・・・！」

「終わった・・・？」
「ああ。姉上は気が強いからな・・・。気に入りの器を壊したとなれば、ただではすまんと思ったのだが――――」
そこで言葉をきったかと思うと、力いっぱい星影を抱きしめる皇帝。
「林山・・・・！」
「ちょ、陛下！？」
「怖かったであろう！？身包みをはがされ、虎に食われそうになるなど！！」
（いや、服を脱いだのは自分だし。）
「知らせを聞いた時、本当に生きた心地がしなかったぞ！？」
（知らせ・・・。）
その皇帝の言葉で、星影の中に疑問が生まれる。
「あの・・・誰が陛下に、私のことをお知らせしたのですか？」
陛下は、自分が危ないという知らせを聞いてここまできてくれ。
もし、そのことが陛下の耳に入らなかったら、私は今頃殺されていた。
陛下がお出ましくださったことで、命をつなげることができた。
（陛下に知らせてくれた者のおかげで。）
「誰が・・・私のことを？」
「王殿だよ。」

星影の問いに、心地の良い声が返ってくる。

「衛青将軍!?」

「君の同僚の王琥珀殿が、私に知らせてきてね。その知らせを受け、すぐに陛下にお伝えしたんだ。」

「琥珀が衛青将軍に!?」

問題の男を見れば、怪我を負った兵達の手当てをしていた。

「琥珀!」

呼べば、こちらを見て笑うだけ。

「ちょっと陛下、すみません!」

「あ!林山!?」

強引に抱きしめる相手から強引に抜け出すと、琥珀の元へと駆け寄る星影。

「琥珀!聞い――――――」

「聞いたよ、林山。賊にやられた怪我が治っていないんだってね?」

星影が問うよりも先に口を開く友。そして、兵を診ながら琥珀は口を動かす。

「だめじゃないか、林山?君の体は、君一人の物じゃないんだから。」

「私だけの物だよ。」

「陛下も敬われてるじゃないか。」

「琥珀っ！」

相手の言おうとすることを察し、怒鳴る星影。相手は微笑しながら言った。

「ハハハ！失敬。陛下はもちろん、紅嘉殿もでしたね？」

「え？」

途端に、側にいた兵達から悲鳴が上がる。見れば、自分の後ろに子虎が控えていたのだ。

「紅嘉殿。」

「ガァウ。」

呼べば、嬉しそうに尻尾を振りながらよってきた。

「すっかり懐かれたね？」

「・・・かな？」

友の言葉を受け、その体を撫でてやれば嬉しそうに喉を鳴らした。

「この子・・・どうしよう。」

「君が飼うんだろう？」

「そうだけど・・・虎の世話なんてしたことないから。どうすればいいかな、琥珀。」

「ご心配には及びませんよ。」

「あなたは・・・！」

「紅嘉の世話をしております、魏忠（ぎちゅう）と申します。」

自分の名前を名乗ると、遠慮がちに近づく虎の世話係り。

そして深々と、星影に向かって頭を下げながら言った。

「安林山様！この度は、紅嘉のお命をお救いくださり、まことにありがとうございました！」

「あ、安林山『様』・・・？」

「おかげさまで、私はこの子を手にかけずにすみました。なんとお礼を申して言いか・・・！」

「そんな！お礼は陛下におっしゃってください！私こそ、あなたがいつくしんで育ててくださった紅嘉殿に、痛い思いをさせてしまったんです。お詫びするのは私の方で・・・。」

「いいえ。本当に、感謝しております。あなたの口ぞえがあったからこそ、陛下もお情けを下さったのですから！」

「とにかく、お顔をお上げください！紅嘉殿だって、心配してますから。」

育ての親の姿に、心配そうな目をしていた子虎。星影の言葉で顔を上げ、紅嘉と、呼んで頭をなでる。そこで、ようやく子虎の目の色が変わった。

「グゥル。」

「おいおい、そんなに舐めるな！」

「よかったぁ・・・！やっと紅嘉も元気になったようです。」

じゃれる紅嘉の姿を見ながら安堵する星影と魏忠。

そんな宦官を見ながら、彼女の友は口を開いた。

「紅嘉殿も元気になったことだし、今度は君も元気にならないとね。」

「私はいつも元気だぞ、琥珀？」

「怪我を放置したままの者を元気だとは言えないね。とにかく、後

で君の怪我を診よう。これでも、医術の心得はあるからね。」
「え!?そうなの?」

(だから、怪我をした兵を見ているのか。)

そう思った時、星影は重要なことを思い出す。

「張願様は!?」
「え?」
「紅嘉殿に、いや!紅嘉殿に乗った私が、体当たりしてしまったんだよ!」
「先ほど、張願様の兵がお医者様の元へ連れて行かれたよ。」
「そうなのか?」
「おそらく、この中で一番重症だと思うよ。骨が折れているみたいだったから。」

深刻そうに言う共に、星影は罪悪感が増す。

(あの時、私が余計なことをしなければ・・・。)

平陽公主を、懲らしめようと思わなければ。
あの時、気を抜いたりしなければ。
自分が油断しなければ。

(私が・・・油断したから。)

「私のせいだ。」
「林山?」
「私のせいだ!私のせいで、張願様は怪我をした!ここにいる兵の皆さんだって、怪我をした!」

「林山、それは・・・」
「それだけじゃない！平陽公主様に逆らってしまったんだぞ！私のせいで！おかげで、全員失業さ！」
「失業しませんよ。」
「え！？」
「落ち着いてください。張願以下千二百名は、失業などしません。今まで通り、弓兵として勤めてもらいます。」
「衛青大将軍・・・。」

いつの間にか、後ろまで来ていた武人。彼は星影に向かって意外な真実を告げる。

「張願やここにいるみなは、私の部下です。そのようなことはしませんよ。」
「部下！？衛青大将軍の！？」
「そうです。だから、心配しなくていいですよ。」

そう言うと、自分のつけていたマントを外す衛青。
それを、星影の肩にかけ、体を隠すように覆わせた。

「え、衛青大将軍・・・！」
「いつまでも、その格好でいるのは良くない。」

顔が熱くなった。

「す、すみません！」

自分の今の姿を考えて、恥ずかしくなった。
いくら、男装しているとは言え、下着姿でいるのはまずかったかもしれない。

「見苦しい姿をさらしてしまい、申し訳ないです・・・！！」

相手の言葉に赤面する星影。わびれば、笑い声が起こった。

「珍しいのぅ！林山もそんな顔が出来るのか！？」

衛青の後ろから、皇帝が顔をのぞかせながら言った。

「青はもちろん、朕がお前についておる。姉上がいくら文句を言おうが、林山のことは朕が守ってやる。心配するな！」

「陛下・・・。」

「それより林山！そなた、怪我をしておるそうじゃな？」

急に真剣な表情になる皇帝。

「なぜ、朕に隠していた？」

「え？」

「怪我をしていると一言言えば、朕はすぐに治療したぞ？」

「いえ、それは～」

（まずい！誤魔化そう！）

すぐさま彼女は、恒例となる行動に出た。

「怪我は・・・したのですが、傷は治っています。紅嘉殿の上で、ふさがった傷がうずいてしまっただけです！」

「つまり・・・傷跡が痛むと？」

「雨の日や湿った日に、古傷が痛むことがあるじゃないですか？それと同じです！」

「そうか。しかし、用心に越したことはない。これから医者に――」
「私ではなく、ここにいる兵の皆さんを見てください！」
「林山！？」
「そうでしょう！？私の傷はふさがったからいいんです！でも彼らは、凶暴な虎と戦って怪我をしたんです！武器である弓矢を壊されつつも、戦ったんですよ！？」
「それはそうじゃが・・・」
「お願いします！私は、彼らに迷惑をかけたのです！だから、どうか・・・！」

そう言って、その場に座り込む星影。

「陛下、どうかこの通りでございます！私は結構ですので、張願様とその配下の方々の治療を優先してください！！」
「なんじゃと？」
「私は大丈夫ですので、どうか・・・！！」

兵達に怪我をさせたこと、自分をかばった弓兵隊長のこと。
彼らを思って頭を下げた。
人のため、他人を思ってのことだった。
それが理由の半分。
では、残り半分は？

（医者なんかに見せられたら、女だってバレる――――――――――――！！）

自分のために頭を下げた。

可愛い妹と親友の未来のため。

半分とは言ったが、実際は半分以上がそういう気持ちで動いていた。

（すべては可愛い星蓮のためっ！！）

体を地につけ、頭を下げて頼む宦官に周りは騒然とする。

「林山・・・！」

「おい、あいつ・・・。」

「俺達のために陛下に・・・。」

「宦官らしくないよな・・・。」

「人間だよ、あれは・・・。」

「非人間的だと言われる宦官中で、唯一の人間だよ・・・。」

彼女の本心を知らない彼らは、星影の行動に心打たれていた。

土下座する星影の側に、紅嘉も駆け寄る。そして、その隣悲しそうな声で泣き出した。

「ガァル、ガァール・・・！」

不安げにその身を星影にすり寄せた。

「こ、紅嘉・・・。」

「紅嘉殿・・・。」

紅嘉を気遣う虎の世話係りの声。
それで星影も、子虎の存在に気づき、声はかけるも体を起こすことはなかった。

「どうか、お聞き届けください・・・！」

再びそう言うと、懇願する星影。
宦官のけなげな姿に、皇帝や大将軍は顔を見合わせながら言った。

「・・・わかった。この者達の治療と、新しい武器の支給をしよう。」

「皇帝陛下！！」
「林山の頼みじゃからな？聞かぬわけには行かぬ。」

ニコニコ言う皇帝・劉徹に感謝する星影。

（参ったな。なんだかんだ言っても、弱者の味方か。）

いいとこあるじゃん！と、思ったのだが・・・。

「その代わり・・・今夜は頼むぞ。」

不意に顔を近づけ、耳元でささやいた。

「え！？」

それが何を意味するのか。

自分の尻に回された手で、気づいた。

「っ～！？」

「本当に可愛いのぉ・・・林山。」

（前言撤回！！）

とりあえず今夜、陛下から逃げる準備をしよう。

そう心に決意する一方で、反省もしていた。

（まぁ～た！・・・林山に報告することが増えたよ・・・！）

内緒にしててもバレるからなぁ・・・。

きっとまた、『なにやってんだ！？』て、責められるだろうな。

（怒るだろうねぇ・・・。）

周りにわからないように小さくため息をつくと、そっと天を仰ぐ星影だった。

・

・・・・・・・

俺・・・星影のこと言えないかも。

「旦那ぁ～もっと飲んでぇ～」

「ワハハ！任せとけ！」

自分の前で、女性と戯れる協力者を見ながら切にそう思う。

ここは、昼間から酒を飲める店。

それどころか、綺麗な女性とも仲良くできる店。

早い話が――――――――――

「どうした！星影！？妓楼に来て、不景気な面して飲む奴がいるかよ～！？」

そう・・・わたくし安林山は、ただ今、花街にいます。

（すまん、星蓮・・・！！）

俺はお前という女性がいながら、人間の色の町・花街で真昼間から、

おなご達をはべらせて酒を飲んでいます。

星影が、皇帝の姉との問題を解決した頃。
劉星影の名を使っていた本物の安林山は、花街の中でも指折りの妓楼『采風雅』に来ていた。
先ほどまで、故郷に似た場所で、のんびりしていた林山。
そんな彼が、花街で酒を飲むことになったのは、間違いなく一緒にいる男が原因だった。

「義烈こそ、よく昼間から飲めるな・・・。」

『百面夜叉』の異名をとる凌義烈だった。
今のところ、林山が信じて、星蓮奪回の協力を仰いだ人物だった。
その義烈から、『今夜宮中に行く!』と聞かされたのが、半刻前。
そして、『作戦会議をするため』という理由で、妓楼に連れてこられたのだった。

「お前さ～女っ気なさそうだから、こういうところでハメはずすのも良いじゃねぇか?なぁ?」
「・・・今夜は、大事な仕事の前だろう?」
「堅い堅い!石ころみてぇ～に、固い!」
「あなたは、豆腐のように柔らかいな・・・!」
「まぁ、夜になりゃ、ビンビンに堅くなるけどな～」

そう言うと、横にいた女性の胸を指でつっつく侠客。

「きゃ!?」

「お？昼間なのに、もうおっ立ってるのかぁ～？」
「やだぁ～！凌の旦那ったら～もぉ！」
「反対側はどうだぁ？」
「もぉ！すけべぇ～」

そのまま、キャッキャッと戯れ始めた。
そんな姿に、軽く静かな殺意を覚える林山。

（この男は・・・！）

人の気持ちを理解していない。
俺が命がけでいることなど、まったくわかっていないかのような振る舞い。
怒りも覚えたが、反面情けなくなる林山。

（本当に、この男を信じてよかったのか。つーか、これじゃあ俺も星影のこと言えないよなぁ・・・。あいつに散々、『俺の名で馬鹿するな』って言ったけど、この状況を星影が見たら――――――）

「テメェ――――――――――――！！婚約者のいぬまに浮気かコノヤロウォオォ！！？人が宮中で苦労してる隙に骨休みか浮気者ぉぉぉ！！星蓮にバラすぞコラァ！！？」

（怒るだろうな・・・。）

いや、怒られて当然だ。

（下手すれば、俺はあいつ以上に馬鹿をしてるようなのだからな・・

・・。）

「星蓮にバラすぞコノヤロォォ！！？」
「ひどい・・・・林山・・・！！」

林山の妄想の中で激昂する姉と、涙ぐむ妹。
姉はともかく、悲しむ妹の姿が痛々しかった。

（星蓮・・・・！）

これが星蓮に知れれば、嫌われるかもしれない。
嫌われないにしても、自分への評価が下がるのは目に見えていた。
なによりも、彼女を傷つけてしまうことが目に見えていた。

（俺は嘘をつくのが下手だからな・・・。）

そもそも、自分が原因で星蓮は郭勇武に連れ攫われてしまった。
その原因となったことを星影にも聞かれたが、今は真相を語るときではない。
ちゃんと星蓮本人と再会してから、正直に話さなければならない。
桂連と浮気していたと誤解されたままでは、死んでも死にきれない。

（・・・ホント、馬鹿だな俺・・・。）

そんなことを思いながらため息をついた時だった。
なんともいえぬよい香りが鼻につく。

「あの・・・つまらない顔しないで、楽しく飲みましょう？」

声に続き、匂いが強くなる。
そう言われたかと思えば、半分まで入っている杯に酒が注がれた。

「え!?あ・・・」
「『昼間から』なんて、ここに来てからそんな野暮はおっしゃらないで?」

見れば、自分と変わらぬ年の女性だった。
サラサラとした髪が、林山の頬に触れる。
驚いて、少し離れれば、ウサギの形をしたかんざしが目に付いた。

「こんにちは、劉様。私は、花雪児(かせつじ)と申します。」

顔を見れば、純情そうな愛らしい娘だった。

「あ、ど、どうも・・・。」

(・・・星蓮の方が、肌が白いな・・・。)

他の女性にドキドキしながらも、本命の彼女を考えて惚気るところが林山のいいところだろう。そんな連れの反応に、義烈はつまらなそうに言った。

「おいおい!他に反応はねぇのかぁ!?可愛い雪児が、酌してくれたのによぉ?」
「おやめください、凌の旦那様。お酌は、妓女として当然の仕事ですから。」
「妓女!?」

この清らかそうな女性が！？

「馬～鹿。妓楼に妓女がいるのは当然だろう？それとも、ウサギにでも見えたか？」

「何でウサギなんだよ！？俺はただ、こんな初心な子がいるのは――――――」

「うぶぅ～！？」

途端に笑いが起きる。

「なにがおかしい！？」

「ダハハ！いやいや・・・お前という人間がわかったよ、劉星影！もうお前を、妓楼には連れてこねぇ！」

「はぁ！？」

「お前、女にだまされて失敗する口だなぁ？」

そう言うと、酒を一気にあおる義烈。

「な、なんであんたに、そんなことがわかるんだよ！？」

「いいか、雪児の代金は、他の妓女の二倍だ！そんな女にはまれば、身を滅ぼすぞ～」

「まぁ・・・ひどいですわ、凌の旦那様。」

「そういうわけだから、お前らもう下がって良いぞ！」

クックッと笑いをかみ締めながら、懐に手を突っ込む義烈。

そして取り出した銀を、妓女達一人一人手渡した。

女達は嬉しそうに受け取ると、義烈の口や頬などに口付けを落としながら部屋を後にしていく。

「おい、なにしてる雪児！オメーも出て行くんだよ！」

「はい・・・。」

部屋から出るのを渋るようにしていた彼女に、義烈が声をかける。
雪児の視線は林山に向けられていた。

「劉様、またいらしてくださいね。」
「え？いや・・・」
「私・・・嬉しいです。心から、そうおっしゃってくださったのはあなた様が初めてですわ。」
「え・・・？」
「雪児！」
「は、はい・・・失礼いたします。凌の旦那様。・・・劉星影様・・・。」

最後の方は、名残惜しそうにそう呟くと渋々部屋から出て行ってしまった。
綺麗な花達がいなくなった部屋で、最初に声を発したのは義烈だった。

「お前・・・あだ花に惚れられたね～？」
「あだ花？」
「雪児のことだ。」
「彼女が？」

不思議そうに首をかしげる林山に、義烈はあきれ気味にいう。

「そうだよ！あいつは確かにいい女だ！可愛いし、歌も躍りも楽器もできる。それでいて床上手！しかも、感度も良いときてる！」
「床っ・・・！？あんた寝たのか！？」
「男だからな。けど・・・あいつはやめときな。可愛い分、性質

が悪い。性格良いのに性質が悪いんだよ・・・。」
「心配しなくても、俺には心に決めた人がいる！」

大きなお世話だとばかりに酒をあおる林山。
確かに花雪児という女性は綺麗だった。
しかし残念ながら、俺の中の宝石には劣る。

（星蓮が一番可愛い！！）

そう確信する林山に、ゲラゲラ笑いながら義烈は言った。

「女買ってたくせに、よく言えるよな～？」
「ブハ！」

相手のその言葉で酒を噴出す。

（そういや、そういう設定にしてたっけ！？）

本物の星影が来た夜、調子に乗って大喧嘩をしてしまった。
誤解が重なり、「女を買って、激しい夜をすごした」と言うことにしたのだが・・・。

「うるさい！とにかく、俺は命を懸けて愛してる人がいるんだよ！！」
「うるせぇな～わかってるよ！性欲はしょんべんと同じ自然現象だってことを。」
「例えが違うだろう、それ！？」
「俺的にはそんなもんだ。とにかく・・・雪児と関わんなよ！面倒だからな。」

「心配しなくても、あんたのお気に入りの女に手は出さないよ！」
「ギャハハハハ！お気に入り～！？」

そう言うと、二度目の大爆笑をする義烈。

「痛い誤解だね～雪児とは、二、三度お相手しただけだよ。あいつを俺の女にするなんて、御免こうむるね！」
「ひどい言い方するな？」
「知ってるから言ってんだぜ。だからお前も、あいつと寝るなよ・・・？」
「寝たりしないさ！それこそ、御免こうむるね！」

吐き捨てるように言いながら、杯を机に置く林山。

「しかし・・・お前に、惚れた女がいるというのは初耳だな？」
「いちいち報告することでもないだろう？」
「お兄さんとしては、報告してほしかったね～？で！？どんな女だよ！？」
「・・・妹と無事に再会できたら紹介するよ。」
「言ったなぁ～！絶対だぜ！？約束したからな！？」

満足そうにうなずく男に、林山も口元を緩めてうなずく。
星蓮をこの腕に抱けたら、紹介ぐらいしても良いだろう。

『本当は、妹ではなく婚約者でした。』と、一言言うだけ。

一言、二言会話するぐらいの時間はあるだろう。それぐらいは許されるだろう。

（あとは・・・言ったと同時に星蓮を連れて逃げよう。）

誰も自分達を知らない土地で、一般家庭の夫婦として暮らせばいい。
幸い、学は修めていたので子供達を教えたりすることができる。
星蓮も裁縫が得意だから何とかなる。
畑仕事も、厳師匠の元で教えてもらった。
多少は、苦しくなると思うが、離れ離れになるよりましである。

（まぁ・・・星影がどうやって生計を立てるかというのが問題だけだな・・・。）

あいつのことだ。
武術の師として働き出すかもしれない。
あるいは、用心棒などをするかもしれない。
その時は困難だとは思うが、説得して普通の女性のフリぐらいはしてもらおう。
そして、良い相手がいれば結婚を勧めて――――――――

「冗談やめてよ！私は、武術と結婚してるの！今更男なんていいわよ！大体私は、尼寺に入るといったのよ！？それなのに・・・・」

林山の妄想の中で暴走する星影。

（・・・・あいつ、本当に結婚しない気か・・・・・？）

星蓮救出が成功すれば、星影は尼寺に行くと宣言していた。
だが、それは無理だと林山は思っていた。

どんなに彼女がそう言い張ろうと、星蓮と二人、引きずってでも一緒に連れて行く気でいた。
星影が、自分達を大事に思う以上に、自分も星蓮も彼女を大事に思っている。
林山からすれば、星影も家族なのだ。

（絶対に、あいつ一人だけ残していかない！一緒に逃げるんだ・・・！）

星影の反発覚悟で。
生傷ができるのを覚悟しながら。

（まぁ・・・こっちには切り札があるけどな。）

星蓮という切り札。
どんなに駄々をこねようと、暴れようと、悪態つこうと、星蓮が頼めば、白を黒とさえ言う女。
星蓮の頼みなら、何でも聞いてしまうような姉馬鹿。
妹に甘い、それが親友のいいところでもある。

（とにかくすべては、星蓮を救出してからだな！）

何十回目になる決意をすると、目の前の男に向かって宣言した。

「無論、あなたには俺の大事な女性を紹介するよ。」
「おお、ぜひとも自慢してくれや？」
「だからあなたも、紹介してくれないか？」
「大事な女をか？おいおい、勘弁してくれよ！俺の女なんざ、そこら辺にゴロゴロしてんだ。一人ずつ見せびらかしてたら一年かかるぞ？」

「そうじゃない。」

強い声で林山は言う。

「この部屋に隠れている奴を紹介してくれ。これじゃあ、おちおち酔いつぶれることもできないんでな・・・？」

林山の言葉に、義烈の表情が変わる。同時に、甲高い笑い声が部屋に響いた。

「フフフ・・・！なかなか、鼻の利く坊やじゃない？」

布のこすれる音と共に、部屋の奥から人の影が浮かび上がる。

「ずいぶん良い子を見つけたじゃありませんか、凌の旦那？」

艶のある声を響かせながら、妖艶な一人の女性が姿を現す。

豊満な胸とは不釣合いな細い体。

長い髪を揺らしながら、優雅に歩く。

彼女が歩くたびに、髪にささったかんざしが、美しい光を放つ。

潤むような睨むような悩ましい瞳は、まっすぐに林山を捉えていた。
こちらも、先ほどの妓女に負けぬほどの美女だった。

「・・・あなたは？」

身構えながら問えば、女性は紅を差した口を動かす。

「――――――鳳玉蘭（ほうぎょくらん）。今宵、皆さんとお供をするお仲間だといえばわかるかしら・・・？」

銀の首飾りを気にしながら、悪戯っぽく答える。

「今宵の・・・仲間だと！？」

まさか！？

そう思って、義烈を見れば、片目を閉じながら答える。

「そういうこと。しっかしお前・・・よくわかったな？このお姉さんの気配が？」

「なにがお姉さんよ？私はあんたよりは年下。それも一つしか変わらないでしょう、お兄さん？」

「いいじゃねぇか？それより林山・・・いつから気付いてた？」
「・・・部屋に入った時から、違和感があった。」

気配を感じ取ったのは、女達が出て行ってから。
だが、あえて試すつもりで嘘をついた。

「部屋に入った時は、他の女性達の気配と同化していて、わかりづらかった。しかし・・・彼女達が出て行ってから、はっきりとわかったよ。やっぱり隠れているなって。」
「へぇ～たいした者ね・・・。気配を同化させてたのまで、感じ取っちゃうなんて。」
「単に、お前の腕が落ちただけじゃねぇか？玉蘭？」
「やめてよ。・・・それで星影、私以外にもここには誰かいると思う？」

誘うような、口説くような声色に、一瞬たじろぐ林山。
迷った末、正直に答えることにした。

「・・・わからない。いると言われればいると思うし、いないと言われればいないと思う。」
「あら？じゃあ、私がいると言ったら信じるの？」
「信じる。義烈の仲間なら、俺は信じるだけだ。」
「プッ――――――――ハッハッ！そりゃいい！！」

林山の言葉に、黙って聞いていた義烈が笑い声を上げる。

「なぁるほど！俺を信用してくれてるわけかい！？それじゃあ、嘘は言えねぇなぁ・・・玉蘭？」
「心配しなくても、私しか隠れてなかったわ。他は違う場所で待ってるからね。」

「違う場所？」
「ええ、この妓楼の上客用の一室にね？」
そう言うと、向かい合わせで座っていた義烈と林山の横に座った。
「義烈が酒屋で助けたっていうから、どんな世間知らずが来るかと思えば・・・たいしたお坊ちゃんね？」
「お坊ちゃんはよして下さい。私は――――」
「劉星影だったわね？よろしく、星影。私のことは玉蘭と呼んで頂戴。」
「では、玉蘭・・・殿。あなたは先ほど・・・ご自分も仲間だといいましたが――」
「そうよ。だから凌の旦那・・・義烈に協力するわけ。」
「心配すんな、星影。玉蘭は、今夜の主役でもあるんだよ。いてもらわなくちゃ、仕事にならねぇんだ。」
「か、彼女が！？しかし、女性を危険な――――――」
「あら？心配してくれるの？優しいのねぇ・・・」
言ったと同時に、暖かいものが頬に触れる。
横目で見れば、間近に玉蘭の顔があった。
「なっ！！？」
「やーねぇ・・・。ほっぺにチュ～ぐらいで、赤くなるなんて？」
「こ、ここ困ります！！こういうことをされては――――――！」
「大事な女にしかられるってよ。」
「義烈っ！！」
「吼えるな吼えるな。玉蘭も、からかうんじゃねぇよ。」
「いいじゃない？私、星影のことが気に入ったわ。今夜は仲良くしましょうね？」

にっこりと微笑む美女に、甘い不安を覚える林山。
その脳裏に、すねる星蓮と激怒した星影がよぎったのは言うまでもない。

第七十三話　華麗なる花（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

無事に、茶器破損事件を解決（！？）した星影。
一方、今度は林山がややこしいことになりつつあります。
新キャラも登場しましたので、よろしくお願いします（平伏）

本編とは関係ないのですが・・・・『鳳玉蘭』の『ホウ』の字は、当初、三国志の『ホウ統』・『ホウ徳』の『ホウ』の字でした。ところが文字化けしたので、『鳳』の字に変更しました・・・。
・・・ちょっと、切ないです。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十四話　怒られて、怒りました。

「本当にもう！すごくびっくりしましたよっ！！」

興奮気味に言う空飛に、星影は苦笑いをしつつも頷いた。

（これで何十回、言われたことか・・・。）

平陽公主との勝負（！？）を終えて、無事部屋に帰宅した安林山こと劉星影。

晴天に起こった事件は、茜色の空になってから解決した。

このまま部屋に来ないかという陛下をなんとか振り切り、気疲れ状態で自分のねぐらに戻った星影。

そんな彼女を待っていたのは、怒りに震えた親友の張空飛だった。

「聞きましたよ！！今度は、陛下の姉君と揉め事を起こされたんですってね！？」

泣いているのか怒っているのかわからない顔で詰め寄る張空飛。

「ご、誤解だよ～空飛！」

「そうだよ。林山は揉め事を起こしたのではなく、大きくしただけだよ。」

「琥珀っ！！」

そう付け足したのは、一緒に戻ってきた悪友の王琥珀だった。

「お前また、空飛が心配するようなこと言って～！」

「本当じゃないか？女官をかばったまではよかったが、虎と戦うな

んてどうかしてるよ。」
「女官!?虎!?」
「おい、琥珀!」
「それではやはり・・・・噂は本当だったんですね・・・・!?」
ああ・・・と、ふらつきながら弱々しい声で嘆く空飛。青ざめた表情で自分を見る相手に、不吉な予感を覚える星影。
「噂って・・・?」
(今度はなに!?)
そう聞き返せば、沈痛な面持ちで彼は口を開いた。
「・・・・・・するんですか?」
「は?」
「林山あなたは、除玲春という女官と――――――結婚するんですか?」
「・・・・・・・・・・・・はい?」
けっこん?

「・・・空飛、私も彼女も、怪我はしてないし、血の痕なんか・・・」
「それは『血痕』です。」
「血の巡りは悪くないし。」
「それは『血行』です。」
「いや、その・・・私は今の身分には十分すぎるくらい満足してるよ。これ以上のことは望んでいないから。」
「それは『結構』です。」
「え～・・・平陽公主様との戦いは、圧倒的に私がフリな悪条件だった。それでも私は諦めずに実行したよ！」
「・・・・・それは『決行』で――――――――すっ！！私が言いたいのは！あなたが平陽公主様お気に入りの女官と夫婦になろうとして、その怒りに触れて、今回の事件が起こったと聞いたのですよ！！」
なっ！？
「なにぃぃぃぃぃ！！？」
結婚！？
夫婦！！？
「私が玲春さんと！？」

（つーか、私本当は女だし――――――――――――――！！）

「そんなことできるかっ！？私は女――――――・・・・と、は！！・・・結婚できない体だ！」

「だから、肉体の構造は関係ないと言ってるじゃないか？」

絶叫否定する星影に、側にいた冷静な宦官が答えた。

「男の機能が体になくても、それを代用できる道具がある。」

「さらっと、卑猥なことを言ってんじゃねぇ！なに、平陽公主様と似たようなこと言ってんだよ！？」

「え！？で、では・・・・平陽公主様と――――結婚についての話をしたんですか・・・！？」

「してないからっ！あのね～空飛！どんな噂を聞いたか知らないけど、私と玲春さん・・・『除玲春』という女官は今日初めて会ったんだ！そんな相手といきなり結婚なんてするわけないだろう？」

「一目惚れということもあります・・・」

「だからなんでそうなるの！？空飛は私に結婚してほしいのか！？」

「そんな！そんなことありません！！誤解ですよっ！！」

星影の言葉に、ひどく狼狽しながら大きく首を横に振る空飛。

「やめてください！結婚なんて――――――・・・しないでくださいっ！！」

「ちょ、ちょっと空飛？」

「そんなんじゃないんです！そんなんじゃ・・・！ただ、林山が突

然結婚するなんて聞いたから私・・・・・！」

そう言うと、メソメソと泣き始める親友。

「空飛・・・？」

「ごめんなさい・・・！気に障ったなら謝ります！だから、嫌いにならないでください・・・！」

「ちょ、ちょっと！？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、林山！嫌いにならないで！私を嫌いにならないでください・・・！！」

泣きながら懇願する友に、星影の怒りは吹き飛んだ。

「馬鹿だね・・・私が空飛を嫌いになるわけないじゃないか？」

「林山・・・？」

優しく語り掛けると、自分より小柄な相手を抱きしめた。

「林山！？」

（胸はしっかり押さえてるから、バレることはないだろう。）

驚く友の声を気にすることなく、彼女は諭すように告げた。

「大丈夫だよ、空飛。私は誰とも結婚なんかしない。無論、除玲春さんともだよ。」

「ほ、本当に――――本当にしないのですか！？」

「しないよ！どんな噂を聞いたか知らないけど、私は結婚はしない。その意思は海よりも深く、山よりも高い。そう誓ってるんだ。」

「林山・・・。」

「そんな誓い以上に、空飛・・・・私は、君を大事な友だと決めてる。絶対に空飛を嫌いになんかならない。」
「・・・林山・・・・！」
「私や琥珀のことを真剣に心配してくれる優しい空飛を、どうして嫌いになれる？」
「優しいなんて――――そんな！私は、林山が思っているほどきれいな人間ではありません！いつも・・・卑しいことばかり考える最低の人間ですよ・・・！」
「もしそうなら、何故怒りながら私達を出迎えた？卑しい者なら、相手の機嫌を伺いながら、媚びるような手段をとるはずだ。なのに空飛は、ご機嫌伺いをすることなく、素直に怒ったじゃないか？」
「林山・・・！」
「そんなに自分を貶(おとし)めるな。自信を持っていいんだよ、空飛。あなたは、私の自慢の友だからさ？」
「りっ・・・・りんざ――――――ん！！」

星影の言葉に、ワッと声を上げながらその胸にすがりつく空飛。

「わ、わかってるんです！私、わかってるんです・・・！」
「ほらほら。そうやってまた泣くんだから・・・・。」
「林山は、今上の大事な人だと、わかってるんです・・・！」
「わかってねぇよ！？私にその気はないって言ってるだろう！？」
「でも、今上はあなたを――――」
「李延年の代わりだよ！あるいは、焼きもちを焼かせたいがための相手に過ぎない！」
「だけど噂では――――――！」

「そのことだが。」

それまで、二人の様子を静観していた琥珀が口を開く。

「具体的に・・・どのような噂を聞いたんだい?今、宮中に広まっているという安林山と平陽公主様が揉めた話の真相とやらは?」
「それが・・・」
「言いにくいことなのかい?」
「・・・いえ。」

琥珀の問いに言い渋る空飛。

「話してよ。」
「林山。」
「遠慮することはないよ、空飛。私に関する噂話を?」

それを後押しするように優しく星影は尋ねた。

「空飛のことだから、私に気を遣っているだけなんだろう?皇族と一宦官なら、宦官がボロクソに言われるのは当たり前じゃないか?それぐらい、私もわかっているよ。」
「いえ!そんな――――――」
「遠慮せずに話しなって。別に、空飛が言い始めたことじゃないし。それに、悪く言われるのは慣れてるから。」
「そんな!悪いようなことは何も――――――」
「しかし、君が言い渋るということは、林山にとっては不利益な話があるということじゃないか?」
「琥珀!」
「違うのかい?空飛が心配するようなことはあったのでは?」
「・・・ええ、まぁ・・・。」

琥珀の言葉に、星影から視線を話しながら答える空飛。

（そりゃあ、そうだろうな・・・。）

皇帝の実の姉相手を『あんた』呼ばわりしたり、タメ口を叩いたりしたんだ。
いくら相手に非があったとしても、身分というものがある以上、自分が悪く言われるのは当然である。

（ホント、誰が身分なんてものを作ったんだか・・・。）

面倒なだけじゃない。

そこまで考えると、目の前で挙動不審な動きをする友に声をかけた。

「大丈夫だから話してごらん、空飛。私が頑丈なのは知ってるだろう？」
「・・・でも。」
「もし、あなたが話した内容で私が傷ついたら、その時は空飛が慰めてよ。」
「な、慰めるって!?」
「ねぇいいでしょう？慰めてくれるよね、く・う・ひ？」
「は・・・・はい・・・。」

星影に促され、赤面しながら頷く空飛。そして噂話の内容を、詳しく細かく説明し始めた。

「『霍去病将軍の再来である高級宦官・安林山は、平陽公主様付の女官で、平陽公主様お気に入りの女官・除玲春と恋に落ちた。二人は平陽公主様の許しを得て結婚をしようとしたが、二人を結婚させたくない平陽公主様は、除玲春にご自身が大事にしていた茶器を割った罪を着せ、それをかばった安林山をその罪で殺そうとした。と

ころが、割った器が偽物であったと、安林山に教えられ、それを偽物だと知らずに使っていた平陽公主様は大恥をかかされてしまう。怒った平陽公主様は、言いがかりと無理難題を安林山に押し付けて事故に見せかけて殺そうとする。その方法としてご自身が可愛がる子虎をけしかけたが、彼は子虎を篭絡して平陽公主様から奪ってしまう。これには、以前、賊から陛下を守った際に負った傷が完治していなかった安林山にとって不利なことだった。しかし、恋人の命までかかっている以上、愛しい娘を守るために獰猛な虎と戦うことにした安林山。お守りとして徐玲春から渡されていた香を使ってなんとか子虎を倒す。その際、子虎は暴走し、周囲にいた兵や女官達はもちろん、飼い主であるという平陽公主様まで襲い始めた。それを目にした安林山は、兵や女官達は元より、自分を殺そうとした平陽公主様まで、虎の脅威から守るために奮闘。危険も顧みずに、虎にまたがりその動きを抑えると同時に彼らを守ったのである。そして騒ぎを聞きつけて陛下がご仲裁に入り、安林山は助かるが、自分の悪事が露見することを恐れた平陽公主様は、証拠隠滅のために可愛がっていた子虎を殺そうとする。そんな子虎を気の毒に思った安林山は、陛下に願い出て子虎の助命を訴える。安林山の優しさに感心した陛下は温情をかけ、子虎を安林山に与えるとした上で、安林山と除玲春に一切危害を加えないと平陽公主様に約束させた。こうして、一命を取り留めた二人は、互いの思いを確かめた後、落ち着いてから結婚しようという誓いを立てたのだった。』・・・というのが、私が聞いた『安林山と平陽公主様の話』なのですが・・・・。」

「毎回思うんだけど、誰がそんな適当な話を広めてるんだっ！！？」

長い長い空飛の話を聞き終わり、額を押さえながらツッコミを入れる星影。

「しかも、最後に『続く』がつきそうな話の終わり方じゃないか！？」
「どうやらみんな、続きを期待してるみたいだね？」
「あってたまるか！命がいくつあっても足りないだろう！？」
（そもそも、時間の無駄だし・・・！！）
こんなことが繰り返し起これば、いつまで経っても妹探しは終わらない。
「それじゃあ――――・・・今話した内容は、間違いなんですか！？」
「ところどころで違う！！つーか、出だしから違う！そもそも、茶器が割れたのは、私と玲春さんが、廊下でぶつかったからだ！根本的に恋などに落ちていない！！」
「えええ！！？」
「『えええ！？』じゃない！その場には琥珀もいたんだ！そうだよな！？」
「ああ・・・『茶器が割れたのは、自分が悪い』と双方が言い合ってね・・・。お互いにそのことを譲らずにいたら、平陽公主様の女官頭がいらして、二人まとめて平陽公主様の御前まで連れて行かれたんだよ。」
「そうなんだよ！」
「ただし、その後のことは知らないよ。結婚しようとしたかどうかは――――どうなんだい、林山？」
真顔で尋ねる悪友に、星影は気炎を発する。
「なにが『どうなんだい？』だ！？するわけないだろう！！」

「それにしちゃあ、ずいぶん君は、あの少女を気にかけていたね？」
「琥珀！」
「・・・そんなに、綺麗な女性だったのですか？」
「『綺麗』というより『可愛い』の方が、印象にあっていたよ。ただし、数年後には美女になるだろうけどね。」
「ちょっと琥珀！？」
「さすが、平陽公主様がお目をかけていらっしゃるだけある。あれならば、どんな男性からも引く手あまたさ。」
「お前、よくそんなところまで観察してたな！？つーか、お前があの子に気があるんじゃないか！？」
「あいにく私は、無骨な宦官。林山と違って、色濃いとは縁のない無能ものなので。」
「どういう意味だよ！？」
「そ、そうですか・・・そんなに綺麗なんですか・・・。」
「おいぃぃ！琥珀の言うことを信じるな、空飛！」
「でも、美人になるぐらいの可愛い子でしょう！？」
「そうだけど、結婚したいほど好きにならないよ私は！」
「わ、わかりませんよ・・・！年月というのは、人の気持ちを変え――――！」
「変えないから！！もお～私は彼女のこと、妹程度にしか思ってないよ！」
「妹って・・・林山、君・・・。」
「でも可愛いのでしょう！？」
「そうだけど、とにかく違うよ！大体、可愛さなら空飛だってそうじゃないか！？」
「わ、私ですか！？」
「そうだよ！あの子と結婚するくらいなら、私は空飛と結婚する！！」

「っ！！！？」

「なっ・・・・・！？」

苛立ち紛れにいった星影の言葉に、空飛は目を見開き、琥珀の目は点になる。

「とにかく、それで終わり！わかったね！？」

「・・・！！」

「わかったね、空飛！？」

「・・・！！」

「聞いてるの！？く・う・ひ！？」

「え！？え、えええええ――――――ええ！！？」

「この話は、玲春さんの話はお～わ～り！・・・・いいね？」

「はっ、はい！？」

「私は誰とも結婚しない！いいね！？」

「はっ、はい！！」

「琥珀も、余計なこと言うなよ！」

「・・・・・・・・・そうするよ。」

有無を言わさぬ友に、空飛と琥珀は首を縦に振った。

「まったく！そろいもそろって嘘ばっかりじゃないか！」

愚痴りながら空飛から体を離すと、机の前にある椅子に腰掛ける星影。

自分から離れた相手に、空飛はオズオズと話しかけた。

「嘘・・・だったんですね。私の伝えた話は・・・？」
「ああ！誤報もいいところだよ・・・！」
「それでは・・・失業しかけた兵を復職させたり、傷ついた女官達のために、傷を癒す時間を与えるように陛下に進言したというのも誤解ですか？」
「・・・え？」
「それは――――・・・事実だね。」

星影の代わりに琥珀が答える。

「『自分の手当てより、巻き込んだ他の者の手当てを。』と陛下に懇願したのは事実だよ。おかげで、虎の世話係り共々、兵や女官達も林山の信者さ。」
「信者って・・・。」
「好感を持たれたのは間違いないと思うよ？そうじゃなくても、『宦官』という存在を見直してくれた。君が来て以来、宦官の評判は上がる一方さ。」
「そ、そうなのか？」
「ああ。その反面、武官達の評判は急降下してるけどね。・・・あまり、『恨み』を買わないようにしなよ。」
「恨みって！？私は、武官には何もしていないよ？」
「早い話が『妬み』だよ。武功をあげることが、武官の務めだからね。それを宦官に奪われたとあれば、彼らは面白くないだろう。」
「馬鹿馬鹿しい・・・！それなら自分達も、手柄を上げればいいじゃないか？宦官と違って、戦場に出れる機会があるんだから。」
「それとこれとじゃ話は別だよ。君は、『陛下を守った』という名誉が与えられたんだから。」
「・・・それで愛妾にされちゃかなわないんだけど？」
「なに言ってるんだい？伽だってまだしてないじゃないか？」
「してたまるか！？私はここに、性的な肉体奉仕に来たんじゃない

!?普通の奉仕活動に来ただけだ！」
「本当に欲がないね。」
クスクスと笑う相手に、さらなる頭痛を覚える星影。
（もう、絶対に星蓮の手がかりをつかもう！）
怒りに肩を震わせながら、何度目かの決意をする姉。
「それじゃあ・・・陛下に兵や女官の皆さんの庇護を訴えた話は本当だったのですね？」
「え？あ、うん・・・。そうだよ。」
「なんだよかったぁ～！じゃあ、そのあたりの話は本当なんですね！？」
「そのあたりとは――――」
「どのあたり？」
まだあるのかと問う琥珀と星影に、無邪気な笑みで空飛は返事をする。
「はい！大怪我を負った弓兵を率いる張隊長に、医術の心得がある林山が、応急処置をして、九死に一生を得たという話です！」
「・・・それ、私じゃなくて琥珀なんだけど・・・・。」
生き生きと話す空飛に、遠目状態で答える星影。
「ええ！？林山じゃなくて、琥珀だったんですか！？」
「悪いね、林山じゃなくて。」

夢を壊しちゃったかな?と、笑う琥珀に、空飛は大きく首を振りながら言った。

「そ!そんなことないです!そうですか――――――じゃあ、やはり大半の噂が大げさなものばかりということで、間違いないんですね・・・。」

「うん、大げさすぎるよ。」

(作り話もあるし。)

どうして、私と玲春さんの恋物語などが生まれたのだろう?

「すみません、林山・・・。」

「なんで空飛が謝るんだい?悪いのは、早とちりで人の噂が好きなせっかちな宮中の人々だよ。」

再度、諭すようにその頭をなでてから、大きなため息をつく星影。顔からは、精神的な疲労がうかがえた。

「・・・とても、疲れているのですね。」

「いや!大丈夫だよ、ハハハ!」

「・・・古傷は大丈夫ですか?」

「そんなことまで噂になってるのか!?」

「当然じゃないか?陛下も知るところとなった話なのだから。」

そう言いながら、星影の向かい側に腰をかける琥珀。

「悪いことは言わない、林山。きちんと医者に見てもらったほうがいいよ。」

「だ、大丈夫だよ!もう塞がったんだから・・・。」

（医者なんかに見せたら、女だとバレるし・・・。）

「・・・どうも君は、医者の類(たぐい)が嫌いみたいだね？まじないで病気や怪我を治す性質かい？」

「そうじゃないが・・・ちょっとね。」

「信用できないと？」

「う・・・！」

射抜くような目で見られ、一瞬言葉に詰まる星影。

「そ、そうだよ！信用してないんだ・・・・！」

そっぽを向きながらはき捨てるように答えた。

「とにかく、私は大丈夫だ！琥珀も・・・あまり根掘り葉掘り聞くな！そうしてると、いい加減な噂を流して楽しんでいる一部の宮中の人間みたいだぞ！？」

「宮中に一部も何もないよ。まぁ・・・具合が悪くなったら私に言ってくれ。医術の心得はある。」

「・・・ああ、悪くなったらな。」

診てもらう気などなかったがそう答えた。

そうでも言わなければ、この話が終わらないと思ったからだ。

（ただでさえ、こいつは油断ならないからな・・・！）

「まぁまぁ二人とも！その話はここまでにしましょう？」

なだめるような声にあわせて、きれいな高音が耳に響く。
声の主を見れば、彼は飲み物を運んでいた。

「空飛！それ・・・・！？」

空飛の持つお盆の上には、瑠璃（ガラス）で出来た大小の器が光っていた。
酒ビンの形をした大きな瑠璃の中では、赤紫色の液体がゆれていた。

「ずいぶん洒落た入れ物に入っているね・・・。お酒なの？」
「はい！これは、『ぶどう酒』というものです。」
「『ぶどう酒』・・・？」
「もしや、西域のお酒かい？」

首をかしげる星影のそばで、興味深そうに琥珀が問う。

「よくご存知ですね！？そうです、これは西域のお酒なんです。」

（――――――――思い出した！）

少し前、父上が話していた。
西域には、ぶどうという果実を使って作ったぶどう酒というものがあるという話を。
そして――――

「・・・・とても高価なお酒じゃないのか？」

『異国の酒』ということもあり、庶民には手が出せない酒だと話していた。

中国における酒の歴史は古く、紀元前７０００年頃には米・果実・蜂蜜を原料とした醸造酒があったとされている。
また、『戦国策』という中国酒に関する最古の記録書によれば、『夏王朝（紀元前２１～１６世紀）開祖・禹王に、儀狄が酒を造って献上した。』という記述が残っている。
『ぶどう酒』が中国の歴史上で最初に登場したのは、前漢武帝の時代。
前１２０年に、武帝の配下である張騫（ちょうけん）がぶどうを異国から持ち帰り、ぶどう酒の生産が始まったとされている。
ぶどう酒が中国人に与えた衝撃は大きく、それは単に、異国の酒と位置づける程度のものではなかった。
この頃の中国国内の酒は、味が薄くてアルコール度が低かった。
どちらかというと水に近い酒が多かった。ゆえに、酸敗しやすく長持ちしない。
それに対して、このぶどう酒は、味が濃厚な上に何年立っても美味しく長持ちする。
だから、超がつくほど高級品なのである。
ただ、ぶどう酒の製造が始まった時期には諸説あり、大まかに見ても紀元１世紀～７世紀頃とされている。
なので、前漢時代は輸入が主流であったかのように思われる。

本編とは関係ないが、もっとも盛んにぶどう酒が飲まれるようになったのが、西域の文化が流行した唐の時代である。かの有名な李白も、ぶどう酒のことを詩に歌っている。ちなみに唐時代は、ぶどう酒ことワインは、赤ワインよりも白ワインの方が上等であった。

「それをなんで、空飛が・・・？」
「いえ、私ではなく、今上が。」
「陛下が！？」
「はい。陛下からのお使いの方が、『本日災難にあった安林山殿を

癒すため』にお持ちくださったものです。」
「そっか・・・陛下が。」

（ということは・・・今夜は、あの親父の相手をしなければならないと・・・？）

昼間の会話を思い出し、軽い胸焼けを起こす星影。

（そうでなければ、こんな超高級品を、私に届けるわけがない・・・・！！）

部屋を照らす光により、ぶどう酒の入った酒びんが怪しく光る。
大商家の娘とはいえ、実物を見るのは初めて。
限られた場所でしか流通していない酒を、思わず凝視してしまった。

「すごいね、初めて見たよ。」

星影の心の声に合わせるように琥珀がつぶやく。

「ぶどう酒を口にできるのは、皇族の中でも限られている。」
「そうだろうね・・・。」
「それだけ今上は、あなたを労わりたいのですよ、林山！」
「そうだね・・・。」

（その見返りを体で返せというのか・・・！あの好色めっ！）

相手からの贈り物の意味を推理し、うんざりする星影。

「なんでもこのぶどう酒というお酒は、味がとても甘くて、飲んでも次の日まで残らないといいます。わが国のお酒のように二日酔い

にはならないそうですよ！」
「へぇ～そうなんだ・・・。」
「さぁ、干した果物も用意しましたから、肴にして飲んでください。疲れた時は、甘いものがいいですからね。」
そう言うと、ぶどう酒と一緒に干した杏子やヤマモモ、ナツメなどを星影の前に置く。
「琥珀もどうぞ。」
「ありがとう。それはそうと・・・君は飲まないのかい？」
「いえ、私はいいですよ。二人ほど疲れていませんから。」
「しかし、私達だけもらうのは悪いよ。」
「そうだよ！空飛も飲もう！！」
こうなれば、ヤケ酒だ！
そんな思いで友を誘えば、相手は首を横に振りながら答えた。
「いいですよ。これは、林山と琥珀を癒すために今上が送られた品です。私はもらえません。」
「なに言ってるんだ？遠慮することないよ！」
「いいんですよ。」
「私のことはいいですよ、林山。そんなことをしたら、二人の分が減っちゃいます。」
「え？」
（二人の分が減っちゃうって・・・！？）
「だから、二人だけで飲んでください。」

そう言って笑うと、そそくさと部屋から出て行こうとする空飛。

「ちょっと待ったぁぁぁ！！」

それを星影が引きとめた。

「ちょっと待った、空飛！」

「り、林山！？」

「何言ってるんだ、空飛！？そんなことできるわけないだろう！？」

そう言って立ち上がると、空飛の前に立ちはだかる星影。

「なんで、空飛を差し置いて、私と琥珀だけで杯を交わさねばならない！？」

「そんな林山、私は――――――」

「空飛。君は今、私に飲み物と干した果物を運んでくれた。この肴も、陛下からの贈り物なの？」

「い、いえ。それは私が勝手に――」

「――――――ということは！私が疲れているからと気遣って用意してくれたからだろう？」

「え？は、はい・・・。」

「だったら、気を利かせて君も飲むべきだ！杯とは、気心の知れたもの同士で交わすもの！私達は友達なんだから、何事も共有しないと！」

「でも――――」
「そんなところで遠慮するな！空飛は私のこと、親友と思ってないのか！？」
「そんな！そんなことは――――！」
「じゃあ、決まりだね。」
星影の代わりに琥珀が答える。

「三人で乾杯しよう。今日一日、無事に終わったことを。」

そう言うと、新たに持ってきた杯に空飛が用意したものと同じものを注ぐ。
それを空飛に差し出す琥珀。

「私達は友だ。違うかい？」
「琥珀・・・。」
「ほら空飛！乾杯だ！」

星影に肩をたたかれ、涙を浮かべながら杯を受け取る空飛。

「『友』なら遠慮はしない？そうだろう！」
「は、はい・・・！」

大胆不敵な宦官の言葉に、心優しい宦官は何度もうなずく。

「では、話がまとまったところで乾杯といこうか？」

「よし！任せろ！」

「はい、お願いします・・・！」

机を囲んで立つと、杯を中央へと掲げる三人。

そして――――――――――

「では、かんぱ～い！」

お騒がせ宦官の言葉を合図に、杯を中央で鳴らしたのだった。

第七十四話　怒られて、怒りました。（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・！！

星影、宮中の噂話に頭を悩ませています。
陛下からの誘いに頭を悩ませています。
ぶどう酒をもらい、ヤケ酒を決めました。

次回も、この三人で続きます。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十五話　飲みすぎじゃなかった

中国において酒とは、みんなで楽しく飲むものである。
味を楽しみ、仲間と幸せを分かち合う。
ここにも、それを実行している三人組がいた。

「これ・・・・！？美味し――――――――――い！！」

歓喜の声を上げたのは、安林山こと劉星影だった。

先ほど、陛下から送られたぶどう酒と星か果実を肴に一杯やっていた。
夕方から飲むのは少し早かったが、ヤケ酒として飲むので気にはしなかった。
なによりこの酒は、彼女の憂さを晴らすのに十分すぎるほどの上物だった。
口の中に広がる果実の甘さと、酒独特の喉越し。
藍田にいた頃から酒をたしなんでいた星影。
裕福な家庭である自分でさえ、飲んだことのない酒の味。
濃厚な舌触りに、思わずうっとりとする。

「これがぶどう酒・・・！」
「すごく美味しいですね～！？」

星影に続くように声を上げたのは、友である王琥珀と張空飛だった。

「だよね？美味しいよね！？」

「はい！」

星影の言葉に空飛はすぐ頷き、互いは顔をあわせて笑いあった。
それを見ながら、琥珀は苦笑した。

「そんな艶のある顔をしたら、皇帝陛下に食べられるよ。」
「何でお前は、人の幸せな気分を台無しにするかな・・・！？」
「事実じゃないかい？いい加減、覚悟を決めないとね？」
「覚悟って・・・。」
「暗い声は出さない。部屋が暗いから、気分まで暗くなるんだよ。」

琥珀の言い分はわかるが、陛下の思い通りになるわけにはいかない。
相手に身をゆだねてしまっては、妹はおろか、自分の首が飛んでしまう。

（なんとか、伽を誤魔化す方法はないかな・・・。）

一番確実なのは、李延年を巻き込むことである。
それしか、自分の操を守る手段はない。

「どうしました、林山？顔色が悪いですが・・・？」
「い、いや・・・ちょっと疲れてね。それでその・・・陛下からのお使いの方は、他に何か言ってなかった？」
「え？なにかとは？」
「いや、その・・・陛下から指示を受けたとか、準備してろとか？」
「？？いいえ・・・なにも？ただ――――――」
「ただ！？」

不思議そうに首を振った後で、何か思い出したように言葉をつむぐ空飛。

その先を問う星影に、彼はいつもと変わらぬ穏やかな口調で答えた。

「『今日はゆっくり休め。』と伝えるようにと言われましたよ？」

「『今日はゆっくり休め。』だって！？」

「え！？・・・ええ。体が治ってからいろいろ頼むとかおっしゃっていたそうですが？」

「そ、そうなの・・・！？」

つまりそれは――――――――――

（今夜は伽をしなくていいということか！？）

「どうやら、今夜のお役目は免れたみたいだね？」

星影の思いを後押しするように言ったのは琥珀だった。

「や、やっぱりそうとらえる！？」

「だろうね。」

片目を閉じると、杯をかかげながら断言する親友。

（よかった――――――――――――――――ぁぁぁ！！今夜は操が守れた・・・・・！！）

ほぉ～と胸をなでおろす星影に首をかしげる空飛。
大体のことを知っている琥珀は苦笑する。

「そうと決まれば、しっかり飲もう！」

安心したこともあり、酒をぐいぐいと飲む星影。そんな相手に、笑顔でお酌をする空飛。

「林山ったら・・・よほど喉が渇いていたんですね？」
「当然だよ！なんせ、今日は命を懸けてよくしゃべったからね～」
「でもよかった・・・林山が無事で。」
「まったくだね。無事に生き延びたことに乾杯だね。」
「変な言い方するなよ！ここは戦場か！？」
「似たようなものじゃないか？権力を求める者達による戦場さ。」
「またそれかよ・・・琥珀。」
「これだけ言っても君はわかってないからね。幸い、君がもめた平陽公主様については、陛下と衛青大将軍が取り成してくださったから無事ですんだんだよ？」
「わかってるよ。」
「わかっていないよ。」

ウンザリする星影に、厳しい表情で琥珀は言った。

「君は、ここが宮中ということを忘れていないか？」
「どういう意味だよ？」
「宮中にはね、林山・・・魔物が住んでいるんだよ。」
「魔物！？」
「ちょ、琥珀！怖い話はいやですよ・・・！？」
「残念ながら怖い話だよ、空飛。その魔物は、人の姿をした魔物なんだ。」

「「人の姿をした魔物！？」」

琥珀の言葉に、思わず声を合わせる星影と空飛。

「そう。宮中にはね、権力や金銀財宝が好きな魔物が多い。己だけが幸せになるためなら、どんな手段もいとわない魔物がいる。邪魔だと思えば、躊躇なく、にくい相手を謀殺・毒殺・罠にかけて殺す・・・ということをする魔物がいるということだよ。」
「要は、欲深い人間に気をつけろってことだろう？」
「欲深いだけではない。身分あるものの自尊心を傷つけないことだ。」
「今の今上は、姉である平陽公主はもちろん、同族の女性を大変大事にしている。・・・いろいろと恩があるからね・・・。それゆえ、彼女達に対しては、とてもお心を砕かれる。」
「そうなの・・・？」

昼間のことを思い出し問いかける星影。

「だから気をつけた方がいいと言ってるんだよ、林山。」
「え？」
「・・・気をつけた方がいい。そのうち、謀殺されるかもしれな

いぞ。」
「謀殺？」
「林山が！？」

言われた本人よりも、真っ青な顔になる空飛。

「い、嫌です！林山が、林山が、殺されるなんて――――――」
「こらこら空飛！勝手に人を殺さない。」
「なにをのんきなことを言ってるんだい？人事じゃないんだぞ、林山？」
「だって謀殺って、卑劣な奴がすることだろう？私が見た限り・・・平陽公主様は、癖のある性格のお方だが、そういう分類には入らない。」
「なにを馬鹿な・・・。」
「ああ、私は馬鹿だ。馬鹿だけどわかる。あの方は、皇族であることに誇りを持っていた。だから、影でこそこそするよりも、皇族として堂々と相手を負かすことを望まれる性質だ。間違っても、刺客を放ったり、毒殺なんかはしないだろう？」
「林山・・・。」
「それに、私に何かあったら、空飛が悲しむだろう？」
「林山！？」
「可愛い空飛を残して、先にくたばったりはしないよ。ねぇ、空飛い～？」

そう言うと、驚いた表情の空飛の頬を両手で挟む星影。そして、ウリウリ撫ではじめた。

「り、林山！？」
「空飛は、す～ぐ泣くんだよねぇ？」
「ひどい！馬鹿にしてるんですか！？」

「褒めてるんだよ。空飛は優しいから、私のことを心配してくれる。怒って出迎えたのだって、私のことが気になったからだろう？」
「林山・・・！」

少しだけ酒が入ったこともあり、からかい混じりで相手を抱き寄せる星影。

「い、いけませんよ！このようなことは・・・！」

真っ赤な顔で抵抗する空飛。

「いいじゃん。友なんだし？」
「いけませんよ！あなたは、今上の大事な方・・・！私相手に戯れ、それで今上の怒りに触れたら、私は申し訳が・・・！」
「なにそれ？」
「そうでしょう！？だから・・・その、あまり、くっつきすぎるのは・・・だから、本当は、一緒に杯を交わすのも・・・。」
「・・・まさかと思うけど、そういう理由で、距離を置こうとしてたわけ？」
「っ！？」

図星かよ！！

真っ赤な顔で黙り込む相手に、頭痛を覚える星影。
なんであんな変態のために、私が友情を失わなければならないのだろう。

「あのね、空飛・・・。」

少しだけ声を落としながら星影は言った。

「確かに私は、陛下によくして頂いている。だから、その恩には報いようとは思っている。でもね、」
「・・・でも？」
「そのために、空飛を失うなら、私は陛下に嫌われていい。」
「林山！？」
「それだけ私は、空飛が大事だよ。」

にっこりと笑うと、ギュッと空飛を抱きしめる。

（・・・まぁ実際、陛下にあるのは、『恩』じゃなくて『怨』だけどね。）

可愛い妹を奪いやがったから。

星蓮を奪い返すために宮中に来た。
だが、その足取りは依然としてつかめない。

（早くしないと、厳師匠が忠告した一ヶ月が来てしまう。）

あの子はどうしているのだろう。
泣いているか嘆いているか。
林山とのことを、あきらめてはいないだろう。
間違っても、死を選んでいないことを祈るだけ。

（こうやって、星蓮を抱ける日は来るのだろうか・・・。）

らしくもない感傷に浸りながら、空飛を抱く力を強める。
そして、その頭をなでたり、時折、ほお擦りしてみたりした。
妹にするように。

「林山・・・！？」

「・・・大好きだよ。」

――――――――――星蓮。

私の可愛い妹。

空想の世界へと旅立った星影。

そんな彼女を現実のせいに引き戻したのは、言わずと知れた悪友だった。

「――――――そこまで。」

「痛て。」

書簡で軽く頭をたたかれる。

その衝撃で、われに返る星影。

「な、なにし――――！？」

「――――――なにしているんだい、君は？」

指差しながら琥珀が問う。その指の先を見れば、赤面したまま硬直する空飛がいた。

「どうした!?空飛!?」

真っ赤じゃないか!?と、叫べば、隣にいた冷静な友が告げる。

「君が抱きしめたからだろう?」

「え?」

「ち、違いますよ!呼吸が苦しくて、真っ赤になっただけです!」

琥珀の言葉に、怒りながら返事をする空飛。

「誤解しないでくださいね!林山!!」

「あ、ああ・・・・。」

そう言い放つ空飛に、意味がわからないながらも、自分が悪かったのかと思う星影。

「とにかく、気をつけた方がいいよ。僕からの忠告はそこまでだ。」

苦笑いしながら言うと、空になった杯に飲み物を注ぐ琥珀。

「わかったよ。忠告ありがとう、琥珀・・・・。」

(心配しなくても、そこらの馬鹿に寝首をかかれるほど、私は弱くない。)

そんなことを思いながら、杯に残る飲み物に口を運んだ時だった。

（――――――――なにこれ！？）

感じたことの無い味が、口に広がる。

（この味！？）

考えるより先に、彼女は叫んだ。

「琥珀！空飛！！飲むな！！」

「え？」

「林山！？」

「ぶぅどうぉしゅヴォ・・・、吐ぁき、だっ――――――――！？」

舌が回らない！？

声を出そうと、口を動かした時、胃の中から何かがあがってきた。

「うっ！？」

「林山っ！？」

「どうした！？」

「うぇええ――――――――！！」

自分が吐いたのだとわかったのは、床に広がる吐しゃ物を見た時。

「だ、大丈夫ですか！？酔ったんですか・・・・！？」

（違う！）

そんな生易しいものじゃない！

これは――――――――――――！！

（ヤバイ！！）

思うよりも早く、彼女の体は動いていた。
ふらつく体で、部屋に飾ってあった花瓶を手に取る。
壷の花を放り出すと、中にあった水を一気に飲んだ。

「林山！？」
「なにを――――――――！？」

驚く二人の前で、花瓶の水を飲み干す。

「林山っ！？」
「おい！？」

口の中に、草花独特のにおいが広がる。
その臭いに誘われ、星影は再びもどした。

「ゲェ！ゲェエ・・・・！！」

花瓶の中に吐き出す。

「林山！？林山っ！！」

何度も名前を呼びながら、星影の背をさする空飛。

「何を考えてるんですか、林山！？悪酔いにしては、性質が悪すぎますよ！？」
「ウェェ・・！！ェエエエ・・・！」
「林山、しっかりして！林山！！」

普通ではない、友の行動と様子に、空飛の顔からは血の気が引いていった。

「ゲェ！ヘェ、ェエエ・・・！！」
「ちょっと、林山・・・！？どうしたの！？なにか悪いものでも食べたの！？」

花瓶の中に向かって吐く友から、返事は返ってこなかった。
もどす声だけが部屋に響く。
懸命に介抱する空飛に対して、琥珀はなぜか部屋の鍵を閉める。
その音は、空飛の耳にも届いた。

「琥珀！？何してるんですか！？」
「空飛！林山から離れるな！」
「それはわかっていますよ！私の質問に答えてください！部屋に鍵なんかかけたら、お医者様を呼べないでしょう！？」
「いいから！林山を見ているんだ！」
「琥珀！？なんでそんな――――――」
「ウゲエェ――――――！！」

意味がわからず、問おうとした空飛。
しかし、再び星影が吐いたことで、彼の気持ちは親友へと移った。

「ゲェ！ゲェ！！」
「林山！しっかりして！林山！」
「ウッ・・・グゥウゥ・・・！」
「まさか――――――私が用意した干した果物が傷んでたんじゃ・・・・！？」

先ほどまで、三人で食べていたつまみに目をやる空飛。

調べようと振り返った彼の瞳に、もう一人の親友の姿が映った。

「・・・君がつまみとして用意した干した果物に、問題はない・・・・。」

「琥珀!?」

臭いをかいだり、確かめるように少しだけかじりながら答える琥珀。

「あなたそれ・・・わかるんですか!?痛んでるかどうかが!?」

「医術の心得があると言ったじゃないか?いいから、君は林山を――――」

そう言った琥珀の語尾がかき消された。

部屋中に響く、嗚咽のような声によって。

「ウェ!うっ・・・ゲェエ・・・!」

「林山!!」

「う〜うぅ〜うっ――――――・・・・!?」

「ああ!?林山!どうして!?なんで!?なにがあたったの!?」

「オェェエエ!!」

「しっかり!?なんで!?何が起こってるの、林山!?」

「ぅぅうう――――――・・・・!!」

(やられた!)

吐きながら星影は思った。

自分の症状は、空飛が言うような食あたりなどではない。

腐ったものや、痛みかけたものなど食べていない。

風邪などの病気による症状ではない。

原因はともかく、この症状は身に覚えがあった。

間違いない・・・！！

（あの味は・・・・昔厳師匠から教えてもらった――――――！）

喉を押さえていた手を離すと、それを自分の口へと突っ込む星影。

「林山！？」

星影の行動が理解できず、そんな彼女の背にすがりつく空飛。

「オッ・・・エェエエ・・・・・！！」

（――――――――――――――――――毒だ！！）

吐しゃ物が喉を通るたびに、喉に焼けるような痛みが走る。
両目は熱くなり、雫がたまり始めた。
ひどい頭痛とめまいが、星影の視界を侵食する。
それでも――――――――

「くっ・・・！」
「林山！！？」

己の手を口に入れる。
右手か左手かわからない手を、喉の奥に突っ込む。

「うっ・・・！？――――――ぇえぇえぇ・・・！！」

吐き続けた。

「やめて林山！無理やりそんな――――――・・・無茶をしないでぇ！！」

空飛が泣きながらとめても、やめなかった。

「ゲェ！ウゲェ！ェエエ・・・！！」

どんなことをしてでも吐いた。
吐き続けることこそ、己の命を守る唯一の方法だったから――――

「まさか――――――――――・・・毒!?」

星影の様子に、空飛もようやく状況を理解する。

「琥珀!まさか林山は――――――――!?」

「――――――やられた。」

空飛の問いに、琥珀は短く答えた。

見れば、星影の使っていた杯の口の辺りをシゲシゲと観察していた。

「本当に今日は厄日だね、林山・・・!?」

そう言うと、杯を持ったまま、星影に近づく琥珀。

「よかった!だいぶ吐いたようだね。」

「こ、琥珀!林山は――――!?林山は――――!!?」

真っ青な顔で完全に取り乱す空飛。

「まさか毒を!?毒を盛られたの!?ねぇ!」

「空飛。」

「ねぇ!!林山は大丈夫なの!?ねぇ!ねぇぇぇ!!」

「落ち着いて、空飛!・・・大丈夫だよ。これを飲ませれば――――」

そう言ってなだめると、懐から紙の包みと水の入った小瓶を取り出

す。

「・・・っ・・・い？」

なに？

そう聞いたが、言葉にはならなかった。

全身がしびれる。

体の力が抜けていく。

星影の持っていた花瓶が、ゴトリと床に鎮座する。

「林山！？」

（ああ・・・よかった。割らなくて。割れたら、掃除が大変だ。）

ただでさえ、床に吐いちゃったのに。

「林山っ！？」

「林山！！」

遠くで、自分に呼びかける友がいる。

答えようとしたが、ひどい眠気に襲われ、答えることができない。

（嘘でしょう――――――林山？）

私、ここで死ぬの？
ここで死んで、服の下を探られたら、女だってバレちゃう！
妹を助ける前に、自滅してどうするのよ！？

（星蓮――――――――・・・・・・！！）

とても体が重くて動けなかった。
彼女の耳に届いていた声も、聞こえなくなった。
程なくして、その視界も遮断された。

意識が薄らぐ星影の脳裏には、藍田での楽しかった記憶がかけめぐるのだった。

第七十五話　飲みすぎじゃなかった（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

星影がやられました。

本編とは関係ないのですが、『クレヨンしんちゃん』でお馴染みの『臼井儀人』先生＝本名：臼井義人先生（５１）が、日帰りで『荒船山』に登山に出かけて行方不明になり、１９日に『荒船山』の絶壁「艫岩（ともいわ）」の頂上にある展望台下、１２０メートルの場所で遺体となって発見されました。
本日、歯型などから、『臼井儀人』先生本人であると確認が取れました。
死因は見ることができなかったのでわかりませんが、全身骨折・顔面損傷が激しかったことから転落死で間違いありません。

実は竜門、『クレしん』の大ファンです。
今回のことは、一ファンとしてあまりにも衝撃が大きく、深い悲しみにくれております・・・。

今はひたすら、『臼井儀人』先生のご冥福を、心からお祈りいたします・・・（合掌）！！

・・・少々・・・、心のダメージが大きいので、しばらくは喪に服するつもりです・・・。

なので、申し訳ありませんが、『臼井儀人』先生の四十九日が終わ

るまで『破天荒列伝』の更新をストップいたします。

わがままな作者だと笑ったやってください。
更新ストップをするほどの、それを報告するほどの作品を書いてるのかこいつ?と、笑ってやってください。
ただ、悲しくてなにも書けないという点だけは、わかってやってください。
竜門のわがままに付き合っていただければ幸いです。
身勝手ではございますが、ご了承ください（土下座）

それでは、失礼いたします。

第七十六話　危険区域へ

後宮・宮中における宦官の登場には、古い歴史がある。
その誕生には諸説あり、『敵の捕虜を奴隷とし、その血を残さないために行われた。』というのが無難な見解であろう。
しかし実際は、女人のみの場所に、皇帝以外の男の存在を否定するためでもあった。
例えば始皇帝の母は、宦官の一人と通じてその間に子をなし、始皇帝の怒りを買い、愛人とその子は処刑された。
これは単に、母を取られた始皇帝の怒りによって起こされたものではない。
自分のみが性活動が出来る場所で、自分以外の男が性活動を行ったことへの見せしめでもあった。それが、母の恋人であろうとも容赦しないという皇帝としての威厳だったように思える。
ゆえに後宮では、性の混乱を防ぐために、限られた身内以外は「男性の象徴を除去する」という約束でその存在を許されたのである。
こうして、皇帝以外の男子が、後宮に入ることは出来なくなったのだ。

「・・・・・そう習ったはずだったんだけどな。」

高価な荷物を抱えながら、小さく青年はつぶやく。
彼の名は安林山。
恋人を追って、都までやってきた武術の心得のある良識ある男子であった。

「こちらが、その品でございます。」
「・・・ほぉ。これはまた、なかなか・・・！」

彼の目の前では、きっちりと正装した男と身分の高そうな宦官が小声で話していた。

「よい品であるな・・・？」
「それはもう、鐘様にもお楽しみいただける品物にございます。・・・いかがでしょう？」
「こやつ！わしに売りつけるつもりか～？」
「ご冗談を！私が申したいのは、いつもご贔屓にしていただいております鐘様への、ほんのご挨拶代わりにと・・・！」

そう言ってにやりと笑うと、恭しく小さな木箱を宦官の袖に入れる男。

「温烈よりの、ささやかなお気持ちと思っていただければ嬉しゅうございます。」

（温『烈』ね・・・。）

大嫌いな宦官に媚びる温烈こと凌義烈の姿に、林山は不快感を覚える。
それと同時に、改めてこの男のすごさを実感していたのだ。
『百面夜叉』の異名を持つ侠客の大親分。凌義烈は、林山を星蓮に会わせるという名目で、花街へと連れ出した。そこで仲間の一人だという鳳玉蘭と対面させられ、熱烈な歓迎を受けた林山。
紹介が終わるなり、義烈の用意していた服に着替えさせられ、店を出た足で向かった先というのが――――

「後宮では、なにかと我々は、疑われやすうございますゆえ。」

男子禁制の後宮だった。

・　・　・　・

「これに着替えろ。」

そう言って義烈が放り投げたのは、商人の服だった。

「・・・これにか？」

見慣れた衣装に、林山は相手を目だけで見る。

「そうだ。お前には商人見習いって役をしてもらう。」

「商人見習い？」

「俺は商人役をやる。それも、お前の上司という設定だ。」

「はぁあ！？」

なんのために！？

そう問おうとした時、義烈は部屋の窓を開けた。そこから見える景色の一点指差しながら告げた。

「あそこに行くためにゃ、多少の変装はしなきゃならねぇからな。」

彼が指差した先は、都で一番の栄華と権力を誇る場所。

「きゅ、宮中！？」

指された一点を見て、思わず声をあげる林山。
同時に、相手の考えていることを察した。

「へぇ～わかるのか？ここからじゃ、結構離れてるんだけどな～」
「茶化すな！お前まさかー・・・・俺と星・・妹を会わせると言ったが・・・・！？」
「そうさ。」
林山の問いに臆すことなく、無邪気な笑みで彼は答えた。

「助けるための下見なんだから、あそこに俺らが入るのは当然だろう？」

「は、入るだと！？」

ニヤリと口の端を上げながら言う侠客。これには、声を上げずに入られなかった。

「まさか、たった三人で宮中に行くというのか！？」
「いいや。俺の部下も連れて行く。」

「あなたの部下をか？」
「ああ、二人ほど連れて行くから心配ない。」
「てっ！？二人だけかよ！？俺達を合わせても五人じゃないか！？」
「あら、嬉しい。ちゃ～んと、私も頭数にいいれてくれてるのね？」
「ちょ！？そこ喜ぶところですか！？」
「そうだぞ、玉蘭！浮かれてるんじゃねぇ。」
「だって・・・今までの人は、私を仲間はずれにしてばかりだったから。」
「今までって玉蘭さん――――！？・・・もしかして以前も、宮中に忍び込んだことがあるのですか・・・！？」
「勘違いするな、星影。コソコソ忍び込んだりしたら、捕まっちまうだろう？」

林山の偽名を呼びながら義烈は朗らかに言う。

「堂々と胸張って、正面から入ってたんだ。」
「そっちの方が危ないだろう！？」

あまりにも常識のない答えに、非難の上げる林山。

「黙って聞いていれば、なんて無茶苦茶なことを言うんだ！あんたらは！？宮中がどういう場所か知らないのか！？」

「「皇帝以外の男子禁制の女性の聖地。」」

「わかっていて正面から入るって言うのか！？」

声を合わせて言う男女に、林山は額に青筋を浮かべる。

行く場所が、気軽に入れる場所なら、ここまで怒ることもない。
気軽に入れない場所だったら、当の昔に自分も、親友と共に入っている。

（それができないからこそ俺は、親友兼義理の姉を身代わりにして、潜入してもらってるんだぞ！？）

それを正面から堂々と簡単に、入れるわけないじゃないか！

（できるわけがない！！）

「なんでもかんでも否定することないだろう？」
「否定しかできないことだろう！？」
「そう熱くなるなよ、星影。」

気炎をあげる林山に対し、なだめるように語り掛ける義烈。

「心配しなくても、捕まるようなヘマはしねぇさ。」
「そういう問題か！？」
「結論から言やぁそうだろう？お前さんが一番危惧してる危険ってのはよ？捕まっちまえば、妹は助けらんねぇ。それどころか、テメーの命もなくなる。それが心配なんだろう？」
「わかっているなら、何故――――！？」
「おお、わかってるとも！つまり俺が言いてぇのはな、星影・・・本当にダメかどうかは、俺の話を最後まで聞いてから決めても、遅くはねぇんじゃねぇかってことだよ。」
「むぅ・・・。」

言われてみれば、義烈の言う通りだった。自分は、話の最初のとこ

ろしか、まだ聞かされていない。『正面から入る』としか聞かされていない。

「お前さんの否定だけの答えも、当然って言やぁ当然の反応だ。けど、焦って機会をふいにするのもどうかと思うぜ？」

「・・・機会だと？」

「お前が妹に会えるって機会さ。俺はその手助けをする立場だぜ？わざわざ、お前を危険にさらす方法を紹介したりするか？」

「それは――――」

「安全な方法しか、させねぇよ。場所が場所だからな？」

ニヤリと笑うと、数歩林山に近づきながら言った。

「まぁ・・・ある程度のお膳立てはするが、会えるかどうかはお前さん次第。そのためにも星影――――お前にもきちんと協力してもらうぜ？」

「・・・何をしろと言うんだ？」

「簡単だ。俺の書いた筋書き通りに動けばいいのさ、商人見習い。」

「しょ、商人見習い～！？」

「・・・そうだ。俺は宮中でも数少ない、出入りを許されている大商人・『恩烈』だ。そしてお前は、俺の元で、一人前の商人になるための修業をしている商人見習いの『華雲』だ。」

「か、かうん！？」

「お前の名前だ！本名の劉星影を名乗るわけにもいかねぇだろう？偽名ってことよ。」

（すでに、劉星影という偽名を使っているのだが・・・）

ニヤニヤする相手に、本名を隠している青年は内心冷や冷やした。

「そういうわけだから、今からお前は『華雲（かうん）』だ。お前も俺のことは『恩烈様』と呼べ。そして、俺を主人として扱え。」
「主人って・・・。」
「主人である俺には、お前以外に小間使い役が二人いる。」
「小間使い二人？」
「それは俺の部下がする。お前が下手な芝居をしても、そいつらが上手くやってくれるから、変に緊張すんなよ。以上！」
「え！？い、以上って・・・！？」

（まさか、それで説明は終わりなのか・・・？）

聞いても聞かなくても大差ないような話に、戸惑う林山。

「待ってくれ、義烈！いくら出入りを許されている商人だと名乗っても、場所が場所ならば、俺たち自身が隅々まで調べられるんじゃ――――！？」
「大丈夫よ。」

そう言ったのは、悩ましい瞳の鳳玉蘭だった。

「私達は、宮中御用達の『夜の大商人・温烈様一行』という肩書きを使って、正面から堂々と入ることができるのだから。」
「・・・はぃ？」

（夜の大商人って・・・どんな肩書きだよ？）

美女が口にした言葉に、眉間にしわを寄せて相手を見る。すると玉蘭は、クスクス笑いながら林山を見て、義烈へと視線を移した。それを受け、苦笑しながら義烈がまとめた。

「まぁ、意味は後々わかるさ。今は考えるんじゃなくて、実行するのみだ。心配すんな！今までしくじったことはねぇからよ。」
「なっ・・・！？なんて安易なことを言ってるんだ！？今までが大丈夫だったから、これからも大丈夫なんてことはな――――――！？」
「――――大きな声はだめよ、ボウヤ？」

林山の口に人差し指を当てながら片目を閉じる美女。突然の行為に驚きつつも、少しだけ頬を染め、声を潜めながら林山は反論を続けた。

「ボ、ボウヤはやめてください・・・！絶対大丈夫という保証はないでしょう？それにそんなことをすれば、俺達全員、法を犯した罪で処刑されてしまいますよ？」
「何度も言ってるだろう？斬り殺されるようなヘマはしねぇって！」
「しかし義烈！」
「心配しなくても今日は下見だけだ、華雲。」
「そうよ、華雲。戦いなんて乱暴なことはしないから。」
「誰が華雲だっ！？あんたら、俺をからかっているのか！？」
「ひどいわね。私達、大真面目なんだから。」

綺麗に化粧された顔を近づけながら玉蘭は言った。

「ダメよ、ボウヤ。真面目に建前なんか気にしてちゃぁ。細か過ぎると、世の中渡って行けないわよ？」
「建前って！」
「確かに後宮は男子禁制よ。でもね、それと対になっているのが宮中の女子禁制よ。」
「だからなんです？」
「宮中に女性は出入りできないと思われてるけど、そうでもないのよ。」

「はあ？」
「一般女性・・・というよりも、私のような同業者は、着替えてしょっちゅう出入りしてるんだから。」
「き、着替える・・・？」
「妓女で遊びたい殿方や元・殿方が、私達を男の姿にして連れ込んでいるのよ・・・！」
「・・・・・・・・・・・・・はい？」

玉蘭の言葉で林山の目が点になる。

「・・・・・・・・・遊ぶ・・・・・？」
「だから後宮でも、逆の場合もあるのよ。男が女の姿になることも・・・！」

妓女である鳳玉蘭の言葉に思わず聞き返せば、艶のある笑みを浮かべながら笑う彼女。

「だから、あなたには女装してもらった方がいいかもしれないわね？」
「ぇえぇ！？」
「本気にすんな、馬～鹿！」

真っ赤になる林山の後頭部を、軽くはたきながら義烈は言う。

「馬鹿アマ！つまんねぇ冗談ばっかり言いやがると、どこぞの貴族の妾にすんぞ！」
「それなら、できるだけお金を持ってる人を紹介してね。それが皇族ならなおさらいいわ。」
「夢見てんじゃねぇぞ、物欲女！星影をからかうんじゃねぇ！」
「だって・・・可愛かったから。」

小さく笑い続ける美女に、林山はどうしていいかわからす、顔を染めるしかなかった。
星影とも星蓮とも、それまで出会った女性達とも、まったく違った性質を持つ玉蘭にどう対応していいかわからないというのが正直なところ。
そんな林山の思いを察した義烈は、玉蘭を睨みながらぶっきらぼうに言った。

「お前な、無駄口たたく間には、下見に備えてその口を休ませとけ！無駄遣いすんじゃねぇ！」
「まぁ、怖い怖い。」
「星影もだ！玉蘭の冗談を真に受けんじゃねぇよ！」
「え・・！？あ、なんだ・・・。冗談か・・・！」
「たりめぇだろ～が？」

安堵する林山に、思わず苦笑いする義烈。

「お前に女装なんかさせねぇよ。星影が女顔で、そういう体だったから考えたが、そりゃ無理だ！こんなに骨格のしっかりした女は後宮じゃ目立つ。だから、大商人ご一行をするんだよ！」
「そ、そうなのか・・・？」
「そうだよ、ボケ！お前はちと、真面目すぎるんだ。」

呆れた声でそう言うと、林山の首に腕を回す義烈。

「いいか。こういう女狐の話は、話半分で聞いとけ。純な男で遊ぶのが趣味な女だからよ。」
「あら。私が狐なら、あなたも狐でしょう？同じ穴のムジナがなにを言うのやら・・・。」

「いいから、オメーは自分の仕事のことだけ考えてろ！何度も言わせんなっ！手はず通りにしろよ！自分の役割は、わかってるだろうな・・・？」
「もちろん。兵達を引き付ける役でしょう？」
「兵を引き付けるって・・・あなたが！？」
「ええ。こう見えても私、結構上手いのよ・・・？」

クスクスと声を漏らしながら、睨むような流し目をしながら楽しそうに林山に告げる。

「華雲様こそ、恩烈様について、よく学ばれてくださいませ。」
「え？」
「そういうことだ。商人見習いとして、私に恥をかかせるなよ・・・華雲？」
「え！？」

それまでとは一変した、安定した綺麗な言葉遣いになる義烈。

（こいつら！もう役柄に入ってるのか！？）

そんな彼の内心を見透かすように、ニヤリと笑いかける侠客の大親分。そして最後にもう一度だけ、凌義烈として口を開いた。

「大事な愛妹を取り戻すためだ。一度しか言わねぇから覚えろよ・・・？」
「あ、ああ！もちろんだ・・・！」

凄みを利かせながら言う相手に、負けじと思わず返事をした林山。こうして、まったくの打ち合わせがない、行き当たりばったりの状態で大商人・温烈と華雲として後宮へと入ることになった安林山。

義烈は大商人の温烈として。林山は見習い商人の華雲として。
そして玉蘭は――――

「こりゃまた、美人の寵童になっちまったなぁ～玉蘭？」
「ええ、その手のお偉い様に、惚れられないように気をつけるわ。」

からかう侠客を茶化す妓女。そこには、控えめな書生の衣装に身を包んだ、男装姿も絵になる玉蘭の姿があった。下ろしていた髪を上で一つにまとめ、化粧などの女性らしい装飾品をはずしていたが、それでもその美しさはかすんでいなかった。からかう侠客に対し、書生に化けた美女は、悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。

「それに温烈様、私の名前は玉山なので、間違えないようにしてくださいね？」
「おお！これは失敬！わかっておるぞ、書生の玉山よ。そうだろう、雲華？」
「え！？・・・ええ。」

（美人なのは、事実だし。）

二人のやり取りを聞きながら、星蓮とは違った美しさを持つ大人の女性に林山は正直な感想を漏らすのだった。

・　・　・

こうして、義烈や玉蘭、義烈の部下二名と共に宮中へ向かった林山。本当に、お抱え商人として宮中に入れるか心配だったが、それは杞

憂という形で終わった。

「よし、通れ。」

義烈が門番に手形のようなものを見せると、彼らはあっさりと通してくれた。
手形というよりも、『温烈』という名によって。

「温烈・・・だと!?」
「はい、温烈でございます。」
「もしや、『あの方』からお呼びが・・・!?」
「はい。あなた様がおっしゃる『あの方』なるお方からのお呼びがかかり、参上いたしました次第です。」
「これは・・・失礼した!どうぞ、お通りくだされ。」
「ありがとうございます。お役目ご苦労様でございます。」

これで、厳しい表情だった門番の表情が緩んだ。
緩むというよりもへつらうような笑い・・・愛想笑いだった。
こちらの様子を伺うように優しい言葉をかけてから、その道をあけてくれたのだ。
その後も、義烈が『温烈』と名乗れば、すぐに門番は通してくれた。
面白いように通ることが出来たのである。
そして――――

「おお!今宵も来たか、温烈!?」
「はい。ご拝顔麗しいようで、鐘様。」

その途中で、『鐘竹民(しょうちくみん)』に出会ったのだ。
義烈の話では、この宦官は、宦官の中でも大宦官になるらしく、とにかく金などの物欲に目がないらしい。

だから、品物と金さえ与えれば、検索などは一切しないらしい。
もちろん、恭しくこびへつらえば、なお更良いそうだ。

（・・・やはり宦官は、薄汚い・・・！）

婚約者のためとは言え、義烈と共に宦官のご機嫌取りをする自分が嫌だった。
嫌だったが、愛する人を思えば、それも我慢できたし、我慢した。

（すべては、星蓮のためだ・・・・！）

そんな一途な想いを胸に、彼は無言で義烈に従っていたのだ。
そして現在に至るのである。

「私どもと致しましては、無害であるとご理解いただければ、それ以上は望みませぬ。」
「フッフッ！お前達が善良な承認であることは、この鐘竹民が保障しよう。」
「ありがとうございます。」
「礼などよい！それよりも――――玉山。」

義烈や自分の後ろに控えていた美人へと視線を移しながら、肥えた宦官は言った。

「玉山、今日も可愛いのぉ～？」
「おやめくださいませ、竹民様。私の主人の前で、そのような――・・・・」
「そういうお前こそ、わしを字で呼んでいるではないかぁ～？」
「あっ！やだ・・・どうしよぅ・・・」
「いかんのぉ～お互い！グッフッフッ！」

「竹民様ったら・・・！」

鐘竹民の指摘に、男装の麗人は恥ずかしそうに袖で顔を隠した。それをニヤニヤしながら、宦官は見つめる。

「どうじゃ、温烈？阿玉を――――！」

「仕事中でございますよ、竹民様。」

宦官の言葉を遮るように玉蘭は言う。

「阿玉～・・・！」

「お察しくださいませ、竹民様。ねぇ・・・？」

わかりやすい色目を使う書生に、相手もそれ以上は言わなかった。

「ご心配なく、鐘様。ちゃんとのちほど・・・！」

「むぅ・・・そうか。わかった。」

不機嫌そうに言うと、そっぽを向く宦官。その姿に林山は変な気持ちになった。

（なんだ、この男！？宦官の癖に、女性を口説くような真似をするなんて・・・！）

そう考えていた林山の鼻先を、上品な蘭の香りがくすぐった。

（玉蘭さん！？）

見れば、玉蘭が自分の横を通り過ぎ、鐘竹民の真横に陣取っていた。

「そんなお顔をなさらないでくださいまし、ねぇ？」

すねるような口調で言いながら、そのよく肥えた腹の上を人差し指でくるくると円を書きながら撫でていた。

「え・・・？」

いやいやいや！玉蘭さん、それってちょっと・・・！？

（色仕掛けじゃないですか――――――――！？）

「まったく・・・お前という奴は・・・！」

困った奴だと言わんばかり、その手を両手で何度もさする鐘竹民。

それで機嫌を直してしまった。そして、そうなるのを見届けてから義烈は口を開いたのだ。

「それでは、そろそろいかねばなりませぬので・・・！」

「うんうん。励めよ！」

デレデレと玉蘭を見つめながら言う宦官。

そんな相手に、恭しく頭を下げる義烈。それに合わせて、林山達も頭を下げた。

そして、その宦官の横を通り過ぎる際、再び義烈は相手の袖に何かを入れた。

「日が昇る前に戻るように。いつも通りにすればよいからな！」

後ろから、上機嫌な男の声を受けながら、林山は確信した。

（・・・・・袖の下を使った。それも二度も。）

不正行為を目の当たりにし、義憤が沸き起こる青年。
賄賂を使うことは、珍しいことではないが、やはり納得ができない行為ではあった。
武術の師である厳師匠でさえ、『賄賂』という行いには顔をしかめていた。

“まあ、相手のお節介から逃れるのには、最上の策といえば最上の策だがな・・・。”

完全否定はしないにせよ、歯切れが悪そうに語っていた。

（・・・今の現状を思えば、金目のものを渡すことで余計な詮索をされないのなら、賄賂という行為を納得するしかない・・・か。とにかく、これで第一関門は――）

「第一関門は突破したな？」

林山の心の声に合わせるように、いつもの口調でいつもよりも小さめの声で温烈こと凌義烈は言った。

「賄賂は楽でいいな～？特に今回は、テメーの懐を痛めてないからなぁ？」
「・・・私がご用意したものですからね、温烈様？」
「それを使う段取りをしたのは私だぞ、華雲？どうだ、難なく入ることができただろう？」
「ああ・・・信じられないよ。」

嫌味で言った商人見習い役の言葉を、主人らしい口調で返す男。
それを林山は、ぶっきらぼうに言い返した。

「肩書き一つで、こんなに簡単に入れるなんて・・・。」
「言っただろう?えり好みしなけりゃ、入る方法はたくさんあるんだよ。――――宮中お抱え商人っていう肩書きを使えばな?」

歩みを緩め、自分と肩を合わせるように歩きなおしながら義烈は目を細めながら笑う。
義烈の言葉は、侠客の大親分の作戦は成功した。
そして思い知らされた。

（こんなに簡単に、宮中に入れるなんて・・・・！）

えり好みというわけではないが、身代わり以外にも、宮中に入り込む方法はあった。
宮中のお抱え商人に成りすますというのも、一応は考えていた。
しかし、あの時の自分達にそれは出来なかった。
いくら大商家と言っても、宮中で取引するほど家柄でもなければ、そういった「つて」もない。
ましてや、両家の両親の反対を押し切って都に来ていたのだ。
下手なことをすれば、『家の恥』として無理やり連れ戻されるだろう。

（・・・思いつかなかったわけじゃないが、実行できる状況ではなかったんだ・・・。）

本家本元の大商人の息子である自分が、商人見習いを演じるのはたやすい。
それは星影も同じである。

この方法を使えば、星影に自分の身代わりで後宮に行ってもらう必要もなかったかもしれない。
大事な友達を身代わりにするという危険な方法はとらなかった。
実行可能であればそうしていた。

（でも――――――それはできなかった。）

星蓮の正確な居場所がわかっていればいいが、中の様子がまったくわからない場所へ行くのだ。
調べようにも調べられない場所へ乗り込もうと思った時、一か八かの短期的な作戦で星蓮を奪回するなどできない。
時間はかかるが、長期的な作戦で取り戻すのが無難だと結論付けたのである。
星影が自分と入れ替わろうと提案したのは、その場の思い付きで間違いない。
思い付きではあるが、最も確実な方法であったのは確かである。
なによりも、たった二人で行える策といえば、入れ替わり以外はなかったのだ。
それしか方法がなかったから、そうしたまでなのである。

（義烈ともっと早く会うことができていたら、星影に俺の身代わりなんてさせなかったんだが・・・。）

「運命とは、つくづく皮肉だ。」
「皮肉でもなんでもいいさ。これが、俺の商売だからよ。」

思わず口にした林山の言葉、軽くせせら笑いながら義烈が答える。

「覚えておきなさい、華雲。宮中には、一般人の出入りは禁止されてはいるが、限られた一部の人間・・・そう、我々のような選ば

れた商人は立ち入りを許可されているのですよ。」

周囲に悟られぬよう、商人らしい口調で語る大侠客。

「ぎ・・・温烈、様。」

「お前も、高貴な方々に重宝されるような商人を目指すのなら、心づけぐらいは心得ておきなさい。」

「はぁ・・・」

なんちゃって商人の言葉に、遠目で頷く林山。

（父上はどうしていたのだろう・・・。）

大商家の跡取りとして、今までさまざまな取引を任されてきた。その中で一つだけ、いまだにやったことのない仕事があった。それが、賄賂を扱うというものであった。

なんとなくではあったが、安家でも商売上、賄賂は使っていたと思う。

しかし林山の父は、息子に賄賂の使いかを教えてはいなかった。

むしろ、そういう汚い仕事はさせないようにしていた節があった。

（・・・元々賄賂を好まない方だからな、父上は。）

袖の下とは、きってもきれない縁を持つ商人。

それは、星影や星蓮のところでも同じである。

言ってしまえば、賄賂は商売につきものであり、当たり前の行為でもあった。

だから、義烈の行為にいちいち目くじら立てることはない。

そんな必要はないのだが・・・。

（そうは言っても、心を込めて品物を作ってくれた者達のことを考えれば、賄賂などというものは使いたくない・・・。）

だからかもしれない。

自分がいまだに、父から賄賂を使うという仕事を任されないのは。

そんなことを考える林山の目に、一人の男の姿が映る。

「あれは・・・？」

宦官だった。

見知らぬ宦官が、こちらを見ながらやってきていた。

これまで、何人かの宦官とすれ違ったが、みな、自分達を見ることなく素通りしていた。

それがここにきてはじめて、自分達を見ながら近づいてきたのである。

さも、こちらに用があるという顔をしながら。

「・・・鐘様の側近の方ですよ。」

ひどく丁寧な声でつぶやくと、足早に自分の横から離れる義烈。

そして、先ほどのように恭しく頭を下げてからその宦官と話し始めた。

（なにを話しているんだ・・・？）

「仕事の話しでございます、華雲様。」

そう耳元でささやいたのは、書生に化けた玉蘭だった。

突然の接近に、驚いて声の主を見る林山。

そこには、かすかな明かりに照らされ、見事な陰影を作り出した綺麗な顔があった。

「――玉ら、」

「玉山です、華雲様。」

有無を言わさぬ笑みを浮かべながら微笑む美女。そして意味ありげな言葉を口にした。

「・・・そろそろ、お仕事のようですわ。どうか、あまり方にお力を入れすぎませぬように。」

「それは――――」

（星蓮に近づくということか!?）

目だけで問えば、相手は目を細めて小さく頷いた。

（会える!やっと星蓮に会えるということか!?）

胸に沸き起こる興奮を抑えようと、自分の主役の男を見る。当の本人は、宦官と二言三言交わすと、こちらを振り返りながら告げた。

「華雲、玉山、ついて来なさい。」

「え!?」

「――――はい、温烈様。」

戸惑う林山とは対照的に、即答する玉蘭。

「さぁ、華雲様。」

そして、先に進むよう林山を促したのだ。それを受けて林山も、止めていた歩みを進め始めた。

「では・・・。」

二人が動き出したのを確認すると、温烈は宦官と共に歩き出す。先頭を歩く宦官は満足げに懐に何かを入れていた。その動作に、林山は内心ムッとした。

（義烈の奴、こいつにも賄賂を渡したのか・・・。）

いつの間に?という気持ちもあったが、これ以上その行為について考えないことにした。
気にすれば気にしないし、大事な仕事の前に冷静さを失うようなことはしたくなかった。
しばらく歩くと、宦官は庭に面したある部屋の前で止まった。

「こちらでございます。」

案内された部屋は、ある程度の広さのあるよい場所だった。
高級な調度品が飾られており、つくづく、ここで宮中であると実感させられるほどの造りとなっていた。

「では、こちらでお待ちください。」

宦官は案内を済ませると、義烈にまた何か言ってからそそくさと部

屋から出て行ってしまった。
完全に立ち去ったのを確認してから、最初に動いたのは玉蘭だった。

「さぁ、急いで。」

自分達だけになると、持って来た行李から服を取り出す。
この日のために用意した黒衣の衣装。それを林山と義烈に渡しながら言った。

「ホント、あの物欲太りに誘われた時は、どうしようかとハラしたわ。」
「誘ったって!?やはりあれは――――――」
「口説いてたのさ!いやだね～スケベは。」
「ええ!?」

玉蘭の代わりに、茶化しながら義烈が答える。

「ちょ、ちょっと待ってくれ!口説くって――」

その言葉で林山は混乱した。

「あの鐘竹民という男は・・・宦官なんですよね・・・?」

「見ての通りだ。女官にでも見えたか？」
「見えるか！そうじゃなく、義烈！だって、宦官だろう・・・？宦官は――――」

「女を抱けない。」

笑いを含んだ声で玉蘭が言った。

「そう・・・一般的には、竿も玉もない宦官が、女を抱くなんてできないわ。」
「ちょ！？玉蘭さ・・！？」
「玉山です、華雲様？」

自分の過激な発言で赤面する若者に、妓女は笑みを作りながら告げる。

「いろいろ説明している間はないけど、これだけはいっておくわ。ここは、外の常識が通じない場所。外界から閉ざされた別の世界。」
「常識が通じない・・・別の世界？？」
「そうよ。割り切らなきゃダメってこと。」

そう言いながら、顔を隠すための布を差し出す。

「今夜は、あなたにとって未知の連続だと思うけど、くれぐれも平

常心と冷静さを失わないでね。何が起ころうとも。」
「玉蘭さん・・・。」
「玉山よ。私に何が起ころうとも・・・いいですね?」
にらむような目で語りかける相手に、かすかな殺気を感じる。思わず相手の顔を見れば、すでに殺伐とした気配は消えていた。
「とにかく着替えてくださいな。覗いたりしませんから。」
「・・・玉山・・・。」
「おーおー!やっと名前覚えたか?よくできましたっ!」
からかうように後ろから、義烈が林山の頭をグリグリとなでた。
「義烈・・・!?」
「まだ『温烈』だぞ?その名前は部屋を出てからな。ほら、着替えるぜ。」
そう言いながら、服を脱ぎ始める相手に、あわてて林山も腰紐を解いた。
横目で玉蘭を見れば、二人から見えない位置に移動していた。
義烈の部下は、しきりに外の様子を伺い、見張ってくれていた。
色合いの良い服から、漆黒の衣へと着替える林山と義烈。
腰に剣を下げてから、服と同じ色の布で鼻から口元を覆った。
互いの顔が隠れたところ、侠客の親分はくぐもった声で作戦について語った。
「じゃあ、後は手はず通りにするぜ。俺と星影は『月仙宮』に行く。超と袁はここに残り、周囲を巻くごまかしてくれ。」
「へい!」
「お任せください、お頭。」

「玉蘭は、いつも通り動いてくれりゃあいい。鐘のジジィも、上手くかわせよ。」
「もちろんよ。義烈こそ、ドジ踏まないで頂戴ね。」
「へっ！テメーに言い聞かせとけ！」

仲間の言葉に不適に答えると、義烈は林山に言った。

「いいか。何が起きても見ても、俺の言う通りに動けよ。妹が大事なら、今夜は俺に従え！いいなぁ・・・？」
「不本意だが、そのつもりだ。」
「テメッ！？」
「あら、よくわかってるってことじゃない？」
「一言多いんだよ、オメーは！」
「はいはい、ごめんね。せいぜい・・・・・怪我しないようにしてね、義烈？」
「・・・玉蘭こそ気をつけな。」
「星影も、無茶しちゃダメよ？」
「え！？あ、はい。大丈夫です。玉蘭さん達も、どうかご無事で。」
「フフフ・・・ありがとう。あなたの武運、祈ってるわ。」

片目を閉じながら、妖艶に言う美女。その姿に、林山はドギマギし、義烈はニヤニヤ笑う。

「おいおい。俺への対応と、ずいぶん差があるなぁ～？」
「だってこの子、スレてないもの？義烈なんて、擦り切れてるからね？」
「ホント口の減らねぇアマだな？行こうぜ、星影。」

苦笑すると、林山に声をかける義烈。

「ああ。」

こうして二人は、音を立てないように闇の広がる部屋の外へと出たのだった。

第七十六話　危険区域へ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます・・・！！

今更ではありますが、新年あけましておめでとうございます。
やっと、立ち直れました（大汗）

年を越してからのアップとなってしまいました。
おそらく今年も、マイペースで更新すると思いますが、それでも読んでいただけるという方、よろしくお付き合いしていただけると嬉しいです・・・（平伏）

小説の話として、林山・義烈・玉蘭が宮中に侵入しました。
今後の３人の行動にご期待ください。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十七話　純情な目撃者（前書き）

※一部、性的な表現がございますので、ダメな方はご遠慮ください
（土下座）

第七十七話　純情な目撃者

先に部屋を出たのは義烈だった。
彼は用心深く周囲を見渡し、安全を確認してから林山に手招きをする。
それに従い、林山も辺りを気にしながら部屋を出た。
廊下には人の姿はなかったが、遠くでかすかに七弦琴が聞こえた。

（星蓮も、七弦琴が上手かったな。）

近くに愛しい人がいるというだけで、林山の集中力は研ぎ澄まされた。

「こっちだ。」

そう告げる、廊下から降りる義烈。そしてその身を、廊下の影になっている部分へ沈めたのである。この侠客の行動に林山も続いた。
夜なので、廊下を歩いてもよさそうだがそれはできなかった。
なぜなら、暗い道を照らすため、一定間隔で明かりが廊下に配置されていた。
いくら人目に気をつけていても、自分達は黒ずくめの格好をしているわけで。
光のない場所ならともかく、光がある場所では遠くからでもわかってしまう。
なによりもここは、絶大な権力を持つ武帝の後宮である。
中国の各王朝において、宮中に女官や宦官が多いことは、それだけ皇帝に力があるということ。
宮中の人の多さは、当時の皇帝の力の有り無しを明確に示したものと言える。

漢王朝において、武帝・劉徹の頃の後宮は救助や妻の数が多かった。
依然述べたように、妻の官位の種類を増やしたのも武帝が即位してからである。
しかも、官位の数だけではなく、それを与えられる妻の数も増えていった。
現に、夜であるにもかかわらず廊下を行きかう女官や宦官が目に入った。

（一晩に数人相手にしたとしても、すべての妻と閨を過ごすことなど出来るはずがない。それほどいても、まだ新しい妻を求めるのか？）

事実、前漢に限らず、すべての王朝において、夫である皇帝と夜を共にすることはおろか、顔すら見ることなく一生を終えた美女達が何万といたといわれている。

（欲張りやがって！星蓮は返してもらうからな！昆主めっ！）

腹から湧き起こる怒りを抑えながら、義烈と共に廊下伝いを歩いていく林山。
呼吸をすることさえ気遣う林山をよそに、案内役の侠客は時折小声で話しかけてきた。

「お！あの三人いるうちの右端・・・俺の好みだ。」
「こんなところに来て、何言ってるんだよ！？」

小声でしょうもないことを言う相手に、林山は呆れるばかりだった。

（こんな場所で、よくのん気なことが言えるものだ・・・。それほど、来馴れているという事だろうか？）

そうでなければ、危機感がかけているとしか言えない。
元々、こういう性格かもしれないが、それでも心配になった。

（まぁ・・・一番の心配は義烈じゃないんだけどな。）

気がかりなのは、星蓮や星影もそうだが、違った意味で気になる奴がいた。

（郭、勇武――――！）

自分から花嫁を奪った相手であり、返さなければいけない借りのある相手。

（俺は面が割れているからな。万が一遭遇でもしたら――――）

星影にまで危害が及ぶのは間違いなかった。

「ああ、そういや言い忘れてたけど。」

考え込む林山に、何度目かになる駆る愚痴をたたく義烈。

「なんだ？」

それを小さく聞き返す青年。

「郭勇武は今夜、俺らがいた花街の妓楼で大宴会してるから、宮中にはいないぜ。」

「なに！？」

のほほんと言う義烈に、思わず林山は相手を見た。

「い、いないって!?宮中に今いないのか!?」

「声がでけーよ。落ち着きな。」

新たな新情報に、聞き逃さまいとくらいつく林山。顔色を変える彼を楽しそうに見ながら侠客は答えた。

「近々、あいつの身内の娘が陛下の妻として入廷するらしい。それの前祝らしいぜ。」

「身内が?」

「ああ、えらく美人で上品らしい。奴とは似ても似つかねぇほどのな。」

「そうなのか・・・。」

「だから、今夜は野郎を気にせず派手にできるぜ?」

「あ、ああ・・・。」

義烈の言葉に胸をなでおろす林山。

(そうか、娘のために宴会か。それなら、宮中にはいないよな。)

これで、郭勇武と遭遇が回避できたからだ。

(どんなクズでも、身内は可愛いというからな。そうかそうか。それほどの愛娘が――――・・・)

「・・・ん?」

ちょっと待て!

（あいつ、愛娘がいたのか！？）

しかし、安堵したのはつかの間。今度は怒りが芽生えた。

（まてよオイ！！そんな自慢の娘がいるなら、星蓮を奪う必要は無かったんじゃないか！？）

普通の親ならば、自分の娘の幸せの妨げになるようなことはしない。いくら仕事とはいえあんな性格ならば、星蓮ほどの並ならぬ器量の美女を見つけても知らん顔するはずだ。

自慢の娘の恋敵（？）が増えれば、皇帝の寵愛を得るのは難しい。

少しでも、障害を取り除こうとするのが親心だ。

それを――――

（無理やり連れて行くのはおかしくないか・・・？）

林山から見れば、郭勇武の行動は不可解極まりなかったのだが――――

「囮みてぇなもんだよ。」

その答えを、侠客の大親分が口にした。

押し黙る林山に、彼の心中を察した義烈がある説を唱えたのである。

「おとり？」

「ああ。お前の妹は、奴の身内の娘のための小魚として使われたのさ。」

「小魚？」

「自分の血族を皇帝に売り込むための餌だよ、餌！餌がよければ、皇帝って言う魚は食いつく。餌が『良い』と薦めるもんなら、食べ

てみようかっていう気になるだろう？」

（それはつまり――）

「お前の妹に仲人をさせるってことだ。仲人の美人が自分より良いと薦めれば、美人だと思うのは男として当然だろう？むしろ、それより美人だと考えるのが普通だろう？」

「なんだと・・・・！？」

「まっ、そう熱くなるな。場所考えろよ。」

「無茶言うな！そんな話を聞いて、落ち着いてられるかよ・・・！？」

「わりぃわりぃ。正直な話をした俺もわりぃが、ムキになるオメーもよくねぇぞ。」

「お前、謝ってるのか喧嘩売ってるのかわからないじゃないか！？」

「要は、体使った仲人をさせられる前に、お前の妹を救い出せばいいんだろうが？」

「それはそうだが・・・。」

「心配しなくても、一応の目星はついてる。」

そう言って笑うと、手招きする義烈。

（郭勇武のことは許せないが、今は目の前のことに集中しよう。）

「落ち着いてよく聞けよ。これから、『宝仙宮』っていう所に行く。」

「『宝仙宮』？」

「新しい妻候補達がいる場所だ。お前の言う、条件に合う娘は八十九人ほどいる。」

「八十九も！？」

「これでもかなり絞ったんだぜ？安心しろ。全員ぐっすり眠ってて、

ちょっとのことじゃ起きねぇよ。」
「起きないって・・・何したんだよ!?」
「へぇ～知りたいのかい・・・？」
瞳孔を開きながら問う侠客の大親分。
「・・・・・いや、聞かなかったことにしてくれ。」
――――――――――――――余計なことに首を突っ込むな。
相手の顔がそう訴えていたから。
（決して、脅されたからというわけじゃないぞ・・・！）
そう自分に言い聞かせながら、闇から闇へと身を隠しながら進む二人。
こうして、人に会うことなく、宝仙宮を守る入り口に到着した林山と義烈。

「・・・美しい。」

宮中には、漢全土最高の技術が集まっていると聞いていた。
肯定の妻となる女性達がいるとされる場所は、天界の香蛾が住む場所ではないかと錯覚させるほどすばらしい建築技術だった。

（装飾にしても最高だ！）

美術品を取ってつけたような飾りや細工に、思わず商人本来の何かを揺さぶられた林山。

「この中に星蓮が・・・。」

一年という寿命しか持たない宮殿には、自分の大事な女性がとらわれている。
それを思えば、高まっていた高揚感も影を潜めた。

（早く助けに行かないと。）

周囲の安全を確認すれば、同じような動作をしていた義烈と目が合った。

「気が合うな？」
「・・・常識的な行動をしたまでだろう？」

テレのような気持ちを抑え、そっけなく答えた時だった。

（・・・おかしいぞ？）

そこで林山は、ある異変に気付く。

（なんでいないんだ？）

「義烈、おかしいぞ。」

「なにがだ？」

「・・・なんで、兵がいないんだ？」

宝仙宮に来るまで、ところどこの入り口に、兵士が立っていた。

義烈に聞けば、宮中の中といえども、いつ何時怪しい奴が出るかわからないので、入り口という入り口には必ず兵士がいると教えられた。

不審者の侵入を防ぐというだけでなく、宮中内で何かが起きてもすぐに鎮圧できるようにという備えによるものだという。

だから、皇帝の妻がいる宝仙宮の入り口にも、兵がいると思っていたのだが――――――

（一人もいないなんて・・・！）

何度見渡しても、兵士はおろか、女官や宦官でさえいないのである。

いくら、皇帝の妻候補がいるといえども、今までの道のりを思えば、おかしな現象であった。

「兵だぁ～？」

この林山の問いかけに、義烈は馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの返事をする。

「いなけりゃいないでいいだろう？ついてるじゃねぇーか。邪魔が

入らねーなら。」
「そういう問題じゃないだろう?義烈はおかしいと思わないのか?」
「お前はどうおかしいって言うんだよ?」
「だって、そうだろう?漢全土から集めた美女達がいるなら、これまで通ってきた入り口よりも、多くの兵が守りを固めていて当然だろう?」
「ほほぉ～そういう見解をするのか・・・。」
「見解って。」
「まぁ・・・普通はそうかもな。」

ニィ～と笑うと、肩を震わせる侠客。

「でもな、星影・・・兵だって男なんだぜ?」
「それがどうしたんだ?」
「美女の側にいながら、手を出せないって言うと、いろいろ溜まっちまうんだよな～」
「はぁ・・・?」

そう言うと、相変わらず肩を震わせながら歩く義烈。その動きを、とっさに林山は引き止めた。

「待て!危ないだろう!?」
「なにがだ?」
「『なにがだ?』じゃない!これは・・・罠かもしれないだろう?」

いくら義烈が、都の裏社会では名の知れた侠客とは言え、宮中でもハバが利くとは限らない。宮中の警備は漢一と言われほど強固。侠客の小細工が、バレない方がおかしいだろう。

「もしかしたら、俺達の侵入に気付いて様子を伺っているのかもし

れないぞ。」
「お前用心深いね。いいぜ、そういうところ・・・！」
嬉しそうに言う義烈に、呆れつつも林山は注意する。
「だから、少し様子を見よう。少しでも怪しい動きがあれば、今日のところは引き上げよう。」
「つーか、お前のいう怪しい動きなら、もう始まってるぜ？」
「へっ！？」
驚く林山の目の前で、あっちと言いながら、茂みを指差す義烈。
何事かとそちらへ視線を向けると、草花が高々と生える場所だった。
そこがかすかに揺れていたのだ。
（あそこに隠れているのか！？）
真剣な表情で一点を見つめる林山。その姿を、ニヤニヤしながら見る義烈。
「見てみるかい？」
「・・・ああ、ここにいてくれ。」
そっと、忍び足で近づく。揺れる草花の側に、大きな木々があった。
その影に身を潜めるようにして同化する。
（敵は何人だ？どんな得物を持っている？）
緊迫と緊張の中、気配を消しながら問題の場所を覗き込んだ。

「あん・・・ぁぁ・・ん！」
「くっ・・・！いいな。」
「ああ、久しぶりだ・・・！」
「いい！あっ・・・そこ・・・！」
「おぅ！で、でる・・・！」
「締め付けが――――いぃ・・・！」

え？

そこにいたのは、数人の兵士。
多くが、円をかくようにして座り込んでいた。
円の中心には、見覚えのある姿。

（・・・・・・玉蘭さん・・・・！？）

生まれたままの姿で、半裸の兵三人と絡みあっていた。

え？なにこれ？
え？え？これって、え？
つまりその・・・子供を作る作業中？
いやいやそれよりも――――――

「あっ、はっ、あぁ――――――！」

「くぅ！」
「おお・・・！！」
「いいっ・・・！」

絶頂を迎える美女と、それに従う三人の男。

「た、たまらん！」
「あの顔！よほど感じてるみたいだな？」
「ああ、なかなか良さそうだ・・・！」

その行為を見ながら、生唾を飲む無数の男達。

「おい、早くしろよ！お前らばかり楽しむな。」
「そうだ！さっさとしろよ！焦らすな！」
「うるさい！今いいところなんだ！」
「数ヶ月ぶりの女なんだぞ！？」
「俺達だってそうだ！」
「お前達ばかりずるいぞ！」
「なにを！！」

（しかも内輪もめしてるし！？）

今にも殴り合いになりそうな空気。しかし、彼らの仲間割れはあっさりと終結する。

「ーーーーー喧嘩はダメよ。」

話の渦中、鳳玉蘭によって。

「皆様お仲間じゃないですの？だったら、仲良くしましょうよ・・・？」

白濁だらけの体を横たえながら、舌なめずりをしながら諭す。その姿に、男達は釘付けになった。

「こう見えても私・・・こういうこと大好きだから、強いのですよ・・・？」

「ぎょ、玉山！」

「ほら。ぼ～としてないで、早く私を慰めてくださいませ。」

怪しく微笑むと、順番待ちをしていたらしい兵の一人を手招きする。

「ま、待て！まだ俺達がー」

「意地悪な方。」

「うっ！？」

言ったと同時に、その男のまたぐらにぶら下がっているものをつかむ玉蘭。

「私、一通り楽しみたいの。」

「よ、よせ！あっ、あっ！」

「あなたがどういうことをされるのが好きか、よ～くわかったから・・・。」

「やっめ・・やっ！うっ、くぅ・・・くぅう・・・！」

「今度は、他の方の好みを知りたいの。」

「わ、わかった！わかったから－－－－！！」

やめないでくれ、と男が声を漏らした瞬間、闇夜に白いものが吹き上がった。

「うっ・・！あっ・・・ぁうあ・・ぅう・・・！」

「ご心配なさらずとも・・・また後で、たっぷりと可愛がって差し上げますからね・・・？」

「はっ・・・はぃ・・・・！」

大の男が、自分よりも華奢な女の言いなりになっていた。

それを見せ付けられた他の兵士達は、羨望と期待に目を輝かせたが、

（・・・・・・・・・これは夢？）

林山は混乱の二文字のもと、固まってしまったのだ。

目を見開き、硬直する林山と満足げに微笑む玉蘭。

「さぁ、お待たせした皆様。ここは風も吹き付けて、寒くて――――！？」

ふいに、そんな二人の視線が交わったのだ。

（ど、どうしよう！？こういうと起動すればいいんだ！？）

動かないからだの変わりに、口をパクパクさせれば、美女は目だけで彼に笑いかける。

そして、自分に欲情する男達を見渡しながら言った。

「すごく寒くてたまりませんの。早く皆様の熱い矛で慰めてくださいませ・・・！」

誘いながら流し目をすれば、我先にと兵達が群がった。

「お、俺が先だ！」

「俺だ！」

「ふっふっ・・・焦らないで。坊や達・・・。」

「お高く留まりやがって！本当は男がほしいんだろう！？」

「ほれ！たっぷり可愛がってやろう・・・！」

「あぁ！ダメぇ・・・あぁん・・・！」

男達に覆いかぶさられた玉蘭は、あっという間に林山の視界から消えた。

後には、男女の悶える声とも鳴き声ともわからない声と、荒い息遣いばかりが聞こえるだけだった。

それらの行為を見せ付けられた林山は、

（なにしてんのっ！？玉蘭さぁぁぁぁん――――――――――！！？）

いかがわしい気持ちよりも、かつてない衝撃を心に受けていた。

「・・・！！」

林山の中の警戒心と緊張感が、フッと消える。
無の状態になった彼は、音もなくその場から立ち去った。
影から影へ移動しながら、ニヤケ顔で待つ侠客の元へと帰還する。

「よっ！どうだった？」

陽気に声をかける男の首に、問答無用で肘を引っ掛ける。

「ぐぇ！」

その動き、後の世では『ラリーアット』と呼ばれる技で相手を捕まえる。
あまりにもすばやい林山の動きに、義烈はよけることができずに捕まる。

「お、おい・・・！？」

非難の声を上げる侠客を無視し、その場所から少し離れた草むらの影に移動する林山。
林山に腕を引っ掛けられた義烈は、後ろ向きにずるずると引きづられた。

「お～い、なんだよ星影？」

草むらに到着したところで、無表情で問う林山。

「・・・なんだあれ？」

無表情で問う林山に侠客は答える。

「なにって、犯ってるんだろう?良い事の最中だよ。見てわかんねぇのー?」

「・・・わからないから~!き・い・て・る・ん・じゃ・な・い・よっ・・・!」

「ぐえぇぇぇ・・・!」

額に青筋を浮かべながら、義烈の胸倉をつかむ林山。

油断していた義烈を、これでもかというぐらい締め上げた

「じょ、ごらごら!味方を絞め殺す気か・・・!?」

「何が味方だよ、あんたっ!玉蘭さんのあれ、なんなんだよ!?」

「だから、男と伽をー」

「そうじゃない!あんた、玉蘭さんにあんなことさせてんのかよ!?」

「つーか、声がでけぇ!」

自分の呼吸を止めている手を振り払う義烈。その上で、林山の口を塞ぎならが侠客は言った。

「あのな~溜まった野郎を引き付けるには、美女が必要だろう?」

「意味がわかんねぇよ!?あれにどういう意味があるんだ?」

「意味あるからしてんだよ。あれで、あそこの兵は攻略できたんだからさ。」

「馬鹿言うなよ・・・!あんなことしたら、他の兵にもばれるだろう?」

「他の兵もグルだからバレねぇよ。」

「だからって、怪しまれないのか?いや、それよりも、玉蘭さんは、書生という役だろう?男に手を出す兵士って、大丈夫なのか?」

「あの兵共は、玉蘭が妓女だって知って抱いてるんだ。」
「へ・・・？」
どういうこと？？
呆気にとられる林山に義烈は裏側を話した。
「宮中に、外部からの人間が入り込むのは簡単だ。特に妓女なんざ、楽勝だ。」
「はぁ！？」
「お前・・・皇帝の妻を手配するのは、宦官の仕事でもあることは知ってるよな？」
「あ、ああ。」
「宦官ってのは、ちんぽこ切られた中間人間だ。性行のモノが無くても、性欲なんてなくならねぇ。だから、ないもんはないもんなりに工夫するんだ。」
「工夫？」
「性の達人とも言える名妓を使うんだよ。」
「なに！？」
「その様子じゃ、宦官が妓女を妻に迎えるって習慣も知らないようだな？」
「宦官が妻を娶る！？」
（娶れるのか！？）
「娶れるぜ。」
林山の心の叫びに答えるように、義烈が不適に笑う。
「宦官の中には、女官を妻にする奴もいる。」

「女官まで！？」
「まぁ、女官を妻にする奴の大半は、性技を教え込んで、金や身分のある奴に妾や側室として紹介するって魂胆があるんだけどな。」
「最悪じゃねぇか！？」
「とにかく、玉蘭は宦官のなじみの女って言うことで、兵共の相手してんだよ。」
「そうなのか？」
「そうだぜ～？あいつらの相手が済めば、物欲の大宦官様の相手をする予定だからな。」
「物欲の大宦官って、鐘竹民のことか？」
「他にいるか～？あいつ、女の好みにうるさいんだよ。おかげで夜の商人大繁盛だぜ。」
「夜の商人――・・・？」

“私達は、宮中御用達の『夜の大商人・温烈様一行』という肩書きを使って、正面から堂々と入ることができるのだから。”
“まぁ、意味は後々わかるさ。”
“妓女で遊びたい殿方や元・殿方が、私達を男の姿にして連れ込んでいるのよ・・・！”
“もちろん。兵達を引き付ける役でしょう？”

（まさか――――――！？）

“こう見えても私、結構上手いのよ・・・？”
“おやめくださいませ、竹民様。私の主人の前で、そのような――・・・・”
“そういうお前こそ、わしを字で呼んでいるではないかぁ～？”
“ご心配なく、鐘様。ちゃんとのちほど・・・！”

林山の中で、それらの記憶がよみがえり、一つにつながった。

「そういうことだったのか・・・！？」

玉蘭さんは、俺や義烈のように武術で相手の足止めをするんじゃない。
自らの体を使って囮をするという役立ったのか！？

「その顔じゃ、大体のことは理解できたみたいだな？」
「義烈・・・。」
「ああ、そうだぜ。玉蘭は宦官からの差し入れってことで、あいつらは楽しんでるんだよ。変な遺恨ができねぇように、兵達の上官様もご存知のことさ。なんせ、その宦官様は自分が味見してよかった女を自分の味方になりそうな武官に紹介してご機嫌をとってるんだからな。」
「嘘だろう・・・？」
「本当さ、ボウヤ。持ちつ持たれつってのが、この世の中の現実だぜ？」
「しかし！」
「野暮だぜ？それに宦官からの紹介なら、兵士どもも安心して内緒で楽しめる。結構、隠れてで妓女達を連れ込んでる輩が多いからな？ここの男子供は。」
「く、」
腐ってる・・・！

（不潔だ、宮中は・・・！）

「いや！それよりも！」

（－－－－－問題は他にあるじゃないか！）

「玉蘭さんを止めないと！」
「はぁ？」
「『はぁ？』じゃないだろう！？あんた、彼女にあんなことさせて平気なのか？」
「あれが、今夜のあいつの仕事だ。」
「ふざけるな。」

声を荒げることなく、静かに怒る林山。

「彼女は物じゃないんだぞ？しかも、複数の男供にかわるがわる犯されるなんて・・・。」
「あいつは、ちゃんとそういうことを心得てる。心配いらねぇ。」
「心配とかそういう問題じゃないだろう？とにかく、すぐに止めさせよう。」
「馬鹿言え。それじゃあ、お前の妹に会えないぜ。」
「それでいい。」
「なに！？」

林山の言葉に、思わず聞き返す義烈。

「玉蘭さんに身売りをしてもらってまで、助けたくない。」
「ふざけんなよ。お前正気か？」
「あんたこそ、ふざけんなよ。」

いくら、星蓮を助けるためとは言え、体を売ってもらってまで助けたくない。
上手くいえないが、ひどく悲しくなった。
でも、一つだけハッキリしていた。
そんな方法で助け出されても、

「きっと悲しむ・・・・。」
「あ？」
「星蓮は・・・彼女は悲しむ。」
「なんでぇ？助けてもらえるのに、悲しむって言うのは。」
「自分のために、しなくていいことをさんにさせたんだ。彼女が知れば、悲しむ。」
「馬鹿だな～黙ってればいいだろう？」
「見破られるさ。星蓮は・・・そういう嘘には敏感なんだ。」

いつだってそうだった。
男相手に喧嘩をしては、怪我をしていた昔の星影。
武術を極めてから、「お前の妹も野蛮だ」と、心無い者に言われるたびに、正面切って叩きのめしていた。
揉め事を起こし、相手の家の者が乗り込んでくるたびに、彼女は嘘をついていた。

『星影姉さま！何が原因なの？』
『私に決まってるだろう？この私を馬鹿にしたから、叩きのめしてやったんだ！』
『星影姉さま・・・』
『お前は部外者だ！奥に引っ込んでなさい。』

姉である星影が、彼女を傷つけないためにいつも嘘をついていたから。
妹に心配かけまいとつく嘘。
俺はそれを優しい嘘だと思わない。
でも、ちっぽけな優しさがつかせる嘘だと知っていた。
だから、いつも俺に語っていた。

『星影姉さまって、馬鹿よね。姉さまが、自分から喧嘩を売らないこと、私は知ってるのに。』

『星蓮。』

『私が姉さまと同じだといわれたことに腹を立てて、姉さまが喧嘩してることぐらい、私はわかってるんだから。』

『星蓮、それは・・・』

『わかってる・・・知らないフリはするわ。でもね、林山・・・あなただけはわかって。私は、星影姉さまを理解し、姉さま以上に姉妹を大事に思っていることを。』

今思えば、困ったように微笑む星蓮に俺は会話そっちのけで見惚れるばかりだが。

姉知らぬところで気遣いをするそんな妹を、星蓮を見ているだけに、自分を助けるために一人の女性が複数の男に体を提供したという事実がバレれば、どんなに傷つくか。

人の気持ちに敏感な恋人を傷つけたくなくて、林山は義烈にそう告げたんだが、

「・・・困った坊ちゃんだ。」

しばらく林山を見つめてから、呆れるように言う義烈。

「今日しか、ねぇんだぞ。」

「宮中に忍び込める日がか?」

「そうじゃねぇ。助っ人が来てくれるのがだよ。おまけにあちらさんは、一足先に『宝仙宮』で俺達が来るのを待ってるんだぜ。」

「なに!?」

「だから、声がでかいんだよ。・・・ある方法で、先に中に入ってもらった。けど、出る時は俺らと出る手はずになってるんだ。」

「そうなのか?」

「ああ。もし、俺らが行かねぇとなると、そいつを置き去りにすることになっちまう。そうなりゃ、俺は仲間を見捨てたことになる。」
「それじゃあ・・・」
行くしかない？
「心配すんな。お前に強制はさせねぇ。俺が先に入って、あいつを連れ出せばいい。その代わり――――」
一呼吸置いた後、義烈はキッパリと言い切った。
「お前の妹は探せねぇぜ。」
「なんだと!?」
その言葉で相手を見れば、表情のない顔で自分を見ていた。
「ここまできて、玉蘭のこと気にして中に入れないなんじゃ、金の無駄遣いもいいところだな？」
「なっ!?」
「いや、金じゃなくて、人生の無駄遣いだ。そんなんだからお前は、妹を奪われたんだ。」
「ふざけるな!?取り消せ!」
無意識に出した手は、払われることなく義烈をつかんだ。
あまりにも簡単に胸倉を掴めたことに、林山は少し戸惑った。そんなわずかな青年の気持を感じ取り、侠客は無表情のまま言葉をつむいだ。

「人生だけじゃねぇ。お前の言い分は、玉蘭の努力まで無駄にすることだ。」
「努力？」
「いくら妓女だといってもな、平気でしてるわけじゃねぇぞ？体を売るのに慣れるまで、随分テメーを傷つけちまうもんだ。個人差はあるからな。」
「それは――」
「テメーに値段をつけて、値段をつけられて、テメーの身一つで生きるんだ。嫌な客相手でも、愛想振り向かなきゃならねぇ。悪い噂でも立てば客はつかなくなる。そうなると、死活問題だからな。」
そう言うと、自分を掴む腕を掴む義烈。
「あいつだってな、軽口たたいちゃいるが大変なんだぜ？前と後から男のナニをぶち込まれちまった日には、翌日がつらくてたまらねぇんだぞ。」
「っ！？あんた、なに言っ――――――！？」
「前はともかく、後ろは出口専用の穴だからな。切れるわなんやで痛てぇらしい。」
「そんな情報いらねぇよ！なに言い出すんだよ！？」
「本心じゃあ、したくもねぇ兵の相手をしてまで引き止めたのに、収穫なしで引き上げられちゃ、面子丸つぶれもいいところだろう？しかも複数で、強姦まがいの真似しながらよ・・・！」
林山を掴む腕はいつもと変わらなかった。しかし、その表情は容赦なく厳しいものだった。
相手の顔を見た瞬間、自分は胸倉を掴んだのではなく、つかまされたのだと理解した。
「オメーのその生半可な優しさが、ここ一番って時期を見逃しちま

ってんだよ。」
「・・・義烈。」
「どうする？そうやって今夜の機会も無駄にするのか・・・・！？」
脅しでもなく、怒るでもなく、語るともかけ離れた声で問う百面夜叉の異名を持つ男。
「・・・お前が決めろ。」
凄みを利かせた後で、林山から手を放しながら義烈は言った。
「俺は言いてぇことは言わせてもらった。あとは、お前が判断して決めな。」
「・・・・俺は、」
（・・・言われてみればそうかもしれない。昔から、相手の気持ばかりを考えて、自分の意思をしっかりと示してこなかった気がする。）
星蓮のことにしても、もっと早く自分が言っていれば違ったかもしれない。
星影と星蓮が服装を入れ替えてまで、俺と桂連のことを探ろうとしたことだって――
（俺のしょうもない優しさが原因だったんだ・・・！）
改めてそのことを自覚させられ、力なく義烈から手を放し、視線を下げる林山。
そんな青年に、義烈はいつもの声で告げた。

「人生って言ったのは、大げさすぎたな。半生って言った方が正しいか。」
「・・・え？」
「さっきまでのオメーは、生半可な優しさで物事を決断する男だった。・・・今はどうだ？」
そう問われ、視線を義烈に向ければ、いつも表情の義烈がいた。
「今夜のことをどうするか。お前が決めろ、星影。」
ニッと口の端を上げながら、特有の笑みを作りながら言った。
「気乗りしねぇなら仕方ねぇ。ダメなら、また段取り組んでやんよ。時間かかるけどな？」
「義烈・・・！」
「だから、あんま情けねぇツラすんじゃねぇよ！星影？」
星影。
義烈の呼ぶ名前。
自分ではない、大事な友の名前。
（あいつならこんな時、どう判断する・・・？）
頭の中に浮かんだ親友は、不敵な笑みを浮かべていた。
危険さえも楽しむような、困難さえも面白がるような屈強な心。
それでいて、ひどく美しい姿。

「義烈・・・・。」
「ん？」
それを思えば、林山が出す答えは決まっていた。
「宝仙宮に案内してくれ。俺のために命をかけてくれている、玉蘭さんやお前に報いるために。」
「・・・今までの依頼人の中で、最短記録の成長だぞ。星影？」
自分が口にした判断に後悔はない。
林山の決断に義烈は、呆れながらも満足そうに微笑んだ。

第七十七話　純情な目撃者（後書き）

※最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

性的表現を書いて失礼しました（土下座）
林山の優しさを、義烈が少しだけ修正する形でまとめてみました。
玉蘭を気遣う気持ちは正しいのですが、「今はそれどころじゃねぇだろう!?」という義烈の意見で、少しだけ変化を見せるというものでした。

そして、話の冒頭で出た「七弦琴」とは「古琴」という中国最古の楽器の一種です。「七弦琴」は前漢のお墓から出土され、その存在が確認された楽器です。
その前の時代の戦国時代のお墓からは「十弦琴」という楽器が出土されております。
古琴という「半箱式」という楽器で、幅が狭く短いのが特徴です。
この古琴には指で弦を押える場所を示す丸い点「徽」なるものがないそうです。ちなみ古琴の創設者とされる人物ですが、あまりに昔からあるので、さまざまな諸説があり、はっきりと断言することはできないそうです（大汗）あやふやみたいですよ（苦笑）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第七十八話　本日、狸中

気がついたのは夜中だった。

「んっ・・・・？」

冷たい感覚が、心地よい。
目を開けて、二・三度瞬きをする。

（・・・・ここは？）

私の部屋だ。

高級宦官として、割り当てられた一人部屋。
枕元にろうそくがついていた。
朧な光がゆらゆらと揺れている。

「なにしてたんだっけ・・・・？」

ひどく体が重く、頭もズキズキする。
まるで、風邪を引いた時のようだった。
ふと、耳に届いた呼吸。

「空飛・・・？」

椅子に腰をかけ、自分の隣で眠り込んでいる友がいた。

（なにしてるんだ？）

ゆっくりと体を起こせば、額からぬれた布が落ちた。

「あ。」

その瞬間、すべてを思い出した。

「そうだ、私は――――――――！」

平陽公主との押し問答を経て、無事帰還した星影。

再び顔を合わせた友と三人で、果物飲み物を飲んでいたのだが――

――――

（毒の味がして吐き出したんだ。）

最初、杯に口付けて飲んだ時は、なんともなかった。

ところが、二度目に口をつけた時、ハッキリと毒物の味がした。

それに気づいた星影は、慌てて二人に飲むのをやめるように叫んだ。

しかしその時すでに、彼女の体には毒が回っていた。

しゃべることもままならず、とった行動は毒を体から出すこと。

一番いい方法は水などを飲んで、吐き出すこと。

だが、そのための水を運んでもらう間に、自分は死んでしまう。

苦肉の策として星影がとったのは、部屋にある水を使うこと。

どうせ吐いてしまうのなら、きれいな水でなくていい。

だから、花を生けていた花瓶の水を飲んだ。

草花独特のにおいがした。

毎日水を取り替えているといっても、多少の汚れは浮いている。

普通なら、あまり飲みたくない水。
飲めば、すぐに戻してしまう。
でも、そうなることが望みだった。
吐き気がすればするほどいいのだ。
本当はぬるま湯状態の方がいいのだが、贅沢は言っていられない。
我慢して飲めば、気持ちが悪くなって戻した。
それでも足りないと思ったので、手を口に、喉に突っ込んで吐いた。
そうすればいいと教えられていたから。

・
・
・

「わしの経験から言えば、どんな毒でも、とりあえず吐いてみろ。
その時は、大量の水を飲んで腹を膨らませろ！一番いいのはぬるま湯だ。とにかく、手を突っ込んででも吐け！腹を蹴ってもらってでも吐け！その上で、急いで解毒剤を飲めよ。」

昔々・・・星影を含めた弟子達を前に、厳師匠が教えてくれた。

「吐くんですか？」
「吐いてみろ。なんとかなる！」
「そんな、投げやりな・・・。」
「投げやりでいいんだ、林山！毒を飲んだすなわち、一度死んだということだ。問題は、どこまでしぶとくこの世に残れるかだ。」
「では、最後まであきらめずにあがけということですか？」
「わかってるじゃないか、星影！そういうわけで、早速、毒を少し食してみよう。」

「「えぇえぇ！！？」」

「ほれ。これが本物の毒だ。舌で軽くなめる程度なら死なん。」
「死なないって厳師匠!?」
「弟子に毒を食べさせる師匠がどこにいますか!?」
「ここに。」
「そういう問題じゃないでしょう!?死んだらどうするんですか!?」
「そうですよ!万が一何かあったらどうしてくれるんですか!?」
「なんのためにこんなことを!?」

星影・林山以外の弟子も、猛烈に反発する。これに対して、風変わりな武人は答えた。

「簡単だ。己の命を守るためだ。毒をなめさせるのは、毒の味を覚え、万が一のときはそれを回避させるためだ。」

真顔で答える師匠に、星影は思わず噴出した。

「なにがおかしい、星影?」
「いいえ・・・。そうですね、命を狙われるくらい、武名で高名をあげるのが私の目標。是非、毒の味見をさせてください、厳師匠。」
「星影!?」
「さすが、豪傑・女傑と評される娘だ!」

星影の言葉に、満足そうに笑う男。

「で、他の者はどうする?」
「星影だけ、というわけにはいきませんよ。」
「その通りだ!」
「そうだな・・・!」

のん気に言う星影に、親友の林山が同調する。それに、他の門下生も従ったが――――

「どうかしてるぜ!?」
「付き合えるか!」
「頭がおかしいんじゃねぇの!?」
「まったくだ!」

そんな厳師匠の教育方針についていけず、この修行を機に、彼の元を去るものが多発した。

「なんで、やめるかなぁ～?」
「そうでうよね～解毒剤もあるっていうのに・・・?」
「・・・どうかしてるよ、お二人さん。」

不思議そうに首をかしげる師弟に、常識人・安林山は呆れ返るばかりだった。

・
・
・

わからないな・・・。

(解毒剤もあったのに、なんで他の連中は厳師匠の元を去ったのだろう。)

昔のことを思い出しながら、しみじみとする星影。

林山がいれば、「違うだろう!?毒飲まされた状況で、疑問視するのはそっちじゃないだろう!?」と言いかねないが。

「うぅん・・・」

そんな星影の横で、ムニャムニャと、何か言いながら身じろぎをする空飛。

（部屋にいるのは空飛だけか・・・？）

注意深く周囲の気配を探るが、部屋にあるのは自分と空飛のものだけ。

琥珀の姿は見当たらなかった。

（どこへ行ったんだ？）

床から抜け、寝ている空飛に布団をかける。

（あ!?そういえば――――）

そこではじめて、自分の体を気にする星影。

そして、手探りで体をまさぐったが、服は部屋に帰った時のまま。

乱れることもなく、胸のさらしをとかれた形跡もない。

（身体を見られていない・・・のか？）

では、どうして毒が消えているのんだ？

その疑問に、星影は思い当たることが一つあった。

“大丈夫だよ。これを飲ませれば――――”

気を失う直前、星影に薬らしいものを飲ませようとした琥珀。

（そういえば琥珀は、医術の心得があったな・・・。）

では、琥珀が処方した解毒剤で助かったのか？

疑問はそれだけではなかった。

（どうして私だけ、毒を口にしたんだろう・・・？）

果実の飲み物自体に毒が入っていれば、飲んだ全員に症状がでるはず。

しかし、琥珀と空飛は無事だった。

（どこで毒が混入したんだ？）

飲み物を入れたのは空飛だが、私を毒殺する理由がない。

（考える限り、ないと思うが・・・）

他に怪しい者がいるとすれば、

（琥珀か・・・？）

『伯燕』という別名を持つ怪しい男。
今は友として付き合っているが、完全に心を許しているわけではない。

（琥珀が入れたのか？）

可能性はあった。
もし、琥珀が自分に毒を盛ったのなら、解毒剤を持っていてもおかしくない。
それを自分に飲ませて助ける。
そう考えたが、

（それじゃあ、つじつまが合わないんだよな・・・。）

助けるつもりなら、毒を飲ませる必要はない。

（それとも、恩に着せようとしたのか？）

それはそれで、やはりおかしい。
ある程度琥珀と付き合ってわかったが、彼は非常に知的で学識がある。
自分が武官に向いているなら、琥珀は間違いなく文官的である。

（そんな賢い頭で考えて、こんなお粗末な茶番をするだろうか？）

そうなると、犯人は琥珀でもない。

「・・・馬鹿だな、私は。」

（仮にも友だと言った相手に対して、疑いを持つなんて。）

己の浅はかな考えに自己嫌悪する星影。
ふいに、部屋に近づく何かの気配を察する。

（誰か来た！？）

このまま出迎えようと思ったが、すぐにそれをやめる星影。
そして、できるだけ自然を装いながら、ふとんをかけた空飛の上に折り重なるようにしてうつ伏せになった。

「う～ん・・・林山・・・・。」

星影の体重をかけられたことで、再びムニャムニャと寝言を唱える空飛。幸い彼が起きることはなく、星影も安心して彼の側で狸寝入りを決め込んだ。

（私の寝たふりは、厳師匠も絶賛するほどの腕前！さぁ～て・・・誰が来たのかな・・・？）

小さな寝息を立てながら、様子を伺う星影。
程なくして、部屋の戸は開かれ、三人の男が入ってきた。

「それで？安林山殿は無事なのですか？」

「ええ。幸い、解毒剤を持ち合わせていましたので、それを飲んで一命は取り留めましたが・・・・。」
「むごい。一体誰が、彼を殺そうとしたのだ・・・・？」
聞き覚えのある声が3つした。
なかでも、最後に聞こえた声に星影の心臓は強く高鳴った。

（この声は――――――衛青将軍！？）

最後につむがれた言葉は、まぎれもなく、憧れる衛青大将軍の声だった。

（え！？ええ！？何で衛青将軍が私の部屋に！？）

おまけがいるのは気になったが、衛青大将軍の訪問に胸躍らせる星影。
必死で、高鳴る鼓動を抑えながら平静を保った。
程なくして、3つの足音が星影達のもとまでやってきた。

「これは・・・。」

苦笑いするようにつぶやいたのはおまけ？の琥珀だった。

「なんという寝相だこと・・・・！」

その後から、呆れ返るような声でおまけ？の黄藩がつぶやいた。

「こちらの気も知らないで、のん気に折り重なって寝るなど・・・

！」

「申し訳ございません。のびのびとしているところが、林山の、安殿の良いところですから。」

「のびのびしすぎです！！こんな！こんな格好で・・・！」

「はい。その通りでございます。」

「そうでしょう！？」

「風邪をひいてはいけませんので、布団をかけておきますね。」

「そっちですか！？」

黄藩にさわやかに笑いかけると、星影の寝ていた足元から新しい布団を引っ張り出す琥珀。それをかけながら再度、すみません、と陳謝した。

「毒でやられている上に、風まで引くとますます大変ですので。」

「そうかもしれませんが、何か違うでしょう！？まったく、心配して損をしましたわ！」

「・・・そう、怒らないで下さい。」

まったく！と連呼する元上司に、この部屋唯一の武官が低い地声でなだめた。

「良いではありませんか。指一本動かせぬというより、はるかにマシなこと・・・。むしろ私は、安心しましたよ。」

「衛大将軍！」

「それに・・・・王琥珀。君の話では、安林山殿に解毒を施して以降、この子は一度も目覚めていないと言っていたね？」

「はい。」

「それがご覧。張空飛の体には布団がかけてある・・・。これは安林山殿が目を覚まし、自分の傍らで転寝をしている友を気遣ってかけたものだとは思わないかい？」

「はい・・・確かに。」
「ええ・・・かけてやり、起きるのを待っているうちに眠ってしまったようですしね・・・」
（そう解釈してくれなきゃ困るよ。そのために、ふとんをかけた空飛の上で、狸寝入りをしてるんだから！）
黄藩の言葉で得意げになる星影。しかし、彼女のそんな気持ちは元上司の次の言葉で台無しにされた。
「ですが・・・解せませんね・・・。」
「なにがでございますか？」
「いえ、ね・・・。安林山は、毒物を飲んだのでしょう？いくら毒を吐き出したとはいえ、通常、こんなに早く意識を取り戻すかと思いまして・・・。」
（ゲッ！？）
台無しというよりも、危機に陥ってしまう。
「・・安林山殿が毒物を飲んで倒れたのは何時頃だ？王琥珀。」
「半日は経過しております、衛青大将軍。」
「夕方に飲み、真夜中に目が覚めるなど・・・・通常では考えられませんね！」
「そう言われますと――――・・・確かに回復が早いですね、黄藩様。」
「でしょう？こんなに早く、目を覚ますなんておかしいと思うでしょう？」
（なんであんたは、余計に鋭いんだ！！）

黄藩の言葉に、内心ひやひやする星影。

「衛大将軍もそう思いませんか？」

（ジジィ！！）

そんな星影の前で、一番話を振ってほしくない相手に話を振る高級宦官。

（ヤバイなぁ・・・・！衛青将軍は、私の瞳の大きさで真偽を見抜くほどのお人だ・・・。）

陛下には色仕掛けで身元の検索をしないように頼めたが、この人には絶対そんなものは通じない！
怪しいと思えば絶対に調べてしまう！！

（そうなれば、ごまかす事なんて絶対できない・・・！！）

はやる心を沈めながら、問題の人物の答えを待つ一同。
寡黙な大将軍は、宦官の質問に対して穏やかな口調で言った。

「・・・単に、軽い毒だっただけではないか？」

（い、命拾いしたぁぁぁぁ！！）

鋭いとされる男は、至極単純な答えを宦官に返したのある。

「毒が軽かった・・・ですか？」
「そうでなければ、間違いなくこの子は死んでいた・・・。」
そう言った声は、ひどく悲しい音を持っていた。
「宮中で使われる毒の大半は、即効性ではなく、遅効性が主流だ。仮に、安林山殿を確実に殺そうと思えば、誰にも気づかれることなく、公になることもなく、殺す方が理想的なはず・・・。」
尊敬する相手の言葉に、嫌な汗が流れるのを感じる。
「即効性ならば、すぐに殺せるという利点がある分、失敗した時の危険が大きい。誰が盛ったかすぐにわかりやすいからだ。しかしそれは、成功した場合にも言えること・・・ゆえに、宮中で即効性の毒が使われることは稀だが・・・」
一呼吸置く男の声は、星影の頭上から降り注がれた。
「・・・遅効性は、時間をかけてする分、誰が盛っているのかわかりにくい。わずかな少量を食事や飲み物に混ぜれば、少しずつ、確実に標的を死へと導くことができる。上手くいけば、病死という形で表面上は、片付けることができる・・・！」
衛青の語尾の言葉に合わせ、暖かいものが星影に触れる。
（――――――!?こ、これって～～～～～!!）

ごつごつとした感触と、暖かいぬくもりを持って、動くもの。

（え、えええええ衛青将軍の手ぇぇぇぇ！！？）

漢帝国きっての大将軍の手が、星影の頭の上に鎮座していたのである。

数々の戦場を知るであろうその指は、とても優しく星影の頭をなで始めた。

（うっ――――きゃぁぁああ！！ど、どうしよう！どうしよう！？どうしたら・・・！！）

これにはさすがの星影も、完全に動きを止めて固まるしかなかった。

（どうしよう・・・！すごく幸せ・・・・！！）

嬉しい心中の中で。

のん気に喜ぶ星影をよそに、話の内容は深刻なものへと変わっていった。

「それらの点を考慮すれば、毒を持った相手は、本気で殺すつもりはなかったのだろう・・・」

「と、申しますと・・・！？」

「早い話が、脅しでしょうな・・・。安林山殿をよく思っていない気持ちはあるが、完全に息の根を留めるというところまでは思っていない。しかし、陛下の寵愛を受け、宮中の人々の心を掴んでいる宦官をひがんでいる。それゆえに、何事においても目立ってしまう安林山殿に対して、『調子に乗ると痛い目にあうぞ。』という意味

も込めて行ったのだろう。」
「なっ!?つまり脅迫目的だと!?」
「・・・そうでなければ、痛みを与え、苦痛を与える程度の助かる確率のあるを用いたりしないでしょう・・・。」
「・・・そうかもしれません。」
衛青の言葉をおまけ?が強く肯定した。

「衛青大将軍が仰る通り、林・・・いえ、安殿は、見せしめでこのような目に良い意味でも悪い実でも目立っております。どなたとは言いませんが、安殿に敵意を持っている方もおりますから・・・。」

(ああ・・・。平陽公主に李延年か。)

琥珀の言葉に心当たりはあった。
思い浮かんだ二人は、自分を間違いなく嫌っているだろう。

「ええ、ええ!そうでしょうね!悪い面の方が際立ちますから・・・!!しかし・・・」

悪態をついた後で、少しだけ声を潜めながら言った。

「・・・そのような目立つものに対して毒を使うなど、やはり~・・・少々お粗末ではございませんか?いくら脅し目的だったかもしれないとしても、安林山は陛下の寵愛を受けるものですよ?」
「恐れながら、私もそれは同感でございます。現に、陛下のお耳に――」
「・・・まだ、入ってはいない。しかし、明日の朝には伝わるだろう・・・。」
「そうなりますと、陛下のお怒りは計り知れませんわね・・・!」

「はい。仮にも、陛下の寵愛を受ける安殿一大事ですから・・・。即効性・遅効性にかかわらず、毒殺しようとしたとなれば、全力で陛下は犯人探しをなさるはずです。」
「・・・犯人探しはしないだろう。」
「え!?」
「陛下は恐らく・・・今回の件で、犯人を探すようなことはしないだろう。」

（なにそれ!?）

意外すぎる衛青の言葉に、宦官二人はもちろん、毒を盛られた星影は軽い衝撃を受ける。
その言葉で星影の幸せな気持ちは吹き飛ぶ。

（いくら、衛青将軍でもそれはないよ!?）

犯人が言うように（!?）自分が調子に乗っているわけではないが、ある程度、自分は陛下に気に入られている。皇帝のあの性格を考えれば、『朕の林山を毒殺しようとするものなど、見つけ出して斬首じゃ!!』ぐらいのことは言うだろう。あの男でさえ、それぐらいの心配はしてくれるはず。

なのに衛青将軍は・・・

（私を殺そうとした犯人を捜すまでもないと・・・そう仰るのですか・・・?）

そう思うと、急に寂しくなってきた。それが、どういう寂しさかはわからなかったが、妹や親友、家族にあえない寂しさとは違った。胸に穴をあけられるような恐怖を伴った悲しさだった。

心細く、泣きたくなりそうな気持ち。
そんな思いになったことなど――――

“助けて・・・！妹を、私を・・・！”

――――――――――ヤメロ！！

（私は、劉星影だっ！！）

頭をよぎった黒い思い出に星影は、軽く身震いする。

「・・・。」

その動きに反応し、衛青の手の動きが止まった。
しかし彼女はそれに気づくことなく、自分を強くしかりつけた。

（私は劉、星影だ・・・！誰にも支配されず、誰にもこびず、自分の力だけで自分を守るんだ・・！他人に犯人捜しを頼るなんて、情けないことを言うな！自分の落とし前ぐらい、自分でつけろっ！！そうだろう！？）

思い出したくない記憶を消すように自分に言い聞かせる。

（毒殺がなんだ！殺せるものなら殺してみろ！私は妹を助けるまでは、絶対に死ぬものか！！郭勇武に『怨返し』をするまではあの世にいけるかっ！！）

言い聞かせ続けた。

（衛青将軍の言葉が何だ！？見方を変えれば、彼の言っていることは『たかが１宦官のために陛下が犯人捜しをするべきではない』というすごく当たり前な意見じゃないか！？そうさ！一国の王が、ただ一人の宮廷召使のために、大騒ぎする必要はない！災いを呼ぶだけだというのに――――――あの男は！！）

言い聞かせた後で、いない相手に八つ当たりする星影。

（そもそもあの皇帝が悪い！陛下は、何でもかんでも大げさにする傾向がある！きっと私が毒を盛られたことを知れば間違いなく大問題にする。そんなことされたら、ますます大事になって、私は今以上に自由に星蓮を探すことができなくなる！まぁ・・・今回ばかりは衛青大将軍の口添えも期待できそうだから、大丈夫だと私が陛下にお願いすれば――――――・・・！？）

そこまで考えて気づく。

他の２人よりも早く、衛青将軍の言葉の真意に。

（・・・もしかして。）

たどり着いた答えを、自分の体に触れている男がつむぎだした。

「きっと、安林山殿が『大げさにしないでほしい』と、陛下に願いするでしょうから・・・・。」

――――――――――――やっぱりそうだ。

「安林山殿の性格を考えれば、必ず、そう陛下に嘆願すると・・・・」

（私の性格を考えれば、この件を不問にしてくれと陛下に頼むと。）

「それを理解した上で、このような目立つ見せしめをしたのでしょう・・・・！」

（だから、『陛下は犯人捜しをしない』と、衛青将軍はおっしゃられたのか・・・・！）

私の性格を理解した上で。

「・・・それを思えば、この犯人は、大変性質の悪い輩だと言える。自分が調べられることも、疑われることもないと確信した上で、安林山殿に毒を盛ったのだ・・・！」

「では・・・安殿の性格をよく知る者の犯行であるということですか？」

「それだと、犯人候補は星の数ほどいることになりますぞ、王琥珀！安林山の性格は、宮中では知らぬ者がいないほど知れ渡っているのですから！」

「どちらにせよ、安林山殿が助かったことを喜ぶべきだ。下手をすれば死んでいたかもしれない・・・。あるいはそこまで考えていな

い輩だったかもしれないが・・・」
「そんな・・・それはまるで、安林山殿の命をもてあそぶような行為ではありませんか・・・!?」
「だから『脅し』なのだ。脅しで使った毒でこの子が死んでしまえば、それはそれでよいという考えを持っていたのだろう・・・!」

（・・・そうかもしれない。）

衛青の解釈は、他の宦官2人だけでなく、星影を十分納得させるだけの説得力を持っていた。

（もし、私を本気で殺そうと思えば、もっと違う方法なり、毒の使い方をしたはずだ・・・!少なくとも、大将軍などの耳に入るような馬鹿な真似はしない・・・。）

脅迫してきたと考えれば納得できた。

（私が生き残れたのも、犯人のあいまいさで救われたに過ぎない・・・!）

毒物への対処を知っていたから生き残れたのではない。
犯人が、自分を確実に殺す意思がなかったから命拾いしたまでである。

（これはやっかいなことになったな・・・!）

こんなことが何度も続けば、星蓮探しの邪魔にしかならない。
何よりも、

（相手がこちらを常に見張っている可能性が高いからな・・・！）

一度あることは二度あると言う。
陛下に気に入られている以上、まだ何時、違う方歩で攻撃されるかわからない。
一方的な敵意から逃げるつもりはないが、自分にはしなければならないことがある。
それを思えば、言いようのない苛立ちが星影の心を支配した。

（腹だたしい！これじゃあ、ますます動けないじゃないか！？）

今すぐにでも、口にしたい不満と怒り。
しかしそれを口にしたのは、星影ではなかった。

「まぁ・・・命を狙われて当然でしょう、この子は。」

不快感を露にそう言ったのは、星影の元・上司兼現・同僚の黄藩だった。

第七十八話　本日、狸中（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

ようやく主人公・星影が意識を取り戻しました。

第七十九話　これがホントの、顔から火が出る（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」に断固反対いたします。※

第七十九話　これがホントの、顔から火が出る

重苦しい雰囲気の中、最初に口を開いたのは黄藩だった。
淀んだ空気を清浄化するように、少しだけ明るい声で茶化すように言ったのだ。

「目立つことは、宮中ではあまり良いこととは言えません。しかも、陛下に気に入られたとなれば、妬む者も多いというのに。」
「悪気があるわけではありません。それだけはお察しください。」

そんな黄藩の声にあわせて、星影を弁護したのは琥珀。

「悪気がないってねぇ・・・」
「お節介な性分が強いのですよ、安殿は。そのお節介ゆえ、周囲を巻き込んで知らないうちに迷惑行為をしているだけです。」
「そのお節介で迷惑行為をされたらたまりませんよ！」
「無自覚でしているだけで、悪気があってしているのではございません。無自覚ゆえに、すべて許して頂きたいとは申しませんが・・・そういう性格ですので、ご理解だけはしていただきとうございます。」

（お前それ・・・かばってるのか？）

ちょっと疑いたくなるような弁護に、星影の心は冷める。
そんな星影の気も知らずに、親友はスラスラとしゃべる。

「平陽公主様のことに関しましても・・・義侠心と申しますか、それゆえの暴走でしたので。」

「そんなもののために、毎回暴走されてはこっちのみが持ちませんよ！？まったく・・・私も数十年宦官をしてきましたが、こんな子は初めてですよ・・・！！」

大げさにため息をつく黄藩。そんな宦官に、高潔の武将がなだめながら言った。

「黄藩殿の気持ちはわかるが、そう怒ってやる。義侠心とは、『正義を重んじて、強い者をくじき、弱い者を助ける』ということ。なかなか誰にでも持てるものではない。」

「ですが、衛大将軍！」

「安林山殿の場合、悪気云々ではなく、ただ少し――――・・・・・素直すぎるだけではないのか？」

え？

（素直？）

「素直・・・でございますか？」

「そうだ。彼は、私から見ても純粋すぎる。もう少し・・・意地が悪くてもいいと思う・・・。」

（素直で純粋って・・・！？衛青将軍！！）

そんなもったいない！！私なんかに、そんなお言葉・・・・！

憧れの人物からの思いがけない言葉に、気持ちが高ぶる星影。その耳に聞き慣れた声が届く。

「大丈夫でございます、衛青大将軍。」

自信たっぷりに琥珀は言った。

「ああ見えて林山は、なかなかの性悪ですから。」

（喧嘩売ってんのか琥珀ぅぅぅ！！？）

衛青将軍になに言ってんの！？
私の印象が悪くなるだろう！？
つーか、お前がさっきから言ってる言葉私の弁護じゃない！！
悪口に近いぞっ！！

友の失礼な物言いに怒る星影。だが、暴言を吐いたのは彼だけではなかった。

「おや、よくわかっているではありませんか？」

「黄藩殿。」

「初めて会った時から、どうもうんさんくさい感じがしていたのですよ。」

「と、申しますと？」

「私は今でも、あの子が厠を探しているうちに、陛下の危機に遭遇したのだとは信じていないということです。」
「まさか黄藩殿は、安殿を賊とお疑いなのですか？」
「そうではありませんが・・・なにか引っかかるのです。長年の私の感がそう言っているのです！只者ではない・・・と。」

（このジジィ・・・・！）

変なところで勘がいいじゃないか！
伊達に、長く宮中に巣くってないってか！？

「なるほど・・・それがあなたの意見ですか・・・。」

黄藩の言葉に、なにか考えるようにつぶやく皇帝の義弟。

（まずいな！）

会話のやり取りからして、衛青将軍は黄藩殿のことを信頼している。
信頼しているゆえに、やつの言葉を信じて私を疑われてはたまらないな・・・！

ズクン

心臓が、変な動き方をした。

（どうする？）

今この場で目を覚まして、会話を断ち切ってしまおうか？
それとも、しばらく様子を見た方がいいか？
これ以上、余計なことを言われてはたまらないし・・・

（厄介だな、クソッ！！）

内心で悪態をつく星影だったが、それは無用のものとなる。

「どうやら・・・二人の意見と私の意見は食い違うみたいだな。」

つぶやくような調子ではかれた言葉は、大きく星影の心に響いた。

（え？）

「衛大将軍？」

「私は、そうではないと思う。」

友や元・上司の言葉をすべて聞いた上で、大将軍はそれらを否定したのである。

「性悪ではなく・・・少し子供なのではないか？」

（子供？）

これには、星影以外の二人も反応した。

「子供・・・で、ございますか？」

「仰る通り、私達よりも子供ではございますがー・・・」

「年齢的なことではない。」

「では、性格的なことですか？」

間髪いれずに琥珀が問えば、あぁ！と納得の声を上げながら黄藩は言った。

「それなら合点行きますね！ほっとぉ～～～に！！お子様ですから！！ホホホ！！」

「ですから、本人にはその自覚がないだけです。」

「でも、お前はあの子がお子様だとわかってはいるのでしょう？」

「それは・・・」

「そうでなくては、『性格』と声に出さぬはず。」

「いや・・・ハハハ。これは一本とられましたね。」

「当然でしょう？ホッホッホッ！」

「アハハ」

（お～ま～え～ら～ぁ～！）

軽妙なかけあいをする友と元・上司に、ワナワナと怒りが込みあがる星影。

「まぁ・・・自分を陥れようとする相手を助けるあたり、まだあの子は甘ったるいのでしょうけどね。」

「甘いは甘いかもしれませんが、それは安殿利点でありまして。」

「甘すぎるのですよ！馬鹿正直もいいところではありませんか？」

「仰る通り、林山殿は馬鹿正直ではあります。しかし、悪気はありません。」
「本人はそれでいいですが、周囲は大変でしょうが！・・・・正直、あなたには同情してます。ここだけの話ですが。」
「大変ですが、友ですので。ただ・・・一緒にいて生きた心地がしない・・・というのは、ここだけの話でございますが。」
「そうでしょう・・・。普通はそうですよ。」
「そうですか・・・・やはり、そう思ってしまうのは仕方ないのですか・・・。」
「馬鹿正直だけならいいんですけどね～」
「はい、馬鹿正直だけならありがたいのですが・・・。」

そう言うと、しみじみと顔をあわせてうなずく二人。
いつの間にか、意気投合していた。

（こいつらっ・・・！）

人が黙って聞いてりゃぁ、好き勝手言いやがって！
馬鹿正直で悪いか！？
ええ、ええ、そうだよ！その通りだよ！！
これでもけっこう、腹黒いんだぞっ！！
なんなら、お前らの言う謀略で目に物見せてやろうかっ！？
思わず、米神に力が入りかけたのだが、

「そういうわけではない。」

落ち着いた、安定した低い音色が部屋に響く。

「そういう意味の、子供ではないよ。」

そう言った口調はどこか呆れているようだった。

（衛青将軍!?）

「え、衛大将軍!?」

「では・・・どういう意味でございますか?」

戦歴ある男の言葉の意味を図りかねて、問いかける宦官二人。それに答えるように彼は淡々と語り始めた。

「性格といえば性格だが・・・あなた達が受けた安林山殿の印象と、私が受けた印象は違うということだ。」

「衛青大将軍は、どのように見られているのですか?」

「・・・変な言い方になるが、『楽しそうにしているこども』だと言う印象を受けた。」

「楽しそうにしている・・・」

「『こども』!?・・・ですか?」

「あぁ。上手く言えないのですが――――・・・『いたずら好きなこども』だという印象です。」

（いたずら好き!?）

「いたずら好きでございますか・・・?」

「そうです。私にはあの子が、『いたずらが好きな小さなこども』に見えます。」

そう言った声は、どこか優しい音を含んでいた。

「初めて見るもの、聞くものに対して、楽しく接している。初めて出会うものすべてに喜びを覚えている。言ってしまえば、好奇心旺盛、天真爛漫だと思うのです。」

「それは――・・・少々無知ということですか?」

「・・・『天真爛漫』には、そういう意味もある。しかし私が言いたいのは、『無邪気で憎めない』ということ。」

(無邪気?憎めない?)

聞きなれない言葉に、思わず聞き入る星影。

「無邪気ゆえに、思った通りに動いてしまう。そこには悪意や欲、私利私欲というものが感じられない。あの子の行動は、自分一人だけが得をするというものではなく、皆が平等に幸せになれるようにという動きをしている。」

「皆が平等にですか・・・?」

「・・・心当たりがあるのではないか?王琥珀?」

「・・・仰るとおりです。初対面の時、安殿は私が止めるのも聞かず、苛められていた同僚を助けました。それにより、自分が標的になるとわかっていながら助けたのです。」

「楊律明と呂文京のことですね・・・!」

「しかしそれは、あなたも同じではないのか、王琥珀?」

「・・・いいえ、私はそこまでしていません。関わったのは、後になってからです。」

「それから、彼らと共にいると?」

「あなたも変わり者ですね～？なに好んで、あのような無茶苦茶な子と・・・。」
「・・・そこがわからないのです。正直に申しますと――――・・・私は損得で動く性質です。ところが、安殿と一緒にいたいと・・・頭ではなく、感情で動いてしまいました。」
「その結果、いつも三人でいると？」
「はい。」

そう返事をした琥珀は、どこか嬉しそうな声だった。

「なによりも林山・・・いえ、安殿は、自分の命を顧みずに、陛下をお助けしています。そこは、一番評価すべきだと思います。」
「それは、誰でも認めますよ。ただ・・・お助けするべき相手が陛下であれば、誰でも助けると思いますがね。」
「陛下だとわかって助けたのなら当然のことだと思います。しかし安殿は、陛下と気づかずにお助けしたのですよ？」
「・・・やはり、気づかずに助けていたのか？」
「はい・・・」
「本当に申し訳ありません！！かつての上司として、これほど無礼なことはございませんのに・・・！」

お恥ずかしい限りでございます！と言いながら、陛下の身内に謝る宦官。

「下級宦官の許された出歩く範囲から出たばかりか、下級宦官立ち入り禁止へ入り込んだ挙句――――――・・・！！」

見えなかったが、相手が頭を抱えているのがなんとなくわかった。

「私に謝らなくていいですよ。なによりも、そう気にすることはな

い。陛下とて、お気になさってはいませんでしたから。」
「そうでございますよ、黄藩殿。陛下もご無事だったのですから。」
「ええ！ええ！！おかげで、本来受けるはずだった罰は免れましたが、『黄藩様の部下は『迷子の英雄』』とからかわれるようになり・・・！！」
「そうなんですか？」
「そうですよっ！！『あなたも迷子になって、功名を立てられるのですか～？』などと言いやがって・・・！！」
「まぁまぁ、黄藩殿。」
「これというのも、安林山めぇ・・・！！」

かすかに聞こえてくる歯軋りと男らしい口調に、相手が怒っているのがなんとなくわかった星影。

「言うことときかねぇし、陛下に直訴に行こうとするし！」
「黄藩さ・・・いえ、黄藩殿？」
「玉も種もねぇのに、武人の情けとか言いやがるし！」
「・・・黄藩殿？」
「たくっ！あの小僧だきゃぁ・・・！！」

「「・・・黄藩殿。」」

「あぁ！？なんだって――――！！？・・・あ。」

自分より若い男達の問いかけで、元に戻る（！？）高級宦官。

「あ、あらいやだ！オホホホホ！！」

誤魔化すように、笑う相手に、武人は少し口調をやわらかくしながら言った。

「では、みなにそう言わぬように注意しておこう。」

「そんな！これ以上のお気遣いは無用でございますよ！！恐れ多い・・・！」

見えなかったが、相手がすごい勢いで何度も頭を下げているのはわかった。

かすかに起こる小さな風によって。

「もぉ・・・！！これ以上の恥の上塗りはようございます・・・！！」

「だからこそ、厳しく私から言っておこう。きっと、あなたを妬む心無いものがそんなことを言っているのだろうから。」

「ですが――――！」

「才あるものが花咲かせるには、その肥やしとなる土や水がしっかりしているからだ。根付くための、手本となるべき土である、あなたがしっかりしていたからこそ、安林山殿は開花したのだよ。」

「え、衛大将軍・・・！」

「もちろん、水である君達もだ。王琥珀、張空飛。」

「もったいない・・・お言葉でございます。」

眠っている空飛の分も込めて、丁寧な言葉で礼を述べる琥珀。

「ええ・・！ええ・・・！！身に余るお言葉でございます・・・！！」

そう言うと、ここでようやく黄藩も頭を上げる。見えなかったが、規則的に起こっていた風がやんだので、そうなのだと思った。

「本当に・・・とんでもないあだ花のおかげで、衛大将軍にはご迷惑を――――！」
「あだ花ではない。」
「は？」
「いろいろ、苦労があったみたいだが・・・あの子は、災いの花ではないでしょう。」
「・・・では、衛青大将軍は、り・・・安殿をなんとお考えで・・・？」
「新しい花、かな。」

（新しい花・・・？）

心地のよい声から聞かされた、何度目かになるあまり聞く事のない言葉。
自分へ向けられることのない言葉。

「今咲いている花とはどこか違う、見たことのない花・・・。その花に惹かれ、それまで訪れることのなかった蝶や小鳥達がやってくる。上手く・・・言えませんけどね？」
「それはつまり・・・安殿によって、宮中に変化が起きつつあると？」
「かすかだが、良い方へと動きつつある。それが必ずしも良いことだとは言いきれないが、あの子の動きによって、宮中に変化が起きていることは確かだよ。」

（私のやったことが、良い方へ？？）

そう聞いて、それまで自分がしてきたことを思い出す星影。

・・・・。

（・・・・ロクなこと、してないな。）

宮中に妹を取り返しに来てから、その目的を果たすために様々な攻防戦を繰り返しているばかりだった。

（賊と戦い、陛下から操を守り、陛下の姉と口論し、虎と戦い・・・・。）

だからだろうか。

（未だに星蓮を救いだせないのは・・・。）

ごめんね、星蓮。

姉さんが不甲斐ないばかりに、あなたを助け出せなくて・・・・！！

本物の林山がいれば「不甲斐ない以前の問題だろーが！」と、言うかも知れないが。

「それは・・・私も認めますよ、衛大将軍。驃騎将軍・霍去病将軍の死後、落胆気味だった陛下が以前のように活力を戻されたことは事実です。しかし・・・大将軍の奥方様の不況を買われたのは事

実です。」

「その半面で、女官や兵は宦官である彼に良い印象を持っている。」

「・・・ええ、ありがたいことではあります。彼のおかげで、人扱いされにくい下々の宦官まで、宮中の者から優しい声をかけられるようになりましたから。」

星影の知る黄藩らしくない、ひどく優しい声が聞こえた。

その声のまま、元・上司は言葉を続けた。

「下級宦官の中には、私のような高級宦官になれば、人として扱われると勘違いしているものもいます。ですが、それは大きな間違い・・・！宦官は所詮宦官。名称や肩書きがどれほど良くなろうと、男でも女でもない中間者であることに変わりはありませんから・・・。」

「黄藩様・・・。」

「王琥珀、あなたも覚えておきなさい。宦官として根性を終えると決めたい上、人としての当たり前の喜びなど、『男』と共に失ったと思いなさい。」

「黄藩殿。」

「ここにいらっしゃる衛青大将軍のように、我らを扱ってくださる方など、いないと思いなさい。私達は、そういう世界にいるのですから・・・！」

「黄藩殿、それは――！」

「どうか『黄藩』とお呼び下さい、大将軍様！本来ならば、私達のような卑しいに敬称などつけてくださらなくてもいいのです。それを・・・！」

そこで、星影の天敵の声は詰まった。

（泣いているの・・・？）

男泣きをしている。

男のモノがないとわかっていたが、そう思わずにはいられなかった。

「やはり、安林山殿の上司ですね。」

「え、衛大将軍・・・？」

「きっと、そういう優しさが似ているのですよ。あなた方は。」

「また、そのような・・・。」

（うん、そんなことないですよ・・・。）

衛青の言葉に、黄藩共々、照れくさい気分になる星影。

「・・・私も口下手だからね・・・。本当に上手くはいえないが、あの子は素直なんだと思うよ。」

恐縮しまくる相手をほぐすように、少しだけ声を高めながら大将軍は言った。

素直？

「安林山殿は、良くも悪くも素直なのだろう。総合的に見れば、よい意味での素直さが際立っている。それはきっと、あの子の人徳によるものだと思う。欲にとらわれない姿が、誰から見ても好ましく思えるのだろう。」

自分のことを言われているのだと気づいた時、相手は次の言葉を発していた。

「あるがままの姿で、素直な心を解き放っている・・・私はそう思えて仕方ないのだよ。」

（この私が・・・素直??）

今まで、好奇心旺盛だとは言われることはあったが、天真爛漫で素直なんて言われたことはない。

嫌味で、無知だという代名詞で天真爛漫だとささやいた女がいた。

後ろから蹴り飛ばしてやったら、親を引き連れて訴えてきたので、その女の秘密を暴露してやった。

それはさて置き、大将軍が語る自分という人間は、とても良い人物のように聞こえた。

「誰かの気を惹くためではなく、自然に振舞った結果、人を惹き付けてしまう。それが、安林山殿という人間でしょう・・・。」

そう言いながら、慈しむように星影の頭を衛青大将軍は撫で続けてくれた。

あたたかい。

（この方は、お言葉も、お手も、全部があたたかい・・・。）

自分の心を癒すかのような、労わるように動く手。

（本当にあたたかい・・・気持ちいいなぁ・・・！）

永遠に続いてほしかった行為だが、手の主の一言によってそれは終わりを告げた。

「とにかく・・・このままではいけない。」

（え？）

そう言うと、自分から手を離す衛青大将軍。

（あっ！・・・あ～あ・・・。）

残念・・・・。
もう少しだけ、触れてほしかった。
名残惜しさはあった。
だけど――――・・・

（残念だけど、離れてくれてよかった・・・！！）

相手の動きに、多少の安堵を覚えた星影だった

（いつまでも、そうはいかないよね？）

この動作に多少の未練はあったが、すぐに踏ん切りをつけた。
気持ちを切り替えた。
そして、次のことを考えた。

（このまま、狸ね入りを続けるか。それとも、ころあいを見計らって目を覚ますか・・・。）

早く起きるか、遅く起きるか。

全員がいるところで目を覚ますか、覚まさないかである。
そんな思案をする星影の頭上から、再び憧れの人の言葉が聞こえた。

「毒は抜けたはいいが・・・このままでは危ないな・・・。」

（危ない？・・・私がか？）

「えぇ・・・一応、その子は狙われたわけですから。」
「あぁ・・・ならば――――後は引き受けよう。」

（――――え？）

途端に、体が空飛から離れ、中を浮くのがわかった。

え？
え！？
えぇ！！？
えええええぇぇぇぇえええええ！？

（お、お姫様抱っこ！？）

耳に当たる分厚い胸板の感触に、星影は顔が厚くなるのを感じた。

「衛青大将軍！？」
「なんと！大将軍自ら、なんと恐れ多い！！」
「・・・気にしません。それより御覧なさい・・・。いつからこの体制で寝ていたかどうかはわからないが、顔が少し赤い・・・。」

（そ、それは病気の赤ではないですぅぅぅぅ！！）

恥じらいの赤であった。

（てっ！？自分に恥らう感情があるなんて！！）

混乱する頭でそんなことを考えつつも、必死で狸寝入りを続ける星影。

憧れの人の言葉に、火を噴出しそうなくらい恥ずかしくなる。

そんな彼女の思いを代わりに解釈したのは同僚だった。

「恐れながら・・・これは風邪ではないと思われます。」

「そうなのか？」

（まさか！？起きているとバレたか・・・・！？）

背中に冷たいものが走るのと、琥珀が口を開いたのとはほぼ同時だった。

「はい。きっと、毒の副作用で発熱しているものです。」

（た、助かった・・・・！！）

彼らが自分の都合のいいように解釈してくれたことに、そっと胸を撫で下ろした。

「そうか・・・まだまだ予断は許さないか・・・。」

琥珀の言葉に納得したようにつぶやくと、星影を抱えたまま、きびすを返す大将軍。

その動きに、思わず宦官二人は待ったをかけた。

「お待ちくださいませ、衛大将軍！あなた様のお考えはよくわかりましたが――――・・・！！」
「安林山をどこへ連れて行かれるのです？」
「・・・張空飛の部屋へ。」
「はっ・・・？そ、それはまた――――なぜでございます？」
「理由はどうあれ、安林山殿が、危険な立場にあることには変わりない・・・。このまま、このものの部屋に寝かせておけば、寝首をかかれるやも知れない・・・！」
「・・・なので、安殿の寝所で眠っている張殿と入れ替わる形で張殿の寝所で休ませるということですか・・・？」
「その通りだ、王琥珀。」
「まぁ・・・そうでしたか！」
「そういうわけですので、張のことは任せたぞ、王。」
「・・・は？任せるとは――」
「もし『敵』が、こちらの予想に反し、安殿の寝所に忍び込んできた場合を考えて見なさい。そのままそこで張を寝かせておけばそうなる？」
「！？――――かしこまりました。」

琥珀の声が、床に反響する。頭を下げながら答えたのだとわかった。

「頼みましたよ。」

低い声が耳の側でした。
声の振動が顔に伝わったようで、耳が熱くなるのが判った。
しかし、その熱さもすぐに感じなくなった。
頬に当たる冷たい風で、部屋から廊下に出たのだとわかった。

「・・・晴れたな。」

心地よい声にあわせて、体に月の光を浴びるのを星影は感じた。

第七十九話　これがホントの、顔から火が出る（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

今回は、黄藩と琥珀が意気投合したようです。
琥珀はともかく、星影のおかげで何かと苦労したらしい黄藩の話を書いてみました（笑）
星影は星影で、衛青将軍に引き受けられました。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

小説のストーリーとは関係ありません（！？）が、今後の更新に関係がありますので後書きでも一言。

竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」に反対いたします。

「『東京都青少年健全育成条例改正問題』ってなに？？」
と思われた方、詳しい詳細は下記の通りとなります。

http://mitb.bufsiz.jp/

第八十話　義姉弟そろって、考えてることは同じ？（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」に断固反対いたします。※

ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／

漫画・小説の作者に責任を押し付ける法案はおかしいですよ・・・（涙）

第八十話　義姉弟そろって、考えてることは同じ？

忌々しそうに舌打ちをする男。
相手が悪態をついた理由がわかったので思わず口を開いた。

「・・・月が出たな。」
「ああ。せっかく曇ってたっていうのによ・・・！面倒くせぇー・・・」

先につむいだ俺の言葉に、無骨な男が忌々しそうに舌打ちをしながら答えた。
俺の名は安林山。
藍田出目（出身）の大商家の一人息子。
劉星蓮という可愛い婚約者がおり、本当ならば婚礼を済ませ、今頃甘い新婚生活を堪能していたはずなのだが・・・

「月が隠れるまで、動けないな・・・。」

何の因果か、ガラの悪い男と二人で物陰に身を潜めていた。
俺の隣で忌々しそうな表情をしているのが『百面夜叉』の異名を持つ凌義烈という男。
都の裏側では恐れられる大侠客の親分である。
大侠客の親分と、大商家の一人息子が何をしているのかというと・・・ご存知の通り、俺の婚約者である女性を奪い返すために、こうしてコソコソしている。
そう、漢帝国最高の女性達が集っていると言われる『後宮』のど真ん中で一一一！

「しばらく待つぞ。」
「・・・わかった。」

不機嫌な声で言う義烈に、林山も険しい表情でうなずいた。
いろいろ回り道はしたが、ようやく二人は、星蓮がいるとされる宮殿『宝仙宮』にきていた。
門番は、玉蘭さんがひきつけているので簡単に通過できた。
『宝仙宮』の中は漢帝国の皇帝が好みそうな豪華な内装が施された場所だった。
廊下を照らすための炎が揺らめいており、その演出の仕方も惚れ惚れするぐらい美しい。
光を覆う、金細工が明かりに照らし出されて陰影を作り、床に夜しか見ることのできない模様を描いていた。

（・・・美しい。）

何度そう思い、心震わされたことか。
皇帝のために作られた最高級の装飾。
この国唯一の王のために用意された品々。
その品の中に、自分の愛する女性も含まれているのかと思うと悲しくなった。

（星蓮・・・）

物悲しい異様な、切ないような感情に思わず天を仰ぐ。
その目に映ったのは、暖かな優しい光を放つ球体。
今、自分達の動きを封じている大きな光は、すべてを包み込むような光で満ちていた。

（月を眺めるのは久しぶりだな・・・。）

最後に見たのはいつだったか。
いつだったか思い出せないぐらい昔だがー

（その時、傍には君がいたね・・・星蓮。）

美しい満月を口実に、二人で逢引したあの夜。
俺は、月を見るふりをして君を見ていた。
君が感嘆の声を漏らすたびに、俺もひそかに息を漏らした。
月明かりに照らされる愛する君の愛らしさに。
月にも負けぬ、優しい笑みに。

「・・・有り。」
「あん？」

息を潜めている最中で、聞こえてきた言葉。
それに反応し、声のする方を見る義烈。
横を見れば、自分が連れてきた依頼人が月を見上げながら『うたい』始めていた。

「南に喬木有り。」

南に背の高い木がある。

「休息す可からず。」

でも高すぎて休息することができぬ。

「漢に游女有り・・・求思す可からず。」

漢水のほとりに遊ぶ乙女がいる。でも河が隔てて妻に求めることができぬ

「漢の廣(ひろ)きこと、泳思す可からず。江の永(なが)きこと、方思す可からず。」

漢水の広大なことは、泳ぎきることもできぬほどだ。
長江の長大なことは、想像もできぬほどだ。

「翹翹たる錯薪、言(われ)其の楚を刈る。之の子　于(ここ)に歸(とつ)がば、言(われ)其　の馬に秣(まぐさ)かはん。」

蘩然と茂る木のかなから、楚の木を刈り取って薪にしよう。
かの乙女が嫁にきてくれたなら、その馬に秣(まぐさ)を　くれてやろう。

「漢の廣きこと、泳思す可からず、江の永きこと、方思す可からず」

漢水の広大なことは、泳ぎきることもできぬほどだ、長江の長大なことは、想像もできぬほどだ

「翹翹たる錯薪、言其(われ)の婁(ろう)を刈る。之の子于に歸がば、言其(われ)　駒に秣かはん」

蘩然と茂る木のかなから、婁の木を刈り取って薪にしよう。
かの乙女が嫁にきてくれたなら、その子馬に馬草(まぐさ)をくれてやろう。

「漢の廣きこと、泳思す可からず。」

漢水の広大なことは、泳ぎきることもできぬほどだ。

「江の永きこと、方思す可からず・・・！」

長江の長大なことは、想像もできぬほどだ・・・！

「・・・なんでぃ、その詩(うた)は？」

謡い終わったのを見計らって、冷やかすような口調で聞く義烈。

「『詩経国風』の1つだよ。」

それに相手は淡々と答えた。

「ああ。『周詩』のことかい？」

「・・・まぁな。」

『詩経国風』とは、中国最古の詩篇のことである。

いつごろ確立したものかはっきりしていないが、周の時代からあったものなので別名『周詩』とも呼ばれている。なので、この詩は、林山が言う『詩経国風』と義烈の言う『周詩』は同じものを指す。構成になってからは『詩経』と短縮されて呼ばれることが一般である。

『詩経』は、儒教においては基本的な経典とされており、当初は三千近くの詩があった。それを儒教の教祖である孔子が、良いものだけ選んで編成しなおしたと言われているが断言はできない。

「『周詩』っていやあ、学のある博士様が開くお勉強会でしか習え

ないもんなんじゃないか?」
「私塾と言ってくれ。まぁ・・・そうだが。」
「すごいね~お金持ちのお坊ちゃまは?月眺めてたかと思えば、小難しい詩を口になさるからよ。まぁ、儒教で使う教材らしい詩らしいと言えば詩だけどよ。」
「どういう意味だよ!?」
「声でけぇよ。辛気くせーとまでは言わねぇが、派手な宮廷詩人らしくねぇ詩じゃねぇか?」
「そりゃあ、そうだよ。俺が口にしたのは『国風』なんだから。」

孔子が編集したとされる詩経は、重複するものを除けば三〇六篇、約三〇〇あまりある。それは大きく三つに分けられる。
内容は、貴族や朝廷の公事・宴席などで用いられた音楽の歌詞などをまとめた「雅」、朝廷の祭祀に用いた廟歌の歌詞をまとめた「頌」、各地の民謡、主に周南・召南・?・?・衛・王・鄭・斉・魏・唐・秦・陳・檜・曹・?の15カ国の地域の小唄を集めた「風」となっている。林山の語った「国風」とは「風」のことであった。

「国風・・・?あぁ、俺達一般人が謡ったってやつかよ?」
「あなたが一般人かどうかは怪しいが、庶民が謡った詩さ。名のある宮廷詩人が謡ったものよりは箔がないが、自由で素直に人間の心を謡っている。・・・だから好きなんだよ。」

「雅」・「頌」・「風」の内容は、どれも優れた詩として孔子に選ばれ、現代にも残っている。もし、違いがあるとすれば作者に関してだろう。
「雅」・「頌」と比べて『国風』は、誰がどれを作ったかわかっていない、『無名の人々』によって作られた詩とされている。孔子の

生きた　時代やそれ以前から伝わる各地域の民謡というだけでなく、男女について謡った詩が多いと言うのが特徴がある。
林山が口にした詩は、『国風』に収められている『周南』という国の民謡で『漢廣』と言う『求愛の歌』の詩。
そう、男が女に求愛する詩であった。

「失礼な奴だな～俺は一般人だぜ？しかし・・・お前にしては素朴な詩だな？さりげなく愛を謡ってるしよ。」
「知ってるのか？今の詩を・・・？」
「いいや。ただよ・・・切ない男の心情みたいのはわかったからな。」
「そうか・・・。」

切ない、という言葉が心にのしかかった。
義烈が言った通り、この詩は、男の切ない心境を謡ったものである。

見初めた女を妻にできぬあせり。
見初めた女を妻にすることができたなら、何でも彼女の望みどおりのことをしてやろうという男心。
そんな男の切なさを歌ったものだ。
漢は漢水、江は長江をさし、いづれも大河である。
この詩を謡った男は、その大河の彼岸に女を見初めてこの嘆きを歌ったと言われている。
楚や婁というのも、その際側に生えていた木の名前。
簡単に訳せば、そういう意味の詩なのだ。

「なんでまた切ない恋の詩なんぞ謡ったんだ?恋人にでも会いたくなったかぁ?」
「そうだな・・・。」

なぜこの詩が口をついて出たのか。
その理由を林山は痛いほどわかっていた。

「星蓮の・・・妹の婚約者の心境を謡ってみただけだ。」

初恋の相手を、心から愛した女性を、妻にしたくてもできないあせり。
彼女を取り戻し、妻に迎えることができたら、なんでも彼女の望み通りにしてやろう。
彼女のために尽くしたいのに、漢水・長江という大河のごとき、強大な権力者が邪魔をする。
その壁に阻まれ、会うことすら、声をかけることするできない恋人への思い。
どこか、自分達と重なるようなところに哀愁を覚えた。
それゆえに、昔読んだ詩を思い出させたのだろう。

「そりゃ、お優しいな。」

そう言った相手の顔は、軽い口調に反してひどく真面目なものだった。

「まぁ・・・俺もできる限りのことをしてやるよ。お前ら兄弟にも、可愛い妹の婚約者にもな・・・。」
「え?」

（やけに親身な事を言うな？）

いつもならガキくさいだのなんだのと言いそうなものである。

「義烈・・・」

もしかして、気を遣ってくれているのだろうか？

「月がいい具合に晴れそうだ。」

そう思い、問いかけようとした矢先だった。問題の侠客は、ぶっきらぼうにそういうと先に動いた。

「ぎ・・・！」

「ほら、いくぞ。」

周囲に人がいないのを確認すると、林山を誘導するように音を立てずに廊下を走り抜ける。

「あ、待ってくれ！」

聞きたいことも聞けず、取り残される林山。

待てと小声で言いながら、義烈の後を追いかけた。

二人がいなくなった廊下では、その名残を伝えるかのようにロウソクの炎が、しばし左右に揺れ続けた。

・　・　・　・

・

耳に響く靴音。
鼻をくすぐる香の匂い。

（どうしよう・・・）

温かい腕に抱かれ、星影は頬が火照るのを感じていた。
半日前に何者蚊の毒でやられるも、何とか回復したのだが、今度は違うものにやられかけていた。

（衛青将軍・・・）

何の因果か、自分は今憧れの衛青大将軍の腕の中。
それもお姫様抱っこの上体で運ばれていたのだ。
時折聞こえる虫の音と、体に感じる穏やかな光で外が夜であることは把握していた。

（どうしよう・・・！）

心が落ち着かない。

憧れの将軍に会えただけでも、嬉しいのに、その人の体に触れ、こうして運んでもらっている。

今まで感じたことのない、不思議な心躍る感情に星影は戸惑っていた。

（本当にどうしたんだろう、私・・・！？）

どういうわけか、衛青将軍のまでは、変に緊張してしまう自分。
最初は、『大将軍』という地位に気おされていたのかと思ったが、どうもそうではないらしい。

”お前・・・衛青将軍のことが、異性として好きなんじゃないか？”

さっきから、林山の言葉が頭を回っている。

”星影は衛青将軍を、恋愛対象として見てるんじゃないか？そして、惹かれたんじゃないのか？衛青将軍の中にある、男の優しさって奴に・・・・。”

”『大人の男の優しさに、惚れこんでいる女』のように・・・。”

（そうなのか・・・・・？）

確かに衛青将軍は、藍田にはいなかった種類の人間だ。
頼もしいし、優しい、包容力はあるし、見た目もいいし・・・。

”男が女に、女が男に惹かれるのは自然なこ　とだ。むしろ、それを拒むことはないだろう？”

（だからって恋愛なんて～！）

”武人としての『憧れ』が、『愛』に変わってもいいんじゃないか？相手が、衛青将軍ほどの御仁ならば・・・？”

（恋なんて・・・！！）

胸の奥が痛くなった。
泣きたくなるような、悔しくて歯がゆい気持ちに駆られた。

（恋愛なんて・・・！）

初めて好きなった男がいた。
顔はおろか、会うことさえなかったが、文字を通して知る人柄に強く惹かれた。
心と心で愛をはぐくんだ。
仮に、相手が醜悪な顔であっても構わないくらい好きになった。
本気で好きなったのに一一一！！

（・・・その恋は、叶わなかった。）

失恋と引き換えに、私は武名を得た。
武術に打ち込み、その才能はすぐに開花した。
初めて数年で、十年近く武術をしていた親友よりも強くなった。

素質があったのだと師は言う。

そういう因果だったのかと両親は嘆く。

そんな自分を認め、支えてくれた妹と未来の義弟。

恋愛とは自分を変えるものだと、あの時思い知らされたが――――

（どうしてまた・・・似たような気持ちになるのだろう・・・？）

色恋とは一種の病気だ。
体温を上げたり、心の臓の動きを乱すと言うならば厄介なことこの上ない。
自分がこの年上の武人を好きなのかどうか確かめることはできない。
そんなことをすれば、なにかが狂う気がしたから。

（とにかく、落ち着かないと・・・！！）

これ以上、顔が赤くなったり、呼吸のしかたがおかしかったら百戦

錬磨の武人に私が起きているとばれてしまう。
そんなことになったら恥ずかしいし、厄介だ！
そう考えながら、なんとか平常心を取り戻そうとする星影。
だから、それに気をとられて気づくのが遅れた。
自分達以外の存在の接近に。

「・・・・・そこにいるのは誰だ？」

低い声にあわせて、自分を抱えている人物の動きが止まった。

（なに！？）

危うく反応しかけた体の動きを抑えながら、星影も警戒態勢に入る。

「誰だ？出て来なさい・・・・！」

変わらぬ口調で衛青将軍は言った。言葉に変化はなかったが、その体の動きは戦闘体制へと変わっていくのを星影は抱きしめられながら感じていた。
武人の警告でその場に緊張が走ったが、程なくしてそれは解かれた。

「驚かせてすみません・・・。」

若い男の声だった。
男と言うよりも、少年といった方がいいかもしれない。
まだ声変わりもしていない男の声色。

「これはっ!?」

途端に、星影の体がカクンと下へ下がった。

（な、なんなんだ!?）

わけがわからず、耳を研ぎ澄ませば、顔の半分を武人の胸へと押し付けられた。

（ほ、本当に何事だぁぁぁぁ!!?）

嬉しさと戸惑いとが混ざり合うなか、胸に押し付けられた顔の方の目を薄っすらと開ける。
細めた視界に飛び込んできたのは、高貴な身なりをした凛々しい少年だった。

年のころは十三～十四といった位。
自分はおろか、空飛よりも年若いのは確かだった。
声や表情からは、穏やかさがにじみ出ている健常な男の子だった。

（誰？）

星影の疑問に答えるように、大将軍は相手の正体を口にした。

「大変失礼いたしました！！皇太子殿下・・・・！！」

こうたいしでんか？

後退し出んか？

こうたいしでんか・・・？

皇太子殿下？

（こ、皇太子殿下、かぁぁぁぁぁ！？）

薄目を凝らしてみれば、少年は笑みを浮かべながら近づいてきた。

「そんなに畏まらないでください、叔父上。驚かせたのは私なんですから。」

叔父上って言ったぁぁぁぁ!!!

ま、間違いない!!

それじゃあ、この子は――――――

（あの昏主の息子をっ!!?）

しかも皇太子ってことは、跡継ぎ!?

歴代皇帝には、たくさんの子供がいる。
皇后を頂点とし、千単位で妻がいるので、男女問わずにその数は多い。
その中でも、皇太子と呼ばれるのはたった一人だけ。
たった一人の男児だけである。

（衛青将軍の姉君は、皇帝の皇后！順番で言えば、次の皇帝は皇后との間の子供！）

今間近にいる少年は、大将軍を『叔父』と呼び、大将軍もまた、少年を『皇太子』と呼んでいる。

（間違いなく、衛青将軍の姉君のお子！なおかつ、将来の皇帝じゃない！？）

動揺を抑えつつ、バレないように視線を向ければ、少年は自分達の手前で歩みを止めた。

「ほら、顔と体を起こしてください、叔父上。それでは安林山が苦しそうですよ？」

（え！？）

相手の言葉に心臓をわしづかみされた気分になった。

（皇太子は、私のことを知っているのか！？）

「拠皇太子殿下、この者をご存知で？」

「ああ、伯母上からね・・・。」

『拠』と呼ばれた少年は歯切れ悪く答えた。その意味を察して大将軍はさらに頭を下げた。

「これは・・・妻からお聞きになりましたか？」

「うん、ずいぶん機嫌が悪かったよ。母も臥せっているし、なだめるのが大変だった。」

彼らの会話で、星影も伯母上が誰か知る。

（そうか！平陽公主から聞いたのか・・・・！）

そう理解した上で、絶望の二文字が頭に浮かんだ。

（あの女から私の事を聞いたと言うことは、きっと私に対してロクな印象を持ってないだろうな～皇太子殿下は。）

予想はついたが、せっかく起きているのだ。

二人の会話を聞いておかない手はないと、星影は耳を傾けた。

「そのことですが、拠皇太子殿下。安林山はー」

「わかっているよ。心根の良い者なんだろう？」

意外なくらい、あっけらかんと述べる少年。
これには、星影だけでなく、衛青も虚をつれる形となった。

「皇太子殿下・・・！？」
「みなが、いろいろ噂しているからね。集めてまとめて、自分なりに審議してみたよ。今どき、純朴な者ではないか？」
「拠皇太子殿下・・・！」

皇太子は少年らしく元気に笑うと、自分の叔父の腕の中にいる宦官を覗き込んだ。

（ヤバイ！！）

慌てて目を閉じて呼吸を整え、寝ているふりをする星影。
そんな相手の芝居に気づいていない皇太子は、息がかかるぐらいまで有名な宦官を見ながら言った。

「う～ん・・・聞いていた話通りだけど、少し違うな。」
「と、申しますと・・・？」
「とても美しい美貌だと言うのは本当だが、去病叔父上にはまったく似ていない。」

（はぁ！？）

「去病似の美形だと聞いていたのだが・・・」

だぁーれ！？そういういい加減な噂流したのっ！？

ムカムカする半面で、

（そうか・・・この子からすれば、霍去病も『叔父』になるのね・・・。）

もしかしてこの子・・・霍将軍と仲がよかったのかな？

だからそんなことを言うのかな？

（つーか、こんな夜中に、未来の皇帝が一人歩きとか危ないんじゃない？）

「・・・恐れながら拠皇太子殿下、お一人でここまで来られたのですか？」

「そうですよ。」

周囲の気配からして、少年の言葉は本当のようだった。

「私一人だが？」

不思議そうに言う皇太子に、星影は思わずツッコミそうになった。

（おいおい、なんて危ないの・・・？）

少し前に、陛下が襲撃されたんだぞ？

一人でウロウロするのはよくないでしょう？

いくら、住み慣れた家と言っても最近は危ないんだよ？

そう思ったのは星影だけではなかった。

「共もつけないでお一人とは、危のうございますぞ！」

けしからんとまではいかなかったが、さもいけないことだと言う口調で衛青将軍が叱った。

「最近の宮中は何かと物騒なのですぞ？宮中に住まうあなた様が、それをご存じないはずがないでしょう？」

必死でそう説く叔父をよそに、甥っ子は気にとめることなく言葉を続けた。

「伯母上の話では、素手で紅嘉をねじ伏せ、懐かせたと言っていたが・・・腕も細い。」

「拠皇太子殿下っ！？」

（ちょ、なんですか！？）

自分の話を聞かない子供。

その態度もそうだが、彼のとった行動に武人の声が上ずった。

だらんと力なく投げ出していた星影の体に手を伸ばしたのである。

「こ、皇太子殿下！なにを！？」

自分の近くにある宦官の手を掴む少年。

最初は慎重に、恐る恐る触れ、感触を確かめるように触れてきた。

こちらが動かないことがわかると、触っている手を上へ下へと移動させながら星影の腕の上を行き来する。

それはまるで、初めて見る動物に触るような手つきだった。

「こんな細腕で、父上を襲った族や紅嘉をねじ伏せたのか・・・！？叔父上達武人のように筋肉がついているわけでもないし、肉が厚いわけでもないのに・・・。」

確かめるように関節や指の先に触れられる皇太子。

「あ！でも、指の肉刺はすごい！ここだけ、叔父上達みたいですよ！」

「皇太子殿下！？」

「すごいな、私でもここまで鍛錬できないのに！本当に宦官らしくないのですね～！？」

（く、くすぐったい・・・！！）

楽しそうに、あれやこれと触ってくる少年。

怒るのを我慢していた星影は、今度は笑うのを我慢する羽目となった。

「・・・安林山の吟味はそれぐらいになさいませ。」

一通り、星影の腕を皇太子が触り終えたところで、厳しい口調で衛青は言った。

「夜も遅いというのに、共一人つけないで歩かれるのは危険なことです。私がお部屋までお送りいたしますから帰りましょう、拠皇太子殿下。」

「・・・ありがとう。では、一緒にこの者を部屋まで運ぼうか？」

「拠皇太子殿下！？」

「そうであろう？この者が私の部屋に来るのは、周囲のことを考え

ればよくない。しかし、叔父上は私を送らなければいけない。ならば、私が叔父上についていい　くしかないではないか？」

「・・・人を呼びますので、お待ちください。」

「私を送り届けさせるため者か？それとも、安林山を運ぶための者か？」

「拠皇太子殿下？」

「黄藩の手前、安林山を運ぶと言っておいて他人にその仕事を押し付けるのか？あるいは、私を部屋まで送ると言っておきながら、他の者に私を任せるのか？」

「拠様・・・！」

「やっとそう呼んでくれたね。」

他人行儀な発音が、親しい者への音色へと変わった。

その口調と呼び方に、少年は満足そうに告げる。

「皇太子になってからは、皇太子殿下、殿下と・・・叔父上は堅苦しくなってしまわれた。私はそれが寂しかった。」

「・・・わがままをおっしゃらないでください。仮にもあなた様は、皇太子と言う立場であるのですよ？」

「わがままなど言っていないよ。高級宦官の部屋を見てみたいだけだ。日々、関わっている者達の生活を見てみたいだけだよ。」

「ですが、拠様。」

「すぐ近くにいる側仕えの者達のことを知らぬのに、この国の人々のことを知ることができるかい？」

「拠様・・・。」

「将来に向けての準備だよ。なによりも・・・・せっかく戻ってきた叔父上と、ゆっくり話がしたいんだ。」

そう告げた表情からは、ハッキリと『寂しい』という感情が出ていた。

（衛青大将軍に会えなくて、心細かったのかな・・・？）

初対面である星影でさえそう思うほどだった。

そうなると、叔父である武人がそんな甥っ子を無視することもできず――

「・・・もしお叱りを受けましたら、衛青が連れまわしたとおっしゃってくださいね？」

「言葉の意味のわからない三つ、四つの幼子ならまだしも、私はもう十三だぞ？自己責任という言葉を知っていますか、大将軍？」

「自己責任を問われることになる前に、早急に安林山を部屋に運びます。・・・参りましょうか、拠様？」

「うん！」

叔父の言葉に嬉しそうに答えると、相手の服の袖を持つ皇太子。

これに対して衛青は、

「ご無礼を・・・。」

小さく詫びると甥っ子の手を取って、自分の服から引き離した。

「叔父上？」

驚いた少年の手と自分の手とをつなぐと、そままの状態でその手を星影の背へと回す。

（え！？ちょ、ちょっと！？）

「安林山は、動けぬ上に起きぬ状態ゆえ、お許しを・・・！」
「いいですよ。でもよかった！嫌われたかと思いました・・・。」
「ご冗談を。」

甥の言葉に、優しい口調で答えると星影を抱えなおす大将軍。
それまでと変わらぬお姫様抱っこで、再び廊下を歩き始めた。
先ほどと違う点があるとすれば、抱きかかえる星影の背中に回された手。
衛青の手と星影の背中に挟む形でつながれた形で、拠皇太子の手があることだった。

「無理に、手をつながなくてもいいんだよ？」
「なにかあっていかませんから。それよりも・・・手は痛くないですか？腕は大丈夫ですか？」
「ハハハ！大丈夫だよ！手をつなぐのは何年ぶりだろう！？なんだか楽しいなぁ～！」
「ご冗談を・・・。」

笑いながら言う甥っ子に、叔父は困ったように微笑む。
ようやく二人に、身内らしい穏やかな空気が流れたのだが・・・

（いやいや！本当に、ご冗談キツイですよ・・・！）

漢帝国きっての高貴な二人挟まれた星影は、とても穏やかな気持ちにはなれなかった。

第八十話　義姉弟そろって、考えてることは同じ？（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

詩経などについて書いてみました。
詳しいほうではないので、おかしい点があるかもしれません・・・。
その際は、ご一報いただけると嬉しいです（大汗）
ヘタレで、すみません。。。

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいなど
ありましたら、お許しください・・・！！

第八十一話　困難必然の恋人捜索（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」に断固反対いたします。※

ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／

上記法案に賛成される方は、　該当する漫画・小説は一切見ないと決めている方だと思っております。

なので、賛成しているのに該当する作品を見ているのはおかしいのではないでしょうか・・・？

第八十一話　困難必然の恋人捜索

コツコツと、確かめるように壁を叩いている。
すると、それに答えるようにコッコッと、少し調子の違う音が耳に届いた。
その音に侠客の表情は変わった。

コツ、コツコツ、コッコッ。
コツコツ、コッ、コッ。

会話でもしているかのような音がしばらく続いた後で、

ガッ！！

「！？」

な、なんだ！？

それまで鳴っていた音とは一変して、拳を叩きつけたような音がした。

「ふ～ん・・・どうやら、大丈夫みたいだな？」

それを受けて、壁を叩いていた男・凌義烈はニヤリと笑った。

「それじゃあ、行こうか？星影・・・？」

いたずらが成功した子供のような顔で、驚いた表情の林山を手招きした。

月がかげり、再び闇へと戻った廊下を義烈について進んだ林山。
先頭を進む侠客は、よく見知った自分の縄張りのごとく宮殿の中を進む。
抜き足、差し足、忍び足。
駆け足、小走り、つま先歩き・・・と。
それらの動きを繰り返した後、二人はある場所へとたどり着いていた。
そこは宮殿の中心部で、義烈が言うには、

「ここに、オメーの妹らしいのがいるそうだぜ?」

ということだった。
確かに、大勢の人の気配はした。
鼻には、女性特有の上品な香の臭いもした。
耳を澄ませば、吐息のような寝息が聞こえた。

つまりは一一一一

「ついに・・・星蓮のところまで来たということか・・・!?」

（やっと・・・・・やっと彼女に会えるのか！？）

高ぶる気持ちを抑えながら、美しい細工が施された入り口に足を踏み入れようとしたのだがー

「無用心だぜ。」

肩をつかまれ、後ろへと下げられた。

「義烈！？」

「だから声がでけぇーよ！・・・安全確認しなきゃ駄目だろう？」

そう言うと、入り口の壁に駆け寄り、その身をピッタリとくっつけた。

確かめるように、肩耳を押し付け、中の様子を伺っていた。

闇に慣れた林山の目から、相手の険しい表情が見て取れた。

（そうだよ・・・なにやってるんだ、俺は。）

ここは宮中なのだ。

皇帝以外の男が忍び込めば、速攻で殺されるぐらい危険な場所なのだ。

存在を悟られるだけでも命取りになるというのに、先ほどの自分はなんの警戒もせずに浮かれ足でのん気に入り込もうとしていた。

（まだまだ修練が足りないな・・・。）

もうすぐ愛する女性と再会できるからといって、油断しすぎだっただろう。

そう自己反省しながら侠客の大親分を見れば、彼は利き手で拳を作ってそっと壁にあてていた。

コツン。

静かなこの場所では、ひどくその音は目立った。

（何のまねだ？）

壁を叩くことに、なんの意味があるというのだ？
よく、瓜などの質を確かめる時に叩くことはある。
それと似たような動きで叩いたのだ。
なにかを確かめているのだろうか？

（だとしたら、なにを？）

コツコツ。

この男がすることだから、何か意味があってのことだろうが――――

（そんな音を出し続けたら、誰かに気づかれないか？）

義烈が壁を叩く度に、林山は不安にかられた。
耳は壁を叩く義烈に向けつつも、目は周囲へと向けていた。
この音を聞きつけ、人がやってこないか。
誰にも見られていないかと警戒しながら。
そして何度目かになる音を立てた時だった。

コツコツ、コツン。

・・・カツン。

「！？」

（なに！？）

明らかに、義烈が立てたものではない音が響いた。
心臓が嫌な動きをする。
背筋に悪寒が走るの感じながら、戦闘体勢に入る林山。

「よせ。」

それを義烈が小声で制した。

「心配すんな、星影。・・・味方の音だよ。」

「み、味方？」

「ああ。だから殺気を抑えな。」

こちらを見ることなく、あっさりとした口調で言い捨てた。

（・・・とんでもない奴だ。）

義烈という男が只者でないのはわかりきっていたが、そう思った理由は一言では言えない。

宮中内部を知っているだけではなく、その宮中に彼の仲間がいたということ。

殺気立つ自分の様子を見ることもなく、気配ひとつで察したこと。

普通ならば、後宮に忍び込むと聞いただけでも肝をつぶすのに、この男はそんな場所の中心で平気な顔で壁を叩き続けていた。

「・・・とんでもない奴だな。」

思わず、口をついて出た言葉。そこでようやく、問題の男はこちらを見た。

「お前こそ、とんでもない奴だろう？妹のためとはいえ・・・恐れ入るぜ。」

感心したとばかりに言う義烈の口調に、林山は恥ずかしくなった。
それと同時に複雑な気分になった。

（俺は、嘘をついているのに。）

本当の星影は宦官として宮中にいるわけで。
どちらかといえば自分は、安全な場所から婚約者探しをしていただけで。

「・・・俺以上に、とんでもない奴が他にいるけどね。」
「そりゃいい。今度紹介してくれよ。」

からかうような口調で言うと、こっちへこいと手招きする。
呼ばれるがまま、義烈の側まで行くと相手は林山の腕をつかむ。

「ぎ！？」

義烈と、名を呼ぶ前に、闇が広がる部屋の中へと引きずり込まれた。
中は予想以上に広かった。
辺りを見渡せば、そこにいたのは――――

「しょ、少女・・・・？」

年端も行かぬ幼子達だった。
それもすべて女子ばかり。

「なんだ、ここは？」
「奥様方の部屋さ。」
呆然とする林山に、義烈は少女達の正体を伝えた。

「ここにいるのは、全員、皇帝の妻だ。」
「・・・え？」

妻って・・・あの妻？
女房・奥方・連れ合いの意味の・・・妻だよな？
妻？

そう思って、一番近くにいた女の子を見る。

「・・・。」
「どうした？」
「いや、これ・・・。」
「これじゃねぇーだろう？無礼だな。陛下の側室だぜ？」
「いや、そうだけど・・・」

これはどう見てもーーーー

「まだ、五・六歳ぐらいじゃないか・・・・・！？」

そこにいたのは、まさに正真正銘の幼女。

「全員子供じゃないかぁーーーー!?」

その部屋には幼女しかいなかった。

「まぁな~この部屋にいるのは大体七歳未満の妻達だ。さすがに一人で寝かせるのにはちょっとなぁ~てことでよぉ!」

「そっか~それで~・・・てっ!!ーーーーなんでだよ!!?なんで、こんな子供が妻候補なんだ!?」

「声でけぇよ!候補じゃなくて、妻だよ。」

「いや、でも早いだろう!?」

当時の中国では、十歳前に結婚することも多く、現に武帝・劉徹が最初の妻と婚約したのも七歳である。

時代によって、結婚事情や風習は変化したが、早いうちから結婚・婚約するというのは古代中国ではごく当たり前のことであった。

だから、妻が幼いということは別におかしいことではない。

ないのだが・・・・

(今の皇帝は、うちの師匠よりも余裕で年上だぞ!?それがこんな幼女達を妻に迎えるのはー・・・!!)

前漢の時代では、これがどのように思われたか知らないが、現代でいえば犯罪になるだろう。

(俺から星蓮を奪っておいて、それでもまだ足りないからとこんな

子供まで妻にするとはーーーー許せない！！）

当時の風習ではおかしいことではなかったが、林山からすれば十分失礼なことに感じられたのであった。

「驚くのも無理ないか・・・。本来なら、国許で成長を待ってから宮中に上がるのが普通だからな～」

「そうじゃないだろう!?あ・・・・悪い。」

思わず大声を出したことを詫びながら口元を押さえれば、困った表情で義烈は答えた。

「気にすんな。どうせこの幼な妻達は、朝まで起きやしねぇよ！薬がたっぷり染み込んだ飯を食ってるからな?」

「なんだ、よかった・・・！それなら、絶対に起きな・・・・ーーーーてっ!?」

一瞬納得するが、すぐに相手のおかしな発言に気付いてそれを問いただした。

「何食わせてんだよ!?てか、え!?薬って!?え?え!?ええ!!?」

「ぐっすり眠れるようにだよ。起きてもらっちゃ困るからな?」

「そうじゃねぇよ！な、なんで食事に薬なんて・・・どうやって・・・!?」

「内緒だ。」

唇に人差し指を一本当てながら、口の端を上げて言う男。

内緒って・・・！

（本当に何なんだこいつは！？）

ここまでくれば、何が起きても驚かないつもりであったが、さすがにこれは限度を超えている。

（宮中の人間の食事にまで細工をできるほどの力があるということは－－－やはり・・・！）

そんな思いで、相手の顔を見れば、同じように自分を見ていた。
そしてニヤリと笑うと、掴んだままの林山の腕を引っ張る。

「あ！？」
「いくぞ～」

こうして、引きずられる形で歩き出す林山。
放せと言うものの、相手は鼻歌交じりでろくに返事などしない。
先ほど、吐息ひとつにも文句を言っていたのに、今はのん気に花街で聴いた音楽を口ずさんでいる。
誰も起きてこないと知った上でのことだろうが・・・

（なんて協調性のない奴だ・・・）

怒りとも呆れとも思えるような思いを抱けば、男は眠る子供達を覗き込みながら不意に口を開く。

「それでどうだ？林山」

足を止めることなく、少女達が眠る部屋を進みながら義烈が問いかける。

「・・・どうとは？」

「この中に妹はいるか？」

「・・・星蓮は、今年で十六なんだが？」

「ワハハハ！知ってるさ。冗談だ！」

この野郎・・・！

楽しそうに笑う相手に、それまでのイライラもあり、腸が煮えくり返る林山。

無言でにらめば、ここでようやく侠客の親分は振り返った。

「そういう面するなよ。ほれ、次の部屋からは少し成長してるぜ。」

「成長・・・？」

言葉の意味がわからず、そのまま引きずられながらついていけばー

「これは！」

新たな部屋で目にした光景。

（なるほど・・・これが、成長の意味か・・・！）

「この部屋が、七～八歳の妻の部屋だよ。」

先ほどの部屋にいた子供達同様、無垢な表情で眠る子供達がいた。

「・・・この子達も・・・皇帝の妻なのか？」

「そうなるな。」

驚く林山の様子を楽しみながら、グイグイと腕を引っ張る。

「なぁ・・・いい加減、腕はなしてくれないか？」

可愛い顔で眠る子供達の中を通り過ぎながら、林山は自分の利き腕をつかんでいる男に言う。

「だめだめ！ただでさえお前、この奥様方に同情してるだろう？そんな奴を放してみろ、たちまち石造のように動かなくなる。」

「石造って・・・！？」

「同情するのはかまわねぇが、そこで足を止められちゃかなわねぇよ。オメーがいくら哀悼の意で幼な妻達を見つめても、こいつらの現状は変わらないんだからな？」

「え？」

「皇帝の妻っていう現実はよ？」

「ー・・・！」

その言葉で何も言えなくなった。

言えなくなったと言うよりも、返す言葉が見つからなかった。

彼の言う通り自分は、幼いこの子達に同情していた。

きっと、自分の意思で皇帝の妻にと望んだわけではない。

親や周囲の勧めで、そうなっただけ。

そうならざる得なかっただけだろう。

だから、穏やかな顔で眠るこの子達が哀れで仕方なかった。

「ほれ、次の部屋が見えてきたぞ～今度は、九～十歳の部屋だ。」
「あ、ああ・・・。」

入り口をくぐれば、先ほどの部屋より少し狭くなっていた。
その分、人数も減ってはいたが・・・

「ここからは、部屋数が十九になる。」
「は？」
「今までは、ひとつの部屋に全員が納まっていたが、今度は十数人単位で十九部屋ある。まぁ・・・目的の部屋じゃないから素通りすりゃいいんだが・・・一応な？」

片目を閉じながら言うと、今まで通り部屋の真ん中を堂々と歩いた。
程なくして部屋から廊下に出た。
今度は部屋の中を通ることなく、廊下を一直線に奥へと進んでいく。

（どうやら、さっきの部屋は通り道として通っただけみたいだな。）

その証拠に、それに面した部屋へは見向きもしなかった。
腕を引かれながら、それらの部屋数を数える。

五、六、七、八・・・・・・十六、十七、十八、十九。

（最初に通った部屋を入れれば、十九だ・・・・！）

数え終わったところで、次の部屋の入り口に差し掛かった。

「・・・今度は、十一～十二歳の娘達の部屋か？」
「ご名答。わかってるじゃねぇか？」

振り返ることなく義烈は言う。

「次も、通り道以外は素通りだ。部屋数は二十三あるけどな。」
「年を重ねるごとに増えてるのか・・・？」
「まぁな。十三歳は二十五部屋、十四際の部屋は二十九部屋、十五の部屋は三十二部屋ある。」
「十三からは同じ年の娘達ばかりになるのか？」
「ああ。ガキが産める年になるからな。」

当たり前のように言われた言葉に、胸が痛むのを感じた。
十三から女扱いになるのはおかしいことではないが、ここでの女扱いというのはどうしても下世話な想像しか出来ない。
悶々とした気持ちのまま、眠る娘達の中を進んでいった。
このあたりから林山はあることに気がつく。

「・・・みな、優れた容姿のものばかりだな・・・。」
「たりまぇだろう～？最高の女しか入れない後宮なんだからよ！」

幼子達の部屋ではわからなかったが、年齢が上がるにつれ、娘達の容貌が整っているものばかりになっていた。
すでに美女といえる容姿のものもいれば、将来有望というもの。
愛らしい者、上品な者と・・・綺麗な娘達しかいなかったのある。
時折、並みの容姿の者もいたがー

「あれは、父親の身分が高いんだよ。あっちは、代々続く名士だ。」

と・・・なんらかの優れた点があるのだった。

（なんだろう・・・この気分・・・。）

上手く説明できないが、なにか腑に落ちないものを林山は感じていた。
後宮という場所は、人や物共に、美しく、すばらしく、優れたものしか存在しない。
皇帝がいるので、それはそれで当然のことだがー

（気持ちが悪い・・・・！！）

なぜこうも、完ぺきなものしかないのだ？
何一つとして、異質で、粗悪なものはない。
普通のものすら存在しない世界。

（綺麗過ぎて、気持ちが悪い・・・・！）

そう思うのは生まれて初めてだった。
綺麗で気持ち悪いなど、矛盾している。

「胸糞悪いだろう？」
「義烈？」

その言葉に足を止めれば、相手も動きを止めた。
こちらに背を向けたまま、男は林山の腕を離した。

「ここは最高の場所だけどよ、どうにもこうにも胸糞悪くていけねぇ・・・・」
「・・・義烈もそう思うのか？」
「やっぱりお前もか？」

林山の問いかけに、侠客は振り返る。

「やっぱりなぁ～道理で、おめぇーとは気が合うと思ったんだよ。」

歯を見せて笑うと、止めていた歩みを進め始める。
それを追いかけながら、林山は再度問いかけた。

「義烈！俺はー・・・ここが高貴な場所だとは思う。特別な場所だとは思うんだが・・・なぜ、気持ちが悪いなどと思ってしまったのかがー・・・！」
「本能だろう、きっと。」
「本能？」
「ここはな、清浄過ぎるんだよ。目立った悪がない分、ささやかな普通がない分、物事の引用の調和がとれてねぇ。」
「悪がない・・・？」
「表向きの悪がない。けど、裏に回れば表と相反して禍々しいまでの貪欲な隠れた悪がある。」
「貪欲な隠れた悪・・・？」
「本当は薄汚い悪があるくせに、それがまったくないような態度をとっている。よくわからねぇ根拠と自信で、自分達は悪くないとほざきやがる。テメーらのすることは正しいと断言しやがる。その身

勝手なやり方の犠牲者のうちの一人が、お前の妹だ。」
「あ・・・！」
「それが後宮だ。俺はそんな白々しい態度が、気に入らねぇんだよ・・・！」

義烈の言葉で、林山は自分の中の気持ちがわかった。
嫌悪感だったのだろう。
美しいものしか、優れたものしか認めない世界。
自分達こそが正しいとして、それ以外の者はどうなろうとかまわない。
無碍に扱われて当たり前だ、当然だという態度。
そういった者が星蓮を奪ったという事実。
それが林山の無意識の中でつながり、不快な気持ちへと導いていたのである。

「まぁいいさ。こうして、ここと関わるのはそんなに多いことじゃねぇ。どちらかといえば、一期一会の付き合いだからよ。」
あざ笑うように言うと、声を潜めながら言った。

「さぁ～てと・・・ずいぶん待たせちまったが星影。」

ポキポキと拳を鳴らしながら義烈は告げる。

「こっから先が本番だぜ。」

周囲をうかがいながら発せられた言葉。
薄い色の枝垂れのようなものが入り口にかかっていた。

「見ろ。目当ての場所だ。」

目で合図しながら笑う義烈。

「こっからは、十六歳からの奥様の部屋になる。」
「ここに星蓮が・・・!?」
「情報が正しければいるはずだ。先に言っておくが、これから先は今までと違うぜ?それまでは集団で雑魚寝みてぇに、みんなで寝てたがそうじゃねぇ。一部屋あたり、六人で寝てる。だから部屋も今までのもんより小さいだろう?」
「確かに・・・そうみたいだが・・・。」

入り口を見る限り、こじんまりとしている。
少人数用の部屋だとはわかったがー

「それで・・・どれなんだ・・・・?」

収容人数はわかったが、どこに星蓮がいるかわからない。
というよりかは、

「一体どの部屋なんだ・・・・・!?」

端から端まで、廊下に沿って順序良くついている入り口。
壁から生えた、それぞれの入り口ごとに1つずつつけられている明かりは、適度な間隔をあけた状態でさらに奥まで続いていた。
明らかに、今までの部屋数とは桁が違う。
ざっと見る限り、四十以上は肉眼で確認できたが・・・。

「・・・何部屋あるんだ?」

見えた倍以上はあるな、と思いながら聞けば、

「え~・・・・三百室ぐらいかな?」
「三百っ!?」

「ああ。一応、今月入った女は二百って聞いてたんだが、あれから追加で百ほど増えてたみたいでな。」
「だからって増えすぎだろう!?どうして二桁から三桁に変わるんだよ!?陛下は十六才好きか!?」
「十六が好みかどうかは、本人に聞いたことねぇからわからねぇけど、単に適齢期だからだろう。後宮に召出すための教養や何やらをつけさせて、それが実を結ぶ年頃ってのが。」
「だからって!」
「それによ、今までは十~二十数人が一つの部屋にいたわけだぜ?それが一部屋六人になったから三桁になっただけだ。つまり、大部屋にいた幼な妻達を六人ずつの部屋に割り振りしたら、同じ数ぐらいにはなるだろう?」
「あ・・・それはー」

(そうかもしれない・・・。)

彼の言い分はもっともだった。
義烈の言葉納得した林山だったが、

「いやいやいや!待てよ!お前、星蓮候補は八十九人だって・・・!?」
「ハハハ!やっぱり女の世界にも先輩後輩があってなぁ~」
「は?」
「新入りの面倒は先輩が教えるってことで、各部屋に振り分けちまったらしいんだよ。」
「はぁ!?」
「ほら、同じ十六でもよぉ~七歳から入廷して後宮にいるのと、十二で入廷して後宮に来たのとじゃ、そういう差ができるだろう?それを補うっていう理由も兼ねての部屋割らしい。」
「はぁあああ~~~~~!?」

な、なんて余計なことを・・・！！

「ご親切なことしてくれるだろう？入った順でへに割り振りしてくれりゃあいいのによぉ～古い奴は古い奴、新しい奴は新しい奴ばっかでかめてといてくれりゃあ、こっちも探す手間省けたんだけどな？」

まさしくそうだ！

おそらく、宮中に早く慣れるためという目的も含んだ上でのことなのだろが、こちらからすれば迷惑極まりない。

「とんでもない手間じゃないか・・・！」

苛立つ林山に、侠客はさらに気持ちを荒げる発言をした。

「それによぉ・・・お前の妹が妻候補として入ってるっている確証がねぇからな・・・」

「確証って・・・郭勇武絡みで入ってるのは間違いないんだぞ！？」

「それがな、玉蘭にそのこと話したらよ、別の可能性もあるって言われてなぁ～」

「別の可能性？」

「お前の妹、音楽とか歌とかできたんだろう？だったら、舞も舞えるよな？」

「え？ああ・・・地元じゃ、『花の化身』、『舞う花弁』とも呼ばれていたから。」

「だったら、しとらしい妻や奥ゆかしいお嬢様じゃなくて、妓女として陛下の御前に出される可能性があるってよ。」
「妓女っ！？」
「おうよ。なんせ妓女から、陛下の妻になった奴もいるからさ。今の皇后様も家妓出身だろう？」
「だからって、どうして妓女に！？」
「陛下のお情けを待つ、高貴なお家のお嬢様はわんさかいるんだぜ？同じ紹介するなら、気軽に顔出しができる宴会とかが好機だろう？あれだけ悪知恵の働く男なら、そういうひねった考えもありだろうからな～・・・」
「だからって、妓女なんて・・・！」
俺の愛した星蓮が妓女として皇帝の前に？
いや、この場合だと――――
「宮中で、皇帝の前で出すなら『宮妓』になるだろうな。」
「『宮妓』だと・・・・！？」
「まぁ、民間から献上されたとなれば、『宮妓』とも言えるだろう。献上じゃなきゃ、違う方法で入ったかもしれ・・・・」
「ふざけるなっ！！」
義烈の言葉を遮るように怒鳴った林山。その表情は怒りに染まっていた。
当時、妓女と言えば『宮妓』・『家妓』・『営妓』・『官妓』・『民妓』と大まかに分けられていた。
その中でも一番高貴な人物に近い妓女といえば、皇帝の後宮にいる

『宮妓』であった。
本来『妓女』とは、歌や舞などのさまざまな技芸で、人々をもてなし喜ばせることを仕事としている。
そのため、そこ内容は幅広く複雑であり、間違っても『妓女』＝『娼婦』と考えるのは誤解である。
つまり、妓女のすべてが体を売っているわけではない。
なによりも、己が得意とする歌・舞・演劇などの芸能、それに加えて肉体を使って接待するのであるからなくてはならない仕事であろう。

よく、古今東西・古今に関わらず、体を売る者に対して多くの者がその者達を軽視・差別する場合がある。身を売り、春を売る者のみを非難して攻め立てるが、その行動が矛盾していることに気づいてない者が多いのもその特徴である。
体を売るのは、その体を求めているものがいるからこそ、売っているのである。
需要と供給があるからこそ、成り立つ職業であるので、彼女達だけを悪とみなすのは間違っている。
もっとも、その道で最高の位と名声を得た者の多くが自分の仕事に誇りを持っているので卑屈になることもなかったようである。

話がそれてしまったが、つまり林山は怒っていたのだ。
自分の愛する婚約者が、高官・貴族・豪商の家にいる個人所有の『家妓』でなく。
武人を主とした将軍や兵士達など、軍隊を慰める軍営の管轄下の『営妓』ではなく。
文官を主とした中央政府のや州や郡で、官僚のもてなした『官妓』ではなく。
一般の民間人なら誰でも通え、人身売買によってその労働力を得ていた売春を主な商売とした民営の『民妓』ではなく。

（皇帝の後宮にいる『宮妓』だと・・・！？）

『宮妓』になる者には、皇帝への敬意を表し、民間から技芸に優れているとして献上されてなった者達。
異国との戦いを通じ、勝利の証・戦利品として連れ帰られた者達。
同盟・服従の印として贈られた者達。
いずれにも該当せず、『宮妓』にならざえるをえない者ーーーーーー

（郭勇武！！星蓮を籍没（せきぼつ）扱いする気かっ！？）

”籍没”とされた者達がいた。
籍没とは、なんらかの罪を犯し、罪人としてあるいは罪人の一族として身分を剥奪され、官の所有物とされる法律の提供を受けた者達のことである。

彼の怒りの源は、そこからきていた。
皇帝の側で、罪人が働くというのも変な話だが、これは後世まで続く風習となった。
一番分かりやすいものでは、これよりも後、後漢末期の三国時代。
呉の孫権の息子の1人で、後に皇帝となる孫亮の生母などはそれに近い者であった。彼女は父親が犯した罪に連座し、宮中で機織の仕事をしているところを孫権に見初められて妻となったのである。
ちなみに、同時代の魏の曹操の二番目の正妻・卞氏も妓女出身であった。

（玉蘭さんの言い分はわかる。）

力ある者達の前に簡単に姿を見せて、楽しませることができるという点では玉蘭の推測は正しいといえた。正しいが、この場合どういう名目で妓女として自分の恋人が召し上げられたのか。

当然、人間として差し出されたのではないと彼はわかっていた。

妓女は献上品。

『宮妓』になる者の中には、本人が罪を犯したり、家族や一族などの身内の罪のとばっちりで妓女へとなる者がいたのである。

それがわかっていたから許せなかった。

（俺の星蓮を妓女などと・・・許せない！！）

林山が怒っているのは、義烈から見てもよくわかるほどであった。

しかし、ここで誤解しないでほしいのは彼が妓女と言う職業を差別しているわけではないということだ。

確かに、昔から体を売る仕事というのは、周囲から倦厭（けんえん）されがちである。

嫌われる職業だといえる。

だが、今の林山が怒っている理由はそこではない。

自分が心から愛する女性を。

自分との生涯を約束した女性を。

自分のだけが独り占めして良い女性を、皇帝の目にとまりやすり『宮妓』にしているかもしれないというのだ。

両思いの相思相愛で愛しあっている女性を、自分以外の男が確実に物してしまうかもしれない可能性。

それが『営妓』や『官妓』でなくて、よりによって『宮妓』なのだ。
『宮妓』を好き勝手にできる一番の権力者は皇帝である。
それを思えば――

「ふざけやがって・・・・！」

腹立たしいこと、この上なかったのだ。

「悪かった。」

ひどく落ち着いた口調に、思わず顔を上げる。目の前に義烈の顔があったことにも驚いたが、その表情に林山は驚いた。

「そんなつもりなかったんだ。ちと、気を紛らわせようとしたんだけどよ。」

悪かったという表情と言葉を自分に向けている侠客の大親分。

「あ・・・いや。」

怒りが発動したのは”献上じゃなきゃ、違う方法で入ったかも”という相手の言葉がきっかけだったが、義烈自身への怒りの気持ちなどはなかった。

「あなたに怒ってるわけじゃー」

「けど、怒らせたのは俺だろう？」

そう言うと、ごめんな、と言いながら肩を叩かれた。

「最後まで責任持つから、勘弁してくれよ？」

「あ・・・いや・・・うん・・・。」

どう答えていいかわからず、了承の答えを出せば相手はにっこりと笑う。

「よ～し！それじゃあ、お前の妹を探そうぜ。その・・・玉蘭の話も無視できねぇから、一応妓女のいる場所もあたってみる予定だからよ。ただな・・・」

「どうした？」

「ああ・・・妓女の宮妓のいる場所は、ここではまた別の場所なんだよな。」

「え！？それじゃあ、また移動するのか！？」

「いいや。今夜宮妓のところへ行くのは無理だろう。つーか、日が昇る前までにここから出ないといけねぇからな～今夜中に宝仙宮にいるオメーの妹候補の顔の確認、できるかどうかも怪しいからな・・・。」

「なっ！？大丈夫なのか・・・！？」

「心配するな。見ろ！入り口垂れ下がってる薄布。その右下を見てみな。」

「右下・・・？」

言われるがまま、薄布に近づいてみる。すると、月の光を受けて銀色何かが光った。

「これは・・・？」

「針だ。」

刺さっているものを引き抜きながら義烈が笑う。

「お前の妹候補がいるかもしんねぇ部屋の薄布の右下に、刺しておいてもらったんだよ。」

「刺しておいてもらったって・・・・！？」

「これなら、持ち運びも便利で怪しまれないだろう？」

「・・・宮中でのお前の協力者って、絶対に女だろう・・・？」

「クックックッ」

林山の問いに答えず、肩を震わせながら笑う男。

「三百ある部屋の、いくつかにこいつを埋め込んでくれてるそうだ。」

「いくつかって・・・八十九本だろう？」

「八十九人全員が、一人ずつ一つの部屋に割り振られてるとは限らないだろう？」

「じゃあ、必ず八十九人だとは断言できないのか！？」

「多くて、八十九部屋だとは断言してやるよ。」

計画性があるようで、計画性がないような義烈の話。

「どちらにせよ、数の目途がつくだけマシだろう？」
「そうかもしれないが・・・」

多少の不安はあったが、ここまでくれば悩んでいる暇はない。

（この男を信じると決めたんだから、信じるしかないだろう。）

「さぁ、おしゃべりは終わりだ。さっさと引き抜いて、面確かめようぜ？」
「・・・わかったよ、義烈。」
「お前が待ち望んだ妹とのご対面だぜ。辛気臭せぇ面はしめぇーにしようや、星影？」

大胆素敵のふてぶてしい男の姿が、いつになく頼もしく見えた。

第八十一話　困難必然の恋人捜索（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

サブタイトルをつけるのに、時間がかかり、アップが遅くて申し訳ないです・・・！！

本編では、ようやく林山が星蓮に近づいてきました。

話の中で登場した「妓女」ですが、少し説明不足だったのでここで少し語らせてください・・・！！

「妓女」は、日本だと「遊女」と同じカテゴリー扱いになります。

もし、日本の遊女と違う点があるとすれば、技芸を深く学んでいたものが多かったこと、学べる環境が充実していたことです。

身請けの基準にしても、若さや美貌で選ばれるのではなく、心なごませる話術、風流で情熱的な詩作、相手を楽しませる酒令といった優れた才知や教養面が重視されていました。

なので、体のみの芸妓ばかりを言うのは誤解です。それも一つの才能としてあるのであって、身を売らない妓女もいましたので。

そのため、文化人などの開いた模様しものに招待され、踊りや音楽、対等に詩作などをともに行ったり、議論を競ったりもしていました。

また、同年代の女性よりも自由が許されていたのだが、その分身分は低いままで、仮に身請けされても正妻になることはまれで、良くて側室や妾などでした。しかも夫が死ねば、召使に降格されたり、わずかな手切れ金で追い出されたりと、その家の正妻次第で哀れな人生の終焉を送ることとなっていたのです。ただし、多くの場合が「この家は合わない。」と思えば、再び妓女の世界に戻ることもできました。手に職がある分、それで食べていけたからです。

また、彼女達は時代の流行に敏感だったので、彼女によって流行ったものは庶民にも受け入れられたようです。

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、という箇所を見つけられた方！
こっそり教えてくださると、嬉しいデス。。。
本当にヘタレで、すみません。。。

第八十二話　直感は大事（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第八十二話　直感は大事

最初に踏み込んだ部屋は、春らしい花の臭いがする場所だった。

「どうだ？いるか・・・・！？」

夢の世界の住人となっている娘達を見ながら義烈が問いかけた。
同じように、林山も眠る娘達の顔を見る。

「ーーーー・・・・いいや・・・」

（ここにはいない。）

星蓮はいなかった。
その答えに義烈は、そうかとつぶやいた後で、

「次いくぞ。」

と、林山を部屋から連れ出した。
再び廊下に出て、薄布の右端を見る。
八つほど進んだ部屋に、次の針が刺さっていた。

「ここだ。」
「ああ・・・」

義烈の後に続いて、部屋の中に入った。
ここは、かんきつ類のにおいのする部屋だった。

「どうだ?」
「・・・・違う・・・・。」
一通り、娘達の顔を見た後で林山は首を横にふった。
「次だ。」
林山の答えを聞くや否や、次の部屋へと向かう義烈。
それに、顔の確認をしていた林山も続いた。
針の刺さっている部屋を探しては、部屋の中の娘の顔を確認する。
周囲の様子を伺いながら、
(きりがない・・・。)
希望を持って部屋に入る。
期待を込めて顔を見て、失望のうちに部屋を後にする。
それを何回も繰り返し続けた。
地道な作業である。
「どうした?もうへばったか?」
「大丈夫だ。」
時折、自分を気遣う義烈の言葉に林山は平気な顔で答えた。
ここに来るまでのことを思えば、どうということはない。
林山の様子に、相手もそれ以上は言わなかった。
二人は無言で黙々と星蓮探しをした。

「ここにもいなかったか。」

若草の香り漂う部屋から出ながら侠客はつぶやく。
それにあわせて林山からもため息が漏れる。
息を吐き切ったところで、彼は義烈に尋ねた。

「あと何部屋ぐらいあるんだ、義烈?」
「ん~半分は終わったな・・・。それを思えば、予定よりは早いな。」
「そうか。それなら・・・宮妓のところも探せるか・・・?」
「だめだ。」

恐る恐る聞いた林山の言葉を、即答で拒否した。

「今日は宮妓のところには行かねぇ。」
「どうしてだ?」
「お前焦ってるだろう?焦ってる時に仕事しても失敗するんだよっ。」

そう言うと、軽く林山の額にこぶしを当てた。

「お、おい!」

痛くはなかった。肩を軽く叩くような感覚で当てられた。
子供をあしらうような態度にむっとする林山。
それを横目で見ながら林山は口だけで笑う。

「まぁ・・・場所の下見ぐらいはしてもいいが、探すのは次の機会だな。」

「次の機会って・・・そう何度も、宮中に侵入できないだろう？」
「馬鹿。夜の商人として入れば簡単だろうが。」
「ま、またそれか！？」
「それしかないだろう？大丈夫だ。ああみえて玉蘭はその道の達人だからな。」
「そうだが・・・」
「あいつも、奉仕活動でしてるわけじゃない。ちゃんとお前からもらった金を渡してる。いわゆる商売だ。」
「商売といわれても・・・」

やはり、女性に卑猥なことをさせるのは気が引けた。
今も彼女は、複数の兵士相手にその体を開いているのだろう。

（一人でも多くの邪魔者をひきつけ、俺達の仕事の妨げにならないようにと健気に・・・！）

そう思うと、胸が締め付けられた。

「まじめに考えすぎなんだよ、お前。」

そんな林山に義烈は言った。

「女がほしいから買う。女を買いたがってる男がいるから春を売る。需要があるから供給があるんだ。目的果たすために、きれいも汚いもないだろうが？」

そう言った男の表情は真剣そのものだった。
なによりも、言っていることが理にかなっていた。

「お前も、覚悟決めたならぶつくさ言うな。お前の優しすぎる性格は問題だぜ？」
「優しいって、別に俺は普・・・」
「普通じゃねぇな！変なところで優しいんだよ、お前。中途半端に優しすぎるから失敗するんだよ。」
「ちゅ、中途半端って！」
「どちらかと言えば優柔不断になるのかね？けど、その性格治した方がいいぞ。テメーだけじゃなくて周りに迷惑かけるんだからな？」
「うっ・・・」

だから、義烈の言葉に言い返せなかった。
心当たりがあったので、黙るしかなかった。
そもそも、星蓮が宮中に召された原因を作ったのは自分にあるようなものだった。
優柔不断な性格。
桂蓮とのことをあいまいにした自分。
己の作った不安は、二人の姉妹を不幸へと巻き込んでしまった。

星影は、自分が俺を巻き込んだと思ってるみたいだがそうじゃない・・・。

（巻き込んだのは、俺だろう・・・。）

すべては俺の性格が問題。
優しいかどうかわからないが、自覚はしてる。
優柔不断な自分の性格。
自覚はしてるが、

「まぁ、優柔不断ってのは簡単に治るもんじゃないから治せって言うのも無理な話かね～？」

ケラケラと笑いながら言う男。

・・・わかってはいたが、こうもはっきりと親友以外に言われてしまうと傷つく。

「とにかく、今日は妻候補の中だけから探すぞ。後は後日だ。」

「・・・わかった。」

あれもこれもと欲張れば、上手くはいかない。

今日のところは、妻達の部屋に星蓮がいるかどうかの確認をするぐらいで終わらせた方がいいだろう。

だから、義烈の言葉に従った。

「しっかしよぉ～こうも女が多いと、使う香の種類も多いんだな～」

自身の衣服をつまみながら忌々しそうに義烈がぼやく。

彼の言う通り、いろんな匂いをかぎすぎてはな変になるのを林山は感じていた。

「仕方ないさ。香を焚くのは上流層のたしなみでもあるし・・・」

「だとしても、移り香がすげーぞ！完全に衣服にしみこんじまってる。」

そう言いながら、自分の服のにおいをかぐ男。

それにつられて、林山も利き腕の袖を鼻に近づけた。

「うっ！？」

な、なんだこれ・・・！？

甘いようなむせるような、果物が腐る寸前の悪臭のような臭い。
頭痛を起こすようなわけのわからない香り。
気持ちが悪くなった。

「これはー・・・・！！」

（いろんな香が混ざった結果か！？）

思わず顔を背ければ、同じようにそっぽを向いていた義烈と目が合った。

「うえぇ～ひどいな、これ？」
「ひどいというか・・・お香で吐き気を覚えたのは初めてだよ・・・！」
「高価なお香は香りが強いからな～」
「混ざったら、上品な香りも台無しだ・・・。」

体の臭いを気にする林山に、義烈は盛大なため息をつきながら言った。

「俺はよぉ・・・汗かいた素肌から香るほんのりとした甘い匂いが好きなんだけどなぁ～」
「どんな匂いだよ！？」
「汗かいた後の匂いかね～」

どういう意味の汗をかいた後の匂いかは、にやける男の顔で想像できた。

「お前はいやか？女の柔肌の素のにおい。」

「下品だぞ、義烈。」
「ホント、真面目だよな?いいなぁ～女の肌の匂い!運動した後の女の匂いはいいぜ!なぁ!?」
「あ、ああ・・・。」

同意を求められ、乾いた笑みでうなずく林山。
実際は、まだ互いの肌すらあわせていないのだが・・・。
とはいえ、こんな匂いをつけて戻れば、周囲に怪しまれないだろうか?

「心配すんな、星影!」

そんな林山の肩を叩きながら侠客は述べた。

「どうせこの服は、隠密行動のためのものだ。脱いだ後で、湯をつけた布で体を拭けばいい。そんでもって、体拭いた上から別の香をつければバレねぇーよ。」

口に出したわけではないのに、林山の考えていた不安要素を言い当てた義烈。
その上で、解決策を口にしたのである。

「・・・顔に出てたか?」
「面白いぐらいに。」

(悪かったな・・・!)

相手の言葉に、離してくれと肩の手を振り解く林山。
それと一緒に、視線を義烈からそらした時だった。

（あれ？）

遠くの視界に、何かが動くのがわかった。
半分月が隠れていたため、それはぼんやりとしか見えなかった。
廊下を照らす明かりの横を、黒い何かが通り過ぎるたびにその炎がゆれていた。

（動物？いや、動物だとしたら檻にいるだろう。大きさにしても大きすぎる。）

じっと見つめていれば、かげっていた月の半分が顔を出し始めた。
その光により、黒い何かは形付けられ、はっきりと輪郭を現し始めた。

（・・・人だ。）

動物だと思った黒いものは人間だった。
それも女性だった。

（いや。女性・・・というよりはーーーーー・・・・・少女？）

何故こんなところに女の子が？
ここにいる人間は、義烈のおかげで起きてこないようになっている。
それが、目に映っている少女はチョロチョロと動き回っている。

（もしかして・・・義烈の協力者か？）

そう思いながら女子を見ていた。
ふいに、少女が振り返った。

（まずい！）

思わず、義烈の腕をつかんで物陰に隠れた。

「!?・・・どうした?」

その行動に身をゆだねながら、小声で問いかける侠客の親分。

（考えて答えが出るわけじゃないし・・・聞いてみるか。）

そう思ったので、林山も義烈に尋ねた。

「なぁ・・・あの子、義烈の協力者か?」

「あん?」

依頼人の言葉に、訝しそうに侠客は眉をひそめる。
顎でさす林山に促され、その先に目をやる男。
少女の存在を確認すると、目を細めながら答えた。

「あんなガキじゃねぇよ・・・。」

「じゃあ、違うのか?」

「つーか・・・ありゃ、ここの女官じゃねぇなぁ・・・。」

「え?」

「宝仙宮の女官じゃない。あの服は・・・別の宮殿の女官のものだ

ろう？」
「服って・・・」
そう言われても、林山の目から少女の服装までわからなかった。
「わかんねぇか？」
「わからない。」
「なかなか良いもの着てるぜ、あのお嬢ちゃん。」
「そうなのか・・・？」
「おう。」
目を凝らしてみるが、真夜中の月明かりだけでは限界があった。
（この男、ずいぶん夜目が効くんだな・・・。）
感心しながら少女を見ていた。
服装はわからなかったが、やはり少女は周囲を気にしながら走っていた。
程なくして、自分達の視界から消えてしまった。
「行ったな。」
「ああ・・・。」
「よかった。こっちにでもこられたら、妹を探しどころじゃないからな。」
安堵の笑みを浮かべる林山とは対照的に、義烈の表情は険しかった。
「義烈？」
「・・・なんか、引っかかるな。」
「なにが？」

「あのお嬢ちゃん・・・荷物抱えてどこに行く気だったんだ?」
「荷物?それじゃまるで家出をすーーー・・・・」

そこまで言いかけてはっとする林山。
宮中において、女官は皇帝のものとされている。
それと同時に、国の重要な情報がある場所とされるのも宮中である。
古来から中国では、一度宮中に入った女官のほとんどは死ぬまで宮中から出られなかった。
宮中の中での出来事を外部に漏らさないため。秘密を守るために。
中国史の記録に残っている女官の最期によると、宮中での仕事を終えた女官は一箇所の宮殿に集められ、そこで死ぬまで過ごしたとされている。
故郷に帰れるでもなく、家族に会えるでもなく、最期まで閉鎖された空間に押し込められる。
すべては、宮中での出来事を外部に流さないために。
だから、万が一女官が逃亡した場合は強制的に連れ戻され、その後には『死』が待っているのだ。

「まさかあの子!ここから逃げる気じゃ・・・!?」
「どうだろうな。」

焦る林山を見ることなくのんびりとした口調で答える義烈。

「どうだろうなって・・・!。つかまればあの子は殺されるんだぞ!?」
「逃げてるってわかるわけじゃないだろう?聞いたわけじゃあるめーし。」
「だとしても、こんな夜中に出歩くなんておかしいだろう?」
「逢引の途中なら、おかしくないだろう?」
「茶化すなよ!」

怒鳴ったところで、ようやく義烈は林山の方を見た。

「じゃあなんだ？お前、あの子を助けるって言うのか？」

「それはー」

「妹助けに来て、他所の娘を助けてどうするんだよ！？」

「いや、でも・・・」

「テメーのために玉蘭は、文字通り体張って兵共の相手してるんだぞ！？その作戦を散々非難しといてなんだ？テメーのしようとしてることは！？」

「あ・・・その、」

「わけわかんねぇことしてんじゃねぇよ！！」

義烈の怒声は、静かな廊下にひどく響いた。

その言葉は廊下だけではなく、林山の心にも響いていた。

（そうだよ、俺・・・！なんて馬鹿なことを・・・。）

相手の言うことは正論で、反論の余地などない。余地はなかったが、

「だ、だけど・・・見殺しにはできない・・・・。」

殺されるかもしれないと予想できるならば、そんな可能性があるならば、

「助けたいと思うのは・・・いけないことか・・・・？」

自分を睨む侠客を見据えながら言った。
これを受けて相手は、はき捨てるように言った。

「これだから、お坊ちゃんの甘ちゃんはよぉ・・・！」

顔を大きくゆがめながら林山を非難する。
それに感情を抑えながら、言われた本人は答えた。

「そうだ・・俺は、あんたが言うように甘ちゃんで優柔不断だ。世の中を知らないさ。でも、あの子はもっと知らない。だけど、俺達と同じでわかったんじゃないかな？」
「あん？」

少女が消えた方角を見ながら林山はつぶやく。

「ここが最高に特別なところだけど、最高に胸糞悪いところだってことに。」

清らか過ぎる水では魚は生きられない。
清らかなようで、泥水のように汚いこの場所。
綺麗であってひどく汚いところだとわかったのではないだろうか。

「単に、家族や元いた世界が恋しくなったのかもしれない。でも中には、俺達が感じたような違和感を覚えたのかもしれない。」

完璧で正常な世界に。

「綺麗で気持ちの悪い場所だとわかったんじゃないか？それを感じて、逃げたのだと思えば――」

「助けるべきじゃないかって？」

クックッと肩で笑う男。

次の瞬間、その目が大きく見開いた。

「そんな奇麗事言やぁ寄り道できると思ってんのかっ！！？」

再度怒鳴りつけ、林山の胸倉をつかむ。

（殴られる！？）

思わず身構えた林山に突きつけられたもの。

「合格だ、星影。」

いつもの意地悪めいた声。

「・・・・・・・・・え？」

そして意外な言葉。

「あのお嬢ちゃんを追うぞ、星影。」

「へ・・・？」

ポカーンとしている林山の胸倉から手を離すと、さっさと歩き始める侠客。

「ちょ、ええ！？な、なんで・・・！？」

妻候補達の部屋から離れる義烈の背に呼びかけた。

「待てよ義烈！星蓮は・・・妹探しは！？」

「あ?オメー、あのお嬢ちゃんを助けたいんじゃないのか?」
「そうだけど、待てって!」
自分を追いかけてくる依頼人に、義烈は淡々とした口調で言う。
「心配すんな。予定よりは早く物事は進んでるんだ。ちょっとぐらい寄り道しても間に合うだろう。」
「それはそうだが・・・さっきまで反対してたじゃないか!?」
「おう。いつもなら、あそこまでだ。けど・・・今はちと、勝手が違う。」
なんとか追いついた相手の横に並べば、義烈は林山を見ながら言った。
「俺達が見たお嬢ちゃん、わけありみてぇな気がしてな。」
「わけあり?」
「俺は宝仙宮に忍び込むにあたって、ここにいる連中におねんねしといてもらうように裏で根回しした。ところが、そんな宝仙宮に平気で動き回るガキがいた。となれば、普通の女官じゃないだろう。」
「それはまさか・・・間者のようなものか?」
「間者というか・・・他の宮殿の女官で間違いない。」
「他の宮殿の・・・?」
「告げ口でもするのかと思ったが、どうもそういう感じはしなかった。つーか、宝仙宮の異変にすら気づいてなかったしなぁ・・・」
「よくそこまでわかるな?あんな遠くにいたのに、そこまでわかるのか?」
「人間第一印象が大事だぜ。なによりも、俺の直感が言ってんだよ。『あのガキを追え』ってな・・・!」
片目を閉じながら答える侠客。

「直感で判断したってお前・・・」

（星影じゃないんだぞ・・・・！？）

自分の身近にいる直感で動く、該当者を想像しながら思う。
そうは思ったが、少女のことが気になったのでこれ以上はなにも言わなかった。

「あのお嬢ちゃん、ずいぶん急いでたがどこに行ったのやら～」
「それもそうだな・・・。見失ってしまったし。義烈、このまま闇雲に進んでもー」
「平気だ。こっちだって、俺の直感がそう言ってる。」

嬉々とした顔で足早に進みながら義烈は言うばかり。

（大丈夫かな・・・。）

侠客の足は、朧な明かりのある廊下を降りて、神々しい光に照らされた庭へと移動していた。
宝仙宮は、こぎれいな庭園になっていた。ところどころに小さな川と小さな橋が架かっている。
幼い妻達もいるせいか、子供から大人まで庭で楽しめるような造りとなっていた。
亭（てい）も豪華というよりは可愛らしく、内側の彩画は花々や動物が描かれていた。

そんな庭園の中を、男二人が足早に進んだ。

「あそこ見てみろよ。」

「え？」

そう言いながら指差す場所を見る。

宝仙宮を囲む意思の壁の一角。

「ほら。」

「ーーーーあ！」

それを見て声を上げる林山。

「はしごじゃないか・・・・！」

庭の手入れなどに使われるはしご。

それが無造作においてあった。

否、無造作というわけではないが、草木の陰に隠すように置いてあったのである。

「これは・・・」

「庭師の忘れもん・・・て、わけじゃなさそうだな。」

そう言いながら、壁の側に座り込む義烈。

「見ろよ、星影。土がえぐれてるぜ。」

地面に二箇所、並んであいている浅い穴があった。

「はしごを立てた時に出来た後だろう。」

「・・・みたいだな！はしごの足の部分に、土がついている。」

土の湿り具合からいって、はしごを使って間がないとわかった。

「どうやらお嬢ちゃんは、このはしごを使って壁の向こうに行ったらしいな・・・。」

「廊下もあるのに？一体なんのために？」

「そうしなきゃいけない理由でもあったんだろうよ・・・！」

楽しそうな笑うと、隠してあったはしごを手に取る。

「せっかくのおいかけっこだ。お嬢ちゃんに付き合おうぜ。」

「おいおい、危なくないか？」

「人の気配はしない。それによ、ここらを守る兵士はうちの美姫が引き付けてるだろーが？」

ニッと口元を緩めながら言う義烈。

「ほらいくぞ。さっさと見届けて帰らねぇーと、妹見つけられないだろうが？」

そう言うと、さっさとはしごを上り始めた。

「わかってる！待てよ。」

「それと！こっからは小声のみだぜ～？」

「わかってる・・・！」

小声で返事をすれば、よしよしと言いながらはしごを使って壁を乗り越えてしまった。

それに林山も従い、壁の上に立った。

「わぁ・・・」

壁の上に座り込んだ上体で下を見る。

隣は、平地になっており、じゅうたんの様に小さな花々が咲いていた。

（綺麗だな・・・。）

月明かりに照らされ、おぼろげに浮かぶ花のなんと美しいこと。

「星影、何ボーとしてるんだ?」

下から義烈が声をかける。

「早く降りろ!はしごは、こっちに渡せ。」

「え!?義烈に?なんで?」

「なんでも糞もあるかよ?行きではしご使ったんなら、帰りもはしごがいるだろう?じゃなきゃ、どうやって宝仙宮に帰るんだよ?」

「あ・・・!」

言われてみればそうだ。

こんなに高い塀を、自力で何の道具も使わずに登るのは不可能である。

「妹探しを途中やめにして帰るって言うなら、渡さなくてもいいけ

どよ?」
「そんなわけないだろう!今渡す!」

茶化す相手を小さく怒鳴ると、はしごを引き上げて地上にいる義烈へと渡した。
相手が受け取ったのを確認すると、周囲を見渡してから地上へと舞い降りる林山。
そのわずかな間に侠客の親分は、受け取ったはしごを手際よく近くの小さな木々の間に隠した。

「これでよし。ちゃんと倒せたみたいだな。」
「ああ。それにしても、あの子は一体どこに・・・?」

見失ってから、塀を乗り越えるまで時間がかかってしまった。
もしかしたら見つからないかもしれない。
そんな思いでつぶやいた言葉に呆れながら義烈が答えた。

「下見てみろ、下。」
「下?」
「ほら。花を踏んだ跡がついてるだろう?」
「あ・・・!」

じゅうたんの様に割いた花々の一部が、踏み潰されていた。
その踏み跡は均等に、道しるべのごとくついていた。

「これを辿ればすぐだろう?」
「あ、ああ・・・。」

(すごい洞察力だな・・・!)

見つけられるか不安だった林山の気持ちは、無用のものとして終わった。
花の上につけられた跡を足早に辿る。
音を立てないように、見つからないように、木々の陰や柱の影に異動しながら進んだ。
そして、

「お。発け～ん！」

腕を引っ張られ、物陰に引きずられながら聞いた侠客の陽気な声。

「あ！本当だ・・・！」

辺りを気にしながら、小走りに廊下を歩く少女を見つけた。
相変わらず、挙動不審な動きをしていた。

（やはり、逃げるのかな・・・。）

その後姿を見ながらそう思う林山。
少女のことを心配しつつも、違う心配もしていた。

（思わず、あの子を助けたいとは言ったが・・・どうか早く終わりますように。）

間違っても、男との逢瀬で急いでましたーという結末にはなりませんように・・・！

こうして、妹ならぬ恋人探しを中断した林山と義烈は怪しい少女の尾行を開始したのだった。

（こんなことしてちゃ、星影に偉そうなこと言えないな・・・。）

問題の少女を尾行しながら、自分も星影に文句を言える立場じゃないと痛感する義烈だった。

第八十二話　直感は大事（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

また、サブタイトルをつけるのに時間がかかってアップが遅くてしまいました・・・（大汗）

・・・すみません。

小説についてですが、話の中で出てきた「亭」とは、読み方が「てい」というのは怪しいですが・・・わかりやすく言うと、日本で言う「東屋」になります。

つまり、休憩する場所のことです。

中国をはじめとする朝鮮・ベトナムなどの東アジアでは、「亭」あるいは「亭子」と言い、庭園を造る際は一緒に建てられていた伝統的建築物です。

その歴史は古く、中国では周時代から「亭」は存在していたとされています。漢代、「亭」は見張り塔や地方政庁の建物として利用されており、数階建てが普通だったようです。ただし、一階分は壁がない場合が多く、その理由が周囲を見張りやすいようにというものだったようです。それが時代の流れと共に、庭園に配置されるのにぴったりな造りへと変化したようです。

「亭」での過ごし方として、休憩はもちろん、景色を眺めたり、季節の移りをみんなで見て楽しんでいたようです。

その造りは、見張り台の名残を残し、周囲には壁がない屋根と柱だけという開放的な造りとなっていました。

内装は、柱に詩句を、内部に彩画を装飾したそうです。

ちなみに屋根は、「宝形造」・「入母屋造」という形状があり、宝形造だと、平面が六角形、八角形、円形などの形があります。

また、庭園だけでなく、寺院や廟宇、水上にも造られました。
水の上に建てられている亭は「？」・「水？」と名前を変えて呼ばれています。

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！ヘタレですみません・・・（土下座）

第八十三話　小さな香蛾の恩返し（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第八十三話　小さな香蛾の恩返し

人の出会いとは、本当に不思議なものだと思いました。

“どうか私の武運をお祈りください――――――――私の小さな香蛾。”

あの時、ひどく穏やかで優しく、自信に満ちた言葉で告げられた。
あの方から、私への言霊。
私はその言葉に口で答えられなかったけれど、ずっと祈り続けていた。

「安様・・・。」

あの方のお命が助かるようにと、心の中で何度も何度も願い続けたのです。

・　・　・　・　・

「素敵よね、安様！」
「ああ、霍将軍の生まれ変わりの！」

部屋に花を飾っている時でした。
初めてあの方のお名前を耳にしたのは。
先輩である女官のお姉様方が、頬を染めながらお話しされていたのです。

「宦官らしからぬ武術の腕前で、賊を撃退したのよね！？」
「しかも、目を見張るような美男子でぇ～！」
「遠くから見たんだけど、本当に美しかったわ！」
「ええ！男のような女のような中世的なお姿がたまらない・・・！」
「そうそう。陛下が林山様を気に入り、ご自分の愛妾にされたお気持ちがわかるわ。」
「この分だと、李延年様はどうなるのかしら？」
「あら。あの方は、陛下の愛する宦官の中で一番の愛妾でしょう？」
「でも、嫌な奴じゃない？陛下のご寵愛をいいことに威張ってるし。」
「その点、安様はとてもお優しいそうよ。なによりも、延年様よりお若いし。」
「そうなると、陛下の一番のお気に入りになるのも時間の問題よね～」

とても職務中にする話とは思えない、色のあるお話。
ふいに、そのうちのお一人、朱姐さんと目があいました。

（どうしよう・・・）

その顔を見て、私は焦りました。だって私を見る姐さんの顔、何か

をたくらむように楽しそうにしていたのですから。

「あなたはどう思うの？玲春。」

「ど、どうとは？」

「安林山様のことよ！」

私の想像通り、朱姐さんは手招きしながら言いました。

「きれいに飾れたじゃない、お花。それで終わりでしょう？こっちへ来なさいよ。」

「は、はい。」

先輩ですから逆らえません。

恐る恐る姐さん達のところへ行けば、

「それで、あんたはどう思うの？」

みなさん私に意見を求めてきたのです。

「安林山様のこと！」

今や『時の人』となられた、高級宦官の安林山様のことを。

「どうと言われましても・・・私は、姐さん達ほど、安林山様を知りませんし・・・。

「ヤダ嘘！冗談でしょう！？」

「あの安林山様を、あなた知らないとか！どれだけ遅れてるの！？」

「す、すみません・・・」

信じられないと大騒ぎする周囲の反応に、恥ずかしくて謝りました。
そんな私をかばうように、朱姐さんは言ってくれたのです。

「まぁまぁ！玲春は平陽公主様が目をつけていらっしゃる子なんだから。そういう情報を遮断されてても仕方ないわよ。」
「あ、それもそうね・・・。」
「それじゃあ、知らなくても仕方ないけど・・」
「可哀想な玲春！」

私の無知を、姐さん達は許してくれましたが、相変わらず気の毒にこちらを見る視線だけは変わりませんでした。むしろ、そこへ憐れみも加わったようです。

それにしても・・・・

「朱姐さん・・・」
「平陽公主様が目をつけていらっしゃる子だから、知っている方がおかしいのよ。ねぇ、玲春？」
「・・・はい、すみません。」

朱姐さん達が言う、『平陽公主様が目をつけていらっしゃる子』とは、どういう意味なのかしら・・・？
良い意味の目をかけるという言葉ならわかるけど、目をつけるって・・・。
ことあるごとにそう言われ、聞かされ、不安を覚えます。
何度も聞こうとしたのですが、

「あの、朱姐さん・・・！姐さんの言う、」

「わかってる。せっかくだし、玲春にも安様のこと教えてあげるわ！」

「え!?あ、はい。ありがとうございます・・・」

いつも、間が合わなくて、会話の持って生き方が悪くて聞けません。
そして今日も、そのことを聞けそうにないです。
いつものことなので、諦めますが・・・。
そう思い、曖昧に笑えば、そんな私の顔を見ながら朱姐さんが言いました。

「それで?あんたは、どこまで安様のことをご存じなの?」
「え?あの・・・陛下を賊からお救いしたところまでしか・・・」

夜、庭を散策されていた陛下を賊が襲撃し、それを厠帰りの安様が聞きつけ、陛下をお助けした。
それが安林山という名の宦官であった。

「そう。それじゃあ安様の人となりは?」
「わかりません。」

私はそれしか知らないし、それ以外はわからない。
わからないけれど・・・

「あの、朱姐さん。」
「何?」
「そんなに安様はすごい方なのですか・・・?」

（一人で賊を蹴散らしたことだけでもすごいのに。）

それなのに――――

「姐さん達が褒めぬくほど、安様は魅力のある方なのですか？」

（まだあるというのかしら？安様の武勇伝。）

「「「「「当たり前じゃない！」」」」」

私の質問にその場にいた姐さん達員が声を合わせた。同時にそう言った後で、まるで打ち合わせをしていたかのように、口々に安林山様の良い点を話し始めました。

「安林山様は、陛下が今は亡き『霍去病将軍の再来』と認められたお方！生まれ変わりともいわれる御仁なのよ！」

「かも、命をお救いしてわずか数日で下級宦官から高級宦官になったほどの人物！人は皆彼のことを『武烈宦官』と呼んでいるのよ！」

「霍去病将軍の再来に、武烈宦官・・・？」

「武を極めた宦官武人！というだけではなく、香蛾のような美しさを持ち、文学にも優れた智者！文武に優れすぐれたお方でもあるの！」

「では、文武両道ですか？」

「当然でしょう？なんせ、古今東西の数万の書物から学んだそうだから！」

「その上、素手で虎を倒すほどの力の持ち主で、まさに豪傑ともいえるお方なのよ!!」
「それは、すごいですね・・・・・!」
目を輝かせながら姐さん達が語る安林山様の人となり。
聞いている私は、ただ感嘆するしかありませんでした。
それと同時に、疑問も生まれました。

「・・・どうしてそんなすごい方が、武官文官ではなく、宦官になられたのですか・・・?」

それだけ優れた方なら、ご自分の性別を捨てる必要はないのに。

「それがね・・・ここだけの話だけど、安様はとあるお屋敷の妾腹の子供で、その才能を妬んだ正室にあそこを切りをとされて仕方なく・・・」
「えっ!?」
「なんでも、母親を人質にとられて切られたらしいわよ。」
「え!?私は、毒を盛られたと聞いたけど・・・?」
「そんな!どちらにしてもひどいじゃないですか!?」
「でしょう?だから陛下が、安様の代わりにその正室達を密かに処分されたらしいけど・・・」
「安様お優しいから、過ぎたことなのでおやめくださいと、最後までじょたんされたらしいわよ。」
「本当に、お姿だけでなく、お心もお優しいのね〜」

話の主体は物騒でしたが、それは私が、安林山様がお優しい方なのだと印象付けるのに十分な内容でした。
でも、平和で慌ただしい宮中の中で、私がそのことだけを気に留めて生きるだけの暇もなく、程なくして忘れてしまっていたのです。

「私の名前は安林山。最近、高級宦官になった者です。」

あの時までは――――――

・・・・・

部屋を照らす油にともした日は、部屋に入る月明かりに比べると弱いもので。
まるで私自身のように頼りない光でした。
私が、油に灯る火ならば、あの方は天空に浮かぶ月なのでしょうか？

「安、林山様・・・！」

そうつぶやく少女の手には、彼女が愛用するお香の入った子袋あった。

淡紫色の花からできる甘い香りが特徴の香草で作ったお香。

量は半分に減って香りは半減しているが、代わりにあの出来事が現実であったと証明する何よりの証拠品でもあった。

（昼間のことは、夢ではないのね・・・。）

そんなことを考えながら物思いにふけるのは、徐玲春。

齢（よわい）十四の少女にして、現皇帝・劉徹の実姉・平陽公主に使える女官だった。

彼女は昼間、自分の仕える女主人の命で、平陽公主が最近手に入れた西域の茶器を運んでいた。

お気に入りの器でおいしいものを飲みたいという元・皇女の望みを叶えるためだけに、宮殿の廊下を慎重に急いで歩いていた。

いつもと変わらぬ、慌ただしくも平和な日々。

雲一つない蒼天の空に、今日は良い日になりそうだと、穏やかな気持ちで廊下の曲がり角をまがった時だった。

「うわ！」

「きゃあ！！」

なにかと、自分より背の高い誰かとぶつかった。
その衝撃で、大事に抱えていた茶器は床へと落ちたのである。
それが、すべての始まりを告げる合図であったと、思い返しながら玲春はため息をつく。

彼女は本日、宮中に来て初めて失敗を犯した。
それも、自分仕える女主人のお気に入りの高価な茶器を割るという粗相をしでかしたのであった。
長年仕えてきた女主人は、優しい方ではあったが、時として激しく怒ることがあった。
それは、自分の大切な何かをダメにした時。
玲春が仕えた間もない頃、同じことがあった。
手を滑らせて茶器を割った先輩の女官がいた。
自分達の主は、それを聞くなり、泣き叫び許しを請う女官をみんなの前で拷問にかけた。
時間をかけてじわりじわりといたぶった挙句、最後は最大限の恐怖を与えながら殺してしまった。
普段は太陽のように温かい目が、真冬の氷よりも冷たかった。
忘れることのできない怖い記憶。
茶器が割れたのだと理解した瞬間、その時の思い出が鮮明に玲春の中に蘇ったのである。
同時に、自分の人生はここで終わるのだと分かった。

いやだ！
どうしよう、どうしよう！
怖いよ！
死にたくないよ！
殺されちゃうよ！
怖いよ、怖いよ！
助けて！
誰か助けて！

パニックで泣きじゃくる自分に、その人物は言った。

「絶対に君を死なせないから。いざとなれば、私が罪をかぶる。」

そう告げたのは私とぶつかった相手。
私は悪くない、自分に責任があると断言した。
普通ならば、私のような女官など放って逃げるのに。

「何故、私をそこまで庇って下さるんですか・・・・？」

戸惑う私にあの方は逃げずに言った。

「だって君は、悪くないじゃないか。」
「え？」
「殺されるような悪事なんかしていない。それに、」
「それに・・・？」
「君は優しい子だよ。私のとばっちりで、ひどい目にあわせたくな

い。」

断言してくれた。

私の命を守ると、宦官の衣をまとった彼の人は言う。

それが――――

（高級宦官・安林山様――――――――――――！）

まさかこんな私が、宮中で『時の人』ともてはやされるお方とお会いすることになるなんて。

それどころか、

「平陽公主様が大事にされている茶器を割ったのは、玲春さんではなく、私です！廊下を走っていた私が、玲春さんにぶつかって割れたんです！」

怒り狂う平陽公主様の前で私をかばってくださり、

「あなたの笑顔を見るためなら、卑しい私どんなことでもしましょう。」

私に優しく語りかけ、

「あなたが笑ってくれるなら、私はどんなことでもしますよ。例え、あなたに嫌われるような破廉恥なことをしてもね。もし、涙が止まらないというなら――――」

「え？」

鼓動が早くなるような言葉を発せられ、

「このどうしようもない口で、あなたの雫を吸うしかありません。雫と一緒に、憂いをおびた気持ちも、あなたの中から吸い取ってしまいましょう。」

「あ、あああ・・・安さ、様・・・・！？」

「泣き止みなさい、泣き虫さん。」

壊れ物で扱うかのように頬を触れて下さった。

その上・・・・

「・・・玲春。」

「玲春さん！」

「・・・玲春さん！」

「玲春さん・・・。」

「玲春さん。」

私の名前を何度も呼んで下さった――――

「安様・・・・」

最後に見たあの方は、まるで私の身を案じるかのような視線を注いで下さっていた。

（私はそれに対して、その場で言える精一杯のお礼と、深く頭を下げることしかできなかった・・・。）

そこまで思い出してから、玲春は大きくため息をついた。

本当に・・・あのような殿方、生まれて初めてでした。

誠実でありながら、「これのどこが高価だぁぁぁ――――――――――!!!?」と怒りながら割れた茶器をもう一度叩き割ってみたり・・・。

破壊した後で偽物だということを理路整然と述べ、宮中の陶工の方にもそれを認めさせてしまうなんて。

そうかと思えば、虎を猫だといって、お香を鼻にたたきつけてみたり、その背にまたがってみたり。
馬に乗るように虎に乗って、大人しくさせたうえで、きちんとその首にはめられていた首輪をとってきたり・・・。

（かっこよかった・・・安様）

女性に決して真似できないことをやってのける。
あれが、男の方というものなのね。

（やはり、女性と男性では、ものの考えた方や行動が違うのだわ・・・！）

・・・などということを考えながら、世間を知らない少女は感嘆の息を漏らす。

「いやいやいやお嬢さんっ！！いろいろ違ってますから！！一般的な男性は、そこまで無茶しませんから！！なによりもそいつ、男じゃないですから！！――――あ！？いや、男でないというのではなく、男のものがないので男でないというだけであって、深い意味は～～～・・・アハハハ！」

この場に本物安林山がいれば、ツッコミどころ満載の解釈を指摘するだろう。

加えて、うっかりかり発言もしかねないが。
もっとも、そのことを玲春本人は知る由もない。

それはさて置き、割り当てられた部屋の寝台の上で、横になることなく彼女は座り込んだままずっと考えていた。

（安林山様・・・。）

宮中で初めて・・・いや、人生で初めて接した異性（！？）安林山のことばかりを頭に思い浮かべていたのである。
彼女の頭の中では、昼間の出来事が何度も脳裏によみがえっていた。目をつぶれば、さらに鮮明に思い出してしまい、眠ろうにも眠れない。
そのため先ほどから、体を横たえることをやめて、寝台の上で座った姿勢でいるのである。

「・・・安様」

再度名を呟いて息を吐く。
短い言葉ではあるが、重みのある声。
それは本人には届かなかったがー

「恋煩い？」
「え！？」

別の人間の耳には届いていた。
真横から響いた突然の声に、体を大きく震わせると振り返る玲春。
そこにいたのは、先輩女官である朱だった。

「朱姐さん・・・！」
「眠りもしないで寝台で座り込んでいると思ったら、安様のことを考えていたの？」

「違います、そんな・・・」
それに首を横に振りながら答える玲春。そんな後輩の態度に、苦笑しながら彼女は言った。

玲春の隣に腰掛けながら訪ねてきた。
「嘘つき。それなら、どうして安様の名を口走ったの？」
「それは・・・」
「別にいいけどね。あなたや安様のおかげで、私達はしばらくお休みを頂けたし。だから、気を付けた方がいいわよ。」
「なにがです・・・？」
「あなた、安様にずいぶん優しくされていたじゃない？宮中には星の数ほど女がいるの。その中のほんの一握りといえば、少なく聞こえるかもしれないけど、武烈宦官・安林山様を狙っている女官は多いのよ。」
「朱姐さん・・・？」
「今回のことで、あんたを憎い恋敵と思っている女官がいるってこと。・・・平陽公主様に仕える、私達仲間の中にもそういう子がい

るってこともね？」
「え？」
「油断していると、このお休みを機会に、あなたいじめられるかもしれないわよ～？」
「ええ！？」

先輩宦官の言葉に、言い知れぬ痛みを感じる。痛みというよりも、戸惑いに近い恐怖だった。

「誤解です、そんな！私、安様とそんな関係では――――！」
「今更、そんな弁解通じないわよ。まぁ、大人しくしておくことね。忠告はしたから用心はしなさいよ。」
「朱姐さん！」

後輩の言葉に、彼女は眼だけで彼女を見ながら言った。

「・・・大丈夫よ。平陽公主様も、安様には怒っているけど、あなたには怒ってないわ。利害問題を抜きにしても、あなたのことを気に入っているのは確かだから。」
「姐さん・・・」

彼女の言う通り、自分の腕を引っ張ってまで連れ帰った主は、玲春を怒ることはなかった。
他の女官達に接するのと同じように接してくれた。
それでも申し訳なく顔色をうかがう彼女に平陽公主は――――

「お前はわらわが一番目をかけている。あんな宦官のこと、小石につまずいたのだと心得るように！」

それだけ言われた。
許してもらえたのだ。
呆然とする玲春に、周囲も安堵の息を漏らす。
ただしそれは、自分達がまきこまれなかったことへの喜びからくるもの。
結果的には、茶器を割ったことへの不始末に巻き込んでしまったこともあり、朱以外は、ロクに口をきいてくれなかった。
玲春自身への言葉はなかったが――――――

「どうなのよ、玲春!?」
「ど、どうとおっしゃいますと?」
「馬鹿ね～安林山様のことよ!」
「あんた本当に、安様と何もなかったの!?」
「平陽公主様は、お前と安様が恋人同士じゃないかと疑っていたけど――――!」
「本当に抜け駆けしたんじゃないでしょうね!?」
「どうなの!?正直におっしゃい、玲春!!」

「～～～～だから誤解ですっ!!」

彼人(かのひと)と自分の仲を疑う質問ばかり。
それは、女官頭の「早くおやすみなさい!」というお叱りの声を受けるまで続き、ようやく先ほど解放されたのであった。

(そんなのじゃないのに・・・!)

いくら自分が、安林山様と初対面だと言っても誰も信じてくれない。
みんな、私達が以前からの知り合いだったと思っているらしい。
相手は仮にも、皇帝陛下の愛妾。
それが、私のような下っ端女官と恋仲だという噂が流れでもしたらー

（安様に、どれだけご迷惑がかかることか・・・！！）

事と次第によっては、自分が原因で陛下からの寵愛がなくなってしまう可能性もある。
そんなことになったら、愛し合うお二人を引き裂くことになってしまうかもしれない・・・！！

（それだけは避けなくては！！）

「つーか、なに気色悪い誤解してくれてるの玲春さん！？誰があんな好色変態と愛し合ってるって！？！それ嘘だから！真っ赤っ赤な嘘だからね！！むしろ引き裂いてほしいんですけど、私は！！」

・・・と、この場に当の噂の人物である高級宦官・安林山がいれば、ツッコミどころ満載の解釈を指摘するだろう。
もっとも、そのことを玲春本人は知る由もない。

そんな玲春の考えをどこまで理解しているのかわからないが、彼女

の先輩は少しだけ茶化すように言った。

「安様の心配もいいけど、まずは自分のことだけ考えなさい。あんたが心配しなくても安様は、陛下の庇護があるんだからね。まっ、怪我をしてるから、当分は夜のお相手はできないと思うけど・・・・。」

「・・・そんなに安様のお怪我はひどいのですか？」

「え？どうかしら・・・ひどいんじゃないの？なんせ、十数人の賊相手に一人で戦ったわけだし。さっき聞いた話じゃ、傷が化膿して熱を出して部屋で休まれているらしいから。」

「え！？」

（安様が熱を！？やっぱり、紅嘉と戦ったのが原因で・・・！？）

「だから、そんな顔するんじゃないの！いい子だからもう寝なさい。」

「で、でも！私のせいで安様が――――」

「何度も言うけど、あなたは悪くないのよ？安様の傷も、十日ほどでよくなるそうだから。」

「でも・・・。」

「大丈夫だから、安心して休みなさい。あなただって、今日は疲れてるでしょう？ね？」

「・・・はい。」

不安げに表情を曇らせる妹分に笑いかける朱。

そして、無理やり寝台に寝かせるとその場から立ち去った。

「何も考えないで目を閉じるのよ。おやすみ、玲春。」

眠りの言葉を呟きながら。

「はい・・・おやすみなさい、朱姐さん。」

こうして、一人きりになった玲春。

言われた通り、なにも考えないようにしながら目を閉じたのだったが――――

（そんなこと言われても、眠れるわけないわっ！！）

彼女の心には相変わらず、安林山という名の宦官が闊歩していた。

（安様、大丈夫かしら・・・）

いくら、背の高い彼が背の低い自分にぶつかってきたからと言って、茶器を割ってしまった責任が自分にないというわけがない。

それなのに、徐春は悪くないと断言した宦官。

死罪の危険があるというのに、一人でその罪をかぶろうとした宦官。

罪を許してもらう条件として、人食い虎と戦って勝った宦官。

ただ、戦って勝つというだけでなく、人食い虎も、女官も兵士も虎

使いも・・・挙句の果てには、自分を殺そうとした平陽公主様にまで情けと優しさを見せた宦官。
異端といってもいいぐらい珍しい善良な宦官・安林山。

（私はなにをしているのだろう・・・）

安様に助けて頂いたのに、曖昧なお礼しか言えなかった。
曖昧というよりも、まるでもう二度と会えないようなセリフを告げた。
あれでは、安様が不安げにお声をかけてこられても仕方がない。
あの方が化膿した傷で苦しんでいらっしゃる時に、自分はのうのうと睡眠をとろうとしている。

なんて薄情なの、玲春？

（何か私にできることはないのかしら・・・・。）

そんな考えをめぐらせながら寝返りを打つ。
それを数回繰り返したところで、彼女はあることを思い出す。

「そうだわ・・・！」

思い出し、身を起こして自分の衣類などが入っている行李の側へと行く。
その中の一つ、片手で持てるほどのこぶりの行李を手にとって中を開けた。

「よかった。まだ残っていたわ。」

そこにあったのは
以前、平陽公主様のお供で医術の先生の所へ行った際に頂いた――――

「化膿による発熱を下げる薬草・・・！」

もらってからかなりの日数は経っていた。
しかし、乾燥して使うものなので、効能に問題はないはず。
保存状態も、言われた通りにしておいたので貰った時のままの状態であった。

（怪我による発熱の際に使う、解毒用のお薬・・・！）

この薬は、平陽公主様が信頼を寄せていらっしゃる先生から頂いたもの。
薬草の良しあしはわからないけれど、良いものであるのは間違いなかった。
何故なら、

「我が夫も使っている。傷が化膿して発熱で苦しんでいる部下に与えている。玲春、お前が将来武人を夫に迎えるかどうかはさておき、持つだけ持っていて困ることはないであろう。世の中、なにがあるかわからないからのぅ。」

カラカラと笑いながら、今より小さかった玲春の手に握らせたのはいつのことだった。

あの時は、お守り程度で受け取ったけど、頂いて本当に良かった。

（ありがとうございます、平陽公主様！感謝いたします。）

当時のことを思い出し、心の底からお礼を言う玲春。
もっとも、当の本人がその使い道を知れば、少女に薬草を挙げたことを後悔するのは間違いなかったが。

（これを安様に飲んで頂けば、きっと早く良くなるはずだわ！）

そう考えた玲春は、小さく微笑むと、取り出した薬草を行李へとしまう。

音をたてないように、そっと寝台から降りると服を着替え始めた。

（安様がいらっしゃるのお部屋は、高級宦官専用の宮殿・・・。）

そこの一室に、お一人でいらっしゃると姐さん達が言っていた。

細かい場所も、姐さん達がしゃべっていたのを聞いたのでわかる。

（私一人でも行ける。）

仕事着に着替えたところで、紺色の布を肩から羽織った。

本当ならば、女官が夜中に外を出歩くのはいけないこと。

見つかったら、場合によっては殺される可能性もある。

それでも――

（安様にお会いしたい。）

会って、きちんとお礼を言いたい。

どれだけ感謝しているかお伝えしたい。

私はもう大丈夫だから、もうご心配なさらなくていいとあの方に――！

はやる気持ちを抑えながら、薬草の入った行李を抱えて部屋から出る。

見つからないように、見られないように、周囲を気にしながら部屋から、宮殿から抜け出した。

「綺麗な月・・・」

宮中に来て初めて真夜中に、部屋の外へと踏み出した。

昼間は、人が行きかう廊下も、夜はひどく静かで廊下を照らす明かりだけがその存在を強く主張していた。

（起床の時間までには帰らないと・・・！）

いくらお休みを頂いたといっても、規則正しい生活をしなくていいというほど、

後宮は甘い場所ではない。

ましてや、未だに腹の虫が収まらないでいる女主人の前でそんなだらしないことはできない。

（急いで安様のお部屋に行って、お礼を申し上げて、薬草をお渡しして帰ってこよう。）

それだけ決めると、玲春は小走りに走り始めた。

第八十三話　小さな香蛾の恩返し（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

最近、更新が遅くて申し訳ありません・・・！！

今回は、徐玲春のお話となっております。
彼女が出会った安林山こと劉星影に対する印象を書いてみました。
自分を助けてくれた宦官が心配な少女は、こっそり部屋から抜け出します。
この後彼女はどうなるかは・・・後々のお楽しみということで（笑）
気長な方、それまでお付き合いいただけるようでしたら、今後とも読んでやってください！
よろしくお願いします・・・・！！

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！
ヘタレですみません！！

第八十四話　準備不万端（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第八十四話　準備不万端

場違いだ。

痛々しいぐらい、痛感した。

「拠(れん)様、学問の方はいかがですか？」
「ちゃんとしていますよ。武芸の方も、きちんとしています。」
「将来のことを考えますれば、学問をしすぎてはいけないということはないと思います。ですが・・・武術は護身程度にとどめておいてくださいませ。」
「護身程度しかできないのでは、みなに笑われないか？」
「あなた様が強くなりすぎては、守る者の立場ございませんよ。」
「ハハハ！そうだったね？危うく、叔父上達の仕事を取りかけましたかな？」
「いえ、そういうわけでは・・・」

自分の側で、楽しそうに話す叔父と甥。
もとい、大将軍と皇太子殿下。

その近くでそんな会話を聞く私は間違いなくお邪魔虫。

（場違いすぎるだろう・・・・！）

かたや商人のふぜいの娘が、皇族達の会話を聞いていていいのだろうか？
そもそも、国の大将軍という将軍の中でも一番の位にある方の腕の中にいること事態、不届きなのではないだろうか？

そんな思いから、非常に居心地の悪い思いをしながら大将軍の腕に抱かれていた。

安全のためという理由で空飛の部屋へと運ばれていた星影。
運んでくれていたのは、憧れの衛青大将軍。
その腕の中で浮かれていたら、とんでもない者のが現れた。

「お戯れを、拠皇太子殿下。」

未来の皇帝とも言える劉拠（りゅうれん）皇太子ある。
彼は叔父である衛青将軍と語りたいという理由で、空飛の部屋までついていくと言ってきたのだ。
衛青将軍が危ないからと言ってもまったく聞かない。
最初は断っていた衛青将軍も、最終的には甥っ子の頼みを断りきれず、こうして今に至るのであった。

「それでね、その時母上は・・・！」
「ほぉ・・・姉上がそのように？」

「ああ。お父上にも、頼まれてね。私もその方がいいとー」
「そうでございましたか。さすが陛下ですね。」
「うん。でも私としてはー」
「そうおっしゃられますな。陛下にもお考えあってのこと。例えば、ある戦の際に・・・・」
「そうなの?でも、それでは負担が大きかったのでは?」
「いいえ・・・。国民と皇帝陛下と、ひいてはあなた様のために戦う・・・。それこそ、私の役割なのですから。」
「わかってますよ、叔父上!それよりも、あの戦の話が聞きたいです!」
「ああ、それでしたらー」

たわいない身内の話から、皇太子が最近習った学問の話し、衛青将軍の出た戦の話など。
話題はさまざまだが、二人は楽しそうに語り合っていた。

「ハハハ!左様でしたか?」

(衛青将軍・・・笑う時はこんな声なんだ・・・。)

時折耳元に、心地よい笑い声が響いた。

自分が見る限りの衛青将軍は、寡黙で無口で落ち着きのある大人の男。
優しさは見せても、笑い声など聞かせてくれなかった。

（やっぱり、身内だからかな・・・？）

素の自分を見せられるのは。

（・・・そうかもしれない。）

私だって、本当の自分を見せるの家族の前だけ。
大事な妹と信頼できる友の前のみ。
それ以外に、本音をさらすなんてできない。
自分の立場に置き換えれば、衛青将軍の今の仕草は十分納得できる。
信用できる相手、気心を許せる相手にしか本心は明かさない。
それは、誰でも当たり前のことだけどー

（羨ましいな・・・。）

衛青将軍の楽しそうな口調や声を聞くたびに、そんな思いが何度も胸をよぎった。
その笑みや気遣いを、私に向けてもらえたら。
怒るような褒めるよう拡張で話しかけてもらえたら。
人には見せない姿を、見せてもらえたら。

（どんなに幸せだろう・・・。）

独りよがりな高望みが、星影の胸を焦がしていた。

「ところで叔父上・・・・父上は大丈夫なのですか?」

そう皇太子が聞いたのは、会話が最高潮まで弾んだ時だった。

「・・・大丈夫と申されますと?」

「宮中内で、賊に襲われたでしょう?それはもう、大丈夫なのですか・・・?」

拠皇太子の言葉を最後に二人の会話がとまった。

しばらくして、口を開いたのは衛青だった。

「申し訳ございません・・・。」

「そうじゃないよ。私が聞きたいのはそんなことじゃないよ?」

「ですが、陛下を危険にさらしたのは、武官である私の責任もございます。」

「叔父上一人が悪いのではないのですよ?そもそも、叔父上に罪を問うというのは見当違いでしょう?」

「いいえ。・・・この国で一番高い武官の地位にいるのは私です・・・!」

「違います、叔父上!それに、私が聞きたいのはそんな言葉じゃないのです!」

「・・・賊のことですね?」

小さく息を吐くと衛青は答えた。

「陛下を襲った賊は、すべて死亡しました。賊を率いていた男も、陛下の前で自害したそうです。」

「叔父上・・・」

「なので拠様。あなた様がご心配なさることはなにもございませんよ?」

「・・・つまり、黒幕はわかっていないのですね・・・?」

少年の言葉に、星影の足を抱えていた方の手が不自然に痙攣した。

「父上を狙っている本当の悪人は、まだわかっていないのですね・・・?」

「拠様。」

「誤魔化さないでください。でも、叔父上達のことです。目星はついているのでしょう?」

「あなた様が関わっていいことではございません。」

「父上が狙われたのなら、次は私でしょう?」

「拠様!?」

「父上には、私以外に男子の子供がいる。私は、たまたま一番早く生まれただけの子供。それでも覚悟はできています・・・!」

そう語る皇太子の口調はどこか寂しそうだった。

「あなたのお気持ちはわかりました。ですが、そのような軽率なことはおっしゃらなー」
「最近、私の身の回りの世話にと、新しい宦官がつけられた。」
叔父の言葉をさえぎるように皇太子は言った。
「新しい宦官は、それはそれはよく私を助けてくれる。私が困っているとすぐに駆けつけて助けてくれる。」
「それは・・・良いことではございませんか。良い者が、お側につかれたのですね。」
「うん。まるで、四六時中私を監視しているかのような動きだよ・・・！」
それまでとは一変して、強い口調で言う皇太子。
（監視・・・？）
少年の言葉に、衛青だけではなく星影も何かを察した。
「拠様、それは・・・あなた様が皇太子殿下だからでしょう。あなた様に何かあってはいけないので・・・」
「私の書状まで盗み見ることがか？」

あざ笑うように彼は言った。

「最初から、違和感はあったんだよ。気のせいだとも思っていた。でも・・・少々度が過ぎる。それにね、あの者達が来てから私の周りでおかしなことが起きるようになったんだ。」

「おかしなこと？」

「だから、逃げてきたんだよ・・・」

小さくため息をつく皇太子。

「つまり・・・今宵、拠様が供もつけずに私の元へきたのはー」

「調べてほしいことがあったからだ。」

（調べてほしいこと・・・？）

声を潜めながら言う少年に、星影も思わず聞き耳を立てる。

「私に何を調べろとおっしゃるのですか・・・？」

「聞いてくれるか？」

「そこまでお聞きした以上・・・必ずや。」

「ありがとう、助かるよ。なんせ、あの宦官共は油断も隙もないから・・・。きっと私の行動も、逐一で報告しているんだろう。」

「・・・恐れながら拠様、それはいったい誰のご推挙によるもので・・・？」

「ああ、それがー・・・・」

叔父の言葉に甥が答えようとした時だった。

星影の背中に冷たいものが走る。

（なに！？）

そう考えたのは一瞬のこと。
悪寒と同時に、体中に鳥肌が立った。
その理由を星影は瞬時に理解する。

（ーーーーーーーーーーーーー殺気！！）

星影が自覚するより早く、彼女を抱えた武人はそれを感知していた。

「ーーーーーー危ないっ！！」

「えっ！？」

（え、衛青将軍！？）

すばやく星影を小脇に抱え、皇太子に覆いかぶさった。

「お、叔父・・・！？ーーーーわぁあああああ！？」

「ーーーー！！」

とっさに叫びそうになったのを星影は我慢する。

代わりに、少年の驚いた声と雄叫びが響く。

それに続いて、何かが廊下の床に刺さるの音がした。

（金属音！？）

音からして、短刀が数本投げつけられていた。

「大丈夫でございますか、拠様！？」

「う、うん！」

幸い衛青は、甥に気を取られてこちらを見ていない。

星影の予想通り、先ほどまで自分達のいた場所には短刀が数本刺さっていた。

大将軍の背中越しで、殺気を感じた方を見る星影。

（あれは・・・・！）

細めた目に、黒ずくめの集団がいた。

（ヤバイ・・・！）

それを目にした時、悪い予感がした。
悪い予感というよりも、

”・・・計画に、抜かりないだろうな？”
”はい。・・・奴を殺すには十分です。”

琥珀と黒ずくめの男とのやり取りが、星影の脳裏によみがえった。

（似てる・・・！あの時の黒ずくめと同じ服装だ。）

薄目で様子を伺えば、その集団は二十数名からいた。

（まさか・・・琥珀の手の者か？）

ある程度は信用していたが、琥珀への疑いが晴れているわけではなかった。
彼は、誰かを殺す話し合いをしていた。
それが陛下ではなく、衛青将軍だったということも十分考えられる。
しかし、どちらかといえばこの場合はーーー

（皇太子狙いだろうな・・・！）

「叔父上・・・！」
「大丈夫です、拠様・・・！」

不安げにいう皇太子にそう告げる大将軍だったが、星影を抱える腕の筋肉が固くなっていた。
武人の筋肉が張るのを、衣服越しに感じながら思う。

（三人でこの人数を相手にするのは無理だろう・・・。）

正確に言えば、皇太子と自分は、今の現状のままでは頭数には入らない。
よって、衛青将軍のみで戦うとなるとかなり不利である。

（いやいや！これでも私は、藍田では名の通った武人（！？）じゃないか！いくら毒にやられていても加勢ぐらいは・・・！）

そうは思っていても、やる気があっても、体がついてこなければ意味がない。
事実、今の自分は毒が完全に抜け切れていないからだ。

体は火照っていて、重く感じられる。
風邪を引いているかのような状態だった。

（なんとか、逃げ道はないのか！？）

薄目を凝らして、気配を探るが脱出経路が見つからない。
完全に四方を囲まれてしまっていると言っていい。

（くそ！どうしてこうなる前に気付かなかったんだ！？）

いくら、毒でやられてるとはいえ、こいつらの気配がわからないなんて！

（あなたそれでも武人なの、星影！？）

ひどく自分が情けなく思えた。
情けなく、無力に思えたが、後悔はしていられない。

（ーーーーーー毒が抜け切れていないからってなによ！？）

それを理由に、戦わないというわけにはいかない。
こいつらが陛下を狙ったように、皇太子を狙ってきたのと同類の刺客のなら、私たち全員を皆殺しにするだろう。
だったらーーー

（戦わないで死ぬよりも、戦って死んだ方がまだマシ！）

つーか、なにが悲しくて二度も皇族を狙う刺客の襲撃に巻き込まれなきゃならないの！？
ここ宮中でしょう！？
鉄壁の守りで、外部からの侵入を防いでるんじゃなかったの！？
こんな物騒な連中を簡単に忍び込ませるとか、どういう警備体制してるのよ！？

（衛青将軍が、宮中の警備に文句をつけた気持ちがわかるわ・・・。）

（その甘っちょろい警備のおかげで、林山に会いに行けたし・・・。）

まぁ・・・でも。

行き帰りの往復が出来たのだ。
それを思えば、強固な鉄壁でなかったことに不満は言えない星影。

（もういいわ！二度あることは三度あるんだから！）

戦う覚悟を決め、敵を見ながらどう攻めるべきかと思案する星影。

（あれ・・・？）

それに気づいたのは、賊の人数を数えている最中だった。

（・・・なんだろう？）

自分達を取り囲む集団に、違和感を覚える。

（この黒ずくめ達から、なにか近いものを感じる・・・？）

星影の嗅覚が、かすかに彼らから、自分に近い何かを感じ取れた。

（いやまさか！私がこいつらと同じわけはーーーー・・・・・！）

こんな多勢に無勢な卑怯者達と。

コソコソと人の見ていないところで人を殺そうとする狡い輩と。

（私が同じはずないわ！！）

理性がそれを否定したが、彼女の本能は相変わらず肯定し続けていた。

（なぜ？）

何が同じなの、私の本能よ？

（まさか、私と同じでみんな妹がいるのかな・・・？）

いやいや！

その程度で、こんな悪人共に近いものを感じないだろう！

そう思い、細めた目を凝らしながら見ればー

（あ。）

そういうことか。

自分が察した近いものに気づく。

それはひどく簡単で、わかりやすい、親近感によるもの。

（女性が混じっていたのか・・・！）

見れば数人・・・体つきなどからして女性らしい者達がいた。

胸はもちろんなかったが、それが布などで抑えているのだと星影にはわかった。

（上手く隠したつもりだけど、こっちにはバレバレだよ！）

普段から男装しているだけに、そういう誤魔化しは彼女には通用しなかった。

（しかし参ったな・・・。）

敵に女性がいるとなるとー

（戦いづらい。）

異性なら、容赦なく殴るける出来るが同姓となると・・・。

（気が引けるな・・・。）

どうしたものかと目を閉じれば、耳元で武人の怒声が上がった。

「貴様ら何者だ！？こちらにいらっしゃるのを、次期皇帝、拠皇太子殿下と知っての狼藉か！？」

沈黙のにらみ合いの末に発せられた衛青の言葉。
彼の問いかけに誰も答えなかった。
代わりに、さらに三人を取り囲んだのだ。

「答えろっ！何が目的だ！？」

皇太子と星影をかばうようにして、腰の剣を抜く。
すると、どこからともなくくぐもった声が響いた。

「拠皇太子殿下と知って狙ったのだ。」

頭上から聞こえた声。

「なっ！？」

衛青将軍の怒りと焦りの声。

（上から声ーーーーー敵は上か！？）

意識を上へ向ける。
薄目で見上げた視界。

「目的は皇太子の命を奪うこと！」

そこに声の主はいた。
天井に張り付く数名の男達。
そのうちの一人が発した声。

（女はいない！）

月明かりを頼りに、瞬時にそれだけ判断できた。
上に潜んでいた敵の数を把握する前に、月の光が消える。

（まずい！来る！！）

月明かりが見え隠れしたのは、ほんのわずかの時間。
星影の予想通り、敵は月が雲に隠れたと同時に動いた。

「ーーーーーーー死ねっ！！」

天井にいた黒ずくめ達が、こちら目掛けて落下してきたのだ。

「おのれっ！」

「叔父上っ！」

「っーーーーーー！！」

襲い掛かってくる男達のその体躯はみな立派で、手にはそれぞれ鋭利な獲物を持っていた。

（ーーーーーまずいっ！！）

必死で、頭の中で有効な攻撃手段を割り出すが、この襲撃を防ぐ方法が見つからない。思いつかない。

前後左右を敵が囲み、下は固い床である。

（せめて皇太子だけでもーーーー！！）

そう考え、動こうとした矢先、強い力が星影の体を拘束する。

（え！？）

なに？

（衛青将軍！？）

星影の動きを封じたのは、彼女が慕う大将軍。
自身の胸の中に、二人を抱き込んでいた。

（ちょ、だめ！この大勢だと、衛青将軍は串刺しにーーーー！！）

自分達を抱きかかえる武人の力が強くなる。
その動きは、皇太子はもちろん、星影をも守る動きだった。

（まさかーーーー死ぬ覚悟で、私達を守る気！？）

皇太子はともかく、宦官という身分の私まで！？
だめっ！
そんなの絶対にだめぇ！！

（無茶です！衛青将軍っ！！）

まさかの奇襲に加え、毒の後遺症でいまだに上手く動けない星影。
ふがいない自身に、彼女は強く奥歯をかみ締めた。

第八十四話　準備不万端（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

二度目の襲撃に、さすがの主人公もピンチです。
おまけに今回は、体も自由に利かないので上手く戦えません。
打つ手なしの星影達の運命はいかに！？

※小説を読んでいて、誤字・脱字・文章のつなげ方がおかしいよ、
という箇所を見つけられた方！

こっそり教えてください（苦笑）・・・・ヘタレで、すみません・・
・！！

第八十五話　寝起き加減はいかがですか？（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

２９日に都内でこの問題について会見を開かれた、ちばてつや先生、秋本治先生らにエールを贈ります！！

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．４７ｎｅｗｓ．ｊｐ／ＣＮ／２０１０１１／ＣＮ２０１０１１２９０１０００７９０．ｈｔｍｌ

第八十五話　寝起き加減はいかがですか？

信じられない。
冷たい。
ひどい。
親切とはいえ、あんまりです。

「親切とはいえ、あんまりです・・・！」

心の中だけで言っていた言葉が、最後の最後で言葉になってしまった。
うっかり口に出してしまったことに気付き、慌てて口をふさぐがー

「確かに今回は大きなお世話だったかもしれないね。起こさないようにした親切が。」

「あ・・・！」

「本当にすまなかった。」

遅かった。
聞いた相手は困ったように微笑みながら謝ってきた。

「違います！私ーーー」

どうしよう・・・困らせるつもりはなかったのに・・・。

「すみません・・・琥珀。」

心底申し訳ないという声色で言う相手に、琥珀こと王琥珀は首を振りながら答えた。

「いいや。君は悪くないよ、空飛。だから、謝らないでほしい。」

自分の名を出されてそう言われ、空飛こと張空飛はしょんぼりと肩を落とした。

ここは、高級宦官用に割り当てられた個室の一つ。
そこにいたのは、この部屋の主の親友・王琥珀と張空飛の二人だった。
先ほどまでこの部屋には、五人の人間がいた。
彼らの元上司で現同僚の黄藩。
漢帝国大将軍・衛青。
そして、部屋の主である安林山と彼らの五人。
しかし今は、琥珀と空飛の二人だけ。
それには理由があった。

本日の夕方、毎度のことながら騒ぎを巻き起こす親友・安林山が、

再び騒ぎを起こして帰ってきた。
今回は、皇帝陛下の実姉平陽公主様ともめ事を起こしてしまったのだ。
危うく、平陽公主様の命で、命を奪われかけたが、なんとか命拾いして戻ってきた。
そんな親友に空飛は二度目の説教をし、林山も気を付けると約束してくれた。
その後、陛下から賜ったお酒と干した果物を肴にささやかな酒宴を行った。
生きて帰ってきてくれた親友のため、高級宦官という立場を存分に発揮して、肴（さかな）のアテとして干した果実を用意した。
皇帝から下された品は、限られた身分の者しか飲めないという『ぶどう酒』という西域のお酒。
親友が干した果物を好きだというのを聞いてのことだったので、酒のつまみに会うかどうか不安だったが好きな食べ物ならば、会う会わない以前にそれだけでもおいしく食べてもらえるだろう。
喜んでくれれば、それでいいと思っていた。
だからーーーー

「空飛も飲もう！！」

そう言われた時、正直戸惑った。
宮中に来てから、新年の祝いの席以外で、酒はおろか干した甘い果物さえ食べたことがなかった。
なので、最初から自分も食べれるなどという考えはなかった。
これは林山のために用意されたもの。

元々卑しい身分の私などが、彼と同じものを口にしていいはずがない。
そんな資格は自分にはない。
だから給仕としてささやかな宴会に参加するつもりだった。
それで十分だった。

ところが、林山の方はそうではなかった。

「君も飲むべきだ！」

皇族でも、限られた人間しか飲めない『ぶどう酒』を彼は自分も飲んでいいと言ってくれた。

嬉しかった。

それが、高価なお酒が飲めるという意味で嬉しいのではない。

「杯とは、気心の知れたもの同士で交わすもの！私達は友達なんだから、何事も共有しないと！」

林山が自分を親友だと言ってくれたことが嬉しかった。

「三人で乾杯しよう。」

自分を仲間に入れてくれたことが。
対等に扱ってくれたことが。
親友だと言ってくれたことが。

空飛は嬉しかった。
自分を人扱いしてくれる林山。
自分を友達だと言ってくれた林山。
自分を助けてくれた林山が、大好きだった。

宦官になった時、自分の世界は絶望とあきらめのみとなっていた。
今まで、暗い気持ちで生きてきた。
強いものに怯えながら生きてきた。

だから。

大好きな林山が無事に帰ってきたことが嬉しかった。

（なのに・・・）

林山は倒れた。

突然、酒を飲むなと叫んだ直後、倒れてしまったのだ。
琥珀が言うには、毒を盛られたというのだが・・・

（一体誰が林山を！？）

林山を殺したい人。
殺して得をする人。

（・・・誰だろう？）

林山は、皇帝にも好かれるだけあって、すごく良い人物だった。
だからその半面で、妬みや嫉妬を覚えている者もいた。
あの李延年様ですら、自分の立場を脅かすかもしれない林山を敵視している。
それはどうしようもないことかもしれないけど――――

（だからと言って、私は犯人を許さない・・・！！）

大事な友達を傷つけたやつ。
大事な親友を苦しめるやつ。
大事な林山の命を奪おうとするやつ。

（林山をこんな目に合わせたやつを、私は許さない。）

幸い命は取り留めたが、高熱で苦しんでいた。
琥珀の処置のおかげで、この程度で済んだらしい。
琥珀は、林山の症状が安定するや否や、『信用できる人を呼んでくる』と言い残して部屋から出て行ってしまった。
後には、私と林山だけ残された。

「・・・林山。」

名前を呼んでも、答えてくれない。
荒い呼吸を繰り返していた。

「林山、死んじゃやだよ・・・・・！」

眠る友に縋り付き、何度もそう言いながら泣いた。
熱を帯びた顔を冷ますため、なんども冷たい布を額にあてた。
手で、そのやわらかい頬を何度も撫でた。

「林山・・・。」

なんて、綺麗なんだろう・・・。

普段は帽子の中にしまわれている黒い艶のある髪。
絹糸のような髪に指先で触れれば、指の間から簡単に滑り落ちる。

頬徴した頬は、頬紅をしているようで、唇は紅をさしているように赤い。
まっすぐと人を見据える目は、今は閉ざされている。
閉ざされてはいるが、その瞳を彩る長く整ったまつ毛は呼吸のたびに小さく揺れる。
とても、同じ同性とは思えないぐらい綺麗だった。

「林山。」

こんなにきれいで優しい人が

「林山・・・！」

こんなところで死んでしまってよいのですか？

「りん・・・ざん・・・！」

よいのですか、天帝よ？

お願いします。

お願い致します。

どうか、天帝よ！

今この場で私を見ているのなら、私の願いをお聞きください。

私の残りの今生が、どれだくつらく苦しい一生になっても構いません。

来世が、畜生に生れ落ちようともかまいません。

ですからどうか、どうかお願いします！！

「私の友を・・・林山を助けてください・・・・！！」

もしお救いくださったなら、この命を差し上げても構いません。

私は卑しい身分の者で、何の財産も有りません。

高価なものは持ち合わせていません。

ですから、差し上げられるものと言えば、この命しかありません。

だからどうかお願いします。

私のこの命と引き換えに、安林山をお助けください・・・！

「お助けください、私の林山を・・・・！」

泣きながら、何度も天を仰いでお願いした。
林山の頬に自信の頬を摺り寄せながら、懇願した。

「林山を助けてください・・・助けてください・・・！」

そして私は眠ってしまった。

気づいた時には、なぜか寝台で眠っていた。

（どうして？なぜ？林山は！？）

親友が寝ていたはずの場所に自分が寝ていた。
慌てて飛び起きれば、もう一人の親友が視界に入る。

「やぁ、起きたかい？」

目にしたのは親友の王琥珀。

彼の姿を認めてから、部屋の中へと視線を送る。

（いない！琥珀しかいない！？）

林山は！？

「琥珀！！林山は！？」

穏やかにいう彼に、私はつかみかかっていた。

「林山はどこ！？ねぇ、林山は！？まさか・・・！まさかぁ――――！！」

病気の同僚が、いつのまにかいなくなる。

それはここではよくあること。

ここではそれが、永久の別れを意味していること。

みんな、知っている。

（死んだーーーー・・・・・・・！？）

「林山はどうしたんです！？なぜ、いないのですか！？」

だから、必死で聞いた。

決して受け入れられない結末。

「林山はどこ！？どこですか！？ぶじなんですよね！？」

胸によぎった最悪の事態を否定しながら聞いた。
子供のように同じ単語を繰り返しながら問うた。

「林山はっ！！？」

林山が、どうなったのか。

「落ち着いて。」

荒れる自分の声とは対照的な静かな声。

「大丈夫だよ、空飛。」

子供をなだめるような優しい口調で彼は言った。

「林山は、もう大丈夫だよ。」

「どう大丈夫なの!?どこにいったの!?」

「君の部屋。」

「えっ!?」

意外な答えに、思わず思考が停止した。

そんな私を見ながら、自分を掴んでいた手をゆっくりと説きながら琥珀は言う。

「君が・・・林山の手当てで疲れて眠っている間に、黄藩殿と衛青将軍がいらっしゃってね。」

「衛青大将軍が!?」

意外な人物の訪問に、さらに驚いた。

琥珀は私に、林山が完全に助かったので大丈夫だということと、林山が何者かに狙われていると告げたうえで、

「当分は、安静にしていなければいけない体だから、しばらく君の部屋で林山の治療をすることになった。」

「私の？」
「ああ。犯人が分からないうえに、相手は林山を諦めてはいないだろう・・・。そうなると、再び、林山を狙ってくる。そうなると、この部屋に忍び込んでくる可能性もある。」
「犯人が・・・？」
その言葉に鳥肌が立つ。
林山のを狙う人物が彼を襲いに来る？
（また、今日みたいなこと蛾林山に起きるかもしれないと・・・！？）
「本人が来るかどうかは怪しいが、その手先は来るだろうね。だから、君には申し訳ないが、しばらく君の部屋に林山をかくまうということで合意したよ。」
「・・・林山はそれを承知したの？」
「いいや。また寝てしまったみたいだから、合意は得ずに勝手に決めさせてしまった。もっとも、林山がその命令を断る理由はないと思うしね。」
「命令・・・」
（そうですね・・・。）
命令とでも言わないと、林山のことだから自分犯人探しとかしそうだよね。

「そういうことならわかりまし・・・」

（・・・・ん？）

そこまで考え気が付いた。

「どうしたんだい、琥珀？」

「『また』って？」

「え？」

「『また寝てしまった』てどういう意味ですか！？」

琥珀は、林山はもう大丈夫だと言った。

心配ないと言った。

（その上で、また寝たっていうのはーーー！？）

「林山は目を覚ましたということですかっ！？」

再度、琥珀の胸にしがみつけば、相手は困ったように告げる。

「いや、起きて寝たのを見たわけじゃないけどー」

「じゃあ、なんで断言できるんですか！？根拠は！？理由は！？」

「落ち着いてくれ、空飛。」

「落ち着けますか！？どうして起こしてくれないかったんですか！

？」

自分が寝ている間に林山は目を覚ました。
眠りこんでいる自分を見て、彼は何と思ったか。

ーーーーーー自分が苦しんでいる間に、のんきに寝ていたのか？ーーーーーー

「そう思われたかもしれないじゃないですか！？」
「な！？空飛？？」

看病していなかったように見られていたら。
心配していなかったように思われたら。
そんな私に愛想つかされてしまったら。

嫌われてしまったらー！？

（そんなのいやだ！！）

それなのに、目の前の友人はー

「どうして起こしてくれなかったんですか！？」

怖くて悲しくて、気づけば叫んでいた。
普段あげることのない声を出してしまった。
肩で息をしながら、震える唇から何度も息を吐く。
その様子を、琥珀は少し目を見開いて見ていた。
しかし、すぐにいつもの穏やかな表情に戻すと静かに言った。

「どうしてもなにも・・・君があまりにも心地よく眠っていたから・・・」

相手の言い分はわかった。
わかったが納得できなかった。
一番肝心な時に起こしてくれなかったのが、気遣いによるものだというのが嫌だった。

「だとしても起こしてくださいよ!!」

そういった後で、罪悪感に襲われる。
だからそれを誤魔化すために別の言葉を紡いだ。

「わ、私!大将軍に寝顔を見られたということですか!?それって・・・恥ずかしいじゃないですか・・・!?」

これに対して琥珀、いつものようにゆったりとした口調で答える。

「大丈夫。きれいな寝顔だったよ。それに見たのは大将軍だけじゃない。」
「琥珀と黄様もと言いたいのでしょう!?」

「私や黄藩殿、それに大将軍よりも前に林山が見ている。」
「だから、琥珀はその現場を見ていなかったんでしょう?どうしてそう言い切れるんですか!?」
「部屋の状況からして、そう言い切れるからだよ。」
「状況?」
「ああ。部屋を出る時に起きていた君は、体に何もかけていなかった。しかし戻った時、林山にかかっていたはずの布団を君がかけて眠っていた。そればかりか、林山はそんな君をいたわるように折り重なりながら寝ていたんだからね。大方、目を覚まして、寝ている君を気遣ってかけてくれたんだろう。」
「じゃあ、林山は・・・!?」

(私を気遣って自分にかかっていた布団を・・・?)

「・・・林山が気遣って起こさなかったのなら、私も起こさない方がいいと思ってね。林山のせいにするつもりはないが、悪気があったわけじゃないんだよ。」
「琥珀・・・。」
「君が林山を心配していたことは、誰よりも私が一番理解しているつもりだ。そんな君を蚊帳の外にするような真似をしたことは、本当にすまないと思っている。」

そういわれた瞬間、心の中が羞恥心であふれた。

「そんな!そんな・・・琥珀は、琥珀は悪くないです!!私が・・私が子供みたいに駄々をこねたのが悪いんです・・・!」

なにをやっているんだろう。
友の一人は、自分のことを、自分がどれだけ林山を心配したか気づ

いていた。
わかってくれていたのに、八つ当たりのように怒って叫んで。

「ごめんなさい・・・琥珀。本当に申し訳ありません・・・！」

そう言って頭を下げれば、そっとその頭に手を置かれた。

「わかっているよ。あやまらないでくれ、空飛。君が林山を心配していた気持ちを思えば、謝る必要はないから。」
「でも！」
「私達は友だろう？だったら、詫びる詫びないはここまでにしよう？」
「琥珀・・・。」

相手の心の広さを感じ、無言で何度も頭を上下させた。
するとふいに、外から人の声・・・というよりも、くしゃみと鼻をすする音がした。
それも、自分達がいる部屋の前からだ。

「・・・誰でしょう？」
「黄藩様ではなさそうだね・・・。」

険しい顔で答える親友。
真夜中に人の部屋を訪ねてくる。
それも、毒を盛られた林山の部屋に。
そこまで思って、ふとある考えにたどりつく。

「ま、まさか！？林山を狙う刺客では・・・！？」

可能性は十分あった。
口に入るものを使って、人の命を奪う輩である。
どこからか、星影が助かったという情報を得て、とどめを刺しに来たと考えてもいい。

「・・・琥珀。」

不安を交えて聞けば、親友は表情を崩すことなく答えた。

「・・・それにしては、まったく気配を消せてないよ。」

そう言いながら立ち上がる琥珀。
そのまま、入口へと歩き出した。

「あ、危ないですよ!琥珀!」

何か武器をと思いつつも、ここには剣や弓はない。
そもそも、宮廷内で物騒なものが各部屋に常備されているはずもなく・・・

「これで・・・!」

とりあえず、近くになった枕を抱えて後を追った。

「待ってください、琥珀!」

（いざとなればこれを投げてー！！）

戦おう！
林山を守るためなら、どんなことでもしますよ私は！！

そうやって気張る空飛に比べると、琥珀はひどく落ち着いていた。
いつもと変わらぬ様子だが、少しだけ足早に戸口に近づいて立ち止まる。
口は閉ざしたまま、無言でその場に佇んだ。
どうやら、相手の出方をうかがっているらしい。

「こは・・・？」

名を呼びかけた時、首だけでこちらを見る。その口元には人差し指が添えられていた。

静かに。

そう語っていた。
それに従い、空飛は無言でうなずくと、グッと口を閉ざして動きを止める。
辺りは静寂に包まれ、音をなくす。
しばしの沈黙の末、自分たち以外の声が上がった。

「夜分遅くすみません。安様。」

そう呼びかけたのは、男の声。
これに空飛は反応し、持っていた枕を高らかとかかげる。

（刺客は男！？）

林山を狙ってきたのなら、これをぶつけてやる！！

怒気を含ませながら構える空飛。

その心意気はいいが、枕にどこまでの攻撃力があるかは怪しいところであった。

第八十五話　寝起き加減はいかがですか？（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

最近、更新が遅くて申し訳ありません・・・！！
本当は、「良い夫婦の日」のゴロ合わせに合わせて１１月２２日にアップ予定でしたが、「東京都青少年健全育成条例改正問題」が再び定義されたことで、そちらがきになってしまい・・・それ＋サブタイトルで悩んでしまったことも原因でして・・・
すみません・・・！！

小説に関してですが、今回は張空飛と王琥珀のお話となっております。
というよりも、空飛視点です。
彼が安林山こと劉星影をどう思っているのか書いてみました。
次回には、訪ねてきた人が分かりますので、しばしお待ちください。

※見直しはしたのですが、誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけるとありがたいです・・・！！
ヘタレですみませんっ！！

第八十六話　一緒にいたいのです（前書き）

※竜門弥生は、「東京都青少年健全育成条例改正問題」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第八十六話　一緒にいたいのです

部屋の中で身構える宦官二人。
その態勢はそれぞれ違ってはいたが、深夜の訪問者への警戒は同じものだった。

「お休みのところを申し訳ありません、安林山様。」

再び聞こえた男の声。
部屋の主(あるじ)を呼びかける内容。

「・・・どちら様ですか？」

それに琥珀が答えた。
普段と変わらぬ冷静なものだったが、確かめるような声色。
こんな時でも落ち着いて対処ができるのだと、空飛を感心させるほどのもの。
そんな琥珀の声に、戸口の外にいる訪問者は驚いた声をあげた。

「もしやあなた様は一一一一王、琥珀殿ではありませんか？」
「！？・・・その通りですが一一一貴殿はもしや・・・・！？」

そう言うと、なんの躊躇もなく入り口をあける友人。

「ちょっと琥珀!?」

あまりにもあっさりと開けたので、空飛は小さく叫んでから言った。

「不用心ですよ!!は、早く閉めー!!」

「大丈夫。林山の話にも出てきた紅嘉の養い親だよ。」

「え?」

戸を半開きにして、こちらを見返す顔は笑顔。

あっけにとられつつも、

(紅嘉の養い親?)

突然発せられた単語に困惑した。

聞き覚えのある名前。

最近聞いたことのある名前。

(紅嘉って確か、林山に一一一一・・・)

自分が一番心配している親友に関係していた名前だった記憶があった。

それを空飛が思い出そうと必死になっている間に、もう一人の親友はその養い親を部屋の中に招き入れていた。

「これは王琥珀様！」
「やはり、魏忠殿でしたか。」

そんな挨拶をしながら部屋に入ってきたのは中肉中背の男。
空飛が初めて見る相手だった。

「紹介しよう、空飛。彼が魏忠殿。紅嘉の養い親の方だよ。」
「え？」
「あ、これはこれは。お初にお目にかかります。魏忠と申します。」

琥珀の紹介を受け、丁寧にあいさつをする男。
それにつられて空飛も挨拶した。

「あ、はい！はじめまして。私は張空飛と申します！」
「存じています。安林山様のご友人でございますね。」
「ええ、はい・・・。」

ニコニコ言う相手に、空飛も作り笑いで答える。

「そういえば、あれから紅嘉はいかがですか？」
「ええ。あの後、安様に少し遊んでもらったのが嬉しかったみたいで！あんなに嬉しそうな顔を見たのは久しぶりですよ。」
「そうですか。それはようございましたね。」

「つきましては・・・真夜中に失礼とは思ったのですが、お詫びを・・・」
「お気遣いなさらないでください。あれは、魏忠殿の責任ではございません。」
「ですが、紅嘉の・・・あの子の不始末は親である私の責任です。」
「その点に関しては、林山も気にしないと言っていました。どうぞ、御心を痛めないでください。」
「ありがとうございます・・・！本当に、命を助けて頂いたばかりか、そのようなお心遣いを・・・！」
「それは、林山に言ってやってください。もっとも、本人がそのことを気にしているとは思えませんので、笑い飛ばすかもしれませんがー・・・ああいう性格ですので、その点はわかってください。」
「ええ、ええ！それはもう・・・！本当に・・・素晴らしい方ですよ、安林山様は・・・！」
「あの～・・・」
「はい？」
「どうしたんだい、空飛？」

自分をそっちのけで、紅嘉のことで盛り上がる二人。
少しさびしくはあったが、それ以上にある感情が空飛の中にあった。

紅嘉というもののこと。

（思い出した・・・！）

穏やかな会話を繰り替え不男二人の前で。

（紅嘉って確か、林山が言っていた――――！！）

思い出した情報をもとに、空飛は口をあける。

「紅嘉というのはー・・・・！」
「は、はい？」
「うん？」

二人に確認の意味を込めて彼は尋ねた。

「私の聞き間違いでなければ、紅嘉というのは・・・」

自分を見つめる者たちに向かって言った。

「紅嘉というのは・・・・・例の子虎ですよね？」

親友である安林山を襲った。

「そうだよ、空飛。彼は、紅嘉の養い親であり、世話係でもあるんだよ。」

「王様のおっしゃる通りで！私が世話をしてます。まだ子供ですが、可愛い子ですよ～！」

思った通りじゃないですかー！！？

魏忠と琥珀の答えに、心の中でツッコミを入れる空飛。

紅嘉。

どこかで聞いたことある名前だと思ったら、林山に打ち負かされた子虎の名前でしたか。
林山が無事だったので、いまさらどうこう言う気はありませんがー！

（その、いかにも人間であるかのような口ぶりで話されるのはちょっと・・・！！）

子虎は子虎ですし。
なによりも、

「ーーーー何が可愛いですか！？林山を食べようとしたくせに、よくそんなのんきなことが言えますね！？」

真剣に聞けば、何でもない口調で返されたこと。
それが、真面目な空飛の逆鱗に触れた。

「林山を殺そうとしたくせにっ！！」

「うわっ！？」

「空飛！」

気づけば、魏忠の胸ぐらをつかんでいた。

注意の言葉を琥珀が上げたが関係ない。

「あ～な～た～ね～！あなたの虎のせいで、林山がどれほど大変な目にあったかー！？」

「す、すみません！そのことに関しまして、今、王様にも申しましたし、安林山様にも改めてお詫びをしにー！」

「お詫びで済んだら、怒りませんよっ！！ただでさ、賊に負わされた傷が治っていないのにー！！どこの世に、虎と宦官を戦わせる人がいますかっ！」

「空飛っ！！」

今度は言葉だけでなく、力ずくで止めに入る琥珀。
後ろから、空飛を引きはがすと、怖い表情で言った。

「平陽公主様への無礼になるぞ・・・・・！？」
「だってーーーー！」
「なによりも、魏忠殿は、平陽公主様に命じられて従ったまで。気持ちはわかるが、彼を責めるのは感心できない。道理的にもそうじゃないかい？」
「でもぉ・・・！」

わかっている。
それはわかっている。
主人が命じれば、親でも殺すのが常。
それが皇族からとなれば、さ唐琴は自分だけでなく一族の破滅を意味している。

（だけどー！！）

「だからって・・・武器も何もない林山と、戦わせるなんて・・・！」
「空飛・・・。」
「り、林山が死んでもいいのですか！？今回は運よく助かりましたが、死んでたら私ー！！」

林山が死ぬなんてダメっ！！
彼は、死んではいい人間じゃない！！
だからこそ、

「私はーあなたを許せないっ！！凶暴な虎を、人食い虎を育てたあなたが・・・！！」

「空飛！！」

「林山が死んでたら、あなたのせいですよ！！ううん！林山があんなことになった原因は、あなたのせいだっ！このろくでなしっ！！」

「よさないかっ！」

「ボロボロの林山に虎を！なに人間みたいに話してるんですか、虎なのに！？畜生のくせにっ！林山を殺そうとしたくせに！！」

「やめるんだ、空飛っ！」

「お前なんか、大嫌いだ！！お前の虎も大っ嫌いだぁ！！林山をーー私の大事な林山を殺そうとしたくせに！この人殺しの極悪人っ！！虎共々畜生だっ！！」

あふれ出る暴言と怒りの感情。
気づけば泣いていた。
そこまで言って、しゃくりあげながら相手をにらんだ。
これに養い親は・・・

「・・・そうですね。」

否定しなかった。

「おっしゃる通り、私が愛(いつく)しんで育てた紅嘉は、安林山様を食い殺す目的で放たれた。」

否定するどころか、残酷な事実を伝える。

「まことに・・・申し訳ございませんでした・・・！」

嘘をつくことも、弁解することもなく、素直に謝ってきた。
空飛をみつめ、まっすぐと綺麗に頭を下げたのである。

「なっ・・・・！？」

これに空飛は複雑な気持ちになった。
高級宦官になってから、別の意味で人間の嫌な部分を見ることが多くなった。
今まで、自分をいじめていた人間が、手のひら返したように敬い始めた。
あからさまに媚びて、身の保身を嘆願する。
金品などを持ってきて、良い付き合いをしてほしいとゴマをすってくる。
だから、魏忠という男も、そういうことを言うと思っていた。
心のどこかで思っていたので、ひどいことを言ってもいいのだと思っていた。
それがー

（そうじゃなかった・・・。）

気づかなかった、自分の心の卑しさを知り、ショックというよりもみじめな気分になった。

「やめてください・・・。」

思いつく言葉が見つからず、そう告げる。

「もう・・・私、最低ですね・・・！」

「ちょ、張様？」

「張でいいです！私はー・・・様付されるほど、偉くないです。今それが分かったんです、私！」

「空飛？」

「私っ！私、あなたが他の人みたいなんだと思ってひどいことー！でも違った・・・！」

そう言って泣き続ける空飛。

「私ダメなんですよ・・・！卑しい身分のくせに、高貴な身分になったから、傲慢になって、貴女に今みたいなひどいことを言って・・・！」

「張様・・・」

「自分まで偉くなった気でー！林山のおまけのくせにっ・・・！」

知っていた。

自分にへつらう連中が陰で、自分達のことを『安林山の頼みで出世できたおまけ品』と言ってることを。
それは事実だし、否定もしない。
否定はしないけど、おまけ品だとわかっている以上、林山のために働きたかった。
自分を人間扱いしてくれた親友の役に立ちたかった。
離れたくない。
大好きだから、ずっと一緒にいたい。
だから、なんと言われようと林山の側にいた。
ただ、側にいるというだけでなく、少しでも役に立てるように頑張っている。
元上司の黄藩に懇願して、礼儀作法や学問も学び始めていた。
林山の親友として笑われないように、少しでもきちんとできるように。

「なのに私は・・・！」

真似てはいけない部分を、自身もしていた。

「すみません・・・！」

絞り出すような声でそういうのが精一杯。
それを最後に誰もが口を閉ざす。
しばらくは、鼻をすする音と嗚咽する声のみが部屋に響いていた。

「・・・やはり、安林山様のご友人ですね。」
「・・・え？」
「普通は・・・自分が悪いなんて・・・おっしゃいませんよ。責められる覚悟はしていましたが、謝られるとは思いませんでした。」
「そんな！だって私ー！」
「張様が安林山様を大事に思われているお気持ち、深く伝わりました。だから、なおさらお詫びのしようがございません・・・。」
「いえ！わ、私は！」
「もし自分が同じ立場でしたらー・・・きっと、張様と同じように怒るでしょう。でも、謝罪はできません。相手を憎んでしまうだけでしょう。しかし、張様は違う。」
「え？」
「安林山様がそうであったように、自分を危険な目に合わせた相手を憎むことなく、許すだけのお心をもちです。それも、労り、気遣うだけの心の広さをお持ちです。」
「魏忠様・・・・」
「魏忠でけっこうですよ。さすが、安林山様のご友人。あの方のお側にいるのにふさわしい方です。頭が下がる思いで、一杯です・・・！」
控えめに笑うと、自然な動きで空飛に向かって再度頭を下げる相手。
「あ・・・・！？」
これで空飛の涙腺はさらに緩んでしまった。
「やめてください！そんなことー！！」

私は卑しい身分の生まれ。
食い扶持のために男を捨てた中間人。
なんのとりえもない、ただ人の形を成すだけのもの。
それがー

「林山に、ふさわしいなんて・・・・！」

悲しさと、嬉しさと、喜びと、戸惑いと、申し訳ない気持ち。
それが、空飛の中でごちゃ混ぜになった。

「私・・・！」

認めてほしかった。
林山の役に立つ人間だと。
欲望でもあった。
林山にふさわしい存在だといわれることが。
それはまだ先のことだと思っていたのに、こんなに早くも第3者から言われた。
嬉しくもあり、自分なんかがと否定と言える思いがあった。

（それなのにーーー！）

単純に嬉しいという気持ち。
嬉しいと思えば思うほど、相手に言った言葉が胸を刺す。

「ごめんなさい、ごめんなさい、私・・・・！あなたにひどいこと・・・偉い人間でもないのに・・・！」
「張様。」
「林山にふさわしいとか、まったくそうじゃないのに。まだ足りないのに！なのに、違うのに・・・！」

あふれる涙をぬぐいながら言えば、ふっと頬に何かがふれた。

「そんなことないよ。」
「琥珀・・・？」

親友が差し出した布だった。

「そんなこと・・・ないよ、空飛。君は、十分林山同様優しい人間だよ。」
「違う！私はー」
「違わなくないよ。君は・・・いつも林山を気にしていた。大事に思って、林山に何かあると、真っ先に心配し、怒り、泣き、気遣っていた。」
「だって、それはー！そんなの、誰にでもできー」
「出来ることじゃない。」

大きめの声で言うと、布で涙をぬぐってやりながら琥珀は言う。

「ここの人間の大半は、見返りを求めて何かをする。純粋に、他人のために何かをする人間なんていやしない。権力にすがり、権力に

近づきたくて、他人の足の引っ張り合いをする。でも・・・君は違う。」

「え・・・？」

「君は、安林山に近づく多くの欲深い人間の中で唯一、純粋に林山の身を案じている人間だ。損得なしで接している人物だ。」

「うそ・・・違います、私・・・！」

私はそんな綺麗な人間じゃない。

「私・・・欲深いです・・・！」

そう、醜いぐらい欲深い。

「林山とずっと一緒にいたい・・・離れたくないって、強く思ってるんです。」

林山といると楽しい。
林山といると嫌なことを忘れられる。
林山と一緒にいるようになってから、毎日が幸せになった。

「初めてできた友達だから・・・私を、幸せにしてくれた人だから、離れたくない・・・！ずっと友達でいてほしいんです・・・！」

「それを人は、無欲というんだよ。」

ーーーーーーーーーー無欲ーーーーーーーーー

まじないのような単語に、思考が停止した。

「君、権力とか出世とか財産とか・・・ほしいとか、手に入れたいとか、必要だとか思ってる？」

「え・・・？」

「考えないかい？」

「どういうことですか・・・？」

「・・・質問を変えよう。いつも、何を考えてる？」

「私が・・・ですか？」

「最近よく考えること。言ってごらん。」

優しい声で言われ、おずおずと口を開いた。

「それは・・・今日も一日無事に過ごせますように・・・と、今日も一日、林山が無事でありますようにと、林山に嫌われませんようにと、林山が今日も友達でいてくれますようにとーーーあっ！もちろん、琥珀の健康と友情の延長も願ってー！」

「ーーーフフッ！」

慌てて弁解する親友に、琥珀は含み笑いをした。

「こ、琥珀!?」
「普通の欲深い人間は、『どうすれば今より楽に過ごせるか?』『出世するにはどうすればいいか?』『気に入らない相手を陥れるにはどうしたらいいか?』『狙っている異性をどうすればものにできか?』・・・などを考えるんだよ?」
「え?」
「自分のことだけ考える。自分が得することだけ考える。自分が幸せになることだけ考える・・・他人を不幸にしてでも、自分の幸福を手に入れようとする。」
すっと目を細めると、その視線を空飛に向けながら問う。
「考えないの空飛?自分のこと?」
「考えないも何も・・・そんな、そんなこと、私と関係ないじゃないですか・・・?」
「だから君は、無欲なんだよ。」
そう告げると、涙をぬぐっていた布を空飛に握らせる。
「君が、自分を謙遜するのは知ってるけど、謙遜しすぎるのも考え物だよ。そういう自覚がないにしろ、もう少しだけ自分に自信を持った方がいい。」
「そんな!私は林山や琥珀みたいにー!」

「同じ人間じゃないか？というよりも・・・人種、かな？そもそも、林山からして常識はずれの子だよ。私も・・・自分が変わっているというのはわかってる。そう考えれば空飛・・・君はどう？」

「え？」

「失礼な言い方だが、君はまともかい？」

「わ、私はーーー・・・・」

どうなのだろう・・・？

卑しい出目（しゅもく）には変わりないがー

「林山にしろ、君にしろ、金銀財宝や権力や異性・・・それに執着してない。必要だと思うかい？」

「それは・・・思いません。宦官ですから・・・」

「林山も、君と同じように言っていたい。私も・・・宮中で宦官になると決めてから、そう言ったものは断ったし、考えることもない。その点を言えば、私達は同じじゃないか？」

「あ・・・！？」

「ね？だから空飛・・・私達は、似た部分によって引き寄せられた友。身分云々はさておき、一緒にいていいもの同士なんだ。自然の通りから考えても当然の流れなのさ。」

「当然の流れ・・・・。」

「それで納得してもらえるかな。」

ポンポンと、肩をたたかれ、笑いかけられた。

琥珀の言葉で、うごめいていた府の感情が綺麗に消えてしまった。

代わりに、暖かい思いが胸いっぱいに広がる。

「私は・・・私は、林山の側にいてもいいんですか・・・？」

「いてもらわないから困ると、駄々をこねたのは林山だよ？」
「り、林山に嫌われていないでしょうか？」
「ありえないね。私よりも好かれているよ。私は、一言多いからね。」
「そんなっ！琥珀の方が頼りにされてますよ！落ち着いてるし、年上だし・・・私だって頼りにしてます！」
「よかった。私もそうなんだよ。空飛を頼りにしている。やはり・・・気が合うね？」
「琥珀・・・！」

収まり始めた涙が頬を伝う。
それを隠すように、渡された布で顔を覆う。

「なんで・・・そんな優しいこと、言うですか・・・・？」
「空飛が優しいからだよ？」

再びしゃくりあげる空飛を、そっと抱きしめながら告げる。

「これからもよ仲良くしてね、空飛？」
「あ、あぃ！私こそ、ながよぐじでくださいぃ・・・・！」
「うんうん、よろしく。」

こうして、改めて友情を確かめある王琥珀と張空飛。
美しい光景に、今や完全に傍観者と化した男は・・・

「な、なんと感動的な・・・！」

もらい泣きとも言える、男泣きをしていた。

「宦官の友情が、これほど美しかったとは・・・！」

肩を震わせ、感服していると、二人のうちの一人と目が合う。

「・・・魏忠殿。」

「あ!?す、すみません・・・！ついもらい泣きを・・・」

涙をぬぐいながら答える男に、琥珀は言った。

「まだいらしたんですか?もう帰られてもいいのに・・・。」

「・・・・・え?」

これで彼が、違う意味の涙を流したということを、本人以外知る由もなかった。

第八十六話　一緒にいたいのです（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

訪ねてきたのは、小虎の養い親である魏忠でした。
謝りにきた彼に対して、張空飛の怒りが爆発です。
彼が安林山こと劉星影をすごく心配していた反面、危険な目に合わせた相手に対して怒っている姿を書いています。
王琥珀と絡むことで、空飛の気持ちを少し整理させてみました。
要は、林山を大事な友達と思っているところさらに書きたかったわけです。
最後の最後で琥珀の冷たいような台詞・・・次回にご期待頂けると嬉しいです。

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！
ヘタレですみません！！

第八十七話　すべては林山（星影）のために（前書き）

※竜門弥生は、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第八十七話　すべては林山（星影）のために

「それはそうと魏忠殿、こんな時間にいかがされました？」

不審者と警戒されてもおかしくない時間にやってきた訪問者・魏忠昼間知り合った虎の世話係を部屋に招き入れ、茶を差し出しながら尋ねる琥珀。

「お礼を述べても帰られないということは・・・なにかご事情があるとお見受けしましたが？どうぞ。」

「え？は、あ・・・！？こ、これはすみません・・・」

出された高価な茶を、恭しく受け取りながら頭を下げる男。

「あ、あの・・・お茶だけでは味気ないので、なにか甘いものでも・・・」

二人のやり取りに、おずおずとした様子で空飛が干した杏子を持ってきた。

「空飛。」

「ど、どうぞ。」

「ああ！これは、申し訳ありません！！」

空飛の心遣いに、慌て頭を下げる魏忠。

先ほどまで、林山をめぐって修羅となっていたがそれももう落ち着いていた。

こうしたやり取りも、空飛が落ち着いたのを見計らってから起こし

た行動だった。
魏忠が杏子を受け取ったのを見届けてから、さりげない口調で琥珀は聞いた。

「そもそも、このような時間に尋ねてこられるということ事態、何やら仔細があるとお見受けいたしましたが？」
「え・・・えぇ、はい・・・！」

相手の言葉に、いろんな意味で流した涙をぬぐいながら男は言う。

「実は・・・お礼を述べたかったのはもちろんですが、今宵このような時間にお尋ね致しましたのには、それなりのわけが・・・」

そう言いかけた男は、何かに気づいたように部屋の中を見回しながら言った。

「あの～」
「いかがなさいました？」
「安様はどちらへ？」
「え？」
「・・・林山に何かご用で？」
「は、はい。安様にお願いしたいことがございまして、失礼を覚悟でこの時間に押し掛けたのですがーーーー・・・こちらは、安様のお部屋ですよね？」

（あれ？これってまずいですか・・・！？）

虎の世話係の言葉に固まる空飛。
林山が毒で倒れたことは、自分達のみしか知らないこと。

「この件は、他言無用とします。安林山殿が毒を盛られたなどと宮中に知れ渡れば、高貴な方にあらぬ嫌疑がかかりますからね！よろしいですね・・・！？」

そうきつ～く、元上司である黄藩様から命じられた。
彼の言う通り、ただでさえ林山は宮中で目立っていた。
それが良い意味ばかりとは限らない。
黄藩が言う『高貴な方』が誰を指しているのか、要領の悪い空飛でもわかっている。

【皇帝陛下の姉ともめた宦官が、その直後に毒を盛られて倒れた。】

そう聞けば、誰もが毒を盛った犯人が宦官に負かされて、恥をかいた元・皇女だと単純に思うはずだ。
証拠がなくても、噂のみで罪人にされることなど、宮中ではよくあること。
しかも、その相手が相手である。
林山が毒を盛られたこと以上に、大きく騒ぎ立てられるのは目に見えている。
なによりも、それが何者かの罠であったとしたら、それによる犠牲者を出してはいけない。

だから、秘密にする必要があった。
今の時点で、周囲はこの事実を知らない。
絶対に知られてはいけないのだ。
いけないのだが――・・・・・

「安様のお部屋だとお聞きして参ったのですが・・・安様はどちらに？もしや、厠でございますか？」

早速その秘密が、バレそうになっている。

（こ、これはまずいですぅ～！！）

ここで迂闊なことを言えば、怪しまれるどころか、林山が暗殺されかけたことがばれる可能性があった。

（何とか誤魔化さないとっ！！）

「あ、あのですね！」

「あいにくここにはいません。」

何とか言いくるめようと、口を開いた空飛の言葉を遮ぎるように琥珀が言った。

「申し訳ない、魏忠殿。林山はここにはいません。」

「琥珀ぅ！！？」

「魏忠殿なら言っても大丈夫だよ。」

そう言うなり、不思議そうにこちらを見る男に向かって言った。

「実はですね・・・林山は今、私の部屋で酔いつぶれて寝ていまして。」

「えっ！？」

「王様のお部屋で！？」
「はい。実は、陛下からお酒を賜り、私達と一緒に飲んでいたのですが、したたかに酔ってしまいまして。おまけに、古傷も治っていない時に深酒をしたために一気に疲れも出てしまったらしく――・・・今は私の部屋の寝台で夢の中ですよ。」
「それは・・・しかし、なんで王様のお部屋で？」
「どうしてでしょうね～なぜか、酒盛りをする際に私の部屋ということになりまして。その場の流れというやつでしょうか？けっきょく寝台を取られた私は、お返しということで今夜は林山の部屋で寝ようと、こうしてこの部屋に居座っているわけでして。」
「そ、そうなんですよ！アハハハ。」
「さらにいえば、我々二人は少しばかり飲み足りず、こうして林山の部屋で魏忠殿が訪ねてくるまで、酒盛りをしていたという次第です。」
「そうだったんですか。」
琥珀のウソにすっかりだまされる男。

（さすが琥珀ですね！だけど・・・よくそれだけ、嘘が思いつけますね・・・。）

友の弁舌に感心しつつも、内心では眉をひそめる空飛。

「では、安様にお願いごとをするのは無理なようですね・・。」
「お願い事ですか？」
「はい・・・。」
「林山に何を頼まれるつもりだったのですか？」
琥珀の問いかけに、男は口ごもる。

「あの・・・私達でよければ、お力になりますが？」
「いえ、張様。そのお言葉はありがたいのですが・・・」
「なにか？」
「・・・恐れながら、お二人ではちょっと・・・。」
「頼めないことだと？」
「あ、いえ！その・・・・」

琥珀の言葉を否定しつつも、あながち間違いではないようだった。

「わかりました。出来る出来ないは別としまして、お話だけでもお聞きしますよ？」
「王様。」
「いかがでしょう？」
「それでは・・・・失礼ながら言わせていただきます。」

そういうなり、突然その場に座り込む魏忠。
二人が驚く前に、男は頭を下げながら言った。

「お願いします！！どうか、安様を半刻だけでいいのでお貸しください！！」

「「はい？」」

それはあまりにも、突拍子のないお願いだった。

しかも内容が内容だけに、

「魏忠殿・・・」
「はい！！」
「あなた・・・林山を狙っているのですか・・・！？」
「空飛っ！」

震えながら言う張飛の言葉を、琥珀が強く制した。

「なにを言ってるんだい、君？」
「だってそうでしょう！？あの人、やっぱり林山を狙っー」
「よさないか。」

誤解を招きかねない親友の発言。
慌てて口をふさぐ琥珀。

「むぅ！？」
「やめるんだ。」

なんでです！？
だってそうじゃないですか！？
けが人を・・・建前で酔いつぶれたと言っているにもかかわらず、
貸してくれなど言うのですよ！？

（刺客だと疑わない方がおかしいじゃないですか！？）

目で訴える空飛に、琥珀が口を開きかけた時だった。

「誤解ですっ！！」

叫んだのは魏忠。

「・・・なにが誤解だと言うのですか？」

「むーむー！」

それに冷淡な口調で尋ねる琥珀と、琥珀に口を閉ざされつつも「そうだ、そうだ」と抗議する空飛。

空飛はともかく、琥珀の言葉を受けて、相手は赤面しながら言った。

「わ、私はー・・・安林山様に、横恋慕しているわけではございません！！」

「「はぁ？」」

「た、確かに見目麗しく、心根も美しい方ですが――皇帝陛下の愛妾に、そんなっ！畏れ多い！！」

相手からの一連の発言で理解する。

（もしやこの男ー・・・）

（私達が、安林山に心奪われ、真夜中に忍んできたと勘違いしたと思って弁護をしている・・・？）

なによりも、

「あ・・」

「愛妾って・・」

林山が聞いたら、怒りますね・・・。

ああ、間違いなく怒るだろうね・・・。

目と目で語り合いながらうなずく親友二人。

「ですから違います！！誤解です！！そういう意味ではないです！！」

その様子をさらに誤解しながら弁護する男。

空飛の言葉を上手く誤解してくれた相手への安堵と、いつまでも騒がせておくわけにもいかないという思いから琥珀は口を開いた。

「ではなんと？」

「わ、私が言いたいのは――――・・・紅嘉のために、半刻お時間

を頂けないかと思いまして！」

「「紅嘉の？」」

琥珀の問いに、言いにくそうに男は言う。
これに、再度化を見合わせる林山の親友達。

（虎が、林山になんの用だと言うのですか？？）

特に空飛など、まじまじと相手を凝視していた。
それを受けつながら、男はそう頼んだ理由を口にし始めた。

「実は・・・あれからずっと泣いているんですよ。」
「泣いているとは・・・」
「誰がですか？」
「紅嘉です。」
「吠えているということですか？」
「いいえ！悲しくて泣いてるんですよ！」
「え！？虎が、泣くのですか？」

鳴くのではなく、泣く。
あまり聞かない言葉に聞き返せば、相手は胸を張りながら答える。

「泣きますよ！！そりゃあ・・・人間のようには泣きませんが、ずっと低い声で悲しそうに泣いているんです！」
「はぁ・・・。」
「安様が別れ際に、あいつの頭や顔をなでてくださいました。それをあいつは嬉しそうにしておりまして。だから、安様が去って行か

れてからずっと・・・どんなに私があやしても、泣き止まないのです。」

「つまり魏忠殿は、いかがなさりたいのです？」

「その・・・安様が現在、陛下を守る際に負った傷で苦しんでいらっしゃるのはわかります。わかりますが・・・！」

そう言って拳を握りしめると、意を決したように言った。

「どうかお願いします！！少しだけ、ほんの少しだけでいいので、紅嘉に会ってやっていただけませんか！？」

「ええ！？」

「ほんの少しでいいのです！ほんの少し、ほんの――――半刻でいいですから！」

「魏忠殿。」

「半刻の間だけでいいですから、お時間頂けないでしょうか！？その半刻の間で、なんとかなだめさせますから！！ですから、どうか！どうか・・・！！」

「それはー・・・！」

「無理ですよ！」

今度は、空飛が琥珀の言葉を遮った。

「空飛。」

「無理です！そんなことできません！！」

毒から回復したとはいえ、林山が重病人には変わりない。

（そんな体で歩かせたら、また具合が悪くなるじゃないですか！！）

「林山に無理はさせられません！」

「張様！」
「・・・空飛の言う通りです。おまけに今は、酒を浴びている。まともに動けません。」
「王様！」
「なので、お引き取りください。」
「わかっています！ご無理はわかっています！」
「でしたら・・・」
「申し訳ありません・・・！本当はこんな非常識なことをお頼みするのは失礼と心得ております！ですが、紅嘉のいる小屋は、平陽公主様のいらっしゃる場所の近く・・・！『鳴き声を黙らせろ！』というお達しが下り、黙らせなければ、あの子に何をされるか・・・！」
「だからと言って・・・林山を貸すわけには。」

（そうですよ！紅嘉より先に、林山の寿命が尽きてしまうじゃないですか！？）

否という返事をする琥珀に、口には出さずにそう思いながらうなずく空飛。
それでも魏忠は、諦めることなく食い下がってきた。

「そこをなんとか！！」
「・・・無理ですね。」
「そこをなんとかっ！」
「酒づけになってしまっている怪我人は貸せません。」
「そこをなんとかぁ！！」
「お気持ちはわかりますが、魏忠殿、」
「いい加減にしてくださいませ！」
「空飛。」

繰り返される問答に、少し苛立ち気味に空飛は声を出した。

「あなたが、紅嘉殿を大事に思うお気持ちはわかりますよ！？ですが、それと同様に、私だって林山が大事なんです！」

「それは――――重々承知して・・・」

「でしたら、これ以上申されますな！ただでさえ林山は！！安殿は重――――」

「空飛！」

眉を顰めながら友の言葉を諫める琥珀。

その表情と声で、我に返る空飛。

「あ・・・！ご、ごめんなさい、琥珀・・・！」

（私、思わず余計なことをー・・・・！）

慌てて口を紡いだ親友を横目で見てから、床にひざまずいて頼む男に目を向ける琥珀。

そして、相手の側に膝をつきながら優しい声色で言った。

「紅嘉殿は・・・それほど嘆いているのですか？」

「はい！それはもう、大変な騒ぎようで・・・！だから、平陽公主様も！」

「それゆえ魏忠殿は、安林山殿と紅嘉殿を合わせれば、紅嘉殿が落ち着くのではないかと思われたのですね？」

「はい・・・。安様が去られた方角に向かってしきりに鳴くのです。顔につた香を落とす時も、嫌がって大変でしたから。」

「香を・・・ですか？」

「ええ。安様の臭いがついているみたいで・・・それで、おそらく。」

「・・・わかりました。では、こうしましょう。」

そこまで話を聞いてから琥珀は1つの提案をした。

「残念ながら、今の安林山殿の体調を考えれば、彼を紅嘉殿会わせることは絶対にできません。」

「そんな!!」

「ですが・・・林山殿の臭いが付いたものを、紅嘉殿に届けることはできます。」

「え!?」

「姿かたちがなくとも、慕う者の臭いがするものならば、きっと紅嘉殿も大人しくなるのでは?」

「いかがでしょう?」

「是非!是非お願いいたします!」

「では、そのように・・・。」

そう言うと、ゆっくりと立ち上がる琥珀。

その様子を心配そうに見守っていた空飛に向かって告げた。

「そういうわけだから空飛、林山に許可をもらいに行こう。」

「許可?」

「そうだよ。林山の臭いが付いた服を紅嘉殿に贈ることを、本人の了解なしにするのはよくないだろう?」

「え、ええ。」

「そういうわけですから魏忠殿、私は空飛と二人で、私の部屋にいる林山に聞いてきます。その間、申し訳ないのですが、この部屋でお待ちいただけませんか?」

「この部屋でですか?」

「なにか不都合でも?」

「いえ・・・実は・・・・」

口ごもりつつも彼は言う。

「安様に、紅嘉の小屋までご足労頂くのは申し訳ないと思いまして・・・・」

「はい？」

「紅嘉を、そばの庭のあたりまで連れてきていまして・・・。」

「「え？」」

（虎を連れてきた・・・ですって！！？）

「そっ！？それ、危なくないですか！？」

「大丈夫です！首輪をしっかりしてますし、ちゃんと縄を木に巻きつけてますし、なによりも！！」

「なによりも？」

「うさぎの肉を与えていますので、空腹で人を襲うことはありません。食事中は静かですから！！」

自信満々に言う虎の世話係。

「・・・あの。」

「なんでしょう、張様？」

「・・・食事で静かになるんでしたら、林山に合わせなくてもそれで静かにさせればいいのではありませんか？」

「いいえ！そんなことをさせれば太ってしまいます！そうなれば、

早死にの原因になるではありませんか！？」

（あなたの要求をのめば、林山が早死にしそうなんですけど・・・！？）

そう言いたいのを我慢して言葉を飲み込む。

代わりに、ため息をつきながら琥珀が言う。

「とにかく・・・林山に会ってきますので、待っていてください。」

「あの！でしたら、紅嘉の側で待っていてもいいでしょうか？その方が、あいつも私も安心しますので――」

「「あぁ、はい。どうぞどうぞ。」」

こうして、部屋のまで男と別れる形で琥珀の部屋へと向かう二人。

「琥珀・・・」

しばらく歩いたところで空飛は親友に話しかける。

「林山は・・・今、私の部屋ですよね？」

「・・・予定ではそうだね。」

「ならば、どうしてあなたの部屋に向かってるんですか？」

「用心のためだよ。」

小さい声をさらに小さくし、隣にいる空飛にさらに近づきながら言った。

「いくら、林山が貰い受けうけた子猫の養い親とは言え、会って1日しかたっていない相手・・・信用はできないからね。」
「子虎でしょう?悪い人には見えませんでしたが・・・?」
「ここで、見かけで人を判断するとどういう目にあうか忘れたのかい?」
「あ・・・そ、れは・・・」
「目に見えることだけ、信用するのは危険なことじゃないかい?」

琥珀の言葉に、口ごもる空飛。
そう、ここは『宮中』という名の危険地帯。
皇帝の前では、仲睦まじい姿を見せていても、本当はそうでないこと。
にこやかに笑って談笑していたかと思えば、その直後にその相手の悪口を言う。
本人がいなくなったところで、散々ぼろくそに言うのだ。
口で言うだけならまだしも、時には罠にはめて、だまして相手を追い落としたりする。
自分が一番に出世したいがために、邪魔な人間を冤罪にかける。
時には上司に嘘の報告をして、相手の命までも奪ってしまう。
命だけではない。
その相手が所有している財産・家族までも奪い取ってしまう。
それらがバレないだけの地位や名誉、身分と権力者からの信頼を持ちながらも、さらなる高みを目指そうとする者達。

「ここは、そういう場所でしたね・・・。」

思えば、宮中に入ったばかりの頃、同じ年頃で仲良くなった子がいた。
何でも話し合い、今の林山や琥珀のように思っていた。

自分はそう思って信用していた。
ところが相手はそうではなかった。
その子は、自分を利用した。
気づいた時には、下級宦官の中でも一番下っ端でいじめられる立場。
そう仕向けたの信じていた友達。
友達だと思っていた相手。
彼がその後どうなったか・・・
高級宦官に近い立場になり、上手く立ち回っていると聞いた。

（私を・・・利用して・・・！）

それを思い出し、空飛は強くした唇をかんだ。

「空飛？」

その声で我に返った。

「あ！すみません、私・・・！」
「疲れたんだね？無理もないよ・・・林山と付き合いだしてから、いつも騒動に巻き込まれるからね。」
「そんなんじゃないですよ、大丈夫です！」
「ならいいんだけど。とりあえず、私の部屋についたら、君は休みなさい。あとは、私がうまくやるよ。」
「そんな！琥珀ばっかりに頼るわけにはー！」
「先に頼ったのは私だよ。林山の看病・・・ずっとしていてくれたじゃないか？本当は私も側についていたかったんだけど・・・黄藩殿への報告があったからね。君に任せきりにしてしまった。」
「そんなことないですよ！私はー琥珀と違ってテキパキできません！適材適所を考えれば、それぞれの役割をこなせるものがした方が

ー！あっ！？違いますよ！琥珀が看病をする役目に適してないという意味ではなくー！！」
「ハハハ！わかってるよ。」
必死で弁解する空飛に、表情を柔らげながら言った。
「わかってるから、借りを返させてほしい。・・・というよりも、一芝居打っていてほしいんだ。」
「一芝居？」
「部屋に、林山がいるようなそぶりをしていてほしいということだよ・・・。」
「え？」
「どうも私は・・・納得できなくてね。」
「・・・なにがですか？」
「・・・林山が、今どのような状況であるかは、私と空飛、黄藩殿に衛大将軍しか知らない。知らないはずなのだが・・・ここは宮中。油断はできない。」
「まさかー・・・・私達以外に、このことを知る者がー・・・！？」
「知ろうと・・・探ろうとしている者がいるかもしれない。」
とたんに空飛の体が固まる。
それを予測していたかのように、相手の肩に手を乗せる琥珀。
「あ、ほこりがついているよ。空飛。」
「こ、琥珀！？」
「・・・静かに。自然なそぶりをして・・・！」
何もついていない肩で、何かを払う動作をしながら言う親友。
「・・・今も、私達を尾行している人物がいるかもしれない。だか

らこそ、部屋についたら、林山がいるものとして私と二人で芝居をしてほしいのだよ・・・！」

「琥珀・・・・」

「いいね・・・？」

「・・・わかりました。」

その言葉を合図に、「さぁ、取れたよ。」と言いながら、空飛から離れる琥珀。

相手からの指示を受け、必死で自然なふりをする空飛。

何でもないふりをするため、夜中にもかかわらず、昼間と同じ声の調子で会話を続けた。

部屋まで話し続けたのだがー

（ああ・・・会話が頭に入ってこない・・・！）

緊張と恐怖と警戒心で、彼の頭と心は真っ白になっていた。

呼吸するのが痛いぐらい、心臓の音が大きくなる。

自分が何を話しているのかも、相手が何を言っているのかわからない状態。

（早く、琥珀の部屋につきますように・・・・！！）

部屋につくまでの間、頭の中にあったのはその思いだけだった。

第八十七話　すべては林山（星影）のために（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

何とか魏忠をごまかした琥珀と空飛を書いてみました
何事にも動じない琥珀と、林山のために平静を装うように頑張る空飛なのでした。

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！
ヘタレですみません！！

第八十八話　追いかけっこ（前書き）

※竜門弥生は、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第八十八話　追いかけっこ

距離を置きながら後をつける。
目的の少女は、周囲を気にしながらトコトコと歩いていた。

「どこまで行く気だ・・・？」
「まったくだ。ずいぶん奥まで来ちまったな・・。」

少女に視線を向けながら林山は言い、周囲に目を向けながら義烈は答えた。
あれから二人は、少女の後を追いかけて、塀をのぼり、花畑を抜け、とある宮殿へと来ていた。
そこは、品のある装飾がされており、それなりの身分の者が生活しているらしい場所だった。
星蓮捜索のために宮中に来た林山達であったが、今やその目的はどこ吹く風か。
不審な少女の後をつけるのに必死であった。

「どこまで行くんだい、お嬢ちゃん？」

決して聞こえることのない距離で、聞こえるはずのない声でささやく義烈。
それは、完全にたわむれによるものだった。

「ふざけている場合かよ、義烈？」

「退屈なんだよ、尾行はよぉ。」

注意する青年に、男は軽口で返した。

「相手がイイ体した美女ならいいぜ？それ以前に、面さえ分からないんだ。気楽に追うしかないだろう？」

「あのなぁ～・・・！」

「まぁ、俺好みの面だったら俺だって頑張るぜ？体はまだまだ成長過程だが、宮中にいるって点では将来有望だ！ゆ・う・ぼ・う。」

「・・・お前好みでも、相手がお前を気に入らなければ意味がないと思うぞ？」

「そうかもな。」

クックッと笑いながら言うあたり、真剣みがない。

この男に真面目に説教しても意味がない。

そう思いながらため息交じりに視線を返した時だった。

「あれ？」

玲の少女が立ち止っている。

「義烈！」

「ん？」

相棒の名を呼んでその様子を指させば、少しだけ目を細める。

「あんだぁ～？」

「どうしたんだろう？」

とある部屋の前で動きを止めていた。

「あの部屋に用があるのか？」
「こっちからじゃ、面が見えないから何とも言えねぇが～・・・」
「というよりも――――」

「「なにしてるんだ？」」

二人の口から出たのは、偶然にも同じ言葉。
というよりも、そう言わずにはいられない光景がそこにあった。

「なんだよあれ？犬かよ？」
「犬ってあなた・・・いや、でも確かに――――――」

もう一度見た少女は、不可解な行動をとっていた。
なんというか・・・迷うようにぐるぐると部屋の前をまわっていたのだ。
落ち着きなく部屋の前で動く姿は、仔犬と言えなくもなかった。

「どうしたんだろう・・・？」
「俺に聞くなよ・・・。」

互いに顔を合わせ、首をかしげる。
もう一度、問題の人物へ視線を戻そうとした時だった。

「おい！」

近況を知らせるような義烈の声。
それは声でなく、表情までも変えていた。

「どうし――――？」

その変化受けて何事かと尋ねる林山だったが、最後まで言い終えることはなかった。

「ヤバイだろうあれ！」
「は？」

そう言いながら言う義烈の視線の先を見る。
少女がいる場所からかなり離れた場所。
林山の目に飛び込んできたのは動く何かの姿。

「あれは――――――！？」

人の姿。
まぎれもない人間だった。

「まずいぞ、義烈！このままじゃ鉢合わせに――――！」

林山の言葉に、小さく舌打ちする義烈。
そして動いた。
少女に向かって一直線に走りだしたのだ。
つられて走り、追いかけながら声をかけた。
相手の行動の意味を知るために。

「おい！？」
「近くまで行くぞ。」
「え！？」
「ヤバくなったら、落とす。」

――――やばくなったら、おとす。――――――

（つまりは、あの子が見つかったら、向こうから来てる相手を気絶させるということか！）

確かに、その方が無難かもしれない。
そうすれば、逃げ出そうとする少女を説得する手間も省け――――！

（・・・・ん？）

そこまで考えてハッとする林山。

少女は真夜中に出歩いていた。
遠くの宮殿まで一人で来た。

部屋の前で立ち止まる。
部屋に入ることなく、うろうろしている。

「まさか――――？」
「どうした？」

何かに気づいたような口調でつぶやく林山に義烈が声をかける。
それに応じたというわけではないが、自然と口をついて出た言葉。

「なぁ義烈、もしかして――――」

否――――――

「あの女の子・・・誰かと逃げるために、こんな遠くの宮殿まで来たんじゃないか？」

感じたままのことを口にしていた。

「なに？」

林山の発言に、歩みは止めなかったが勢いよく振り返る侠客。

「だってそうだろう？こんな真夜中に女の子が一人で――――――・・・

理由もなく宮中内を動き回ると思うか？」
「そりゃぁ――――・・・・」
「それに、『宝仙宮』からここまでくる道中のはしごとか！あんな、いかにも『隠していました』っていうものを使って、ここまでくる理由はなんだ？宮中のさらに中心部で、俺達のいたところから、かなり距離がある場所にだぞ！？」
「確かに・・・・逃げんなら内側じゃなくて外側に向かっていくよな、普通は。」
「そうだろう？きっと、一緒に来た友達か何かと逃げる気かもしれない！」
「それなら男もありだろう？」

その言葉で体が震えた。
しびれるような妙な感覚。

おとこと、にげる。

自分がこれからしようとしていること。
あの少女の姿は、未来の俺達でもあるのか？
妙な不安が脳裏をよぎる。
それをかき消すかのように、大きく頭を振る。

（大丈夫だ！俺と星蓮は大丈夫だっ！）

一瞬ではあったが、自分に言い聞かせた。
俺達は大丈夫。絶対みんなで生きて逃げる。逃げ切ってやる！
だから、あの娘も俺が助ける。
なぜなら――――

「・・・他人事じゃないからな。」
「おお、ここまで首突っ込んだからな。危なくなってるしな～！」

自然と出た言葉は、疑われることなく会話として成り立った。
どちらにせよ、少女の側へ行くのが先である。
そんなことを考えながら、義烈の後ろをついては知っていたのだが
――――

「！？隠れろっ！！」

自分にだけ聞こえる声でそう言われた。
走る速度を落とすことなく、自分の腕をつかむと、そのまま柱の陰へと引っ張り込まれた。

「ぎ――――！？」

名を呼ぼうとしたが口をふさがれる。

（なんだ！？）

最後に視界に映ったのは、同じように慌てて隠れている少女の姿。
彼女は、こちらへ向かってくる人影に気づいたらしい。

（よかった・・・！）

安堵したのもつかの間。

コツ、コツ、コツ。

廊下に響く靴音。

（誰から、こっちへ来てる・・・！？）

どうやら、今度は自分達がヤバい状況になっているらしい。
息を殺して気配を殺して身をひそめる。
すると、かすかな足音と会話が耳に届いた。

「・・・・ほしい。・・・いて・・・・だ。」
「・・・・し・・・？」
「・・・が、・・・・・・・・しか・・・・・。・・・できない。」

人の声。

（・・・これは男か。）

床に伸びた影の長さと、自分と似た質の声にそう確信する。

「・・・して・・・・か・・・・・。・・・・・たら、・・・・と・・・・・！」

「・・・は・・・・・」

「・・・ね・・・・？」

一文字一文字しか聞き取れないような会話。

ただ、その話し方からして、誰かが誰かに何かを頼んでいるようだった。

気配が完全になくなってから、その者達が向かったらしい方角を見る。

月明りで見えたのは、そのうちの一人のものらしい影法師が、視界から消えていくところだった。

「衛兵か・・・？」

「こんな時間に宮中内を動き回る男はいないだろうな。」

「男だったのか？」

「ああ。」

林山の問いにあいまいに首を振りながら言う義烈。

「女の臭いじゃなかったからよ。」

「・・・犬か、あなたは？」

「例えるなら、猟犬だろうな？」

ニッと口だけで笑うと、ピッと親指を立てながら言った。

「ヤローのことはともかくよ、お嬢さんの方が面白いことになってるぜ？」

「え？」

指を指しながら言う方向を見れば、自分達が尾行していた女の子は再び移動を始めていた。

それも、先ほどよりも足早に動いている。

（どうしたんだ、急に？）

「急げ！見失うぜ。」

「あ、待ってくれ！？」

疑問すら口に出来ぬまま、再開された追いかけっこ。

歩みを速めた相手に、こちらも追う速度を上げたのだった。

・・・・・・・

「そういうわけですので林山、林山の服、お借りしますね。」

「借りるのは、君の部屋に置いてある服だよ。そう・・・紅嘉殿にね。」

「よかったんですか、林山？虎に貸したりなん・・・ええ！？」
「アハハハ！君らしいね？では、ありがたくお借りするとしよう。」
「笑い事じゃないですよ、琥珀。」
「すまない。ああ、そうだ。ここにいる間の君の着替えだけど、私の服を使ってくれ。多少は大きいと思うが、寝ているだけだから、見てくれを気にすることもないだろう。」
「汗をかいたら、マメに着替えてくださいね？感冒の原因になりますからっ！」
「飲み物と食べ物も、そばに置いて置くから。安静に・・・いいね？」
「あ！いいです！動かないでください！すぐに帰ってきますから、眠っていてくださいね。」
「寝ている時に悪かったね、林山。」
「ゆっくり休んでくださいね！おやすみなさい、林山。」

それだけ告げると、琥珀と共に部屋から出た。
そして、すごく自然な足取りで部屋から離れたのだが、

「空飛。」
「・・・はい。」
「動きが不自然だよ。」
「そ、そうですか？」

涼しい口調で言う友に対して、自分の声が上ずっていたのがわかった。

「仕方ないでしょう・・・こういうこと、初めてですし。」
「私もね。」

（そういうわりには、緊張してないじゃないですか・・・？）

のほほんという相手に目だけで訴えれば、ニッコリと笑い返された。
あれから、琥珀の指示に従い、林山がいるとされる琥珀の部屋へ向かった。
誰が見ているかわからないので、寝台で寝ているとされる林山と会話をしているかのようなやり取りを行った。

「もぉ～・・・！生きた心地がしませんでしたよ！？」

林山の部屋に入り、寝台まで行ったところで大きく息を吐く空飛。

「しかし、誰も見ていないようでよかったよ。」
「わかるんですか～そういうこと？」
「・・・感でね。」
「はぁ、そうですか・・・。」

疲れたと言わんばかりに椅子にもたれるように座る空飛に対し、琥珀はゆったりとした仕草で椅子に腰かけていた。

「でも琥珀・・・あんなことまでする必要がありましたか？」
「あんなこと？」
「・・・寝台に置いた、林山の身代わりですよ。」
「ああ、あれかい？」
「何十枚もの服を丸めて丸めて人の体みたいにして、服で作った体と枕の頭をくっつけて、さらに服まで着せて・・・あんなことしたら、琥珀の服がダメになるでしょう？」
「林山と同じ大きさの人形があれば、それを使ったよ。それがない

以上、ああでもしないと、誤魔化せない。部屋に入ってもすぐにばれないように、頭から布団もかけたし・・・。仮に刺客が来て一突きしても、大丈夫だよ。」

「え!?やっぱり刺客は来るのですか!?」

「たとえ話だよ。備えあれば憂いなし・・・。来たら来たで時間稼ぎにもなるから。」

そんな理由で、琥珀の部屋の根台に林山人形を作ってから林山の部屋へと戻ってきた。

林山が命を狙われたのは間違いないことだから、身代わりを仕掛けておくのは当然だが・・・。

「あの身代わり人形で誤魔化せますかね・・・?」

お世辞にも上手とは言えない代物。

完成度の高くない身代わり人形を思い出して溜息つく空飛。

それに対して琥珀は落胆的だった。

「大丈夫。部屋の明かりは暗めにしたし、寝台に行くまでの道中、罠もしかけたじゃないか?」

「時間がなくて、簡単な子供騙ししかできてませんけどね・・・。」

「こういうのは、子供騙しのようなものの方が、意外と騙されやすいものだよ。」

「はぁ・・・だといいんですが。」

そう言われても、半分は不安な空飛である。

これ以上の励ましは無意味と判断したのか、琥珀はさっさと林山の持ち物へと手を伸ばす。

「さて・・・どの服を拝借するか。」
「あまり綺麗な服はやめた方がいいですよ。汚れてもよさそうなものにしないと。」
「汚れてもよさそうな服とは難しいね。林山の持ち物はどれも綺麗だ。」
「え？」

立ち上がり、服を物色している琥珀のもとまで行く。
その手元をのぞきこめば、綺麗に洗いあげられた衣装の数々があった。

「わぁ～意外ですね・・・！」
「ああ。林山のことだから、適当だと思っていたが。」
「失礼ですよ！琥珀。」
「ハハハ！これは失敬。」
「でも・・・いくら非常時とはいえ、私達の判断でお借りしてもいいのでしょうか？」
「今更迷っても仕方ないよ。さすがに下着なら、林山も怒るかもしれないけど。」
「それ、林山じゃなくても怒りますよ？」
「本当は、肌着の方がいいのだけどね・・・。直接触れている部分だから、臭いもよくしみこんでいると思うし。」
「なっなに言ってるんですか！？いけません！だめですよ！！動物のくせに！」
「動物だからこそ、嗅覚に頼る部分があるのと思うが？」
「そんなに臭いが嗅ぎたいなら、お香をつければいいんですよっ！！お香の匂いでも反応するって言っていたじゃないですか！？」
「そうなると・・・やはり、あの時来ていた服がいいかな？」
「あの時、とは？」

「林山と紅嘉殿が遊んだ時。」
「殺し合いをした時でしょうっ!?遊んだなんて、やめてくださいっ!!」
真っ赤になって怒れば、親友はくすくすと笑ってそれに答えた。
「もぅ!からかわないでくださいっ!」
「悪かったよ。しかし・・・本当にどれにしようかな・・・・」
そう言うと、笑みを消して真剣な表情で林山の衣類に目をやる琥珀。
「紅嘉殿に貸す以上、無傷で返ってきそうなものにしないと。」
「それは・・・難しいですね。」
「まぁ、いざとなれば、魏忠殿に弁償していただおう。これはどうかな?」
そう言って差し出したのは、ゴワゴワした生地の服。
「ん~手触りがちょっと・・・牙を研ぎそうな肌触りですね。」
「却下だね。じゃあ、あれは?」
「これは逆に生地が薄いので、じゃれようものなら破れますよ。」
「返却時には、ズタズタになってそうだね。それはどうかな?」
「え~?それ、高そうじゃないですか?いくら弁償してもらうとはいえ、魏忠殿のお給金で賄(まかな)えるでしょうか?」
「金欠になるね。」
「こちらはいかがですか?柄も綺麗ですし。」
「!?ダメだ!触ってはいけない空飛!!」
「え!?」
「それは林山が陛下から下賜された服じゃないか!?」
「わぁー!?なんでそんな高級品が普通の衣服と一緒に入ってるん

ですか！？」
「無頓着だからな、林山は・・・・！」
「ど、どうしましょう！？私触っちゃいましたよぉ！死刑ですかね・・・！？」
「いや、それぐらいじゃ死刑にはならないよ。それに、君が触ったぐらいじゃ林山は怒らないだろう。とりあえず、戻しておこうか？」
「は、はははは、はい！」
「空飛、服が傾いてる。」
「だっだだだって！皇帝陛下からの下賜で・・・！」
「そんな震えた手じゃどうにもならないね・・・貸してごらん。私が戻そう。」
「こ、こここはくぅ～！」
「はいはい大丈夫だよ。ここは手分けして、虎がじゃれてもよさそうな服を探そう。」
「はい・・・！」
「無難なところでいけば、上着あたりがいいだろうね。」
「わかりました・・・！」

こうして、林山の服が入った行李から、よさそうなものを探す二人。

いつもと変わらぬ動作で探す琥珀に対し、空飛は恐る恐るという感じだった。
普段着の中に、最高権力者からもらった服が混じっていたのである。
今の感覚で言えば、百均で買った服の中に、一億はする毛皮のコートを一緒に押し込んで入れているようなものである。扱いも自然と慎重になった。

（き、気をつけないと！）

カクカクと動く友を見かねてか、琥珀が声をかける。

「空飛、必ずしも下賜された服が混じっているわけじゃないから。」
「で、でも・・・！」
「じゃあ、そこの行李を探してごらん。そこには下賜された服は入っていないから。」
「え？なんでわかるんですか！？」
「その行李には、封がしてあるからだよ。皇帝が苦手な林山のことだ。封を切ってまで、入れることはないだろう？」
「確かに・・・」

言われた行李を見れば、ヒモで十文字に封がされていた。明らかに説かれた形跡のないもの。ヒモをといて行李を開ければ、中から林山のにおいがした。

「わぁ・・・」

数枚の服がその中に納まっていた。
そのうちの一枚を手に取り、広げてみる。

「これは・・・！」
「へ～なかなか良い色の青だね。」
「ええ・・・！林山に似合いそうです。」
「しかし、同じ青色なら、こっちの方が汚れても怒りそうに――・・・いや、そっちの方がいいかな？」

空飛が広げた服に目をやった琥珀だったが、自分の手元にある似たような色の服とを見比べる。

「いやいや。青でなくても、もう少し地味な服の方が――」

何着か引っ張り出し、吟味しながらぶつぶつ言う琥珀。
そしてそのまま、自分の作業へと没頭し始める。
そんな親友の姿に小さく笑うと、再度手にした林山の服を見つめる空飛。

（林山の服・・・。）

一件なんのへんてつもない普通の素材を使った服だったが、強烈に親友を連想させた。
青く澄んだ色は、颯爽（さっそう）とした彼が着れば似合うだろう。
髪留めと玉けつは緑にすれば似合うのではないか？
その上で、口元目元に化粧を施せば、きっと見目麗しい麗人になるだろう。
同性から見ても、林山はすごく魅力のある人。
もう少し着飾ってもいいのに、彼は目立つことを好まない。
行動では十分目立つくせに、自分の容姿が目立つことを拒むのである。

（あんなに綺麗なのだから、化粧ぐらいはしても良いんじゃないかな？仮にも、高級宦官だし。）

もちろん、化粧やらなんやらしなくても、林山は綺麗だった。そんな親友が自分は好きだった。それでも空飛は、思ってしまう。

（もったいない。せっかくの容姿なのに・・・）

着飾って美しい者のと、着飾らなくて美しい者との美が同じなら、着飾らない方が優れているに決まっている。
自分達三人以外の高級宦官は、みんな化粧やらなんやらしている。
黄藩様でされ、口紅をしている。
陛下は、林山や他の者を見比べて美しい朕の花だという。

（そんなの違う！）

他の者は化粧をして美しくしてるんだ！
林山は何もしなくても美しいんだっ！！
だから、一番きれいな宦官は林山だ！！
私の親友が一番綺麗なんだ！

（林山が、一番なんだ・・・・！）

広げた服を掲げ、そのまま胸に抱きしめた。

（林山のにおい・・・。）

あったかい、陽（ひ）の光のような優しいにおい。
忘れていた何かを思い出すようなにおい。
大すきなにおい。

（林山・・・・）

「・・・ので、林山があの時来ていた服にしようと思うんだが・・・いいかな？空飛？」

「え！？」

名を呼ばれ、思わず抱きしめていた服を背後に隠す。

「どうしたんだい？」

「べべべべ、べ、別に！」

「・・・そうかい？じゃあ、この服でいいかな？」

「え！？」

そう言って差し出されたのは、ボロボロで帰ってきた際に林山が来ていた肌着。

要は、虎の紅嘉と遊んだ際に身につけていた服だった。

「どうせ捨てるつもりだと言っていたし、紅嘉殿も覚えているであろう服だから、貸して汚されても困らないと思うんだよ。」

「あ！？え！？ああ！なるほど！それはいい考えですね！はい！」

「君も賛成してくれるなら、捨てる予定だというこの服にするけど・・・本当にいいかい？」

「もちろんです！私は、物の良しあしに鈍いから、琥珀のめがねにかなったのなら、それでいいと思うよ！！」

「めがねなんて、大げさだね？じゃあ、これにするよ？」

「はい！」

空飛の返事を得ると、用意していた布に服を包む琥珀。

「服はこれでいいね。後は、出した服を行李に戻しておこう。このままにしていたら、確実に起こられるからね？」
「ええ、そうですよね・・・。」
服をたたんではしまう動作をしながら言う親友に、空飛も慌てて手の中の服をたたむ。
空飛の心をつかんだ林山の服は、衣類の中の一番上へと彼の手によって置かれた。
「それじゃあ、行こうか？」
「はい・・・。」
琥珀の言葉で、彼の後について部屋から出る空飛。
行李のふたを閉める際、名残惜しげに見た青色の着物。
行李の外で見た時とは違う、別の青さになっているように空飛は感じたのだった。

第八十八話　追いかけっこ（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

私事ですが、毎回小説をアップするたびに思うのですが、サブタイトル考えるの大変ですね・・・（大汗）
ストーリーはすぐに思いつくのですが、サブタイトルは考えるだけで数日かかります。
ただでさえ、脱字・変換ミスが多いのに、お恥ずかしい限りです（赤面）

さて、今回の小説の内容ですが、林山&義烈の追いかけっこと空飛&琥珀の話となっています。
本来の目的そっちのけで、少女を追いかける林山達。
自分と似ている部分があると感じた林山は、義烈と共にさらに追跡します。
一方の空飛と琥珀は、林山こと星影の服を持って魏忠の元へと向かいます。
次回は、誰が出てくるのでしょう（笑）
興味ある方、引き続き読んで頂けるとありがたいです。

遅くなりましたが、ハッピーバレンタイン！！

第八十九話　肝心なことが抜けてました（前書き）

※竜門弥生は、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第八十九話　肝心なことが抜けてました

夜と昼では、こんなにも違うのね。

そんなことを考えながら、真夜中の静かな廊下を小走りに走る少女。
平陽公主付きの女官・玲春だった。
仕事着の上から、紺色の布をかぶっていた。
その身を隠すように。
少女が夜中にこそこそ動いていたのにはわけがあった。

（早く安様にお会いしないと・・・！！）

自分を助けてくれた高級宦官・安林山を見舞うためであった。
普通、お見舞いといえば明るいうちにするのが礼儀である。
しかし彼女の場合は、人目のある昼間は動けない。
というのも、自分が仕える主人が、安林山のことを嫌ってしまっているからだ。

「玲春・・・安林山には二度と会うでないぞ・・・・！？」

あの騒動の後、女官頭の馬瞭華を通すことなく自分に告げた女主人。

それが何を意味している。

（直接言われたということは、絶対聞かなければいけないご命令ということ・・・。）

平陽公主様のご性格を考えれば、当然なのかもしれない。
ご自身の愛用品を偽物と暴かれた上、殺そうとした相手に命を救われてしまえば・・・

（安様をお嫌いになられても、仕方がないのかもしれないけれど・・・）

玲春の脳裏に、安林山の笑顔と平陽公主の笑みとが交互に浮かぶ。

できれば、できることならば――

（お二人には仲良くしていただきたい・・・）

だって、

（お二人とも、私にとって大事なお方だから・・・）

少女は自分の住んでいる宮殿から抜け出した。
誰にも告げず、誰にも気づかれないように彼人(かのひと)の下(もと)まで行かなければならなかった。
安林山のいる宮殿に行くのは、同じ宮中内だから簡単かと言えば、そうでもない。
自分がいる宮殿と相手のいる宮殿はかなり離れている。
普通に行くだけでも時間がかかるのに、その途中途中で、衛兵の見回りや見張りなどが各所に配置されていた。
つまり、見つからないように女官一人でこんな真夜中に行くのは不可能であるということ。
捕まればただでは済まない。
降嫁したと皇族の姫（？）の侍女といえども、罰せられるだろう。
仮に、お見舞いに行くためだった正直に話したところで信じてもらえるか怪しい。
というよりも、下手をすれば密通をしに行くと誤解されかねないのだ。

（そんなことになっては、平陽公主様にご迷惑をかけてしまう。）

ただでさえ、自分が原因で不快な思いをさせてしまっている。
それを思ったので、正直に普通の道を使わなかった。
先輩女官や自分で見つけた秘密の近道を使って、彼女は安林山のいる宮殿へと来たのである。
庭を抜けたり、塀を登ったりと、見つかれば怒られそうなことをしながら忍び込んだ。
はやる気持ちを抑えつつ彼女は向かったのである。

（安様が知れば、またご心配をかけそうだけど・・・。）

そう思いながら、廊下の角を曲がろうとした時だった。

「まったく!!どうしてあの子は・・・!」

甲高い声が聞こえた。
慌てて、近くの部屋に入る。

「安林山め・・・!大将軍にまでご迷惑をかけるなんて!ぁあ・・・
陛下に何とご報告すればよいのやら・・・」

(安林山!?)

その声は、自分が探す人物のことを口にしていた。

「大体あの子は!入廷早々、先輩宦官と一方的な殴り合いの喧嘩をするわ!立ち入り禁止の陛下専用のお庭に侵入するわ!そこで賊と壮絶な戦いをして品物をたくさん壊すわ!陛下に無礼を働くわ!挙句の果てには平陽公主様に殺されかけるわっ!本っっっ当~~~~に!!あの宦官らしくない宦官め!!」

歯ぎしりしながら言う内容は悪口。

「人の話を聞かない!忠告もどこ吹く風!高慢で!自信家で!凶暴

で！身勝手で！自由人で！思ったことは良くも悪くもズバズバ言う！！こうだと決めたら一直線のイノシシでっ！！口が悪いクッソガキがぁ～～～～！！！」」

悪具と言うか偏見と言うか、とにかく怒りを口にしていた。

「これにこりて、大人しくなればいいけど・・・！ただでさえ、宦官らしくない行動・素行・口調で、古参の者からも苦言が来ているというのに！いくら私の元部下とはいえ、今後はまじめに行動してくれないと、私の評価にだって関わるっていうのに！これ以上私の顔に泥を塗られちゃかないませんよっ！あれが健全な体の男なら、と～～～の昔に！おチンチン切り落として喉の奥に突っ込んでやってるぜ・・・！！」

（こ、ここの宦官って怖い・・・・！！）

自分の周りにいるナヨナヨとした女性っぽい宦官と比べ、その違いを痛感する玲春。

何気に男らしい言葉を使ったのも、そう感じさせる要素となっていた。

そうして、しきりに安林山に対する悪口を並べる宦官であったが・・・

・

「・・・あの子、本当にちゃんと寝てるかしら・・・？」

急に、静かな口調でつぶやくように言った。

「・・・そりゃあ・・・ああなったのは、自業自得だけど・・・・悪意があってしたわけじゃないでしょうし・・・。だからこそ、始末が悪いのだけど・・・」

なにやら、愚痴のような嘆きのようなことをブツブツ言い始めた。

「まぁ・・・意外と丈夫だから簡単には死ななそうだけど・・・ちゃんと休んで治しなさいよ。」

え？

（治しなさいよ・・・？）

「治して・・・元気になるのですよ・・・。」

集中して聞いていなければ、聞き逃していたほどの声。
蚊の鳴くように小さく紡がれた言葉。
安林山を気遣うもの。

（この方は――――――！）

文句を言いつつも、心配をしていた。
散々口汚くののしっていたが、最後に漏らした言葉はまぎれもない真実。
安林山の身を案じる言葉だった。

（心配する心が深かったからこそ、その反動であんなことをおっしゃっていたのね・・・。）

それがわかって、玲春は嬉しかった。
足音が聞こえなくなるのを待ってから、隠れていた部屋からそっと顔を出す。

（行ったみたい・・・。）

悪口で照れ隠しをしていた人物は、もうそこにはいなかった。

（さっきは怖いと思ってしまったけど、本当は良い方なのかもしれない。）

そんな感想を思い浮かべながら、相手が来た方向を見る。

（今の方、こちらから来たのよね・・・？）

周囲の様子をうかがいながら玲春は考えた。
今の人は、安様のことを話しながら歩いていた。
話の内容からして、今まで安様に会っていたと考えられる。

（もしかしたら、安様を見舞った帰りだったのかもしれない・・・）

『元部下』と言っていたから、以前は、安様の上司だった方でしょうね。
もしそうなら、この時間にこうして出歩いているのも納得できるわ。
この場合、お見舞い帰りだったと考えた方がいいわね。

（向こうへ行けば、安様に会えるかもしれない・・・）

そう思いながら、そろそろと歩き始めた。
長い道を、一歩一歩確実に歩く。
見つからないように慎重に進んだ。
程なくして、高級宦官達に与えられている部屋へとたどり着く。
個室を与えられているらしく、廊下に沿って扉が並んでいた。
そこで玲春は、新たな壁へとぶつかった。

（・・・どの部屋に安様がいるのかしら？）

彼女は、一番肝心なことがわかっていなかった。

それは、会いたい相手の部屋である。
知っているのは、この宮殿のどこかの部屋だということ。
各部屋の前を通ってみたが、どの部屋も静かで人の声さえしない。

（先ほどの方と会われていたのなら、まだ起きてらっしゃると思ったんだけど・・・。）

それともさっきの人は、お見舞いを終えた後ではなかったのかしら？
偶然、安林山の名を口にしていただけ、ただの通行人なの？
そう思いながら、忍び足でとある部屋の前を通った時だった。

「どうして起こしてくれなかったんですか！？」

悲痛な叫びが聞こえた。
びっくりして足を止める。

「どうしてもなにも・・・君があまりにも心地よく眠っていたから・・・」
「だとしても起こしてくださいよ！！わ、私！大将軍に寝顔を見られたということですか！？それって・・・恥ずかしいじゃないですか・・・！？」

聞こえてきたのは、怒る男性となだめる男性の声。
玲春はそのなだめる方の声に覚えがあった。

（この声、王琥珀様！？）

安林山と一緒にいた親友の宦官の声に間違いなかった。

ここは、王様のお部屋？

（もしかしたら、安様の手掛かりがあるかもしれない。）

そんな期待に胸ふくらませ、そっと部屋の前まで近づく。
気づかれないように耳をすませれば、程なくして中の会話が聞こえてきた。

「大丈夫。きれいな寝顔だったよ。それに見たのは大将軍だけじゃない。」
「琥珀と黄様もと言いたいのでしょう！？」
「私や黄藩殿、それに大将軍よりも前に林山が見ている。」

（え！？『林山』！？）

聞きたかった人の名前。

（い、今！『林山が見ている』って言っていたけど――――！？）

聞こえた会話をつなげて推測すれば、安様に寝顔を見られたということになる。

（それでは、安様は無事だということ！？）

高鳴る胸を抑えつつ、会話を聞くために耳を押し当てる。

「だから、琥珀はその現場を見ていなかったんでしょう？どうしてそう言い切れるんですか！？」

「部屋の状況からして、そう言い切れるからだよ。」

「状況？」

「ああ。部屋を出る時に起きていた君は、体に何もかけていなかった。しかし戻った時、林山にかかっていたはずの布団を君がかけて眠っていた。そればかりか、林山はそんな君をいたわるように折り重なりながら寝ていたんだからね。大方、目を覚まして、寝ている君を気遣ってかけてくれたんだろう。」

「じゃあ、林山は・・・！？」

（よかった・・・・。）

そのやり取りに玲春は安堵した。

（安様、動けるぐらいまで回復なさっているのね・・・・。）

一番気がかりだったことが解決し、自然とその場に座り込む。
怪我がひどくて倒れたと言っていたけど、もう大丈夫なのね。
自分以外の誰かをいたわれるぐらい、お体にもお心にも余裕ができるぐらい良くなられたのね。

（本当にようございました、安林山様。）

安心するとともに、彼女は確信した。

ここは安様のお部屋なんだわ。
今会話している方々は安様の一番のご友人方。
確か安様には、王琥珀様というご友人以外に、張空飛様と言うご友人がいたはず。
怒っていらっしゃった方が、きっとその張様だわ。

（張様も、心配されていたのね・・・。）

断片的なやり取りしか聞けなかったが、おそらく林山の怪我で二人がもめていたことは玲春にもわかった。
一番の友達、親友だからこそ、怒るぐらい心配して当然だということぐらい彼女にもわかった。

（安様って、本当に人望がおありになるのね。）

自分以外にも心配している人がいると分かると嬉しくなった。
今、彼がどうしているかわからない。
声が聞こえてこないのだから、眠っているのかもしれないが――

（ここに安様がいるのは間違いないわ！）

彼の部屋だと分かった以上、いないはずがない。
あの人は今、寝台の上で安らぎに身を沈めているのね。
激しさと優しさを持つ瞳を閉じ、虎をねじ伏す力を封じ、無垢な姿で眠っているのかしら。
安様の寝顔、きっと可愛・・・！

（ヤダ私ったら！なんてはしたないことを――――！！）

その姿を想像して恥ずかしくなり、頭を左右に振って妄想を消す玲春。
嬉しくて、胸がドキドキして、楽しい気分になった。
彼に会ったらなんと言おう？
なにから話せばいいのかしら？
そう思いながら、部屋の前をぐるぐる回っていた。

「ふぇっくゅ！！」

歓喜に満ちた少女の背後で、突然響いた音。

（え！？なに！？誰！？）

暗がりの中、鼻をすすりながらこちらへやってくる人影が見えた。

（ど、どうしよう！？もしかして衛兵！？）

そんな！ここまで来たのに、お会いする前に衛兵に捕まってしまったら・・・！

最悪の事態が少女の頭をよぎる。

（そんなのいや！隠れないと！！）

慌てて、柱の陰に隠れた。

（み、見つかりませんように・・・・！！）

小さな体をさらに小さくし、震えながら玲春は祈るの。

柱とその壁の中に身をうずめていると、すぐ近くで声がした。

「夜分遅くすみません。安様。」

え？

（衛兵じゃない・・・？）

理解したと同時に、その声に聞き覚えがあった。

（この声は――――――紅嘉の世話係の魏忠殿？）

平陽公主様の覚えもよかった人物。

ただし、今はその印象が良いのかはわからない。

昼間の一件で、自分の女主は彼に不満を抱いていた。

しかし、玲春は違った。

平陽公主の動物の世話係と言うこともあり、魏忠とは面識があった。

気さくで、誰にでも優しく、玲春も親切にしてもらった。

お菓子をくれたり、外の話を聞かせてくれたりした。

だから――――

（魏忠殿なら、見つかっても内緒にしてくれるのでは？）

そう思ってしまえるほどの人柄の持ち主。

心細さと甘えから、相手に声をかけようとしたのだが、

（え？）

柱の陰から顔を出し、魏忠を見た時。

（・・・なにそれ？）

声をかけることなく、影の中に顔をひっこめていた。

（なに、あの顔・・・。）

上手く表現できないが、彼女が見た見知った虎の世話係の姿。
いつもとは違う顔をした魏忠がいた。

（なんだろう――？なんかやだ・・・！）

声をかけることを躊躇させるようなものだった。

（どうして――――魏忠殿・・・。）

いつもと違う相手を見て、変な気持ちになった。

それと同時に、なぜ相手もここにいるのかという疑問が湧いて出てきた。
あの部屋が、安林山の部屋ならば、謝罪に来たと考えれば普通だろう。
しかし、時間が時間である。
真夜中に人を訪ねるなど非常識。
それは自分にも言えることだが、
魏忠殿のあの表情――――――

（あれは、謝罪をするという表情かしら？）

どちらかと言えば――――

そう思案していると、部屋の戸が開く音が聞こえた。
びっくりして固まり、さらに身を縮めれば、

「これは王琥珀様！」
「やはり、魏忠殿でしたか。」

魏忠と王琥珀の声。
それがやむのと、扉が閉まるのとは同じぐらいだった。
静かになったところで顔を出してみれば、廊下から魏忠の姿は消えていた。

第八十九話　肝心なことが抜けてました（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・・！！

ようやく、玲春の登場です。
安林山こと星影の悪口を言いながら彼女の側を通過したのは、黄〇です。
悪口言いつつも心配はしているということを表現したかったのですが・・・伝わったでしょうか？
一応、次回に続きます。

小説とは関係ありませんが・・・サブタイトルを考えるのって、大変ですね・・・！！
今回のサブタイトルの決め手は、『危険を冒してまで来た玲春が、肝心の林山の部屋を知らない』ということをもとにつけました（苦笑）
本当に・・・小説を書くより大変です（笑）

※誤字・脱字・変換ミスがありましたら、教えて頂けると嬉しいです・・・！！
ヘタレですみません（土下座）

第九十話　本人が聞いたら怒る誤解（前書き）

※竜門弥生は、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第九十話　本人が聞いたら怒る誤解

自分が考え込んでいる間に、部屋の中へと入った顔見知りの男。

（魏忠殿・・・。）

隠れていた柱にもたれながら玲春は考えた。

（どうして、魏忠殿がここにいるの？）

彼の仕事は宮中で動物の世話をすること。
子供同様に育てているのが、小虎の紅嘉。
虎を扱えるということで、重宝されていたと聞いている。
なによりも、生き物に対して優しかったことを知っていた。

だからわからない。

なぜそんな人が、ここに来たのかわからない。
昼間の一件もあり、紅嘉は平陽公主から安林山へと下賜された。
魏忠もそれに伴い、平陽公主の下から離れた。
あんな形で離れたこともあり、元・皇女は魏忠と小虎をよく思っていない。
宮中では、闇から闇に葬られることはよくある。
いくら、表向きで陛下の命を聞いていても、裏では何をするかわからない。
玲春自身、自分の主人を信じている。

陰でひどいことをする人ではないと信じていた。
彼女が自分に向ける笑みは、優しいもの。
厳しい人ではあったが、暖かさのある厳しさを持つ人だと思っている。
でも――――――

昼間見た主人は、初めて見る主人だった。

平気で約束を破り、卑猥なことを口にした。
いつもたわむれた口調で、残酷に人を殺そうとした。
安林山を殺すつもりだったのだ。

あんな態度を見たこともあり、玲春にはかすかな疑問が生まれていた。

（本当に・・・誓いを守ってくださるのかしら？）

安林山を殺さないという誓い。
それとあわせて、紅嘉を殺さないという約束を――――――

（ごめんなさい・・・平陽公主様・・・！）

かつての私なら信じられました。
でも、今の私は完全に信じきれません。

安様のものになった紅嘉を、生かしておくとは言い切れない。
安様(にんげん)が無事でも、紅嘉(どうぶつ)が無事とは限らない。
紅嘉に何かする可能性はあった。

玲春が見た限り、魏忠は一人だった。
彼以外に、紅嘉を手なずけられるものはいない。
つまり、大事な小虎を一匹残してここにきているということになる。
そうまでして、ここへ来た意味。
その理由をはっきりと断言はできないが、わかっていることは一つある。

安林山に用があって来たというのは間違いなかった。

安林山のおかげで、大事な虎と己の命とを失わずに済んだのだ。
お礼を述べに来たのだと思えばよかったが・・・・

(平陽公主様から『会うな』と言われた私ならともかく・・・・会うことを禁じられていない彼が、わざわざ真夜中に会いに来るかしら?人目を忍んだとしても・・・なんだろう――――――――?)

なにか、おかしい。

素直にそう思えず、疑問を覚えた。
疑問には思ったのだが――――

（いいえ・・・もしかしたら、やむにやまれぬ事情がおありなのかもしれない。一概（いちがい）には言えないわ・・・！）

それはそれとして、この後どうすればいいのかしら？

（魏忠殿の話が終わるのを待ってから、声をかけた方がいいかしら？それとも、今すぐにでも声をかけた方がいいかしら？でも――――）

出来ることなら、林山とだけ玲春は会いたかった。
彼の親友や顔見知りの男が信用できないわけではなかったが、できれば大事（おおごと）にしたくなかった。
だから、こっそりと会って帰りたかった。

（お礼だけ述べて帰るなら、すぐすむかもしれない。魏忠殿が帰れば、王様も張様もお部屋に帰られるだろうし・・・。）

それを待ってから、お声をかけた方がいい。

そう判断して待つことにした。
すぐに終わるだろうと思って、待っていた。
ところが、待てども待てども、なかなか部屋から出てこない。
そのうち、誰かの怒鳴り声がした。

（なに！？）

びっくりして顔を上げれば、さらに罵声のような声色がした。
気になった玲春は、隠れていた柱から離れて部屋の前まで戻った。
悪いと思いつつも、再び、聞き耳を立てた。
悠長（ゆうちょう）に構えていた自分の気持ちとは裏腹に、部屋の中は殺伐（さつばつ）とした状態になっていた。

「林山を殺そうとしたくせにっ！！」

（ええ！？）

あまりの内容に、心臓が飛び跳ねた。

（この声は――――――張空飛様かしら・・・？）

一度も話したことはなかったが、他の二人の声を知っていたこともあってそう判断した。
なによりも、最初に部屋の前で聞いた声と同じだった。

さっきは『起こさなかったこと』で怒っていたが――――

（今度は、自分のことで怒っているということではなさそうですね・・・。）

怒りの原因は、彼の親友だった。
話の内容や受けた印象からして、安林山を危険な目に合わせた魏忠と紅嘉に対して怒っているらしい。

「ボロボロの林山に虎を！なに人間みたいに話してるんですか、虎なのに！？畜生のくせにっ！林山を殺そうとしたくせに！！」

特に、紅嘉をまるで人間の子供のごとく紹介したことに腹を立てているようだった。

（魏忠殿から見れば、子供かもしれないけど――――）

所詮、虎は虎。
それも親友を食い殺そうとした人食い虎。
それが怒っている彼の気持ちだったようで、

「お前なんか、大嫌いだ！！お前の虎も大っ嫌いだぁ！！林山を――私の大事な林山を殺そうとしたくせに！この人殺しの極悪人っ！！虎共々畜生だっ！！」

（それはいくらなんでも――――――・・・・・）

言い過ぎではないかと思ったが、それが普通の反応なのかもしれない。
怒りに満ちた罵声は、いつしか鳴き声へと変わっていた。
気まずい気持ちになり、玲春は少しだけ戸から離れた。

（そうよね・・・・。いくら可愛くても、人間と虎は違う。誰だって、虎相手に素手で戦うなんてできない。それなのに安様は――――）

戦った。
自分のお香を使ったとはいえ、ほぼ素手で戦ったのだ。
平陽公主様に許していただくため、私を助けるために人食い虎と戦ったのだ。

（どうして私なんかのために？会ったばかりの私のためにそこまで

出来るのですか・・・？）

“あなたの笑顔を見るためなら、卑しい私はどんなことでもしましょう。”

（私のためなら・・・・。）

・・・いいのですか？

「そう思ってよいのですか？安林山様・・・」

小さな小さな声で、口の中でつぶやくように、息を吐くように声に出す。

胸が締め付けられる、何とも言えない気持ちになる。

少しだけ上を見れば、月明りが出ていた。

その月を見ながら、しばし感慨にふけった。

（安様・・・）

ここに来る前よりもさらに、彼のことを考えていた。

笑顔やしぐさが頭の中を駆け巡る。

夢うつつにそんなことを考える少女だったが、程なくして現実へと引き戻された。

「お願いします!!どうか、安様を半刻だけでいいのでお貸しください!!」

背後から聞こえた声に、背筋が伸びた。
ぼんやりとしていた思考が、一気に動き出す。
その声が安林山の部屋から発せられたものであり、言っているのがよく知る虎の世話係だとわかったのだが、

(安様を貸す?)

彼の言う言葉の意味がわからなかった。
その意味を知るため、中のやり取りに注意を傾ける。
すると魏忠の声で、とんでもないことが聞こえてきた。

「わ、私はー・・・安林山様に、横恋慕しているわけではございません!!」

「「はぁ?」」

(横恋慕!?)

その言葉に眉をひそめる。
横恋慕って、あの横恋慕ですよね？
え？魏忠殿が安様に？
え？でも、安様は男性ですよね？
それは魏忠殿とて同じはずで～？？

（わ、私が盗み聞をやめているうちに、いったいどんなやり取りが！？）

混乱する玲春にとどめを刺すかのように、虎の世話係は決定的なことを言った。

「た、確かに見目麗しく、心根も美しい方ですが――皇帝陛下の愛妾に、そんなっ！畏れ多い！！」

（・・・・え？）

あいしょう？

（あいしょうって・・・・あの愛妾？）

ゾクリと何かが背筋を這った

（――――――愛妾って！？愛妾って！？愛妾って！？愛妾って～～～～！！）

あ――――――――――――――

（あ・・・・安様が、安様がっ――――――――――！！！）

――――皇帝陛下の愛妾――――――

（りゅ、龍陽（男色）だったなんて――――――――――！！？）

玲春の中で、何かが音を立てて崩れた。

確かに、噂では陛下とそうではないかと聞いていた。

しかし、本人を前にし、そうでもないのではと思っていた。
それが、こうして身近な人間の断言によって知ってしまった以上、
信じない方がおかしいのである。

（安様が・・・龍陽・・・・！）

さっきとは違った意味で、その場にへたり込む玲春。

（そうよね・・・陛下のお気に入りならば・・・・）

いろんな想像がぐるぐると頭を回る。

「そっ！？それ、危なくないですか！？」
「大丈夫です！首輪をしっかりしてますし、ちゃんと縄を木に巻きつけてますし、なによりも！！」
「なによりも？」
「うさぎの肉を与えていますので、空腹で人を襲うことはありません。食事中は静かですから！！」

（そうですよね・・・陛下の愛妾と横恋慕の誤解なんて、危ないですよね・・・。首輪をつけて愛でるほどでしたら・・・。襲う勢いで愛を与えていらっしゃるのですか・・・。）

もはや、聞こえてくる会話をきちんと把握すること出来なくなって

いた。
うなだれながら玲春は思った。

（安様は、皇帝陛下御自ら、御助けに来たほどの身分。私などが、薬を持ってはせ参じたところで、どうこうなるわけではないですよね・・・。）

――帰ろう。――

せっかくここまで来たけど、帰ろう。
真夜中に、それも怪我をひどくする原因となった自分が現れただけでも、迷惑に違いない。それが、部屋を抜け出してきた飛ばれでもしたら――

（安様にご負担をかけるばかり・・・）

そう決心して立ち上がろうとした時だった。

「とにかく・・・林山に会ってきますので、待っていてください。」
「あの！でしたら、紅嘉の側で待っていてもいいでしょうか？その方が、あいつも私も安心しますので――」

そう言いながら、こちらへ、戸の方へと近づいてきていた。

（大変・・・！見つかっちゃう！）

立ち上がれば、自分の影が三人に見えてしまう。
慌てて身を伏せて四つん這いになりながら素早く、さきほどまで隠れていた柱の陰に行く。

「「あぁ、はい。どうぞどうぞ。」」

重なる声と一緒に、三人の男が姿を現した。

「では、我々は林山に会ってきますので。」
「はい、よろしくお願いします。」
「紅嘉殿はどちらに？」
「向こうの庭にいます。そこで紅嘉と共に私もいますので。」
「あの・・・本当に大丈夫ですか？夜中ですし・・・騒いだりしません？」
「ご心配には及びませんよ、張様。お待ちしている間、あいつの毛並みを整えておりますので。」
「毛並み・・・ですか？」
「はい。撫でてやったり、櫛でといてやると、その間だけは大人しいのですよ。」
「そうですか・・・。」

「ええ、なくてはならないものなのです。」
「でしたら、思う存分なだめていてくださいね。」
「はい、王様。」
「それでは、後程。」
「お心遣い、感謝いたします。」

そう言い交すと、二手に分かれた。

（安様に会ってくる・・・・？）

それぞれの姿が小さくなったところで、そっと顔を出す玲春。

（安様は部屋にいるんじゃ――――？）

気づいた時には、戸に手をかけ、部屋の中へと入っていた。

「安様・・・？」

呼びかけてみるが、返事はない。

「安様、いらっしゃらないのですか？玲春です。」

寝台に近づくが、寝乱れした寝具があるだけで人の姿はない。

「どうして・・・？」

ここは安様のお部屋ではなかった？
お部屋にいないということは、まさか――――――

（皇帝陛下の寝所！？）

”では、我々は林山に会ってきますので。”

「・・・だからここに、いらっしゃらないのね・・・！」

王様達が、魏忠殿と別れて出て行かれたのはそういうことだったのね。

「安様は・・・皇帝陛下のお側にいらっしゃるのね・・・。」

（じゃあ、王様達が向かわれた先に安様が？）

そう思い、追いかけようと部屋から出たが、

「・・・・やめよう。」

その歩みを止めた。

（何を考えてるの、玲春？今更、私がお会いして何になるというの？）

あの方は今、皇帝陛下のお側で、首輪につながれ愛でられているというのに。

子猫や子犬にするみたいに、頭をナデナデされているというのに。

添い寝をなさっているというのに。

本人が聞けば、全力で怒る内容。

唯一の救いは、玲春の想像が幼子が感がる男女の戯れであったこと。

小さい子供が、手をつないであるいたり、一緒に眠るだけというおこちゃまの男女がするほのぼのとした恋愛模様であったことだ。

彼女の想像力と知識では、それが精一杯だった。

同時に、それ以上の男女の付き合いを知らない玲春にとっては、十分な深い中の男女という認識であったと言えた。

だから、強く思い知らされた。

（私のような女官が、陛下と一緒にいらっしゃるであろう方とお会いできるはずがない。）

皇帝陛下に単独で会うことすら許されぬ身。

罰せられる身分の者。

（ここで会えなかったのだから、縁がないということなのに・・・。）

私のような女官と高級宦官・・・それも、陛下の寵姫である方とが・・・

（身の程知らずも、あったものではないわ。）

帰ろう、自分の部屋に。

（安様がご無事であったと・・・わかっただけ、十分じゃない？）

自分にそう言い聞かせて満足し、踵を返した時だった。

小さな音がし、何かが足に当たった。

「え？」

視線を下に落とせば、何かが落ちていた。身をかがめて手に取る。

「これは――魏忠殿の櫛。」

そこにあったのは、魏忠が大事にしている櫛(くし)だった。
いつも、紅嘉の毛をといてやる際に使っているもの。

“ええ、なくてはならないものなのです。”

先ほどの会話がよぎる。

「これがないと困るのでは・・・？」

紅嘉は、毛をとかしてもらうのが大好きで、側にいる時は撫でている
かといてやっているかしないと拗ねてしまうと・・・以前、魏
忠殿はおっしゃっていた。

「届けないと。」

今なら、まだ間に合うかもしれない。

そう思うよりも早く、体は動いていた。
こうして彼女は、虎の世話係の後を追って紅嘉がいるとされる庭の
方へと向かったのだった。

第九十話　本人が聞いたら怒る誤解（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・・・！！

内容は、『玲春の誤解』となっております。
恩人であり、ある安林山こと劉星影が皇帝と深い仲だと思ってしまったようです。
元々、星影に対して美化したイメージを持ってたので、それが崩れてしまったということを書いてみましたが・・・伝わったでしょうか？
次回も続きます。

※誤字・変換ミスがありましたら、ご一報いただけると助かります・・・！！
ご親切のほど、お願いいたします（土下座）

第九十一話　まさかの遭遇（前書き）

※３月１１日に発生いたしました東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心からお祈り申し上げます。また、災害地域の皆様が、一日も早く元の生活に戻られますよう、切に願っております※

第九十一話　まさかの遭遇

姿を見送ったのはほんの少し前。
それにもかかわらず、一向に目的の人物が見当たらない。

「足が速いのですね・・・魏忠殿。」

廊下を走りながらつぶやく玲春。
安林山に会いたくて部屋を抜け出してきた玲春だったが、林山が皇帝と深い仲である関係者（!?）から聞いてしまい気落ちをしていた。
自分の出る幕ではないと思い、部屋に帰ろうとしたところで拾い物をした。
それは顔見知りの虎の世話係・魏忠愛用の櫛だった。
安林山と皇帝が恋愛関係にあると語った人物の落し物。
これが、彼自身が使うものなら、今すぐ渡そうとは思わなかった。
しかしそれは、魏忠が世話をする小虎・紅嘉愛用の品だった。
これがなければ、紅嘉は大人しくならない。
それを聞いた以上、後日渡すなどできない。
詳しい事情は知らないが、魏忠は紅嘉と共に庭の方で林山の親友達と会う約束をしていた。
そこに自分が行けば、きっと驚かれるだけでなく、夜中に出歩いたとして罰せられるだろう。
そのことは彼女もわかっていたのだが――――

――――撫でてやったり、櫛でといてやると、その間だけは大人しいのですよ。――――

ただでさえ、平陽公主様の不興を買っている紅嘉。
それが、夜中に騒いでいたと知れれば、今度こそ処分されるかもしれない。
そんなことになれば――――

（安様がどんなにお嘆きになるか・・・）

自分を食い殺そうとした虎にさえ、情けをかけられるお優しいお方。
恩人である、彼の悲しむ顔は見たくなかった。

（そのためにも、これを魏忠殿に届けなければ。）

自分のことより他人のことを優先したあの方のように、私も自分を犠牲にしてでも人のためにもなりたい。
そんなことを考えながら、庭に降りようとした時だった。

「うわぁああ！！」

悲鳴があたりに響く。

（なに！？）

それは、驚いてあげたというものではなかった。
聞き覚えのある苦痛のある声。
昼間聞いた、女官仲間や兵士達の叫び声と類似していた。

「まさか・・・安様？」

（紅嘉にまたがって、暴れていらっしゃるの！？）

一瞬そう思ったが、すぐにその考えを否定する。

「玲春の馬鹿！安様は正義の味方じゃない・・・！」

あの時は、賊にやられた傷が原因で暴れる紅嘉を制しきれなかっただけ。
間違っても安様のご遺志で暴走していたわけではないじゃない。

となると、考えられるのはただ一つ。

「・・・・・賊？」

少し前に、皇帝陛下が襲撃された。
賊はすべて自害し、誰の犯行かはわからずじまいだと聞いた。
しかし、賊の侵入を許したということで、自分の主人の夫である衛青様は、宮廷内の警備は強化したのだけど。

（だから、賊が忍び込むはずなんてない・・・・！）

大将軍である衛青将軍の指揮の下、ネズミはおろか、蟻さえも入り込めないほど厳重にしているはず。

（賊がいるはずはないわ・・・！）

そうよ、いるはずがない。
そうは思ったのだが、それに合わせて疑問も浮かぶ。

（それじゃあ、今の叫び声はなに？）

なんだったの・・・？

「どうしよう・・・！？」

どうしていいのかわからない。
こんな時どうすればいいか、馬様は教えてくださらなかった。
平陽公主様もご教授下さらなかった。

「安様・・・！」

不安と恐怖から、その場に立ち尽くす。正確には、怖くて動けなかった。

震えながら、動けずにいる彼女の耳に鳴き声が響いた。

「グルゥ・・・・！」

先ほどの悲鳴よりは小さく、普通の会話よりも小さい声だったが間違いない。

「あれは・・・紅嘉殿の声！？」

微かに聞こえたけものの声が、玲春を動かした。

苦しそうな、明らかに普通ではない鳴き声。

（どうしたのかしら？側に魏忠殿がいらっしゃるんじゃないの？）

そこまで考えてハッとした。

（まさか、先ほどの悲鳴は――――――――！？）

魏忠様！？

そう考えるのが自然だった。

（大変！）

彼に何かあったのかもしれない。

でも、何かが起きているということはわかっていた。

自分に何ができるかわからないけど、このままにしておけない。

（確かめなきゃ！）

そう思って動いたが、今の彼女には後のことを考えていなかった。

万が一、なんらかの異変を目撃した際、その出来事を目撃した後の行動をどうするべきか考えていなかったのだ。

このような場合、何者かに襲われているという可能性もある。

なので、不審者に気づかれないように隠れながら行くのだが、大胆にも彼女は普通に駆け寄ったのだ。

もし、これが賊に襲われているところだったら、目撃した人物はまず命はない。

しかし玲春は、そんな状況に対処する正しい知識がない。

とにかく、何が起きているのか確かめなければという気持ちの身で動いていた。

庭に出て見渡せば、数人の人影が見えた。

「あ――」

とっさに、近くの花々の中に隠れた。

一瞬しか見ていない

顔はもちろん、性別すらわからなかったのだが

（こわいっ・・・・・！）

理由のわからない恐怖が玲春を襲ってきた。
それはじわりじわりと、彼女を支配する。

（なに・・・？なんなの・・・！？）

とにかく、怖いという思いしかない。

（怖い！怖い！！怖い！！！）

目を閉じて、体を小さくして一生懸命隠れた。
ガタガタと、震える体を抱えていると聞いたことのない声がした。

「まずは、あれで良しとしよう。」
「はい。ですが・・・そのようなものが役立ちますか？」
「ないよりマシだ。」
「奴は、あのままでよろしいので？」
「殺した方がよかったと言いたそうだな。」
「はい。その方が――――」
「毒にも薬にもならぬ。捨て置け。」

そんな会話をしながら、自分の側に近づいてくる。

（お助け下さい、天帝様・・・安様・・・！）

必死で祈る彼女の願いは通じた。
出ていた月が雲に隠れる。
それにより、庭を含めた地上すべてを闇がつつむ。
そのおかげかどうかわから煮が、声の主達は彼女に気づくことなく通り過ぎる。
足音は全くしなかったのだが、

（なに・・・？このにおい？）

震える玲春の花に、妙なにおいが届く。
薬品のようなにおいと、生臭いにおい。
前者は心当たりがなかったが、後者は嗅いだことのあるにおい。

（あれは・・・なんのにおいかしら？）

すぐには思い出せない。
一瞬、血の臭いかと思ったが、少し違うような気がした。

（行ったのかしら・・・・？）

彼らから足音や衣擦れはしなかった。
代わりに、連中がまとっていたにおいがしなくなっていた。

そのにおいを頼りに、彼らがいなくなったと理解した玲春。
しかし、すぐに動くことができなかった。

（もしかしたら、隠れて私が出てくるのを待ってるかもしれないし・・・。）

という警戒心と、

（こ、腰が抜けて動けない・・・・！！）

恐怖による、体の不具合があった。

（こ、怖かったぁ～！今日の昼間より怖かったぁ～・・・・！！）

時間はかかったが、なんとか四つん這いで這い出る。
辺りを見渡し、怪しい人物がいないのを確認してから先ほど人影が集まっていた場所へと這って行く。
その間、あたりは漆黒となっていたのだが、

「あ・・・？」

視界が晴れていく。

見上げれば、隠れた月が姿を現し始めていた。
ホッとするような暖かい光。
それをしばらく眺めた後、視線を前に戻す。
その瞬間、背筋が凍りついた。

「魏忠殿！？」

折り重なるように、魏忠と紅嘉が倒れていた。
否、紅嘉を守るように、魏忠が体を預けていたと言っていい。

「ぎ、魏忠殿っ！！」

大声で叫んで、転がりながら駆け寄った。

「ぎ、魏忠殿！魏忠殿！？しっかりなさってください！！」

肩を支え、揺さぶってみる。すると、二、三度痙攣したのち、そのまぶたが動いた。

「うっ・・・？」
「魏忠殿っ！？」
「れ、玲・・・玲春殿・・・！？」
「よかった・・・よかった気がつかれて・・・！！」

相手は生きていた。
介抱しようと抱き起した時、手に生ぬるい感触。

「ひっ！？」

それがなんであるかわかった瞬間、叫んでいた。

「ち、血・・・！？」

触れた場所肩。

月明りを頼りに見れば、鮮血が流れていた。

「ひどい・・・！」

傷もそうだが、親切な彼を斬ったということにも嘆く言葉。

「しっかりしてください！今、止血しますから。」

急いで懐から布を出して肩をきつく結ぶ。

主人が大将軍の妻と言うこともあり、そういった知識は学んでいた。

しかし、実際にするのは初めてのこと。

震える手で、傷口を縛った。

「す、すまない・・・！だが玲春、どうしてここに・・・・？」

「私のことより魏忠殿です！お待ちください、今誰か――――！」

「ガァ・・・！」

自分の言葉を遮るような鳴き声。

「紅嘉殿！？」

「グゥゥ・・・」

魏忠の体の下になっていた小虎を見れば、ガクガクと変な動きをしていた。

「どうしたの?あなたもやられたの!?」

虎だということも忘れ、その頭を撫でてやれば、目を細めて低く鳴く。

「その子は無事だ・・・。」

「魏忠殿?」

「私は肩をやられたが・・・その子は妙な袋をぶつけられ・・・中に入っていた、水のようなもので・・・動きが・・・!」

「ひどい!誰がそんなむごいこ――――!?」

“まずは、あれで良しとしよう。”

脳裏に先ほどの声の主達が浮かぶ。

「・・・!?」

(あの人達が魏忠殿を・・・?)

「ぎ、魏忠ど――――！」

「ガルゥ・・・！」

何かに体を引っ張られ、言葉途切れた。

「紅嘉殿！？」

見れば、自分の着物の袖を引っ張っていた。

「ど、どうしたのですか？」

それも、紅嘉から近い腕の方ではなく、離れている方の袖。
自分は今、仕事着の上から紺の布をかけていた。
同じ引っ張るなら、布の下に隠れている仕事着よりも、その上に羽織っている布の方が近いはず。
それなのに、布の下に顔をもぐりこませてまで、袖部分を引っ張るというのはおかしな行動だった。

（体勢的にもつらくなるのに・・・なぜ？）

戸惑いながら見れば、なにかを訴えるようにぐいぐいと袖を引く。

「本当にどうしたの・・・？」

そこまで言って気が付く。

（そういえば、こっちの袖に――）

「ま、待って！今出してあげるから。」

「玲春！？」

「魏忠殿！袖の中のものを出しますから、紅嘉殿を――」

「え！？あ、ああ・・・」

言われるがまま、玲春から紅嘉を引きはがす。

小虎が離れるや否や、かまれていた袖に手を突っ込む。

「これが、ほしかったのですね？」

袖から手を出し、紅嘉の前に差し出したのは小さな包み。

それを見た瞬間、苦しそうな声で鳴いていた紅嘉の鳴き声が変わった。

「グルゥ。」

嬉しそうな声で尻尾を振り始めたのだ。

（やっぱり・・・。）

「れ、玲春・・・それは一体・・・！？紅嘉殿。」

わけがわからず、尋ねる男にやわらかい玲春は答える。

「安様が昼間、紅嘉殿を落ち着かせるために使ったものです。」

「それでは――――それが安様のお香か！？」

「・・・ええ。正確には、私が安様にお貸ししたお香の残りです。」

小さく笑いながら答えた。そのまま視線を小虎に向ければ、少し高めの声で鳴いてから銜(くわ)える。

「グルルル・・・。」

ぎこちなく体を起こすと、前足をそろえる。その揃えた前足に、咥えていた香袋を乗せる。

そして、嬉しそうにその香袋に顔を摺り寄せ始めたのだ。

「紅嘉殿・・・・。」

甘えるかのような仕草。

その光景は、昼間あの人に懐いていた時の同じ。

「安様だと思って・・・甘えているのですね・・・・。」

頬ずりする姿に、非常事態にもかかわらず、自然と笑みがこぼれた。
嬉しそうに香袋を顔にくっつける小虎。
その姿を眺めながら、ポツリと魏忠が呟いた。

「あいつ・・・安様と別れてから、随分泣いたんだよ。」
「え？」
「あまりにも泣き止まないから、平陽公主様から『黙らせなければ殺す』と言われてな・・・。」「平陽公主様がそのようなことを！？」
「おっしゃってきたのは馬殿だけどな。それで、少しだけでもいいから、紅嘉をなだめるために安様に面会を求めたんだ・・・。」
「それでここまでいらっしゃったのですか・・・・！？」
「そうだ・・・。ご本人は体調を理由に断れたが、ご友人の王様と張様が紅嘉のため――――ぐっ！」

そこまで言うと、男の言葉が途切れた。
見ると、血が流れ出る肩を抑えながら苦しそうにしていた。

「魏忠様！？しっかりなさってください！」

慌てて体を支える。
続いて、懐から布を取り出して、傷口の側を縛った。

「うぁ！」
「痛いでしょうが、我慢してください！流れる血の量を止めてから、傷口を抑え中れば、血の出すぎで命を落としてしまうそうですから！」

口を動かしつつも、手を動かしながら別の布で怪我の部分を縛った。

「す、すまない・・・」

「いいえ。傷は深いみたいですが・・・場所が良かったみたいです。お命に問題はございません。」

「そうか・・・。」

「とにかく、人を呼びましょう。手当は早い方がいいですわ。」

「玲春殿・・・」

「でも、いったい何があったのですか?そもそも、このような時刻に、こんな場所でこのような怪我を追われるなんて・・・」

青ざめた顔で聞く少女に、苦しい呼吸を繰り返しながら魏忠は口を開いた。

「・・・あなたはどうなのだ?」

「え?」

「なぜ、平陽公主様付きの女官であるあなたが、高級宦官の宮殿にいるのだい?」

「そ、それは――」

「女官が真夜中に出歩くだけでも罰を受けるんだよ?賢いあなたが、知らないとは思えない・・・。」

恐れていた質問に、声も体も震えた。

「わ、私・・・・」

誤魔化すことなどできない。

覚悟を決めて、真実を語ろうとした時だった。

「紅嘉！？」

魏忠の驚いた声と、唸り声とが耳に届く。

「どうしたんだ、紅嘉？」

普通ではない唸り方をする紅嘉を見れば、小虎は一点をにらみ続けていた。

第九十一話　まさかの遭遇（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

この度は、東北地方を含めた、日本各地で起こった地震・津波によって、被害にあわれた方々のご冥福と、早期のご回復を心よりお祈り申し上げます。

今回の小説の内容ですが、玲春と魏忠の話となっています。
魏忠の落とした紅嘉の櫛をとどけるため、その後を追った玲春は怪しい人達を見かけてしまいます。
その上、追っていた虎の養い親は負傷中です。
次回も続きますので、興味のある方は読んでやってください。

※ないとは思いますが、誤字・脱字・変換ミスがありましたら、ご一報いただけるとありがたいです。ヘタレですみません！！！※

第九十二話　追いかけっこは続く（前書き）

※本日、４月１１日午後１５時４６分、東北地方太平洋沖地震発生から一か月たちました。改めまして、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心からお祈り申し上げます。地震・津波に加え、原発被害・風評被害で苦しむ方々、戦う方々に、心からエールを送りたいです。※

第九十二話　追いかけっこは続く

突然唸り始めた紅嘉。
何かいるのかと思いそちらを見る玲春。
その心中は穏やかではなかった。

（もしかしたら、先ほどの人達がもどってきたのでは・・・！？）

不安な気持ちでいっぱいだった。
開いていた眼を閉じながら振り返る。
そして、ゆっくりと目を開けた。
固唾を飲んで紅嘉が見つめる方向を見た。

「・・・あら？」

予想に反し、人影はおろか誰かが来る様子さえない。

「なにもいませんけど・・・」

気が抜けたということもあり、息を吐くのに合わせて声を発する玲春。

「一体、どうしたの？」

首をかしげながら小虎を見れば、よろよろしながらも起き上がった。

「紅嘉殿・・・！？」

「グル・・・！」

返事をするように鳴くと、一点を見つめたまま歩き始めた。

「待て紅嘉！どこに行くんだ！？」

親代わりの男の言葉を無視して、よろめきながら歩く子虎。

そのまま、速度を上げて進みだす。

「待って！紅嘉殿！」
「行くじゃない玲春！」

つられて追いかけようとした女官を男が引き止める。

「危ないからここにいるんだ！動くんじゃない！」
「でも紅嘉殿が！」
「だめだ！私を襲ってきた賊がまだいるかもしれないんだぞ！？」
「賊！？」
「そうだ！男女数人の賊だった。」
「そんな！先(さき)の陛下襲撃を受け、衛青第将軍が全力を持って警備をあたっているのですよ！？賊が入り込めるわけなど――」
「だから安全だと思って、真夜中にこんなところに一人で来たのか？」
「！？」

相手の言葉に玲春の心臓は大きく鳴った。
真夜中に女官が出歩くことは、危険ということで禁止されていた。
しかし、自分の主人の夫である武人が守っている以上、危険はないと心のどこかで思っていた。
陛下が賊に襲われたと聞いていたが、それを受けてこれまで以上に厳重に警備しているということもあって・・・安心して出てきたという気持ちがあったのも事実。
その核心を突かれ、なにも言うことができなかった。

「その様子だと・・・図星のようだな？」
「そ、そんな！私は別に――」

「ここで君の意見を聞いても、君が宮殿を抜け出してきたという事実に変わりはない。だが、私が賊に襲われた以上、君を不用意にここから動き回らせるわけにはいかない！」
「魏忠殿・・・・」
「賊がいるのは間違いないんだ。それにもうすぐ、ここに知り合いが来てくれる。助けが来るとわかっていて、わざわざ動く必要はないだろう？違うか？」
「・・・いえ。」
相手の言葉に、うつむきながら答える少女。
「いい子だ。さぁ、そんなところで立っていても仕方がない。こちらへ来て、横に座り――――――――」
そう言いながら、玲春を引き寄せた時だった。
「ガァアアア！！」
「うっわあああああああああ！？」
「きゃっ！？」
突然の大音量と共に、自分の腕をつかむ手が離れた。
獣と男の叫びに、玲春も驚きの声を上げる。
それがやんだ時、尻餅をつく形で地面に座り込む魏忠がいた。
「ぎ、魏忠殿！？」

その姿に、慌てて駆け寄ろうとしたのが、

「グガァアアア！！」

雄叫びが響く。反射的に声のする方を見た。

「紅嘉殿！？」

林山を慕う小虎だった。

唸りながら口を開けたり閉めたりしていた。

「紅嘉殿・・・・！？」

二人を引き裂いたのは紅嘉だった。

玲春と魏忠の間に割って入るようにして引き離すと、おもむろに少女に駆け寄る。

そして頭で彼女の体を押しながら、強引に立たせる。

「紅嘉！？」

「グゥウウ～！」

「おい、紅嘉！？何の真似だ！？」

「ガァア！！」

「なっ！？」

自分を養ってくれている相手に向かって吠える。

そのまま、魏忠を見据えると、低い声で唸り始めた。

「ガウゥ～ウ・・！！」

――――――邪魔をするな――――――

まるで、そう言っているかのような態度。
玲春の前に歩み寄ると、一番長い付き合いであるはずの相手を威嚇する。

「紅嘉っ！！」

これには、さすがの魏忠も怒った声で叱ったのだが、

「ガァルアア！！」

大きく口を開けて、養い親に飛びかかった。

「ひぃい！？」

じゃれ合いでもなんでもない、敵意ある声。
遊びではない、立派な攻撃ともとれる動きに男は悲鳴を上げた。

「ぎゃああ――――――!!」

そのまま肉を引き裂くがごとく、育ての親に噛みついたのだ。

「きゃあ――――――!?」

その光景に、側にいた玲春は悲鳴を上げる。

（そんな!魏忠殿に噛みついた!?）

思考が認識する前に、豪快に布が引き裂かれる音がした。

「い、痛てぇ――――――!!

「い、いやぁ――――――!!」

痛みに悲鳴を上げる男。

想像できる最悪の状況に、目を閉じて顔を覆う少女。

「痛っ、ひっ！ひぃぃ――――！！」

「だ、誰か！誰か来てください！！魏忠殿が紅嘉に食べられますー！！」

助けを呼ぶ少女の側で、魏忠の悲鳴は続く。

彼の体は、小虎の強靭な牙にやられた。

・・・かのように見えたのだが・・・・・

「痛い！痛い！痛――――・・・・・！？・・・・あ・・・あれ・・・・？」

「・・・・ぎ、魏忠殿・・・・・？」

急に、声の高さが低くなったことに違和感を覚える玲春。

すると、程なくその耳に届いた声。

「・・・・・・・・・・・痛く、ない・・・・・・・・・・・・？」

「え！？」

呆気にとられるような声に、顔を覆っていた手をどける。

問題の男と虎を見る。

「あ・・・！？」

虎の養い親は生きていた。

生きているのはもちろんだが、出血はおろか、怪我すらしていない。

「べ、紅嘉殿！？」

それで玲春は、なにが起きたのかわかった

紅嘉は魏忠の体にかみつかなかった。

その着物の裾を引き裂いただけだったのだ。

「よかった・・・！」

知り合いが生きていたことへの安堵の言葉。

「――――――よくない！！なにが、いいものか・・・・！？」

ところが、助かった本人はふざけるなと言わんばかりに悪態をついた。

確かに、体を食いちぎられなかったのはよかっただろう。

これが普通の者ならそれでいい。

しかし彼は、自分を攻撃してきた虎の育ての親である。

猛獣を育てることにかけては宮中一の実力を持っている。

だからこそ、宮中でお抱えの飼育係として仕えることができているのだ。

決して飼いならすことができない生き物を懐かせることこそ、自分に価値が出てくるのだ。

間違っても、手塩にかけて育てた猛獣が反抗することなどない。

それなのに自分の子供同然だった子虎は、自分に襲いかかってきた。

明らかな反逆行為。

あってはならない、養い親への反抗だった。

「なんのつもりだ、紅嘉！！私を怒らせるのかっ！！」

怒鳴りつけると、懐から棒のようなものを取り出す。

一振りすれば、尺度が長くなる。

現代で言う警棒のようなものだった。

「二度と逆らえぬようにしてくれる！！」

はむかえば、二度とそんなことができないように叱るだけ。
いつもなら、これをだしたところ紅嘉は大人しくなる。
ところが、

「グオッ！！」

一吠えすると、大口を開けて突進してきた。

「なに！？」

まさかの行動に魏忠の動きが一瞬遅れる。
それが、勝敗を分けた。

「うわぁああ！？」
「ぎ、魏忠殿！？」

しつけ棒を持つ手に襲いかかると、それを自慢の牙で噛み砕いた。

「なっ！？」
「ガゥ！！」

真っ二つに砕き壊すと、魏忠の上へと身を沈めた。

「ぎゃっ！！」

まだ子供とは言え、紅嘉は【シベリアトラ】と呼ばれる種類の中国産の虎である。
通常の【シベリアトラ】の成人体重、１６０～３００ｋｇ以下であるとは言え、それが飛び乗ってくれば、かなり苦しい。

「うっ！ぐぅう・・・！」

押しのけようともがくが、びくともしない。
それどおろか、自然界で捕まえた獲物を追い詰めるた肉食獣のように体重をかけてきた。

「ぐっ！べ・・・紅嘉・・・！」

魏忠の声に、低く唸るだけでどく気配はない。
こうなってしまえば、もうどうすることもできない。
紅嘉は自分の養い親を見下ろしながら、舌を出しながら大口を開ける。

「ガァア・・・！」
「や、やめろ紅嘉ぁ！！私がわからないのか！？どうし――――――！？」

疑問の声さえ遮るように大きく吠える。

「ひっ・・・ひぃ・・・！」

「グルゥ・・・！」

最後に、念を押すように吠えると、相手の上から降りた。

「ガァルゥウ・・・・！」

体からどいたものの、相変わらず魏忠をにらみ続けていた。
そしてその体勢のまま、後ろ向きの姿勢で下がり始める。
敵を警戒するような動きに、二人の人間は困惑した。

「紅嘉殿・・・！？」

「・・・なんで・・・・どうしたというのだ・・・！？」

呆然とした状態で、目だけでその動きを見つめる魏忠。
程なくして、後退していた紅嘉の体は玲春の体に触れるところまでくる。
それがわかるやいなや、再び少女の体に頭をくっつけた。

「えっ！？」

早く早くと急かすように、玲春の体を押す。
自分が見詰めていた方向へと、彼女を行かせようとするのだ。

「私に・・・一緒に来てくれと言うのですか・・・？」
「な、何を言ってるんだ！？ただの偶然だ！動いてはいけない！」
「・・・・魏忠殿は、動かないでください。」
「玲春！？」
「紅嘉殿は・・・きっとなにかを察して、私に同行を頼んでいるのですよ・・・！」
「馬鹿を言うんじゃない！あなたになにかあったら、平陽公主様がどれほどお怒りに――――」
「すでに、真夜中に出歩いたというと罪を犯しています。昼間の件も含めまして・・・覚悟はできております。」
「馬鹿者！早まるな！」
「大丈夫です。紅嘉殿も一緒ですから。」
「小虎に何ができる！？なにがわかる！？偶然だ！」
「いいえ。この子は、あなたが怪我をしているとわかるからこそ、私をお供に選んだのです！だから大丈夫です・・・どうか、ここでお待ちください。」

微笑んで言うと、紅嘉が嬉しそうに鳴いた。
自分の意見が受け入れられたのだと理解したかどうかわからないが、小虎は少女の袖を引っ張って問題の方角へと歩き出した。

「紅嘉！？玲春、もどるんだ！」
「どうかお静かにして、こちらへいらっしゃるという方をお待ちください！先ほどの怪しい方々が、戻ってくるかもしれませんから！」

首だけで後ろを向き、そう叫びながら歩く。
視界を前に戻し、歩く速度を上げた。
少女を引っ張りながら、庭から廊下へと移動する紅嘉。
小虎が導く先は、自分が着た方向とは全く逆の方角。

（安様の部屋とは違う方向だけど――――！）

胸騒ぎがした。

行かなければいけないという気持ちになった。

「玲春！止まれ紅嘉！」

制止の声をかけられたが、聞くつもりはなかった。

「やめるんだ！行くんじゃない！」

背中ら自分を引き留める声は何度もかかったが、玲春はそれを無視した。

玲春が走り出したことで、紅嘉も速度を上げて進み始める。

ついてきてくれると判断したかどうかはわからないが、銜えていた服の袖を離した。

彼女がついてくるように、誘導するかのように前を走り始める。

（この先に何があるというの？紅嘉殿――――――――――――――！？）

不安と期待を真面目ながら、少女は宮殿の廊下を走った。

「おい。」

「ああ・・・！」

その様子を見ていた二つの影。

「ここからじゃ聞き取れなかったが・・・」
「向こうで何かあったのは間違いないな、星影?」

そんな会話を交わしながら姿を現したのは二人の若者。
本物の安林山と凌義烈だった。

「すごいお嬢ちゃんだな!?虎を手なずけるとはよ!」
「宮中の女性はおしとやかだと聞いていたが・・・初めて見たよ。虎に誘導される人間というのを・・・。」
「おう。聞くと見るとじゃあ、大違いって奴か?」
「ああ・・・。」

うちの星影も、なかなかの強者(つわもの)だが・・・

(上には上がいるということか・・・)

なかなかお目にかからない光景を目にし、しみじみと世間の広さを痛感する本物の林山。

だが彼は知らない。

この少女が、玲春が虎に慣れてしまった原因が親友にあるということを。
その事実を知らない林山だが、やはり猛獣と行動する少女の安否は気になった。

「なんにせよ、あの子を追った方がいいんじゃないか？義烈。」
「そうだな。いくら平気そうでも、相手は人間じゃねぇからなぁ～それに・・・」
「それに・・・なんだ？」
「ど～も、嫌な予感がする。さっきの連中が絡んでるかもしれねぇー」
「あの黒装束のことか？」
「それ以外あるか？」

部屋から急いで立ち去る少女を追って庭までやってきた時、彼女以外の気配を感じて身を隠した。
その時目にしたのが、義烈と林山が言う黒装束をまとった数人の連中だった。
少女と入れ替わりに庭から出てきたのだ。
幸い、少女の存在が気付かれることはなかったが、連中は建物の中へと消えて行った。

「月が陰ったおかげで見つからなかったみてぇだが・・・ありゃあ、素人じゃねぇな。」
「あなたのような達人か、義烈？」
「ご冗談を！あんなんと同類にしないでくれ！つーか、問題はそこじゃないだろう？」

「ああ、問題視する点は別にある・・・！」

二人が危惧すること。

「今彼女が向かった方角は、その黒装束が向かった方角でもあるということだ・・・！」

そう・・・今まで自分達が尾行していた少女は、よりによって、一番危なそうな方向へと向かっていたのだ。
それも、虎付きでだ。

（放っておけるはずがあるか！）

「義烈！」
「わ～てる！」

ポキポキと拳を鳴らしながら答える。

「放っとくわけにはいかねぇからな。」
「同感だ。あ！その前に、あの人を助けた方が――――・・・」

言葉を濁した林山の目は庭に一人残された男に注がれていた。
遠目からでも、怪我をしているのはわかった。

離れている分、怪我の程度はわからないが、早く助けないと命に係わるかもしれない。
そんな林山の気持ちを察した義烈は、こちらを見ることなく答える。

「ほっとけ。」
「そうだな。早く手当をし――――――ええ!?」

しっかりとその意見を切り捨てた。
今なんて!?と聞き返せば、変わらぬ口調で再度言った。

「こっから見た動きじゃ、命に別状はねぇ。ほっとけ。」
「放置する気か!?」
「聞き取れなかったが、なんだかんだ叫んだりしてたろう?声が出るなら助けも呼べる。さっきまであれだけわめいてたなら、そのうち誰か来るだろう?俺達が助けるまでもない。」
「しかし――!」
「あいつの声に誘われてきた連中に見つかってみろ!俺らだけじゃなくて玉蘭さえも危なくなるだろう?つーか、単純に考えりゃ、お嬢ちゃんの方が危険だろうが?」
「そ、それはそうだが・・・」
「みんな救うなんて出来っこねぇんだよ!俺達ゃ、そういうことが目的でここにいるんじゃねぇだろうが?」
「これ以上の寄り道を俺達はできない。わかるな?」
「・・・ああ。」

確かに、これ以上は無理だろう。
玉蘭さんだって待っている。
今夜は、これ以上星蓮のことはわからないだろう。
今日はもう、調べようがないが――――

（次にかけるためにも、ここから生きて帰らないと――――！）

限られた時間で、何を優先するべきか。

“やるなら、徹底的にやれ！逃げ場所は作っといてやる！！”

わかっています、厳師匠！

「ほら行くぞ！」

沈黙の了解をとった侠客は、そう告げると走り出す。
林山も、反対するつもりもなかったので後に続いた。
納得して、その場から離れたのだが・・・

「だ、誰か～！助けてくださーい！！」

遠ざかりつつある場所から、助けを求める男の声。
痛みをこらえているような、泣きそうな情けない叫びだった。
本当は助けてあげたいが、優先順位を考えれば彼は後回しである。

（すまない！名も知らぬ人っ！！）

罪悪感を覚えつつも、全力で廊下を疾走した。
少女と虎が消えた方向へと向かって。

第九十二話　追いかけっこは続く（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

小説の解説前に一言だけ。
本日で、東北地方太平洋沖地震からひと月が経過しました。
地震津波のみにならず、原発や風評により、日本と言う国自体に大きな打撃がきています。
被害にあわれた方々のご冥福と、早期のご回復はもちろん、一日も早く、日本と言う国がちな折れるように、私たち一人一人にできることをしていきたいです。

今回の小説の内容ですが、玲春＆ａｍｐ;義烈の話となっております。
養い親である義烈に逆らってまで、紅嘉が玲春を連れ出したわけは？
林山＆ａｍｐ;義烈が尾行していた少女は、実は玲春であったがその後どうなるのか？
さらに、一人残された魏忠の運命は？

映画の予告風な解説になりましたが、詳しくは次回に続きます。
興味のある方は読んでやってください（＾＾；）

※ないとは思いますが、誤字・脱字・変換ミスがありましたら、ご一報いただけるとありがたいです。ヘタレですみません！！！※

第九十三話　心乱れる中で（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。

竜門弥生は、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第九十三話　心乱れる中で

異変に気付いたのは、二人同時であった。

「こ、琥珀！？」

「ああ――――――！」

静かな虫の声しかしない宮中で、その声は異質でしかなかった。

「わ、私は聞いたことがいのですが・・・読んだ書物によると、犬よりも大きく、オオカミより怖い声を――――！」

「・・・そう、間違いないね。あれは、虎の鳴き声だよ。」

慌てる空飛に琥珀は鋭い表情で答える。

真夜中の訪問者・魏忠の頼みで、林山（星影）の服を部屋から持ち出した二人。

上手く、魏忠を誤魔化し、誰か見ているかもしれないことを想定して芝居までしながら歩いている時だった。

「今が、虎の・・・紅嘉の鳴き声・・・・・！？」

待ち人の元へと向かう道中で、唸るような鳴き声が二人の耳に届いた。

空飛にとっては初めて聞く、猛獣の唸る声だった。

「琥珀！」

「・・・どういうことだろう・・・」

険しい表情で言いながら、歩みを早める琥珀。

「ま、待ってください！」
「空飛、君はここにいた方がいい。」
「え！？」
「私が様子を見てくる。半刻待っても、戻らないようなら黄殿を呼んで――――」
「いやですっ！！」
「空飛？」
「友達だけを、危険な場所に行かせるなんてできません！！」
「友達だからこそ――――」
「危険な目に会わせたくないというのでしょう！？それは私も同じですよ！」

そう言うと、琥珀を追い越して走り出す空飛。

「私も行きます！」
「あ！？待つんだ空飛！！」

自分の忠告を無視して逃走する親友。それを琥珀も急いで追いかけた。

（こっちの方から声がしてるような・・・！？）

虎の声は、断片的ではあるが続いていた。
それを頼りに周囲を見渡す。

（あれ？この方向って――――――！？）

「待つんだ！！」

「わっ！？」

肩を掴まれ、急停止させられた。

「こ、琥珀！」

「頼むから・・・一人で先へ行かないでくれ。何かあっては大変だろう？」

「す、すみません。それよりも琥珀！この声・・・庭の方からしています！そっちは確か――――――」

「ああ・・・魏忠殿と待ち合わせた場所だね。」

唸り声が発せられているのは、自分達を待つ虎の世話係と小虎がいる場所。

「静かに待っていると魏忠殿は言っていましたが・・・なにあったのでしょうか？」

「・・・紅嘉をなだめるための櫛を無くした・・・・という程度ではなさそうだね・・・。」

そう告げて、ゆっくりとした歩みで動き出す琥珀。

「足音は立ててはいけないよ・・・静かに歩くんだ・・・」

「は、はい！」

そんな琥珀に空飛もゆっくりついて行く。

いつもは何とも思わない廊下も、ひどく長く感じた。

（なんでしょう・・・なにがあったというのですか・・・！？）

魏忠殿の性格を思えば、紅嘉がうるさく騒ぎ始めれば、絶対に大人しくさせるはずだ。
それが・・・怒ったような大声で鳴くようなことはさせない。
つまり――――

（・・・それほどのことが起こっているというのでしょうか・・・・？）

震える両肩を抑えながら琥珀について行く。
ゆっくりではあったが、忍び足で進めば、目的の場所が見えてきた。
庭へと降りる入口。
そこまで来た時、急に琥珀が止まる。
何事かと相手を見れば、庭をにらんだまま小さく言った。

「ここで待っていてほしい・・・」
「琥珀！？」
「様子を見てくる・・・。安全だったら、君の名を呼ぶ。もし、危ない様だったら叫び声だけ上げる。そうしたら君は、急いで衛兵のところに行くんだ。」
「でも！」
「二人ともやられたら、意味がないだろう？」

優しくいうと、あっという間に庭へ行ってしまった。

「こ、琥珀・・・！」

残された空飛はやきもきしながら待つしかない。
親友が叫び声を出さないことを願いながら。

その結果は、すぐにわかった。

「空飛！！」

名前を呼ばれた。

（よかった！！）

「無事だったのですね！？」

喜び勇んで庭へ駆け下りれば――――――――

「無事じゃない！！手を貸してくれっ！！」

「え！？」

焦る声で頼む親友。よくよく見れば、庭の一部に座り込んでいた。

その腕には、見覚えのある姿。

「あ、あなたは魏忠殿！？」

あの虎の世話係の姿。
しかしそれは、最後に見た拝み倒す彼ではなかった。

「なっなっなっ！？なんですかその血は――――――――！？」

血まみれで、ぐったりとしている姿だった。

「空飛、布を持っていたら貸してくれ！止血をする。」
「え！？あ、は、は、はい！」

急いで懐から布を出しながら駆け寄る。

「ぬ、布です！？大丈夫ですか！？」
「ぐぅ・・・！」
「肩からバッサリいかれている・・・。刀で斬られたのだろう。」
「ひどい！だれがそんなことを・・・！？」

苦悶の表情で、相手の傷口に布を当てる。

（あれ？）

よく見れば、赤く染まってはいたが、すでに別の布で止血を施されていた

（魏忠殿がしたのかな・・・？）

「魏忠殿、魏忠殿！しっかりなさいませ！」

「うぅ・・・お、王様？それに張様も・・・？」

「あ、気づかれました！？大丈夫ですか！？お気を確かに！！」

「わ、私は平気です！私はいいですから、どうか玲春をっ！！」

「れいしゅん・・・？」

「！？彼女がどうしたのですか！？」

その名前に首をかしげる空飛に対し、琥珀は素早く反応した。

「べ、紅嘉と・・・」

「紅嘉殿とどうされたのです！？」

「あ！そういえば琥珀・・・小虎の、紅嘉殿姿が見えませんよ！？」

相手の言葉で、気づいたかのよう周囲を見渡す空飛。琥珀も同じように見回したが、二人を呼び寄せた声の主はどこにもいなかった。

「魏忠殿、紅嘉殿はどこです！？玲春にも、なにがあったというのですか！？」

「ぞ、賊に・・・」

「賊！？」
「ぞっ・・・賊に、突然切りつけられ・・・！」
「ええ！？」
「玲春殿がですか！？」
「や、やられたのは私だけです・・・そこへ玲春が来たのですが・・・賊が逃げた方向へと、紅嘉と共に・・・！」
「なんと！？女官の身で、なんという無茶を――――・・・・！？」
「あ！？もしかして玲春というのは、昼間林山が助けた女官ですか！？」
「そ、そうです・・・！」
「それも、平陽公主様お気に入りの女官だよ・・・！」
「ええ！？それって――――まずくないですか！？」
「不味過ぎるね。空飛、悪いが魏忠殿を頼む。」
「琥珀！？　」
「私は人を呼んで来てくる！」
「ま、待ってください！怪我ならば、医術の心得があるあなたの方が――――！」
「幸い魏忠殿の傷は致命傷ではない！傷口を布で抑えておいてくれ。」
そう言うと、懐から布を出して空飛へと投げた。
「大丈夫、すぐに応援を呼んで駆けつけるから！そうだ・・・ここでは目立つから、あそこへ移動しよう・・・！」
素早く魏忠を起こすと、その体を支えながら室内へ続く廊下へと腰を下ろさせた。
「琥珀・・・！」
「ここで、大人しく待っているんだよ。心配しなくていい。すぐに

戻るから・・・！」
「わ、私は大丈夫です！それよりあなたが・・・！もし、賊にでも遭遇したら、殺されてしまいますよ！？」
「では、私が殺されないように祈っていてくれ。そうすれば、大丈夫だよ。」
「本当ですか！？」
「本当だとも。じゃあ・・・頼んだよ。」

空飛の頭を撫でながら言うと、あっという間に立ち去ってしまった。

「琥珀・・・！」

怪我人と共に残された空飛。

「ぐぅ・・・」
「魏忠殿！？」

しかし、不安に駆られている暇などない。
側には傷ついた者がいる。
傷口を抑えながら、自分に出来る範囲の手当てをする空飛。

「痛みますか・・・？」
「いえ・・・おかげさまで、先ほどよりはましになりました・・・」
「それはよかったです。しかし・・・どうして賊が、入り込んだのでしょう・・・？」

親友が陛下を賊から守った一件以来、宮中の警備は厳しくなっていた。
それにもかかわらず、自分の目の前の男は賊に襲われたという。

（紅嘉殿が襲ったのかとも思ったけど・・・・）

改めてみた相手は、袖の部分が引き裂かれていた。
それはまるで、食いちぎられたかのようなもの。
しかし、服を裂かれただけで、皮膚などに外傷は全くなかった。
なによりも、心血が流れている部分は、どう見ても何かで斬られたようなものであった。

「私にも、わかりません・・・。それ以上に、あいつの行動が・・・」
「あいつ？」
「紅嘉です・・・」
「そう言えば・・・先ほど、玲春という女官と一緒に、賊を追いかけて行ったと・・・」
「お願いです張様！！玲春にお口添えをしてください！！」
「く、口添え！？」
「あの子は、宮中では珍しい純粋な子です！それゆえ、平陽公主様も、可愛がっていらっしゃいました！優しい子ゆえに、安様のことが気になって、こんなところまで来てしまっただけなのです！！」
「どういうことです？」
「あの子は・・・玲春は、安様の元へ行く途中だったのですよ。」
「林山の元へ！？」
「はい・・・それが、何を察したのか、賊にやられた私を助けてくれ・・・それなのに・・・！」
「魏忠殿・・・玲春殿という女官は、昼間林山が助けた女官ですよね？」
「ええ・・・そうらしいのですが・・・・」

ばつの悪そうな表情をする相手に、物事に疎い空飛も何かを察した。

「あの・・・女官は普通、夜で歩いてはいけないというのは知っていると思うのですよ。それを・・・真夜中に宦官の元へ来るというのは・・・」
「・・・はい。私も詳しいことは知らないのですが、皆が言うには、」
「え・・・？」

“霍去病将軍の再来である高級宦官・安林山は、平陽公主様付の女官で、平陽公主様お気に入りの女官・除玲春と恋に落ちた。”

聞いた噂が脳裏によみがえる。
それを否定しようと頭(こうべ)をふる前に男は口にした。

「玲春と安様は・・・・結婚を約束した深い仲のようなのです・・・・！」

空飛が認めたくなかったことを。

――――――――――結婚を約束した深い仲――――――――――

「ば・・・馬鹿言わないでください！！林山は、誰とも付き合っていないのですよ！？」
「しかし、陛下の寵愛を受けていらっしゃるではないですか？」
「そ、それは――――・・・・私のような下々が口にできることではないです！それはあなただってそうでしょう、魏忠殿！？」
「口にはできませんが、この目で見ております。昼間、安様をいたわる陛下のお姿、あれはまさに愛にあふれていました。」
「あ、あああ愛にあふれていた――――――――！？」

ズクンと胸が痛んだ。
それが、どういう痛みかうまく表現できない。
ただ、気分の良いものでないことは確かだった。

「ええ。ですから・・・口にするまでもないと・・・・」
「嘘ですっ！！」
「へ！？」
「そんなの――――――――――――――嘘だ！！」

林山は言った。
自分は皇帝の恋人ではないと！
玲春という少女とも結婚しないって言ったんだ！

“私は誰とも結婚しない！”

誰の物にもならないと。
そう言って完全否定したんだ！！

“あの子と結婚するくらいなら、私は空飛と結婚する！！”

そう言ってくれたんだ・・・・！！

（だから私は信じない・・・！）

林山が誰かと深い仲であるとか、結婚するとかなんて、

（そんなまやかし、誰が信じるものか――――――――――！！）

歯がゆいような怒りにこぶしを握り締める。
驚いたままでいる魏忠をにらみつける大音量で言った。

「それで！？小虎を引っ張っていった女官殿はどっちへ行ったのですか！？」
「誤解です！引っ張っていったのは紅嘉――――――あ・・・・！」
「『引っ張っていったのは紅嘉』・・・・ですと？」

「あ！？いえ！その！」
「・・・つまり、玲春殿が小虎を引きつれていったのではなく、小虎が紅嘉殿を無理やり連れて行ったのですか・・・？」
「そ、その・・・・」
「魏忠殿！あなた狩りにも紅嘉殿の養い親でしょう！？世話係でしょう！？なぜ止めないのですか！？」
「止めましたよ！しかし――――――――言うことを聞いてくれず！」
「聞いてくれなかった？」
「ああ、もう！あんなことは初めてですよ！おまけに私にまで逆らって！」
「！？もしや・・・・食いちぎられたようなその袖、紅嘉殿が・・・・？」
「あ！いや！こ、これは、賊から逃げる時に自分で～・・・・！」

（紅嘉殿にやられたのですか・・・）

下手な嘘をつく相手に、空飛はその心がわかった。
失敗が許されないのが宮中というところ。
人が人を陥れる場所。
隙を見せればけり落とされる。
彼のような地位を、宮中内での動物の世話をして生計を立てたいと思うものは数多くいる。
猛獣を従わせてこその職なのに、その猛獣を手名づけることができないと知れれば、この男は今の地位を失うだろう。
それゆえの、苦し紛れのごまかしの嘘だった。

「そうでしょうね・・・本来ならば、命を奪われておかしくないのですから。着ているものが引き裂かれようとどうしようと、必死で逃げるものですよね。」
「ちょ、張様・・・。」

「お話は分かりましたら、とにかく待ちましょう。すぐに琥珀が、お医者様と衛兵を連れてきてくれますから。」
「張様。」
「紅嘉殿も玲春殿も大丈夫ですよ。紅嘉殿は、自分の育ての親を守るために、追い払うために賊を追いかけて行ったのです。玲春殿はそれが心配でついて行ったのですから、危なくなれば逃げますよ。」
「張様・・・・!!」
「大丈夫ですよ・・・ね?」

頑張って笑いかければ、相手は安心した表情で頭を下げた。

「ありがとうございます・・・!まさに、安様のごときお優しさ・・・!」
「え?」

林山と同じ?

その言葉で、急に毒に犯された親友のことが心配になった。

(賊が侵入してるって言っていたけど・・・・)

まさか、林山を狙って!?

「あ、あの!」
「はい?」
「ぞ、賊は何者ですか!?誰か狙っているのですか!?」

もし、標的がこの人でなく別にいるなら、それが親友である可能性は高かった。
彼を探して、命を狙ってやってきたのではないだろうか？
この場所から、林山の自室は近い。今はここより離れた自分の部屋にかくまっているので、命を奪われる心配はないが・・・。

（林山を狙ってきたのなら、つじつまが合うし！）

「そ、そうおっしゃられましても・・・相手は、黒ずくめの覆面でしたし・・・。」
「男でした女でした！？」
「わ、わかりませんよ！顔は見れなかったのですから！」
「じゃあ、人数は！？何人いました！？」
「どうしてそのようなことを聞かれるのですか？」
「どうしてって・・・！」
「賊に心当たりでもあるのですか・・・？賊に狙われるようなお知り合いでも？」
「そういうわけではありませんが――――――ほら！林山が、一度賊を撃退してるでしょう？もしかしたら、復讐に来たのかと思いまして。」
「あの時の賊は、すべて死んだと聞きましたが？」
「あの場にいなかった他の仲間が、復讐に来たと考えられるでしょう！？」
「あ・・・なるほど！」

納得したようにうなずく男だったが、その表情はすぐに深刻なものへと変わる。

「ちょっと待ってくださいよ！そうなると、安様が危なくないですか・・・！？」

「通常の場合でしたら、そうかもしれません。ですが、大丈夫です。林山は今、別の場所に――――」
「知っています！ですが、そんなのわかりませんよ！陛下の場所でさえ、突き止めた不届き者達でしょう！？王様のお部屋の場所ぐらいわかるはずです。」
「ええ！？そ・・・そう言われて見れば・・・！」

（そうかもしれない・・・！）

その言葉で、今度は空飛の表情が変わった。
宮中に侵入するような賊が、何の下見もせずにやってくるだろうか？
いいや、きっとちゃんと調べてくるはずだ。
そうなると――――

「林山っ！！」

林山が危ないっ！！

叫んだと同時に立ち上がる空飛。そして、驚いた顔で自分を見る怪我人に言い礼すると早口で言った。

「こうしてはいられません！すみませんが魏忠殿！私、林山のところへ行ってきます！あとはお願いします！！」
「えぇ！？」

そう告げると回れを右をする宦官。これに呆気にとられつつも、即座に反応する虎の世話係。

「ちょ、待ってくださいよ！私はどうなるのです！？」
「すみませんが、頑張ってください！」
後は勝手にしてくれと言わんばかりの言い方に、慌てて空飛の腰にしがみつく魏忠。
「頑張るって・・・どう頑張れと言うのですか！？待ってくださいよ！！」
「宦官の情けです！林山を助けないと！」
「私も助けてください！大丈夫ですよ！安様は！！」
「その安易な大丈夫が命取りになるのですっ！！」
「それでしたら、助けが来てからにしてくださいよ！！」
「それじゃあ間に合いませんよ！離してください！」
「見捨てないでください！」
行かせまいと引き留める男と、押しのけて進もうとする元男と。
そんなやり取りを数回繰り返したところで宦官は叫んだ。
「しつこいです！うるさいです！こんな真夜中にそんな大声出したら、周りの部屋の人が起きるじゃ――――――！？」
あれ？
そう言いかけて空飛は気づく。

「起きるはず・・・・ですねよ？」
「へ！？」
「・・・・魏忠殿。私達が来るまで、どなたかに助けを呼びましたか？」
「え！？もちろん呼びましたが・・・」
「大声でですか？」
「大声です。」
「紅嘉の吠える声よりもですか？」
「そこまで大きな声は出ませんが・・・叫びましたよ？」
「なのに、誰も来なかったのですか・・・？」
「え？」

向けていた視線を男から外すと、周囲に目をやりながら空飛は告げる。

「・・・なんか変じゃないですか？」
「変とはなにがです？」
「私達・・・これだけの声で騒いでるのに、どうして誰も起きてこないのですか・・・？」
「あ！そういう言われてみれば・・・そうですね・・・。」

少し離れているとはいえ、それなりに部屋が点在していた。
顔見知り程度ではあるが、同僚である高級宦官達が使う部屋。

（わからないほど、疲れて熟睡してるわけじゃないでしょうし・・・？）

自分達と違って、多くの高級宦官は面倒な仕事はすべて下級宦官に

させている。
そして、自分達は好きなことをして半分は遊んでいるのである。
先ほどの紅嘉の唸り声も含めて考えれば、庭に近い部屋の者達が起きてこないわけがない。

（まさか・・・・！）

背筋に冷たいものが流れた。
考えたくない、あり得ることのないある想像が頭に浮かんだ。

「そんなはずは・・・」

口に出して呟いたが、不安はぬぐえない。だから彼は動いた。

「ここから動かないでください！」
「張様！？」

それを確かめるために。
魏忠から離れると、廊下の壁へと手を伸ばす。
一定間隔で配置され、灯（とも）されている光。

（宮中の備品を、勝手に取ると怒られるんですけど――――！）

そんなこと、言っている場合じゃないです！

種火を取ると、一番近くの部屋へと駆け込んだ。
その部屋は、袁（えん）という色の白い高級宦官の部屋。

神経質で、いつもツンとした目で自分達をにらむ同僚だった

「夜分に失礼致します！袁様、起きていらっしゃいますか！？張空飛でございます！」

部屋の中は静まり返っており、返事はなかった。

「袁様！起きてください！張空飛です！いらっしゃらないのですか！？」

（おかしい・・・！）

普段は、少しだけ声が大きくなっただけで「安林山様のおまけは声まで分相応に声も大きい。」と怒りながら嫌みを言う。
今の声の大きさなら、それこそ罵詈雑言で怒鳴りつけられてもおかしくない。
それなのに――――――

（これだけ騒いでも何も言わない・・・）

「袁様っ！！」

再度呼びかける。暗闇の中、わずかな明かりを頼りに部屋の中を進む。はじめて入る親友達以外の部屋。豪華な装飾品がある立派な部屋で、きちんと綺麗に片付いていた。

「袁様、どこですか？」

人の気配を探すように、火種を部屋の中でかざす。

物音一つしなかったが、問題人物は寝台の上にいた。

「袁様！」

手を投げ出して横たわる姿。顔は首ごと、こちらをそむけていたがわかった。それが同僚の袁であることに。

「袁様・・・。」

目的の相手を見つけ、ホッとしながら近づいた。

「袁様！起きてください！外に賊が出て大変なのです！」

そう言いながら寝ている相手の肩をゆする。

「賊が闊歩しており、怪我人も出ています。どうか、袁様も私と共に避難を――――」

空飛の言葉がそこで止まる。

「え・・・？」

肩をゆすったことで、袁がこちらを向いた。

「うっ――――――――わぁあああああああああああ！！」

空飛の悲鳴が上がる。

「ちょ、張様！どうされたのです！？」

その声を聞きつけ、壁伝いに部屋へと入ってくる魏忠。
そして同じように小さく叫んだ。

「袁様ぁ・・・・！」

震える声で訴える空飛の視線の先には、かんざしでのどを一突きされ、絶命している同僚の亡きがら。更衣は乱れることなく、普段通りの状態で死んでいた。
口から流れる血が、彼の白い肌をさらに白く見せていた。

「袁様が、袁様がぁ！！」

持っていた火が、空飛の手から落ちた。それは床に落ちると、ジュッと音を立てて消えてしまった。同時に、なにかにつまずいて転んだ。見れば、水が入っていたらしい入れ物が中身をぶちまけた状態で転がっていた。

「あ、ああ・・・ああ・・・！」

「張様！」

「ぎ――――――魏忠殿！魏忠殿ぉ！袁様が！袁様がぁ――――――！」

そのまま床を這いながら男の元へと戻る空飛。それに男は、よろけながらも同じように床に床を這いながら近づくと、泣きながら震える宦官を抱きしめた。

「か、肩に触れた時、冷たいとは思ったです！でも、まさか・・・・！」

「・・・おいたわしや・・・！なんてことでしょう・・・」

「し、死んでるのでしょうか・・・！？」

「・・・生きてるように見えますか・・・？」

作り笑いをしながら言う相手に、空飛は全力で首を横に振る。

「ハハハ・・・！そうでしょうね・・・死んでいるなら、外の騒ぎに反応するはずないですよね・・・！」

体を震わせながら言う男だったが、急に何かに気づいたように小さく叫ぶ。

「まさか・・・！？」

「魏忠殿!?」
「お、お待ちください!確かめてきます!」

そう言い残すと、床を這いながら部屋から出る。
わけがわからず、呆然とした医のいる部屋へと残される空飛。

(何を確かめると・・・?)

そんな空飛の耳に、残酷な言葉を叫ぶ虎の世話係の声が届く。

「た、大変です!大変でございます!!張様!」
「魏忠殿!?
「み・・・みんなっ!みんな死んでおります!!」
「え!?」
「に、庭に面した部屋のすべての人達が、死んでいます!!殺されて・・・!!」
「う・・・そ、でしょう・・・・?」

信じられない現実に、男の声がする部屋の外を見つめながらつぶやく空飛。

(何かとんでもないことが、起きているというのですか・・・?)

そんな思いが彼の脳裏によぎる。

皮肉なことに現実は、空飛の予想通りの展開へと進んでいたのだった。

第九十三話　心乱れる中で（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・（土下座）
！！

今回のお話は、琥珀＆amp;空飛が魏忠と合流したところを書いてみました。
何事にも冷静な琥珀と、情が深い分、感情的になりやすい空飛を目指してみました。
特に空飛に関しては、林山（星影）のことが心配でたまらないとのことでしたが・・・
今後どうなるか、よろしければ読んでやってくださいね。
続きの方、頑張って仕上げますので（大汗）

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください（平伏）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第九十四話　災い転じて福となる・・・か？（１）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。

竜門弥生は、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第九十四話　災い転じて福となる・・・か？（1）

自分に合わせるように紅嘉は走ってくれていた。

（やっぱりこの先に何かあるんだわ！）

紅嘉に頼まれ、引っ張られながらそのあとについて行く玲春。

「どこまで行く気なんだ、あの虎は？」

そんな玲春の後ろを、間隔をあけながら追いかける林山と義烈の二人組。

「真夜中に出歩いているだけでも危ないのに・・・それを猛獣と一緒に夜の散歩なんて。宮中の女性は本当に怖いもの知らずだな？」

少女と虎のことばかり口にする林山に、義烈は目を細めながらつぶやいた。

「・・・気配が増えた。」

「え？」

「どうも・・・素人のもんじゃねぇな。」

「なにがだ？」

「殺し屋の臭いがするってんだよ。」
「え！？」

ぞっとするような目でつぶやく男。林山の体に鳥肌が立った。
その目に、見覚えがあったからだ。
かつて、自分を打ちのめした賊と同じ目。
星影によって叩きのめされた血を好む男の瞳に酷似していた。

「人でも殺すつもりか？」

気付けばそう聞いていた。それに侠客は、驚いたように目を見開いた後で笑った。

「いいや・・・そういう意味じゃねぇ。」

クックッと笑うと楽しそうに告げる。

「遊べるかもしれないからよ・・・！」

嬉々とした表情で、殺伐とした殺気を放つ男。
それでどういうことか理解できた。

「ここは宮中だぞ？」
「そうだな。」
「皇帝のいる宮殿に・・・殺り合わなければいけないほどの敵がいるのか？」
「護衛兵とか衛兵とかじゃないのは確かだ。どっちかっつーと、俺に似た種類だな～」
「義烈？」

「まぎれてるぜ。裏稼業の連中がよぉ・・・・！」

そう語る男は、戦闘態勢に入っていた。
手元にあるのは、懐に入れることができる大きさの短刀のみ。

（戦いになったら、こんな小さい得物で戦えというのか？）

困惑しつつも、男の言葉通り、万が一に備える林山。
ふいに、鋭い殺気を感じた。

（ヤバイ！）

反射的に身を隠せば、義烈も同様に物陰に隠れた。
ただならぬ気配がする方を見れば、黒衣に身を包んだ人影。

（なんだあいつら！？）

見るからに怪しい者達。
作りかけの庭の庭園から様子を伺った。
人数は全部で三人。
怪しいと思った決め手は、手にしている大きめの弓矢。

（こんな真夜中に、闇にまぎれやすい黒装飾で、弓矢片手に闊歩してれば、誰が見ても怪しいよな・・・。）

側にいる相方に目配せすれば、同じようなことを考えていたのだろう。いぶかしそうな表情で頷いた。

（なにをしているんだ？）

追いかけていた少女も気になったが、幸い彼女は連中に見つかることなく行ってしまった。今はこの、いかにも宮中の外から無断でやってきましたという連中を見張った方がいい。
そう判断して、連中へと視線を向けていた。

「おい。」

小声で義烈に呼ばれた。顎だけで、向こうを見ろと指された。
どうしたのかと思い、庭園から見える遠くの景色へと目をやる。

「え・・・・！？」

目に映った光景に、体が凍りついた。

・　・
・

・
・

「星影姉さまは・・・私の誇りです。」

真っ赤な目で泣きながら妹が言う。

「町の人が、偉いお役人様が、身分の尊き方がなんと言おうが、姉さまは私の一番大切な姉。尊敬すべき方です。」

なぜ、妹がそう言うのか。

ああ、そうだ・・・。

私達に言い寄る山賊を倒した直後だった。

今まで私達にちやほやしていた者達が、友達が、私達を化け物のように扱ったんだっけ。

星蓮はそうでもなかったけど、私はかなり嫌煙された。

『凶悪な山賊を倒した恐ろしい女』

それが、私達を山賊に差し出し、生け贄にして、助けもしなかった連中の決めた価値観。

それを知った妹が、泣きながら私に言ったのだ。

・・・謝ってきたのだ。

「星影姉さまだけを・・・ひどい女にしてしまいました。私が、私が武芸を習っていれば・・・！」

ごめんなさい、ごめんなさい。自分だけ何も言われなくて。自分だけ安全な場所で、ぬくぬくとしていて。同じ生け贄になったのに、私だけ・・・！と。

そう言って泣きながら詫びる星蓮。

どうして泣くの、妹よ?可愛いお前は何も悪くない。悪いのは私達を見捨てた連中だぞ?優しいお前が泣くことはない。悲しむことはない。罪悪感を覚えることはない。
星蓮、お前はただ花のように笑っていればいいの。それだけで私は満足なの。
今の自分を不幸だとも、哀れだとも思わない。周りがそう言っているだけ。周囲の言葉に惑わされてはいけないよ、星蓮。
姉さまは、お前が幸せになってくれることが何よりも幸せなのよ?私達は幸せを守ったのだから。
それに見合う形の幸せを手に入れましょう。
私の言葉に愛しい妹は、私にすがり付きながら小さく頷いた。

「私は・・・そんな姉さまが大好きです。」

必死で笑顔を作りながら。

(星蓮・・・!)

瞬きをするように、そんな記憶が頭を駆け抜ける。

(私は死ぬの?)

敬うべき少年に抱き着かれ、憧れる大将軍に抱きしめられ、動かぬ体で奥歯をかみしめる。
天井から、皇太子の命を奪おうとする刺客が落ちてくる。

早いはずの動きが、ひどくゆっくり見えた。
絶体絶命、という言葉ふさわしい状況。
面白いように体が動かない。毒のせいだと思っていたが、それだけではないようだ。

（この私が・・・女傑だのなんだのと言われた私が！）

恐怖に近いような感覚で、どうしていいかわからない状況で、石像のように固まってしまうなんて！！

（なんて情けないのだろう、星影？）

悔しくて、笑みさえ浮かんだ。
完全に逃げ場を失った状態で、どう戦えばいいのか？
捨て身で皇太子と大将軍をかばえばいいのか？
そんな力は残ってないし、今ここで彼らの盾になって死ぬわけにはいかない。

（そうなったら、星蓮を救えない。）

それでもー

（なんとかしないとっ！！）

諦めてはいなかった。
諦めてはいなかったが、体が動かない。
視界の片隅に月のない黒い空が見えた。
だが、一番強烈に映っていたのは自分達に向かう凶器。

「死ね衛青！！劉拠！！」

銀色の刃が振り下ろされた。

「あぁああ！！」

星蓮っ！！林山っ！！

その場にこだまする絶叫。

「ぎゃっ！？」
「ぐっ！？」
「うわぁ！！」

鈍い音と、連続的な悲鳴。
その音で、薄めだった星影の目が開かれる。

「え！？」
「なっ！？」

「なに・・・・・・・？」

思わず漏れてしまった声。
しかし、今の彼女にそんなことは些細なこと。
自分の失態を気にするよりも、目の前の光景に意識が注がれていた。

「ぐぅう・・・！」

一声ないて倒れる影。

（え、衛青将軍！？）

その影は、自分が慕う大将軍・衛青ではない。

「これは・・・」

星影が心配する人物は、困惑気味につぶやくと床に倒れた相手・・・

「どういうことだ・・・・！？」

自分達を襲ってきた敵を見ていた。
床に倒れている賊は1人だけではなかった。
頭上から降りてきた数名が、1人を残して全員床に倒れていたのだ。

「うぅ・・・！」
「ぐ・・・。」

幸か不幸か、賊達は死んではいなかった。
しかしみな、完全に伸びている状態だった。

（一体なにが!?誰が!?）

戦闘不能になっている男達を注意深く見れば、その周囲にはがれきの残骸。

（誰かがこれを、こいつらにぶつけてくれたのか!?）

つまり、助けが来たということ――――!?

「叔父上!」

星影がそう結論付けた時、声が上がる。
この中で一番年若い少年の叫びだった。
それを合図に、敵も味方も気が付いたかのように止めていた体を動かす。

「拠様！お怪我は！？」

真っ先に衛青将軍が動いた。
庇っていた皇太子の体を抱き寄せると、何度も背をなでながら叫ぶ。

「大丈夫でございますか！？ご無事ですか！？お怪我は！？拠様！」
「私は平気だ！叔父上こそ、無事でよかった・・・！！」
「拠様・・・！」

「無事ではないぞ・・・・！」

互いを労りあう、叔父と甥へ憎々しい言葉が向けられた。

「ずいぶん舐めた真似をしてくださいましたな・・・！」

そう言ったのは、唯一がれきをよけた賊だった。

「お頭。」

駆け寄る仲間の言葉が耳に届く。それで、この男が曲者共をまとめている頭目とわかった。

「用心したはずだったが、まさか仲間がいようとは・・・！」

つばを吐きながら言うと、周囲の仲間に命を下した。

「こいつらの仲間が近くにいるぞ！殺せ！！」

その指示で、数名が、がれきが飛んできたらしい方角へと音もなく向かった。

・
・　・　・

「良かった間に合って！！」

「よかねぇーよ！このお節介っ！！」

安堵した直後、後頭部を殴られる本物の安林山。

「仕方ないだろう！？ああでもしないと、彼らは殺されていた。」

「だからってな、怪しい奴らのとこに割って入って攻撃するのもどうかと思うぜ！？」

「そうしないと間に合わなかったんだ！」

「俺がいなきゃ、オメーの命が間に合ってなかったぞ！？」

忌々しそうに義烈が地面を一踏みすれば、うめき声が漏れる。
見れば、二人の足元には黒衣の賊が三人転がっていた。

最初、その光景に目を疑った。
姿かたち、状況がどうあれ、見間違うはずはない。
何年一緒にいたと思う？
そうとも、絶対に間違えるなんてありえない！！
賊らしい集団に襲われていたのは、なにをかくそう親友兼義理の姉である劉星影だったのだ。

「あ・・・・！？」

あの馬鹿！！何してんだっ！！？

そう叫びたくなるのを我慢して。
いろいろツッコみたいところはあったが我慢して。
怒りたいのを我慢して林山がしたこと。
というよりも、気づいた時には体が自然に動いていた。

「うおっぉおお！！」

叫びながら突進すると、

「なっ！？」
「なんだ貴様！？」
「なにものだ！？」

曲者の質問に答えることなく、その足元へと利き足を繰り出した。

「やぁあああ！！」

林山の動きに、賊たちは攻撃されると思って身をひるがえす。
それで、林山の視界は開いた。
今まさに、正面に見える親友・星影の命が消えようとしている。

（消してなるものか！！）

ろうそくの光じゃないんだ！！
そう心の中で怒ってから、彼は行動に出る。
彼は後方へと上げた足を大きく前方へと動かす。
そして狙いを定めて、転がっていた瓦礫を力いっぱい蹴り飛ばしたのだ。

「あ！？」
「な、なに！？」
「しまっ――――――――――――――――――――！」

それでようやく、林山から離れた賊たちは理解した。
彼の本当の狙いが、自分の仲間達を攻撃することだということに。

瓦礫は人のこぶし大ほどだったので勢いよく飛んだ。

「でぇやぁああ！やっ！やっ！やっ！やぁぁあああ！！」

どれだけ蹴り飛ばしたかわからない。
とにかく連打で両足を使って蹴りまくった。
それは目的の者達へと次々と命中した。

「ぎゃっ！？」
「ぐっ！？」
「うわぁ！！」

静かな空気を通して、親友に襲いかかる賊の悲鳴が聞こえた。
すべては命中したかのように見えたのだが、

「あ！？一人かわしたか！？」

蹴り終わった後で凝視すれば、一人だけ平然と立ち尽くしているものがいた。
一発不発に終わったこと忌々しく思ったが、星影なら一人ぐらいどうということもなく倒すだろうと思い、これ以上の攻撃はしなかった。

「よかった・・・。」

そうつぶやいて、ほっと安堵した林山だったが、

「き、貴様！」
「よくも我らの仲間を！」
「死ねっ！」
「え・・・？」

戸惑いと怒りの音色を混ぜた怒声が、三方向から攻撃として炸裂した。

「しまっ・・・！？」

（ヤバイっ！！）

一息ついてところでまさかの不意打ち。
不意打ちだと思いつつも、まぁ当然の結果だろうと心のどこかでのんきに考えていた。

（いきなり姿を現して攻撃して、ハイそれで終わり、というわけもないよな・・・普通は。）

そう思い、これは無傷じゃ済まないだろうと、覚悟した直後。

「ぎゃっ！」
「ぶっ！！」

「え？」

左右の男が倒れた。
それに驚いて目をやる林山と残りの賊。

「ど、どうなって――――――！？」
「見ての通りだよ。」
「あ。」

状況を理解できずにつぶやいた最後の一人。その背後には義烈の姿。

「おまっ！？」
「――――――――て め～も寝ろ。」
「がぁ！？」

良い音がしたと思ったら、そのまま地面に崩れ落ちる賊。
義烈の上段蹴りが決まった証拠だった。

「義烈！？い・・・」

いつの間に！？と、言い終わらないうちに後頭部にこぶしを落とされた。

「この馬鹿っ！！」

ついでに雷も落ちる。

「いてぇ～!?」

「お前馬鹿か!?なにやってんだよ!?いきなり飛び出して!」

こうして、お説教を受けることとなり、現在に至るのである。

「お前さ、いくら自分の腕が経つって言ってもな、敵の前でその仲間を倒し終わった後で、のんきにホッと一息ついてるなんていう、無謀なバカ見たのは初めてだぜ!?馬鹿だお前は!!」

「そんな言い方ないだろう!?急がないと向こうの人が死にかけたんだ!あそこまで駆けつけてる時間もなかったし、手ごろのがれきがったから・・・!」

「このクソややこしい状況で不通も何もあるか!?飛び出すだけでも悪いのに、

「人助けのためだから仕方ねぇだぁ!?そういうことは、テメー一人の時にしやがれ!ぞんなことしてっと、そのうち人助けで死ぬぞ!?一銭にもならねぇのに馬鹿じゃねぇのか!?」

「あれしか方法がなかったんだ!見殺しにするわけにはいかないだろう!?つーか、あんた金しか頭にないのかよ!?」

「悪いかよ!?なんで俺が金にならねぇことしなきゃなんねぇんだよ?お前だって、こんなことしてる場合じゃねぇことはわかってるだろう!?」

「それは・・・」

「そんなに、風景の一部が大事なのかよ?」

「そりゃあ、あなたにとっては風景画に出てくる登場人物かもしれないが――――」

俺にとっては愛する女性の姉になる肉親。
それも、最恐・最凶・最強の三拍子のそろった最高の親友。

（もちろん、そんなことは言えないけど・・・）

口ごもる林山を見ながら、義烈は大げさにため息をつく。

「もういい馬鹿が！見ろ、お仲間が来ちまったぜ？」

言われて、攻撃した方を見れば、ハヤテのごとくこちらに向かってくる集団。

「反省会は後だ。ほれ、使え！」

そう言うなり、無造作に何か投げてよこした。それを受け取ってギョッとした。

「剣じゃないか！？どうやって持ち込んだんだ？」
「足もとで寝てる奴から取った。」

そう言いながら、二本の剣を見せびらかす侠客。

「パクッたのかよ！？」
「漢民族の特権だからな？」

クックッと笑いながら答える。

「さぁ～て。星影のおかげで面倒なことになっちまったが・・・」

舌なめずりをしながら剣を抜くと、嬉々とした声で言った。

「運動の時間と行こーか！？」

まるでおもちゃで遊ぶかのような口調。しかし、それに反する凍りつくような殺気を義烈は放っていた。
そんな男の側で林山も、剣を抜いて構える。

（なにがあったのかわからないが。）

騒ぎの中心にお前がいるということは、

（また、とんでもない事件に巻き込まれたってことかよ？）

それが星蓮に関わることであろうとなかろうと。
期待してるが、期待はしてない。
がっかりするのは慣れている。
ただ、その内容が、いつも並はずれだから、俺もつい怒ってしまう。
前回の、陛下襲撃・救出事件や安林山男娼愛妾話なんていうものからしてもな。

（でもな――――――）

昔からお節介で、世話焼きで、義侠心のあるお前のことだ。

（誰のためにしてる事だって、俺はわかってるよ。）

俺は信じてからな、星影？

（だって俺達、親友だろう？）

今までもこれからも――――――

うっすらと笑ってから、キュッと口元をしめる林山。
神経を研ぎ澄ませれば、無数の殺気がこちらへ向かってくる。

「き――――――」
「きたな。」

義烈がそう言う前に、静かな口調で言った。それに侠客は少し目を大きくしたが、すぐにいつものニヒルな笑みを作りながら告げる。

「良い顔してるな・・・お前。」

一言告げると、獲物めがけて一歩踏み出した。
それに続くように林山も前へと進んだのだった。

第九十四話　災い転じて福となる・・・か？（1）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・（土下座）
！！

危機一髪の星影達を救ったのは、林山＆ａｍｐ；義烈でした。
二度目の賊の襲撃に、不自由な体で星影はどう立ち向かうのか？
次回も続きますので、良かったら読んでみてください。

ストーリーとは関係ありませんが、いつもサブタイトルを考えるのに悩みます・・・。
今回も、サブタイトルに悩んでアップが遅くなってのでした・・・
（赤面）
優柔不断ですみません。

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください
（平伏）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第九十五話　災い転じて福となる・・・か？（２）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。
東京電力上層部と、九州電力には、今までの件を真摯に受け止め、誠意ある対応を行えるように望みます。

竜門弥生は、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第九十五話　災い転じて福となる・・・か？（2）

頭目の指示で、3分の一がその場から消えた。
窮地を脱した星影達だったが、安心できる状況ではなかった。

「これでもう、味方は来ませんぞ・・・？」
「貴様・・・！」
「今は運よく助かったな、衛青大将軍よ。これで終わらせるほど我らは三流ではない。悪いがあんたには死んでもらう！皇太子共々な・・・！！」
「ふざけるな！拠様には指一本触れさせない！」

少年と星影をかばいながら賊の前に立ちはだかるは、漢帝国自慢の名将・大将軍衛青。

「この人数相手にずいぶん強気でございますな、大将軍？」
「・・・側まで私の手の者がきている。これだけ騒いで人が来なかった方がおかしいのだ。これ以上貴様らが粘るのも無意味なこと。命があるうちに、早々に引き揚げてはどうだ？」
「ここまで来た以上、引くことなどできん。もう、二度目のしくじりは許されんからな・・・！」
「二度目のしくじり？」

（どういうこと？）

賊の言葉に首をかしげる衛青。その言葉が引っ掛かったのは星影も同じだった。

（つまり・・・以前も襲撃して失敗しているってことかしら？）

そうだとしたら、皇太子って大変な身分なのね。

しみじみと思いながら薄めで少年を見れば、複雑そうな表情で賊をにらんでいた。

「・・・要は貴様らに、私を殺すように命じた依頼者がいるということか？」

「我らは素人と違い、そのような情報は言わぬぞ？皇太子殿下？」

「言わずとも、察しはついている。」

皇太子の代わりの大将軍が答えると告げた。

「だからこそ、皇太子さまは私が守る・・・！」

「叔父上。」

（どうするんだ、これ？）

先ほどの加勢のおかげで、頭上の賊からは逃れられたが、不利なことには変わりない。

壁際に追い込まれ、前はおろか、左右には殺気を向ける敵ばかりだった。

「お、叔父上・・・！」

「安林山とともに動かないでください！」

甥の声にそう告げると、剣を構えて応戦の動きを見せる。

（無茶だ！二十人近い敵相手に一人で！それも、私達の様な足手まといを守りながらなど・・・）

再び薄目で周囲の様子をうかがう星影。
幸い、自分が意識を取り戻していることに、敵味方双方共に気付いてはいなかった。
だからと言って、このまま皇太子とじっとしているわけにもいかない。
なんとか逃げ道はないかと薄めで目を凝らしながら探すが見つからない。

（悪い時には悪いことが重なるもんだな！くそっ！！）

内心で悪態ついていると、ふと自分の体を支えている皇太子の体が動く。
見れば、呼吸を整えながら剣の柄を握りしめていた。

（おいおい、戦う気か！？）

お前が原因で襲われてるんだぞ！？
命を狙われてる本人が応戦したら、守るものも守れないだろう！？

「おやおや皇太子様・・・なにをなさるおつもりで？」

星影が気付いたことに賊の頭も気づく。
フフフと笑いながら、手にした漆黒色の刀を上下に振りながら言った。

「お噂通り、お優しい皇太子様で・・・。この劣性で、大事な叔父上様を守るために自らも戦おうとは。」
「拠様！いけません！動かないで！！」
「ですがね、皇太子様・・・今の状況を打開するための一番いい方法は、あなた様が手にしているその剣で我々を殺すことではありませんぞ？」
「なんだというのだ・・・！？」
「あなた様ご自身で、あなた様がご自分の命を絶つことです。」

その言葉で空気が張りつめた。

「無礼者っ！！」

続いて、衛青の怒声が飛んだ。

「皇太子殿下に対して、どこまで侮辱すれば・・・！もはや命はないと思え！！」
「事実を述べたまででございます。きっと、あなた様方を助けた者達が、ここで最後の生き残りだったのでしょう。」
「え・・・？」

（？どういうこと？）

意味ありげに告げた言葉。相手は不思議そうな口調で話を続けた。

「おや・・・？お気づきになりませんでしたか？ああ、そうでしたな・・・！死体にはすべて、布や衣服やらをかぶせましたからね・・・。さすがの衛青将軍も、血の臭いまでは嗅ぎ当てられませんでしたか？」

その言葉で、星影の体から熱が抜けた。

「まだお気づきになりませんか？不審に思われませんか？これだけ騒いでいるのに、誰一人ここのものがやってこないことに？」

まさか・・・！？

「どういう・・・ことだ・・・・！？」

聞いたのは衛青だった。唇を噛みしめながら、震える声で問いただした。

「貴様・・・！この周辺にいる者達をどうした・・・！？」

「殺しました。」

返事でもするように答える男。

「宦官・女官はもちろん、この場にたまたまいただけであろうものもすべて。なにか・・・不備でもございましたか？」

「なっ・・・！？」

何気ない会話でもするように話す敵。

「み、皆殺しにしたというのか・・・・！？」

「ご安心を。女官は綺麗な体のまま、殺しました。抱いてしまえば、喘ぎ声がうるさいですからな。」

クックッと笑う男に、星影と衛青の怒りがあおられた。

「きさまぁ～！！」

（この外道がっ！！）

皇太子一人殺すためなら、関係ない人間を殺してもなんともないと

いうの！？

「なんと・・・むごいことを・・・！」

残酷な真実を聞かされた少年は、絞り出すような声で言った。
それは怒るような、嘆くような言葉。怒りに打ちひしがれる二人の傍らで、皇太子は真っ青な顔でつぶやいたのだ。そう言って噛みしめた皇太子の唇からは、赤い液体が流れ出ていた。

「何の罪もない者達まで殺めるなど・・・貴様それでも人間か・・・！？」

これに対して、相手は馬鹿にするような口調で返してきた。

「なにをおっしゃいます？あなたがいけないのですよ、皇太子殿下？大将軍に会いに行ったりなどするから！あなたを殺そうと思えば、先に大将軍を仕留めなければいけません！なんせ、大将軍ですからね～・・・殺すまでの時間や騒ぎのことも思えば、皆殺しにするのも仕方ないでしょう・・・！？」

「貴様ぁ――――――」

気炎を上げる衛青とは対照的に、がっくりと肩を落とす劉拠。
程なくして、自分を抱き寄せる彼の体から力が抜けていった。
同時に、唇から流れる血の代わりに、両頬から小さな玉の雫がいくつも零れ落ちていた。

「そんな・・・私の、せいで・・・！？」

声と触れ合う体の感触で、少年が落胆しているのがわかった。
その様子は、当然のことながら衛青や賊達にも伝わっていた。

「違います、拠様！あなたのせいではありません！！悪いのは――」

「――――――――皇太子殿下であるあなた様ですよ、劉拠様。」

衛青の言葉を遮りながら頭目は叫ぶ。

「本当に気づかなかったのですか？この大人数で、これだけ騒いでいるのに誰も出てこないことに！？血の臭いにも、殺される故郷によって出たし尿の臭いにも！？それすらわかりませんでしたか、拠様は！？」

上から目線で語る言葉は、余裕がにじみ出ていた。
なんともいえない歯がゆい気持ちに、抱きしめられた状態で星影は拳を握りしめた。
少し休んだおかげか、時間が経ったせいか、琥珀の薬が効いたのか。
あるいは敵に対する怒りによってか。
『病は気から』という言葉通り、星影の闘争心が彼女をむしばむ毒に抗体として作用したのだ。
感情が奮い立つことによって、毒による体の疲労が収まりつつあった。

（なんとか時間を稼がないと・・・！）

それもまだうまく動けないが、￥この相手を許すことはできない。
自分が動けるようになるまで、まだ時間がいる。

あと少しだけ、あと少しだけ休ませてもらえれば――――

（私はこのクソッタレ共の顔面を張り倒すことができる・・・！）

そう思い、回復出来次第すぐに動けるようにと・・・呼吸だけでも整え続けたのだが・・・

「さぁさぁ！もう悲しむのはそこまでにしましょう。あなたがこれ以上悲しむ必要はありません。」

おしゃべりは終わりだとばかりに言い放つ賊の頭目。

「あなたが悲しんだからと言って、失われた命は戻りません。生き返りません！」

「おのれ！ぬけぬけと！」

「本当でございましょう？衛青大将軍。なんせ皇太子殿下は――――これから死ぬのですからねっ！」

「――――――――――黙れっ！！」

それは完全に衛青を怒らせるのに十分だった。雄叫びを上げながら、敵に向かって一歩踏み出す。無情にも、それが殺し合いの合図となってしまったのだ。

「敵は大将軍といえども一人！なぶり殺せ！！」

「なめるなっ！！」

「叔父上！！」

いっせいに、衛青向けてとびかかる賊。
一方で、皇太子へも敵の凶刃が向けられる。

「死ね皇太子！」
「あっ！？」
「――――させるか！！」

甥を狙う獲物を払いのける叔父。

「背中がまるごしだぜ！」
「なんの！」

皇太子に気を取られれば自身に攻撃を受け、攻撃に気を取られれば皇太子に攻撃が及ぶ。

「おのれ・・・卑怯者共！！」

いたちごっこの繰り返しで、思うように状況を打破できない衛青。
そのいら立ちが、悪態として口をつく。

「無様ですな・・・大将軍。」
「貴さ――――・・・！？」

衛青の口から出た相手への言葉が途中で途切れる。
その異変で、星影もあることに気づく。

（――――――気配が消えた!?）

先ほどの声の主である賊の頭目の気配が消えたのだ。
それも気配だけではなく、

「どこだ!?どこへいった!!」

姿も一緒に消えたようだった。
薄眼をさらに開けてみれば、別の異変を目にすることとなった。
賊の頭目が消えたのに合わせて、他の部下達も怪しげな動きを始めたのだ。
波が打ち寄せるように、前後左右へとすり足で動き始める。

「我ら闇に生きるもの・・・影から影へと移動し、獲物をしとめるのが本分。先ほどの失態はそれを怠ったがため・・・！」
「なに!?」
「それゆえ・・・我らの本分で仕留めさせていただく!」

その言葉で、波が引くように一斉に星影達から離れる賊達。同じよ

うに、月も雲中へと隠れ、視界は完全に暗くなった。

（やつらめ！月が隠れるのに合わせて、勝負に出たか・・・！）

「どこまで卑怯なのだ！姿を現せ！」

「殺し合いに卑怯云々は無意味でしょう？少しは喜ばれてはいかがですか？あなたはこれから、皇太子様共々、冥府にいらっしゃる甥御様に会えるのですから？」

「黙れ！私は、私は死んでもこの子を守る！けっして、去病のもとなどへはー・・・！」

姿が見えない敵を探しながら叫ぶ。

そんな衛青をあざ笑うような笑い声ばかりがこだまする。

「姿を現せ卑怯者！正々堂々と戦え！！」

「もしそうならば、最初から暗殺者として来ませんぞ？」

（そりゃそうだろう・・・。）

相手の言葉に、その通りだと不本意ながらも同意する星影。

同意はするが、このやり方は許せない。

（どんな理由があるにせよ、陰でこそこそと命を狙うなんて許せない！）

これ以上、こんな奴らに大きな顔はさせられない。

（毒でうまく体が動かないけど・・・やるしかない。）

星影の中ではすでに、衛青将軍と共に戦う決意はできていた。
敵も味方も自分が起きていることには気づいていない。
ならば、不意を衝いて形勢逆転に持ち込めるかもしれない。

（姿を消した賊の頭目を打てば、それも簡単だが・・・）

困ったことにその人物が隠れてしまってわからない。
よほど手だれた暗殺者なのだろう。
すっかり気配を消していた。
なので、ここで自分が下手な気配の探り方をすれば、皇太子より先に冥府に送られる可能性があった。

「叔父上危ないっ！！」

その言葉で星影の思考は中断された。
何かに気づいたかのように皇太子が叫んだ。
鈍い音に続き、衛青の唸る声がした。
大将軍めがけて、何かが飛んできたのだ。

（今のは――――――鞭か！？）

一瞬だったのでよくわからなかったが、それが衛青に致命傷を与えたのは間違いなかった。

「くっ・・・！？」

「お、叔父上！！！」

「今だ！かかれ！！」

「ハッ！！」

姿を消した頭目の合図で、波のようにゆらめいていた敵達が一斉に衛青に襲いかかる。

「よくもっ！」

少し離れた場所から衛青の呻き声がした。

やっぱり！今の攻撃は――――！

（衛青将軍と皇太子を引き離すためだったのね！？）

「拠様！拠様ぁ！！」

だんだんと遠ざかっていく声に合わせて、自分の体を抱きしめる皇

太子の力が強くなる。

「拠様！」

「さぁ、ここで余興を一つつけてあげましょう。」

衛青の叫び声と頭目の声とが重なる。

その時、鼻にきな臭いにおいが流れ込んできた。

「け、煙！？」

少年の言葉で、これが煙幕だと理解する。

（煙幕を張ることで、私達の視界を完全に経つのが目的・・・！今は月が雲に隠れていて真っ暗だが、隠れている時間は限られている。月が晴れても問題ないように、念には念を入れてということか！？）

衛青将軍の側から、皇太子を引き離すのが目的だったのね！？

なんて、念入りなことだ！！

「拠様、どこですか！？拠様！」

「叔父上！？叔父上！！」

周囲はどんどん煙で視界が悪くなっていく。

賊のもくろみ通り、衛青と宦官付きの皇太子は、完全にお互いの姿を確認できなくなった。

聞こえてくるのは、衛青が皇太子を叫ぶ声と、金属のぶつかる音のみ。

「叔父上！大丈夫ですか！？叔父上！？」

「こ、これしきのこと・・・・！それよりお逃げください！」

返事を聞く限り、あまり大丈夫そうではない。

どんなに気丈な返事をしていても、それがやせ我慢だと星影にも皇太子にもわかった。

「叔父上・・・・・！」

少年の声色から、絶望が読み取れた。

「逃げてください！拠様！」

「逃げてどうされますか！？また、犠牲者を増やされますか！？」

「私は・・・！」

「一番早いのは、あなたがお手持ちの刀でご自分を一突きすることですよ。」

「黙れ！聞いてはいけません、皇太子殿下！あなたは皇太子殿下なのですぞ！？」

「私は――――――！」

「代わりの皇太子候補の子供はたくさんいるというのに、まだ生きることに執着なさいますかっ！？」

「――――――黙れっ！！」

皇太子の声から、絶望の色が消えた。

「私は・・・七代皇帝劉徹の嫡男、劉拠。」

そうつぶやくと、しっかりとした動きで立ち上がる。

「不当な悪には、決して膝を曲げぬ！賊よ・・・相手をしてやる。かかってまいれ！！」

宦官を自分の足元に丁寧に寝かせた。
そして剣を引き抜きいて、戦う姿勢をとったのである。
そんな甥の言葉を聞いて、衛青が絶叫する。

「いけません！！いけません皇太子殿下！！逃げてください！！」

言うなり、駆け寄るような靴音がしたが、

「貴様の相手はこっちだ！」
「くっ！？」

足止めを食らっていた。

「れ、拠様！逃げてください！どうか、戦わないで！！」

「無理だよ・・・叔父上。この煙では・・・。」

苦笑しながらつぶやきつつ、周囲へと目を配る。
その時だった。

「うわっ！？」

煙の風をかき消すように、なにかが皇太子に向かってきた。

「そこか！？」

叫んで剣を振る。

手ごたえを得た音が響く。

「やったか！？」

「拠様ぁぁ！？」

安堵する皇太子の声と、驚く大将軍の声。

（いや――――――――――――・・・・違う。）

「あ！？」

ほどなくして、皇太子の声はこわばったものへと変わる。

「これは――――――・・・・うさぎ！？」

肉を切ったと感じた皇太子。
確かにそれは肉ではあったが、人のものではなかった。

（やはり、おとりだったか！）

襲ってきたと見せかけただけだった。

「――――謀ったか！？」

それに気づいて叫べば、高らかとした笑い声が響いた。

「勇気と腕前はお見事なこと。料理人の素質があるのでは？」

その言葉で、ドッと周囲から拍手と爆笑が起こる。悔しそうに顔を真っ赤に染め、肉に突き刺した剣を抜こうとしたのだが、

「なっ！？け、剣が離れぬ！？」

剣が外れなかった。見れば、肉の中に無数の鋼が仕込まれており、

それが歯に引っかかって抜けなくなっていた。

「こ、この！」

必死で自分の目の前で、剣を引き抜こうと四苦八苦する少年。
その姿に星影はひやひやした。

（ちょっと！敵に囲まれた状態でなんて無防備な体勢してるの！？
危ないでしょう！？なにやってるのよ！？）

このままじゃいけない！
これはもう、私がなんとかしないと！

（でも、どうすればいいの？）

姿を見せない相手をしとめるの至難の業。
健全な状態なら問題ないけど、毒でやられた体はうまく動かない。
がむしゃらに動いても体力を奪われるだけ。

（ちくしょう・・・！どうすれば！？）

こんなときどうすればいい！？
厳師匠なら、どうされた！？

――――人には3つの目がある。顔についている目と、心についている目の3つだ。――――

記憶の奥深くから飛び出した言葉。

そうだ！あれは――――――――

（いつの話だったか・・・！）

それで、1つの過去が星影の中で蘇った。

第九十五話　災い転じて福となる・・・か？（2）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・（土下座）
！！

危機一髪を救われた星影達でしたが、そう簡単にはいかないというのが、今回のお話です。
危ない状況で星影が思い出したのはなんだったのか？
答えは、次のお話となりますので、良かったら読んでやってください。

ストーリーとは関係ありませんが、いつもサブタイトルを考えるのに悩みます・・・。
今回も、サブタイトルに悩んでアップが遅くなりました（赤面）
優柔不断ですみません。

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください
（平伏）
私自身も、なくせるように精進いたします・・・！！

第九十六話　災い転じて福となる・・・か？（３）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。
東京電力上層部と、九州電力と、某県の政治関係者には、今までの件を真摯に受け止め、誠意ある対応を行えるように望みます。

竜門やよいは、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第九十六話　災い転じて福となる・・・か？（3）

あれは厳師匠から、武術を学び始めた頃だった。
風変わりな武人は、星影1人を呼びだすとある質問を投げかけてきたのだ。
それが――――

「星影。お前には武術において大切なことはなんだと思う？」

ということだった。
自身の部屋に星影を招きいれ、椅子に座らせ、湯を出してからの問いかけだった。

「大切なことですか？」
「そうだ。それが何かわかるか？」

（武芸で大切なことって・・・ずいぶん簡単な質問ね。）

話を聞いてすぐにそう思った。
なぜなら、彼女は知っていたからだ。
優れた武術を己の欲望のためだけに使い、目的のためなら周りの人

間を迷うことなく傷つける。
言うことを聞かなければ、力でねじ伏せる。
強い力を持ちながらも、集団で弱いものを虐げる。
鍛えた力を自分のためだけに使っている。
そんな輩が原因で武の道を進むことになった星影にとって、それはあまりにも簡単な問いかけだった。

「はい、わかります。己を誇示するために使わないことです。人を傷つけたり、苦しめたり、自分より弱いものを虐げることに使うのではなく、自分より弱いものを、守らなければいけない者を守るために使うことが大切だと思っています。」
「ふむ・・・。」

（そう答えるのが妥当だろう。）

そんな星影の考え通り、厳師匠は感心した様子で彼女の答えに頷いていた。

「なるほどな・・・・」
「ですから、悪用するのではなく、正しく使うことが一番大切なことだと思います。武術を正しく使うためにも、正しく学ぶこと。十分な体力と、折れない心を養うこと。それからー」
「あ～あ～はいはい！大体あってる。」
「は？・・・大体？」
「半分正解。」
「は、半分正解！？」
「うむ。半分正解ということだ。」
「ええ！？」

師匠の言葉に思わず聞き返せば、武人はあっけらかんと答えた。

（それって、完全に正解じゃないってこと！？）

そう思って相手を凝視すれば、ニッと口元をゆるめながら師匠は告げる。

「わしの質問も悪かったが・・・まぁ、そんなところだな。」

「質問が悪かったって・・・私の答えは、厳師匠の考えていらした答えと違うというのですか？」

「うん、根本的にな。正しいが、違う。」

「何か違うというのですか！？」

「いや、正解は正解だ。武術の使い方に関しては、ほぼ正解だ。正解だが・・・目のことは知らんようだな。」

「目？」

「そうだ。精神的な面に関することだ。」

「精神的な面・・・？」

それって、強い心で戦うってこと？

打たれ強いとかそう言うことなの？

「あの、つまり・・・心も強くなくてはいけないということですか？どんなことに折れないという・・・・？」

「あ～それもそうだが、ちょっと違う。」

「では、どんな状況でも落ち着いて冷静に判断できる平常心・・・というものですか？」

「それだと、折れない心と同じ分類になる。」

「じゃあ、なんだというのです？」

「それをこれから話そうと思う。」

そう言うと、星影を見ながら語りかける。

「武術において、目は重要な役割を果たす体の一部。星影、お前は自分にいくつ目があるかわかるか？」
「はぁ？いくつって・・・２つですが？」
「ぶぅぅぅぅ～！ハズレ。」
「ええ！？あ、じゃあ・・・２つだったり、１つだったりですか？」
「なんで減るんだ？」
「だって、私は両目とも健在ですが、中には片目がなかったり、あるいは両目が見えない者が一・・・あ！そうなると、０というのもありですね！」
「大間違いじゃ、バカタレ！」

大きく肩を下げながら、大きな口で息を吐きながら言う武人。

「お、大間違い！？」

対する星影は、自分の答えの何がいけなかったのか全く分からない。

（何が違うっていうのよ・・・！？）

自分の答えを正解と言いつつも、それは完全な正解ではないと言い。違う違うと否定した挙句に、大間違いだと言われて呆れられた。あからさまにバカにされたこともあり、少しいやな気分になってしまった。

「まぁ、そう不機嫌になるな。」

態度には出していないにもかかわらず、星影を見つめながら厳師匠は優しく告げる。

「不機嫌なんて・・・そんなことありません。」
「嘘を付け。今もまだ、むっとしてるだろう？わしにはわかるぞ～なんせ、心の目で見てるからな。」
「心の目？」
「おう。」

思わず、相手を直視する星影。厳師匠と目があう。互いの目を見つめた状態で武人は言った。

「人には３つの目がある。顔についている目と、心についている目の３つだ。」

「顔についてる目と心についてる目？」

（どういうこと？）

聞きなれない言葉に、星影は不思議そうに厳師匠を見る。
相手はそれに答えるように柔らかい口調で言った。

「顔につい散る目は姿あるものを見定める目、心についている目は見えない者を見定める目だ。人にはな、星影・・・誰しも３つの目があるのだ。」
「３つの目が・・・？」
「お前のように顔に２つあるものには１つの心の目が、片目だけの

ものには2つの心の目が、盲目の者は3つの心の目があるというわけだ。」
「はぁ・・・。」
「ハハハ！口で言ってもわからないのは当然か。」
いまいち、ピンとこなくて首を傾げれば、悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。
「普段の生活で、心の目を使うことはないからな。だがな星影、この普段あまり使わない心の目というのが、武術において重要なものなのだぞ。」
「『心の目』、がですか？」
「そうだ。例えば、盲目の者は顔の目がない代わりに耳や鼻がよく利くだろう？あれはな、ない部分を補うために発達しているのだ。盲目の者が杖を頼りに、あるいは杖なしに歩けるのも、自分の歩く歩幅と、目的地まで何歩けばつくのかをすべて暗記しているからだ。」
「そうだったんですか！？すごいですね・・・！」
「だろう！？それだけじゃないぞ～盲目の者は、心の目を使うことに関しても長けている。」
「『心の目』、をですか？」
「ああ。武術において心の目とは、周囲への心を解き放つことで見ることのできる目なのだ。心を閉ざしたり、壁を作ったりしては、使うことはおろか、見ることもできない。」
「では・・・どうすれば使えるようになるのですか？心を解き放つとは？」
「その場の空気と一体化すること。なぁ～に、難しく考えなくていい！体の力を抜いて楽にし、楽しむことだ。」
「楽しむ？」
「そうだ！変に緊張したり、無理やり意識を集中させようとするな。

その場をすべているものが誰か、好き嫌いなしに考えて、認めて、楽しむのだ。反感や抵抗という陰の感情を出してはならん。楽しい陽の感情を出しながら、その楽しい明るい気持ちから平常心へと心を変化させる。そこで初めて、心の目を使うことができる。」

「心を変化させれば・・・見えるのですか?」

「そうだ。喜怒哀楽を使い分けられるお前なら、習得するのは造作もなかろう!」

カラカラと笑いながら武人は言う。

「見えるもの、聞こえるもの、あるいはにおいや感覚に惑わされるな。気を楽にして心を解き放ち、その場の空気に身を委ねた時、隠れた真実が見えるのだ。このことを、武術においては、『心の目』すなわち『心眼』という。」

「『心眼』・・・。」

「星影、よくよく忘れるな。心眼は、心を解放した時にこそ使えるもの。お前はそれを使えるだけの心の豊かさと自由さを持っている。だから自信を持て、星影。」

・　・　・　・

我が愛弟子よ――――――――――

・

（そうか、心眼・・・！）

短い時間で、それだけの記憶が駆け巡る。

（それを使えば、皇太子殿下を救うことができる！）

『心眼』の教えはもちろん、楽しかった思い出も一緒によみがえった。

走馬灯にしては、やけに生への執着が込められたもの。

思い出されるのは楽しいものばかりで、沈んだ気持ちが浮き上がった。

（私ならできる。）

そう思った瞬間、楽しくなった。

元気が出てきた。

何を弱気になっていたの、星影？

体力がないなら、その分集中力で補えばいい。

毒でやられたからって何よ？

あなたまだ、こんなところで死ねないでしょう？

妹を助けてもいないのに、救ってもいないのに、どうして絶望してるの？

困っているの？

言い訳ならいくらでもできるじゃない？

出来ると信じてやればいいじゃない。
あなたならこんなこと、朝飯前でしょう？

この窮地で打開策を思い出すことができたということは――――――！！

（それってつまり、まだ死ぬなっていう天帝からのお告げでしょう？）

そう解釈したのである。
先ほどまで滅入っていた気持ちと体が嘘のように楽になっていく。
出来ると、勝てるとわかったから、力が出てきたのかもしれない。
琥珀の飲ませてくれた薬の効果も大きいとは思ったが、自分を信じてこそ戦える。
私はいつだってそうしてきたから。

――――――――――自信を持て、星影よ。――――――――――

ありがとうございます、厳師匠。

あなたのおかげで、私に迷いはない。

（私はもう、戦える。）

星影は静かに目を閉じた。
目を閉じ、体の力を抜いた。
相変わらず、心の臓の音がうるさかったが、悪い気分はなかった。
なぜならそれは、自分の好奇心と昂揚感によるものであったから。
これまでのように、悪いことに対する心臓の鼓動ではなかったから。
だから、気分がよかった。
耳を研ぎ澄ましながら、その場の空気へと心を解き放つ。
変に意識を自分の身に集中させずに、その場の空気へと一体化した。

（今、この場を支配しているのは漆黒の刀の主。）

どこにいるかなんて探らない。
無理やり見つけようとする必要はない。
だって彼が、この舞台の主役。
主役だと主張しなくても、目立つのが主役というもの。

（さあ・・・今どこで、私達からの歓声を待ち望んでいるの？）

舞台の主役は、ここ一番という見せ場の前にはその存在を誇示させるもの。
待っていれば、必ず脇役の前に現れてくれる。

「では、お名残惜しいですが・・・」

賊の声が響く。
その声には余裕があり、自身の勝利を確信していた。
星影はそんな賊の心に自分の心を重ねる。

（私が奴なら、どこから攻撃する？）

身動きの取れない、獲物を扱えない、かられるのを待つだけの得物をどうやって仕留める。

「お別れと行きましょうか、大将軍、皇太子。」

ひどく静かな声で、主役は宣言した。

――――――くる。

（まずは、布石を仕掛けるはず。）

「うわっ！？」

そんな星影の予想通り、何かが皇太子を倒した。

「なっ！？」

彼を弾き飛ばしたのは、黒色の鞭のようなもの。先ほど、衛青を攻撃したのと同じだった

（もう一撃、攻撃してくる。）

「あぅ！？」

程なくして、体に軽い衝撃を受けた。

皇太子を弾き飛ばした何かが、再び彼を攻撃した。

起き上ろうとしていたところに少年の鳩尾にそれは当たる。そのまま、星影ごと一緒に床に突っ伏してしまった。

「痛っ！？」

「拠様っ！！」

甥の異変に気づき、声を上げる叔父。それを鼻で笑いながら敵は最後の仕上げへと入る。

「さぁ～て、皇太子殿下・・・！」

追いつめて得物にとどめを刺す猛獣のように楽しそうな口調で暗殺者は告げる。

「次生まれ変わる際は――――――――」

その言葉に合わせて、皇太子の周りの煙だけ晴れる。
その合間から、追いつめられた甥の姿が武人の目に映った。
しかしそれは一瞬の出来事。
武器も何も持たない少年に、

「命を狙われぬ平民にでも生まれなされ！！」

漆黒の刀を男が振り下ろした。

「やめてくれぇぇぇぇ！！」

なにもできず、見せつけるように晴れた煙の中に浮かんだ甥の最後。
皇太子が叫ぶ代わりに、大将軍が叫ぶ。
痛みによるものか、恐怖によるものか。
逃げることも、動くこともできず、完全に固まる皇太子。
未来の皇帝を約束された少年に刀の刃が当たる――

「拠様ぁぁぁ――――――――!!」

敵がどう攻撃してくることはわかっていた。
わかっていたけど、皇太子を庇わなかった。
そこでかばってしまっては、肝心な攻撃を防げない。
戦で言う、遊撃や伏兵ばかりを気にするあまり、本陣への攻撃を見逃してしまってはいけない。
だから、あえて手も出さずに待ったのだ。

（本陣を、皇太子へとどめの一撃を刺すこの瞬間を――――――――――!!）

「――――――そっこだぁぁぁぁぁぁ！！」

皇太子に、敵の刃物が当たることはなかった。

「なっ！？」

「――――――えっ！？」

「ぐはっ！？」

衛青の声から悲痛の念が消え、拠皇太子の口から驚きの声が漏れ、賊の頭目の口から苦痛の叫びが上がった時。

「・・・次は平民に生まれろだぁ？」

何かが、地面に倒れる音の後だった。
周囲を威圧するように問いかける声が発せられたのは。

「だったらテメーは、次こそは真っ当な職種の人間に生まれ変わることだな。暗殺者さんよ・・・！？」

しかもその口調は軽やかで、どこか楽しそうに紡がれた言葉。

「なっ！？なん・・・・！？」

予想を反する事態に、敵達は思わず手を止めてそちらを見る。
煙の隙間から、二つの影が浮き上がる。
一つは、自分達が命を狙い、自分達の頭目の手によって殺されるはずだった皇太子の姿。
もう一つは、宮中ではよく見かける衣をまとった長身の人物が立っていた。

「何者だ貴様！？」

自分にかけられた声に、その人物は皇太子をかばいながらゆっくりと振り返った。

「そういう貴様らこそ、何者だ？」

煙が晴れるのと厚い雲から月が顔をのぞかせるのは同じで、

「畏れ多くも漢帝国皇太子殿下と大将軍を暗殺しようとは不届き千万もよいところ！！」

月光を浴び、照らされるようにして現れたのは美しい顔立ちの宦官。

「まぁ・・・そ～んな馬鹿な相手に、名を名乗れということという私も馬鹿だけどね？」

そう言って茶化すように笑う姿は、香蛾と称えるのに十分な姿。

「お前・・・は・・・？」

ハッとする美貌に思わず見とれる賊達。
一方、そんな連中と戦っていた衛青は、美しい宦官の名を口にしていた。

「安林山殿っ！？」

敬愛すべき大将軍の言葉に、腰を落としてしおらしく首を垂れる麗人。そして、にっこりと微笑むと、柔らかの口調で答えた。

「寝過ぎですみません、衛青将軍。昼間しっかり寝て目がさえた分、きっちりと働かせていただきますので。」
「働く？」
「はい。」

皇太子を抱き寄せたまま、胸の前で両手を組む星影。
その姿は力強くしなやかで、宦官独特の弱さを漂わせていた。
しかし、その目には武官と同じ強さがうかがえる。
強い光を込めた瞳で大将軍を見ると、はっきりとした声で告げる。

「どうぞこの安林山を、賊討伐の手駒として、存分にお使いくださいませ。」

この大胆不敵な申し出により、周囲からは静かな動揺が走るのだった。

第九十六話　災い転じて福となる・・・か？（３）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます！！

主人公・星影がなんとか復活しました。
厳師匠の言葉を胸に、やられたらやり返す精神で反撃に出るようです。
時間も続きますので、興味のある方読んでやってください（＾＾；）

※誤字・脱字がありましたら、こっそりでいいので教えてください（平伏）
チェックを厳しくしているので、ないとは思います・・・あったらすみません！！

第九十七話　災い転じて福となる・・・か？（４）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。

竜門弥生は、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第九十七話　災い転じて福となる・・・か？（４）

自分が加勢することで、少しは続が驚くと思っていた。
最初は驚くが、すぐに「たかが宦官風情で！」という反応をするだろうと。
今までのこともあるので、たいして気にも留める必要もない。
すぐに、殺し屋の本性丸出しで冷静に対応してくるはずだ。
そう考えていたのだが、今回は少しばかり、その予想が外れていた。

「ど・・・どうなっているのだ！？」
「なぜ、安林山が動けるのだ！？」
「奴は確か毒で――――――！？」

敵の動揺がいつまでも収まらなかった。
同時に、聞き捨てならない会話が聞こえた。

（なに？）

“奴は確か毒で――――――！？”

なぜ、私が毒で動けないことを知っている？

（まさか、毒を盛ったのはこいつらなのか？）

間抜けな目で自分を見ているこいつらが？
自分に向けられる視線を受けながら星影は思う。
だとしたら、ちょっと情けない。
こんな連中にやられた自分はあまりにも馬鹿じゃないの？
そう思って反省する星影だったか、彼女は知らない。
星影が間抜けだと称した賊達の表情が、彼女自身の美しさによってそうなっていたということを本人は気づいていなかった。
もっとも、それを星影が知ったところで喜ぶことはないだろうが。

（犯人かどうかはわからないけど、連中が私の事情を知っているのは確かね。）

伏せている情報を知っているあたり、そう考えて間違いないだろう。

（でも今はそれどころじゃない。）

仕返しをするためには、確かめるべき大事なこと。
だけど、優先順位が違った。
自分に毒を盛ったかどうかは、後で締め上げて聞き出せばいい。
そんなことよりも先に、確かめなければいけない大切なことがある。

「皇太子様、お怪我はございませんか？」

それは、劉拠皇太子殿下の安否。
宦官の名を反復する敵を無視して、皇太子へと穏やかに笑いかける。

「あ・・・？ああ！だ、大丈夫、だよ・・・」

名を呼ばれたことで、ようやく我に返る少年。
星影の質問に劉拠は、本来の彼らしい素の表情で答えた。
そんな彼の声で、金縛り状態だった叔父も覚醒した。

「こ、皇太子殿下！劉拠様ぁ！！」
「叔父上。」
「拠様、拠様！ああ、ああよかった！ご無事でよかった！！」
「叔父上！！」

駆け寄ってくる叔父に甥っ子は飛びついた。

「なんとバカなことを！もう少しで死ぬところだったのですよ！？」
「すまない、許せ・・・。私はただ、叔父上の助けになりたくて・・・」
「私は武人です！刃物を使うことは、私に任せればいいのです！ああ、よかった！本当にお前が無事で・・・！」
「叔父上・・・！」

もう離さないと言わんばかり少年を抱きしめる男。その微笑ましい光景を見ながら星影は口を開いた。

「ご無事で何よりでございました、劉拠皇太子殿下。衛青大将軍。」

（本当に、あなた様方が無事でよかった・・・！）

心底安堵したように告げれば、甥を抱きしめたまま、彼は星影の方へ視線を向けながら言った。

「安林山殿、かたじけない！皇太子を、拠様を守ってくれて！君には心から礼を言う・・・！」

「私からもだ、安林山。おかげで助かったよ。」

「いえいえ。臣たるもの、主を守るのは当然の務めですから。」

「謙虚であるな。」

「そんな！そんなことは、衛青将軍・・・」

尊敬する代将軍にそう言われ、表情が緩む星影。

「とにかく、全員無事で何よりだ。」

「はい、皇太子殿下！」

「はいっ！」

そんな会話をしながらほのぼのと、互いの無事をたたえあう三人。

そこへ罵声が加わった。

「やりやがったな！小僧っ！！」

そう叫んだのは、惚ける暗殺者達を従える頭目。

「クソガキ！！よくもぉ～！」

皇族二人の後ろから、少し体をふらつかせながら姿を現した。

皇太子を仕損じた男は、星影をにらみながら怒鳴りつけた。

「クソガキ～よくも邪魔をしてくれたな!?自分の立場が分かってるのか!?そんなにぶち殺されてぇのか!?」

それまでの綺麗な言葉遣いはなくなり、完全に怒っているということを思い知らせるもの。

これに星影は、とぼけた口調で答えた。

「あんれぇ～?もう平気なんですかぁー?」

「当たり前だ!このガキ!!鞘ごと殴りやがって・・・・!」

「仕方がないでしょう?剣はあなたが飛ばしちゃったんですから?」

「黙れ!貴様ただの宦官ではないな!?あのような高度な技を・・・!!」

「はてはて・・・。なぁ～んの、ことやら・・・・。」

ニッと笑いながら星影は答えた。

あの時。

皇太子に振り下ろされた刃物は、星影の手によって防がれていた。

自分めがけて向かってくる刀に、立ち尽くして動けない少年。

彼の足元で体を横たえていた星影は、猫のように俊敏に起き上がると皇太子と賊の間に割って入った。

その状態で、自分より背の低い皇太子を胸に抱きしめながらかばった。

賊に背を向けるということは、『切り殺してくれ』と言うようなもの。

だから敵は、星影もろとも串刺しにしようと、刀を持ち替えた。

そのわずかな動作に合わせて彼女は動いた。

向かい合う形で皇太子と抱き合っていたのだが、少年を抱きしめた

状態で体を反転させたのである。
正確には半回転。
それにより、敵の目前に皇太子の体が付きだされた。
これには賊も微(かす)かに驚いたが、すぐに口元を緩(ゆる)めた。

（――――――――――己の命惜しさに、庇(かば)うのをやめて皇太子を己の盾としたか！）

そう判断して、再度刀を持ち替えて振り上げたのだが、

「――――――――――ば～か。」

聞こえるか聞こえないかの小さな呟き。

その声と意味に賊の頭目が気付いた時、彼は宦官の術中にはまっていた。
皇太子と抱き合ったまま半回転した際に宦官は、少年の腰から剣の収められていた空の鞘を抜き取ると、それで漆黒の刀を防いだのだ。

「なっ！？」

それらの一連の動きは一瞬のこと。自らの攻撃をあっさりと防がれる。あまりの手際の良さに、暗殺者の体はわずかに止まった。それに合わせて星影は、皇太子の背に回していた左手を敵の腰へと伸ばした。
至近距離だったので手は届いた。
伸ばした手で、賊が腰に携えていた小刀をつかんで勢いよく引き抜いた。

それに驚いて視線を下げた頭目の顔面めがけて、刃が収まったままの小刀でぶん殴ったのである。
引き抜いた勢いそのままに、その動作をつなげる形で殴ったのかなりの攻撃力があった。

「馬――――――ぶうぅ！？」

馬鹿な、と言いたかったであろう言葉は、赤ちゃん言葉へと変換される。
利き手に空の鞘を持って賊の攻撃を防ぎ、左手で敵から奪った獲物で攻撃したのだ。
しかも、この攻防にはそれなりの理由があった。
利き手で防御することで確実に皇太子の安全を守れる。
左手で敵の獲物を奪ったのは、奪う小刀が右に束帯されていたから。
相手は暗殺のプロである。
腕を伸ばしてとる際に、右で取ってしまえば、無防備な皇太子の背が攻撃を受ける可能性があった。
これが左手であれば、腕を伸ばした際に、皇太子の背を守れるばかりか、攻撃を受けても自分の腕が盾代わりとなって皇太子を傷つけることがなかった。さらに言えば、安全な自分の腕に抱き寄せることもできて便利である。
ついでに言えば、右側から顔を殴るよりも、左側から下から上に向けて腕を上げて殴った方が勢いもあって攻撃力も高い。
というよりも、この動作が右に刺した刀を引き抜く動作と同じだったので、それの応用で攻撃しやすかったといった方が正しいだろう。
結果、星影のもくろみ通り『賊から皇太子を守る！』という形で成果を見せたのであった。

「小僧・・・このままで済むと思うなよ！！」

真っ赤な顔で怒る男。刀鞘でなぐったこともあり、鞘に描かれていた模様がくっきりとついていた。怒れば怒るほど、それがありありと浮き彫りになる。その様子を失笑しつつも、茶化しながら星影は言う。

「あまり怒ると、即席のイレズミが目立ちますよ？プクク！」

「笑うな黙れぇえ！！貴様何者だ！？ただの宦官ではないな！？」

「宦官でなければなんだというのです？うさぎですか？」

「ふざけるな！！あの動き！！・・・あれは、わしの動きが分かっていなければできないものだ！わしの気配を貴様・・・どうやって！？」

「あなたと一体化しただけです。」

切り捨てるのように、バシッと言い放つ星影。

「心を解き放てば、自然とこの舞台を仕切っている人物の動きがわかるというもの。そんなことさえも、あなたはわからないのですか？」

「なっ！？」

「例えどれだかあなたが強かろうと、あなたが従える者が優れていようと、数で圧倒していようと。己の持つ武のなんたるかを理解できず、それを生かせていない愚か者に、人の命を奪えるはずがない。」

「き、貴様～！？」

「武の真髄を理解していないばかりか、こともあろうに皇太子殿下暗殺の手段として武術を使うとは何たることだ？」

「なにを宦官風情が偉そうに！」

「宦官風情でもわかることを、貴様らは理解できていない。今なら

まだ見逃してやる。命のあるうちに立ち去れっ！このままここにとどまるというならば――――」

両手を胸の前で組むと、ボキボキと指を鳴らしながら言った。

「全員まとめてぶっ殺す・・・・！」

殺気を放ちながら宦官は忠告した。

「殺すだと！？」

「俺たち全員をか・・・？」

「それはいくらんでも・・・」

「そう、無慈悲だ。」

馬鹿にするような口調でささやく周囲の敵に、星影は無慈悲だと笑顔で告げる。

「寝起きの悪い私に、お仕置きされることになりますよ。次期皇帝、現皇太子・劉拠様を暗殺しようとした罪でね・・・・！？」

そう言った眼は一切笑っていなかった。

それどころか、氷のような冷たくて重い威圧を周囲へと発していた。

これで、ざわついていた敵達は黙り込む。

「そういうわけだから、頭目殿。いい子だから、みんなを連れておうちへお帰りなさい。」

優しい口調とは裏腹の殺気立つ目をした宦官。
それが、戯れでも冗談でもないことは全員がわかっていた。
宦官からの脅しを受け、賊の何人かの手が、己の得物へと触れていた。
柄を、柄を、弦を・・・手にして、いつでも生意気な宦官を殺せるようにと構えようとしたが・・・

「痛い目を見てもいいなら、おいたをしてみなさい。・・・・坊や、お嬢ちゃん？」

その言葉で、何名かの賊の体がビクリと震える。
皇太子暗殺のため、彼らは俊敏に動いた。
優れた腕が持つものだけで集団された暗殺団。
決して自分達が何者であるか悟られないように。
それは性別に関しても同様のことで――――

「貴様なぜ・・・！？」

何度目かになる何故を口にする頭目。
素早い殺しを第一にしていたので、今までそれに気づく者などいなかった。

言い方を変えれば、こちら側に女性も交じっているなど気づく標的はいなかった。

「なのに貴様は・・・！！」

己の気持ちを誤魔化すように、強い口調で言う頭目。
それに星影は冷めたく口調で答えた。

「私は、女子供を殺す趣味はありません。だから、やめましょうと言ってあげているのでしょう？」

下手（したて）な口調とは違う上から目線の言葉。

「それでもなお、皇太子殿下のお命を脅かすならば、皆殺しにする。これは脅しではない・・・！」

最終勧告と言える宦官の言葉に、獲物に手をかけていた賊達は、無意識のうちにそれから手をどけていた。
鋭い眼光を伴う星影の脅しを受け、敵は完全に黙り込んだかのように見えたが――――

「・・・・それがどうした？」

開き直った口調。

「・・・・言いたいことはそれだけか？」

そう言ったのは敵の首領。

「貴様ら宦官相手におびえてどうするっ！？」

一括するように叫ぶと、星影を睨みつける男。

「それがどうした、宦官？帰れと言われて帰る暗殺者がどこにいる？ましてや、貴様のような玉なしの声をこちらが聞いてやる温情はないぞ？」

「温情をかけてやってるのは私だ。許してやろうと言うのを辞退するとは・・・本物の馬鹿だね？」

「貴様一人増えたところで、我らに勝てると思っているのか？それほど自分に自信があるのか？宮廷奴隷が！」

「例え暗殺に成功したとしても、口封じに殺されるのが８割。それが暗殺稼業だろう？そんなに死にたきゃ、そこの屋根から集団で飛び降りたらどうだ？おっと！その際は体を袋に入れて飛び降りてくれよ。そうしてくれないと、あとで片付けるものが困るから。」

「その言葉――――――！！あとで死ぬほど後悔させてくれるわっ！！」

そう言うなり、同じように殺気を放ちながら叫んだ。

「おしゃべりはここまでだ小僧！殺しの邪魔だ！どけ！！」

手にした得物を持ち直しながら構える敵。

（なんて頑固な分からず屋なの！？）

それに応える体勢をとりながら、ダメもとでもう一度星影は言った。

「また痛い目にあいたいのか？今度は、鞘から抜いた状態で、顔を殴られたいわけ？」

「同じへまを二度もするか！今度はわしが、貴様をなぶる番だ・・・！」

「ずいぶん粘るんだね・・・？」

「ここまでした以上、手ぶらでは帰れん！是が非でも皇太子の首をもらうぞ！」

「・・・そう雇い主から言われているのか？一度の失敗は許したが、二度目はないと？」

「黙れ黙れ！貴様の正体はあとで吐かせればすむことだ！さっさとそこをどけ！！」

皇太子の前にいる自分を追い払うように手を動かす敵。

（そうだとわかれば、手加減の必要はないな。）

相手の状況を察したうえでそう決意する星影。

「大人しく皇太子の前からどけ、宦官！！」

「やだね。」
「なに!?」
「なんで私が、薄汚い刺客の類の命令を、聞いてやらないといけないわけ?」
「逆らうか小僧!?何様のつもりだ!」
「宦官様。」
「なっ!?」

鼻で笑いながら答えると、その場の全員に聞こえるように星影は言った。

「テメーらがその気ならこっちも遠慮はいらねぇ!お前ら全員捕まえて、黒幕吐かせてやるから覚悟しろっ!!」

そう叫ぶと、足元に落ちていた剣を蹴り上げる。

「なっ!?」
「あ!?」

驚く敵と皇太子目の前で剣が宙を舞う。宦官はそれを掴むと、賊めがけて垂直に刀を突いた。

「はっ!」
「ぐおっ!?」

星影の剣の切っ先は、狙った急所から外れた。
しかし、敵の肩口に傷をつけることはできたのだった。

「おのれ宦官～！？」
「宦官にも愛国心はあるんだよっ！！衛青将軍、微力ながら加勢いたします！」
「安林山殿なんと！？」

驚く大将軍を無視して、迷うことなく頭目へと剣を繰り出す宦官。

「このクソガキ！！」

追い払うように星影に刀を向けるが、それを彼女は難なくかわす。
逆に、それよりも早い速度で敵をほんろうした。

「なんと見事な太刀捌き・・・！」
「本当に宦官でしょうか・・・？」

呆然とするばかりの皇族二人だったが、ぼうっとしてるわけにもいかない。

「殺せっ！皇太子と大将軍を！」

その瞬間、夕立のごとく、周囲から一斉に殺気が放たれた。

「なっ！？」
「きゅ、弓兵！？」

今までどこにいたのかと聞きたくなるように、自分達の周囲を囲む弓を携えた黒衣の集団。

「なぜ宮中にこれほどの曲者が！？」

（まったくだよ！どれだけ後宮の治安は悪いわけ！？）

皇太子の言葉に、星影も心の中でぼやいた。
それに応えるように、楽しそうに敵の大将は笑う。

「ハッハッハッ！簡単でございますよ、皇太子殿下。世の中力があればできないことはありません。それが善であれ、悪であれ・・・それを使いこなせる者だけかが、人の上に建てるのですよ。」
「貴様のような輩が、皇太子殿下に帝王学を語る資格はない！！」
「ではあの世で、高祖（書大寒帝国皇帝・劉邦）にでもお聞きすればいい。三人仲よくご教授されなされ！！」

声に合わせて、弦（げん）の引かれる音がした。

「危ない！」
「拠様！」

星影と衛青の声が重なった。

二人同時に皇太子に駆け寄ると、両脇を抱えて走る。
後ろから放たれた矢から逃げ、前方へと走った。
前から来た矢を素早く剣で払い、それぞれの左右から来た矢からよけるように身をかがめる。そのまま、皇太子の盾になりながら、三人は前へとでんぐり返しをしたのである。

「あっぶなぁ～！」
「ご無事ですか、拠様！？」
「ふ、二人ともすごいな・・・！？」

呆然としながら感心する皇太子の両脇で、宦官と大将軍は渋い顔をする。

（まずいな・・・壁かどこかに逃げないと、四方からの矢は防げない！）

武器で払ったとはいえ、先ほど自分達のいた場所に何本か弓矢が刺さっていた。
完全に防ぐことはできないだろう。
そう考えたのは衛青将軍も同じで、急いでそういう場所へ移動しようとしたのだが、

「死ねっ！」
「くたばれ衛青！」
「覚悟しろ宦官！」

そちら側からは、刀や剣を持った別の敵が襲いかかってきた。

「おらぁ――――！」

「――――ぐっ！」

衛青は振り降ろされた刀を受け止め、つばぜり合いとなる。

「お、叔父上！」

「安林山殿！皇太子殿下を守ってくれ！」

「心得ました！」

それに応えながら、星影は皇太子に襲い掛かる敵を殴り飛ばした。

（参った！毒さえ盛られてなきゃ、陛下の時のようにいくのに・・・！）

まだ完全でない自身の体に舌打ちをする。

何人か目の敵を蹴り飛ばした時だった。

「安林山殿！」

危険を知らせる様な衛青の声。

程なくしてその理由を理解する星影。

自分と皇太子に刺さるような殺気が向けられていたのだ。

「そこまでだぞ、宦官・・・！」

接近戦に持ち込めない距離から、再び矢を構える敵達。

（マズイ！！）

あそこまで行けない！
向かう間に弓矢の餌食になる！

（逃げるのだって・・・）

目だけで周囲を見るが、突破口が見つからない。
逃げるのが不可能だと理解した瞬間、頭目の男の手が振り上げられた。

「ではごきげんよう、皇太子殿下。大将軍。・・・と、クソ宦官！！」

最初の方は聞こえるか聞こえないかの声だったが、最後ははっきりと周りに聞こえるような声。

「なんで私だけ悪口なんだよっ！？」

そう言い返した声は、唸る弓の音でかき消された。

（ちくしょうっ！！）

私が後宮に来たのは、奪われた妹を救うため。
相思相愛で、婚礼を待ち望んでいた妹を取り戻すため。
一番幸せになってほしい子の幸せを守るため。

（それなのに！）

「え！？」

未来の皇帝となるであろう少年を守るために抱きしめた。

「あ、安林山！？」

（私は絶対に死なない！！）

「そなた拠様のっ・・・・！？」

「私の盾に――――――！？」

「――――――皇太子殿下！！」

愕然とした顔で自分を見る少年に、不敵な笑みで星影は言った。

「助かった暁には、私のお願い聞いてくださいね――――――！！」

「え！？」

（妹、星蓮を林山に返すと――――――――――！！）

絶対に死なないけど、ただでは死ぬものかっ！！

絶対にあきらめない生への執着と、受け入れなければいけない現実の中で、星影は劉拠の盾となった。

矢が急所に当たらないように、皇太子に当たらないように、後ろの方でつばぜり合いをしている大将軍に当たらないように。

その上で、まだ戦えるような状態でこの攻撃を耐えるような防御態勢に入ったのだ。

（星蓮っ――――――――――――――――！！）

星影が覚悟を決めた時。

その場に大きな絶叫がこだました。

「ぐぉおおおお！！」

「・・・・へ？」

耳に届いたのは、人の悲鳴とは程遠い声。
声というよりも、

「がぁああ！！」

聞き覚えのある懐かしい唸り声と、猛々しい呼吸。
目の前の後継に星影は目を見張った。
視界に映る矢が、黒くて大きなものによって隠された。
こちらに飛んでくる矢を、大きな口と強靭な牙で、真横からかっさらう生き物。
宙を舞うその生き物は、己の牙に納まった矢を細い枝を折るように簡単にバキバキと真っ二つにした。
地上に舞い降りた時には、粉々になった矢の残骸を苦とから吐き出しながら一吠えしたのだ。

「な、なに！？」
「こちらの矢がすべて――――――！！」

「噛み砕かれた!?」
「お、叔父上あれは・・・・!?」
「な・・・なぜここにいる!?どういうことだ!?」

その咆哮に、誰もが恐怖を覚えるのだが彼女は違った。
星影は歓喜の声で叫んでた。

「紅嘉っ!!!」

そこにいたのは、金色の毛と稲妻のような黒曜の毛をもつ生き物。
衛青の妻である平陽公主の元・愛動物であり、ほんの半日前に皇帝の命で星影に下賜された小虎の紅嘉だった。

第九十七話　災い転じて福となる・・・か？（４）（後書き）

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございます・・・！！

まずは、小説の中で出てきた言葉に関する解説を（＾＾；）
星影が言った『痛い目を見てもいいなら、おいたをしてみなさい。』の『おいた』ですが、『おいた』の『いた』は『いたずら』の略語です。
子供のいたずらを大人がしかる時に使っていた言葉です。
わからない方もいると思い、解説を入れさせて頂きました。

小説の内容に関してですが、前回の危機を回避した星影に、再び敵の弓矢が向けられました。
それを助けてくれたのが、例の子虎の紅嘉です。
危なかったり助かったり、助かったのに危なくなったりという状況ですが、一応、主人公（の身体）が不利な状態ということでこのように書いています（笑）
タイトルとなっている『災い転じて福となる』は、『災い転じて福となす』ということわざをもじったものです。
これは一般的に『身に振りかかってきた災いを、うまく利用・活用して幸福に変える』という意味で使われます。
それを『なす・・・か？』ではなく、『なる・・・か？』にしたのは、『星影がこの状況を幸運に変えれるかな？』という意味を込めてつけてみました。
その続きは・・・次回に続きます。
よかったら読んでやってください（＊＾＾；）

※誤字・脱字がありましたら、お知らせください・・・！！
ヘタレですみません・・・（土下座）

第九十八話　災い転じて福となる・・・か？（５）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。
子供への放射能影響が、これ以上広がらないようにと・・・願うばかりです。

竜門弥生は、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／に断固反対いたします。※

第九十八話　災い転じて福となる・・・か？（5）

死を覚悟し、命と引き換えに危険なお願いをしようと思っていた星影。
そんな彼女達を救ったのは、美しい毛皮と堂々とした巨体を持つ四足（よつあし）の猛獣だった。

「紅嘉！お前紅嘉かっ！！？」

星影の言葉に反応するように、素早く振り返る紅嘉。
そして尻尾を振りながら、一目散（いちもくさん）に駆け寄ってきた。

「がぁ。」

甘えるようにじゃれつくと、かまってくれと言わんばかりに頭を顔に押し付けてきた。

「ぐるぅ～ぐるる～」
「おい、紅嘉。」
「ぐるっ、ぐるぅ～」
「アハハ！こらぁ、くすぐったいよ～紅嘉～」

あまりの無邪気な子虎に、星影の毒気は抜けてしまう。
それとは対照的に、一般的な感覚を持つ他の人間は凍り付いていた。

「お、お、おおおお叔父上!と、虎に猛獣に安林山が!」
「大丈夫だよ、拠・・・。あれは、安林山殿に懐いてる虎だから。」
「はっ!?もしや・・・・伯母上の持ち物だった生き物を、仲直り(!?)のしるしに安林山に下賜したというのはまさか!?」
「ああ・・・それがあの子虎の紅嘉だよ。」
「えっええ!?」

叔父の言葉に面食らう皇太子。それは賊の面々も同じだった。

「ど、どうなってるんだ!?」
「あの宦官、虎を子猫のように扱って・・・!」
「一体なんなんですか、お頭!あの安林山というガキは!?」
「なっ、なっ、な・・・・!?」

配下達の言葉に、青筋を浮かべながら唸る男。

「なっ、なぜだ!?これは一体どういうことだ!!安林山!?」

困惑気味に紡ぎだされた言葉。それに対して問われた本人は、のんきに笑いながら答えた。

「あ〜!やっと名前を呼んだな!?」

紅嘉を引き寄せながら笑えば、その姿が癪に障ったのだろう。少し高めの声で怒ったように再度問いかけてきた。

「うるさい!貴様なぜ――――・・・・!?その虎をどうした!?」
「そんなの私が聞きたいよ。紅嘉ぁ〜どうしてここにいるんだ?」

「ぐるぅ～」
「ん～？『ぐるぅ』じゃ、わからないだろう？お前一人で来たのか？」
笑顔で子虎を引き寄せながらそう言った時だった。
ふと、その体から覚えのある匂いがした。

（このかおり――――！？）

まさかと思った瞬間、

「安様っ！！」

この場に似つかわしくない高めの声が上がる。
自分の今の名前を呼びながら、何かが茂みから飛び出してきたのだ。
一瞬警戒した星影だったが、その声に聞き覚えがあった。

「玲春殿！？」

姿を確認して抱きしめたのと、相手が胸に飛び込んできたのは同時

だった。

「安様ぁ・・・ご無事でよかった・・・！！」

息の上がった声で再度名前を呼ばれる。
腕の中にいたのは、昼間林山が助けた女官・徐玲春。
そして、衛青の妻・平陽公主が一番可愛がっている少女でもあった。
想像していなかった相手の登場に、さすがの星影も呆気にとられた。

「玲春殿！？どうしてここに――――」
「・・・・た・！」
「え？」

星影の問いに、聞き取れるかとれないかの声で少女はなにかを呟く。

「安様が・・・生きていて、よかった・・・・！」

絞り出すような、切ないような音色。
思い詰めていたような表情に安堵色が浮かぶ。
それが消えた時、一気に顔がゆがみ、感極まった声で彼女は言ったのだ。

「どれだけ・・・どれだけ・・・！安林山様のご無事を願ったことか・・・！」

自分の身を案ずる言葉を。

「良かった・・・安様が生きていらして・・・！もう、間に合わないかと・・・！」

そう言いながら抱き着く玲春の力が強くなる。思わず、背に両手を回して抱き寄せれば、その体はガクガクと壊れかけの棚のように震えていた。

「私・・・安様が矢で・・・囲まれているのが見えて・・・急いで紅嘉殿に頼んで・・・間に合わぬかと・・・！」

その言葉で星影は理解する。紅嘉を連れてきたのは玲春であると。なぜ、彼女が小虎を連れてこられたのかはわからないが、

（魏忠殿に何かあったか・・・！）

彼が紅嘉の側にいない以上、そう考えるのが妥当だろう。
根拠はなかったが、自分の感がそう告げていた。
何が起きたかまではわからなかったが、その何かを聞きださなけれ

ばいけない。
いけないのだが・・・今はそれよりのやらねばいけないことがあった。

「・・・大丈夫だよ。」

労わるように、慰めながら玲春の背中を撫でる星影。

「・・・私は大丈夫だよ、玲春殿。」
「安様。」
「私は生きている。だから、君をこうして抱きしめられるんだよ?」
「安様、私・・・!」
「こうして抱きしめていれば、君の体温を感じる。君も、私の体温を感じるだろう?いや・・・私の場合、体温だけじゃない。君の温かい心のぬくもりも感じるよ。」
「安様・・・」
「優しい心が、ぬくもりとして伝わってくる。」

今、星影がするべきことは、皇太子を庇うことや賊との戦闘を再開することではない。
自分を助けてくれた恩人を落ち着かせること。
いたいけな少女を慰めるのが先決だった。
そう思って、震える玲春に語りかけた。

「『急いで紅嘉に頼んで』」
「え?」

「君が言った言葉だよ。それって、私達を助けに来てくれたんだろう？」

彼女がどうしてここにいるのか、まだ理由はわからない。
しかし彼女は、自分の身を案じる言葉を言ってくれていた。
つまり、私を心配して、危険を承知で賊の前に姿を現したということだろう。
それならば、

「紅嘉殿と一緒に、助けに来てくれたんだね。」

そう考えるのが当たり前。

「ありがとう、玲春殿。」

そう言うのが当たり前である。
ゆっくりと頭を撫でてやった。その動きに合わせて、興奮した様子だった玲春の息遣いも整っていった。それを確認しながら星影は言葉を紡ぐ。

「可愛そうにこんなに震えて。いや、無理もない・・・。ここに来るまで、よほど怖い思いをしたはずだ。危険を冒してまで、決まりを破ってまで、紅嘉と共に来てくれた。そのおかげで、私だけでなく皇太子殿下も救われた。」
「安様・・・！なんてもったいないお言葉を・・・！」

「それは私の言葉だよ。もったいないどころか、畏れ多い。君の行為は、夫のために自ら敵の捕虜になった呂皇后の愛にも勝る。」
「そんな！私は呂后様のような貴人ではないし、優しくなんか・・・」
「身分なんか関係ないね。」
「え？」
「人を思う心に身分なんて関係ない。あなたは間違いなく優しい人間だ。今まで宮中で知り合った女性の中で、一番優しくて、綺麗な心を持っている。」
「わ・・・私！私ぃ・・・！」
「わかってるよ、なにも言わないで。護符にも勝る、私の可愛い香蛾殿。私は、ちゃんと生きている。・・・それって最高だと思わないかい？」

耳元でささやけば、何度も首を縦に振る少女。
星影の感謝と思いやりの気持ちは、確実に相手に伝わっていた。
ただ、残念なことに・・・

「叔父上あれは・・・」
「・・・うむ。」
「慰めるというよりは、口説いているのでは・・・？」
「・・・。」

この宦官の行為が、はたかれ見れば、下世話な風にしか映らなかったということであろう。
さらなる不幸は、そのことに当の本人同士が全く気付いていないと言うことだったが。

「よかった・・・安様がご無事で・・・本当に良かった・・・・！」

そんな外野の様子に気づくことなく、安心しきった表情で静かに泣きはじめる玲春。
目からあふれる涙を星影は無言で何度も拭き取った。

（ああ・・・本当にこの方は、なんとお優しいのだろう・・・）

――――――――あの時は本当に、生きた心地がしなかった・・・・
――――――――――――

自分の目元で動く指を見ながら、ぼんやりと先ほどのことを思い浮かべていた。

・　・　・　・　・

こんなに長い時間、暗闇の中を動き回るのは初めてだった。
最初は、その暗さに戸惑っていた体も、次第に慣れ始めていた。体だけでなく目も、闇夜の中で利くようになってきていた。

立派な毛並みと巨体を持つ、四足の案内役の後を玲春は追っていた。
小虎の進む先は、自分も行ったことのない場所。
周りの様子や景色を見る限り、宦官専用の宮殿ではないかと玲春は考えていた。
元々、自分がいる宮殿以外は出ることはないし、あったとしても平陽公主様のお供でついて行くぐらいで、大まかな場所しか知らない。
それでも、この場所が自分のいる宮殿と異質であることは肌で感じていた。
すごく静かで物音一つしない。本当に人がいるのかさえ疑わしい。
なによりも・・・

（変なニオイがしますし・・・）

どこかで嗅いだことのある香り。
なぜか、自分が仕える女主人の夫の顔が思い浮かんだ。

（衛青将軍のにおい・・・？）

いいえ、あの方がつけていらっしゃる香は、こんな独特の香りはしない。
申し訳なさ程度につけているぐらいで、鼻をつくにおいではない。
お香と言うよりは、古い刀についている錆と似たにおいがする。
いつのまにか、自分と並んで走っていた小虎の方を見る。
紅嘉の鼻はしきりに動いていたが、相変わらず視線だけは前を向いていた。
その鼻が、各部屋から漂ってくる錆のにおいに反応しているのかはわからない。
ただ、自分が捜している高級宦官を見つけるために動いているのだということは確信できた。
そう思えるだけの証拠はなかったが、自分の心がそう断言していた

から。

（部屋を抜け出しただけでも罪なのに。魏忠殿の制止を振り切って、紅嘉殿と一緒に行動していたとバレたら、きっと平陽公主様は許して下さらないかもしれない・・・）

ただでさえ、烈火のごとく怒らせてしまっていた。

いくら、自分が殺されない立場だとしても、今度こそ売り飛ばされてしまうかもしれない。

（殺さなくても、それに相当するだけの苦痛を与える方法をあの方は心得ていらっしゃる。）

覚悟はできていた。

市場で売られて自分を買って、育てて下さったのが平陽公主様。一緒に売られていた子達の大半は、私の年まで生きていない。

買った主人次第で、その命の短さが違う。

それを、ここまで育てて頂いたばかりか、女性としての教養も授けて下さった。

だから、あの方に死ねと言われれば、迷わず命を絶つ覚悟はしていた。

死ぬのは怖いけど、決心はついていた。

もし、それ以外の感情があるとすれば、平陽公主様に迷惑をかけるということに対してのみ。

主人に対する罪悪感だけだけど・・・。

（・・・きっと平陽公主様だけでなく、衛青様もお怒りになるでしょうし・・・。）

女主人の年下の夫は、誰に対しても優しかった。
単に優しいと言うだけでなく、悪いことは悪い、良いことは良いというけじめを示してくれる人物だった。同僚や部下だけに限らず、使用人にも慈悲深かった。
彼のおかげで、粗相を許され、挽回の機会を与えられたものは多い。
同時に、命を救われたものもたくさんいるのだ。

「玲春、二度とあのようなことをしてはいけない。次は助けない・・・！」

（そんな旦那さまでさえ、茶器の一件では私にきつく注意なさった・・・）

それだけ、いけないことをしたのだとわかるけど・・・

（自分の気持ちに嘘はつけない。安林山様にお会いしたいという気持ちに・・・・！）

改めて、今の自分の思いを再認識した時だった。

「貴様ら何者だ！？」

「え？」

聞き覚えのある声に足が止まる。
思わず横を見れば、同じように動きを止めている紅嘉。

「今の声・・・・！」

（衛青様！？）

「旦那様の声！？」

そう理解した時、ふいに服の袖を引っ張られた。

「紅嘉殿！？」

こっちだと言うように玲春をある方向へと引っ張った。
されるがまま近づけば、その方角から声がしていた。

「おのれっ！」

「――――上っ！」

耳をすませば、主（あるじ）の夫以外の声もした。

（衛青様だけじゃない？それにこの声・・・怒ってる？）

心臓が鷲掴みされたように圧迫される。
喉から下の辺りに、一直線で異物が通る感覚がした。

怖い。

「ぎゃっ！？」
「ぐっ！？」
「うわぁ！！」

今度は複数の悲鳴が聞こえた。
それで玲春は、この先でよからぬことが起きているのだと分かった。

「どうしよう・・・どうすれば・・・！？」

困惑し、足が止まる彼女を子虎が必要に引っ張った。

「紅嘉殿!?」

早く早くと急がせてきた。

「やめて!どうして!?・・・まさか――――――」

（この先に、安様がいると言うの・・・・!?）

目だけで問いかければ、無言で紅嘉は見返してきた。
今までと違うところがあるとすれば、尻尾を振っていること。
左右にゆらゆらと、どこか嬉しそうに動かしていた。

「・・・・安様が・・・この先にいるの・・・ね?」

どれぐらい見つめ合ったかわからない。耳に届く、言い争うような複数の声。
それを聞きながら尋ねれば、人の言葉が離せない生き物は、銜(くわ)えていた少女の袖を離した。

「がぁ。」

返事でもするように軽く唸ると、さっさと玲春から離れて行った。
なぜか走るのをやめて、トコトコと歩きながら、声のする方へと向かい始めた。

「紅嘉、殿・・・・」

呼んだつもりはなかった。自然と口から漏れた言葉だった。
それに子虎は耳をピクピクさせて反応し、首だけでこちらを見返してきた。
虎の表情の変化などわからなかったが、自分を見るその顔。

ボク　ヒトリデ　イクカラ　イイヨ

拗ねたような諦めたような、そんな顔つきだった。

「ま、待って！」

置いてきぼりを食らうかのような疎外感。気付けば叫んでいた。
引き留めようとしての行為だったかもしれないが、叫んだのは彼女だけではなった。

「やめてくれぇぇぇ！！」

初めて聞く、旦那様の懇願する声。

「拠（れん）様ぁぁぁ――――――！！」

続けざまに聞いたのは、絶望に満ちたその方の叫びとそして――――

「――――――そっこだぁぁぁぁぁぁ！！」

楽しむような、怒ったような、してやったりというような声。
聞き覚えのある、よく知っている、今一番聞きたかった声。

「安様っ！？」

（安林山様のお声！！）

自分が今、一番探している、会いたい人の声。
その声が背中を押し、止まっていた玲春の歩みを進めた。

「安様っ！」

恐怖も不安も戸惑いも振り払い、一目散に声のする方へと向かった。
途中で、何度かこけそうになったが気にせず進んだ。
この先に安様がいる。私を助けてくれた安様がいる。

（安様に会いたいっ！！）

「ぐるぅ。」

顔をほころばせて走る少女の後を、小虎がトットコとついていく。

その背を見つめる瞳は、“やっと、行く気になった。”と言わんばかりのものだった。
声の中心に近づくにつれ、はっきりと会話が聞こえ始めた。

「おのれ宦官～!?」
「宦官にも愛国心はあるんだよっ!!衛青将軍、微力ながら加勢いたします!」
「安林山殿なんと!?」

知らない声と知っている声。
夜の世界で、そんな人達の人影を認識できる距離まで来た時だった。

（こ、これは一体どういうことですか!?）

玲春が目にした光景は一言でいえば非常事態。
怪しい連中と戦っている高級宦官と大将軍の姿。
二人の側には自分と同じぐらいの少年がおり、服装からして皇族であるのは間違いなかった。
何人いるかわからない数の賊らしい者達にも驚いたが、それ以上に彼女をびっくりさせたのは――

（あの人達!!魏忠殿を襲った人達と同じ格好をしている!まさか・・・仲間!?）

ということ。それで玲春は事の重大さを思い知らされた。そして考えた。

（どうしよう！このまま安様達のお側まで行くよりも、誰か助けを呼んだ方がいいかしら！？）

迷いで動くことができず、その場に立ち尽くす玲春。
それとは対照的に、低く唸り始める紅嘉。

「紅嘉殿・・・！どうしたら、私・・・！」

小虎と修羅場とを交互に見ながら少女は考えた。
こうして見る限り、安様や旦那様達が不利な状況であるのは間違いない。
でも、どうして宮中に賊が侵入できたの！？
あんな剣や弓なんか持ち込んで・・・どうやってここに持ち込めたの！？
それにもし、あの賊が魏忠殿を襲った犯人と同じならば――

（安様も旦那様も、無事では済まない・・・！！）

助けを呼びに行くのは時間がかかってしまう。

いっそ、私と紅嘉殿で何とかするべきなの？
ううん！そんなの無理！
私は武芸の心得はないし、紅嘉殿だって・・・！

“紅嘉殿とは、とても可愛い子猫です。この子は人を食べたことはありません。”

人を食べたことはない、襲うことさえしない・・・。
そうあの方は、みんなの前で断言された。
もしも、紅嘉殿が宮中で人を襲ったと公に知られれば、人食い虎でないと奥様に言った安様のお立場がなくなってしまう。
紅嘉殿を庇われた、安様の努力が無駄になってしまう。
最悪の場合、追放ではなく殺されるかもしれない・・・！
それだけはさけたい。

「安林山殿！」

再び、大将軍の声がした。切羽詰まった声は、緊急事態を告げていた。
たくさんの弓矢が彼と少年を狙っていた。

――――――――――あれでは、ぜったいに、にげられない――――――――――

あんなにたくさんの矢を射ぬかれたら、

「安様っ！！」

彼が死んでしまうっ！！

（――――――――やめて！）

やめてやめてやめてやめてやめてやめて！お願いお願いお願いお願い！！

祈るように、指示を出しているらしい一人の敵を見る。その姿を見て思った。

この人は安様を殺す気だ。

頼んでも助けてくれない。見逃してくれない。その行為をやめてなんかくれない。

いや！安様を殺さないで！

逃げて！逃げてください安様！！

すぐに視線を彼に戻したが、その目は死んでいなかった。

ギラギラと輝き、生きることをあきらめてなかった。

（――――――――いいえ、違う！）

あの眼は、生きることをあきらめていない目だけどそうじゃない。

「自分の命ではなく、他の誰かを、生かすことをあきらめていない目だわ・・・・！」

それは誰？答えは簡単。あなたのお側にいるあの皇族の方ですね。
その方のために、自分の命を捨てようとなさる？
私を助けた時のように？
いいえ、あの時よりもご冗談が過ぎます。
自分を犠牲にして、その方を守ろうと――――――？

（そんなことさせないっ！！）

玲春の中の、ここまでの一連の思考は、本当に瞬きするほどの一瞬の出来事。
建前、面子、立場、体裁・・・・そんなこと、どうでもいい。
安様の命がかかっているなら、どうでもいい。
そう思った時、なりふり構わず彼女は叫んでいだ。

「紅嘉殿っ！！」

紅嘉殿が宮中で人を襲ったと公に知られれば、人食い虎でないと奥様に言った安様のお立場がなくなってしまう。
でも、避けたいのはそんなことじゃない。

「――――――――安様を助けてぇぇぇ――――――――――――――――！！」

（一番避けなければいけないのは、安林山様の命が失われてしまうことっ！！）

玲春の叫びは、複数の音と重なり、かき消された。
唸り声と、床を蹴る爪の音と、己の横を駆け抜ける風の感触。

「助かった暁には、私のお願い聞いてくださいね――――――！！」

「がぁああ！！」

優しいあの人の言葉と声の後で、猛獣が何かをかみ切る音。

「紅嘉っ！！！」

弓で射抜かれた悲鳴ではなく、元気なあの方の声が耳に届く。

「間に合った・・・！」

一気に体の力が抜け、その場に座り込む玲春。
間に合ったのだと、嬉しそうに猛獣の名を呼ぶ宦官の声を聞きながら安堵した。

第九十八話　災い転じて福となる・・・か？（5）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

小説の中で星影が玲春に語った『呂皇后』とは、漢の高祖である劉邦の正妻・呂雉（りょち）のことです。

詳しく覚えていないのであいまいなのですが、劉邦と項羽が覇権を争っている際にある戦で、呂雉は項羽軍に追われていました。彼女は、子供や家族を逃がすために、乗ってた馬車から飛び降りて、自ら捕虜となって家族を逃がしたとされています。

彼女の場合、自分の父親が劉邦の将来性に掛けて、格下のやくざの大親分であった劉邦と結婚した身でありました。愛情があったかはわかりませんが、夫を信じ、子供や夫のことを考えて猛スピードで走る馬車から取り降りたのは、愛ゆえのことだと思われます。

おかげで子供たちは無事に逃げきれ、彼女も何とか後日、劉邦の元へ戻れたそうです。

ただし・・・これには、残念な後日談があります。

体を這って逃がした子供を、夫である劉邦は「逃亡の邪魔だから！」と、馬車から捨てました。「何考えてんですか！？」と、これを怒って拾い上げたのが、三国志の曹操のいとこであり、四天王と称された夏侯惇（かこうとん）・夏侯淵（かこうえん）のご先祖様に当たる夏侯嬰（かこうえい）です。

子供を捨てたことを怒る夏侯嬰に劉邦は、『陳勝・呉広という人達が自分の家族を逃がすために、部下に殺されて自分の命を落としたこと、主君である自分の子供を守るために、有能な家臣が死んでしまうこと』を述べた上で、「子供は逃亡の邪魔！代わりはいつでも作れる！！」という理由で捨てようとしたと述べています。元々、やくざの親分だった人なので、駆け引きやはったりは得意でしたし、

どこまで本気だったかというと難しいところです。ただ、三国志の劉備も、自分の大事な武将であった趙雲が息子を助けるために数万の敵の中を一揆で駆け戻って、奥さんと赤子であった後継ぎを連れ帰った時でさえ、息子を地面にたたきつけて、涙ながらに趙雲を怒り、彼を失うことへの恐怖を語ったとされています。

それを思えば、「子供はいつでも作れるから捨てていく。でも、優秀な家臣は作ることなんてできない！」というのは、天下人としては最高ですが・・・女性の立場から見れば、最低の夫でしょう。結局は、夏侯嬰の説得に従って、子供も連れて行きますが、その様子を見ていた家臣や兵士は「そこまで我々のために・・・！」と感動したらしいです。

ただし、再会してからこのことを知った奥さんの心中はどれほどのものだったか、察することはできます。呂皇后のこの行為を、「打算のためだった」という人もいるかもしれませんが、今となってはわかりません。

ただ、この物語の主人公である星影の場合は、「愛があったからこそできた命がけの行為だ！」と思っているので、最高の褒め言葉として、玲春に言ったということを、この場を借りて追記させていただきます。

※誤字・脱字・漢字の間違いがありましたら、こっそり教えていただけると、ありがたいです・・・！！

ヘタレですみません！！

第九十九話　災い転じて福となる・・・か？（６）（前書き）

※この度、東北地方太平洋沖地震で、被害にあわれた皆様のご冥福と、早期のご回復を心から願っております。
同時に、原発作業に尽力を尽くしてくださっている【東京電力の作業員】皆様の無事を切に願っております。

竜門弥生は、現知事のエゴ強行可決された、公平さに欠けた法案「東京都青少年健全育成条例」　ｈｔｔｐ：／／ｍｉｔｂ．ｂｕｆｓｉｚ．ｊｐ／　に断固反対いたします。※

第九十九話　災い転じて福となる・・・か？（6）

玲春の登場に驚いたのは、星影だけではなかった。

「玲春！なぜ女官であるお前がここにいるのだ？それも、紅嘉と一緒に・・・！？」

彼女が仕える主人の夫である衛青だった。
困惑気味に少女を問いただせば、星影の胸にうずめていた顔を上げる。
そして神妙な面持ちで彼女は答えた。

「・・・お許しを、旦那様。お叱りは後で受けます。どんな罰でも受けますから・・・！」
「いやいやいや！ちょっと待って！！お叱りとか罰とか玲春殿！そう言う問題じゃないから！」
「安様。」
「衛青将軍は、別に怒っているわけじゃないよ。夜中に女の子が一人で、こんな危ないところに来てるから～」
「お許しくださいませ、安様。安様が怒るお気持ち、十分にわかっております。」
「わかってるって・・・」
「がぁ！」

途端に、服の袖を引っ張られた。紅嘉だった。

「ど、どうした紅嘉？」

「もしや・・・怒るなと言っているのではないか？」
注意深く紅嘉を観察していた皇太子が呟く。
「え！？そうなのか、紅嘉？」
すると、そうだと言わんばかりに星影の袖を上下に引っ張る小虎。
「やはり・・・！」
「それじゃあ紅嘉・・・・玲春殿は悪くないというのか？」
「ぐるぅ！」
「じゃあ、なんでお前と一緒にここにいるんだい？」
「ぐぅ・・・」
「なんだ、急に元気のない声を出して？何かやましいことでもあるのか～？お前は？」
このこのと、指先で小虎の顔をつつきながら聞く星影。完全に遊んで、からかってたのだが、
「おやめください、安様！紅嘉殿を怒らないでください！」
「玲春殿。」
それを『怒っている』と勘違いして、大慌てで止める玲春。
つついていた宦官の手を握ると、潤んだ双璧で星影を見ながら言った。
「紅嘉は、安様の危機を察してここまで駆けつけたのです！それを私に教えてくれたのです。」
「なんだって！？」

予想外の発言に、星影でなく、衛青達も顔色を変える。

「紅嘉・・・が、きみに教えたというのか？」

「はい、私に安様が危ないと伝えてくれ・・・ここまで導いてくれたのです。」

「じゃあ紅嘉って、しゃべれるのかい！？」

「いえ！・・・そういうわけではございませんが～・・・鳴き声で教えてくれました。それから行動で！私に来てくれと――――」

「――――――それで自分の部屋を、宮殿を抜け出し、ここまで来たというのか！？」

「衛青将軍！？」

「そうなのだな？玲春！？」

「旦那様・・・。」

妻の侍女の話に、いつもとは違う口調になる衛青。

それは怒りと戒めが込められた声だった。

「なんという危険なことを！紅嘉は限られた者しか懐かないというのに・・・危ないと思わなかったのかい？」

「申し訳ございません・・・！」

「叔父上、そんなに怒らないでください。」

大将軍の態度にまずいと思ったのだろう。なだめるように、皇太子が口をはさんだ。

「お気持ちはわかりますが、悪気があってしたことではないでしょ

う。紅嘉と玲春・・・であったかな?この一匹と一人のおかげで私達は助かったのですから。」
「しかし・・・」
「そうですよ、衛青将軍。悪いなら、紅嘉の管理をしている魏忠殿ですよ!」
「では、その魏忠はどこだ?玲春!?」
星影の聞きたかった魏忠殿の安否を、厳しい口調で衛青が問う。
「それが・・・」
この問いに彼女は、言いにくそうに答えた。
「・・・賊に襲われてお怪我を。」
「なんだって!?」
「襲われただと・・・!?」
「どこで襲われたのだ、玲春!?」
少女の答え、星影・劉拠・衛青の男三人(!?)は、すぐさま聞き返した。
「襲われたとはまさか――まさか玲春!魏忠に、いや、妻達のいる宮殿にも賊が侵入していたのか!?」
「違います、旦那様!奥様も、奥様がいらっしゃる宮殿の方々は、みなご無事でございます!」
「無事だと?」
「はい。安様の、高級宦官の方々がお住まいの宮殿の庭にいらっしゃるはずです。」
「ここから近いですね、叔父上・・・!」

「おっしゃる通りです、拠様。そのことを踏まえて考えても・・・・・玲春。」
「・・・はい。」
「つまりお前は・・・自分の宮殿を抜け出し、高級宦官のいる宮殿まで来たと言うことになるが・・・。」
「申し訳・・・ございません・・・！」

完全に怒る姿勢で問いただす衛青と、大人しくそれを受ける玲春。

「返す言葉もございません・・・。」
「本当に・・・なんということを・・・！」

ため息交じりに言う衛青の言葉で、その場は重い空気となったのだが、

「だ～か～ら！そういうことは後にしてください！！今は魏忠殿のことでしょう！？」

空気と話題を変えようと宦官が口を開いた。
玲春を庇いながら衛青との間に割って入ると、再度、武人に向かって訴えた。

「玲春殿を怒らないでください、衛青将軍！彼女は、紅嘉に頼まれてここまで来ただけですよ！」
「しかしな、安林山どーーーーー」
「それで玲春殿！魏忠殿は無事なのかい！？」

なにか言おうとする大将軍の言葉を遮りながら、縮こまっている少

女に問いただす。
それに少女は、星影の服の裾を掴みながら答えた。
「はい、お命に別状はございません。お怪我はされているのですが・・・」
「じゃあ、生きているのだね？」
「はい・・・生きております、安様。」
「それならよかった。彼に何かあれば、紅嘉が可愛そうだからね。」
「・・・それが、良いとも言い切れないのです・・・。」
「え？」

安堵する宦官に、震える声で少女は言った。

「私が駆け付けた時、魏忠殿は肩から血を流されておりました。その側では、紅嘉が苦しんでおりました。私は・・・魏忠殿のお側に行く直前、ある者達が、そこから立ち去るのを目撃いたしました。」
「ある者達？」
「それは一体誰なのだ！？」
「それは――――――」

一呼吸すると、強く星影にしがみつく。
そして、片手の人差し指を立てると、その先をある方向へと向けながら叫んだ。

「魏忠殿を襲った賊！それは今、安様や旦那様達を襲っている者達で間違いございません！！」

「なに!?」

その言葉で、一斉に敵を見る一同。
指差した先、視線の先にいたのは、自分達を襲っていた賊達。
これを受け、指を刺された賊の頭目は忌々しそうにつぶやいた。

「やはり虎使いは・・・殺しておくべきだったようですな。」

「それじゃあ、お前達が魏忠殿を!?」
「一体何のために魏忠、という者まで襲ったのだ!?」
「それは拠皇太子様のせいでしょうね～」
「っ!!またそれかいっ!?いい加減にしろよっ!」

決まり文句用に言う相手に星影は、憤慨しながら怒鳴りつけた。

「『皇太子が悪い』と言い続ければ、それでこっちが納得するとでも思ってるのか!?だとしたら、貴様らはよっぽど仕事のできない刺客だな!?」
「なんだと!?」

「現に、一度失敗しているのだろう?」

脅すように核心をつけば、苦々しい表情で黙り込んでしまった。

「図星のようだな？」

「黙れ、小僧・・・！」

「ああ、いいとも。黙ってやろう。だが、黙るかどうかはお前達次第だ。」

「なんだと？」

片目を吊り上げながら聞き返す敵に、星影は目を細めながら言った。

「お前たちが誰に頼まれて皇太子殿下や魏忠殿性質周辺の一般宮廷人を襲ったのか話せ。そうすれば、命だけは見逃してやるよ。」

「安林山殿！？」

「正気ですか、安様！？」

「もちろん正常だよ。どうだい頭目さん？悪い話じゃないだろう？お前達が正直になれば、見逃してやる。仲間と一緒に逃げられるんだぜ？」

正直、ここまで非道の限りを尽くした敵を助ける気など毛頭ない。どこぞの、媚を売るのが上手な宦官を助けた時のように、陛下が賊達の命を助けるとは思わなかった。

関係ない宮中の人間をたくさん殺し、そうなった原因は皇太子にあるとわけのわからない責任転嫁をしている連中など、陛下でなくても許せない。

だからこれは、口先だけの言葉に過ぎない。

「お前達に、悔い改める機会を・・・与えたい。望むなら、私が陛下に助嘆する。」

口先だけの言葉。

無理かどうかはやってみなくてはわからないが、相手は絶対に自分の話に応えないだろう。

「馬鹿か！いくら陛下の寵愛を受けている宦官とはいえ、李延年ほどの愛は受けていないだろう！？」

客観的に見ても、今の状態は賊の方が有利。

「だから信用できないと？」

「当たり前だ！男と男の約束だとでも言いたいのか！？玉無しの宦官風情が！！」

不利な立場ならともかく、有利な立場だからこそ、私の話には乗らない。

現に今、私達への侮辱と軽蔑の言葉を語った。

それを怒って黙らせるつもりはない。

むしろ好都合。

だってこれは、時間稼ぎなのだから。

「私もこ奴らは許せぬぞ、安林山！そなたが、心の優しいものというのは知っている。しかし、情けをかける相手を間違えているだろう？」

「おっしゃる通りでございます、皇太子殿下。しかし、あれは哀れな生き物でございます。」

「あ、哀れだと！？」

「我らのどこが哀れだと言うのだ！？」

反発する敵に、冷たい目で星影は言った。

「所詮・・・刺客・暗殺者の類は、闇にしか生きられないもの。ど

んな忠義・忠誠を尽くしても認められない。金で命を売っているのと等しいのではありませんか？」

「どういうだ・・・安林山、殿？」

「刺客とは、常に裏切りと隣り合わせだと言うことですよ、皇太子殿下。どんなに、高額な報酬とぜいたくな暮らし、確かな地位を約束されても、任務がまっとうできても、それが手に入るとは限らない。」

「なぜだ？」

「暗殺を依頼した権力者に、殺される場合が大半ですから。」

「依頼主に！？」

「そうなのですか！？安様？」

「そうだよ、玲春殿。私の師が言っていたよ。やましいことがあるから刺客を雇って使うからだ。やましいことを隠す為なら、刺客の使い捨てなんて当たりまえ。今回の貴様らの依頼だって、奇跡が起きて皇太子殿下を含めた私達が、幸運にも、あり得ないぐらいの万が一の可能性で成功したとしても、消されるのは確実さ。」

言い方を含めた星影の発言に、敵は声を荒げた。

「ふざけるな！なにが奇跡だ幸運だ！？」

「どこまでこちらを舐めれば気が済むのだ、クソガキめ！」

相手の反応はもっともだった。上から目線の言い方をされれば、誰でも腹が立つ。

「宦官よ！貴様、我ら相手によくそんな大口が聞けるな！？少しばかり腕が立とうと、大将軍様が側にいようと、お前たちが不利なことには変わりないのだぞ！？」

「それはどうかな？」

「なに！？」

「貴様らは、人を殺し過ぎだ。それに加え、私達に姿を見られている。・・・低い可能性で、人生最後の幸運を使って、私を殺せたとしても、私が貴様らの正体を暴けるだけの証拠を、この戦闘中に隠していたとしたら、貴様らの所業はすべて無駄！殺し損になるだけさ・・・！」

「！？」

「なんと！？」

「いつの間にそんなことを・・・！？」

賊はもちろん、驚く大将軍と皇太子に、星影は笑顔で微笑みかける。星影が口にした、『敵の正体を暴けるだけの証拠を隠した』ということについてだが、

（そんなわけじゃないじゃ～ん。）

真っ赤な大嘘である。

そんなことをする余裕があれば、さっさとこの場から大将軍と皇太子を連れて逃げている。

「そなたがそんなことをしたなど、我々でさえ気づかなかったというのに・・・！」

「まさに、神業と言える・・・！」

「ははは。たとえ話でございますよ、皇太子殿下、大将軍。証拠になるかどうかは、陛下が確認してくだされればいいこと・・・。」

「なっ!?どういう意味だ、宦官!?」
「たとえ話ですよ・・・。所詮私は、李延年様ほど寵愛はございませんが・・・それなりのことは出来るのです・・・!」
「なんだと~!?」
「例えば、皇帝のみしかわからない暗号があるでしょう?今更あなた方が、どんな偽装をしても、私がそれで真実を記していますので無駄ですよ。」
「き、貴様っ・・・・!?」

星影の言葉に、敵も味方も四苦八苦する。
自分の話している言葉は、賊がしたこと以外はすべて嘘。
人間は言葉に惑わされやすい。
星影が先に彼らがしたやましい証拠を口にしたことで、多少なりとも敵は動揺した。
その後で、精神的なゆさぶりとなる嘘をついた。
寵愛とか皇帝のみしか使わない暗号とか、知るわけがない。あるかどうかさえ分からない。
だけどそれでいい。
意味深なことを言えば、それだけでも効果はある。
命の駆け引きをしている場は、一瞬一瞬が、即決の決断を迫られる。
だから、落ちつて考えればわかるようなことをじっくり考えている間はない。

「どこにその証拠を隠した!?どのような暗号なのだ!?答えろ、宦官!!」

なので、騙す、騙されるという現象が起こって不思議ではないのだ。

（これで敵の呼吸は乱れた。）

上手くいくと踏んだ星影は、さらに相手を怒らせる言葉を吐いた。

「答える義務などありません。私がお仕えしているのは漢帝国である。どこの馬の骨ともわからんものの捨て駒に用はない。」

「か、かんがぁ～～～んっ！！

「宦官ですが、なにか？」

歯ぎしりする敵に、わざとらしく聞き返せば、何人か悔しそうに拳を握る音がした。

「見ての通りの宦官ですよ、私は？それを聞き返しただけで怒るなど・・・なにがしたいのか、わけがわかりませんね？」

「安様、あまり挑発されてはー」

「挑発ではないよ、玲春殿。ただ私が言いたいのは、この刺客達のしていることが無意味なことだと言うことです。どうせ最後は、雇い主に葬り去られる運命なのに――――――」

「黙れっ！」

星影の言葉を遮って頭目は怒鳴った。

「黙れ・・・宦官！貴様に何がわかる！？」
「わかるよ。」

その問いに、真面目な表情で星影は言った。

「失敗の挽回をしようと、必死になっている。仲間養わなきゃいけないのもわかるけど、別のやり方があったはずだ。」
「なっ・・・」
「無能な跡継ぎを排除するような裏工作は、私達が生まれる大昔からあっただろう。だが・・・そんな道理に合わせて、ここにいらっしゃる劉拠様は、そんな無能とは程遠い。お前達の依頼主は、間違っているんだよ。」

確かに、嘘で惑わすことも必要だが、やはり自分の性分と少し合わない。
悪人だから、悪い奴だからと言って、人間が持つ良心がないわけではないだろう。
育った環境によって、良心なるものを知らない輩立っている。
だから、それを説くだけのことはする。
自分の気持ちだけは相手に伝えるようにしている。

「そんな馬鹿のために、死ぬこともないだろう？」

それが自分のやり方だから。
唇を噛みしめながら宦官の話を聞いていた死の使い達。
しかしそこは、その道の達人達であった。

「調子に乗るなよ、安林山！」

それが彼らの返事だった。

「小娘と虎一匹増えたところで、貴様らが不利なことには変わりないのだぞ！？」

星影の言葉を強く否定すると、再度襲ってくる姿勢を見せたのだ。

「・・・そこまで言うなら、試してみましょうか頭目さん？」

「なにっ！？」

相手の態度に、予想通りだとほくそ笑む星影。

先ほどまでは、行きつく間もないほどの急展開だった。

精神が張りつめすぎて、呼吸さえも苦しかったが、今はそれもない。

焦燥感や焦り、緊張も収まった。

心身ともに整えられた。

（相手を乱して、己を整える心理戦法は成功だな。）

相手と言葉を交わしたのは時間稼ぎのため。
相手にしゃべらせたのは、その間に自分の調子が回復させるため。
相手を怒らせたのは、彼らの精神状態を乱すため。

（それが私の目的さ。）

私には敵を助ける権限も力もない。
救えるものなら救うがそんな気は全くない。
最初から、彼らを説得する気はない。
でも、私の考えだけは言っておいた。
だってこれは、あくまでも私が万全の状態になるための時間稼ぎだから。

「どちらが不利なのかをね・・・？」

悪戯を思いつたい子供のように、ニヤリと笑う宦官。
少女の側から音もなく離れると、その動きに合わせてついてきた小虎の背を一撫でしてから叩いた。叫んだ。

2015

「――――――――――いっけぇ、紅嘉！！賊どものはらわたを食い破れっ！！」

「がぁあああ！！」

言ったと同時に、撫でていた背中を叩けば、それが合図となった。
新しい主人の命令に、待ってました！と言わんばかりに、賊めがけて襲い掛かる人食い虎。これに相手方は、大いに慌てた。

「ぎゃぁ――――――――――――――――――――――！？」

巨体に似合わない俊敏な動き。
たちまち辺りは大混乱となった。

「と、虎がぁ！」
「こっちに来るなっ！」
「がるぅう！」
「ひぃい！噛むな噛むな！」

子供とはいえ、鋭い牙ととがった爪。
巨漢の体を揺らしながら敵に食いついた。
それはまるで、昼間の惨劇がもどってきたような光景。
もし、あの時と違う点があるとすれば――――――――

「うわぁ――――！腕がぁぁ！」

「は、腹を噛まれた！」
「きゃあああ！いやぁ！！」
「来ないでくれ！！」
「グルァァァァァ！！」

この場所が、すでに血の臭いで満ちていたということ。
紅嘉が星影達の場所を見つけられたのは、小虎が星影の匂いのみで探したわけではなかった。
目的地まで、道しるべのように漂っていた臭い。
人にはわからない、辺りに立ち込めるぐらい充満していたサビテツの香り。
自分が狩る前から、鮮血と死肉の香りが広がっていた。
大好きな星影のにおいと混じってそこにあった。
それを頼りに紅嘉は星影達を探し当てていたのだ。

「がぁあ！！」

彼は、今ご機嫌だった。
新しい主人から許可が下りたということで、興奮状態にあったということ。
野生本来の捕食本能が、死臭と血で呼び起こされていたこと。
噛みたくて、噛みたくて、噛みたくて。
殺してみたくてたまらなかった。
もちろん、死なない程度に。
それが、この猛獣を駆り立てている理由であった。

「ガァア――――――！！」

皮肉にも、刺客達が殺した人間の血によって、小虎は興奮状態となっていたのだ。

「紅嘉の奴、いつにも増して、好戦的だな～」

幸か不幸か。

そのことに、小虎をけしかけた星影は気づいていなかったのだが・・・。

どちらにせよ、紅嘉の猛攻は、予想以上に賊に痛手を与えていた。

「ひ、引け！」

「虎から離れろっ！！」

「距離を取るんだ！」

統率がとれず、彼らの包囲が乱れ始めていた。

「お、お頭っ！虎が！虎がぁ！」

「このままじゃ、食い殺されますよっ！」

「ええい！情けない連中だ！？なにをしてる！殺せ！」

「へ、へい！ですが――」

「どうやれば・・・？」

「馬鹿野郎！矢をいかけろ腰抜けどもが！それで、ひきつけてる間に――――！」

「させるかっ！」

「ぶっ！？」

接近戦では歯が経たないと判断した敵は弓矢で紅嘉を射掛けようとする。

それをさせまいと星影は、弓矢を構える集団に攻撃を仕掛けた。

散らばっていた敵の武器を拾って立て続けに投げつけた。

「やっ！はぁ！とぉ！やぁぁぁ！！」

刀や剣を、切っ先を向けて投げつけた。鞘なども十分な武器になるので、回転を利かせて投げつけたりした。
それはすべて矢を射かけようとする敵達にぶつかり、その攻撃を阻んだのだった。
星影の不意打ちの攻撃で、敵の包囲はさらにもろくなった。
それを瞬時に確認すると、呆気にとられている衛青に向かって叫んだ。

「大将軍！今のうちに皇太子と玲春殿を安全な場所に！」
「な、なんと！？」
「私はあなたほど、武に優れていません！二人一度には守れませんので、お早く！」
「安林山殿！？」
「本気ですか、安様ぁ！？」
「大真面目だ！さぁ、衛青将軍と逃げるんだ！」
「無茶を言うな！そなたをおいて逃げるなど――――・・・・！」
「私は大丈夫です、衛青将軍！遊撃は得意です！さぁ、お早く！」

星影の言葉に、一瞬苦悶の表情を見せるが、

「――――――――・・・・必ずもどってくる・・・・！」

苦しそうに、本当に苦しそうな呼吸でそう返事をする衛青。

「そなたの元に戻ってくるから――――――生きていてくれ！」

待っていてくれ。

普通ならそう言うだろう。
それをこの方は、生きていてくれと言った。
それだけで星影は十分だった。

「・・・仰せのままに、大将軍。」

笑いかけて胸の前で両手を組めば、同じように両手を合わせる男。

「必ず、生きていてくれ・・・・」

愁いを込めた目で、星影を見つめた後で背を向ける。

「叔父上！」
「安様っ！」

少年少女を庇いながらその場から遠ざかる武人。
その姿に星影は、戦いの時とはまた違った高揚感を覚えるのだった。

2021

第九十九話　災い転じて福となる・・・か？（6）（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます・・・！！

本編に関することではないのですが、小説の中で『刺客』について星影が語っていましたので、昔のチャイニーズヒットマンについて、少し語らせて頂きます。

中国の歴史書の中には、刺客についての列伝というものがあります。それを記したのが、その小説にも出てくる武帝に仕えた歴史家・司馬遷であります。彼は彼が記した『史記』の中に、五人の刺客について紹介した『刺客列伝』というものを残しています。

現在では、殺し屋という怖いイメージ・悪いイメージがありますが、時代によっては、悪い権力者などを懲らしめる・退治するという人達のことを言っていたみたいです。

だから、司馬遷の書いた『刺客列伝』に登場する方々も、現代風に言えば、どちらかと言うと烈士や侠客のような方々だったようです。

刺客として行動した理由も、『義理』・『大義』・『忠義』・『自己犠牲による平和』などがあったみたいです。

日本風に言いますと、必殺仕事人や暴れん坊将軍、遠山の金さんみたいな感じだと思って頂ければわかりやすい（！？）ですかね（＾＾；）

ただ・・・こうやって公に残っている刺客というのも稀（まれ）なので、珍しいので書き残していますので、実際の刺客はまた違っていたかもしれません。

しかし、口封じで、殺害の任務完了後に殺されてしまうケースはあったようです。

ちなみに本編ですが、暗殺を実行する刺客である賊達に、星影は紅

嘉をけしかけます。その上で、皇太子達を連れて逃げるよう衛青に進言をしました。
普通は逆かもしれませんが、星影の性格上、『自分がやらねば！』という責任感からこうなっています。
衛青将軍も、最初は迷いますが、虎もいるということで星影を信じて甥と妻の女官を連れて逃げます。
どうなるかは・・・次回に続きます（笑）

興味のある方、次回までお待ちいただける方、よかったら読んでやってください・・・（平伏）！！

※見直しはしましたが、文章中に、『誤字・脱字・変換ミス・抜け字』がございましたら、こっそりでもどうどうでもいいので、ご一報いただけると助かります・・・！
ヘタレですみません！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9919c/

破天荒列伝

2011年11月11日23時30分発行